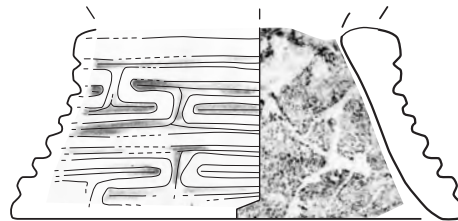


は ん ざん ばる い せき
平安山原B・C遺跡

— 桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成20・21年度） —



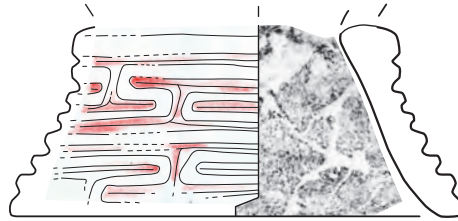
大洞系土器

2016（平成28）年12月

沖縄県 北谷町教育委員会

はんざんぼる いせき
平安山原 B・C 遺跡

— 桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成20・21年度） —



大洞系土器

2016（平成28）年12月

沖縄県 北谷町教育委員会

はじめに

本報告書は、桑江伊平土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査として、平成 20・21 年度に記録保存を目的とした平安山原 C 遺跡、平成 21 年度の平安山原 B 遺跡発掘調査についての成果をまとめたものであります。

両遺跡は、旧字平安山と旧字伊礼の間を流れるナガサ川の北側に位置しており、貝塚時代後期以降の生活跡やグスク時代の耕作域などが重複する遺跡であります。

平安山原 C 遺跡では、貝塚時代後期以後の貝塚が、良好な堆積を残した状態で検出され、出土した資料から土器の新旧関係について地層堆積から 400 年の差を見だし、貝交易の変化を窺わせる様相、漁網錘に用いられた二枚貝有孔製品の大量出土、ジュゴン骨の一括出土、往時の海がイノ一型であることなど、様々な成果が得られております。

この貝塚堆積については、剥ぎ取り保存を行い、本町庁舎のロビーにて常設展示をしております。

平安山原 B 遺跡では、県内初の大洞系土器が出土しております。東日本を起源とする縄文時代晩期のこの土器が出土したことは、縄文文化の広がりを示す大変重要な意義を有するものであります。更に、グスク時代初期頃に浜堤背後の湿地の条件を利用した耕作域、これに関連する可能性が高い溝・杭列・畦畔状遺構・ウシ蹄跡が発見され、発掘調査での出土例としては県内初の鉄製風呂鍬が出土しております。

また、両遺跡は、近世、近代にかけては集落と耕作地の区割がなされたと見られており、石列や小流路内に築かれた石組遺構等が検出されております。

本発掘調査が、これまで行われてきた旧字平安山における文化財調査の成果を結びつけ、出土品の整理・分析、報告書作成によって、先史時代から現代に至る環境変化や人々の移動が深く関係し展開していく様子が明らかとなったことは、「平安山原地区」が沖縄の先史人のサンゴ礁域における生活モデルとなり得る大きな成果であります。

この大きな成果が、町民はもとより多くの方々に本町の歴史や文化を実感し、理解する資料の一助となれば幸いです。さらに、本町においては、現在、町立博物館建設を進めており、開館された暁には、活用され町民の心の豊かさと魅力あるまちづくりに繋がるものと考えております。

末尾になりましたが、様々なご指導やご助言、ご協力を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成 28 年 12 月

北谷町教育委員会
教育長 川上 啓一

例 言

1. 本報告書は、北谷町教育委員会が桑江伊平土地区画整理事業に伴い、平成 20・21 年度「平安山 C 遺跡」、平成 21 年度「平安山 B 遺跡」発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/2,500 地形図（昭和 54 年測量）を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本書に掲載した緯度、経度の平面直角座標はすべて世界測地系にもとづくものである。
3. 遺物の同定等については、下記の方にご協力をいただいた。（敬称略）記して感謝申し上げます。

陶 磁 器	大橋 康二（佐賀県立九州陶磁文化館）
脊椎動物遺体	樋泉 岳二（早稲田大学教育学部）
貝 類 遺 体	黒住 耐二（千葉県立中央博物館）
人 骨	藤田 祐樹（沖縄県立博物館・美術館）
石 質	大城 逸朗（おきなわ石の会）
堆 積 学	松田順一郎（史跡鴻池新田会所管理事務所）

4. 樋泉岳二氏・黒住耐二氏・藤田祐樹氏には玉稿を賜った。記して謝意を表します。
5. 放射性炭素年代測定は、パリノ・サーヴェイ（株）に依頼した。
6. 本報告書の編集は、土岐耕司の協力を得て島袋春美が行った。執筆分担は下記のとおりである。

第 I 章 第 II 章 第 III 章 第 IV 章 第 3 節（21・23・24）	山城 安生
第 IV 章 第 1 節 第 2 節 第 3 節（7・12～14）第 VI 章 第 1・2 節	土岐 耕司
第 IV 章 第 3 節（1）	呉屋 広江
第 IV 章 第 3 節（2）	上地千賀子
第 IV 章 第 3 節（3～5）第 VI 章 第 3 節	島袋 春美
第 IV 章 第 3 節（6・8～11・22）	比嘉 優子
第 IV 章 第 3 節（15～20）	北條 真子

7. 本遺跡の遺物の注記及び、遺構、取上の凡例は次のとおりである。

・注記 HC 地区（平安山原 C 遺跡 H20・21 年度調査）

遺跡名	記号	ID	グリッド	群	遺構	層位	日付
⑧平C	台	10813	T15	Ⅲ群		V	H211020



⑧平C 台 10813. T15 Ⅲ群 V . H211020

・注記 HB ③地区（平安山原 B 遺跡 H21 年度調査）

遺跡名	記号	袋（台帳）No	区	グリッド	遺構	層序	日付
⑩平C	台	271	A-3	S14	SL005	2層	091210



⑩平B, 台 271, A13-S14, SL005, 2層, 091210

8. 本報告の編年表記は沖縄編年を基本とするが、出土遺物には時代幅があり、その種類によって時代表記が異なる。（伊礼原 D 遺跡（2013）例言（沖縄・九州時代区分対象表）参考）
9. 本書に掲載した発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物全ては北谷町教育委員会が保管している。



Ⅲ a 層上面（近世面）検出全景（北西より）



近世石列 1 群の遠景（北より）



近代石列と近世土坑群（東より）



近世石列 1 群と大型土坑 SK32 検出（南東より）



近世大型土坑 SK32 完掘（北西より）



同左 断面（東より）



Ⅲ b 層上面 検出全景 (北西より)



東壁遠景 (Q7 ~ 10) (南東より)



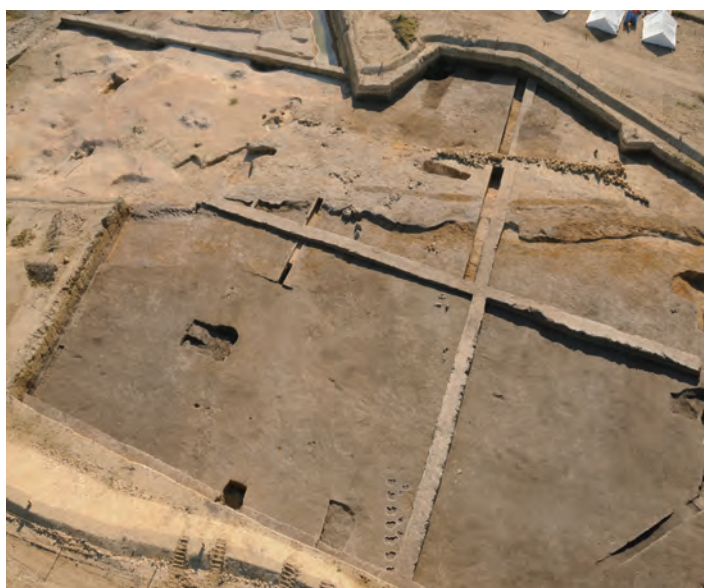
南壁遠景 (Q・R10) (北東より)



ベルト 18 遠景 (R ~ T18) (南東より)



Ⅲc層上面 検出全景 (南西より)



Ⅲc層上面遺構 完掘全景 (俯瞰)



貝符出土 (Ⅲc層)



カムイヤキ出土 (Ⅲ層)



HC地区まで広がる浜堤域 (手前) とⅢd層 (奥) (南西より)



浜堤域 (左) とⅢd層 (中央) (南東より)



SD06 検出状況（西より）



鉄製風呂鍬出土（SD06 検出時）（西より）



鉄製風呂鍬出土



Ⅲ d 層 遺物出土状況（西より）



Ⅲ e 層 検出状況（南東より）



Ⅲ d 層 遺物出土状況（北西より）



Ⅳ・Ⅴ層上面検出とHB③南壁（北西より）



IV・V層上面 検出全景（北西より）



IV・V層上面 検出全景（南西より）



下層トレンチ2 断面



下層トレンチ3 断面



調査完了遠景（北西より）



第一浜堤とB流路全景（南東より）



近世石列3群 検出（北東より）



近世石列3群 検出（北西より）



調査区全景（南より、手前は平安山原A遺跡）



近世 石列 2・6・7 群及びクムイ状遺構 検出 (南東より)



近世 石列 2 群 青磁出土 (南より)



近世 クムイ状遺構 検出 (東より)



近世 クムイ状遺構木杭・編物 検出 (北より)



同左 編物部分 (北より)



近世小溝状遺構群 完掘 (北西より)



椀形鉄滓出土



青磁出土



有孔滑石製品出土



貝層Ⅰ群 検出 (南東より)



スコリア (軽石) 範囲 検出 (南東より)



貝層Ⅱ群 f ~ h 検出 (西より)



貝層Ⅱ群 a ~ c 検出 (北西より)



貝層Ⅲ～Ⅴ群 検出（東より）



貝層Ⅲ群-1b層 検出（西より）



貝層Ⅲ群-2層下部 遺物出土状況（北西より）



貝層Ⅲ群-3・4層 検出（南東より）



貝層Ⅲ群-3・4層 検出（西より）



貝層Ⅲ群 調査区北壁部分（南より）



貝層Ⅲ群土層観察用ベルトに西壁 断面（南東より）



貝層Ⅲ群土層観察用ベルト東側 作業風景（北から）



町役場ロビーに展示された貝層Ⅲ群の剥ぎ取り土層



大洞 A 式土器



搬入及び貝塚時代前・中期土器



復元土器



石器



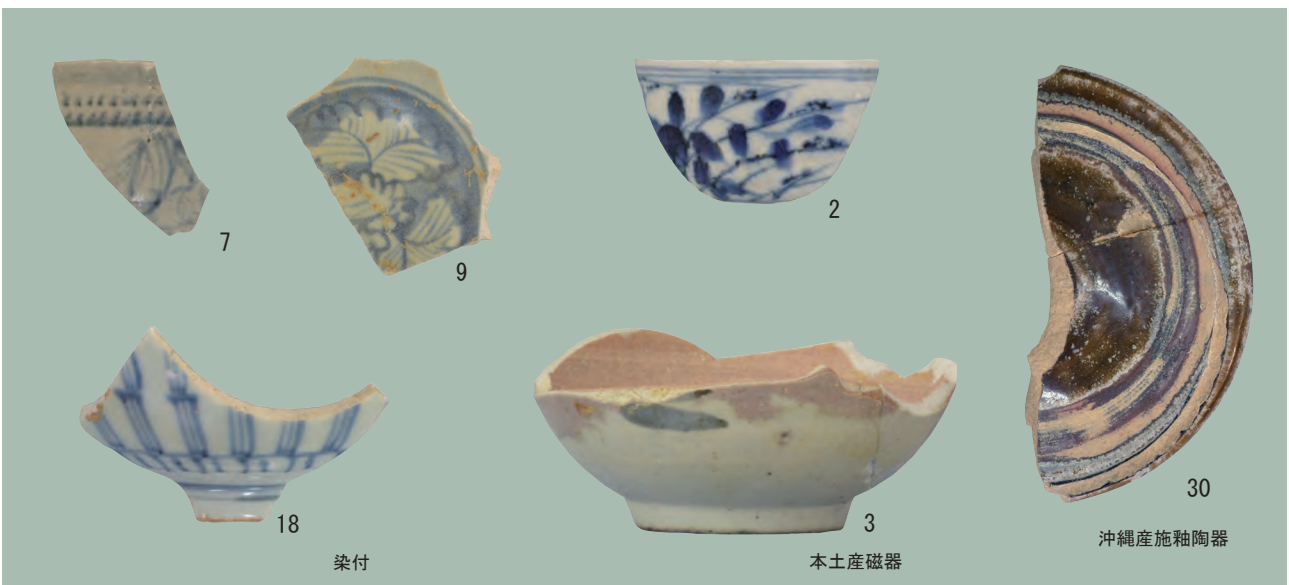
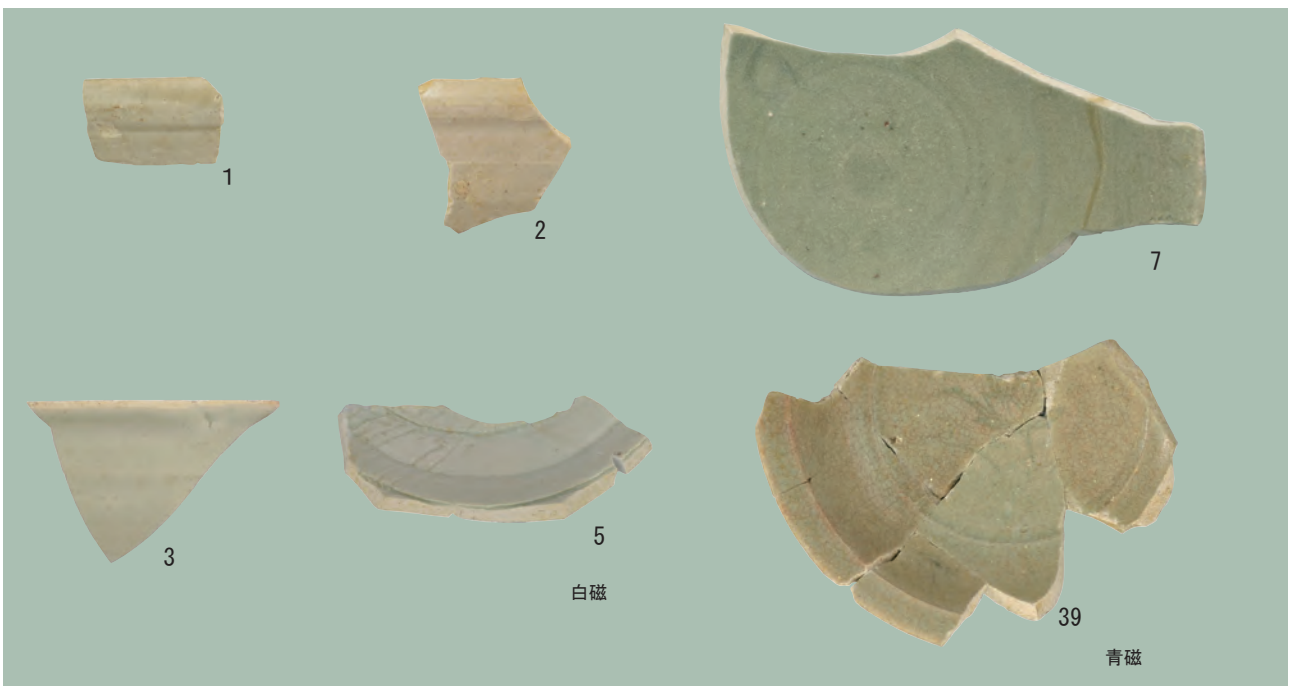
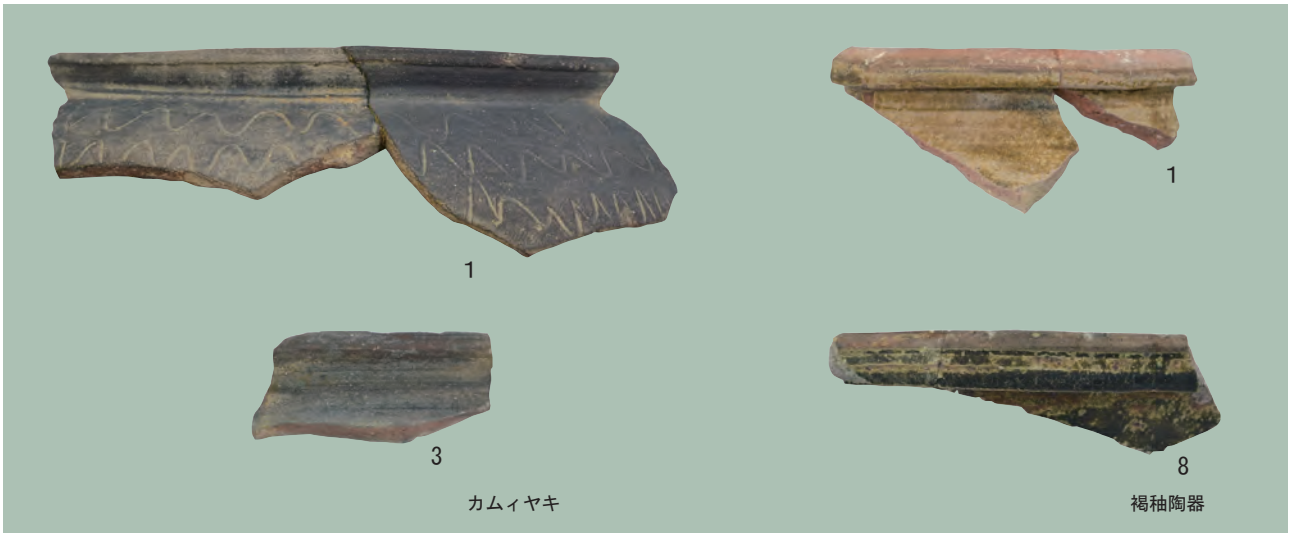
ヤコウガイ製匙



ゴホウラ製品



左：シャコガイ 中：メシガイ 右：リュウキュウサルボオ
手前：ハイガイ、マスオガイ、ホソスジイナミガイ、ソメワケグリ、ザルガイ、サメザラ、リュウキュウマスオ、カワラガイ、スダレハマグリ、ヌノメガイ



卷首図版 16 カムイヤキ・褐釉陶器・白磁・青磁・染付・本土産磁器・沖縄産施釉陶器 (番号は図番号と一致)

本文目次

はじめに

例言

巻首図版

第Ⅰ章 調査経緯・経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	3
第Ⅱ章 位置と環境	7
第Ⅲ章 調査の方法	11
第Ⅳ章 調査成果	14
第1節 層序	14
第2節 検出遺構	38
第3節 出土遺物	70
第Ⅴ章 科学的分析	331
第1節 平安山原B遺跡・C遺跡で採集された脊椎動物遺体	331
第2節 平安山原B遺跡と同C遺跡の貝類遺体および本地域の遺跡出土貝類のまとめ	372
第3節 平安山原B遺跡・平安山原C遺跡の年代測定	402
第4節 平安山原B・C遺跡より出土した人骨資料について	406
第Ⅵ章 まとめ	409
第1節 平安山原における遺物平面分布	409
第2節 平安山原の地形と生活空間の変遷	421
第3節 平安山原B・C遺跡の遺構と遺物	431

CD収録

- ・平安山原C遺跡・平安山原B遺跡出土貝類遺体の詳細
- ・平安山原C遺跡・平安山原B遺跡 遺物台帳

図版目次

巻首図版1 平安山原B遺跡(HB③地区)		巻首図版10 平安山原C遺跡(HC地区)	
巻首図版2 平安山原B遺跡(HB③地区)		巻首図版11 平安山原C遺跡(HC地区)	
巻首図版3 平安山原B遺跡(HB③地区)		巻首図版12 平安山原C遺跡(HC地区)	
巻首図版4 平安山原B遺跡(HB③地区)		巻首図版13 土器・石器	
巻首図版5 平安山原B遺跡(HB③地区)		巻首図版14 貝製品	
巻首図版6 平安山原B遺跡(HB③地区)		巻首図版15 貝製品(二枚貝有孔製品)	
巻首図版7 平安山原C遺跡(HC地区)		巻首図版16 カムイヤキ・褐釉陶器・白磁・青磁・染付・本土産磁器 ・沖縄産施釉陶器	
巻首図版8 平安山原C遺跡(HC地区)			
巻首図版9 平安山原C遺跡(HC地区)			
図版1 貝層Ⅲ群-1a層 検出(北西より)	39	図版9 SS02 検出(南西より)	46
図版2 貝層Ⅲ群-1b層 検出(北西より)	39	図版10 SK03 断面(西より)	47
図版3 貝層Ⅲ群土層観察用ベルト東面 断面(北東より)	41	図版11 SK03 南宋銭出土(東より)	47
図版4 貝層Ⅱ群f~h検出(西より)	41	図版12 貝層Ⅰ群検出(南東より)	47
図版5 貝層Ⅱ群a~c検出(北西より)	41	図版13 SD06 検出(北西より)	49
図版6 SB01~03 完掘(南より)	45	図版14 SD06 セクションA(東より)	49
図版7 SB02 検出(東より)	45	図版15 SD06 セクションC(東より)	49
図版8 SS01 検出(南西より)	46	図版16 SD06 完掘(西より)	49

図版17	SX03 検出(南東より)	49	図版66	土器20	153
図版18	Q14・15付近 ウシ蹄痕 検出(西より)	50	図版67	土器21	155
図版19	ウシ蹄痕 断ち割り	50	図版68	土器22	157
図版20	SK20～30 検出(南西より)	51	図版69	土器23	159
図版21	SD04 完掘(南西より)	51	図版70	サンゴ有孔製品	172
図版22	耕作関連遺構 畦畔1	53	図版71	石器1	179
図版23	耕作関連遺構 畦畔2～4	54	図版72	石器2	181
図版24	耕作関連遺構 畦畔5	55	図版73	石器3	183
図版25	石列1群検出(西より)	57	図版74	石器4	185
図版26	SK32 断面(南東より)	57	図版75	石器5	187
図版27	石列2群他 検出(南東より)	58	図版76	石器6	189
図版28	SK04 断面(東より)	58	図版77	石器7	191
図版29	礫間の貝集積検出(南西より)	59	図版78	石器8	193
図版30	石列3群 検出(東より)	59	図版79	石器9	195
図版31	石列3群 検出近景(東より)	59	図版80	石器10	197
図版32	石列4群-SL01 検出(西より)	60	図版81	石器11	199
図版33	石列4群-SL06 検出(東より)	60	図版82	石器12	201
図版34	石列5群 検出(東より)	60	図版83	石器13	203
図版35	クムイ状遺構 検出(南西より)	62	図版84	石器14	205
図版36	クムイ状遺構 断面(東より)	62	図版85	石器15	207
図版37	木杭と編物 検出(北より)	62	図版86	石器16	209
図版38	編物 検出(北より)	62	図版87	石器17	211
図版39	小溝状遺構群 検出(北西より)	63	図版88	ゴホウラ・アツソデガイ	215
図版40	土坑列 検出遠景(東より)	64	図版89	貝製品1	229
図版41	HB③-SK01 完掘(北より)	64	図版90	貝製品2	231
図版42	HB③-SK04～09 検出(南東より)	65	図版91	貝製品3	233
図版43	HB③-SK13～19 完掘(南東より)	65	図版92	貝製品4	235
図版44	SL03・04 検出(南東より)	66	図版93	貝製品5	237
図版45	SD01 検出(南西より)	67	図版94	貝製品6	239
図版46	SL05 検出(東より)	67	図版95	貝製品7	241
図版47	土器1	115	図版96	貝製品8	243
図版48	土器2	117	図版97	貝製品9	245
図版49	土器3	119	図版98	貝製品10	247
図版50	土器4	121	図版99	骨製品	249
図版51	土器5	123	図版100	グスク土器1	257
図版52	土器6	125	図版101	グスク土器2	259
図版53	土器7	127	図版102	カムイヤキ1	263
図版54	土器8	129	図版103	カムイヤキ2	264
図版55	土器9	131	図版104	滑石製品	265
図版56	土器10	133	図版105	白磁	269
図版57	土器11	135	図版106	青磁1	277
図版58	土器12	137	図版107	青磁2	279
図版59	土器13	139	図版108	青磁3	281
図版60	土器14	141	図版109	染付1	287
図版61	土器15	143	図版110	染付2・色絵	289
図版62	土器16	145	図版111	褐釉陶器・半練土器	293
図版63	土器17	147	図版112	銭貨	294
図版64	土器18	149	図版113	木製品	294
図版65	土器19	151	図版114	鉄製品	296

図版115	SD06検出プラン上での鉄鍬検出状況(西より)	298	図版129	軽石製品・琥珀	330
図版116	鉄製風呂呂検出土状況 近景(西より)	298	図版130	脊椎動物遺体1(魚類)	366
図版117	瓦質土器	299	図版131	脊椎動物遺体2(上段:ウミガメ類・リクガメ類、下段:イヌ・ネズミ科)	367
図版118	本土産陶器	301	図版132	脊椎動物遺体3(上段:ウマ、下段:イノシシ/ブタ) ..	368
図版119	本土産磁器	303	図版133	脊椎動物遺体4(イノシシ/ブタ)	369
図版120	沖縄産施釉陶器1	307	図版134	脊椎動物遺体5(ウシ)	370
図版121	沖縄産施釉陶器2	309	図版135	脊椎動物遺体6(ジュゴン・イルカ類)	371
図版122	沖縄産無釉陶器1	313	図版136	ホンダカラ破損状態	373
図版123	沖縄産無釉陶器2	315	図版137	貝類遺体1(巻貝)	399
図版124	沖縄産無釉陶器3	317	図版138	貝類遺体2(上段:巻貝、下段:二枚貝)	400
図版125	陶質土器	319	図版139	貝類遺体3(二枚貝)	401
図版126	鍛冶関連遺物(羽口・鉄滓・炉壁)	322	図版140	HC・HB③人骨片	408
図版127	円盤状製品	325			
図版128	瓦	327			

挿図目次

第1図	北谷町の位置と遺跡分布	5	第33図	V層上面 SK03 平面	46
第2図	遺跡の位置と北谷町域	7	第34図	V層上面 SK03 断面	47
第3図	戦前(1945)の平安山	7	第35図	V層上面 貝層 I 群	47
第4図	現在(2002)の平安山	7	第36図	IV層上面 SD06	48
第5図	北谷町の地形分類	8	第37図	IV層上面 SX03	49
第6図	キャンプ桑江北川地区の旧地形の復元状況	8	第38図	蹄痕形成過程想定案 模式	50
第7図	貝塚時代後期面の断面模式(北西-南東)	9	第39図	耕作関連遺構配置	51
第8図	グリッド設定	13	第40図	耕作関連遺構 SD04・SK20~30・木杭群	52
第9図	平安山原B・C遺跡の位置	13	第41図	畦畔状の痕跡 検出箇所	52
第10図	平安山原A~C遺跡の各調査区	13	第42図	「疑似畦畔B」及び畦畔2・3形成 模式	53
第11図	浜堤域・耕作域におけるIII層 模式	16	第43図	耕作関連遺構 畦畔2~4	54
第12図	自然流路の名称と位置	17	第44図	耕作関連遺構 畦畔5	55
第13図	V層堆積変遷 模式	18	第45図	HB③近世面 検出遺構配置	56
第14図	耕作土の人為的作出作業 想定図	20	第46図	HC近世面 検出遺構配置	56
第15図	IIIc・III d層における貝塚時代後期土器分布	21	第47図	近世面石列1群・SK32	57
第16図	層序1(HB③地区)	23	第48図	近世面石列2群・SK04	58
第17図	層序2(HB③地区)	25	第49図	近世面石列3群	59
第18図	層序3(HB③地区)	27	第50図	近世面石列4群	60
第19図	層序4(HB③地区)	29	第51図	近世面石列5群	60
第20図	層序5(HC地区)	31	第52図	近世面石列6・7群	61
第21図	層序6(HC地区)	33	第53図	近世面クムイ状遺構 平面	61
第22図	層序7(HC地区)	35	第54図	近世面クムイ状遺構 断面	62
第23図	貝塚時代後期面 当初検出された貝層範囲	38	第55図	小溝状遺構群	63
第24図	貝層III~V群各層における地点観測遺物分布	40	第56図	近世面 土坑列 HB③-SK01~03	64
第25図	貝層III群土層観察用ベルト東面 断面	41	第57図	近世面 土坑群 HB③-SK04~09(左)、HB③-SK13 ~19(右)	64
第26図	貝層II群	42	第58図	近世面 検出遺構配置	65
第27図	HCIV・V層上面検出遺構配置	43	第59図	近代面 検出遺構配置	66
第28図	HCV層上面検出遺構配置	43	第60図	近代面 SL03・04	66
第29図	V層上面 SB01	44	第61図	近代面 SD01・SL05	67
第30図	V層上面 SB02	44	第62図	近代面 祝女殿内小屋敷と周辺道路合成図	68
第31図	V層上面 SB03	45	第63図	土器重量 平面分布	71
第32図	V層上面 SS01・02	45			

第64図	HC貝層Ⅲ群・V層出土土器変遷	72	第113図	石器13	202
第65図	土器(口縁部)平面分布	76	第114図	石器14	204
第66図	土器接合関係 平面分布	78	第115図	石器15	206
第67図	土器(胴部)平面分布	91	第116図	石器16	208
第68図	HC貝層群・V層における底部 出土量	92	第117図	石器17	210
第69図	底部器種別 出土量	93	第118図	巻貝製品 平面分布	213
第70図	土器(底部)平面分布	94	第119図	貝輪 平面分布	214
第71図	土器1	114	第120図	貝符 平面分布	216
第72図	土器2	116	第121図	ヤコウガイの蓋附刃分布	217
第73図	土器3	118	第122図	ヤコウガイ蓋 大きさ別比較	217
第74図	土器4	120	第123図	シレナジミ(R)サイズ比較	218
第75図	土器5	122	第124図	二枚貝有孔製品 平面分布	222
第76図	土器6	124	第125図	ヤコウガイ重量・製品個数 平面分布	224
第77図	土器7	126	第126図	ヤコウガイの部位名称と割れ方	226
第78図	土器8	128	第127図	タカラガイ製品 平面分布	227
第79図	土器9	130	第128図	貝製品1	228
第80図	土器10	132	第129図	貝製品2	230
第81図	土器11	134	第130図	貝製品3	232
第82図	土器12	136	第131図	貝製品4	234
第83図	土器13	138	第132図	貝製品5	236
第84図	土器14	140	第133図	貝製品6	238
第85図	土器15	142	第134図	貝製品7	240
第86図	土器16	144	第135図	二枚貝有孔製品 地区別重量比較	240
第87図	土器17	146	第136図	貝製品8	242
第88図	土器18	148	第137図	貝製品9	244
第89図	土器19	150	第138図	貝製品10	246
第90図	土器20	152	第139図	骨製品出土 平面分布	248
第91図	土器21	154	第140図	骨製品	249
第92図	土器22	156	第141図	グスク土器 平面分布	255
第93図	土器23	158	第142図	グスク土器1	256
第94図	石器 平面分布	161	第143図	グスク土器2	258
第95図	敲石 長さとの幅の相関	166	第144図	カムイヤキ 平面分布	261
第96図	敲石兼磨石 長さとの幅の相関	167	第145図	カムイヤキ1	262
第97図	磨石 長さとの幅の相関	169	第146図	カムイヤキ2	264
第98図	サンゴ有孔製品	172	第147図	滑石製品	265
第99図	石器 石質組成	175	第148図	白磁 平面分布	267
第100図	器種別石質比率	176	第149図	白磁	268
第101図	石器1	178	第150図	青磁 平面分布	275
第102図	石器2	180	第151図	青磁1	276
第103図	石器3	182	第152図	青磁2	278
第104図	石器4	184	第153図	青磁3	280
第105図	石器5	186	第154図	染付・色絵 平面分布	284
第106図	石器6	188	第155図	染付1	286
第107図	石器7	190	第156図	染付2・色絵	288
第108図	石器8	192	第157図	褐釉陶器・半練土器 平面分布	290
第109図	石器9	194	第158図	褐釉陶器・半練土器	292
第110図	石器10	196	第159図	銭貨	294
第111図	石器11	198	第160図	風呂鉢の部位名称	295
第112図	石器12	200	第161図	鉄製品	296

第162図	鉄製風呂鉢出土状況 層位模式	298	第190図	平安山原B・C遺跡 貝類遺体分析地区名	401
第163図	瓦質土器	299	第191図	平安山原B・C遺跡 試料採取箇所	405
第164図	瓦質土器 平面分布	299	第192図	人骨出土地点(S=1/1000)	407
第165図	本土産陶器 平面分布	300	第193図	遺物平面分布(平安山原-貝塚Ⅰ期)	410
第166図	本土産陶器	300	第194図	遺物平面分布(平安山原-貝塚Ⅱ期)	410
第167図	本土産磁器 平面分布	302	第195図	遺物平面分布(平安山原-貝塚Ⅲ期)	411
第168図	本土産磁器	303	第196図	遺物平面分布(平安山原-グスクⅠ期)	411
第169図	沖縄産施釉陶器 平面分布	304	第197図	遺物平面分布(平安山原-グスクⅡ期)	412
第170図	沖縄産施釉陶器1	306	第198図	遺物平面分布(平安山原-近世期)	412
第171図	沖縄産施釉陶器2	308	第199図	グスク土器平面分布(平安山原-グスクⅠ期)	413
第172図	沖縄産無釉陶器 平面分布	310	第200図	白磁・青磁平面分布(平安山原-グスクⅠ期)	413
第173図	沖縄産無釉陶器1	312	第201図	骨平面分布(ウシ)	414
第174図	沖縄産無釉陶器2	314	第202図	骨平面分布(ウマ)	414
第175図	沖縄産無釉陶器3	316	第203図	骨平面分布(ブタ)	415
第176図	陶質土器 平面分布	318	第204図	骨平面分布(イノシシorブタ)	415
第177図	陶質土器	319	第205図	骨平面分布(海獣類)	416
第178図	羽口・鉄滓・炉壁 平面分布	321	第206図	骨平面分布(魚類)	416
第179図	鍛冶関連遺物(羽口・鉄滓・炉壁)	322	第207図	貝平面分布(シヤコガイ類製有孔製品)	417
第180図	中国象棋駒参考資料	323	第208図	貝平面分布(リュウキュウサルボオ製有孔製品)	417
第181図	円盤状製品	324	第209図	貝平面分布(大形イモガイ)	418
第182図	瓦 平面分布	326	第210図	貝平面分布(ホシダカラ)	418
第183図	瓦	327	第211図	貝平面分布(ヤコウガイ)	419
第184図	軽石 平面分布(製品含む)	329	第212図	貝平面分布(小形タカラガイ製錘)	419
第185図	軽石製品・琥珀	330	第213図	各期遺物平面分布(模式)	420
第186図	平安山原B遺跡(HB③地区)・C遺跡(HC地区)における 脊椎動物遺体の層位別出土数と組成(NISP)	364	第214図	平安山原周辺遺跡 変遷(1)	424
第187図	平安山原B遺跡(HB③地区)・C遺跡(HC地区)における 脊椎動物遺体の地区・層位別組成(NISP比)	365	第215図	平安山原周辺遺跡 変遷(2)	425
第188図	平安山原B遺跡(HB③地区)・C遺跡(HC地区)における 魚類遺体の地区・層位別組成(NISP比)	365	第216図	平安山原周辺遺跡 変遷(3)	426
第189図	平安山原B・C遺跡から得られた優占種のサイズ組成変化	382	第217図	平安山原周辺遺跡 変遷(4)	427
			第218図	平安山原周辺遺跡 変遷(5)	428
			第219図	時代別出土遺物変遷	429

表目次

第1表	北谷町遺跡一覧	6	第17表	文様別(外面のみ)出土量	80
第2表	HB③浜堤域Ⅲ層における遺物出土状況	15	第18表	文様別(外面+内面)出土量	81
第3表	HC後期層における遺物出土状況	17	第19表	文様別(口唇+外面)出土量	81
第4表	HB③耕作域Ⅲ層細分層の遺物出土状況	19	第20表	口径サイズ別(Ⅱ～Ⅴ類)出土量	81
第5表	Ⅲa・b層出土遺物	19	第21表	土器(胴部)出土量	89
第6表	平安山原各遺跡における基本層序の対応	21	第22表	土器(底部)出土量	92
第7表	基本層序土層注記一覧	22	第23表	くびれ平底 底径・底厚の関係	98
第8表	近世面 石列一覧	57	第24表	土器 観察一覧	100
第9表	報告遺構一覧	69	第25表	石器 出土量	160
第10表	遺物 出土量	70	第26表	遺構出土石器一覧	162
第11表	土器分類	71	第27表	石斧 形態別サイズ分類	163
第12表	搬入土器 出土量	74	第28表	石斧 観察一覧	164
第13表	土器(口縁部)出土量	77	第29表	敲石 形態別サイズ分類	165
第14表	Ⅱ類口縁部 出土量	79	第30表	敲石 形態別サイズ比較(完形)	166
第15表	施文部位別 出土量	80	第31表	敲石兼磨石 形態別サイズ分類	166
第16表	文様別(口唇のみ)出土量	80	第32表	敲石兼磨石 形態別サイズ比較(完形)	167

第33表	磨石 形態別サイズ分類	168	第79表	木製品 観察一覧	294
第34表	磨石 形態別サイズ比較(完形)	169	第80表	鉄製品 観察一覧	296
第35表	石皿 使用面×石質相関	170	第81表	各鉄製風呂鉢 特徴一覧	297
第36表	石皿 使用面×残存長相関	170	第82表	本土産陶器 出土量	299
第37表	石器 観察一覧	172	第83表	本土産陶器 観察一覧	299
第38表	岩石の性質と分類	175	第84表	本土産磁器 出土量	302
第39表	器種別使用岩石	176	第85表	本土産磁器 観察一覧	302
第40表	貝製品 出土量	212	第86表	釉色別使用比較	304
第41表	巻貝製品 観察一覧	213	第87表	沖縄産施釉陶器 出土量	304
第42表	貝輪 観察一覧	214	第88表	沖縄産施釉陶器 観察一覧	305
第43表	ゴホウラ・アツソデガイ製品(貝輪)観察一覧	215	第89表	沖縄産無釉陶器 出土量	310
第44表	ゴホウラ・アツソデガイ(自然貝)出土量	216	第90表	沖縄産無釉陶器 観察一覧	311
第45表	貝符 観察一覧	217	第91表	陶質土器 出土量	318
第46表	大形イモガイ大きさ(殻径)別 出土量	217	第92表	陶質土器 観察一覧	318
第47表	螺蓋製利器 観察一覧	218	第93表	鍛冶関連遺物 出土量	321
第48表	貝製利器 観察一覧	219	第94表	円盤状製品 出土量	323
第49表	二枚貝有孔製品 出土量	220	第95表	円盤状製品 観察一覧	323
第50表	二枚貝有孔製品(孔位置・重量別) 出土量	221	第96表	瓦 出土量	326
第51表	二枚貝有孔製品遺跡別 出土比較	221	第97表	軽石 出土量(重量)	328
第52表	二枚貝有孔製品 観察一覧	222	第98表	平安山原B遺跡(HB③地区)・C遺跡(HC地区)から 採集された脊椎動物遺体の種名一覧	335
第53表	ホラガイ有孔・ヤコウガイ製容器 観察一覧	223	第99表	平安山原B遺跡(HB③地区)から採集された脊椎動物 遺体の同定結果	336
第54表	ヤコウガイ製品(貝匙)出土量	224	第100表	平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物 遺体の同定結果	342
第55表	ヤコウガイ製品(貝匙)観察一覧	225	第101表	平安山原B遺跡(HB③地区)における脊椎動物遺体の 組成(NISP)	362
第56表	ヤコウガイ分類(加工痕有り・自然貝)出土量	226	第102表	平安山原C遺跡(HC地区)における脊椎動物遺体の 組成(NISP)	363
第57表	タカラガイ製品 出土量	227	第103表	平安山原C遺跡・B遺跡の新規報告分およびA遺跡の 近世以降の優占種	381
第58表	タカラガイ製品(貝錘)観察一覧	227	第104表	キャンプ桑江北側地区における各遺跡出土海産 貝類遺体の時代別変遷(暫定)	383
第59表	二枚貝有孔製品の属性	241	第105表	平安山原BおよびC遺跡出土貝類遺体の分類学的位置 と生息場所類型	384
第60表	骨製品 出土量	248	第106表	平安山原C遺跡・平安山原B遺跡出土貝類遺体の詳細	386
第61表	骨製品 観察一覧	248	第107表	放射性炭素年代測定結果	403
第62表	グスク土器 出土量	250	第108表	暦年較正結果	404
第63表	グスク土器胎土分類	252	第109表	平安山原B遺跡および平安山原C遺跡から出土した 人骨片一覧	407
第64表	グスク土器胎土別 出土量	253	第110表	平安山原地区の主な器類出土量	431
第65表	グスク土器 観察一覧	254	第111表	東日本系土器出土一覧(南九州～沖縄)	432
第66表	カムイヤキ 出土量	261	CD収録		
第67表	カムイヤキ 観察一覧	261	第112表	平安山原C遺跡・平安山原B遺跡出土貝類の詳細 (腹足類・二枚貝類)	
第68表	滑石製品 観察一覧	265	第113表	平安山原C遺跡・平安山原B遺跡 遺物台帳	
第69表	北谷町各小字におけるグスク時代初期遺物出土状況	265			
第70表	白磁 出土量	266			
第71表	白磁 観察一覧	267			
第72表	青磁 出土量	270			
第73表	青磁 観察一覧	273			
第74表	染付・色絵 出土量	284			
第75表	染付 観察一覧	285			
第76表	褐釉陶器・半練土器 出土量	291			
第77表	褐釉陶器・半練土器 観察一覧	291			
第78表	銭貨 観察一覧	294			

第 I 章 調査経緯・経過

第 1 節 調査に至る経緯

本報告書は、桑江伊平土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査を行った平安山原 C 遺跡・平安山原 B 遺跡を後世に残すため、記録保存を目的とした調査成果をまとめたものである。記録保存調査は、2003（平成 15）年 3 月に返還された在沖米海軍基地（キャンプ桑江北側地区）と既に返還されていた地域を含む、合わせて 45.8ha にわたる区画整理事業地内で発見された遺跡（「周知の埋蔵文化財」）が対象となった。

本町教育委員会では、1993（平成 5）年 8 月に基地返還の情報を得たことから、それに先立って返還跡地利用の諸開発に対応するため、1995（平成 7）年度から 1997（平成 9）年度に文化庁の補助を得て予備調査を実施した。その成果を踏まえ、更に遺跡の範囲と性格を詳細に把握するため、1998（平成 10）年度から 2004（平成 16）年度にかけて範囲確認調査を行い、9 遺跡 6 遺物散布地（延べ 13ha）と周知の 2 遺跡を合わせた 11 遺跡が確認された。

跡地利用促進が重要な課題となることから、1999（平成 11）年 9 月から 2000（平成 12）年 10 月にかけて、沖縄県内の政府関係機関、沖縄県並びに北谷町で「キャンプ桑江北側地区跡地利用支援関係機関連絡会議」が開催された。

区画整理事業は、2002（平成 12）より桑江伊平地権者会が結成されるなどの準備が始められ、2002（平成 14）年 3 月に桑江伊平土地区画整理事業の都市計画決定、2004（平成 16）年 3 月に事業認可（施工者：北谷町）を受け着手された。区画整理事業地内のほぼ全域で盛土造成工事が計画されており、この盛土の造成高は一様でなく埋蔵文化財に悪影響を及ぼす規模であることから、区画整理事業地内の埋蔵文化財は緊急発掘調査を行うこととなった。

この盛土造成工事を行う区画整理事業地は、米軍基地返還跡地が広域幹線道路である国道 58 号より地盤面が低いため、大雨による冠水が起きる等の問題を含んでいることから、国道との段差を解消し、職住近接型の都市環境の創出及び地域活性化を目指す計画が策定された。

区画整理事業地内に所在する遺跡のうち、1997（平成 9）年に発見され、縄文時代の長期にわたる拠点的な集落遺跡であることが判明した伊礼原 C 遺跡（当時の名称）については、現地保存範囲の確定に向け範囲確認調査が継続され、2004（平成 16）年の北谷町庁議で保存が決定、2005（平成 17）年に都市計画決定の変更、2006（平成 18）年 11 月の北谷町庁議で約 17,000 m²の保存が決定した。そして、2010（平成 22）年の文部科学省告示第 12 号により史跡に指定され、国史跡「伊礼原遺跡」として現状保存されることとなった。

同遺跡を除く他の遺跡は、次善の策として記録保存調査を行うこととなり、2004（平成 16）年に北谷町教育委員会と北谷町は、桑江伊平土地区画整理事業施行区域における埋蔵文化財の取り扱いについての協定を締結した。本町教育委員会は、区画整理事業地内の埋蔵文化財の記録保存を目的とする発掘調査について、事務負担量や諸作業の軽減、調査員体制、遺跡面積やその他の事業を考慮し、現地調査の測量及び発掘作業員の手配及び安全管理を民間業者に業務委託することとした。

平安山原 C 遺跡は平成 7 年度から平成 9 年度の予備調査で発見され、当初は貝塚時代前 V 期（縄文時代晩期）の遺跡であると考えられた。同遺跡は平安山原 A・B 遺跡に隣接し、その南側に位置する伊礼原 D 遺跡とは旧河川を挟んで別の遺跡であることが把握された（2008 北谷町教委）。今回報告分の発掘調査は、2009（平成 21）年 3 月 31 日に着手し、2009（平成 21）年 9 月 30 日に業務を

完了。調査面積は2,460㎡である。発掘調査の着手届は北教社21第303号平成21年4月20日付、終了報告は北教社21第303号平成21年10月21日付である。

平安山原B遺跡(3期)は、予備調査で貝塚時代後期・グスク時代の遺物包含層と戦前の遺構が確認された成果を踏まえ、本調査を4期に分けて行ったうちの1つである。『平安山原B遺跡』(2015北谷町教委)では、調査成果の内容を踏まえ、1・2・4期分(合計4,390㎡)をまとめて報告した。残る3期については隣接する平安山原C遺跡との関連が強いため、今回合わせて報告することとした。3期の発掘調査は平成21年10月14日に着手し、翌年2月19日に業務完了。調査面積は2,720㎡である。着手届は北教社21第2514号平成21年11月11日付、終了報告は北教社21第2514号平成22年3月16日付である。

第2節 調査体制

平安山原C遺跡発掘調査及び平安山原B遺跡発掘調査(3期)における調査体制は、以下のとおりである。

事業主体	教育長	比嘉 秀夫(平成20・21年度)
	同	川上 啓一(平成27・28年度)
事業総括	教育次長	謝花 良継(平成20・21年度)
	同	佐久本 盛正(平成27・28年度)
	社会教育課長	大城 操(平成20・21年度)
	同	比嘉 敬文(平成27年度)
	同	池原 誠(平成28年度)
調査総括	文化係長	嘉陽田 朝栄(平成20・21年度)
	同	米須 健(平成27・28年度)
調査担当	主任主事	山城 安生(平成20・21・27・28年度)
	同	東門 研治(平成20・21・27・28年度)
	同	松原 哲志(平成27・28年度)
	同	島袋 春美(平成27・28年度)
	主 事	松原 哲志(平成20・21年度)

資料整理作業員(順不同)

(平成27年度)

- 嘱託 ・比嘉優子・呉屋広江・上地千賀子・照屋元子・西原美草・佐久間クリエ・曾木菊枝
- ・東 順子・山城小百合・上間真寿美・富平砂綾子・知念栄子・金城綾乃・大城 光
- 臨時 ・又吉朋子・伊波弘子・泉 恵子・仲宗根円華・仲村渠容子・仲村渠恵子・崎濱あすか
- ・知花良枝・池原辰樹・仲宗根学・大城明香・照屋朝子・新川弘美・仲里亜希子

(平成28年度)

- 嘱託 ・比嘉優子・呉屋広江・上地千賀子・東 順子・上間真寿美
- 臨時 ・大城明香・照屋朝子・新川弘美・仲里亜希子

発掘調査及び自然科学分析に係る業務委託

(平成 20 年度)

平安山原 C 遺跡埋蔵文化財発掘調査委託業務委託 株式会社パスコ

平安山原 B 遺跡埋蔵文化財発掘調査委託業務委託 (その 3) 株式会社イーエーシー

(平成 22 年度)

貝層の額装作成業務委託 株式会社パスコ

(平成 28 年度)

平安山原 B 遺跡出土炭化物の年代測定業務委託 パリノ・サーヴェイ株式会社

金属製品保存処理業務委託 株式会社文化財サービス 沖縄営業所

平安山原 C 遺跡の獣骨年代測定業務委託 パリノ・サーヴェイ株式会社

調査指導及び助言 (敬称略、順不同)

おきなわ石の会	大城 逸朗	早稲田大学教育学部	樋泉 岳二
史跡鴻池新田会所管理事務所	松田 順一郎	佐賀県立九州陶磁文化館	大橋 康二
千葉県立中央博物館	黒住 耐二	沖縄県立博物館・美術館	藤田 祐樹
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部		東京大学大学院 人文社会系研究科附属次世代	
	設楽 博巳	人文学開発センター	国木田 大
沖縄国際大学	宮城 弘樹	沖縄県立博物館・美術館	山崎 真治
鹿児島大学埋蔵文化財調査室	新里 貴之	鹿児島県志布志市教育委員会	相美 伊久雄
青森県埋蔵文化財センター	永嶋 豊	青森県三沢市文化振興係	工藤 司
国際文化財株式会社	吾妻 俊典	国際文化財株式会社	水上 匡彦

第 3 節 調査経過

発掘作業

これまでの調査成果から、平安山原 C 遺跡の立地が背後の丘陵間から流れる河川 (ナガサ川) の右岸に位置することを考慮し、平安山原 B 遺跡 (3 期) では、平安山原 B・C 遺跡が隣接していることから、両遺跡のつながりを考慮して調査を行った。

両遺跡とも、磁気探査中に米軍由来の不発弾が発見され、自衛隊・警察による回収がなされた。平安山原 B 遺跡では油臭土が確認された。そのため本町教育委員会・沖縄防衛施設局で調整を行い、調査区近接地で計画されていた仮置き場を選定して油臭土をブルーシートで覆い仮置きを行った。同油臭土は、沖縄防衛施設局による土壌処理が行われることとなった。掘削土は、区画整理事業担当部署と調整し、同事業地内に選定された土置場に運搬した。調査終了後は、引き続いて同事業による造成工事が行われることから、調査区埋め戻しは行ななかった。

平安山原 C 遺跡 (HC : 平成 21 年 3 月 31 日～9 月 30 日) [遺跡名の表示 (HC、HB ①～④) は第 10 図参照]

当初貝塚時代前 V 期 (縄文時代晩期) のものと推定していた川沿いに立地する生活址の様相や、その後の陸地形成の変遷、近現代の耕作地の変遷などの把握を目的とした。調査区を設定後、4 月 10 日より磁気探査を実施し、表土掘削を行った。

5 月 8 日より人力による包含層掘削を開始した。近世面①では石列群、礫集中を伴う土坑 (SK)、

耕作痕などが検出された。石列は平安山原 A 遺跡 (HA ①)・平安山原 B 遺跡 (HB ①) で検出されたものに類似する。近世面②では、ナガサ川に繋がるものと推察される流路が検出され、流路内から石積遺構〔通称：クムイ (調査当時の名称)〕や杭列も検出された。近世面①・②それぞれの全体検出状況の撮影は、高所作業車を用いて行った。引き続きグスク層の検出作業を進めたが、判然としない状況が続いた。

9月1日以降、調査区内の北東側では貝塚時代後期の貝層群 (I～VI) が検出された。貝層 II 群は廃棄単位で a～i に分け、貝種の違いによる廃棄傾向にも留意して取り上げを行った。貝層 III 群は本遺跡南側を流れる自然流路へと傾斜する斜面及び湿地へ投棄されたものと考えられた。約 1.2 m と厚く 5 枚の堆積は、貝塚時代後期の土器変遷 (出土土器は、上層から下層に行くに従い、くびれ平底土器から尖底土器への変遷が見られる。) の様相も示すことから、剥ぎ取り保存処理を行った。

下層調査は、調査区北西側で浜堤を横断する掘削を行った。砂層堆積の下位の内陸側では、固結の弱い状況が確認された。浜堤の範囲は、調査指導員である松田順一郎氏が想定された伊礼原遺跡とその周辺地形分類図 (伊礼原遺跡 2007) に類似する状況に思えた。

平安山原 B 遺跡 (HB ③ : 平成 21 年 10 月 14 日～2 月 19 日)

HB ③の調査区は、HB ①・②と平安山原 C 遺跡から広がる貝塚時代後期・グスク時代から近世の生活址及び浜堤後背湿地の様相等の把握を目的とした。

調査区設定後、11 月 9 日より磁気探査を実施し表土掘削を行い、包含層の掘削作業へと進んだ。

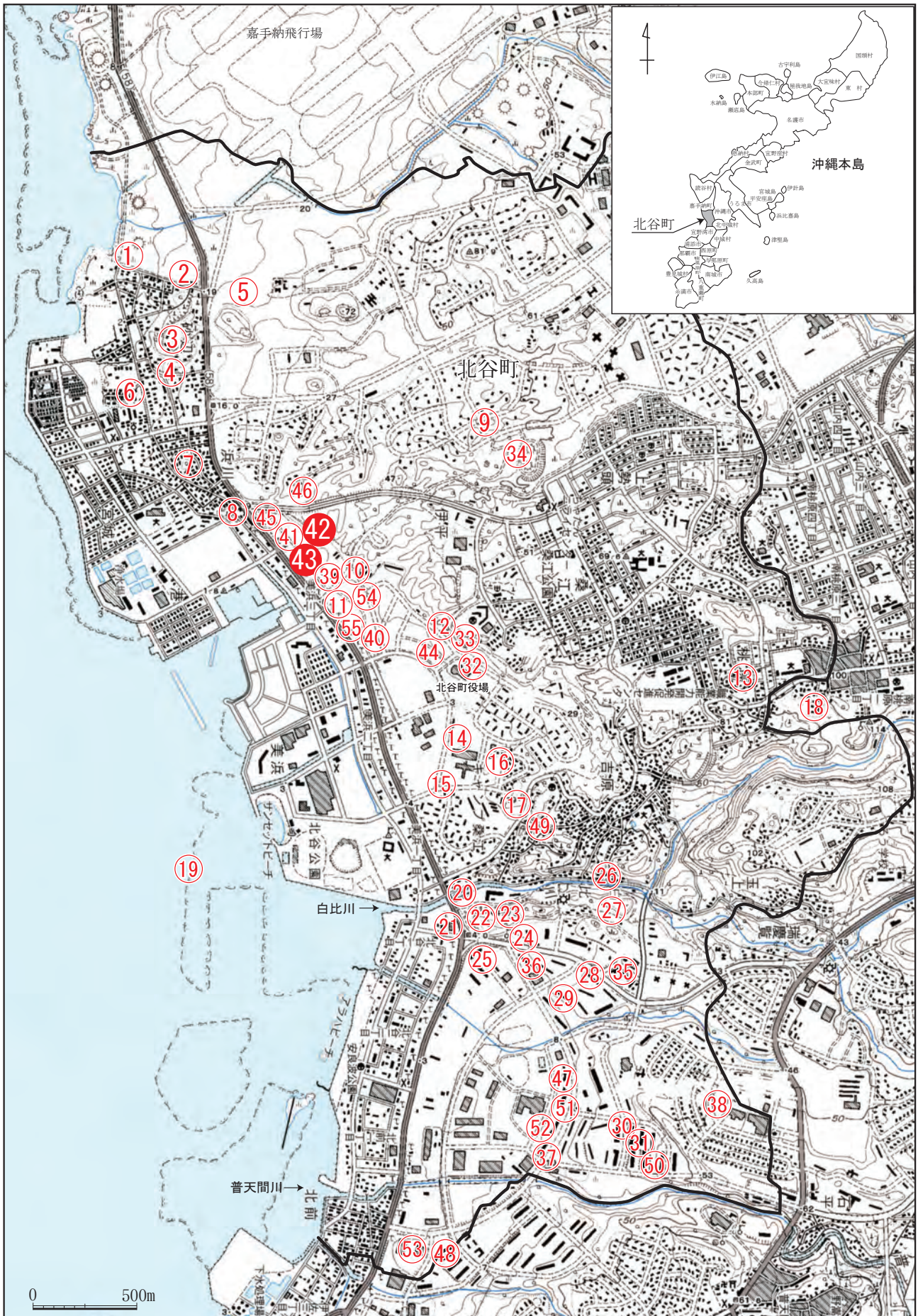
調査区北側では戦前の平安山集落の屋敷に伴う石列が、南西側では早い段階で石列やピットがそれぞれ検出された。またその下から、HB ①でも検出されたグスク時代包含層が流路状の堆積範囲にて検出され、遺跡南側のナガサ川に関連する湿地堆積と考えられた。同堆積からの遺物の出土は少ないが、列を成す土坑・溝などの他、耕作の可能性が考えられるウシの足痕が検出され、鉄製風呂鉢も出土した。招聘した堆積学の松田順一郎氏からは、この湿地堆積はグスク時代の遺物を含むレベルでは砂が混ぜられており、淡灰色砂質土層 (7 層) と灰黒色砂質土層 (14 層) は耕作土であるとの指摘があった。同時に、溝状遺構 SD04 としたものは単に自然流水ではなく、耕作土をつくる際に何らかの手が加わったものだろうという所見も得ている。同堆積下位 (16・17 層) では灰白色を呈するシミ状の広がりが見られ、これについても同氏より、地震による噴砂の痕跡でグスク期以後の比較的新しいものと思われるとの所見を得た。

下層調査では、固結の弱い砂礫層の広がりとその上位に堆積する泥炭層の堆積が認められた。調査区南側は河口の可能性が考えられた。

整理作業 (平成 27・28 年度)

平安山原 A 遺跡及び平安山原 B 遺跡 (HB ①・②・④) の成果を踏まえ、戦前の平安山集落東側・近世の耕作地・グスク時代の土地利用の様子・貝塚時代後期の生活址などの変遷や広がり、遺物の出土分布による傾向から捉えること、浜堤背後の陸地の変遷を広く把握することを目的に、整理作業を行った。

現場作業中に採取した炭化物サンプル試料の分析及び石質・人骨等の同定については、専門機関へ業務委託・調査依頼を行った。



第1図 北谷町の位置と遺跡分布

※番号は第1表と一致

第1表 北谷町遺跡一覧

2016年3月現在

No.	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺(すなべ)サーク原貝塚	貝塚後期	字砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	貝塚前IV期～近世	字砂辺加志原
3	砂辺貝塚	貝塚前IV期～グスク	字砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	貝塚後期	字砂辺加志原
5	カーシーノボントン遺物散布地	貝塚前V期	字砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	貝塚前II期～戦前	字砂辺村内原
7	浜川千原岩山(はまがわせんばるいわやま)遺物散布地	貝塚前V期	字浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	貝塚後期	字浜川浜川
9	上・下勢頭区古墓群(かみ・しもせどくこぼぐん)	近世	字上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原(いれいばる)遺跡	貝塚前I期～戦前	字伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	貝塚I～V期・晩期・近世・戦前	字伊平伊礼原
12	桑江ノ殿(くわえのとうん)遺物散布地	グスク～近世	字桑江小堀原
13	鹿化石出土地	旧石器	字吉原栄口原・桃原
14	前原古島(めーばるふるじま)A遺跡	近世	字桑江桑江原・前原
15	前原古島B遺跡	近世	字桑江前原
16	伊地差久原(いじさくばる)古墓	近世	字桑江伊地差久原
17	前原古墓群	近世	字桑江前原
18	桃原(とうばる)洞穴遺跡	旧石器	字吉原東新川原
19	インディアン・オーク号の座礁地	近世	字北谷地先
20	池(いち)グスク	グスク	字吉原東宇地原・西宇地原
21	白比川(しらひがわ)河口遺物散布地	貝塚前II期	字北谷西表原
22	北谷城(ちやたんぐすく)遺跡群	貝塚後期末～グスク	字大村城原
23	北谷城	貝塚後期末～近世	字大村城原
24	北谷城第7遺跡	貝塚後期～グスク	字大村城原
25	北谷番所址	近世	字北谷北谷原
26	吉原東角双原(よしはらあがりちぬまたばる)遺物散布地	グスク	字吉原東角双原・西角双原
27	山川原(やまがーばる)古墓群	近世	字大村山川原
28	玉代勢原(たまよせばる)遺跡	貝塚後期末～グスク	字大村玉代勢原
29	長老山(ちやうろうやま)遺物散布地	グスク～近世	字大村玉代勢原
30	大道原(うふどうばる)A遺跡	グスク	字北谷大道原
31	大道原B遺跡	貝塚前V期	字北谷大道原
32	後兼久原(くしかにくばる)遺跡	グスク	字桑江後兼久原・字桑江小堀原
33	ジョーミーチャー古墓	グスク	字桑江小堀原
34	伊礼伊森原(いりーいーむいばる)遺跡	グスク	字上勢頭伊礼伊森原
35	後原(くしばる)遺跡	グスク～近世	字大村玉代勢原
36	塩川原(すーがーばる)遺跡	グスク	字北谷塩川原
37	稲干原(んにふしばる)遺跡	貝塚後期	字北前稲干原
38	横嵩原(よこたけばる)遺跡	グスク	字北前横嵩原
39	伊礼原D遺跡	貝塚後期～近世	字伊平伊礼原
40	伊礼原E遺跡	貝塚前II期～近世	字伊平伊礼原
41	平安山原A遺跡	貝塚後期～近世	字伊平平安山原
42	平安山原(はんざんばる)B遺跡	貝塚後期～近世・戦前	字伊平平安山原
43	平安山原(はんざんばる)C遺跡	貝塚後期～近世	字伊平平安山原
44	小堀原(くむいばる)遺跡	貝塚後期～近世	字桑江小堀原
45	千原(せんばる)遺跡	グスク	字伊平千原
46	大作原(うふさくばる)古墓群	貝塚後期・近世	字伊平大作原
47	東表原(あがりうむていばる)遺跡	貝塚前V期	字北谷東表原
48	新城下原(あらぐすくしちやばる)第2遺跡	貝塚前I期～近世	字北谷安仁屋原
49	東宇地原(あがりうじばる)古墓群	近世	字吉原東宇地原
50	大道原C遺跡	近世	字北谷大道原
51	大道原D遺跡	グスク	字北谷大当原
52	高畔原(たかふしばる)水田跡	近世～戦前	字北谷高畔原
53	安仁屋原(あにやばる)遺跡	グスク～近世	字北前安仁屋原
54	伊礼原A遺跡	貝塚前III期～貝塚後期	字伊平伊礼原

注：時代表記は概ね「グスク」→「10～17世紀前半」、「近世」→「17世紀後半～明治以前」、「戦前」→「1945年以前」

*番号は第1図と一致

第Ⅱ章 位置と環境

【 地理的環境 】

北谷町は、沖縄本島の東シナ海に面した西海岸側にあり、県庁所在地である那覇市から北に直線距離で約16kmに位置している。本町の総面積は13.93km²、東西に約4.31km、南北に約6kmを測る。北側に嘉手納町、東側に沖縄市、南東側に北中城村、南側に宜野湾市が隣接する。

町面積の52.3%を米軍基地が占めており、町域北側と南側の大部分、その間の海岸低地と丘陵台地の一部を占有する返還予定のキャンプ桑江（南側地区）や陸軍貯油施設桑江第1タンクファームによって町は東西に分断されている。

町の人口は29,266人（平成28年9月現在）、第三次産業が75.6%を占め、駐留軍用地跡地利用や公有水面埋立により新たな街づくりが進んでおり、商業集積や観光リゾート産業を中心とした産業拠点が形成されつつある。

平成15年3月末に返還された旧キャンプ桑江北側地区が大部分を占める6.3haについて、「町の都市核」として位置づけた桑江伊平土地区画整理事業が進められている。同区画整理事業地内は、盛土造成工事が広範囲に及んでおり、米軍基地の施設整備による盛土造成と合わせると沖縄戦以前の地面との標高差は、国道58号側では約2～3m程度となる。

戦前までの北谷村は、大正期以降の全作付面積の9割以上を芋畑とサトウキビ畑が占めていた農



第2図 遺跡の位置と北谷町域

『(C) Mapion 地図データ (C) ZENRIN』(加筆)より



第3図 戦前（1945）の平安山

2006『北谷町の地名』より



第4図 現在（2002）の平安山

2006『北谷町の地名』より

村であったが、北谷城の城下町である北谷三箇村（旧字北谷・伝道・玉代勢）の水田は、湧水「チブガー」や普天間川（佐阿天川）の流域に広がる県下の三大美田の一つ『北谷ターブクラー』として知られ、字伊礼・字平安山を分けるナガサ川、字伊礼・字桑江を分ける「ナルカー」などの河川周辺にも水田が営まれていた。また、現在の国道58号より海側には、貨客の輸送に大きな役割を果たした県営鉄道（軽便鉄道）の嘉手納線（那覇—嘉手納間）23.6kmが走っていた。

【遺跡の位置と地形的環境】

平安山原B遺跡と平安山原C遺跡は隣接しており、前者は平安山原A遺跡の東側、後者は南東側に接している（第9図）。桑江伊平土地区画整理事業地内の街区番号では、6・7・10・12街区（平安山原B遺跡：北谷町字伊平小字平安山原140番地一帯）、13・14街区（平安山原C遺跡：北谷町字伊平小字平安山原131番地一帯）にあたる。

両遺跡は標高約3～5mの沖積地に立地している。背後は標高約30m前後の丘陵を刻む浅い谷が発達し、遺跡の南側には丘陵地の谷間にある泉からナガサ川（註1）が西流し、東シナ海に達している。

遺跡は広範囲で確認されたビーチロックや固結の弱い砂礫層上に形成された浜堤上に展開し、平安山原B遺跡背後の丘陵麓や岩壁下のサンゴ礫層や石灰岩礫層の上位に形成された砂浜にも貝塚時代後期の生活址があり、その後の陸地の形成の中で耕作地や集落が営まれた。

本町内で確認される遺跡の多くは、海岸低地や小起伏丘陵やその麓に所在している。伊礼原地区では陸地の形成・発達の中で、丘陵麓の湧水に近い一帯から、以後発達する砂浜や浜堤とともに海側へも拡大していく。平安山原地区では、阿波連浦下層式期以後、現代に至るまでの遺跡の広がりや砂浜や浜堤上にて認められている。

遺跡前面の海はやや内湾的様相を呈し、サンゴ礁が発達したため、良好な魚場であるイノー（礁池）や干瀬が続いている。本遺跡から埋立て以前の海岸線までの距離は約200mである。



第5図 北谷町の地形分類

1983『沖縄県地形分類図』（加筆）より



第6図 キャンプ桑江北側地区の旧地形の復元状況

2005『キャンプ桑江北側地区返還に伴う試掘調査』掲載図に加筆

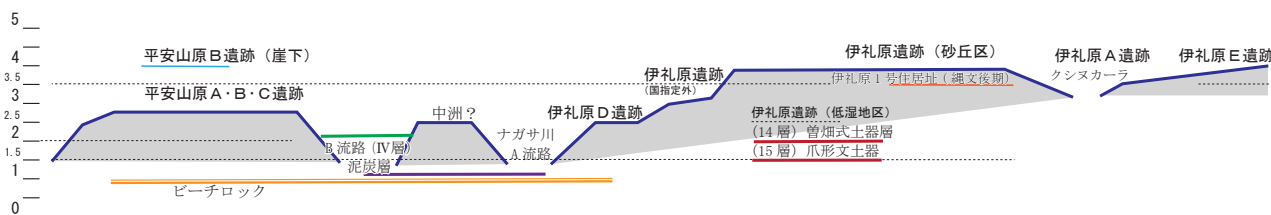
平安山原A・B遺跡では自然流路（B流路：第12図参照）が確認されている。浜堤の発達に伴う後背窪地とみられ、平安山原B遺跡では、丘陵地からの流水に起因するものと考えられる水性堆積が整層状態で確認され、カワニナを含む堆積であることから湿地の広がりがあったと判断される。同様の堆積は、伊礼原D遺跡でも確認されている（2013）。

平安山原A遺跡の調査区（HA③）の下層掘削では、波静かな状態での砂層堆積^{（註2）}、平安山原B遺跡範囲の西側では、固結の弱い砂礫層が確認され^{（註3）}、平安山原や伊礼原一帯のビーチロック形成の基となった。これら海底の二次堆積層中から、縄文時代前期～後期の土器片が発見されており、それより新しく堆積したと思われる枝サンゴ層からは弥生時代相当期の土器が発見されている。

平安山原A遺跡（HA④中央部）の下層確認トレンチにおける、標高1～1.5mのビーチロックに含まれた貝類を試料とする年代測定分析結果からは、 $4,120 \pm 30BP \sim 1,620 \pm 20BP$ の値が得られている。陸から海側へ新しくなる傾向も見られたが、内陸側では $3,109 \pm 26BP$ の結果となりビーチロックの形成は単純でなく、複数の時期に生成され混在していると考えられている（2016）。

キャンプ桑江北側（旧字平安山・字伊礼・字桑江）の沖積地の形成は、試掘調査の成果から飛び石状の小島が連なる海に、沖積層の流入や海成浜堤が形成されていったと判断されている（第6図）（2005）。

第7図に示した平安山原A・B・C遺跡の標高と伊礼原遺跡の標高を比較すると、平安山原B遺跡の崖下（HB②イ地区）の標高は伊礼原遺跡浜堤区と同様に標高約4mと調和的であるが、B流路（第12図参照）を挟んだ海側では標高約2.8～3mで伊礼原遺跡の貝塚時代後期面より低い。固結の弱い砂礫層上の海成砂層の堆積は、前述のビーチロックの標高と比較するとさほど厚くない。伊礼原遺跡の浜堤形成過程には、縄文時代後期と弥生時代後期相当期に起きた暴浪または高潮等の大きな波力による浜堤の侵食、伊礼原E遺跡では津波による侵食等の自然災害を受けた痕跡が認められており、その後、標高約4mまで浜堤砂が累重する発達が繰り返されていると考えられているが、平安山原では伊礼原遺跡と同様な標高に達していない。



第7図 貝塚時代後期面の断面模式（北西－南東）

陸地の形成発達によって町域西部に広がる沖積低地の背後には、本町を北西－南東方向に走る桑江断層が大きな境となっており、町域東・南部は標高100m以上、100～50m、50～30mの段丘地形が見られ、侵食が進んだ台地は起伏に富んだ地形をなし、北部では洞穴やドリーネ・石灰岩堤・石灰岩丘等のカルスト地形が発達している。

地質は、沖縄本島中南部に広く分布する島尻層群、同時異層の琉球石灰岩と国頭礫層から構成される琉球層群、海岸低地を構成する沖積層が分布する。台地・丘陵部は、沖縄本島北部の地質（国頭礫層）と中南部（琉球石灰岩層）の境目にあたり、沖縄島の国頭礫層分布域の西北端をなしている。町域北側の標高50～100m（上勢頭・桑江・浜川・伊平付近）の台地では、風化が進んだ最上部は国頭マージと呼ばれる酸性土壌である。

地形を概観すると東高西低の様相を呈しており、町内を流れる二級河川の白比川・普天間川（佐阿天川）の上流域の崖面、吉原（北玉小学校付近）では島尻層群（泥岩層）、玉上付近に島尻層群（砂

岩) が分布する。

植生は、国頭マージの分布域ではリュウキュウマツ・イタジイ・イジュ・ヤマモモなど、石灰岩質土壌域ではガジュマル・アカギ・オオバギ・ヤブニッケイなど、泥岩層(クチャ)を母材とする風化土壌の「ジャーガル」ではススキ・チガヤ、砂岩(ニービ)の風化した土壌の「ウジマ」ではオオバイヌビワ・タブノキ・ホルトノキなどの植生が見られる。本島北部と中南部の植生が混生しているが、現存する自然植生は少ない。

平安山原と伊礼原の間を流れるナガサ川の左岸となる伊礼原遺跡出土の植物遺体や炭化物から、縄文時代前期の植生・景観は照葉樹林(常緑広葉樹林)が成立し、高木層からなる照葉樹林は遺跡から多少隔たった内陸部に分布していた可能性や、沼沢地性の植物群落・アダン群集が海岸線に沿って成立していたこと、丘陵の縁でマングローブの縁でもあるような生育環境が成立していたことなどが想定されており、多様な植生が形成されていたと考えられている(2007)。

伊礼原遺跡では、汽水地域縁辺部のマングローブ林(サキシマスオウノキ・オヒオルギ・サガリバナ)の植生が確認された第X I層出土資料から、 $1,140 \pm 60$ BP(2012)の年代測定が得られている。伊礼原D遺跡では、マングローブの後背地や川沿いの湿地に生育するサガリバナ(950 ± 30 BP)が確認されている(2013)。

【村落変遷(グスク時代～近世・近現代)】

ナガサ川右岸の北側一帯に平安山原A遺跡・平安山原B遺跡、同左岸に伊礼原遺跡や伊礼原D遺跡、これらより約800m南下した、ナルカーと称される河川左岸の小堀原遺跡、その南側約150mに後兼久原遺跡が所在する。小堀原・後兼久原遺跡は出土遺物の違いなどから集落における構造差の指摘(宮城2014)や喜界島勢力の影響(瀬戸2014)、後兼久原遺跡は製鉄・鍛冶等からも喜界島城久遺跡群との関連が指摘されている(村上2015)。町域北側の砂辺サーク原遺跡はグスク時代開始期の集落と考えられている。

さらに、約1km南にあり白比川沿いの急崖となる標高約44.7mの琉球石灰岩丘陵上には北谷城、同じく同河川右岸にイシグスク(北谷城の出城的存在と考えられている)がある。北谷城は、古琉球期の歌謡集『おもろさうし』に「きたたんのてだ」や「きたたんの世のぬし」と謡われた按司の居城で、民間伝承では金満按司・大川按司・谷茶按司の興亡があったと伝えられている。また、1609年の島津侵入時に首里の陥落を聞いて自刃した「雍肇豊佐敷筑登之興道」の伝承が残る。

近世以降の北谷の村落変遷については、『おもろさうし』に「きたたん・くわい・くになおり・やら・やまち」の5つ、近世初期の村名を記す『絵図郷村帳』(1649年)には「北谷・くわい・平安山・すなべ・野国・賀手納(嘉手納)・屋郎(屋良)・山内・あぎな(安仁屋)」の9つの村がみられる。

その後1660～1670年代に間切の分割や新聞切の創設などが繰り返され、12の村(字)が出揃う。北谷城の城下の北谷三箇村と呼ばれる北谷・玉代勢・伝道の名は、「翁姓大宗家々譜」や「乾隆二年帳」に見られる。「平安山」の名は、同家々譜に「嘉靖年間北谷間切平安山地頭職」とあり、このことから平安山村は18世紀前半までには成立していたと考えられている。『琉球国由来記』(1713年)によると、村落祭祀を主催した女性神役である「平安山ノロ」が5ヶ村(平安山村・浜川村・砂辺村・桑江村・伊礼村)を管轄していたことが分かる。

また北谷間切には、王府の払請地を求めて首里・那覇からの貧窮した士族が北谷に下り、「屋取」と呼ばれる集落が多く形成された。

戦前にはナガサ川を境にして北側を平安山、南側を伊礼と呼び分けており、旧字平安山(41戸)、旧字伊礼(39戸)の畑は、集落の周囲にとどまらず丘陵台地や谷間地形の谷底に、水田は川沿い

や湧水「ウーチヌカー」周辺で行われている。

近代の北谷は、近世の村（字）を引き継いで、沖縄戦の頃までほとんど変化なく存続しており、1908（明治41）年の「沖縄県及島嶼町村制」施行に伴って「間切」は「村」に、「村」は「字」に改称され

た。大正から昭和にかけて屋取集落が行政字として分離独立し、行政字（区）は22字となり、1944年（昭和19）末には34字、1951年（昭和26）の土地所有権確認事業の際に地籍字が現在の11の字に整理された。遺跡の所在地の名称である伊平（伊礼と平安山）とは、このことによる。

註1：泉と平地に至るまでを「トゥクガー」、平地に至った流では「ナガサ」と呼称された。現在は徳川排水路として整備されている。

註2：松田順一郎氏の所見による。

註3：大城逸朗氏の所見による。

第Ⅲ章 調査の方法

調査区及びグリッド設定

グリッドの設定は、1辺100mの大グリッドで区画整理事業地全体を覆い、大グリッドの中に1辺5mの小グリッドを設けた。同設定は、試掘調査で設定されたメッシュとの整合を考慮している。グリッド名称は、大小ともグリッドの北東隅を基準に、南東へ1～20、南西へA～Tとした（第8図）。

平安山原C遺跡の調査区は、大グリッドB4区の範囲内に位置している。調査区内のセクションベルト位置は、遺跡背後の丘陵間から流れる河川（ナガサ川）の右岸に位置することを考慮し、河川周辺の様相も含めて捉えることを目的に選定した。

平安山原B遺跡の調査区は、大グリッドA・B3・4区にまたがって位置している。調査区内のセクションベルト位置は、調査区を縦横断するグリッドラインに沿って設定した。

表土掘削

調査区の設定後、磁気探査及び、機械力による表土掘削を行った。表土掘削は0.8 m³のバックホウと10 tダンプにて、米軍基地施設の整備による造成土や確認調査時の埋土等を掘削・運搬した。米軍基地整備による造成土中に見られる様相や、沖縄戦上陸後から基地としての利用が始まったことで攪乱された旧表土面の様子を把握しながら、調査対象の遺物包含層検出に努めた。

包含層掘削及び遺構検出

遺物包含層は、遺物量や出土状況に応じて小形のスコップや手鋏、ねじり鎌を用いて掘削した。遺構検出作業は基本的にジョレンを用いたが、より精査が必要な箇所についてはねじり鎌を用いた。排土は、ベルトコンベアも併用して場外搬出し、バケット容量0.3 m³級のバックホウと4 tダンプを用いて残土置き場へ運搬した。

遺構掘削

土坑や柱穴は基本的に長軸で半截し、溝は規模に応じて数箇所の土層観察用畦を残し掘削した。掘削には移植ごてやスプーン等を用いつつ、遺物を傷つけないよう必要に応じて竹串や竹べら等を用いた。出土遺物は原則として層位・グリッド毎、或いは遺構毎に取り上げたが、出土地点の測量

が必要なものについては測量機器による点上げを行った。

記録作業

遺構実測は主にトータルステーションを用いたが、写真測量や手実測の方法も用いた。写真撮影は、6×7のフィルムカメラ（カラーリバーサル・モノクロネガ）と、500～1000万画素のデジタルカメラを使用した。遺構検出時と完掘時には高所作業車24mを使用して全景の撮影を行い、できるだけ定点撮影することを留意した。

整理作業

本発掘調査から出土した総遺物量は、標準的な遺物コンテナ（60×40×10cm）で、平安山原C遺跡462箱、平安山原B遺跡179箱、土嚢袋95個であった。遺物洗浄・乾燥といった一次整理作業は、現場作業期間中の雨天時等を利用して行った。

本格的な作業は、現地調査終了後の平成27年度から開始した。出土遺物への注記は、膨大な量を短期間で行う事に苦慮した。

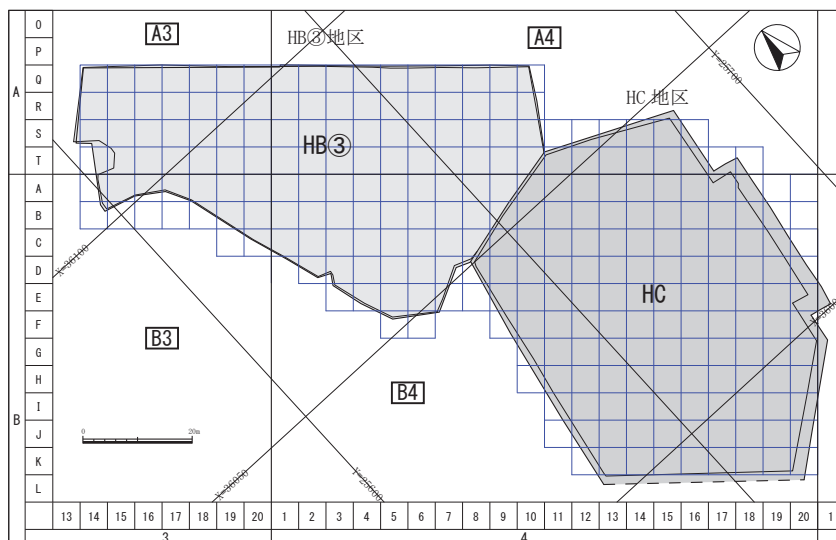
分類・接合を行いながら、遺物に付随する情報等をカード化し、集計表や出土分布図などの作成に続く基礎データ作成を行った。

遺物の実測は、分類された各出土遺物の帰属時期を示すもの、特徴的な資料等を抽出して行い、実測図をスキャンして描画ソフト（Illustrator CS）を用いてデジタルトレースを行った。現場作業時にトータルステーションや写真測量、手実測の遺構図等を描画ソフト（Illustrator CS）で製図したものを、報告書用の図面に整理掲載した。

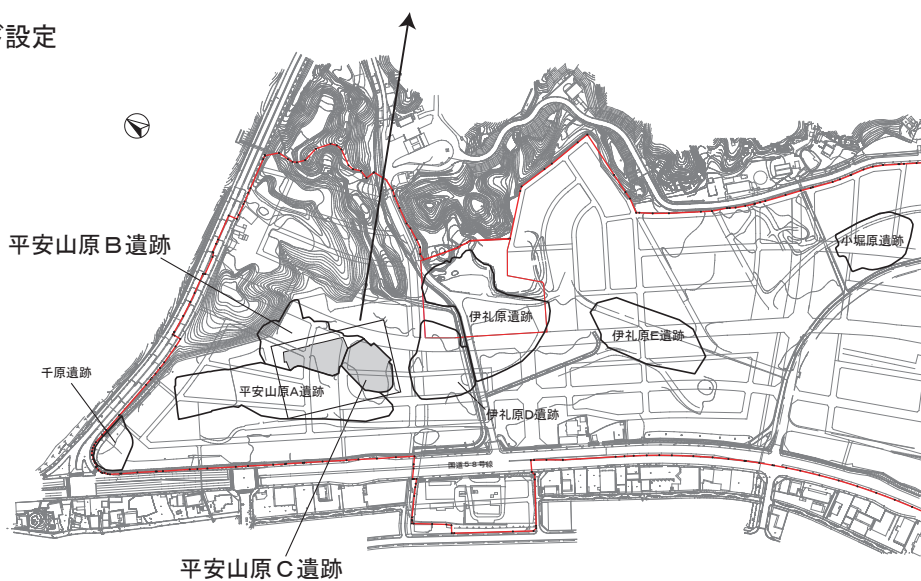
報告書では、遺物についてはデジタルカメラ（1200万画素）で撮影したもの、調査現場で撮影した写真は前述のものを用いた。調査現場で撮影したフィルムカメラの資料はアルバムにて整理・保管した。遺物の撮影画像データは、画像処理ソフト（Photoshop CC）にて補正・切抜きを行い、描画ソフト（Illustrator CS）上で図版を作成した。

土器は、復元可能な資料については焼石膏を用いて復元を行った。復元した資料は土器6点である。

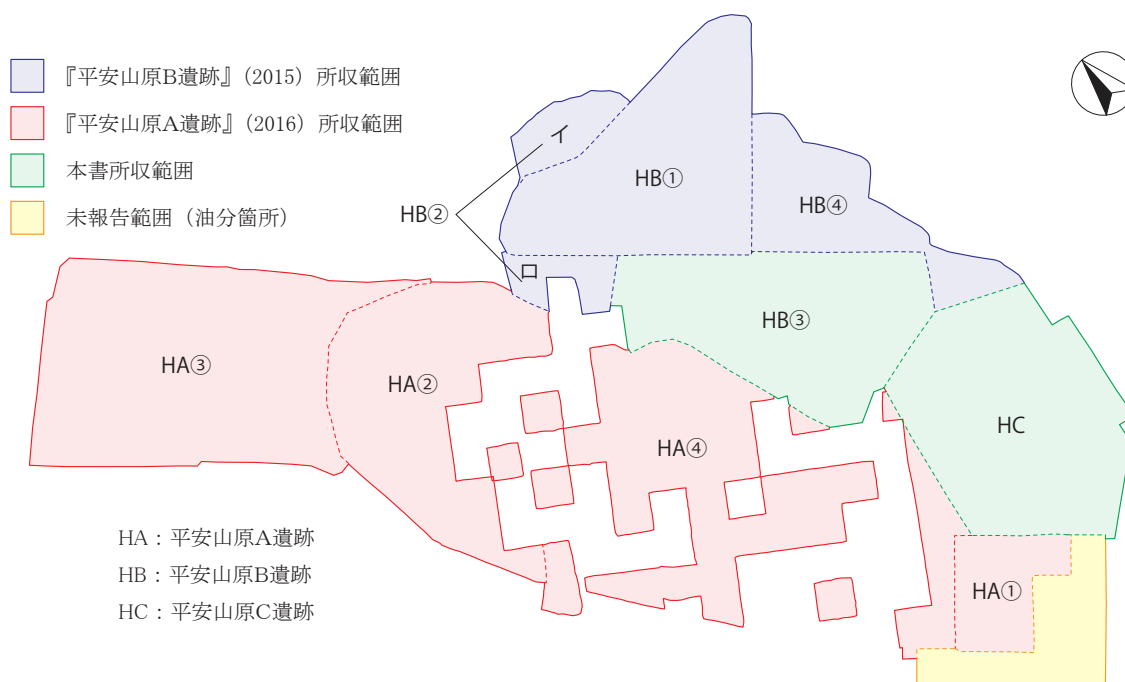
出土遺物のうち、分類作業後の土器・石器・陶磁器・貝類・骨類・人骨については、前掲した調査指導員による分析鑑定・指導を受けた。年代測定は鉄製風呂鍬出土層の上位層中の炭化物6点・獣骨3点・土器付着炭化物1点について、保存処理は鉄製鍬2点について専門機関に委託した（分析結果は第V章第3節を参照）。



第 8 図 グリッド設定



第 9 図 平安山原B・C遺跡の位置



第 10 図 平安山原A～C遺跡の各調査区

第IV章 調査成果

第1節 層序

土層大別にあたっては、戦後造成土→調査対象となる時期に堆積した有色土壌→貝塚時代後期以降に埋没した流路内堆積土→海浜に順次堆積した砂、という平安山原地区に所在する遺跡共通の基本概念に基づいている。また、明確な帰属時期差や遺構面の間在、性格の違い等が認められた場合は、適宜これらを細分した。

I層：戦後の造成土

キャンプ桑江を構築するため、1945年以降、厚い盛土をもって平坦化がなされている。米軍施設に伴って多数構築された攪乱（埋設管等）も、同じくI層の範疇に含めた。

II層：近世後半～近代に帰属する土層

最上面は戦前までの生活面をなしていたが、区域によって利用の仕方や性格が異なるため、以下のように細分した。

II a層：近代居住域に施された整地層

戦前の字平安山では、居住域がその北半にあった。この居住域の整備（道路造成・屋敷割り等）は近代に入ってからなされたものと考えられ、その際平坦化を意図した盛土・整地が行われた。このためこの土層には、原位置を失った各時期の遺物が含まれる他、その上面にも生活感の漂う痕跡（瓦溜り等）が明瞭に残っている。今回の報告箇所においては、HB③北西部に僅かに認められただけであったが、戦前の字平安山集落を考える上で非常に重要となる土層である。

II b層：広範で厚く堆積する耕作土層

字平安山の南半、ナガサ沿岸は広く近世・近代の耕作域であったと考えられる。上記II a層とは分布域が重ならず、完全に二分する格好となっているが、その堆積が始まったのはII b層の方が早い。厚く均質な土壌で、その供給源が問われるところである。近世中に北谷村の高標高域では屋取による開拓が始まっており、これに伴い多くの森林地が伐開されたと考えられる。裸地となった高台から、大量の土壌が雨水によって低標高地である平安山にもたらされたのではないだろうか。同様の土壌は、戦前の字桑江に所在する小堀原遺跡でも確認されており、後背に丘陵が迫った小河川の近くという地形の類似点も認められる。

II c層：近世半ばに構築された石列に伴う土層

ナガサ川沿岸では、近世中に石列等の構築が盛んになされている。恐らくはナガサ川の氾濫域に土留め等の手を加えることによって、流路を安定させ、耕作域拡大を図ったものと思われる。土木工事とも言えるこの行為には、盛んな地面の掘り返しも伴っており、後述するIII層・V層をも攪乱していた。特にHCではこの影響が大きい。

III層：グスク時代前後に帰属する土層

この時期の遺物を包含する土層をIII層として一括した。基本的には砂層上に堆積する黒・暗色系のシルト土壌を指す。特にHC浜堤域では、II c層期の破壊・攪拌行為の影響を受けており、また層下の貝塚時代後期の遺物包含層とも錯綜しているため、結果として明確な層細分はできなかった。

HB③においては8～13層に分層した。特に13層は細砂質であるため、貝塚時代後期遺物包含層である可能性も考えられたが、グスク期に帰属するものと考えられるピットの掘り込み面との整合から、「砂丘域Ⅲ層」を構成する土層の1つとして取り扱った。これらⅢ層における遺物の出土状況をまとめたのが、第2表である。予想に反して13層出土の遺物は少なく、むしろその上層である12層からの貝塚時代後期遺物の出土量が突出して多い。この12層は後述するⅢd層(耕作土)よりは新しい堆積であり、グスク時代の遺物も定量出土している。このことからHB③における「浜堤域Ⅲ層」についても、層下の貝塚時代後期の遺物包含層との錯綜が看取される。

第2表 HB③浜堤域Ⅲ層における遺物出土状況

層位	図中層名	沖無	本磁	染付	褐釉	青磁	白磁	カムイヤキ	グスク土器	後期後半	後期前半
Ⅲ (浜堤域)	8	1	1	5	4	14			4	5	181
	9										
	10								1	13	12
	11	1		1	2	1	1	1	12	40	1,078
	12								1	12	29
13											

これに対してHB③で検出されたグスク期耕作域では明瞭な水平堆積が認められたため、ここにおいてのみⅢa～e層に細分した。この耕作域の範囲は、Ⅳ層で言及する「B流路」が閉塞した範囲に限定されており、各層上面には耕作関連の遺構・痕跡が少ないながらも検出されている。

Ⅲa層：シルト質の耕作土層

黒褐色を呈するシルト土壌で、カワニナを均質に含む。この上面は近世後半(Ⅱb・Ⅱc層期)の遺構面をなしている。層直下面(=Ⅲb層上面)においても検出された遺構が4基あったものの、Ⅱb層に類似した埋土をもっていたため、検出の見落としであった可能性が高いものと考え、本層上面遺構として捉え直した。

Ⅲa・Ⅲb層は色調では明確な異なりを見せるものの、混入物・粒度・質感においては非常に似ていると言って良い。当初は単純に時期差のある堆積と捉えていたが、今回の整理作業を経て、これらの両土層は耕作土層と母材層という関係にあるのではないかという考えに至った。両者間には僅かではあるが、層理面の凹凸が認められる。

Ⅲb層：シルト質の耕作土母材層

灰白色を呈するシルト土壌で、Ⅲa耕作土層の母材層として捉えた。色調の明るさが最大の特徴であるが、その起源は不明である。基本的にはⅢc層上面に堆積しているが、Ⅲc層より分布幅が広い。これはみ出た範囲での層下には、砂層と分かつかのように悉く黒味の強い薄層が認められ、薄層下には鉄分沈着が伴っている。また、Ⅲc層下の層理面には乱れも殆ど認められない。これらのことからⅢb層は水積と考えられ、透水しにくい範囲にのみ分布したと考えられる。

Ⅲc層：砂質の耕作土層①

黒灰色を呈する砂質土壌で、上位層との土質は明らかに異なる。過年度の調査においても検出されていたが、出土遺物が僅少であったため自然堆積の無遺物層として取り扱っており、下層確認以外の目的での調査掘削は行ってこなかった。今回の調査では比較的包含遺物が多かったことから調査対象としたところ、現場所見として遺物が「意図的にクラッシュされた印象」をもったという。松田順一郎氏から、「耕作によるブロック状の塊がみられることから田畑の可能性があり、特に畑である可能性が高い」とのご指摘を得ている。しかし、この時までには同層の掘り下げは終了しており、そのような視点からの検討は充分に行うことができなかった。整理段階に至っ

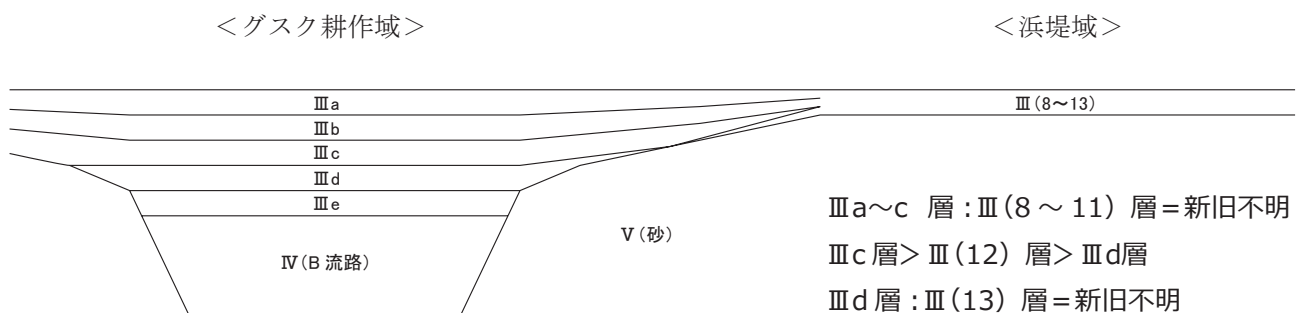
て再度検討を進めたところ、数箇所耕作地に伴う畦畔と考えられる痕跡を確認し、この土壌全体が人為的に作出された空間（耕作域）であると再認するに至った。また層上面においては、同方向に走る溝・土坑列・杭列が検出されている。

Ⅲd層：砂質の耕作土層②

松田氏により、Ⅲc層と同様の所見が示された層である。カワニナの混入は認められない。層下に堆積する粘質土層Ⅲe層或いはⅣ層に対して、浜堤地の砂を混ぜるという大掛かりな造成が行われていたものと考えられる。カムイヤキが僅かに混じる以外は、貝塚時代後期（特に大当原式期）の土器が圧倒的に多く、これを層序との整合から判断すると、これらの土器は大規模造成の際に混入したものと考えざるを得ない。層直下のⅣ層上面ではウシの足跡も検出されており、当該期に農耕が行われていた可能性を窺わせる。

Ⅲe層：粘質の耕作土層

黒味の強い粘質土壌で、Ⅲd層の母材の1つとなった土層と考えられる。この層直下にて溝・炭溜りといった遺構が検出されているおり、溝が導水目的で構築されたとすれば、Ⅲ層細分層の中ではⅢe層が最も分布域が細長で狭いことと何らかの関係があるのかもしれない。松田氏によると、土壌への含有物の状況から耕作土であった可能性は十分にあるとのことであった。この層に含まれていた5点の炭化物を試料として年代測定を行った結果、5点とも大きなズレは認められず、概ね10～11cの値を示していた（第Ⅴ章第3節参照）。



第11図 浜堤域・耕作域におけるⅢ層 模式

Ⅳ層：流路内堆積

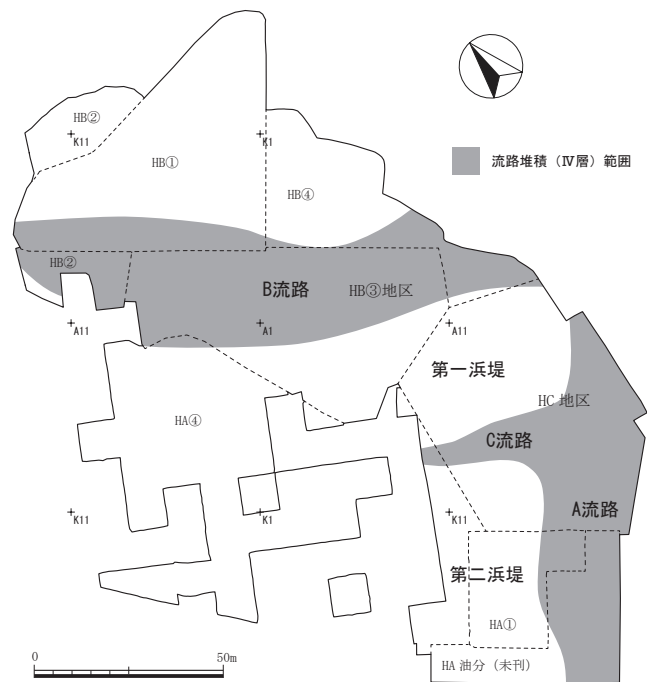
調査区内で検出された流路は、北東→南西に走る「A流路」と、南東→北西に走る「B流路」「C流路」に大別した（第12図）。いずれもその成立時期と埋没過程の間には、大きなタイムラグが発生していることを留意しておく必要がある。

A流路は、現在のナガサ川の流水方向とほぼ一致しているもので、その旧流域或いは氾濫域と考えられる。流路底面のほぼ全域で平坦なビーチロックが認められており、これが河川の深化作用を妨げる格好となっている。このため水量が多い折には、堆積物を一斉に洗い流すということがしばしばあったことも予想されるが、少なくとも調査範囲内においては、全ての範囲がグスク～近世までに埋没している。

これに対してB・C流路は、断続的に形成される浜堤間の谷状地形に発生したものと考えられる。海側の浜堤ほど形成時期が新しいため、汀線に平行するようなこれらの流路形成にも新旧があったことが予想される。山側小砂浜と「第一浜堤」間に発生したB流路については、グスク期以前に閉

塞・止水していたものと思われ、その最下層には泥炭層が認められた。『平安山原B遺跡』(2015)において、この泥炭層に含まれる有機物を試料とした年代測定値から、B流路は6c初頭ごろには既に形成されていたことになる。

これより海側に位置する、「第一浜堤」と「第二浜堤」間に発生したC流路の形成は、B流路よりは確実に新しいものである。『平安山原A遺跡』(2016)におけるHA①において、C流路の肩をなす第二浜堤上から出土した最古の遺物がフェンサ下層式土器であったことから、この浜堤は当該期までに形成されたことになる。また、この流路内にて検出されたクミイ状遺構は近世期に帰属するものと考えており、その頃はまだ流路の埋没が始まっていなかったことになる。従って、このC流路については概念上IV層の範疇のものとして捉えられるものの、実際の埋没土はIIc層に該当することになる。



第12図 自然流路の名称と位置 (S=1/2000)

V層：砂層

遺跡の最終面地盤をなしている砂層上位を一括した。V層の堆積・形成にあたっては上記IV層と表裏一体の関係（V層形成が進行することに伴い、IV層堆積範囲も決まっていく）にあり、海側に進むほど新しい堆積である。V層形成直後の生活面となったため、砂層上位からは当該期の遺物が多く出土する。HCにおいては浜堤上での土壌の錯綜が激しかったが、貝塚時代後期の遺物量が夥しかったこともあり、混貝層のような特殊なものを除いては、土質にあまり捉われずに「後期層」という土層名を用いて遺物取上げを行っている。この「後期層」のものとして採取された遺物のうち、土器資料についての出土状況を第3表に示した。これによると、グスク期以降の土器の混入率は僅か0.03%ほどであり、層の名称通り概ね貝塚時代後期に帰属するものとして、最終的な集計作業においては「V層」として取り扱っている。

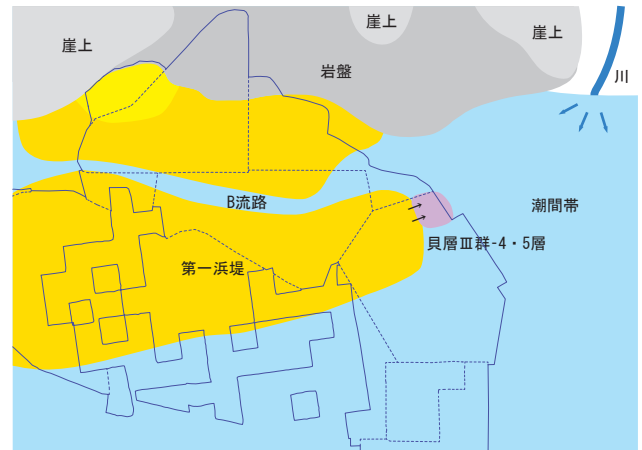
平安山原地区全体における地形変化については第VI章にて取り扱うこととするが、砂層形成の変遷については、以下の想定模式図を参照していただきたい。ただし、調査区外の様相については多分に推測の域を超えないものであることをご容赦いただきたい。

第3表 HC 後期層における遺物出土状況

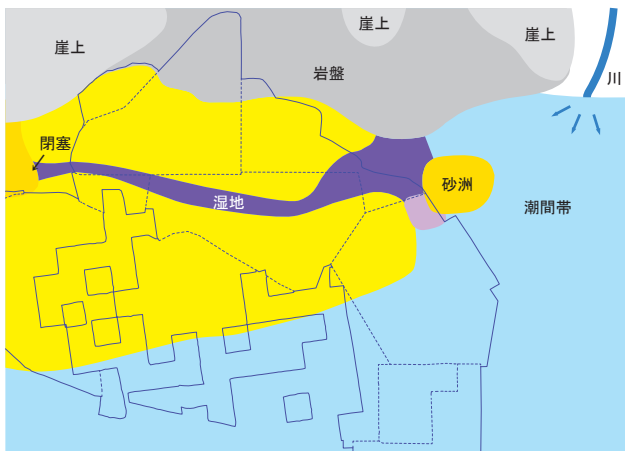
層位	瓦質	染付	色絵	褐釉	青磁	白磁	カムイヤキ	グスク土器	後期後半	後期前半
V層 (後期層)	1	4	1	16	29	2	5	100	1,350	3,418



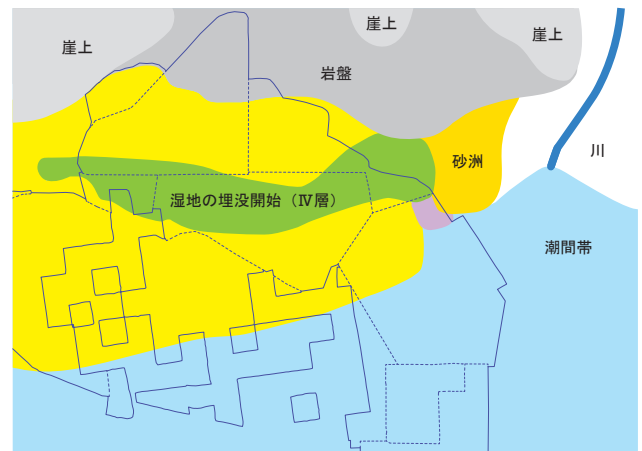
①弥生前期頃、小砂浜が形成され、燃烧行為が繰り返される。



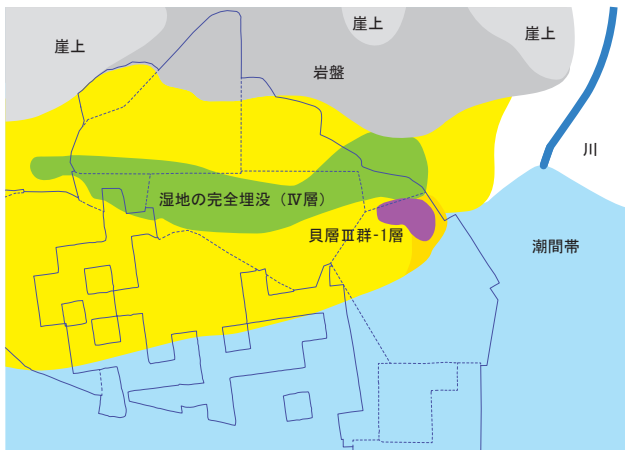
②大当原式期、砂浜・浜堤が発達し、谷間に自然流路が形成。第一浜堤先端にて廃棄行為がなされる。



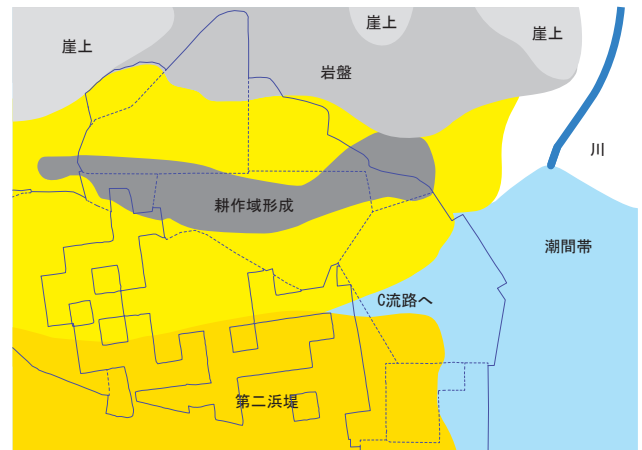
③その後、流路下流が閉塞。上流側でも砂洲が形成される。止水したことにより、流路内は湿地状となる。



④砂洲の発達により、流路への水の供給が遮断される。湿地には粘質土壌が堆積を始める。



⑤くびれ平底期までに、流路域が完全埋没する。浜堤域のわずかな窪みや微傾斜地への廃棄行為がなされる。



⑥粘質土壌域を選定し、耕作行為が始まる。浜堤は更に海側に拡大し、C流路が形成される。

第13図 V層堆積変遷 模式

「耕作域」におけるⅢ層細分層の年代観

本書での基本層序に関わる特記事項として、「グスク期耕作域」が検出され、その範囲に限ってではあるが、基本層Ⅲ層の細分が明確になされた、ということが挙げられる。細分層各々が比較的厚く、各土層の乱れが少なかったため、判別・分層が容易であった。この要因として、①この耕作域は埋没した自然流路跡の窪地にて形成されたこと、②「耕作」という土壌攪乱行為が居住域に比べ

ると静的で単純であったであろうこと等が考えられ、結果として整然とした堆積状況を示したの
と思われる。耕作域であるからこそ同時期の人的遺物が極端に少ないこともまた事実ではあるが、
ここではその少ない遺物の出土状況（第4表）から、Ⅲ層細分層について年代観を検討してみたい。

第4表 HB③耕作域Ⅲ層細分層の遺物出土状況

層位	図中層名	染付	褐釉	青磁	白磁	カムイヤキ	グスク土器	後期後半	後期前半
Ⅲa・b層	3～6	9	16	45	4	4	84	33	460
Ⅲc層	7		3	2		6	11	75	1,489
Ⅲd層	14					4	1	376	3,033
Ⅲe層	15・16							43	283
Ⅳ層	17・18						1	52	327

陶磁器類（染付・褐釉陶器・青磁・白磁）

Ⅲa・b層にピークがあり、Ⅲc層で激減、Ⅲd層では出土していない。最も点数の多い青磁は
14～16cのものが殆どであり、Ⅲc層出土の2点も15～16cの範疇に収まる。

カムイヤキ

Ⅲa～d層で少量ながらも出土を認める。Ⅲc層出土のものは概ね13cに帰属する。

グスク土器

陶磁器類と同じく、Ⅲa・b層にピークをもつ。滑石を混入するものや石鍋を模倣したものは全
く認められず、グスク土器としてはやや新相を示している。

貝塚時代後期後半土器（くびれ平底土器）

全層位から出土しているものの、Ⅲd層にピークがあることは特記される。グスク土器の状況と
併考すると、層位の上下関係と土器の新古関係とが整合的である。

小結

ここまで記述した各種遺物については、上層から新しい
遺物が出土し、下層にいくに従って遺物が古くなる、とい
う考古学上のシンプルな理屈に概ね沿っており、現場調査
進行段階での一次的所見・実感にも近い。

まずⅢa・b層についてであるが、『平安山原B遺跡』（2015）
では両者を一括して「Ⅳ層上」としている。詳細な年代判
別が可能な白磁・青磁・染付について、2015年及び今回の
出土結果を統合したのが第5表である。12～18cと出土遺物
の年代幅は広いものの、14～16cのものが主体的であると言
える。17c以降の遺物が含まれているのは、層上面が近世遺
構面をなしていることによる混入とすれば説明はつくものと思われる。『平安山原A遺跡』（2016）
において、ほぼ同時期となる明代の柱穴群が非常に密集した状態で検出されている。少なくとも
この時期において、居住域は平安山原A遺跡、耕作域は平安山原B遺跡という空間区別がなされ
ていたことが想像できる。

Ⅲc層からは15c代の青磁片が2点出土しているため、Ⅲa・b層とそれほど時期差がないこと
になる。この事実は最も留意されるべきであるが、各種遺物の出土比率は明らかな変化を示して
いるため、上層からの混入という可能性を割り引けば、14c以前の堆積である可能性も全くない
とは言えない。

第5表 Ⅲa・b層出土遺物

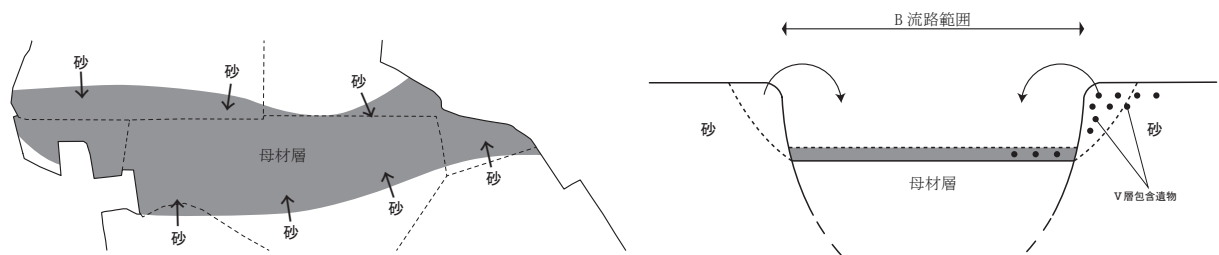
遺物の年代観	白磁	青磁	染付
12～13c	1		
13～14c	5	5	
14c	1		
14～15c	5	36	
14～16c		22	
15c		4	1
15～16c	2	4	4
17c	2		1
17～18c			4
18c			1
合計	16	71	11

Ⅲd層については、カムイヤキの出土状況からグスク時代に相当する、即ち耕作土作出行為がこの頃の出来事であったと考えるのが普通である。しかしながら、グスク土器の出土が激減していることから、なお慎重を期して、カムイヤキが上層からの混入と考えた場合はこの層の年代観もやや古くなり、一定量得られているくびれ平底期の遺物の中には、耕作土作出時に外から混入したものばかりではなく、耕作期に混入したものも含まれていた可能性も残る。

Ⅲe層は、同層中から得られた炭化物の年代測定結果から、概ね10～11cの貝塚時代後期末頃に帰属すると考えられる。このことから、層直下で検出された溝（SD06）や炭溜り（SX03）はそれと同時期以前ということになり、SX03出土の土器片がフェンサ下層式に比定されることも整合的である。問題はⅢd層との時間的關係であるが、層下の遺構がⅢd耕作土層作出行為と関連性があるか否かによって、今回の調査成果の解釈が大きく左右されることは非常に重要な留意事項となる。

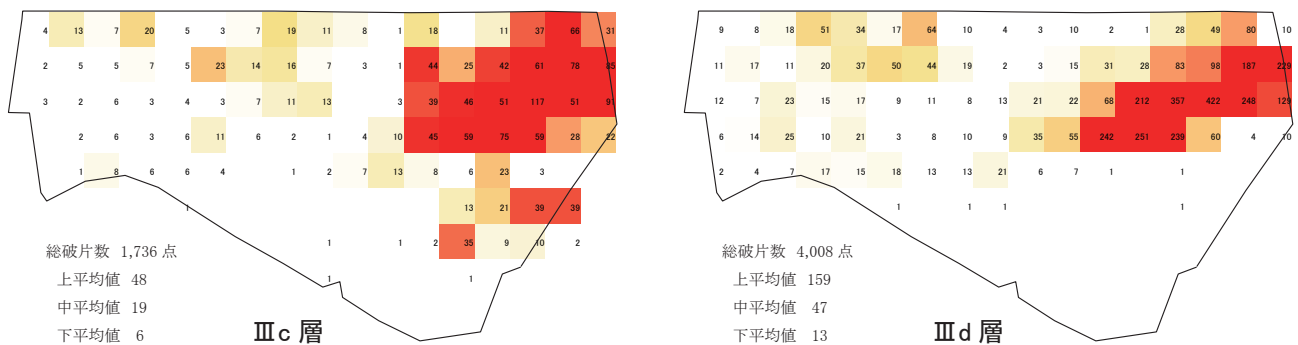
Ⅲc・Ⅲd層出土の貝塚時代後期前半遺物

ここまでの記述に限っては、貝塚時代後半期（くびれ平底期）の遺物については一定の考慮が必要であるものの、各種遺物の出土状況と層位的新古関係とが、ある程度の整合性をもって説明できた。しかしその一方で、基本土層の設定概念からすればⅣ・Ⅴ層から出土するはずの貝塚時代後期前半土器が、Ⅲ層細分層の各層から大量に出土しており（第4表）、Ⅲc・Ⅲd層では貝塚時代後期後半～グスク時代の遺物点数を凌駕した状況となっている。これは前項で述べた通り、耕作土作出にあたって大掛かりなⅤ層土混入があったことによる、と考えている。耕作域では同時期の遺物に乏しく、母材となった土壌に含まれていた前代の遺物が主体的に出土した格好になることは、『新城下原遺跡』（2006）においても観察・指摘されている。今回の事例は、耕作土壌の直下にあった母材層ではなく、周囲の砂（Ⅴ層土）混入による出土、という違いはあるものの、耕作に関わる遺跡を調査する際の1つの重要な視点であろう。



第14図 耕作土の人為的作出作業 想定図

この砂混入作業を想像するにあたってその作業能率をも加味すると、直近の流路兩岸の傾斜地から砂を削り運んだのではないだろうか（第14図）。浜堤斜面地には遺物の包含地が所在することが多く、耕作土を作り出そうとする者によって、意図せず遺物を混入させる結果になったと思われる。また、この貝塚時代後期（特に前半期）の遺物分布には、明らかな偏りが認められる（第15図）。これは直近地から砂を運んだ傍証になるものと思われる、そうであれば、これらの混入遺物は厳密な意味での原位置は失っているものの、その移動距離はそれほど大きくなく、巨視的にはその遺物分布が意味をなし得るものと思われる。これらのことを考慮の上、遺物集計にあたっての層名は「Ⅲd（Ⅴ）層」との表記を用いた。



第 15 図 III c・III d 層における貝塚時代後期土器 分布

平安山原地区全体における基本層序の整合

北谷町字伊平小字平安山原にて登録・設定された平安山原 A・B・C 遺跡は、全て旧米軍キャンプ桑江の返還地内に所在する。これらについて、これまで刊行された調査報告書は5冊に及ぶが、それらの整理・編集作業を行うたびに遺跡全体の調査所見再考に迫られてきた。本書は平安山原地区における遺跡報告の最終のものとなるため、これまでに得られた知見に対して全体的な整合性が求められる。

既刊の5冊のうち、試掘を除いた大規模な調査報告として、『平安山原B遺跡』（2015）・『平安山原A遺跡』（2016）が挙げられる。基本層序に対する概念や大別の仕方については、その報告領域それぞれで相対的なものにならざるを得なかったが、今回平安山原に所在する全ての調査区が連結されたことにより、ナガサ川以北の土層堆積について概念整理が可能となった。以下、各調査区における基本層序設定概念の対応を第6表に示した。

第 6 表 平安山原各遺跡における基本層序の対応

時期	平安山原A (2016)	平安山原B・C (今回)	平安山原B (2015)	測定年代(補正年代)値等	
戦後	I	I	I	1945.4～(米軍上陸)	
近代		II a	II	1899(土地整理法発布)～1945.3(平安山空襲)	
近世	埋没・埋立	II b	III	239 ± 23BP (平A - II層下 SK100 出土土器附着炭化物)	
		II c・C 流路			
グスク時代	↑	III (浜堤域)	III a	IV 上	560 ± 23BP (平B・C-HC-SK03 出土ウマ下顎骨)
			III b		
			III c	IV 下	829 ± 24BP (平A - III層下検出 11 号人骨)
			III d		973 ± 21BP 他 (平B・C - III e 層中炭化物)
			III e		1072 ± 23BP (平A - IV層検出 5 号人骨)
貝塚時代後期	↓ 形成	IV (B 流路)	貝III -1 層	V (砂洲)	1140 ± 25・1340 ± 25BP (平B・C - 貝層III群 -1b 層出土イノシシ下顎骨)
			貝III -3 層		1598 ± 22BP (平B - IV下層中炭化物)
			貝III -4・5 層	VI	1795 ± 26BP (平B・C - 貝層III群 -5 層出土土器附着炭化物)
			V		1887 ± 25BP (平B・C - 貝層III群 -5 層出土イノシシ下顎骨)
貝塚時代前期	ビーチロック	VI	VI	1889 ± 25BP (平B - V層出土VI類土器附着炭化物)	
				2290 ± 24BP (平B - 燃焼遺構出土炭化材)	
				2345 ± 26BP (平B - V層出土IV類土器附着炭化物)	
				1620 ± 23～4118 ± 27BP (平A - ビーチロック中貝殻)	

HB ③ 基本土層注記

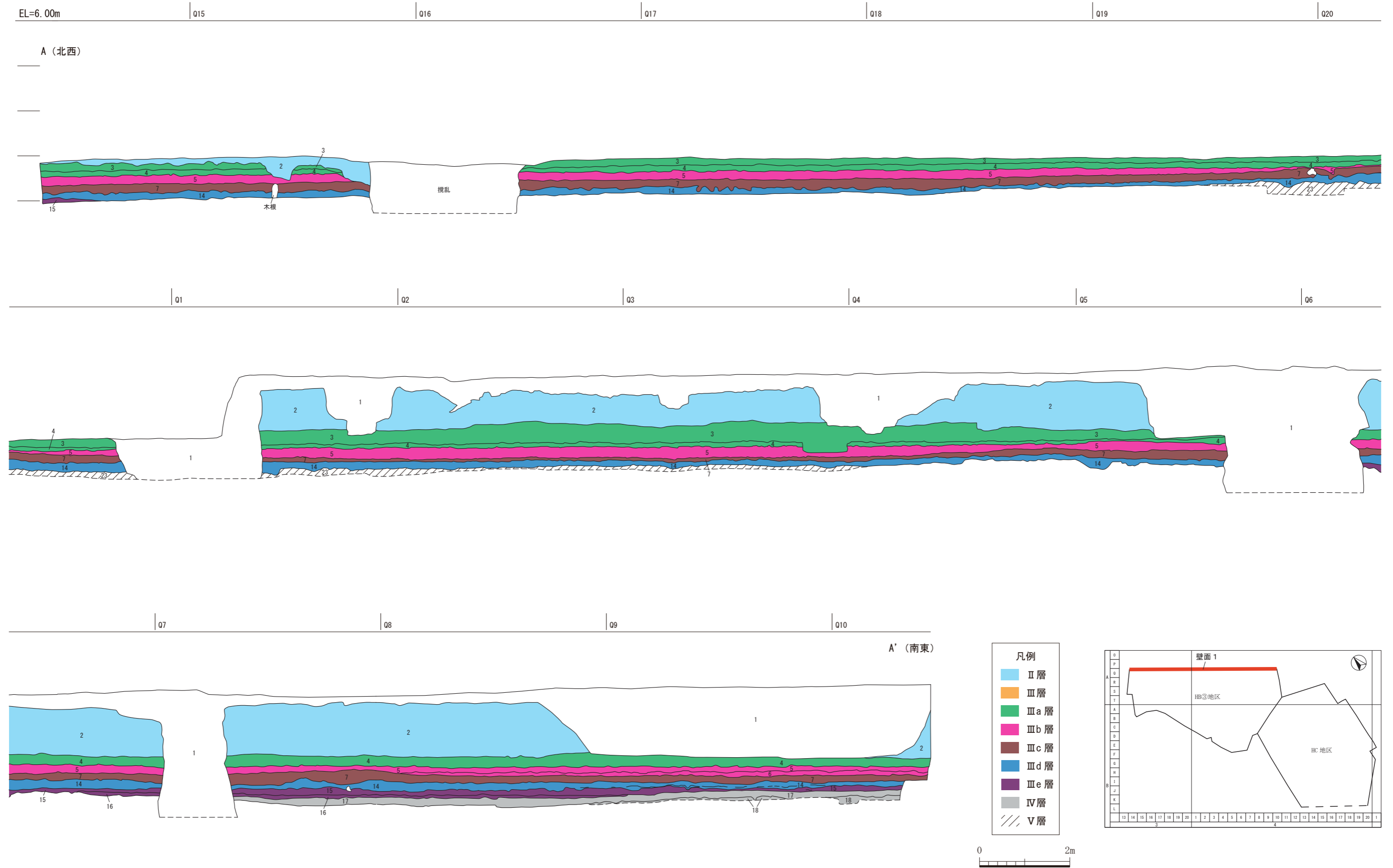
層		色・土質	特徴	備考 (旧層序)
大別	細分			
I	1	10YR 4/4 褐色混礫土	米軍による造成土。	1
II b	2	2.5Y 7/6 黄褐色土	全体に鉄分が混じる。	2
III a	3	2.5Y 4/3 オリーブ褐色シルト	硬くしまる。カワニナを均質に 3% 含む。鉄分が混じる。	3
	4	2.5Y 4/2 暗灰褐色シルト	硬くしまる。カワニナを均質に 3% 含む。鉄分が混じる。	4
III b	5	2.5Y 6/2 灰黄色シルト	硬くしまる。カワニナを均質に 5% 含む。鉄分が混じる。	5
	6	10YR 5/2 灰黄褐色シルト	硬くしまる。カワニナを均質に 7% 含む。鉄分が混じる。	6
III c	7	2.5Y 3/2 黒褐色砂質土	硬くしまる。細砂主体で粗砂が全体に混じる。耕作土。	11
III	8	10YR 3/2 黒褐色砂質土	硬くしまる。粘性やや強い。カワニナ微量。鉄分が多く混じる。	7
	9	10YR 3/2 黒褐色砂質土	細砂主体。軽石少量。	8
	10	10YR 2/1 黒色砂質土	細砂主体。軽石中量。	9
	11	10YR 2/2 黒色砂質土	細砂主体。軽石多量。	10
	12	10YR 2/2 黒褐色砂質土	小～大型貝類多量。土器を多く含有する。層底部は鉄分が多く硬質。	12
III d	13	2.5Y 5/2 暗灰黄色細砂	海産貝中量。	14
	14	2.5Y 3/1 黒褐色砂質土	硬くしまる。細砂主体で粗砂が不均質に混じる。耕作土。	13
III e	15	2.5Y 3/2 黒褐色粘質土	硬くしまる。粘性非常に強い。	15
	16	5Y 3/2 オリーブ黒色粘質土	15 層土主体で、帯状に粗砂が 20% 混じる。	16
IV	17	5Y 3/1 オリーブ黒色粘質土	硬くしまる。粘性非常に強い。漸移層か。	17
	18	7.5Y 5/2 灰オリーブ砂質土	粘性弱い。包含物が少ない。	18
V	19	7.5YR 7/4 にぶい橙色砂	海産貝・枝サンゴ多量。局所的に鉄分が多く硬質。	19
	20	10YR 7/6 明黄褐色砂	細砂と粗砂に細分可。	21
	21	10YR 7/4 にぶい黄褐色細砂		22
	22	7.5YR 5/6 明褐色粗砂	枝サンゴ多量。	23
	23	2.5Y 6/3 にぶい黄褐色砂	細砂と粗砂に細分可。古い浜堤を形成。	20

HC 壁面 基本土層注記

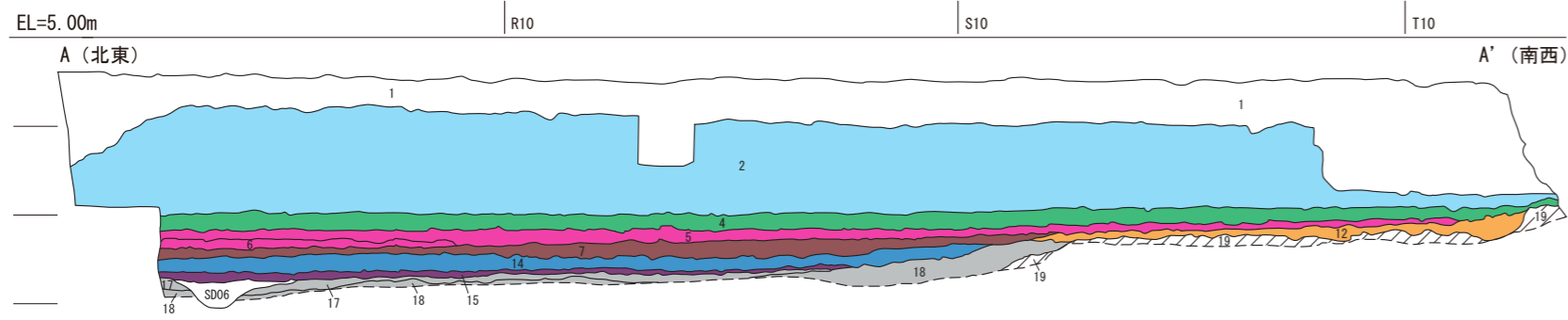
層		色・土質	特徴	備考 (旧層序)
大別	細分			
I	1		米軍による造成土。	1
II b	2	10YR 5/8 黄褐色土	カワニナ微量。全体に鉄分が混じる。	3～6・7b
クムイ	3	7.5Y 2/1 黒色混砂土	明褐色粗砂と青黒色粘土の互層がみられる。	10
	4	5B 2/1 青黒色粘質土		11
	5	5B 2/1 青黒色粘質土	マーブル状。粘質土主体で砂・枝サンゴ・自然貝を含む。	12
	6	7.5YR 5/6 明褐色砂	カワニナ・自然貝・枝サンゴ多量。	13
III a	7	7.5YR 4/1 褐灰色粘質土	カワニナ少量。鉄分が混じる。	5b
III	8	10YR 2/2 黒褐色粘質土	硬くしまる。カワニナ微量。	7a
	9	10YR 3/4 にぶい黄褐色土	カワニナ微量。鉄分が混じる。	12
	10	2.5Y 3/1 黒褐色砂質土	硬くしまる。	III-1 a
IV	11	10YR 3/3 暗褐色土	非常に硬質。カワニナ多量。以下、20 層まで A 流路。	8
	12	7.5YR 4/3 にぶい黄褐色土	鉄分が多く混じり、硬質。	9
	13	10YR 2/1 黒色粘質土	マーブル状。	14
	14	10YR 8/2 灰黄褐色粗砂	二枚貝微量。	15
	15	10YR 5/1 褐灰色砂質土	ブロック状・帯状の粗砂を含む。	20
	16	10Y 5/3 オリーブ灰色シルト	自然貝を含む。	17
	16	10YR 5/1 褐灰色砂質土	カワニナ・自然貝微量。	21
	17	2.5Y 4/3 オリーブ褐色砂	自然貝多量。	19
	19	10Y 5/2 オリーブ灰色シルト		16
	20	5Y 3/1 オリーブ黒色土	マーブル状。	18
	21	7.5YR 2/1 黒色砂質土	以下、21 層まで B 流路。	III-3
	22	2.5Y 4/6 オリーブ褐色砂質土	自然貝を含む。	III-5
V	23	7.5YR 7/4 黄褐色砂	貝・枝サンゴ多量。鉄分が所々で凝固。	32
	24	10YR 6/4 黄褐色砂	枝サンゴ・自然貝少量。	22
	25	10YR 5/8 黄褐色砂	マーブル状の黒色砂・小礫を含む。	23
	26	10YR 6/8 明黄褐色粗砂	自然貝・枝サンゴ多量。	24
	27	7.5YR 9/4 にぶい橙色砂	枝サンゴ多量、自然貝少量。	25
	28	7.5YR 7/8 黄褐色砂	巻貝・サンゴごく微量。	26
	29	7.5YR 7/4 にぶい橙色細砂	枝サンゴ少量。	27
	30	5B 2/1 青黒色シルト		28
	31	5YR 4/6 赤褐色粗砂	サンゴ・自然貝少量。	29
	32	7.5YR 2/1 黒色粘質土	明褐色砂層がマーブル状に堆積。直下はビーチロック。	30
	33	7.5YR 7/3 黄褐色砂	二枚貝・枝サンゴを多量。鉄分が多く混じり、硬質。	31

第 7 表 -1 基本層序土層注記一覧

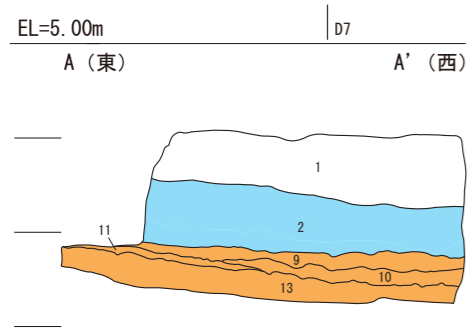
<HB③ 壁面 1>



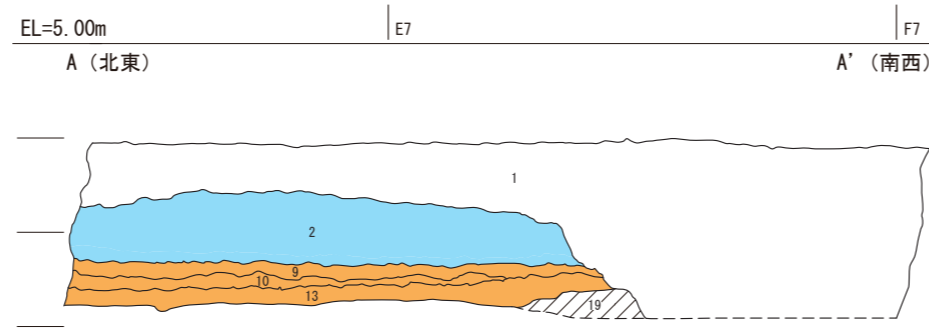
<HB③ 壁面 2>



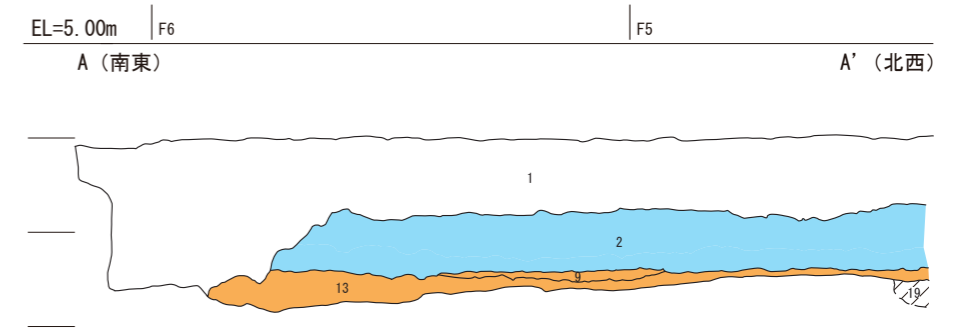
<HB③ 壁面 3>



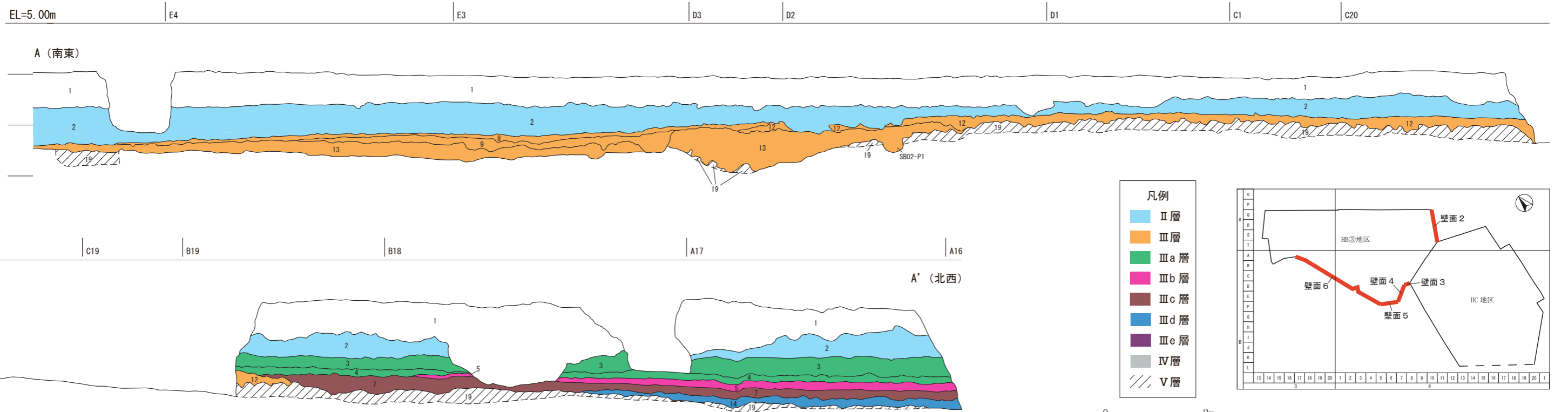
<HB③ 壁面 4>



<HB③ 壁面 5>



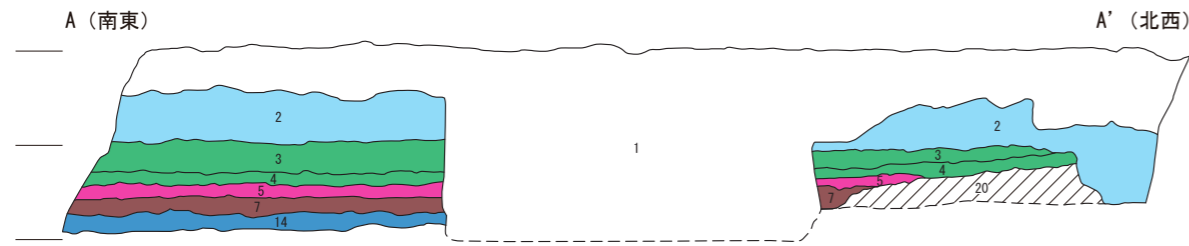
<HB③ 壁面 6>



第 17 図 層序 2 (HB③地区)

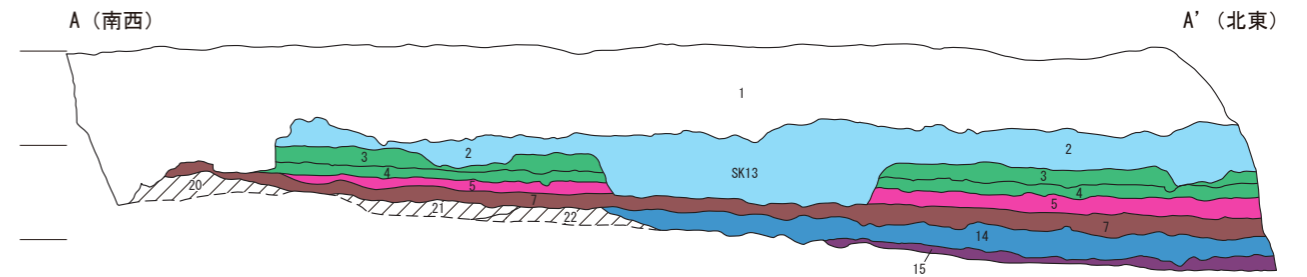
<HB③ 壁面7>

EL=5.00m | A16 | A15 | B15 | B14



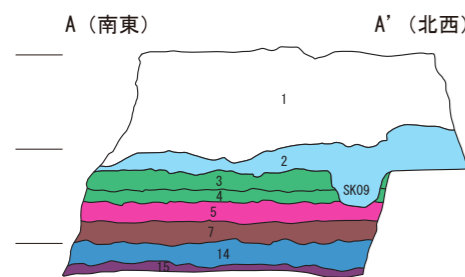
<HB③ 壁面8>

EL=5.00m | A14 | T14 | S14



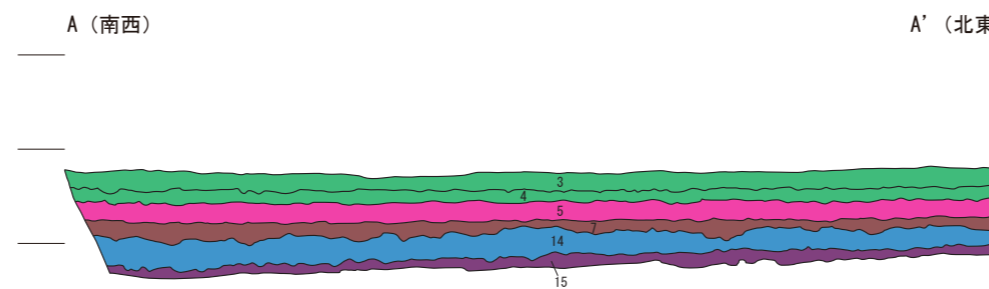
<HB③ 壁面9>

EL=5.00m | S13



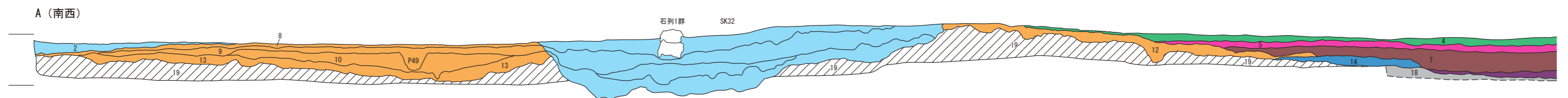
<HB③ 壁面10>

EL=5.00m | R14 | Q14

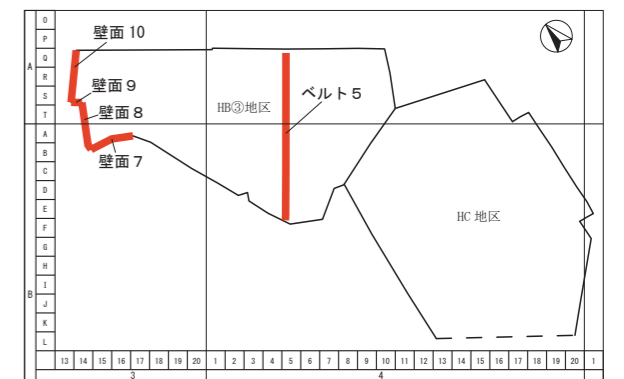
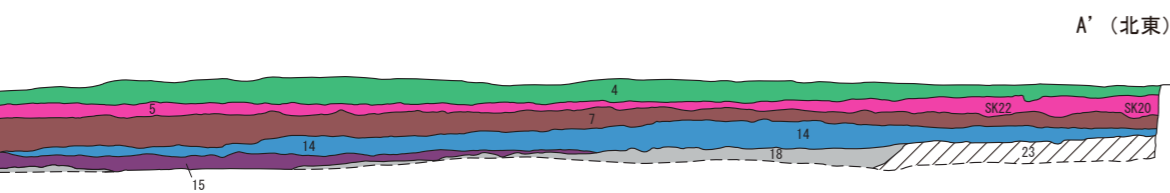


<HB③ ベルト5>

EL=4.00m | E5 | D5 | C5 | B5 | A5 | T5

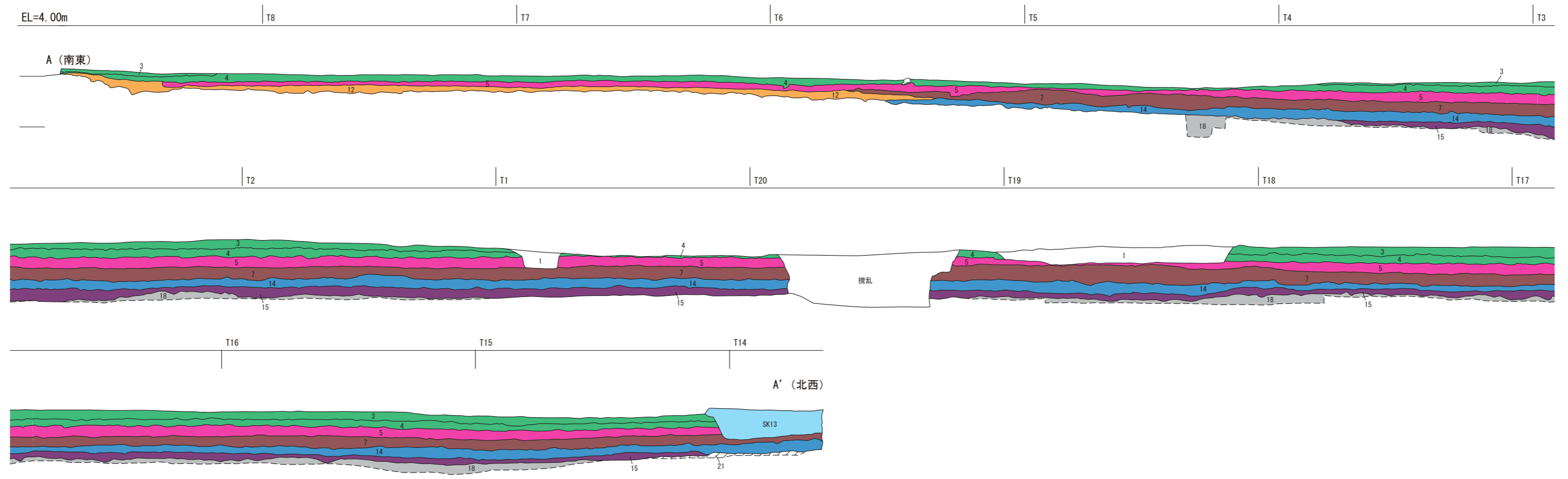


| S5 | R5 | Q5

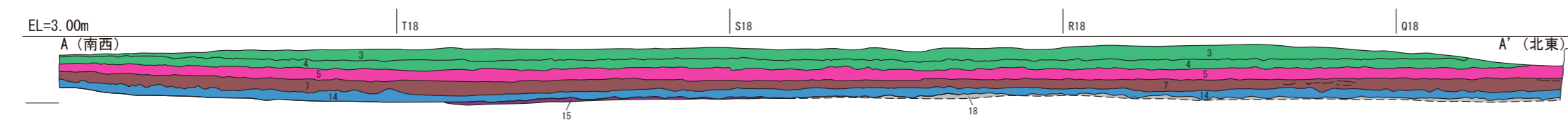


第18図 層序3 (HB③地区)

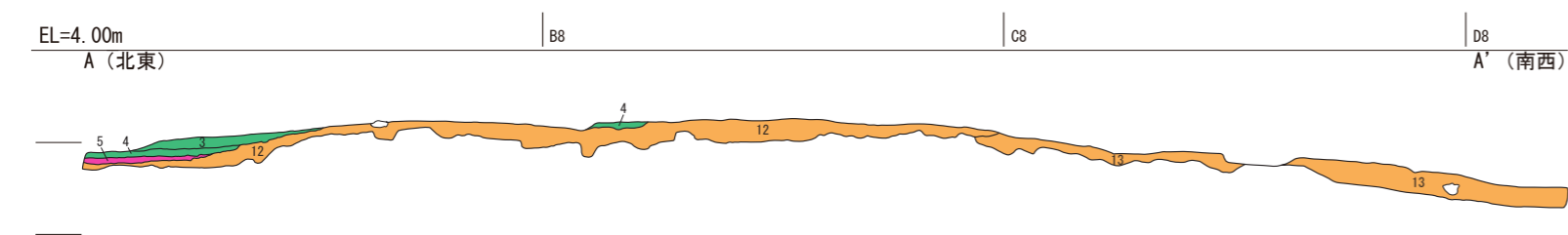
<HB③ ベルトA>



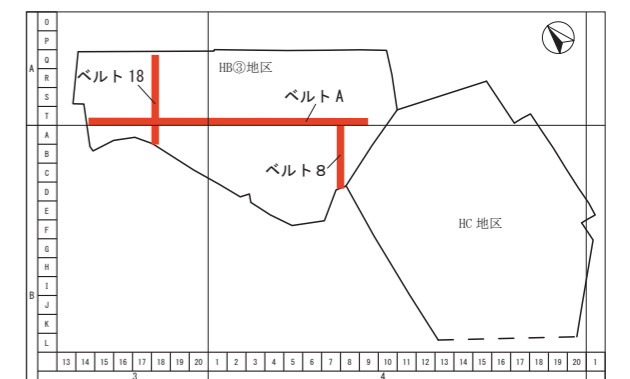
<HB③ ベルト18>



<HB③ ベルト8>



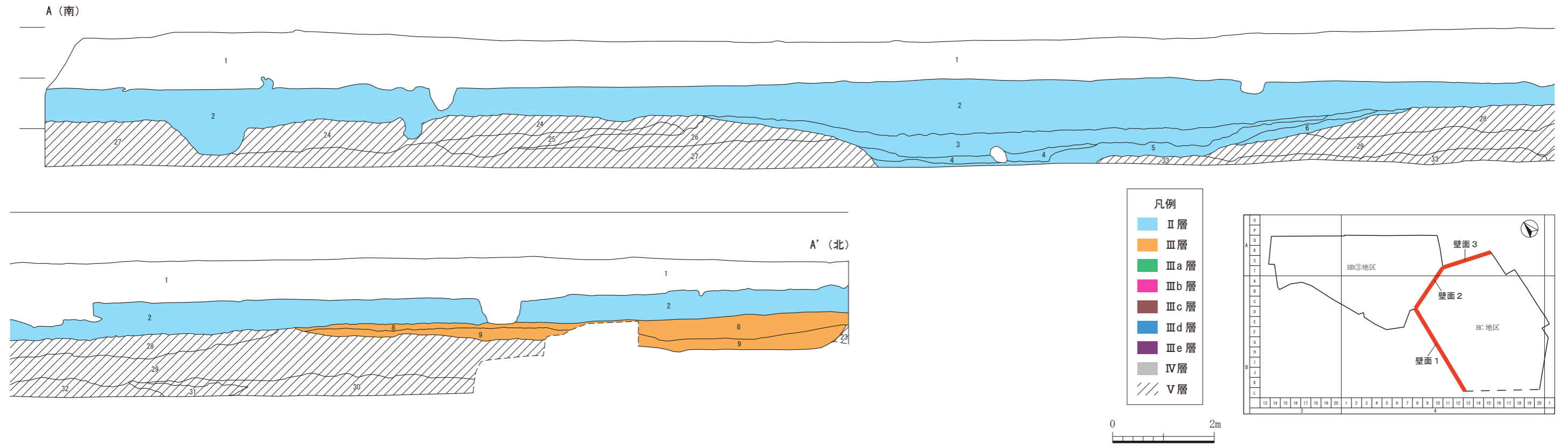
- 凡例
- II層
 - III層
 - IIIa層
 - IIIb層
 - IIIc層
 - IIId層
 - IIIe層
 - IV層
 - V層



第19図 層序4 (HB③地区)

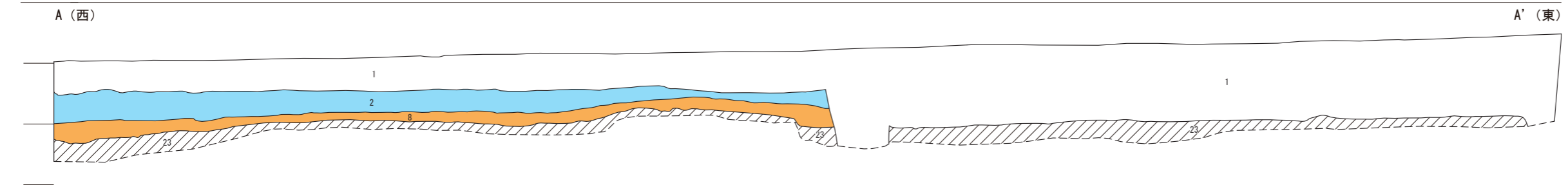
<HC 壁面 1>

EL=5.00m



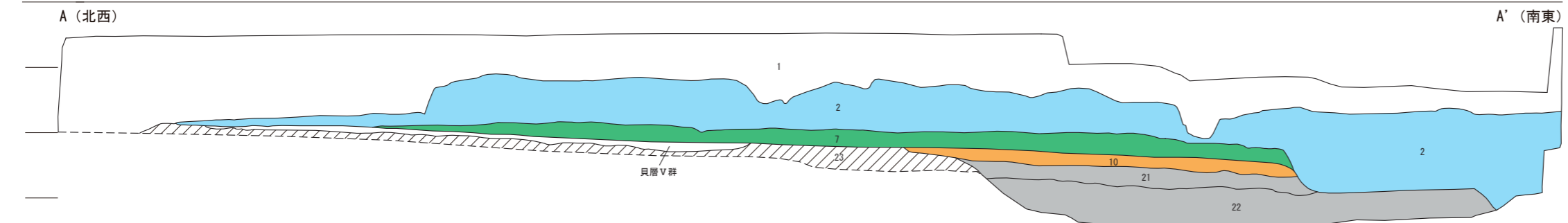
<HC 壁面 2>

EL=5.00m



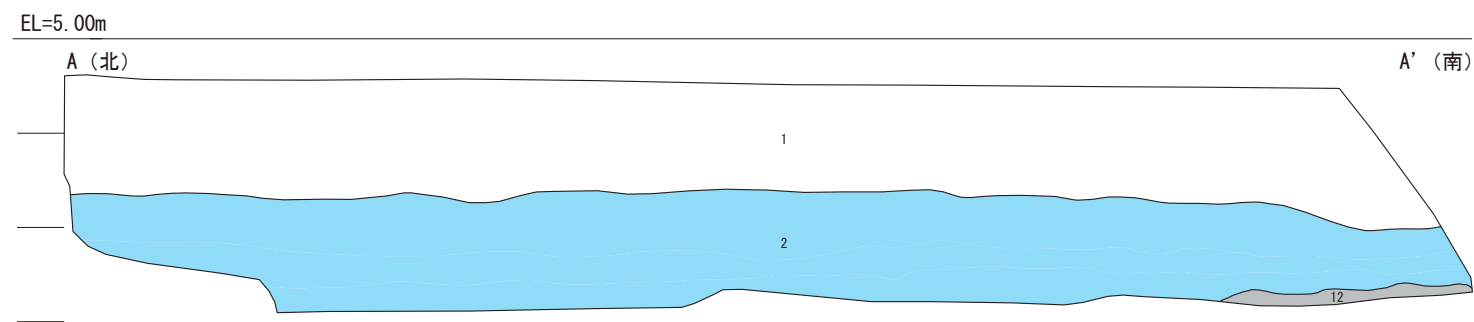
<HC 壁面 3>

EL=5.00m

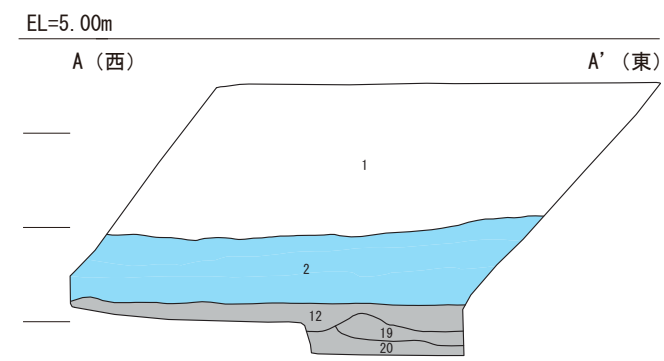


第20図 層序5 (HC地区)

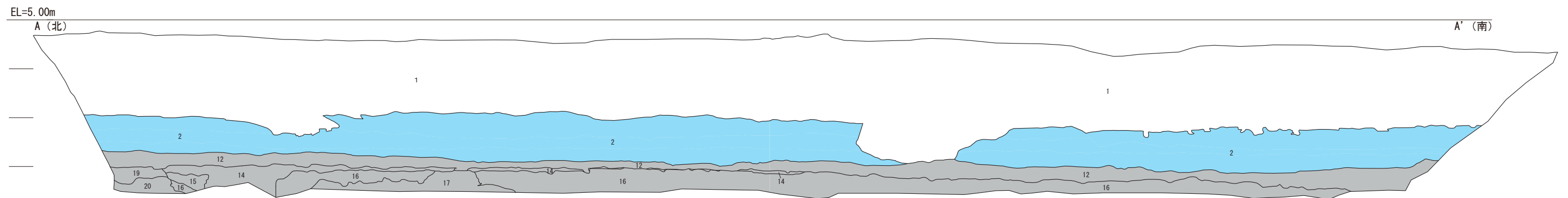
<HC 壁面 4>



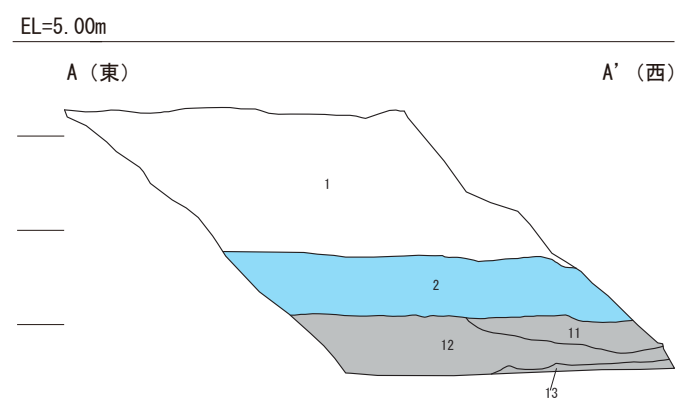
<HC 壁面 5>



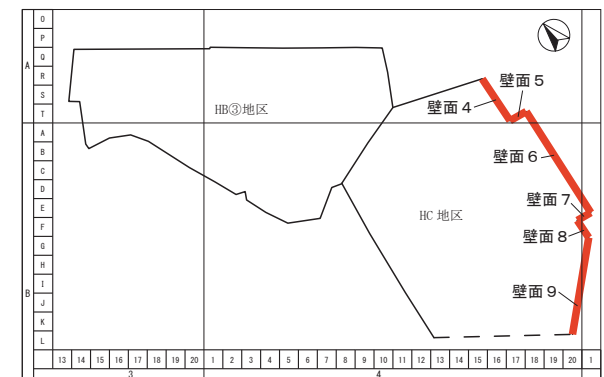
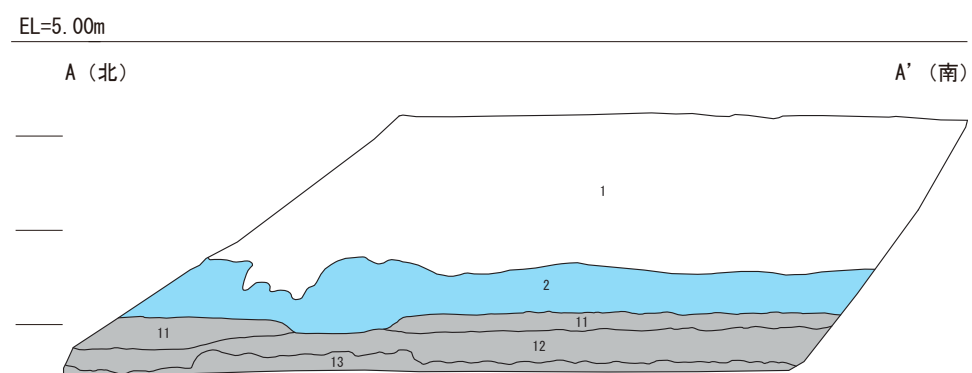
<HC 壁面 6>



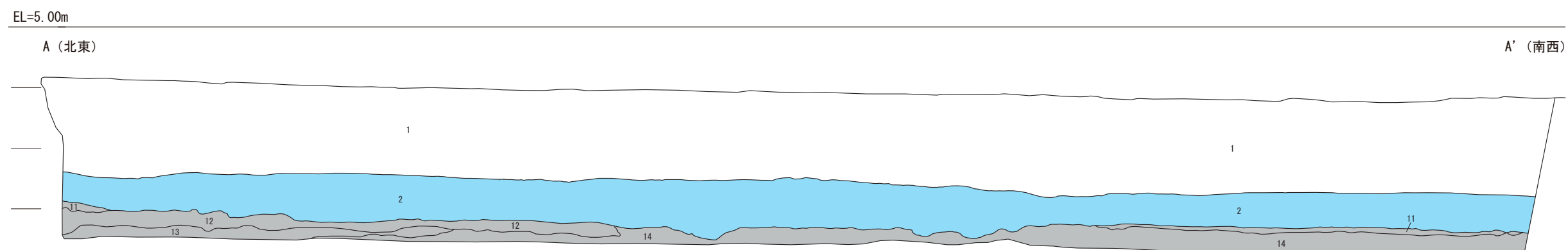
<HC 壁面 7>



<HC 壁面 8>



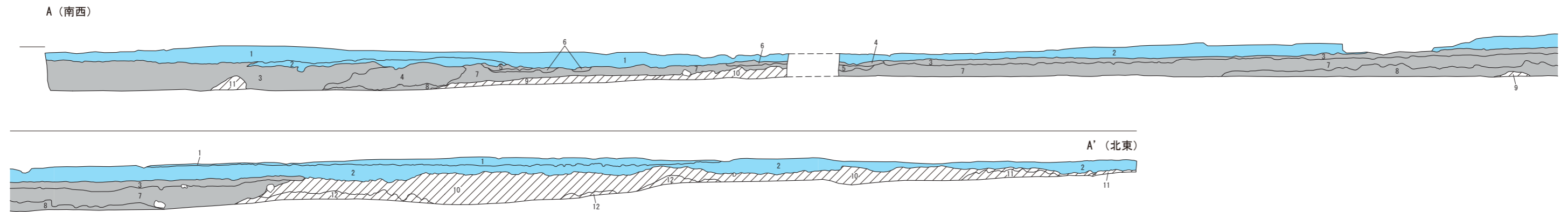
<HC 壁面 9>



第21図 層序6 (HC地区)

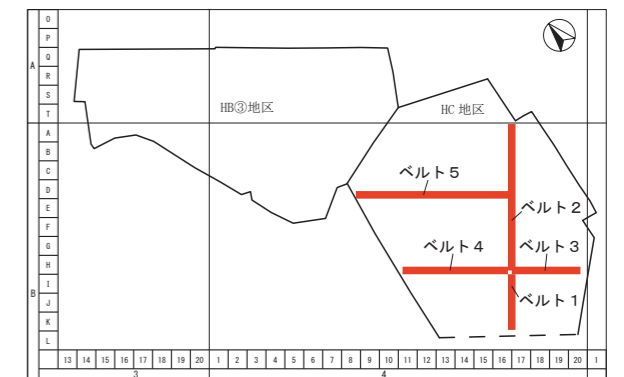
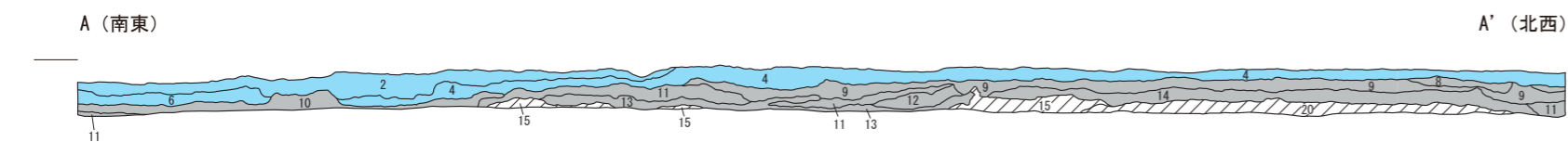
<HC ベルト 1・2>

EL=3.00m



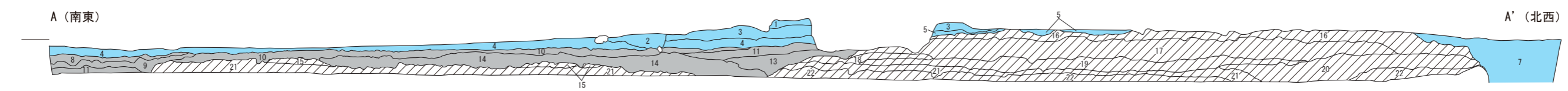
<HC ベルト 3>

EL=3.00m



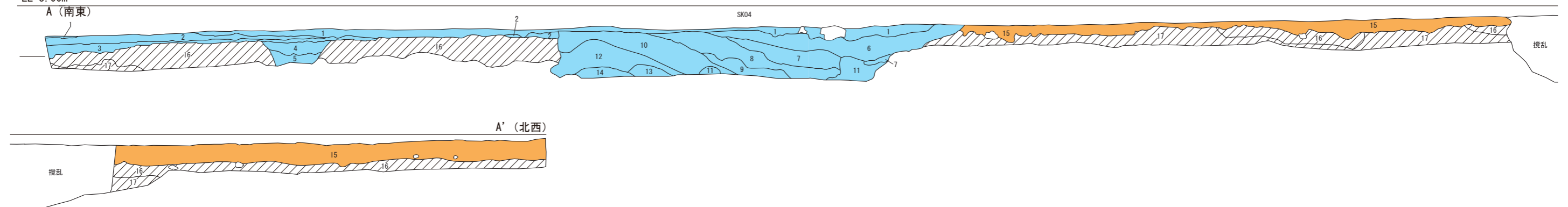
<HC ベルト 4>

EL=3.00m



<HC ベルト 5>

EL=3.00m



第22図 層序7 (HC地区)

HC ベルト1・2 基本土層注記

層		色・土質	特徴	備考 (旧層序)
大別	細分			
II c	1	10YR 3/2 黒褐色土	カワニナ多量。鉄分が混じる。	
	2	10YR 6/3 にぶい黄橙色砂	カワニナ少量。	
IV	3	10YR 5/8 黄褐色砂	黒色粘質土と互層をなす。	
	4	10YR 6/6 明黄褐色砂	粒子の異なる砂が互層をなす。	
	5	7.5YR 2/1 黒色粘質土	所々に白砂を薄くレンズ状に含む。	
	6	7.5YR 2/1 黒色土	白砂・枝サンゴ貝少量。	
	7	7.5YR 3/5 極暗褐色粘質土	木片・カワニナ多量。	
	8	10YR 5/2 灰黄褐色砂	暗褐色と黄褐色砂の互層。	
V	9	7.5YR 4/1 褐灰色砂	木片・二枚貝・枝サンゴ多量。黒褐色土微量。	
	10	7.5YR 4/1 褐灰色砂	木片・貝多量。鉄分が混じる。	
	11	7.5YR 6/3 にぶい橙色粗砂	枝サンゴ・貝多量。	
	12	注記なし		

HC ベルト3・4 基本土層注記

層		色・土質	特徴	備考 (旧層序)
大別	細分			
II c	1	2.5 Y 8/3 淡黄色砂	硬くしまる。カワニナ・自然貝少量。	1
	2	10 YR 4/2 黄灰色粘質砂	カワニナ多量。わずかに鉄分が混じる。	3
	3	10 YR 6/8 明黄褐色細砂	硬くしまる。カワニナ・自然貝微量。	2
	4	10 YR 4/1 褐灰色砂	カワニナ少量。わずかに鉄分が混じる。	4
	5	7.5YR 3/1 黒褐色砂	小礫・貝片多量。	9a
	6	7.5YR 3/1 黒褐色砂	小礫・貝片多量。	9
クムイ	7	10YR 2/1 黒色粘質土	しまり強い。	9b
IV	8	10YR 3/2 黒褐色粘質土	カワニナ多量。鉄分が混じる。	5
	9	7.5YR 4/1 褐灰色砂質土	カワニナ・炭化物多量、枝サンゴ・白砂少量。	6
	10	10YR 4/2 灰黄褐色砂質土	炭化物微量。わずかに鉄分が混じる。	7
	11	2.5Y 5/2 暗灰黄褐色砂質土	帯状の黒褐色粘質土を含む。	8
	12	7.5YR 6/4 にぶい橙色砂		10
	13	7.5YR 5/2 灰褐色粗砂	枝サンゴ・貝少量。	11
V	14	7.5YR 6/1 褐灰色細砂	帯状の黒色砂を含む。二枚貝少量。	12
	15	10YR 2/3 黒褐色スコリア	面的に広がる。汀線の打ち上げ物か。	13
	16	7.5YR 6/4 にぶい橙色砂		10 西
	17	10YR 5/8 黄褐色砂	枝サンゴ多量。	14
	18	7.5YR 6/1 褐灰色砂	黒色砂ブロック少量。	15
	19	10YR 8/2 灰白色細砂	帯状の黄褐色砂を含む。	16
	20	10YR 5/1 褐灰色砂	貝片・枝サンゴ少量。	17
	21	2.5Y 4/1 黄灰色砂	直下はビーチロック。	18
	22	注記なし		19

HC ベルト5 基本土層注記

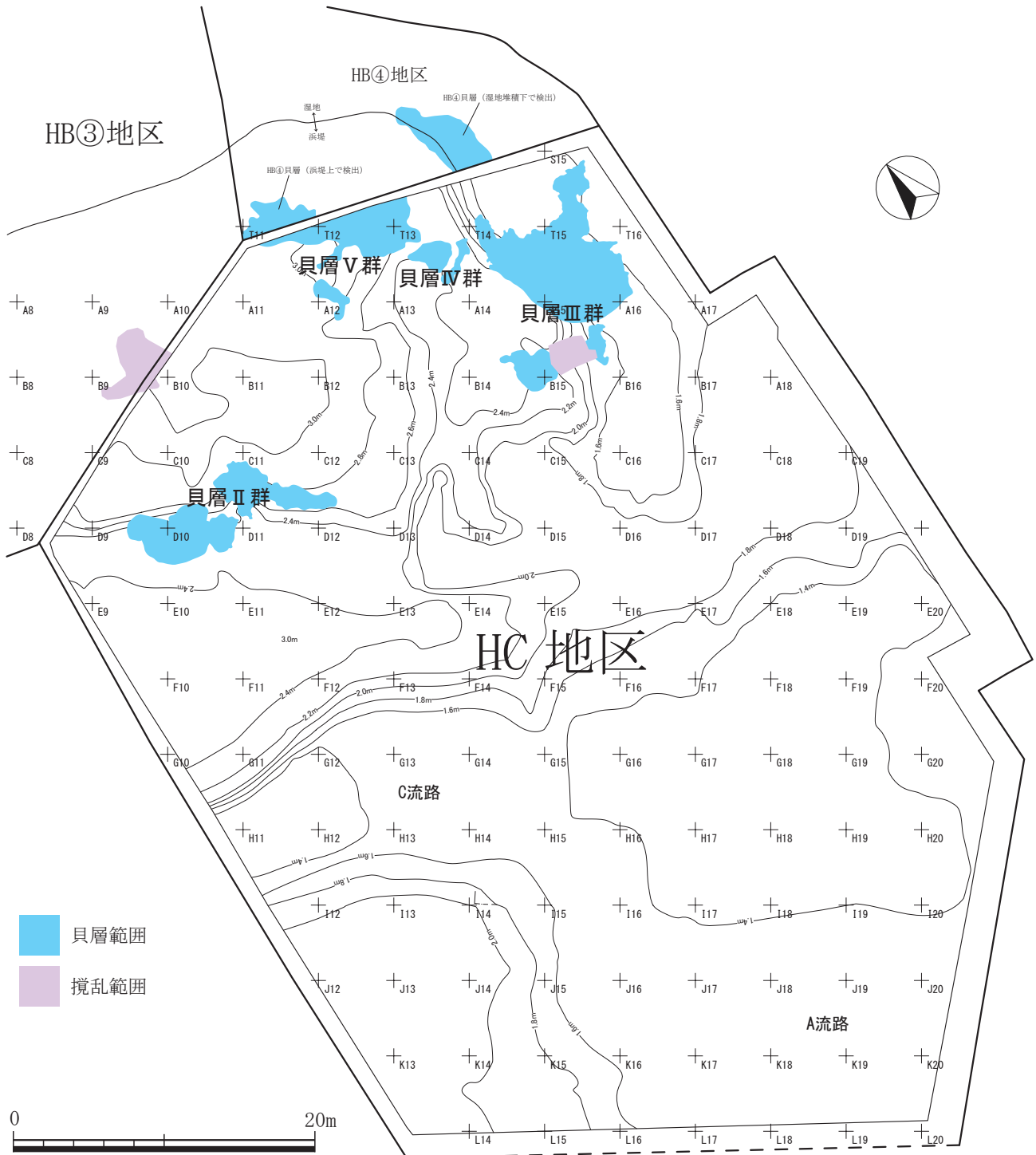
層		色・土質	特徴	備考 (旧層序)
大別	細分			
II c	1	10Y 3/1 オリーブ黒色土	カワニナ多量。鉄分が混じる。	1
	2	10YR 4/1 褐灰色砂	カワニナ多量、二枚貝微量。	2
	3	7.5Y 5/1 灰色砂	ブロック状のカワニナを含む。	3
	4	2.5Y 4/6 オリーブ褐色砂	カワニナ・枝サンゴ・二枚貝を含む。	4
	5	10YR 5/6 黄褐色砂	カワニナ少量。わずかに鉄分が混じる。	5
SK04	6	10Y 4/1 灰色砂	カワニナ微量。	6
	7	10Y 3/1 オリーブ黒色砂	カワニナ多量。黄褐色砂がマーブル状にみられる。	7
	8		カワニナ・黒褐色砂を含む。	8
	9	10YR 4/3 にぶい黄褐色砂	カワニナ・二枚貝多量。鉄分が多く混じる。	9
	10	10YR 6/3 にぶい黄橙色砂	自然遺物多量。鉄分が多く混じる。	10
	11	7.5Y 3/2 オリーブ黒色砂	二枚貝・カワニナ・枝サンゴ・大型貝を含む。	11
	12	2.5Y 3/1 黒褐色砂	鉄分が混じる。	12
	13	10YR 4/4 褐色砂	カワニナ多量。	13
	14	10YR 2/1 黒色砂	カワニナ微量。	14
	III	15	10YR 4/1 褐灰色砂	カワニナ多量、二枚貝微量。
V	16	10Y 4/1 灰色砂		6 外
	17	10YR 6/4 にぶい黄橙色砂質土		16

第7表-2 基本層序土層注記一覧

第2節 検出遺構

1. 貝塚時代後期の遺構（第23図）

HC第一浜堤のV層砂面において、人為的廃棄活動による貝層範囲が複数個所で検出された。これらを平面的にグルーピングした上で、各々掘り進めていったことは調査進行上の必然と言えるが、上層で面的に検出されたものと、傾斜地にて重層的に検出されたものでは、廃棄主体者及び構築時期が全く異なる別な遺構として捉え直す必要がある。しかしながら、これらの貝



第23図 貝塚時代後期面 当初検出された貝層範囲 (S=1/400)

層からの出土遺物量は膨大であり、既にナンバリング・集計が進んでいた遺物の属性を変更することが工程的にも厳しく、混乱をも招く恐れがあったため、報告するにあたっては現場調査での呼称を踏襲することとした。

グルーピングされた貝層はⅠ～Ⅵ群まであり、廃棄単位で更に細分されるものもある。Ⅰ群は立地する浜堤の新しさを考慮して、グスク期の遺構として捉え直した。Ⅵ群については、Ⅲ群との区別が困難・無意味であったため整理段階で統合している。Ⅲ群の上層及びⅣ・Ⅴ群はほぼ同時期のものと考えて差し支えなく、Ⅲ群の3層以下を別時期のものとして捉え直し、遺物分布等の検討を行っている。

貝層Ⅲ～Ⅴ群（第23～25図・図版1～3）

第一浜堤東側突端部の広い範囲にて、貝層が検出された。近世及びそれに攪乱されたグスク期の有色シルト層除去直後に検出された範囲と、その後に貝包含率の低い「後期層」を除去して検出された範囲とがみられた。以下、細分層ごとに記述する。

【Ⅲ群-1a層及びⅣ・Ⅴ群】

いずれも面的に検出され、貝の混入率が高かった。第23図の貝層範囲は、この段階の状況を示している。人工遺物は比較的少ないが、くびれ平底期に比定される遺物が多くを占める。

【Ⅲ群-1b層】

1a層直下で検出された黒色を呈する混貝層で、分布範囲は1a層とあまり変わらないが、層幅は厚い。層下部には多くの軽石が認められるため、1b層堆積以前は海水に曝され得る環境にあった可能性が高い。



図版1 貝層Ⅲ群-1a層 検出（北西より）



図版2 貝層Ⅲ群-1b層 検出（北西より）

【Ⅲ群-2層】

土色は局所的に1b層に似るが、あまり貝を含まない。分布範囲は広くなり、HB④（2015北谷町教委）にまで広がるはずであるが、近世期の攪乱のせい、HB④では報告されていない。B流路内Ⅳ層（HB④-16層）との新旧の判別が難しいが、その堆積時期はごく近いものであると推定した。

【Ⅲ群-3層】

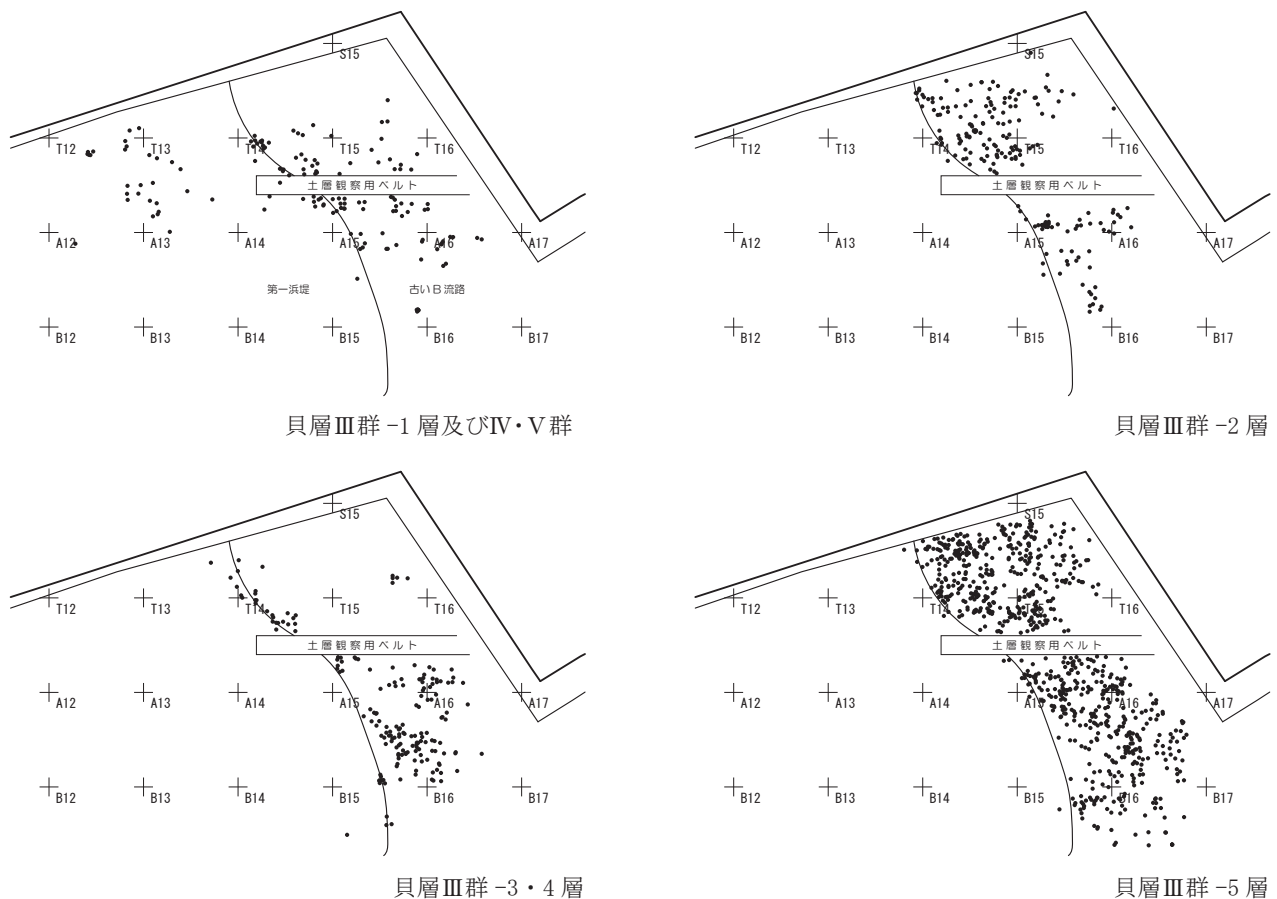
浜堤突端に向かい合うように広がる砂層であり、海成或いは風成自然堆積と考えられる。HB④-25層と連なる可能性が高く、ナガサ流域内の砂洲として形成されたものであろう。

【Ⅲ群-4層】

全体として傾斜をもちながら、5層を完全にパックしている。断面図で示した以上に細分される要素が多く、水成の互層が観察されたり、廃棄貝が水平に堆積していたりと、その堆積環境が水辺であったことを物語る。前述3層とともにB流路の閉塞に関わったと考えられる重要な層である。つまりB流路内IV層の堆積開始は、これら3・4層の堆積以後のことである可能性が高い。

【Ⅲ群-5層】

浜堤突端の外側に広く分布する。堆積レベルは最も低く、水平の堆積である。出土遺物の点数は圧倒的に多い。貝塚時代後期前半の資料が含まれており、浜屋原式のような古手のものも認められることから、第一浜堤の形成途中の段階から廃棄行為が始まっていた可能性が高い。



第24図 貝層Ⅲ～Ⅴ群各層における地点観測遺物分布 (S=1/400)

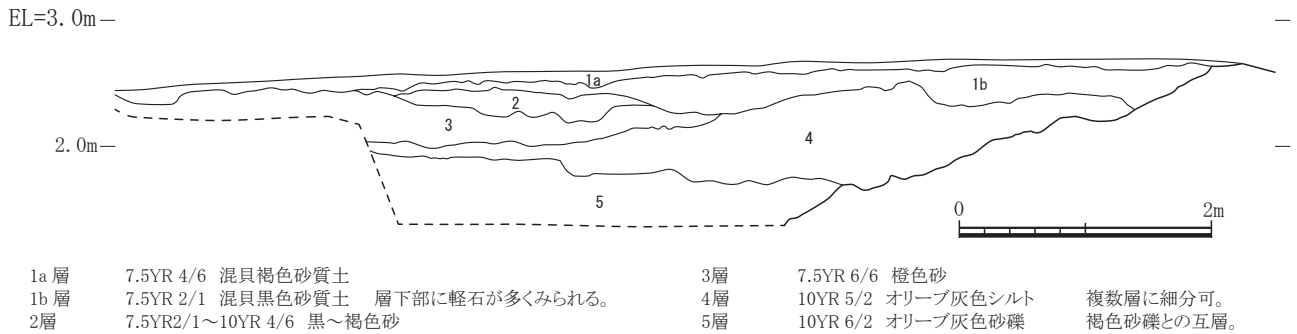
小結

このように、第一浜堤突端部においては、長期にわたる盛んな廃棄行為がなされていた。自然堆積である「貝層Ⅲ群3層」を定点とすると、その下層で概ね大当原式、上層でくびれ平底

式という層位的な新古関係が存在する。

発掘調査前には想定してなかった内容であったこともあり、工期内の調査完了は非常に厳しいものとなってしまった。そのために生じた作業上の混乱を完全に克服できなかった部分が多分にあったことは猛省しきりであるが、当該期土器の変遷に大きく関わる内容について、層位的発掘調査が実現できた意味は非常に大きなものであることは間違いない。

なお、本遺構の土層観察用ベルトは、樹脂塗布等の処理のうえ剥ぎ取りを行っており、北谷町役場ロビーにおいて常設展示している（巻首図版12）。



第 25 図 貝層Ⅲ群土層観察用ベルト東面 断面 (S=1/60)



図版 3 貝層Ⅲ群土層観察用ベルト東面 断面 (北東より)

貝層Ⅱ群 (第26図・図版4・5)

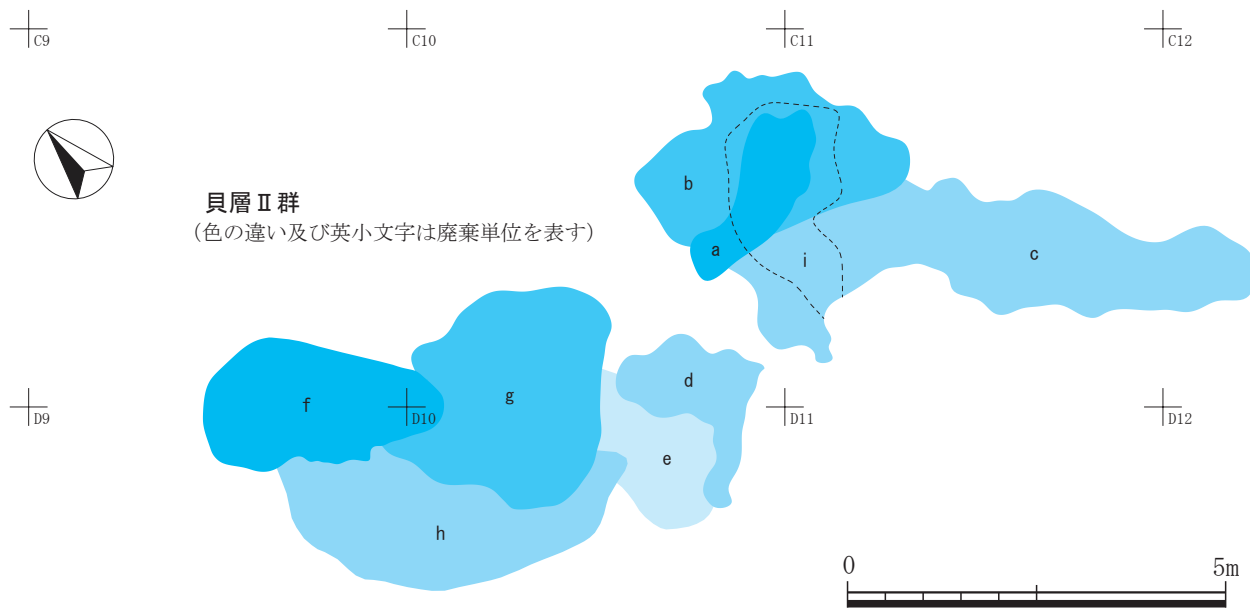
第一浜堤西側の傾斜地において面的に広がる貝層で、廃棄単位からa～iの9グループに分割することができた。グループごとに構成される貝種に多少の違いがみられる。含まれる土器には細片が多く、時期決定の根拠に乏しい。



図版 4 貝層Ⅱ群 f～h 検出 (西より)



図版 5 貝層Ⅱ群 a～c 検出 (北西より)



第26図 貝層Ⅱ群 (S=1/100)

2. グスク時代～近世前半の遺構

(1) V層上面で検出された遺構 (第27・28図)

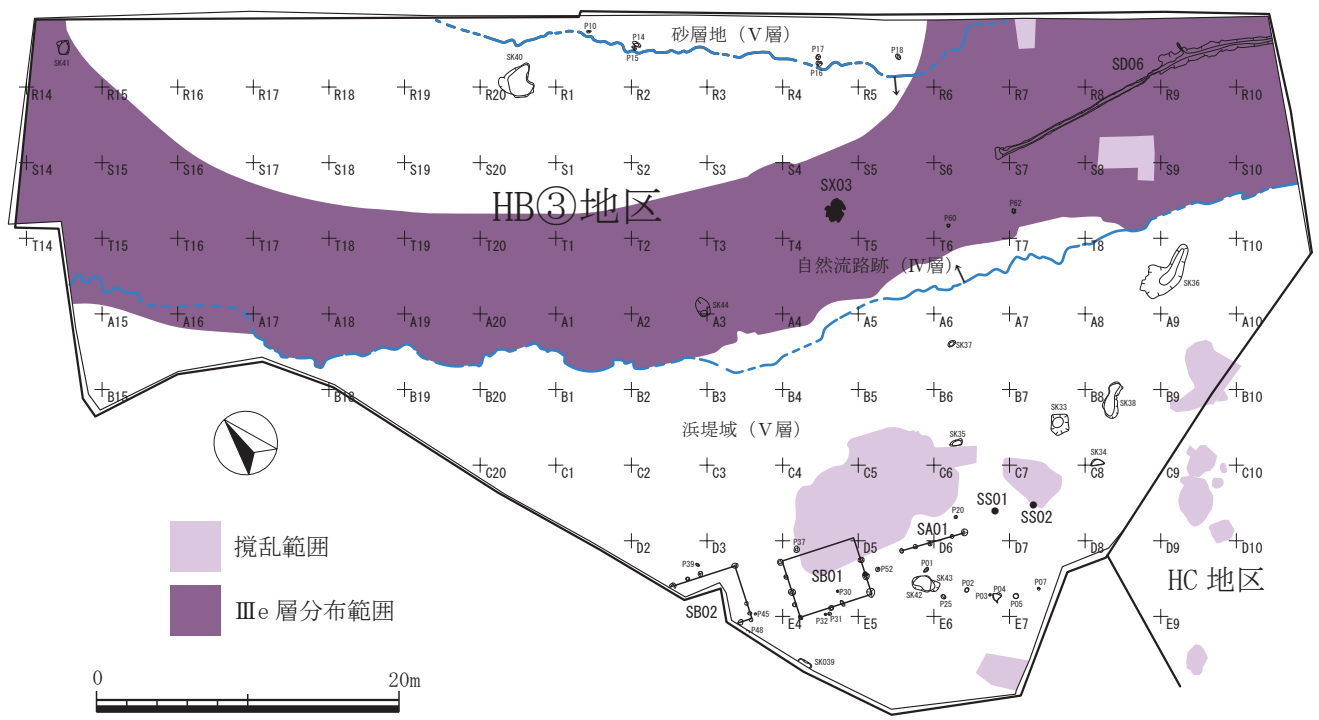
浜堤域のV層上面では、50基以上の土坑・ピット類が検出された。Q1～5グリッドにある6基のピットも、B流路を挟んだ対岸砂層上での検出であるため、このグループに含めた。近世遺構による攪乱の影響を受けているが、配置に規則性があるものが一部に認められたため、整理作業の段階に至って側柱建物等を想定した。これまで調査された平安山原の各遺跡では、遺構の疎密が激しく、密集地では建物想定が不可能なほどであったのに対し、当該箇所では切り合いが少ないこともあり、建物を想定することが比較的容易であった。

建物址 (SB01) (第29図、図版6)

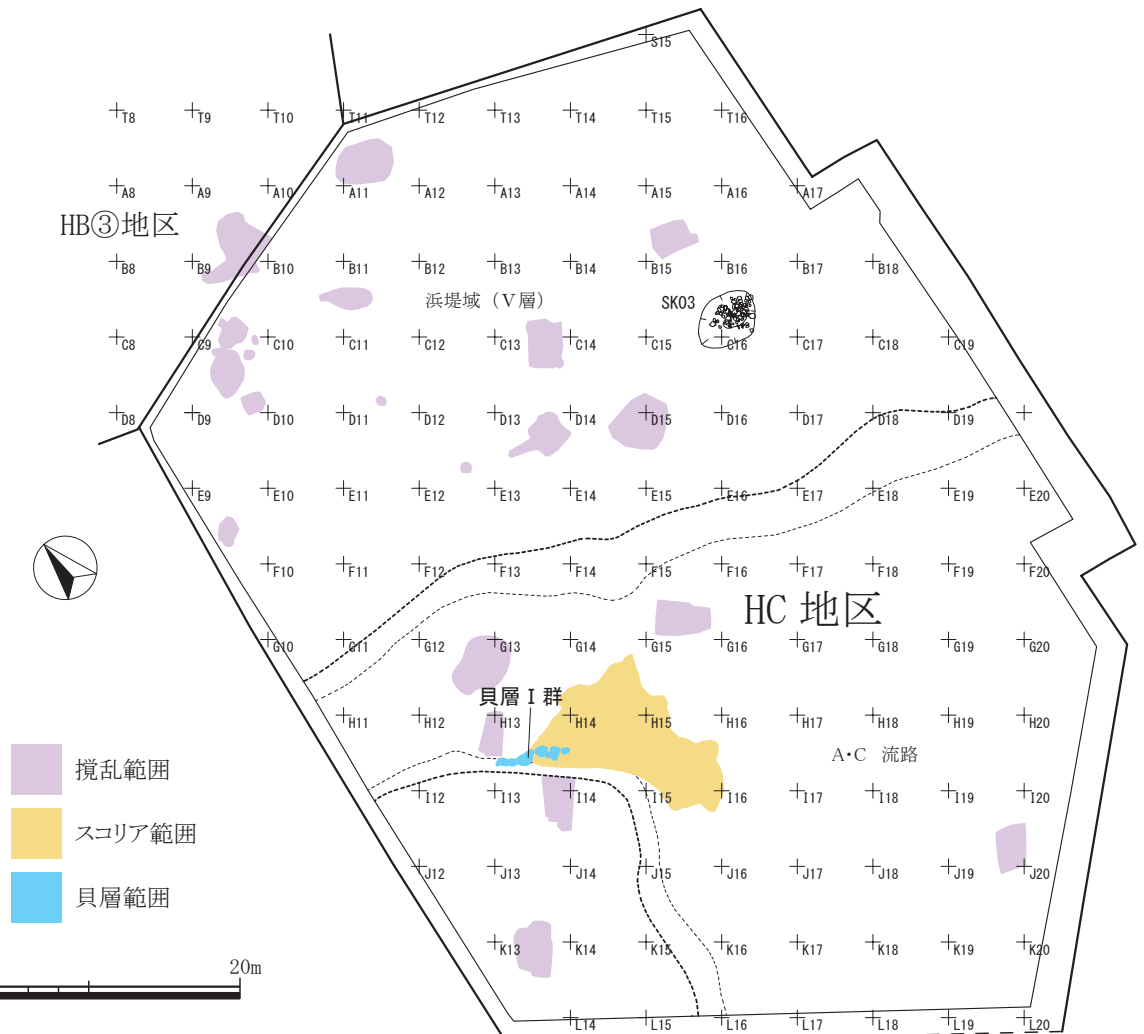
近世大型土坑SK32によって東隅を欠失するが、残存範囲から3間(長辺)×4間(短辺)程度の側柱建物を想定した。長辺は約5mを測る。東辺を構成するP1～3については、土層観察用ベルト上に位置していたため、Ⅲ層の細分層であるHB③-10層上面からの掘り込みであることが確認されているが、その他のピットは全てV層上面での検出となった。P11はP2完掘後のほぼ同位置にて検出されたため、P2の掘り残しであった可能性も残る。遺物は出土していない。

建物址 (SB02) (第30図、図版6・7)

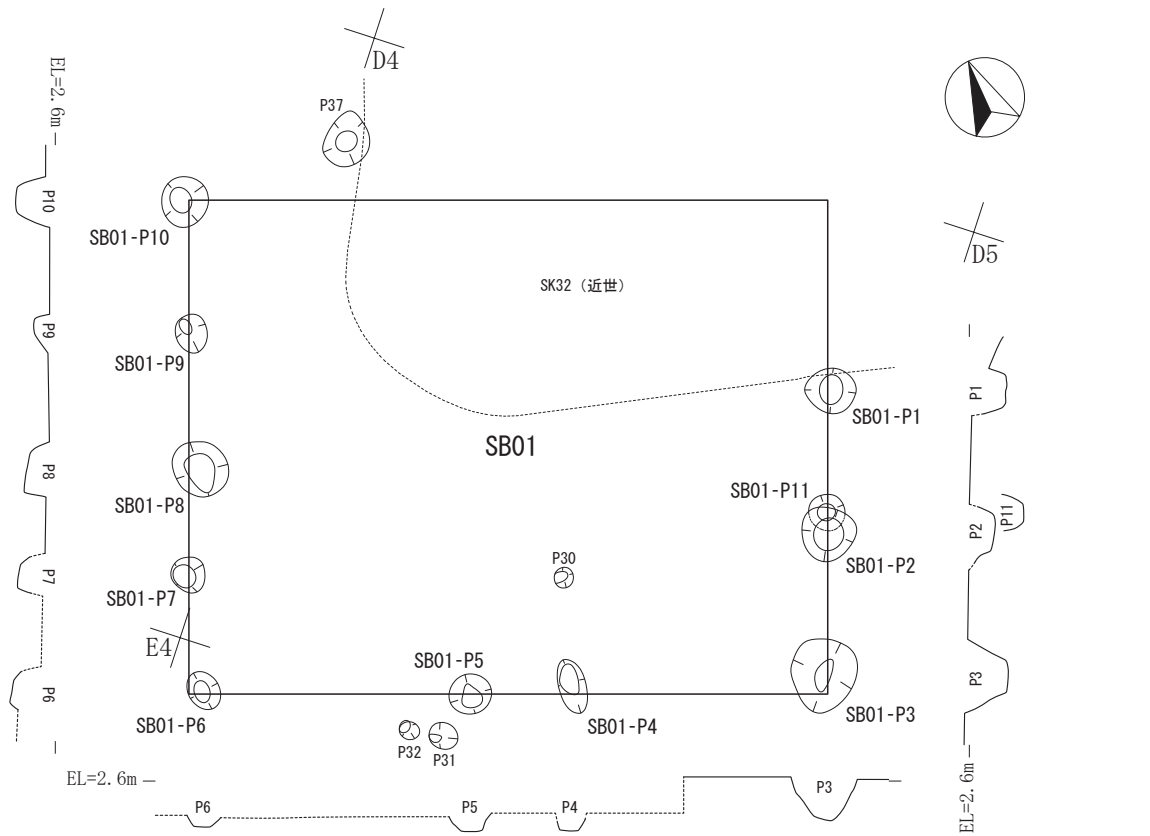
大半が調査区外に位置するため全体規模は不明であるが、3間以上(長辺)×3間(短辺)の側柱建物を想定した。短辺は約3.8mを測る。北東隅柱となるP4が最も深く、柱穴としてはしっかりとしている。SB01とは方向が一致しており、両者が整然と配置されているため、同時存在していたようにも感じられるが、調査区壁面に位置するP1の掘り込み開始面は、HB③-13層下からであり、SB01との層位的な整合性の点で問題が残る。遺物は出土していない。



第27図 HB③ IV・V層上面 検出遺構配置 (S=1/500)

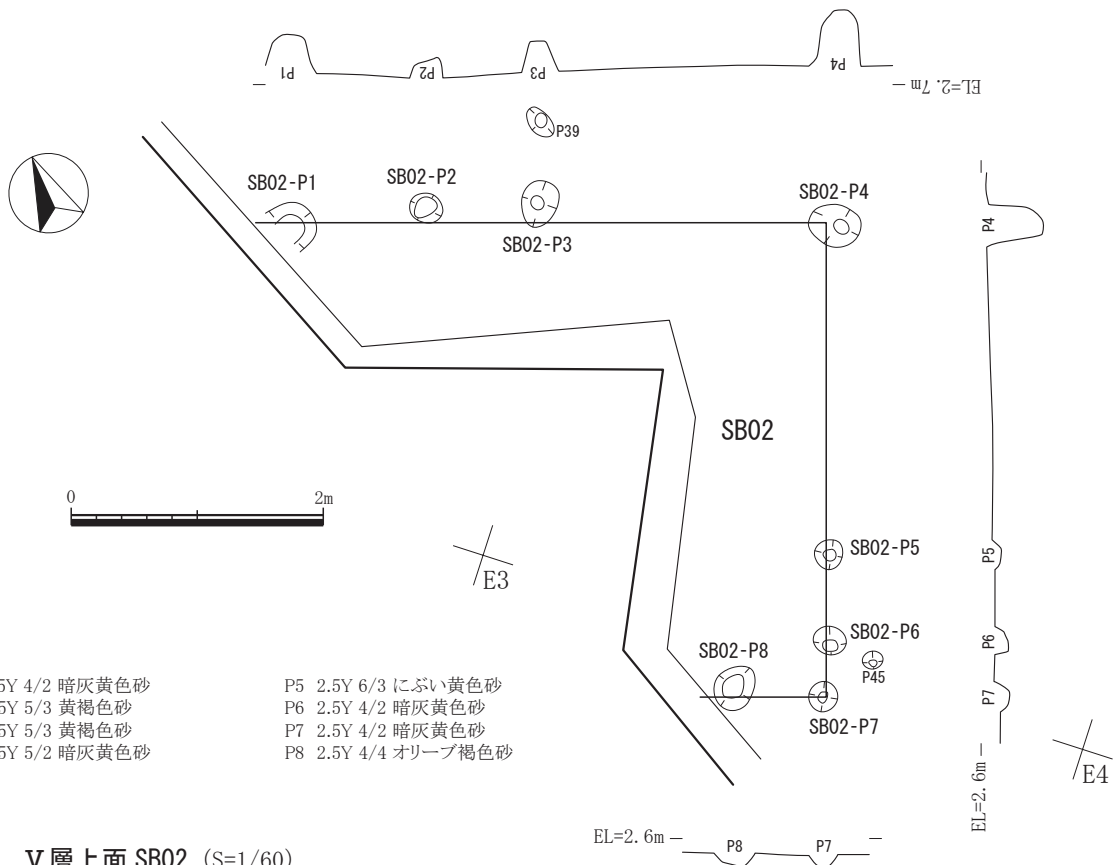


第28図 HC V層上面 検出遺構配置 (S=1/500)



- | | | |
|-------------------------|-------------------|--------------------|
| SB01-P1 10YR 3/3 暗褐色砂質土 | P5 7.5YR 2/2 黒褐色砂 | P9 2.5Y 5/4 黄褐色砂 |
| P2 10YR 3/2 黒褐色砂質土 | P6 2.5Y 4/2 暗灰黄色砂 | P10 2.5Y 4/2 暗灰黄色砂 |
| P3 10YR 3/2 黒褐色砂質土 | P7 10YR 4/2 灰黄褐色砂 | P11 2.5Y 5/2 暗灰黄色砂 |
| P4 7.5YR 3/3 暗褐色砂 | P8 10YR 4/2 灰黄褐色砂 | |

第 29 図 V層上面 SB01 (S=1/60)



- | | |
|------------------------|---------------------|
| SB02-P1 2.5Y 4/2 暗灰黄色砂 | P5 2.5Y 6/3 にぶい黄色砂 |
| P2 2.5Y 5/3 黄褐色砂 | P6 2.5Y 4/2 暗灰黄色砂 |
| P3 2.5Y 5/3 黄褐色砂 | P7 2.5Y 4/2 暗灰黄色砂 |
| P4 2.5Y 5/2 暗灰黄色砂 | P8 2.5Y 4/4 オリーブ褐色砂 |

第 30 図 V層上面 SB02 (S=1/60)



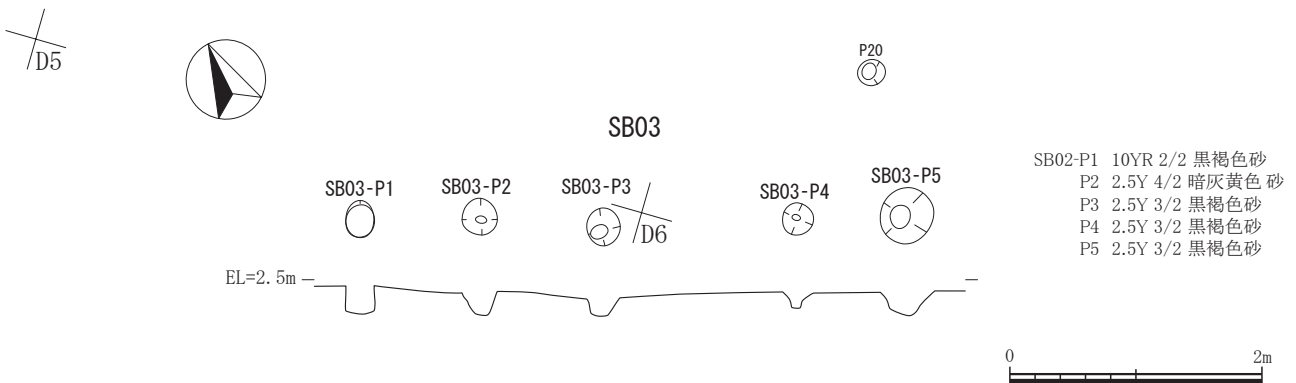
図版6 SB01～03 完掘（南より）



図版7 SB02 検出（東より）

建物址（SB03）（第31図、図版6）

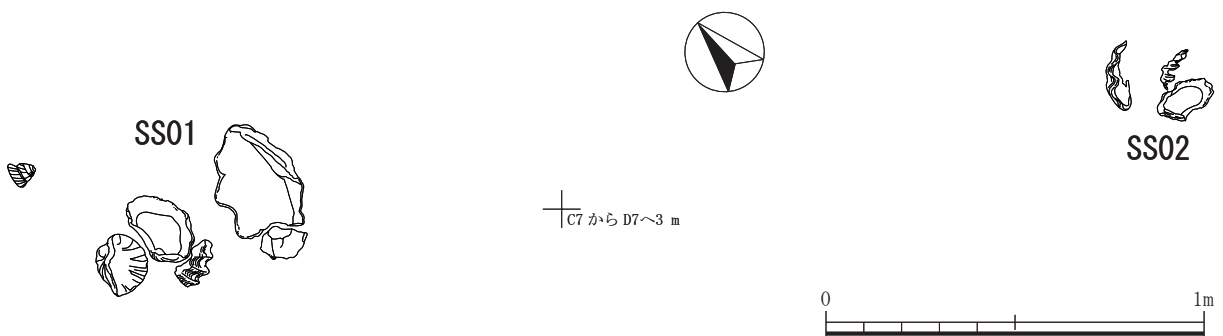
1列に並ぶ5基のピットをもってSB03とした。柱列としか言いようがないが、SB01・02との配置関係や方向軸の一致からして、両者に関連する建物或いは施設である可能性が高い。長さ約4.5mを測る。P1から獣骨が得られたのみで、人工遺物は出土していない。



第31図 V層上面 SB03 (S=1/60)

貝集積（SS01・02）（第32図、図版8・9）

前述の建物址の外側にて、2カ所の小規模な貝集積が認められた。どちらも主にシャコガイで構成される。帰属時期は不明であるが、便宜上この面に属するものとして報告する。



第32図 V層上面 SS01・02 (S=1/20)



図版8 SS01 検出 (南西より)

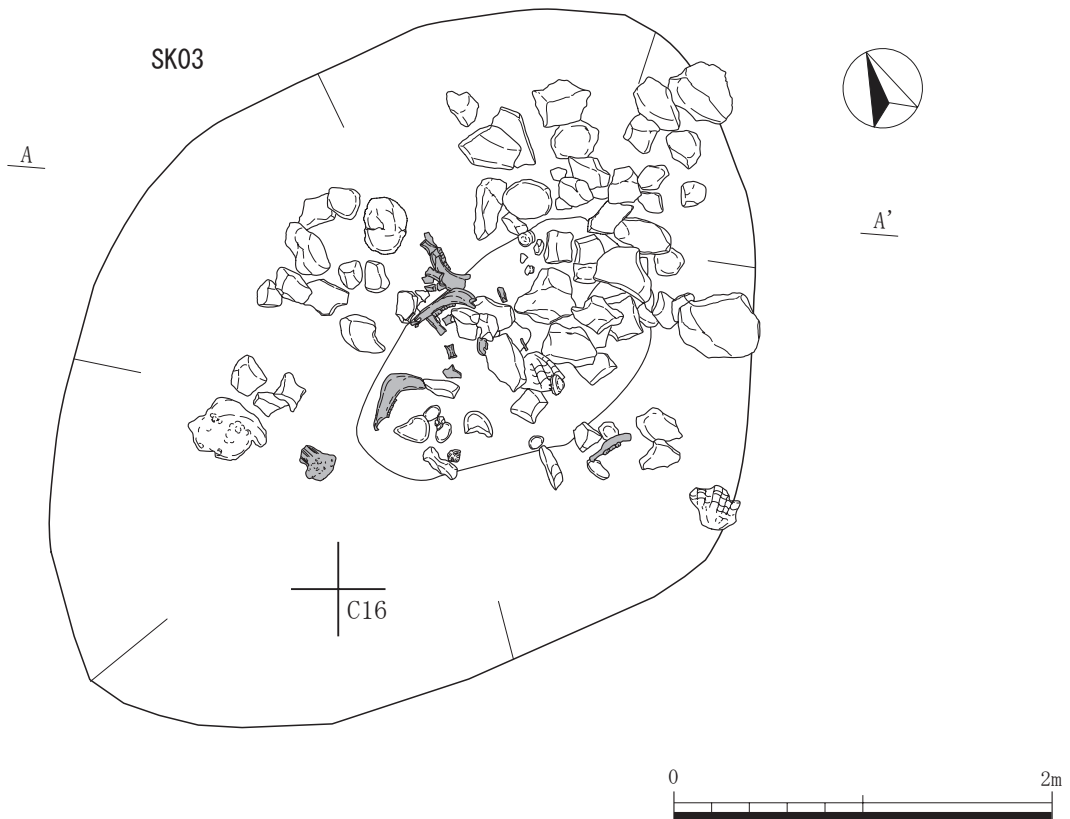


図版9 SS02 検出 (南西より)

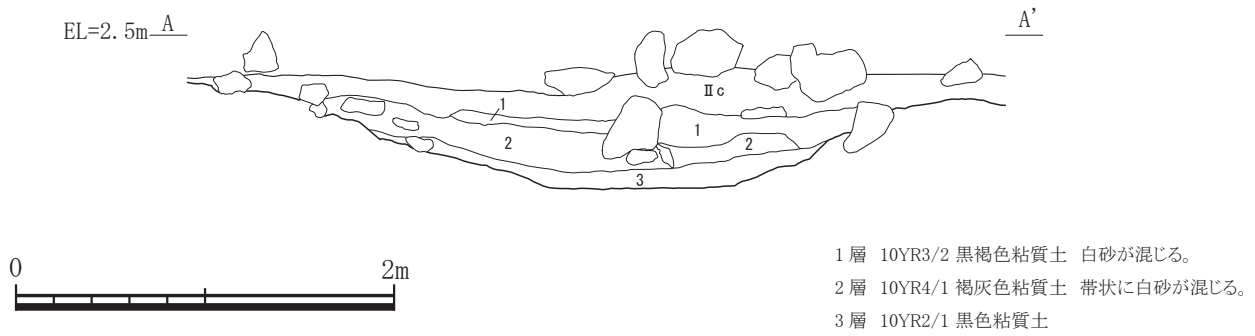
埋納土坑 (HC-SK03) (第33・34図、図版10・11)

HC北側の石列2群層直下にて検出した。土坑掘り方に礫を敷き詰めていたため、当初は石列2群との混同があり、この土坑の開口部プランは明瞭に判別することができなかったが、整理段階でその平面形状を復元した。最下層からウシ・ウマ幼体の下顎骨が多く見つかった他、南宋の大銭(淳熙元寶・背「十五」、当二銭)も1点出土しており、何らかの祭祀性を伴った埋納土坑という性格をあてることができる。

石列直下に構築された大型土坑は今回2例あり、いずれも近世のものと推定された。そのため本遺構も同様である可能性を考え、出土したウマ下顎骨を試料とした年代測定を行ったところ、 $560 \pm 20BP$ の値を得た。共伴する南宋銭とも調和するため、年代観を改め14~15cのものと考えた。



第33図 V層上面 SK03平面 (S=1/40)



第34図 V層上面 SK03 断面 (S=1/40)



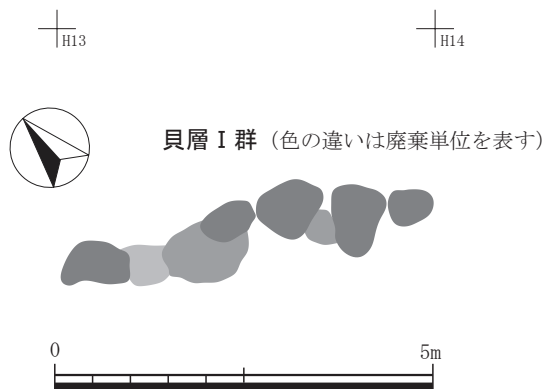
図版10 SK03 断面 (西より)



図版11 SK03 南宋銭出土 (東より)

貝層 I 群 (第35図、図版12)

C流路に沿うようにして、第二浜堤際の緩斜面に帯状に薄く堆積する。第二浜堤はフェンサ下層式期までに形成されたものと思われるが、C流路の埋没開始は近世に入ってからであるため、この貝層は便宜上グスク期頃のものと考え、本項にて報告する。貝種はほぼイソハマグリで構成されていたが、廃棄単位から8グループに分割することができた。A・C流路の合流部に広がるスコリア層の上で、この貝層が検出されていることも特記される。人工遺物は出土していない。



第35図 V層上面 貝層 I 群 (S=1/100)



図版12 貝層 I 群 検出 (南東より)

(2) IV層上面で検出された遺構 (第27図)

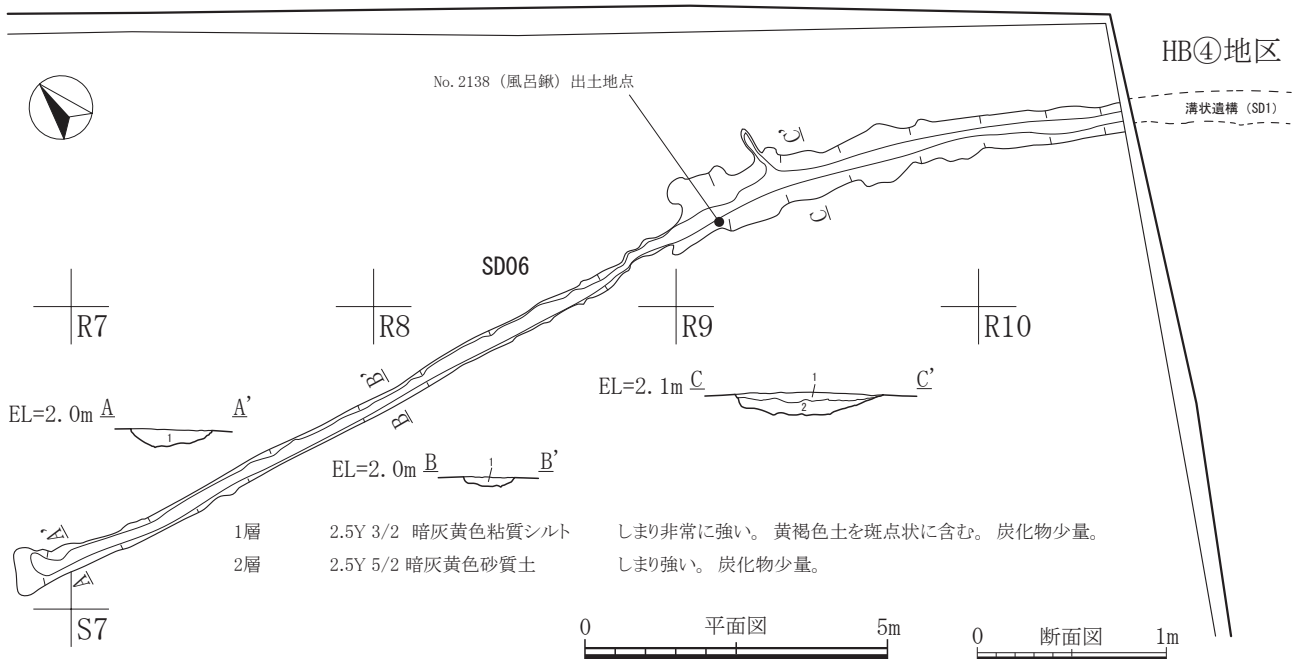
HB③を走っていた自然流路 (B流路) は、グスク期までに埋没が進み (IV層の堆積)、平坦で浅い窪地となった。浜堤地とは異なり粘性のある土壌であったためか、グスク期に入るとこの範囲にて農耕が開始されることとなる。

耕作域においては、III d・III e層直下のIV層上面にて溝 (SD06)・炭溜り (SX03)・土坑 (SK40・41・44)・ウシ蹄痕群が検出された。検出状況からすると、前3者はこの面に伴って然るべきであるが、ウシ蹄痕は杭痕と同じように上層から下に向かって突き抜けが考えられる痕跡であるため、取扱いには一定の注意が必要である。本事例では、耕作土作出時に残された可能性も考慮し、本項において報告する。これ以外にも不鮮明なシミが残されており、これらは人足痕・草木根・鋤痕であった可能性が考えられなくもない。

これに非常に似た検出状況を示しているのが、那覇市那崎原遺跡 (那覇市教委1996) である。溝2条・焼土層遺構群・鋤跡群が近在して検出されており、焼土遺構は短期的に使用されたものであるという所見も、今回の炭溜り (SX03) に通じるものがある。ただし農耕における鋤痕は上位に耕すべき土壌があつてこそ下位で残るものであり、実際の作業面は検出面よりやや上となることが考えられる。那崎原遺跡・平安山原B遺跡におけるこれらの遺構セットが、果たして同時期のものとして意味をなすものなのか、そしてまたそれが何を意味するのか、検討にあたっては更なる慎重さが求められる。

溝 (SD06) (第36図、図版13~16)

耕作域であるHB③東隅のIV層上面において、III e層に完全に覆われた形で1条の溝が検出された。『平安山原B遺跡』(2015)で報告された溝状遺構5 (SD1)と同一・一連のものであり、検出総長は合わせて28.4mを測る。底面標高は西側ほど低いため、導排水目的であると推定しやすいが、地勢そのものが微傾斜をなしているため即断はできない。Q9付近で僅かに屈曲



第36図 IV層上面 SD06 (平面 S=1/25、断面 S=1/40)



図版 13 SD06 検出 (北西より)



図版 14 SD06 セクション A (東より)



図版 15 SD06 セクション C (東より)



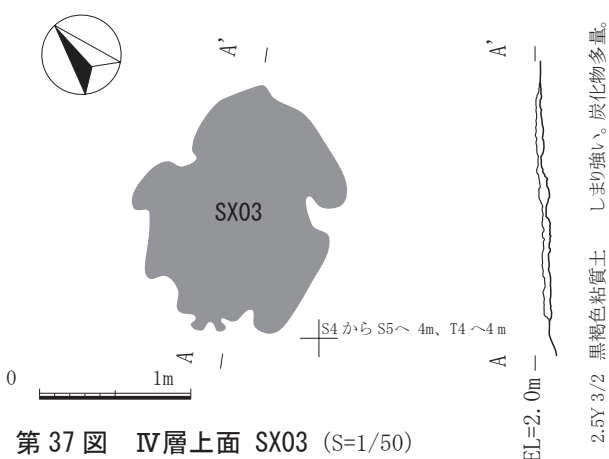
図版 16 SD06 完掘 (西より)

し、溝幅が細くなり、溝肩の乱れもみられなくなる。掘り足しであろうか。

この溝の構築目的は定かではないが、想像を逞しくするならば、耕作域を選定し、土壤改良を始めるにあたっての第一工程ではなかったか。つまり、完全に埋没していたIV層土壤に導水することにより水分を含ませ、そこに周辺の砂を混ぜ込んでいったと考えることはできないだろうか。愚見ではあろうが、検出層位とは整合している。或いは、調査区南壁面での溝断面観察において埋土上部にIIIe層同質土の混入が認められるため、実は構築面がIIIe層上面であり、IIIe層を耕作していた時の用水溝であった、という可能性も想定できる。

炭溜り (SX03) (第37図、図版17)

HB③-SD06の延長上に、炭化物が密集する範囲が検出された。検出状況はSD06と同じで、平面的には160×130cmほどの広がりを持つ。被熱・赤化した獣骨・海産貝の他、フェンサ下層式



第 37 図 IV層上面 SX03 (S=1/50)



図版 17 SX03 検出 (南東より)

に比定される土器口縁部片や破損した磨石も含まれていた。完掘底面での強い被熱痕跡は認められなかったため、これらの炭化物や骨等は別の場所で燃焼されたものを廃棄したか、この場所で燃焼したとしても一過性の行為であったことが考えられる。

ウシ蹄痕 (図版18・19)

耕作域各所のIV層上面にて、上層土由来の埋土を持つ大型獣の足跡が散見された。偶蹄であることからウシの蹄痕とした。このウシの歩行が農耕に関わるものとした場合、耕土がよほど薄くでもない限り、土壌にかなりの水分を含んでいる状態(湿田状)を前提としなければ、下層面には蹄痕が残らないものと思われる。また、犁を引かせた際に生じる条痕も認められないため、これらのことから、少なくとも乾地での「田起こし」のような作業は想定できない。貧弱な発想ではあるが、水を湛えた(引き込んだ?) IIIe・IV層上にて耕作土III d層(或いはIII e層)を作出するにあたって、何らかの形で牛力を利用(踏耕等)したのであれば、このような痕跡が残るのではないだろうか。1つの想定案として、第38図に模式を示した。これ以外にも様々な想定は可能と思われるが、蹄痕が土層を突き抜ける要素をもった痕跡でもあるため、その時の土壌の軟弱度合を考慮に入れておく必要はあろう。



図版 18 Q14・15 付近 ウシ蹄痕 検出 (西より)

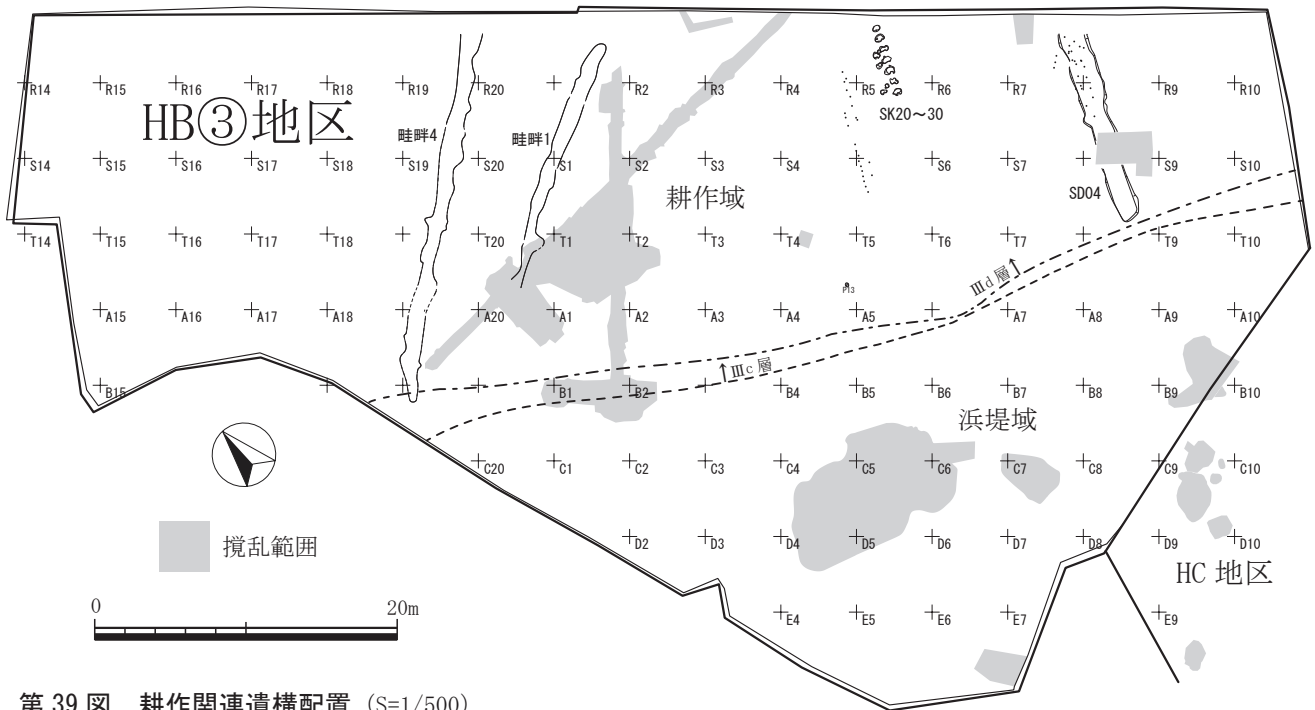


図版 19 ウシ蹄痕 断ち割り



第 38 図 蹄痕形成過程想定案 模式

(3) 耕作関連遺構 (第39図)



第39図 耕作関連遺構配置 (S=1/500)

溝 (SD04) ・木杭群 (第40図、図版21)

溝は一部に攪乱を受けていた。検出長約13.3m、幅約186cmを測り、南側は耕作域境から先には延びない。埋土の様相が後述する畦畔痕跡にも類似するが、断面が凹形を呈するため、溝として扱った。深さが殆どなく、底面に不規則な起伏がみられるため、流水した溝ではないように思われる。溝内外に木杭が残存しており、確認された杭数は27本に及んだ。なお、平面図中の木杭は●記号で表しており、原寸径とは異なる。溝内には礫も散見された。

土坑群 (HB③-SK20~30) ・木杭群 (第40図、図版20)

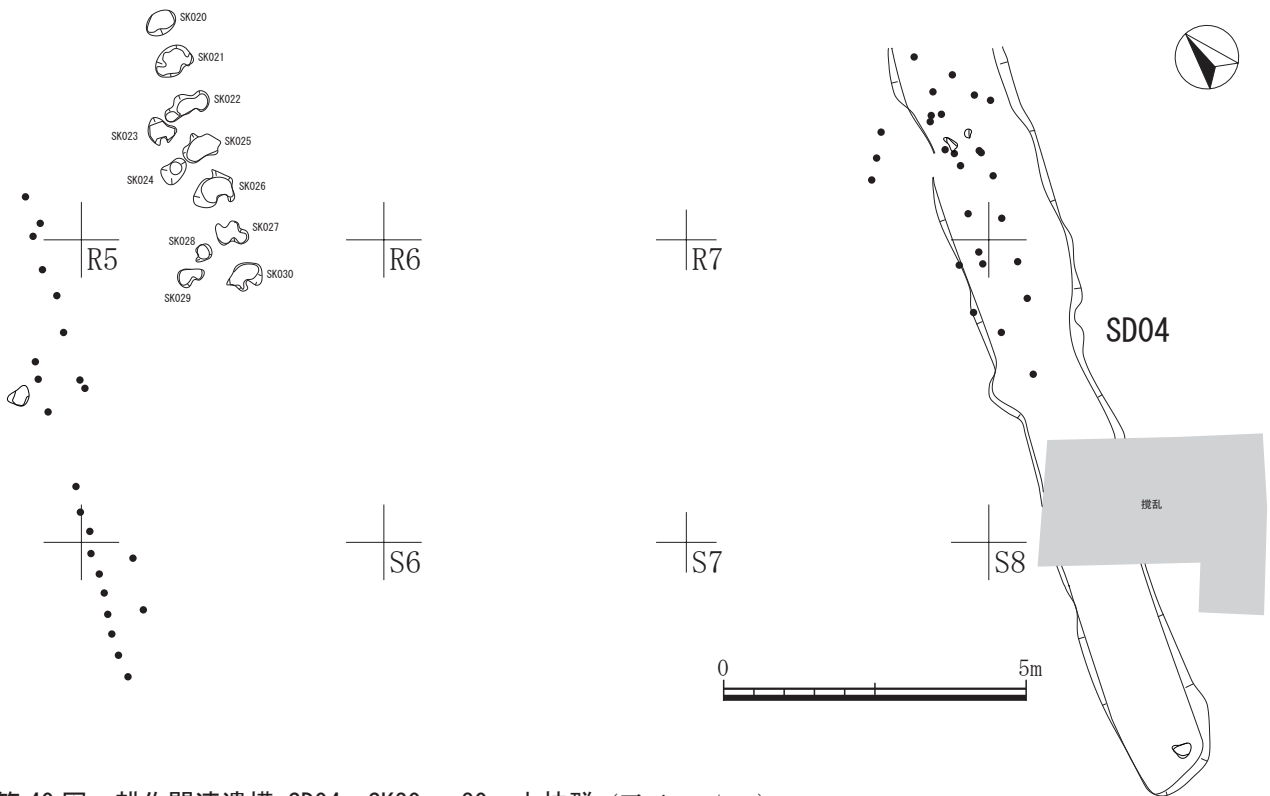
列状に並ぶような11基の土坑が検出された。いずれも浅く、不整形を呈することから、植栽痕跡であろう。遺物は出土しなかった。また、これらと並行するように木杭列が検出され、23本を確認した。



図版20 SK20~30 検出 (南西より)



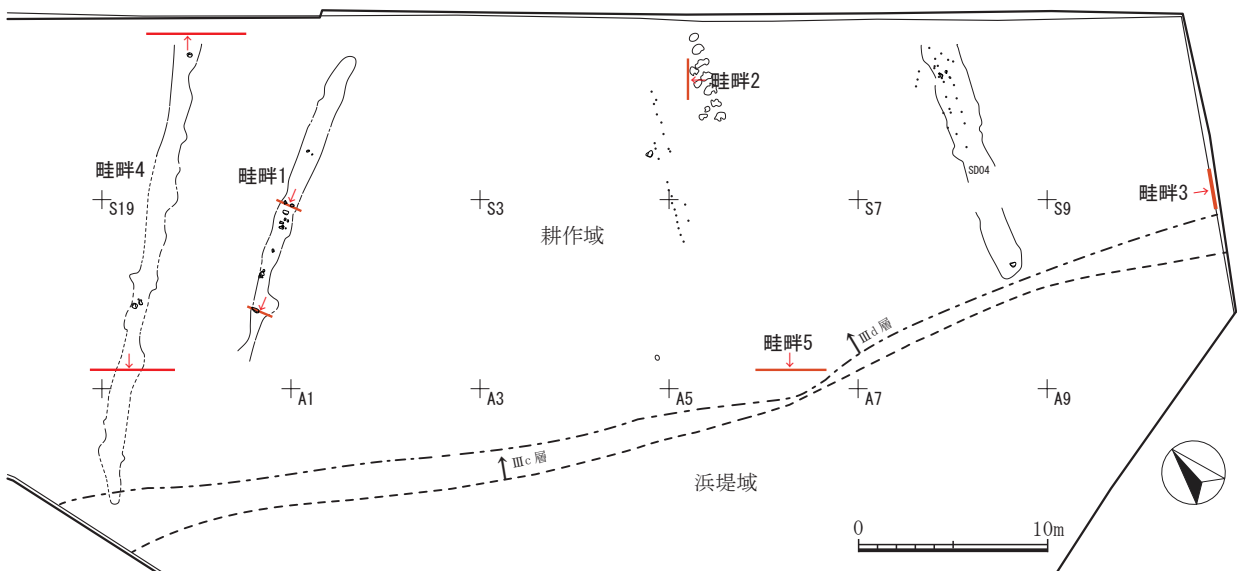
図版21 SD04 完掘 (南西より)



第40図 耕作関連遺構 SD04・SK20～30・木杭群（平面S=1/125）

畦畔状の痕跡（畦畔1～5）（第41図）

Ⅲc・Ⅲd層における平面・断面観察を繰り返す中で、不自然な土壌の高まりや土壌攪拌の程度の違い、礫の有無等から、畦畔が存在していた可能性を感じた。推論の域を出ない部分もあるが、看過するのも躊躇されたため、積極的な解釈をもって以下に報告する。



第41図 畦畔状の痕跡 検出箇所（S=1/400）

○畦畔1（図版22）

Ⅲd層中で検出した。当初は溝として掘削を行ったが、遺構断面が凹形をなさなかったため、遺構として一度除外した経緯がある。検出プランとなった土色の違いは、下層であるⅣ層の露

出とその周辺の粗い攪拌土であり、耕作土壤に包含されるには相応しくないような礫の出土も認められた。断面からはIV層の高まりが明瞭に観察される。

今回の耕作域については必ずしも水田を想定している訳ではないが、この下層の高まりについては、水田跡調査における「疑似畦畔B」に近い状況にあると思われる。「疑似畦畔B」とは、実際に構築・使用された畦畔そのものではなく、畦畔があった場所の下位レベルに残る痕跡であり、一義的には耕作土下で検出される自然堆積層の高まりを指す。その形成過程については、第42図左側にて模式を示している。III d層の主たる母材層はIV層と考えられ、断面写真（図版22）のような状況は「疑似畦畔B」の典型的なものと言えよう。

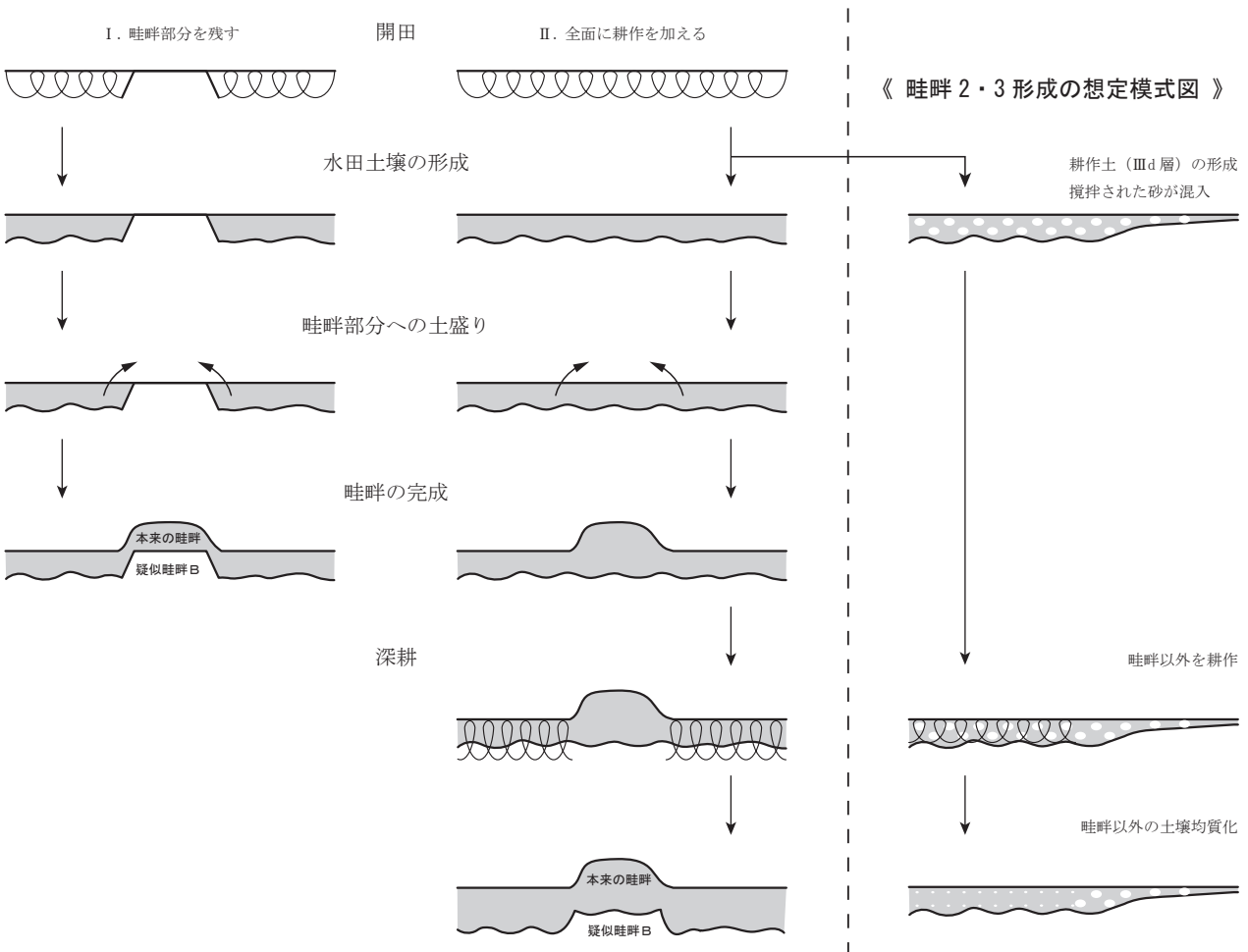


断面A：IV層が高まり、礫が配置される



断面B：断面Aに類似した状況

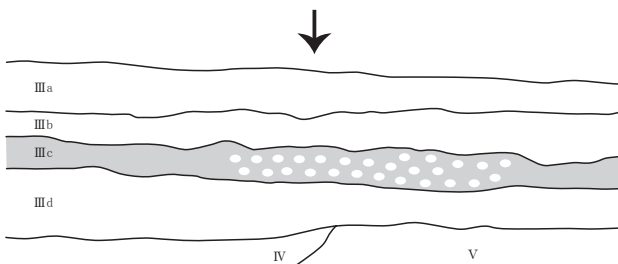
図版 22 耕作関連遺構 畦畔 1



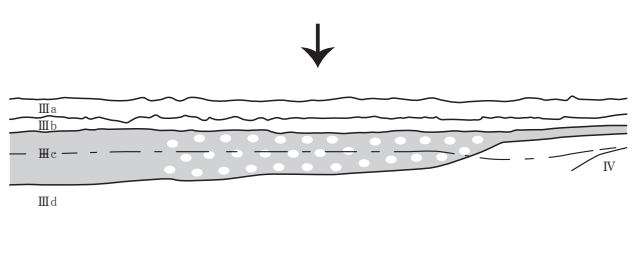
第 42 図 「疑似畦畔B」及び畦畔2・3形成 模式

○畦畔2・3 (第43図、図版23)

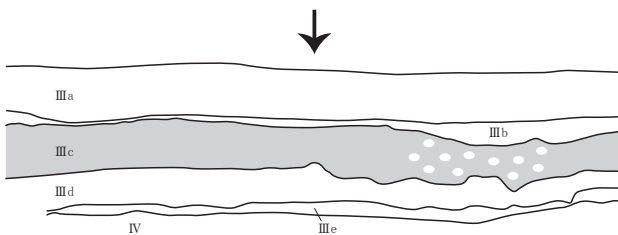
壁面2及びベルトAのⅢc層中にて、砂ブロックの混入状況が周囲とは異なる箇所を発見した。いずれも耕作域の縁辺に近い。Ⅲc層が人為的に作出された耕作土であることは、第IV章第1節において述べた通りであるが、この耕作土作出にあたっては、母材層に砂を混入し攪拌するといった行為があったと考えられる。この攪拌状態が粗い箇所について、第42図右のような形成過程を想定し、広義の畦畔（耕作土由来の非耕作範囲）に分類できるものとして取り扱った。今回事例では畦畔以外部分にて耕作を重ねることで、当初混入・攪拌された砂（ブロック）の細小化及び土壌の均質化が起こると想定した。結果として、畦畔（非耕作）部分では粗い砂ブロックが残存することとなる。



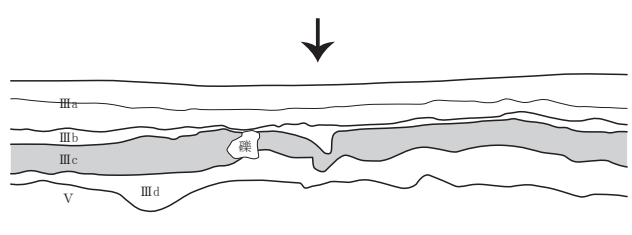
畦畔2 : Ⅲc層中に粗い攪拌土が残る (HB③- ベルト5)



畦畔3 : Ⅲc層中に粗い攪拌土が残る (HB③- 壁面2)



畦畔 4a : Ⅲc層の高まりの片側に粗い攪拌土が残る (HB③- ベルトA・合成)



畦畔 4b : Ⅲc層の高まりの片側に礫や起伏がみられる (HB③- 壁面1・合成)

第43図・図版23 耕作関連遺構 畦畔2～4

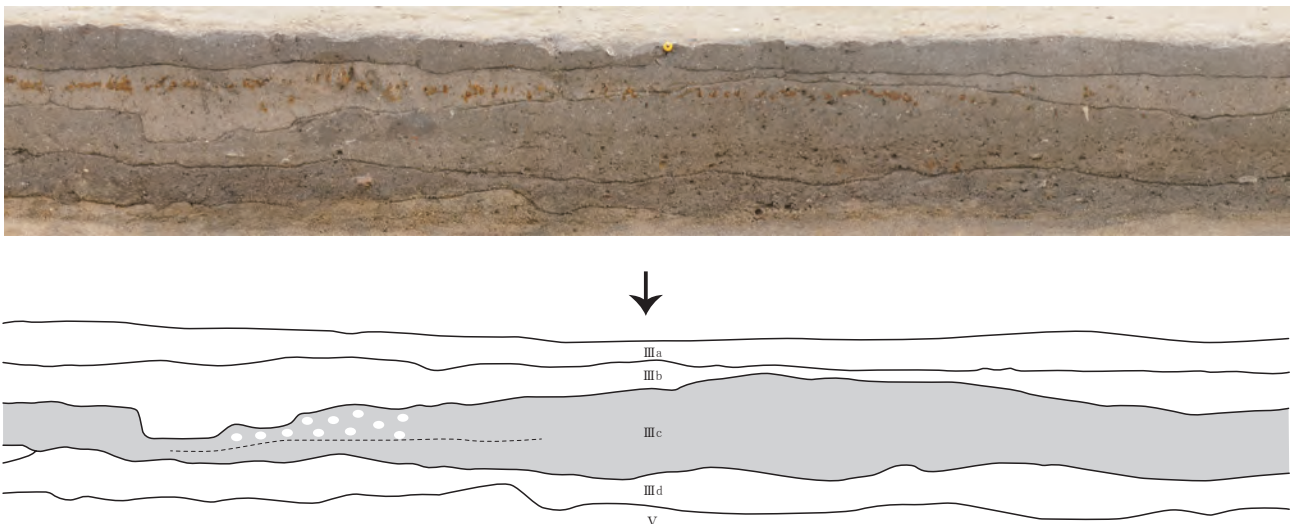
○畦畔4（第43図、図版23）

Ⅲc層中にて平面的に検出された。畦畔1同様、当初は溝としたものの断面凹形に掘削しきれなかったものである。耕作関連遺構として再度検討を加える中で、畦畔1～3の事例に共通点が認められたため、その1つに加えた。

本痕跡には、①壁面やベルトの観察において畦畔状の高まりが認められる、②その高まりの片側において粗い攪拌が残存している、③この攪拌部分に礫や木杭が配置されたり、上面の起伏が大きかったりして、実際の耕作範囲とは考えにくい、といった特徴が認められる。粗攪拌範囲は帯状に延び、その方向は畦畔1と平行する。しかしこの両者は構築層位が異なるため、併存したものではないと考えられる。

○畦畔5（第44図、図版24）

畦畔4に類似する状況が、ベルトAの別の箇所にて確認された。Ⅲc層の高まりの片側に、大きな凹みが認められた他、砂ブロックではないが粗い攪拌土が盛られたような土層の違いもうっすら看取される。前述の木杭列の延長上に位置していることも併せて、畦畔状痕跡の1つとして報告する。

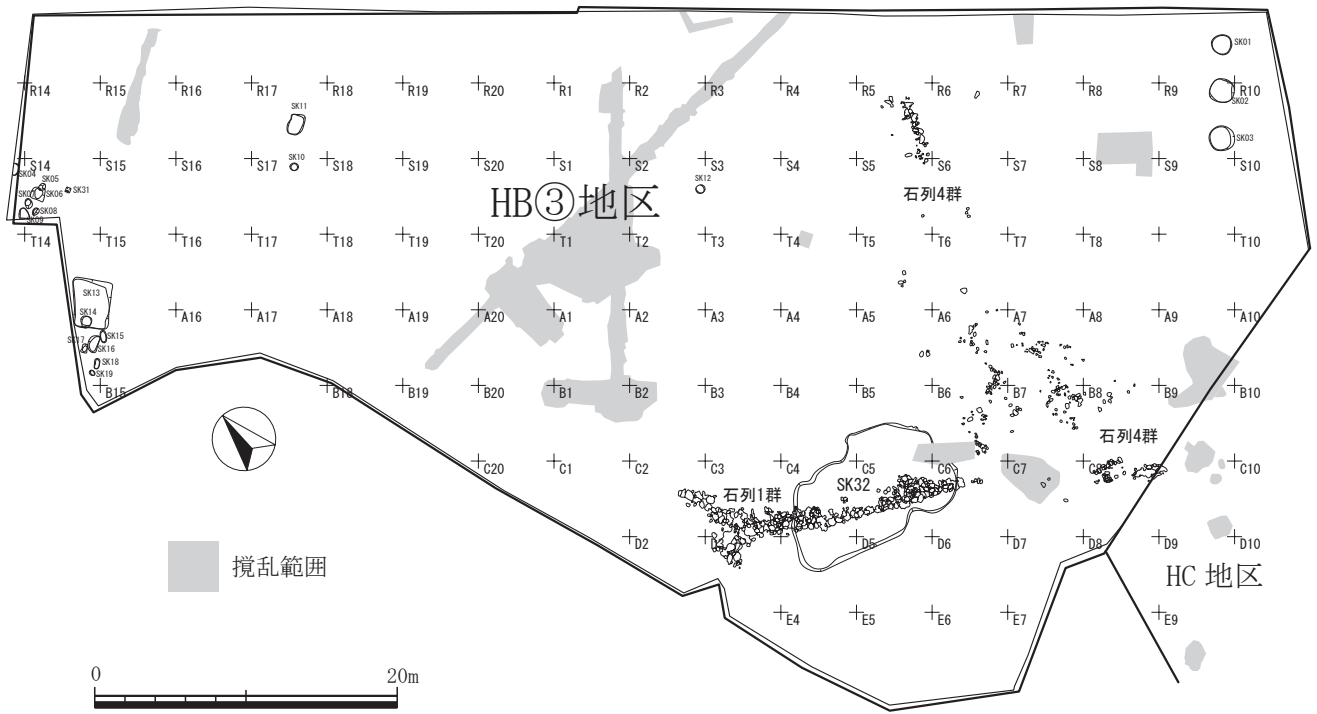


第44図・図版24 耕作関連遺構 畦畔5

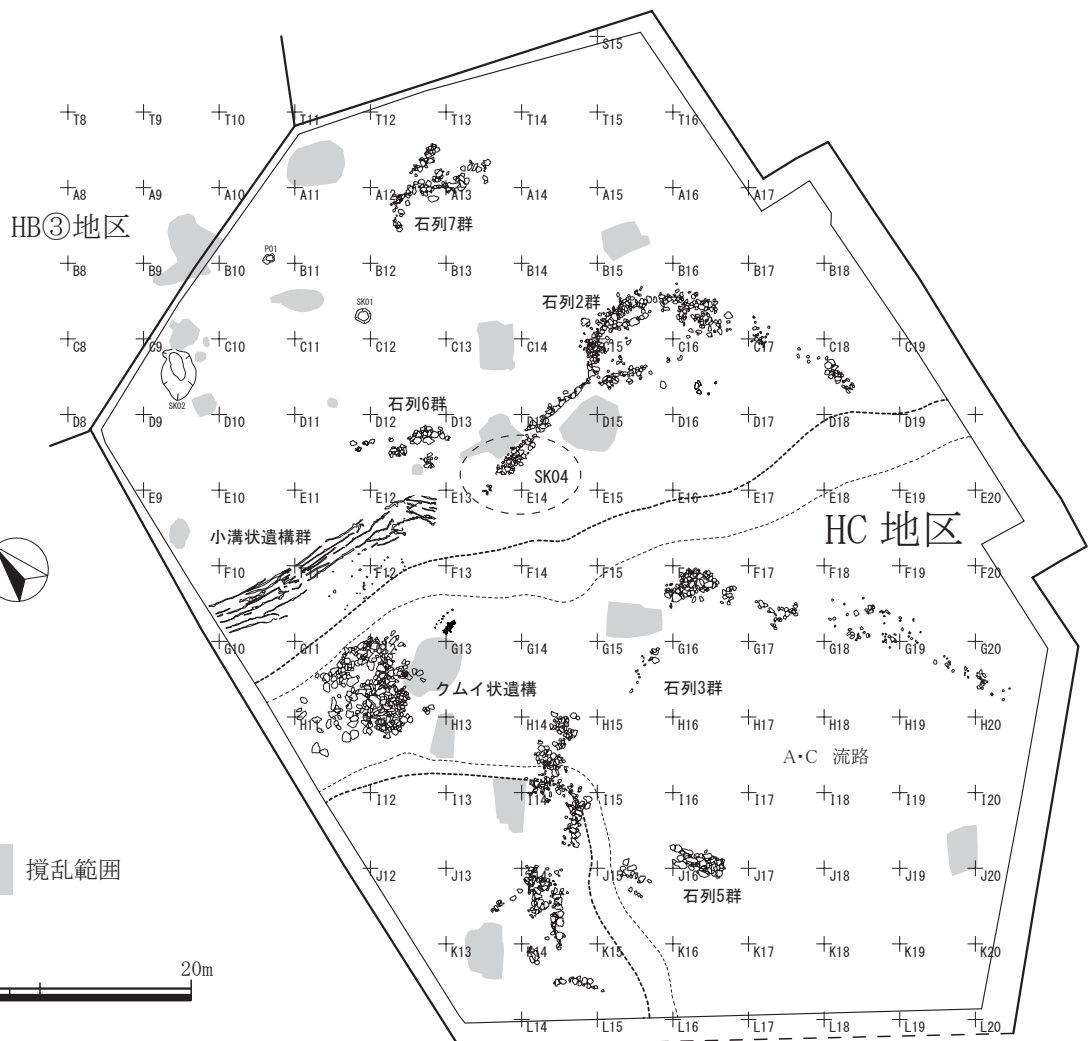
註：第42図の模式図については、佐藤（1999）242頁・第94図を基としてデジタルトレースを行い、本項の内容に合わせて省略等の加工をした。この内容を参考にしつつ、図右半においては筆者の想定を新たに作成し、並置させている。

3. 近世の遺構（第45・46図）

耕作域ではⅡa・Ⅱb層直下において、近世の遺構群を確認した。これらの遺構は大別することができ、一方はⅡb層類似の埋土を持つ土坑群、もう一方は調査区全体にわたって構築される石列群とその関連遺構である。『平安山原B遺跡』・『平安山原A遺跡』における知見から、前者をより新しい遺構として捉えることができるが、全ての遺構を峻別することはできなかった。



第45図 HB③近世面 検出遺構配置 (S=1/500)



第46図 HC近世面 検出遺構配置 (S=1/500)

石列群及び関連遺構

石列遺構は遺構番号の再整理の結果、7群に大別した。文字通り礫が列状をなすもの他、「石込め」或いは「石敷き」と表現した方が妥当なものも含まれる。畠の区画や土留めの性格が考えられるが、検出範囲の広さや規模から、やや大掛かりな土木工事であったと捉えることができよう。

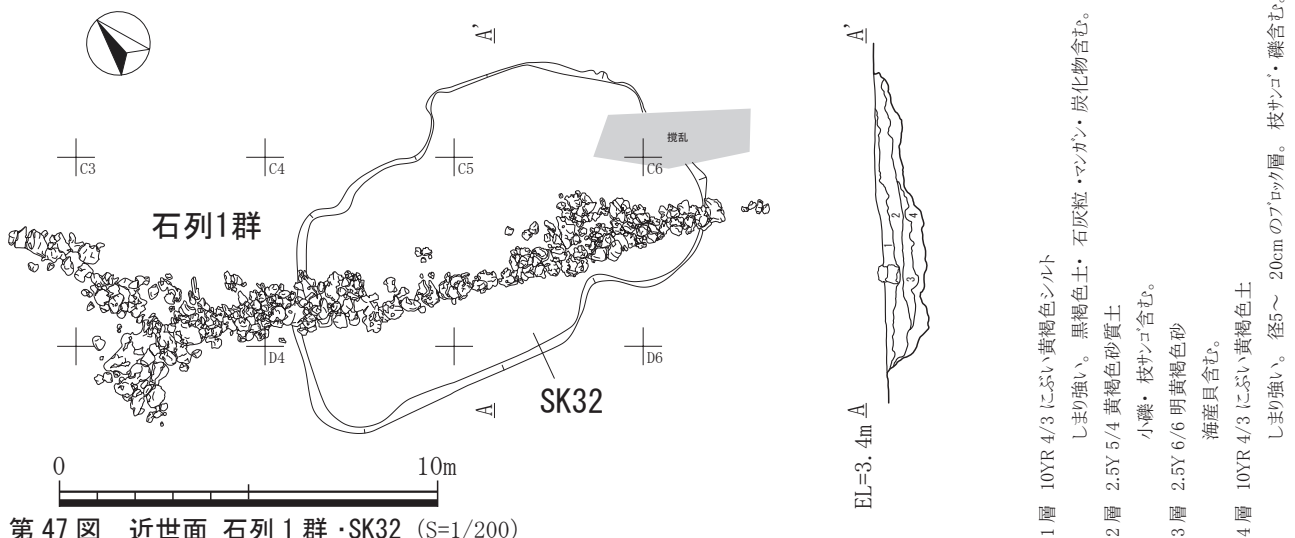
なお、混乱を防ぐために、整理段階で遺構番号の統合・付け直しを行った。現場調査段階に付した旧遺構番号等は第8表を参照されたい。

第8表 近世面 石列一覧

遺構名	地区名	旧遺構番号
石列1群	HB③	SL02
石列2群	HC	石列6
石列3群	HC	石列1～4
石列4群	HB③	SL01・06～08
石列5群	HC	石列5
石列6群	HC	石列7
石列7群	HC	石列8

○石列1群・大型土坑 (HB③-SK32) (第47図、図版25・26)

HB③南西の浜堤部にて、西北西-東南東に走る石列を検出した。検出長は約18.5mである。ほぼ平行・直角方向に走る石列4群とは関連性が感じられる。耕作地の区画である他に、原地形で最も高標高地に立地していることから、道路の区界であった可能性も考えたい。この石列直下で検出されたのが、大型土坑 (SB-SK32) である。当初この両者は、たまたま重複する異なる時期・目的の遺構として扱っていたが、HCでも類似した事例が確認されたため、石列構築にあたって何らかの関連性があるものと捉えられるようになった。土坑は、平面規模は11.8×7.4m、深さ約1.1mと、今回報告する土坑では最も大型である。埋土は4分層され、最下層にはブロック土が混じる等、堆積に人為性が感じられる。陶磁器片・土器片が出土した。



第47図 近世面 石列1群・SK32 (S=1/200)



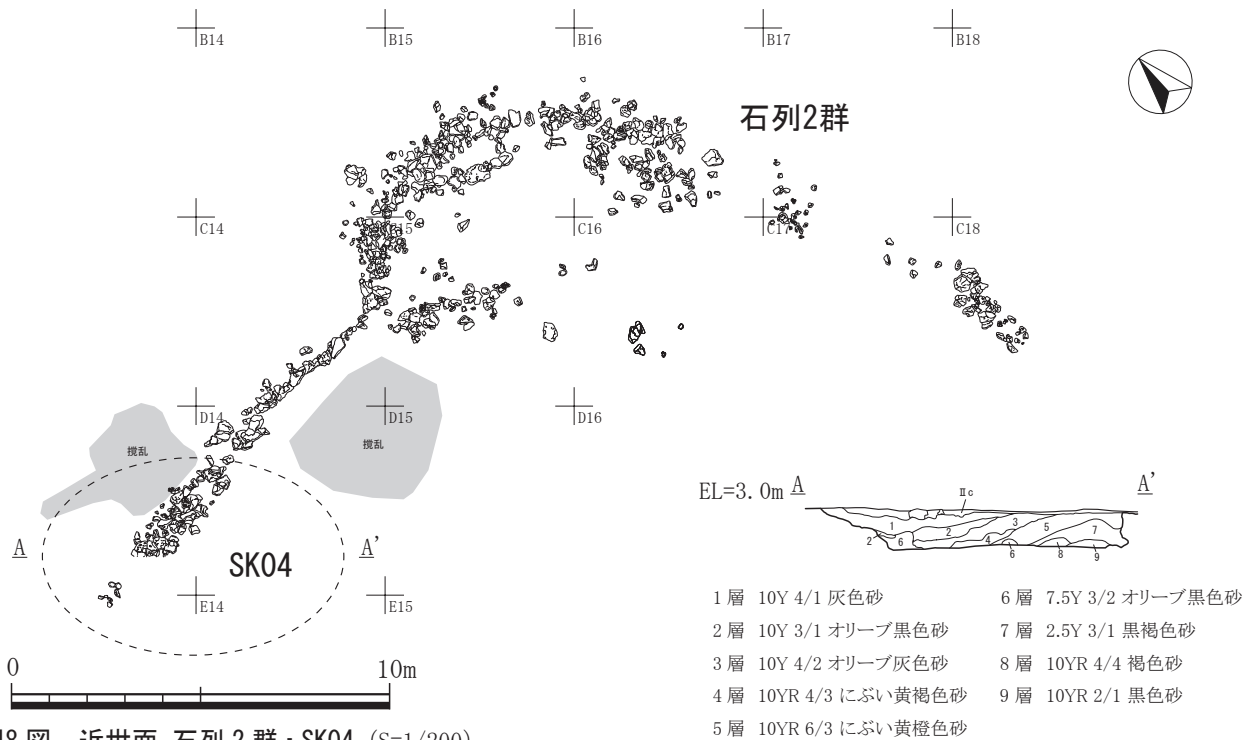
図版25 石列1群 検出 (西より)



図版26 SK32 断面 (南東より)

○石列2群 (第48図、図版27・28)

HC北側のⅡb層直下にて、緩やかな「L」字を呈する石列を検出した。東西列で約19m、南北列で約13mを測る。石列検出面上上下はⅡc層として捉えることができるが、C14グリッド付近の同層上面ではウシ蹄痕が集中する箇所もあった。「L」字屈曲部では、石列が楕円を描くように二股に分かれている。また、石列西端をかすめるように設定されたベルト5において、石列直下の土坑状の掘り込みが確認されている。平面検出ができないまま掘削が進んでしまったため平面形状は不明であるが、土層断面上では長さ約8m、深さ約1mを測る大型のものである(推定平面範囲を破線で図示した)。石列1群と状況が酷似するため、同様の事例として報告する。



第48図 近世面 石列2群・SK04 (S=1/200)



図版27 石列2群他 検出 (南東より)

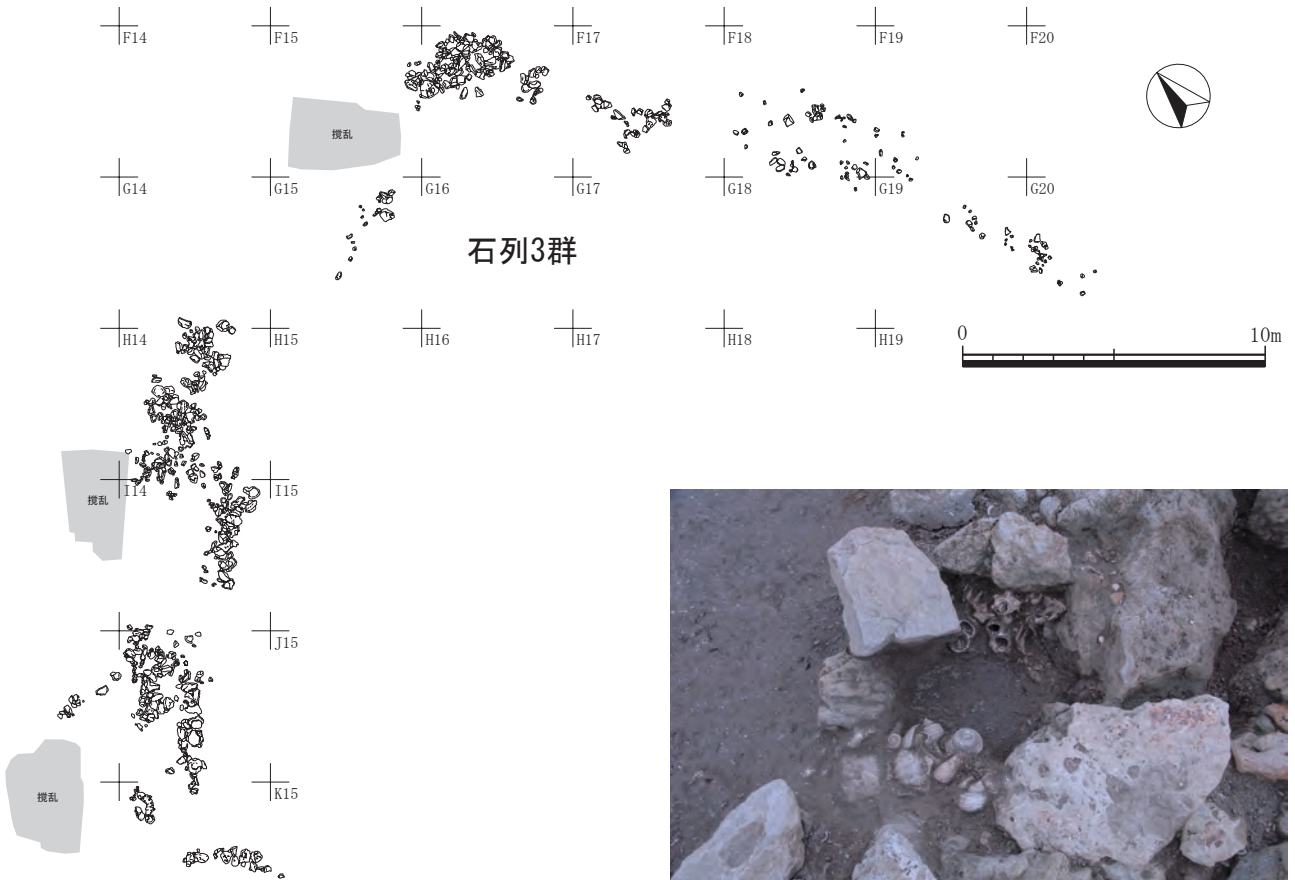


図版28 SK04 断面 (東より)

○石列3群 (第49図、図版29～31)

HCで最初に検出された遺構である。石列2群同様、全体として「L」字を呈しており、東西列で約29m、南北列で約21mを測る。列の方向や「L」字屈曲部に礫が集中する傾向も、石列2群に類似しているが、本遺構がより低標高地に立地し、大半がA流路範囲内に含まれる。両者

の各辺間距離は概ね14~15m、検出標高差は概ね20~50cmである。礫間に食料残滓と思われる海産貝の集積がみられる箇所もあった。



第49図 近世面 石列3群 (S=1/250)



図版29 礫間の貝集積 検出 (南西より)



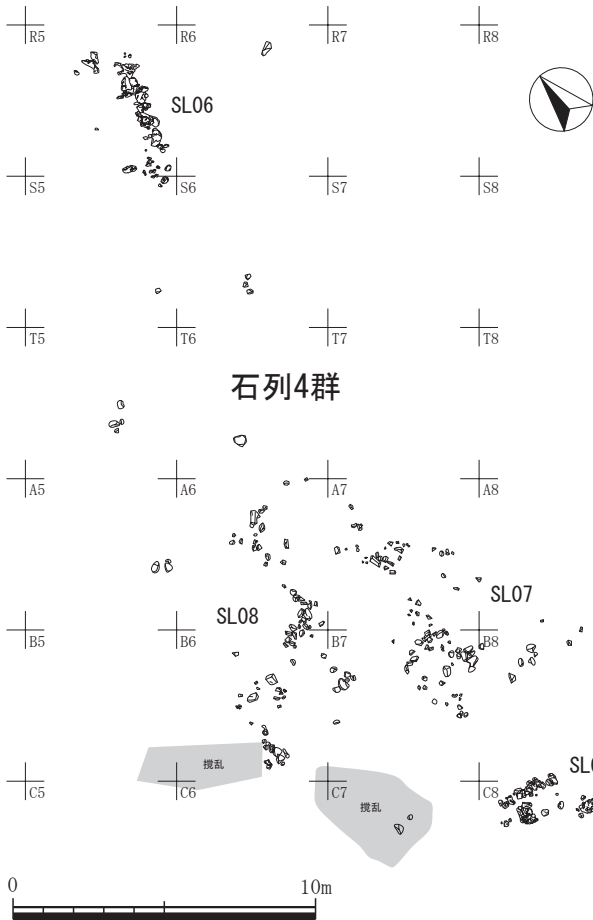
図版30 石列3群 検出 (東より)



図版31 石列3群 検出近景 (東より)

○石列4群 (第50図、図版32・33)

既に述べた通り、いずれの石列も石列1群との関連性が考えられる。規則性が感じられるが散在するため、便宜上現場段階の遺構番号も使用する。SL01は西北西-東南東に走り、検出長は約4.6mを測る。約1mの間隔をもって2条が平行しているようにも見えるため、道路の痕跡であった可能性もある。礫が散在するSL07・08も、同様に互いが並走しているように感じられるが、その間隔は約2.4mと広く、HB③-SL01に対して直角を向く。このSL07の北側延長上にSL06が走り、両者を合わせた検出長は約25mにも及ぶ。大畔上の通行路であったか。



図版 32 石列 4 群 -SL01 検出 (西より)

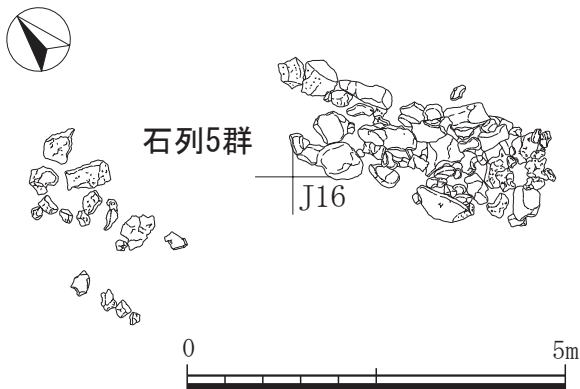


図版 33 石列 4 群 -SL06 検出 (東より)

第 50 図 近世面 石列 4 群 (S=1/250)

○石列5群 (第51図、図版34)

石列3群に囲まれるようではあるが、一連の石列をなさない一群である。検出されたのがIV層上面であり、同層を掘り込んで礫を配置しているため、他の石列との明らかな検出レベル差が認められる。これは構築時期差とも考えられるが、東側のまとまりには方向性が認められる。直方体に切石されたサンゴ礫を両サイドに立てるように配置し、人頭大の岩礫で間隙を埋めて平坦化しており、他の石列に比べ丁寧な造りでもある。遺物は出土していない。

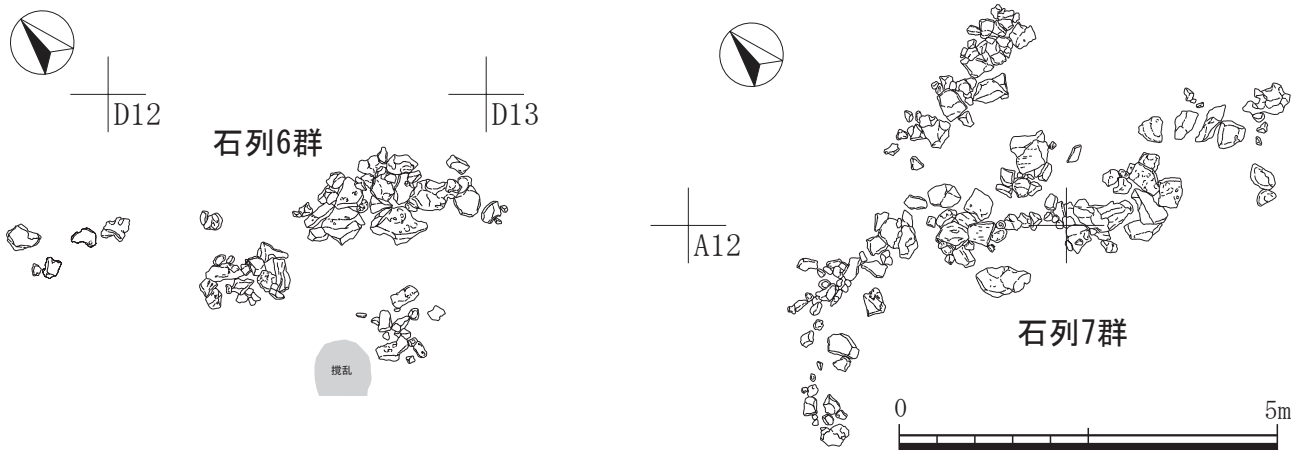


第 51 図 近世面 石列 5 群 (S=1/100)

図版 34 石列 5 群 検出 (東より)

○石列6・7群 (第52図)

HCでは更に2群の石列が検出されている。石列6群は前述した石列2群近くに位置し、何らかの関連が考えられるものの判然としない。石列7群についても、北側に石列2群に平行するようなラインが確認できるが、その他の礫とのレベル差が大きいため、石列下部に土坑状の掘り込みを伴っている可能性もある。石列7群からは青磁・染付片が出土している。

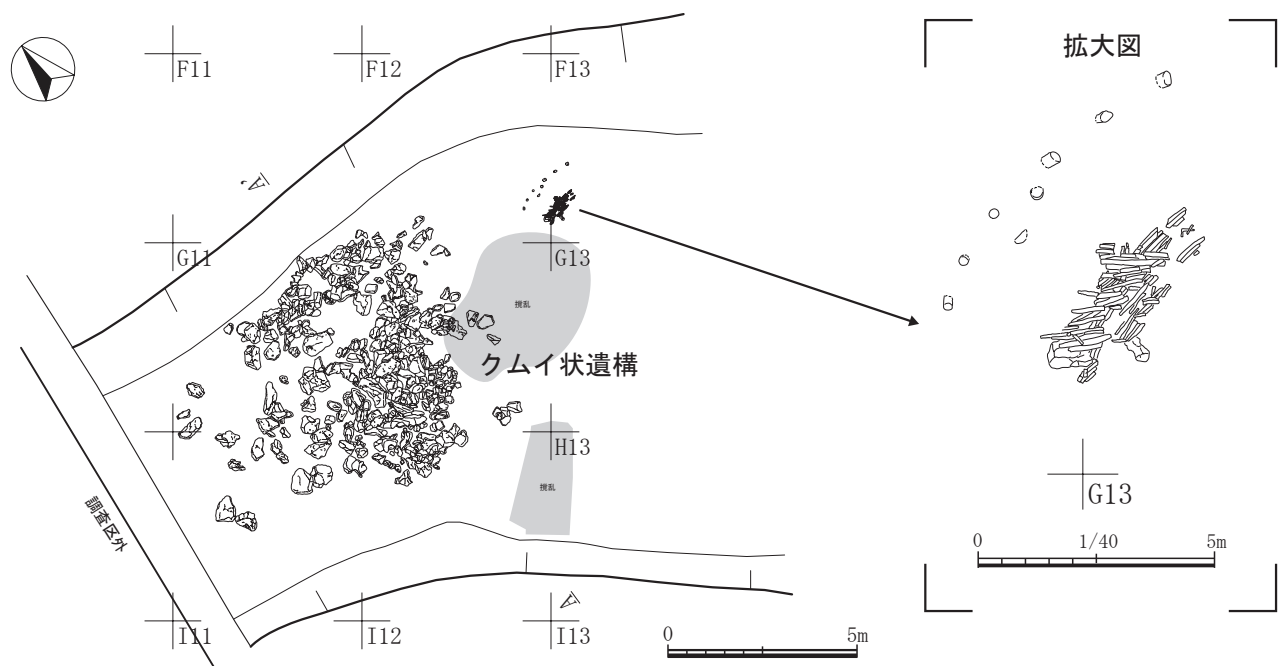


第 52 図 近世面 石列 6・7 群 (S=1/100)

クムイ状遺構 (第53・54図、図版35～38)

C流路の掘削中、人為的に集積された大量の礫を検出した。集積礫の殆どが石灰質砂岩であった。ビーチロック直上に方形の基礎部分を構築し、その後人頭大の礫で間隙を埋めている。基礎部分に比べて上部礫の配置が乱雑であるが、崩落して原位置を保っていない可能性もある。

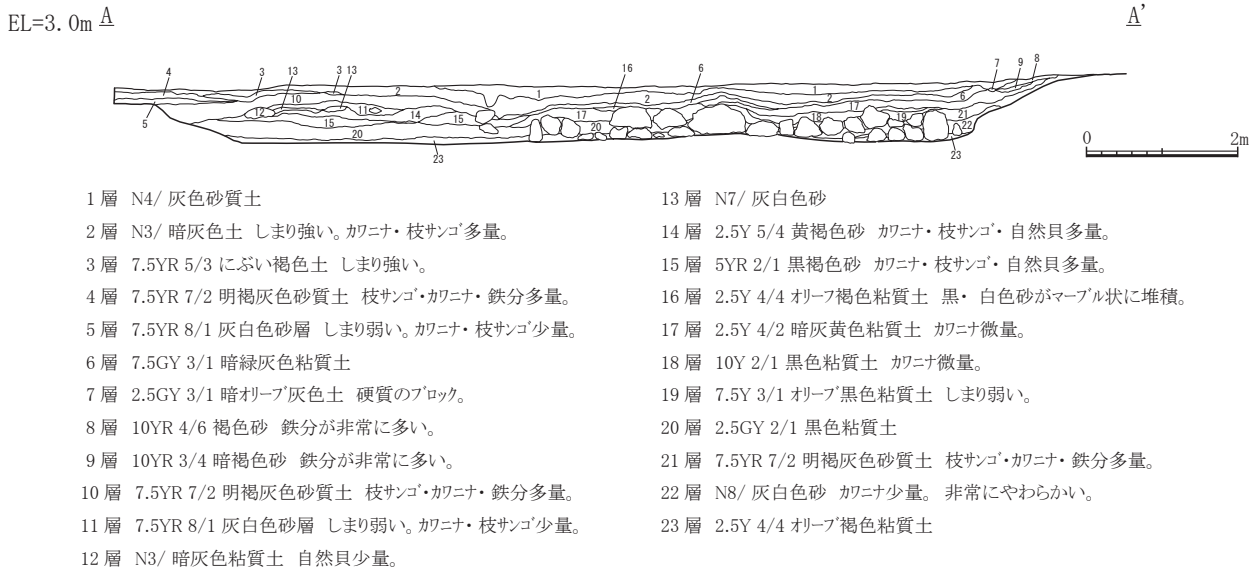
本遺構構築当時、C流路は開口していたものと思われる。その意味においては、前述の石列遺構より古い段階のものと言えよう。規模・構造から、洗い場（クムイ）として利用されたも



第 53 図 近世面 クムイ状遺構 平面 (S=1/200)

のと考え、「クムイ状遺構」という名称を充てた(クムイは方言で池の意)。

集積礫の東側では、列状に並んだ木杭と植物質(竹?)の粗い編物が検出された。杭に柵(しがらみ)を施してクムイへ降りるためのステップにしたか、或いは水止めに関わる構造があったことが考えられる。



第54図 近世面 クムイ状遺構 断面 (S=1/100)



図版35 クムイ状遺構 検出 (南西より)



図版36 クムイ状遺構 断面 (東より)



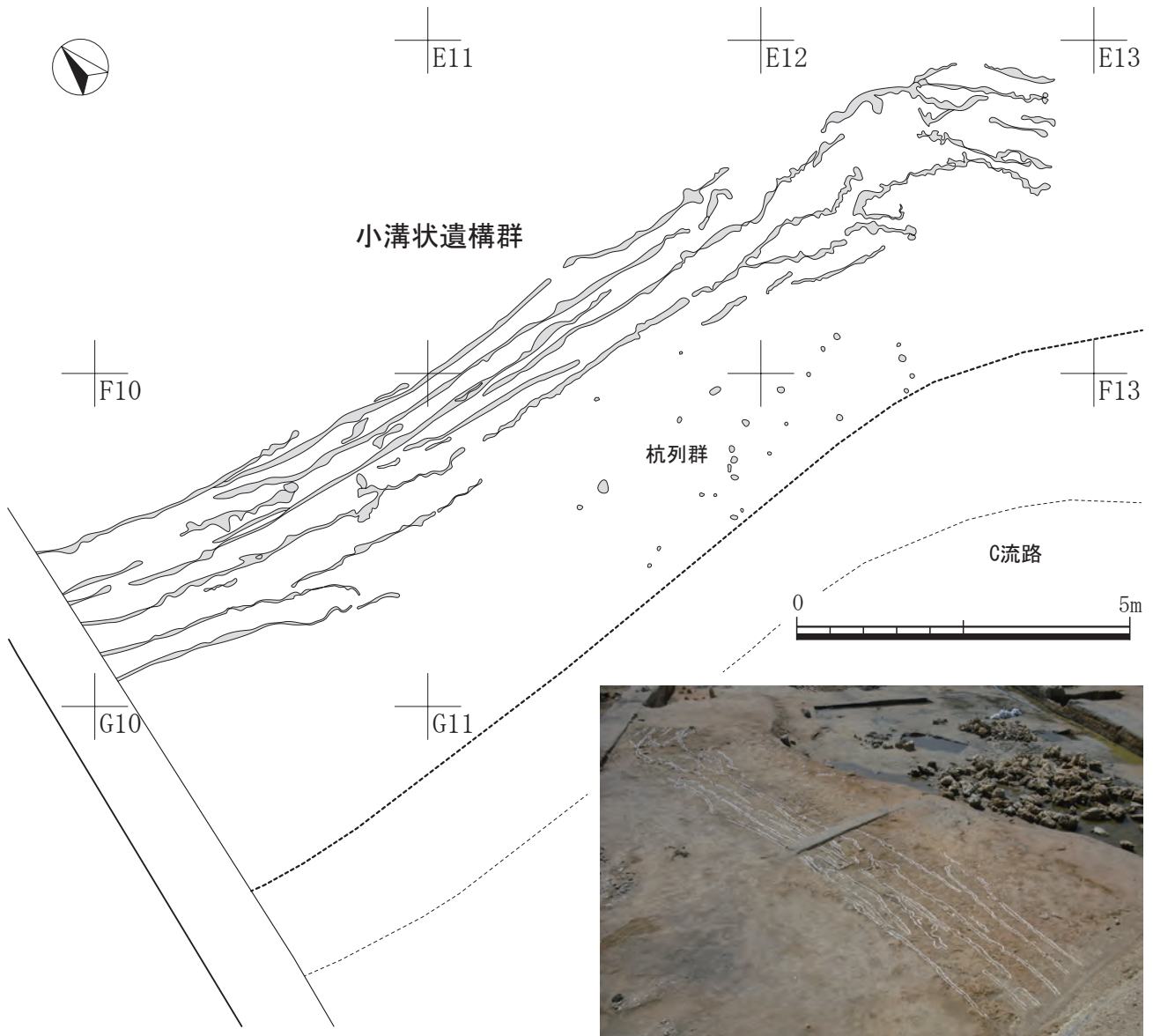
図版37 木杭と編物 検出 (北より)



図版38 編物 検出 (北より)

小溝状遺構群 (第55図、図版39)

HC西側浜堤上にて、やや不規則であるが並走する黒褐色土の小溝を検出した。プランが明瞭なもので22条を数え、各々の大まかな間隔は30cmほどである。ピッチの長いものが含まれることから、牛馬に犁を引かせた耕起の痕跡と考えられる。また、南側にも数条並びそうな杭列群が検出されている。帰属時期は不明であるが、石列2群と同方向に走っていることや石列群と切り合いが見られないことから、本遺構面のものとして取り扱った。しかし、既述したグスク期の溝や建物址とも方向軸が似通っていることも留意しておきたい。また、全体として細長い単位を示していることが、地割に関連する事象であるのかも今後検討すべき課題である。

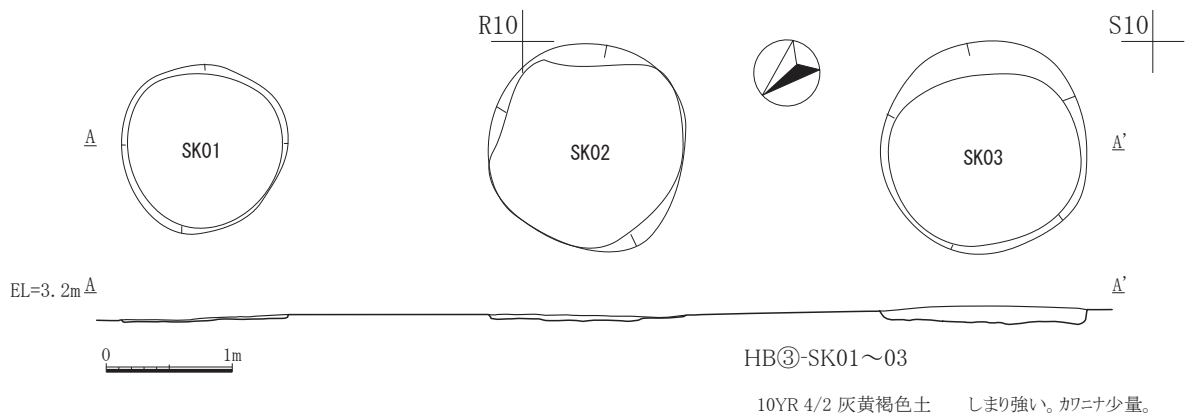


第55図 小溝状遺構群 (S=1/100)

図版39 小溝状遺構群 検出 (北西より)

土坑列 (HB③-SK01~03) (第56図、図版40・41)

HB③東隅において、1列に並ぶ3基の土坑が検出された。いずれもⅡb層由来の埋土を持ち、平面規模の割に非常に浅いことも共通する。構築目的は不明で、遺物も出土していない。



10YR 4/2 灰黄褐色土 しまり強い。カワニナ少量。

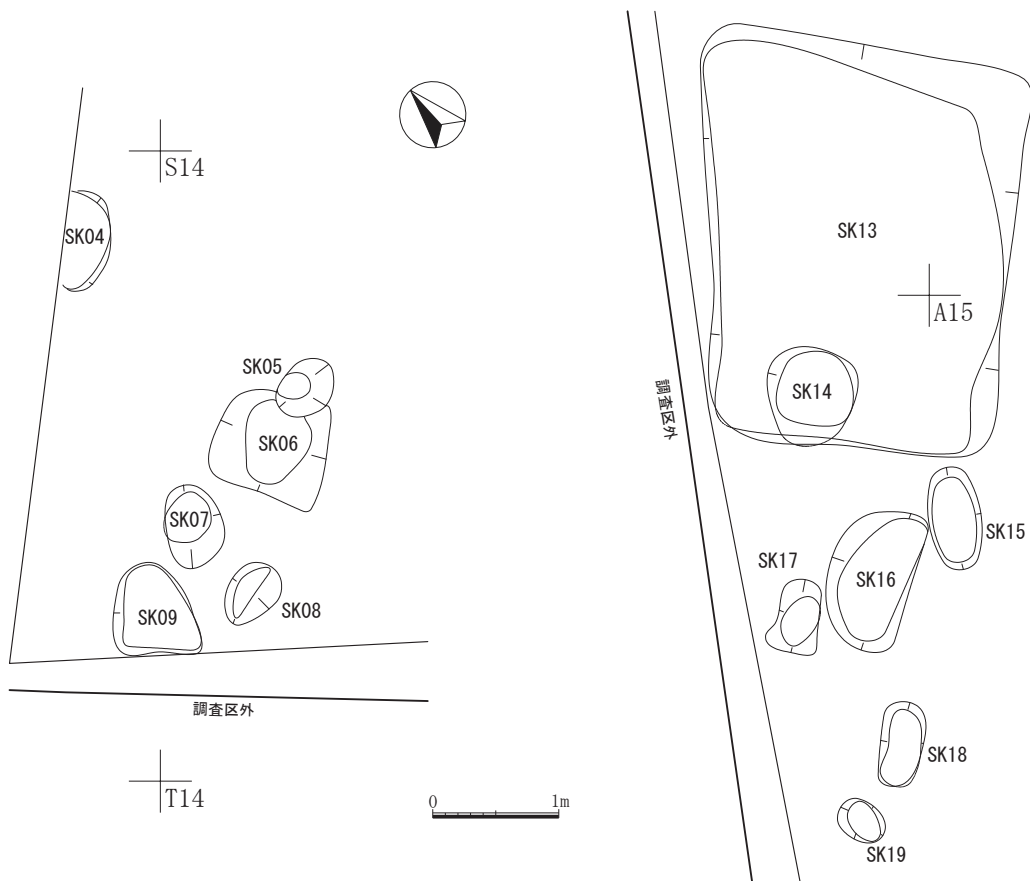
第 56 図 近世面 土坑列 HB ③-SK01 ~ 03 (S=1/60)



図版 40 土坑列 検出遠景 (東より)



図版 41 HB ③-SK01 完掘 (北より)



第 57 図 近世面 土坑群 HB ③-SK04 ~ 09 (左)、HB ③-SK13 ~ 19 (右) (S=1/60)

土坑群 (HB③-SK04～09・13～19) (第57図、図版42・43)

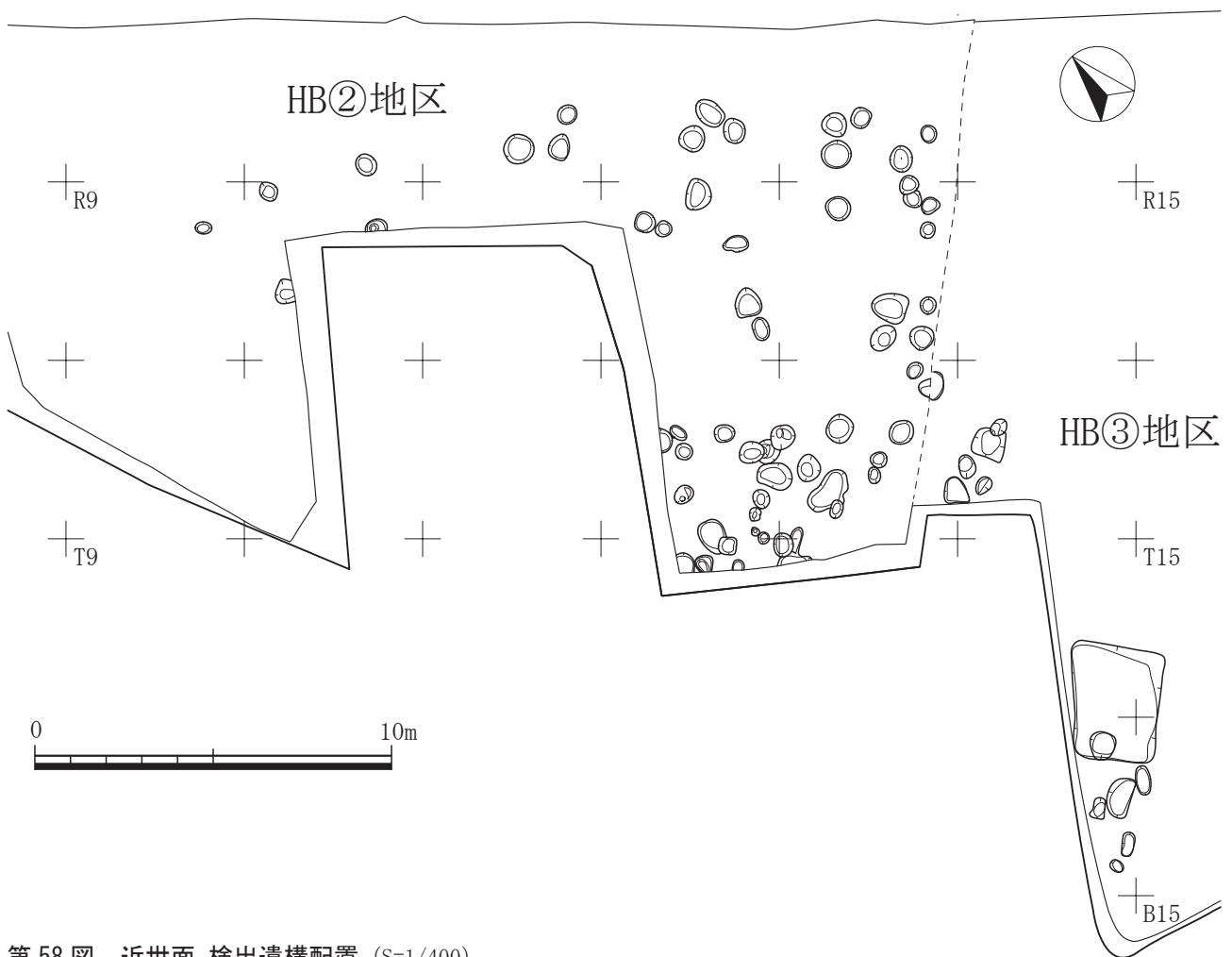
HB③北側に12基の土坑が密集して検出された。前述の土坑列と同様、Ⅱb層由来の埋土を持つ。配置や形状に規則性が認められなかったが、『平安山原B遺跡』で報告されたHB②口地区土坑群と類似した埋土をもつため、第58図にて合わせて図示した。



図版 42 HB③-SK04～09 検出 (南東より)



図版 43 HB③-SK13～19 完掘 (南東より)



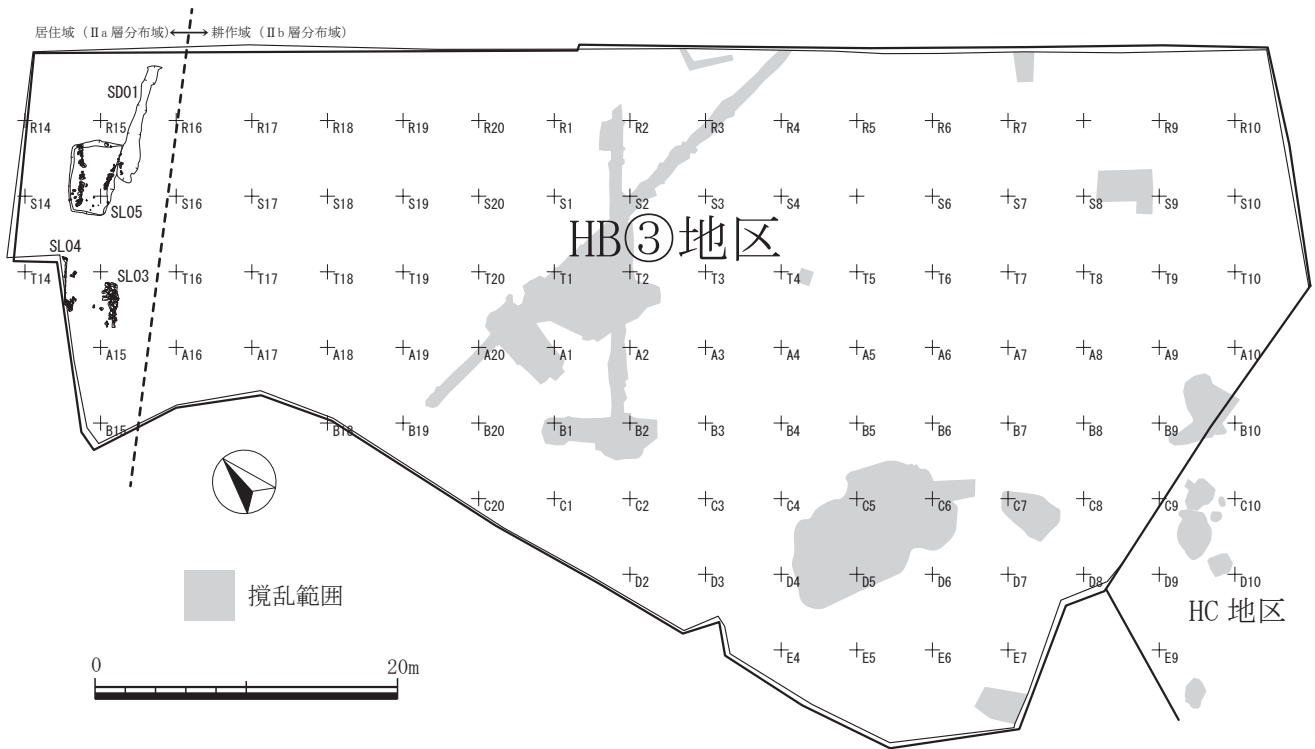
第 58 図 近世面 検出遺構配置 (S=1/400)

その他

HCで土坑2基 (HC-SK01・02) とピット1基 (HC-P01) を検出した。

4. 戦前の字平安山集落跡（第59図）

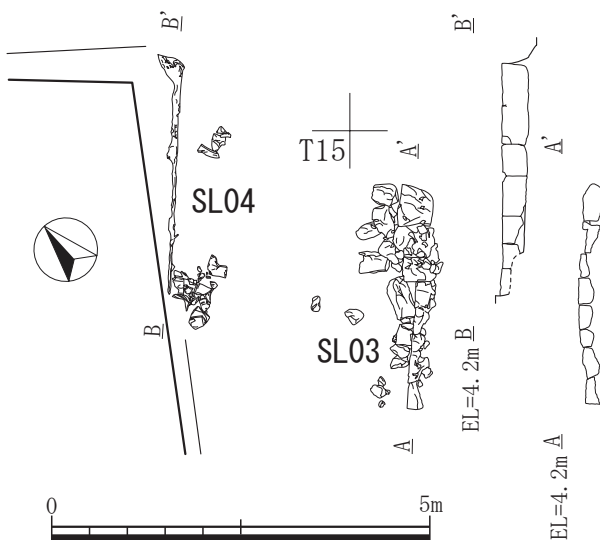
HB③北側の一角において、戦前の字平安山集落の一部が検出された。『平安山原A遺跡』（北谷町教委2016）にて詳しく報告された遺構群に連なるものであり、いずれも「祝女殿内小（ヌンドウルチグワー）」屋敷の外縁部に相当する。



第59図 近代面 検出遺構配置 (S=1/500)

石列遺構 (HB③-SL03・04) (第60図、図版44)

I層直下において、2条の石列 (HB③-SL03・04) が検出された。向かい合うように面を持っており、雨端と石塀であったと考えられる。当屋敷の屋根構造の記録は残っていないが、上面



第60図 近代面 SL03・04 (S=1/100)



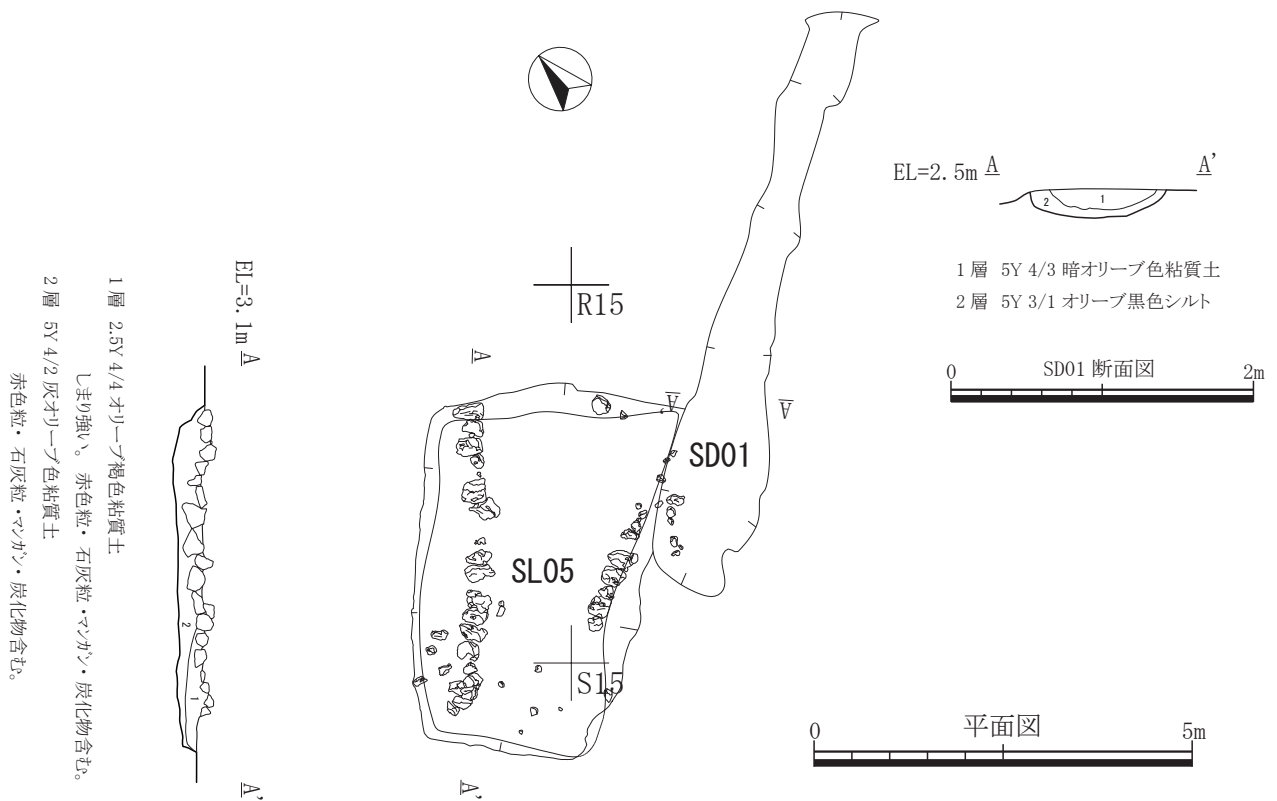
図版44 SL03・04 検出 (南東より)

に赤瓦が大量に残っていたため、瓦葺きであったと考えられる。屋号の通り平安山ノロを輩出する家の一門であり、戦前当時のノロは当家から出ていた可能性がある（北谷町教委2016）。このため、比較的裕福な家柄であったことも想像できる。

溝 (SD01)・石列遺構 (HB③-SL05) (第61図、図版45・46)

屋敷の北東にて、石列と同方向に走る溝 (HB③-SD01) を検出した。現場段階では攪乱として扱っていたが、祝女殿内小屋敷の外縁を構成する溝として認識できた。

この溝に僅かに切られる形で、長方形に近い掘方を伴う石列 (HB③-SL05) を検出した。列をなす礫は2条あり、掘方を埋めてから配置されている。検出経緯から当初は近世遺構として捉えていたが、掘方埋土から近代の移入品と思われる鉄製鎌が出土したことや石列の走行方向から、当屋敷に帰属するものとして報告する。



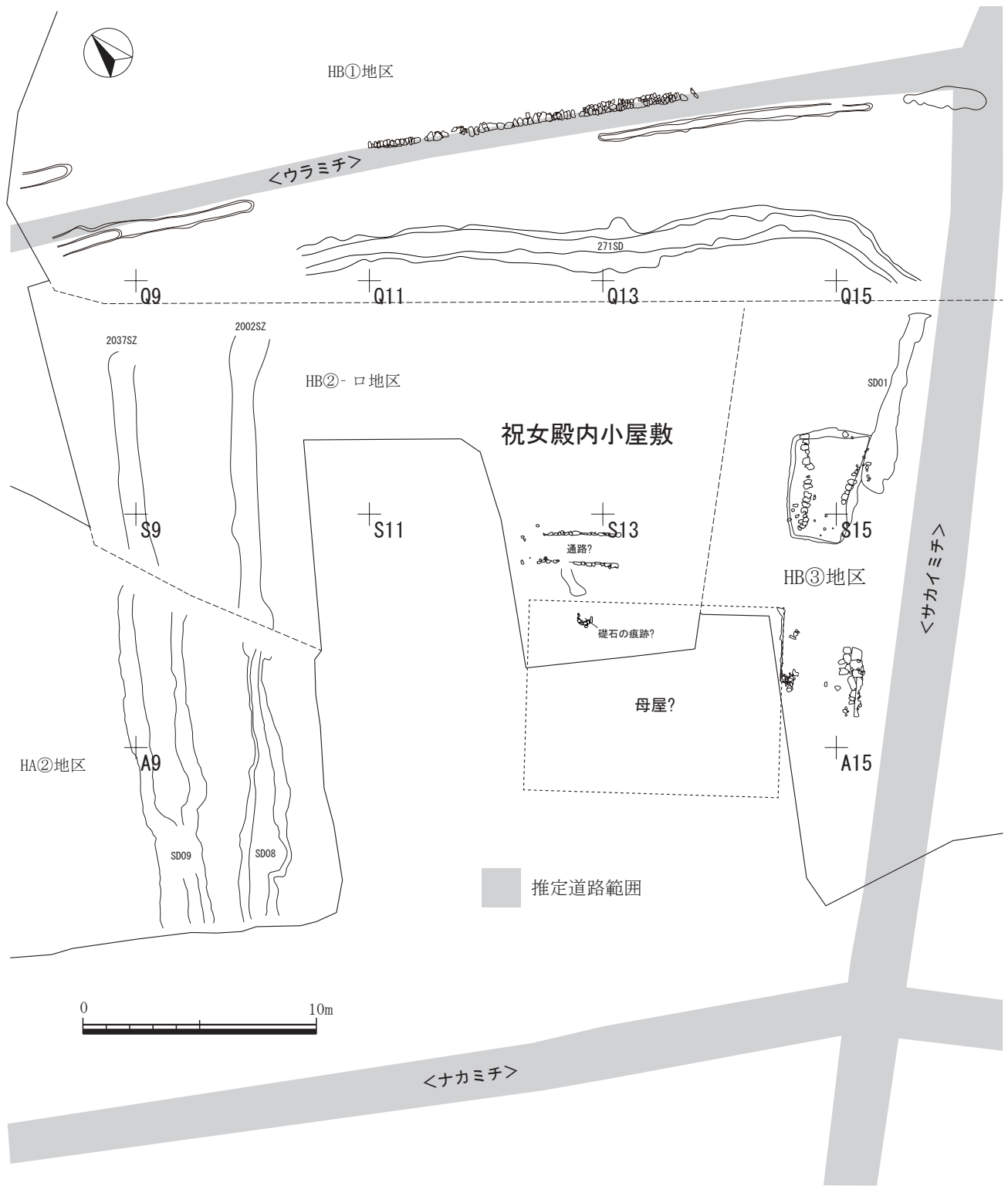
第 61 図 近代面 SD01・SL05 (S=1/100、1/50)



図版 45 SD01 検出 (南西より)



図版 46 SL05 検出 (東より)



第 62 図 近代面 祝女殿内小屋敷と周辺道路合成図 (S=1/250)

この祝女殿内小屋敷については、今回の調査区を含めて計4調査区にまたがっており、全体規模等が理解しづらかったため、第62図を作成した。SD08～2002SZ～271SDは一連の溝と考えられ、近代集落形成にあたっての区画設定の際に構築された可能性がある。2002SZ周辺からは大便器片が出土していることから、屋敷北側に便所があったことを窺わせる。SD09は隣の畠地との区境であろう。母屋は礎石建ちであった可能性があり、そうであれば上位に多くみられた赤瓦片とも整合する。

第9表 報告遺構一覧

第IV章第2節 項番号	地区	遺構名	性格・属性	時期
1	HC	貝層Ⅲ群-1・2層	廃棄貝層	くびれ平底期
	HC	貝層Ⅳ群	廃棄貝層	くびれ平底期
	HC	貝層Ⅴ群	廃棄貝層	くびれ平底期
	HC	貝層Ⅲ群-3層	自然堆積	5～6cか
	HC	貝層Ⅲ群-4・5層	廃棄貝層	大当原式期
	HC	貝層Ⅱ群	廃棄貝層	くびれ平底期か
2-(1)	HB③	SB01	建物址	グスク～
	HB③	SB02	建物址	グスク～
	HB③	SB03	建物址?	グスク～
	HB③	SK33～40、42・43	土坑	グスク～
	HB③	P01～5、7、10、14～18、20、25、 30～32、37、39、45、48、58	ピット	グスク～
	HB③	SS01・02	貝集積	不明
	HC	SK03	埋納土坑	14～15c
	HC	貝層Ⅰ群	廃棄貝層	グスク期前後
2-(2)	HB③	SD06	溝	10～11cか
	HB③	SX03	炭溜り	10～11cか
	HB③	SK41、44	土坑	グスク期
	HB③	P60、62	ピット	グスク期
	HB③	ウン蹄痕	歩行痕	10c～
2-(3)	HB③	SD04 + 木杭群	溝	グスク期
	HB③	SK20～30 + 木杭群	土坑列	グスク期
	HB③	畦畔1	疑似畦畔B	グスク期
	HB③	畦畔2	耕作域内非耕作範囲	グスク期
	HB③	畦畔3	耕作域内非耕作範囲	グスク期
	HB③	畦畔4	耕作域内非耕作範囲	グスク期
3	HB③	石列1群	石列	近世
	HB③	SK32	大型土坑	近世
	HC	石列2群	石列	近世
	HC	SK04	大型土坑	近世
	HC	石列3群	石列	近世
	HB③	石列4群	石列	近世
	HC	石列5群	石敷?	近世
	HC	石列6群	集石?	近世
	HC	石列7群	石込?	近世
	HC	クムイ状遺構	洗い場?	近世(古)
	HC	小溝状遺構群+杭列群	畠跡	近世
	HB③	SK01～03	土坑列	近世(新)
	HB③	SK04～14	土坑群	近世(新)
	HB③	SK10～12、31	土坑	近世(新)
	HC	SK01・02	土坑	～近世
	HC	P01	ピット	～近世
4	HB③	SL03・04	祝女殿内小屋敷	近代
	HB③	SD01・SL05	祝女殿内小屋敷	近代

第3節 出土遺物

出土した遺物は28種34,083点(第10表)で、その所属時期は貝塚時代後期・グスク時代・近世・近代～戦前と広い範囲にまたがる。層序はこれまでの平安山原地区の遺跡同様、貝塚時代後期～戦前まで継続的に生活していたため、人為的な攪乱を受けている。特に基盤は砂地ということもあり、攪乱を受けた上層の遺物が下層に紛れ込んだ可能性が高く各々の時期の遺物包含層を把握するのは難しかったが、これまでの報告書と同様、遺物の平面分布と層を加味しながら、各時期の遺物の分析を行った。HCでは貝塚時代後期に属する遺物が主体で、グスク土器、青磁や褐釉陶器は後期土器に比べ圧倒的に少なく、近代の遺物は散見できる程度である。また、貝層群が確認され、中でも貝層Ⅲ群では厚さ125cmの貝層が検出され、層位的に検討できる良好な資料と期待された。30,162点という膨大な量の土器は口縁部・底部および胴部を分類し、従来の大当原式土器(Ⅱ類)やアカジャンガー式土器(Ⅳ類)の層位的変遷を試みた。HB③では貝塚時代後期の遺物のほか、グスク・近世・近代遺物の出土する割合がHCに比べて高い。平面分布をみると貝塚時代後期に属する遺物はHC側に多く、グスク時代の土器や中国産陶磁器などは西(HA④)側に得られ、近世・近代の遺物は平安山集落の端(HA②)にあたる北側に集中している(第10図)。以下、貝塚時代後期から近代とほぼ時代順に遺物を報告する。各々の遺物は出土量と平面分布、主なものを図化し、観察一覧を示す。

第10表 遺物 出土量

年代	遺物	貝塚時代後期				グスク時代・近世・近代														戦前	合計										
		土器	石器	貝製品	骨製品	グスク土器	カマイヤキ	滑石製品	白磁	青磁	染付	色絵	褐釉陶器	タイ産半練	銭貨	木製品	鉄製品	瓦質土器	本土産陶器			本土産磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	鍛冶関連	円盤状製品	瓦	軽石		
HC	I	237	2	11		3				3	2		3					1		1	7	8	18	4		1	9	310			
	II	149	2	6		1				9	1		7													1		176			
	IIc	遺構	90	2	12								1			1													106		
	III		111	5	20		2			2																			141		
	IV		7		1											1													8		
	V	後期層	5,866	95	619	2	97	5	1	2	29	4	1	16		1			1	1			1		4			1	6,746		
		貝層I群			2																									2	
		貝層II群	a	24																										24	
			b	84		4																									88
			c	176		21																									197
			d	110	1	2																									113
			e	30																											30
			f	217		18																									235
			g	66		2																									68
			h	191		5																									196
			i	150		7																									157
		-	6		9																									15	
		貝層III群	1	800	6	32		8																						846	
			1a	202	1	11		3																							217
			1b	908	2	36																									946
			2	3,910	14	139		5																							4,068
			3	872	16	63																									951
			4	859	3	57	1																								920
			5	4,099	73	460	3	1																						4,636	
		-	188	3	56	1	5																						253		
	貝層IV群	63	1	8		4																							76		
	貝層V群	226	1	16		7																							250		
	不明	1,045	34	125	1	44	2	1	10	25	14	1	24				4	10	12	21	4	15					4	1,396			
	HC 小計	20,686	261	1,742	8	180	7	2	12	68	21	2	51	0	2	1	1	1	6	17	20	40	8	19	2	9	5	23,171			
HB③	I	103	1	6	1	1			3	8	13		4					6	32	58	57	13	1	5	59			371			
	IIa	遺構	2	1	1				7	3	10							2	11	53	71	10			6				177		
	IIb		35	1	2		2			3			1								4	3	2	2	2	29			86		
	IIb	遺構	1		7					1											1	2							12		
	IIc	遺構	147	3	2		9	1	1	12	1		4					3	2	2	6			16	1			210			
	III (V)		1,569	21	118		31	1		2	16	9		5	1					1	1	2		18					1,795		
	III	遺構	48	1																									49		
	IIIa		191	3	30	1	29	3		4	38	6		14				1	2	11	13		12			1		359			
	IIIb		380	13	25		55	1			7			2					1	1							2		489		
	IIIc (V)		1,782	14	84		11	6			2			3					1	1	2						5		1,911		
	IIIc	遺構	12	1	40																								53		
	IIId (V)		4,029	18	103		1	4															5						4,160		
	IIId	遺構	5																										5		
	IIIe		383	4																									387		
	IV		422				1										1												424		
V		2																										2			
	不明	365	3	24		7			1	2			2											1	7		7	422			
	HB③ 小計	9,476	84	442	2	147	16	0	18	92	39	0	35	1	0	2	1	0	15	52	132	154	31	56	14	103	0	10,912			
	HC+HB③ 合計	30,162	345	2,184	10	327	23	2	30	160	60	2	86	1	2	3	2	1	21	69	152	194	39	75	16	112	5	34,083			

(1) 土器

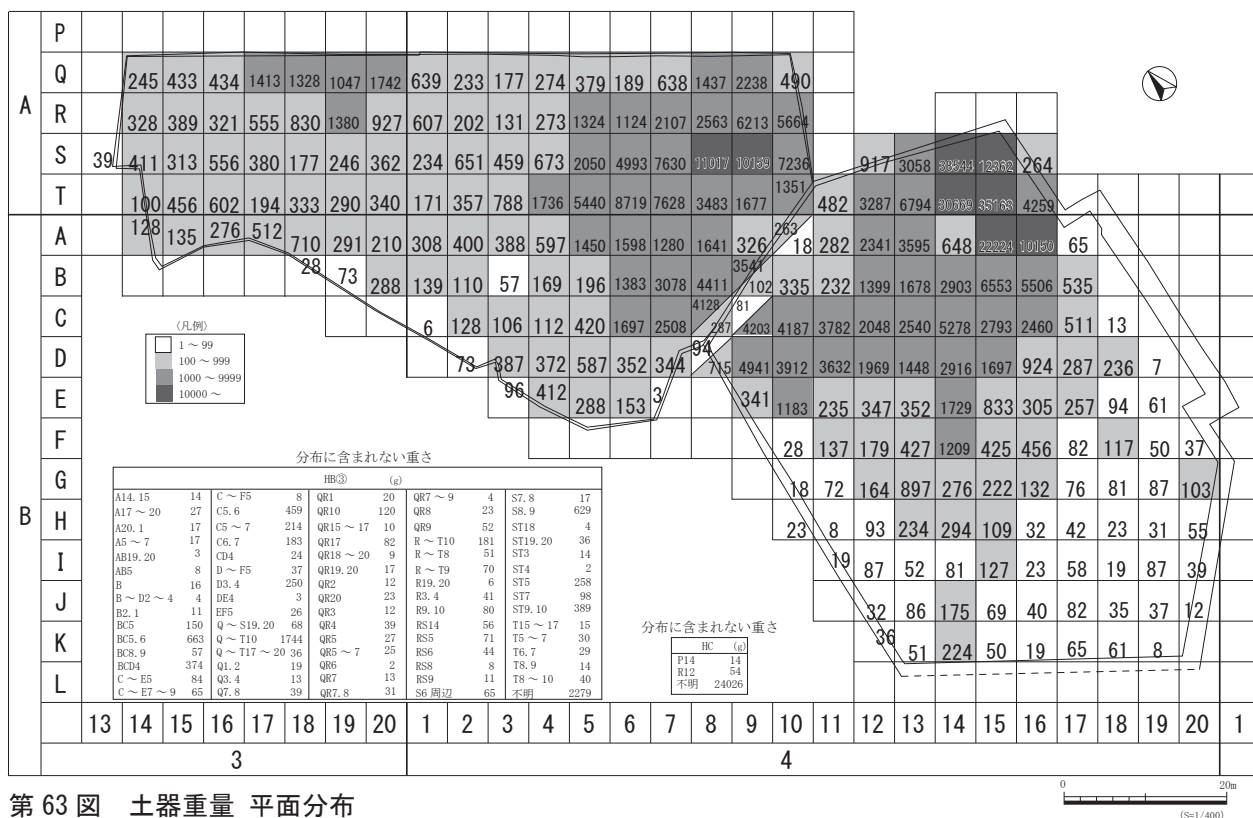
土器はHC20,686点、HB③9,476点、総数30,162点が出土した。出土量が多いため、2.5cm以下は報告から除外している。遺物整理の指標とするために注記時に重量を量り、第63図に土器の重量分布を示した。大半が貝塚時代後期の土器で、僅かに貝塚時代前・中期の土器と搬入土器が得られている。取上げ遺物や接合によって復元された土器は6個体で、その他にも形状の分かる破片が多数得られた。口縁部・胴部は、搬入土器、貝塚時代前・中期の土器、貝塚時代後期の土器（I～V類）に分類し、第11表に示した。底部は、図4のみが搬入であることから搬入土器の項で扱い、その他は全て貝塚時代後期の底部としてまとめた。

第11表 土器分類

〈搬入土器〉
〈在地土器〉
(1) 貝塚時代前・中期土器
(2) 貝塚時代後期土器
I類: 浜屋原式土器相当
II類: 大当原式土器相当
III類: II・IV類の中間タイプ 型式不明土器
IV類: アカジャンガー式土器相当
V類: フェンサ下層式土器相当

第63図の重量平面分布や第13表の口縁部出土量、第21表の胴部出土量から見ると、HCは貝層III群のあるS～A14～16辺りでの出土が多く、地形上、砂層のない南側からの出土は少ない。第IV章第1節の層序で述べたように、V層（後期層：以下V層で表記）は貝塚時代後期に相当する包含層と考えられ、数型式の土器が検出された。そのため、第64図に貝層III群及びV層出土の土器を層位別に示した。それからすると、貝層III群においては底部・口縁部・胴部とも尖底系土器が多く得られ、くびれ平底系土器は少ない。また前者は同群2・5層、後者は2層からの出土が多いなど層位的に違いが見られる。V層では数量的にまだ尖底系土器が多く出土するが、くびれ平底系土器も貝層群に比べると多く、大きな破片や数個体が復元出来る出土状況を見せる。

また、V層においては貝塚時代後期の土器以外にグスク土器97点、カムイヤキ5点、白磁2点、青磁29点、染付4点などが出土し、後世の攪乱行為を受けてグスク期の遺物が混ざり込んでいるものと考えられる。



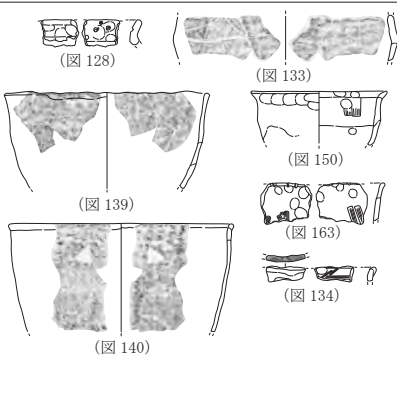
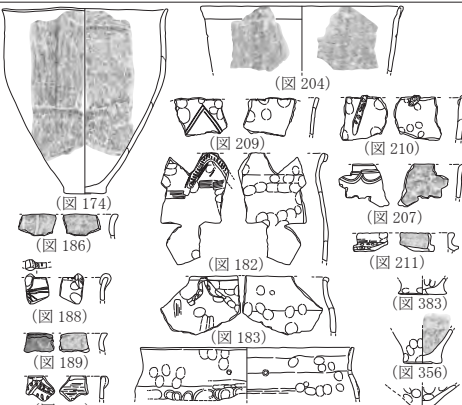

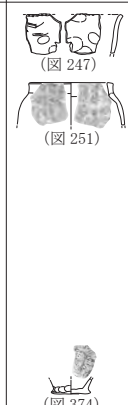

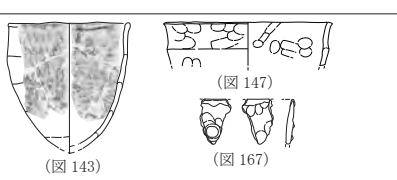



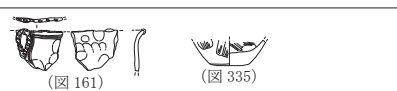

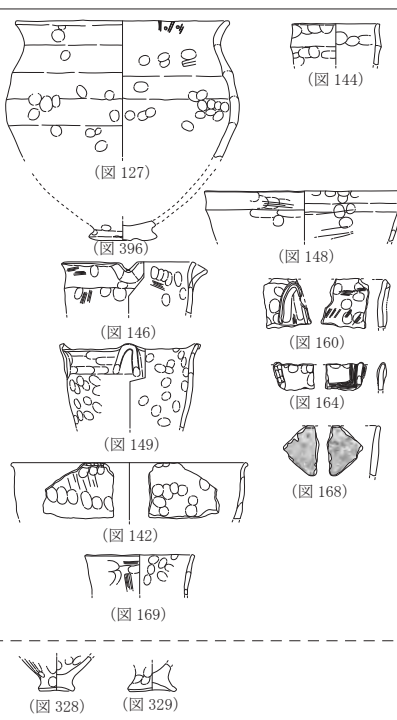

第63図 土器重量 平面分布

分類 層	搬入土器	貝塚時代					
		前・中期 土器	後期の土器				
			I類 鉢・甕・壺	A	B	II類 C D(壺)	
V層	 (図10) (図11)	 (図12) (図13)	 (図17) (図24)	 (図39) (図40) (図51)	 (図78) (図84) (図85) (図104) (図108)	 (図110)	 (図126)
	1		 (図57)		 (図118)		
	2		 (図55)	 (図86) (図98)	 (図125)		
	3	 (図3)		 (図301) (図305) (図324) (図315) (図294)	 (図79) (図102) (図278)		
	4	 (図6)		 (図47)	 (図82) (図101) (図276)		
貝層 Ⅲ群	 (図5) (1795±26BP)	 (図16) (図19) (図26) (図25) (図18) (図23) (図32) (図31) (図37) (図309)	 (図41) (図38) (図44) (図45) (図46) (図52) (図64)	 (図80) (図89) (図90) (図91) (図92)	 (図105) (図106) (図107) (図109)		
	5		 (図307) (図316) (図296) (図272) (図288) (図294)	 (図121)	 (図114)		

第64図 HC 貝層Ⅲ群・V層出土土器変遷

貝塚時代

後期の土器

Ⅲ類	Ⅳ類		Ⅴ類	
	A~C (鉢・甕)		D (壺)	A~C (鉢・甕)
 <p>(図 128) (図 133) (図 139) (図 140) (図 150) (図 163) (図 164) (図 183) (図 186) (図 188) (図 189) (図 212)</p>	 <p>(図 174) (図 182) (図 183) (図 191) (図 199) (図 204) (図 207) (図 209) (図 210) (図 211) (図 213) (図 214) (図 215) (図 216) (図 217) (図 218) (図 219) (図 220) (図 221) (図 222) (図 223) (図 224) (図 225) (図 226) (図 227) (図 228) (図 229) (図 230) (図 231) (図 232) (図 233) (図 234) (図 235) (図 236) (図 237) (図 238) (図 239) (図 240) (図 241) (図 242) (図 243) (図 244) (図 245) (図 246) (図 247) (図 248) (図 249) (図 250) (図 251) (図 252) (図 253) (図 254) (図 255) (図 256) (図 257) (図 258) (図 259) (図 260) (図 261) (図 262) (図 263) (図 264) (図 265) (図 266) (図 267) (図 268) (図 269) (図 270) (図 271) (図 272) (図 273) (図 274) (図 275) (図 276) (図 277) (図 278) (図 279) (図 280) (図 281) (図 282) (図 283) (図 284) (図 285) (図 286) (図 287) (図 288) (図 289) (図 290) (図 291) (図 292) (図 293) (図 294) (図 295) (図 296) (図 297) (図 298) (図 299) (図 300) (図 301) (図 302) (図 303) (図 304) (図 305) (図 306) (図 307) (図 308) (図 309) (図 310) (図 311) (図 312) (図 313) (図 314) (図 315) (図 316) (図 317) (図 318) (図 319) (図 320) (図 321) (図 322) (図 323) (図 324) (図 325) (図 326) (図 327) (図 328) (図 329) (図 330) (図 331) (図 332) (図 333) (図 334) (図 335) (図 336) (図 337) (図 338) (図 339) (図 340) (図 341) (図 342) (図 343) (図 344) (図 345) (図 346) (図 347) (図 348) (図 349) (図 350) (図 351) (図 352) (図 353) (図 354) (図 355) (図 356) (図 357) (図 358) (図 359) (図 360) (図 361) (図 362) (図 363) (図 364) (図 365) (図 366) (図 367) (図 368) (図 369) (図 370) (図 371) (図 372) (図 373) (図 374) (図 375) (図 376) (図 377) (図 378) (図 379) (図 380) (図 381) (図 382) (図 383) (図 384) (図 385) (図 386) (図 387) (図 388) (図 389) (図 390) (図 391) (図 392) (図 393) (図 394) (図 395) (図 396) (図 397) (図 398) (図 399) (図 400) (図 401) (図 402) (図 403) (図 404) (図 405) (図 406) (図 407) (図 408) (図 409) (図 410) (図 411) (図 412) (図 413) (図 414) (図 415) (図 416) (図 417) (図 418) (図 419) (図 420) (図 421) (図 422) (図 423) (図 424) (図 425) (図 426) (図 427) (図 428) (図 429) (図 430) (図 431) (図 432) (図 433) (図 434) (図 435) (図 436) (図 437) (図 438) (図 439) (図 440) (図 441) (図 442) (図 443) (図 444) (図 445) (図 446) (図 447) (図 448) (図 449) (図 450) (図 451) (図 452) (図 453) (図 454) (図 455) (図 456) (図 457) (図 458) (図 459) (図 460) (図 461) (図 462) (図 463) (図 464) (図 465) (図 466) (図 467) (図 468) (図 469) (図 470) (図 471) (図 472) (図 473) (図 474) (図 475) (図 476) (図 477) (図 478) (図 479) (図 480) (図 481) (図 482) (図 483) (図 484) (図 485) (図 486) (図 487) (図 488) (図 489) (図 490) (図 491) (図 492) (図 493) (図 494) (図 495) (図 496) (図 497) (図 498) (図 499) (図 500)</p>	 <p>(図 231) (図 232) (図 233) (図 236) (図 356) (図 374)</p>	 <p>(図 247) (図 251) (図 374)</p>	 <p>(図 256)</p>
 <p>(図 143) (図 147) (図 167)</p>	 <p>(図 214) (図 215) (図 216) (図 268)</p>	 <p>(図 237) (図 238) (図 242)</p>	 <p>(図 248) (図 379)</p>	
 <p>(図 161) (図 335)</p>	 <p>(図 227)</p>			
 <p>(図 127) (図 142) (図 146) (図 148) (図 149) (図 160) (図 164) (図 168) (図 169) (図 328) (図 329) (図 396)</p>	 <p>(図 187) (図 190) (図 213)</p>			

HB ③は遺跡全域にわたって土器が分布する状況である。重量分布や出土量から見ると、HCに近いS・T7～9からの出土が目立ち、次に南側のB・C8・9が多い。いずれもⅢd層・Ⅲ層（耕作土層）からの出土であるが、遺物はV層由来と考えられる。詳細は層序の項を参照されたい。

第13表の口縁部、第21表の胴部出土量を詳細に見ると、最も多いものはHC・HB ③ともⅡ類（大当原式土器）で、口縁部は約5割、胴部では7～8割を占める。口縁部で形式分類が出来ず、不明土器としたものも2～3割程度ある。有文・無文とも文様や胎土、混和材等の特徴からV類には相当せず、大半がⅡ～Ⅳ類に相当するものと考えられる。

第66図にはHC・HB ③から出土した土器の接合関係を示した。HCはV層での接合関係が目立ち、HB ③は耕作土層故か、25～30m程離れて接合が出来た遺物や、層が異なって接合出来たものなどが見られる。

また、HC 貝層Ⅲ群4層からは尖底の鉢形土器（図101）、2層から明瞭なハケ目調整を持つ泥質の土器（図143）が復元出来た。後者はハケ目痕が明瞭で、胎土等からV類（フェンサ下層式土器）が考えられたが、底部は尖底が想定されることから形式不明土器として扱った。くびれ平底系土器に多く見られるハケ目痕が、本遺跡の形式不明土器やⅡ類でも割と見られることから、移行期或いは並行期の土器であろうか、それともⅣ類（アカジャンガー式土器）の範疇で捉えるべきか、今後器面調整等に十分な注意を払う必要がある。

以下、搬入土器、在地土器の貝塚時代前・中期の土器、後期の土器の順で記述する。

＜搬入土器＞

搬入土器は僅かの出土であることからまとめて記述する。出土量は第12表に示し、HC7点、HB ③5点と計12点が得られた。図1～4は縄文時代中期～晩期に属する資料で、この時期に相当する層が本遺跡では見当たらないことから、紛れ込みと考えられる。

第71図1～11に11点を図示した。図1・2は胎土や器厚、文様などが本町の伊礼原遺跡（国指定外・2014）等で出土した搬入土器に類似し、縄文時代中期の時期に相当する。本遺跡出土の2点は図1がHB ③ S8 Ⅲd層、図2はHB ③ T7 Ⅲc層出土である。前者は口縁部で、口唇部が平らに強調されるため、外面側に粘土が僅かにはみ出す。外面には細い三角状凸帯文が弧状に貼付される。後者は胴部で、外面に細い三角状凸帯文を横位、それから縦位に二本貼付する。図1に比べて器面は丁寧なナデ調整が行われている。

図3は胎土や文様から面縄東洞式土器の頸部と思われる。縄文時代後期の時期に相当する。胎土に金雲母が混和されており、外面には三角状に尖った工具で横位に緻密な刺突文が施されている。出土地はHC T15 貝層Ⅲ群3層出土である。

図4は胎土が軟質で細かく、文様等も在地の土器には見当たらず、搬入品と思われる。浅鉢の台付の部分に相当し、中空で「ハ」字状に開く。外面には全面にわたって工字文が施され、幅広の凹み線文を規則的に深く施文するため、浮き出た凸部分が貝符の文様にも似る。

また、凹み部には僅かに朱色が見られる箇所があり、何らかの顔料が塗布された可能性がある。出土地はHB ③ T6 Ⅲe層の出土である。同様な文様を持つ土器が奄美のウフタⅢ遺跡（2002）でも

第12表 搬入土器 出土量

遺跡	層	分類	船元系		面縄東洞	大洞A	奄美?	不明		合計
			口	胴				口	胴	
HC	V						1	2		3
	貝層Ⅲ群	3			1					1
		4							1	1
		5							1	1
	不明							1	1	
HC小計			0	0	1	0	1	4	1	7
HB ③	Ⅲb							1		1
	Ⅲc		1					1		2
	Ⅲe		1		1					2
	HB③小計	1	1	0	1	0	2	0		5
HC+HB③ 合計			1	1	1	1	1	6	1	12

出土している。本品は九州まで影響を与えた東日本の亀ヶ岡系土器の範疇に相当するが、このような文様は亀ヶ岡系土器の中でも新しく、大洞A式土器の可能性が高い。

図5・6は形式不明の精製された有文土器で、文様構図・胎土・混和材・内面の器面調整等から搬入土器の項に含めた。出土地は前者がHC S15 貝層Ⅲ群5層、後者はHC T15 貝層Ⅲ群4層 出土である。前者は貝層Ⅲ群の下位層出土で、付着物の煤から年代測定を行ったところ $1795 \pm 26BP$ の測定値が得られた。同層より大当原貝塚（読谷村）の下層で出土した粘土接合面の隆起したタイプが多数出土しており、同土器と時期などの関連性が窺える。口唇部や文様等若干の違いはあるが、類似資料として名護市の大堂原遺跡（2005・図80）がある。図5は口縁部、図6は胴部片で、前者は口唇部に粘土が貼付され、平らな面を呈する。そのために外面側にやや張り出す形状となり、口縁部から胴部へ直線的に移行する。外面には細い三角凸帯文が2本丁寧に貼付されており、上は横位に圍繞、その下は方形状を思わせる。三角凸帯文を境に上下2段に先端の尖った棒状工具による細沈線文がクロス状に施される。横位の凸帯文で区画された文様帯の胴部にも同様の文様が施される。胎土に石英などの混和材が多量に含まれ、内面には丁寧なナデ或いはミガキが見られる。後者も同様な文様が施されていたと考えられる破片で、横位の三角状凸帯文の上部に前者と同じ細沈線の文様がクロス状に施される。

図7は胎土や器面調整等から搬入土器としたもので、文様は見られず形式名は不明である。内面は剥がれているが、外面には僅かにミガキが残る。口縁部の外反度から大型の壺が想定出来る。出土地はHC F16 ト`302で、層位は不明である。

図8・9は、器面調整等からここに含めたものである。いずれも口唇部に粘土を貼付し、平らで幅広な面を作る。両側に張り出すために断面形は「T」字状を呈する。胎土はやや在地の土器にも類似するが、器面調整は丁寧である。前者の外面にはへら状のナデ痕が明瞭に残り、手触りは滑らかである。ミガキの可能性もある。後者の口唇部には 1.2×1.0 cmの楕円状の粘土が貼付され、ナデ調整が丁寧である。いずれもHB③Q17で前者はⅢb層、後者はⅢc層出土である。

図10は、胎土や文様の仕方等から搬入土器とした。口唇部に横位の沈線文、外面には三角状凸帯文を圍繞させ、その上に刺突文が施される。形状が平安山原B遺跡（2015）出土の奄美系土器に類似するが、具志原式土器（伊江島）にも似る。HC T16 V層の出土である。

図11は口縁部が内傾し、口径より胴径が大きく、甕形か広口の壺と考えられる。口唇部は粘土貼付により1cmと幅広く、外面側に張り出す。外面には小振りな瘤状突起が貼付される。器形や胎土に火山ガラスが僅かに含まれることからここに含めたが、瘤状突起などは在地の土器の特徴を示し、模倣土器の可能性もある。HC D10 V層の出土である。

<在地土器>

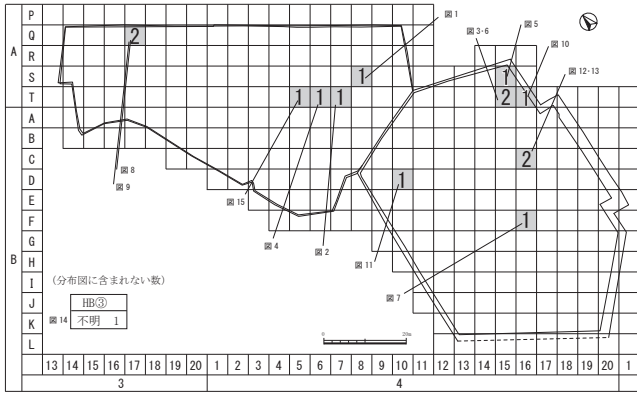
(1) 貝塚時代前・中期の土器

在地土器の中で貝塚時代前・中の土器が僅か4点得られ、第71図12～15に図示した。図14・15は時期、形式とも不明であるが、胎土等からここに含めたものである。これらの遺物に相当する時期の層が本遺跡では見当たらず、数量的にも僅かであることから、紛れ込みの可能性が高い。

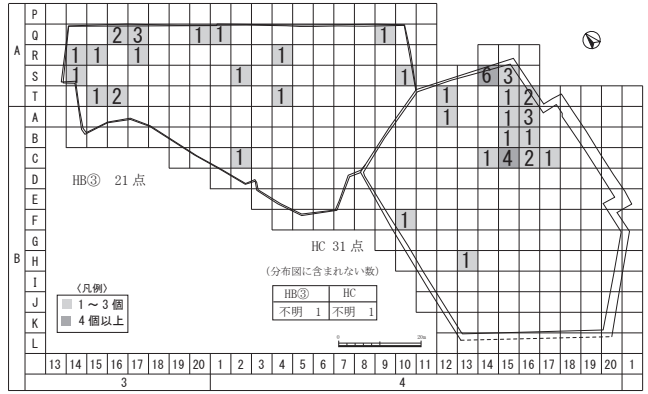
以下、形式が古い順にそれぞれ略述する。

図12は室川下層式土器の胴部である。外面には縦位の連点文が施されているが、摩耗のため不明瞭である。HC C16 V層の出土である。

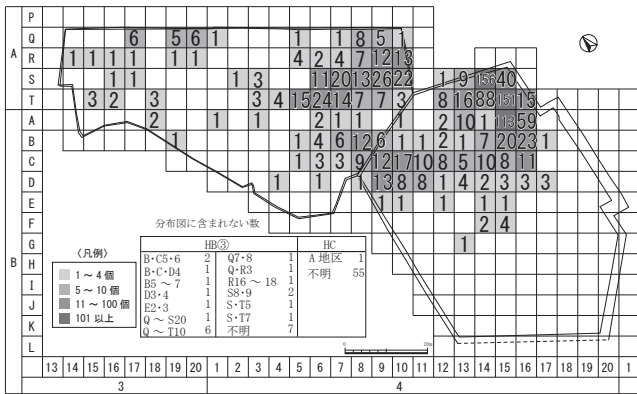
図13は大山式土器と考えられるものである。外面の肥厚帯に単篋工具による押引文が3条施されている。胎土に石灰質砂粒を含み肥厚帯に文様が施される等、室川貝塚（沖国大考古第2号・1978）



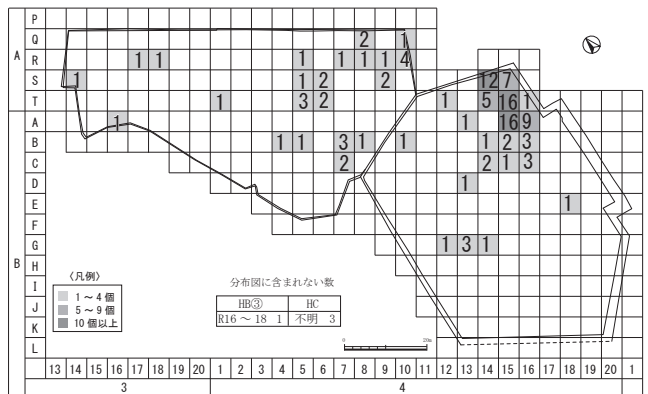
貝塚時代・中期の土器



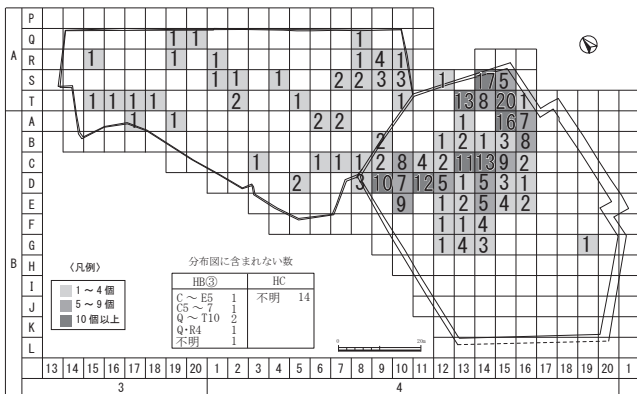
I類



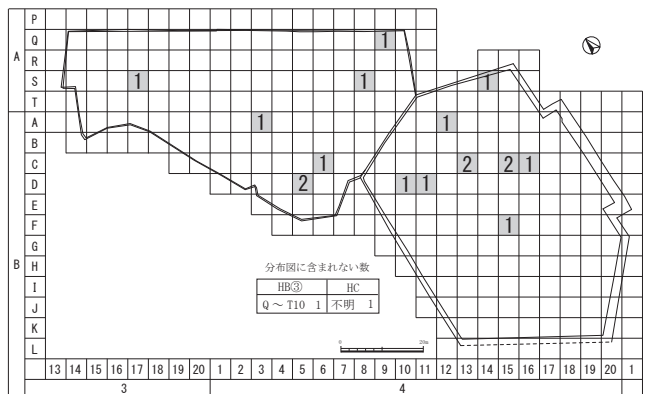
II類



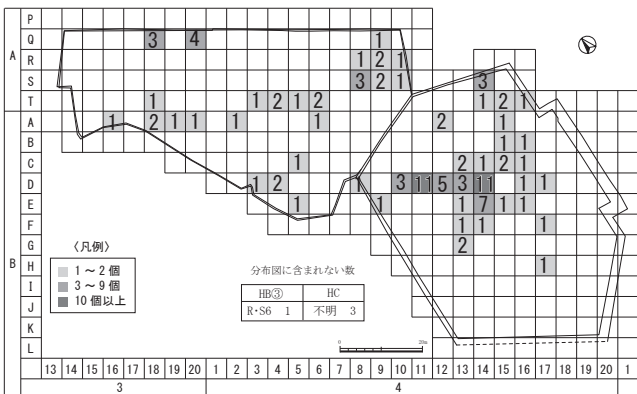
III類



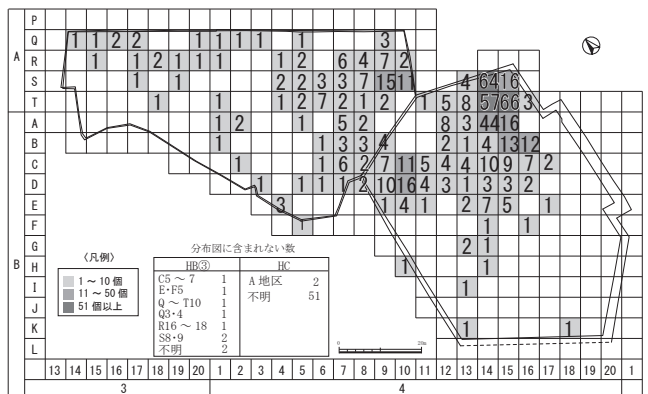
IV類



IVor V類



V類



不明

第65図 土器（口縁部）平面分布

で出土した有文のカヤウチバンタ式土器にも類似する。図12と同じ出土地である。

図14・15はいずれも形式不明の頸・胴部で、胎土からここに含めたものである。前者は頸部で、薄く粘土を貼付し肥厚帯を作る。後者は胴部で、外面に円形状の刺突文が施される。2点ともHB③出土で、前者はT5 III c層出土で、後者はII c層の遺構であるSK32からの出土である。

(2) 貝塚時代後期の土器

貝塚時代後期の土器が多量に出土した。本遺跡の土器は2015年に報告した平安山原B遺跡のIV類土器(大当原式土器)を主体とし、くびれ平底系の土器に相当するV・VII類も2割程得られている。HCは貝層III群、HB③はS6～10、T6～8で大当原式土器の出土量が多く、隣接する平安山原B遺跡のHB④ロも同形式の土器がほぼ同じ出土状況を示す。遺物が多量のため口縁・胴部・底部の出土量を第13・21・22表に示し、各部位別に記述する。

1. 口縁部

口縁部はHC1,898点、HB③659点の計2,557点を得られ、前区で多く出土する。口縁部以外の主な頸・胴部もここで記述する。第13表の口縁部出土量を見ると、HC・HB③ともII類(大当原式土器)が最も多く、次いでIV類(アカジャンガー式土器)と続く。HCを見ると、II類は貝層III群からの出土が多く、くびれ平底系に相当するIV類やV類(フェンサ下層式土器)は貝層群以外のV層出

第13表 土器(口縁部) 出土量

遺跡	層	分類	遺構	貝塚 前・ 中期	貝塚時代後期												合計								
					I類	II類		III類		IV類		IVorV類		V類		不明									
						有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文		無文							
HC	I					1	7			1	3			1		14	27								
						1	2			1				1		5	10								
						IIc	遺構	1	2				1					2	6						
						III		1	3		1	1	3				1	5	15						
	V						1	11	17	207	5	16	63	94	4	5	6	51	11	152	643				
							a			1									1	1	3				
							b			7												1	8		
							c			10	1											2	13		
							d			3				2								2	7		
							e							2										2	
							f			1	10			1				1				4	17		
							g				3												1	4	
							h				6				3								4	13	
							i				6	1											6	13	
							貝層III群	1				26			1	5							2	13	47
								1a				1	3		1								1	4	10
								1b				4	13		9	4	3			2	4	31	70		
								2				13	156	1	10	14	8	1		4	11	120	338		
								3				6	37	1	8	6	2				2	11	73		
								4				1	48	1	2	3	2				3	11	71		
								5				16	33	260	10	20	8	1			6	40	394		
								-				1	5		1	2							6	15	
								貝層IV群																3	3
貝層V群										1	6				1							2	10		
不明											1	20	2	1	8	13	1		8	3	29	86			
HC小計									1	31	79	841	22	69	112	144	6	5	6	67	46	469	1,898		
HB③												1			1			1					1	4	
	IIb					1									1			1		1	4				
	IIc	遺構			8									1	1						3	13			
	III			1	5	54						4	1	6	2	1	1		8	10	25	118			
	IIIa					6								1					3	1	1	13			
	IIIb				2							12	1		2	1			1	3	2	24			
	IIIc			1	1	2						59	3	1	2	3	1	1		5	22	102			
	IIIc	遺構				2															1	3			
	III d				15	14						145	15	6	11	12		3	3	17	8	58	307		
	III e					1						12	1			2			4	1	1	22			
	IV											23			2	3			1		9	38			
	V																					1	1		
	不明											5			3							2	10		
HB③小計			1	21	22	327	25	8	28	25	3	5	3	36	28	127	659								
HC+HB③合計			2	52	101	1,168	47	77	140	169	9	10	9	103	74	596	2,557								

HC IIc:SK01.02・クムイ HB③ IIc:SK32 石列1群 石列4群-SL01 III:SK36 IIIc:SD04

土が増加する。HB ③はⅢd層、Ⅲc層、Ⅲ層からの出土が多く見られるが、遺物はⅤ層由来のものと捉えたい。詳細は層序の項で述べた通りである。

今回、様々な有文土器が得られ、底部の出土状況、有文土器の胎土や文様等を兼ね合わせて分類したところ、Ⅳ類以外にⅡ類、Ⅲ類（両者の中間タイプ）、Ⅴ類にも有文が見られた。分類可能なものはそれぞれに含め、小破片など判別出来なかったものは形式不明土器の中で扱った。口縁部は伊礼原遺跡（国指定外・2014）、平安山原B遺跡（2015）、本遺跡で復元の出来た土器を参考に分類を行い、以下、順に記述する。

I類：破片が小さく形状は不明、胎土はきめ細かく砂質、角閃石や石英を多量に含む、底部は尖底系（浜屋原式土器相当）

II類：鉢・甕形主体で大型～小型有り、粘土接合面が隆起（不明瞭なものも有り）、器面調整は雑、底部は尖底系、厚手・薄手有り（大当原式土器相当）

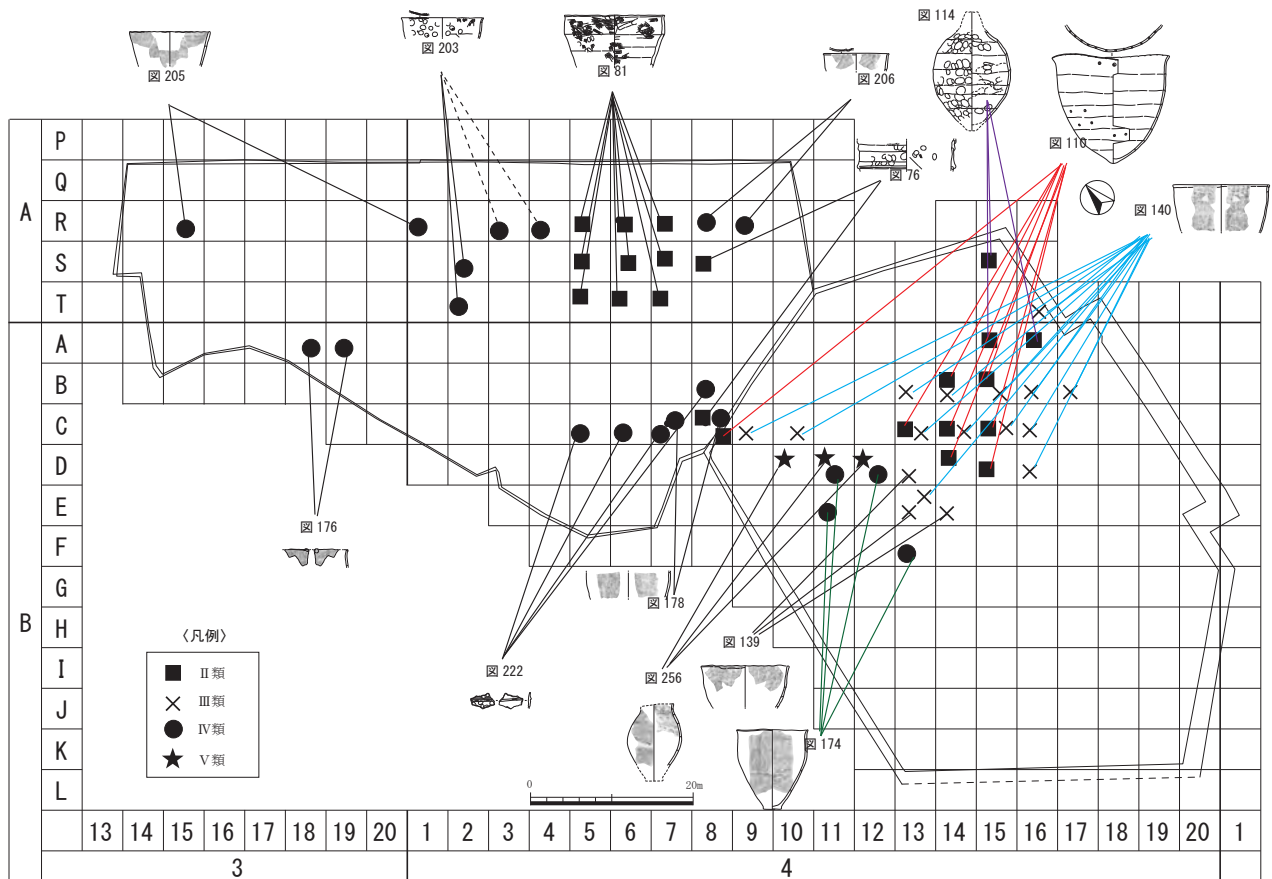
III類：鉢・甕形主体で大型～小型有り、粘土接合面がⅡ類に比べて不明瞭、内面にハケ目が見られるもの有り、厚手・薄手有り（Ⅱ・Ⅳ類の中間タイプや一部形式不明土器も含む）

IV類：鉢・甕形主体で他に壺有り、有文・無文有り、胎土は精製・赤色粒を含む、底部はくびれ平底、ハケ目痕多い（アカジャンガー式土器相当）

V類：胎土は泥質で無文が多い、底部はくびれ平底、小型化する（フェンサ下層式土器相当）

I類（浜屋原式土器相当）

HC31点、HB ③ 21点の計52点を得られた。前者は全体の僅か1.6%、後者は3.2%とかなり少ない。第13表の口縁部出土量を見ると、HCでは貝層Ⅲ群5層で16点、Ⅴ層で11点と多く、HB ③では北西側のⅢd層から15点と出土が多い。第65図に示した口縁部平面分布でも同様な出土状況を示す。



第66図 土器接合関係 平面分布

I類を主体とする調査区は平安山原B遺跡の②イ地区で、HB①・HB②口地区でも流路の堆積層にI類が僅かに出土することから、HB③出土のI類もHB②イ地区との関係が窺える。HC・HB③出土のI類は殆どが小破片で、復元出来る程の破片は出土していない。図16～37に22点を図示した。鉢・甕形の口縁部は形状からA、Bに分け、壺形はCとした。

A：口縁部が直状するもの（図16～22）

B：口縁部が外反するもの（図23～35）

C：壺形（図37）

Aは口縁部が直状するもので、破片が小さく、胴部以下の形状は不明である。口唇部の形状は平らなものが多く、他には丸や舌状を呈するものも見られる。器面調整を見ると、大半の外表面はナデ調整が丁寧で、内表面はナデが徹底されずに指頭痕が目立つ。胎土は砂質強で、手触りはざらつく。

Bは口縁部の上端のみが外反し、胴部にかけては直線的な形状を呈する。口縁部以外の特徴はAとほぼ同じである。図30は口径が21.6cmを測り、II類（大当原式土器）において第20表に示した口径の大きさからすると、中型②（20.1～25.0cm）に相当する。有孔も見られ、両側から穿たれる。図35は頸部の屈曲が他より強い。

図36はA・Bの形状から外れるもので、口径より胴径が大きい。

Cは図37の1点である。厚手の壺で、口縁部は「ハ」字状に開く。胎土等からI類に含めたが、III類とした有文土器にも類似する。外表面には2本1組の浅い沈線文が波状に施されている。

II類（大当原式土器相当）

本遺跡で最も多く、HC920点、HB③349点の計1,269点が得られた。器種を見ると鉢・甕・壺・ミニチュア・皿形が得られている。鉢・甕形が大半を占め、次に壺形である。ミニチュアや皿形は僅か数点である。図125・126のミニチュアは丁寧に製作され、底部や混和材などの特徴からII類に含めた。II類には様々な形状のものが出土することから、特徴的な粘土接合面の隆起を元に口縁部形状などと組み合わせて下記の4種に分けた。A～Cは鉢・甕形で、Dは壺形である。皿形やミニチュアは出土数が少ないことから、Dの項で記述する。A・Bは大当原貝塚の下層タイプに相当し、粘土接合面の隆起が明瞭なものはA、やや明瞭なものはBとした。Bに分類したもので粘土接合面がやや不明瞭ではあるが、胎土等からII類に含めたものもある。Cは本町の伊礼原遺跡（国指定外）やナガラ原西貝塚で出土した薄手の土器で、粘土接合面が不明瞭・或いは丁寧なナデ調整のものである。

A：粘土接合面の隆起が明瞭、口縁部は内湾、やや直状、外反・胴部は膨らむ

B：粘土接合面の隆起がやや明瞭、口縁部は内湾、やや直状、外反・胴部は直線的 or やや張る

C：薄手で粘土接合面の隆起が不明瞭、口縁部は外反・胴部はやや膨らむ or 直線的

D：壺形

第65図の口縁部平面分布、第13表の口縁部出土量を見ると、HCは貝層III群のあるグリッドからの出土が多く、層的には貝層III群においては上位層（1・2層）で少量のくびれ平底系、下位層（4・5層）で多量のII類が出土するなど、時期差が見られた。（3層は間層のために検討遺物から外している）下位層の5層では、同時期の遺物である石器や貝製品も多数出土している。口縁部出土量などを詳細に見ると、HCで得られたII類口縁部920点のうち、V層からは224点、貝層II群は47点、貝層III群は606点と後者が最も多く出土する。貝層

第14表 II類口縁部 出土量

遺跡 層		分類					合計
		A	B	C	不明		
HC	V	76	92	24	32	224	
	1	14	2		10	26	
	1a	1	2		1	4	
	1b	2	7		8	17	
	2	107	31	8	23	169	
	3	16	18	4	5	43	
	4	23	10	4	12	49	
	5	134	67	7	85	293	
	-	1	2		2	5	
HC 合計		374	231	47	178	830	

Ⅲ群では上位層（1・2層）で216点、下位層（4・5層）で342点が出土し、後者がやや多い。

また、Ⅱ類で分類したA～C間の出土状況に違いがあるか、第14表に貝層Ⅲ群を中心にV層出土も合わせて示した。Aは貝層Ⅲ群全体で298点の出土と最も多く、下位層（4・5層）では157点も得られ、V層は76点と少ない。Bも貝層Ⅲ群全体では139点を得られたが、上位層・下位層に分けると前者は42点、後者は77点、V層で92点とV層での出土が多くなり、Aの出土状況とやや異なる。Cは全体的に出土数が少なく、貝層Ⅲ群全体では23点、V層は24点の出土で、A・Bに比べて後者での出土が多い。

HB③も第65図の口縁部平面分布、第13表の口縁部出土量で見ると、S6～10、T5～7近辺での出土が多い。層位的にはⅢd層で159点と最も多く、次にⅢc層が63点、Ⅲ層が59点、Ⅲa・Ⅲb層は合わせて18点である。

また、形状や胎土等からⅡ類に分類した有文の口縁部はHCが79点、HB③が22点の計101点で8.0%の割合を占める。形式ごとに文様の施文部位や文様等の違いを見るため、胴部の有文も合わせて第15表に施文部位、第16～19表に部位別の文様をⅡ～V類まで示した。文様は施文部位の多い順に口唇部のみを第16表、口唇部+外面を第19表、外面のみを第17表、外面+内面を第18表に分けて示した。他にも数量的には少ないが、内面のみや口唇部+内面、口唇部+両面等が見られる。

Ⅱ類ではHC・HB③を合わせて口唇のみが46点、口唇部+外面は7点、外面のみが96点、外面+内面は11点で、外面のみに施文するものが最も多い。口唇部の文様は指圧文が23点と多く、次に刻目文、鞍状凸帯文が9点と続く。口唇部+外面では口唇部に刺突文、外面には沈線文や凸帯文など様々な組み合わせが見られた。外面の文様では不規則な沈線文が最も多く、他に凸帯文や有孔等が見られる（有孔は文様ではないが、有文として扱った）。図110の様に複数の穿孔が並列して施されて

第15表 施文部位別 出土量

分類		分類					合計	
		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	V	不明		
遺跡	施文部位	口唇のみ	42	5	46	4	13	110
		口唇+外面	7	4	19	1	2	33
		口唇+内面		2				2
		口唇+両面			2			2
		外面のみ	52	14	78	2	96	242
		内面のみ		3				3
		外面+内面	1		1			2
		HC小計	102	28	146	7	111	394
HB③	口唇のみ	4	7	13	2	3	29	
	外面のみ	44	13	26	3	56	142	
	内面のみ	1		2		2	5	
	外面+内面	10	6			5	21	
	HB③小計	59	26	41	5	66	197	
HC+HB③ 合計		161	54	187	12	177	591	

第16表 文様別（口唇のみ）出土量

分類		分類					合計	
		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	V	不明		
遺跡	口唇文様	指圧文	22		9		3	34
		鞍状凸帯文	6	1	2		7	16
		刻目文	9	2	13	2		26
		刺突文	3	1	21	2	3	30
		沈線文	2	1	1			4
		HC小計	42	5	46	4	13	110
HB③	指圧文	1	4			1	6	
	鞍状凸帯文	3	1			1	5	
	刻目文		2	10	1		13	
	刺突文			3		1	4	
	押引文				1		1	
HB③小計		4	7	13	2	3	29	
HC+HB③合計		46	12	59	6	16	139	

第17表 文様別（外面のみ）出土量

分類		分類					合計	
		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	V	不明		
遺跡	外面文様	円形文		1	1			2
		押引き		1	2			3
		刺突文			2		2	4
		沈線文	19	4	24	1	44	92
		沈線文・刺突文			2		1	3
		凸帯文・沈線文	1	1	6		3	11
		凸帯文	19	5	27		25	76
		瘤状突起					3	3
		肥厚帯		1	11		9	21
		肥厚帯・沈線文				1		1
		肥厚帯・凸帯文					1	1
		有孔	13	1	3		8	25
		HC小計	52	14	78	2	96	242
HB③	刻目文		2				2	
	瘤状突起					1	1	
	刺突文			1			1	
	沈線・有孔					1	1	
	沈線文	19	8	19	1	35	82	
	沈線文・刺突文		1			1	2	
	凸帯文	3	1	2	2	8	16	
	沈線文・凸帯文			1		1	2	
	肥厚帯			1		1	2	
	肥厚帯・沈線文			1		1	2	
	肥厚帯・押引文			1			1	
有孔	21	1			5	27		
有孔・凸帯文	1				2	3		
HB③小計		44	13	26	3	56	142	
HC+HB③合計		96	27	104	5	152	384	

いるものも見られる。外面+内面は両面とも不規則な沈線文を施すものが殆どである。

その他、本遺跡では分類したA～Cにおいて小～大型まで様々なサイズが見られ、口径が計測出来た資料を第20表に示した。参考までにⅢ～Ⅴ類も一緒に載せている。Ⅱ類の口径が計測出来た遺物は34点で、最も多いサイズは中型と大型がそれぞれ12点ずつ得られ、小型も10点ある。中でも大型①が9点と最も多く、次に小型②が7点、中型の①・②が6点ずつある。分類

第18表 文様別 (外面+内面) 出土量

遺跡 外面+内面文様		分類				合計
		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	不明	
HC	沈線文+沈線文	1		1		2
	HC 小計	1	0	1	0	2
HB③	沈線文+沈線文	10	6		4	20
	凸帯文+沈線文+沈線文					1
	HB③ 小計	10	6	0	5	21
HC+HB③ 合計		11	6	1	5	23

第19表 文様別 (口唇+外面) 出土量

遺跡 口唇文様		有孔		沈線				凸帯文			凸帯文 沈線文	肥厚帯 沈線文		肥厚帯	合計
		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	不明	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ		
HC	指圧文											1			1
	鞍状凸帯文		1												1
	刻目文		1	1	13	1	1			1				2	20
	刻目文+鞍状凸帯文				1										1
	刺突文	2	1		2			1	1	1		1		1	10
	HC 合計	2	3	1	16	1	1	1	1	2	1	1	2	1	33

別に見ると、A・Bには小型土器も得られ、口径は計測出来なかったものの、形状から小型土器と思われるものも数点ある。A・Bは小型①～大型①まで見られ、Bには大型②も2点得られている。大型②の図110は口径が36.1cmと、本遺跡のⅡ類で最大の大きさを測る。Cは出土数が少ないせいか、中型が2点、大型が1点の計3点に留まった。A・Bで見られた小型はCにおいては見られない。以下、分類別に記述する。

Aは図38～76に39点を図示した。Ⅱ類の中では最も多く得られ、特にHCの貝層Ⅲ群5層134点、2層から107点と多量に出土している。粘土接合面の隆起が目立ち、器厚は厚手・薄手の両方が有り、口唇部は舌状を呈するものが多い。粘土帯はサイズに関係なく3.0～4.0cm幅が多く見られた。口縁部の形状によりア～ウに分けた。

- ア：口縁部が内湾し胴部は張るもの (図38～60)
- イ：口縁部が直状し胴部は直線的なもの (図61～71)
- ウ：口縁部の上端が外反し胴部は直線的なもの (図72～76)

Aアは口縁部が内湾するもので、図38～60に図示した。胴部が残るものを見ると、殆どが丸みを呈する形状をなす。特徴的なものについてみると、図38は小型で、外面に横位の凸帯文とその下に「U」字状の凸帯文が貼付される。貼付文は奄美のスセン當式土器にも類似する。貼付文のために正確な胴径は計測出来ないが、胴部の湾曲からすると小型土器と思われる。図39～42も小型の土器で、本遺跡では割と多い。図45は口縁部直下に幅4.0cm程の粘土接合面が明瞭に残り、薄い肥厚帯にも見える。外面は全面的に暗褐色を呈し、火を受けた痕跡であろうか。図48はHB③Ⅲd層出土で、口径が僅か7.0cmと小さく、小型土器、或いはミニチュア土器が想定される。図49・50は外面に雑な外耳と思われる凸帯文が半分程残る。前者は口唇部に沿って貼付され、後者も上部が破損しているが、同様な貼付と思われる。図

第20表 口径サイズ別 (Ⅱ～Ⅴ類) 出土量

サイズ		分類													合計	
		Ⅱ			Ⅲ					Ⅳ		Ⅴ				
		A	B	C	A	B	C	D	E	G	不明	A	C	A	B	
小	①10cm以下	2	1													3
	②10～15cm	4	3					1		1		2		1	1	13
中	①15.1～20cm	5		1	1			1	2	3		1	3	2	1	20
	②20.1～25cm	2	3	1				1	1	1			2	1		12
大	①25.1～30cm	4	5		1	1	3	1					6			21
	②30.1cm以上		2	1												3
合計		17	14	3	2	1	5	5	4	1	1	13	1	3	2	72
分類合計		34			19					14		5				

52は粘土接合部の隆起が直線状に残り、他に比べて明瞭である。有文は2点で、図57は横位に1.5cm弱の薄い凸帯文を2条貼付し、その上に縦位の凸帯文(幅1.3～2.0cm)が2条貼付され、凸帯文の最

後は中央部を窪ませた円形状を呈する。本資料もスセン當式土器の貼付文に類似するが、形状や胎土からⅡ類に分類した。図 60 は横位の細沈線文が施される。

AⅠは図 61～71 に図示した。AⅠに比べて出土量が少なく、口径が計測出来たものは図 64・68 の 2 点である。有文は図 61・69～71 の 4 点で、図 61 は外面にやや横位の沈線文が浅目に施され、図 69・70 は両面に曲沈線文、図 71 は外面にやや幅広の鋸歯状沈線文が施される。図 68 は粘土接合面の隆起がより明瞭で屈曲部を作る。

AⅡは図 72～76 に図示した。粘土接合面の隆起がAⅠの内湾するものに比べて明瞭である。無文が多い。有文は図 74 の 1 点で、口唇部に鞍状凸帯文を貼付する。図 75・76 は胴部で不明であるが、粘土接合面の隆起が明瞭なことからAに含めた。

Bは図 77～100 の 24 点を図示した。BはAに比べて全体的に有文が目立つ。Bも形状により以下の様に分けた。

ア：口縁部は直状を呈し胴部が直線的なもの（図 77～82）

イ：口縁部はやや直状 or やや内湾気味で胴部は張るもの（図 83～92）

ウ：口縁部は外反し胴部が張るもの（図 93～100）

BⅠは図 77～82 の 6 点を図示した。図 77・78 は小型土器で、口径は 2 点とも 15.0 cm 以下である。前者は口唇部に刻目文、外面に不規則な沈線文が施される。図 79～82 の 4 点は口縁部が直状を呈し、胴部は屈曲して直線的な形状を呈する。図 79 の口径は 26.0 cm、図 80・81 は 30.0 cm 以上と大きい。図 82 は 22.6 cm と中型サイズである。図 79・80 の 2 点は有文で、前者は口唇部に刺突文、外面に「0」字状の凸帯文を貼付する。後者は外面に幅太の凸帯文を 2 条圍繞しており、粘土接合面が余り目立たないが、形状や胎土からⅡ類としたものである。

BⅡは図 83～92 の 10 点を図示した。図 83～86・90 は凸帯文の施された口縁部である。図 83・84 は鞍状凸帯文、図 85 は外面に「U」字状と逆「U」字状の凸帯文が添うように貼付され、図 86 は口唇部が破損し、外面に「0」字状の凸帯文が貼付される。図 90 は外面上部に楕円状の薄い凸帯文が貼付される。図 88 も有文で、外面に長めの鋸歯状沈線文と外→内面に穿たれた孔が見られる。その他は無文の口縁部である。図 89～92 はいずれも口径が 25.0～30.0 cm 間に収まり、大型のサイズである。

BⅢは図 93～100 の 8 点を図示した。図 93～96 は無文で、両面とも指頭痕が目立つものが多い。図 94 は胎土が精製されてきめ細かく、粘土接合面の隆起がやや明瞭なことや形状等からⅡ類に含めた。図 96 の口唇部は破損しているが、形状からここに含めた。図 97～100 は有文で、いずれも両面に不規則な沈線文が施される。

Cは図 101～113 の 13 点を図示した。いずれも粘土接合面の隆起がやや不明瞭、器厚もほぼ均一であるが、形状、調整の仕方や胎土等からⅡ類の範疇に含めた。図 101・110 は口～底部の破片が得られ、接合作業により復元が出来た資料である。2 点とも口縁部は外反し、胴部はやや張りながら底部へと続く。後者の口縁部の上端は、前者に比べて外反度が強い。底部は両者とも尖底で、後者はやや丸みがある。前者はHC 貝層Ⅲ群 4 層の出土で、上面観は残存部からやや楕円状（19.6×22.8 cm）が考えられる。口径に比べて器高は 17.4 cm と低い。後者は口径が 36.1 cm、器高 32.6 cm と大型の土器で、全体的に歪みが見られる。口唇部に刺突文が施され、器面には同間隔の有孔が 2 孔 1 組で外面→内面へ並列に穿たれている。孔の位置も口縁部、胴部、底部近くなど様々である。本資料はV層の出土である。他に、口唇部のみに文様が施されるものは図 104～108 で、図 104 は斜位の沈線文（約 2 cm 弱）、図 105・106 は刺突文で、前者は二叉状工具を使用している。図 107 は刻目文、

図 108 は指圧文が施される。図 109 は口唇部に指圧文、外面には縦 + 横位の規則的な沈線文と口唇部に沿って 0.8 ~ 1.0 cm 幅の粘土が薄く貼付される。図 111 は外面に横位の凸帯文が貼付される。図 113 は無文の胴部で、粘土接合面が不明瞭なことから C とした。器厚はほぼ均一となる。

D は壺形であるが、僅かに得られた皿形・ミニチュアも壺形の次に記述する。壺形は図 114 ~ 123 の 10 点、皿形は図 124 の 1 点、ミニチュアは図 125・126 の 2 点を図示した。壺形は図 114・119 やその他の口縁部の形状から、後述する IV 類の壺に比べると大きい。壺形も口縁部の形状により以下のように分けた。

ア：口縁部が内湾するもの

イ：口縁部が直状 or 外反するもの

D アは図 114 ~ 117 の 4 点を図示した。いずれも無文である。図 114 の胴部と図 115 の口縁部は、出土地や頸径、胎土や器厚などが同じであることから同一個体と考え、接合は出来なかったが図上復元を試みた。底部も口縁部や胴部と同様な遺物を元に図上復元を行った。口縁部は窄まりながら肩部で張り出し、胴部は丸みをもって底部へ移行する。図 115 の上面形からすると、やや楕円状の口縁部が想定出来る。図 116 は口縁部だけの破片で、頸部以下の形状は不明である。図 117 も同様な形状を呈するが、前者の窄まる形状とは異なり、口径が大きくなるものと考えられる。胎土も前者の砂質とは違って堅致で砂泥質である。外面はナデ調整が丁寧、内面は指ナデ痕が雑に残る。器厚が厚く、器面調整等から I 類の可能性も考えられる。

D イは図 118 ~ 123 の 6 点を図示した。図 118 は口縁部がやや直状を呈し、そのまま緩やかに胴部へ移行する。図 119 は口 ~ 胴部まで得られ、ナデ肩を呈しながら胴部で屈曲し、そのまま直線的に移行する。粘土接合面の隆起が明瞭で、指頭痕などの調整痕により器面が少しゴツゴツし、左右はやや非対称である。図 120 ~ 123 は頸部で、図 120 は外面に凸帯文を 1 条圍繞させる。形状から B とした。図 121・122 は無文で、図 123 は外面に不規則な沈線文が施される。

次に皿形であるが、1 点の出土で図 124 に図示した。HB ③ III d 層出土で、胎土は II 類と同じである。口唇部は舌状を呈し、剥がれた痕跡が無いことや底径の大きさ等から皿形として扱った。口径は 10.2 cm、底径は 10.0 cm、器高は 2.5 cm である。底厚も 1.2 cm と厚く、安定感があり、直に立ち上がる。煤などの付着は見られず、容量などから食膳皿として利用されたものと考えられる。皿形土器の出土例として、若干形状は異なるがシマシーヤーマ貝塚 (1957) が挙げられる。

ミニチュア土器は 2 点の出土で、図 125・126 に図示した。いずれも器面調整が丁寧である。図 125 は口縁部が破損し、底部は尖底である。図 126 は底部がやや不安定で丸底的な尖底を呈し、口縁部はやや窄まる。口縁部と頸部以下は接合が出来なかったが、同一個体と考えられることから、図上復元を行った。

Ⅲ類 (Ⅱ・Ⅳ類の間接タイプ・形式不明土器)

Ⅱ・Ⅳ類の間接要素を持つものや形式不明土器をⅢ類でまとめ、中にはⅤ類に類似する資料も見られる。全体的に口唇部は丸みを呈するものが多く、舌状や平らなものもある。Ⅲ類は HC で 91 点、HB ③で 33 点の計 124 点が得られた。第 65 図の平面分布を見ると、HC・HB ③ともⅡ類と同様の出土状況を示す。中でも貝層Ⅲ群では 64 点が得られ、HC のⅢ類出土中 70.3% の割合を占める。下位層Ⅲ群を層位的に見ると、上位層 (1・2 層) は 21 点、下位層 (4・5 層) は 33 点と下位層出土が多い。Ⅱ類も下位層出土が多量であったことから、Ⅱ類の可能性が高いと思われる。Ⅴ層は 21 点の出土で、貝層Ⅲ群の上位層と同じ出土量である。Ⅲ類にも有文土器が得られ、HC・HB ③とも外面のみに文様を施すものが合わせて 27 点と最も多い。他には口唇部のみ等がある。

HB ③を層位的に見ると、Ⅲ d 層出土が 21 点と最も多く、次に多く得られたのはⅢ層が 5 点、Ⅲc 層が 4 点である。平面分布や層位を関連づけると、Ⅲ類はⅡ類の範疇に含まれるものと、Ⅳ類の範疇に含まれるもの、或いはその中間タイプに細分可能であるが、今回は膨大な資料に迫られ、Ⅲ類としてまとめている。以下、様々な形状や胎土等から下記のように分けて記述する。

A：厚手で口縁部の外反が強く、胴部の張りが強いもの

B：口縁部は外反し、砂質で石英を多量に含むもの

C：口縁部はやや外反 or やや直状で胴部の張りが弱いもの（中にはハケ目痕が明瞭）

D：口縁部は外反し、頸部で僅かに屈曲部をつくるもの

E：口縁部は外反し、胴部が張るもの

F：口縁部は外反し、胴部が直線的なもの

G：口縁部が直線的に外反するもの

A は図 127～132 の 6 点を図示した。胎土や混和材はⅡ類に類似する。図 127 は口縁部、胴部が同一個体と考えられるもので、接合は出来なかったが図上復元を試みたものである。図 127 の口縁部は外反が強く、頸部はくびれて胴部が張り出す。胴部の中央部から底部に向かって窄まることから、器高は低いと想定される。口縁の内面には、竹管状或いは巻き貝の螺塔部による施文具を用いた円形状の刺突文と、それを区切るかのように縦位の短沈線文が 2 条施される。底部は不明だが、出土地が同じで胎土等も類似することから、図 396 のくびれ平底が想定される。底径が 9.0 cm と大きく、Ⅳ類やⅤ類のくびれ平底とは胎土等が異なる。いずれも S14 貝層Ⅲ群 5 層の出土である。図 128 は口縁部が外反し、図 127 と同じ施文具を使用して円形状（径 4.5 mm）の刺突文が施される。形状は図 127 の口縁部と同じであるが、文様構成や出土地がⅤ層であるなど、若干の違いがある。図 129 は外反の口縁部で、破片が小さいせいか、内面のみには弧状の沈線文が施される。図 130 は頸胴部で、外面に弧状の沈線文を施している。図 131 は胴部で、1 条の凸帯文を横位に圍繞させ、その上に不規則な沈線文を施す。図 132 は砂質で上記の遺物と胎土が異なるが、器厚等からここで扱った。外面には弧状の細沈線と棒状工具による刺突文が施される。

B は図 133～138 の 6 点を図示した。いずれも砂質で混和材に石英が多量に含まれるもので、図 133～135 は類似の胎土を呈する。文様を見ると、図 134 は口唇部に斜位の刻目文、内面に幅広の沈線文が施される。図 133・135 は胴部で、前者は外面に横位の幅広沈線文を 1 条施し、その上に弧状の同様な文様を施す。伊礼原 D 遺跡（2013）で報告した図 44・48 に胎土や文様が類似し、縄文晚期系かと考えられたが、形状や層位等から貝塚時代後期に含めたい資料である。後者は外面に規格的な細沈線文が斜位に施される。図 137 は外面に横位の沈線文、その上に「V」字状の沈線文、内面には緩やかに曲がった沈線文が施される。図 138 は胎土に粗い石英を含み、外面に単篋工具による押引文が施される。

C は図 139～143 の 5 点を図示し、いずれも HC の出土である。外面や内面に明瞭なハケ目痕やナデ調整痕が見られ、形状や胎土はⅡ類に類似する。図 139 は内面のハケ目が明瞭で、口径は 27.0 cm を測り、大型①のサイズである。D13・E14 のⅤ層出土である。図 140・141 の内面には粗めのナデ調整が見られる。前者の口径は 29.6 cm、後者は 24.2 cm とそれぞれ大型①、中型②のサイズである。前者は C14・15 のⅤ層、後者は貝層Ⅲ群 3 層出土である。図 142 はⅡ類に近いもので、口唇部に指圧文が施され、両面とも指頭痕が残る。貝層Ⅲ群 5 層出土である。図 143 は口～底近くまで復元が出来た資料で、外面に縦位、内面には横位のハケ目が明瞭に残る。口径は 16.2 cm と中型①のサイズであるが、やや小振りである。器面調整や胎土等はⅤ類にも類似するが、形状はややⅡ類に近く、

底部に尖底が想定出来ることから中間タイプとしてⅢ類に含めた。HC 貝層Ⅲ群2層出土である。

Dは図144～148の5点を図示した。5点とも口縁部の直下の粘土帯がナデ調整によって僅かに屈曲部を持つ。図144・146・148はHC 貝層Ⅲ群5層からの出土で、角閃石を含むことから古手の可能性も考えられるが、口唇部が平らに整えられⅣ類の要素も持つ。図146は片口を持つもので、Ⅳ類に多い形状であるが、胎土に角閃石を多量に含むことからⅢ類に含めた。

Eは図149～153の5点を図示した。図149・152はHC 貝層Ⅲ群5層出土で、前者は外面に逆「V」字状の凸帯文を貼付する。凸帯文上は無文で、口径は18.0cmと中型①のサイズである。器面は丁寧にナデ調整を行い、粘土接合面は不明瞭である。図151はHB③Ⅲ層出土で、外面には刻目文が横位に施される。

Fは図154～164の11点を図示した。図154～158の5点は無文で、特徴的なものについて見ると、図155は器厚が1.0cmと厚手で、HC 貝層Ⅲ群5層出土である。図156は外反が弱く、器厚が0.6cmと薄手で貝層Ⅲ群2層出土である。図159～164の6点是有文で、口唇部や外面に文様が施される。図159は、外面に弧状の沈線文と竹管状の工具或いは巻貝の螺塔部を使用したと思われる径4mmの円形状の文様が縦位に2個施される。内面にはハケ目痕が見られる。図160は外面に逆「U」字状の凸帯文、図161は外面に刺突文を施した凸帯文が「0」字状に貼付され、浅い幅太の沈線文が規則的に施され、口唇部にも同様の施文具を用いた刺突文が見られる。図162は口唇部に細い刻目文が施され、外面には幅約5cmの薄い肥厚帯が見られる。図163は口唇部に不揃いの刻目文が施され、やや刺突文にも似る。図164は鞍状凸帯文が貼付され、内面には図161の外面に施された文様と類似の規則的な沈線文が見られる。図159はHB③出土、他の5点はHC出土である。図163はV層、それ以外は貝層Ⅲ群より得られ、図160・164は5層、図161は4層、図162は3層である。図160～164は本遺跡のⅣ類の文様に類似するが、胎土がややⅡ類のCに近く、いずれの要素も持ち合わせていることから、今回はⅢ類とした。

Gは図165～172の8点を図示した。図165は口唇部が舌状を呈しⅡ類にも近いが、小破片で胎土等がはっきりしないことからⅢ類に含めた。外面には単篋工具により方形の刺突文が施される。図166・167の2点は外面に中央部が窪んだ円形状の凸帯文が貼付される。口唇部が舌状を呈することからⅡ類の可能性もある。後者はHC 貝層Ⅲ群2層の出土である。図168は両面に条痕が見られ、胎土からやや古手の感を受ける。HC 貝層Ⅲ群5層出土である。図169はHC 貝層Ⅲ群5層出土で、口径が14.4cmと小型の土器である。本資料は粘土積み痕が不明瞭で、Ⅱ類のCにやや近い。図170は胎土に粗い石英が多量に含まれ、両面から穿孔した有孔も見られる。図171は両面に文様が施文され、外面には縦位、内面には斜位の沈線文が見られる。胎土はややⅣ類に近い。図172は内面に草木の莖らしきものが胎土に見られる。粘土の中に紛れ込んでいたのだろうか。

その他、図173はA～Gのいずれも分類出来ないものである。口縁部はやや波状を呈し、僅かに口径より胴径が大きい。胎土は堅致で、丁寧な器面調整が見られ、粘土の接合面は不明瞭である。HC 貝層Ⅲ群5層出土である。

Ⅳ類（アカジャンガー式土器相当）

HCは256点、HB③は53点で計309点が得られた。両地区を合わせると12.1%の割合を占め、Ⅱ類に次いで多い。第65図の口縁部平面分布を見ると、HCではほぼⅡ類と同様な分布を示し、出土数が割合多いが、HB③では遺跡全体から散見され、出土数も少ない。

層的に見ると、HCではV層が157点、貝層Ⅲ群は59点と前者での出土が多くなり、Ⅱ類と出土状況が逆になる。貝層Ⅲ群でも上位層（1・2層）、下位層（4・5層）に分けて見ると、前者は35点、

後者は14点と上位層での出土がやや多く、Ⅱ類と異なる。

HB③ではⅢd層から23点と最も多く、次にⅢ層から8点、Ⅲc層・Ⅳ層がそれぞれ5点と続く。同地区ではⅡ類以外は同様な出土状況である。

Ⅳ類は有文の比率がⅡ類に比べて高く、HCが112点、HB③が28点と計140点が得られ、45.3%を占める。無文もHC144点、HB③25点と計169点出土し、54.7%と半数以上を占め、有文より無文が若干多い。

第15表に示した有文土器の施文部位や、第16～19表に示した文様の種類から見ると、Ⅱ類同様HC出土に有文土器が多く得られた。施文部位はHB③も合わせて口唇部のみが59点、口唇部+外面は20点、外面のみが105点と後者が最も多い。口唇部のみは刻目文が23点、刺突文が24点と両者の文様が主体となる。その他、Ⅱ類で見られた指圧文も見られる。口唇部+外面は口唇部に刻目文、外面に沈線文を施すものが大半である。外面のみでは沈線文が主流で、Ⅱ類の不規則な沈線文と異なり鋸歯状や縦・横位など規則的に施文されるものが多い。沈線文以外の文様もあり、Ⅱ類より文様が多様化する傾向が見られた。

Ⅳ類も第20表から口径の大きさを見ると、Ⅱ類と同じく小②～大①まであり、中でも大①のサイズが6点と多く見られた。Ⅱ～Ⅳ類まではほぼ同じサイズを要している。

その他、形状や胎土等においてⅡ・Ⅳ類の中間タイプはⅢ類、いずれにも分類出来ない有文土器は不明土器に分類した。

また、Ⅳ類は底部がくびれ平底になるものと考え、第70図のくびれ平底の平面分布を見ると、HCは貝層Ⅲ群のあるS14を中心とするその周辺とC14・D11を中心とするその周辺で多く、後者では第65図の口縁部平面分布で示したようにⅣ・Ⅴ類がほぼ重なり、貝層Ⅲ群のあるグリッドではⅣ類の口縁部が多く見られ、Ⅱ類とも重なることから、Ⅳ類がやや優勢と思われる。

また、口縁部の図182の胎土と類似する底部に、丸底的尖底の図269がある。伊礼原D遺跡(2013)で報告した第22図39の例からすると、Ⅳ類は底部の一部が丸底的尖底となり、本遺跡で出土した同資料も口縁部がD14、底部がE14と隣同士のグリッドで、共にⅤ層の出土であることから、同一個体の可能性が考えられる。層位的に見ると、S14周辺ではほぼ貝層Ⅲ群の上位層より出土し、他ではⅤ層の出土が多い。貝層Ⅲ群出土の口縁部を層位別に示した第64図から、上位層でⅣ類、下位層でⅡ類の出土が多く見られる。HB③は遺跡全体から得られ、やや目立つのはS9である。層位的にはⅢd層出土が多い。以下、全形が窺えるものが少なく、口縁部の形状を中心に下記のようにA～Dに分けた。A～Cは鉢・甕形で、Dは壺形である。

- A：口縁部が外反するもの
- B：口縁部が直状のもの
- C：A・Bより外れるもの
- D：壺形

Aは口縁部が外反するもので、様々な形状が見られることから下記のようにア～ウに細分した。

- ア：頸部が僅かにくびれて胴部は張り、底部にかけて直線的な形状
- イ：頸部がくびれて胴部の張り出しがやや強い形状
- ウ：逆「ハ」字状外反で胴部まで直線的な形状

Aアは図174～179の6点を図示した。図174は口～底部まで破片が得られ、復元を試みた。無文で口縁部の外反は弱く、頸部が僅かにくびれながら胴の上部で一端屈曲し、底部へ直線的に移行する。底部はくびれ平底であるが、くびれは弱く、底径は5.8cmを測る。口径は21.9cm、器高は24.4

cmと少しスリムである。器面にはハケ目痕が見られ、外面は縦位、内面は横位に施される。HC D11+E11 V層の出土である。胎土は砂質で、赤色粒が顕著に見られる。図 175・179 の 2 点は口縁部に 2 個の角状突起を持つ。図 176 は現存で 1 個の角状突起を持つ。いずれも図 174 と同じ胎土である。図 177 の口縁部と図 178 の胴部は出土地・胎土・器面調整等が類似することから、同一個体の可能性が考えられる。

A I は、胴部まで得られた図 182 を参考にした。頸部のくびれ、胴部の張りが A よりやや強く、全体的に胴部が丸みを呈し、無文に比べて有文の比率が高い。図 180～201 の 22 点を図示した。

口唇部のみに文様を施すものは図 181・192・195 の 3 点で、前者は刻目文、後者の 2 点は刺突文が施される。図 190 も口唇部に刺突文が施され、外面には 1.2～1.9 cm 幅の薄い肥厚帯が見られる。HC 貝層 III 群 5 層出土である。

口唇部及び外面に文様を施すものは図 185・187・188・194・196・199 の 6 点で、このうち口唇部に刻目文、外面には沈線文が施されるものは図 185・196・199 の 3 点である。図 194・199 の 2 点は器厚が薄く、小型の土器で、前者は口径が 11.0 cm、後者は 12.4 cm と計測が出来た。口唇部に刺突文、外面には沈線文が施されるものは図 194 で、外面に凸帯文と沈線文の組み合わせは図 187・188 で、両方とも刺突文は先端が二叉状になった施文具を使用している。

外面のみに文様を施すものは図 182～184・186・189・191 の 6 点である。図 182・183 は刺突文の施された逆「V」字状の凸帯文、図 184 は竹管状工具による円形文、図 186・189 は沈線文が施され、前者は縦位の沈線文間に弧状の刺突文、後者は弧状の沈線文が施される。図 191 はあまり見られない文様で、外面に頸部と胴部を区別するかのように楕円状のやや大きな指圧文が横位に連続して施され、有孔も見られる。文様が見られる部分は薄く粘土を貼付し、その上に文様を施しているために他に比べて頸部のくびれが強い。今回は形状・胎土等から IV 類に含めたが、今後の資料追加を待ちたい。図 197 は口縁上部に薄い凸帯文が貼付されるが、半分は破損している。外反が他に比べて強く、頸部は外面にはケズリ様の調整痕が見られる。

無文は図 193 の 1 点で、丁寧なナデ調整が行われている。

図 200・201 の 2 点は頸部で、形状からここに含めた。前者は外面に単篋工具による刺突文、後者は外面に弧状の沈線文と三角状の凸帯文が貼付される。

A II は図 202～210 の 9 点を図示した。口唇部のみに文様を施すものは図 202・203・206 の 3 点で、いずれも刻目文である。口唇部、外面に文様が施されているものは図 208・209 の 2 点で、図 208 は口唇部に刺突文、外面に弧状の沈線文、図 209 は口唇部に刻目文、外面に鋸歯状沈線文を施している。図 210 は口唇部に刺突文を施し、鞍状凸帯文が貼付される。凸帯文の上にも刺突文が施される。外面のみに文様を施すものは図 207 の 1 点で、浅目の沈線文が不規則に施される。図 204 は無文で、口縁部直下には粘土を折り曲げ、約 1.8 cm 幅の薄い肥厚帯を作る。

B は図 211～215 の 5 点を図示した。大半が小破片で、口縁部は直状を呈する。図 211 は口唇部に刻目文、外面の凸帯文上とその貼付部分に刺突文が施される。図 212 は口唇部に刺突文、外面にも刺突文を施した凸帯文を貼付する。図 213～215 は無文の逆「U」字状凸帯文を外面に貼付し、後者の図 215 はその下に約 1 cm 幅の凸帯文が貼付される。

図 216～222 の 7 点は A・B いずれかの胴部片と考えられるもので、いずれも外面に文様が施される。図 216 は刻目文の施された細い凸帯文を方形状に貼付し、図 217 は刺突文の施された縦位の凸帯文、図 218 は単篋工具による横位・斜位の押引文、図 219 は横位・弧状の沈線文、図 220・221 は弧状の沈線文、図 222 は外面に横位の凸帯文とその下に 5 mm 幅の太沈線文が施される。

Cは上記のA・Bに当てはまらないもので、図223～230に図示した。図223～225・229は直状で、図226～228は口縁部の上部が湾曲する。図230は内湾の形状を呈する。本資料は口縁から胴部にかけてそのまま直線的に移行する。文様を見ると、図223～229の7点は有文である。両面に文様が施されているものは図223・228の2点で、いずれも曲沈線文が施される。前者の口唇部には横位の沈線文も見られる。外面に文様が施されるものは図224～227・229で、図224は口唇部に粘土が貼付され、口唇部が内面側に張り出す。文様は外面に縦・横位の規則的な沈線文が施されている。図225は外面に弧状の沈線文、図226・227・229は外面に規則的な細沈線文が施され、前二者はやや深く、後者は浅目に施される。図227の外面には縦位の凸帯文が貼付され、その上は無文である。

図230にはハケ目が見られ、外面は縦位、内面には横位に施される。今回、全体的な形状は異なるが、胎土や調整の仕方等からIV類としたが、今後の課題である。

DはIV類の壺をまとめたもので、図231～243の13点を図示した。形状により、下記のように細分して記述する。

ア：口縁部が外反するもの

イ：口縁部が直状のもの

ウ：口縁部がやや内湾するもの

Dアは図231～235の5点を図示した。図231は長頸で無文の壺である。外面は丁寧なナデ調整を行っている。図232～234は短頸の壺で、前二者は有文で、後者は無文である。前二者の外面に施された刺突文は類似するが、図232は先端が細めの単篋工具、図233は棒状工具によるものである。前者の外面には刺突文の他に規則的な沈線文も施される。図235の口縁部は破損するが、頸部の張り具合からDアに含めた。外面に規格的な浅目の沈線文が施される。

Dイは図236～239の4点を図示した。図236は口唇部に刺突文（二叉状工具による）、外面に弧状の沈線文が施される。図237は無文で肩部が張り出す。図238・239は頸部で、いずれも外面に凸帯文が貼付される。前者は縦・横位に無文の凸帯文、後者は刺突文の施された凸帯文が横位に2条貼付される。

Dウは図240～243の4点を図示した。いずれも凸帯文を貼付し、図241・243の凸帯文上は無文である。有文の凸帯文は2点で、図240は刻目文を施した凸帯文を横位に圍繞させ、その上下に沈線文を浅く施している。図242は刺突文を施した凸帯文をほぼ直角に曲げて貼付し、その周囲にはラフな細沈線文を施している。

V類（フェンサ下層式土器相当）

図244～256に13点を図示した。出土数が少なく、HC73点、HB③39点で、計112点である。地区別に見てもHCでは僅か3.8%、HB③も5.9%の割合で、全体的に出土量が少ない。第65図に示した平面分布を見ると、HCでは貝層Ⅲ群のあるグリッドでの出土は減り、貝層Ⅱ群辺りのグリッドで多く出土するなど、同じくびれ平底を要するIV類とは若干の違いが見られる。HB③は耕作土層故か、他の土器とほぼ同じ出土状況を示す。層位的に見ると、HCの貝層Ⅲ群では上位層（1・2層）で6点が得られたが、下位層（4・5層）では出土せず、同じくびれ平底を持つIV類とは出土状況が異なり、若干の時期差があるものと思われる。

底部では貝層Ⅲ群5層から4点のくびれ平底が出土しているが、いずれもV類には属さない。1点は図127（Ⅲ類）と類似し、図示した図355はIV類、報告外の2点も胎土等からⅢ・IV類の底部の可能性が考えられる。

また、第20表からサイズを見ると、V類は小型②・中型①の小振りな土器が目立つ。V類にも

有文土器が見られるが、Ⅱ・Ⅳ類に比べるとかなり少なく、無文化が進む。第15表を見ると、口唇部のみが多く、両地区合わせて6点の出土である。

V類は鉢・甕形と壺形が得られ、前者は口縁部の形状によってA～C、後者はDとした。

- A：口縁部が外反するもの
- B：口縁部が直状するもの
- C：口縁部が内湾するもの
- D：壺形

Aは図244～248の5点を図示した。図244～246は無文で胴部が余り張らない。図247の口唇部に刻目文が施されている。いずれもハケ目が明瞭で、図248の外面には7本1組のハケ目数が明瞭

第21表 土器(胴部) 出土量

遺跡層	分類	貝塚	貝塚時代後期												合計		
			前・中期	I類	II類		III類		IV類		IVor V類	V類		不明			
					有文	無文	有文	無文	有文	無文		有文	無文	有文		無文	
HC	I			5		129		7		1	1		8	1	46	198	
	II			2		75		3		2					46	128	
	IIc	遺構				45							7		26	78	
	III			1		64		3					1		22	91	
	IV					1	2									3	
	V		1	26	5	2,980		395	18	300	5	1	273	17	826	4,847	
	V	貝層II群	a				7							1		13	21
			b				64									11	75
			c				145									9	154
			d				41					10		8		38	97
			e				11									16	27
			f				137				3					52	192
			g				27							11		21	59
			h				110		5					8	2	47	172
			i			1	64				1			12		51	129
		不明						1		1					2	4	
		貝層III群	1			1	490		3			1		11	6	211	723
			1a				152			3	16	2		3	2	11	189
			1b				456		43	4	2	1		34	4	272	816
			2	8	4	2,336		154	6	12	15		88	8	783	3,414	
			3	2		577	1	77	2	4	1		4	3	84	755	
			4	6		682	1	12	1				1	2	64	769	
			5	86	10	3,124	1	2			2				10	263	3,498
			不明	6		96		18			1		5	1	36	163	
	貝層IV群		1		31					1					24	57	
	貝層V群	1	1	167		12			1					22	204		
	不明		12	1	488	1	39	2	23	9		29	8	239	851		
	HC小計		1	156	23	12,499	6	774	36	370	45	1	504	64	3,235	17,714	
	HB③	I			3		71		2					2		14	92
		IIa	遺構		2												2
		IIb					18		1		1			6		4	30
		IIb	遺構		1												1
		IIc	遺構	1	3	1	112		1				1	1	9	129	
		III			8	7	1177		17	1	12		1	8	8	146	1,385
		III	遺構				40		1				1		3	45	
IIIa				1		119		4		1		1	1	30	157		
IIIb				10	2	276		6		4		3	1	37	339		
IIIc				26	6	1343		35	5	14		5	7	160	1,601		
IIIc		遺構		1		8									9		
III d				72	18	2652	1	117	6	104	2	1	74	13	476	3,536	
III d		遺構				3									1	4	
IIIe				4	2	248		3		14			16	2	45	334	
IV				4	1	295		35	1	7			4	2	28	377	
V															1	1	
不明				3		252		1		23			2	3	63	347	
HB③小計		1	138	37	6,614	1	223	13	180	2	2	123	38	1,017	8,389		
HC+HB③合計		2	294	60	19,113	7	997	49	550	47	3	627	102	4,252	26,103		

HC IIc:クムイ.SK01.02.P01

HB③ IIa:SD01.祝殿小-SL IIb:SK13 IIc:SK32 石列1群 石列4群-SL01 SL07

III:P04.20 SB02 SB02-P2 SK33.36.38.40 IIIc:SD04 III d:SK44

に残る。本資料はⅢ類の図 143 と類似する。

B は図 249 ～ 251 の 3 点を図示した。図 249 は口唇部に刻目文が施され、口径は 16.8 cm を測る。図 250・251 は頸部の粘土接合部分で一端屈曲し、胴部がやや張る。後者の口径は 11.2 cm を測る。口唇には深い刻目文が 1 個施され、外面には縦位、内面には横位のハケ目が残る。

C は図 252 の 1 点を図示した。口縁部の上端が内湾し、口唇部はやや波状で舌状を呈する。

D は図 254 ～ 256 の 3 点を図示した。図 254 は口縁部が僅かに外反し、口径が 4.4 cm と小型の壺である。頸部以下が得られず、全体的な形状は不明である。図 255 は長頸部の破片で、直状を呈する。上部の上面観は丸みを呈する「V」字状、下部は楕円状を呈することから片口口縁が想定される。図 256 は口～胴下半部まで得られ、復元を試みた。口縁部は外反し、頸部がくびれて胴部は張る。底部は得られなかったが、くびれ平底を想定し、同グリッド⁶・同層出土の底部を参考にした。両面ともケズリ様の調整痕が残る。口径が 10.1 cm と大きい。口径の大きさや形状から壺形とした。

その他、口縁部の上端が屈曲し、受け口状を呈する図 253 を図示した。グスク土器にも類似するが、胎土、混和材等から貝塚時代後期の範疇に含めた。薄手で、屈曲部は明瞭な角を持つ。

また、第 13 表の土器出土量において小破片のために分類出来なかった不明土器が多数得られた。Ⅴ類には相当しないことからⅡ・Ⅳ類の範疇と思われる資料である。層位的にも貝層Ⅲ群 5 層出土が多く、同層における底部の出土量からしても、無文の不明口縁部の大半はⅡ類の範疇に収まる可能性が考えられる。平面分布においてもほぼⅡ類と重なり、同層より得られた不明の有文口縁はⅡ～Ⅳ類のいずれかに属するものと考えられる。

2. 胴部

胴部も多量に出土し、地区ごとに出土量を第 21 表に、平面分布を第 67 図に示した。主な遺物は口縁部の項で記述している。

HC の胴部は 17,714 点の出土で、分類別に見るとⅡ類が 12,522 点と最も多く、胴部出土量の 70.7% を占める。次がⅢ類の 780 点であるが、4.4% の割合とかなり少ない。口縁部と胴部においては分類別の割合に若干の違いが見られた。

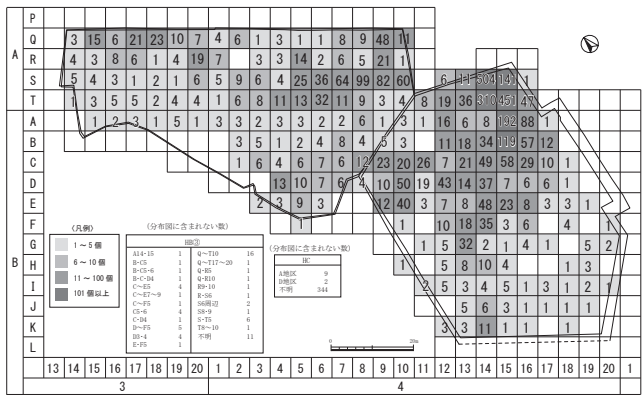
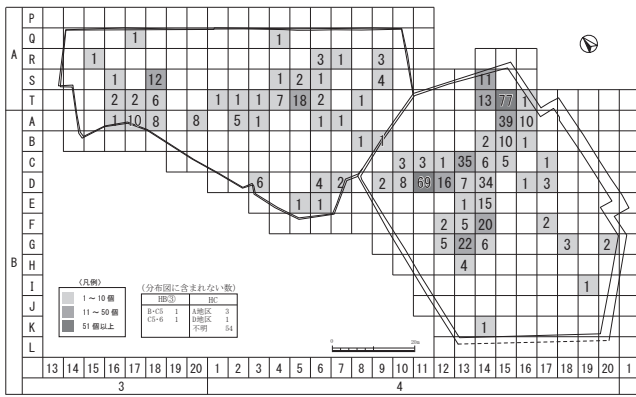
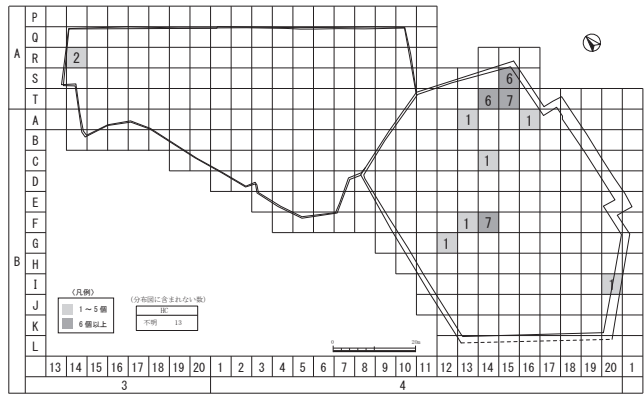
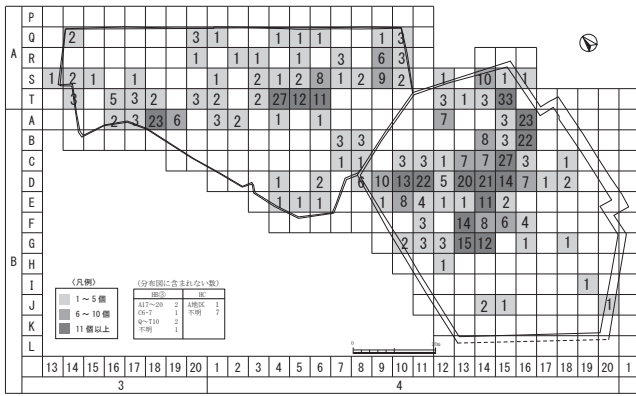
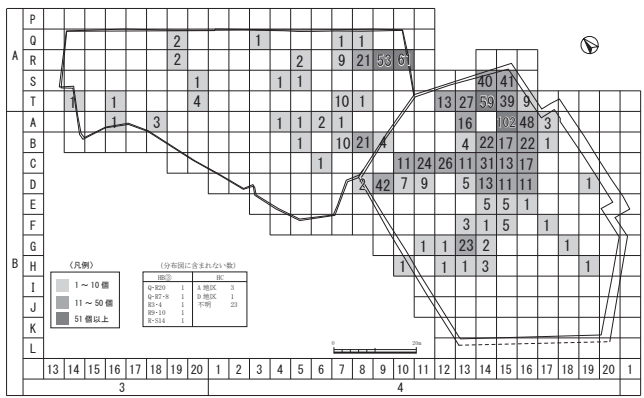
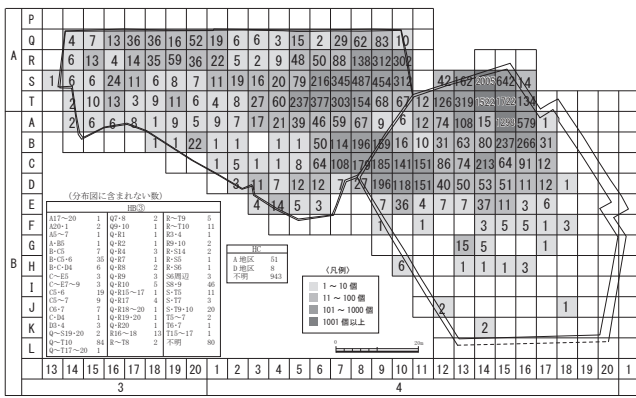
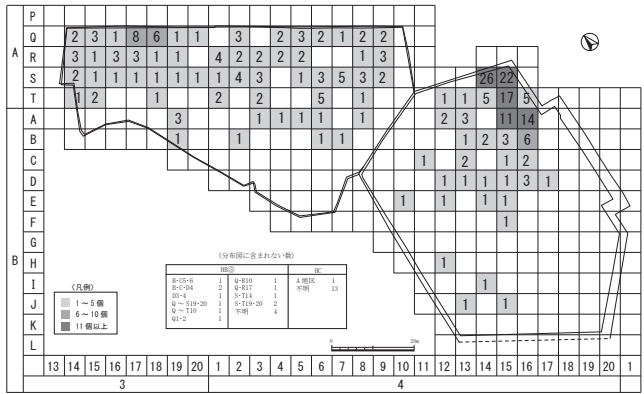
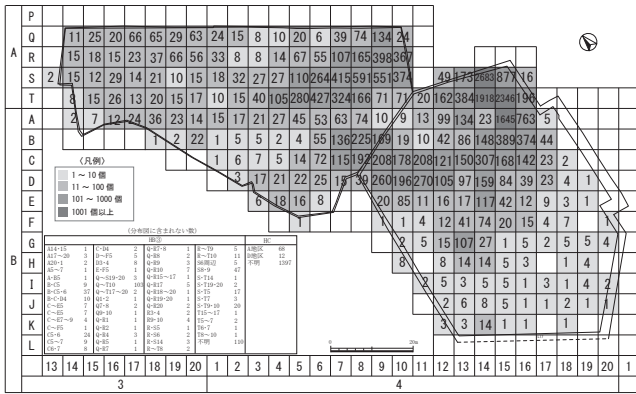
HC の胴部出土状況を見ると、第 67 図の平面分布においてⅠ～Ⅳ類までは口縁部とほぼ同じ出土状況を示すが、Ⅴ類のみ若干異なる。貝層Ⅲ群での出土も多く、そこで得られた図 143 (Ⅲ類 c) はⅤ類にも類似し、小破片の胴部だとⅤ類に分類された可能性がありうる。

層位的に見ると、貝層Ⅲ群出土が 10,327 点と全出土量の 58.3% も占める。詳細に見ると、貝層Ⅲ群の上位層 (1・2 層) で 5,142 点、下位層 (4・5 層) で 4,267 点と胴部においては前者の出土量が多く、口縁部と異なる出土状況が見られたが、破片が多いため個数が増加したものと考えられる。最も多く出土したⅡ類は貝層Ⅲ群で 7,928 点を得られ、同群の出土量では 76.8% と高い割合を示した。Ⅴ層でもⅡ類が 2,985 点と多量に出土し、同層で 61.6% の割合を占めることから、胴部においてもⅡ類が主体となることわかる。

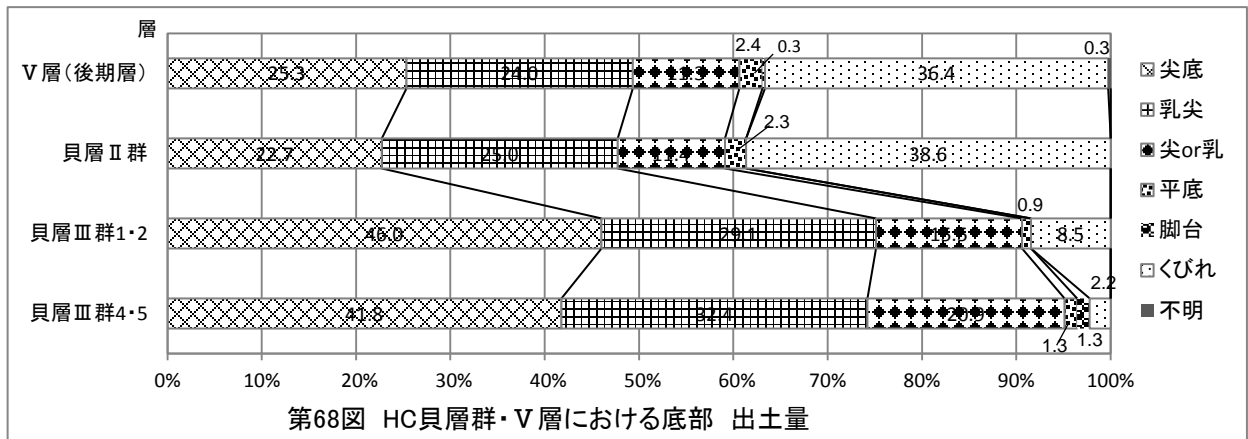
HB ③は 8,389 点を得られ、Ⅱ類が 6,651 点と最も多く、79.3% の割合を占める。胴部も口縁部と同じく、Ⅲ d 層出土が最も多く、次にⅢ c・Ⅲ層と続く。第 67 図の胴部平面分布では個数の差はあるが、いずれも口縁部と同じ出土状況を示した。

3. 底部

底部は HC1,067 点、HB ③ 423 点と総数 1,490 点を得られた。底部まで復元出来た土器は、口縁部として集計を行っている。全体の出土状況を把握するため第 70 図に平面分布、第 22 表に出土量を示し、整理作業の指標とした。底部は形状により A: 丸底、B: 尖底、C: 乳房状尖底、D: 脚台、E:



第 67 図 土器（胸部）平面分布



第68図 HC貝層群・V層における底部 出土量

平底、F：くびれ平底に分類した。平安山原B遺跡（2015）の底部の器種別と比べると、今回は尖底が乳房状尖底より若干多く出土している。第13表の口縁部出土量からII類（大当原式土器）が多く得られるなど、形式の違いによるものと考えられる。II類は接合面の隆起が明瞭な大当原貝塚出土タイプの他に、薄手で粘土接合面の隆起が目立たない（II類C）ナガラ原西貝塚出土タイプも見られた。後者のタイプは尖底を呈する

割合が高いと考えられるが、底部との関係は把握出来なかった。本遺跡の底部は層位的・分布状況、あるいは胎土・器面調整などから大方A～E（尖底系）とF（くびれ平底）に分けられる。中には並行期？の底部なのか、その分類に当てはまらないものも僅かに見られる。全体の割合を見ると、尖底系はHCで76.1%、HB③で80.9%を占め、くびれ平底はHCが23.5%、HB③が19.1%といずれもほぼ8対2の割合となる。HB③における平面分布（第70図）から見ると尖底系・くびれ平底とも遺跡全体から出土する。その中で北東側にあるIII d層で大半が出土し、尖底系はS・T6～9辺りでの出土が目立つ。HCは地形の関係上、砂丘のある北側での出土が大半で、特に貝層III群辺りのグリッドで集中して出土する。第68図にHCのみ貝層群とV層における種類別の出土状況を横棒グラフに示した。尖底系とくびれ平底の出土量の割合は、貝層III群での上位層（1・2層）・下位層（4・5層）ともほぼ8：2の割合、貝層II群、V層ではほぼ6：4の割合となり、時期差や併存期があるものと考えられる。貝層III群と貝層II群、V層では貝製品の出土量や貝種にも違いが見られ、土器の出土状況と関係してい

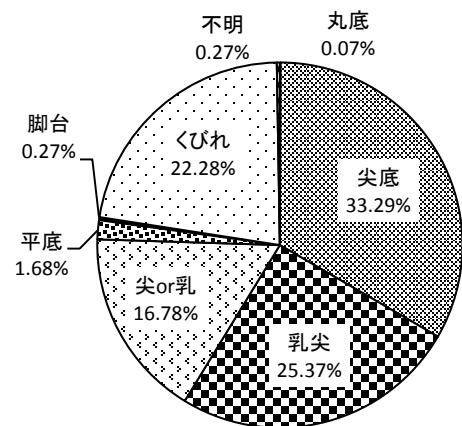
第22表 土器（底部） 出土量

遺跡	層	分類	丸底	尖底	乳尖	尖or乳	脚台	平底	くびれ	不明	合計		
HC	I	I		2	4	3		1	3		13		
		II		3					5	2	10		
		IIc	遺構			1	1			4		6	
		III			1	2	1			1		5	
		IV			1					5		6	
	V	貝層II群	b			1						1	
			c		2	4	3					9	
			d			1					5		6
			e								1		1
			f		3	2					3		8
			g				1		1	1			3
			h		2	1					3		6
			i		3	2	1				2		8
			不明								2		2
			貝層III群	1		11	13	5		1			
		1a					3						3
		1b			5	6	8				3		22
		2			82	43	17		1	15			158
		3			21	8	12		1	1			43
		4		8	4	5		1	1			19	
5		86	69	42	3	2	4			206			
不明		3	4	1				1		9			
貝層IV群		1	2							3			
貝層V群		3	5	3				1		12			
不明			14	22	14		1	55	1	107			
HC小計			0	345	283	162	4	18	251	4	1,067		
HB③	I	I		2	1				4		7		
		IIb		1							1		
	IIc	遺構		3				1	1		5		
	III	III		21	15	17				14		67	
		III	遺構		1	1						2	
	IIIa		1	7	3	5			5		21		
	IIIb			5	6	3			2		16		
	IIIc			25	24	13		3	11		76		
	IIId			72	37	40		3	35		187		
	IIId	遺構							1		1		
	IIIe			8	4	7			6		25		
	IV			2	2	2			1		7		
不明			4	2	1			1		8			
HB③小計			1	151	95	88	0	7	81	0	423		
HC・HB③合計			1	496	378	250	4	25	332	4	1,490		

HC: IIc クムイ・SK02 HB③: IIc・SK32・石列1群・石列4群-SL07

HB③: III SK36 HB③: IIIc・SD04 HB③: IIIe・SX03

ることが窺える。貝層Ⅲ群出土の底部は490点で、層位不明なものを除いて1～5層全体では尖底が457点(95.0%)、くびれ平底系は僅か24点(5.0%)の割合である。層位別に見ると尖底系は2層で143点、5層で202点、くびれ平底系は2層で15点、5層で4点の出土である。V層でも尖底系は235点(63.3%)と多く、くびれ平底は135点(36.4%)が出土している。くびれ平底のみを見ると、貝層群よりV層からの出土が多い。このように、層位的にはV層で尖底系土器とくびれ平底土器、貝層群で尖底系土器が多量に出土する状況を見せる。異なる層序から出土する尖底系土器に違いが見られるのか、今回は判別出来なかった。貝層Ⅲ群を上位層(1・2層)、下位層(4・5層)に分けて見ると、尖底系は上位層で195点、下位層で220点、くびれ平底は上位層で18点、下位層で5点の出土である。口縁部・胴部においてV類は出土しないことから、同じくびれ平底であるIV類に相当するものと考えられる。



第69図 底部器種別 出土量

このように貝層群は尖底系を中心とする時期だが、くびれ平底も2割近く出土することから併存していた可能性が想定される。さらに貝層Ⅲ群2層から出土した図143は、口～底部近くまで両面にハケ目が明瞭に残り、全体の形状や大きさ、胎土等から見ると貝塚時代後期後半の型式が考えられるが、底部はほぼ尖底が想定される資料も得られている。底部も口縁部と同じく平面分布を整理作業の指標とし、出土量も合わせて全体の状況把握を行った。以下、個々の遺物の詳細は第24表の観察一覧に示し、特徴的なものについてそれぞれ形状別に記述する。

A：丸底

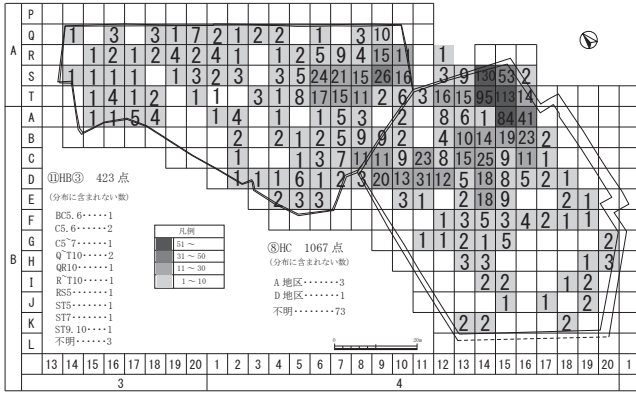
丸底は図257に示した1点のみで、HB③Ⅲa層出土である。平底とも考えられるが、外底が僅かに丸みを呈することから丸底とした。砂質が強く手触りはざらつく。角閃石を混和材としていることから、僅かに出土したI類(浜屋原式土器)の底部が想定される。

B：尖底

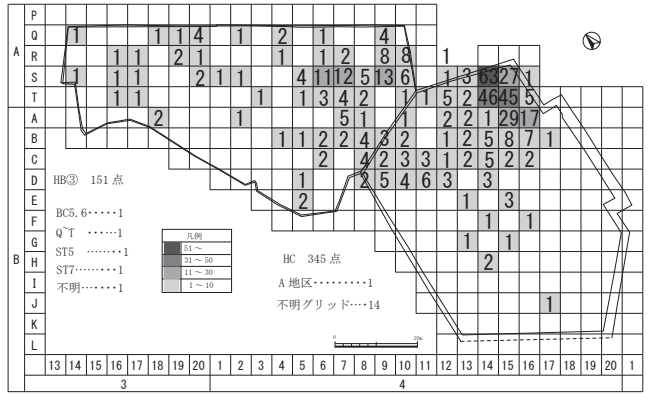
尖底はHCが345点、HB③151点で計496点と最も多く得られ、図258～293に図示した。第69図の底部器種別の円形グラフを見ると、33.3%の割合で最も多い。第70図の平面分布を見ると、HB③ではほぼ遺跡全体から出土し、HCに近いS6～9で割と集中している。層位的には耕作土層と考えられるⅢd層出土が多いが、これは全てV層由来の遺物と思われる。HCは貝層Ⅲ群のあるS・T14・15、A15・16等から多数出土し、V層からも得られるが、貝層Ⅲ群に比べて出土数は少ない。尖底は外底の形状が様々で、平安山原B遺跡(2015)の分類に合わせて以下のように分けて記述する。

- a：外底が丸底的で立ち上がりが急なもの
- b：外底が尖り気味なもの
- c：外底がやや平らで底径が小さいもの(底径2.5cm以下)

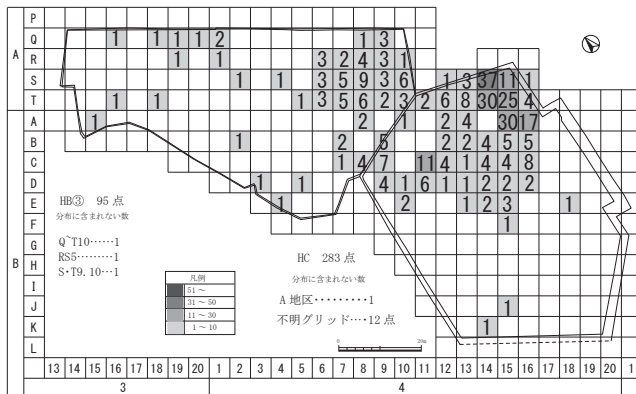
aは図258～274の17点を図示した。図258～260は外底が丸みを呈し、胴部への立ち上がりも膨らみを呈する。外反が急なことから、小型或いは壺の底部の可能性が考えられる。図258の内底には放射状にハケ目痕が4本1組の工具で施され、規則的である。外面の丁寧なナデ調整、胎土等からくびれ平底系の時期の可能性も考えられる。図259は胎土に石英を多量に含み、外面はナデ調整が丁寧である。図260は前二者に比べ立ち上がり部が緩やかであるが、底面の状態からaに分類した。外底の中央部を指で押し、若干円形状に窪ませている。図261・262も外底が丸みを呈するが、立ち



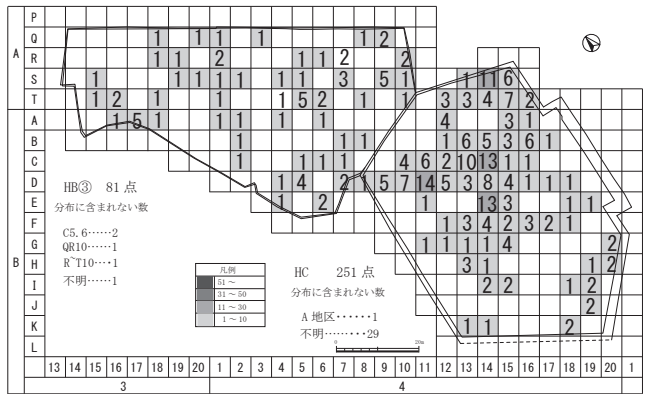
土器（底部）全体



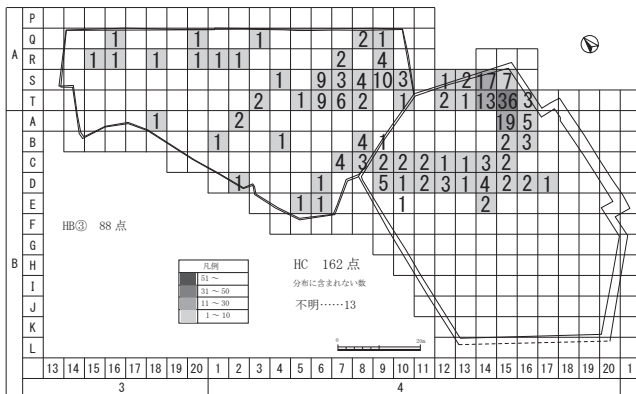
尖底



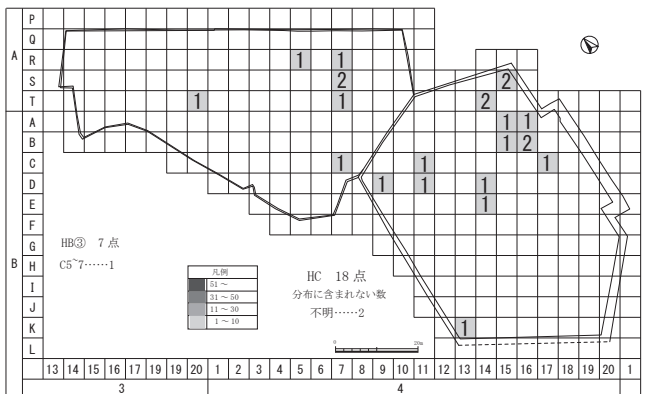
乳房状尖底



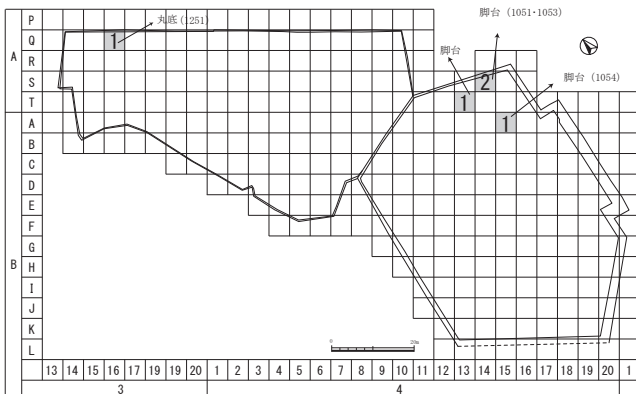
くびれ平底



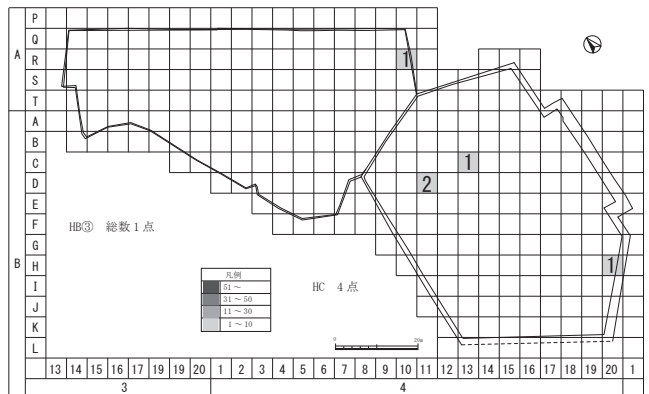
尖底 or 乳房状尖底



平底



脚台・丸底



不明土器

第70図 土器（底部）平面分布

上がりはやや直線的で外反する。このタイプは重量感のある底部が多い。図 261 は外面が指やヘラナデにより器面に起点が残り、乳房状尖底にも見えるが、全体の形状から尖底とした。図 262 は外底に粘土を貼付し、丸底的な尖底で、他に比べて外反が大きい。図 263 は底厚が厚く、割と大振り、手に持つと重量感がある。図 264 ～ 274 は上記に比べて外底の丸みがやや小さく、全体的な形状を見ると外呈の尖りがやや目立ってくる。HC 出土の図 267 ～ 269 は外反が大きく、底厚もあまり厚くならない。図 269 は胎土や器厚などの特徴が口縁部の図 182 に類似し、同一個体の可能性が考えられる。ただ、本資料は尖底で、図 182 はIV類（アカジャンガー式土器）と想定したもので、既存の器形より外れる。同資料と施文部位の違いはあるが、伊礼原D遺跡（2013）においても丸底的尖底が見られることから資料の追加を待ちたい。このように、aに分類した中にはIV類の有文タイプの底部が含まれている可能性がある。図 263・265・266 は外反がやや強く、立ち上がりが急である。図 274 は外面の器面調整により乳房状尖底にも見えるが、全体的な形状から尖底に分類した。

bは図 275 ～ 285 の 11 点を図示した。図 275 ～ 279 は底厚があまり厚くなく、外底は尖りが顕著である。器面調整を見ると外面は丁寧なナデ調整が施されている。図 280 ～ 285 は底厚が厚く、外底はやや尖る。外面の粘土接合面は明瞭で、やや雑に仕上げているものが殆どである。図 283 は外底がやや潰れており、混和材も他に比べると粗く多量に含まれる。全体的に立ち上がりは直線的でスムーズに外反する。

cは図 286 ～ 293 の 8 点を図示した。外底が平らなため平底にも見えるが、尖底の底を潰すか、或いは平らに整えていることから尖底で扱った。外底が平らなことから底径が計測出来、大半が 2.8 cm以下である。図 286・287 は底厚がやや薄く、外面のナデ調整もやや丁寧である。図 288 は底厚が厚く、粘土接合面が明瞭である。図 289 ～ 292 は底厚がより厚く、重量感がある。図 293 は底厚が厚いが、やや泥質で軽い。他に比べて底径が 2.8 cmとやや大きく、くびれながら立ち上がる。

C：乳房状尖底

乳房状尖底は尖底に次いで多く出土し、その内訳はHCが283点、HB③95点の計378点である。第22表の底部出土量を見ると、25.4%の割合である。第70図の平面分布を見ると、尖底と同じ分布状況を示し、尖底 or 乳房状尖底もほぼ同じである。HCでは貝層Ⅲ群での出土が最も多く、V層では少なくなる状況を見せる。HB③は遺跡全体から得られ、若干S7～9で多く、尖底と同じくⅢd層出土が多い。図294～326に33点を図示した。大半は大当原式土器と考えられる。乳房状尖底はバラエティーのある形状を呈するものが多く、下記のようにa～cに分け、さらに外底の違いによりア～ウに細分した。

- | | |
|----------------------------|------------|
| a：乳頭部が小振り（底径 2.0 cm以下） | ア：外底が丸いもの |
| b：乳頭部が中振り（底径 2.1 ～ 3.4 cm） | イ：外底が平らなもの |
| c：乳頭部が大振り（底径 3.5 cm以上） | ウ：外底が凹むもの |

aは外底の形状を見るとア～ウの三タイプがあり、それぞれ分けて記述する。aアは図294～297の4点を図示した。図294は胴下半部まで残り、粘土接合面もやや明瞭である。薄手（3mm）で、外面にはハケ目が残る。図295は乳頭部の粘土貼付痕が明瞭である。図296は厚手で、重量感のある底部である。外面上部にはハケ目が僅かに残る。図297は尖底にも近いが、不明瞭ながら乳頭部に粘土貼付が見られることからここに含めた。

aイは図298～300の3点を図示した。図298は外底に薄く粘土を貼付し、やや不安定な外底である。立ち上がりは急で、小型の可能性が考えられる。図299・300は外反が強く、後者は外底に粘土を貼付している。

aウは図 301・302 の 2 点を図示した。いずれも中央部の凹みは円形状で、やや深い。

bアは図 303・304 の 2 点を図示した。いずれも HB ③の出土で、乳頭部は b の中でも 3.2 cm と大きい方で、c に近い。前者は底厚が厚く、内外面とも不揃いである。いずれも外底に粘土を貼付しているのか、調整の痕なのか、不明瞭である。

bイは図 305～314 の 10 点を図示し、若干の凹みが見られるものは全体的な形状から b に含めた。全体的に乳頭部は高いものが殆どである。図 305 は乳頭部のみが残存し、中央部が若干凹む。図 306 は不揃いで、粘土接合面が明瞭である。調整も雑で、器面全体の手触りがざらつく。図 307 の外面は雑、内面はナデ調整が丁寧である。図 308 は立ち上がり部が一部器面調整により左右非対称な形状となる。割と堅致な胎土である。外面には調整痕または文様とも思われる 2 条の長沈線が不規則ながら弧状に施される。図 309 は胎土から浜屋原式土器の底部と考えられるものである。外底には明瞭に粘土を貼付した痕が見られる。図 310 は外底が平らで、乳頭部の側面をナデによりくびれ部分を呈する。図 311～313 はいずれも底厚が厚く、乳頭部の形状が類似し、図 313 は外底の中央部が若干凹む。図 314 は他に比べて底厚がやや薄く、立ち上がりの角もやや丸みを呈する。外底の中央部は若干凹み、外底の手触りからすると少し摩耗している。

bウは図 315～320 の 6 点を図示した。いずれも底径は 2.4～2.8 cm と小さく、外底の中央部が円形状に凹む。

大振り外底が丸みを呈する Cアは出土しなかった。

cイは図 321・322 の 2 点を図示した。いずれも底厚は厚く、底径は前者が 3.7 cm、後者は 4.5 cm と大きい。

cウは図 323～326 の 4 点を図示した。前三者は外底の凹みが深く、図 326 のみ浅い凹みである。凹みの形状は図 325 が方形状、他は円形状を呈する。図 323 の凹みは他に比べて 1.5 cm とより深い。図 323・324 は脚台を意図して作製されたのか、凹みの内側も丁寧なナデ調整が行われている。

D：脚台

脚台は僅か 4 点の出土で、全て HC からの出土である。その内訳は 3 点が HC 貝層Ⅲ群 5 層、1 点は V 層の出土で、出土状況は尖底系とほぼ重なる。胎土や大きさなどから全て在地の土器と思われ、図 327～329 の 3 点を図示した。本町の伊礼原遺跡（2014）で出土した在地の脚台（第 40 図 24）は搬入土器に比べて小さく、本遺跡出土の脚台も底径を見ると図 328 は 4.8 cm、図 329 は楕円状の外底で 5.8 × 6.4 cm と小さい。図 327 は底面が破損しているが、形状から脚台とした。後者の 2 点に比べて小型で、内底には煤が付着し、黒褐色を呈する。図 328 は外底が上げ底で、立ち上がりはくびれて外反する。図 329 は外底の上げ底が図 328 に比べて高く、底厚はやや薄くなる。

E：平底

平底は HC18 点、HB ③ 7 点の計 25 点で、第 69 図の器種別出土量の円グラフから見ると僅か 1.7% の割合でしかない。図 330～344 に 15 点を図示した。本遺跡出土の平底は尖底の c に類似し、底径が 3.0 cm 以上のものは平底とした。平底の大半が乳房状尖底と同じ胎土や混和材を呈し、同時期が想定されるが、中にはくびれ平底に近い胎土を持つものも見られる。平底も形状により以下のように分けた。

a：立ち上がりの角がやや丸みを呈するもの

b：立ち上がりの角がやや角を呈するもの

a は図 330～343 の 14 点を図示した。アは胴部の形状が様々で、以下の様にア～ウに分けた。

ア：やや丸みを持って胴部へ移行するもの

イ：立ち上がりの角から直線的に胴部へ移行するもの

ウ：僅かにくびれながら胴部へ移行するもの

aアは図 330～335 の 6 点を図示した。図 330 は底径が 2.8 cm と小さく、尖底とも思われるが、外底がより平らで全体的な形状からここに含めた。底厚が薄いものは図 330～333、厚いものは図 334・335 である。Aアは全体的に尖底の流れを汲むものと考えられる。

aイは図 336～339 の 4 点を図示した。図 336 は底径が 3.6 cm と小さく、内底は平らな面を呈する。底厚が薄いものは図 336・337、厚いものは図 338・339 である。図 339 の内底は盛り上がる。

aウは図 340～343 の 4 点を図示した。底厚はいずれも厚く、くびれて胴部へ立ち上がるために外反がやや強い。内底は斜位が殆どである。

b は図 344 の 1 点を図示した。本資料は立ち上がりに角を持ち、全体的に若干くびれる。本資料はくびれ平底にやや近い。

F：くびれ平底

くびれ平底は HC251 点、HB③ 81 点の計 332 点が得られ、前者の地区で 75.6% を占める。第 22 表の底部出土量を見ると、くびれ平底は 22.3% の割合を占める。第 70 図の平面分布では HC・HB③ とも遺跡全体から出土する。HC では尖底系は V 層で 235 点、貝層Ⅲ群で 465 点と後者で多量に出土するが、くびれ平底は V 層で 135 点、貝層Ⅲ群で僅か 25 点の出土と、尖底系とは異なる状況を見せる。貝層Ⅲ群の南側にあるグリッドの V 層出土が 135 点と目立つ。

HB③はⅢ d 層で 36 点が出土し、くびれ平底の出土数の 44.4% と高い割合を占める。次いでⅢ層の 14 点、Ⅲ c 層の 11 点と続く。第 23 表に底厚と底径との関係を図示した。

また、貝層Ⅲ群の 5 層より得られた図 396 は、底径が 9.0 cm とかなり大きく、胎土が図 127 と同胎土を呈する。図 127 は口縁部が外反し、胴部の張りが強い厚手の土器で、胎土は大当原式土器にも類似する。ただ、粘土接合面の隆起があまり目立たず、形状も異なることからⅢ類としたもので、層位的には同層である。形状で分類した為今回くびれ平底で扱ったが、今後は時期、形式等において注意を要する資料である。以下、くびれの形状により a～d、底厚の厚さでア～エに分類し、順に記述する。

- | | |
|------------|-----------------------|
| a：くびれが微弱 | ア：底厚が厚い（1.4 cm 以上） |
| b：くびれが弱 | イ：底厚がやや厚い（1.0～1.3 cm） |
| c：くびれが明瞭 | ウ：底厚がやや薄い（0.6～0.9 cm） |
| d：くびれがより明瞭 | エ：底厚が薄い（0.5 cm 以下） |

a は図 345～350 の 6 点を図示した。底径が 5.0 cm 以下の小さいものは図 345～349 の 5 点で、前 2 者は底厚がア、図 348 はイ、図 347・349 はウに分類される。底径が 6.2 cm とやや大きな図 350 はイに分類される。

b は図 351～373 の 23 点を図示した。くびれ平底の中では c と共に多い形状である。底径も様々で、5.0 cm 以下の小さいものから 8.0 cm サイズまで出土する。

底径が 5.0 cm 以下は図 351～358・360 の 9 点で、底厚はアが図 360 の 1 点、イが図 351～353・358 の 4 点、ウが図 354～357 の 4 点である。図 351 は底径が 3.4 cm と小さく、乳房状尖底にも近い。図 352～355 は形状が類似し、図 356 は外底の調整が雑で、内面にハケ目が見られる。

底径が 5.1～6.0 cm は図 359・361・362・366・367 の 5 点で、底厚はアに分類されるのは図 361・362 の 2 点で、いずれも外底が若干上げ底となる。底厚がイに分類されるものは図 359 の 1 点で、底厚がウに分類されるものは図 366・367 の 2 点で、外面のナデ調整は丁寧、内面にはハケ目が見られ

る。器厚は薄手である。

底径が 6.1～7.0 cm は図 363～365・368～371 の 7 点である。底厚を見ると、アに分類されるものは図 363 の 1 点、イは図 364・365・371 の 3 点、ウは図 368・369 の 2 点、エは図 370 の 1 点である。図 365 の外底には円形状の粘土を貼付し、不安定な底面となる。図 368 は器厚が薄く、内底は盛り上がる。

底径が 7.1 cm 以上は図 372・373 の 2 点である。図 372・373 は底径が 8.0 cm とかなり大きい。底厚は前者がイ、後者がウに分類される。

c は図 374～395 の 22 点を図示した。c のくびれ平底は、胎土などから IV 類より V 類と思われるものが多い。

底径が 5.0 cm 以下は図 374 の 1 点で、底厚はエに分類される。

底径が 5.1～6.0 cm は図 375～380 の 6 点を図示した。底厚を見ると、アは見られず、イは図 380 の 1 点、ウは図 377～379 の 3 点、エは図 375・376 の 2 点である。

底径が 6.1～7.0 cm は図 381～391 の 11 点で、底厚はアが図 382 の 1 点、イが図 386・388・389 の 3 点、ウが図 381・383～385・387・391 の 6 点、エが図 390 の 1 点である。図 382 は他とやや異なり、立ち上がりの角がやや丸みを呈する。

底径が 7.1 cm 以上の大きなものは図 392～395 の 4 点が得られ、底厚は全てウに分類される。胎土は全て砂質である。

d は図 396 の 1 点を図示した。底径は 9.0 cm と大きく、底厚も 1.9 cm を測る。外底には指で押し込んだような円形状の凹みが二個見られ、立ち上がりは外反度が強い。出土地は HC 貝層 III 群 5 層である。本資料は形状から F に分類したが、他のくびれ平底と胎土や厚さ、混和材等に違いが見られ、口縁部の項で記述したように図 127 に近く、時期が若干異なる可能性が高い。

図 397 はくびれが弱であることからくびれ平底の a に分類出来る資料だが、他の a と外底の形状が異なることから今回は外して不明とした。外底に円形状の凹みが見られ、高台を呈するような作りとなっている。

第 23 表に計測可能なくびれ平底を対象に底径と底厚の関係を示し、平安山原 A 遺跡 (2016) とほぼ同じ傾向を見せた。底厚はいずれの地区も 0.6～0.9 cm が最も多く、次に 1.0～1.3 cm と続く。底径は両地区で違いが見られた。HC では底径 5.1～6.0 cm が 49 点と最も多く、HB ③は 6.1～7.0 cm が 11 点と多く得られた。次に多い底径は HC で 4.1～5.0 cm が 32 点、6.1～7.0 cm が 31 点とほぼ同数である。HB ③は 5.1～6.0 cm が 6 点、4.1～5.0 cm が 4 点である。両地区を合わせて見ると、底径が 5.1～6.0 cm が 55 点と最も多く、次いで 6.1～7.0 cm が 42 点と続く。4.1～5.0 cm も 36 点が得られ、くびれ平底の底径はほぼこの範疇に収まる。平安山原 A 遺跡では、底厚が 1.4～1.9 cm の厚手のものは底径が 5.1～6.0 cm、4.1～5.0 cm と両方の底径値に多く見られたが、本遺跡では底径 4.1～5.0 cm に多く見られ、底径がより小さくなる傾向を示した。

くびれ平底は口縁部の IV 類・V 類の両形式に伴う底部形状で、両者を区別しようと試みたが、今回も口縁部との関係が掴めなかった。本遺跡で復元出来た図 174 は砂質で赤色粒を含み、ハケ目により器面調整も丁寧に行われていることから IV 類として捉え、本資料と本町の小堀原遺跡 (2012)、

第23表 くびれ平底 底径・底厚の関係

遺跡 分類	底径 (cm) 底厚 (cm)	4.0	4.1	5.1	6.1	7.1	不明	合計	
		以下	～ 5.0	～ 6.0	～ 7.0	以上			
HC	厚手	2.0以上		1			3	4	
		1.4～1.9		5	3	1	1	11	
	薄手	1.0～1.3	1	3	7	4	4	10	29
		0.6～0.9	2	5	12	11	5	20	55
		0.5以下		1	2			3	6
	不明		17	25	15	3	84	144	
HC小計		3	32	49	31	13	121	249	
HB ③	厚手	2.0以上							
		1.4～1.9			1	1		4	6
	薄手	1.0～1.3		3	2	3		9	17
		0.6～0.9	2	1	1		1	18	23
		0.5以下				3		5	8
	不明			2	4	1	19	26	
HB③小計		2	4	6	11	2	55	80	
HC+HB③合計		5	36	55	42	15	176	329	

伊礼原遺跡（国指定外・2014）の復元土器も参考にして両者を比べて見た。IV類はV類に比べてサイズが大きく、胎土も砂質が多い。口縁部が外反し、頸部でやや窄まり胴部は張るものが多い。V類は泥質が多く、小型化する傾向が見られ、口縁部が外反し、胴部は直線的でそのまま底部へと移行するものが多い。いずれのくびれ平底もHC・HB③の両地区で見られるが、HC貝層Ⅲ群におけるくびれ平底を見ると、下位層（4・5層）出土のものは砂質で、底径や底厚等の特徴からIV類またはⅢ類のくびれ平底に相当することが窺える。上位層（1・2層）出土のくびれ平底は泥質が多く、底厚や器厚等の特徴からV類の底部と考えられる。

また、図143は口縁部のみだと泥質でハケ目が見られることからV類とも捉えられるが、底部は尖底が想定されることや形状等から、今回はⅢ類に分類した。今後、検討を要する。

小結

HC・HB③ともⅡ類（大当原式土器）を主体とし、HCではV層や貝層群で多量に出土した。粘土接合面の隆起が明瞭なA・Bが多いことから、両地区のⅡ類はやや古手と考えられる。中には、隆起が目立たないCや内面にハケ目が顕著に見られるものもあり、今後、細分の必要性がある。

また、貝層Ⅲ群ではⅡ類の他に、上位層（1・2層）でIV・V類、下位層（4・5層）でIV類が少量得られており、時期差はあるもののIV類はⅡ類と併用の時期があると考えられる（第14表 貝層Ⅲ群の層位別出土状況、第22表 HC底部種類別の層位出土状況を参照）。

また、V類は貝層Ⅲ群よりV層での出土が多く、貝層Ⅲ群においても下位層出土は殆ど見当たらない。平面分布においてもIV類はⅡ類と同じ貝層Ⅲ群を中心とする分布状況を示したが、V類はD11～14辺りでの出土が多いなど、若干の違いが見られる。IV・V類のくびれ平底系土器にも時期差があることが窺える。

底部については、IV・V類の口縁部に合わせたくびれ平底の分類が、今回も出来なかったことは残念である。ただ、砂質で底径や口径が大きな中振りサイズはIV類、泥質で急な立ち上がりを呈し、小型の土器はV類に属することが窺えた。さらに、IV類には丸底的尖底も有りうる状況が示され、くびれ平底においてもⅡ類またはⅢ類に分類出来るものが得られ、尖底・くびれ平底の併用時期があったことがこれまでのキャンプ桑江返還地区の調査から窺えるのではないだろうか。

その他、注目したい土器として、東日本の亀ヶ岡系土器の大洞A式土器があげられる。本資料を設楽博巳氏に問い合わせる機会があり、「東日本の大洞系土器で大洞A1式併行の可能性が高い」との御教示をいただいた。

また、フェンサ下層式土器に類似するⅢ類とした図143、在地外とした有文の図5・6、図230の器形などは、今後の資料の追加等で型式の判断を待ちたい。

第24表-1 土器 観察一覧

(法量単位:cm, g)

第図版	図番号	分類		部位	形態	法量		混和材							胎土	器色		器面調整		遺跡・クリッド・層・遺構・台帳(ド・カ)番号
		大	小			口径高底径	器厚底厚重量	粒度含量	石英	赤色粒	角閃石 輝石	砂粒	その他	外面		内面	外面	内面		
第71図・図版47	1	搬入(船元)	-	口	口縁外反・口唇角・外-三角状凸帯文・貼付(細・曲)	-	0.6	細粒多量	◎				△	砂	両-暗灰褐色	両-ナテ・指頭痕	HB③ S8 IIIe(15) 12425			
	2			胴	外-三角状凸帯文貼付(細・横1条+その上に縦2条)	-	0.9	細粒多量	◎				△	砂	両-暗灰褐色	両-ナテ・指頭痕	HB③ T7 IIIc(7) 1028			
	3	搬入(面縄東洞)	-	胴	外-横位の三角状凸帯文+その上下に刺突文(密・先端三角状工具)	-	0.5	中粒多量	◎			△	雲母△	砂	両-淡灰褐色	両-ナテ・指頭痕	HC T15 貝層III群3 10743			
	4	搬入(大洞A)	-	底(台付)	「ハ」字状台付・外-規格的な工字文(太凹み線文間に朱色?)全体的に摩耗	6.0	0.5	微細微量	△	△	△		泥	両-灰褐色	両-ナテ	HB③ T6 IIIe(15) 12392				
	5	搬入(不明)	-	口	口縁外反・口唇角(粘土貼付)・文様-丁寧・規格的(外-三角状凸帯文2本(横位+曲)+その間に細沈線(横位1本+クロス状数条)	-	0.6	中粒中量	◎		△	○		砂	両-暗茶褐色 内-上部は煤附着	外-ナテ丁寧 内-指頭痕・シキ?	HC S15 貝層III群5 14400			
	6			胴	外-横位の三角状凸帯文+その上に斜沈線文数条・図5の模倣?	-	0.9	中粒多量	◎	△	△	△		砂	外-暗褐色 内-赤褐色	両-ナテ	HC T15 貝層III群 HC T15 貝層III群4 14612.台11078			
	7			口	口縁外反強・口唇と内面ハカレ・外-シキ?	24.3	0.6	細粒中量	○	△	△	△	火山ガラス	砂	外-茶褐色 内-暗灰褐色	両-指頭痕・ハケ目シキ?	HC F16 1302			
	8	搬入?	-	口	口縁直・口唇角(両側に幅1.8cmの粘土貼付)	-	0.8	細粒少量	△	△	△		砂堅致	外-暗茶褐色 内-灰褐色	外-ハケ目 内-ナテ・指頭痕	HB③ Q17 IIIb(5) 1285				
	9			口	口縁直・口唇角(粘土貼付で1.5cm幅)・口唇部-径1×1.2cm弱の楕円形の粘土貼付	-	0.8	細粒少量	△			△		砂	外-橙褐色 内-暗灰褐色	両-ナテ・指頭痕	HB③ Q17 IIIc(7) 496			
	10	搬入(不明)	-	口	口縁直・口唇角・外-横位の凸帯文(丸・8mm)・口唇-文(横位)	14.4	0.6	細粒少量	△				砂泥	両-暗茶褐色	両-ナテ・指頭痕	HC T16 V(後期層) 10121				
	11			口	口縁内湾・口唇角(強調・断面三角状)外-小突起	17.0	0.6	細粒少量	○	△	△	火山ガラス	砂	両-赤褐色	外-ナテ 内-ハケ目	HC D10 V(後期層) 1761				
12	在地(室川下層)	-	胴	外-縦位に連点文?数条・厚手	-	1.2	中粒中量	○			○	砂	外-暗茶褐色 内-暗褐色	外-ナテ 内-指頭痕	HC C16 V(後期層) 2851					
13	在地(大山)	-	口	口縁外反(微弱)・口唇角・3.3cm幅の肥厚帯に文様(単覧工具により3条の押引文)	-	0.7	中粒多量	△			○	白色粒◎ 泥砂	外-茶褐色 内-暗茶褐色	両-ナテ (内-擦痕・滑らか)	HC C16 V(後期層) 1807					
14	在地(不明)	-	頸	肥厚帯(薄手・長さ不明・無文)	-	0.7	細粒多量	◎		◎		砂	外-赤茶褐色 内-暗茶褐色	両-ナテ	HB③ T5 IIIc(7) 1550					
15			胴	外-刺突文(斜位)	-	0.8	中粒多量	◎			△		砂	両-茶褐色	両-ナテ	HB③ B'D4 IIc SK32 613				
16			口	口縁直・口唇角・均一	-	0.6	細粒多量	◎		○			砂強	両-灰褐色 (内-煤附着)	外-ナテ丁寧 内-指頭痕明瞭	HC A16 貝層III群5 13813				
17	口	口縁直・口唇角(内に膨らみ有)・均一	-	0.7	細粒多量	△		◎			砂強	外-淡茶褐色 内-茶黄褐色	外-ナテ丁寧 内-指頭痕明瞭	HC B15 V(後期層) 12422						
18	口	口縁直・口唇角・均一	-	0.5	細粒多量	○		◎			砂強	両-淡橙褐色	外-ナテ丁寧 内-指頭痕明瞭	HC A16 貝層III群5 10199						
19	口	口縁直・口唇丸・均一	-	0.8	細粒多量	◎		△			砂強	両-橙茶褐色	外-ナテ丁寧 内-指頭痕明瞭	HC S15 貝層III群5 14554						
20	口	口縁直・口唇角・胴部直・無文	-	0.6	細粒中量	○		△	△		砂強	両-茶褐色	外-ナテ丁寧 内-ナテ・指頭痕	HB③ I 2572						
第72図・図版48	21	I	-	口	口縁直・口唇丸・胴部直・無文	-	0.6	細粒多量	◎		◎		砂強	両-暗茶褐色	外-ナテ丁寧 内-ナテ・指頭痕	HB③ R4 III d(14) 1256				
	22			口	口縁直・口唇丸・胴部直・無文	-	0.6	細粒多量	◎		◎		砂強	両-橙褐色	外-ナテ丁寧 内-ナテ・指頭痕	HB③ R14 IIIa 97				
	23	B	-	口	口縁上端外反・口唇丸・均一	-	0.7	細粒多量	○		◎		砂強	両-淡橙褐色	外-ナテ・指頭痕 内-指頭痕明瞭	HC S15 貝層III群5 10854				
	24			口	口縁上端外反・口唇丸・均一	-	0.6	細粒多量	◎		△		砂強	外-暗茶褐色 内-暗褐色	外-ナテ丁寧 内-指頭痕明瞭	HC C16 V(後期層) 9662				
	25			口	口縁上端外反・口唇丸・均一	-	0.5	細粒多量	◎		○		砂強	外-暗褐色 内-橙茶褐色	外-ナテ丁寧 内-指頭痕明瞭	HC S14 貝層III群5 10825				
	26			口	口縁上端外反・口唇やや丸・均一	-	0.7	細粒多量	◎		○		砂強	外-暗褐色 内-灰褐色	外-ナテ丁寧 内-指頭痕明瞭	HC T16 貝層III群5 10820				

◎:非常に多い ○:多い △:少ない △/:僅少 [出土地] 12:ドット取上番号 カ:貝番号

第24表-2 土器 観察一覧

(法量単位:cm, g)

第図版	図番号	分類		部位	形態	法量		混和材						胎土	器色		器面調整		遺跡・クリッド・層・遺構・台帳(ド・カ)番号
		大	小			口径器高底径	器厚底厚重量	粒度含量	石英	赤色粒	角閃石 or 輝石	砂粒	その他		外面	内面	外面	内面	
第72図・図版48	27	I	B	口	口縁上端外反・口唇角・胴部直・無文	-	0.9	細粒多量	◎		△			砂強	両-灰橙褐色	外-ナデ'丁寧 内-ナデ'指頭痕	HB③ T15 III d(14) 台1565		
	28			口	口縁上端外反・口唇角・胴部直・無文	-	0.7	細粒多量	◎		○	△		砂強	両-淡橙褐色	外-ナデ'丁寧 内-ナデ'指頭痕	HB③ R17 III c(7) 台545		
	29			口	口縁上端外反・口唇丸・胴部直・無文	-	0.6	細粒中量	○		○			砂強	両-茶褐色	外-ナデ'丁寧 内-ナデ'指頭痕	HB③ T16 III d(14) 台1669		
	30			口	口縁上端外反・口唇舌・胴部直・有孔(7mm・外→内)	21.6	0.6	細粒多量	△	◎			茶色粒○	砂	両-橙灰褐色	外-ナデ'丁寧 内-ナデ'指頭痕	HB③ Q17 III b(5) ド288		
	31			口	口縁上端外反・口唇やや丸・均一	-	0.7	細粒多量	◎		○			砂強	両-暗茶褐色	外-ナデ'丁寧 内-指頭痕明瞭	HC A15 貝層III群5 台10178		
	32			口	口縁上端外反・口唇丸・均一	-	0.7	細粒中量	△		○			砂強	両-黄茶褐色	外-ナデ'丁寧 内-指頭痕明瞭	HC S14 貝層III群5 台10845		
	33			口	口縁上端外反・口唇舌・胴部直・無文	-	0.6	細粒中量	○		○			砂強	両-茶橙褐色	外-ナデ'丁寧 内-ナデ'指頭痕	HB③ S14 III d(14) 台1447		
	34			口	口縁上端外反・口唇舌・胴部直・無文	-	0.6	細粒多量	◎		◎			砂強	外-淡橙褐色 内-灰黄褐色	外-ナデ'丁寧 内-ナデ'指頭痕	HB③ T4 III d(14) 台1611		
	35			口	口縁上端外反・口唇角・均一	-	0.5	細粒中量	△		○			砂強	両-淡橙褐色	外-ナデ'丁寧 内-指頭痕明瞭	HC S14 貝層III群5 台10844		
	36			口	口縁直・胴部膨らむ・口唇角	-	0.6	細粒少量			○	△	△		砂	両-黄茶褐色 外下部は煤付着	両-ナデ'指頭痕	HC T15 貝層III群5 ド4722	
37	頸		「ハ」字状外反・緩やか・厚手・頸・有文(2本1組の波状沈線が2本)	-	1.1	細粒多量	◎		△			砂強	外-暗茶褐色 内-暗褐色	両-ナデ'指頭痕	HC S14 貝層III群5 台10848				
第73図・図版49	38	II	A7	口	口縁内湾・胴部張る・口唇丸・外・縦位の凸帯文+その下に逆「U」字状の凸帯文・小型	-	0.5	細粒少量	△	○		△	砂泥	両-淡茶褐色	両-ナデ'	HC T15 貝層III群5 ド4666			
	39			口	口縁内湾・胴部張る・口唇丸・小型・粘土接合面明瞭(4.0cm幅)	7.8	0.4	中粒中量	○	△		△		砂	外-暗茶褐色 内-灰茶褐色	両-ナデ'指頭痕	HC C14 V(後期層) ド3056		
	40			口	口縁内湾(波状)・口唇丸(煤付着)・粘土接合面明瞭(2.5cm幅)	11.9	0.7	細粒少量	△	△		△		砂泥	両-灰茶褐色	両-ナデ'指頭痕	HC A16 V(後期層) ド2820		
	41			口	口縁内湾(波状)・胴部張る・口唇舌・粘土接合面明瞭(2.5~3.0cm幅)	14.8	0.5~0.7	細粒少量	△	△		△	灰色粒△	砂	外-暗褐色 内-灰茶褐色	両-ナデ'指頭痕	HC S14 貝層III群5 ド4204		
	42			口	口縁内湾・胴部張る・口唇舌・粘土接合面やや明瞭(4.0cm幅)	15.0	0.8	細粒少量	△			△		砂	両-茶褐色	両-ナデ'指頭痕	HB③ BCD4 II c SK3 台613		
	43			口	口縁内湾・口唇舌・同部張る・粘土接合面やや明瞭(3.5cm幅)	16.4	0.5	中粒多量	○	◎		△		砂	両-赤茶褐色	両-ナデ'指頭痕	HB③ Q`T10 試掘ド 40`60 台503		
	44			口	口縁内湾(波状)・胴部張る・口唇舌・粘土接合面明瞭(3.0~3.5cm幅)	15.8	0.6~0.9	細粒少量	△			△		砂泥	両-茶褐色	両-ナデ'指頭痕	HC S15 貝層III群5 ド4295		
	45			口	口縁内湾(波状)・胴部張る・口唇丸・粘土接合面明瞭(3.5~4.0cm幅)	25.2	0.5~0.7	中粒少量	△			△	黒色粒△	泥砂	両-暗灰褐色	外-ナデ'指頭痕 内-ハケ目・指頭痕	HC T15 貝層III群5 ド4455.4456		
	46			口	口縁内湾(波状)・胴部張る・口唇やや舌・粘土接合面明瞭(2.5cm幅)	26.2	0.6~0.9	中粒中量	△	○		△		砂泥	両-暗灰褐色	外-ナデ'指頭痕 内-ハケ目・指頭痕	HC A16 貝層III群5 ド4098		
	47			口	口縁内湾(やや波状)・胴部張る・口唇舌・粘土接合面明瞭(3.0~3.5cm幅)	23.5	0.8~1.0	細粒少量	△			△		砂泥	両-黄茶褐色	両-ナデ'指頭痕	HC S14 貝層III群4 ド4196		
	48			口	口縁やや内湾・口唇舌・ミニチュア	7.0	0.96	中粒少量	△	△		△		砂	両-灰茶褐色	両-ナデ'指頭痕	HB③ T5 III d(14) ド1097		
	49			口	口縁やや直・口唇舌・粘土接合面明瞭・外-外耳状凸帯文(半分破損)	-	0.7	粗粒中量	△	○			茶色粒△	泥砂	両-灰赤褐色	両-指頭痕	HC T15 貝層III群5 ド4731		
	50			口	口縁内湾・口唇舌・外-縦位の凸帯文(本来は外耳状)	-	0.5	細粒少量	△	△				砂	外-暗茶褐色 内-茶褐色	両-ナデ'指頭痕	HC A16 貝層III群5 台10763		
	第74図版50			51	口	口縁内湾・胴部張る・口唇やや舌・粘土接合面明瞭(3.5~4.0cm幅)	17.4	0.5~0.7	粗粒中量	△	○		△		泥砂	両-淡茶褐色	両-ナデ'指頭痕	HC B17 V(後期層) ド3508. 4131	
52		口	口縁やや内湾(波状)・胴部張る・口唇やや舌・粘土接合面明瞭(3.0cm幅)	19.8	0.6~0.8	中粒中量	△	○		△		砂	両-暗茶褐色	外-ヘラナデ'指頭痕 内-指頭痕	HC S14 貝層III群5 ド4342				

◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 [出土地] 下:ドット取上番号 カ:貝番号

第24表-3 土器 観察一覧

(質量単位: cm, g)

第図版	図番号	分類		部位	形態	法量		混和材							胎土	器色		器面調整		遺跡・グット・層・遺構・台帳(ド・カ)番号
		大	小			口径器高底径	器厚底厚重量	粒度含量	石英	赤色粒	角閃石	砂粒	その他	外面		内面	外面	内面		
第74図・図版50	53	A7		口	口縁やや内湾・口唇丸・胴部張る・粘土接合面やや明瞭(約3.0cm幅)	19.4	0.7	細粒少量	△		△	△		砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ B7 III(12) 下1347			
	54			口	口縁内湾・胴部張る・口唇やや舌・粘土接合面明瞭(3.0cm幅)	27.4	0.7~1.0	細粒少量	△			△		砂	両-黄茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ C6 IIIc(7) 下405			
	55			口	口縁内湾(波状)・胴部直線的・口唇舌・粘土接合面明瞭(3.0~4.0cm幅)	27.0	0.5~0.8	細粒少量	△		△	△		砂泥	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC T14 貝層III群2 下4072.4073			
	56			口	口縁直・口唇舌・粘土接合面やや明瞭(約3.5cm幅)	-	0.8~1.3	中粒少量	△			△		砂	両-橙茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ C7 III(9) 下265.266			
	57			口	口縁やや内湾・胴部直線的・口唇角・粘土接合面明瞭・外-凸帯文(縦文・最後は円形状・中央は凹み)	-	0.6	細粒中量	△	○				砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群1b 台12785			
	58			口	口縁やや内湾(波状)・胴部張る・口唇やや舌・粘土接合面明瞭(3.5cm幅)	-	0.7	細粒中量	△	○		△		砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15 貝層III群 下3752			
	59			口	口縁やや内湾(波状)・胴部張る・口唇やや舌・粘土接合面明瞭(4.0cm幅)	-	0.6	中粒中量	△	○			△	砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群5 下4433			
	60			口	口縁直・口唇破損・粘土接合面隆起・外-短沈線(1.2~1.5cm・横位・細・ヲフ)	-	0.6~1.2	細粒少量	△	△			△	泥砂	両-淡橙灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ R10 IIIc(7) 台1204			
	61			口	口縁直・口唇丸・粘土接合面明瞭・外-沈線文(曲・不規則)	-	0.7	中粒中量	△	○				砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群5 台10827			
	62			口	口縁直・胴部直線的・口唇舌・粘土接合面明瞭(4.0cm幅)	-	0.6	中粒少量	△	△				砂泥	外-灰茶褐色 内-淡茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC T15 貝層III群 下4535			
第75図・図版51	63	II	A4	口	口縁直・胴部直線的・口唇丸・粘土接合面明瞭(4.0cm幅)	-	0.9~1.2	粗粒少量	△	△		△	砂泥	両-茶黄褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ C8 III(9) 下281				
	64			口	口縁直・胴部直線的・口唇丸・粘土接合面明瞭(3.0cm幅)	21.0	0.4	細粒中量	○			△	砂	外-暗茶褐色 内-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC T15 貝層III群5 台10813.10817				
	65			口	口縁直・口唇舌・粘土接合面やや明瞭(約3.5cm幅)	-	0.5~0.9	中粒少量	△	△				砂泥	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ S9 IV(17) 台1547			
	66			口	口縁直・口唇舌・粘土接合面明瞭(約4.5cm幅)	-	0.6~0.9	中粒中量	△	○			△	砂泥	り様-赤褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ S9 III d(14) 下1670			
	67			口	口縁直・胴部直線的・口唇丸・粘土接合面明瞭(3.0cm幅)	-	0.5	中粒中量	○	△			△	砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15 貝層III群5 台11228. 11229			
	68			口	口縁直・口唇舌・粘土接合面明瞭(接合面で破損)	12.4	0.7~1.1	中粒中量	○	○			△	砂	両-赤茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ IIIc(7) 下552			
	69			口	口縁直・口唇舌・外-沈線文(横+弧状)内-沈線文(斜位)	-	1.0	細粒少量	△				△	砂	外-茶褐色 内-灰茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ S8 III d(14) 台1283			
	70			口	口縁直・口唇丸・両-曲沈線文(細)・粘土接合面より破損・不揃い	-	0.9	中粒少量	△				△	泥砂	両-赤褐色	外-ナデ 内-ハケ目(横)	HB③ R10 III d(14) 下1931			
	71			口	口縁直・口唇如く・粘土接合面隆起・外-鋸歯状沈線文(幅広2.5~3.0mm)	-	0.6	中粒少量	△	△	△			砂	両-赤褐色	外-ヘラナデ(縦) 内-ヘラナデ(横)	HB③ S9 III d(14) 台1559			
	72			口	口縁外反・胴部直線的・口唇丸・粘土接合面明瞭(3.5cm幅)	-	0.4	粗粒中量	△	○				砂泥	両-橙褐色	両-ナデ・指頭痕	HC T15 貝層III群5 下4478			
73	口	口縁外反・口唇舌・粘土接合面明瞭(約4cm幅)	-	0.6	細粒少量	△	△			△	砂泥	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ B7 IIIc(7) 下779						
74	口	口縁外反・口唇舌(鞍状凸帯文貼付・1.0cm幅)・土接合面やや明瞭(3.0~3.5cm幅)	-	0.6~0.9	細粒少量	△				△	砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ C8 III(12) 台908						
75	胴	粘土接合面明瞭(約3cm幅)・最大胴径28.6cm)	-	0.7~1.5	中粒少量	△	△			△	砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ C5 III b(5) 下2053						
76	胴	粘土接合面明瞭(約3cm幅)・最大胴径30.4cm)	-	0.5~1.5	中粒中量	○		△	△		砂	両-赤褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ C8+S8 IIIc(7) HB③ C8 III(12) HB③ C8 IIc 石列IV群-SL01 下617						
第76図版52	77	B7	口	口縁直・胴部やや張る・口唇丸・外-細沈線(不規則)+円形文(剥がれ)・口唇-刻目文	8.8	0.4	細粒少量	△					砂	両-黄茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC 貝層II群f 台11336				

◎:非常に多い ○:多い △:少ない ▽:僅少 [出土地] 下:ドット取上番号 カ:貝番号

第24表-4 土器 観察一覧

(質量単位:cm、g)

第図 図版	図 番号	分類		部位	形態	法量		混和材							胎土	器色		器面調整		遺跡・グッド・層・ 遺構・台帳(ド・カ)番号
		大	小			口径 器高 底径	器厚 底厚 重量	粒度 含量	石英	赤色 粒	角 閃石	輝石	砂粒	その他		外面 内面	外面 内面			
第76図・ 図版52	78	B7		口	口縁直・胴部直線の・口唇舌・粘土接合面やや明瞭(3.5cm幅)	11.0 -	11.2 20.7	細粒 少量	△					砂泥	両-黄茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15 V (後期層) ド2809			
	79			口	口縁やや直・胴部直線の・口唇丸・外-凸帯文(逆「O」字状)・口唇-刺突文	26.0 -	0.5 99.3	細粒 少量	△				△	砂	外-暗褐色 内-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S15 貝層Ⅲ群3 HC 貝層Ⅲ群 台10739ド4292			
	80			口	口縁直・胴部直線の・口唇丸・外-凸帯文2条(横)	30.2 -	0.7 129.0	細粒 少量	△				△	砂	両-暗灰褐色 (外上部煤付着)	両-ナデ・指頭痕	HC A16 貝層Ⅲ群5 ド4763			
	81			口	口縁外反(上端)・口唇舌・頭部「く」字状屈曲・胴部直線の・厚手・大型粘土接合面やや隆起明瞭	30.8 -	0.8~1.1 470.5	細粒 少量	△	△			△	砂泥	両-黄茶 ・橙灰茶褐色	両-ナデ(指・ヘラ)明瞭 指頭痕・雑仕上げ	HB③ T5+T6+T7 IIIc(7) R5 7+S5 8+T5+T7 III d(14) T5+T7 III (12) R6 III d(14)ド1000他			
	82			口	口縁外反弱(波状)・胴部直線の・口唇角・粘土接合面不明瞭(3.5cm幅)	22.6 -	0.5 52.9	細粒 少量	△	△				砂	両-茶褐色	外-指頭痕・ハケ目(縦) 内-指頭痕・ハケ目(横)	HC T14 貝層Ⅲ群4 ド4135			
	83			口	口縁直・口唇舌・胴部やや張る・口唇-鞍状凸帯文(0.6mm幅)	- -	0.7 41.3	細粒 少量	△					△	砂泥	外-黒・黄茶褐色 内-橙茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ T8 III d(14) ド1243		
	84			口	口縁やや内湾・口唇舌-鞍状凸帯文(幅1.5cm・薄)	- -	0.5 15.6	細粒 少量	△					△	砂	両-茶褐色	外-指頭痕 内-指頭痕・ナデ(横)	HC D13 V (後期層) ド2305		
	85			口	口縁やや内湾・口唇舌-外-「U」・逆「J」字状凸帯文(幅0.8~1.3cm・やや厚)	- -	0.5 22.9	細粒 少量	△	○					砂	両-灰茶褐色	両-指頭痕	HC T14 V (後期層) ド1764		
	86			胴	外-「O」字状の凸帯文	- -	0.6 9.4	細粒 中量	△	○				△	砂泥	両-赤茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15 貝層Ⅲ群2 台10894		
	第77図・ 図版53			87	B4		口	口縁やや内湾(波状)・口唇丸・粘土接合面やや明瞭(2.8~3.0cm幅)	- -	0.6 47.1	中粒 中量	△	○			△	砂	外-暗茶褐色 内-淡茶褐色	外-ナデ・指頭痕 内-指頭痕・ハケ目	HC T15 貝層Ⅲ群5 ド4491
88		口	口縁直・口唇丸・外-沈線文(鋸歯状)・有孔(外→内)	- -			0.7 22.8	中粒 中量	△	○			△	泥砂	両-暗褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ S4 III e(15) ド2446			
89		口	口縁直(波状)・口唇丸・粘土接合面やや明瞭(3.3cm幅)	25.6 -			0.8 60.8	中粒 中量	○	○				砂	外-灰茶褐色 内-淡茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S15 貝層Ⅲ群5 ド4398			
90		口	口縁やや内湾・口唇丸・口唇-鞍状凸帯文(薄)・粘土接合面やや明瞭(2.5cm幅)	29.6 -			0.8~1.0 80.6	細粒 少量	△	△				△	砂	両-暗茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC T15 貝層Ⅲ群5 ド4233		
91		口	口縁やや内湾(波状)・口唇丸・粘土接合面やや明瞭(2.0~2.5cm幅)	29.8 -			0.5 44.7	粗粒 中量	△	○				△	砂泥	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕 雑仕上げ	HC T15 貝層Ⅲ群5 ド4403		
92		口	口縁外反弱・胴部張る・口唇丸・外-沈線文(曲不規則)粘土接合面やや明瞭(3.5cm幅)	27.0 -			0.7 112.5	粗粒 多量	○	△			○	不明 ○	砂	外-茶褐色 内-暗灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15 貝層Ⅲ群5 ド4178		
93		口	口縁やや内湾(波状)・胴部張る・口唇丸・粘土接合面やや明瞭	22.2 -			0.6 93.6	粗粒 多量	◎	△				△	砂	両-暗茶褐色	両-ナデ・指頭痕 雑仕上げ	HC A15 貝層Ⅲ群 ド3686		
94		口	口縁外反弱・胴部張る・口唇丸・粘土接合面明瞭(3.0cm幅)	21.6 -			0.6 58.0	細粒 中量	○	○				△	砂泥	両-黄茶褐色	外-指頭痕 内-ハケ目明瞭	HC C10 V (後期層) 台9547.ド1909		
95		口	口縁外反(波状)・胴部やや張る・口唇丸・粘土接合面不明瞭(粘土幅3.0cm)	- -			0.6 62.7	細粒 中量	○	△	△				砂強	外-暗褐色 内-石褐色	外-ナデ・指頭痕 内-指頭痕・ヘラ?	HC B16 貝層Ⅲ群5 ド3883		
第78図・ 図版54		96	B9				頸	口縁外反強(口唇破損)・胴部張る	12.8 (頸径) -	0.7 23.5	中粒 中量	○		○	△	砂泥	両-茶褐色	両-条痕	HC T15 貝層Ⅲ群5 台10816	
	97	口			口縁外反弱・口唇丸・頭部ややくびれ・外-曲沈線文・内-横位の沈線文	- -	0.5 5.6	細粒 少量	△				△	砂	両-茶赤褐色	両-ナデ	HB③ S9 III d(14) 台1633			
	98	口			口縁外反・頭部くびれ・口唇舌・内外-沈線文(曲)・口唇-刻目文(縦・横)	- -	1.0 9.7	細粒 少量	△				△	砂	両-赤褐色	両-ナデ・指頭痕	HC T16 貝層Ⅲ群2 台11064			
	99	口			口縁直・口唇やや丸・内外-沈線文(曲)・小型	14.4 -	0.6 17.6	中粒 中量	△	○				白色 粒 ○	砂泥	両-暗褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ R7 III c(7) 台725		
	100	頸			口縁直・口唇破損・内外-沈線文(曲)	- -	0.5~0.9 34.2	粗・ 細 中量	○	△				△	砂泥	両-茶褐色	外-ヘラナデ 内-ハケ目	HB③ T6 III d(14) ド1910		
	101	口~ 底			口縁外反弱(波状・上面観・楕円状)・胴部やや張る・底部尖底(b)	22.8× 19.6 17.4 -	0.6 1.1 860	細粒 少量	△					△	砂	両-暗灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HC T16 貝層Ⅲ群4 HC T16 貝層Ⅲ群 台10637.ド4529		
102	口	口縁外反強・胴部直線の・口唇丸・粘土接合面不明瞭	- -	0.5 70.5	細粒 中量	○	△	△				砂	両-灰茶褐色	両-ナデ・指頭痕 (外は指頭痕明瞭)	HC A15 貝層Ⅲ群3 ド3699					

◎:非常に多い ○:多い △:少ない △/:僅少 [出土地]ド:ドット取上番号 カ:カ目番号

第24表-5 土器 観察一覧

(質量単位:cm,g)

第図 図版	図 番号	分類		部位	形態	質量		混和材						胎土	器色		器面調整		遺跡・クワッド・層・ 遺構・台帳(ド・カ)番号
		大	小			口径 器高 底径	器厚 底厚 重量	粒 度 含 量	石 英	赤 色 粒	○ r 輝 石	角 閃 石	砂 粒		そ の 他	外 面 内 面	外 面 内 面		
第78図・ 図版54	103	C	口	口縁外反弱(波状)・胴部やや張る・口唇丸・粘土接合面不明瞭	-	0.5	-	粗粒 多量	◎	△			○	砂	両-暗茶褐色	両-ナデ・指頭痕 雑仕上げ	HC T15 貝層Ⅲ群3 台11381		
	104		口	口縁外反・胴部やや張る・口唇角・口唇-短沈線文(斜位・2cm弱)・粘土接合面明瞭(3.5~4.0cm幅)	-	0.5	0.7	細粒 少量		△			△	砂	外-暗茶褐色 内-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC C14 V(後期層) 台9627		
	105		口	口縁逆「ハ」字状外反・口唇角・口唇-刺突文(横位・9mm・二叉状工具)	-	0.6	-	中粒 少量		△			△	砂泥	両-暗褐色	両-指頭痕明瞭	HC 貝層Ⅲ群5 台5074		
	106		口	口縁外反・胴部直線の・口唇やや丸・外-沈線(縦位・横位)・口唇-刺突文	-	0.5	-	粗粒 少量		△	△		△	砂泥	外-黄茶褐色 内-灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HC T16 貝層Ⅲ群5 台4650		
	107		口	口縁外反弱・胴部直線の・口唇角・口唇-刻目文(縦・横・先端が平らな工具)	-	0.4	-	粗粒 中量		○	△		△	砂	両-黄茶褐色	両-指頭痕・ハケ目	HC S14 貝層Ⅲ群5 台4285		
	108		口	口縁外反・胴部直線の・口唇丸・口唇-指圧文	-	0.5	-	中粒 少量		△			△	砂泥	両-黄茶褐色	両-ナデ・指頭痕明瞭	HC C11 V(後期層) 台2915		
	109		口	口縁外反・口唇丸・外-肥厚帯(横幅2.5cm)・細沈線文(横・縦)・口唇-指圧文・粘土接合面不明瞭	-	0.5	-	細粒 少量		△			△	砂泥	両-灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HC B15 貝層Ⅲ群5 台3858		
第79図・ 図版55	110	II	口~ 底	口縁外反強(歪み)・口唇平ら・胴部やや張る・底部尖底(a)・口唇-刺突文・有孔(上下に多孔・外一内へ穿孔)・内-下部半分は煤付着・大型	36.1 32.6	0.6 1.5	2700	細粒 中量	△	○			△	砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC 14+C14+C15+D14 V(後期層) 台3052他		
	111		口	口縁外反・口唇舌・胴部張る・粘土接合面明瞭・外-凸帯文(6mm幅・平ら・横位)	-	0.4	-	細粒 中量		○	△		△	砂	両-赤褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ S10 III d(14) 台1608		
	112		口	口縁外反(波状)・胴部張る・口唇角・粘土接合面不明瞭	-	0.5	-	中粒 中量		△			△	砂	両-黄茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC C12 V(後期層) 台3543		
	113		胴	胴-直線的で底近くはやや丸み・粘土接合面やや明瞭(約4.0cm幅)	18.4 (胴径)	0.5	-	121.9	細粒 少量		△				砂	外-茶褐色 内-黄茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC B15 V(後期層) 台3133	
第80図・ 図版56	114	DI (壺)	頸~ 胴	頸部やや内湾・胴部張る・粘土接合面明瞭(4.0cm幅)・図115と同一個体?	23.8 (胴径)	0.5	0.7	770.0	細粒 少量	△	△		△	砂泥	外-淡灰黄褐色 内-橙褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15+A16+S15 貝層Ⅲ群5 台4837他		
	115		口	口縁やや内湾・口唇丸(波状)・胴部張り出す・無文・図114の口縁?	3.8	1.0	-	28.0	粗粒 中量		△	○			砂強	両-橙褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S15 貝層Ⅲ群5 台10852	
	116		口	口縁内湾・口唇丸・無文	5.8	1.1	-	21.7	中粒 少量		△	△			砂	赤褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A16 貝層Ⅲ群5 台3823	
	117		口	口縁「ハ」字状外反・厚手・無文・内-調整雑	-	0.6	1.5	-	127.8	中粒 多量		△	◎		△	砂泥	外-茶褐色 内-灰褐色	外-ナデ・丁寧 内-ケスリ? 指頭痕	HB③ Q19 III d(14) 台1285
	118		口	口縁直・頸部ナデ肩・短頸・口唇丸	6.2	0.5	-	75.2	細粒 少量		△	△		△	泥砂	両-淡茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC C9 V(後期層) 台3140	
	119		口	壺・口縁直・短頸・ナデ肩・胴中央部で屈曲。粘土接合面明瞭・左右歪み	4.4	0.4	0.7	-	732.0	細粒 中量		○		○	△	砂	両-赤褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ S10 III d(14) 台1525
	120		頸	頸部直・胴部やや張る・外-凸帯文(横位・幅7mm)	6.1 (頸径)	0.8	-	14.0	中粒 中量		△	○				砂	両-赤褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15 貝層Ⅲ群5 台11233
	121		頸~ 胴	頸部直・胴部張る(強)・外-沈線文(曲・不規則)	8.0 (頸径)	0.8	-	72.9	中粒 少量		△	△				砂	両-黄灰褐色	外-ナデ・丁寧 内-雑仕上げ	HC A15 貝層Ⅲ群5 台10190・台4257
	122		頸	壺・口唇破損・「ハ」字状に開く・無文・厚手	-	1.4	-	32.2	細粒 少量		△	△	△	△		砂	両-橙茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ S7 III d(14) 台1281
	123		口	無頸壺(「ハ」字状)・口唇破損・外-曲沈線文	-	0.7	-	44.1		△				△	砂泥	両-橙褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ T7 III d(14) HB③ S7 III d(14) 台1210.1529	
第81 版図57	124	III	口~ 底	皿形・口縁直・口唇舌・底部は平底	10.2 2.5 10.0	0.4 1.2 69.8		中粒 少量		○	△		△	砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ T7 III d(14) 取2519		
	125		胴~ 底	口縁直・胴部張る・底部尖底(外底尖る)・口唇破損(器高は4.0cm以上)・無文・ミチユア	3.0 (胴径)	0.4 0.9	17.8	細粒 微少		△					砂	両-茶褐色	外-ナデ・丁寧 内-ナデ	HC 貝層Ⅲ群2 台5079	
	126		口~ 底	口縁内湾・胴上部直線的、下部張る。口唇丸・底部尖底(外底やや丸み)・ミチユア	2.8 7.2	0.3 1.1	41.0	微粒 微少					△		砂	外-黄茶褐色 内-暗褐色	両-ナデ・丁寧	HC C14+F14 V(後 期層) 台2583.229.245	
	127		口~ 胴	口縁外反強・頸部くびれ・胴部張り強。粘土接合面明瞭・口唇丸・内-沈線文(縦・斜・2条1組)・円文(径3mm)・厚手	28.0	1.1	-	249.0	粗粒 多量		◎			△	砂泥	両-淡灰黄褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14+T15 貝層Ⅲ 群5 台4815他	

◎:非常に多い ○:多い △:少ない ▽:僅少 [出土地]ド:ドット取上番号 カ:貝番号

第24表-6 土器 観察一覧

(法量単位:cm, g)

第図版	図番号	分類		部位	形態	法量		混和材						胎土	器色		器面調整		遺跡・グリッド・層・遺構・台帳(ド・カ)番号
		大	小			口径器高底径	器厚底厚重量	粒度含量	石英	赤色粒	角閃石 輝石	砂粒	その他		外面	内面	外面	内面	
第81図・図版57	128	A	口	口縁外反強・口唇丸・厚手・外円文(径4.5mm・貝の螺塔部施文具?)・厚手	-	1.0	細粒少量	△			△	砂泥	両-橙茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15 V (後期層) D2907				
	129		口	口縁外反弱・口唇舌・厚手。内-沈線文(弧状)	-	0.9	中粒多量	○		△	○	砂	両-橙茶褐色	両-ナデ	HC B10 台10327				
	130		胴	頸-内湾・胴-「く」字状屈曲・厚手。外-頸部に弧状の沈線(幅2mm)	15.4	0.8	中粒中量	△					砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC F18 D74.75			
	131		胴	外-凸帯文(横位に圍繞)・その上に曲沈線文	-	0.9	粗粒中量	△	○		△		砂	両-橙褐色	両-ナデ・指頭痕	HC H19 D41			
	132		胴	外-沈線文(曲・縦・不規則)	-	1.0	細粒中量	○	△				砂・密	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC T14 貝層Ⅲ群5 台10869			
	133		頸~胴	外-頸部に幅広沈線(5mm)を横位に圍繞・その上に斜位の沈線(3mm)	29.6	0.6~1.0	中粒中量	○				△	砂	外-暗褐色 内-赤褐色	両-ナデ・指頭痕	HC B17+ C16 V (後期層) D1162.1806			
	134		口	口縁外反・口唇丸(粘土貼付)。内-縦・斜位に浅い沈線(2.3mmとやや幅広)	-	0.7	中粒多量	◎		○	△	火山ガラス	砂	外-暗褐色 内-暗茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC C16 V (後期層) D2713			
	135		胴	外-横位の沈線の後に斜位の沈線を2条1組で施文・図134の胴?	-	0.7	中粒多量	◎		○	△	火山ガラス	砂	外-暗褐色 内-暗茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC 台10169			
	136		口	外-横位の凸帯文圍繞	-	0.7	中粒多量	○		○	△	茶色粒 △	砂	両-灰黄褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層Ⅲ群5 D4574			
	137		頸	頸部外反・粘土接合面明瞭・外貼付文(上に4mm幅の沈線文)+その上に沈線文(鋸歯状)・内-沈線文(曲)	-	1.1	中粒多量	◎		△	△		砂	外-黄茶褐色 内-赤褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ B8 Ⅲc(7) D774			
138	胴	外-不規則な押引文。(幅6~9mm)	-	0.7	粗粒中量	○				雲母 △	砂	両-黄茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC 台10889					
第82図・図版58	139	Ⅲ	口	口縁外反・胴部張る・口唇丸(口唇に沿って粘土折り曲げ)・内-ハケ目明瞭・粘土接合面不明瞭	27.0	0.6	細粒少量	△			△	砂	両-暗茶褐色	外-ナデ・指頭痕 内-ハケ目明瞭	HC E13+E14+D13 V (後期層) D2307他				
	140		口	口縁外反・胴部張る・口唇玉緑・粘土接合面不明瞭・薄手・大型	29.6	0.5	細粒中量	○		○	△	砂	両-暗褐色	両-ヘラナデ(捺痕) 内面はより明瞭	HC C14+C15 V (後期層) D2039他				
	141		口	口縁外反・胴部やや張る・口唇丸	24.2	0.5	細粒少量	△	△		△	砂	外-暗茶褐色 内-黄茶褐色	両-ナデ	HC A15 貝層Ⅲ群3 D3732.3735				
	142		口	口縁外反・胴部張る・口唇丸。口唇一指圧文	29.8	0.8	細粒少量	△	△		△	砂	外-暗褐色(煤) 内-暗茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A16 貝層Ⅲ群5 D4121				
	143		口~底	口縁やや直(上端外反)・口唇玉緑・胴部の張り弱・底部は尖底想定・中型	16.2 17.2 (推定)	0.6	細粒少量	△			△		泥	両-灰褐色	両-ハケ目明瞭 (外-縦、内-横・斜)	HC T15 貝層Ⅲ群2 HC T14 貝層Ⅲ群 D4794 台11261			
	144		口	口縁外反弱・口唇やや角。頸部屈曲(粘土帯・2.5cm幅)	11.4	0.6	中粒中量	○		○	△		砂	両-暗茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層Ⅲ群5 台10825			
	145		口	口縁外反弱・頸部やや屈曲(粘土帯3.0cm幅)・口唇舌	16.0	0.7	細粒中量	△	○		△		砂	両-灰茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC B16 Ⅲ(グスク) 台9300			
第83図・図版59	146	D	口	口縁外反・頸部やや屈曲(粘土帯3.0cm幅)口唇角・注口有り・均一	17.8	0.5	中粒中量	○		△	△	砂	両-暗褐色	両-ナデ(ヘラ?)・指頭痕	HC T15 貝層Ⅲ群5 D4492				
	147		口	口縁外反・口唇角・頸部屈曲(粘土帯3.5cm幅)	22.2	0.6	細粒少量	△				砂泥	両-暗灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15 貝層Ⅲ群2 カ762				
	148		口	口縁外反(波状)・口唇丸・頸部屈曲(粘土帯2.5~3.0cm幅)	26.4	0.5	細粒少量	△		△		砂	外-暗褐色 内-暗茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A16 貝層Ⅲ群5 D4161				
	149		口	口縁外反(波状)・胴部やや張る・口唇丸・外-逆「U」字状凸帯文	18.0	0.7	細粒少量	△			△	砂	両-橙茶褐色	両-ナデ(ヘラ?)・指頭痕	HC T15 貝層Ⅲ群5 D4306				
	150		口	口縁外反強・胴部張る・口唇舌	18.0	0.6	細粒中量	○			△		砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC B15 V (後期層) D4263			
	151		口	口縁外反・口唇丸・胴部やや張る・外-刻目文(横位)・粘土接合面やや明瞭(3.0cm幅)	19.4	0.6~0.8	細粒少量	△			△		泥	両-橙茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ B7 Ⅲ(12) D1348+1353.1343			
	152		口	口縁外反強・胴部やや張る・口唇丸	-	0.6	中粒中量	△	○	△	△		砂	外-橙茶褐色 内-橙灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A16 貝層Ⅲ群5 D4159			
	153		口	口縁外反・口唇丸・胴部張る・粘土接合面不明瞭	20.6	0.8	細粒少量	△	△		△		砂泥	両-赤褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ B1 Ⅲd(14) D1949			

◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 [出土地] D:ドット取上番号 カ:貝番号

第24表-7 土器 観察一覧

(法量単位:cm, g)

第図版	図番号	分類		部位	形態	法量		混和材							胎土	器色		器面調整		遺跡・グリッド・層・遺構・台帳(ド・カ)番号
		大	小			口径器高底径	器厚底厚重量	粒度含量	石英	赤色粒	Or輝石	角閃石	砂粒	その他		外面	内面	外面	内面	
第83図・図版59	154			口	口縁外反(上端)・口唇舌・胴部直線的	-	0.8 - 42.8	中粒少量	△	△			△		砂泥	両-橙茶褐色	外-ナデ・指頭痕 内-ナデ・ハケ目?	HB③ S14 III d(14) 台1166		
	155			口	口縁外反・胴部直線的・口唇丸・粘土接合面不明瞭	-	1.0 - 78.9	細粒少量	△	△			茶色粒 △		砂泥	両-淡橙褐色	外-ナデ丁寧 内-指頭痕明瞭	HC T15 貝層III群5 F4477		
	156			口	口縁外反(弱)・胴部直線的・口唇丸・粘土接合面不明瞭	-	0.6 - 91.6	中粒多量	△						砂	両-橙茶褐色 (内-煤付着)	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群2 F4082		
	157			口	口縁外反(上端)・口唇丸・胴部直線的	-	0.8 - 55.5	粗粒多量	○	◎			△		砂	外-橙茶褐色 内-灰茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ S5 III d(14) F883		
第84図・図版60	158			口	口縁外反(上端)・口唇舌・胴部直線的・厚手	-	1.0 - 36.7	粗粒多量	◎					砂	外-橙茶褐色 内-暗褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ R19 III d(14) 台1174			
	159		F	口	口縁外反(上端)・口唇舌・胴部直線的・厚手・外-弧状の沈線文+円文(縦に2個・径5mm・貝の螺塔部使用?)	-	0.8 - 65.1	中粒少量	△	△			△		砂	両-茶褐色	外-ナデ 内-ハケ目・指頭痕	HB③ R17 III d(14) F913		
	160			口	口縁外反弱・口唇丸・外-逆「U」字状凸帯文(凸帯文上は無文)	-	0.6 - 37.6	細粒少量	△	△	△				砂	両-暗灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HC T15 貝層III群5 F4836		
	161			口	口縁外反・口唇やや丸・外-逆「O」字状凸帯文・沈線文(4mm幅・浅め・縦+横)・口唇-刺突文(横)	-	0.5 - 25.4	細粒少量	△				△		砂	両-暗褐色	両-ナデ・指頭痕	HC T16 貝層III群4 F4603		
	162			口	口縁やや外反・胴部直線的・口唇丸。外-薄い・肥厚帯・口唇-刻目文(縦)	-	0.5 - 41.7	細粒少量	△						砂	外-暗褐色 内-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15 貝層III群3 F3690		
	163			口	口縁やや外反・胴部直線的・口唇丸・外-刻目文(不揃い)	-	0.6 - 32.5	中粒中量	○	△	○				砂	両-暗灰褐色	両-指頭痕・ヘラナデ	HC B14 V (後期層) F3243		
	164			口	口縁外反弱・口唇丸・鞍状凸帯文・内-方形の幅広沈線(4mm・浅い)	-	0.6 - 18.4	中粒中量	○	△					砂	両-赤褐色	両-ナデ・指頭痕	HC T15 貝層III群5 台10818		
	165			口	口縁直・口唇舌・外-刺突文(斜位・単篋工具)	-	0.8 - 12.6	中粒少量	△	△			△		砂泥	両-灰茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ Q8 III d(14) 台1298		
	166			口	口縁やや直・口唇丸・外-円形状の貼付文(中央は凹み)	-	0.9 - 20.7	細粒中量		○			△		砂	両-灰茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ Q8 III c(7) F423		
	167			口	口縁直・口唇やや舌・外-円形の貼付文(中央部は凹み)	-	0.5 - 16.0	中粒中量	△	○					砂	外-橙灰褐色 内-淡橙褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群2 台10911		
	168			口	口縁やや外反・胴部直・口唇丸	-	0.8 - 28.5	中粒中量	△	△					砂	両-灰褐色	両-指頭痕・ハケ目	HC S14 貝層III群5 台10842		
169			口	口縁外反(波状)・口唇丸	14.4 -	0.5 - 53.3	細粒中量	○				△		砂	両-灰茶褐色	外-指頭痕・ハケ目 内-ナデ・指頭痕	HC A15 貝層III群5 F4254			
170			口	口縁直・口唇角・有孔(両-穿孔)	-	0.9 - 28.4	粗粒多量	◎				灰色粒 ◎		砂	両-暗灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ R18 III d(14) F1268			
171			口	口縁直・口唇舌・外-沈線文(縦位)・内-沈線文(横位)	-	0.7 - 15.9	中粒少量		△	△	△			砂泥	外-暗褐色 内-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ R12 III d(14) 台1102			
172			口	口縁直・口唇舌・内-植物繊維? 茎?混入・混和材抜けで若干アバタ状	-	0.7 - 19.6	中粒中量	△				白色粒 ○		砂	両-茶褐色	外-ナデ・指頭痕 内-ヘラナデ(縦)・指頭痕	HB③ T6 III d(14) F975			
173			口	口縁やや直(波状)・口径<胴径)・胴部やや張る・口唇舌・粘土接合面不明瞭	19.4 -	0.5 - 42.0	細粒少量	△				△		砂	両-橙茶褐色	外-指頭痕・ハケ目 内-ナデ・指頭痕	HC S15 貝層III群5 F4245			
第85図・図版61	174			口~底	口縁外反・胴部やや張る・口唇丸・底部くびれ平底(b・立ち上がりは直線的・底厚0.8cm)	21.9 24.4 5.8	0.6 0.8 791.5	中粒中量	○	○			△		砂	両-黄橙褐色	両-ハケ目明瞭	HC D11+E11 V (後期層) F2649他		
	175			口	口縁やや外反・口唇角(角状突起)	-	0.4 - 16.0	中粒中量	○	△			△		砂	外-暗茶褐色 内-茶褐色	外-ハケ目(縦) 内-ハケ目(斜)	HB③ I 台1406		
	176			口	口縁やや外反・口唇角(角状突起)	-	0.4 - 20.0	中粒中量	○	△			△		砂	外-暗茶褐色 内-灰褐色	外-ハケ目(縦)明瞭 内-ハケ目(斜)明瞭	HB③ A19 III d(14) HB③ A18 III e(15) 台1639, F2162		
	177			口	口縁やや外反・口唇角・頸部縮まる。胴部張る・無文	-	0.4 - 33.3	細粒中量	○				△		砂	両-黄茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ C8 III (12) 台954		
	178			胴	胴部やや張る・丁寧な調整	26.0 (胴径)	0.5 - 103.3	中粒中量	△	○	△	△			砂	両-黄茶褐色	外-ナデ 内-ハケ目明瞭(横)	HB③ C8 III (12) (13) 台1001.1438		
	179			口	口縁やや外反・口唇角(角状突起)	-	0.5 - 31.8	中粒中量	○	△			△		砂	両-暗茶褐色	外-ハケ目(縦)明瞭 内-ハケ目(斜)明瞭	HB③ A17 III d(14) F1381, 台1555		

◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 [出土地] F:ドット取上番号 カ:貝番号

第24表-8 土器 観察一覧

(質量単位:cm,g)

第図 図版	図 番号	分類		部位	形態	法量		混和材						胎土	器色		器面調整		遺跡・クワット・層・ 遺構・台帳(ド・カ)番号
		大	小			口径 器高 底径	器厚 底厚 重量	粒度 含量	石英	赤色 粒	○ r 輝石	角 閃石	砂 粒		そ の 他	外面 内面	外面 内面		
第85図・ 図版61	180			口	口縁外反(波状)・口唇丸・頸部縮まる・胴部張る	-	0.4	細粒 少量		△			△	泥	両-灰橙褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ T4 III d(14) 台1704		
	181			口	口縁外反・口唇丸で波状(刻目文・縦)	-	0.7	細粒 少量	△				△	砂	両-橙赤褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ Q~T10 - 台503		
	182			口	口縁外反・胴部やや張る・口唇丸・外-逆「U」字状凸帯文(上に刻目文)	-	0.5	細粒 中量	△	○	△			砂	外-灰褐色 内-赤茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC D14+E14 V(後 期層) F2674他		
	183			口	口縁やや外反・口唇丸・胴部張る・外-斜位の逆「U」字状凸帯文(上に刺突文)	-	0.6	中粒 少量	△				△	砂	両-灰褐色 (内-煤付着)	両-ナデ・指頭痕	HC C14 V(後期層) F4274		
	184			口	口縁外反強・口唇丸・外-刺突文(円文・竹管状工具・横)	-	0.6	細粒 少量						砂泥	両-灰茶褐色	両-ナデ	HB③ B9 III(12) F1438		
	185			口	口縁外反・口唇丸・外-鋸歯状沈線文・口唇-刻目文(縦)	-	0.6	細粒 少量	△				△	泥砂	両-黄灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A16 貝層III群3 F3603		
第86図・ 図版62	186			口	口縁外反・口唇丸・外-縦位の沈線文間に刺突文(刺突文は先端が弧状)	-	0.5	細粒 少量	△	△			灰色 粒 △	砂	両-暗茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC E10 V(後期層) F659		
	187			口	口縁外反・頸部くびれ・胴部張る・口唇丸・外-斜位の凸帯文(上に刻目文)・斜沈線・口唇-刺突文(二又状工具で横)	-	0.5	細粒 少量	△	△				砂	両-暗褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A16 貝層III群5 台10194. 10196		
	188			口	口縁外反・口唇丸(二又状工具で刺突文・縦位)・鞍状凸帯文・外-沈線文(斜・横)	-	0.5	細粒 少量	△				△	砂	両-茶褐色	両-指頭痕	HC C14 V(後期層) 台9626		
	189			口	口縁外反・頸部くびれ・口唇丸・外-斜沈線文	-	0.6	細粒 少量	△	△				砂	両-灰茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC G13 V(後期層) F1667		
	190			口	口縁外反・胴部やや張る・口唇丸・外-口唇粘土貼付(疑似肥厚)・口唇-刺突文(横)	-	0.6	細粒 少量	△				△	砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群5 台10839		
	191		Aイ	口	口縁やや外反・頸部くびれ・胴部張る・口唇丸・外-肥厚帯(幅6.5cm・薄・下部に横位の指圧文)	28.2	0.5	細粒 多量		○	◎	△			砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15 V(後期層) A15 貝層III群2 F2806. カ682	
	192		IV	口	口縁外反・頸部くびれ・胴部張る・口唇丸・外-口唇-刺突文(横・浅)	30.0	0.4	細粒 中量		○	△	△	△		砂	外-灰褐色 内-灰茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC D13 I 台10695	
	193			口	口縁外反強・胴部やや張る・口唇丸	29.4	0.8	細粒 少量	△			△	△		砂	両-黄茶褐色	外-ナデ・丁寧 内-ナデ	HC 貝層III群 F3187	
	194			口	口縁外反・胴部張る・口唇丸・小型・外-細沈線文(斜位)・口唇-刻目文(横・縦)	11.0	0.4	細粒 少量	△				△		砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15 貝層III群3 台10889	
	195			口	口縁外反・口唇丸(刺突文)・頸部縮まる・胴部張る・摩擦	-	0.6	細粒 少量	△	△	△			砂泥	両-灰橙褐色	外-ナデ? 内-ハケ目(横)	HB③ D5 III(10・11) 台1476		
	196			口	口縁外反・胴部張る・口唇丸・外-沈線文(横+曲)・口唇-刻目文(縦・等間隔)	-	0.6	細粒 少量	△				灰色 粒 △	砂	両-黄茶褐色	外-ナデ 内-ハケ目	HC C15 V(後期層) F910		
	197			口	口縁外反強・頸部くびれ・胴部張る・口唇丸・外-凸帯文(斜位?)	20.0	0.5	細粒 少量	△	△	△			砂	両-黄茶褐色	両-ヘラナデ	HC G14 V(後期層) F1666		
	198			口	口縁外反・口唇丸・頸部縮まる・胴部張る・摩擦	-	0.4	細粒 少量	△	△			△	砂	両-黄茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ A2 III d(14) F1296		
	199			口	口縁外反・胴部張る・口唇丸・外-沈線文(斜)・口唇-刻目文(縦・等間隔)	12.4	0.4	細粒 少量	△				△	砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A16 V(後期層) F1652		
200			頸	外-押し引き文(横位・単體工具)	-	0.7	細粒 中量	△	○			△	砂	外-赤茶褐色 内-暗茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A16 貝層III群3 F3603			
第87図・ 図版63	201			頸	頸部外反・外-幅5mmの凸帯文(その上に弧状の沈線文)	-	0.6	細粒 中量	△	○		△	砂	両-灰茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ R5 III d(14) F1709			
	202			口	口縁逆「ハ」字状外反・口唇丸(刻目文・縦)・胴部直線的	16.6	0.6	粗粒 中量		△	△	△	黄白 粒 ○	砂	両-赤茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ R19 III d(14) F1290		
	203			口	口縁逆「ハ」字状外反・口唇・胴部やや張る・口唇-刻目文	25.2	0.5	細粒 中量	△	○	△			砂	外-暗茶褐色 内-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ S2 III c(7) T2 III b(5) 台665. F354.376		
	204			口	口縁外反・胴部直線的・口唇丸・外-肥厚帯(薄・幅1.8cm前後)	26.6	0.5	中粒 中量	△	○			△	砂	両-黄茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC D8 V(後期層) F3397.3558		
	205			口	口縁逆「ハ」字状外反・口唇・胴部直線的	24.8	0.5	中粒 多量	△	◎			△	砂	両-茶褐色	外-ハケ目(縦) 内-ハケ目(横)	HB③ R1+R15 III d (14) F1858. 台1229 R1 IV(18) 台1753		

◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 [出土地]ド:ドット取上番号 カ:貝番号

第24表-9 土器 観察一覧

(質量単位:cm, g)

第図版	図番号	分類		部位	形態	法量		混和材						胎土	器色		器面調整		遺跡・クリット・層・遺構・台帳(ド・カ)番号
		大	小			口径器高底径	器厚底厚重量	粒度含量	石英	赤色粒	角閃石	砂粒	その他		外面	内面	外面	内面	
第87図・図版63	206	A	ウ	口	口縁逆「ハ」字状・外反・口唇丸・胴部直線的・口唇部-刻目文	19.2	0.5	中粒	△	○		△	砂	両-橙灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ B7+C7 III(12) R9+R8 III d(14) R9 IV(17) F1348			
	207			口	口縁外反・口唇丸・外-幅広沈線文(2.5mm・二又状工具)	-	0.5	中粒	△	○			砂	外-暗褐色 内-黄茶褐色	両-ナデ	HC G13 V(後期層) F1272			
	208			口	口縁直・口唇丸・外-沈線文(横+曲)・口唇-刻目文(斜)	-	0.6	細粒		△		△	砂	両-赤褐色	外-ナデ 内-ハケ目(横)	HB③ R9 III d(14) 台1627			
	209			口	口縁やや外反・胴部直線的・口唇丸(刻目文・不揃い・縦)・外-鋸歯状沈線文(長め)	-	0.4	細粒	△				砂泥	両-橙茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC D8 V(後期層) F3559			
	210			口	口唇直・胴部直線的・口唇角(刺突文)・鞍状凸帯文(斜位・上に刺突文・外-外面長め)	-	0.7	中粒		○		△	砂	両-橙茶褐色	両-指頭痕	HC C14 V(後期層) F377			
	211			口	口縁直・口唇やや外・外-横位の凸帯文(上に刻目文)・刺突文・口唇-刻目文	-	0.5	細粒	△	△			砂泥	両-赤褐色	両-指頭痕・ハケ目	HC E14 V(後期層) F3209			
	212			口	口縁直・口唇丸・外-逆「U」字状凸帯文(斜位・上に刺突文)・口唇-刻目文(等間隔)	-	0.5	細粒	△				砂泥	両-橙茶褐色	両-指頭痕	HC C10 V(後期層) F3520			
	213			口	口縁直・口唇舌。外-逆「U」字状凸帯文	-	0.5	細粒	△	△			砂	外-茶褐色 内-暗茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15 貝層III群5 台10185			
	214			口	口縁内湾・口唇丸・外-逆「U」字状凸帯文(上は無文)	-	0.4	細粒	△	○		△	砂	両-赤褐色	外-ナデ 内-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群2・D13 V(後期層) 台10945, F2303			
	215			口	口縁直・口唇丸・外-リボン状凸帯文+横位に幅広凸帯文(1.3cm)+有孔(径不明・内→外に穿孔)	-	0.7	細粒	△				砂泥	両-橙茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC T15 貝層III群2 台10136			
	第88図・図版64	216	IV	A・B	胴	外-凸帯文(方形状・上に刻目文)	-	0.5	細粒	△				砂	両-灰茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC T14 貝層III群2 台11004		
		217			頸	頸部に凸帯文(縦・上に刺突文)	-	0.5	細粒	△		△	△	砂泥	両-橙茶褐色	両-ヘナデ?・指頭痕	HB③ S10 III b(5) F98		
		218			胴	外-押し引文が横位に2条(二又状工具)・堅致	-	0.5	細粒	△				砂	両-灰茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC C16 V(後期層) F353		
		219			頸	外-やや肥厚帯(1cm弱)の短沈線文を横位+その上に弧状の沈線文	-	0.5	中粒	△	△			泥砂	外-淡橙褐色 内-淡灰褐色	両-ハケ目(横)	HB③ T4 III d(14) 台1635		
		220			頸	頸部直・粘土接合面隆起明瞭・外-沈線文(曲+斜位)	-	0.6~1.0	中粒	△			△	砂	外-橙赤褐色 内-灰赤褐色	外-ナデ・指頭痕 内-ハケ目(横)	HB③ A7 III b(5) 台481		
221		頸			頸部やや外反・外-沈線文(細・弧状・2条1組)	-	0.9	中粒	△	△			砂	外-赤茶褐色 内-灰茶褐色	外-ナデ・指頭痕 内-ハケ目(横)	HB③ S8 III c(7) 台674.1757			
222		頸			口縁直・口唇破損・外-三角状凸帯文+その下に幅広沈線文(4mm・横)	-	0.6	細粒	△	△		△	砂泥	外-黄茶褐色 内-暗黄褐色	両-ナデ(ヘラ?)	HB③ C5~7 II c 石列1群 台7 B8 III a上 台29			
223		口			口縁直・口唇丸(強調)・内外-弧状の沈線・口唇-沈線(横)・棒状工具	-	0.5	細粒	△			△	砂泥	両-赤褐色	両-ナデ	HC C10 F530			
224		口			口縁内湾(口唇に粘土貼付)・口唇丸・外-沈線文(縦+横)	-	1.0	細粒	△			△	砂	両-淡茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ S7 III d(14) F1538			
225		口			口縁直・口唇丸・頸部くびれ・外-沈線文(弧状)	-	0.8	中粒	◎			△	砂	外-橙茶褐色 内-暗茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ S9 III d(14) F1681			
226		頸			口縁直・口唇欠如・外-肥厚帯(上に斜位の細沈線文)	-	0.4	細粒	△			△	砂泥	外-暗・橙褐色 内-橙褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ A6 III(12) 台1067			
227		口			口縁内湾・口唇丸・外-凸帯文(縦・逆「U」字状)・細沈線(横+斜)	-	0.4	中粒	△	○		△	砂	外-暗茶褐色 内-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群4 台10747			
228		口			口縁内湾・頸部で屈曲・口唇丸・内外-不規則な曲沈線	-	0.7	細粒	△			△	砂	両-赤褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15 貝層III群3 カ688			
229		口			口縁直・口唇丸・外-沈線文(横+斜)	-	0.4	中粒			○	○	△	泥砂	両-灰橙褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ S8 III d(14) 台1520		
230		口			口縁内湾・胴部まで直線的・口唇角(強調)	21.4	0.5	中粒		◎	○		△	砂	両-黄茶褐色	両-ハケ目	HC B16+C15 V(後期層) F2299他		
第89図版65	231	D7(壺)		口	口縁外反微弱・長頸・ナデ肩・薄手	5.4	0.5	細粒	△			△	砂	両-暗茶褐色	両-ナデ丁草	HC E14 V(後期層) 台9891, F2782			
	232			口	口縁やや外反・短頸・ナデ肩・口唇丸・外-刺突文(単篋工具)+横・斜	4.6	0.4	細粒	△			△	砂	両-黄褐色	両-ナデ・指頭痕	HC C11 V(後期層) 台9566			

◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 [出土地] F:ドット取上番号 カ:貝番号

第24表-10 土器 観察一覧

(法量単位:cm, g)

第図版	図番号	分類		部位	形態	法量		混和材						胎土	器色		器面調整		遺跡・グリッド・層・遺構・台帳(ド・カ)番号	
		大	小			口径器高底径	器厚底厚重量	粒度含量	石英	赤色粒	Or輝石	角閃石	砂粒		その他	外面	内面	外面		内面
第89図・図版65	233	Dア(壺)		口	口縁外反・短頸・ナデ肩・外-刺突文(縦位に2列)	8.4 -	0.4 - 6.6	細粒多量	◎	○			△		砂	両-黄茶褐色	両-ナデ'	HC B13 V (後期層) F406		
	234			口	口縁やや外反・口唇丸・頸部から緩やかに張り出す・無文	5.7 -	0.5 - 12.4	細粒中量	○	○			△		砂	両-淡茶黄褐色	外-ナデ'・指頭痕内-ハケ目(横)	HB③ T18 IIIe(15) F2489		
	235			頸	頸部ハ字状外反・口唇破損・外-沈線文(弧状+横位・浅目)	- -	0.7 - 30.0	中粒中量	△	○	△					砂	両-黄灰褐色	両-ナデ'・指頭痕	HB③ S7 III d(14) 台1561	
	236	Dイ(壺)		口	口縁直・短頸・口唇丸・外-沈線(不規則)・口唇-刺突文(二又状工具)	6.0 -	0.6 - 7.3	細粒少量	△				△		砂	両-淡橙褐色	両-ナデ'・指頭痕	HC E15 V (後期層) F1107		
	237			口	口縁直・短頸・口唇丸・無文	7.2 -	0.7 - 12.6	細粒少量	△						砂	両-赤褐色	両-ナデ'・指頭痕	HC S15 貝層III群2 F4139		
	238			頸	口縁直・肩部ナデ肩・外-凸帯文(縦+横位で前者が先に貼付)	5.2(頸径) -	0.7 - 12.9	細粒少量	△	△						砂	両-橙茶褐色	両-ナデ'・指頭痕	HC T14 貝層III群2 F4038	
	239			頸	頸部に1.6cm幅の凸帯文貼付(上に刺突文・単篋工具)	- -	0.5 - 27.4	細粒中量	○	△			△			砂	両-黄茶褐色	両-指頭痕	HB③ T10 台1035	
	240			口	無頸・やや内湾・ナデ肩・口唇丸・外-凸帯文(横・上に刻目文)+上下に幅広沈線(不規則・縦)	6.8 -	0.4 - 26.0	細粒少量	△				△			砂泥	両-橙茶褐色	両-ナデ'・指頭痕	HC D11 V (後期層) F2526	
	241	Dウ(壺)		口	無頸・内湾・口唇丸・外-凸帯文(口唇+縦位の2個)	3.4 -	0.5 - 8.0	細粒少量	△						砂	両-赤褐色	両-ナデ'・指頭痕	HC T14 V (後期層) F1765		
	242			頸	無頸・内湾・ナデ肩・外-凸帯文(上に押引文・先端平ら工具)+沈線文(横・曲)	2.8(頸径) -	0.5 - 12.3	細粒少量	△		△				砂泥	両-橙茶褐色	両-ナデ'・指頭痕	HC T14+T15 貝層III群2 F3941他		
	243			口	無頸・内湾・肩部一端くびれ・口唇舌・外-凸帯文(横・縦)	4.2 -	0.4 - 6.9	細粒少量	△	△						砂	両-赤褐色	両-ナデ'・指頭痕	HC T15 貝層III群5 台10813	
	244	A		口	口縁外反・口唇舌・頸部縮まる・胴部張る・外-凸帯文貼付(斜)	15.6 -	0.7 - 29.3	細粒少量		△			△		泥	両-橙褐色	外-ハケ目(縦)明瞭内-ハケ目(横)明瞭	HB③ T3 III d(14) F2496		
	245			口	口縁外反・口唇丸・頸部縮まる・胴部直線的・摩滅	17.4 -	0.4 - 22.9	細粒少量		△			△			泥砂	外-橙褐色内-淡橙褐色	外-ナデ'内-ハケ目(横)	HB③ A18 IIIe(15) F2164	
	246			口	口縁外反・口唇丸で波状・頸部縮まる・胴部張る・無文・小型	11.2 -	0.6 - 32.1	細粒中量	○	△			△			砂	外-灰橙褐色内-灰黄褐色	外-ナデ'・指頭痕内-ハケ目(横)	HB③ A16 III d(14) 台1289	
247	口			口縁外反・口唇やや角・外-不規則な沈線・口唇-刻目文(等間隔)	- -	0.4 - 17.2	細粒少量	△				△			泥	外-橙褐色内-灰橙褐色	両-ナデ'・指頭痕	HC C13 V (後期層) F1796		
248	口			口縁外反弱・口唇丸(粘土貼付)・外-疑似肥厚帯・ハケ目は3本1組(凹みに朱色?)で縦位	- -	0.4 - 6.2	細粒少量		△				△			泥砂	両-灰橙褐色	外-ハケ目明瞭内-指頭痕	HC T15 貝層III群2 台11033	
249	B				口	口縁直・口唇丸(刻目文・縦)	16.8 -	0.4 - 16.3	細粒少量	△	△			△		砂泥	両-赤褐色	両-ナデ'・指頭痕	HB③ S8 III d(14) 台1520	
250		口	口縁外反(波状?)・口唇舌・頸部縮まる・胴部張る		- -	0.5 - 25.5	細粒少量					△			泥	両-灰橙褐色	外-ハケ目(不規則)内-ハケ目(横)	HB③ A18 III d(14) F1863		
251		口	口縁直・口唇やや角・胴部やや張る・口唇-刻目文		11.2 -	0.4 - 21.8	細粒少量	△				△			泥砂	両-灰橙褐色	外-ハケ目(縦)内-ハケ目(横)	HC D13 V (後期層) F2303		
252	第90図・図版66		C	口	口縁内湾・口唇丸・薄手	- -	0.4 - 7.5	細粒少量	△				△		砂	両-赤褐色	両-ナデ'・指頭痕	HB③ T4 IIIe(15) F2139		
253				-	口	口縁外反強(受け口)・口唇丸	- -	0.3 - 4.7	細粒少量	△				△		砂	外-赤褐色内-灰赤褐色	両-ナデ'・指頭痕	HB③ R8 III d(14) 台1471	
254			D(壺)		口	口縁やや外反・頸部直・口唇丸・小型	4.4 -	0.4 - 3.0	細粒少量					△		泥	両-灰褐色	両-ハケ目	HB③ T18 III d(14) 台1680	
255					胴～頸	口縁片口?頸(長・寸胴)・無文	8.4(胴径) -	0.5 - 31.4	細粒少量	△				△			泥砂	両-灰褐色	外-ハケ目(縦・横)明瞭内-ハケ目(横)明瞭	HB③ D8 III (12) 台966
256					口～胴	口縁外反・短頸・ナデ肩・胴部張る・口唇丸・左右形状歪み・外-ハケ目明瞭	10.1 23.8(推定)	0.6 - 1092(復元後)	細粒少量		△				△			泥	両-黄茶灰褐色	外-ハケ目明瞭(斜)内-ナデ'

◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 [出土地] F:ドット取上番号 カ:貝番号

第24表-11 土器（底部） 観察一覧

(法量単位:cm, g)

第90図・図版66	図番号	分類		形態	法量		混和材							胎土	器色		器面調整	遺跡・グリッド・層遺構・台(ドット)番号		
		大	小		底径重量	器厚底厚	粒度含量	石英	角閃石	輝石・赤色粒	白色粒	砂粒	その他		外面内面	外面内面				
第90図・図版66	257	丸底	-	外底平丸・内底平ら 底厚やや厚い	-	-	細粒多量	◎	○						砂(強)	両-淡橙色	両-指頭痕	HB③ Q16 IIIa 台77		
	258	尖底	a	外底丸・底厚やや厚い 立ち上がり(急・膨らむ)	-	0.5	細粒中稜	○					△	砂	両-橙茶褐色	外-ナデ 内-ハケ目(放射状)	HC D11 V(後期層) 台9742			
	259			外底丸・底厚薄い 立ち上がり(急・膨らむ)	-	0.4	粗粒多量	◎				△		砂	両-黄茶褐色	両-ハケ目・指頭痕 外-ナデ丁寧	HC S14.T14 貝層III群4 HC S14 貝層III群2 HC S14 貝層III群 F4194他			
	260			外底丸(上げ底) 底厚薄い	-	0.7	細粒中量	○	△						砂	両-赤褐色	両-指頭痕	HB③ Q14 III d(14) F1948		
	261			外底丸・底厚厚い 立ち上がり(緩やか)	-	0.7	粗粒多量	△		◎		○	黒色粒 △		砂	外-赤褐色 内-淡茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ R9 III d(14) F1727		
	262			外底丸・底厚やや厚い 立ち上がり(緩やか・やや直線的)	-	0.7	中粒中量	○		△					砂	外-赤褐色 内-暗褐色	外-ナデ・指頭痕 内-指頭痕	HB③ S6 III d(14) 台1597		
	263			外底丸・底厚より厚い 立ち上がり(急・ややくびれる)	-	0.9	中粒中量	○	△			△	火山ガラス △		砂	外-橙茶褐色 内-暗茶褐色	外-ナデ・指頭痕 内-ナデ	HB③ A18 III c(7) F419		
	264			外底やや丸・底厚やや厚い 立ち上がり(緩やか・やや直線的)	-	0.5	中粒中量	△		○			黒色粒 △		砂泥	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ R9 III d(14) 台1516		
	265			外底やや丸・底厚薄い 立ち上がり(急・やや直線的)	-	0.6	中量少量	△				△			砂泥	両-橙茶褐色	両-指頭痕	HB③ S9 III e(15) F2511		
	266			外底やや丸み・底厚やや厚い 立ち上がり(急・直線的)	-	0.4	最良少量	△				△			砂	外-茶褐色 内-黄茶褐色	外-ナデ丁寧 内-ハケ目	HC C11 V(後期層) F657		
	267			外底やや丸み・底厚薄い 立ち上がり(緩やか・直線的)	-	0.5	細粒中量	○				○			砂	両-橙茶褐色	両-ナデ	HC D9 V(後期層) F3379		
	268			外底やや丸み・底厚やや厚い 立ち上がり(緩やか・直線的)	-	0.5	中粒多量	◎	△	○					砂	両-赤褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15 貝層III群2 F3684		
	269			外底やや丸み・底厚やや厚い 立ち上がり(緩やか・直線的)	-	0.5	細粒中量	○	△	△					砂	外-灰褐色 内-赤灰褐色	外-ナデ丁寧 内-指頭痕明瞭	HC D14 V(後期層) F2446		
	270			外底やや丸・底厚厚い 立ち上がり(やや急・直線的) 内-半分煤付着(黒色)	-	0.5	中粒少量	△				△	灰色粒 △		砂	外-赤褐色 内-淡茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ R19 III c(7) 台596		
	271			外底やや丸・底厚より厚い 立ち上がり(やや急・直線的)	-	0.9	細粒少量	△				△	灰色粒 △		泥砂	外-橙茶褐色 内-灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ R10 III e(15) F2108		
	272			外底やや丸・底厚より厚い 立ち上がり(やや急・直線的)	-	0.7	細粒中量	○							砂	外-茶褐色 内-赤褐色	両-ナデ	HC A16 貝層III群5 F4150		
	273			外底やや丸・底厚より厚い 立ち上がり(やや急・直線的)	-	0.7	細粒少量	△		△					砂	外-茶褐色 内-暗茶褐色	両-ナデ	HC A15 貝層III群3 F3749		
	274			外底やや丸・底厚より厚い 立ち上がり(急・ややくびれ)	-	0.8	粗粒多量	△		◎		△			砂泥	外-赤褐色 内-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ T8 III c(7) F871		
	275			外底尖る・底厚薄い 立ち上がり(緩やか・直線的)	-	0.6	細粒少量	△	△						砂	両-灰黄褐色	両-ナデ・指頭痕 内-ハケ目	HC C14 V(後期層) F2408		
	276			外底尖る・底厚厚い 立ち上がり(緩やか・直線的)	-	0.7	粗・細粒多量	○	△	◎	△				砂	両-暗茶褐色	両-ナデ丁寧	HC T16 貝層III群4 F4798		
	277			外底尖る・底厚やや厚い 立ち上がり(緩やか・直線的)	-	0.5	細粒少量	△				△			砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S15 貝層III群5 F4382		
	278			外底尖る・底厚やや厚い 立ち上がり(緩やか・直線的)	-	0.6	細粒少量	△				△			砂	外-茶褐色 内-暗褐色	両-ナデ丁寧	HC A16 貝層III群3 F3345		
	279			外底尖る・底厚やや厚い 立ち上がり(緩やか・直線的)	-	0.5	粗粒中量	○				△			砂	両-茶褐色	両-ナデ	HC A16 V(後期層) F3339		
	第91図・図版67			280	b	外底尖る・底厚厚い 立ち上がり(緩やか・ややくびれ)	-	0.6	細粒少量	△						砂泥	両-灰茶褐色	両-ナデ	HC T14 貝層III群2 F4057	
				281		外底尖る・底厚厚い 立ち上がり(緩やか・ややくびれ)	-	0.6	中粒多量	△				◎	黒色粒 ◎		砂泥	外-淡茶褐色 内-灰褐色	両-ナデ	HB③ S5 III e(15) F2375
				282		外底尖る・底厚より厚い 立ち上がり(緩やか・ややくびれ)	-	0.7	中粒中量	○				△			砂泥	両-黄茶褐色	両-指頭痕	HB③ C8 III c(7) F661
				283		外底やや尖る・底厚より厚い 立ち上がり(緩やか・直線的)	-	0.7	粗粒多量	△		◎	◎				中	両-淡茶褐色	両-指頭痕	HB③ Q20 III d(14) 台1301
284				外底尖る・底厚より厚い 立ち上がり(急・ややくびれ)		-	0.5	細粒少量	△				△			砂泥	外-灰茶褐色 内-暗茶褐色	両-指頭痕	HB③ B8 III SK38 台1092	
285		外底尖る・底厚厚い 立ち上がり(急・ややくびれ)	-	0.6		細粒少量	△				△			泥砂	外-赤褐色 内-暗褐色	両-指頭痕	HB③ B7 III a(上) 台14			
286		外底平ら(底径小)・底厚やや厚い 立ち上がり(緩やか・やや直線的)	2.0	0.7		細粒少量	△				△			砂泥	外-赤茶褐色 内-暗褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ A18 III c(7) F418			
287		外底平ら(底径小)・底厚やや厚い 立ち上がり(緩やか・直線的)	2.0	0.6		中粒少量				△		△	黒色粒 △		泥砂	両-淡橙褐色	両-ナデ	HB③ S7 III d(14) 台1561		
288		外底平ら(底径小)・底厚厚い 立ち上がり(やや緩やか・直線的)	2.0	0.7		中粒中量	△		○		△			砂	両-茶褐色	外-雑仕上げ 内-ナデ・指頭痕	HC T15 貝層III群5 F4809			
289		外底平ら(底径小)・底厚より厚い 立ち上がり(やや急・直線的)	2.3	0.8		細粒少量	△							砂	外-灰茶褐色 内-暗褐色	両-ナデ	HC B16 V(後期層) F3031			
290		外底平ら(底径が小)・底厚より厚い 立ち上がり(やや急・直線的)	2.5	0.6		細粒少量	△							砂泥	両-橙茶褐色	両-ナデ	HC T14 貝層III群1 F3375			
291		外底平ら(底径が小)・底厚より厚い 立ち上がり(やや急・ややくびれ)	2.5	0.5		細粒中量	○				△			砂	両-暗茶褐色	両-ナデ・指頭痕 内-ハケ目	HC A16 貝層III群5 F3837			

◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 [出土地] F:ドット取上番号

第24表-12 土器（底部） 観察一覧

(質量単位:cm、g)

第91図・図版67	図番号	分類		形態	法量		混和材							胎土	器色		器面調整		遺跡・グリッド・層遺構・台(ドット)番号
		大	小		底径重量	器厚底厚	粒度含量	石英	角閃石・輝石・赤色粒	白色粒	砂粒	その他	外面内面		外面内面				
第91図・図版67	292	尖底	c	外底平ら(底径小)・底厚より厚い 立ち上がり(急・直線的)	2.8	0.8	細粒 中量	○					△	砂	外-橙茶褐色 内-灰茶褐色	両-指頭痕	HB③ A7 IIc 石列IV群 -SL07 台847		
	293			外底平ら(底径が小)・底厚厚い 立ち上がり(緩やか)・ややくびれ	2.8	0.5	中粒 少量	△		△				泥砂	両-灰橙褐色	両-ナデ	HC S14 貝層III群5 -F4323		
	294	a7		乳頭部小振り・外底丸み	-	0.5	細粒 少量	△		△		△	砂	両-茶褐色	両-ハケ目明瞭	HC T14 貝層III群2 -F4052. 4062			
	295			乳頭部小振り・外底丸み	-	0.5	細粒 少量	△					砂	外-茶褐色 内-灰茶褐色	両-ナデ	HC A15 V(後期層) -F3258			
	296			乳頭部小振り・外底丸み	-	0.9	細粒 中量	○		△			砂泥	外-茶褐色 内-灰茶褐色	両-ナデ	HC B16 貝層III群5 -F3845			
	297	a1		乳頭部小振り・外底丸み	-	0.5	細粒 少量	△					砂泥	両-茶黄褐色	両-ナデ・指頭痕 内-ヘラ	HC C9 IIc SK02 -F3372			
	298			乳頭部小振り・外底やや平ら	2.0	0.7	細粒 少量	△					砂泥	両-暗茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A16 V(後期層) -F1778			
	299			乳頭部小振り(やや高い) 外底やや平ら	2.4	0.6	中粒 中量	△		○		灰色粒 △	泥砂	外-茶灰褐色 内-灰褐色	両-指頭痕	HB③ Q1 IIIc(7) -F456			
	300	a7		乳頭部小振り(低い) 外底やや平ら	2.0	0.4	細粒 少量	△	△				砂泥	両-黄茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ T7 IIIc(7) -F475			
	301			乳頭部小振り・外底凹み	1.8	-	細粒 少量	△					砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群2 -F3938			
302	b7		乳頭部小振り(高い) 外底凹み	2.3	0.7	細粒 少量	△				△	砂泥	外-赤褐色 内-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ S9 IIIc(14) -F1683				
303			乳頭部中振り(やや高い) 外底やや丸み	3.2	0.6	細粒 少量	△		△		△	砂	外-赤褐色 内-暗茶褐色	両-指頭痕	HB③ T6 IIIc(14) -F996				
304	b7		乳頭部中振り(やや高い) 外底やや丸み	3.2	0.6	細粒 少量	△				△	砂	両-茶褐色	両-ナデ	HB③ B7 IIIc(7) -F671				
305			乳頭部中振り・外底やや平ら	1.8	-	細粒 最良	△					砂	外-茶褐色 内-暗褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群2 -F4086				
306	b1		乳頭部中振り・外底やや平ら	2.2	0.8	細粒 少量	△				△	砂	両-茶褐色	両-雑仕上げ	HC C11 貝層II群c -F4095				
307			乳頭部中振り・外底やや平ら	2.2	0.9	細粒 中量	○		○		黒色粒 △	砂	両-茶褐色	外-雑仕上げ 内-ナデ丁草	HC T15 貝層III群5 -F4542				
308	b1		乳頭部中振り・外底やや平ら	2.6	0.7	細粒 少量	△		△			砂	両-茶褐色	両-ナデ・擦痕	HC A15 貝層III群1 -F3224				
309			乳頭部中振り・外底やや平ら 外底-粘土貼付明瞭	3.4	0.5	細粒 少量	△					砂強	両-淡橙色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群5 -F4507				
310	b1		乳頭部中振り(高い) 外底平ら	2.8	0.6	粗粒 中量	△		○			砂泥	両-茶褐色	両-指頭痕	HB③ S8 IIIc(14) 台1520				
311			乳頭部中振り(高い) 外底平ら	2.4	0.9	粗粒 多量	○		◎			砂	外-赤褐色 内-灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ Q19 IIIc(14) -F1854				
312	b1		乳頭部中振り(高い) 外底平ら	3.0	0.7	中粒 中量	○				△	砂泥	外-茶褐色 内-暗褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ R7 IIIc(7) -F437				
313			乳頭部中振り(高い) 外底平ら	3.0	0.8	中粒 少量	△				△	砂泥	外-茶褐色 内-暗灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ R6 IIIc(7) -F451				
314	b1		乳頭部中振り(低い) 外底平ら	3.2	0.8	細粒 少量	△		△		△	砂泥	両-茶褐色	両-ナデ	HB③ S8 IIIc(7) 台674				
315			乳頭部中振り・外底凹み	2.4	0.6	細粒 少量	△		△			砂	両-灰茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群2 -F4065				
316	b1		乳頭部中振り・外底凹み	2.4	0.5	粗粒 多量	○				灰色粒 ○	砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群5 -F4516				
317			乳頭部中振り(やや低い) 外底凹み	2.8	0.5	細粒 少量	△				△	砂	外-赤褐色 内-暗灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ T7 IIIc(7) -F605				
318	b1		乳頭部中振り(低い) 外底凹み	2.8	0.6	細粒 少量	△				△	砂泥	両-赤茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ T9 IIIb(5) -F2000				
319			乳頭部中振り(やや低い) 外底凹み	2.8	0.6	中粒 少量	△				△	泥	両-淡橙褐色	外-ヘラナデ 内-指頭痕	HB③ T5 IIIc(14) -F2525				
320	b1		乳頭部小振り(低い) 外底凹み	2.6	0.8	中粒 中量	△				△ 灰色粒 ○	砂泥	外-茶褐色 内-灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ S4 IIIc(14) -F1147				
321			乳頭部大振り(やや高い) 外底やや平ら	3.7	0.5	中粒 多量	△		◎		△	砂	外-赤褐色 内-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ T16 IIIe(15) -F2173				
322	b1		乳頭部大振り(やや高い) 外底やや平ら	4.5	-	細粒 中量	○		△			砂	外-黄茶褐色 内-暗灰褐色	両-指頭痕	HB③ S8 IIIc(14) 台1520				
323			乳頭部大振り・外底凹み	3.8	0.9	細粒 少量	△		△			砂	両-灰茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A16 貝層III群5 -F4761				
324	b1		乳頭部大振り・外底凹み	3.8	1.1	細粒 少量	△					砂泥	両-淡橙色	両-指頭痕	HC S14 貝層III群2 -F3790				
325			乳頭部大振り(高い) 外底凹み	4.4	-	細粒 少量	△				△	砂	外-茶褐色 内-暗灰褐色	両-指頭痕	HB③ B9 IIIc(7) 台768				
326	b1		乳頭部大振り(低い)・外底凹み やや楕円状の底	3.8× 4.3	- 1.8	細粒 少量	△				△	砂泥	両-橙茶褐色	両-ナデ	HB③ T7 IIIc(14) -F1558				

◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 [出土地] 下:ドット取上番号

第24表-13 土器（底部） 観察一覧

(質量単位: cm, g)

第93図・図版	図番号	分類		形態	法量		混和材							胎土	器色		器面調整	遺跡・グリッド・層遺構・台(ドット)番号
		大	小		底径重量	器厚底厚	粒度含量	石英	角閃石・輝石・赤色粒	白色粒	砂粒	その他	外面		内面	外面内面		
第92図・図版68	327	脚台	-	外底上げ底(高)・内底平ら 立ち上がりくびれる・小型	-	-	細粒多量	◎				△	砂	外-赤褐色 内-暗褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15 貝層Ⅲ群5 f4166		
	328			外底上げ底(低)・内底平ら 立ち上がりくびれる	4.8 70.9	0.5 1.6	細粒少量	△				△	砂泥	外-淡褐色 内-灰褐色	外-ヘラ・指頭痕 内-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層Ⅲ群5 f4202		
	329			外底上げ底(やや高)・内底平ら 立ち上がりくびれる	6.4 76.2	0.9 1.2	細粒少量	△				△	砂泥	外-橙褐色 内-灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層Ⅲ群5 f4505		
	330	平底	a7	立ち上がりやや丸・やや張る 底厚薄い	2.8 20.1	0.5 0.7	細粒少量	△				△	砂	両-暗茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC B15 V(後期層) f2770		
	331			立ち上がりやや丸・やや張る 底厚やや厚い	3.6 59.6	0.6 1.3	細粒中粒	○		△			砂強	外-灰茶褐色 内-灰茶褐色	外-ヘラ(縦) 内-ナデ	HC D11 V(後期層) f2121		
	332			立ち上がりやや丸・やや張る 底厚やや厚い	3.8 34.4	0.7 1.0	細粒少量	△					砂泥	両-橙茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S15 貝層Ⅲ群3 f3760		
	333			立ち上がりやや丸・やや張る 底厚薄い	4.4 42.4	0.4 0.6	細粒中粒	○	△	○			砂泥	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC A15 貝層Ⅲ群5 f4174		
	334			立ち上がり丸・底厚厚い	4.4 37.7	- 1.7	中粒中粒	○			△		砂泥	外-茶褐色 内-灰茶褐色	両-ナデ	HB③ T7 Ⅲc(7) 台1028		
	335			立ち上がりやや丸・やや張る 底厚厚い	4.8 75.0	0.4 1.6	中粒少量	△				△	砂泥	両-橙褐色	両-ヘラ(斜)・指頭痕	HC T14 貝層Ⅲ群4 f4223		
	336			立ち上がり丸・やや直線的 底厚薄い	3.6 33.9	0.6 0.9	細粒中粒	○	△			△	砂泥	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC C17 V(後期層) f1917		
	337			立ち上がり丸・直線的 底厚薄い	5.4 11.9	0.6 0.8	中粒少量	△				△	砂泥	両-暗褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ R5 Ⅲd(14) 台1616		
	338			立ち上がり丸・直線的 底厚厚い・内底斜位	4.8 50.3	1.0 1.9	中粒中粒	△		○			砂	外-赤褐色 内-灰茶褐色	両-ナデ	HB③ S7 Ⅲd(14) f1830		
	339			立ち上がり丸・直線的 底厚厚い・内底盛り上がる	6.8 44.5	0.7 1.7	細粒少量	△				△	砂	外-暗茶褐色 内-赤茶褐色	両-雑仕上げ	HB③ C7 Ⅲc(7) f864		
	340	立ち上がり丸・若干くびれる 底厚より厚い・内底斜位	3.0 62.5	0.5 2.3	中粒中粒	○		○		△	砂	両-灰茶褐色	両-指頭痕	HB③ T6 Ⅲd(14) f1017				
	341	立ち上がり丸・若干くびれる 底厚厚い・内底斜位	3.0 57.7	0.7 1.7	細粒中粒	○					砂	外-赤茶褐色 内-灰茶褐色	両-ナデ	HB③ S7 Ⅲc(7) f410				
	342	立ち上がり丸・若干くびれる 底厚厚い・内底斜位	4.8 23.0	- 1.6	中粒中粒	○		○		△	砂	両-淡橙褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ T20 Ⅲc(7) 台1685				
	343	立ち上がり丸・若干くびれる 底厚厚い・内底斜位	4.8 73.3	0.8 1.6	中粒少量	△					砂泥	外-赤茶褐色 内-暗褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ R7 Ⅲd(14) 台1571				
	344	b	立ち上がり角・若干くびれる 底厚より薄い	6.0 36.4	0.4 0.5	中粒少量	△				△	砂泥	両-黄茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC K13 V(後期層) f1611			
	345	a7	くびれ微弱・底厚より厚い 底径小	4.8 30.24	0.6 1.5	中粒多量	△		◎			泥砂	両-灰橙褐色	両-ナデ・指頭痕	HC E14 V(後期層) f1160			
	346	a7	くびれ微弱・底厚より厚い 外底-粘土粒貼付・底径小	5.0 51.7	0.6 1.5	中粒多量	◎				○ 灰色粒	砂	両-灰茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC G11 f618			
347	a7	くびれ微弱・底厚やや厚い 外底凹み(浅め・円形状)・底径小	5.0 46.0	0.5 0.8	細粒少量	△				△	砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕 内-ハケ目	HC C14 V(後期層) f1441				
348	a1	くびれ微弱・底厚やや厚い・立ち上 がり丸・若干くびれ・外底不安定	4.6 30.0	0.4 1.2	細粒少量						泥	両-橙灰褐色	両-ハケ目・指頭痕	HC F16 V(後期層) f1606				
349	a7	くびれ微弱・底厚やや薄い 内底平ら・底径小	5.0 24.0	0.3 0.9	中粒少量				△		泥	外-灰褐色 内-淡橙褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ S5 Ⅲe(15) f2327				
350	a1	くびれ微弱・底厚やや厚い 底径中	6.2 58.7	0.5 1.1	中流中粒	○					泥砂	両-灰黄褐色	両-ナデ・指頭痕	HC B15 V(後期層) f2423				
第93図・図版69	351	くびれ	b1	くびれ弱・底厚やや厚い 外底やや上げ底・底径小	3.4 17.2	0.3 1.0	細粒少量	△					泥砂	両-黄茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ B7 Ⅲ(12上) 台808		
	352			くびれ弱・底厚やや厚い 底径小	4.2 23.9	- 1.3	細粒少量	△			△		泥砂	外-茶褐色 内-暗褐色	両-指頭痕	HB③ T5 Ⅲd(14) 台1137		
	353			くびれ弱・底厚やや厚い 底径小	4.2 38.1	0.5 1.2	細粒少量	△				△	砂泥	両-灰茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ S7 Ⅲd(14) 台1240		
	354			くびれ弱・底厚薄い 底径小・内底斜位	3.8 12.7	0.4 0.6	細粒少量	△					砂泥	外-茶褐色 内-暗褐色	両-指頭痕	HB③ B8 Ⅲc(7) f628		
	355			くびれ弱・底厚やや薄い 底径小	3.8 36.8	0.5 0.9	中粒多量	○			◎		灰色粒 △	砂	両-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC T14 貝層Ⅲ群5 f4311	
	356			くびれ弱・底厚やや薄い 外底上げ底(雑)	4.8 84.0	0.5 0.9	細粒中粒	△					茶色粒 ○	砂	両-暗茶褐色	外-ナデ・指頭痕 内-ハケ目明瞭	HC E14 V(後期層) f1155	
	357			くびれ弱・底厚薄い 底径小	5.0 15.6	0.5 0.7	細粒少量						△	泥	両-赤褐色	両-指頭痕	HB③ S2 Ⅲd(14) 台1176	
	358			くびれ弱・底厚やや厚い 外底やや上げ底	5.0 33.5	0.5 1.0	細粒少量	△		△				泥砂	両-淡茶褐色	外-ナデ・指頭痕 内-雑・指頭痕	HC D9 V(後期層) f2023	
	359			くびれ弱・底厚やや厚い 底径中	5.2 19.1	0.6 1.0	細粒少量	△		△				泥砂	両-橙灰褐色	両-指頭痕	HB③ T5 Ⅲc(7) 台514	
	360			くびれ弱・底厚厚い 外底上げ底・底径小	4.9 62.1	0.7 1.6	中流中粒	○		○		△		砂	外-茶褐色 内-暗褐色	両-ナデ・指頭痕	HC T14 貝層Ⅲ群2 f3949	
	361			くびれ弱・底厚厚い 外底中央部上げ底・底径中	5.4 42.7	0.5 1.6	細粒少量	△						砂泥	外-茶褐色 内-暗褐色	両-ナデ・指頭痕	HC C14 f549	
	362			くびれ弱・底厚厚い 外底やや上げ底・底径中	6.0 75.0	0.6 1.6	細粒少量	△					灰色粒 △	砂泥	外-茶褐色 内-灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HC I14 f246	

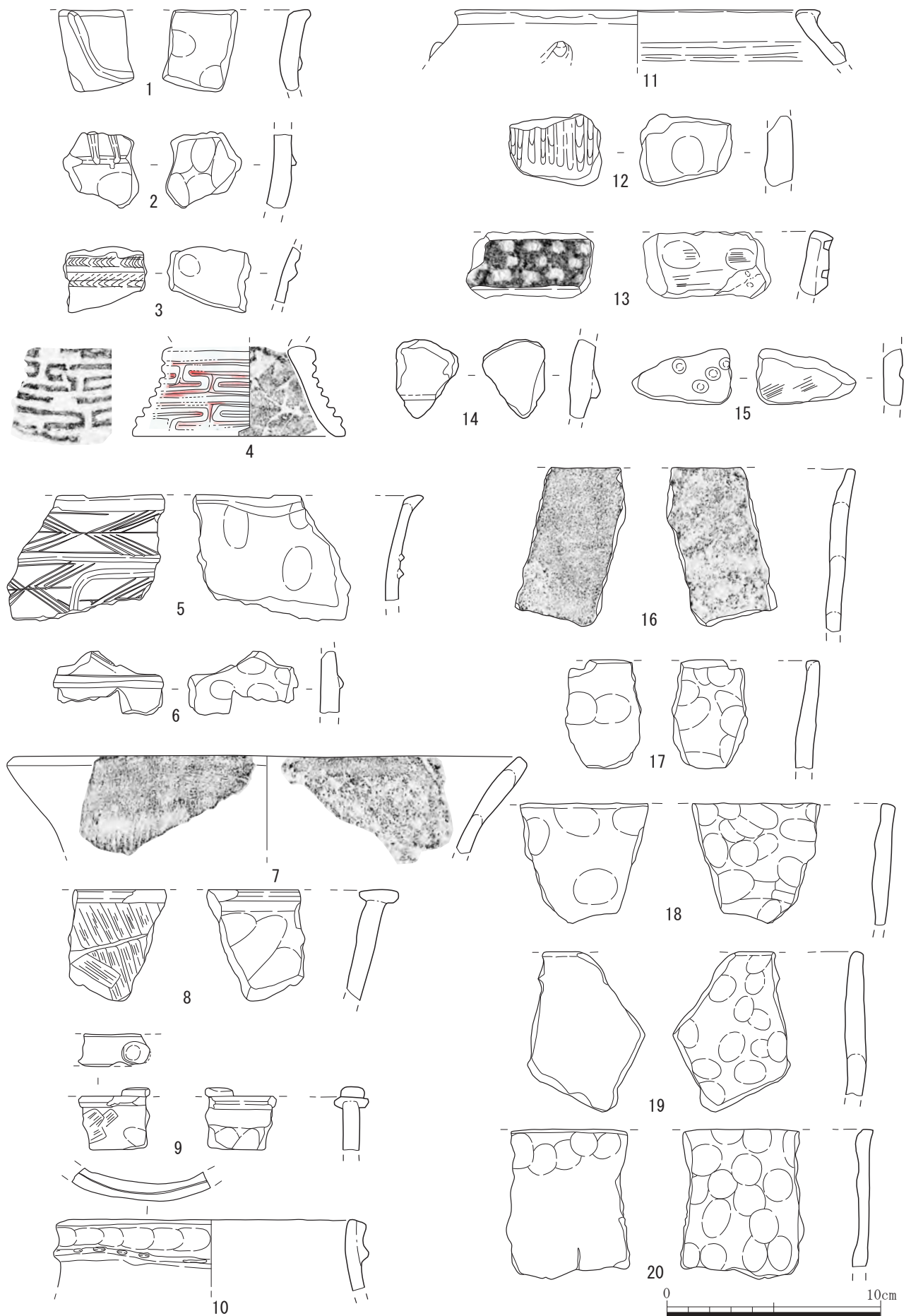
◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 [出土地] f:ドット取上番号

第24表-14 土器（底部） 観察一覧

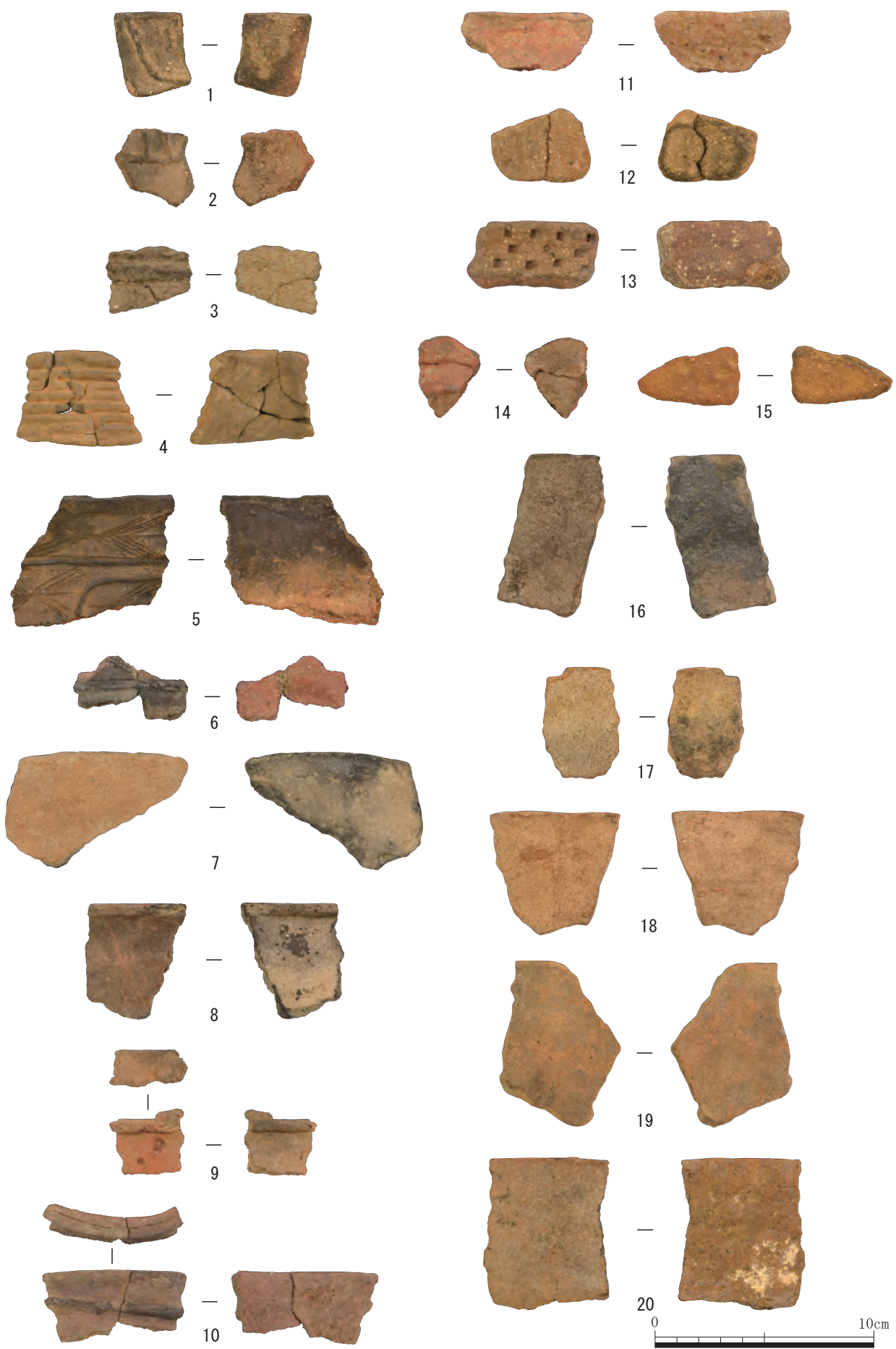
(質量単位:cm, g)

第93図・図版	図番号	分類		形態	法量		混和材							胎土	器色		器面調整		遺跡・グリッド・層遺構・台(ドット)番号
		大	小		底径重量	器厚底厚	粒度含量	石英	角閃石・輝石・赤色粒	白色粒	砂粒	その他	外面		内面	外面	内面		
第93図・図版69	363	bア		くびれ弱・底厚厚い 底径中	6.4 71.2	0.6 1.6	中粒 中量	△					△	灰色粒 ○	砂	外-茶褐色 内-暗灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ T15 IIIe(15) F2536	
	364	bイ		くびれ弱・底厚やや厚い 底径中	6.3 32.7	- 1.1	中粒 多量	△		◎					泥砂	両-淡橙褐色	両-指頭痕	HB③ S17 III d(14) HB③ T16 IIIe(15) F953. F2303	
	365	bイ		くびれ弱・底厚やや厚い 外底上げ底(円形状の粘土貼付)	6.4 34.8	0.6 1.2	細粒 少量	△				△			砂泥	両-茶褐色	外-ヘラナデ 内-ナデ	HB③ S9 IIIc(7) F642	
	366	bウ		くびれ弱・底厚薄い 底径中	5.4 35.5	0.3 0.9	細粒 中量	△		○					砂泥	両-茶褐色	外-ナデ・指頭痕 内-ハケ目(斜)	HB③ A1 IIIe(15) F2444	
	367	bウ		くびれ弱・底厚薄い 底径中	5.6 66.9	0.4 0.6	細粒 少量	△				△			砂	両-茶褐色	外-ナデ・指頭痕 内-ハケ目明瞭	HC G15 IV(流路内覆土) F1660	
	368	bウ		くびれ弱・底厚薄い 外底やや上げ底・底径中	6.4 44.4	0.3 0.8	中粒 多量	○		◎		△			砂	外-暗茶褐色 内-茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HC G12 IIc(クムイ) F1844	
	369	bウ		くびれ弱・底厚薄い 外底中央部やや上げ底・底径中	6.8 42.5	0.5 0.9	細粒 少量	△		△					砂泥	両-灰橙褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群2 F4026	
	370	bエ		くびれ弱・底厚より薄い 内底平ら・底径中	6.9 10.3	0.6 0.4	細粒 少量				△		△		泥	両-橙灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ T18 III d(14) 台1112	
	371	bイ		くびれ弱・底厚やや厚い 底径大・外底やや上げ底	7.0 24.7	0.5 1.0	中粒 少量				△		△		泥	両-橙灰褐色	両-ナデ	HB③ S20 IIIc(7) 台652	
	372	bイ		くびれ弱・底厚やや厚い 底径大	8.0 22.7	0.5 1.2	中粒 少量	△					△		砂	外-茶褐色 内-暗褐色	両-指頭痕	HB③ S9 III d(14) F2087	
	373	bウ		くびれ弱・底厚薄い 外底中央部やや上げ底・底径大	8.0 64.9	0.5 0.9	細粒 少量	△							砂	外-淡灰褐色 内-淡茶褐色	両-ナデ丁寧	HC D12 V(後期層) F2140	
	374	cエ		くびれ明瞭・底厚より薄い 外底上げ底・底径小	5.0 25.8	0.3 0.5	細粒 少量	△					△		手誂	両-灰褐色	外-ナデ・指頭痕 内-ハケ目明瞭	HC B14 V(後期層) F493. 500	
	375	cエ		くびれ明瞭・底厚より薄い 底径中	5.2 10.7	0.3 0.5	細粒 少量	△					△	灰色粒 △	泥砂	外-橙褐色 内-灰褐色	外-ナデ 内-ハケ目	HC T15 貝層III群4 F4613. 4614	
	376	cエ		くびれ明瞭・底厚より薄い 底径中	5.4 14.7	0.4 0.4	中粒 中量	△		○			△		砂泥	外-暗茶褐色 内-淡橙褐色	外-指頭痕 内-ハケ目(横)	HB③ S9 IV(17) 台1546	
	377	cウ		くびれ明瞭・底厚薄い 底径中	5.9 69.0	0.5 0.6	細粒 少量	△					△		泥	両-淡橙褐色	両-指頭痕	HB③ C5 III(12) 台951	
	378	cウ		くびれ明瞭・底厚薄い 外底中央部やや上げ底・底径中	5.8 35.6	0.7 0.8	細粒 少量	△					△		砂	外-淡茶褐色 内-灰褐色	外-ナデ・指頭痕 内-ハケ目明瞭	HC E14 V(後期層) F1610	
	379	cウ		くびれ明瞭・底厚薄い 外底上げ底・底径中	6.0 19.4	0.5 0.6	細粒 少量	△							差で位	両-橙灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群2 F4014. 台10951	
	380	cイ	くびれ		くびれ明瞭・底厚やや厚い 外底上げ底・底径中	6.0 40.4	0.4 1.1	細粒 少量	△					△	泥砂	両-灰橙褐色	外-ナデ丁寧 内-雑仕上げ	HC C13 V(後期層) F1067	
	381	cウ			くびれ明瞭・底厚薄い 底径中	6.2 30.3	0.5 0.9	細粒 少量	△					△	泥	両-黄茶褐色	両-指頭痕	HB③ D4 III(13) F1955	
	382	cア			くびれ明瞭・底厚厚い 底径中	6.3 99.0	0.7 1.7	細粒 少量	△					△	泥砂	両-灰茶褐色	外-ナデ 内-ハケ目(縦)	HB③ Q18 III d(14) F1855	
	383	cウ			くびれ明瞭・底厚薄い 底径中	6.4 20.8	0.4 0.8	中量 多量	○		◎					砂	外-灰茶褐色 内-淡橙褐色	両-ナデ・指頭痕	HC E14 V(後期層) F1154
	384	cウ			くびれ明瞭・底厚薄い 外底上げ底・底径中	6.4 30.9	0.6 0.8	細粒 少量	△					△		砂泥	両-橙灰褐色	両-ナデ丁寧	HC E14 V(後期層) F2658. 2659
	385	cウ			くびれ明瞭・底厚薄い 外底上げ底・底径中	6.4 21.0	0.5 0.7	細粒 少量	△		△					泥	両-橙灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群2 F4013
	386	cイ			くびれ明瞭・底厚やや厚い 底径中	6.5 65.8	0.4 1.0	細粒 少量	△					△		砂泥	両-橙灰褐色	両-ナデ(ヘラ?)	HB③ A17 IIIe(15) F2156 HB③ A17 III d(14) 台1555
	387	cウ			くびれ明瞭・底厚薄い 底径中	6.6 24.6	- 0.7	中粒 中量	○					△		砂強	両-灰黄褐色	両-指頭痕	HB③ A17 III d(14) 台1211
	388	cイ			くびれ明瞭・底厚がやや厚い 外底上げ底・底径中	6.6 50.3	0.7 1.3	細粒 少量	△		△		△			泥砂	外-灰茶褐色 内-淡橙褐色	両-ナデ・指頭痕	HC F12 IIc(クムイ) F1246
	389	cイ			くびれ明瞭・底厚がやや厚い 外底上げ底・底径中	6.8 37.1	0.4 1.0	細粒 少量	△					△		手誂	両-灰褐色	外-ナデ丁寧 内-雑仕上げ	HC D13 V(後期層) F1794
	390	cエ			くびれ明瞭・底厚薄い 外底やや上げ底・底径大	7.0 21.2	0.4 0.4	細粒 少量	△					△		泥	両-黄茶褐色	両-指頭痕	HB③ E4 III(13) F1960
	391	cウ			くびれ明瞭・底厚薄い 外底やや上げ底・底径大	7.0 19.5	0.5 0.7	細粒 少量	△					△		泥	外-赤褐色 内-灰褐色	外-指頭痕 内-ハケ目(横)	HB③ S10 IIIc(7) 台1043
	392	cウ			くびれ明瞭・底厚薄い 底径大	7.2 83.5	0.6 0.6	中粒 中量	○	△	△					砂	両-暗茶褐色	外-ナデ・指頭痕 内-ハケ目明瞭(斜)	HB③ S8 III d(14) HB③ S7 IIIe(15) F1817. 2235
	393	cウ			くびれ明瞭・底厚薄い 底径大	7.2 27.9	0.4 0.6	中粒 中量	○		△		○			砂	両-灰茶褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ C7 III(8-9) 台427
	394	cウ			くびれ明瞭・底厚薄い 外底やや上げ底・底径大	7.4 54.9	- 0.7	粗粒 多量	○		◎			△		砂	両-橙褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ A4 III d(14) F2504
	395	cウ			くびれ明瞭・底厚薄い 外底上げ底・底径大	7.6 65.3	0.6 0.9	中粒 中量	△		○		△			砂	外-橙褐色 内-灰褐色	外-ナデ丁寧 内-雑仕上げ	HC D13 V(後期層) F2439. 2442
	396	dア			くびれより明瞭・底厚より厚い 底径大	9.0 108.1	0.8 1.9	中粒 中量	○		△	○				手誂	両-橙灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HC S14 貝層III群5 F4694
	397	-			くびれ弱・底厚薄い 外底凹み(大・明瞭)	4.6 52.5	0.4 0.6	中粒 中量	△					灰色粒 ○		泥	外-灰橙褐色 内-暗灰褐色	両-ナデ・指頭痕	HB③ Q8 III d(14) F1472

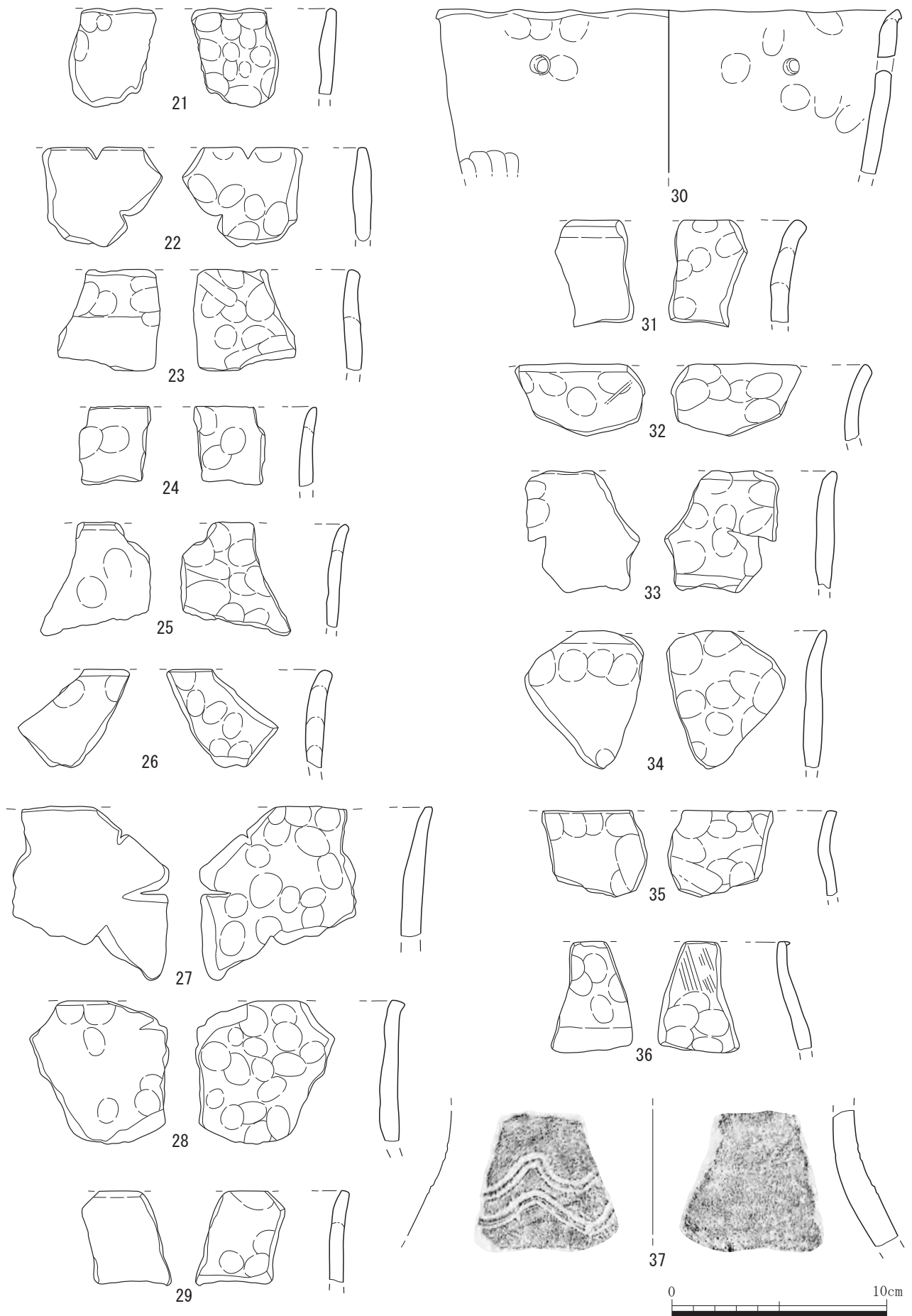
◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 [出土地] F:ドット取上番号



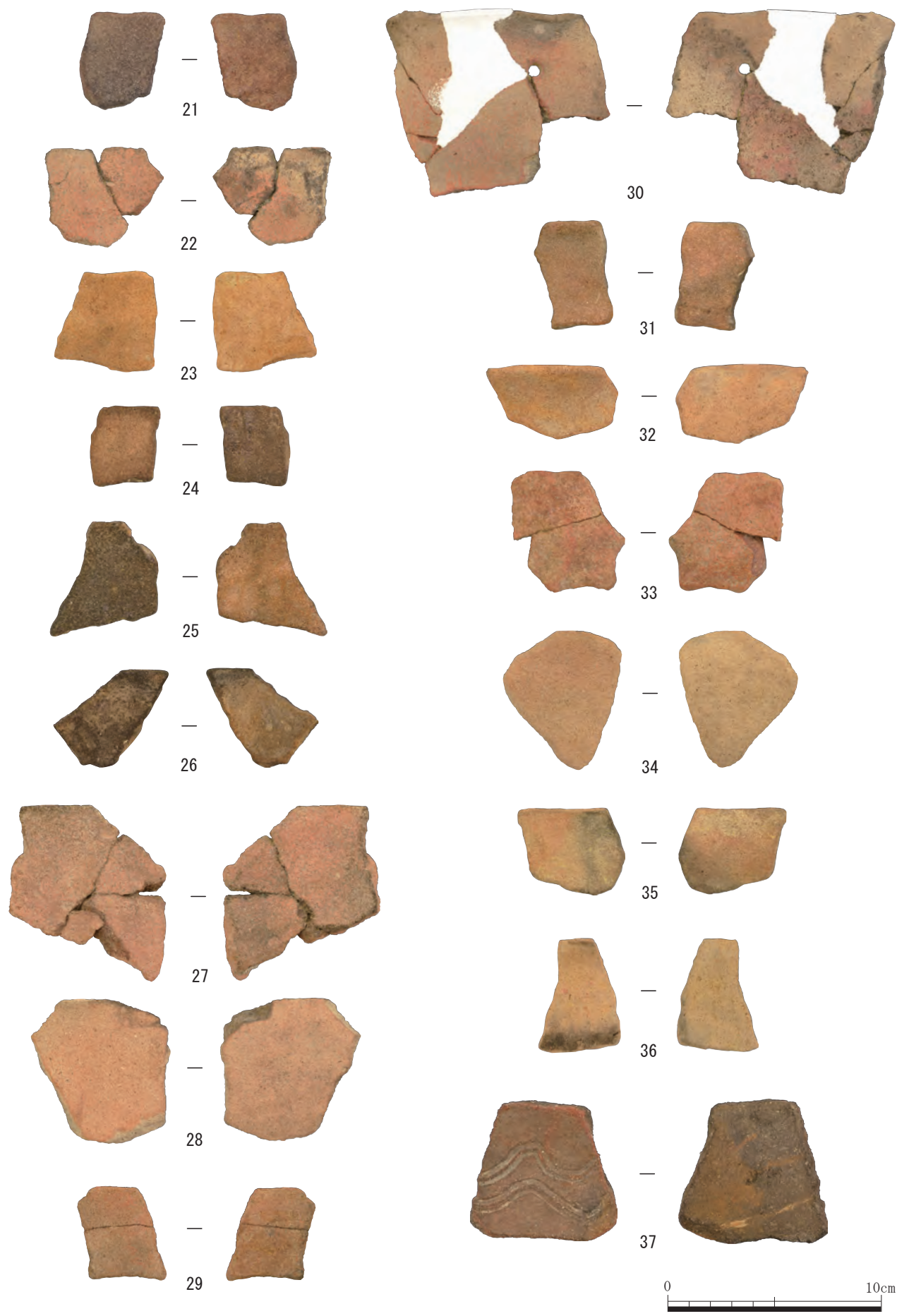
第71图 土器1



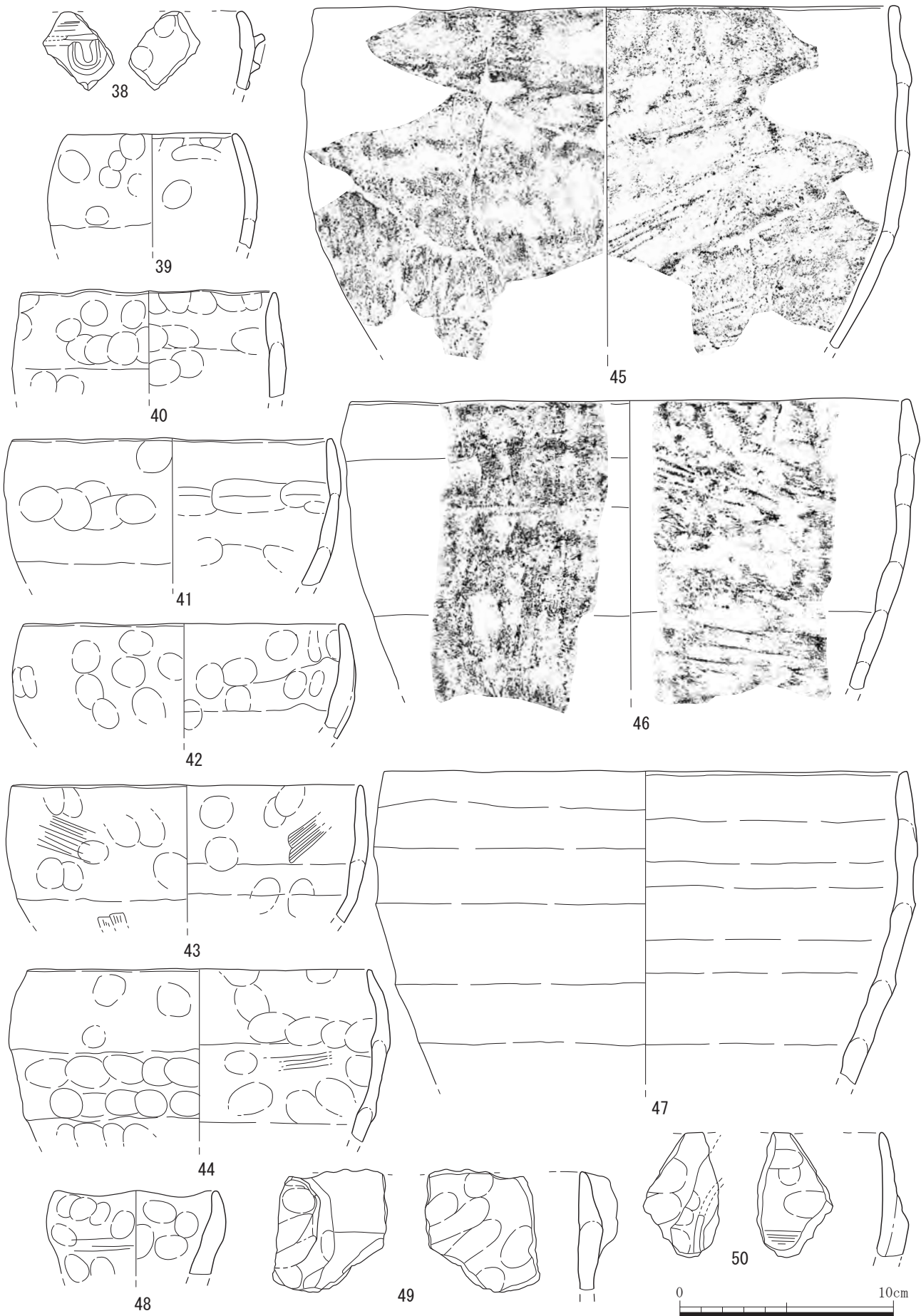
图版 47 土器 1



第72图 土器2



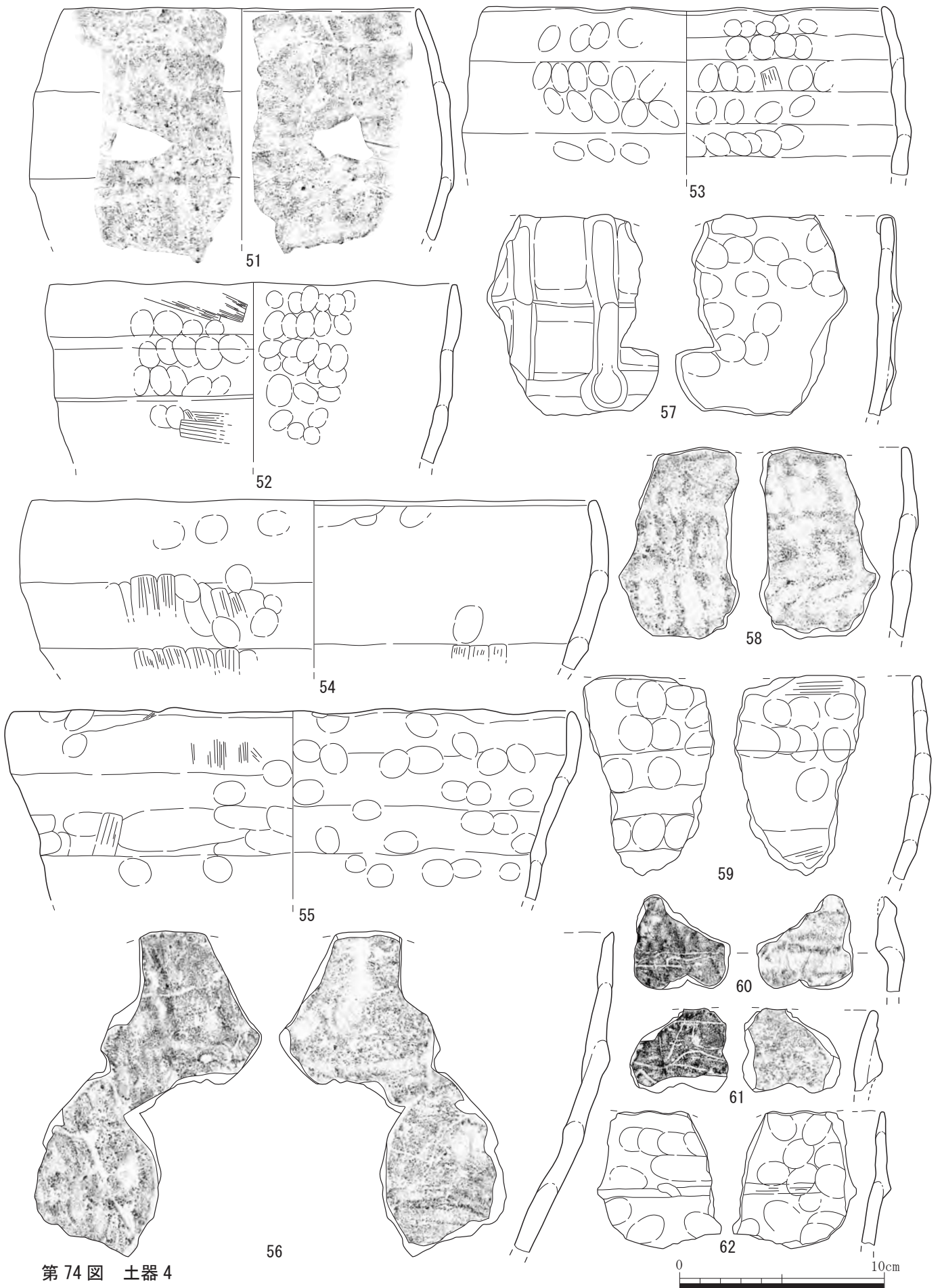
图版 48 土器 2



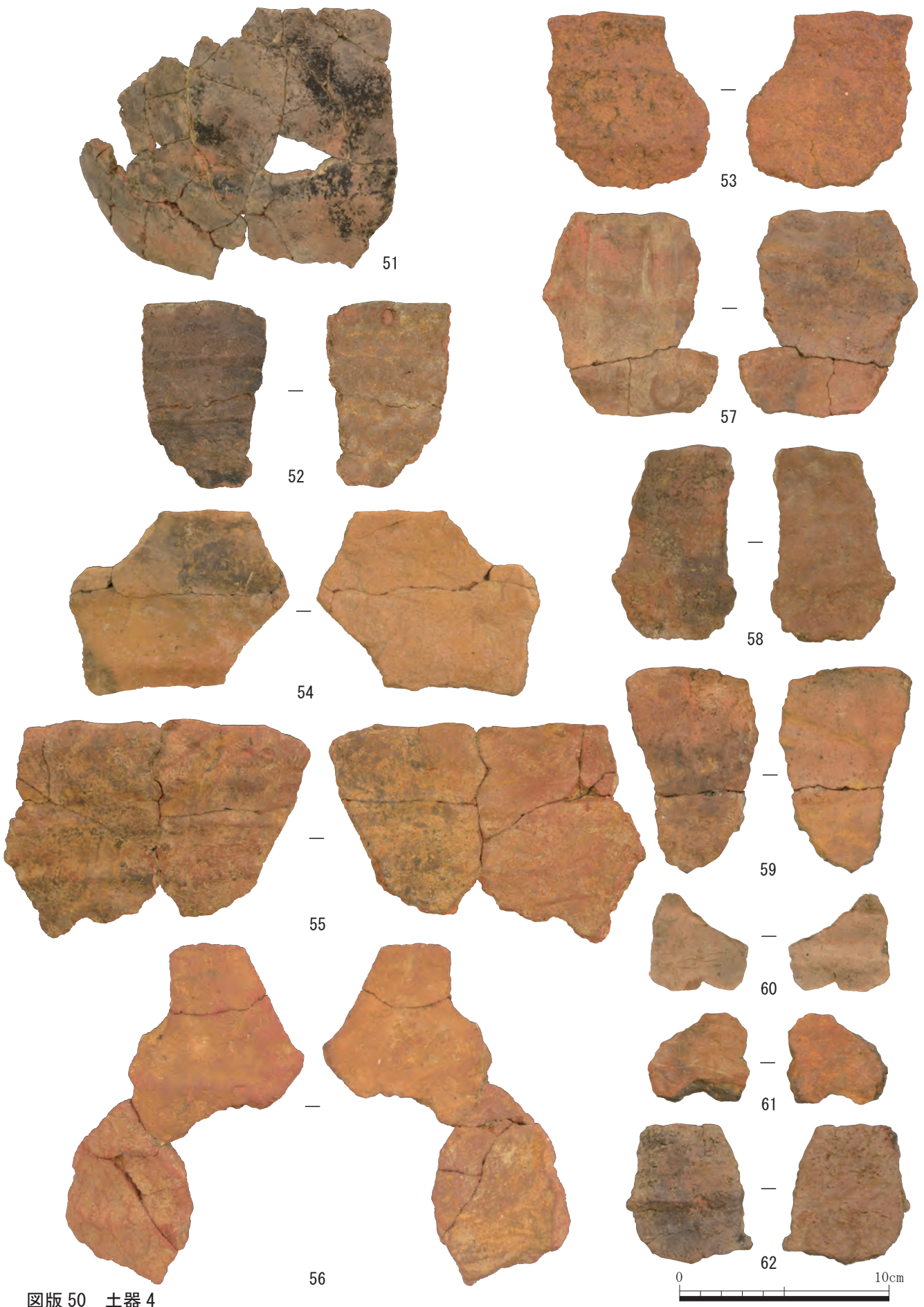
第73图 土器3



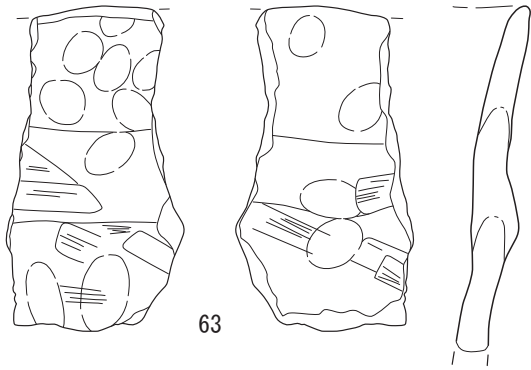
图版 49 土器 3



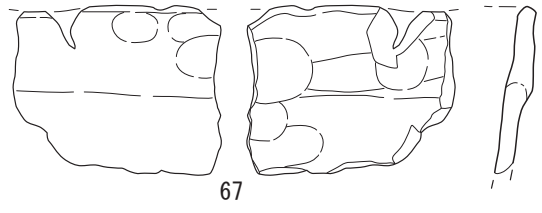
第74图 土器4



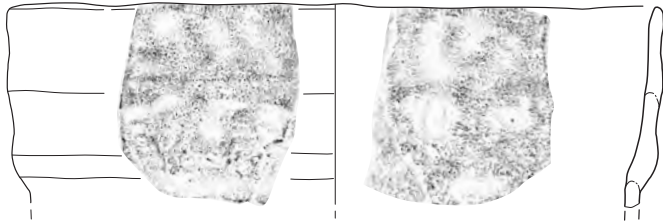
图版 50 土器 4



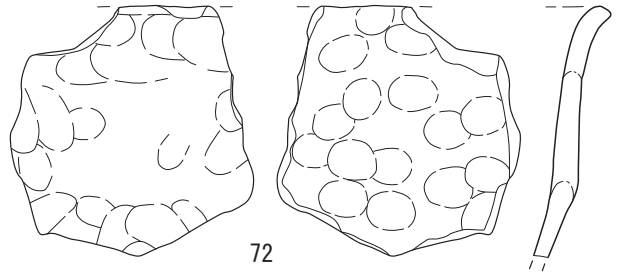
63



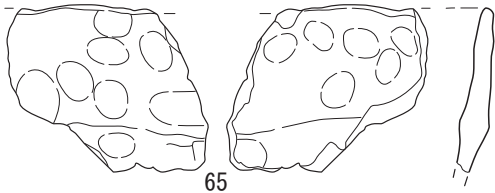
67



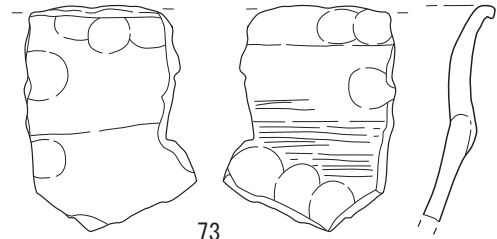
64



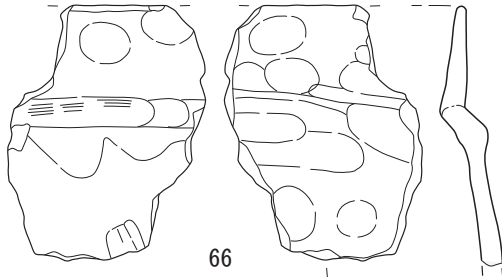
72



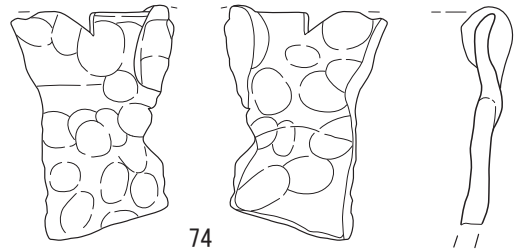
65



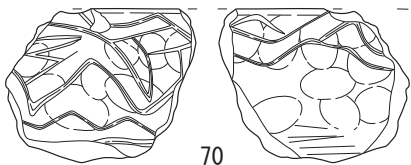
73



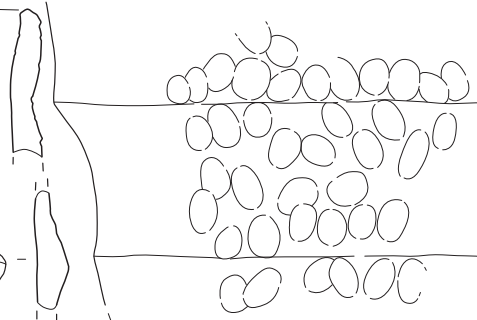
66



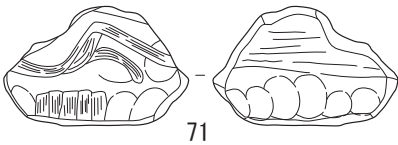
74



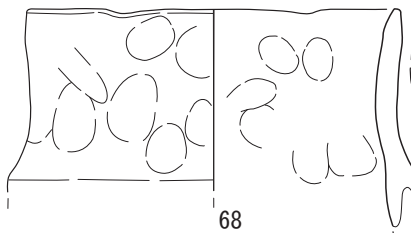
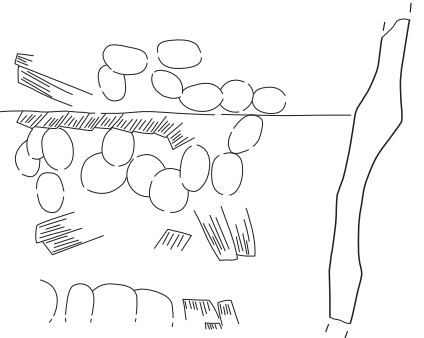
70



75



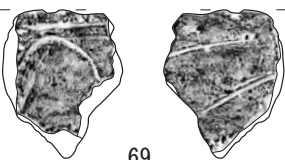
71



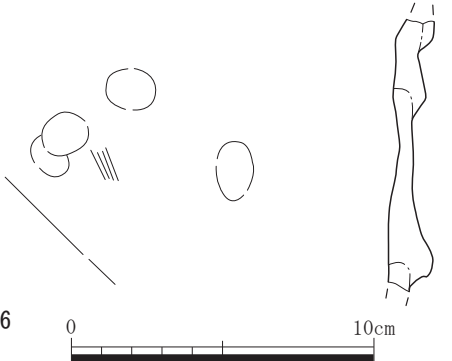
68



76

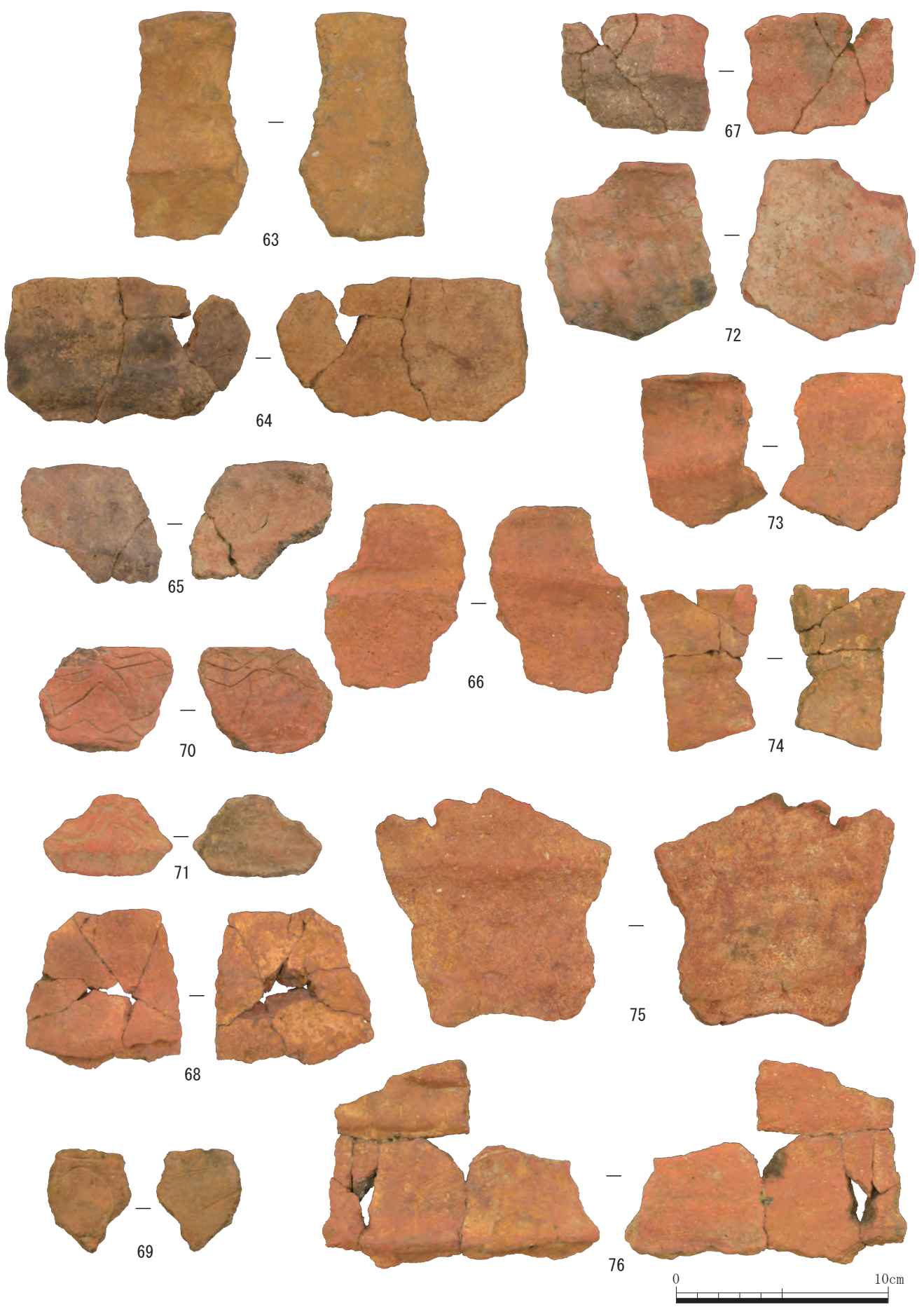


69



0 10cm

第75图 土器5



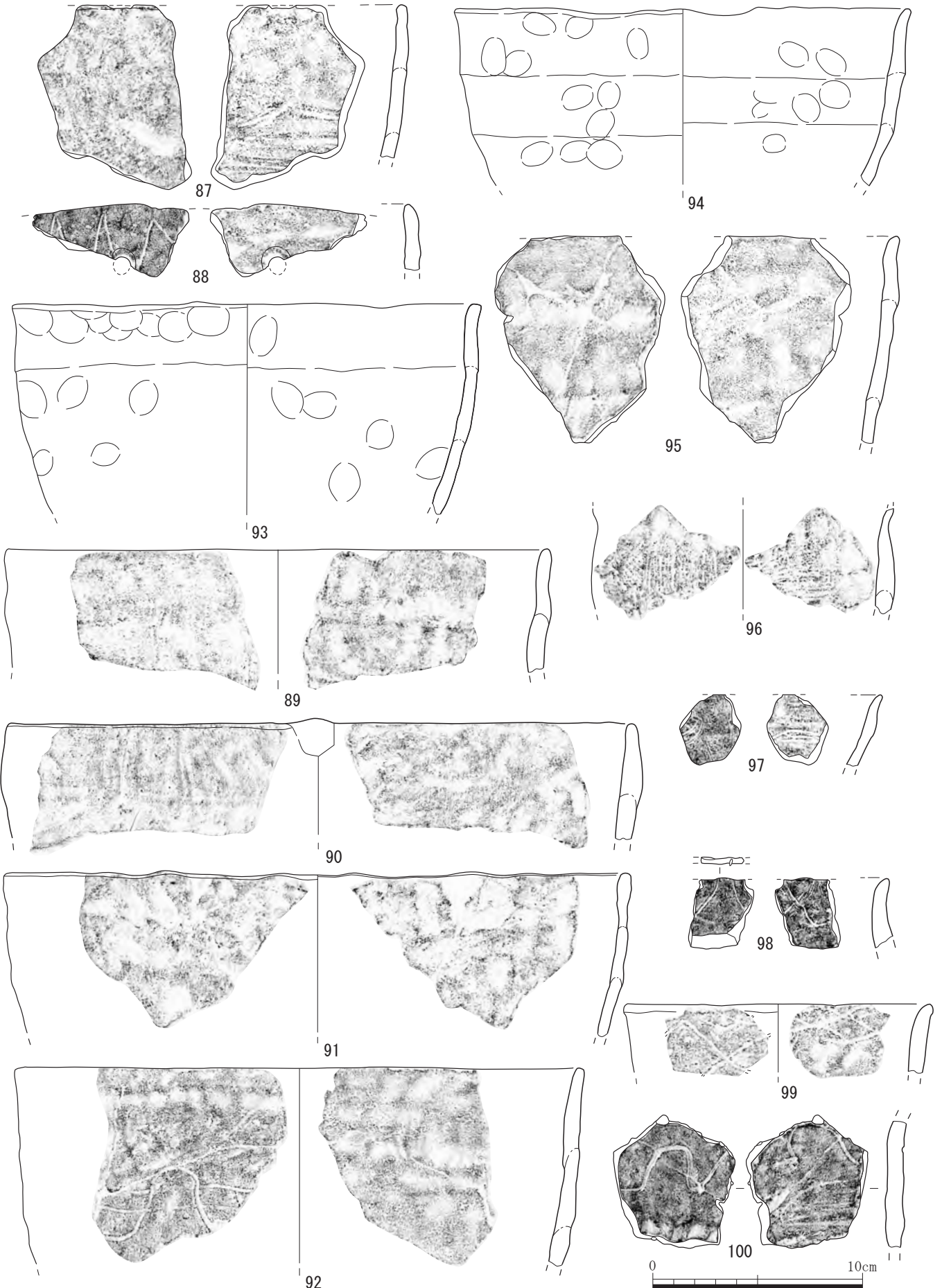
图版 51 土器 5



第76图 土器6



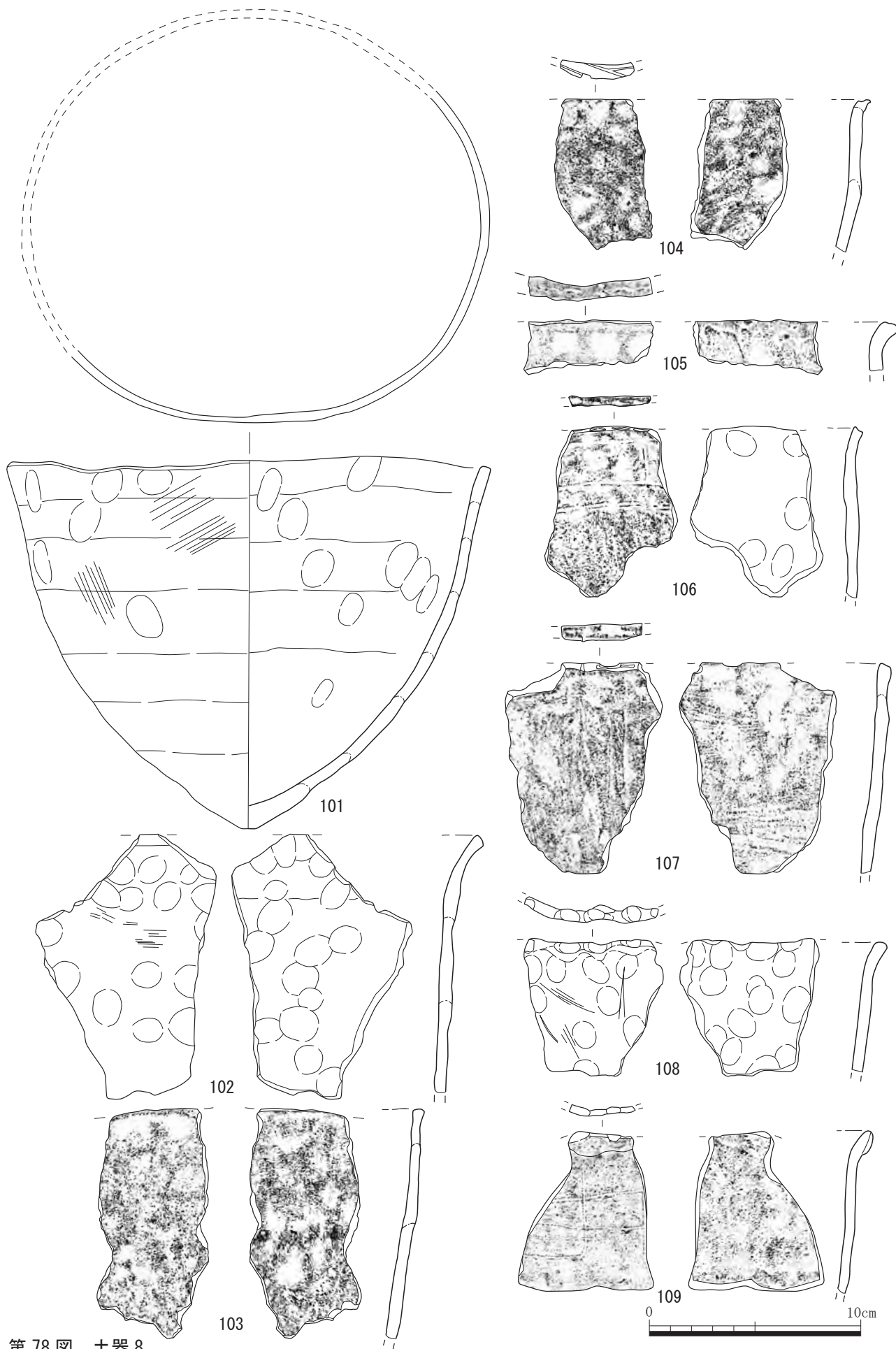
图版 52 土器 6



第77图 土器7



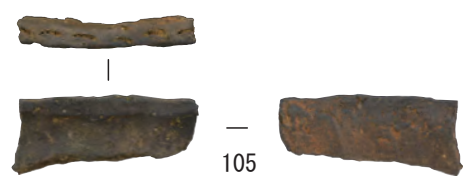
图版 53 土器 7



第78图 土器 8



101



105



106



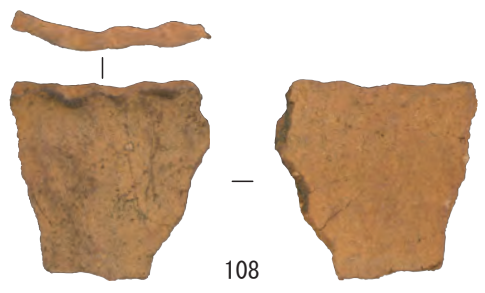
102



107



103



108



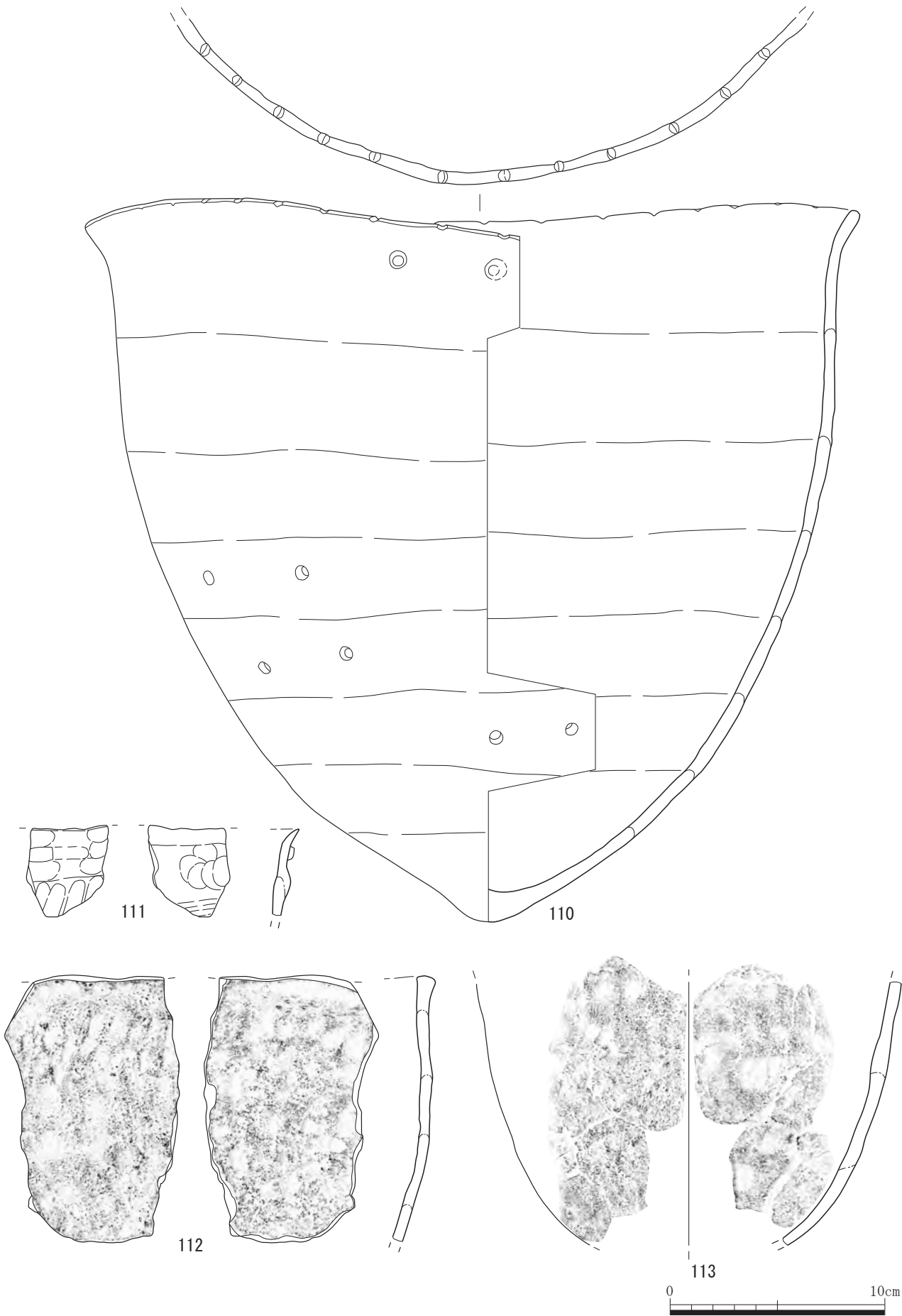
104



109



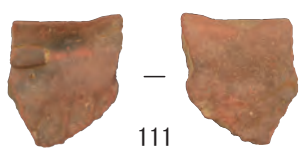
图版 54 土器 8



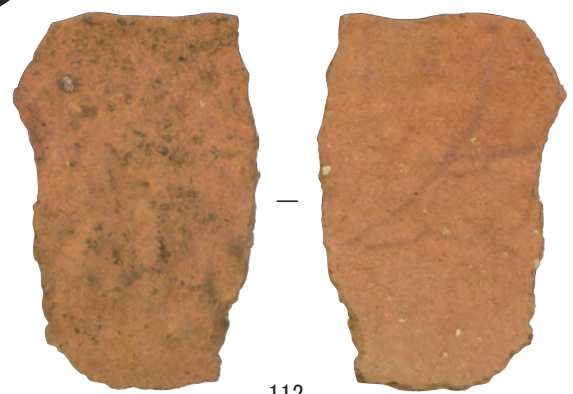
第 79 图 土器 9



110



111



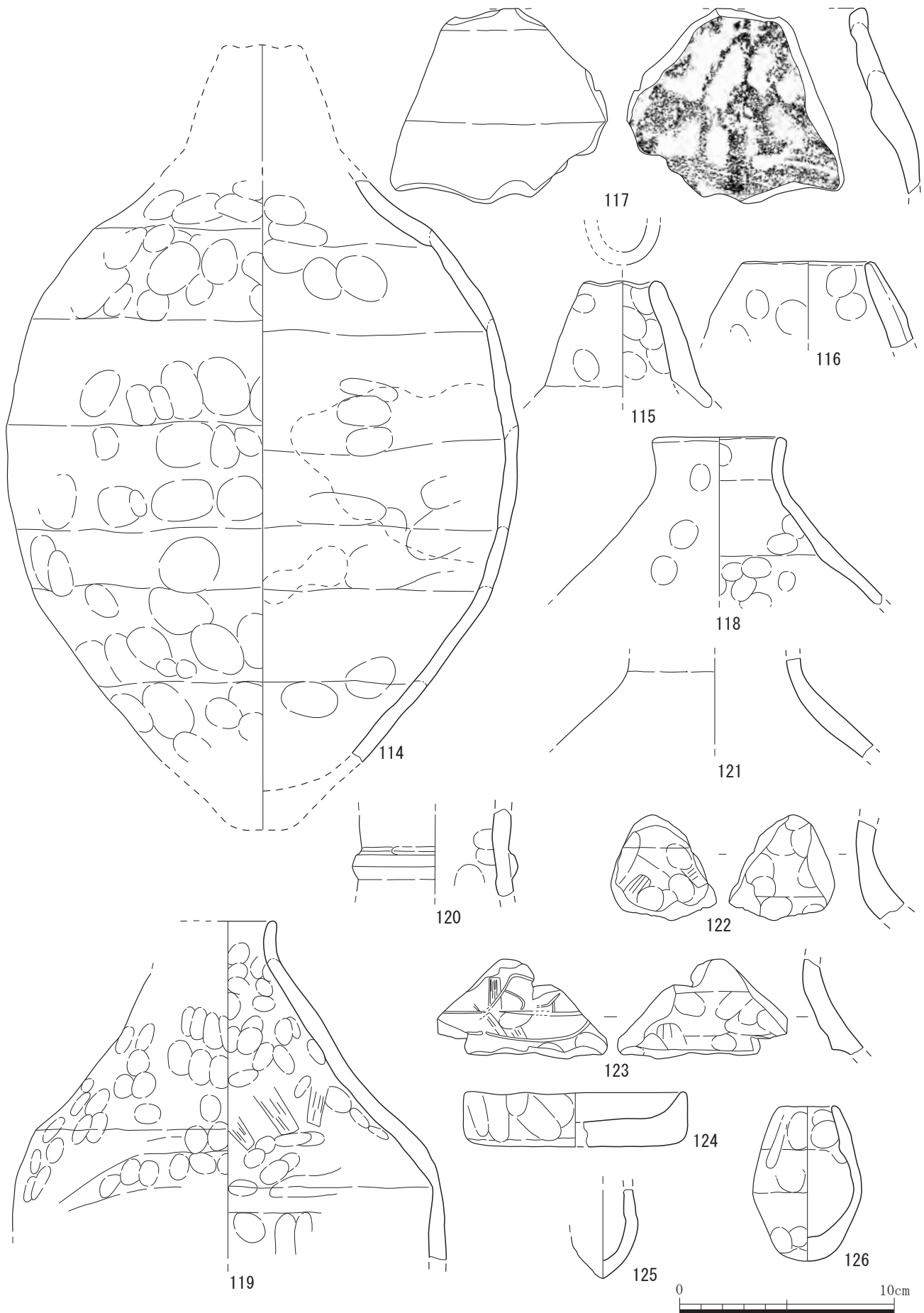
112



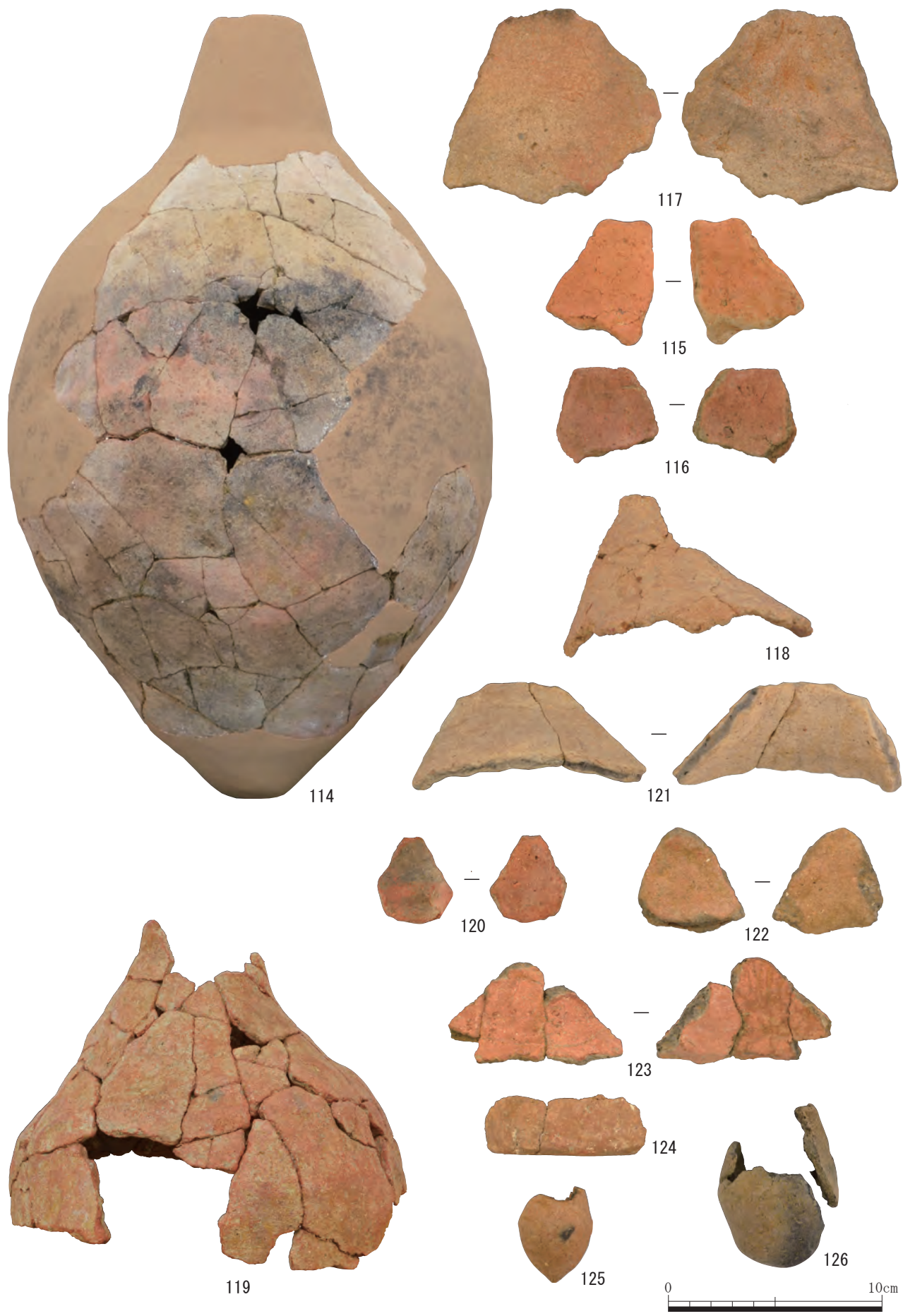
113



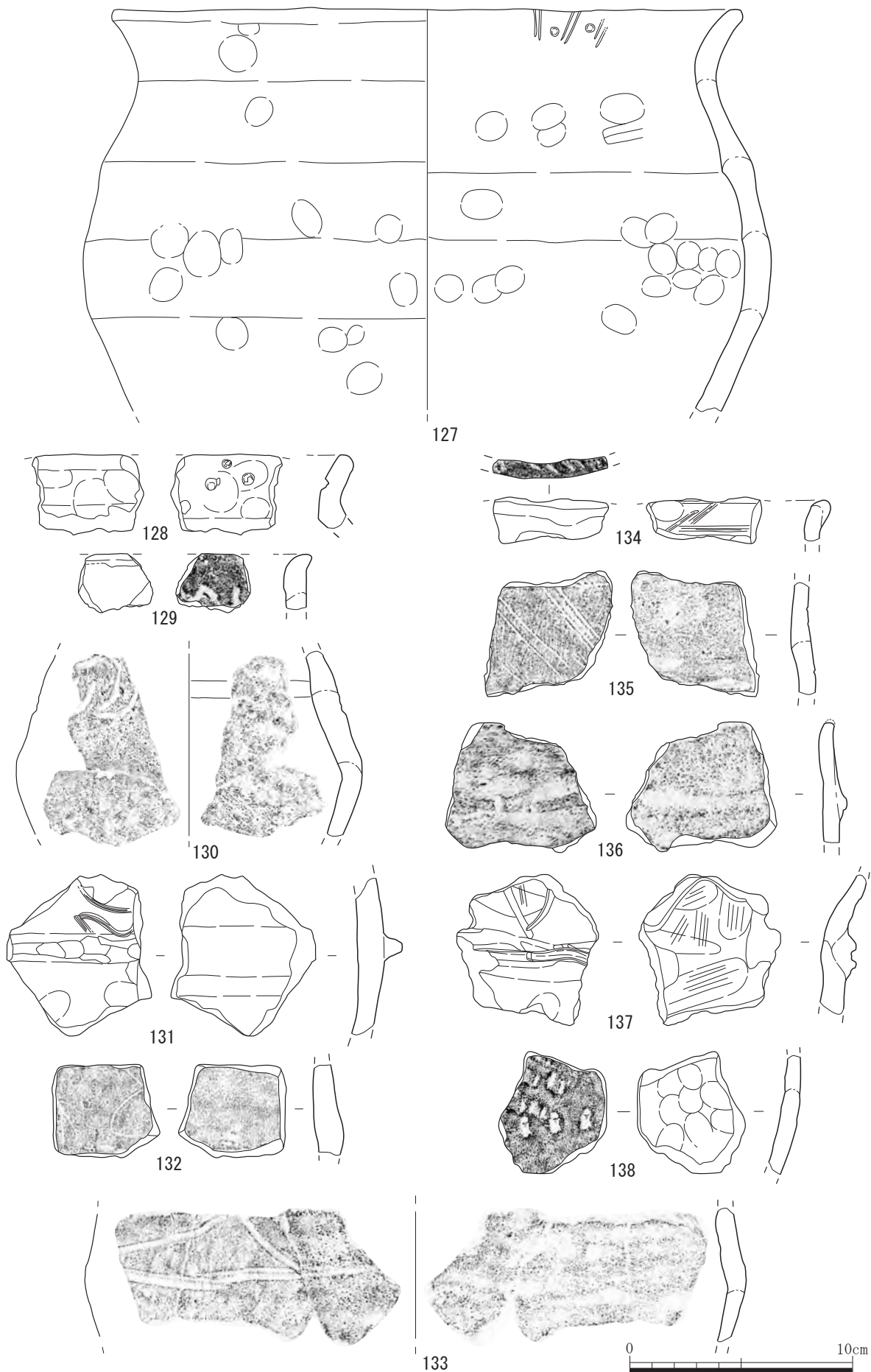
图版 55 土器 9



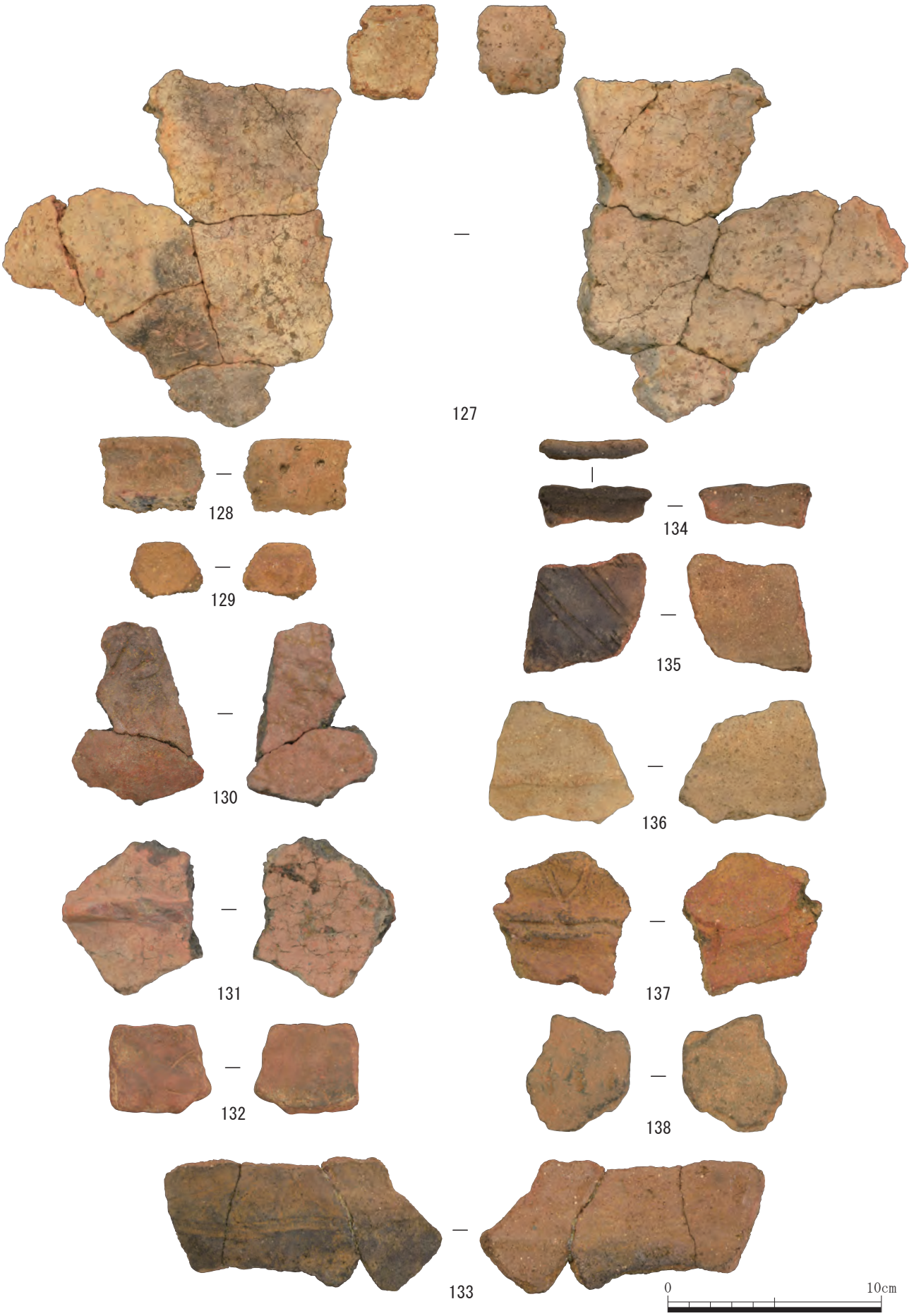
第 80 图 土器 10



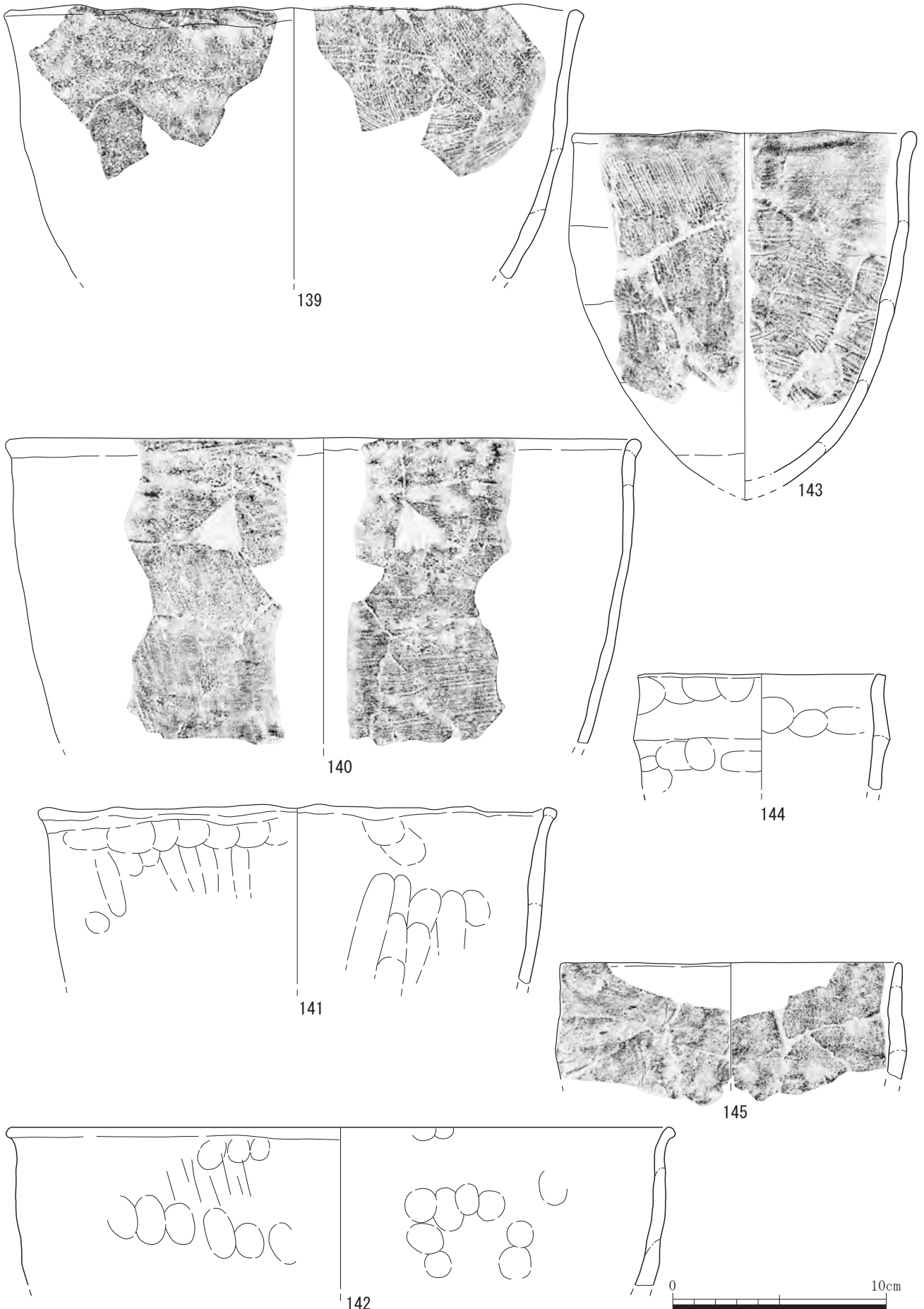
图版 56 土器 10



第 81 图 土器 11



图版 57 土器 11



第82图 土器 12



139



140



141



142



143



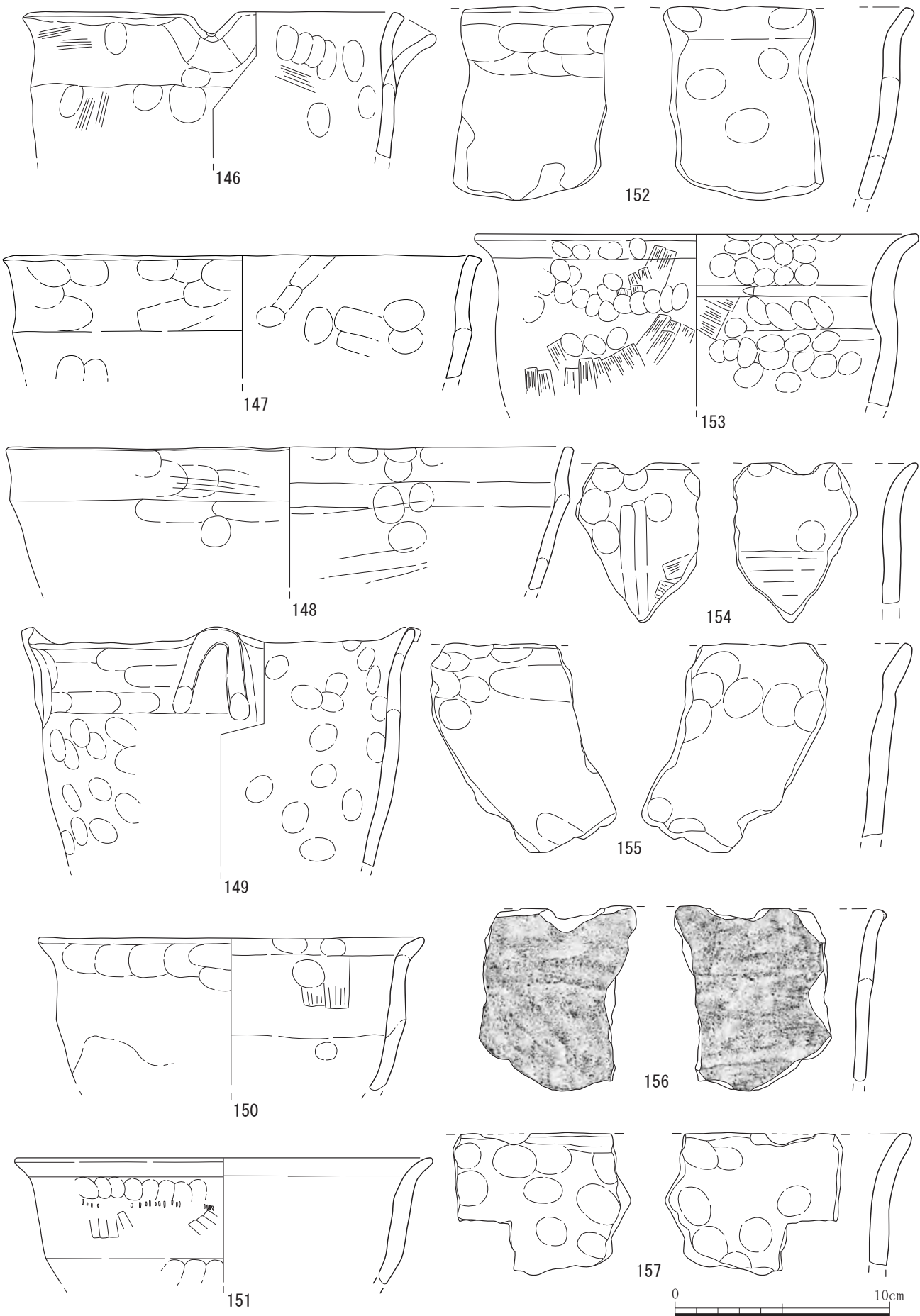
144



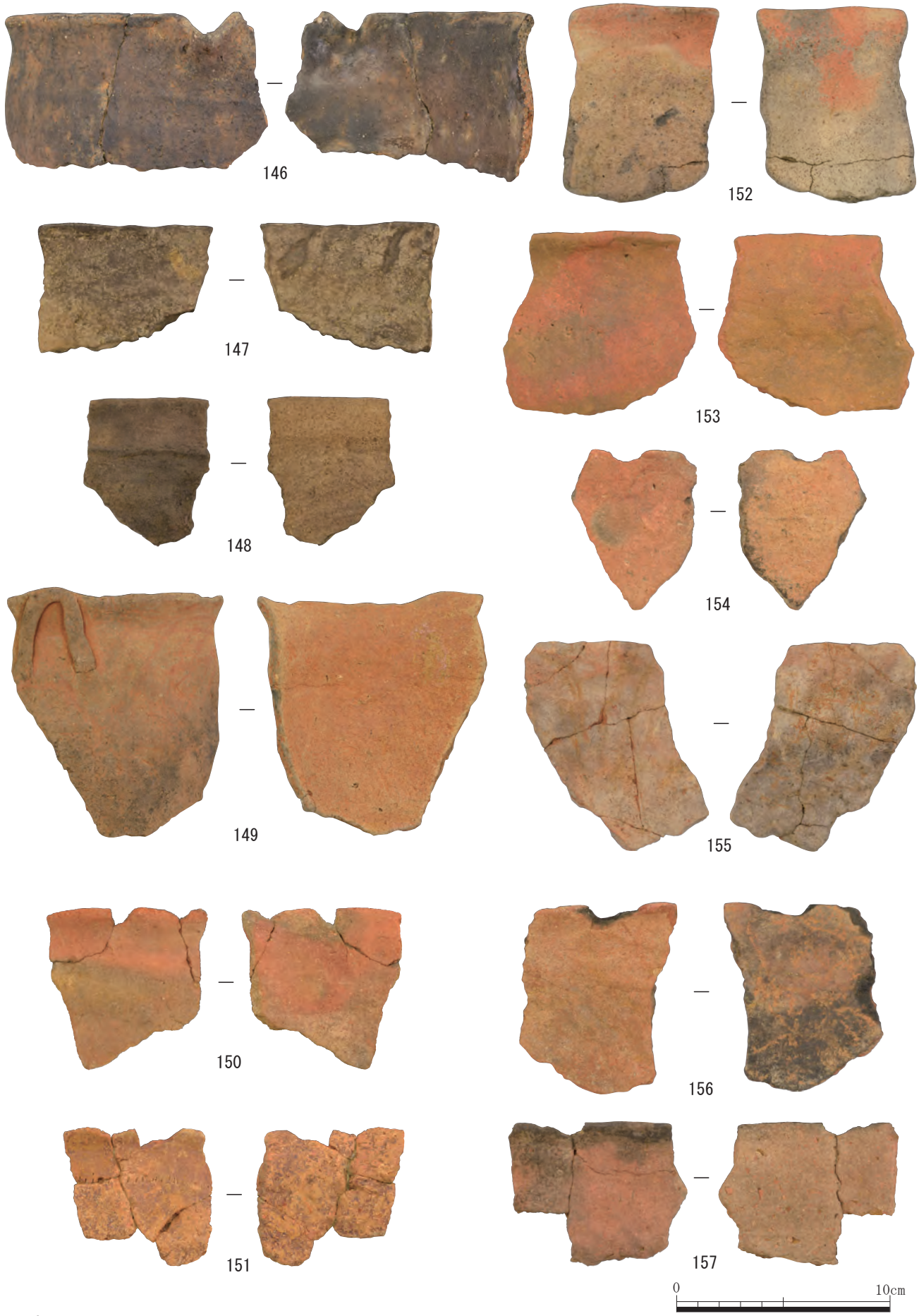
145



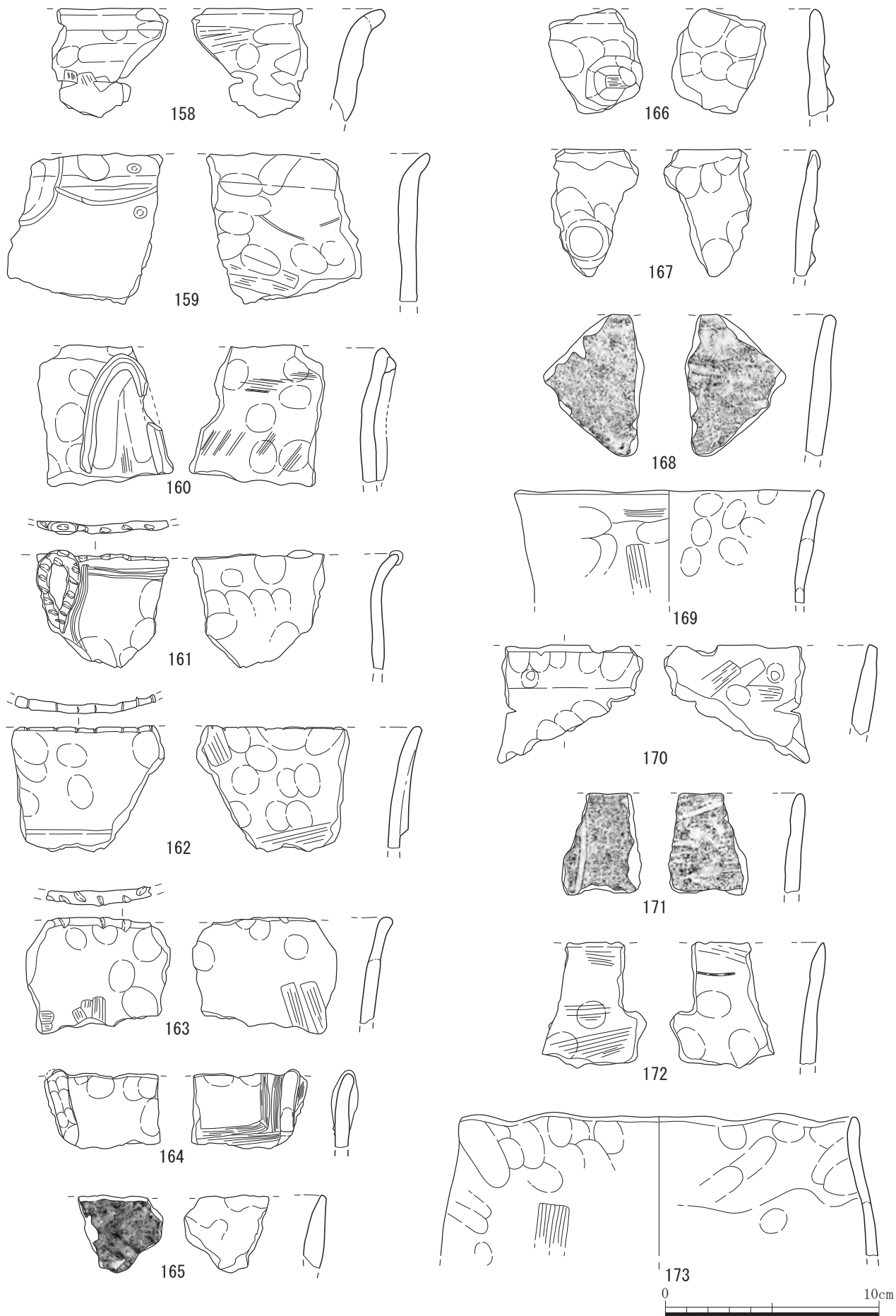
图版 58 土器 12



第 83 图 土器 13



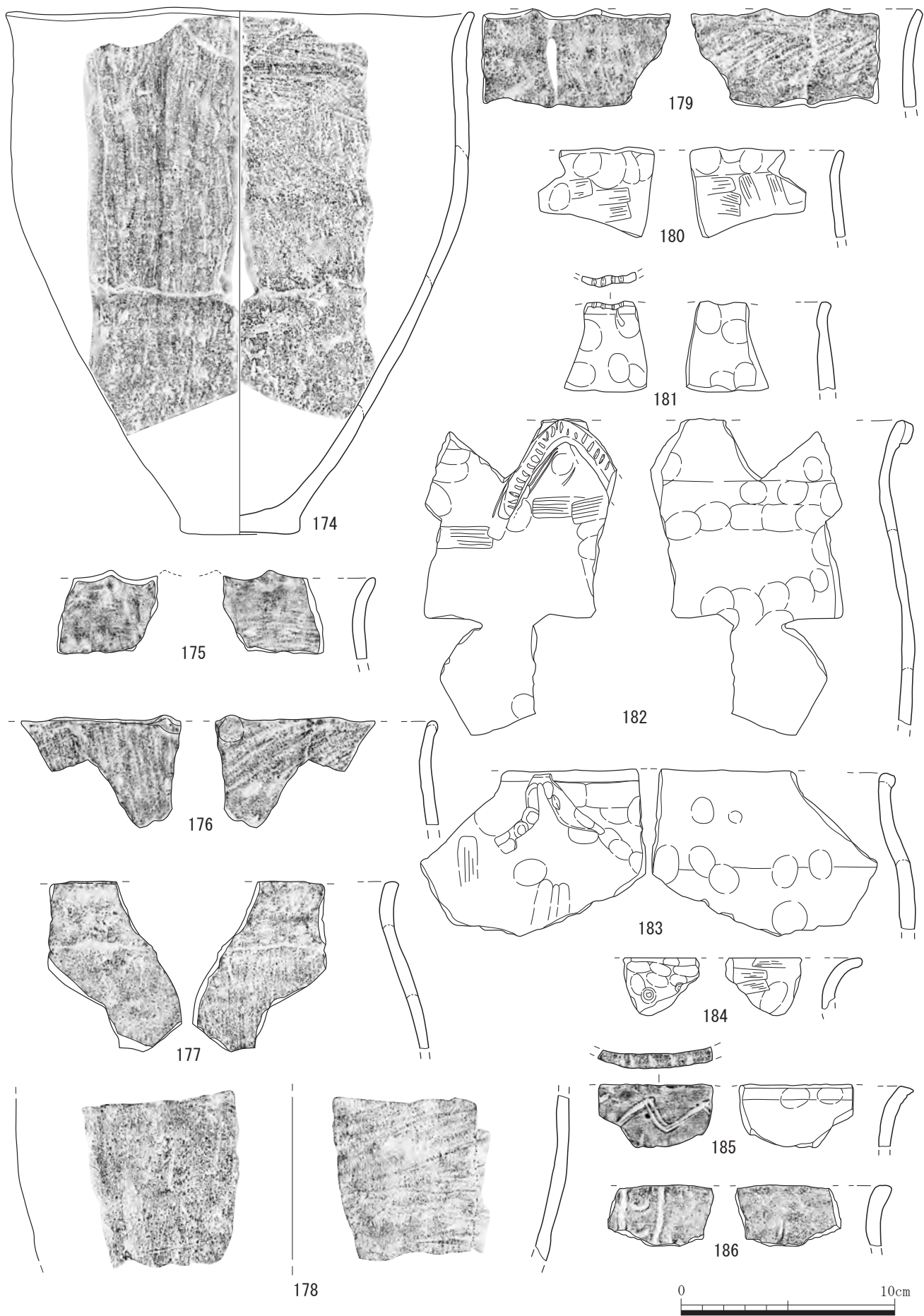
图版 59 土器 13



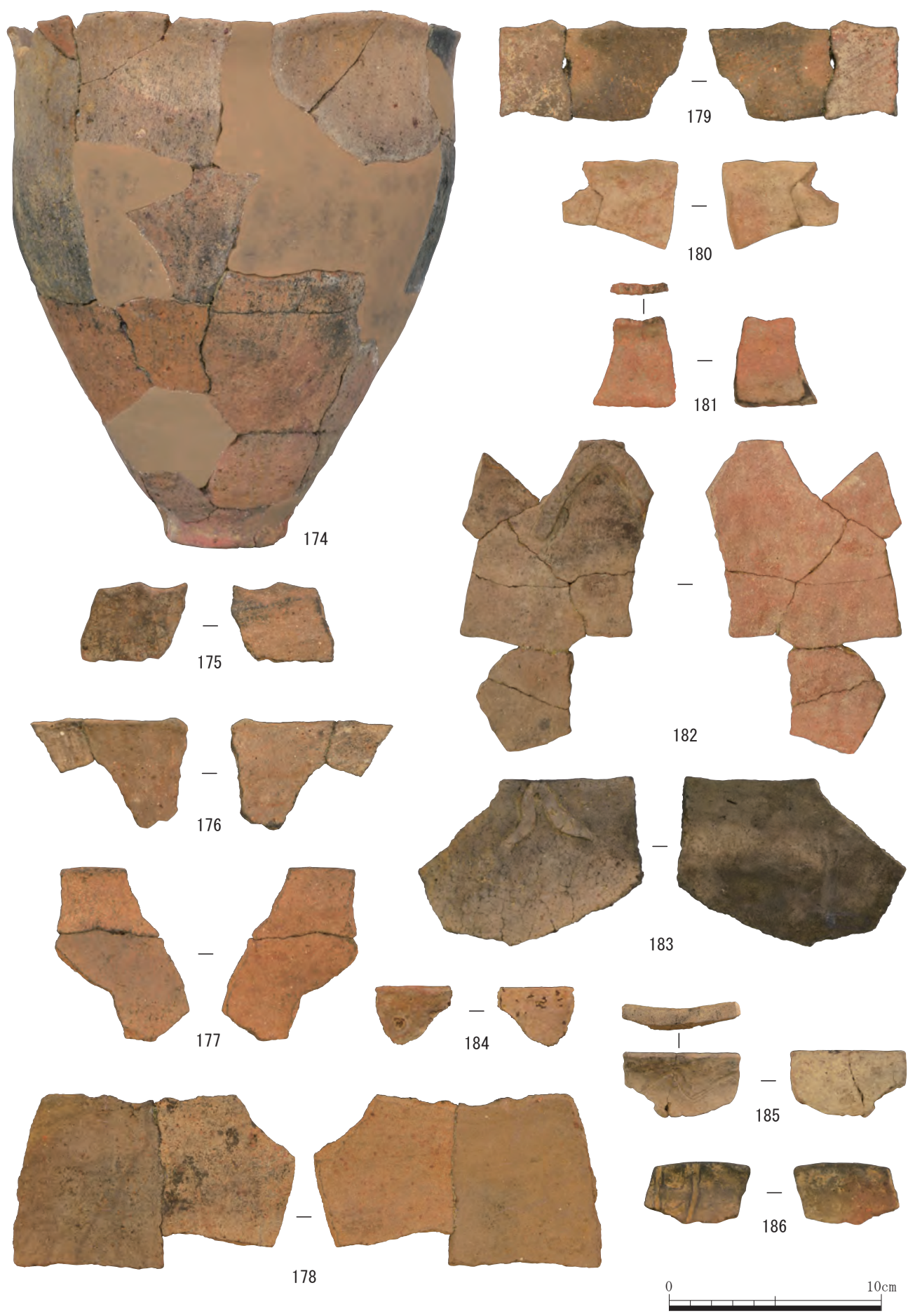
第 84 图 土器 14



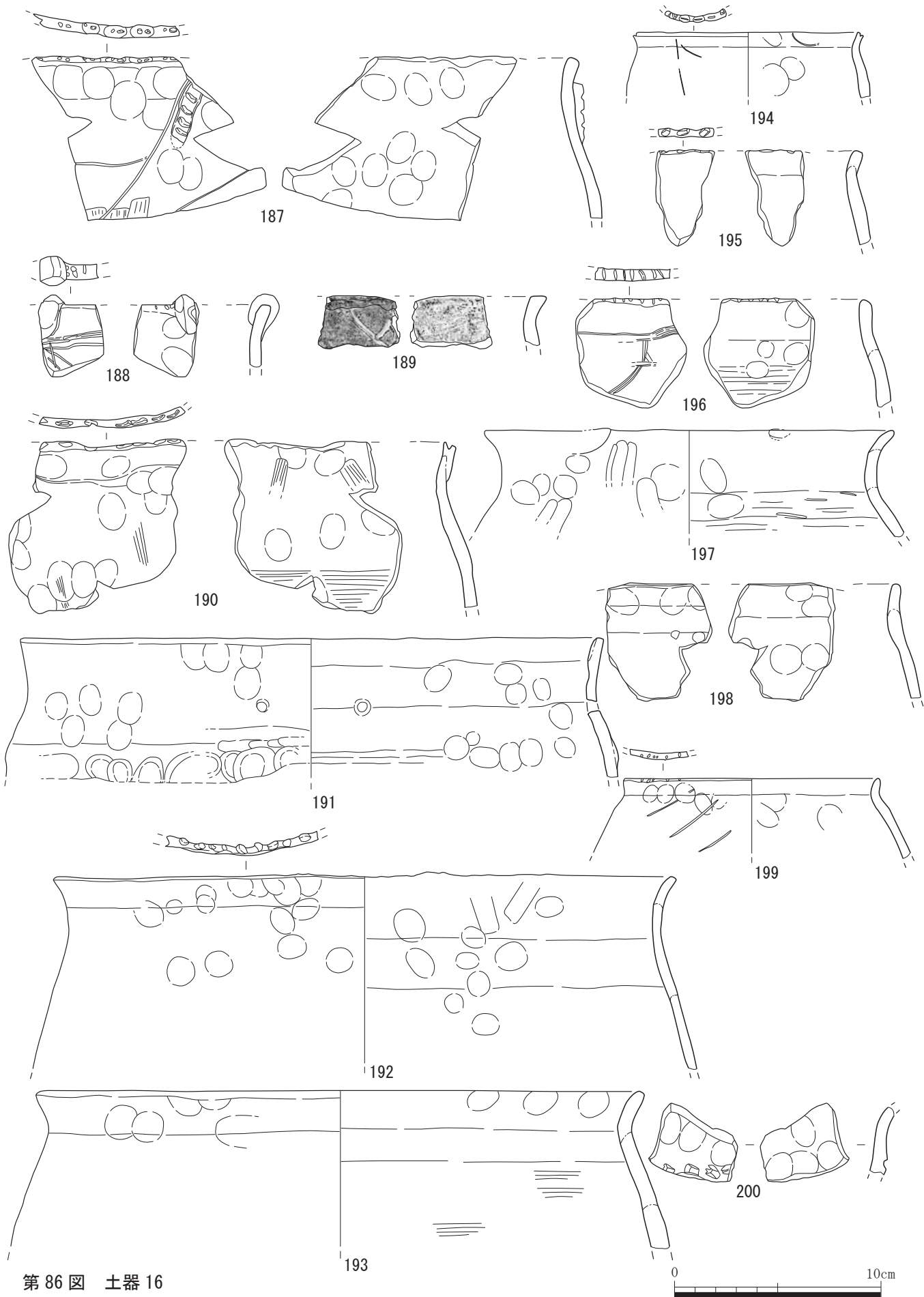
图版 60 土器 14



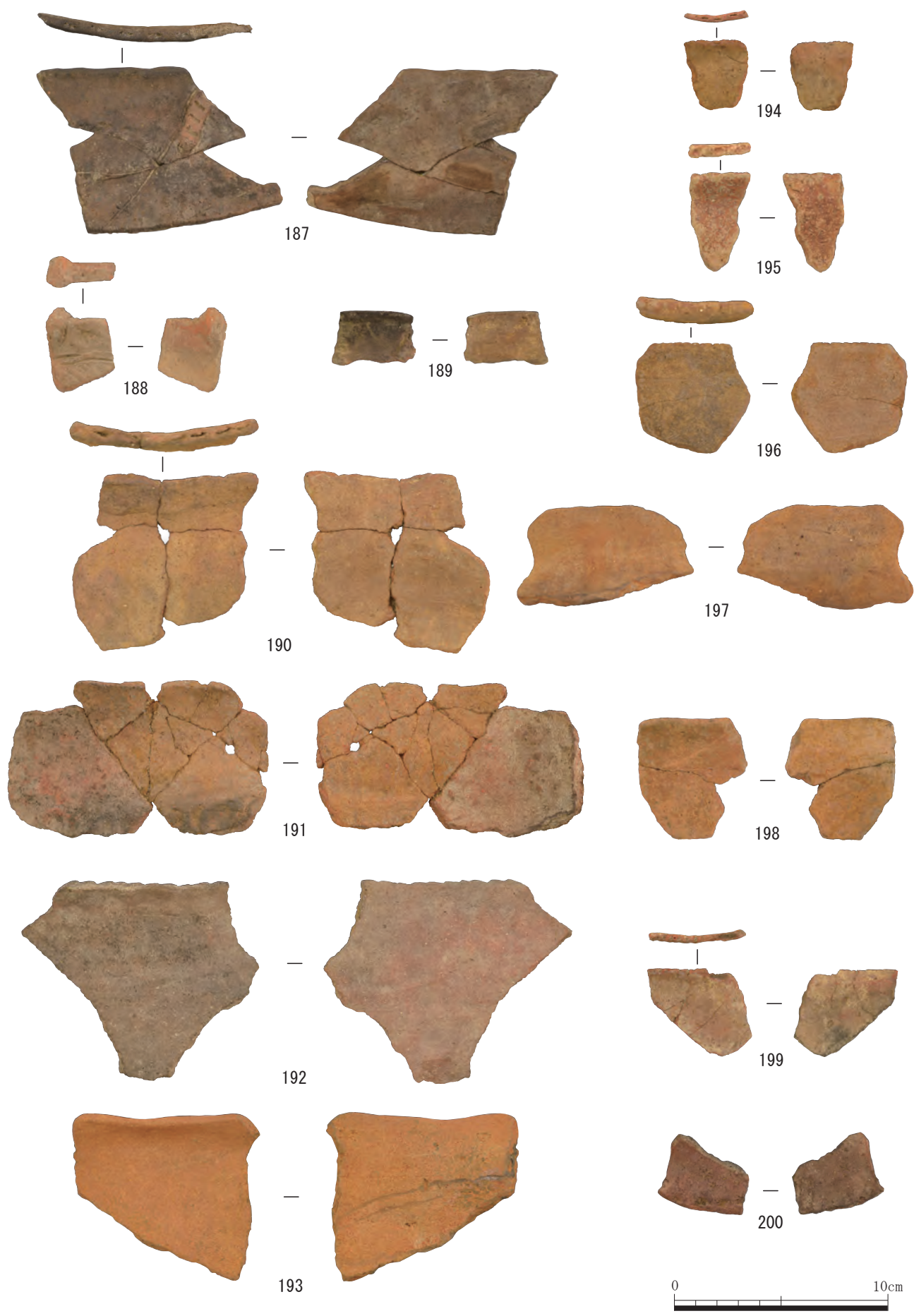
第85图 土器 15



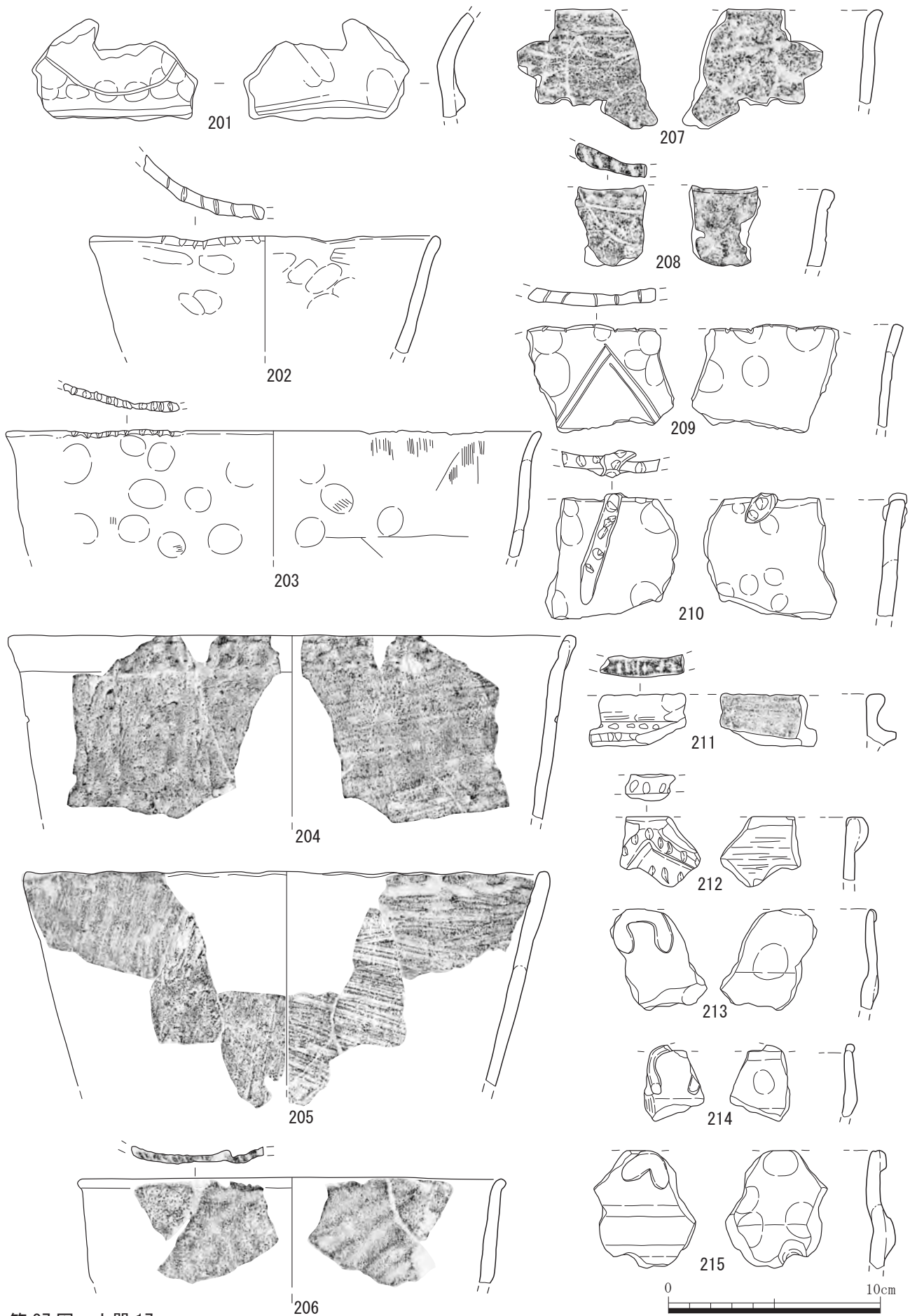
图版 61 土器 15



第 86 图 土器 16



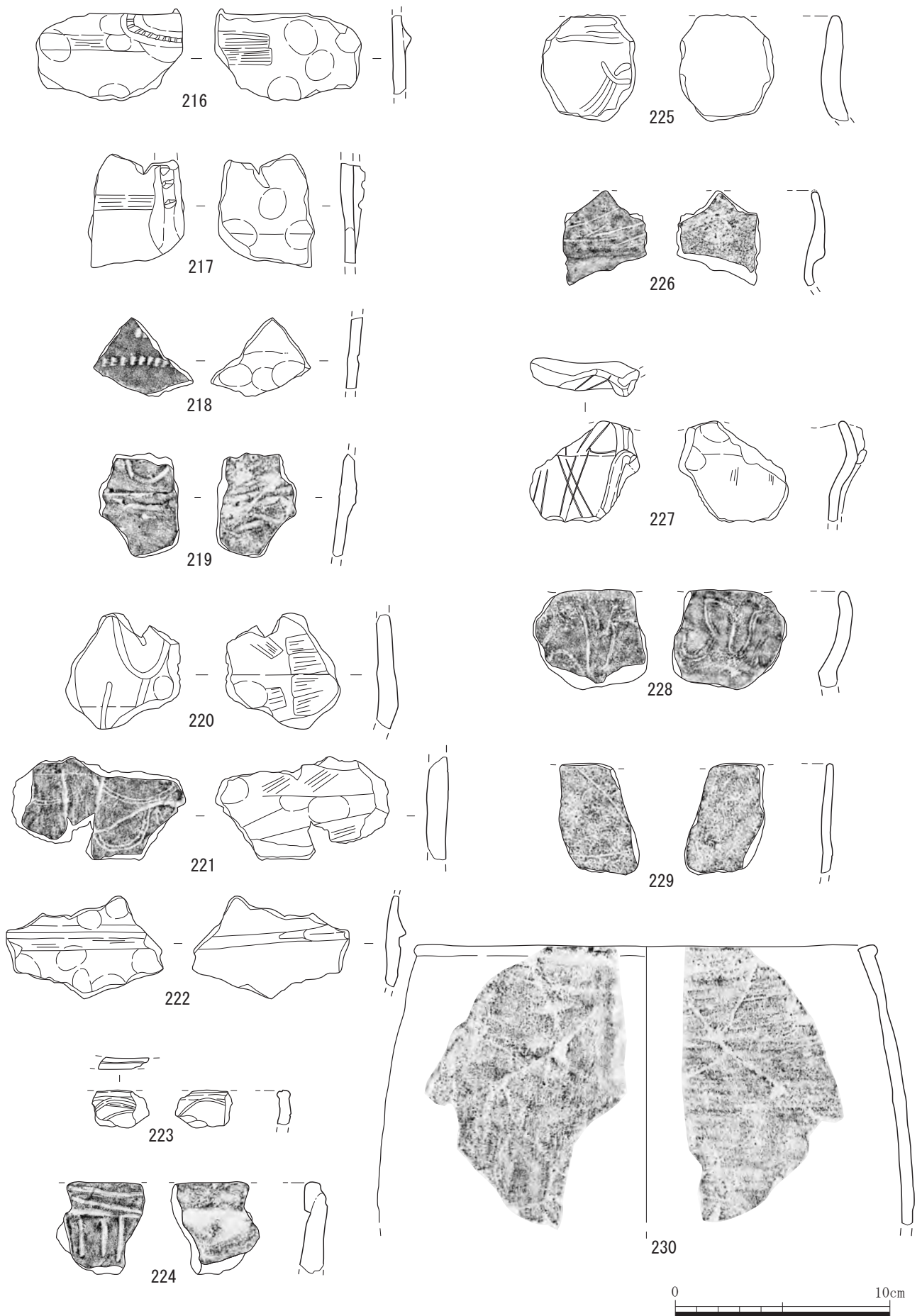
图版 62 土器 16



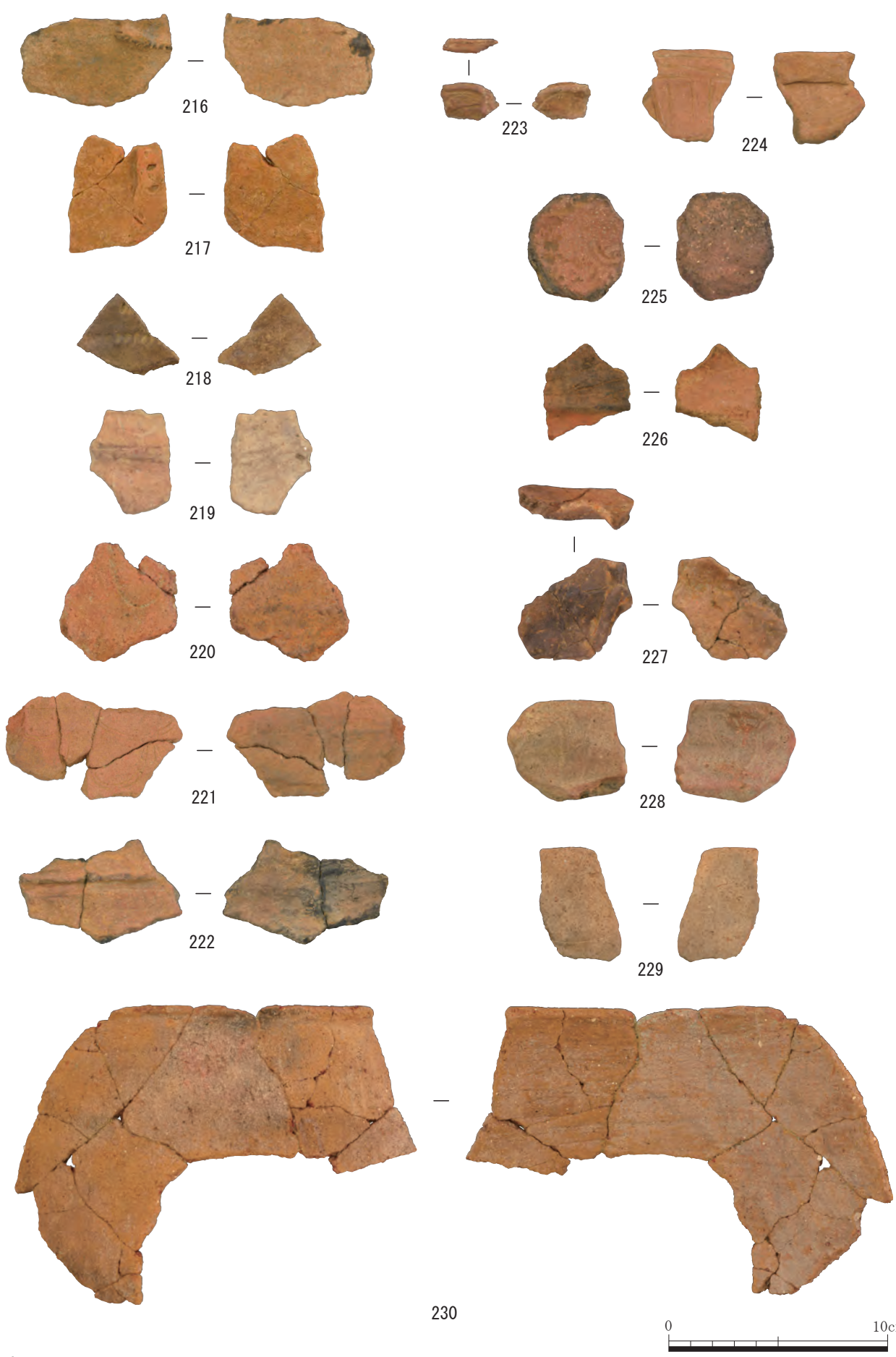
第 87 图 土器 17



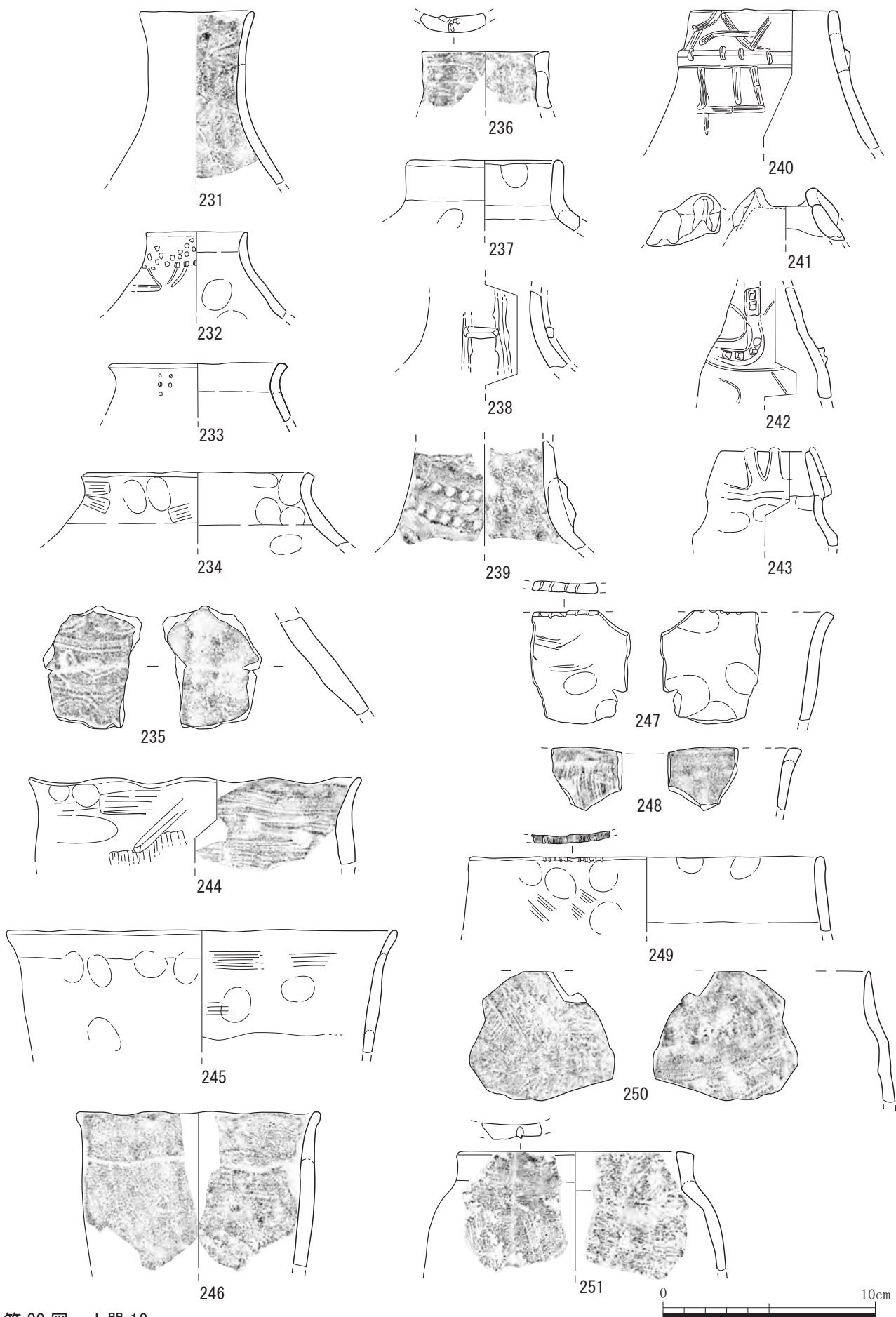
图版 63 土器 17



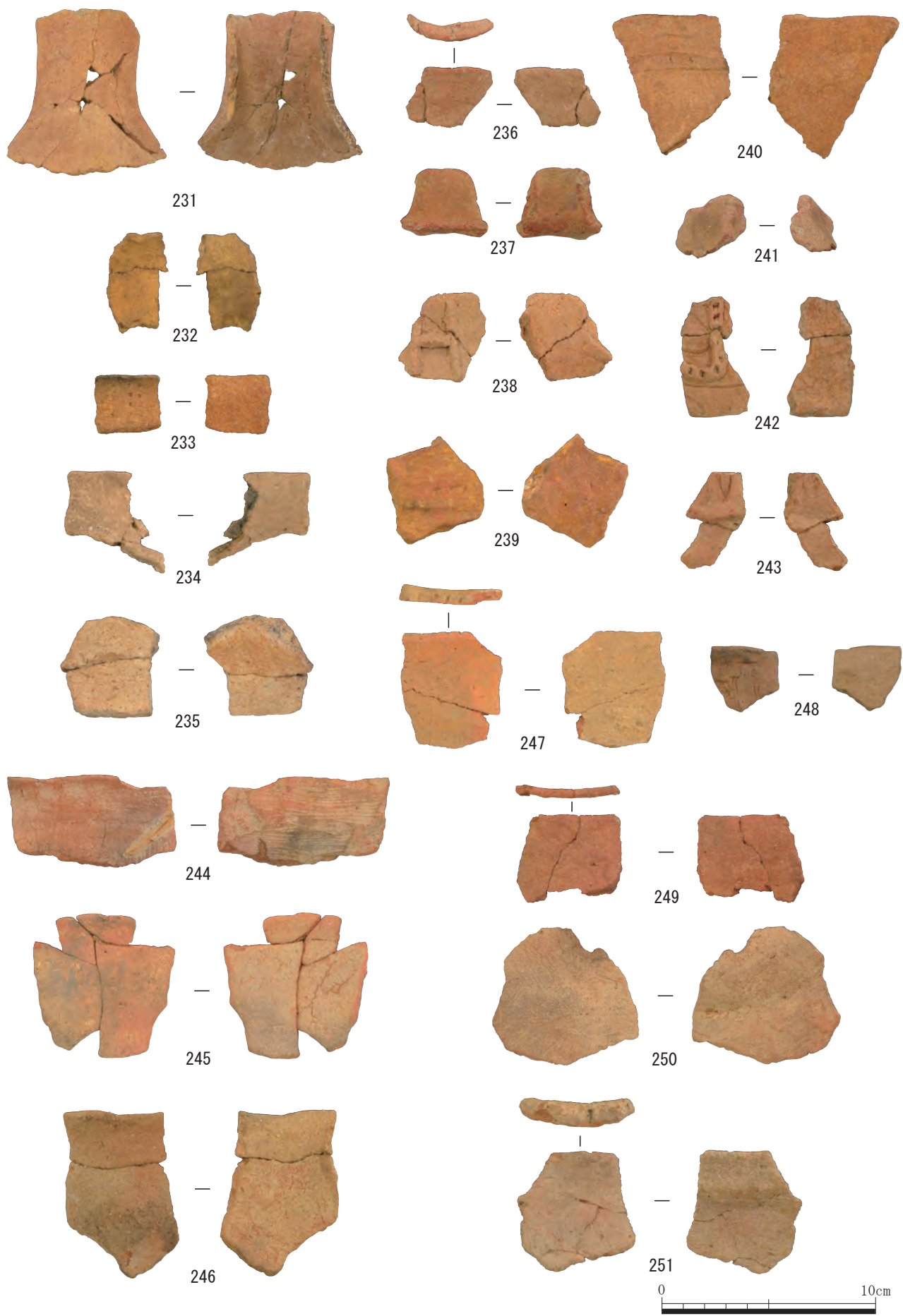
第 88 图 土器 18



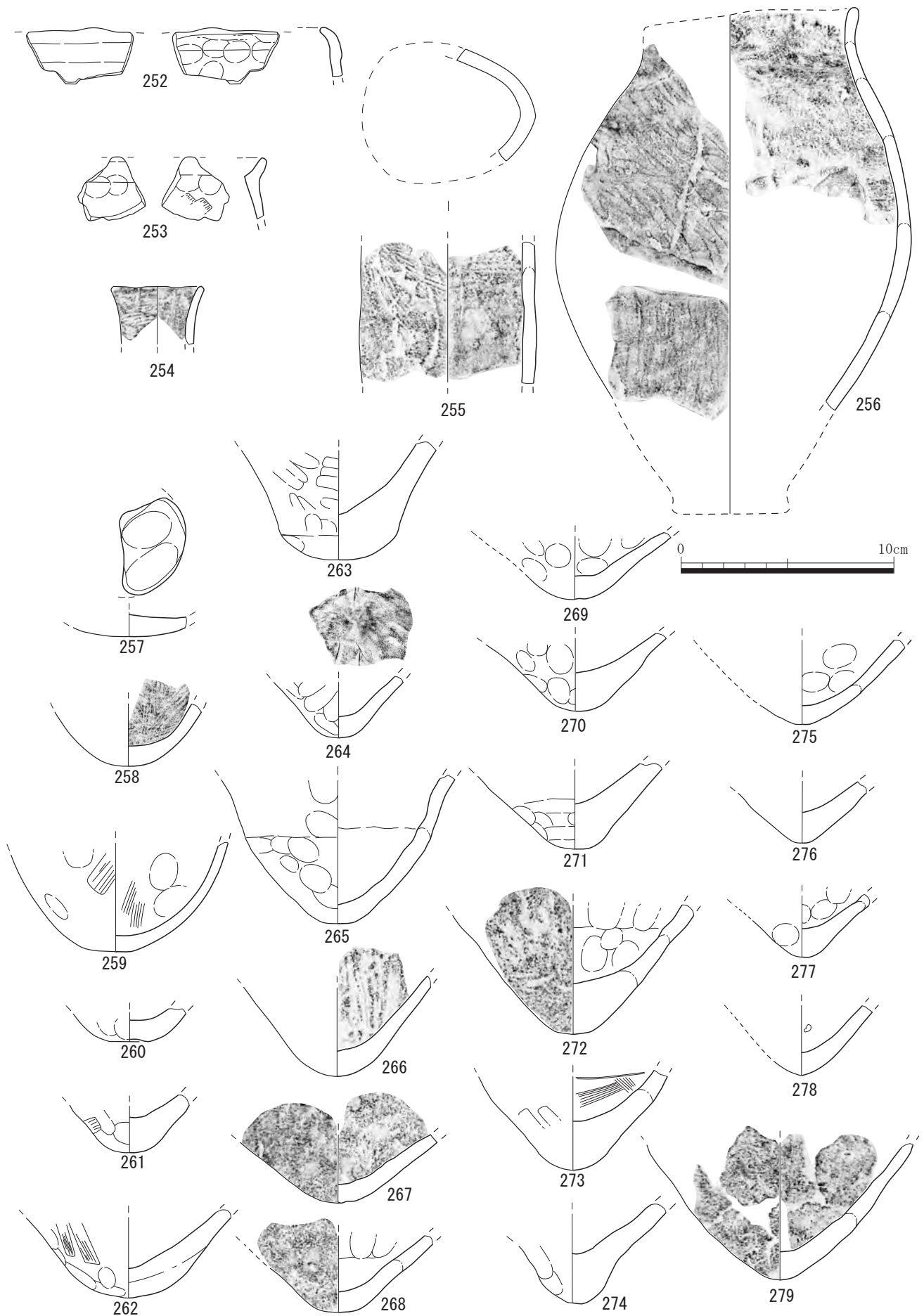
图版 64 土器 18



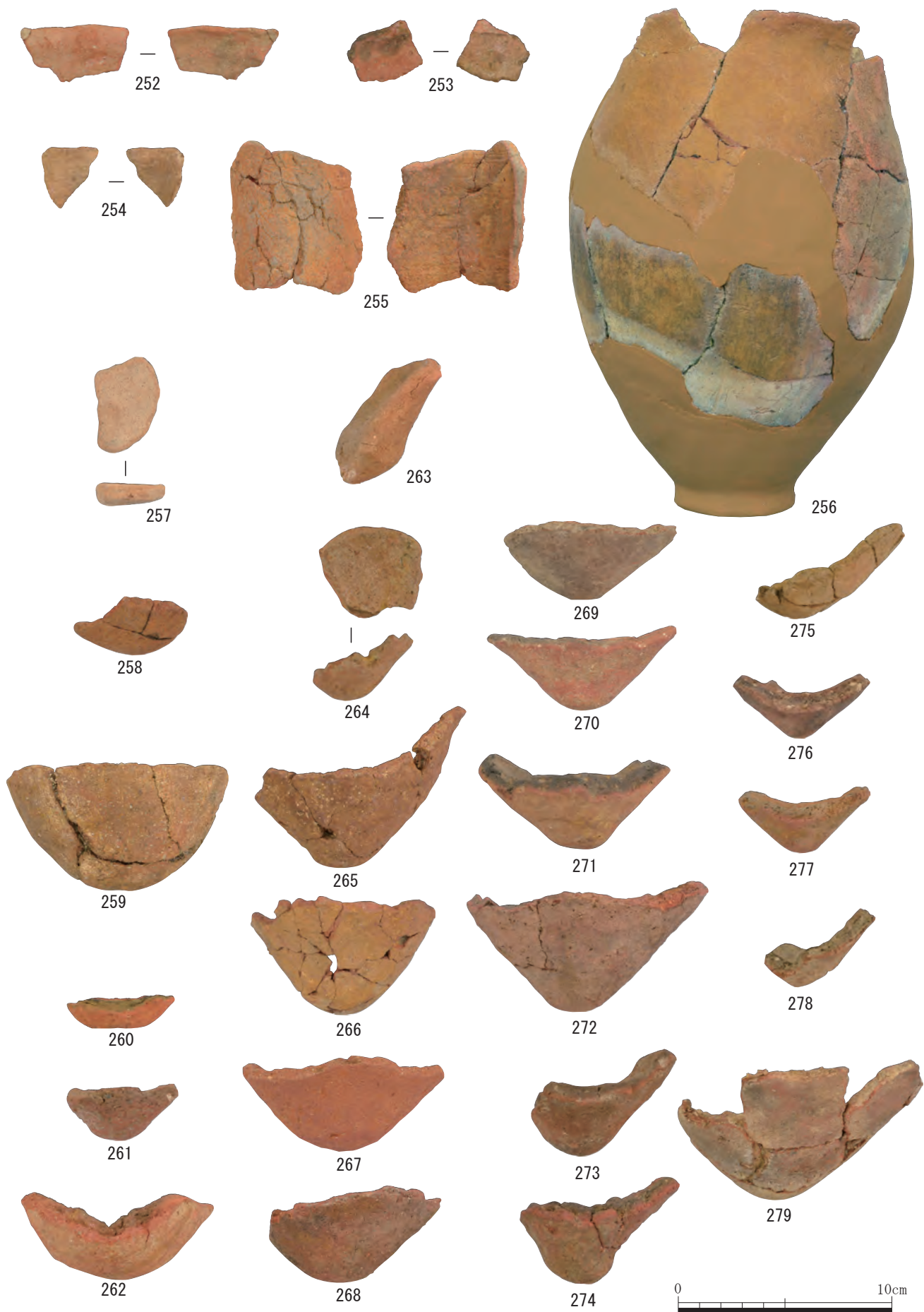
第 89 图 土器 19



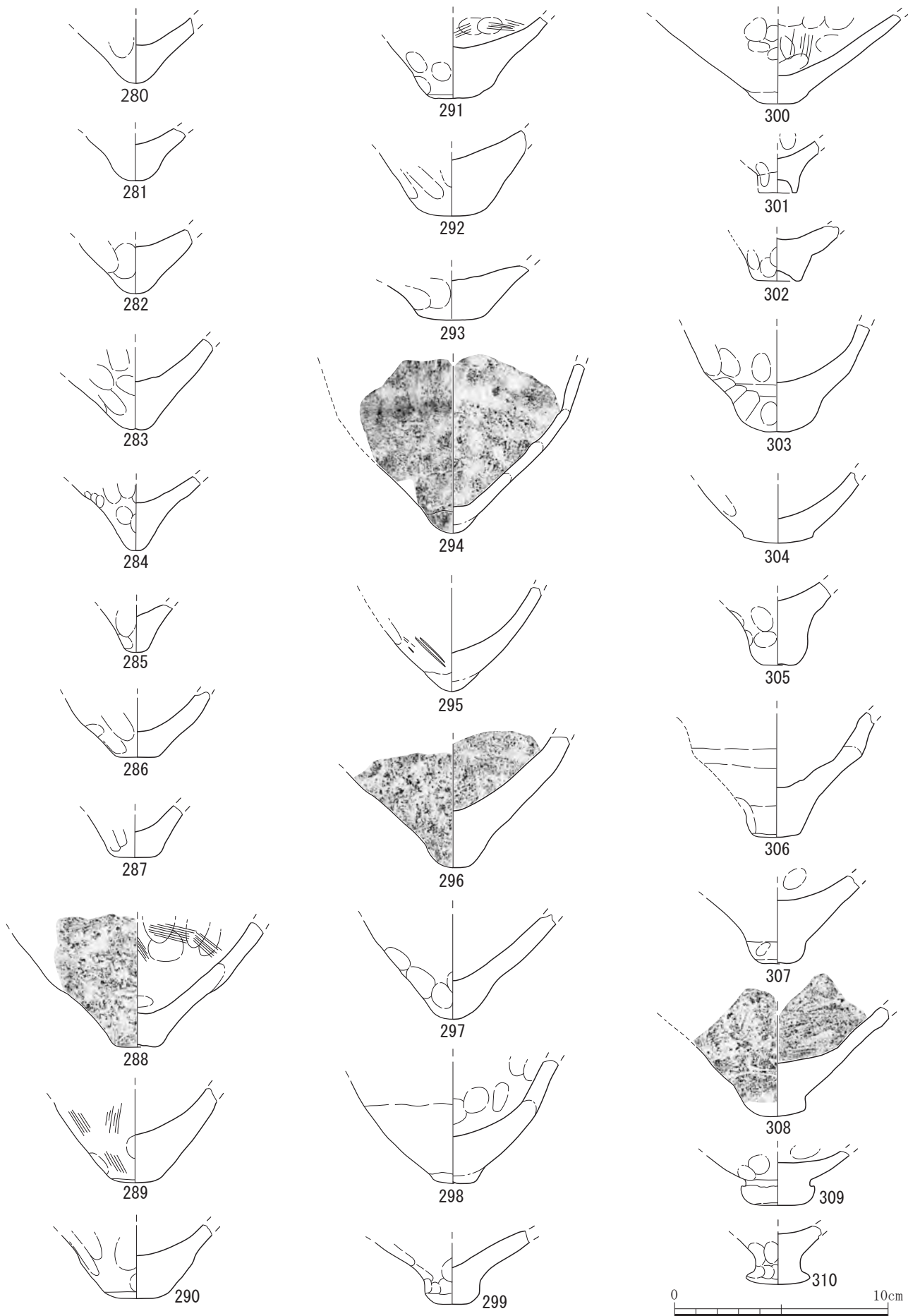
图版 65 土器 19



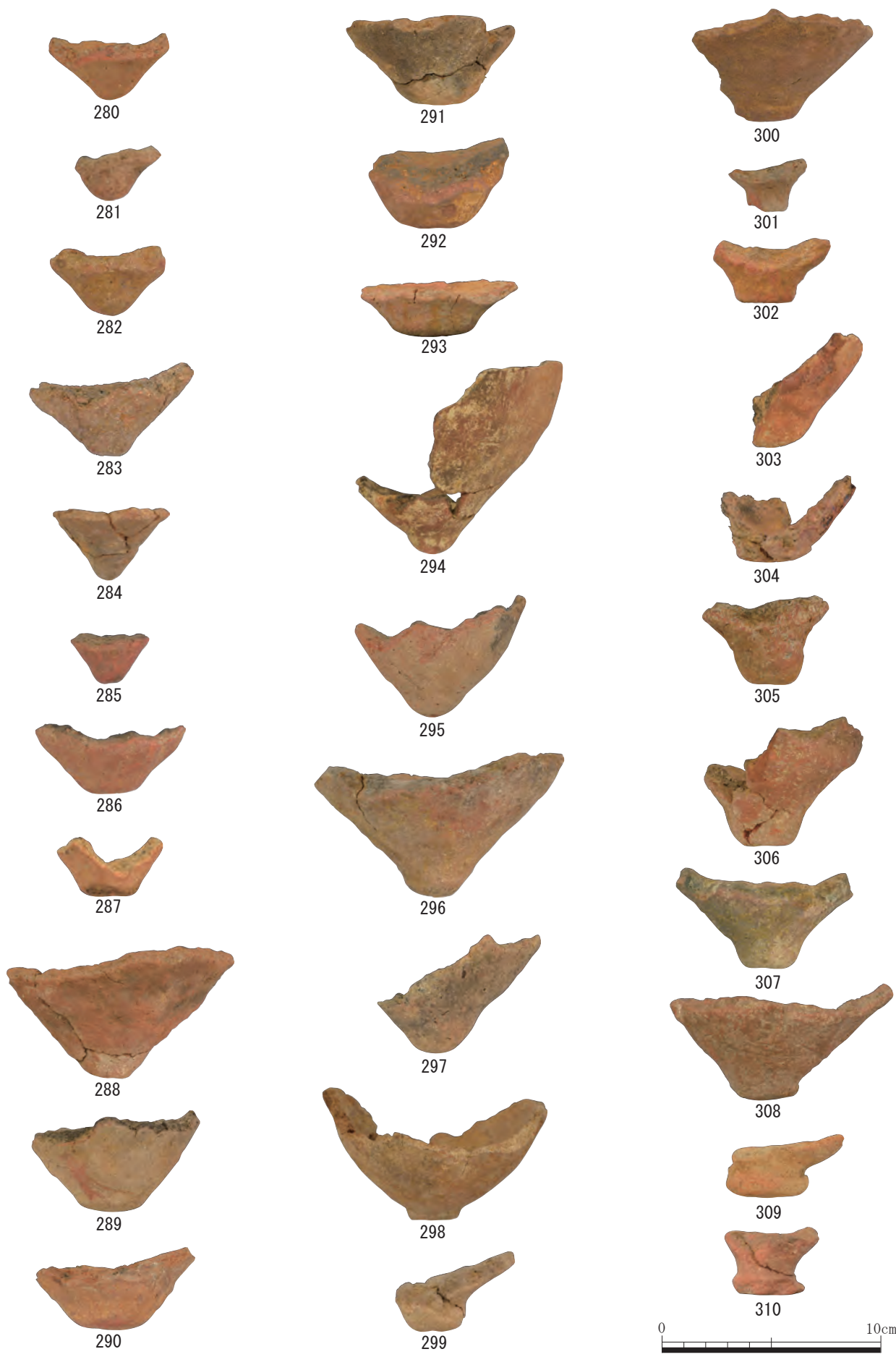
第90图 土器 20



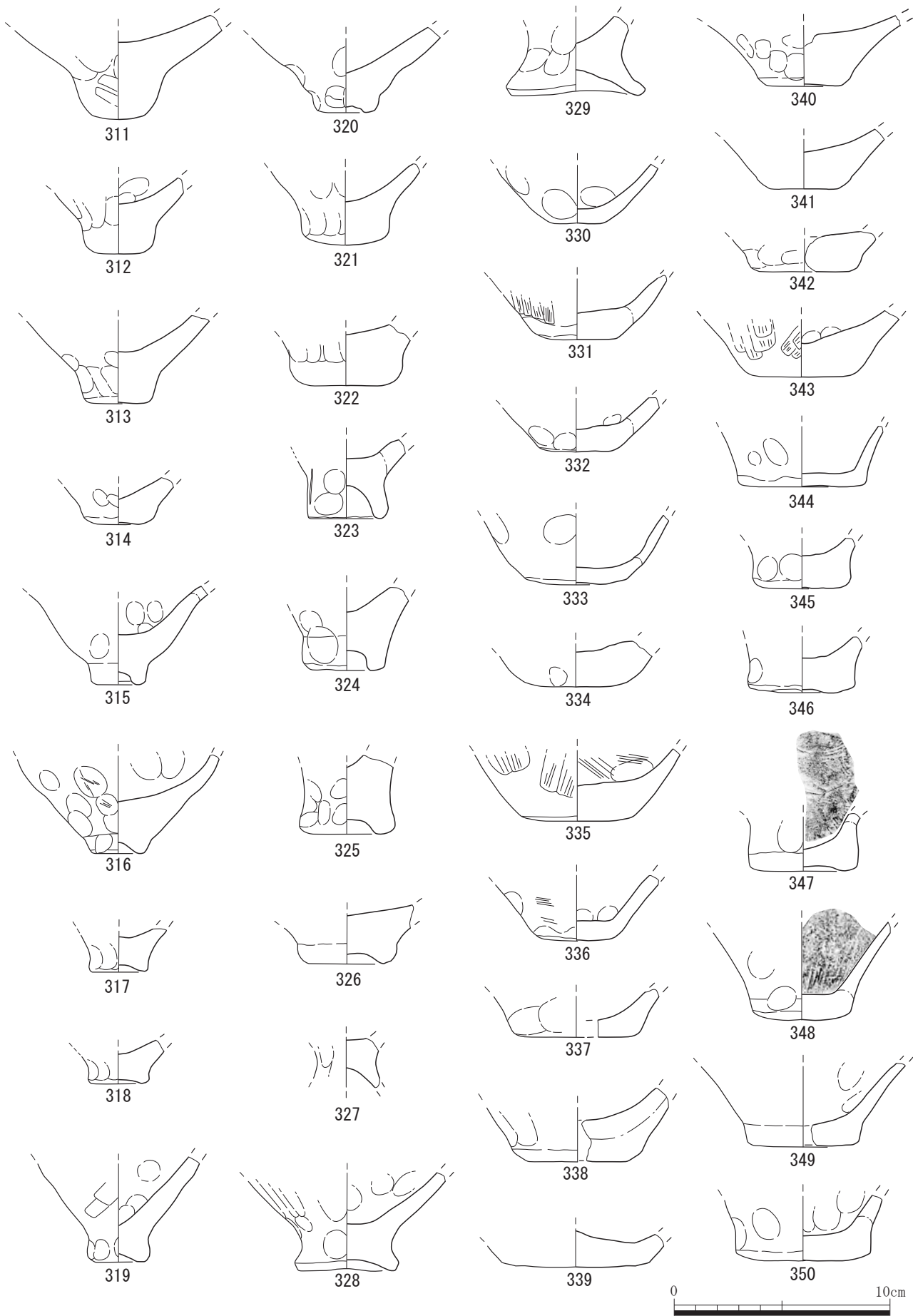
图版 66 土器 20



第91图 土器 21



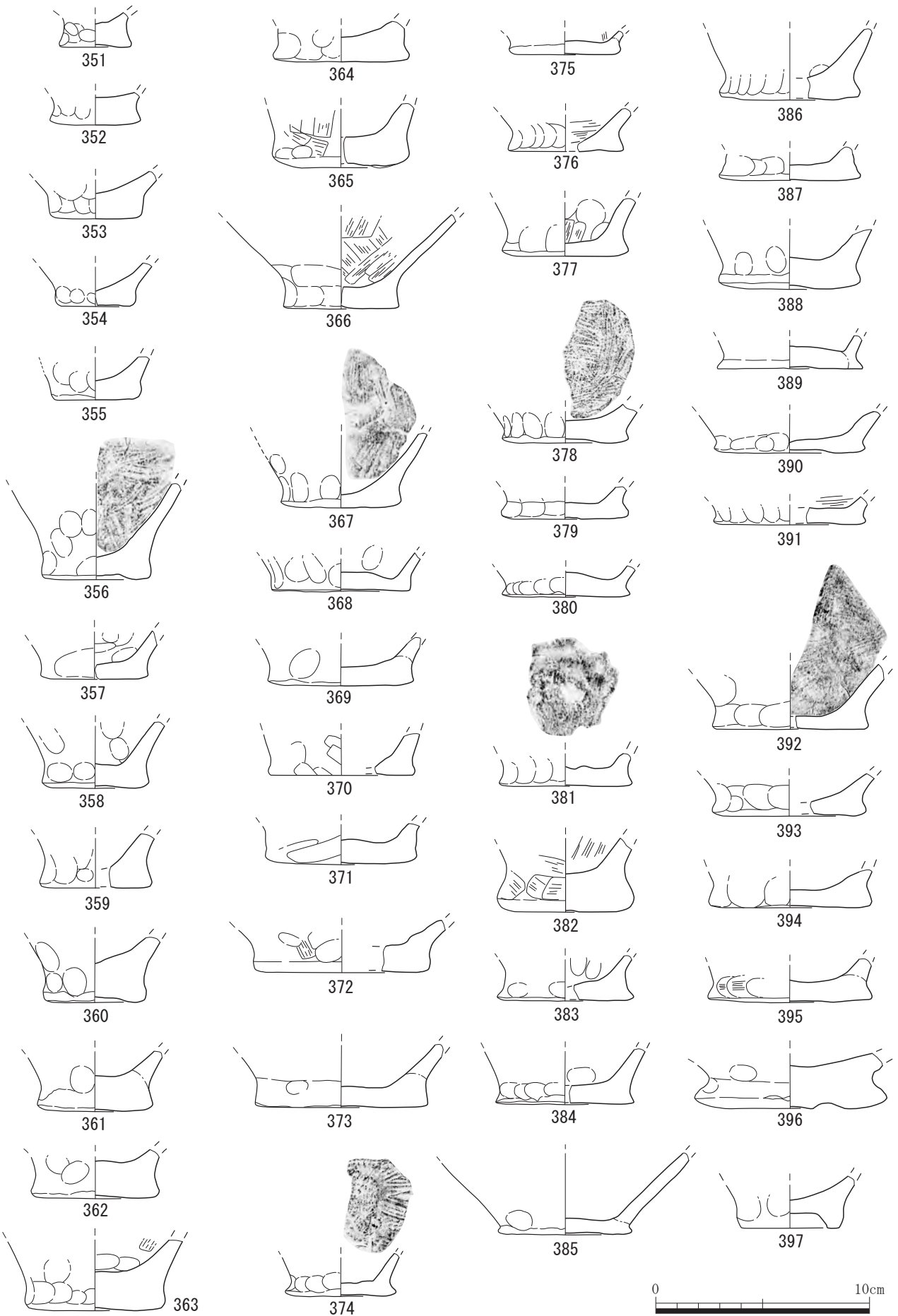
图版 67 土器 21



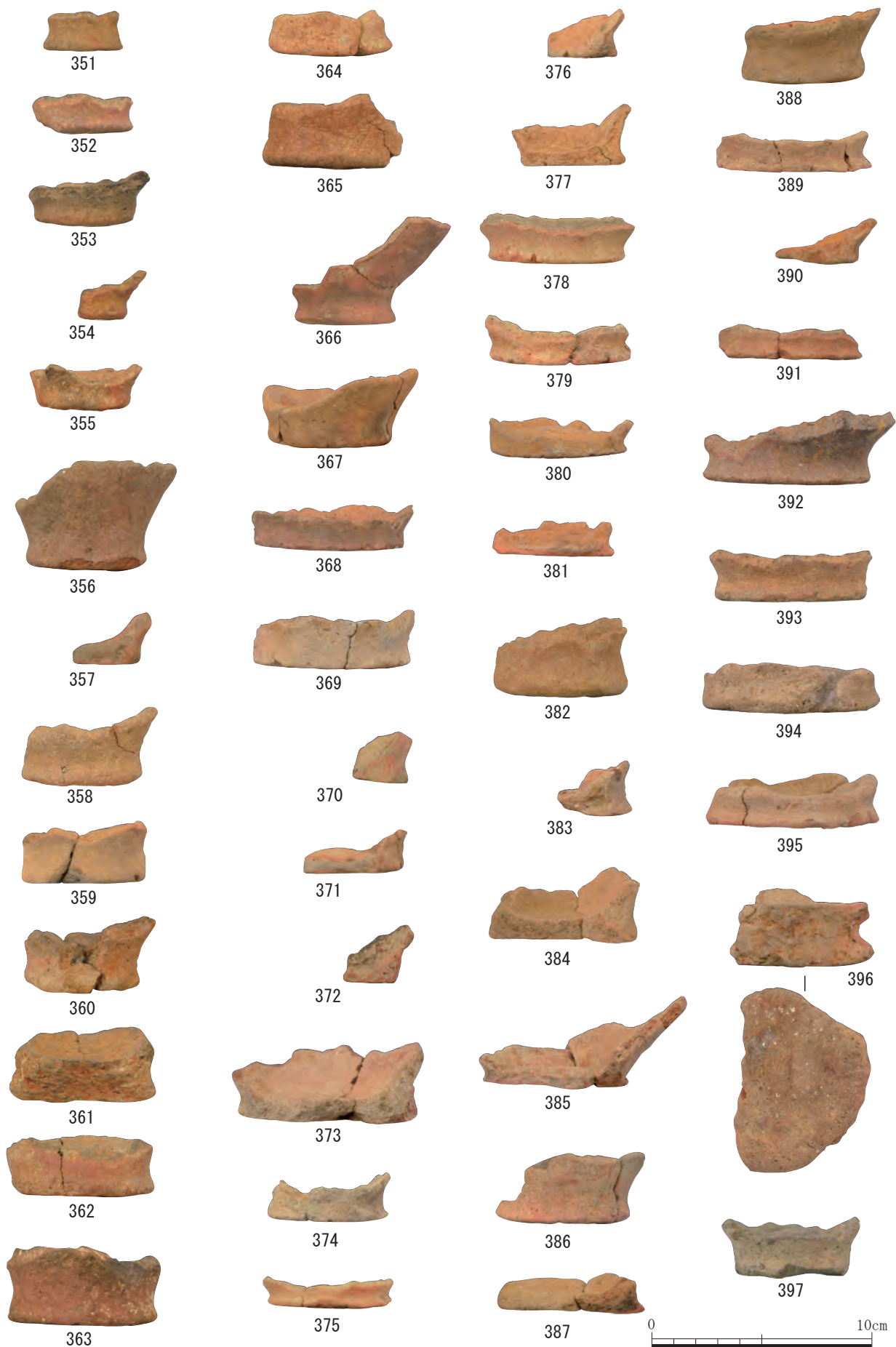
第92图 土器 22



图版 68 土器 22



第 93 图 土器 23



图版 69 土器 23

(2) 石器

総数 345 点出土した。器種は石斧・敲石・敲石兼磨石・磨石・石皿・砥石・台石・円盤状石器・クガニ石・チャート製品（楔形石器・スクレイパー）・石球・用途不明石器・サンゴ有孔製品である。

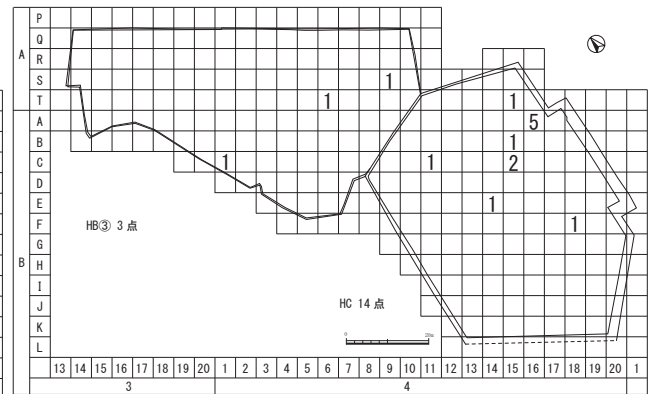
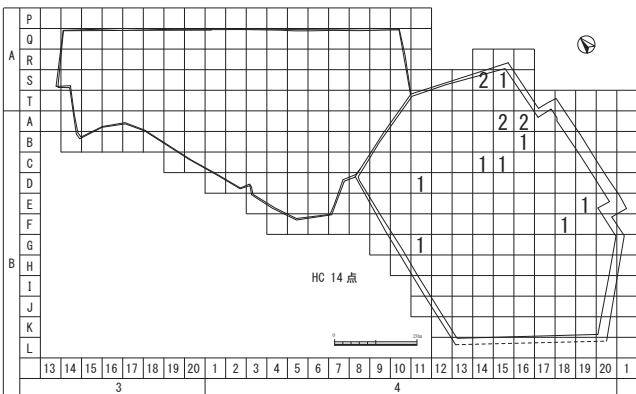
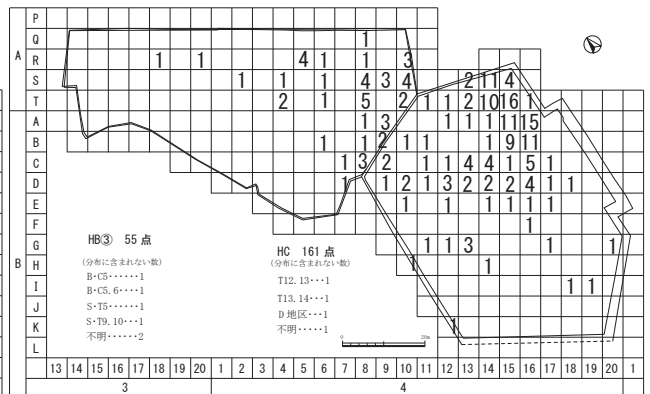
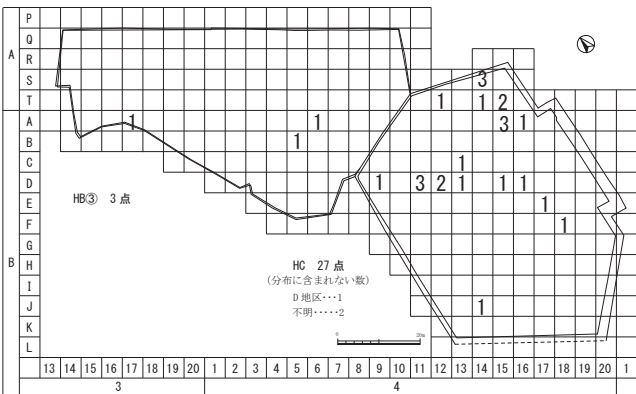
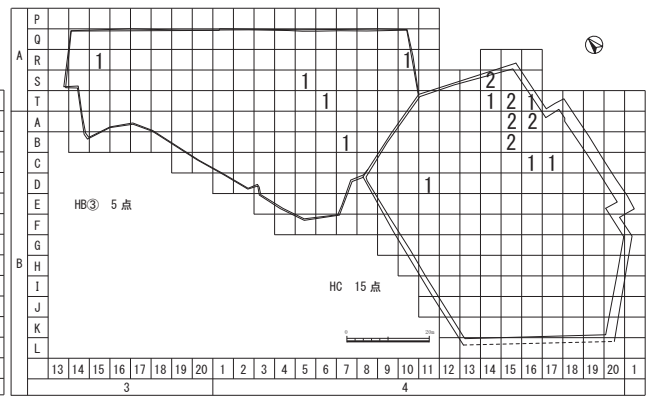
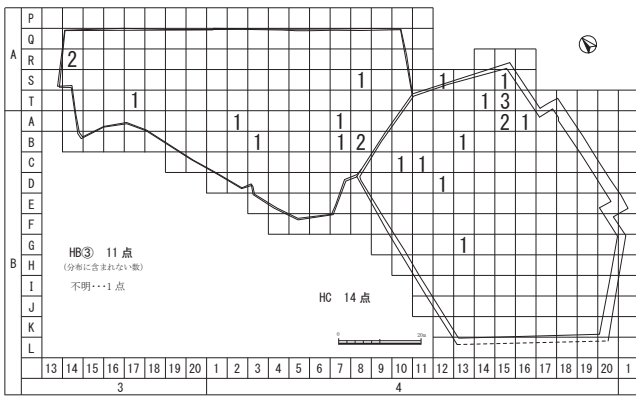
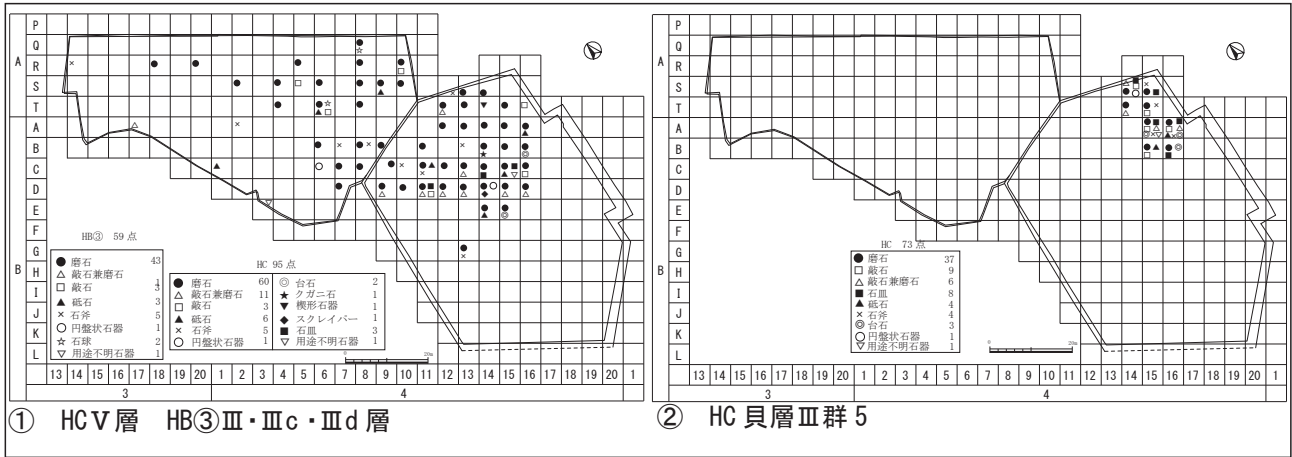
下表のとおり、器種では磨石が 216 点と最も多く、器種全体の 62.6% を占める。他の器種に比べ磨石が多い傾向は、HC・HB ③とも同様である。石斧は全体の 7.2%、敲石は 5.8%、敲石兼磨石は 8.7% と 10% に満たず、砥石・石皿など数量の少ない器種は 5% 以下である。

層序では、HC の V 層（後期層）から 95 点と多く全体の 27.5% を占め、石斧・敲石・磨石など殆どの器種が出土する。V 層は土器においても大当原式土器が主体で、石器と時期も、量的にも一致する。次いで貝層群の I 群～V 群のうち、石器は貝層 III 群が多く、特に III 群 5 層は V 層と並び 73 点と全体の 21.2% を示す。これに貝層 III 群 3 層と貝層 III 群 2 層が続く。

HB ③では石器の出土量が少なく又、貝層は確認されていない。III 層（遺構 SK36 含む）と III d 層は 22 点と同数で比率にして 6.4% である。これに次いで III c 層が 15 点の 4.4%、III b 層が 13 点で 3.7% である。

第25表 石器 出土量

遺跡	層	遺構	器種		石斧	敲石	敲石兼磨石	磨石	石皿		砥石			台石		円盤状石器	クガニ石		チャート製品		石球	用途不明石器	サンゴ有孔製品	合計		
			完形	破損					完形	破損	破片	完形	破損	完形	破損		楔形石器	スクレイパー								
			遺構																							
HC	I		攪乱				1										1							2		
	II						1																1	2		
	IIc		遺構				2																	2		
	III		グスク				3						1									1		5		
	V		後期層	5	3	11	60		3	1	4	1		2	1	1		1	1			1		95		
	V	貝層 II 群	d				1																		1	
			1	2		1	3																		6	
			1a				1																			1
			1b		1		1																			2
		貝層 III 群	2			2	11			1																14
			3	2	1		12																1			16
			4			1	2																			3
			5	4	9	6	37	2	6		4		1	2	1								1			73
			不明				3																			3
			貝層 IV 群				1																			
貝層 V 群				1																				1		
不明	1	1	6	21		3	1								1									34		
HC 小計			14	15	27	161	2	12	3	8	1	1	5	2	1	2	1	1	1	3	1			261		
HB ③	I			1																				1		
	IIa		遺構				1																	1		
	IIb						1																	1		
	IIc		遺構		1		1															1		3		
	III			2			14			2				1							1	1		21		
	III		SK36				1																	1		
	IIIa			2			1																	3		
	IIIb			2		2	7														2			13		
	IIIc			1	1		11														1			14		
	IIIc		SD04				1																	1		
	III d (V)			2	2	1	12			1														18		
IIIe						4																	4			
不明	2			1																				3		
HB ③ 小計			11	5	3	55	0	0	0	3	0	0	0	1	0	0	0	0	2	4	0			84		
HC+HB ③ 合計			25	20	30	216	2	12	3	11	1	1	5	3	1	2	1	1	3	7	1			345		



第94図 石器 平面分布

第94図①・②は出土量の多い層に限定し、器種別で平面分布に示した。第94図①に示すHC V層とHB③ III層・III c層・III d層は、土器の出土状況も参考に同一の時期としてまとめた。図①は、磨石がHCの調査区北東側からHB③の南側にかけて広く分布し、HB③の北側にも若干散見される。HCでは磨石に限らず敲石兼磨石、砥石などが認められ、HB③でも様々な器種が全体にHC寄りのグリッドに多く確認される。

第94図②はHC貝層III群5層出土の遺物で、図に示すように限られた範囲で石器が集中する様子が確認できる。貝層III群5層はV層に次いで遺物が多く、下層にいくほど集中範囲が小さくなる。器種では磨石が多く、石皿は14点のうち8点が出土している。

次に点数の多い6器種を第94図③～⑧に示した。図③～⑤の石斧・敲石・敲石兼磨石は、出土量・分布も同様の状況を示す。HCとHB③の比較では、HCに若干多い程度で、僅かにHC北東側の貝層群で数グリッドに3器種とも、やや纏まるように出土する。

HB③では、どの器種も集中せず散見される程度である。特に石斧は、近接する遺跡の中で今回は出土量が少なく、分布にばらつきが見られる。

図⑥の磨石は、HCとHB③では集中度に差がある。HCに殆どの磨石が集中し、調査区北側約半数のグリッド、貝層群の検出された北東側は特に多い。磨石の出土量216点のうちHCだけで161点出土している。北東側の貝層群検出箇所では土器もくびれ平底が多く認められることから、推測の範囲だがグスク時代まで敲打器類を使用していた可能性も想定される。

図⑦の石皿はHCのみで認められ、破損品ながら大型資料が数点認められる。図⑧の砥石も量的にHCが多くHB③では僅か3点と少ない。又、既報告の平安山原A遺跡(2016)で認められたグスク時代と考えられる砥石は今回確認されていない。

遺構出土の石器

第26表に遺構出土の石器を示した。石器は8点と少なく、HCでは土坑・柱穴、HB③は石列・土坑・溝状遺構から敲石・磨石・用途不明石器が出土した。HC P01では二枚貝有孔製品と、SK02では土器底部・二枚貝有孔製品と共伴出土している。HB③ではSK32・SK36・SD04で土器口縁・胴部・底部などと共に出土した。

HC P01は、埋土中に小礫、自然貝を多く含み4層に分層されるが、石器の詳細な出自は不明。HC SK02の埋土は近世包含層と白砂の互層で、近世期に掘削された可能性があるものの、石器は埋土下層出土である。表中に層序・時期を示したように、グスク時代の場合、石器を使用する可能性はあるが、時期的にその範疇かは判断できない。

HB③ SL02・SL05は石列遺構で、試掘トレンチと、重機掘削後の清掃時に出土したもので、近代・近世に該当する時期だが、本来の帰属時期がはっきりしない。SK32の磨石・用途不明石器は、時期がII c層の近世出土だが埋土下層から出土した。SK36の土坑、SD04の溝状遺構ともに出土時期はグスク時代である。HC・HB③のどちらの遺構も帰属時期はグスク時代・近世・近代に相当するもので、紛れ込みの可能性も否めない。

上記の石器以外に遺構から石材及び礫類も65点出土している。HCでは土坑SK01が白砂層上面で検出され、遺構内から礫片が20点、HB③のSK14. SK32. SK36. SK38. SK40で合計12点、その他HC SP01で1点、HB③ SP18で1点、SP23で2点の計4点、HB③のSL01. SL01・02. SL02. SL04. SL05. SL07で計17点、HB③ SD04で12点出土した。

第26表 遺構出土石器一覧

遺跡	遺構名	遺構番号	層序	時期	器種
HC	土坑	SK02	II c	近世	磨石
	柱穴	P01	II c	近世	磨石
HB③	石列	祝女殿内小-SL05	II a	近代	磨石
	石列	石列I群-SL02	II c	近世	敲石
	土坑	SK32	II c	近世	用途不明石器
	土坑	SK32	II c	近世	磨石
	土坑	SK36	III	グスク	磨石
	溝状遺構	SD04	III c	グスク	磨石

石斧

完形と基部・刃部破損資料、破片、粗加工品を含め 25 点出土した。石斧は下記の基準とおりに全体の器形と刃部で大別、又サイズで分類した。

18 点を図化した但形態は破損資料が多く、分類不可に含めたものが殆どである。基端から刃部までの長さが短く、頻りに研ぎ直しが繰り返された痕跡の窺える資料もみられた。

又、刃を付けた形跡がなく石斧として完成されていない資料は粗加工品として扱い、特徴的な点を略記する。

第27表 石斧 形態別サイズ分類

遺跡	層	形態 サイズ	I類	II類	III類	IV類	分類不可			粗加工	合計	
			2類 完形	1類 完形	3類 完形	2類 完形	基部 破損	刃部 破損	破片			
HC	V	後期層	2	1				1			1	5
		1					1	1				2
	V 貝層 III群	3				1				1		2
		5			1				1	1	1	4
		不明								1		1
	HC 小計			2	1	1	1	2	2	3	2	14
HB ③	III							2			2	
		IIIa						1		1	2	
	IIIb						1	1			2	
		IIIc						1			1	
		III d (V)						2			2	
	不明							1	1		2	
HB③ 小計			0	0	0	0	1	8	1	1	11	
HC+HB③合計			2	1	1	1	3	10	4	3	25	

第 27 表に石斧の形態別分類を示した。I～IV類としたものは完形で形態が確実に把握できる資料を分類した。分類不可には基部、刃部の破損資料と破片を含めた。刃部破損資料が大半で全体量の半数近い。石斧の刃部で用途を考えた場合、観察表に示すとおり両刃の資料が多い。

形態分類 <正面>

- I類：撥形で基端頭部が小さく刃部にかけて末広がり
- II類：短冊形を呈し、基部から刃部にかけて直線的
- III類：棒状形で基部に厚みがあり乳棒状を呈す
- IV類：上記のどちらの範疇にも属さない不定形資料
- 分類不可：基部もしくは刃部が破損、形態把握が不可
- 粗加工：粗く成形、細かい打割調整はなく刃の研ぎ出しはない

<側面>

- イ：基部と刃部の境目が厚い
- ロ：全体に均一な厚み薄手を呈す

刃部形態 <正面>

- A：円刃で刃の中心から左右にラウンド状に刃が付く
- B：直刃で刃先全体が直線的で刃の左右に角を作る
- C：偏刃で刃の付け方が左右でアシンメトリー

<側面>

- 1：両刃で表裏両面から刃を研ぐ
- 2：片刃で片側から刃を付ける

サイズ分類

- 1類：大型の範疇として、基部から刃部先の長さ 12.0 cm以上
- 2類：中型とした資料で基部から刃部先の長さが 12.0 cm～ 10.0 cmの範疇のもの
- 3類：小型のサイズで基部から刃部先の長さが 10.0 cm以下のもの

I類

図 1・10 は撥形石斧の範疇としたものである。図 1 は撥形の両刃としたが、側面を見た場合、裏面からの刃の研ぎ出しが強く、やや片刃的な要素もある資料である。図 10 は撥形を成し右側面の一部が欠損する。研磨状態は特に良好で均一な厚みを呈し、刃部に刃毀れが数箇所見られる。

II類

この形態に含めた資料は平面観が基端頭部～刃部まで同じ幅をもち、且つ側面が均一な厚みのものを短冊形とし、図 8 をこの範疇に含めた。完形で厚みが均等、ほぼ全面に顕著な成形が施される。刃は角度が急で刃面が短く、刃部に刃毀れは見られない。又、刃の研ぎ直しも確認できる。

III類

図 7 は平面・側面観から棒状に含めた。裏面は基部～刃部に欠けを生じる。研磨痕は明瞭だが部分的に自然面を残す箇所もあり、横断面をみる限り厚みは左右均等ではない。

IV類

図 11 は基部～刃部まで角がなく、扁平で均一な厚みを呈す。裏面の一部は欠けを生じ、研磨は基部と刃部に認められる。刃部は円刃で刃は短く、一部に刃毀れを生じる。

分類不可

図 6・15 は基部資料である。図 6 は厚みがあり、基端は平坦面を成し擦痕が認められる。基部は成形され研磨は明瞭でないが、全体に丸みを帯びる。基部中央から下部は大きく破損、刃部の形態は想定できない。図 15 は基端頭部の角を落とし丸く成形、研磨は表裏面・両側面に認められ明瞭、側面の厚みは均一で原形は残存部から短冊形と判断できる。

図 2～5・9・12～14 は刃部資料である。図 2 は基端を欠き残存する基部はやや厚く、側面から両刃と判断できる。図 3 は形態やサイズは判断できないが、刃部の厚みからかなり太形の両刃石斧と推測される。刃毀れはあるものの、研磨はかなり明瞭である。図 4 は裏面の基部中央～刃部にかけて大きく破損する。研磨は両面とも顕著だが側面まで至らず、刃部形態は刃毀れが激しく不明とした。

第28表 石斧 観察一覧

(法量単位:cm, g)

第図 図版	図 番号	形態		完/破	残存 部位	刃部形態		サイズ	計測値				観察事項	石質	地区・グリッド・層 遺構・台帳(ドット)番号
		平面	側面			正面	側面		残存長	残存幅	残存厚	重量			
第101 図・ 図版 71	1	I類	イ	完形	—	A	1	3類	9.9	5.9	3.7	334	状態:基端頭部、面を成す 研磨:基部・刃部明瞭 刃部:刃こぼれ数カ所あり	砂岩	HC C10 V ㊦3459
	2	分類 不可	イ	破損	刃部	A	1	不明	8.4	6.5	2.9	265	状態:基端破損 研磨:基部・刃部明瞭 刃部:刃こぼれ数ヶ所	砂岩	HC T15 貝層Ⅲ群5 ㊦4240
	3	分類 不可	イ	破損	刃部	A	1	不明	6.7	3.8	2.9	113	状態:基部はほぼ破損、形態不明 研磨:刃部かなり明瞭	輝緑岩	HB㊦ R14 Ⅲd(14) ㊦1942
	4	分類 不可	イ	破損	刃部	A	1	不明	8.2	6.1	2.4	119	状態:裏面、刃部～基部中央破損 研磨:表面・刃部～基部まで明瞭	片状砂岩	HB㊦ B7 Ⅲc(7) ㊦406
	5	分類 不可	イ	破損	刃部	A	1	不明	9.1	5.5	2.4	180	状態:刃部の刃先、欠けを生じる 刃部:刃こぼれ、側刃角破損 研磨:基部・刃部不明瞭	砂岩	HB㊦ B8 Ⅲ(12) ㊦879
	6	分類 不可	イ	破損	基部	—	—	不明	8.1	4.3	4.0	205	状態:石斧の基部か? 基端:頭部に面をつくる 研磨:表面・裏面に浅く確認	輝緑岩	HB㊦ T17 Ⅲb(5) 台825
	7	Ⅲ類	イ	完形	—	—	—	3類	9.5	4.3	3.5	212	状態:基部に歪み 基端:頭部に面を作る 裏面:大きく破損、刃部形態不明	砂岩	HC A16 貝層Ⅲ群5 ㊦4163
	8	Ⅱ類	イ	完形	—	B	1	1類	12.3	7.2	2.7	484	状態:基端頭部、面を成す 研磨:基部・刃部明瞭 刃部:刃の長さ、基部に反比例短い	斑レイ岩	HC C11V (白砂層上面) 台5078
第102 図・ 図版 72	9	分類 不可	イ	破損	刃部	B	1	不明	6.3	4.5	2.5	114	状態:基部中央から破損 研磨:表裏面に有り 刃部:刃先やや鈍る	斑レイ岩	HC A15 貝層Ⅲ群 ㊦3227
	10	I類	ロ	完形	—	A	1	2類	10.6	7.6	2.4	331	状態:両側面打割調整、一部研磨 、刃部研ぎ直しの痕、刃こぼれ多い 研磨:基端・基部・刃部明瞭	砂岩	HC S12 V (後期層) ㊦788
	11	Ⅳ類	ロ	完形	—	A	1	2類	10.0	5.6	2.0	196	状態:全体に角がなく隅丸を呈す 基部:一部薄く剥離 研磨:表裏面基部・刃部明瞭	砂岩	HC T15 貝層Ⅲ群 ㊦4047
	12	分類 不可	ロ	破損	刃部	B	1	不明	7.2	6.5	2.1	110	状態:形状不明、全体につくり粗い 刃部:刃は付される 研磨:基部不明瞭、刃部研磨痕	片状砂岩	HB㊦ A7 Ⅲb(5) ㊦211
	13	分類 不可	ロ	破損	刃部	C	2	不明	5.4	4.5	1.4	63	状態:基部形態不明、側面に稜線を確認、角を成す、 刃部のみ残存 研磨:基部一部・刃部かなり明瞭	砂岩	HB㊦ R14 Ⅲa(4) ㊦0
	14	分類 不可	ロ	破損	刃部	—	—	不明	5.1	2.9	1.3	30	状態:研磨は部分的に明瞭 刃部:刃先の刃線は潰れ、面を成す	角閃岩	HB㊦ A2 Ⅲd(14) 台1620
	15	分類 不可	ロ	破損	基部	不明	不明	不明	7.5	4.8	2.1	156	状態:基部中央～下部破損 研磨:基部、表裏面・両側面明瞭	砂岩	HC G13 V ㊦1823
	16	分類 不可	—	破片	—	—	—	不明	7.7	4.8	1.1	65	状態:裏面剥離、表面基部のみ 研磨:表面、一部明瞭	砂岩	HB㊦ 地区・グリッド不明 層序不明 台1731
	17	粗加工	—	—	—	—	—	—	7.3	5.3	2.0	122	状態:形状局部磨製的、成形途中 研磨:表面基部研磨なし、裏面基部・刃部?僅かに有	砂岩	HC B13 V ㊦1833
	18	粗加工	—	—	—	—	—	—	12.6	5.5	2.2	270	状態:成形は粗く打ち割り 研磨:基部中央の一部	砂岩	HB㊦ B3 Ⅲa 台314

図5は全体に成形され基端も残存するが、石質が泥質の砂岩のため基部の研磨は不明瞭である。刃部は表裏面とも刃の研ぎ出しが確認されるが、刃毀れも多い。図9は基部が僅かに残存、平面観は幅が細く側面は刃部に厚みを持つ。刃部は直刃で刃先が直線的、又、裏面はかなり上部まで刃を研ぎ出し片刃的な様相を呈す。図12は基部中央から破損し形態不明、僅かに残存する基部は雑なつくりで刃部のみ研磨され、刃は偏平な両刃であるが片刃的要素をもつ。図13は基端～基部中央まで破損する。側面の厚みは均一で薄手を成し、刃部は片刃で刃先から刃面までの長さが短い。又、左右の厚さが均等でなく左側面が若干厚くなる。図14は刃部の一部のみ残存し、表裏面に僅かに研磨が見られ裏面は平坦な面を呈す。刃先は研磨で潰れ、刃線は失われている。

粗加工品

図17・18は粗加工資料とした。基本的に細かい調整痕や研磨のないものを指すが、ここでは一部に目的不明の研磨が認められる資料も含めた。図17は上部が破損し、全体の形状は粗く成形される。裏面中央と下部に研磨が確認されるが、刃を付けた痕跡や刃の研ぎ出しは全く認められない。図18は転石を利用したもので、形状に若干ねじれと歪みが見られる。表面は粗割り程度で打割調整は施されず、裏面の一部・両側面は自然面を成す。裏面もほぼ加工痕はなく基部中央の一部、高まりの箇所を平坦に研磨した痕跡が窺える。

敲石

敲石の形態・サイズ分類は、以下のように行い、且つ分類の範疇にない資料は横幅と厚さの計測値も参考にした。又、長さ
と幅に対し厚みのある資料は、上下に面をもち敲石に使用される事が多い。使用痕については
敲きの痕跡が主に目立つもの、
窪みの明瞭な資料を敲石として
分類し20点出土した。石質は砂

第29表 敲石 形態別サイズ分類

遺跡	層	形態 サイズ		I類		II類		III類		IV類		V類		分類 不可	合計
				2類	1類	2類	1類	2類	1類	2類	1類				
				完形	完形	完形	破損	完形	完形	破損	完形	破損	破片		
HC	V	後期層			1				1					1	3
		1b			1										1
		3											1		1
		5			1		2	1			2	2	1		9
	不明												1	1	
HC小計				0	0	2	1	2	1	1	2	2	2	2	15
HB③	I	SL02							1						1
		IIc							1						1
		IIIc	1												1
		III d (V)		1				1							2
	HB③小計				1	1	0	0	0	3	0	0	0	0	5
HC+HB③合計				1	1	2	1	2	4	1	2	2	2	2	20

岩が多く使用され、片状砂岩・礫質砂岩などの堆積岩や斑レイ岩・輝緑岩なども認められた。第29表に形態別サイズ分類を示した。形態ではI～V類のうち、III類が6点でやや多く又、II類とV類が4点と同数出土した。サイズ分類では各々の形態に1類・2類と分け、そのうち2類が10点、1類は8点である。

1) 形態分類

- I類：円形で偏平なもの
と厚みのある種類に分けられる
- II類：球状形で全体に丸みがあり、1類・2類資料に多い
- III類：楕円形の厚みがあり角のない資料で、1類に認められる
- IV類：俵形を呈し全体に丸みをもち筒状の資料
- V類：不定形で達磨や瓢箪様の形状、その他の形状が一般的でない資料

2) サイズ分類

- 1類：中型で長さが14.0～8.0cm、又は重量1.500g～450gの範囲の資料
- 2類：小型で長さが8.0cm以下、又は重量450g以下のもの

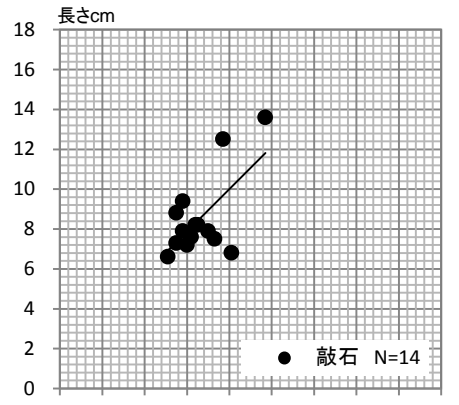
図19・20は石質が脆い素材を利用しており、手短な転石、或いは自然礫を用いたと考えられる。図19は砂質石灰岩を用い、使用痕は四面の5カ所に見られ、敲打は2～5cm台の範囲を示す。図20は自然の転石を利用したと思われる。頭部と下部の上下に敲打が認められ、部分的に面取りされた痕跡と括れをつくる箇所に線状痕らしき跡がみられる。図51も転石を利用したと考えられ、形状は成形されていない。中央部分が括れを成し、且つ一周し部分的に窪みを有す。使用痕は下面に敲打の痕跡を残す。石質は砂岩で粒子が細かい。

第30表で完形14点の形態とサイズを比較した。形態はⅢ類が若干多くサイズでは1類・2類の比較で敲石の全体量20点からすると2類の完形率は高い。形態はⅢ類が若干多く1類・2類では標準的な形態と考えられる。

第95図は長さ幅のサイズを数値でグラフに示した。この図も完形のみを示し、敲石は長さ6～10cm以内、幅4～8cm台の大きさに集中し、1類・2類の範疇ではこの大きさが一般的と言える。グラフ内の近似直線に近い数値に集中しており、やや縦長の形状が多い。

第30表 敲石 形態別サイズ比較(完形)

形態	1類	2類	合計
I		1	1
II	1	2	3
III	2	4	6
IV		2	2
V	1	1	2
合計	4	10	14



第95図 敲石 長さ幅の相関

敲石兼磨石

1) 形態分類

- I 類：円形でやや扁平資料と厚みのある種類に分けられ、サイズ分類の2類に多い
- II 類：球状形で扁平と厚手に分類され、1類・2類の資料に多い
- III 類：楕円形の厚みがあり角のない資料で、1類・2類の完形に多く認められる
- IV 類：俵形を呈し全体に丸みを持ち筒状の資料で1類・2類資料に多い
- V 類a：石鹼状の隅丸で全体に角のないもので2類に認められる
- V 類b：分銅形で両側面にノッチ状の窪みが明瞭なもの
- VI 類：不定形の形状が特定の形を示さず破損資料や原形が窺えない資料も含む

2) サイズ分類

- 1 類：大型の範疇に含め、長さ 13.0 cm以上、又は重量 1.300g 以上
- 2 類：中型で長さ 13.0～9.5 cm、又は重量 1.300～250g はこの範疇に含む
- 3 類：小型で長さ 9.5 cm以下、又は重量 250g 以下

第31表 敲石兼磨石 形態別サイズ分類

遺跡	層	形態	I 類		II 類			III 類			IV 類		V 類a		V 類b			VI 類			分類不可	合計	
			1類	2類	1類	2類	3類	3類	2類	1類	2類	1類	2類	3類	3類	3類	3類	3類					
			完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損	破片				
HC	V	後期層	1	1		1	1	3	1	2										1		11	
		貝層 Ⅲ群	1																		1		1
			2					1						1									2
			4											1									1
			5			2		2					1		1								6
			不明						2														2
HC 小計		1	1	2	1	4	5	1	2	2	1	1	1	1	0	1	1	2		2	27		
HB ③	Ⅲb Ⅲd (V)														1	1					2		
															1						1		
		HB③ 小計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0		0	3	
HC+HB③ 合計		1	1	2	1	4	5	1	2	2	1	1	1	1	1	3	1	2		2	30		

敲石兼磨石は敲石と磨石の用途を兼ねた資料と捉えた。敲きの痕跡が見られる資料は範囲の小さい敲打の場合も、その度合いに限らずこの項目に含め 30 点出土した。個体により表裏面でそれぞれ用途を使い分け片面で敲打、片面で磨りの使用痕が確認される資料もある。形態とサイズ分類は前述のように行った。

第 31 表に形態分類を示し、形態はⅥ類に、サイズは 3 種類に分類した。形態はⅢ類が多く 13 点、サイズ分類では各々の形態の 1～3 類に認められ全体で 2 類が 18 点と多い。

図 27・29 は、2 点ともⅢ類の形態に属す資料で、図 27 は若干幅がなく細身である。どちらも中央に同程度の敲打痕を有し、窪みは図 27 の方が深く図 29 は幅広で敲きの痕跡も浅い。図 30 は、側面の状態から厚手資料とした。完形で表裏面に明瞭な研磨が認められ滑沢である。両面中央に敲打があり片面は深く片面は浅い。風化により鉱物の雲母片が抜け落ち、多孔質の状態では表裏面の研磨面も脆く剥離する。

図 32 は表面中央に 3cm 台の浅い敲打痕があり、裏面の研磨は破損後に再利用した結果、使用痕が残り緩く反りが見られる。図 36 は、左側面から裏面にかけ破損する。研磨は表裏面の残存箇所認められ、敲打は破損部の左側面に 3cm 前後の深い窪みを有し、破損後もその面を再利用している。図 37・38 は、Ⅴ類 a の形態を呈しサイズは 2 類の厚手の範疇に入る資料である。図 37 は、用途を使い分けた典型的な資料で片面は磨り、もう片面は敲きに使用している。図 38 は、表裏面の研磨が特に明瞭で、上下面と側面周囲に浅い擦痕が確認できる。図 41 は形態がⅢ類、サイズ 1 類の厚手資料で、裏面の一部が破損する。使用痕は裏面・下面残存部に敲打が認められるが、石質が砂岩のため敲打痕が不明瞭である。研磨は表裏面全体にみられる。

図 53 は側面に窪みをもち表裏面とも研磨は明瞭で、上下端も面を成し擦痕が認められる。両側面のノッチ状窪みは縦 4cm、横 3cm 程度で、手で掴む際の指掛けに適している。

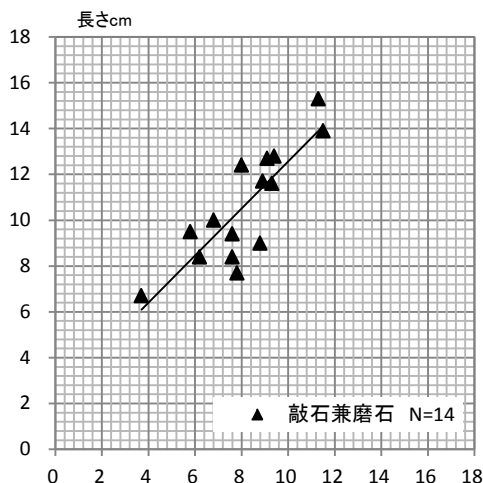
図 54・55 は側面が厚手の資料で、図 54 は表裏面に研磨が明瞭、どちらの面も中央に 3～4cm 台の敲きの痕跡が窺える。両側面は明瞭なノッチ状の窪みを有し、上下面は擦痕が浅く認められる。図 55 は、表・両側面、上下に敲きの使用痕が観察される。図 81 の資料と共伴出土した。

図 57・58 は表面中央に稜をもち下面から見た形態が三角形を成す。図 57 は整った形状で下面図にあるように中央に稜をもつ。一部に研磨の跡が残るものの、中央の稜を境に左右どちらも多孔質で風化の影響が窺える。又、裏面の平坦な面は研磨が残る。図 58 も表面中央に稜をもち、左右どちらも研磨が明瞭で、右側に微かに敲きの痕跡が残る。裏面は平坦な面を有し、研磨はかなり滑沢、右側面のみ 4cm 台の窪みが認められる。

第 32 表に完形 15 点をサイズ別に形態を比較した。形態はⅢ類が多く、破損も含めるとⅤ類 a と二つの形態に分けられ、その他の資料は手短な転石を簡易的に使用したと考えられる。第 96 図に長さとの幅の関係を示し、1 類と 2 類ではサイズの集中する範囲が違う。一般的なものは幅に対し長さの比率が高い資料が多いが、長さとの幅の数値が同数の資料で近似直線から外れるものが数点あり、縦長ではなく長さの短いものも認められる。

第32表 敲石兼磨石 形態別サイズ比較(完形)

サイズ 形態	1類	2類	3類	合計
I			1	1
Ⅲ	2	4	1	7
Ⅳ			2	2
Va		2		2
Vb	1	1		2
Ⅵ		1		1
合計	3	8	4	15



第96図 敲石兼磨石 長さとの幅の相関 幅cm

磨石

磨石は最も出土量が多く 216 点出土した。研磨が明瞭で滑沢なものほど破損率が高く、全体のサイズは特定できない。下記のとおり形態とサイズで分類を行った。形態ではⅢ類が 56 点で、サイズ分類では 2 類が 73 点と最も多い。3 類は研磨が浅く使用痕も不明瞭なものが多い。

1) 形態分類

I 類：円形で偏平資料と厚みのある種類に分けられ、サイズはこの 3 類に多い

II 類：球状形を呈し偏平と厚手に分類され、3 類・2 類に多い

III 類：楕円形で厚みがあり角のない、2 類・1 類の完形資料に多く認められる

IV 類：俵形の平面観が縦長で筒状で俵の形状を示す資料

V 類：三角形の平面中央に稜をもち、横断面が三角形を呈すもの

VI 類：不定形で形状が一般的でないもの、破損資料や原形が窺えない資料も含む

2) サイズ分類

1 類：大型で長さ 11.0 cm 以上、又は重量 1.300g 以上の資料

2 類：中型で長さ 11.0 ～ 9.0 cm、又は重量 1.300 ～ 660g の範疇

3 類：小型を呈し長さ 9.0 cm 以下、又は重量 660g 以下のもの

第33表 磨石 形態別サイズ分類

遺跡 層	形態 サイズ	I 類			II 類			III 類						IV 類		V 類						VI 類			分類 不可	合計			
		2類		3類	1類	3類		1類		2類		3類		2類	3類	1類	2類	3類	1類	2類		3類							
		破損	完形	破損	完形	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損						
HC	I	攪乱																							1	1			
	II									1																	1		
	IIc	P01																				1			1		2		
	III	グスク									1															2	3		
	V	後期層			1		1				2	2	7	5	1							4	1	10	1		25	60	
	V	貝層 II群	d																								1	1	
			1																									2	3
		貝層 III群	1a																									1	1
			1b																									1	1
			2										2	3	1										1			4	11
			3									2	2	2														5	14
			4																1									1	2
			5	1			1	1		1	3		6						1	1	1	2		4		7		7	35
	不明																								1	2	3		
貝層IV群																										1	1		
貝層V群																										1	1		
不明										3	1	1									1		3			12	21		
HC 小計		1	0	1	1	2	0	1	7	4	23	9	2	0	1	1	1	1	2	12	1	26	1	2	63	161			
HB ③	IIa	SL05		1																								1	
	IIb											1																1	
	IIc	SK32																									1	1	
	III											1	1				1									4	7	14	
	III	SK36																									1	1	
	IIIa																									1	1		
	IIIb																									2	5	7	
	IIIc										1	1				1										1	7	11	
	IIIc	SD04											1														1	1	
	III d (V)							1				2	1													2	1	5	12
	IIIe				1							1						1			1							4	4
不明						1																					1	1	
HB③ 小計		0	1	1	0	1	1	0	0	1	4	4	1	1	0	1	1	0	1	0	10	0	1	3	26	55			
HC+HB③ 合計		1	1	2	1	3	1	1	7	5	27	13	3	1	1	2	2	2	13	1	36	1	3	89	216				
分類別計		4			5			56						2		6						54			89	216			

図 23 は一部が欠けるが、表裏面とも研磨がかなり明瞭に見られる。表面から側面にかけて角度の違う方向から研磨に至らない擦痕が小さい範囲で幾つも認められる。図 24 は表面の研磨がない部分は面が潰れ、手慣れの痕跡が見られる。上面・両側面に部分的に研磨が残り、形状から破損品の二次使用の痕跡が窺える。図 25 は全体に厚みと丸みがあり、平坦な使用面が多面的で形状を変形にしている。使用面は表裏・両側面の四面に研磨が見られ小範囲ながら明瞭である。図 26 は石器に不向きと思える程、石英脈が全体に走る。表裏面に浅い研磨が認められ、裏面の一部はかなり明瞭である。下面の一部には研磨に至らない擦痕が窺える。

図 40 は、破損後も再利用したと考えられる。使用した後の痕跡が形状に表れ多角的に面を成し、六面に使用痕が認められる。歪だが完形とした。破損前の本来の研磨が右側面・上下面の一部に明瞭に残り、破損後の研磨は表裏面、左側面の突出部に粗く認められる。

図 42 は器面が脆く、研磨の痕跡は表面に四箇所、裏面に三箇所と小さい範囲で僅かに残る。おそらく全面に研磨を呈していたと考えられる。石質は花崗岩で鉱物が多く多孔質、風化で残存状態は悪い。図 30 同様に、酸化で鉱物が風化し茶色に変化する現象が見られた。図 45 は表裏面とも研磨がかなり滑沢でテカリさえ窺え、使用頻度の高さが窺える。石質は砂岩で鉱物に均一な石英粒を多く含み、研磨が明瞭で滑沢になる。

図 49・50 は、形態が丸みを帯び表裏面に平坦な面をもたない。図 49 は全体に丸く研磨は全面に認められ左側面・裏面がより明瞭である。擦痕が上端に三箇所、下端に四箇所認められる。図 50 は前者に比べ、やや大きなサイズになり研磨は裏面がより明瞭である。使用頻度はそれ程高くなく、器面に細かい凹凸が認められる。

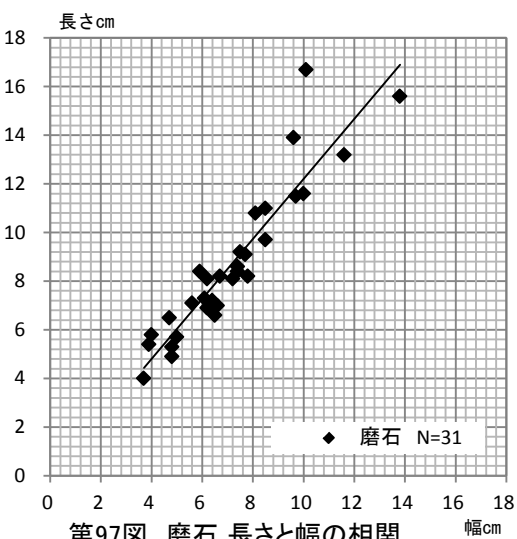
図 56・59 は、下面から見て三角形を呈す資料である。図 56 は表面中央が山なりに稜を成し、左右に面をもつ。研磨は全面に認められ、表面左側の敲きの痕は使用時の痕跡でなく後々研磨面を潰した跡と推測される。両側面も稜をもち、裏面は平坦で部分的に研磨が至っていない。石質が輝緑岩のため、研磨がかなり明瞭である。図 59 は破損資料で、全体に丸みを帯び稜は明瞭でない。図上復元した場合、前者とほぼ同程度の大きさと推測、上面観は丸みのある三角形を呈す。砂岩を用いており節理面から剥離、破損面に石英が張り付く。

第34表 磨石 形態別サイズ比較(完形)

サイズ 形態	1類	2類	3類	合計
I			1	1
II	1		3	4
III	1	5	13	19
IV			1	1
V	2		3	5
VI		1		1
合計	4	6	21	31

第 34 表に磨石の完形 31 点を形態別にサイズを比較した。216 点と全体量からみると圧倒的に少ないが、1～3 類のうち 3 類に多く残る。1 類は各形態の数量が僅かで傾向は把握できず、2・3 類は形態の III 類に多い傾向にある。破損資料を加えた場合も III 類が多く、VI 類が幾つか見られる傾向に変化はない。

第 97 図に磨石の長さ・幅の相関関係を示した。長さは 4cm 台から 16cm 台と範囲が広い。幅は 4cm 台から 14cm 台でサイズが大きくなる程、縦・横の比率は縦長傾向にあり、近似直線を示したが敲石、敲石兼磨石の場合と比較し縦長の比率は高い。



第97図 磨石 長さとの相関

石皿

石皿はHCのみで14点出土した。層序では貝層Ⅲ群5層の8点が最も多く、V層で破損資料が3点、その他、層不明3点が確認された。大型に属し、破損資料ながらかなり重量のある資料も出土した。

図79はシルト岩を用い使用痕は表面中央のみ、使用面以外は自然面を呈し、横断面から平坦ながら浅く反りを成す。

図80は砂岩で、使用痕が表裏面に確認できる。特に表面中央の使用痕は深く、平面図を図上復元すると窪みの範囲は四分の一程度と判断、その状態から原形は残存部の四倍程度と思われる。裏面も明瞭な使用面が確認できる。

図81は平面が不定形を成し、側面は厚く板状を呈す。表面のみ使用し、石質は黒色片岩である。使用面は平坦で滑沢があり研磨が明瞭に確認されるが、劣化が激しく部分的に剥離している。又、図55の敲石兼磨石と共伴出土した。図82は平面が不定形を成し、側面は板状で均一の厚みを呈す。重量は17.5kgを量り出土した石皿のうち最も重い。

第35表は石皿の使用面と石質を比較したもので、両面使用が3点、片面使用が11点出土した。石質は殆ど砂岩系の岩石で、シルト岩・黒色片岩も僅かに認められる。他に、小堀原遺跡(2012・第78図43)で砂質石灰岩の石皿も確認されている。

第36表では石皿の使用面と残存長でのサイズを示した。14点のうち完形は僅かに2点で片面使用である。破損資料は、両面使用が10～20cm台に3点、片面使用は9点でそのうち40cm以上の長さのある大型資料が2点認められた。石皿の形態・大きさは、県内の遺跡では破損資料が多い為、規格化したサイズはない。大型のものとして伊礼原A遺跡(2014・第74図62)の完形資料で約62cmのサイズが、小型は小堀原遺跡(2009・第38図12)の15cm程度のサイズが確認されている。又、両面使用の場合、中央部が磨り減り、薄くなるため殆どの石皿が破損していると推測される。

砥石

出土した砥石は総数15点出土し、石斧や貝製品・骨製品・小型利器などを研ぐ用途と位置づけた。完形が少なく、ほぼ破損資料でサイズは用途別に大型の置き砥石と、中型・小型の手持ち砥石に分けられる。破損後も手持ち砥石として再度使用されたと考えられる資料もあり、中型・小型が本来のサイズか判断できない。

砥石もHCで12点と多く、V層6点、貝層Ⅲ群2層で1点、貝層Ⅲ群5層で4点、その他、層不明1点、HB③ではⅢ層2点、Ⅲd層で1点の出土である。平安山原A遺跡(2016・第176・177図)ではグスク時代の砥石が出土したが、今回は類似する砥石は認められない。

図73・74は、成形等の手を加えず自然の状態で利用したと考えられる資料である。図73は、やや扁平な棒状を呈し側面の一部が反る状態で、この箇所のみ研磨痕が窺える。図74は全体の形状及びサイズは不明で、不定形を呈し、上下・左右側面は破損、使用痕は表裏面に確認できる。表面は一部に緩い段差が生じ裏面も同様の段差が残存する。

図75は略方形を呈し厚みは一定、上下・左右の面が破損するためサイズは把握できない。表裏面に使用痕が認められ横断面から若干の反りが確認できる。

台石

敲石の土台として敲打のある資料6点を扱った。2点を図化した。図示したもの以外は破損品

第35表 石皿 使用面×石質相関

使用面		石質	
		両面	片面
砂岩		3	5
細粒砂岩			1
片状砂岩			1
礫質砂岩			1
シルト岩			2
黒色片岩			1

第36表 石皿 使用面×残存長相関

使用面		完・破	
		両面	片面
完形	20cm台		2
	10cm台	2	3
破損	20cm台	1	2
	30cm台		2
	40cm台		1
	50cm台		1

で10 cm台から20 cm台の資料が認められる。又、片面に敲打痕、片面に磨りの痕跡が残る資料もあるが、据わりが悪く使用痕に曖昧な箇所があり、用途を再度検討する必要がある。台石もHCのみで出土、層序はⅢ層で1点、2点がⅤ層、3点は貝層Ⅲ群5層から出土した。

図71は形状がやや方形で縦・横の計測値に厚さが比例し、キューブ状を成す。表裏面に平坦な研磨面を有し、中央に細かく浅い敲打痕が幾つも見られる。図72は、上端が欠ける資料で形状は三角形を呈し、表面中央に敲打の痕跡が見られる。両側面と裏面・下面に研磨が窺える。敲石の土台以外に磨石に使用した可能性もある。

円盤状石器

磨石を二次加工した資料で、素材の縁辺を細かく打ち割り円形を呈す。出土した円盤状石器はサイズが各々異なり、形状も同じ資料はない。破損した磨石を再利用するケースが多く、厚さが均一なもの、やや厚手を呈す資料の二種類が見られた。HCでⅤ層から1点、貝層Ⅲ群5層1点、HB③ではⅢ層から1点の計3点出土した。使用された素材は堆積岩系統の砂岩・片状砂岩のみで地元で手に入る岩石を利用している。

図67は磨石を再利用、側面周縁の角を落とし円形に仕上げた資料である。表面は風化で部分的に研磨が剥離、磨石の研磨面が残存した痕跡が窺える。裏面は自然面を呈し、破損資料を再度使用したとわかる。県内遺跡でも宇佐浜遺跡(1989)等、貝塚時代中期の遺跡からも類例資料が出土する。

クガニ石

上辺に1～2 cm程の幅をもつ稜を有し、断面がピリケン形や倒卵形のをクガニ石として扱い、図68～70の3点出土した。図68は上部がやや薄手の資料で、上辺の稜が不明瞭で片面のみ研磨痕が窺える。図69は片側が半欠し、全体に表裏面が粗い印象で研磨面は確認できない。側面の形状からクガニ石と判断した。図70は破損が激しく、全体の形状やサイズは不明、側面や上辺の稜などからクガニ石に含めた。石質はひん岩で、鉋物のぬけた小穴が無数にみられ、研磨は表裏面に部分的に確認できる。上辺の稜部分は破損で不明だが下端部は厚手である。隣接する平安山原A遺跡で、一遺跡では出土量の少ないクガニ石が8点出土した。

チャート製品

楔形石器

楔形石器は通常、形状が縦長、或いは横長の上下端に両極剥離痕が見られる小型ものを楔形石器とする。今回の資料は形態が楔形状を呈す製品と考えられる資料でチャート素材である。HCⅤ層から1点出土した。図76は縦長の形状を呈し、側面の縁辺に細かい調整痕が窺えるが、加工が雑である。剥離痕は下端部の一箇所のみで、上端には認められないため模倣品の可能性もある。伊礼原E遺跡(2010・第126・127図)で楔形石器が出土しており縦長形状のタイプと類似する。チャート製品など小型利器は貝塚時代前期・中期に多く、貝塚時代後期やグスク時代の遺物と共伴する事は不自然な印象を受ける。土器に貝塚前期・中期の資料が僅かに出土し、それに伴う資料と思われる。

スクレイパー

搔器・削器を意味し、切る、削る等の用途をもつへら状の形態をスクレイパーとした。本資料もチャート素材でHCⅤ層から1点出土した。図77は形状が雫形を呈し厚みは薄く、ほぼ均一な形状を呈す。使用された形跡はなく縁辺部は細かく剥離調整を施す。伊礼原E遺跡(2010)でスクレイパーの出土が確認され、又、伊礼原遺跡(2007)では皮剥用の小型利器として石匙が出土した。計測値のサイズや重量を伊礼原E遺跡の資料と比較すると、類似する形状の資料が見受けられ遺物の帰属時期として古いタイプの資料である。

用途不明石器

形状やサイズも様々で、僅かに使用痕は残るが用途が特定できない資料を用途不明とした。HCではⅢ層から1点、V層1点、貝層Ⅲ群5層で1点、HB③ではSK32Ⅱc層1点、Ⅲ層1点、Ⅲb層2点の合計7点出土した。

図78は、大型の磨石状を呈す資料で、破損後の残存部は尚、通常の磨石の十数倍あると思われる。抱える程の大きさや重量から何らかの土台の上で転がすことは推測されるが、標準的な磨石と考えるには無理が生じるため用途不明とした。

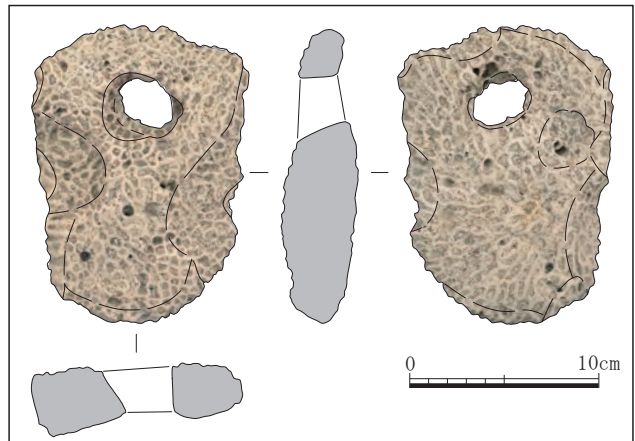
石球

形状や大きさの異なる石球が3点出土した。HCから2.5cm程度の資料が貝層Ⅲ群3層で1点、HB③のⅢ層から6cm台のものが1点、Ⅲc層で5cm台の資料が1点出土した。用途は首里城（1995・2001）で出土する石弾と同様のものと想定されるが点数が少ない為、詳細は不明である。類例資料、北谷城（2010・第40図13～15図）でも出土している。

サンゴ有孔製品

サンゴを素材にした製品と考えられる資料が1点出土した。層序も他の石器に比べ上層からの出土で、時期的に新しい遺物と考えられる。縦長の隅丸方形を呈し、上部に比べ下部が厚く又、左右の厚さは左が厚い。表裏面・両側面とも角がなく手慣れでざらつき感はない。表面は部分的に窪みが見られるが、裏面は平坦な面を呈す。

右図版に示すように上部中央に大きめの孔を穿つ資料で、孔の貫通する内面も若干丸みを帯びる。用途として戦前・戦後に小型の舟やサバニ等に用いる舟の錘として使用していた可能性が考えられる。計測値は最大長15.8cm、最大幅11.4cm、最大厚4.1cm、重量631g、上部中央の孔は縦2.5cm、横2.5cmを呈す。HC T13、近世層出土。



第98図・図版70 サンゴ有孔製品

第37表-1 石器 観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	器種	形態		完/破	サイズ	計測値				観察事項	石質	地区・グリッド・層 遺構・台帳(ドット)番号
			平面	側面			残存 長	残存 幅	残存 厚	重量			
第103 図・ 図版 73	19	敲石	Ⅳ類	厚手	完形	2類	8.8	5.5	5.1	310	状態:成形なし、転石を利用か? 敲打痕:表裏・両側面、5ヶ所に敲打	砂質石灰岩	HC B15 貝層Ⅲ群5 F3852
	20	敲石	Ⅴ類	厚手	完形	2類	9.4	5.8	5.3	382	状態:こぶ状に上下間は括れをつくる 敲打痕:上下端に敲打	砂岩	HC A16 貝層Ⅲ群5 F4112
	21	敲石兼磨石	Ⅳ類	厚手	完形	3類	8.4	6.2	5.2	433	状態:側面一部破損、上面に3面ほど面を成す 研磨:表裏面	砂岩	HC D12 V層 F3537
	22	磨石	Ⅳ類	厚手	破損	3類	8.6	4.8	4.7	243	研磨:表裏の2面に見られ浅い 側面:研磨に至らず	砂岩	HB③ 地区、グリッド不明 Ⅲc(7) F582
	23	磨石	Ⅰ類	厚手	破損	3類	6.9	6.8	4.6	322	形状:球状を潰した形 敲打痕:小さな範囲で中心にあり 研磨:表裏面中央、明瞭	斑岩	HB③ R5 Ⅲe(15) F2460
	24	磨石	Ⅲ類	厚手	完形	3類	8.1	6.2	3.8	280	状態:破損資料の二次使用 研磨:全面にあり、3カ所・特に明瞭	砂岩	HB③ R5 Ⅲe(15) F2461
	25	磨石	Ⅴ類	厚手	完形	3類	7.3	6.1	5.8	377	形状:変形たご状、4面体を成す 研磨:浅く平坦面を作る	砂岩	HC S14 貝層Ⅲ群5 F4316
26	磨石	Ⅲ類	厚手	完形	3類	8.2	6.7	4.9	361	状態:一部欠けを生じる 敲打痕:下面敲打 研磨:表裏面明瞭	砂岩	HC C16 V(後期層) F2891	

第37表-2 石器 観察一覧

(質量単位:cm, g)

第図版	図番号	器種	形態		完/破	サイズ	計測値				観察事項	石質	地区・グリッド・層遺構・台帳(ドット)番号
			平面	側面			残存長	残存幅	残存厚	重量			
第104図・図版74	27	敲石兼磨石	Ⅲ類	薄手	完形	2類	9.5	5.8	3.0	248	状態:両面一部欠け 敲打痕:表裏面中央に2cm台の範囲 側面:一部面を作る、研磨:良好	砂岩	HC D16 V(後期層) F4799
	28	敲石兼磨石	Ⅵ類	厚手	破損	3類	8.0	6.0	4.1	288	状態:裏面大きく破損 窪み:表面中央、深さあり 研磨:良好	砂岩	HC T12 V(後期層) F3025
	29	敲石兼磨石	Ⅲ類	薄手	完形	2類	10.0	6.8	3.4	349	状態:一部欠け 敲打痕:両面とも中央に2cm台の敲打 研磨:表裏面とも浅い	砂岩	HC S14 貝層Ⅲ群2 F4069
	30	敲石兼磨石	Ⅰ類	厚手	完形	3類	7.7	7.8	4.3	407	敲打痕:どちらにも中央に2cm台の敲打 研磨:表裏面とも明瞭	花崗岩	HC D11 V(後期層) F2020
	31	敲石兼磨石	Ⅲ類	厚手	完形	2類	9.4	7.6	6.2	694	状態:破損品の再利用? 窪み:上面、深い 研磨:側面周縁	片状砂岩	HC A16 貝層Ⅲ群5 F3874
	32	敲石兼磨石	Ⅱ類	厚手	破損	2類	10.5	10.0	7.8	880	敲打痕:表面中央に3cm台の範囲 研磨:敲打周囲は浅く、離面もあり、状態:二次使用? 擦痕:側面・周縁に一週する	砂岩	HC D12 V(後期層) F651
第105図・図版75	33	敲石兼磨石	Ⅲ類	厚手	完形	3類	8.4	7.6	4.8	559	敲打痕:表面中央に敲打 研磨:表裏面研磨あり 擦痕:側面・周縁に一週する	輝石角閃石安山岩	HC D15 V(後期層) F2959
	34	磨石	Ⅲ類	厚手	破損	2類	9.9	6.4	5.0	420	状態:原型1/2程度の大きさ 側面:角が丸みを帯びる程度 研磨:表裏面に浅く確認	砂岩	HB③ S9 Ⅲc(7) F 387
	35	磨石	Ⅲ類	厚手	完形	3類	8.2	7.8	4.9	660	敲打痕:上面・下面に細かい敲打 研磨:表裏面かなり明瞭、中央に稜が2カ所確認	斑レイ岩	HC B16 V(後期層) F2468
	36	敲石兼磨石	Ⅵ類	厚手	破損	2類	11.2	5.6	5.5	600	研磨面:全体に突出部研磨 敲打痕:側面1カ所	斑レイ岩	HB③ A6 Ⅲb(5) F52
	37	敲石兼磨石	V類a	厚手	完形	2類	9.0	8.8	5.4	712	敲打痕:裏面に2cm台の敲打、右側面・下面もあり 研磨:裏面、敲打の周囲、表面は得に明瞭	輝石角閃石安山岩	HC T14 貝層Ⅲ群5 F4451
第106図・図版76	38	敲石兼磨石	V類a	厚手	完形	2類	11.7	8.9	5.2	974	状態:一部欠けを生じる 研磨:表裏面かなり明瞭 敲打:上下・側面中央に浅くあり	砂岩	HC 表土掘削時一括 台9186
	39	敲石兼磨石	Ⅵ類	厚手	破損	2類	9.4	8.4	7.4	710	使用痕:多面的 研磨:明瞭な箇所が1面 擦痕:数カ所あり	斑岩	HB③ A17 Ⅲd(14) F2543
	40	磨石	Ⅵ類	厚手	完形	2類	9.7	8.5	7.2	879	状態:破損品を再利用か、多角形を成す 研磨痕:六面のうち四面に磨り	斑レイ岩	HC D12 V(後期層) F2515
	41	敲石兼磨石	Ⅲ類	厚手	破損	1類	14.4	9.9	7.1	1,464	形状:全体に丸味を帯びる 敲打痕:裏面・側面周縁全面	砂岩	HC D13 V(後期層) F1986
第107図・図版77	42	磨石	Ⅲ類	厚手	完形	1類	13.9	9.6	6.0	1,143	状態:形状整う 研磨面:一部残存、風化で全体の鉱物が抜け脆い状態	花崗岩	HC B11 V(後期層) 台9102
	43	磨石	Ⅲ類	厚手	破損	3類	7.4	8.4	5.7	547	状態:残存部1/2程度 敲打痕:下面敲打、表裏面、含まれる鉱物が関係、かなり明瞭	石英片岩	HC T15 貝層Ⅲ群5 F4309
	44	磨石	Ⅲ類	厚手	破損	2類	9.2	9.1	5.4	696	敲打痕:明瞭には認められず 研磨:表裏面、明瞭	片状砂岩	HC A15 貝層Ⅲ群3 F3343
	45	磨石	Ⅲ類	厚手	完形	2類	11.5	9.7	5.6	1,030	研磨:表裏面かなり明瞭 擦痕:側面周縁に有り	砂岩	HC S14 貝層Ⅲ群2 F4036
	46	敲石兼磨石	Ⅲ類	厚手	破損	2類	11.8	8.5	6.0	760	状態:斜位に大きく破損 研磨:全面、特に表面は明瞭	輝石角閃石安山岩	HC グリッド 層序不明 F1202
第108図・図版78	47	磨石	Ⅲ類	厚手	破損	1類	14.5	8.7	6.8	1,082	形状:1/3破損 研磨:表裏面中央は明瞭、側面まで至らず	片状砂岩	HC B15 貝層Ⅲ群 F3723
	48	敲石兼磨石	Ⅲ類	厚手	完形	2類	12.8	9.4	6.8	1,259	状態:上・下は自然面を成す 窪み:両側面に小さく2カ所ずつ確認 研磨:表裏面は明瞭	砂岩	HC S14 貝層Ⅲ群5 F4756
	49	磨石	Ⅲ類	厚手	完形	2類	10.8	8.1	6.6	960	形状:たまご形、部分的に面を成す 擦痕:上下面にあり 研磨:良好	輝緑岩	HC D12 V(後期層) F3561
	50	磨石	Ⅲ類	厚手	完形	1類	11.6	10.0	7.9	1,310	形状:全体に丸味 研磨:全面に見られ表裏面は特に明瞭	砂岩	HC A16 貝層Ⅲ群5 F4182
第109図・図版79	51	敲石	V類	厚手	完形	1類	13.6	9.7	8.6	1,430	形状:転石を利用か 敲打:敲打が中央を一周、下面もあり	砂岩	HC A15 貝層Ⅲ群5 台9205
	52	敲石兼磨石	V類b	厚手	破損	2類	10.8	8.7	4.6	628	形状:全体に丸味帯びる 敲打痕:上下面に敲打 窪み:両側面に軽いソッチあり 研磨:表裏面に浅く確認	礫質砂岩	HC A15 貝層Ⅲ群5 F4177
	53	敲石兼磨石	V類b	厚手	完形	2類	12.7	9.1	5.6	1,110	敲打痕:表裏面中央、浅い 研磨:両面とも明瞭 両側面:ノッチ状の窪み	砂岩	HC T15 貝層Ⅲ群2 F4793
	54	敲石兼磨石	V類b	厚手	完形	1類	13.9	11.5	4.6	1,163	敲打痕:両面中央に3cm台の範囲 窪み:両側面ノッチあり 研磨:表裏面良好	礫質砂岩	HC S14 貝層Ⅲ群4 F4199
	55	敲石兼磨石	Ⅲ類	厚手	完形	1類	15.3	11.3	5.7	1,545	状態:表面丸味を帯び 敲打痕:中央に4cm台の範囲 両側面:擦痕と敲打 研磨:良好、裏面平坦で研磨あり	礫質砂岩	HC A15 貝層Ⅲ群5 F4001

第37表-3 石器 観察一覧

(質量単位: cm, g)

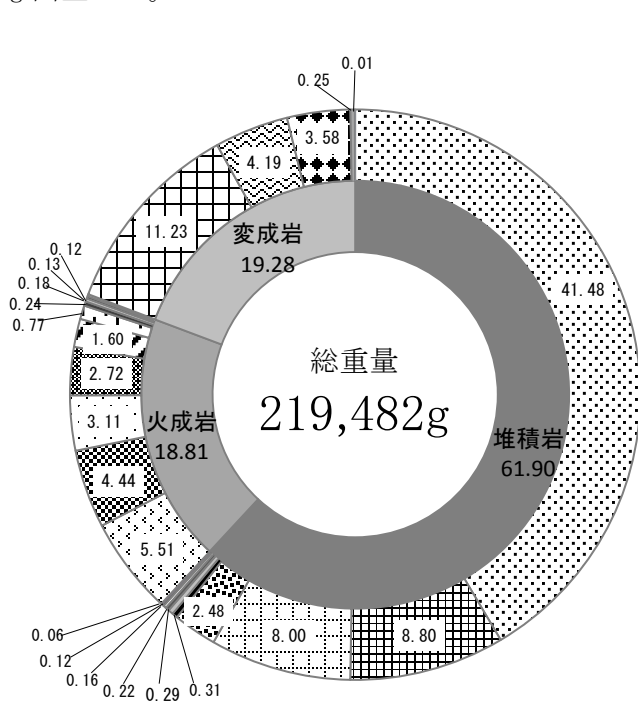
第図 図版	図 番号	器種	形態		完/破	サイズ	計測値				観察事項	石質	地区・グリッド・層 遺構・台帳(ドット)番号
			平面	側面			残存 長	残存 幅	残存 厚	重量			
第110 図・ 図版 80	56	磨石	Ⅲ類	厚手	完形	2類	11.0	8.5	5.9	928	横断面: 三角形で陵を作る 研磨: 3面かなり明瞭 敲打痕: 部分的に残る	輝緑岩	HC A15 貝層Ⅲ群2 F3623
	57	敲石兼磨石	Ⅲ類	厚手	完形	2類	11.6	9.3	6.9	1,140	横断面: 三角形・陵をつくる、多孔質、角閃石のぬけた穴が全面にあり 研磨: 一面のみ	輝石角閃石安山岩	HC A15 貝層Ⅲ群5 F4004
	58	敲石兼磨石	Ⅵ類	厚手	完形	2類	12.4	8.0	7.7	1,315	形状: 横断面は4面体やや台形に近い 窪み: 側面一方所ノッチあり 研磨: かなり明瞭	輝緑岩	HB③ B5 Ⅲb(5) F315
	59	磨石	Ⅲ類	厚手	破損	2類	11.5	7.7	5.2	650	残存部: 原型2/3程度 研磨: 全体的に浅い 打割: あり	砂岩	HB③ R10 Ⅲd(14) F2084
第111 図・ 図版 81	60	敲石兼磨石	Ⅲ類	厚手	破損	2類	14.0	8.9	7.3	1,229	状態: 残存1/3程度破損 研磨: 表裏面あり、良好 敲打痕: 表面・側面中央に敲打	片状砂岩	HC D11 V(後期層) F3454
	61	敲石兼磨石	Ⅲ類	厚手	破損	2類	13.0	11.0	9.4	1,167	状態: 1/2程度 横断面: 三角形で陵をつくる 研磨: 表裏面に確認	砂岩	HC C13 V(後期層) F2545
	62	磨石	Ⅴ類	厚手	完形	1類	16.7	10.1	7.6	1,830	形状: 変形三角形、角はなく、丸み帯びる 下面形態: 三角形 研磨: 部分的に滑沢	輝石角閃石安山岩	HB③ C8 Ⅲ(13) F2096
第112 図・ 図版 82	63	磨石	Ⅵ類	厚手	破損	1類	14.8	9.5	9.3	1,892	サイズ: 原形推測不可、残存形態より、かなり大型と推測 使用痕: 研磨後に擦りの痕跡	砂岩	HC C16 V(後期層) F2750
	64	磨石	Ⅵ類	厚手	破損	2類	12.8	9.2	6.3	933	形状: 1/2残存、全体に丸味を帯びる 研磨: かなり明瞭 裏面: 平坦面を成し、陵をつくる	片状砂岩	HC A4 T13 貝層Ⅳ群 I層 F3655
	65	用途不明石器	分銅形	厚手	破損	大型	11.2	11.6	4.0	766	形状: 末広がり分銅形を呈す 窪み: 両側面に歪なノッチ 研磨: 表裏面にあり	輝緑岩	HB③ C・D4 IIc SK032 台587
	66	磨石	Ⅱ類	厚手	完形	1類	15.6	13.8	13.6	4,500	形状: かなり大型、ほぼ球状を呈し、8cm四方の平坦面を1ヶ所確認	ひん岩	HC T15 貝層Ⅲ群 5 F4820
第113 図・ 図版 83	67	円盤状石器	円形	厚手	完形	中型	11.2	10.4	3.8	550	打割: 裏面に細かい打割、側面周縁を円状に整えた痕跡 研磨痕: 表面一面に確認、多少劣化	片状砂岩	HC S14 貝層Ⅲ群 5 F4570
	68	クガニ石	長楕円形	厚手	完形	大型	17.9	10.2	6.4	1,628	形状: 横断面は隅丸三角形 研磨: 一面のみ	砂岩	HC B14 V(後期層) F504
	69	クガニ石	楕円形	厚手	破損	大型	15.6	11.4	6.5	1,830	形状: 原形の2/3程度残存、下部も一部欠け 敲打痕: 上部の稜を成す部分に確認	砂岩	HC I(攪乱) 台9185
	70	クガニ石	長楕円形	厚手	破損	大型	13.0	9.9	6.7	1,060	形状: 原形1/3程度残存 研磨: 表裏面の二面・良好、多孔質で鉱物がかなり抜けた状態	ひん岩	HC I(表探) E15 台9188
第114 図・ 図版 84	71	台石	方形	厚手	完形	中型	10.4	9.9	8.3	1,561	形状: 養子状四角形を呈す 使用面: 2面 敲打: 中央に浅くあり 研磨: 表裏面平坦で良好	片状砂岩	HC A15 貝層Ⅲ群5 F4753
	72	台石	三角形	厚手	破損	大型	12.6	11.3	8.6	1,600	状態: 1/3欠け 敲打痕: 一面は2cm台の浅い敲打 研磨: 三面あり明瞭	砂岩	HC A16 貝層Ⅲ群5 F4250
	73	砥石	棒状	厚手	破損	中型	12.5	4.2	2.7	255	状態: 上端は面を成す 打割: 下面 厚さ: 細長く平均的	輝緑岩	HB③ T6 Ⅲ(12) 台884
	74	砥石	不定形	厚手	破損	不明	10.0	5.2	4.1	253	使用痕: 表裏面に確認 研磨: 使用頻度は低く、浅い研磨痕	礫質砂岩	HB③ C1 Ⅲ(12) 台948
	75	砥石	略方形	厚手	破損	不明	9.5	7.7	3.2	357	使用痕: 表裏・両面使用 研磨: 中央が緩く擦る減る	砂岩	HC A16 貝層Ⅲ群5 F4747
	76	楔形石器	縦長形	厚手	完形	小型	2.8	2.3	1.4	9	加工痕: 成形痕あり 色調: 淡緑色 敲打痕: 下端部のみ	チャート	HC T14 V(後期層) F1885
	77	スクレイパー	雫形	薄手	完形	小型	5.4	3.8	1.2	24	状態: 全体につくりが丁寧 剥離調整: 左側面は薄い 色調: 灰緑色	チャート	HC D14 V(後期層) 台9131
第115 図版 85	78	用途不明石器	長楕円形	厚手	破損	大型	26.0	18.5	14.8	9,200	状態: 破損状態で、かなり重量あり 使用痕: 敲打・研磨ほぼ全面	斑岩	HC B15 Ⅲ(グスク) F3324
第116 図版 86	79	石皿	長方形	厚手	完形	大型	23.6	14.4	4.2	1,813	成形: 痕跡なし、表面中央が縦長に反る 使用面: 1面のみ確認	シルト岩	HC A15 貝層Ⅲ群5 F3968
	80	石皿	不定形	厚手	破損	大型	27.0	17.5	8.7	5,900	状態: 表面中央は明瞭、裏面やや浅い 使用痕: 表裏、両面使用	砂岩	HC B16 貝層Ⅲ群5 F3888
	81	石皿	不定形	厚手 板状	破損	大型	38.0	28.0	5.4	7,800	状態: 離面若干反りぎみ 使用痕: 二面 研磨: 表面平坦、全体に研磨 剥離: 部分的	黒色片岩	HC A15 貝層Ⅲ群 5 F4000
第117 図版 87	82	石皿	不定形	厚手 板状	破損	大型	52.0	37.0	7.6	17.5kg	使用痕: 表面のみ 研磨: 中央から、縦方向の広範囲に平坦な研磨	シルト岩	HC C15 V(後期層) F4329

<石質>

今回の調査で石器 344 点、石材 385 点、自然礫 513 点の総数 1,242 点が出土した。自然礫にはサンゴ砂利由来の小礫や石灰岩、ビーチロックの岩塊も含まれている。石灰岩・貝化石・サンゴ塊など脆く石器の素材に不適當な破片、剥離し易い資料は集計から除外した。

又、素材として不純物の多い石英礫も出土したが、これらのうち手を加えられた痕跡のある石器のみ抜き出し同定を行った。

第 99 図に石器に使用された全ての岩石組成を系統別に示した。成り立ちから 3 系統に分類され、堆積岩系が 10、火成岩系 10、変成岩系 5 の 25 種類が出土した。石器は約 220kg のうち堆積岩系が 61.92% を占め、火成岩系・変成岩系の割合は約 19% である。全体では堆積岩系の砂岩が約 91kg で 41.48% を占め、これに次ぐ変成岩系の片状砂岩 11.23% と 2 種類で全体の 5 割を超す。上位 5 位までに砂岩、片状砂岩、シルト岩、細粒砂岩、はん岩が並び比率は 10% 未満と少ないものも認められるが、重量は各々 10kg 以上と多い。特に、はん岩は北谷町で産出されない火成岩系に属す一種で約 12kg 出土した。



第99図 石器 石質組成

全体に占める火成岩系の割合ははん岩以外では、比率にして 5% 未満と少ないが火成岩系の合計では 18.82% と約 2 割近い。

第 38 表に岩石学で区分される分類を簡素化しまとめた。系統により岩石の成り立ちは各々場所や条件で、成り立ちに違いがある。

今回、石器で確認された堆積岩系の種類は沖縄本島で一般的に得ることができる。特に砂岩は石器の様々な器種に多用され、なかには均一な石英粒が鉱物として多く含まれる個体ほど、使用痕の研磨が滑沢になると考えられる。磨石など一部の資料で使

第38表 岩石の性質と分類

系統	石質	%
堆積岩系 61.90%	砂岩	41.48
	シルト岩	8.80
	細粒砂岩	8.00
	礫質砂岩	2.48
	石灰岩	0.31
	現生サンゴ片	0.29
	砂質石灰岩	0.22
	石英礫	0.16
	チャート	0.12
	サンゴ礫か?	0.06
火成岩系 18.81%	はん岩	5.51
	輝石角閃石安山岩	4.44
	斑レイ岩	3.11
	ひん岩	2.72
	玄武岩	1.60
	花崗岩	0.77
	角閃石安山岩	0.24
	石英安山岩	0.18
	斜長はん岩	0.13
	花崗はん岩	0.12
変成岩系 19.28%	片状砂岩	11.23
	輝緑岩	4.19
	黒色片岩	3.58
	石英片岩	0.25
	角閃岩	0.01

<鉱物>

<火成岩>

1 深成岩	花崗岩、閃緑岩など
2 半深成岩	石英はん岩、ひん岩など
3 火山岩	流紋岩、安山岩など
4 火砕岩	細粒凝灰岩、シルト質凝灰岩

<堆積岩>

1 碎屑性堆積岩	シルト岩、細粒砂岩など
2 生物的・科学的堆積岩	
a. 炭酸塩岩	石灰岩、苦灰岩など
b. 珪酸が主成分	チャートなど
c. 金属酸化物が主成分	マンガンジュールなど
d. 炭素が主成分	石炭など

<変成岩>

1 接触変成岩	緑色岩、珪灰岩など
2 広域変成岩	
a. 堆積岩起源	粘板岩、石英片岩など
b. 火成岩起源	緑色千枚岩、輝緑岩など
3 破碎変成岩	破碎礫岩など

用頻度の高いものは、その傾向が見受けられる。

変成岩系の種類も本島で産出されるものの一種で片状砂岩など調査毎に砂岩と同程度の比率で石器に使用される。火成岩系の種類は沖縄本島周辺では久米島、石垣島、西表島が上げられるが、沖縄本島で産出することは極めて稀で、火成岩系の産出される候補は本島中部に最も近い徳之島が可能性として高い。

第39表に出土量の多い6器種の重量を、第100図にその重量比を示した。石斧は25点の出土で6種類認められた。最も多い素材は砂岩で14点の62.15%を占める。重量比の多い順では斑レイ岩が点数2点、輝緑岩・片状砂岩は同率に近く10%台で輝緑岩は4点、片状砂岩は3点である。黒色片岩の1点と角閃岩の破片1点は1%に満たない。石斧に最も多用される輝緑岩は今回少ない。

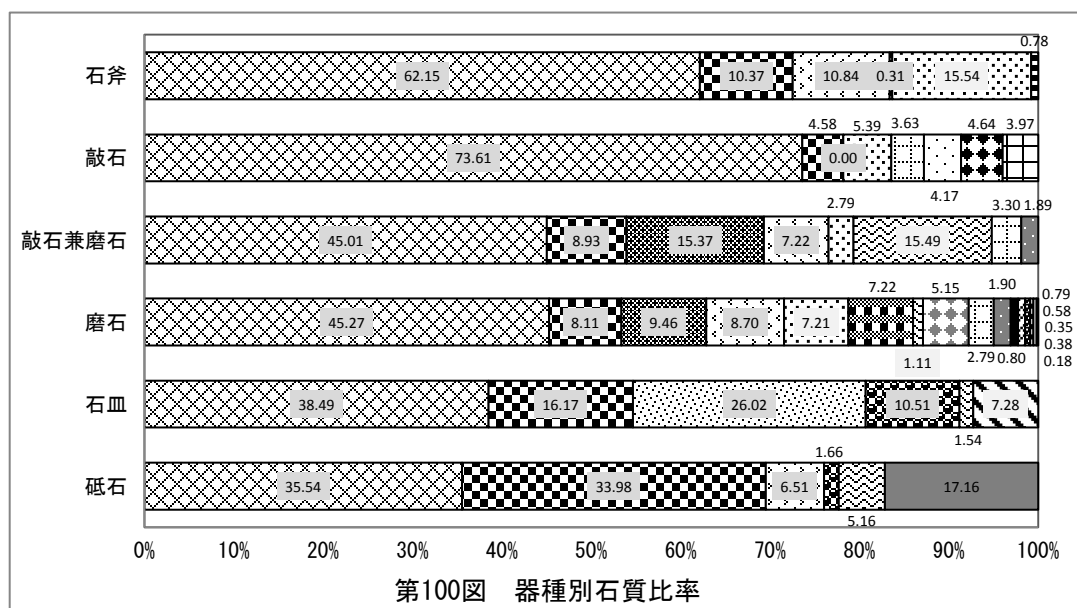
敲石は20点のうち7種類確認された。砂岩の14点が最も多く73.61%を占め、その他の種類は殆ど10%以下である。そのうち火成岩系は斑レイ岩が1点、斜長はん岩1点、はん岩1点の3種類である。変成岩系は片状砂岩の1点で1種類である。堆積岩系は石英礫1点、砂質石灰岩1点と、先に挙げた砂岩の3種類が確認された。

敲石兼磨石は30点出土、8種類が認められた。その中で多いものは砂岩14点で45.01%を占める。次に礫質砂岩3点15.49%、輝石角閃石安山岩5点の15.37%と殆ど同率である。以下、片状砂岩2点、輝緑岩3点、はん岩1点、斑レイ岩1点、花崗岩1点で10%に満たない。これらのうち火成岩系は4種類、変成岩系2種類、堆積岩系2種類が確認された。

第39表 器種別使用岩石

(法量単位:g)

石質	砂岩	片状砂岩	シルト岩	輝石角閃石安山岩	輝緑岩	黒色片岩	斑レイ岩	ひん岩	礫質砂岩	細粒砂岩	玄武岩	はん岩	花崗岩	石灰岩	石英片岩	角閃石安山岩	砂質石灰岩	石英安山岩	石英礫	斜長はん岩	チャート	花崗はん岩	サンゴ礫か?	角閃岩	合計	
石斧	2,391	399			417	12	598																	30	3,847	
敲石	5,468	340					400					270					310		345	295						7,428
敲石兼磨石	9,693	1,923		3,311	1,555		600		3,336			710	407													21,535
磨石	30,771	5,511		6,433	5,914		4,901	4,910	755		3,500	1,896	1,289		547	534			395		235	255	121		67,967	
石皿	28,569	12,000	19,313			7,800			1,140	5,400															74,222	
砥石	1,392	1,331			255	65			202					672											3,917	
合計	78,284	21,504	19,313	9,744	8,141	7,877	6,499	4,910	5,433	5,400	3,500	2,876	1,696	672	547	534	310	395	345	295	235	255	121	30	178,916	



磨石は216点で16種類認められた。砂岩が最も多く127点で45.27%を占める。次に点数10点～20点台、比率10%未満では輝石角閃石安山岩が12点、比率で9.46%と砂岩に次いで多い。輝緑岩は24点、斑レイ岩15点で片状砂岩も点数11点、8.11%と輝緑岩の次に多い。又、点数10点以下、比率10～1%は、ひん岩2点、玄武岩1点、はん岩6点、花崗岩2点、礫質砂岩が3点、点数10点以下の1%未満は石英片岩1点、角閃石安山岩5点、石英安山岩3点、花崗斑岩1点、チャート2点、サンゴ礫1点である。火成岩系は9種類、変成岩系3種類、堆積岩系4種類である。

石皿は14点出土し6種類認められた。石皿に使用された素材は砂岩が最も多く8点の出土で38.49%である。次いでシルト岩2点、片状砂岩1点の3種類が重量で上位を占め、10kgを超える。重量10kg以下は黒色片岩1点、細粒砂岩1点、礫質砂岩が1点である。火成岩系は石皿に認められず変成岩系が2種類、堆積岩系は4種類認められた。

砥石は15点の出土で6種類が使用されている。砂岩は9点で35.54%、片状砂岩が2点で33.98%と点数に違いはあるものの重量比ではほぼ等しい。その他、石灰岩は1点、比率にして10%台、輝緑岩1点、礫質砂岩1点、黒色片岩1点は10%未満である。砥石も火成岩系の種類はなく、変成岩系3種類、堆積岩系3種類が認められた。

小結

本調査で出土した石器はまず、石斧の量自体が少ない。破損資料が目立ち、基部や刃部形態など分類できる資料が少ない為、形態では分類不可の資料が多い。刃部形態のみで判断できるものは、極力分類を行った。形態は左右アンバランスなものや、作りが雑な資料もあり摩滅が著しい。判別のできる範囲で中型石斧、小型石斧などが少量出土し、刃部も破損資料だが両刃、片刃が認められる。又、沖縄本島以外から持ち込みと考えられる石斧も今回は出土していない。石器で時期の判断できる主な器種は石斧のみで、敲打器類はグスク時代まで使用されたと推測される。貝塚時代後期に石斧が減少する理由が、何らかの影響と関係があると思われる。

石質に関して通年の報告では石斧に使用される素材は、輝緑岩が最も多く確認されるが、今報告は火成岩系の割合が少なく砂岩、片状砂岩など地元で容易に手に入る素材が多い。石斧の減少と火成岩系の割合が減る現象の因果関係を検証する必要がある。

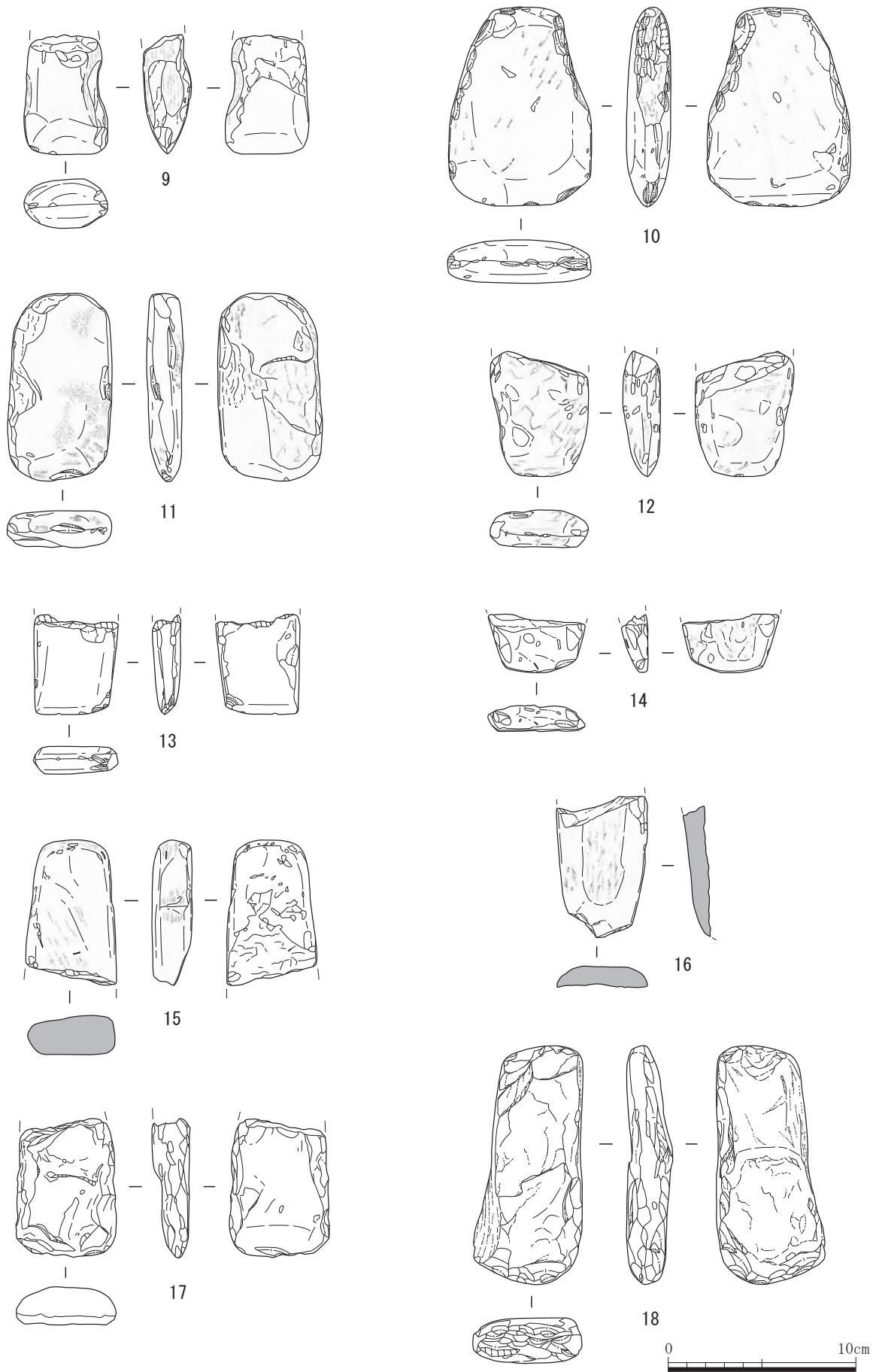
相反して敲打器類は数量が最も多い。一般的な形態の他、敲石兼磨石や磨石に、横断面の形状が三角形の資料が幾つか出土した。図56～62は下面観の形状が三角形を呈す特徴的な資料である。類例資料として小堀原遺跡(2012)、伊礼原A遺跡(2014)、宇佐浜遺跡(1989)や清水貝塚(1989)等で出土している。又、石英の剥片石器がサキタリ洞穴(2014)で出土し、加工に不適当な石英も、チャート同様に石器の素材になり得ると思われた。参考に重さを計量した結果、チャート1.7kg、石英が1.3kg出土した。



第101图 石器1



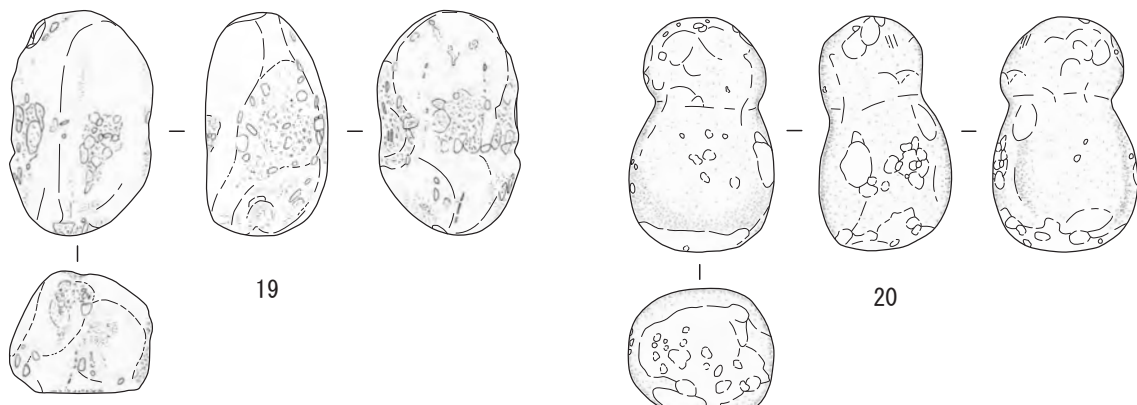
图版 71 石器 1



第 102 图 石器 2

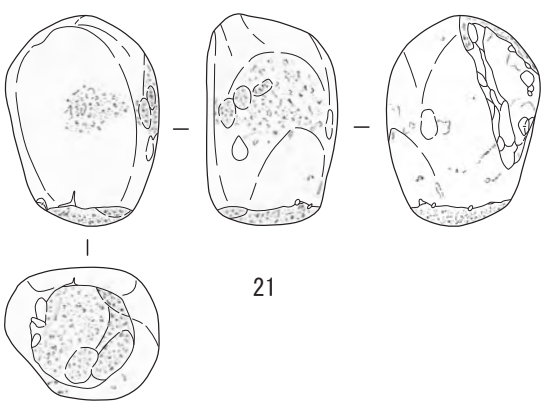


图版 72 石器 2

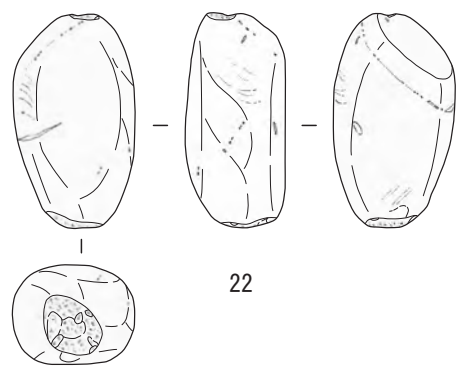


19

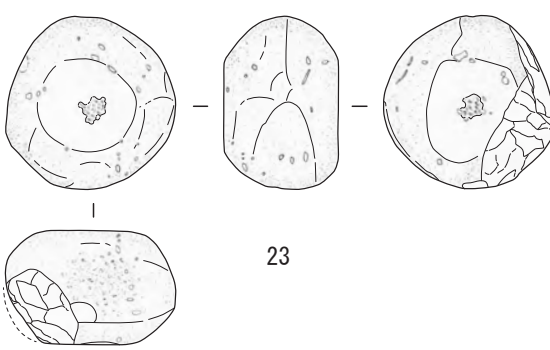
20



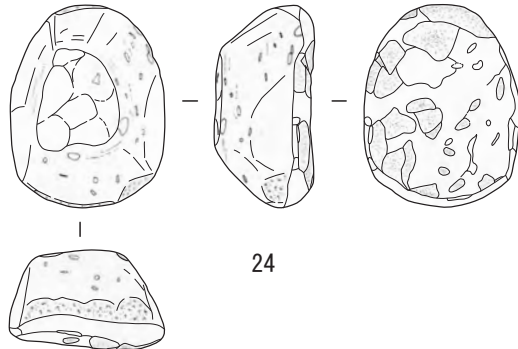
21



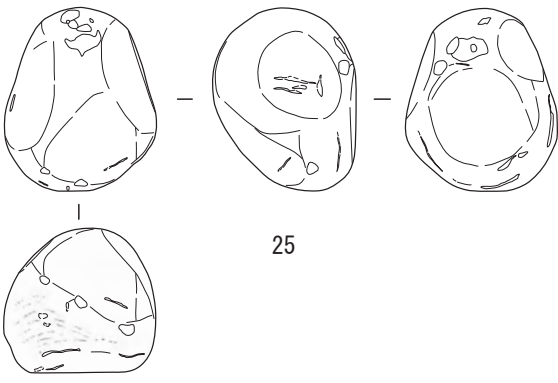
22



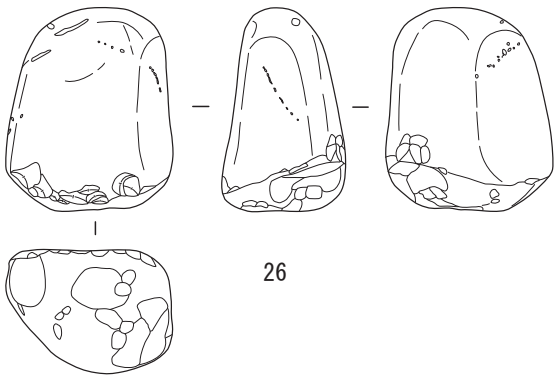
23



24



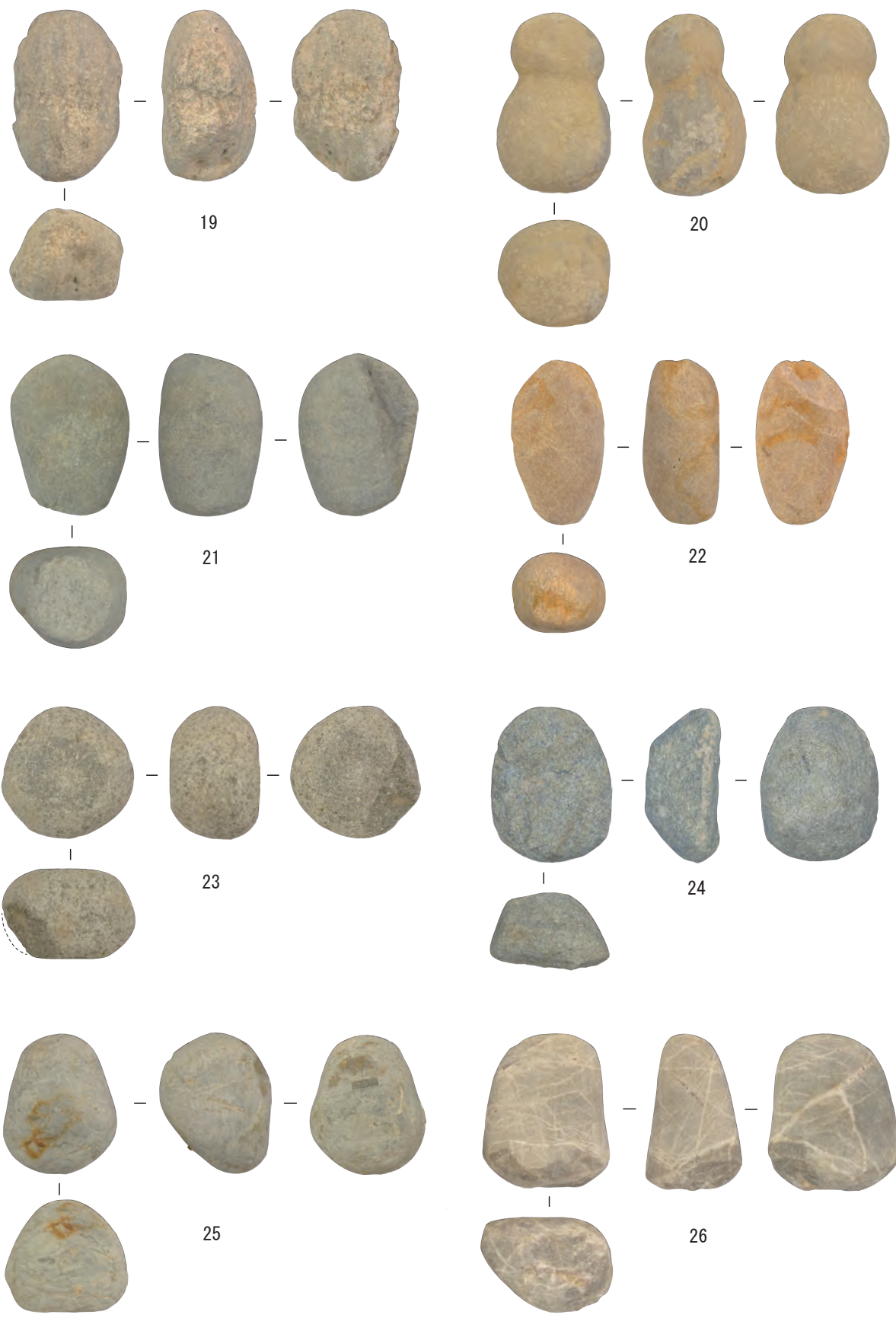
25



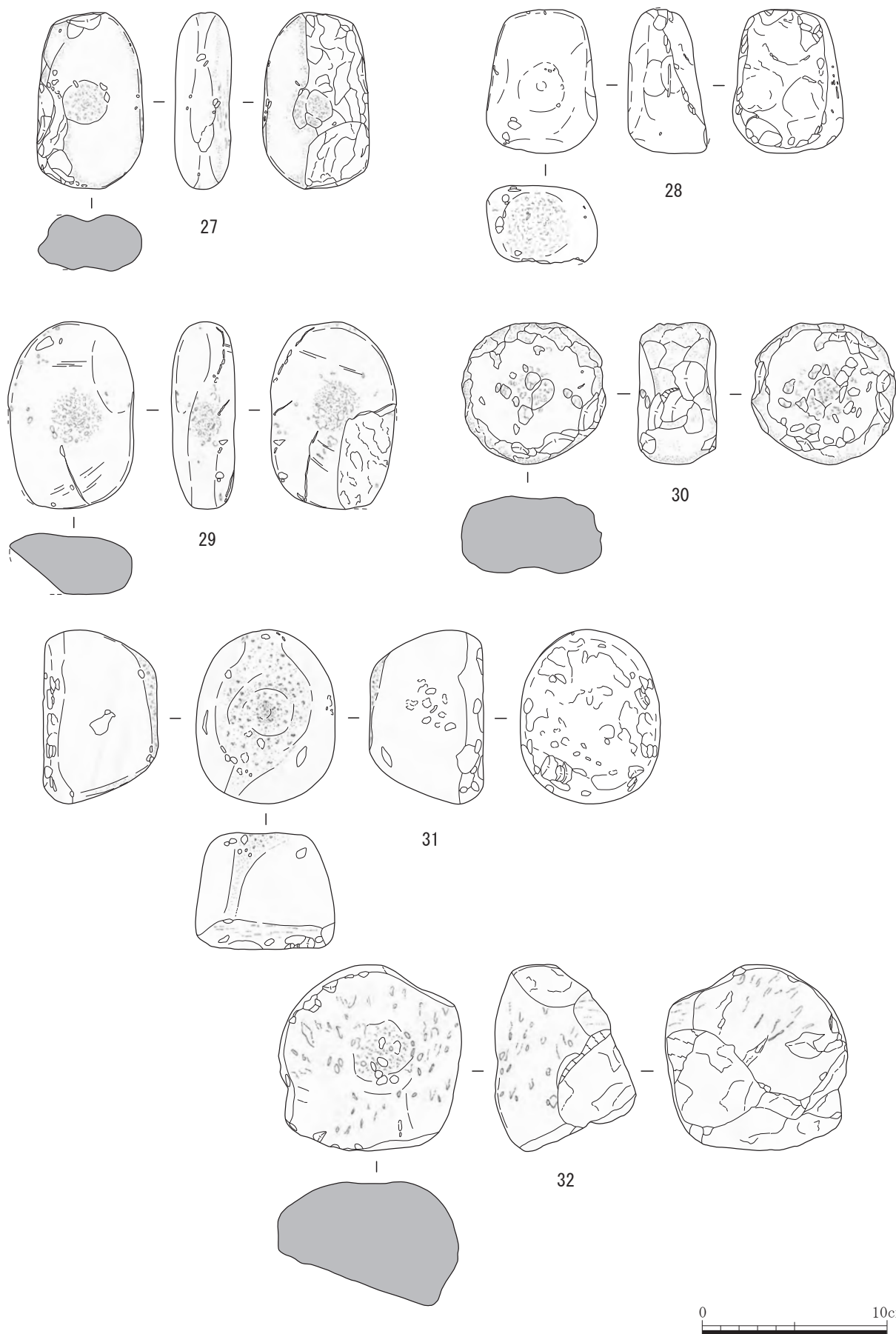
26



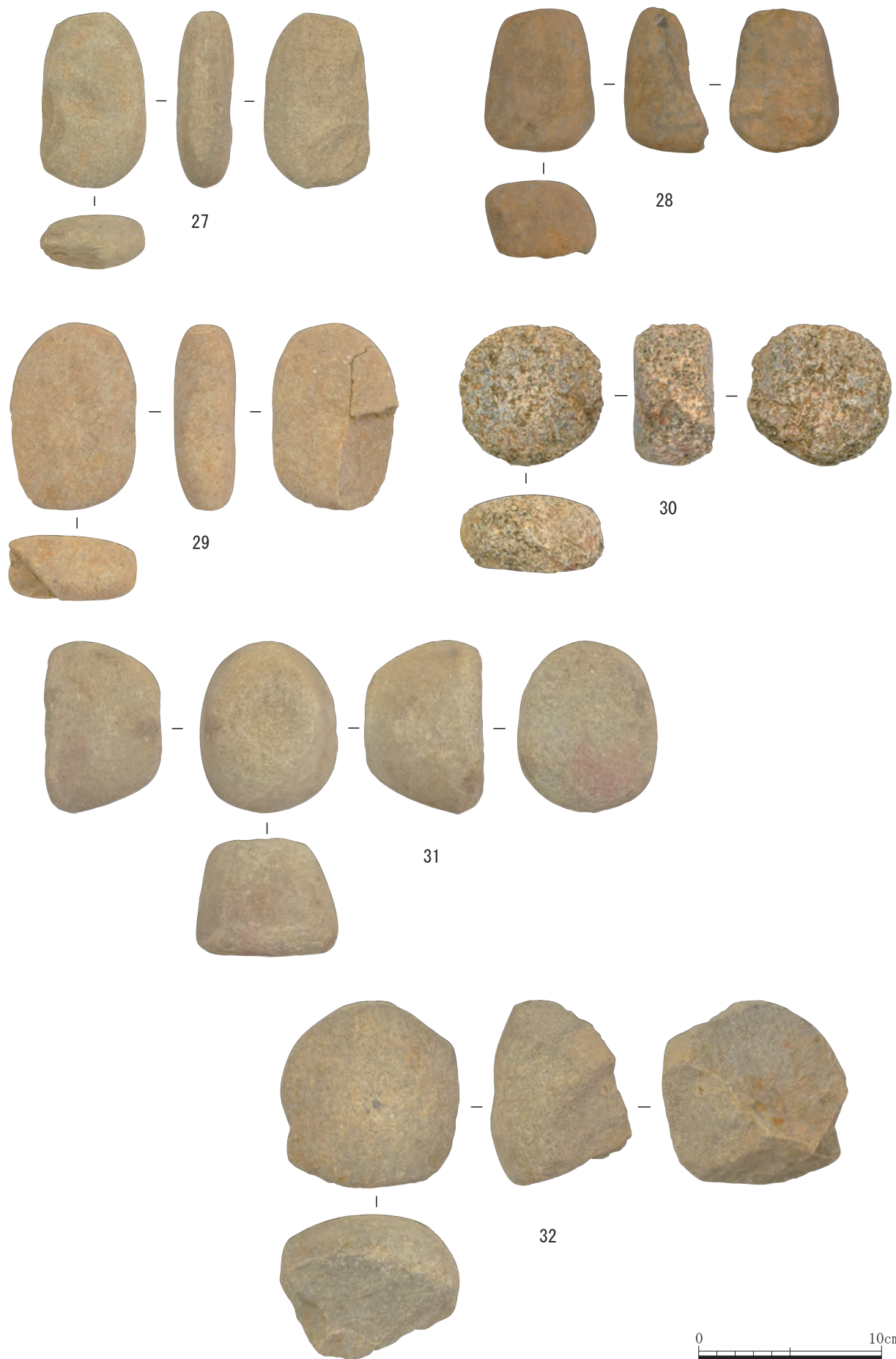
第 103 图 石器 3



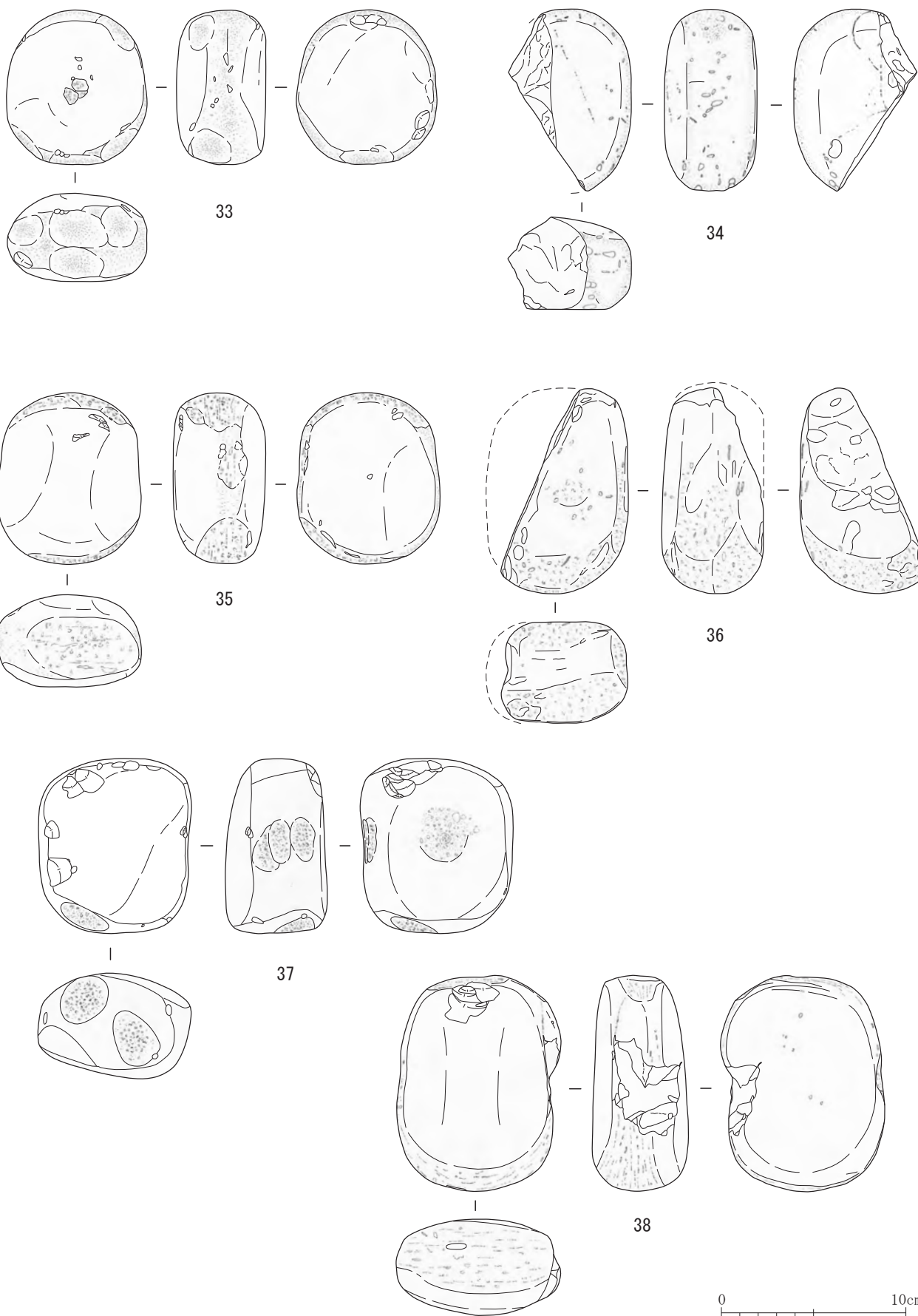
图版 73 石器 3



第104图 石器4



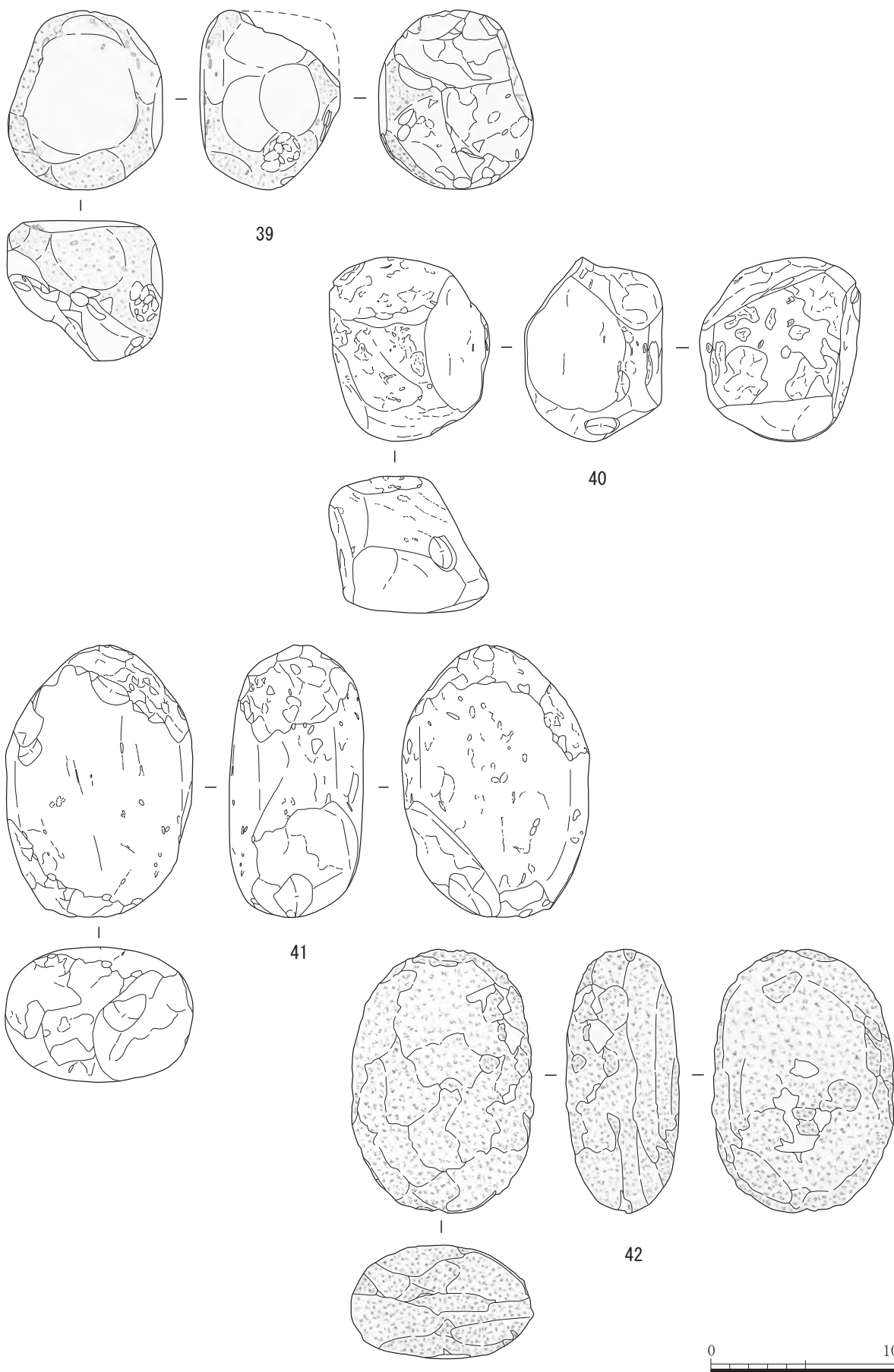
图版 74 石器 4



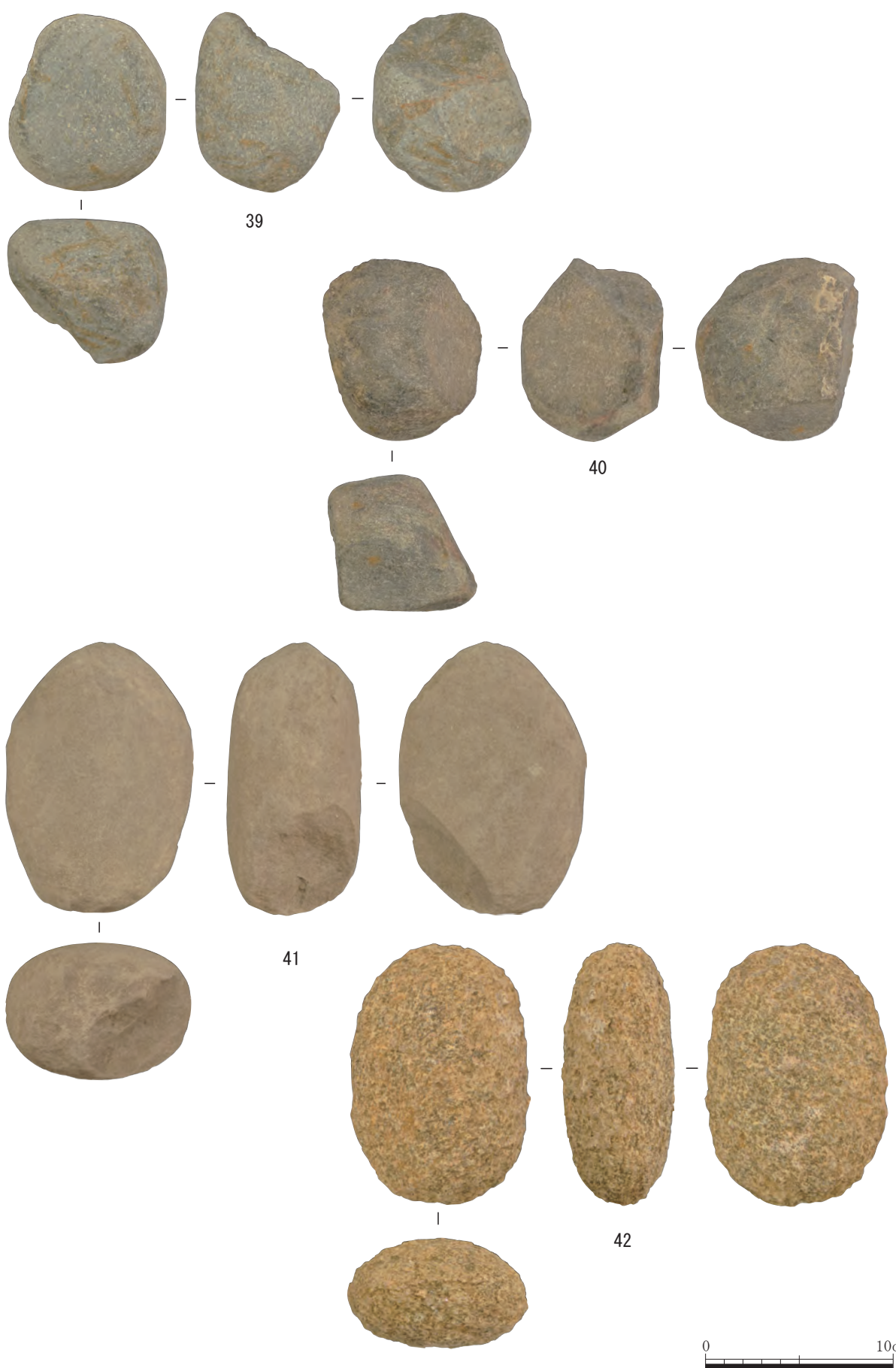
第105图 石器5



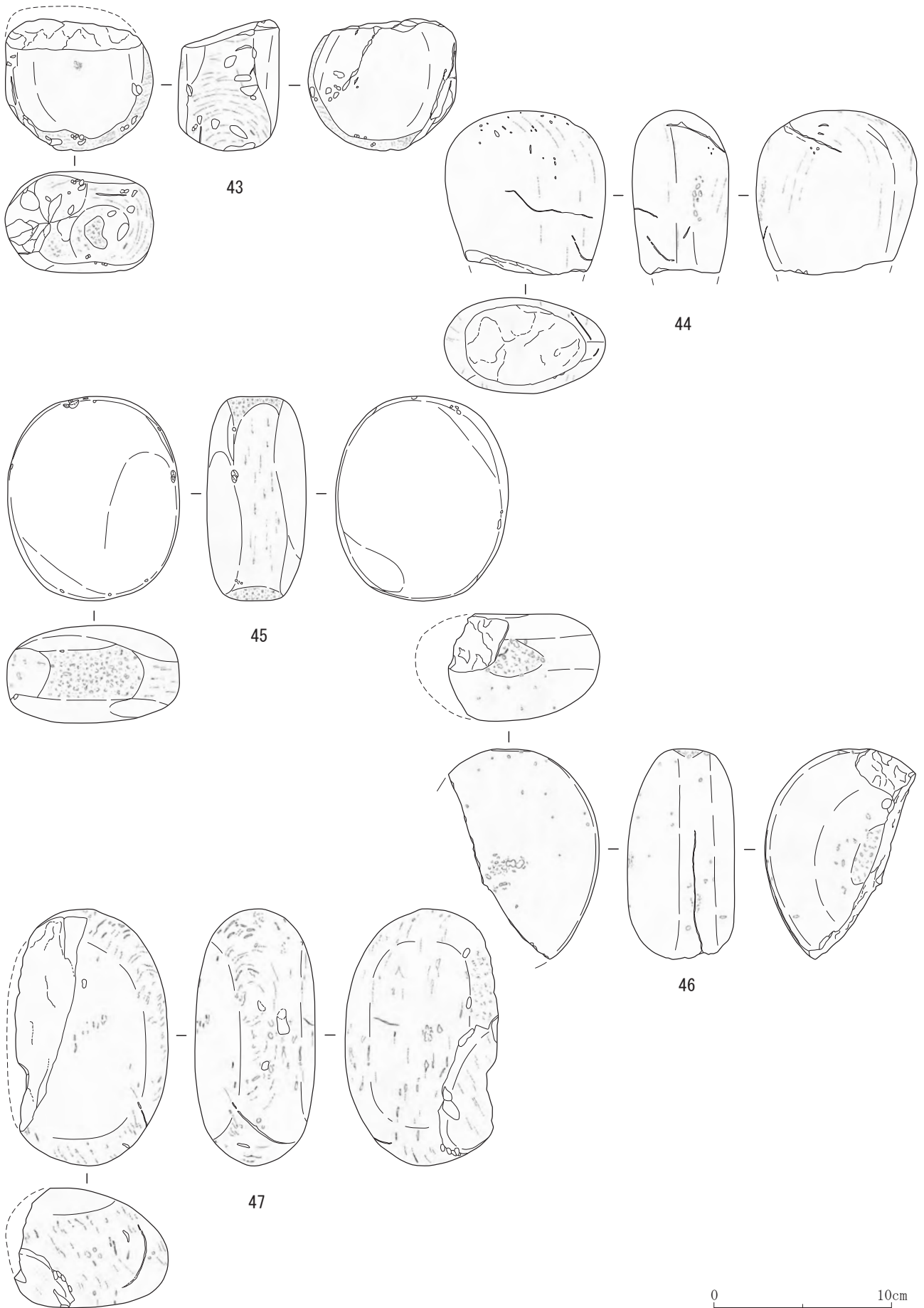
图版 75 石器 5



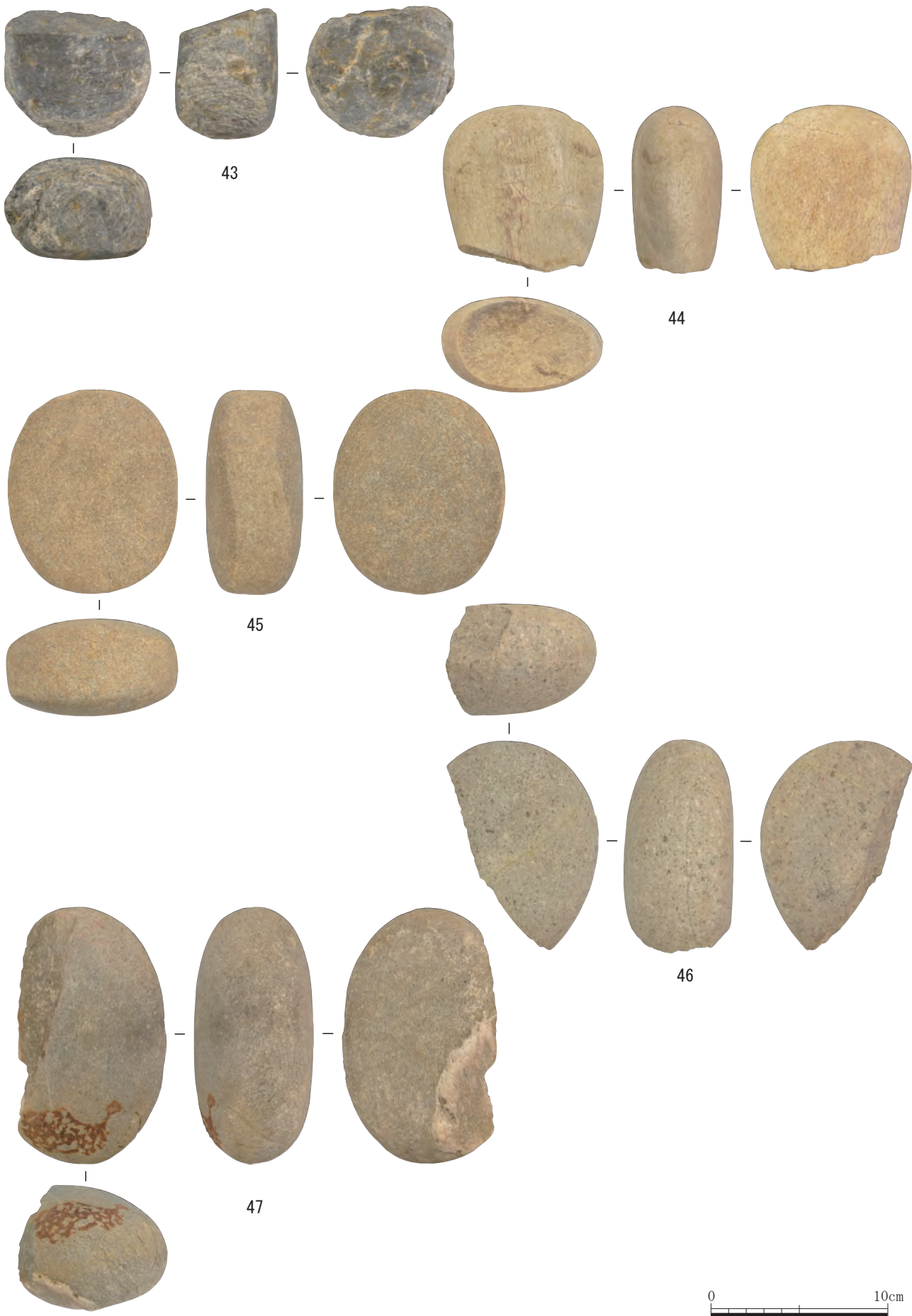
第106图 石器6



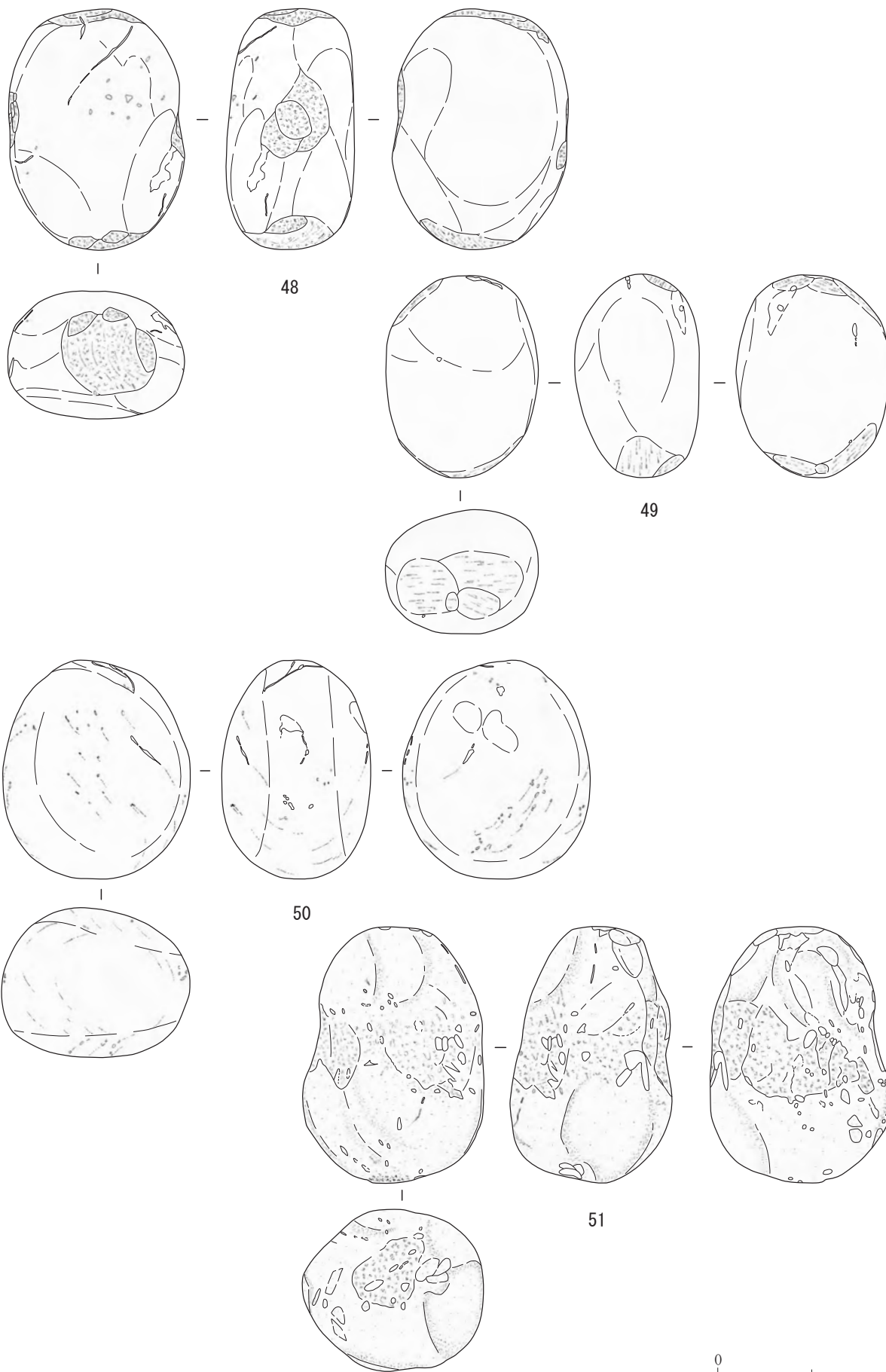
图版 76 石器 6



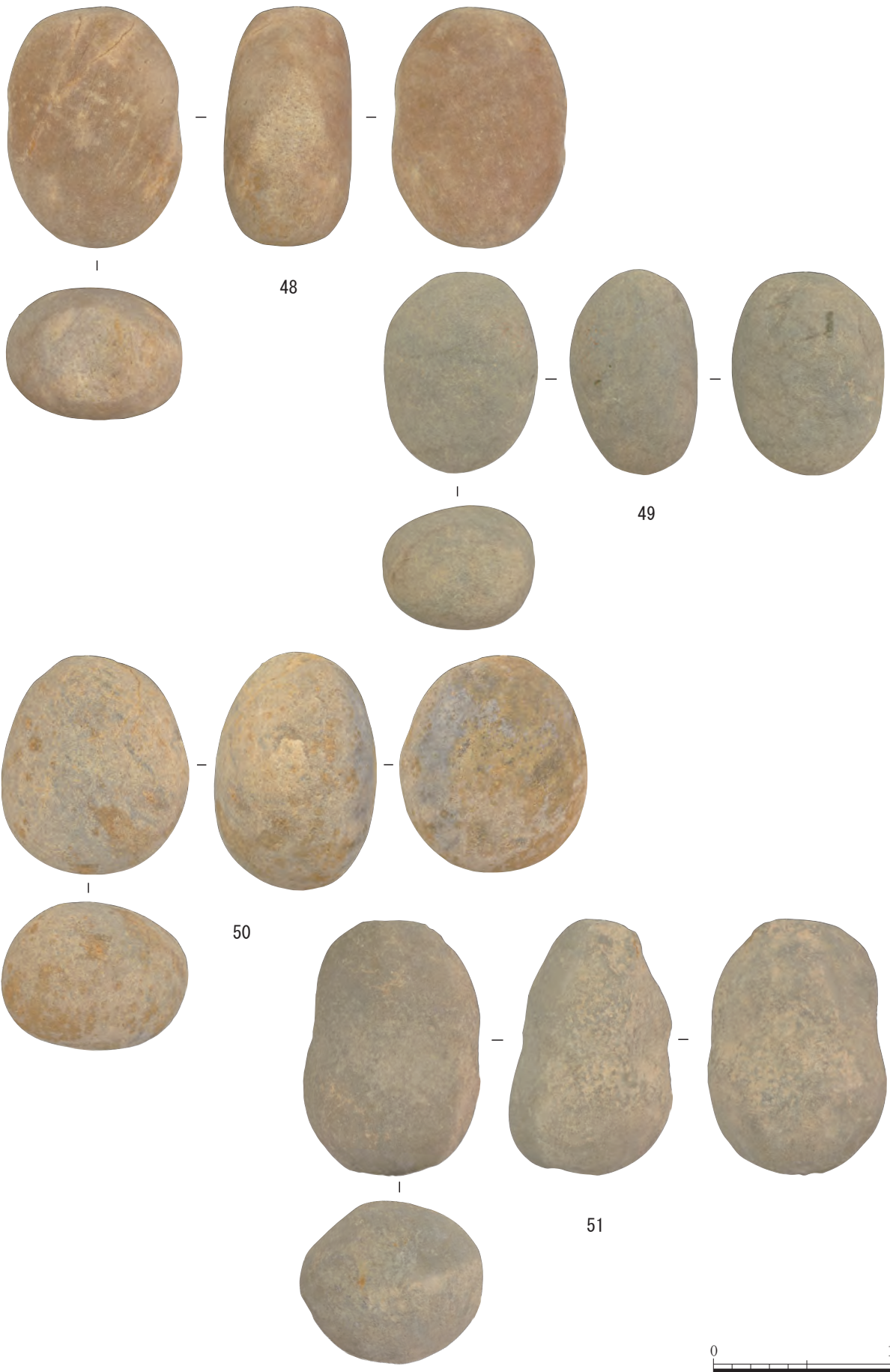
第107图 石器7



图版 77 石器 7



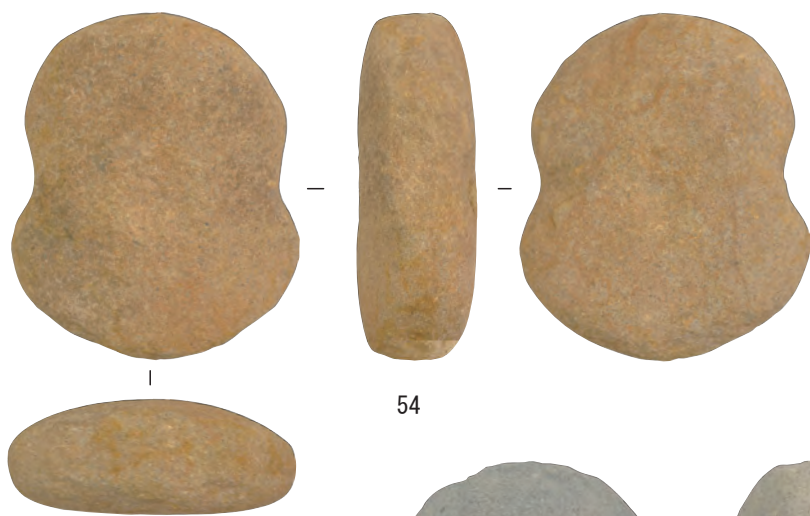
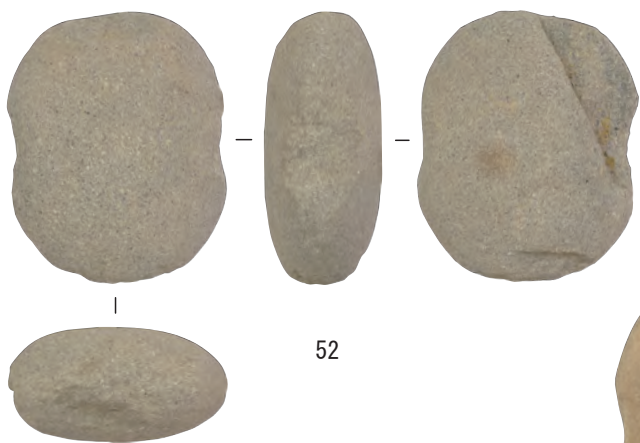
第108图 石器8



图版 78 石器 8



第 109 图 石器 9



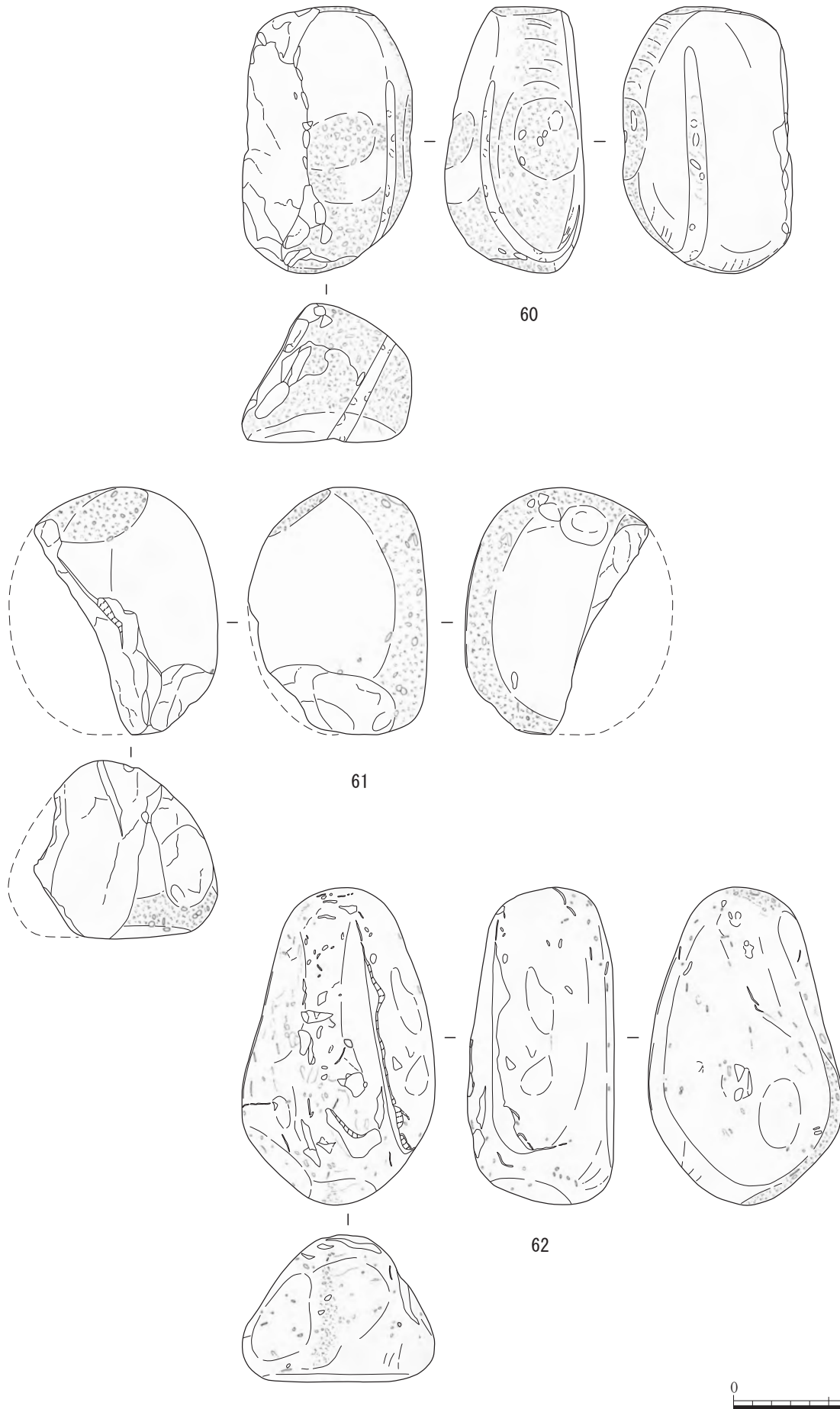
图版 79 石器 9



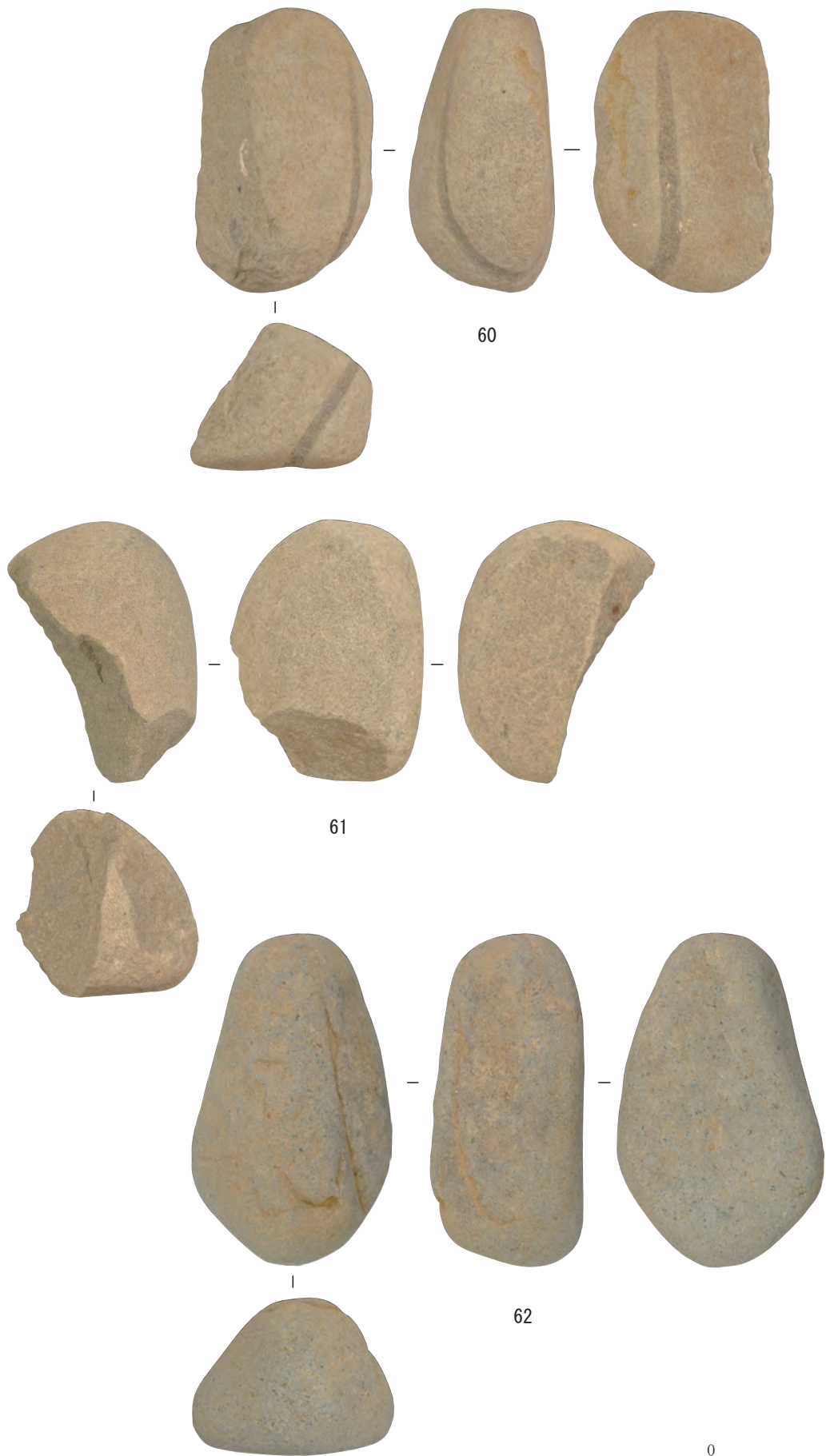
第110图 石器10



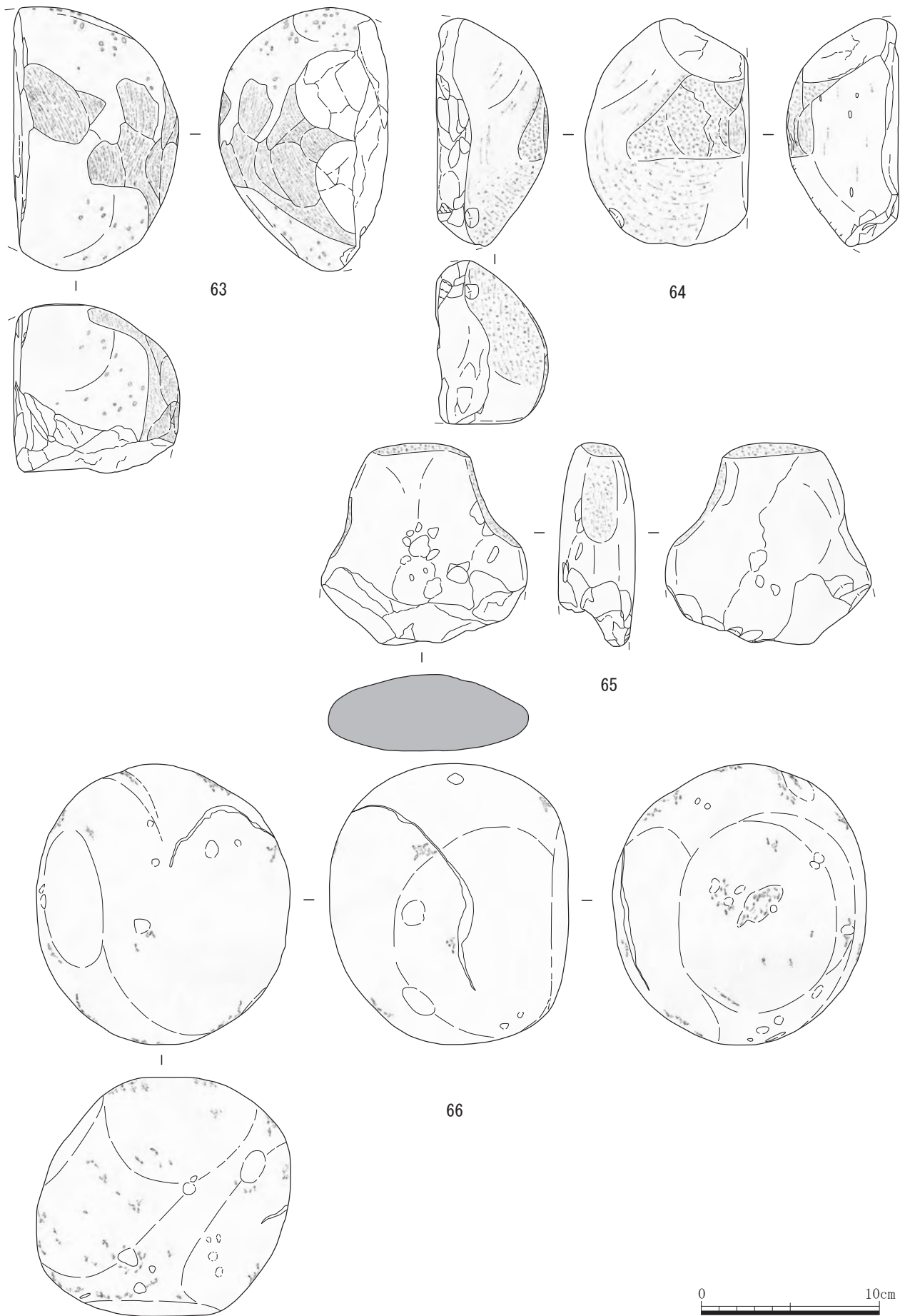
图版 80 石器 10



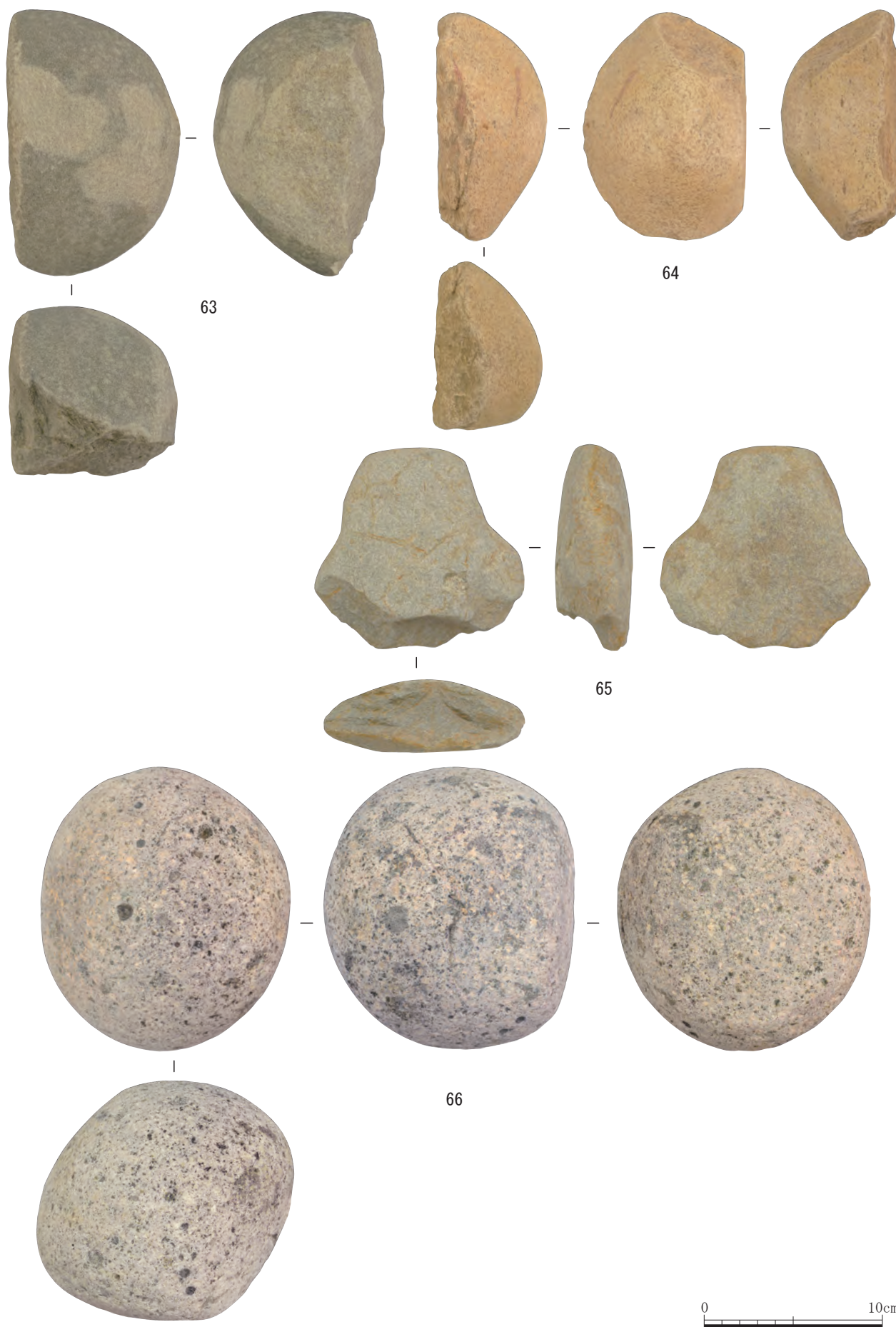
第111图 石器11



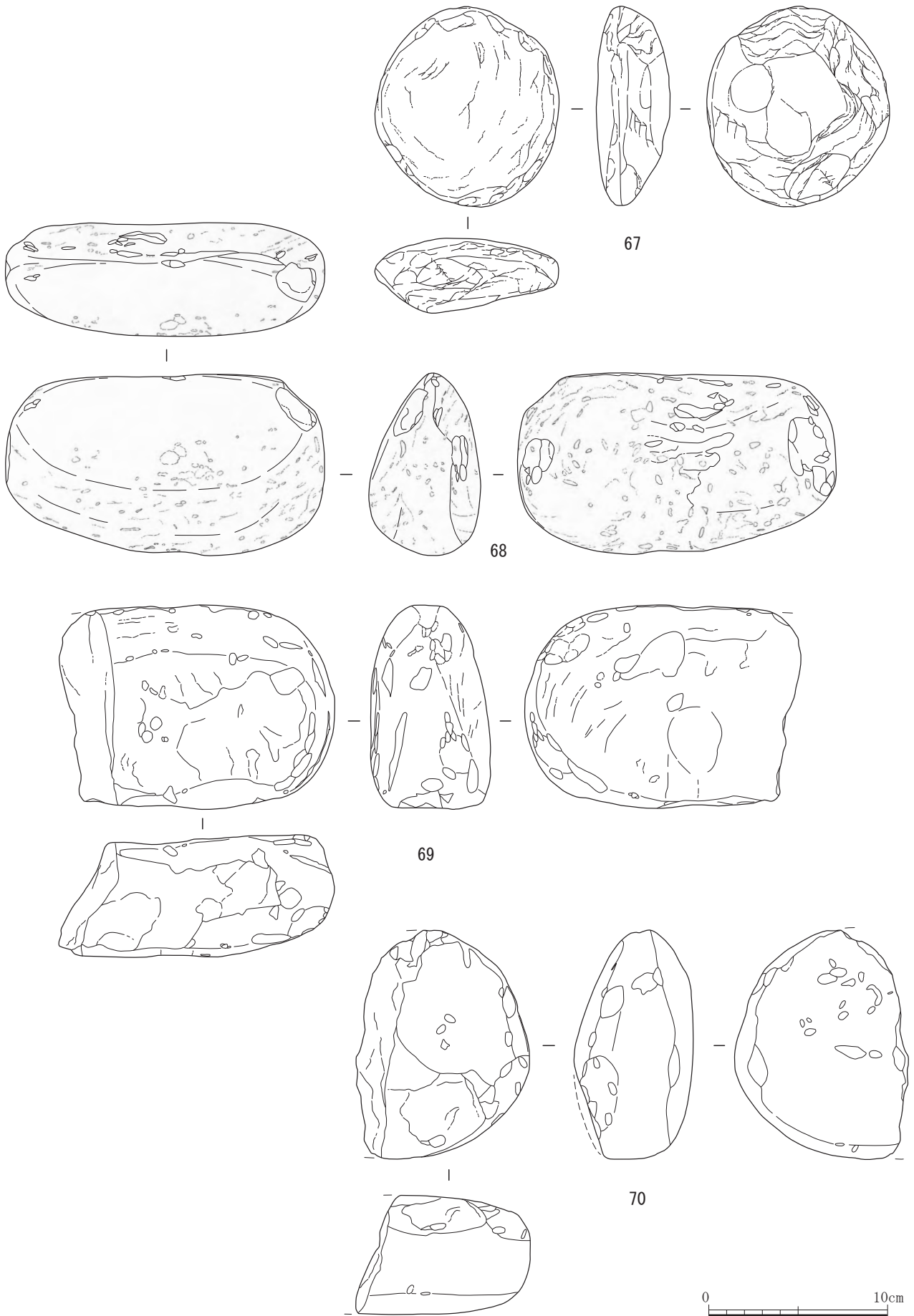
图版 81 石器 11



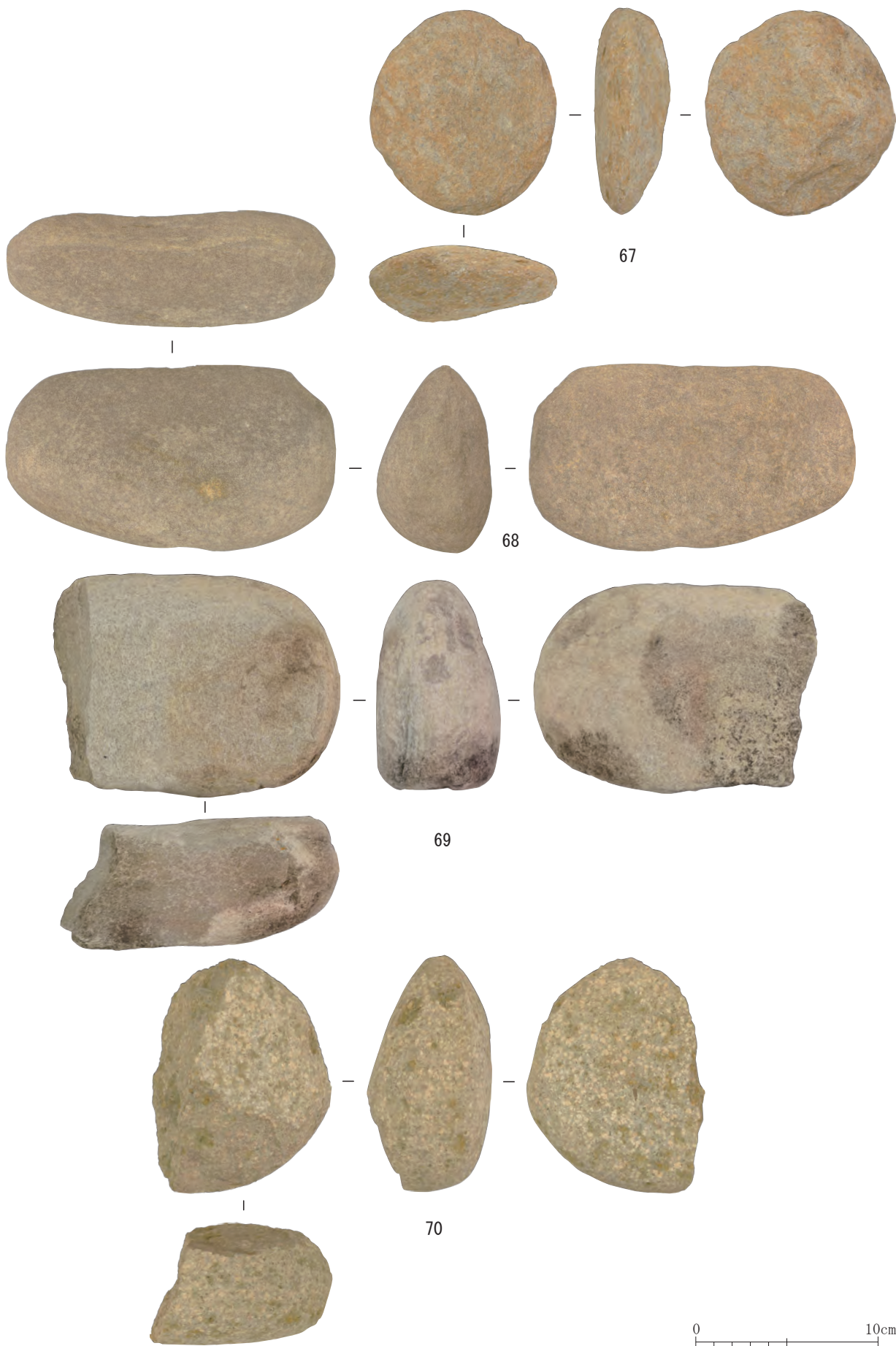
第112图 石器12



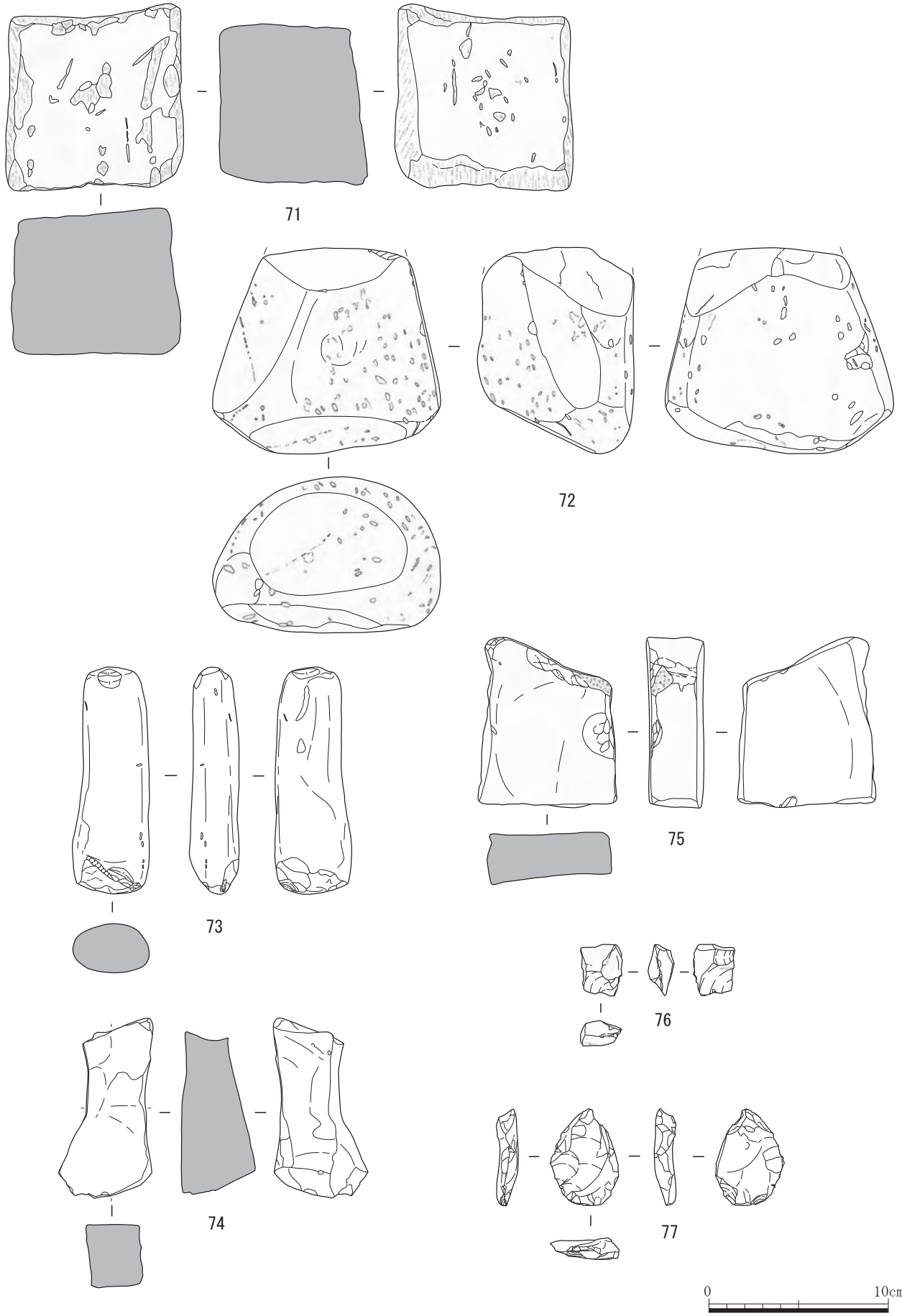
图版 82 石器 12



第113图 石器13



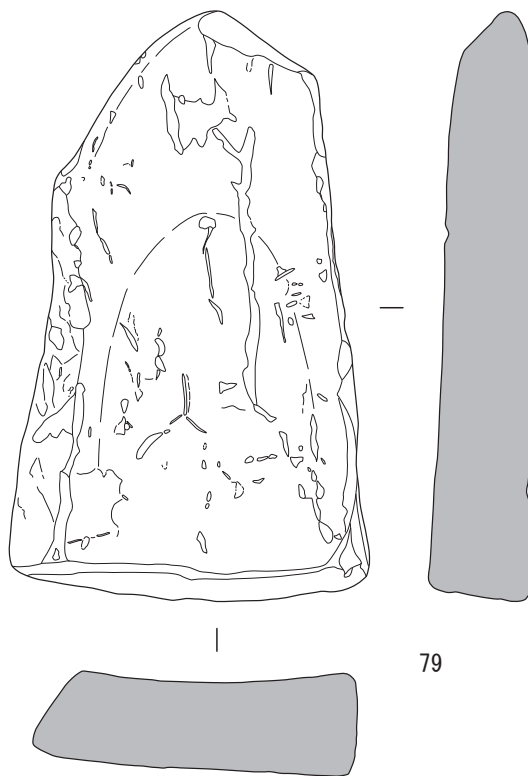
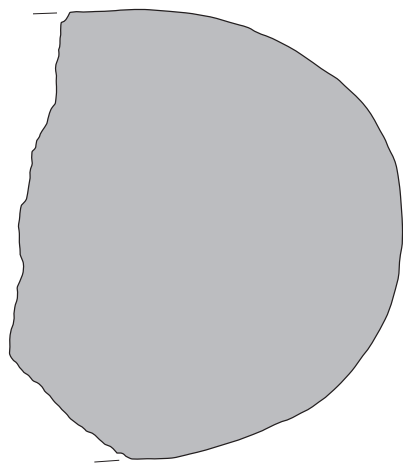
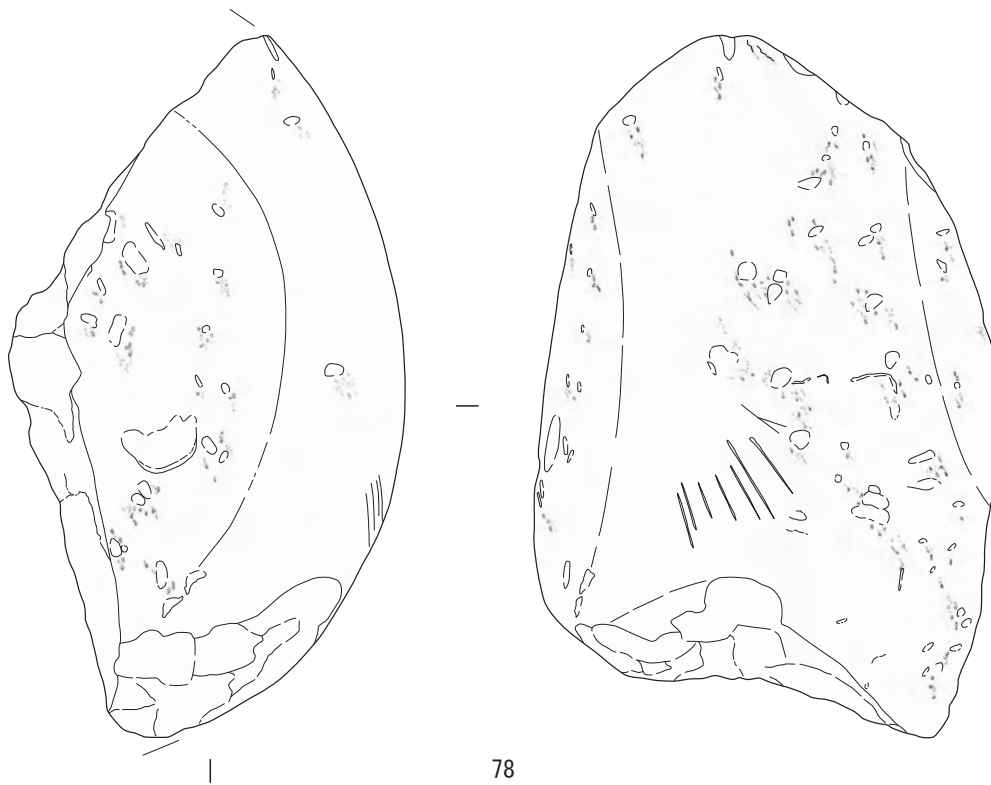
图版 83 石器 13



第114图 石器14



图版 84 石器 14



0 10cm

第 115 图 石器 15



1



78



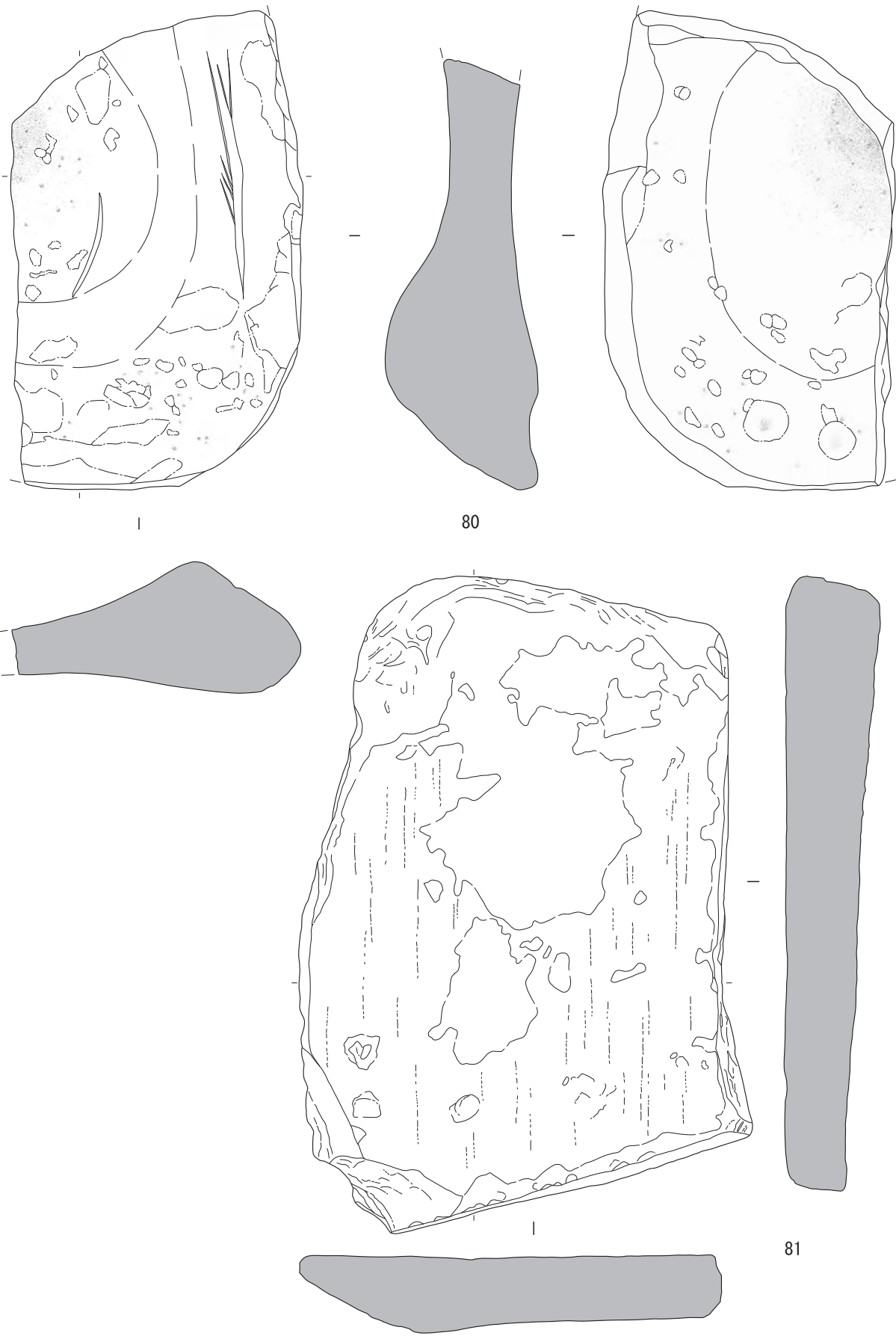
1



79



图版 85 石器 15



0 10cm

第116图 石器16



1

80



1



81



图版 86 石器 16



第117図 石器17



1

82



图版 87 石器 17

(3) 貝製品

今回報告する貝製品はHCで1,344点、HB③で308点の合計1,652点である。平安山原A遺跡(2016)で397点、平安山原B遺跡(2015)で261点と比べると約5倍の出土で、その中でも二枚貝有孔製品が86.3%を占める。HCをみると貝層Ⅲ群において605点出土と全体の45%が得られている。本貝層群は土器・石器の出土状況から上層(1・2層)と下層(5層)に分けられるようで、1・2層で26.0%、5層で55.4%を占める。なお、HB③Ⅲ層及びⅢc・d層は下位V層とも重なり、土器・石器・貝製品などが多数含まれていることから「V層」所属のものとして扱った(第1節参考)。以上の状況から貝製品のほとんどは貝塚時代後期に属するが、ヤコウガイ製匙やタカラガイ製品など、明らかにグスク時代(Ⅲ層)に属するものもここで報告する。

装飾品と考えられるもの(巻貝製品・貝輪・貝符)と実用品と考えられるもの(有孔製品・容器・貝匙・二枚貝有孔製品など)に大別される。種類別に観察一覧、平面分布を示し、必要に応じて個別の集計を行った。

第40表 貝製品 出土量

遺跡	層	製品 貝種	装飾品										実用品										自然貝					製品合計	自然貝合計	
			巻貝	貝輪				貝符	利螺器蓋製	貝刃	貝包丁	有孔		有孔	容器	貝匙		タカラガイ	ゴホウラ	アツソノデガイ	ヤコウガイ	有加工痕ヤコウガイ								
				オオツタノハ	オオベッコウガサ	メンガイ類	ゴホウラ					アツソノデガイ	イモガイ・他			ヤコウガイ	シレナシジミ						クロチョウガイ	二枚貝	ヤコウガイ	ホラガイ	ヤコウガイ			ゴホウラ
HC	I																							11					0	
	II																							5			1		1	
	IIc																							10	1		1		2	
	III																							16	3	1			4	
	IV																							1					0	
	V		1	1	1	1	3	1		1	1	2	509		2	1	1	11	1					537	17	8	52	5	82	
	V	貝層I群											2											2						0
		貝層II群	b											1											1	1	1	1		3
			c											20											20				1	1
			d											1											1			1		1
			f	1										7		1									9	1		8		9
			g											1											1			1		1
			h											4											4	1				1
			i											5		1									6			1		1
		—					2						7											9						0
		貝層III群	1											21										2	23	1	2	4	2	9
			1a											1										1	2	1		7	1	9
			1b											16										1	19	5		12		17
			2											106										1	113	6	2	13	5	26
			3											40										1	42	4		14	3	21
			4											30										1	32	5		16	4	25
	5												252										1	335	17	5	92	11	125	
	不明		2	1								31											5	39	7	4	4	2	17	
	貝層IV群											6											6			1	1		2	
	貝層V群		1									9												11			5		5	
不明			2	1							4											5	3	89	2	4	25	5	36	
HC 小計		5	7	3	7	17	2	42	1	5	1,181	1	10	2	2	54	5	1,344						72	28	259	39	398		
HB③	I											3											3			2	1	3		
	IIa																					1	1					0		
	IIb											2											2					0		
	IIc											4											7			1	1	2		
	III (V)											53											12	72		29	17	46		
	IIIa		1																				17	18		7	5	12		
	IIIb			1								12											3	17		5	3	8		
	IIIc (V)			1	1	1	1	1				63											1	69		11	9	20		
	IIId (V)			1		2						97		1									2	103		1	23	11	35	
不明											11											5	16		6	2	8			
HB③ 小計		1	3	3	6	2	2	0	0	0	245	0	1	0	0	3	42	308						0	1	84	49	134		
HC+HB③合計		6	10	6	13	19	4	42	1	5	1,426	1	11	2	2	57	47	1,652						72	29	343	88	532		

<装飾品と考えられるもの>

1. 巻貝製品

装飾品と考えられる小・中イモガイ及びマガキガイなどをここにまとめた。

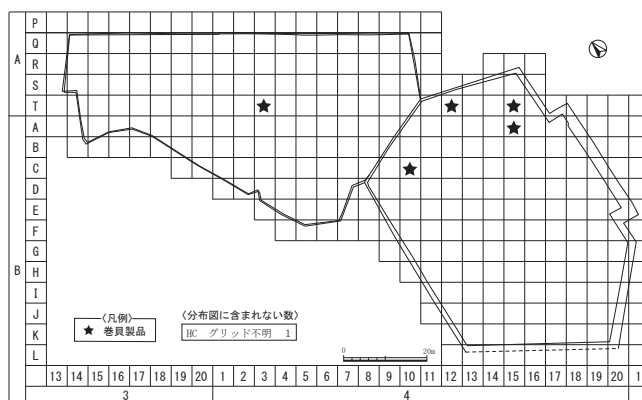
イモガイの形を残し、研磨あるいは穿孔などを行ったものと螺塔部のみを円盤状に加工したものがある。図3以外はHCの出土である。

イモガイの形をそのまま用いたものには小と中がある。

小：螺塔部を水平に研磨したもの（図1）と貝殻全体が丸味を呈するもの（図2）の2点が得られた。いずれも殻頂に0.4cm前後の孔を施す。

中：図3はクロザメモドキの螺塔部を研磨、外唇を打割調整したものである。穿孔もなく、そのまま使用するの難しく、製作途中の可能性が高い。

円盤状に加工したものにはマガキガイと中・大のイモガイがある。図4はマガキガイで殻頂を打割で穿孔するもので、肩部は部分的に研磨され、体層面は丸味を帯びる。図5は中サイズのイモガイの螺塔部を用い、殻頂に穿孔、体層面は水平に研磨したもので、螺塔部は丸味を帯びることから打ち上げ貝を用いたと思われる。図6は大サイズのイモガイの螺塔部を用いるが、外縁を一巻削り、大きさを調整するものである。螺塔及び体層面に若干の研磨が確認できる。孔は外殻からは自然、内殻から回転穿孔が確認される。体層面は摩耗のため丸味を帯びる。



第118図 巻貝製品 平面分布

第41表 巻貝製品 観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	貝種	完	横	縦	孔 タテ	孔 ヨコ	重さ	観察事項	色	残	摩	風	遺跡・グリッド・層 遺構・台帳(ド・カ)番号
第 128 図 ・ 図 版 89	1	イモガイ(小)	完	1.5	1.6	0.4	0.3	1.9	螺塔部研磨。全体に丸味。孔-楕円、破損のため?。外唇及び下端部摩耗。製1468	×	○	×	HC T12 貝層V群 カ192	
	2	イモガイ	完	1.1	1.7	0.4	0.4	1.0	全体丸味。肩部の丸味が強い。外唇摩耗。製1431	×	○	×	HC 貝層II群f カ19	
	3	クロザメモドキ	完	3.7× 3.4	51	-	-	35.9	螺塔及び体層(肩部)の一部研磨。下端部摩耗。外唇打割。製308	○	△	△	HB③ T3 IIIa(3) 台1663	
	4	マガキガイ	完	2.9	2.5	0.5	0.4	11.4	殻頂、打割穿孔。体層面摩耗。製1467	×	○	×	HC A15 貝層III群 カ890	
	5	イモガイ(中)	完	3.1	3.2	0.5	0.4	10.7	螺塔のみ。殻頂に外殻から穿孔。製1470	×	○	△	HC C10 V(後期層) カ647	
	6	イモガイ(大)	完	4.1	4.1	1.1	1.1	19.3	螺塔平ら、研磨?殻頂が抜けて穿孔?体層面摩耗。製1446	×	○	△	HC T15 貝層III群 ド3147	

○:普通 △:少 △:僅少 ×:なし 製:貝製品番号 「出土地」ド:ドット取上番号 カ:貝番号

2. 貝輪

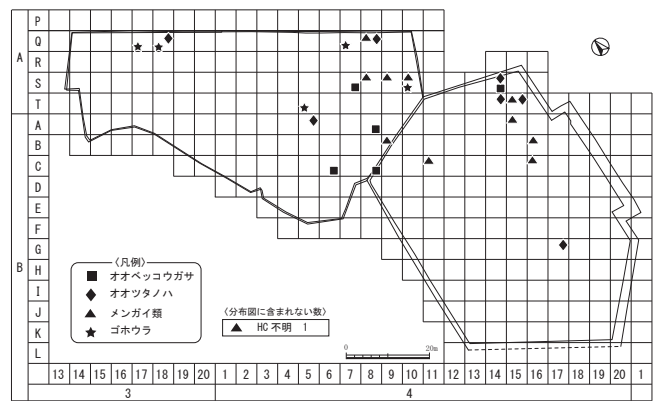
一枚貝のオオツタノハ・オオベッコウガサ、二枚貝のメンガイ類、巻貝のゴホウラ・アツソデガイが出土した。オオツタノハは沖縄では産しないとされ(黒住1994)、またゴホウラ・アツソデガイは「南海産貝輪交易」(木下1996)の対象の貝である。以下、貝種別に略述する。

オオツタノハ: HCで7点、HB③で3点の計10点得られ、そのうち4点を図示した。キャンプ桑江北側地区調査区内では、最も多く得られている。HCではV層で1点、不明2点、貝層III群で4点、HB③ではIII b・III c・III d層で各々1点の出土で、調査区の北側と南側で得られている。図7は唯一の完形で、大きさは殻長6.2cm、殻高8.0cmで殻は厚い。他をみると殻長7.3cm、殻高9.5cm(図8・10)は大きく外殻の加工も顕著である。特に図10は外縁をかなり削り、角を呈する。図8の内縁は丸い。図9はHC、図10はHB③Q18の出土である。後者は平安山原B遺跡(2015)の包含層の延長上にあり、縁にあたると思われる。

オオベッコウガサ: HCとHB③で各々3点の計6点の出土である。HCはV層、貝層III群5層、不明

で各々1点、HB③はⅢ層で2点、Ⅲc層で1点の出土である。図11は完形で石灰が付着し、色残りもよい。図12は殻長5.7cmと小さめで加工は打割が主である。図13は内外縁を摩耗し、幅0.7cmと細くまた色残りもよく、光沢もある。

メンガイ類：HCで7点、HB③で6点の計13点の出土である。他の製品と比べるとHB③での出土割合が高い。図14は完形で内縁を打割、内外殻は部分的に研磨痕が確認できる。この種の製品としては丁寧な仕上げである。HC貝層Ⅲ群5層の出土である。



第119図 貝輪 平面分布

第42表 貝輪 観察一覧

(法量単位:cm, g)

第図 図版	図 番号	貝種	完	横	縦	孔 タテ	孔 ヨコ	重さ (g)	観察事項	色 残	摩 耗	風 化	遺跡・グリッド・層 遺構・台帳(ド・カ)番号
第 128 図 ・ 図 版 89	7	オオツタノハ	完	6.2	8.0	3.9	5.4	24.9	幅1.3~1.7cm。内縁研磨、角。外縁やや研磨。外殻研 磨顕著。風化で研磨痕不明。殻厚0.4cm。製1449	○	×	×	HC C9 V(後期層) ト'3866
	8	オオツタノハ	1/2	(7.3)	(9.5)	-	-	10.6	幅1.4~1.6。内外縁とも研磨顕著。 外殻-研磨顕著。製1438	△	△	△	HC T15 貝層Ⅲ群5 カ971
	9	オオツタノハ	1/2	-	-	-	-	10.4	幅1.7。内縁、一部研磨。外殻一部研磨。製1469	○	×	×	HC 不明 カ110
	10	オオツタノハ	1/2	(7.2)	(9.3)	-	-	9.0	縁幅0.6~1.5。内外縁-研磨、内縁研磨2面。 外殻-研磨顕著。風化で研磨痕不明。製772	△	×	△	HB③ Q18 Ⅲd(14) 台1262
	11	オオベッコウガサ	完	6.1	7.2	5.2	4.2	14.8	縁幅1.0~1.4。内外縁-打割。石灰付着。製1420	○	△	×	HC S14 貝層Ⅲ群5 台4437
	12	オオベッコウガサ	完	5.7	7.2	5.4	4.2	12.6	縁幅0.8~1.4。内縁-打割。外縁は自然に近い。製1452	○	△	×	HC A16 V(後期層) ト'1541
	13	オオベッコウガサ	1/2	(5.7)	(6.4)	(5.5)	(4.7)	2.8	縁幅0.6。内外縁-摩耗。製266	○	○	×	HB③ A8 Ⅲ(12) 台891
	14	メンガイ類	完	5.5	6.5	4	3.3	9.7	縁幅1.0~1.6。外殻は殻頂など、部分研磨。 蝶番周辺の研磨痕明瞭、石灰付着。製1451	○	×	×	HC A16 貝層Ⅲ群5 ト'4748

():推算 ○:普通 △:少 △:僅少 ×:なし 製:貝製品番号 「出土地」ド:ドット取上番号 カ:貝番号

ゴホウラ・アツソデガイ：ゴホウラ・アツソデガイの製品は「南海産貝輪交易」との関連もあるため、平安山原A遺跡(2016)・平安山原B遺跡(2015)と同様、製品および未製品、自然貝も含めて観察し、貝輪や未製品のうち主なものを第129~131図、第43表に観察一覧に示し、自然貝については残存部位を分類し、集計を行った(第40表)。

本遺跡では背面型貝輪のみ(図17~19)の出土で、また、小形貝を用い、貝輪に使用される部位もこれまで出土したものと異なる。形状は種子島広田遺跡(2007)のゴホウラ貝輪に近いようである。出土地をみるとHC貝層Ⅲ群5層に多い。

半環状製品：図15はゴホウラの袖部をかなり削り込み、半環状に加工したものである。一端を直線状に加工、さらに側面に「V」字状の抉りを入れ、他端は破損するが、尖るようである。組み合わせの貝輪か、あるいはイノシシの牙に類似することからその模造品の可能性もある。HC V層の出土。しかし、貝塚時代後期にはイノシシの垂飾などの出土はなく、また、貝製の模造品も貝塚時代前V期が最も多いことから矛盾が残る。同じような形状でサラサバティラを用いたものが北原貝塚(1995)で出土している。今後の検討課題である。

貝輪：図17~19は背面型貝輪の破片である。図19は前水管溝近くで、幅1.3~1.6cmと細くて薄い。図17と図18は螺塔部近くで、図18は幅1.9~2.2cmとやや太く、貝殻に付着するへびガイを削り、内外縁の研磨もかなり良く、製品の完成度は高い。図17は、外殻が内外縁に沿うように点刻文が施されている。いずれもHC貝層Ⅲ群5層の出土である。同じような点刻文を施したものに具志堅貝塚(1986)のゴホウラ、嘉門貝塚(1993)のイモガイ製貝輪がある。県外では種子島広田遺跡(2007)や長野県八丁鎧塚古墳(木下2000)でも報告され、南海産貝輪交易の一端を窺わせる。

貝輪未製品：小形のゴホウラを利用、背面・袖部を大きく割り取ったもので、その割れ方は定型化されている。出土した資料から背面型貝輪の製作工程が細かく窺える。①段階 - 図 20・21 は内外縁を研磨するが一部に打割が残し、外殻の瘤が研磨される。②段階 - 図 22・23 は内外縁を打割し、外殻の研磨は顕著で、その稜線が明瞭にみられる。また、外殻の凸面の研磨は皆同じレベルで、方向も同一であることから、板状のものに外殻を押し付けて研磨したと思われる。図 23 は HB ③ III c、他は HC 貝層 III 群 5 層の出土である。③段階 - 図 24・25 は殻頂から袖部を残すもので、外縁は打割で丸く調整、内縁は粗い。外殻は凸部に研磨が施される。図 26 も外殻が研磨されることからこの範疇に含まれる。④段階 - 図 27



図版 88 ゴホウラ・アツソデガイ

第43表 ゴホウラ・アツソデガイ製品(貝輪) 観察一覧

(質量単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	製品	貝種	部位	残存	縦 (殻高)	横 (殻長)	重さ	観察事項	色 残	摩 耗	へ び	風 化	遺跡・グリッド・層 遺構・台(ド・カ)番号
第 129 図 ・ 図 版 90	15	半環	ゴホウラ	袖部	完	-	-	33.0	幅1.4~2.0cm、厚さ1.0cm外唇利用。一端は両側面から「V」字状の挟り、他端はわずかに欠損。内外縁研磨、内縁は丸み、外縁は角をなす。全面研磨。インシヤ模倣? 製1462	×	×	×	△	HC B14 V層(後期層) 13028
	16	貝輪	アツソデガイ	袖部	1/2	-	-	18.0	幅1.8cm。外縁-研磨顕著、内縁-研磨と打割がある。外殻-研磨、内殻は3個のへビガイ除去。製71	×	×	○	△	HC T12 貝層V群 1342
	17	貝輪	ゴホウラ	背面	1/4	-	-	12.3	幅2.3~2.5cm。内外縁研磨。外殻に両縁に沿うように径0.1cmの点刻を0.2cm間隔で施す。製1441	×	×	×	○	HC A15 貝層III群5 14215
	18	貝輪	ゴホウラ	背面	1/3	-	-	11.1	幅1.9~2.2cm。内外縁-研磨、内縁-打割残。外殻-へビガイ削り痕、研磨。外殻研磨細かい。黒:ゴホウラかアツソデガイの亜成貝。製1439	×	×	○	△	HC T15 貝層III群5 14929
	19	貝輪	ゴホウラ	背面	1/3	-	-	6.5	幅1.3~1.6cm。薄片。内外縁研磨、外殻研磨。黒:ゴホウラかアツソデガイの亜成貝。製1440	×	△	×	○	HC T15 貝層III群5 14984
	20	貝輪未①	ゴホウラ	背面	完	9.2	5.6	22.0	小さい。内縁研磨、一部打割残。瘤:研磨。製79	△	×	×	△	HC A16 貝層III群5 14253
	21	貝輪未①	ゴホウラ	背面	1/2	-	-	42.0	幅1.9~2.4cm。外縁水平に研磨、2面。内縁及び殻軸を打割。製73	△	×	×	×	HC A16 貝層III群5 14143
	22	貝輪未②	ゴホウラ	背面	2/3	9.8	-	76.5	幅2.2~3.6cm。内外縁-打割後部分研磨、外面部分-研磨、顕著。黒:コカイ付着。小形成貝。製1475	△	×	○	×	HC A16 貝層III群5 14759
	23	貝輪未②	ゴホウラ	背面	1/2	-	-	9.7	縁幅3.1~4.7cm。外縁-研磨、内縁-打割。研磨痕-横位・縦位に明瞭。製495	△	×	△	△	HB③ Q7 IIIc(7) 14764
第 130 図 ・ 図 版 91	24	貝輪未③	ゴホウラ	背面	2/3	8.8	7.9	104.0	幅2.2~4.1cm。内外縁打割、外縁は輪状に整える。外殻研磨あり。製70	△	×	×	×	HC A15 貝層III群2 14725
	25	貝輪未③	ゴホウラ	背面	1/2	10.5	-	38.2	縁幅1.2~2.7cm。内外縁に打割、若干の摩耗。風化。製86	×	△	×	○	HC S15 貝層III群5 14208
	26	未製品	ゴホウラ	背面	1/3	-	-	26.0	外殻の背面部分を研磨。殻薄片。貝輪の加工ではない。製1454	△	×	×	△	HC 不明 14304
	27	貝輪未④	ゴホウラ	背面	2/3	10	7	61.0	幅1.4~4.2cm。内外縁、打割。外殻→内殻。石灰付着、螺塔周辺にアバタ多し。黒:小形、成貝。製78	×	×	×	○	HC B16 V層(後期層) 142953
	28	貝輪未④	ゴホウラ	背面	2/3	11.6	7.5	93.0	幅1.6~4.4cm。内外縁打割。殻頂残。製69	△	×	×	×	HC T15 貝層III群5 14867
	29	貝輪未⑤	ゴホウラ	背面	1/2	10.3	-	40.0	内外縁打割、打割は粗い。打割は外殻→内殻外殻。へビガイ除去の痕跡。黒:成貝、小形。内部に付着なし。製68	×	×	△	△	HC T14-51 貝層III群1b 14678
第 131 図 ・ 図 版 92	30	貝輪未⑤	ゴホウラ	殻頂	1/2	-	11.3	183.5	縁幅3.9cm。内外縁打割。螺塔部除去、一部研磨。瘤も研磨痕あり。製504	×	○	×	○	HB③ S10 IIIb(5) 14307
	31	貝輪未⑥	ゴホウラ	背面	完	14.5	12.9	283.0	背面中央穿孔、輪状。内殻→外殻に打割。打割一般軸、袖部、外唇も加工。外殻にへビガイ付着。内殻の外唇にアバタあり。泥が付着。黒:大形成貝。製76	×	×	○	△	HC C16 142944
	32	未製品	ゴホウラ	背面	完	14.8	11.9	376.0	背面中央穿孔。穿孔位置、中央よりずれる。穿孔は外内、孔縁に叩き痕あり。上袖部を直線状にカット。外唇も調整。黒:大形成貝。製72	△	△	×	△	HC T15 貝層III群5 14486
	33	腹面穿孔	ゴホウラ	体	完	15	12.1	620.0	孔径4.9×4.3cm。内縁に複数の打割痕。上袖に打割数回。泥付着、背面は泥がしみて暗灰色。殻はきれい。製1485	×	○	×	△	HC I 145085

黒:黒住耐二氏同定 ○:普通 △:少 △/ :僅少 ×:なし 製:貝製品番号「出土地」ド:ドット取上番号 カ:貝番号

と図 28 は殻頂の残るもので、殻はやや風化が進んでいる。螺塔部に粗いアバタが見られ、外殻の瘤近くは研磨で丸みを帯び、後者は殻頂～上袖部の打割が明瞭にみられる。⑤段階 - 図 29 ~ 31 は殻頂を欠き、外殻にヘビガイ除去の痕跡が確認でき、内外縁を粗い打割で外殻→内殻に施す。⑥段階 - 図 32・33 は上袖部を調整、背面あるいは腹面に穿孔があるもので、この段階は貝集積遺構にもみられる。図 30 以外は HC 貝層Ⅲ群の出土である。

自然貝：加工の施されていないものはゴホウラ 72 点、アツソデガイ 29 点、計 101 点得られた（第 44 表）。出土地をみると HB③Ⅲd でアツソデガイが 1 点得られた以外はすべて HC で得られ、そのうち、貝層Ⅲ群で 58.4% を占め、中でも 5 層で 22 点の出土で 21.8% を占める。殻の状態をみるとほぼ完形がゴホウラで 32%、アツソデガイ 55% を占める。

近接する平安山原 A 遺跡（2016）と平安山原 B 遺跡（2015）のゴホウラ・アツソデガイの出土状況を見ると前者が製品 2 点、製品以外 14 点の計 16 点、後者が製品 15 点、製品以外 13 点の計 28 点を数える。本遺跡では製品 22 点、自然貝は 101 点と 3 遺跡中最も多い。ゴホウラのほぼ完形が 23 点、アツソデガイが 16 点で全体の 38.6% を占める。その中には貝殻の側面を殻頂から斜め方向に割ったもの（図版 88）やヘビガイも付着してないものが数例確認できる。以上の状況から貝輪の製作以外に食用の可能性も考えられる。類例は恩納村熱田貝塚（1979）がある。

第44表 ゴホウラ・アツソデガイ(自然貝) 出土量

遺跡	層	貝種	ゴホウラ					アツソデガイ			合計		
			残存	ほぼ完形	外唇	体層	背面	細片	合計	ほぼ完形		外唇	細片
HC	Ⅱc		1					1				0	1
	Ⅲ		2				1	3		1		1	4
	V		5	4	1	1	6	17	3	4	1	8	25
	Ⅱ群	b			1			1		1		1	2
		f		1				1				0	1
		h		1				1				0	1
	Ⅲ群	1					1	1		1	1	2	3
		1a			1			1				0	1
		1b		1	2			2	5			0	5
		2		1	1	2	1	1	6	2		2	8
		3		1				3	4			0	4
		4			1			4	5			0	5
		5		5	2	4		6	17	4	1	5	22
		不明		4	1			2	7	3	1	4	11
Ⅳ群	不明						0	1			1	1	
	不明		1			1	2	3		1	4	6	
HC小計			23	13	7	2	27	72	16	9	3	28	100
HC	Ⅲd (V)						0			1		1	1
	HB③小計		0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
HC・HB③合計			23	13	7	2	27	72	16	10	3	29	101

3. 貝符

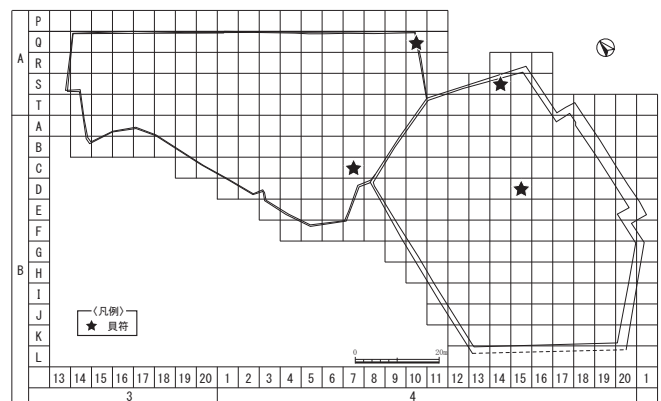
大形イモガイ・ゴホウラを板状に加工したもので、広田下層タイプの有文 1 点、未製品 2 点、南島型 1 点の計 4 点の出土である。HC で 2 点、HB③で 2 点得られたが、平面分布をみると分散している。

図 34 はやや台形で、縦 1.3cm を測り、広田遺跡の貝符と比べると細い。精巧な作りで、文様は渦巻き状の浮き文で、短辺の上端には孔が 2 個施され、内殻から穿孔する。本品と同様なものは奄美大島宇検村屋純遺跡（2009）、名護市大堂原貝塚（2005）で各々 1 点得られ、久米島清水貝塚（1989）では一括で 5 点出土している。

図 35 は前者と同じく台形であるが、文様は施されてなく、完成品か製作途中かはっきりしない。素材はあまり例がないがゴホウラの外唇部を用いている。

図 36 は大形イモガイの肩部から体層を幅 3.3cm の板状に象り、その隅を丸味を出すものである。穿孔に特徴があり、外殻は孔と孔の間を紐が納まるように溝を施し、裏面は孔から上隅に向かって溝を施す。無文と考えられ、南島型（木下 1996）に分類されるものである。

図 37 は大形イモガイの肩部～体層を板状に加工するが、イモガイの湾曲が残る。切断部分



第 120 図 貝符 平面分布

第45表 貝符 観察一覧

(質量単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	製品	貝種	完 破	横	縦	孔 タテ	孔 ヨコ	重 さ	観察事項	ア バ タ	色 残	摩 耗	へ び	風 化	遺跡・グリッド・層 遺構・台帳(ドット)番号
第 132 図 ・ 図 版 93	34	貝符	イモガイ	完	2.5 (3.0)	1.3	0.5	0.3	1.9	板状、台形。外面に文様、浮文0.1で左右対称、渦巻き文。2カ所に穿孔。孔は内殻→外殻に回転穿孔。製879	×	×	×	×	△	HB③ Q10 IIIc(7) F411
	35	貝符	ゴホウラ	完	4	2.6	-	-	9.6	板状、台形。全面研磨、平面は縦位、側面は斜めに研磨痕。外面成長線からはがれる。内面の中央に自然面残す。製1444	△	△	×	×	×	HC D15 V(後期層) F1742
	36	貝符	イモガイ	完	3.3 (3.1)	4	0.5	0.5	6.2	板状、隅丸方形、無文。孔2個、外面は溝、裏面は角に向かって溝。周縁は丸味。製880	×	×	△	×	△	HB③ C7 III(グスク) 台1758
	37	貝符 (未製品)	アンボン クロザメ	完	4.3	4	-	-	11.9	未製品。体層を方形に切り取り。上面は湾曲、側面は研磨顕著。下隅に丸味。製1448	×	△	×	×	△	HC S14 貝層III群2 F4028

製:製品番号 △:普通 △:僅少 ×:なし

第46表 大形イモガイ大きさ(殻径)別 出土量

殻径(cm)	遺跡				合計	平安山原B (2015)	伊礼原D遺跡 (2013)	伊礼原遺跡 (2014)	平安山原A (2016)
	HC		HB③						
	貝層III群 アンボンクロザメ	その他 クロフモドキ	アンボン クロザメ	イモガイ (大)					
3.0~3.4				2	2			1	5
3.5~3.9				3	3	1		1	1
4.0~4.4	1		4	6	12	4			4
4.5~4.9	5		7	12	20	8		8	7
5.0~5.4	5		6	11	17	31	1	11	4
5.5~5.9			4	6	10	17	4	8	1
6.0~6.4	3		1	4	11	8	8	7	1
6.5~6.9			1	2	3	3	9	5	
7.0~7.4				2	2	2	8	2	
7.5~7.9				1	1		3		
8.0~8.4					0		1		
8.5~8.9					0		1		
合計	14	0	23	37	81	74	35	43	23
遺跡別合計	44				81	74	35	43	23

HC その他(クロフモドキ) 6.0~6.4cm カバミナシ1点含む

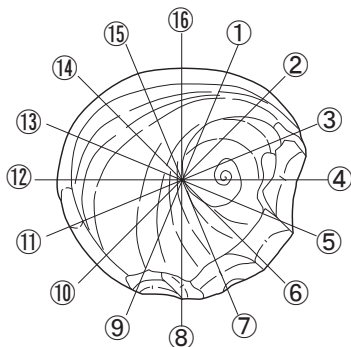
は研磨が顕著である。下端角は丸味を帯びることから、図 36 の製作途中と思われる。色残りもよく、本品からイモガイの大きさを復元すると殻径 5.4cm 以上が推測される。

第 46 表に自然貝の大形イモガイの殻径別の出土量を周辺遺跡と比較を示した。クロフモドキとアンボンクロザメ、その他にカバミナシを含めた。本遺跡からは大形イモガイを加工したものは貝符のみで、その大きさを復元すると 5.4cm と平均値よりは大きめの貝である。伊礼原 D 遺跡(2013)の貝集積(4317SS)では殻径 6.5~7.0cm を中心に得られた。本遺跡では最も多い大きさは 4.5~4.9cm 前後である。従って本遺跡の大形イモガイは、貝製品の製作というよりは食用を目的に採取した可能性が高い。

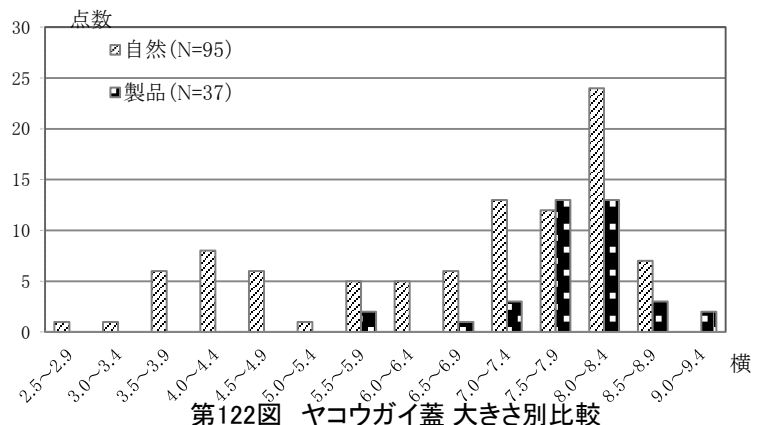
<実用品と考えられるもの>

1. 螺蓋製利器

ヤコウガイの蓋の縁に複数の剥離を施す。刃として使用するために打割を加えたか、使用により剥離したかは明らかでない。出土地をみると HC の I 層 1 点、III 層 1 点、V 層 1 点、不明 4 点、貝層 III 群 35 点の計 42 点が得られた。そのうち貝層 III 群 5 層で 31 点と最も多い。



『シヌグ堂遺跡』(1985)
第 121 図 ヤコウガイの蓋附刃分布



第 122 図 ヤコウガイ蓋 大きさ別比較

第47表に附刃の範囲や大きさ・出土地などの観察一覧を示し、そのうち1点を図化した。図38は附刃の範囲が③～⑩まで連続して剥離するものである。自然貝の出土も多く、製品に用いられたものと自然貝との大きさを比較すると製品に用いたものは横が5.8～9.0cm、縦が5.2～8.5cmの範囲、自然貝は横2.6～8.9cm、縦2.9～8.8cmの範囲にある。第122図に製品と自然貝の横を比較した。これによると製品は大きい方を多く選択していたようである。附刃の範囲をみると①～⑯にみられるが、特に附刃率の高いのは③～⑩の範囲で、「螺蓋製貝斧」(三島1988)、「敲打・打割形」(角田・伊藤1996)としたものと一致する。

第47表 螺蓋製利器 観察一覧

(法量単位:cm, g)

第図 図版	製品 番号	完破	縦	横	重さ	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	打割 回数	遺跡・グリッド・層 遺構・台帳(ド・カ)番号	
第132図38 ・図版93			7.4	8.0	200			●	●	●	●	●	●	●	●								HC D11 V(後期層) ㊦3560	
	2		7.0	8.0	161						●	●	●	●	●								HC V(後期層) ㊦16	
	3		7.5	8.1	163			●	●	●													HC D11 V(後期層) ㊦2976	
	4		8.5	9.0	267	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●							●	HC V(後期層) ㊦16
	5	*半	4.0	5.7	39																			HC A15 貝層Ⅲ群5 ㊦292
	6		7.0	7.5	137					●	●	●	●	●	●									HC C9 V(後期層) ㊦2981
	7		7.2	7.5	164			●	●	●	●	●	●	●	●	●							●	HC S13 V(後期層) ㊦2783
	8		7.8	8.4	188						●	●	●	●	●	●							●	HC G12 V(後期層) ㊦2981
	9		7.4	7.8	143						●	●	●	●	●									HC T15 貝層Ⅲ群5 ㊦912
	10	*半	7.5	5.4	114																			HC A16 貝層Ⅲ群4 ㊦1131
	11		8.0	8.3	195				●	●														HC T15 貝層Ⅲ群5 ㊦1045
	12		6.6	7.2	105			●	●	●				●										HC S14 貝層Ⅲ群5 ㊦1511
	14		7.2	8.2	189			●	●	●	●	●	●	●	●									HC 不明
	15		6.8	6.8	130					●	●	●	●											HC 不明
	19		5.5	5.8	70						●	●	●	●										HC S14 貝層Ⅲ群5 ㊦1046
	20		7.6	8.0	202			●	●	●	●	●	●	●	●									HC T15 貝層Ⅲ群5 ㊦4669
	21		7.1	7.6	186					●	●	●	●	●	●									HC T15 貝層Ⅲ群5 ㊦4346
	22		7.9	8.5	166			●	●	●	●	●	●	●	●	●								HC T15 貝層Ⅲ群5 ㊦4552
	23		6.9	7.5	138			●	●	●	●	●	●	●	●	●								HC S15 貝層Ⅲ群5 ㊦4594
	24		6.7	7.6	125			●	●	●	●	●	●	●	●	●								HC A16 貝層Ⅲ群5 ㊦4122
	25		7.1	7.9	158				●	●	●	●	●	●	●	●								HC S14 貝層Ⅲ群5 ㊦4637
	26		7.6	8.5	166			●	●	●	●	●	●	●	●	●								HC T14 貝層Ⅲ群2 ㊦4037
	27		7.4	8.0	178					●	●	●	●	●	●	●								HC D10 V(後期層) ㊦1875
	28		6.1	7.7	99			●	●	●	●	●	●	●	●	●								HC S15 貝層Ⅲ群5 ㊦3797
	29		8.0	8.2	174						●	●	●	●	●									HC S15 貝層Ⅲ群5 ㊦4486
	30	*半	4.3	3.6	25																			不明
	31	完	7.0	7.5	124						●	●											●	HC S15 貝層Ⅲ群5 ㊦4393
	32		6.5	7.4	112				●	●	●	●	●	●	●	●								HC B15 Ⅲ(グスク) ㊦2894
	34		6.8	7.8	140			●	●															HC E17 不明 ㊦2080
	35		7.2	8.0	155				●	●	●	●	●	●	●	●								HC A15 貝層Ⅲ群2 ㊦3616
	36		6.8	7.0	120				●	●	●	●	●	●	●									HC B16 貝層Ⅲ群5 ㊦70
40		8.1	8.2	204			●	●	●	●	●	●	●	●	●								HC T15 貝層Ⅲ群5 ㊦4819	
41		7.4	7.8	156			●	●	●	●	●	●	●	●	●								4回 HC C13 不明 ㊦3397	
42	完	7.9	8.4	189			●	●	●	●	●	●	●	●	●								3回 HC T16 貝層Ⅲ群5 ㊦285	
44		7.3	8.1	154					●	●	●	●	●	●									2回 HC A16 貝層Ⅲ群5 ㊦202	
45		7.4	7.9	171			●	●	●	●	●	●	●	●	●								8回 HC B16 貝層Ⅲ群5 ㊦70	
46	*半	—	—	26				●	●														HC C9 V(後期層) ㊦2981	
47		6.4	7.1	110											●								1回 HC B16 貝層Ⅲ群5 ㊦64	
48	完	7.9	9.0	228				●	●	●	●	●	●	●	●								4回 HC B16 貝層Ⅲ群5 ㊦78	
49	完	7.9	8.7	201				●	●	●	●	●	●	●	●								4回 HC A16 貝層Ⅲ群5 ㊦784	
50	完	7.2	7.9	166.5				●	●	●	●	●	●	●	●								4回 HC S14 貝層Ⅲ群1b ㊦678	
51	完	5.2	5.9	64.8											●								3回 HC B16 貝層Ⅲ群5 ㊦65	

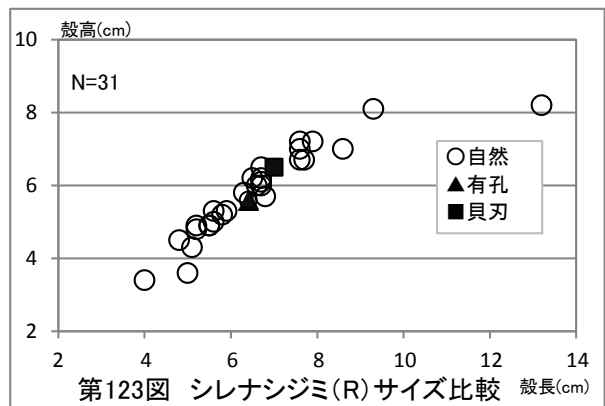
*半:附刃範囲不明 「●」:割れ痕「出土地」下:ドット取上番号 カ:貝番号

2. 貝刃

図39はシレナジミの腹縁を打割して刃状にしたもので、HC V層で1点出土した。殻高6.5cm、殻長7.0cmを測る。マングローブに生息する貝で、自然貝の出土数は多くない。自然貝と比較する(第123図)と手持ちしやすい手頃な大きさを用いられている。

3. 貝包丁

クロチョウガイの腹縁を研磨し、刃状にしたもの



第123図 シレナジミ(R)サイズ比較 殻長(cm)

第48表 貝製利器 観察一覧

(法量単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	製品	貝種	完破	LR	殻長 横	殻高 縦	重さ	観察事項	ア パ タ	色 残	摩 耗	風 化	遺跡・グリッド・層 遺構・台帳(ド・カ)番号
第 132 図 ・ 図 版 93	39	貝刃	シレナシジミ	完	R	7.0	6.5	26.1	腹縁のほぼ全縁を打割で剥離。 剥離幅0.3~0.5cm。製1464	△	×	×	△	HC D13 V(後期層) ト5080
	40	貝包丁a	クロチョウガイ	完	L	6.8	7.8	22.8	腹縁を外殻研磨し刃状をなす。研磨面積は大きい。真珠層の露呈。製1453	×	○	×	△	HC S14 貝層Ⅲ群5 ト4287
	41	貝包丁a	クロチョウガイ	完	R	8.0	8.2	30.7	腹縁中央部分、研磨により附刃。弧状、使用によるものか。丸味。製977	×	○	△	△	HC T14 貝層Ⅲ群5 ト4712
	42	貝包丁a①	クロチョウガイ	完	L	6.2	7.5	18.4	腹縁研磨?有孔(1.2×1.4cm)、内→外。製974	×	×	×	△	HC B15 貝層Ⅲ群5層
	43	貝包丁b	クロチョウガイ	完	R	5.6	6.1	11.5	外殻の研磨。後背縁・前背縁を打割により方形に整形。外殻ははがれ、部分的に真珠層露呈。附刃は明瞭でない、腹縁は自然のラインを残す。製976	×	○	×	△	HC C12 V(後期層) ト3550
	44	貝包丁c	クロチョウガイ	1/3	不明	5.1	5.1	10.0	腹縁に刃状。使用痕-斜め。製1494	×	○	×	△	HC C10 V(後期層) カ813

○:普通 △:少 △:僅少 ×:なし 製:貝製品番号「出土地」ド:ドット取上番号 カ:貝番号

でHCのV層で2点、貝層Ⅲ群3点の計5点の出土である。複数の加工がみられ、貝をそのまま利用したものa(図40・41)、後背縁と前背縁を割取り小さくしたものb(図43)、大形の貝殻を方形に加工し附刃したものc(図44)がある。また、二枚貝有孔製品と同じく粗孔を施し、腹縁に刃状にしたものがあり、a①(図42)とした。近接する平安山原A遺跡(2015)ではリュウキュウマスオ、クロチョウガイのaタイプが出土している。

4. 二枚貝有孔製品

二枚貝の殻頂近くに1.0~2.0cm前後の粗孔を施したもので、製品の性格上、自然に割れる可能性も高いため、右記の二枚貝有孔製品の条件に当てはまるものを扱った。その結果、21種類、1426

<二枚貝有孔製品の条件>

- 二枚貝の殻頂に1.0~2.0cmの粗孔を施すものである。
- 条件①孔の穿孔に複数の打割が見られるもの
- ②孔に複数の切り合いが見られるもの
- ③腹縁に複数の剥離あるいは摩耗(使用痕)が見られるもの
- 2個以上の条件を満たすものを製品として扱った。

点の出土であった。キャンプ桑江北側地区で最も多い出土である(第51表)。貝塚時代後期の遺跡の中でも多く、リュウキュウサルボオ、シャコガイ科は漁網錘と考えられるが、出土した貝種も多ことから、用途を検討するため、各々の貝の重量と孔位置について分析してみた。

全体の合計1426点で出土地別にみるとHCが1181点で82.8%、HB③が245点で17.2%とHCの出土が多い。層別にみるとHCはV層で509点、貝層群ではI群2点、II群46点、III群497点、IV群6点、V群9点で、貝塚時代後期に属するところで90.5%を占め、IIc層(クムイ)で10点、III層で14点得られている。HB③ではI層で3点、IIb層で2点、IIc層で4点、III層で53点、IIIb層で12点、IIIc層で63点、IIId層で97点、不明11点の計245点の出土である。所属年代は層序や土器・石器などの出土遺物を検討するとIII・IIIc・IIId層は貝塚時代後期に相当するものと思われ、これらを勘案すると貝塚時代後期に属するV層で213点(86.9%)を占める。本製品は貝塚時代後期に属するものと判断される。貝種別にはHCはシャコガイ科が683点(57.8%)、リュウキュウサルボオ270点(22.9%)、メンガイ類が105点(8.9%)、HB③ではシャコガイ科96点(39.2%)、リュウキュウサルボオ123点(50.2%)、メンガイ類11点(4.5%)を占め、HCではシャコガイ科、HB③ではリュウキュウサルボオが主体をなす。

HCの貝層III群で497点と二枚貝有孔製品の42.1%を占める。貝層III群は土器の出土状況から1・2層でくびれ平底系(アカジャンガー式・フェンサ下層式)と5層で大当原式と新旧の差が見られ、また、HB③も土器の出土状況が若干異なる。本品は民俗事例から網の錘とされ、これらの地区の貝種別の重量を比較してみた(第135図)。これによるといずれの地区も10~19gが最も多く、次に20~29g、0~9gと続き、他の遺跡と同様に一定の法則性が見られる。重量のあるシャコガイ科は50g以上も見られ、貝層III群5層とHB③で100g以上まで連続して出土するが、HC貝層III群1・2層

では途切れるようで、網の変化が想定される。また、貝種ではHB③ではリュウキュウサルボオが多く、平安山原B遺跡(2015)のHB④口と類似する。貝層Ⅲ群ではいずれの重さもシャコガイが主体をなす。腹縁の加工をみるとリュウキュウサルボオやメンガイ類では少なく、シャコガイ科がHCで全体の43.3%、HB③で67.7%の加工が認められることから腹縁を調整し、重量の均一化を計っているものと思われる(図54・55)。時期的問題はあるが、少なくとも貝層Ⅲ群の5層段階(大当原式)からシャコガイの腹縁を調整し、1・2層(くびれ平底系)では0~9gの出土が増えることから重量調整がさらに進んだといえる。このことからシャコガイ科は重さを調整するのに適し、民俗事例(上江洲1973)にもあることから漁網錘とされる。

今回出土した21種類の貝について、すべてが漁網錘とは考えにくくことから、貝の属性を見るため、第59表に出土した貝の平均の重さと大きさから1gあたりの示数を算出した。これによると民俗事例のあるリュウキュウサルボオやシャコガイ科など主体を示す貝種は示数が1.1~1.5にほぼ収まる。また、後述のグスク時代以降の漁網錘であるハナマルユキも示数1.2とこの範囲に収まることからこの示数は網の錘に用いられる貝の目安になると思われる。さらに、1.6~2.5まで示数を示すも

第49表 二枚貝有孔製品 出土量

遺跡	層	遺構	貝種																			合計				
			Rサルボオ	メンガイ(類)	シャコガイ科	Rザルガイ	カワラガイ	Rシラトリ	Rマスオ	ヌノメガイ	ホソスジイナミ	スタレハマグリ	クロチョウガイ	ハイガイ	シレナシジミ	マスオガイ	Rアサリ	ウチワガイ	エガイ	キクザルガイ科	クチベニツキガイ		ソメワケグリ	イソハマグリ	その他	
HC	I		3	5									1											9		
	II		2	2		1																		5		
	IIc	遺構		2																					2	
				2	5	1																			8	
	III		5	2	6		1																	14		
	IV				1																			1		
	V		109	72	271	2	20	6	4	2	2		2	2	2	4	1	2	1	2	1	4		509		
	V	貝層I群						2																	2	
		貝層II群	b	1																						1
			c	7	1	8		2					1	1												20
			d			1																				1
			f	2		4			1																	7
		貝層III群	g			1																				1
			h	2		2																				4
			i			5																				5
			-	4		2		1																		7
		貝層IV群	1	5	1	14		1																		21
			1a	1																						1
			1b	7	1	6		2																		16
			2	26	6	64		6		1		2	1													106
			3	5	4	29										1									1	40
4			8		18		1		1						1	1									30	
5	43		6	182	1	5	1	6	1	1		5		1									1	253		
不明	5	2	18		3		1		1															30		
貝層V群	3		2		1																			6		
不明	6		2								1													9		
不明	22	5	39		2	1		1									1					1	1	73		
HC小計	270	105	683	3	46	10	14	4	6	1	9	4	5	5	1	3	1	2	1	5	1	2		1,181		
HB③	I		1		1																				3	
	IIb		2																						2	
	IIc		2		2																				4	
	III (V)		19	5	21		3	4		1															53	
	IIIb		6		6																				12	
	IIIc (V)		36	3	24																				63	
	IIId (V)		52	2	40		3																		97	
不明		5	1	2			3																	11		
HB③小計	123	11	96	0	3	6	5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	245	
HC・HB③合計	393	116	779	3	49	16	19	4	7	1	9	4	5	5	1	3	1	2	1	5	1	2		1,426		

遺構:HC IIc P01・SK02 R:リュウキュウの略

第50表 二枚貝有孔製品(孔位置・重量別) 出土量

孔位置	貝種	孔位置		重量別																		合計					
		遺跡	重量(g)	Rサルボオ	メンガイ(類)	シヤコガイ科	Rザルガイ	カワラガイ	Rシラトリ	Rマスオ	ヌノメガイ	ホソスジイナミ	スタレハマグリ	クロチョウガイ	ハイガイ	シレナシジミ	マスオガイ	Rアサリ	ウチワガイ	エガイ	キクザルガイ科		クチベニツキガイ	ソメワケグリ	イソハマグリ	その他	
HC	上後	3	1	21					2	1								1								29	
	上前	3	2	514					3							3									1	526	
	上中	110	89	111	3	36	2	6	1	2		3			1			3	1	2	1	5		1	377		
	中後			3											1											4	
	中前			2			1																			3	
	中中	2	12	30		4	6	3	2	4	1	1			3	2								1		71	
	殻頂	151		2		6									4											163	
	空白・ー	1	1				1						5													8	
	HC小計	270	105	683	3	46	10	14	4	6	1	9	4	5	5	1	3	1	2	1	5	1	2			1,181	
	HB③	上後	1		1						1																3
		上前	10		45			1																			56
		上中	29	8	46		1	4	4																		92
		中中		2	3		1	1																			7
		殻頂	85				1																				86
下前				1																						1	
空白			1					1																		2	
HB③小計		125	11	96	0	3	6	5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	247	
HC・HB③合計	395	116	779	3	49	16	19	4	7	1	9	4	5	5	1	3	1	2	1	5	1	2			1,428		
HC	0~9	19	16	108	3	21	10	10		6	1				5		3	1	1			5	1		210		
	10~19	124	36	200		21		4	1		3	1	2			1	3	1						1	394		
	20~29	79	30	162		4			2			1	2								1				282		
	30~39	27	14	77					1			2	2	1							1				125		
	40~49	17	5	39																						61	
	50~59	1	2	24																						27	
	60~69	2	2	25																						29	
	70~79	1		15								2														18	
	80~89			7																						7	
	90~99			7																						7	
	100~			19																						19	
	HC小計	270	105	683	3	46	10	14	4	6	1	7	4	5	5	1	3	1	2	1	5	1	2			1,179	
	HB③	0~9	8	3	8		1	6	2	1																	29
		10~19	42	4	29		1		3																		79
20~29		33	1	19		1																				54	
30~39		23	1	8																						32	
40~49		14	2	8																						24	
50~59		3		8																						11	
60~69				4																						4	
70~79		2		3																						5	
80~89				3																						3	
90~99																										0	
100~				4																						4	
空白			2																							2	
HB③小計	125	11	96	0	3	6	5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	247		
HC・HB③合計	395	116	779	3	49	16	19	4	7	1	7	4	5	5	1	3	1	2	1	5	1	2			1,426		

R:リュウキュウの略 孔位置:クロチョウガイ(貝包丁)2点含む

第51表 二枚貝有孔製品遺跡別 出土比較

遺跡	立地	貝種																		合計	発行年					
		Rサルボオ	メンガイ類	シヤコガイ科	Rザルガイ	カワラガイ	Rシラトリ	Rマスオ	ヌノメガイ	ホソスジイナミ	スタレハマグリ	クロチョウガイ	ハイガイ	シレナシジミ	マスオ	Rアサリ	ウチワガイ	エガイ	キクザルガイ			クチベニツキガイ	ソメワケグリ	イソハマグリ	その他	
小堀原遺跡	試掘		3	1	2																				6	2009
小堀原遺跡		4	4	18	1	2		1																	30	2012
伊礼原D遺跡	試掘	15	22	28	1	1		3													1		1		72	2008
伊礼原D遺跡		32	38	147	6	1	6		1				3			1	1				1				237	2013
伊礼原遺跡	国指定外	74	17	219	2	16	8	11					2								1		1		351	2014
平安山原B遺跡		15		17		2	6	3				1	2												46	2015
平安山原A遺跡		11	20	46	2	10	16	17	2	2	1	2											6		135	2016
HC		270	105	683	3	46	14	10	4	6	1	9	4	5	5	1	3	1	2	1	5	1	2		1,181	2016
HB③		123	11	96	0	3	5	6		1															245	2016

R:リュウキュウの略 その他:バカガイ・アラヌメ・ウラキツギガイ・オオナデシコ・チリボタン・ユカゲハマグリ

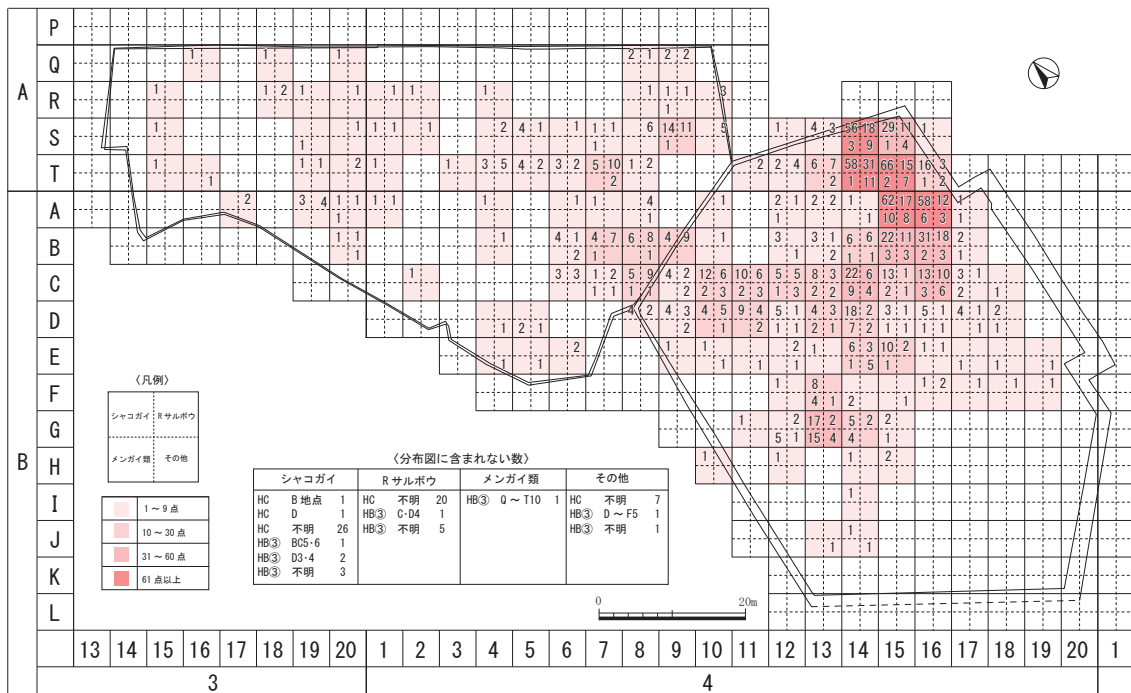
のは前出の貝と共伴したり、遺跡でよく出土する。また、クロチョウガイは貝包丁が出土しているが、備瀬貝塚（1986）ではヤコウガイ有孔製品と一括で出土していることから、穿孔のみのものはここに含めた。カワラガイは示数 1.7 で、孔位置は「上中」が多いが、「中中」についてみると第 133 図 59 ように、自然に剥離する性質がある。平安山原 A 遺跡（2016）、平安山原 B 遺跡（2015）でも出土したリュウキュウザルガイ・リュウキュウシラトリ・リュウキュウマスオなどは貝殻が薄く、漁網錘には適さないと考えられ、別の用途かあるいは自然の穿孔の可能性が考えられる。小形のホソス

第52表 二枚貝有孔製品 観察一覧

(質量単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	製品 番号	貝種	完	部位 左右	殻 高縦	殻長 横	孔 タテ	孔 ヨコ	重さ	孔位置	孔形	穿孔 方向	腹縁	状態・備考	遺跡・グリッド・層 遺構・台帳(ド・カ)番号
第133 図・ 図版 94	45	681	R.サルボオ	完	R	4.6	5.7	0.5	0.6	16.8	殻頂	楕円	外→内	×	孔縁摩耗。風化△	HC A16 貝層Ⅲ群5 ㊦4764
	46	896	メンガイ類	完	L	4.8	6	1.6	1.4	21.2	上中	多角形	内→外	中○	色残○	HC G12 V(後期層) ㊦1599
	47	924	メンガイ類	完	R	5.6	5.8	2.5	2.2	19.8	中中	不定形	内→外	摩耗△	摩耗△	HC A15 貝層Ⅲ群3 ㊦3750
	48	884	メンガイ類	完	R	6.2	5.7	3.8	3.3	17.3	中中	円→大	内→外	×	孔大きく、貝輪の可能性、内縁に 打割複数。風化○	HC A16 貝層Ⅲ群5 ㊦4146
	49	1209	ソラナミ	完	R	5.5	9	1.2	1.4	37.8	上中	円形	内→外	×	孔上縁ハカレ、摩耗。風化△、製品◎	HC 不明 ㊦59
	50	1277	ヒメジャコ	完	L	6.8	9	1.6	1.8	54.1	上前	不定形	内→外	×	孔上部、剥離紐スレカ。摩耗△、 風化△、ヘビガイ付着	HC S16 貝層Ⅲ群5 ㊦156
	51	1214	シラナミ	完	R	5.7	9.7	0.95	0.8	54.0	上中	方形	内→外	全△	摩耗△、風化△	HC T14 貝層Ⅲ群5 ㊦135
	52	1234	シラナミ	完	R	4.7	7.6	0.9	1.25	22.9	上前	方形	内→外	×	全体に摩耗	HC A15 貝層Ⅲ群5 ㊦203
	53	1256	シラナミ	完	R	3.8	6.7	0.8	0.9	14.9	中中	方形	内→外	×	孔は丁寧	HC 貝層Ⅱ群c ㊦162
	54	1289	ヒメジャコ	完	L	4.5	4.8	1	1.15	12.2	上前	扇状	内→外	前・中・後大きくカット	孔上縁ハカレ、	HC A16-11 貝層Ⅲ群5 ㊦251
	55	1443	シラナミ	完	L	4.4	5.1	1.6	1.1	12.9	上前	不定形	内→外	前・後背縁のカット◎	円形状	HC D14 V(後期層) ㊦2787
	56	1297	ヒメジャコ	完	L	3.7	5.4	0.55	0.55	11.4	上前	方形	内→外	全△	孔上縁ハカレ、摩耗△。製品◎	HC T16-52 貝層Ⅲ群3 ㊦137
	57	1220	ヒメジャコ	完	R	3.5	5	0.75	0.8	7.8	上前	楕円	内→外	×	孔は上ハカレ。摩耗△	HC A16 貝層Ⅲ群5 ㊦285
	58	956	R.ザルガイ	完	L	4.7	4.3	1.4	1.2	8.6	上中	扇状	内→外	×	孔は自然か	HC B14 V(後期層) ㊦1114
	59	793	カワラガイ	完	R	5	4.4	1.2	1.1	14.0	中中	円形	内→外	×		HC T14-12 貝層Ⅲ群2 ㊦346
	60	835	カワラガイ	完	L	4.7	4.5	1.3	1.1	14.9	中中	方形	外表剥離	中△	孔貫通せず	HC F15 V(後期層) ㊦1072
	61	952	R.シラトリ	完	R	3.3	4.3	0.9	0.8	3.3	上中	不定形	内→外	×		HC C16 V(後期層) ㊦694
	62	982	マスオガイ	完	R	2.5	4.9	0.5	0.4	3.3	上後	方形	内→外	中△		HC G12 V(後期層) ㊦2778
	63	966	R.マスオ	完	R	4.2	6.7	1.1	1	13.6	中中	円形	内→外	×	外縁の剥離大きい。風化△	HC S14 貝層Ⅲ群5 ㊦4373
	64	967	R.マスオ	完	R	3.3	4.9	1.6	1.5	3.9	上中	楕円	内→外	×	内側に色残	HC E14 V(後期層) ㊦2216
	65	970	ヌノメガイ	完	R	5	5.2	1.5	1.4	18.1	上後	方形	内→外	×	色残	HC T15 貝層Ⅲ群5 ㊦4740
	66	995	ホソスジイナミ	完	R	2.5	3.2	1.1	1.1	2.3	中中	楕円	内→外	×	孔は2回以上打割	HC F15 V(後期層) ㊦1187
	67	1447	ハイガイ	完	L	4.1	5.4	0.9	1.6	31.3	殻頂	楕円	外→内	摩耗	孔縁および殻摩耗△	HC B12 I ㊦2615
	68	987	ハイガイ	完	R	4.2	4.8	0.6	1.2	25.2	殻頂	楕円	外→内	×	孔複数の打割痕	HC C8 V(後期層) ㊦373
	69	992	シラナシジミ	完	R	5.6	6.4	1.7	1.3	22.0	上後	不定形	内→外	×	殻頂に数個のアバタ	HC S15 貝層Ⅲ群5 ㊦4673
70	999	ソメワケグリ	完	R	3.8	4	0.8	1.3	7.6	上前	方形	内→外	×	色残。孔縁摩耗	HC T15 V(後期層) ㊦1381	
71	997	ウチワガイ	完	R	3.6	3.6	1	1.4	6.6	上中	円形	内→外	全△	色残△。孔縁摩耗	HC E12 ㊦2166	
72	888	キクザル	完	R	5.8	5.3	1.7	1.6	37.4	中中	円形	内→外	×	風化△。殻厚、重い	HC D9 V(後期層) ㊦3097	
73	968	R.アサリ	完	R	4.9	8	2	1.9	12.6	上後	不定形	内→外	後△	自然の穿孔の可能性高い	HC C14 V(後期層) ㊦726	
74	973	クロチョウガイ	完	R	-	-	-	-	36.9	上中	円形	内→外	腹縁破損	孔の打割明瞭。風化△	HC S14 貝層Ⅲ群5 ㊦4527	
75	1474	ヤコウガイ	1/3	体層	-	4	1.5	-	3.9	中中	円形	外→外	カットあり	孔は打割、製品の可能性低い。	HC 貝層Ⅱ群1 ㊦140	

貝種: R-リュウキュウの略 腹縁: 中-中央、全-前腹縁〜後腹縁 ◎: 強い ○: やや強い △: 少ない △/: 確認できる ×: なし 「出土地」㊦: ドット取上番号 カ: 貝番号



第124図 二枚貝有孔製品 平面分布

ジイナミ(図 66)は孔径 1.1cm で重さ 2.29g と最も軽い貝であるが、鹿児島県奄美市マツノト遺跡(2006)でも報告されており、用途については今後の課題である。ハイガイは砂泥に棲む貝で、絶滅種であるが多く出土する。リュウキュウサルボオに似ていることから漁網錘の可能性もある。

5. ヤコウガイ有孔製品

1点のみの出土である。図 75 は真珠層を露呈するもので、周縁は特に加工が見られないが、打割により径 1.5cm の孔がほぼ中央に見られる。殻の使用部位は殻口付近である。類例から前述の二枚貝有孔製品と同様、漁網錘と考えられる。奄美市マツノト遺跡(1992)、恩納村熱田貝塚(1979)に報告例がある。

6. ホラガイ有孔製品

ホラガイの腹面に 1.5cm 前後の粗孔を施すもので、1孔タイプと2孔タイプがある。前者が6点、後者が5点出土した。地区別にはHC V層で2点、不明1点、貝層II群f層で1点、貝層III群3層で1点、5層で5点の計10点、HB③では、III d (V) 層の1点でほぼ貝塚時代後期に属する。そのうち保存の良い3点を図示し、出土した製品は観察一覧(第53表)に示した。

図 76 は小振りで、図 77 は外唇及び殻頂を丁寧に整え、細かいアバタが見られる。図 78 は外唇を大きく割取り、本来の貝殻を一回り小さくして大きさを調整している。製品番号1は2孔タイプで、殻頂を研磨している。背面を欠損するのが、1例ある。完形の容量をみると150cc(図 76)から600cc(HB③ B529)まで見られ、約400cc前後が多い。貝殻の保存状態をみると総じてHC貝層III群出土のものが状態はよい。

7. ヤコウガイ製容器

貝殻の殻頂や殻口を若干加工し、容器としたものでHC V層で1点、貝層III群4層で1点出土した。

図 79 は小形で、外唇から体層中央まで大きく割取り、平らに整えている。腹面は表層を剥離し、部分的にアバタが見られる。ホラガイ(図 78)のように大きさを調整していると思われる。全体的に摩耗するが、特に螺肋・上の摩耗が顕著である。図 80 は大形のヤコウガイで殻頂及び螺塔の一部を割りとる。外唇はほぼ平らなす。容量600ccと多い。背面に焼き後は見られない。臍部のアバタが顕著で死貝の可能性が高い。

第53表 ホラガイ有孔・ヤコウガイ製容器 観察一覧

(法量単位:cm, g)

第図 図版	図 番号	製品 番号	製品	貝種	完破	縦	横	孔 径	孔 径	重さ	観察事項	アバタ	色残	摩耗	へり	風化	遺跡・グリッド・層 遺構・台帳(ド・カ)番号
第 136 図 ・ 図版 96	76	1478	有孔	ホラガイ	完形	20.3	9.2	1.4	1.4	285	1孔。殻頂除去。外唇調整なし。殻頂丸味。背面若干欠損、石灰付着。	×	○	×	×	×	HC A15 貝層III群5 f'3449
	77	1491	有孔	ホラガイ	完	19.2	11.7	3.5	4.1	222	1孔。殻頂除去。外唇は打割、調整が顕著。孔は不定形。	△	○	×	×	△	HC T15 貝層III群5 f'4105
	78	1477	有孔	ホラガイ	完	22.9	11.1	3.1	4.1	476	1孔。外唇を大きく削り、調整する。殻頂除去、貝を調整して製品にする。	○	△	○	×	○	HC C10 V(後期層) f'3460
	79	1486	容器	ヤコウガイ	完形	8.3	8.7	-	-	155	殻口、摩耗。螺肋・上は研磨。殻全体が摩耗。	○	△	○	×	△	HC A16 貝層III群4 f'707
	80	75	容器	ヤコウガイ	2/3	14.9	19.5	-	-	816	外唇摩耗。容器として利用。殻頂欠。黒:自然の摩耗	○	×	○	○	△	HC D11 V(後期層) f'4266
図 ・ 図版 なし	-	1	有孔	ホラガイ	1/2	-	-	a 6.4 b 3.1	a 1.1 b 1.1	350	2孔。殻頂丸味および研磨。	×	△	×	×	×	HC S14 貝層III群5 f'4692
	-	2	有孔	ホラガイ	2/3	20.8	9	2.8	2.6	191	2孔。研磨確認。	×	×	×	×	×	HC 貝層II群f'カ20
	-	8	有孔	ホラガイ	2/3	-	-	3.3	3.4	55	1孔。殻頂丸味。	×	×	×	×	×	HC 不明
	-	14	有孔	ホラガイ	2/3	-	-	23	19	155	2孔。殻頂欠。	×	△	×	×	×	HC S14 貝層III群5 f'カ1059
	-	16	有孔	ホラガイ	完	24.5	10.5	-	-	324	2孔。殻頂欠。	×	△	×	×	×	HC B15 貝層III群 f'3803
	-	19	有孔	ホラガイ	1/2	-	-	27	29	173	2孔	×	×	×	×	×	HC E18 V(後期層) f'カ2688
	-	21	有孔	ホラガイ	2/3	24	10.5	-	-	181	1孔。殻頂欠。	×	×	×	×	○	HC T14 貝層III群5 f'4027
	-	529	有孔	ホラガイ	完	26	12.5	3	3.4	245.2	1孔。殻頂丸味。	×	△	×	×	△	HB③ S9 III d(14) f'1673

「-」:計測不可 黒:黒住耐二氏同定 ○:普通 △:少 △:僅少 ×:なし △:ドット取上番号 カ:貝番号

8. 貝匙

貝殻を匙状に加工するもので、ホシダカラとゴホウラ、ヤコウガイが得られた。

ホシダカラ・ゴホウラ製貝匙:図 81 はホシダカラの背面を切り取り、周縁を打割調整し、整えたも

ので、HC 貝層Ⅲ群 5 層で 1 点出土した。平安山原 B 遺跡 (2015) で報告されている。図 82 はゴホウラの貝殻の体層を用いたもので、津堅島キガ浜貝塚 (1976) 形状から貝匙としたが、製品かどうかは不明瞭な部分も多い。一端の縁は摩耗、他端は貝輪をとるように一括で割りとった状態で残る。

ヤコウガイ製貝匙：ヤコウガイを匙状に加工したもので、完形はわずか 5 点でそのほとんどは破片である。HC で 54 点、HB ③で 3 点の計 57 点出土した。これらは使用部位により背面を用いたもの (A) と腹面を用いたもの (B)、腹面グスクタイプ (C) に大きく分けられ、さらに有柄 (a) と無柄 (b) に細分され、殻の大きさに分けられる。その集計は第 54 表に示した。以下、各分類ごとに主なものを図示し、第 55 表に観察一覧を示した。

Aa (背面型・有柄)：本タイプは貝塚時代後期に一般的に見られるもので、貝殻の外唇側に柄、体層側に身を配する取り方で、柄の幅は 5.7～6.0cm とほぼ一定している。柄 21 点、身 18 点の計 39 点出土した。そのうち、状態の良い柄の部分の 5 点を図示した。図 83 と図 84 は柄の先端の一部を「L」字状に削り取る意匠で、前者は径 0.5m の孔を打割で両面から施す。図 85 は柄のほぼ中央を「V」字状に挟り、図 86 は柄が扇形をなす。これらはいずれも周縁は丁寧に研磨され、前 2 点は外殻も削られ、真珠層が部分的に露呈する。後 2 点は外唇部が 0.5～0.8cm と厚く、ヘビガイが確認される。

図 87 は周縁を打割し、螺肋・上も打割調整のみで、製作途中と考えられる。

Ab (背面型・無柄)：外唇側に身の先端を配することから、柄の無いタイプと考えられる。さらに大きさにより、大と中がある。類例は清水貝塚 (1989) にもある。

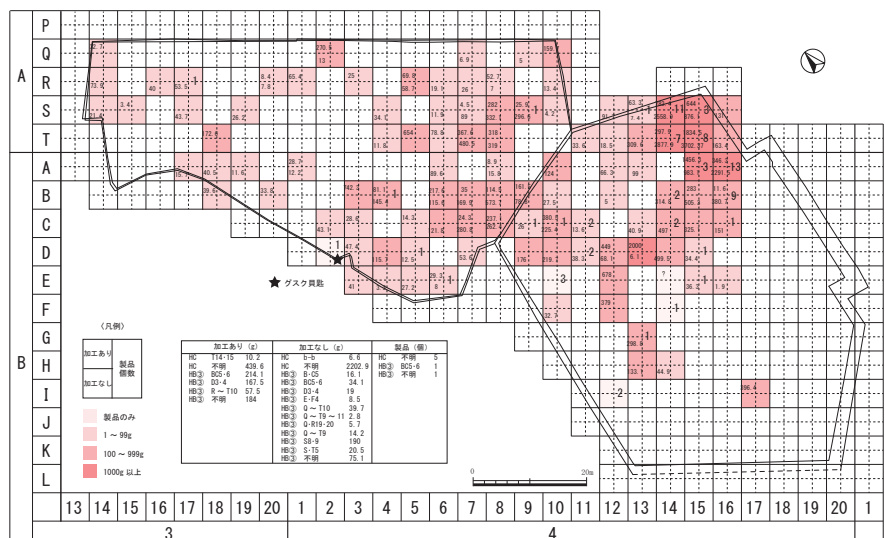
(Ab 大) 図 88 と図 89 の 2 点が得られた。図 88 はほぼ完形で、螺肋を殻と同じ厚さまで削るもので、特に殻の厚い螺肋・上を削り込み、丸みを出す。匙の縁は打割後、研磨する。総じて研磨は顕著で外殻の表層をみると体層側は研磨により部分的に真珠層が露呈する。図 89 は使用された貝は若干小さい。螺肋・上は打割のみの調整であるが、周縁や外殻の表層に研磨が認められる。

(Ab 中) 図 90～92 の 3 点が得られた。図 90 はやや大きめで、身はやや浅く、外唇側が破

損する。そのため、有柄の可能性も考えられる。周縁を大きく割取り、研磨し、外殻の螺肋・上・中・下、滑層部は丁寧に研磨される。図 91・92 はほぼ同じ大きさのヤコウガイを用いる。図 91 は大タイプと同じような形状を示す。周縁は打割が残るが、外殻は螺肋・上・中・下とも研磨される。図 92 は、外唇～体層までを大きく取り込み、周縁は打割し、

第54表 ヤコウガイ製品 (貝匙) 出土量

遺跡	層	分類	背面				腹面		腹面グスク C	合計	未製品	合計
			Aa	Ab大	Ab中	Ac	Ba	Bb				
HC	Ⅲ								0	1	1	
		V	9			1			10	1	11	
	Ⅴ	貝層Ⅲ群	1	1			1			2		2
			1a	1						1		1
			2	1						1		1
			3						1	1		1
			5	19	2	3		3		27		27
		不明	4				1		5		5	
		不明	4						4	1	5	
		HC小計	39	2	3	1	5	1	0	51	3	54
HB	③	Ⅲ							1	1	1	
		Ⅲd					2			2	2	
		HB③小計	0	0	0	0	2	0	1	3	0	3
HC・HB③合計		39	2	3	1	7	1	1	54	3	57	



第125図 ヤコウガイ重量・製品個数 平面分布

外唇はほとんど調整しない。前者の未製品とも考えられる。

Ac (背面型・丸タイプ)：図 93はヤコウガイの背面を丸型に割り取ったもので1点のみの出土である。殻口に身を配し、螺肋・上は加工されていないが、螺肋・中にわずかに研磨が認められる。第137図 81のホシダカラと同じ形状を示し、大きさも近い。

Ba (腹面型・有柄)：ヤコウガイの腹面を用いる点は後述のCタイプと同じであるが、外殻の表層を残す点で異なる。5点得られ、そのうち図 94～97を図示した。

図 95は小形のヤコウガイを用いたもので、Aa大のミニチュアである。図 94はほぼ完形で、外殻の螺肋①の研磨は顕著である。

Bb (腹面型・無柄)：図 98はAbと同じような形状をなすが、ヤコウガイの腹面を用いるためここに分類した。外殻の表層は研磨がなく、周縁は打割調整のみである。未製品の可能性も考えられるが、殻口方向に幅広くなることから、無柄と判断した。

C (腹面型・グスク)：ヤコウガイの腹面を匙状に割取り、外殻の表層を除去し、柄の形状は魚の尾状をなし、身はBaに比べて浅い。図 99と図 100は出土地もHB③ D2 III層と同じであることから同一個体と考えられる。外殻の表層を全て除去するため風化が著しい。平安山原A遺跡(2016)や伊礼原D遺跡(2003)で報告されているが、本品が若干大きいようである。

第55表 ヤコウガイ製品(貝匙) 観察一覧

(質量単位:cm, g)

第図 図版	図 番号	分類	貝殻 使用	部位	残存	横	縦	高さ	観察事項	アハタ	色残	へび	風化	遺跡・グリッド・層 遺構・台(ド・カ)番号
第 137 図 ・ 図版 97	83	Aa	背面	柄	1/2	6.2	10.2	58.0	殻口は厚く大きい貝である。周縁研磨。両面穿孔、孔0.4cm。製1458	○	×	×	×	HC C14 V層(後期層) F3027
	84				1/4	—	—	29.0	殻口、薄手。周縁研磨、上縁に打割の痕跡残る。外殻縁に研磨あり。部分研磨。製1473	○	△	×	×	HC V層 カ391
	85				1/4	5.5	—	27.0	殻口、厚い。周縁研磨。外殻、部分研磨。製1471	○	×	×	×	HC S15 貝層Ⅲ群5 カ149
	86				1/4	4.9	—	34.2	殻口、厚い(0.55cm)。周縁研磨、一端は湾曲強く、先端は扇状。上縁は若干の剥離、外殻一部分研磨。製1472	○	△	×	×	HC C16 V層(後期層) カ718
	87				1/4	6.3	6.3	35.0	殻口。周縁は打割加工。稜・上は打割、・中は摩耗。製1457	△	△	×	△	HC T15 貝層Ⅲ群5 F4610
	88	Ab大	背面	身	完'	9.9	15.5	151.0	外唇～体層。殻大きい、螺肋・上は殻と同じ厚さまで削り、螺肋・下の瘤も研磨。外殻表層の2/3を研磨し、部分的に真珠層露呈。周縁は打割後、研磨。部分的に打割痕が残る。厚みのある滑層部は研磨は2面で稜を残す。製1488	×	△	×	△	HC S14 貝層Ⅲ群5 F4450
	89				完'	7.8	15.1	126.0	外唇～体層。螺肋①は打割。周縁は研磨、外唇は自然。製77	△	△	×	×	HC S14 貝層Ⅲ群5 F4689
第 138 図 ・ 図版 98	90	Ab中	背面	身	2/3	7.4	10.4	86.0	外表残。周縁打割後、研磨。加工の方法が他と異なる。螺肋・上・下の研磨が顕著。柄の部分、破損後研磨。製1482	△	△	△	△	HC T15 貝層Ⅲ群5 F4497
	91				完	6.1	10.2	63.1	外表残。周縁打割、稜は研磨、平ら。製1476	○	△	×	×	HC 貝層Ⅲ群5 カ1522
	92				完	7.5	10.6	111.0	外表残。周縁打割。殻軸の打割顕著。75cc。製1481	×	△	×	△	HC A16 貝層Ⅲ群5 F3602
	93	Ac	背面	身	3/4	6.1	7.3	31.0	殻口。周縁は打割後、調整、やや丸味か。螺肋・中にわずかに研磨。ホシダカラ(図81)と同じサイズ。製1455	△	×	×	△	HC C11 V層(後期層) カ3386
	94	Ba	腹面	柄～身	完	5.1	8.7	52.0	外表残。周縁打割、粗い。柄と身の境を「U」字状に挟る。縁・打割顕著。製1479	×	△	×	×	HC S14 貝層Ⅲ群5 F4283
	95				1/2	—	4.7	25.9	腹面、外表有。周縁研磨。柄の中央に径0.3cm、内殻→外殻に回転穿孔、片側の柄に穿孔あり、破損。柄は「V」字状に挟る。製948	×	△	×	×	HB③ S9 III d 台1759
	96			身	1/5	1.5	—	3.8	腹面。周縁研磨。製1445	×	×	×	×	HC S14 貝層Ⅲ群1 カ336
	97	1/3	4.6		3.3	6.1	周縁打割。螺肋摩耗。ほか加工無し。製91	×	△	×	×	HC B14 貝層Ⅲ群不明 カ443		
	98	Bb	腹面	身	2/3	4.4	7.9	28.0	体層奥、小さい貝。周縁打割、粗割、他加工なし。周縁は内殻から外殻に加工か。製1456	△	×	×	△	HC T15 貝層Ⅲ群3 F4537
	99	C	腹面	柄	1/2	3.1	—	12.5	周縁研磨。内殻は表層残。柄は「V」字状に挟り、魚の尾鱗に類似。製629	×	×	×	○	HB③ D2 III (12) 台1005
100	身				1/2	4.7	4.0	14.5	周縁研磨。内殻は表層残。身の中央に螺肋の痕跡あり。製628	×	×	×	○	HB③ D2 III (12) 台1005

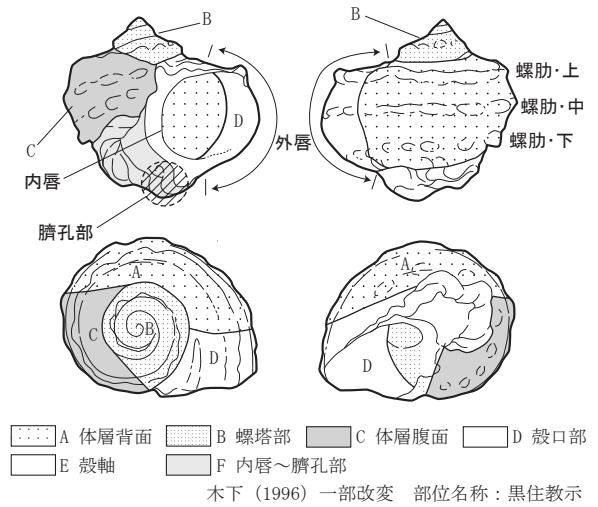
完':ほぼ完形 ○:普通 △:少 △:僅少 ×:なし 製:貝製品番号 「出土地」F:ドット取上番号 カ:貝番号

打割・未製品：ヤコウガイの殻の殻頂および螺肋・上を打割したもので、3点出土した。上記製品のAaタイプの製作第一段階と想定されるもので図101を示した。臍部も打割が施されている。

***ヤコウガイの割れ方**

平安山原A遺跡と同じようにヤコウガイの自然貝をまとめた。第56表によると自然貝は343点、一部打割の確認されるもの88点でその総重量は37,015g、平均85.8gである。地区別にはHCで298点、重量37,339g、HB③は133点、重量9,676gである。貝層Ⅲ群のS16、T14・15、A15・16に集中する。ヤコウガイの貝匙や容器も同じように貝層Ⅲ群に集中する。HB③では製品や自然貝の出土量は少ないが、100g以上の出土は他の遺物と同じようにS9周辺に集中する。

完形は5点のみで、他は破片である。加工の痕跡



第126図 ヤコウガイの部位名称と割れ方

第56表 ヤコウガイ分類（加工痕有り・自然貝）出土量

遺跡	層	加工 遺構	加工痕有り									自然貝										合計		
			A	B	C	D	E	F	B+D	E+F	完	合計	A	B	C	D	CD	E	B+D	E+F	F		完	合計
HC	V	I										0										0	0	
		II										0		1									1	1
		IIc	遺構									0	1										1	1
		III										0											0	0
		IV										0											0	0
	V	貝層Ⅰ群	b									0				1							1	1
			c		1							1											0	1
			d									0			1								1	1
			f									0				3					5		8	8
			g									0				1							1	1
			h									0					1						0	0
			i									0									1		1	1
			—									0											0	0
			貝層Ⅲ群	1		1		1					2			1	1		1			1		4
		1a					1					1				1		2			4		7	8
		1b										0			1	2		3			1	5	12	12
		2		1		1	2		1			5	1	2	1	7					2		13	18
		3		1			1			1		3			6		3				4	1	14	17
		4					4					4	2	3		6		4			1		16	20
		5	2		2				5		11	6	5	8	45				3	22	3	92	103	
—	1								2		1		1				1	1		4	6			
貝層Ⅳ群									0							1					1	1		
貝層Ⅴ群									0				2			1			2		5	5		
不明		1	1	1	1	1			5	2	2	1	11		2				7		25	30		
HC 小計		7	3	4	12	1	7	1	4	0	39	15	22	17	101	0	21	0	6	73	4	259	298	
HB③	I							1		1				1						1		2	3	
	IIa									0											0	0		
	IIb									0											0	0		
	IIc							1		1				1							1	2		
	III (V)		4	2	4	2	4	1		17		3	4	11	2	1			8		29	46		
	IIIa		2		1		2			5	1	1		2		1			3		7	12		
	IIIb				1		2			3	1	1		1					2		5	8		
	IIIc (V)		1		2		6			9	1	1	2	2	1				5		11	20		
	III d (V)		1	1	2	1	3	3		11	2	2	1	8		4	1		5		23	34		
	IV									0											1	1		
不明					2				2				2	1			1		1		5	7		
HB③ 小計		1	8	4	11	2	19	4	0	49	3	8	9	27	3	6	2	0	25	1	84	133		
HC・HB③合計		8	11	8	23	3	26	5	4	88	18	30	26	128	3	27	2	6	98	5	343	431		

遺構 HC IIc:P01

の見えるものはHCよりHB③の方が多いためである。残存部位は加工痕有りも自然貝も「D」(殻口)が多く、「F」(臍孔部)と続く。これらの部位はヤコウガイの中でも肉厚で残りのいい部分である。

以上のことからHC・HB③とも加工痕があること、自然貝も割と多いことから在地でヤコウガイ匙に加工、食用でもあり、肉量のある有用貝である。また、蓋の大きさから(第122図)ヤコウガイは大～小まで採集していたようである。貝匙でも小ぶりのものを製作している。また、第126図に示したように製品を取るために螺肋・上を打割調整することは定型化していたようである。

9. タカラガイ製品

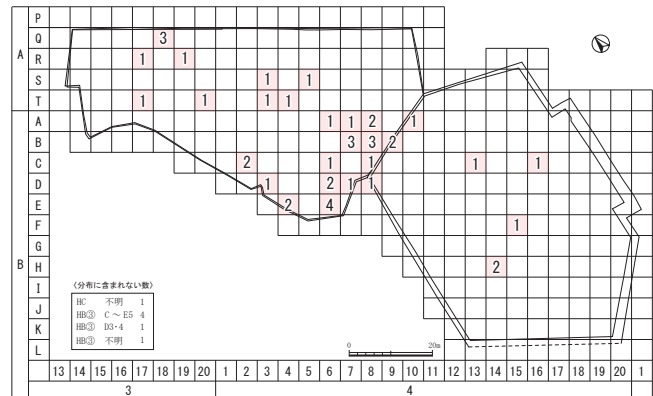
ハナマルユキやハナビラダカラなどの小形タカラガイの背面を除去し、整えたもので民俗事例から網の錘とされるものである(岸上1971・上江洲1973)。貝種はハナマルユキが一般的であるが、稀にヤクシマダカラやハナビラダカラやキイロダカラなどが出土する(島袋2003)。

出土地をみるとHCではハナマルユキ5点、HB③ハナマルユキ44点、ハナビラダカラ3点の計47点である。層別にはHCではV層で1点、Ⅲ群Ib層で1点、不明3点、HB③ではⅡa層1点、Ⅱc層3点、Ⅲ層12点、Ⅲa層17点、Ⅲb層3点、Ⅲc層1点、不明5点の出土で大半はグスク期の出土である。平安山原A遺跡や平安山原B遺跡と同じような傾向を示すことから、V層出土のものは上層からの混ざり込みか取り上げ時のエラーと思われる。

ハナマルユキ・ハナビラダカラを合わせた加工をみると、殻軸有(A)23点、半欠(B①)12点、欠(B②)12点で、その割合も平安山原A遺跡(2016)・平安山原B遺跡(2015)と同様な傾向を示す。主なものを図と観察一覧を示す。

第57表 タカラガイ製品 出土量

遺跡	層	貝種	ハナマルユキ			ハナビラダカラ			合計
			A	B①	B②	A	B①	B②	
HC	V		1						1
	V	貝群Ⅲ層		1					1
		不明	1		2				3
		HC 小計	2	1	2	0	0	0	5
HB③	Ⅱa				1				1
	Ⅱc		1	2					3
	Ⅲ		8	2	2				12
	Ⅲa		5	5	6		1		17
	Ⅲb		1	1		1			3
	Ⅲc							1	1
	V		1						1
		不明	4						4
	HB③ 小計	20	10	9	1	1	1	42	
	HC・HB③ 合計	22	11	11	1	1	1	47	



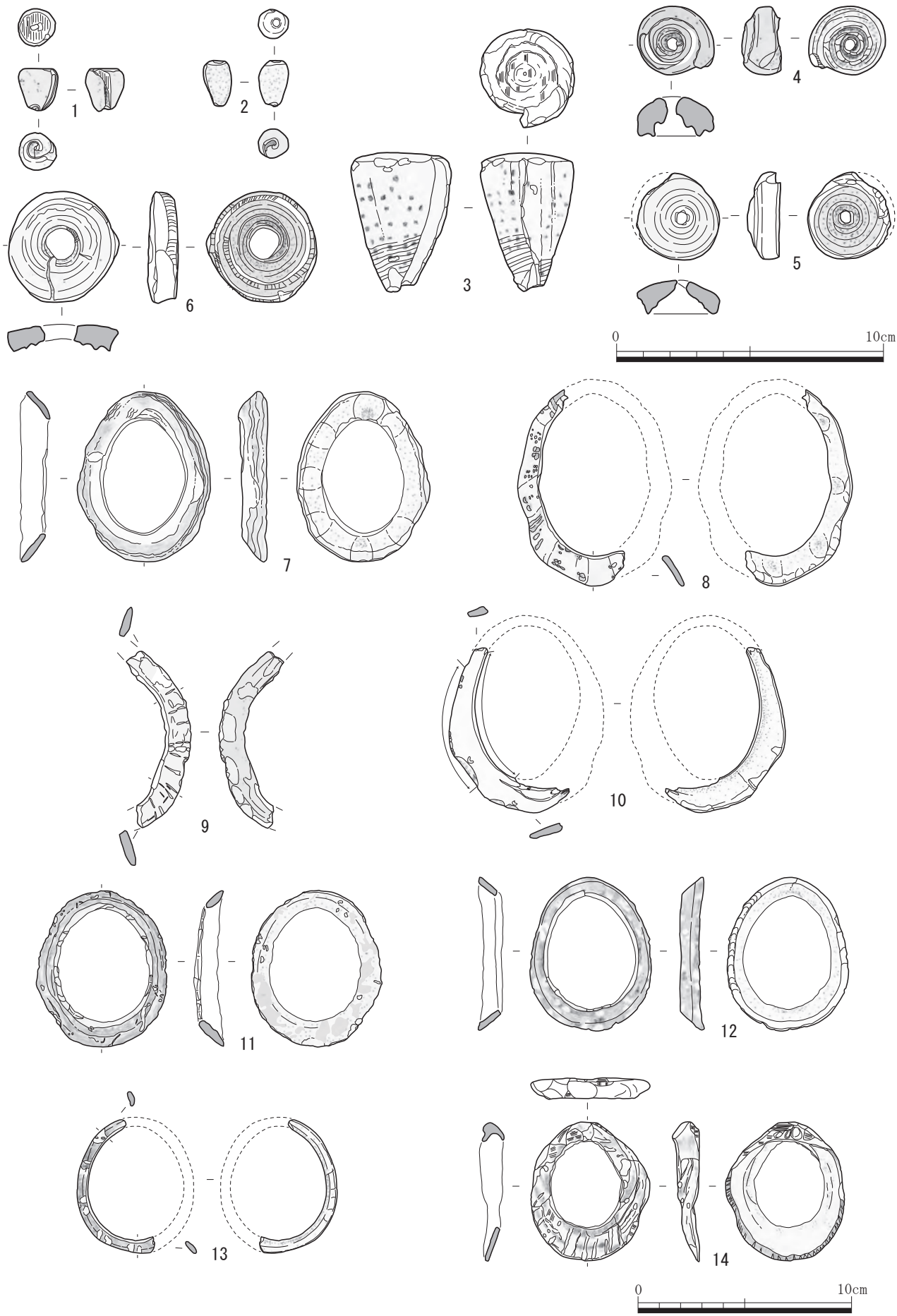
第127図 タカラガイ製品 平面分布

第58表 タカラガイ製品(貝錘) 観察一覧

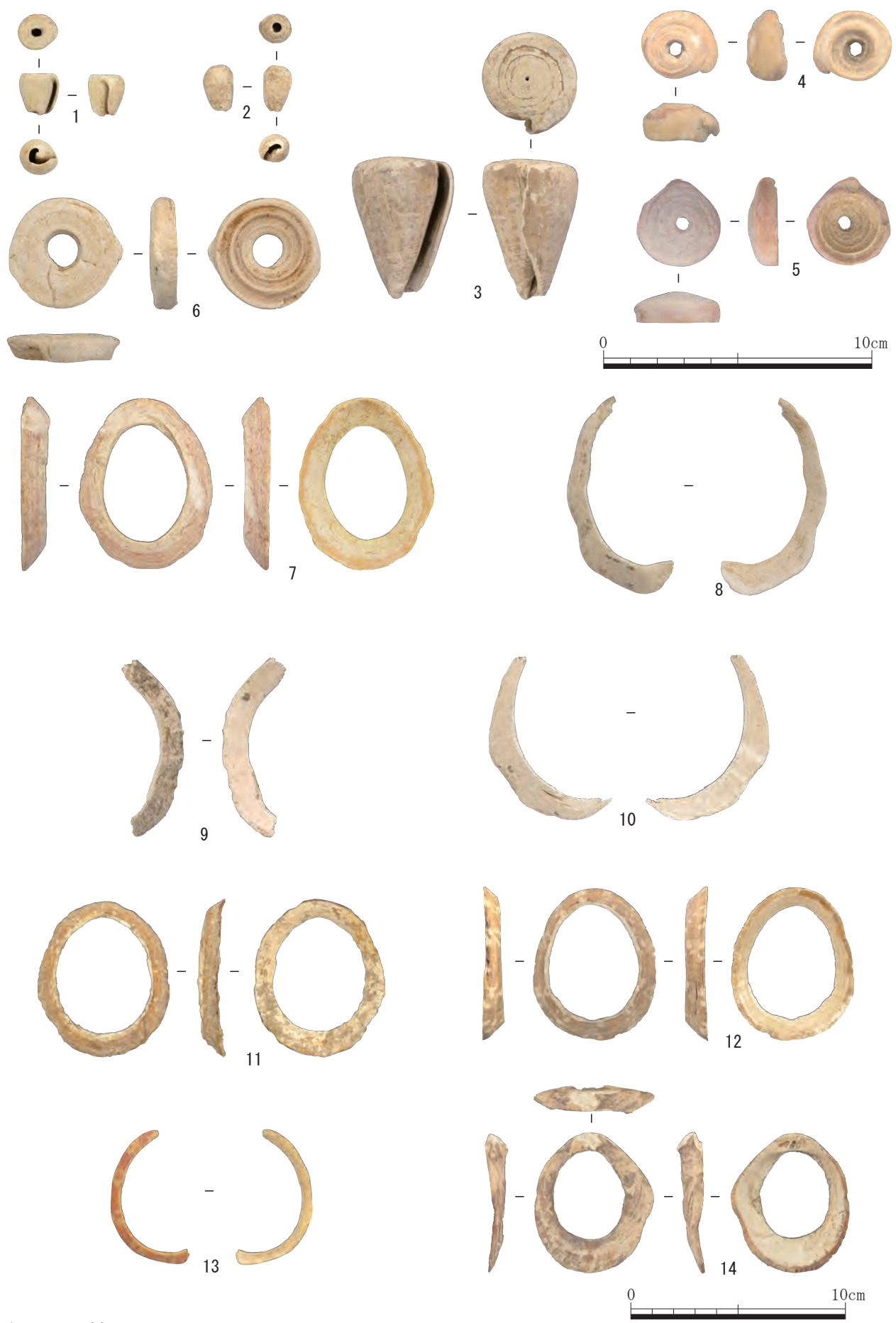
(法量単位:cm, g)

第図 図版	図 番号	貝種	完 破	殻長 横	殻高 縦	重さ	観察事項	色残	摩耗	風化	遺跡・グリッド・層 遺構・台(ド・カ)番号
第 138 図 ・ 図 版 98	102	ハナマルユキ	完	2.5	3.3	7.3	殻軸欠。B②。製1450	×	×	○	HC Ⅱ層 739
	103	ハナマルユキ	完	2.5	3.2	5.4	殻軸欠。B②。製477	×	△	○	HB③ R17 Ⅲa 台297
	104	ハナマルユキ	完	2.5	3.3	7.3	殻軸半欠。B①。製478。	△	×	△	HB③ E6 Ⅲa 台263
	105	ハナマルユキ	完	2.5	3.3	6.8	殻軸有。A。製463	×	△	○	HB③ B8 Ⅲ(12下) 台1596
	106	ハナマルユキ	完	2.3	3.2	5.6	殻軸有、一部欠。B①。製457	△	×	○	HB③ T17 Ⅲa 台276
	107	ハナビラダカラ	完	2.4	1.8	2.4	殻軸欠。B②。製484	△	×	△	HB③ R19 Ⅲd(14) 1264

○:普通 △:少 △:僅少 ×:なし 「出土地」ド:ドット取上番号 カ:貝番号



第128図 貝製品1



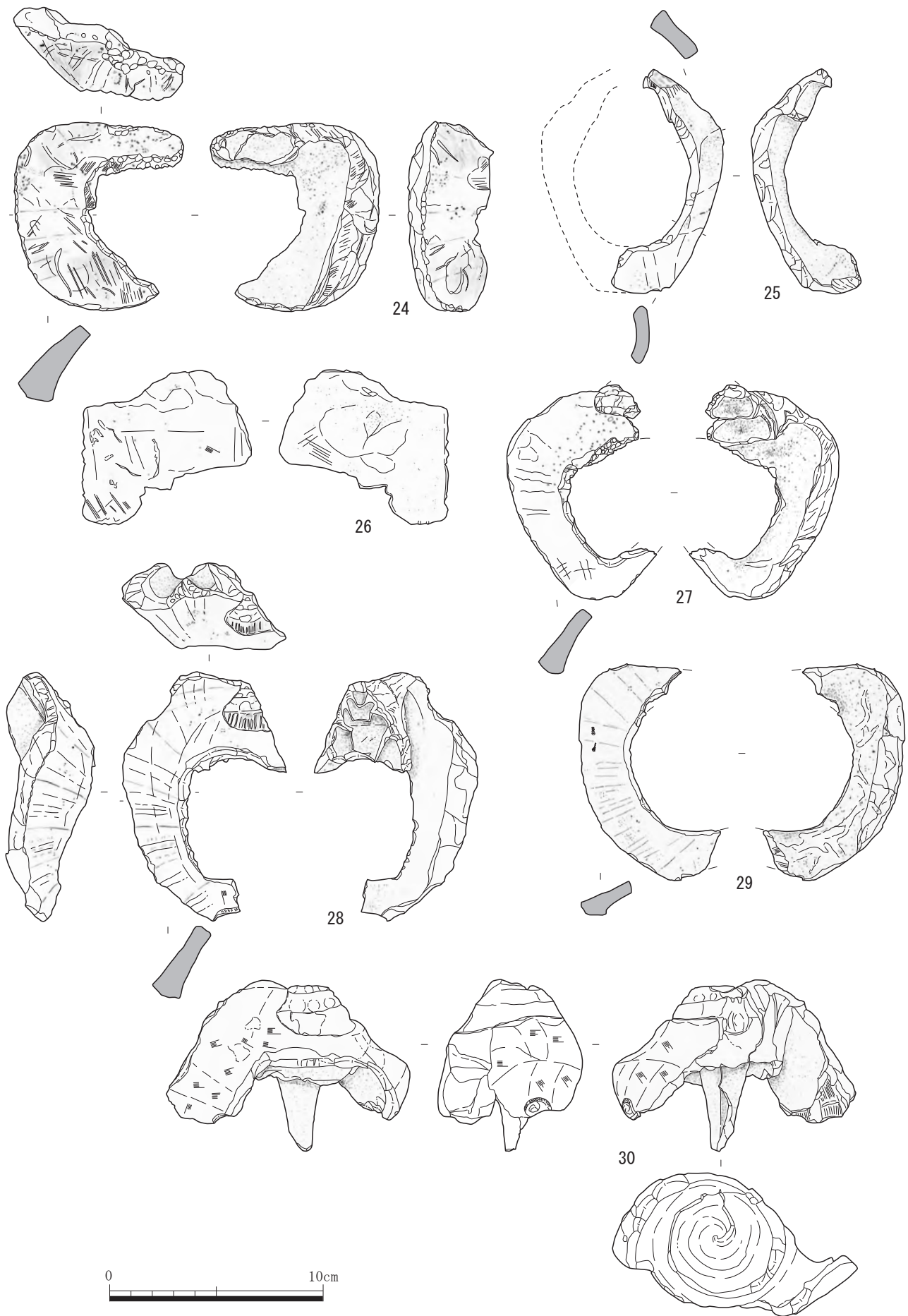
図版 89 貝製品 1



第129図 貝製品2



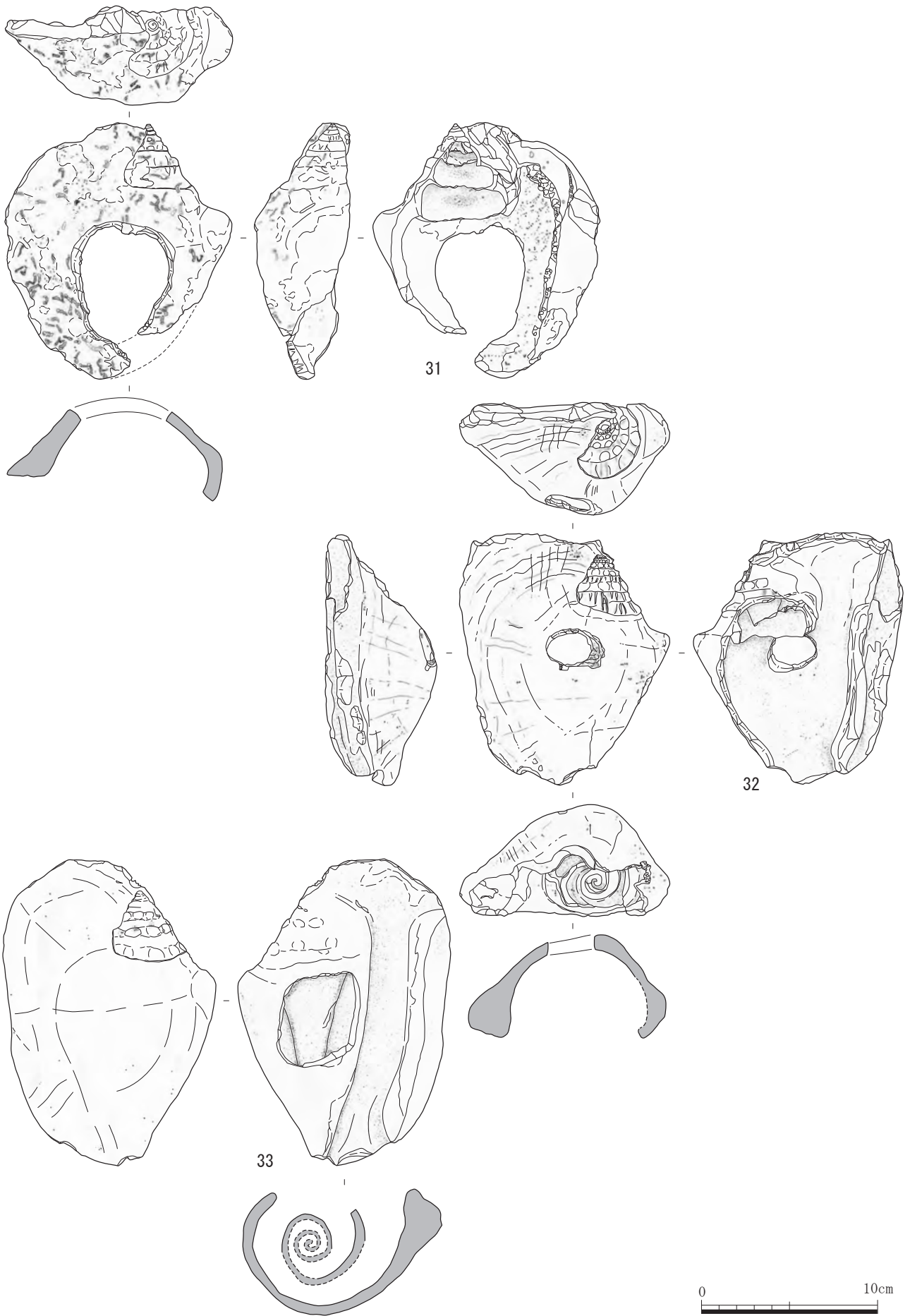
图版 90 貝製品 2



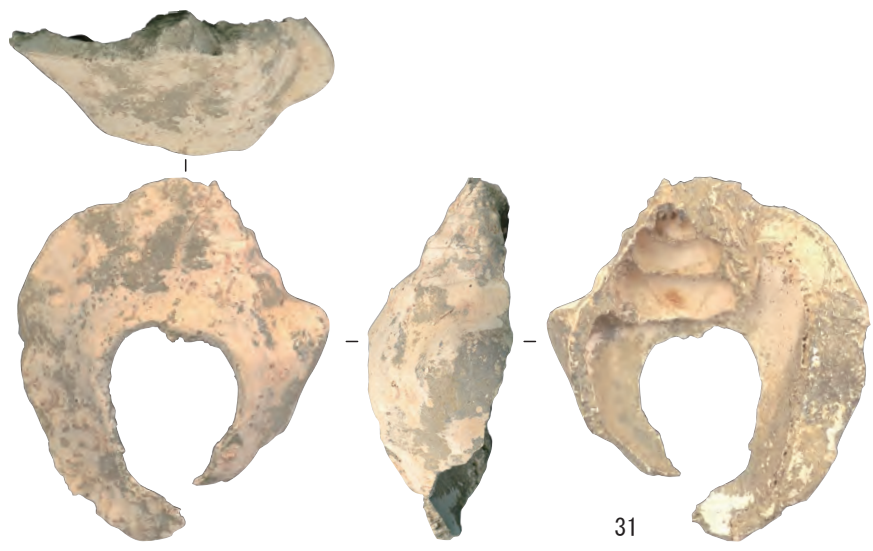
第130図 貝製品3



图版 91 貝製品 3



第131図 貝製品4



31



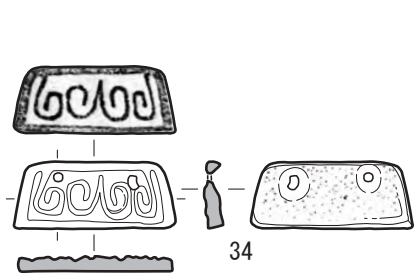
32



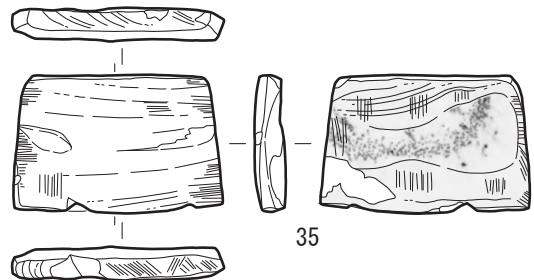
33



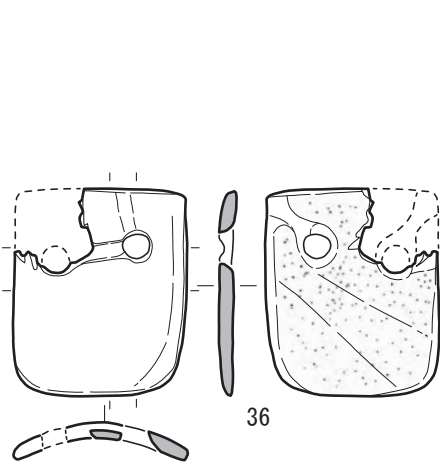
図版 92 貝製品 4



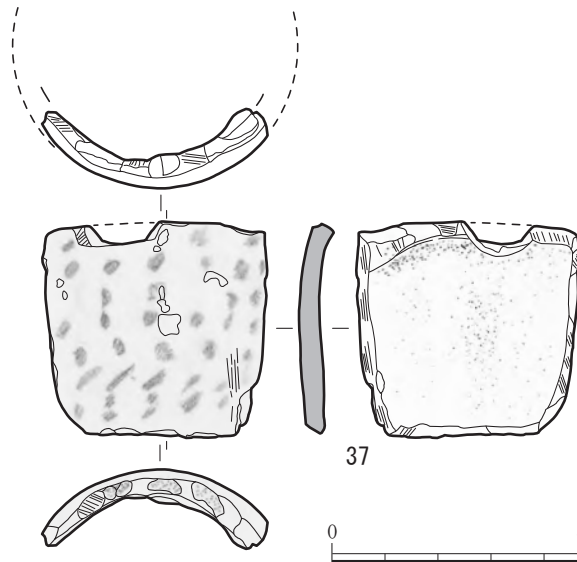
34



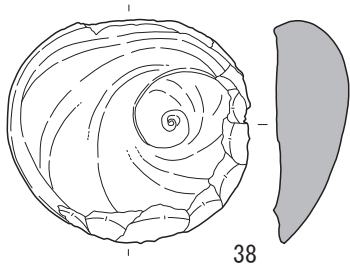
35



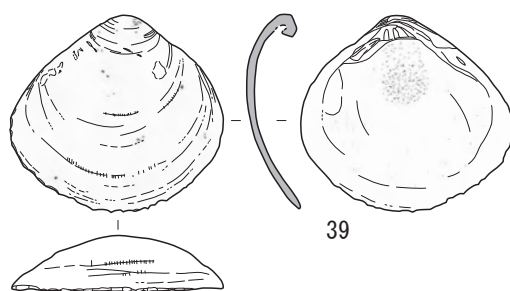
36



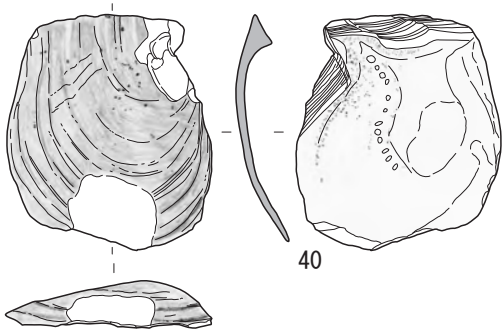
37



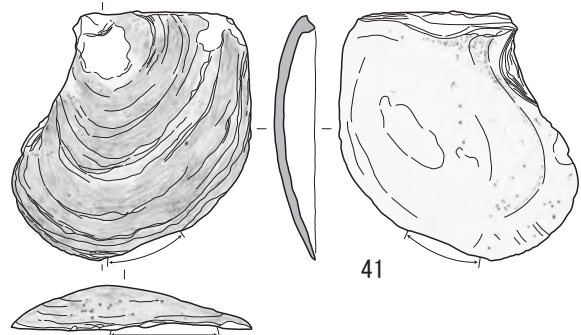
38



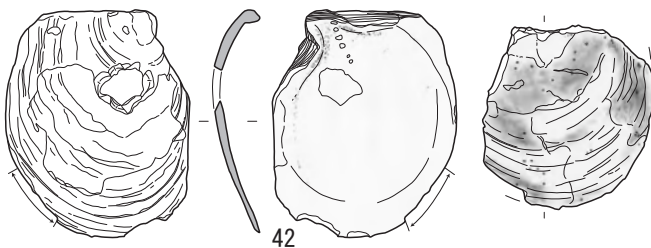
39



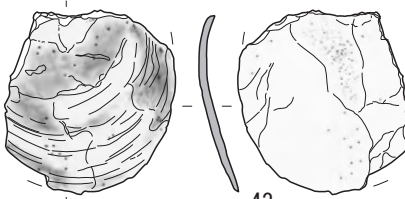
40



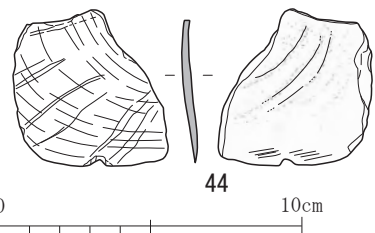
41



42



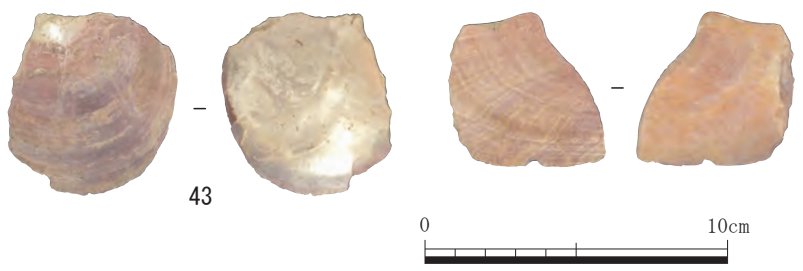
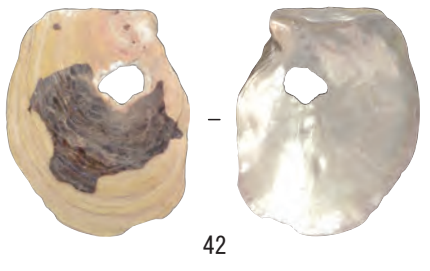
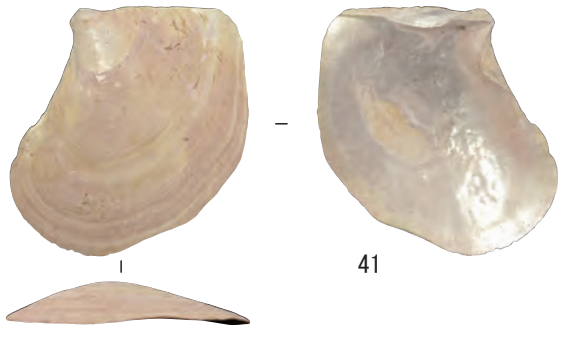
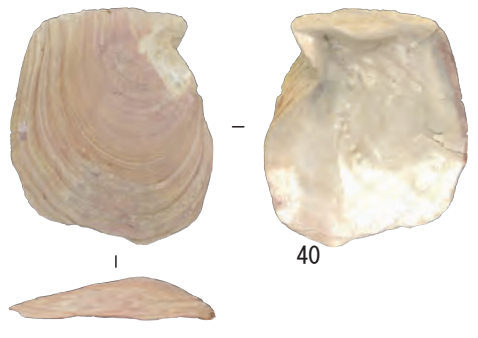
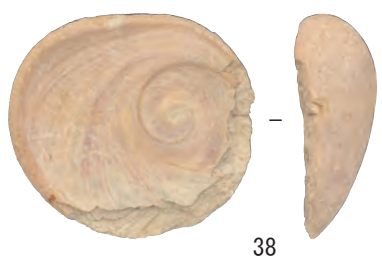
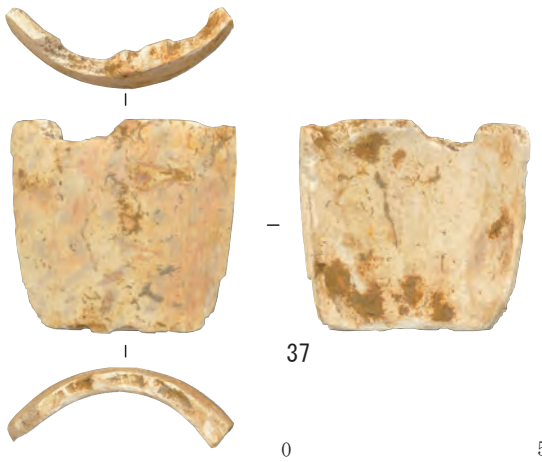
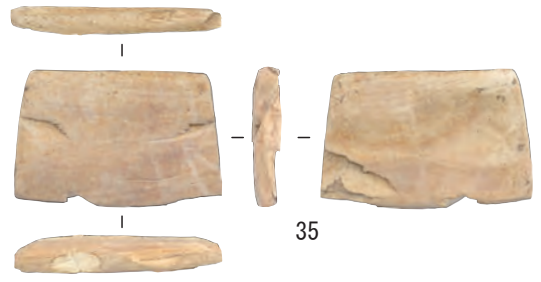
43



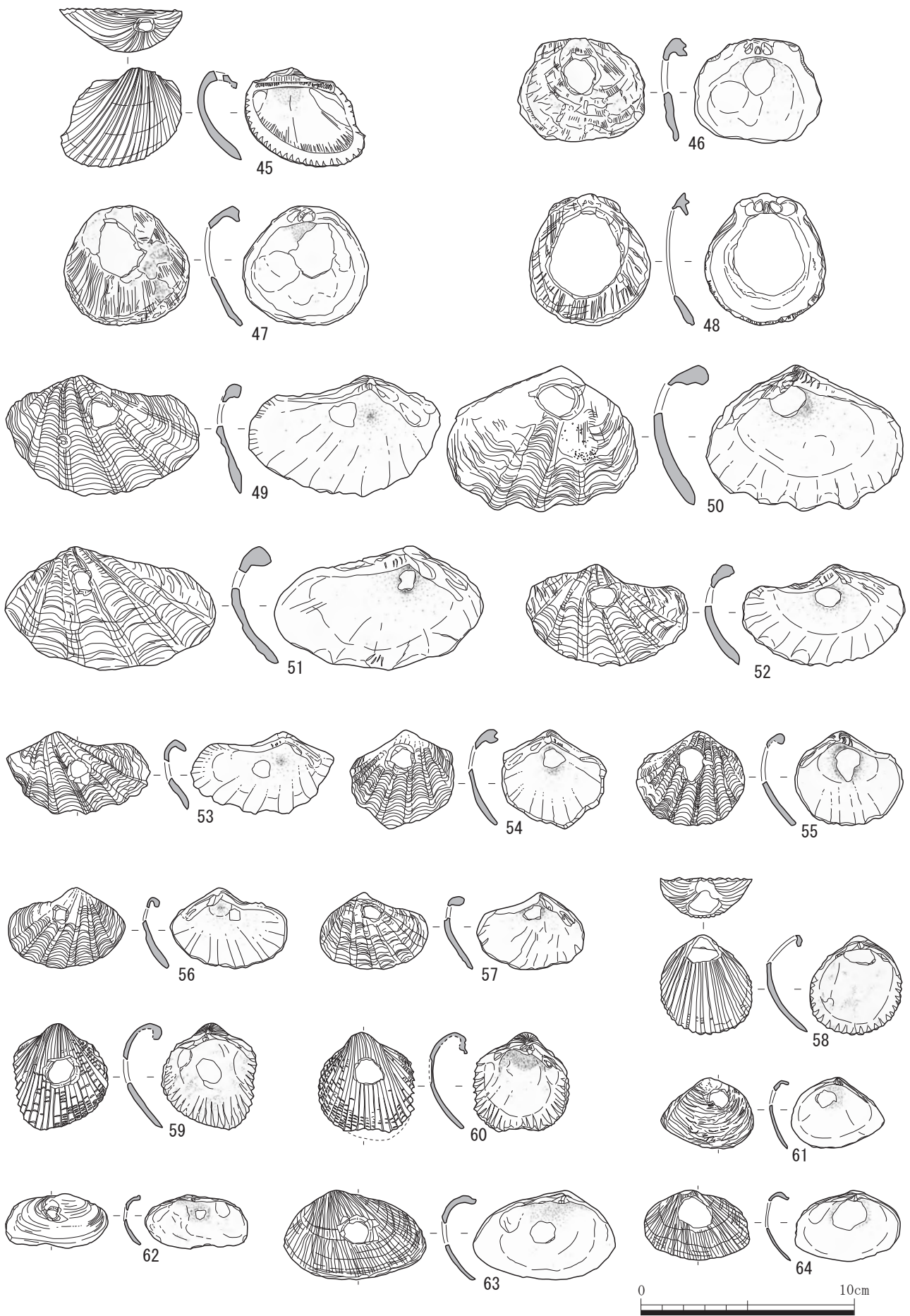
44



第132図 貝製品5



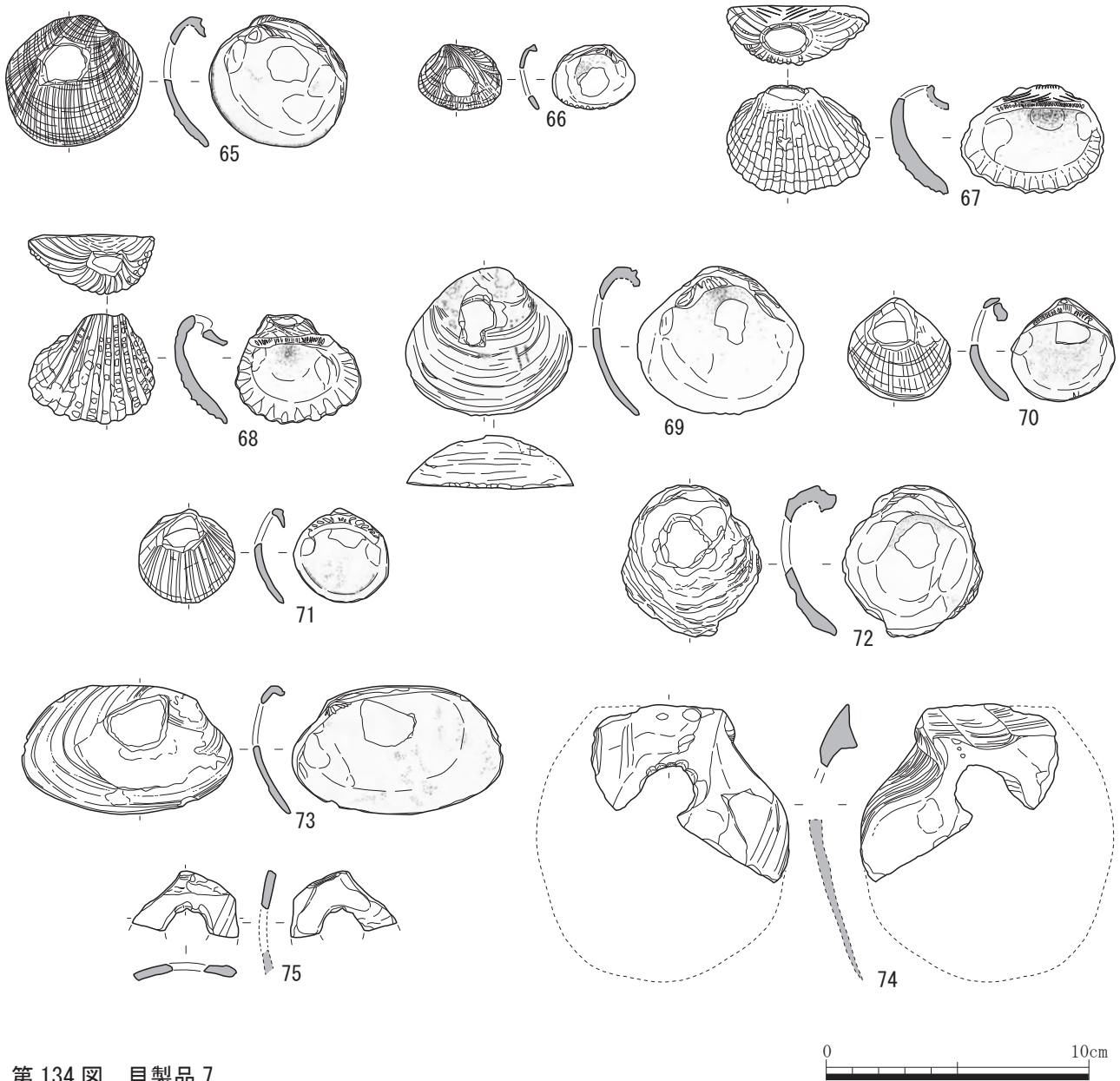
图版 93 貝製品 5



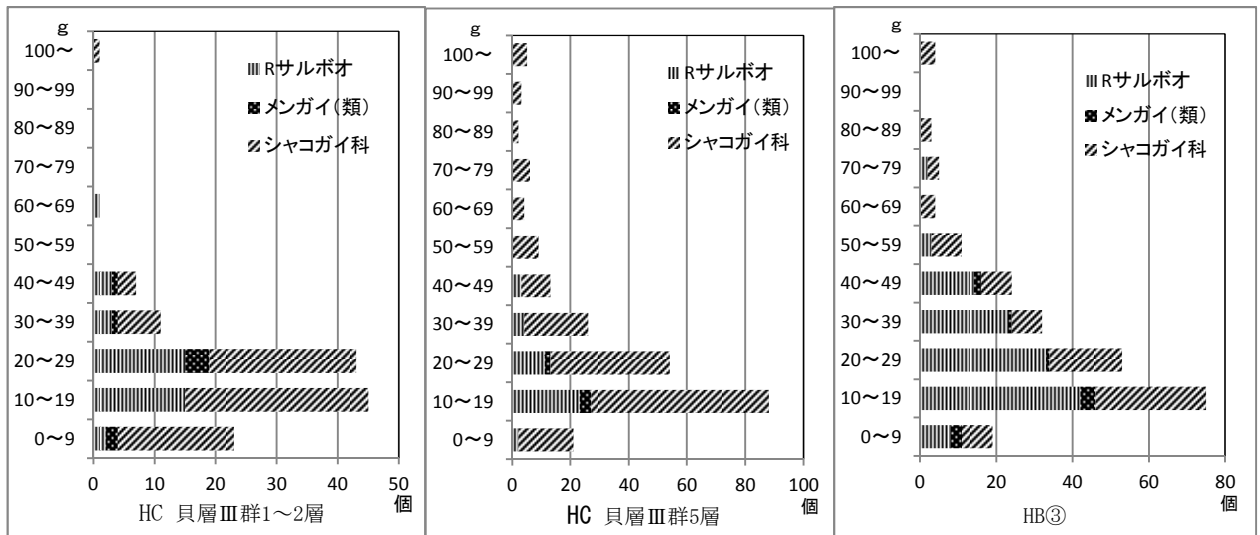
第133图 貝製品6



図版 94 貝製品 6



第134図 貝製品7



第135図 二枚具有孔製品 地区別重量比較

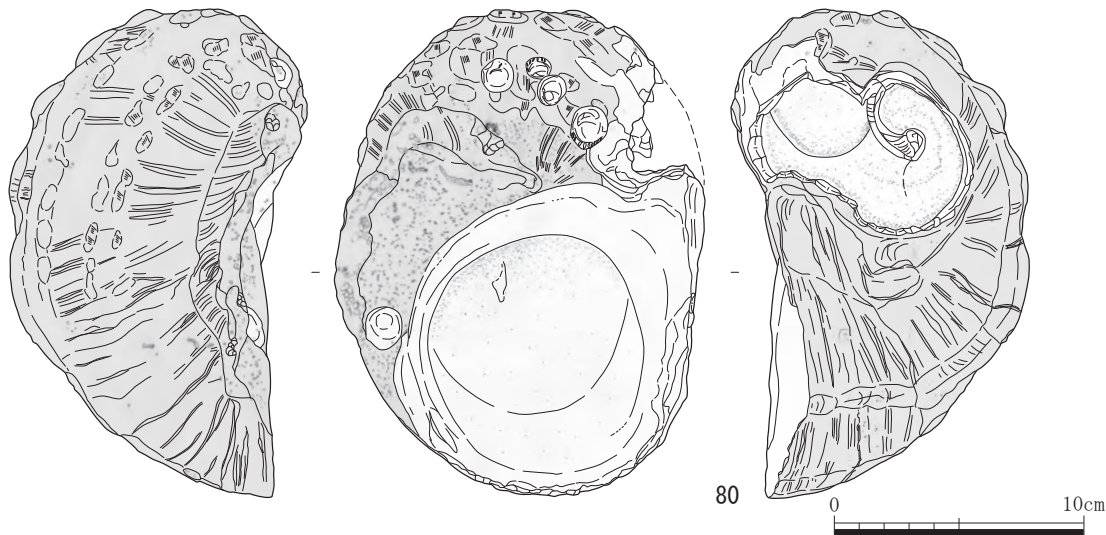
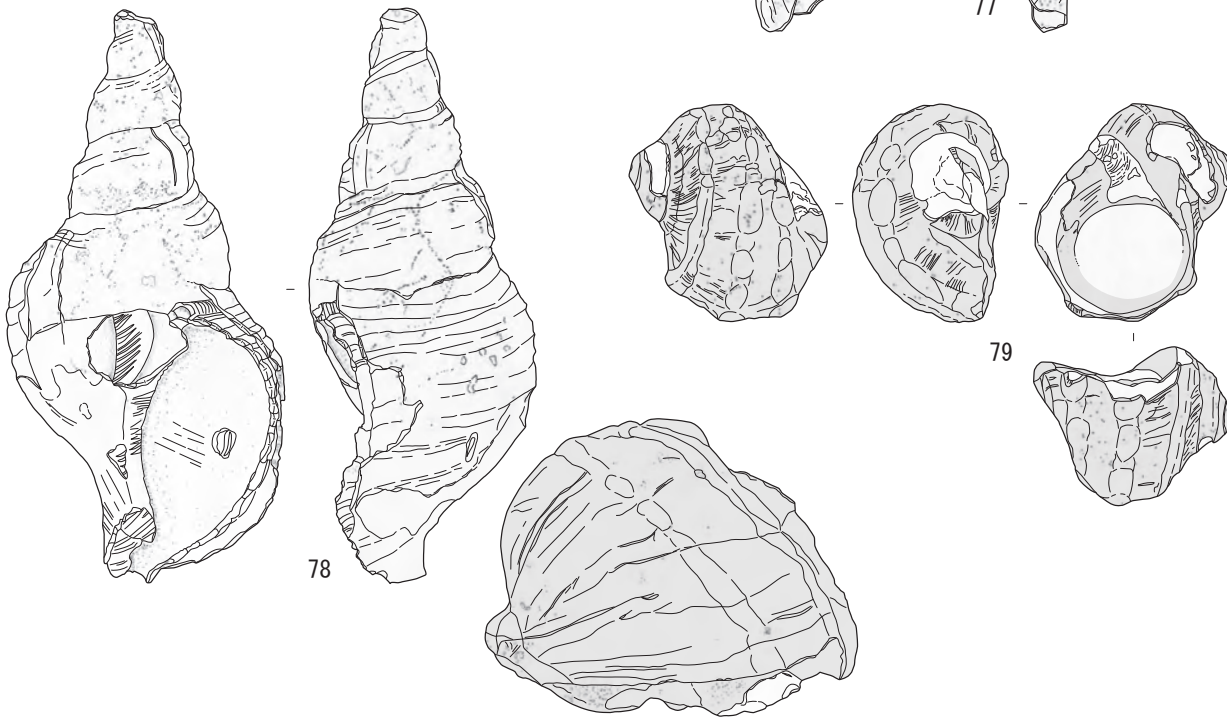
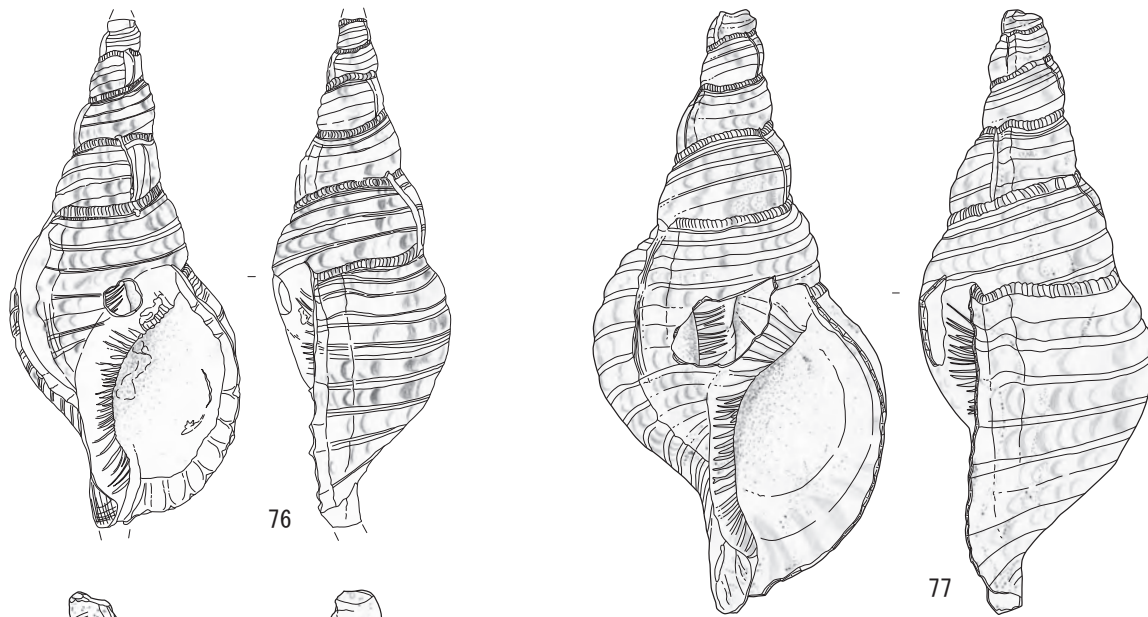


図版 95 貝製品 7

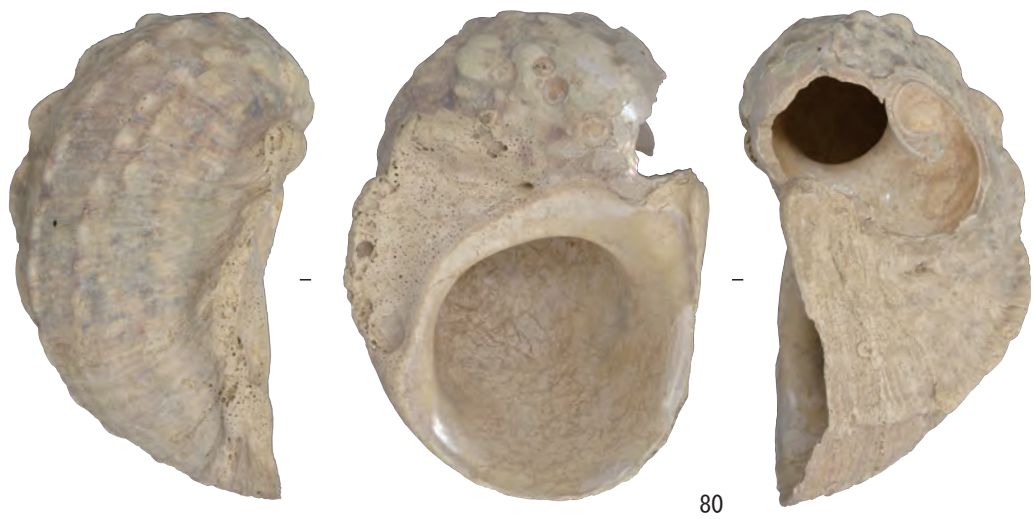
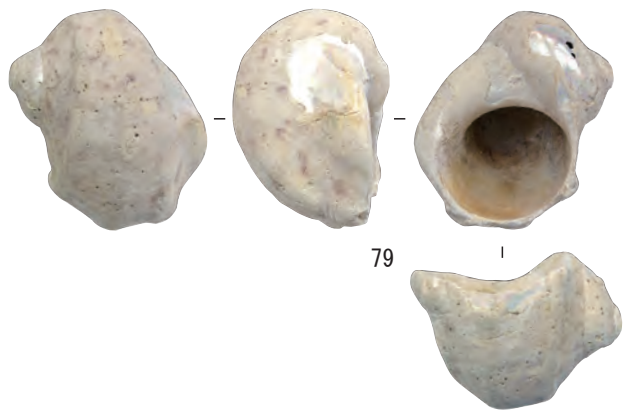
第59表 二枚貝有孔製品の属性

貝種	Rサルボオ	メンガイ(類)	シヤコガイ科	Rザルガイ	カワラガイ	Rシラトリ	Rマスオ	ヌノメガイ	ホソスジイナミ	スタレハマグリ	クロチョウガイ	ハイガイ	シレナシジミ	マスオガイ	Rアサリ	ウチワガイ	エガイ	キクザルガイ科	クチベニツキガイ	ソメワケクリ	イソハマグリ	ハナマルユキ
平均重量(g)	21.6	22.4	30.6	6.1	11.8	2.7	8.6	23.6	2.4	4.05	18.44	25.1	22.7	2.5	12.6	4.8	6	23.5	23.5	5.7	0.8	6.4
示数	1.1	1.5	1.4	2.5	1.7	5.0	2.5	1.3	3.0	3.1	2.5	0.8	1.6	5.4	3.2	2.4	2.7	1.0	1.4	2.2	5.0	1.2
可能性	●	●	●	▲	▲		▲	▲			▲		▲			▲		●	▲			●
備考	民俗事例有	奄美でヤコウガイ有孔と一括で出土	民俗事例有		貝塚時代前V期の遺跡で出土				奄美で出土例あり		備瀬貝塚一括	絶滅種	貝刃の製品もあり			奄美でヤコウガイ有孔と一括で出土				奄美でヤコウガイ有孔と一括で出土		民俗事例有

R:リュウキュウの略 ●:可能性高い ▲:可能性ややあり 係数:平均重量÷平均の大きさ



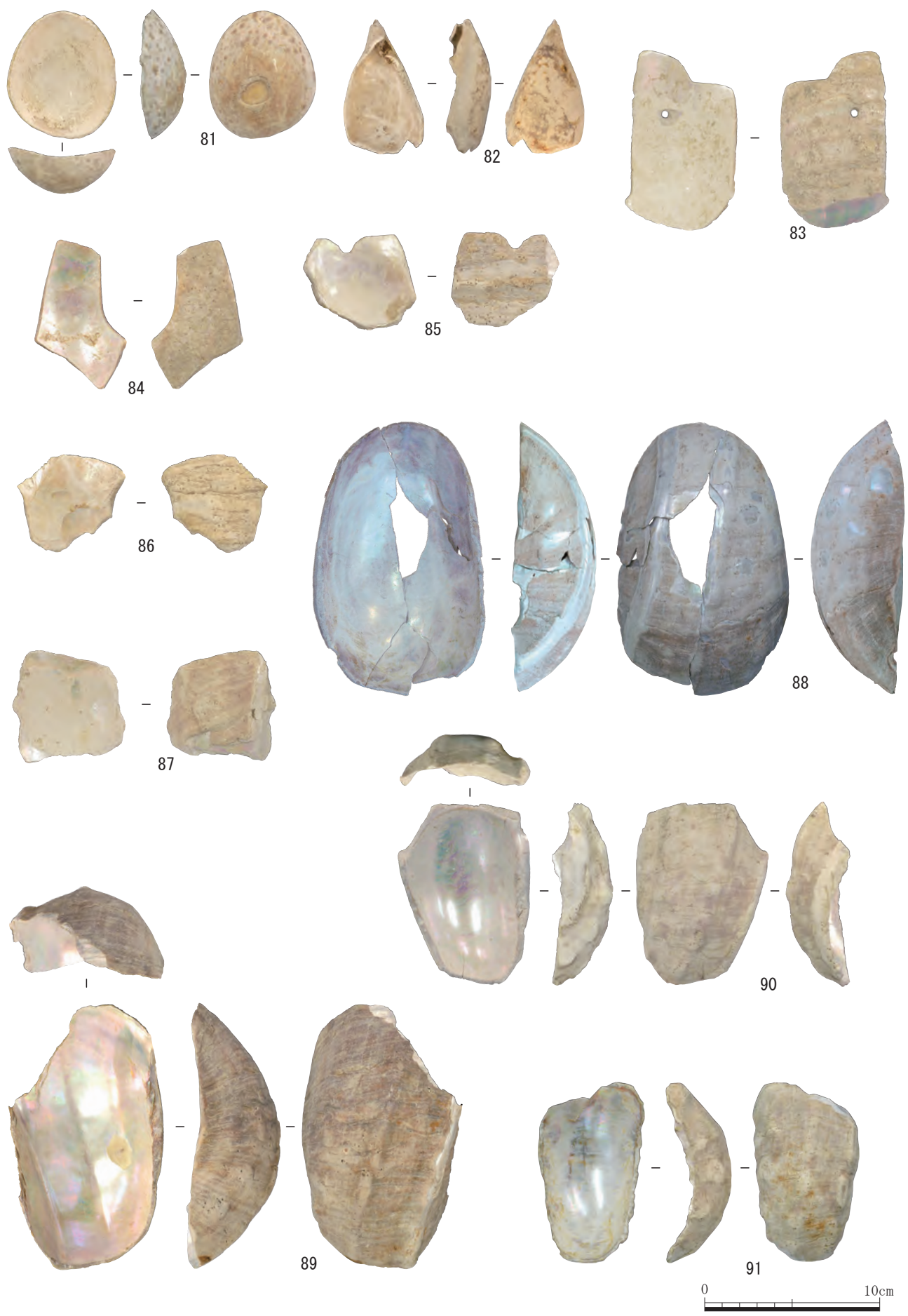
第136图 貝製品8



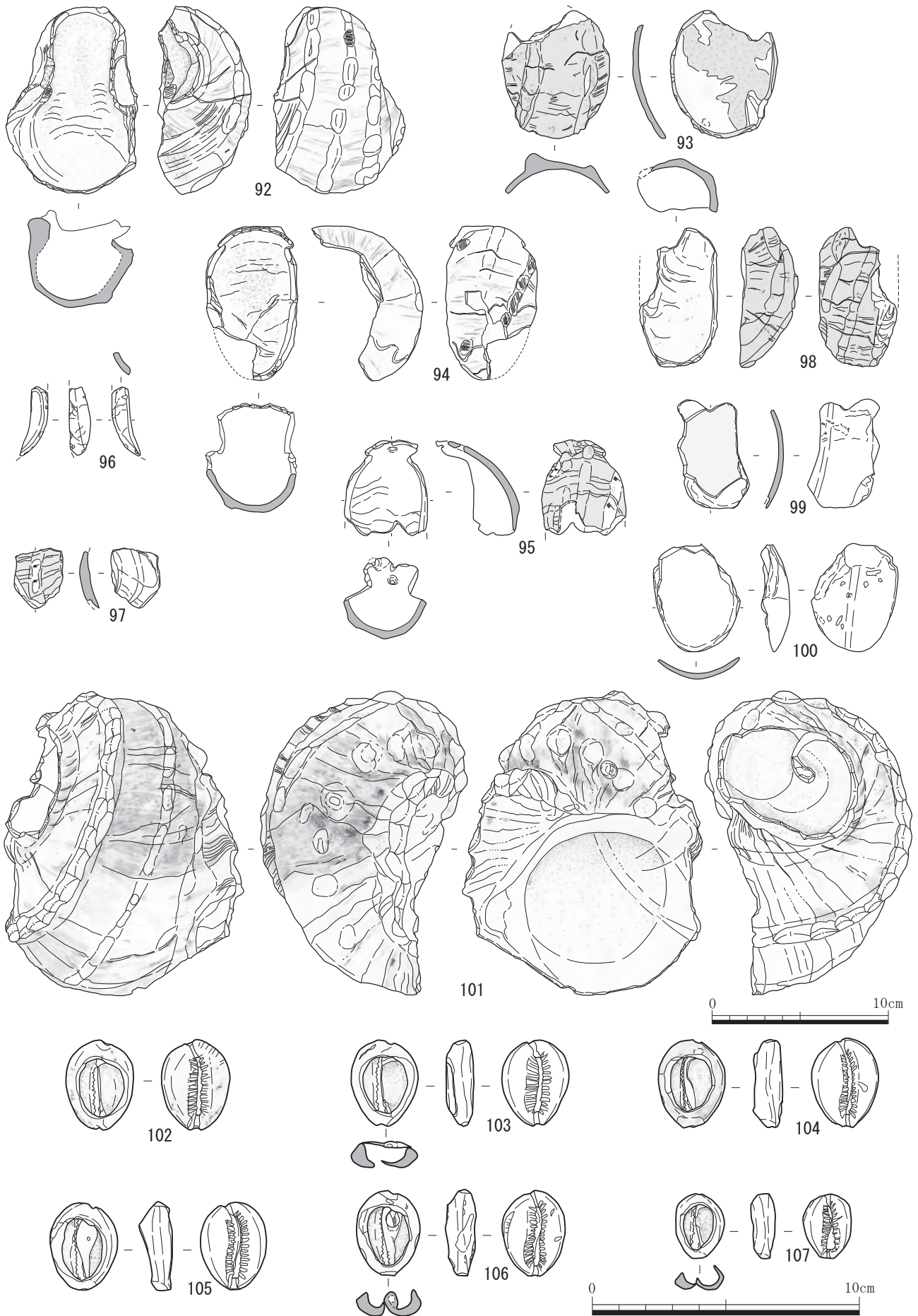
図版 96 貝製品 8



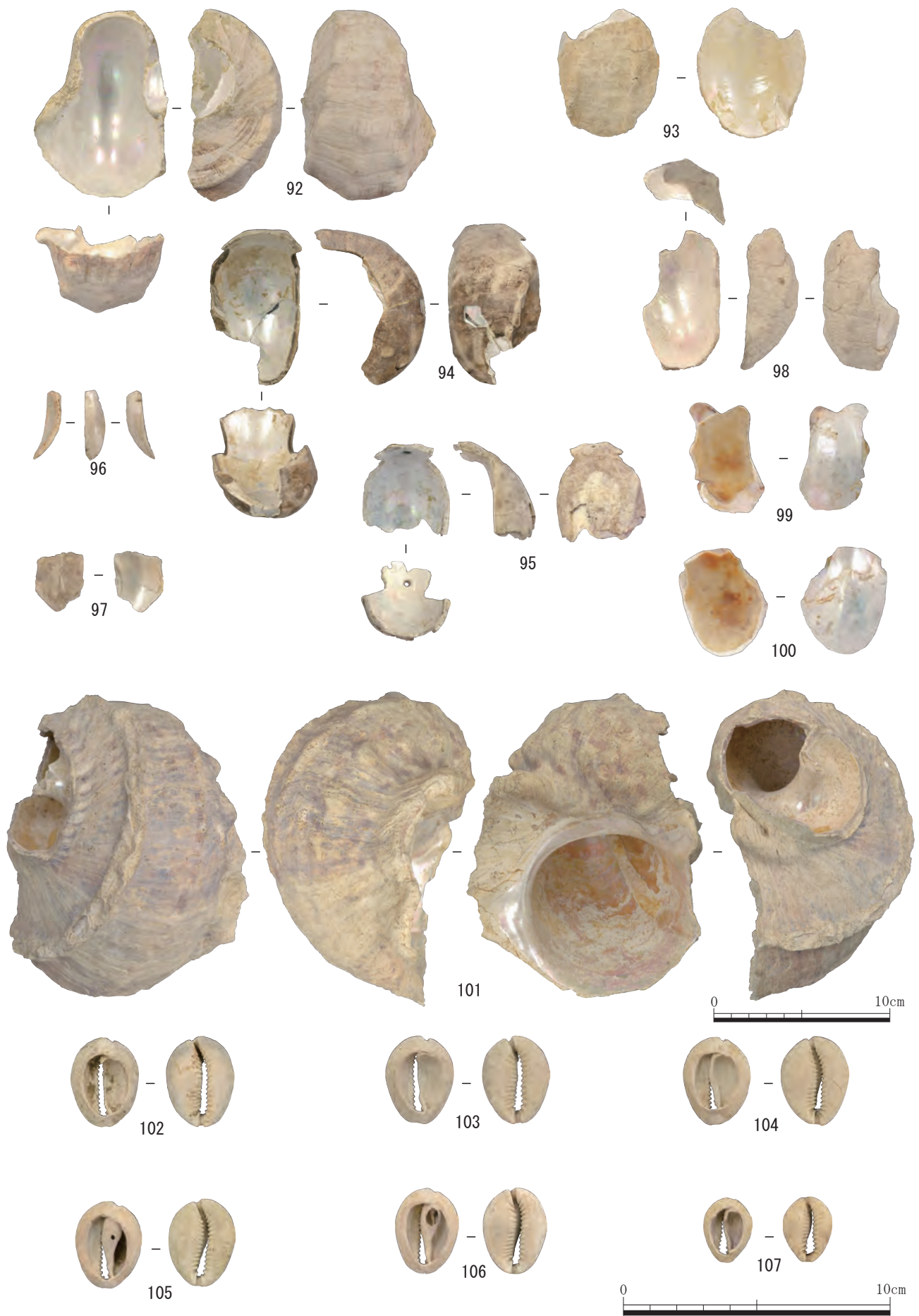
第137图 貝製品9



图版 97 貝製品 9



第138图 貝製品10



图版 98 貝製品 10

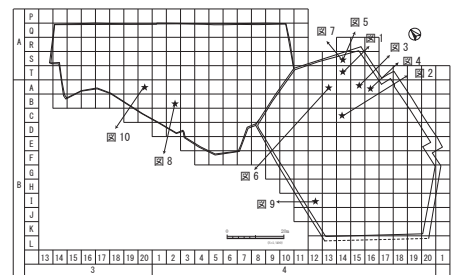
(4) 骨製品

HCで8点、HB③で2点の計10点の出土である。出土地をみるとHCのV層で2点、貝層Ⅲ群4層で1点、5層3点、貝層V群で1点、不明1点の出土である。HB③はI層とⅢa層で各々1点出土した。装飾品が1点、実用品6点、用途不明3点である。以下、各々について略述する。

装飾品は図1のエイの脊椎の中央を穿孔し、周縁を整えたものである。本品の出土例は喜友名グスク(1999)がある。大きさを比較すると本品が大きい。HC貝層Ⅲ群4層の出土。

実用品は骨鏃1点、骨針3点、錐2点の計6点の出土である。**<骨鏃>**図2は化石サメ歯(ホホジロザメ)を加工したものである。二等辺三角形の両縁と基部をカットし、有茎にしたものである。化石で歯は堅く、鏃として用いたものと思われる。化石サメ歯は未加工品が伊礼原E遺跡(2010)で出土している。島尻層群の露頭部で入手できる(島袋1987)ようで、本町にも島尻層群は分布することから周辺で入手したと思われる。**<骨針>**イノシシの腓骨を用いたもので、3点とも頭部は欠損する。針先の加工は各々異なる。図3はほぼ完形で、近・遠位端を加工、頭部も研磨される。針先はへら状を呈する。研磨痕が縦位に見られる。図4・5は骨体の一端を加工したもので、図5は針の先端を6面に削られ、その境は明瞭である。図1のエイの孔に大きさが一致することから、穿孔具の可能性も考えられる。図3はHC貝層V群、図4・5は貝層Ⅲ群5層の出土で、貝塚時代後期ではうるま市アカジャンガー貝塚(1980)がある。**<骨錐>**イノシシの四肢骨とクジラの肋骨を用いたものである。図6はイノシシの四肢骨を縦位に半裁し、その先端を削り、尖らしたものである。先端のみ得られた。HC V層の出土。図7はクジラの肋骨を用いたもので、横断面は饅頭型を呈し、先端は尖り、頭部は欠損し、全体の形状は不明であるが、断面の状況から半分欠損した可能性もある。一部に研磨が見られるが、骨組織が粗く、光沢は見られない。HC貝層Ⅲ群5層の出土。

用途不明が3点出土した。加工痕のあるものをここで扱った。図8はイヌの上腕骨を横位に切り取り管状にしたもので、両端を外側から削り、丸味を出す。装飾品の可能性が高い。HB③Ⅲa層の出土で、グスク時代の可能性がある。図9はイノシシの踵骨の近位部を切り取ったものであるが、製作途中か用途は不明、現段階で報告例はない。図10はウミガメの背甲板を板状に加工したもので周縁を摩耗、上端を幅0.5cmほど削り、段を付けたもので、類例はなく、用途は不明。HB③のI層の出土である。



第139図 骨製品出土平面分布

第60表 骨製品 出土量

遺跡 層	分類部位	玉	鏃	針	錐	用途不明			合計	
		エイ脊椎	サメ歯化石	イノシシ腓骨	イノシシ四肢骨	クジラ肋骨	イヌ上腕骨	イノシシ踵骨		ウミガメ背甲板
HC	V			1		1				2
	V	貝層Ⅲ群4	1							1
		貝層Ⅲ群5			2		1			3
		貝層V群			1					1
	不明						1		1	
HB	I								1	1
	Ⅲa						1			1
HC+HB③合計		1	1	3	1	1	1	1	1	10

第61表 骨製品 観察一覧

第図版	図番号	製品	種類	部位	完・破	縦	横	厚さ	重さ	観察事項	地区・グリッド・層
											遺構・台帳(ドット)番号
第140図版	1	玉	エイ	椎骨	完	2	2	1.0	2.0	回転・両面穿孔(径0.3)。外縁も丁寧に研磨。図5骨針の先端と孔が一致。	HC T14 貝層Ⅲ群4 台 12203
	2	鏃	サメ	歯	完	3	1.3×1	0.55	1.8	2等辺三角形の両縁と基部を割取る。幅1.0m残す。エナメル部はアバタがあり、黒褐色を呈す。先端丸味、側縁は鋸歯が残る。	HC C14 V(後期層)台 5086
	3	針	イノシシ	腓骨	完'	8.6	0.6	0.5	2.5	先端はへら状、研磨痕は縦位にあり。頭部がわずかに欠損。	HC A15 貝層V群ド 4272
	4	針	イノシシ	腓骨(骨体)	1/3	3.4	0.6	0.4	0.9	削り面は1.7cm。研磨あり。側縁に丸味あり。やや風化。	HC A16 貝層Ⅲ群5 台 11943
	5	針	イノシシ	腓骨(骨体)	1/4	2.3	0.6	0.5	0.6	先端部、研磨面0.8cm。6面削り。研磨痕-横位に明瞭。基部は光沢有り、縦位に研磨痕確認。	HC S14 貝層Ⅲ群5 台 12723
	6	錐	イノシシ	四肢骨(骨体)	1/4	2.6	1.1	0.3	1.4	先端、打ち割り、尖る、摩耗光沢あり。黒色、焼けかも。	HC A13 V(後期層)台 11418
	7	錐	クジラ	肋骨	1/4	4.8	1.2	0.9	3.5	横断面は饅頭型。先端は尖る。頭部は欠損。全体の形状は不明。部分研磨。骨組織が粗く、光沢無し。	HC S14 貝層Ⅲ群5 台 12227
	8	加工品?	イヌ?	上腕骨(骨体~遠位)	2/3	2.5	1.3×1	0.2	1.6	上腕骨を横位に切り取る。管状、両端を外側から削り、丸味。	HB③ B2 Ⅲa 台 270
	9	加工品?	イノシシ	踵骨(骨体~遠位)	2/3	3.0	1.6	1.1	5.1	黒色、焼けかも一端を研磨、丸味、摩耗かも	HC I12 台 12124
	10	加工品?	ウミガメ	背甲板	完	7.3	5.4	0.9	28.5	板状、周縁を摩耗。上端を幅0.5cmほど削り、有段。	HB③ A20 I 台 445

(法量単位: cm, g)



第 140 图·图版 99 骨製品

(5) グスク土器

グスク土器はHCで180点、HB③で147点の計327点の出土（第62表）で、その量は平安山原A遺跡（2016）の4割程度である。平面分布をみるとHCではS・T15とC16～T13の間に多く、HB③ではA5・6に特に多く、A2・B6・C6・D7に分布する。出土層をみるとHCではV層からの出土が53.9%と多く、貝層Ⅲ群では上層（1・1a・2層）で出土し、特に1層に集中する。5層から胴部片が1点得られたが、上層からの混ざり込みと思われる。HB③ではⅢa層で29点、Ⅲb層で55点得られ、土器の集中するA5・A6では接合出来る土器（第141図）もあり、グスク土器からもHB③Ⅲa・b層がグスク時代の生活面であることが証左される。また、近接する平安山原B遺跡（2015）ではグスク土器が147点得られ、同遺跡のIV層上は今回報告のHB③Ⅲa・Ⅲb層とほぼ同じ時期と考えられる。平面分布でみるとHB③のIV層（川跡）を取り囲むように分布するようである。

今回は滑石製石鍋の模倣とされる方形把手^(註1)は得られていないが、滑石を混入した土器片と滑石の加工品が2点（第147図）得られている。

器種は鍋形、甕形、壺形が確認され、鍋形は口縁と把手の形態でA～Cに細分した。底部は基本的には口縁部の分類の範疇に含まれるものであるが、形状から器形の復元出来る資料が少ないため、別に分類した。胴部については、平安山原A遺跡（2016）のグスク土器の胎土分類（第63表）を踏襲し分類を試みた（第64表）。以下、主なものを図示し、第65表に観察一覧を示した。

1. 口縁部・頸部

HCで21点、HB③20点で計41点出土した。器種は鍋形・甕形・壺形・甕形か壺形がある。

<鍋形>

鍋形は11点で、口縁部のおよび把手の形状によりA～Cに細分した。

(A) フェンサ上層式^(註2)：基本的に口縁部が内湾し、その断面が角状、丸状、舌状が得られ、瘤状突起は出土していない。

第62表 グスク土器 出土量

HCで3点、HB③で2点の計5点の出土である。図1・2は口縁部が角をなすもので、内唇の角は特に明瞭である。器厚は0.7cm前後で貝塚時代後期土器に比べてやや厚く、均一である。両者はT16とS15で出土、胎土も他に比べて石英が多く近似し、同一個体の可能性が高い。内面をハケで調整する。図3は口縁部が内湾するもので、断面は舌状で胴上部からレンズ状に膨らむ。図4・5は胴部と底部ではあるが、滑石を混入することから

遺跡	層	部位 分類	口縁部・頸部					胴部	底部					合計			
			鍋形			甕形	壺形		甕か壺	小計	a	b	c		d	不明	小計
			A	B	C												
HC	I						0	3						0	3		
	II						0	1						0	1		
	III						0	2						0	2		
	V		2	2	4	1	4	13	79	3	1	1		5	97		
	V	1			1			1	4	1	2			3	8		
		1a						0	3					0	3		
		2	1					1	3	1				1	5		
		5						0	1					0	1		
		不明						0	2				3	3	5		
	貝層Ⅳ群						0	4						0	4		
	貝層Ⅴ群						2	2	5					0	7		
不明		1		1		2	4	37	1	1	1		3	44			
HC小計		3	1	3	5	1	8	21	144	6	2	4	3	15	180		
HB③	I						0	1						0	1		
	IIb						0	2						0	2		
	IIc				1		1	7		1			1	9			
	III	1			4		3	8	22		1			1	31		
	IIIa	1					1	2	25	1	1			2	29		
	IIIb		1	1	4		1	7	42	1			5	6	55		
	IIIc					1		1	10					0	11		
	IIId							0	1					0	1		
	IV							0	1					0	1		
	不明						1	1	6					0	7		
HB③小計		2	1	1	9	1	6	20	117	1	2	2	0	5	10	147	
HC+HB③合計		5	2	4	14	2	14	41	261	1	8	4	4	8	25	327	

ここで扱う。前者は胴部で器厚 0.7cm で滑石の混入はわずかであるが器面調整は他より丁寧である。後者は後述する底部分類の b に属するもので、特に滑石の混入が多い。前者が HB ③ R19 III a 層、後者は HB ③ T10 III 層の出土である。

(B) 罎：把手を圍繞するいわゆる羽釜タイプである。HC と HB ③ で各々 1 点出土した。

図 6 は口縁部で罎縁幅が 2.0cm を測り、断面が三角形を呈する。口縁部から罎までが 3.8cm を測り、周辺遺跡と比較すると平安山原 A 遺跡では 2cm、後兼久原遺跡 (2004) では 3cm を測ることから、本品は長めである。口縁の形状は角をなし、内唇に膨らむ。胎土は他と異なり、砂質で石英が主体であるが中に円礫も含む。器面は混和材を引きずることからヘラ削りで調整され、搬入品の可能性が高い。HB ③ T5 III b 層の出土。

図 7 は胴部で、罎幅が 1.8cm を測り、前者より若干小さい。罎形の上部は緩やかに膨らみ、下部は指痕が残り、水平である。他のグスク系土器に比べて混和材の量が少ない。HCT11 と HB ③ 近い所で出土。

(C) 横耳：胴上部に把手を 2 個配するもので、HC で 3 点、HB ③ で 1 点の計 4 点出土した。そのうち、器形の判るものが 2 点得られた。その形状は鍋形を呈する。把手は平面形が①方形、②楕円、③隅丸方形、④半円形があり、横断面は舌状と丸状、その方向は上向、水平がある。

①**方形**：図 8 は把手のみで破損部から復元すると平面形が方形、上向きである。胎土は図 7 と同じく砂質で混和材の量も少ない。HCD16 の出土。

②**楕円**：図 9 は唯一このタイプで器形が復元できるもので、口径 21.8cm を測り、内湾するもので、その断面は鍋 A と同じく角をなす。口縁下 4.8cm に把手を付ける。把手は平面形は楕円、上向きである。

③**隅丸方形**：図 10 は把手のみで、平面形が隅丸方形で、その向きは水平で、混和材に赤色粒を多く含む。横耳の大きさ 4.5 × 4.2cm を測る。やや小降りである。HC 貝層 III 群 1 層の出土。

④**半円形**：図 11・12 は胎土から同一個体と考えられるものである。口縁は内湾し、口径は 25.0cm を測る。把手は半円形で、やや上向きである。胎土は他と異なり、石英や板状の砂の粗粒を多量に混入する。破損面から本来の胴部は 0.9cm と他に比べて厚く、把手は上下に粘土を貼付している。グスク土器の出土量の多い HB ③ A5 の III b と III c の出土である。

< 甕形 >

口縁部が有頸をなすもので、口径の大きいものを甕形し、頸部でも甕形と判断できるもの (図 19 ~ 21) もここに含めた。頸部の屈曲が「く」字状 (図 15 ~ 19) と「L」字状 (図 21・22) がある。HC で 5 点、HB ③ で 9 点の出土である。

「く」字状：頸長が 2.5cm 前後のもの (図 15・16)、2.2cm (図 17)、1.6cm (図 18) があり、2.5cm 前後のものは口唇断面が角を呈し、それ以外は丸か舌状を呈する。いずれも内面の口縁から頸部に厚くなる傾向が見られる。図 17 は口径 16.8cm で、口縁部の内面は粘土を貼り付け、厚くする。HB ③ C6 II c 層の出土。図 19 は口縁を欠損するが、頸径 21.2cm を測る。頸部は他に比べて厚く、胎土に鉍物を多量混入し、器面調整も丁寧で、他の土器とは異なり、精錬されている。HB ③ E4 III 層の出土。

「L」字状：頸長が 2.5cm (図 22) を測るもので、頸部の器厚は胴部とほぼ同じである。HC V 層の出土。図 21 は口縁部を欠損するが、形状からここに分類した。混和材に鉍物を混入する。HB ③ III b 層の出土。

< 壺形 >

口径が 10cm 前後を壺形とした。HC・HB ③ で各々 1 点の出土である。図 23 は口径 9.1cm、頸部は「く」字状に湾曲、図 24 は口径 11.5cm、外反するものである。前者が HB ③ III c 層、後者が HC V 層の出土。

<甕か壺の頸部>

「く」状に屈曲するもので壺か甕の判断できない頸部をここにまとめた。HCで8点、HB③で6点の計14点の出土である。前述した甕と壺をみると頸部の厚さが厚いもの（頸>胴）とほぼ同じ厚さ（頸=胴）がある。頸=胴は図25で器厚も0.4cmと薄く、器色などから図36と酷似する。前者がHCF15、後者D12の出土で、他に数点出土。図27は器厚が前者に比べてやや厚く、頸部もさらに厚くなることから甕形の可能性がある。図26は頸部に調整の痕が明瞭に残る。石英や赤色粒を混入する。

2. 底部

HCで15点、HB③で10点の計25点の出土で、そのうち15点を図示した。底厚は平均0.7cmで胴部と同じかあるいは薄いのが大半で、底厚は貝塚時代後期土器に比べて薄い。器形は鍋形が主体となるため、底径は大きくなる傾向がある。底面からの立ち上がりの形状を主な分類基準とし、丸底(a)、丸味(b)、直底(c)、上げ底(d)に分けられる。

丸底(a)：HB③で1点出土した。図28は丸底で、残存胴径7.8cmを測る。内外面は明灰褐色を呈し、白色粒を多量混入する。胎土はグスク土器に酷似するが、形状は貝塚時代後期の壺に類似するものである。HB③Q8Ⅲa層の出土。

立ち上がり丸味(b)：平底で底面からの立ち上がりは丸味を帯び、胴部が張るもので、鍋形Aの底部と考えられる。HCで6点、HB③で2点、計8点の出土で底部の中で多い。器厚は薄手と厚手に分けられ、**薄手**は図29と図30で底面のみであるが、前者は底径が12.4cmと推定され、後者は底径10.5cmを測る。いずれも白色粒が主体で、前者は内面にアバタが見られる。**厚手**は胴部より底面が薄くなる。図31・図32は胴部が底面より厚く、いずれも砂質を呈する。図33と図34は胴部と底部がほぼ同じ厚さで底径は図32が10.5cm、図34が13.0cmと大きく異なる。胎土はいずれも泥質であるが、図33が石英・赤色粒の混入が目立ち、図34は白色粒が主に含まれる。

直底(c)：底面からの立ち上がりが直状、角の部分が厚い。HC・HB③各々2点の出土である。薄手と厚手がある。**薄手**は図35と図36で前者は底径9.3cmを測る。外面はいずれも黒褐色を呈し、胎土も酷似する。HB③SK32からの出土。図25の頸部と胎土が酷似する。**厚手**は図38で胴部より底面が厚く、底径は11.0cmを測る。外面はヘラケズリが明瞭である。仕上がりは雑で、甕の底部の可能性が想定される。

上げ底(d)：HCで4点出土した。上げ底気味で、底の立ち上がりが角を呈するものと丸味をなすものがある。胴部より底厚が薄くなる傾向が見られる。図39は底径10.8cmを測り、底面はやや上がり、白色粒が多いが、他に石英や黒粒などを含む。積み痕が確認される。HCA16の出土。図40は底径7.4cmを測る。立ち上がりの角が明瞭である。図41は底径15.3cmを測り、底面からの立ち上がりは不安定で、ヘラでケズリ段をなす。HC貝層Ⅲ群(T15)の出土である。混和材に巻き貝(カワニナ)が含まれている。

2. 胴部および胎土分類

平安山原A遺跡(2016)分類に従い、口縁部・底部・胴部の分類を行い、第b表にまとめた。

胴部はHC144点、HB③117点の計261点の出土であるが小破片が多い。

胴部の復元できる図13・14は胴径が26.0cmと27.0cmで図9や図11はとほぼ同じ大きさであるこ

第63表 グスク土器胎土分類(平A2016一部改変)

胎土	A:砂質 B:砂泥質 C:泥質
混和材	イ:滑石混入 ロ:黒粒主体 ハ:白色粒主体,石英・赤粒 ニ:赤粒主体,白・砂粒 ホ:砂粒 ヘ:石英主体に赤・黒・砂粒 ト:灰色粒を主体

混和材:白色粒(貝・石灰質)のこと

とから鍋形の胴部が想定される。いずれも砂質で、前者はグスク土器の最も出土量の多いHB③ A5 III b+ III c層でここからは図41も得られている。後者は厚手でHCT15 V層の出土である。そのうち、第64表に部位・胎土別の集計を示した。口縁部・胴部・底部を含めてみると泥質(C)が236点(72.2%)、砂質(A)・砂泥質(B)が各々36点(11.0%)を占め、泥質が主体である。また、混和材を見るといずれのタイプも白色粒(ハ)が主体を示すが砂泥質(B)・泥質(C)が75%以上を示すのに対し、砂質(A)ではその割合は47.2%と低い。砂質(A)の混和材をみると石英主体(ヘ)、赤色粒主体(ニ)の割合が他に比べて高く、その器形をみると図6の鏝縁や図10の把手などがあげられる。平安山原A遺跡の胎土分類と比較すると、同じように白色粒主体であるが、平安山原A遺跡が84.4%、本遺跡が69.7%と割合が低い。白色粒主体を地区別にみるとHB③で68.7%、HCで70.6%と若干の差が認められる。他に混和材についてみるとHB③では他に滑石混入(イ)が得られ、HCでは赤色粒主体(ニ)12.8%、石英主体(ヘ)6.7%となる。白色粒の組成は石灰岩粒や貝殻粒などサンゴ礁や琉球石灰岩に由来の混和材であるのに対し、滑石は滑石製石鍋を砕いて入れたもの、石英や赤色粒なども在地外の可能性が考えられる。HB③では図6・11・16は白色粒を含まないもの、滑石混入するもの(図4・5)が見られる。俯瞰してみるとHB③のA5・6とHCのT15・16では出土量が多く、接合率も高いことと胎土の違いを考慮すると、HB③とHC間に若干の時期差の可能性が想定される。

第64表 グスク土器胎土別 出土量

部位	分類	A=砂質						B=砂泥質					C=泥質					不明				合計		
		ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	ハ	ニ	ホ	ヘ	不明	イ	ハ	ニ	ホ	ヘ	不明	ニ	ハ	ホ		不明	
口縁部	HC			1			1			1				8		2	6	1					1	21
	HB③	1	1		1	4							2	8	1		2							20
	小計	1	1	1	1	4	1	0	0	1	0	0	2	16	1	2	8	1	0	0	0	1	41	
底部	HC	1	1										10			2							1	15
	HB③		4	1									5											10
	小計	1	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	15	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	25
胴部	HC			3	1	1		14	1	3	1		94	18	3	2							3	144
	HB③		11	1		3		14				2	4	54				14	1	4	1	8	117	
	小計	0	11	4	1	4	0	28	1	3	1	2	4	148	18	3	2	14	1	4	1	11	261	
HC合計		1	1	4	1	1	1	14	1	4	1	0	0	112	18	5	10	1	0	0	0	5	180	
HB③合計		1	16	2	1	7	0	14	0	0	0	2	6	67	1	0	2	14	1	4	1	8	147	
総合計		2	17	6	2	8	1	28	1	4	1	2	6	179	19	5	12	15	1	4	1	13	327	
分類別計		36						36					236					19				327		

註1: 平安山原A遺跡(2016)、グスク土器、鍋aタイプ

註2: 糸満市フェンサ城貝塚(1968)の上層で出土した土器で内湾口縁で外縁に4個の瘤状突起を配するもので、1978年恩納村熱田貝塚で方形の瘤を有する滑石製石鍋(1979)が発見され、滑石製石鍋模倣土器とも呼ばれている。

第65表-1 ガスク土器観察一覧

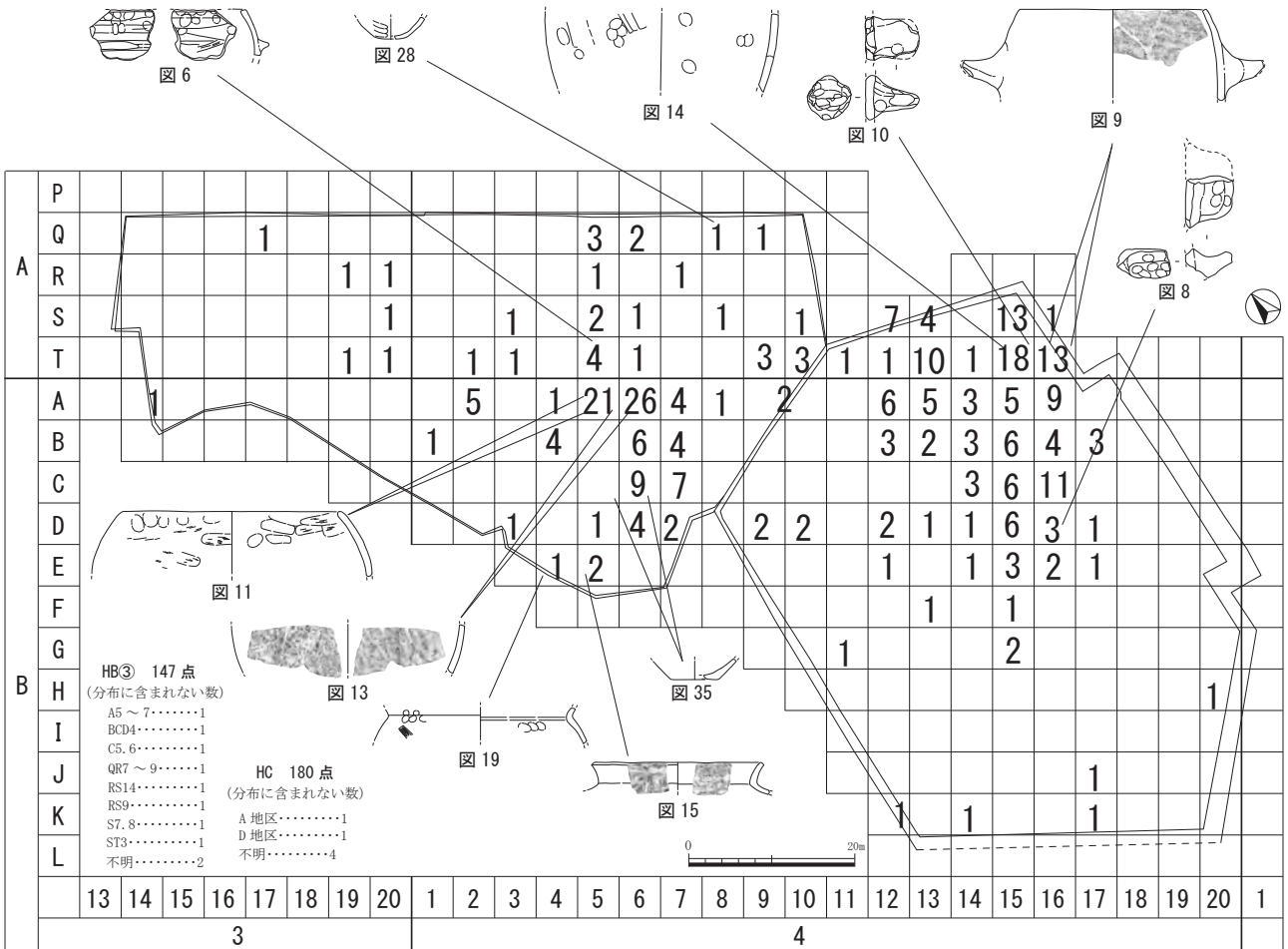
第図版	図番号	器種	分類	部位	形状・特徴	径 (cm)	胎土分類記号	粒度含量	白色粒	石英	赤色粒	黒色粒	・角閃石 ・輝石	砂粒	その他	焼成	器色 外面・内面	器調 外面・内面	遺跡・グリップ・層 遺構・台帳(ドット)番号	
第142図・図版100	1	編形	A	口	内湾。角。器厚(0.75cm)。	—	Cへ少	中粒 △		△	△						外-暗茶褐色 内-暗茶褐色	内外-ヘラナデ	HC T16 V(後期層) F3152	
	2		A	口	内湾。角。器厚(0.7cm)。	口径 29.2	Cへ少	中粒 △		△	△					良	外-暗赤褐色 内-暗赤褐色	内-ハケ(横)	HC S15 貝層Ⅲ群2 台10980	
	3		A	口	内湾。舌状。レンズ状に膨らむ。器厚(0.9cm)。	—	Cへ	粗粒 ◎	○		△				炭○	良	外-灰～橙褐色 内-橙褐色	内外-ユビナデ	HC C16 V(後期層) F2259	
	4		A	胴	均一。滑石混入。器厚(0.7～0.8cm)。	—	Cイ	細粒 ○							滑石 △	良	外-黄～橙褐色 内-黄～橙褐色	内外-ナデ	HB③ R19 Ⅲa 台187	
	5		A	底	底b。滑石混入。器厚(0.8cm)。底厚(0.9cm)。	—	Cイ	中粒 ◎							滑石 ◎	良	外-暗灰褐色 内-暗灰褐色	内外-ナデ	HB③ T10 Ⅲ(12) 台1056	
	6		B	口	内湾。角。鏝縁幅(2.0cm)。三角形。水平。搬入品か。	—	Aへ	粗・細粒 ○			△					円礫 △	良	外内-暗褐色 中-暗灰褐色	内外-ヘラナデ	HB③ T5 Ⅲb(5) F2044
	7		B	胴	鏝(1.8cm)。三角形。水平。器厚(0.85cm)。	—	Aト少	細粒 △	△								良	外-赤褐色 内-灰褐色	外-ユビナデ	HC T11 台 10622.10623
	8		C	胴	平面-方形(幅8.5×横5.5×厚1.5cm)。上向。器厚(0.9～1.1cm)	—	Aト少	細粒 △			△						良	外内-赤褐色 中-灰褐色	把手-指頭痕	HC D16 V(後期層) F961
	9		C	口	内湾。角。平面-楕円。幅4.7cm。上向。器厚(0.7cm)。	口径 21.8	Cへ	中粒 ○			△	△					良	外-暗褐色 内-暗褐色	内-ヘラナデ	HC T16 V(後期層) F1408
	10		C	胴	平面-隅丸。幅5.0cm。水平。器厚(1.1cm)。	—	Aニ	中粒 △			△	○	△				良	外-褐色 内-褐色	内-ヘラナデ	HC T15 貝層Ⅲ群1 F3287
	11		C	口	内湾。丸。器厚(0.82cm)。	口径 25.0	Aホ	粗粒 ○			○					板状	良	外-明褐色 内-明褐色	外-ロヘラナデ 胴-ヘラケズリ 内-ヘラナデ	HB③ A5 Ⅲc(7) 台636
	12		C	胴	1412と同一個体。平面-円。幅5.8cm。水平。他と混和材が違うか。器厚(0.82cm)。	—	Aホ	粗粒 ○	△	○						板状	良	外-黄～橙褐色 内-黄～橙褐色 中-暗灰褐色	内外-ユビナデ	HB③ A5 Ⅲb(5) F383
第143図・図版101	13	-	胴	均一。器面はがれると白粒露出。器厚(0.62cm)。	胴径 26.0	Aへ	粗粒 ○	◎		△				アバタ ○	良	外-褐色 内-褐色	外-ヘラケズリ	HB③ A6 Ⅲb(5) A5 Ⅲc 台450.636		
	14	-	胴	胴のみ。器面はきれい。器厚(0.84cm)。	胴径 27.0	Aニ	中粒 ○		△	△	△					良	外内-褐色 中-明褐色	外-ヘラ 内-ユビ	HC T17 V(後期層) F1355	
	15	甕形	口	外反。角。「く」字状。頸長2.7cm。厚手。頸部で0.75cmと厚い。湾曲による。器厚(0.55cm)。	口径 20.4	Cへ	粗粒 (不揃)		△	△	△	△			○	良	外-暗褐色 内-暗褐色	内外-ヘラナデ	HB③ E5 Ⅲ(9) F227	
	16		口	外反。角。「く」字状。頸長2.5cm。器厚(0.7cm)。	—	Cへ	中粒 ○			△					△	良	外-褐色 内-褐色	内外-ヘラナデ (横)	HB③ D3 Ⅲ(8～11) 台1023	
	17		口	外反。丸。「く」字状。頸長2.2cm。厚手。器厚(0.5～0.7cm)。	口径 16.8	Cニ	中粒 △			△	○					良	外-暗赤褐色 内-明褐色	外-ヘラナデ(丁) 内-ヘラ(横)	HB③ C6 Ⅱc 石列1 群 台485	
	18		口	外反。舌状。「く」字状。長1.6cm。頸厚0.8cm。器厚(0.55cm)。	—	Cへ	粗粒 ○	○			△	茶			アバタ △	良	内外-明灰褐色	外-ヘラナデ 内-ヘラユビ	HB③ A7 Ⅲb(5) 台366	
	19		頸	外反。「く」字状。器厚(0.6cm)。	頸径 21.2	Aロ	細粒 ○				△				輝石 ○	良	外-赤褐色 内-褐色	内外-ナデ	HB③ E4 Ⅲ(8～11) 台571	
	20		胴(頸)	直状。「L」字状。頸>胴。器厚(0.7cm)。	—	Cへ	粗粒 ○	○			△					良	外-暗茶褐色 内-明褐色	外-ナデ 内-ユビ痕	HC A15 V(後期層) 台9345	
	21		胴(頸)	直状。「L」字状。頸=胴。器厚(0.8cm)。	—	Aへ	中粒 ○			○	○	○	○			良	外-明褐色 内-明褐色	外-ハケ 内-ユビ	HB③ A6 Ⅲb(5) F49	
	22		口	直状。丸。「L」字状。頸長2.5cm。頸=胴。器厚(0.5cm)。	口径 19.0	Cへ	中粒 ○	○								良	外-暗赤褐色 内-暗赤褐色	外-ユビナデ 内-ハケ	HC S12 V(後期層) F3092	
	23		壺形	口	やや外反。丸。頸長1.6cm。頸厚0.75cm。混和材は不揃。器厚(0.65cm)。	口径 9.1	Cへ	粗粒 ○	○							アバタ △	良	外-赤褐色 内-褐色	外-ユビ 内-ハケ	HB③ T9 Ⅲc(7) 台632
24	口			やや外反。舌状。頸長2.2cm。器厚(0.6cm)。	口径 11.5	Cへ	粗粒 ○	○			○					良	外-淡褐色 内-淡褐色	外-ナデ 内-ハケ(横)	HC C16 V(後期層) F2710	
25	不明		胴(頸)	薄手。甕?。頸=胴。器厚(0.4cm)。	—	Cへ	粗粒 ○	○	△						△	良	外-暗灰～赤褐色 内-褐色	外-ユビ 内-ハケ(横)	HC F15 V(後期層) 台9945	
26		胴(頸)	頸<胴。器厚(0.6cm)。	—	Cへ	中粒 ○			○	△					良	外-暗赤褐色 内-暗赤褐色	外-ハケ(横) 内-ナデ(横)	HC S12 貝層V群- 台11278		
27		胴(頸)	頸<胴。器厚(0.5cm)。	—	Cへ	粗粒 ○			○						良	外-明灰色 内-明灰色	外-ハケ 内-ユビ	HC E17 F110		
28	底部	a	底	壺か碗か。丸底。胴部にやや膨らむ。底厚(0.4cm)	胴径 7.8	Cへ	粗粒 ○	◎							良 ◎	外-明灰褐色 内-明灰褐色	内外-ユビ	HB③ Q8 Ⅲa 台100		
29		b	底	薄手。胴=底。立ち上がり緩やか。若干。底は上がる。底厚(0.7cm)。アバタ内面に多し。	底径 12.4	Cへ	細粒 ○	○		△				アバタ ○	良	外-暗赤褐色 内-暗赤褐色	内外-ユビ	HC D15 V(後期層) 台9824		
30		b	底	薄手。平ら。丸底に近い。胴=底。アバタ。底厚(0.8cm)。	底径 10.5	Cへ	中・粗粒 ○	○		△					良	外-橙～茶褐色 内-灰褐色	内外-ユビ	HC D16 台10455		
31		b	底	立ち上がり丸。胴>底。底厚(0.8cm)。器厚(1.0cm)。	底径 13.8	Aへ	粗粒 ○	○		○					良 ◎	外-明褐色 内-明褐色	内外-ユビ(丁)	HB③ A6 Ⅲb(5) 台448		

◎:多い ○:普通 △:少ない △/:僅少

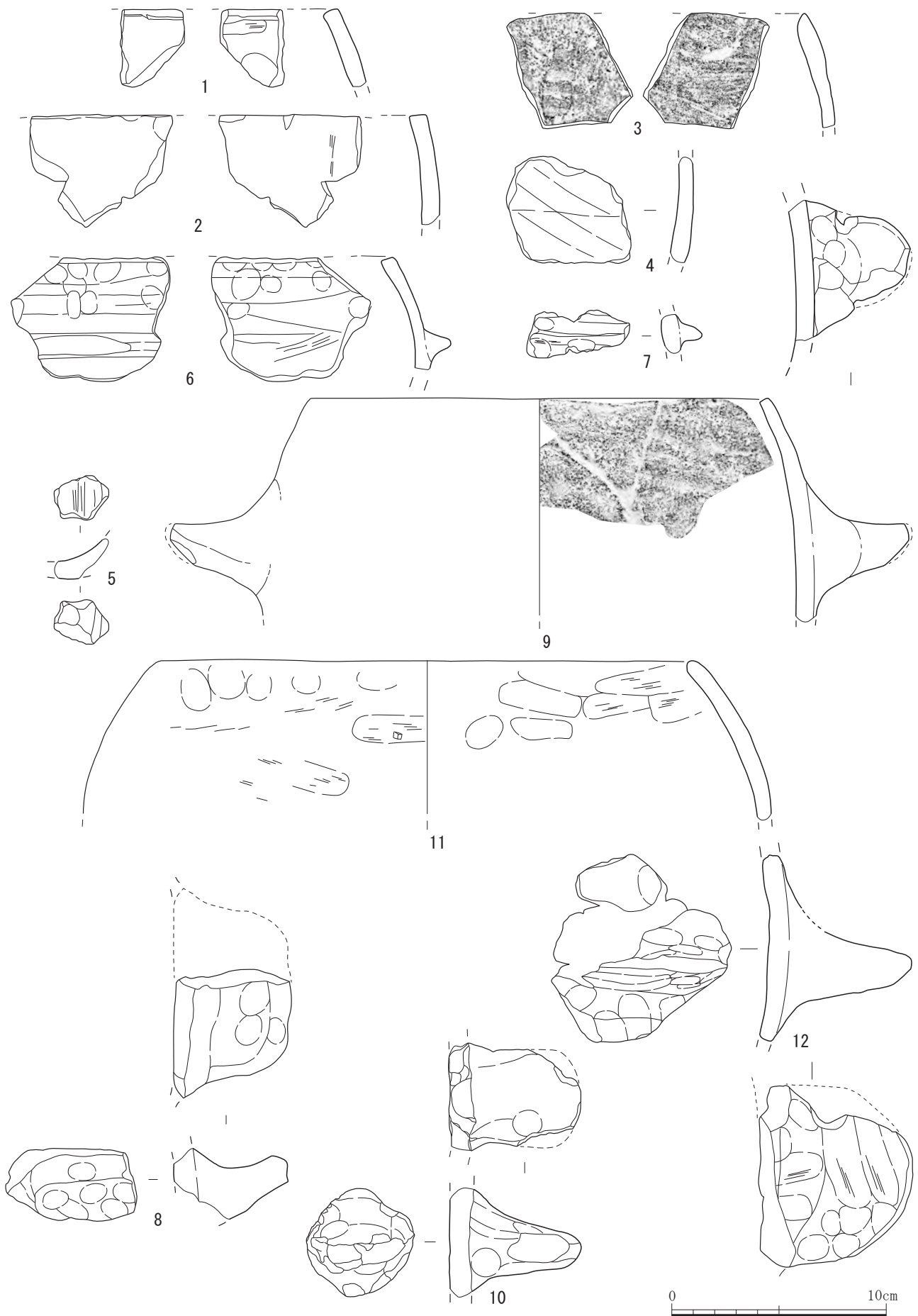
第65表-2 ガスク土器観察一覧

第図版	図番号	器種	分類	部位	形状・特徴	径 (cm)	胎土分類記号	粒度含量	白色粒	石英	赤色粒	黒色粒	・角閃石 ・輝石	砂粒	その他	焼成	器色 外面・内面	器調 外面・内面	遺跡・グリッド・層 遺構・台帳(ドット)番号		
第143 図・ 図版 101	32		b	底	立ち上がり丸。胴>底。 底厚(0.7cm)。器厚(0.9cm)。	底径 10.5	Aへ	中・細粒 ○			△						良	外内-暗黄褐色 剥げ灰褐色	内外-ハケ(横)	HC T15 貝層Ⅲ群2 台10734	
	33		b	底	底-直状。胴=底。 底厚(0.7cm)。器厚(0.8cm)。	底径 7.2	Cへ	中粒 ◎	△	○	△							良	外-赤褐色 内-褐色	内外-ユビ	HC B15 V(後期層) F425
	34		b	底	上げ底。胴=底。 底厚(0.7cm)。器厚(0.9cm)。	底径 13.0	Cへ	細・中粒 ◎	○	△					アバタ	良	外-淡灰褐色 内-淡灰褐色	外-削(横)	HC B15 V(後期層) F855		
	35		c	底	薄手。底-直。胴=底。 底厚(0.6cm)。器厚(0.5cm)。	底径 9.3	Cニ	中粒 ○	△			○			アバタ	良	外-黒褐色 内-灰~橙褐色	内外-ユビ	HB③ C5.6 IIc SK32 台579		
	36		c	底	薄手。直状か。胴=底。 底厚(0.6cm)。器厚(0.5cm)。	-	Cへ	粗粒 ○	○	○					アバタ △	良	外-暗灰褐色 内-茶・橙褐色	不明	HC D12 台10434		
	37		c	底	立ち上がり直。胴=底。 底厚(0.6cm)。器厚(0.7cm)。	底径 9.1	Cへ	粗・中粒 ◎	○			△			アバタ ○	良	外-暗灰褐色 内-明褐色	外-ヘラナデ(斜) 内-ヘラナデ	HB③ C7 III(10-11) 台697		
	38		c	底	胴<底。 底厚(1.1cm)。器厚(0.8cm)。	底径 11.0	Cへ	粗粒 ○	○	△					アバタ	良	外-黒~褐色 内-淡褐色	内外-ヘラケズリ	HC C16 V(後期層) F2761		
	39		d	底	立ち上がり明瞭。胴<底。 底厚(0.7cm)。器厚(0.7cm)。	底径 10.8	Cへ	粗粒 ○	○	△		△			茶粒	やや良	外-暗褐色 内-暗褐色	外-削(横) 内-ユビ	HC A16 F198		
	40		d	底	やや上げ底。胴=底。底面不安 定。外面白粒、内面中は白粒見ら れない。底厚・底厚(0.68cm)。	底径 7.4	Aへ	中~粗 粒 ○	○	○					アバタ	良	外-黄~茶褐色	外-削(横) 内-ユビ(T)	HC B13 V(後期層) F2380		
	41		d	底	上げ底。厚手。胴=底。底面不安 定。角はヘラケズリで有段。底厚 (0.8cm)。器厚(0.6cm)。	底径 15.3	Cへ	粗粒 ○	○			△			アバタ	良	外-淡灰色 内-橙褐色	外-削(横)明瞭	HC T15.S15 貝層Ⅲ 群1 F3150.台11097		

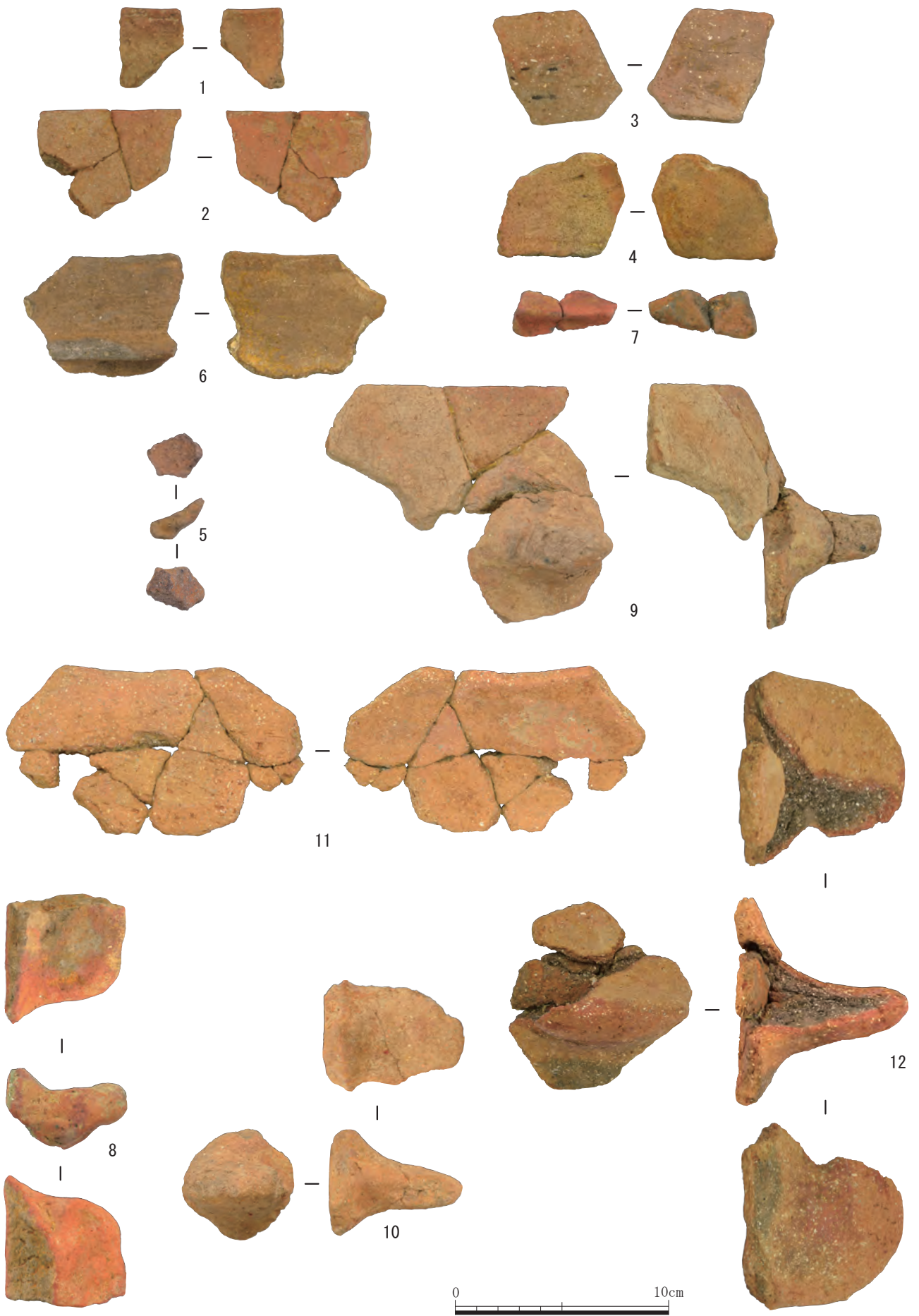
◎:多い ○:普通 △:少ない ▽:僅少



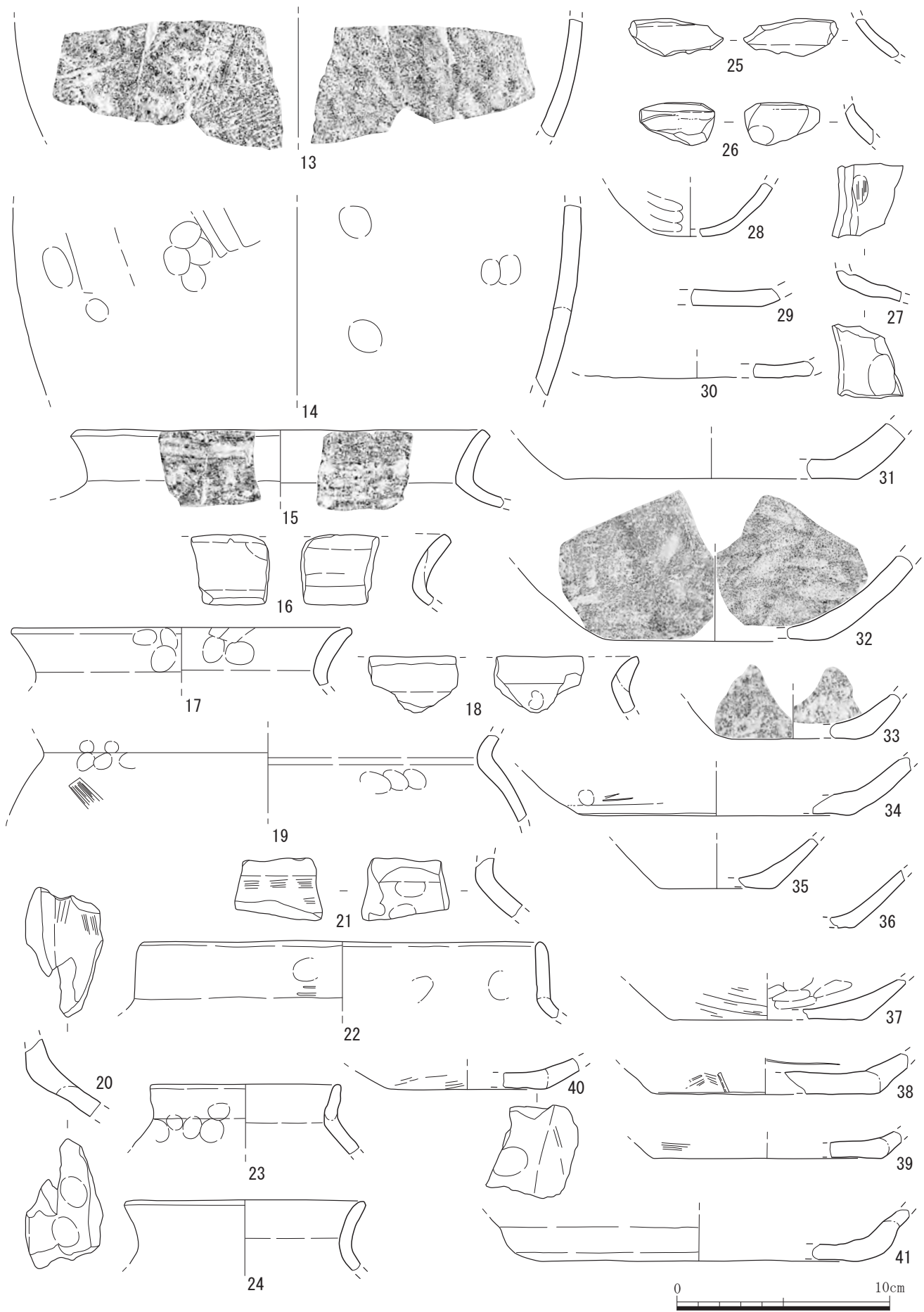
第141図 ガスク土器 平面分布



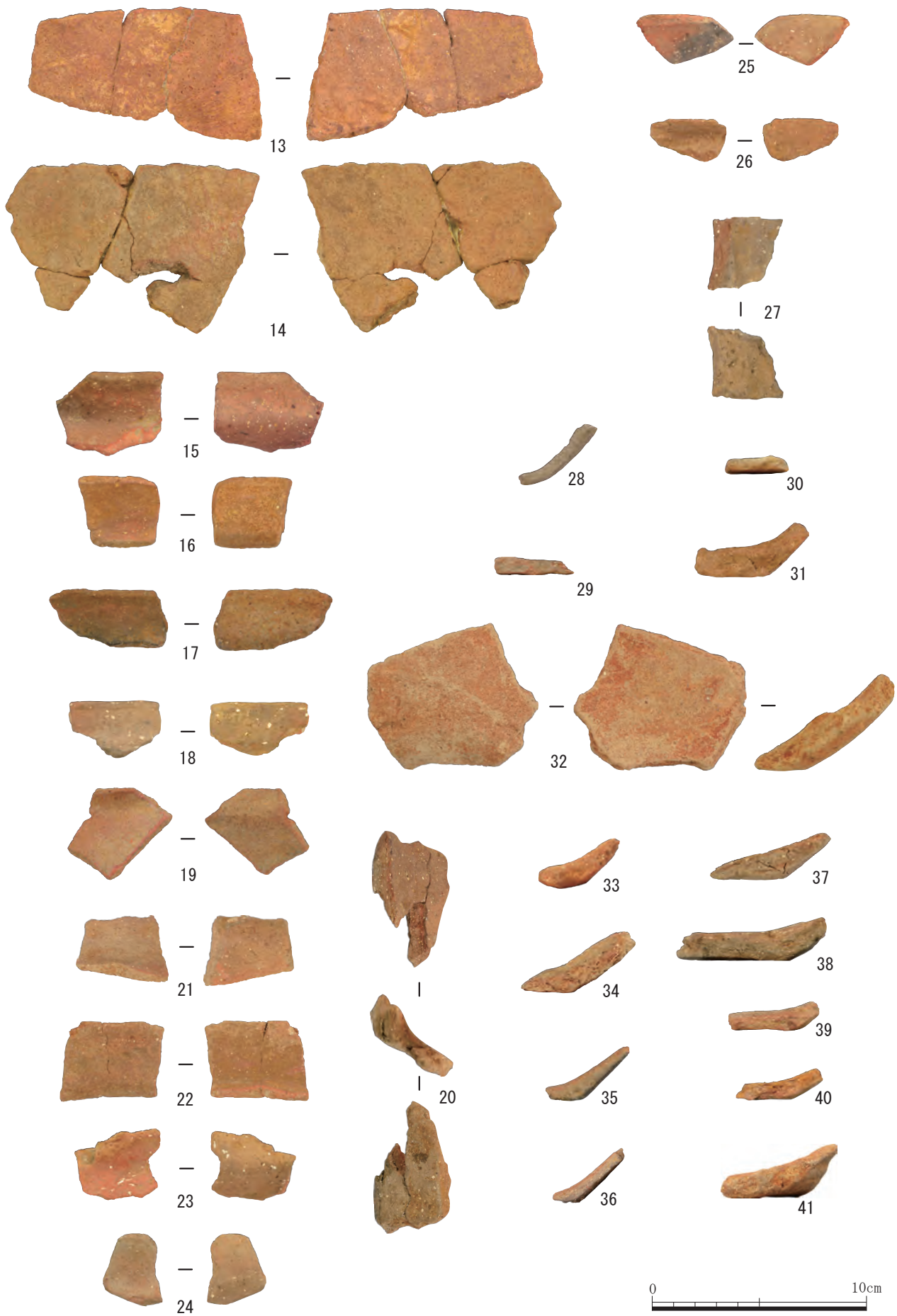
第142図 グスク土器1



図版 100 ギスク土器 1



第143図 グスク土器2



図版 101 グスク土器 2

(6) カムイヤキ

カムイヤキは総数 23 点が得られ、口縁部 3 点、胴部 20 点で底部は出土していない。層位別の出土量は HC が V 層に多く、HB ③は III c・III d・III a 層に多い (第 66 表)。確認できる器種は総て壺で、いずれも小型で薄手なものである。素地は細かい白色細粒を混入し、焼成は良好である。口縁形態から判断すると新里分類の IV 式 a に属するものと考えられ、生産年代は概ね 13c に位置づけられる。外面に平行状叩き痕、綾杉状叩き痕があり内面に平行圧痕、格子圧痕、放射状圧痕などがみられる。口縁部と頸部、肩部の外面と内面の一部はナデ仕上げにより叩き痕が消されている。文様は肩部に二条ないし三条の波状文を巡らすもと無文のものがある。器面調整 (叩き、圧痕、ナデ、ロクロ、ヘラ削り) は外面と内面の組み合わせで以下の 6 種に分類できた。

A 類：外面に平行状叩き痕や綾杉状叩き痕、内面に平行状圧痕や溝状のロクロ痕がある。

B 類：外面に平行状叩き痕や綾杉状叩き痕、内面に格子状圧痕や溝状のロクロ痕がある。

C 類：外面に平行状叩き痕や綾杉状叩き痕、内面に放射状圧痕と溝状のロクロ痕がある。

D 類：外面は叩きの痕跡を僅かに残すがナデ調整が勝り、内面に溝状のロクロ痕がある。

E 類：外面と内面をナデ調整するが一部に内面の圧痕が残る。

F 類：外面と内面をナデ調整するが一部に内面の圧痕が残る。外面に波状文などの文様が描かれる。

外体面に見られる綾杉状の叩き痕は、平行状叩き痕が重なることにより生じるとも考えられるがここでは平行状叩き痕と綾杉状叩き痕は別に扱った。以下に主なものを第 145・146 図、第 102・103 図版に観察を第 67 表に示した。

1. 口縁部

口縁部の形態は三つに分かれる。図 1 は口縁が頸部から「く」字状に屈曲させ外側に開きながら引き上げる。口唇は丸く整えている。頸部の内面に直交する平行圧痕が認められる。外面は叩き痕を残さず、肩部外面に三条の波文を巡らしている。図 3 は口縁が頸部から外に開き、口唇の先端を内側上方に摘まみ上げ尖がらせている。無文である。図 1 と 3 は新里分類 IV 式 a のバリエーションに含まれると考えられる。生産年代は概ね 13c に位置づけられる。図 4 は頸部から外側に開き、先端で外に折り返す。口縁は断面形態がややアーモンド形状の玉縁を示す。頸部内面にナデ擦痕が認められる。口縁部の器面調整は F 類と E 類がみられ F 類が 1 点、E 類は 2 点であった。

2. 胴部

胴部の器面調整は A 類、B 類、C 類、D 類、E 類、F 類の 6 種があり、D 類が 6 点、C 類が 5 点、A 類が 4 点、B 類・F 類が各 2 点、E 類が 1 点の順であった。

図 2 は横位の波状文を肩部から胴部にかけて巡らす胴部資料である。図 1 と直接の接合はできないが同一個体の可能性が高い。

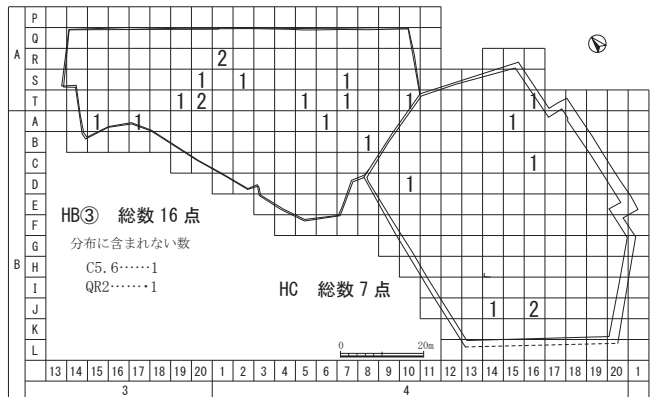
<註文献>

新里亮人 2003 「琉球列島における窯業生産の成立と発展」『考古学研究』49-1 考古学研究会

新里亮人 2007 「カムイヤキとカムイヤキ古窯跡群」特集古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島『東アジアの古代 130 号』

第66表 カムイヤキ 出土量

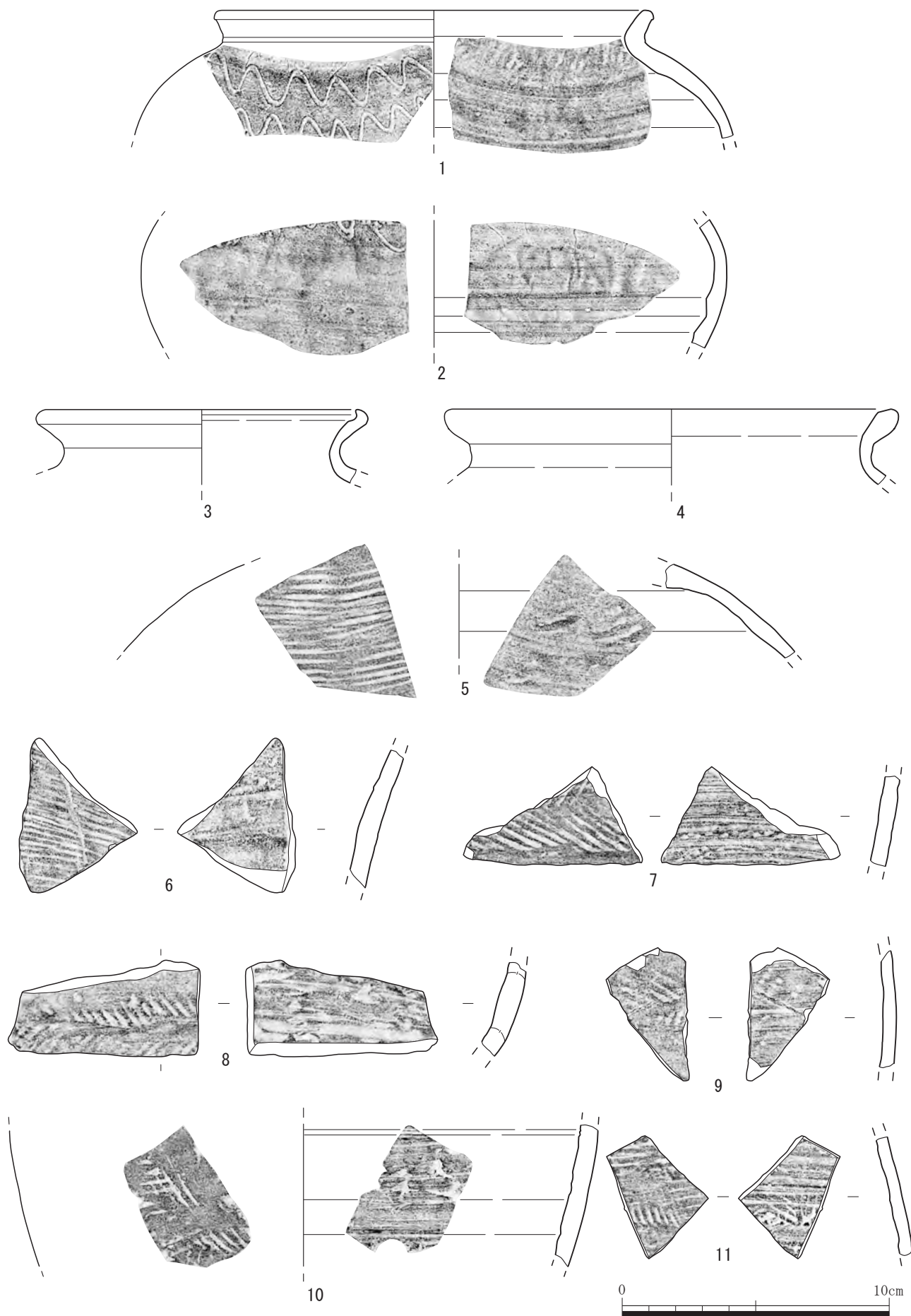
遺跡	層	遺構	器種 部位 分類	壺								合計
				口縁部		胴部						
				E	F	A	B	C	D	E	F	
HC	V	後期層			1		2	2				5
	—					1	1					2
	HC小計		0	0	1	0	3	3	0	0		7
HB ③	IIc	SK032							1			1
	III							1				1
	IIIa		1				1	1				3
	IIIb					1						1
	IIIc		1	1	2	1					1	6
	IIId				1	1		1			1	4
	HB③小計		2	1	3	2	2	3	1	2		16
HC・HB③合計			2	1	4	2	5	6	1	2		23
部位別計			3		20							



第144図 カムイヤキ 平面分布

第67表 カムイヤキ 観察一覧

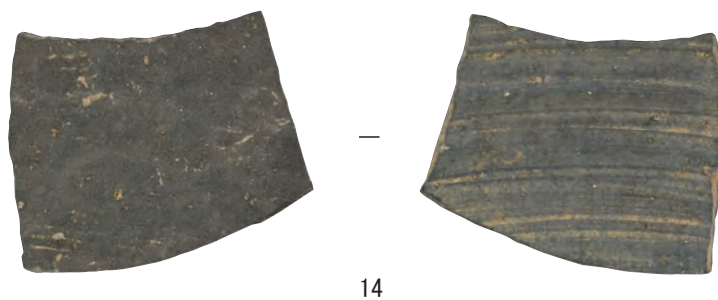
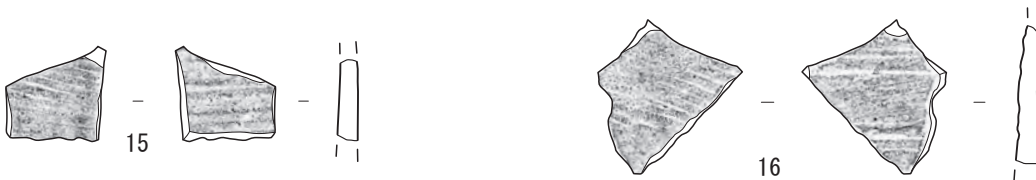
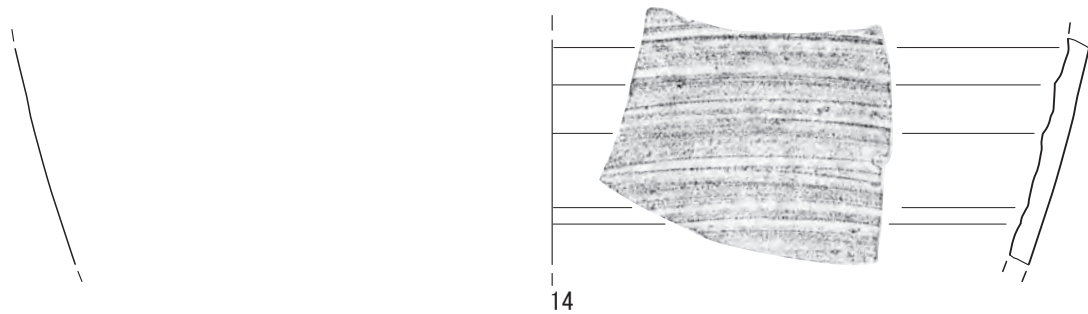
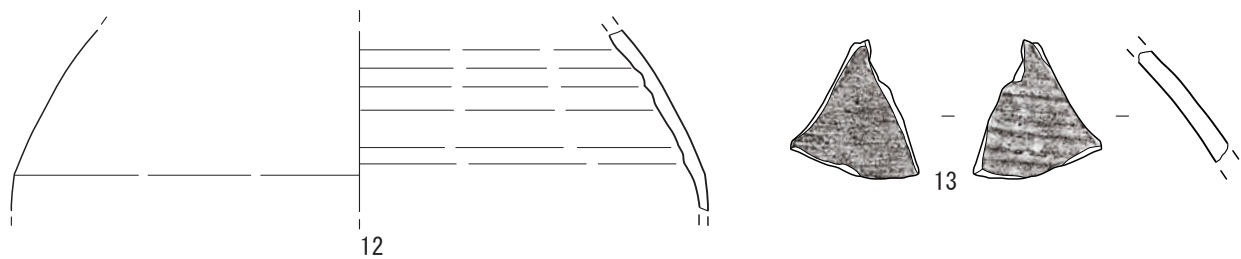
第図 図版	図 番号	叩 分類	部位	口径 (cm)	器厚 (mm)	器形・文様	素地 質・焼成・混和材	器色	遺跡・グリット・層 遺構・台帳(ドット)番号
第 145 図 ・ 図 版 102	1	F類	口縁部	15.8	5~6	肩部に丸味を持ち胴部の最大径は胴上部に来ることが予想される。口縁は頸部から「く」字状に屈曲させ外側に開きながら上に引き上げる。肩部外面に三条の波状文を巡らしている。新里分類IV式a	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗灰 裏:暗灰	HB③ S2 IIIc 台665 HB③ R1 III(12) 台1445
	2		胴部	—	6	肩部に丸味を持つ。外面に波状文。図1と同一個体の可能性が高い。	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗茶 裏:暗灰	HB③ T19 IIIc 台602
	3	E類	口縁部	12.6	5	口縁は頸部から「く」字状に屈曲させ外側に一旦開き先端を上面やや内側に引き上げる先端が尖る。口縁は無文。新里分類IV式a	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗灰 裏:暗灰	HB③ T7 IIIa 台290
	4		口縁部	16.8	5	口縁は頸部から「く」字状に屈曲させ外側にやや開きながら外に折り返す。口縁は断面形態がアーモンド形状の玉縁で無文である。	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗灰 裏:暗灰	HB③ A17 IIIc 台475
	5	A類	胴部	—	4~8	肩部にやや丸味を持つ。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:灰 裏:灰	HB③ S7 III d(14) 台1752
	6		胴部	—	7	やや開く。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:灰 裏:灰	HC J16 V(後期層) 1635
	7	B類	胴部	—	6	やや開く。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗茶 裏:暗茶	HB③ T5 III d(14) 台1456
	8	C類	胴部	—	9	丸味のある胴部。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗灰 裏:暗灰	HB③ A6 III b(5) 台365
	9		胴部	—	5	胴部は直に立つ。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:淡灰 裏:淡灰	HC D10 V(後期層) 706
	10		胴部	—	6~7	胴部はやや開き直に立つ。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:明灰 裏:暗灰	HB③ BHC III a(上) 台29
	11		胴部	—	3	肩部はなで肩。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:淡灰 裏:暗灰 (サンド)	HC J16 V(後期層) 台9994
12	胴部		—	3	逆「八」の字状に外に開き胴上部で丸味を持ち内による。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗灰 裏:暗灰	HB③ S20 III d(14) 1259 HB③ T18 III d(14) 台1649	
第 146 図 ・ 図 版 103	13	D類	胴部	—	5	肩部はなで肩。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗灰 裏:暗灰	HC T16 1201
	14		胴部	—	5	逆「八」の字状に外に開く胴部。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗茶 裏:暗灰	HB③ A15 III(12上) 台473
	15		胴部	—	5	胴部は直に立つ。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗灰 裏:暗灰	HC A15 V(後期層) 1751
	16		胴部	—	5~6	胴部は直に立つ。無文	質:細かい 焼成:良好 混和材:白	表:暗灰 裏:暗灰	HC C16 V(後期層) 1178



第 145 図 カムイヤキ 1



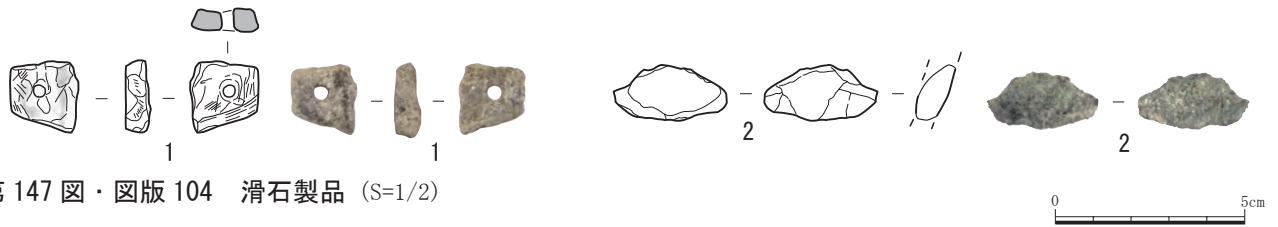
図版 102 カムイヤキ 1



第 146 図・図版 103 カムイヤキ 2

(7) 滑石製品

2点の資料が得られた。図1は有孔製品で、孔径は3mmほどである。非常に小型で薄い。孔がほぼ中央に穿たれていることから、直角台形を呈するこの平面形状には何らかの意味があるのであろう。片面に煤状炭化物が付着しており、これが側面に及んでいないことから、使用に際して煤が付着する石鍋のような器種を再加工したものと考えられる。第二浜堤砂層（第IV章第1節「層序」参照）から出土しており、第二浜堤が石鍋流通期までに形成されていたことの傍証となる。図2は僅かに青緑がかっており、厳密には結晶片岩に分類されるものと思われる。石鍋の素材となる滑石は、長崎県西彼杵半島の「西彼杵型滑石鉱床」を産地とする。これは結晶片岩を主とする広域変成岩類に貫入するようにして蛇紋岩が半島諸所に分布し、その周縁に滑石鉱床が発達したものである。つまり、滑石を産する地域では蛇紋岩や結晶片岩も同様に産するのであり、各々の中間タイプのような岩石も存在する。本資料は「質の悪い滑石」として当地にもたらされたものかもしれない。



第 147 図・図版 104 滑石製品 (S=1/2)

第 68 表 滑石製品 観察一覧

第図 図版	図番号	種別	寸法 (cm)	重量 (g)	観察事項	地区・グリッド・層序 遺構・台帳番号
第 147 図 図版 104	1	有孔製品	縦 1.9 × 横 1.8 × 厚 0.6	3.2	片面に煤状炭化物付着。	HC J13 V層 D1211
	2	破片	長 3.0 × 高 1.4 × 厚 0.7	3.8	変成鉱物が顕著。結晶片岩か。	HC F18 D78

琉球列島における滑石製品は、玉縁白磁・カムイヤキ及びグスク土器と共伴することが知られるが、その出土比率については遺跡ごとの異同が大きいことが指摘されており、宮城弘樹氏はそれを集落・集団が持つ属性・性格が反映されているとした（宮城 2016）。既に報告されている本町所在遺跡における滑石その他の遺物の出土状況について、第 69 表に示した。紙数の制限もあり、現行行政区分上の小字ごとにまとめ、概ね北→南に並べて表記した。滑石多出遺跡として知られる小堀原遺跡・後兼久原遺跡以外は、宮城氏の言う「移行期集落」に含まれることになるが、4 器種の出土比率はそれぞれで異なっていることが分かる。隣接した平安山原と伊礼原を比較すると、その比率の違いは顕著である。平安山原は調査実施面積が最も広いものの、滑石製品の出土数が極めて少ない。この「少なさ」も、当該期の集団の生活様式を解明する上で重要な視点になるものと考えられる。

第 69 表 北谷町各小字におけるグスク時代初期遺物出土状況

大字	小字	調査面積	滑石	玉縁白磁	カムイヤキ	グスク土器	所収報告書
砂辺	差久(サーク)原	106 m ²	16	5	9	555	沖縄県 81 集
浜川	千原	試掘	0	1	2	3	北谷町 23 集
伊平	大作原	15 m ²	0	0	5	71	北谷町 22 集
	平安山原	約 20,800 m ²	3	4	158	1,538	北谷町 23・33・37・38・40 集
	伊礼原	約 17,800 m ²	16	5	17	107	北谷町 8・23・26～28・31・35・36 集
上勢頭	伊礼伊森原	1,600 m ²	0	0	0	144	北谷町 18 集
桑江	小堀原	約 8,500 m ²	529	98	227	55	北谷町 23・30・34・36 集
桑江	後兼久原	約 7,300 m ²	115	98	939	20,023	沖縄埋文センター 22 集、北谷町 21・23 集
大村	城原(北谷城)	-	1	3	26	1,391	北谷町 1・2・11・32 集
	玉代勢原	525 m ²	0	0	52	89	北谷町 13 集

(8) 白磁

白磁は総数 30 点得られ、器種に碗、皿、杯、瓶がある(第 70 表)。生産地は総て中国産で景德窯系、徳化窯、福建・広東系があり、生産年代に宋～明初(12c～14c)から清(19c)までの幅を持つ。

層位別の出土をみると、HB③Ⅲ・Ⅲa層において宋～明初である玉縁の碗や口禿の碗、皿が出土し、HB③Ⅱa層は14c代の福建系の碗や15c～16cの福建・広東系の碗があり、HB③Ⅰ層からは徳化窯系の18c～19cに位置づけられる型成形の杯などが出土している。平面分布はHB③が北側と南側にやや集中し、HCは特に集中部と言える地点は認められなかった。

分類は形態、成形方法、施文範囲、釉調、素地により行い、基軸となる分類や年代観は森田勉・横田健次郎1978・森田1982に準拠するものである。主なものを第149図、図版105に、観察一覧を第71表に示した。

1. 碗

20点得られ、生産地は福建・広東系のものが多数を占め、僅かに景德鎮窯系がある。生産年代は12c～18cにまたがり、多くは14c後半～17c中葉のもので構成される。形態別には玉縁状口縁碗(12c～14c)、櫛目文碗(13c)、外反の口禿口縁碗(13c～14c)、ピロースクタイプ碗(14c)の外反口縁碗や福建・広東系の直口の撥形碗(15c～16c)などが主なものである。

図1、2は口縁の断面形態が三角状の玉縁状口縁である。胴部は逆「八」の字状に外に開き、外面は轆轤痕が顕著である。2は特に胴下部に丸味を持つ。

図3、4は口縁部が外反し口唇の上面と内側を露胎させた口禿口縁である。いずれも外体面に轆轤痕が認められ、3は胴下部に丸味を持つ。図5は内面に櫛目文を施す、腰部が逆「八」の字状に開き、内面は段状の積痕が顕著で、胴下部に斜位に櫛目文が施文されている。図6、7はピロースクタイプに属する胴部資料で、いずれも胴部に丸味を持ち外体面に轆轤痕を多く認める。6は口縁で内側に窪み先端で外反させている。図8、9は福建・広東系の口縁が逆「八」の字状に開く撥形碗である。8は直口で口唇は撥状に先端がやや肥厚し、器面は轆轤痕が顕著である。9は低めの幅広の高台で外割りの断面形態は台形状を成す。畳付を含め外底は露胎している。図10は胴下部にやや丸味があり、高台は小さめで外側から三角状に削り出している。図11は腰部に丸味を持ち器壁は薄い。高台は三角状、高台内に砂目が付着している。皿の可能性もある。図12は高めの高台を持ち断面形態は先端を両側から削り出した方形を成し、畳付は露胎し、染付や色絵になる可能性がある。

2. 皿

5点が得られている。生産地は景德鎮窯系、福建・広東系があり、生産年代は13c～16c位置づけられる。図13は口縁部が口禿になる皿の底部と考えられ、内底の中心が窪み、幅広の圏線を巡らしている。高台は外

第70表 白磁 出土量

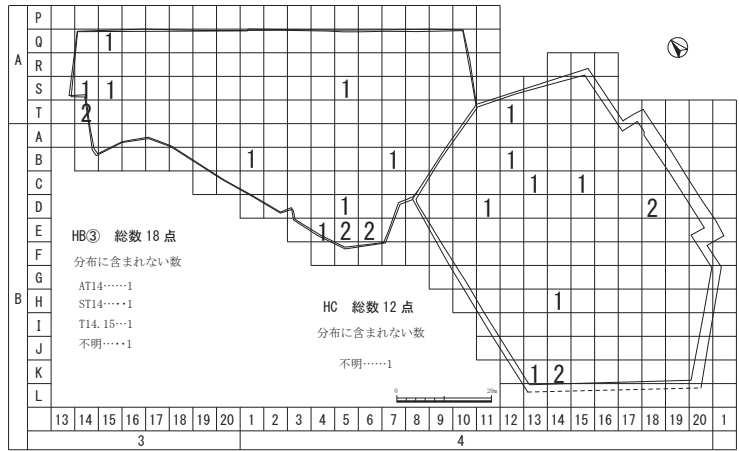
器種 年代	碗												皿			杯		瓶 明代 福建・ 広東系	合計		
	宋元		元・明初		明代				清代		不明		元・明初	明代		明代	清代				
	福建	福建・ 広東系	福建	福建・ 広東系	福建・ 広東系 かタイ	景德鎮窯	福建・ 広東系	徳化窯	不明	福建・ 広東系	不明	福建	福建・ 広東系	景德鎮窯	中国	福建	徳化窯				
遺跡 層 遺構	口	口	胴	口	胴	底	胴	底	底	胴	胴	胴	胴	底	口	底	底	胴	口	胴	
HC V			1													1					2
HC 不明	1		2			1	1	1				1	1							1	10
HC小計	1	0	3	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	0	0	1	1	0	0	12
HB③ I 攪乱						1						1								1	3
HB③ IIa 遺構						2					1	1			1					1	6
HB③ IIc 遺構																					1
HB③ III				2																	2
HB③ IIIa		1							1						1			1	1		5
HB③ 不明					1																1
HB③小計	0	1	0	2	1	3	0	0	1	1	1	1	1	0	0	1	1	0	1	1	18
HC・HB③合計	1	1	3	2	1	3	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	1
器種別計	20												5			4		1	30		

HB③: IIa 祝殿小-SL、祝殿小-SL05 HB③: IIa 石列1群 宋元:12c～13c 元・明初:13c～14c 明代:14c～17c 清代:17c～

側から斜めに削り出し断面は三角状を成す。図 14 は外底の外側に高台を作る。径は自ずと大きくなり、高台の高は低く小さい。断面形態は三角。畳付の内側は平坦な凸状で露胎させ、内底面に陰刻文を施している。図 15 は口縁が大きく外反し口唇は方形に近い丸で、全体的に薄手である。

3. 杯

総数 4 点が得られた。生産地に徳化窯系と福建・広東系がある。生産年代は 14c ~ 15c と 18c ~ 19c に位置づけられる型成形の杯がある。図 16 は腰に丸味を持ち胴部は直線的に外に開き口縁は外反する。外面は轆轤痕が顕著である図 17 ~ 19 は生産地が徳化窯で型成形の杯である。

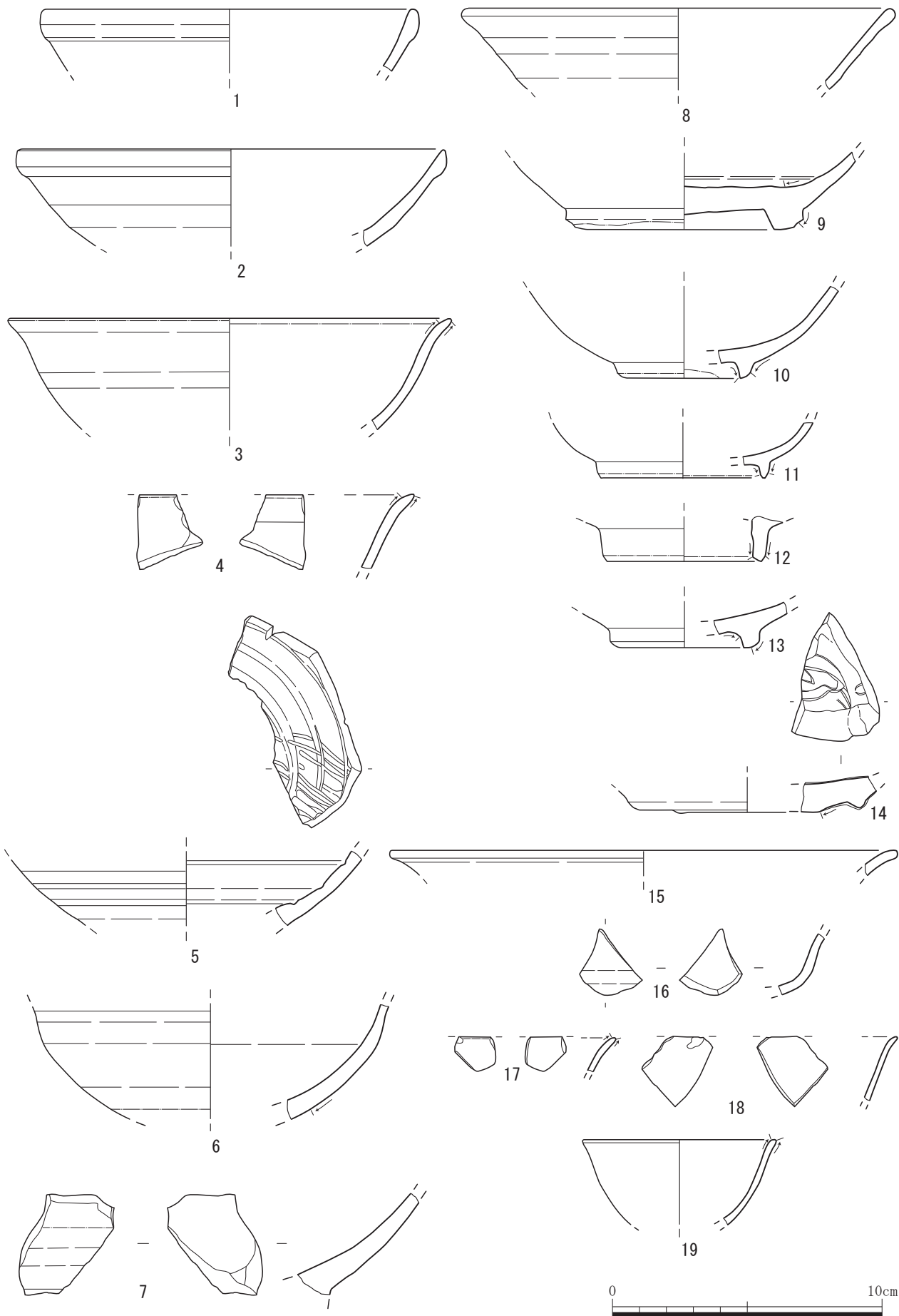


第 148 図 白磁 平面分布

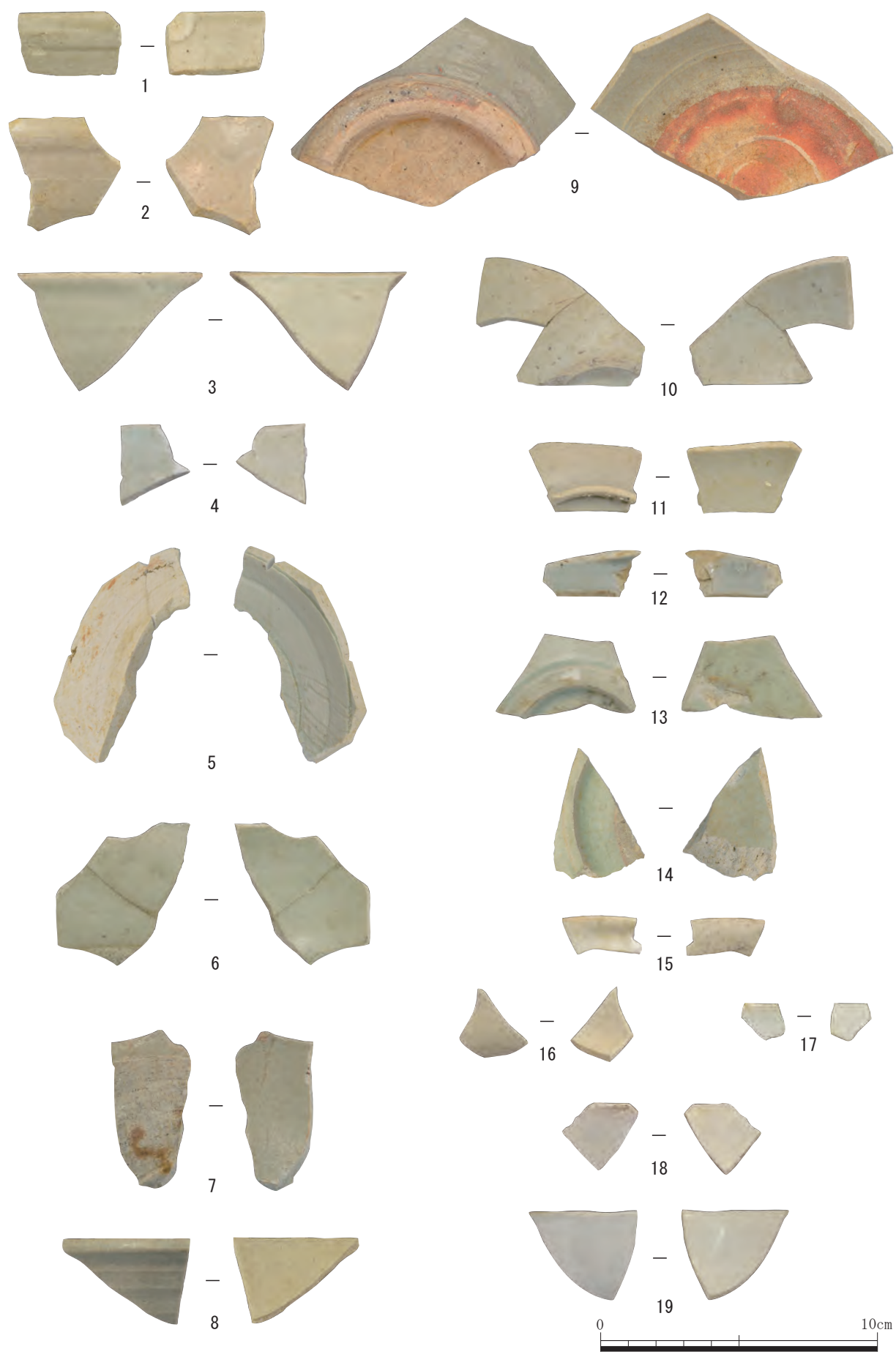
第 71 表 白磁 観察一覧

(法量単位:cm)

第図 図版	図 番号	器 種	部 位	口 径 底 径	器 形・文 様構 成	釉 色・範 囲	素 地 質	生 産 年 代 生 産 地・ そ の 他	遺 跡・グ リ ド・ 層 遺 構・ 台(ド ット) 番 号
第 149 図・ 図 版 105	1	碗	口縁部	13.6 -	口縁は外に開き断面形態は三角状の玉縁口縁をなす。外面は轆轤痕が認められる。	灰白色の釉が全面に施される。	黒色微粒子 灰白色、細かい。	13c~14c 福建	HB③ S5 III (12) 台1018
	2		口縁部	15.9 -	玉縁状、胴下部に丸味を持ち逆「八」の字状に外に開く。口縁の断面形態は三角状。外面は轆轤痕が顕著である。	乳白色の釉が全面に施される。	黒色微粒子 灰白色、細かい。	12c~14c 福建	HC D18 台5015
	3		口縁部	16.4 -	胴下部に丸味を持ち外に開く。口縁は外反し、口唇の断面形態は舌状で、口唇の上と内側を露胎させた所謂口壳である。外外面に轆轤痕。	緑白色、口唇の先端と内面は口壳。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	13c~14c 福建	HB③ S5 III (10・11) 台705
	4		口縁部	- -	口縁は直線的に開き上部で外反する。口唇の内側と先端は露胎し口壳になる。	青白色、口唇頂部から内面が口壳。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	13c~14c中 福建・広東系	HB③ E6 IIIa 台233
	5		胴部	- -	腰部は逆「八」の字状に開き、内面に横線状の轆轤痕が顕著で、斜位の楡描き状の沈線を描く。	緑灰色の釉が内面に施される。外面露胎。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	13c 福建・広東系	HC T12 下140
	6		胴部	- -	腰胴部に丸味を持ち口縁は端反り。ピロースク III。	灰白色の釉が外面の腰部までと内面に施される。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	14c 福建・広東系	HC C15 V (後期層) 下1809 下1790
	7		胴部	- -	腰部は丸味を持つ。ピロースクタイプ。	灰白色の釉が外面の腰部までと内面に施される。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	14c 福建・広東系	HC D10 台5014
	8		口縁部	16.2 -	口縁は逆「八」の字状に外に開く。先端の断面形態は撥状に肥厚。外面は轆轤痕顕著。	灰白色の釉が全面に施される。	黒色微粒子 灰白色、細かい。	15c~16c 福建・広東系	HB③ 不明
	9		底部	- 8.8	腰部は逆「八」の字状に開き、幅広高台断面形態は台形状。	緑灰色の釉が高台外面まで施される。内底は露胎。	黒色微粒子 灰白色、細かい。	15c~16c 福建・広東系	HC K14 台193
	10		底部	- 5.0	胴部にやや丸味。高台は外側から削り出し、断面形態が三角状を成す。	灰白色、畳付露胎。	灰白色 細かい。	17c前 景德鎮窯	HB③ E5 IIIa 台169.台202
	11	底部	- 6.0	高台の断面形態は、三角状。高台内砂目が付着。皿の可能性はある。	灰色の釉が高台外面まで施される。畳付を含む高台先端は露胎。	黒色微粒子 灰白色、やや細かい。	16c 景德鎮窯系	HC K14 下287	
	12	底部	- 6.0	方形、先端は両側から削り出し尖る。染付の可能性はある。	青白色、畳付露胎。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	18c 福建・広東系	HB③ AT14 II a 祝殿小-SL 台55	
	13	底部	- 4.6	内底面に一条圈線。高台は外削りで外側から削り出し断面形態は三角状。	緑白色、畳付から内側は露胎。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	13c~14c 福建	HB③ E5 IIIa 台1465	
	14	皿 底部	- 8.0	高台は比較的小さく断面形態は三角状。高台内は凸状で露胎している。	淡緑灰の釉が全面に施されるが外底は露胎。	黒白微粒子 灰白色、密。	14c後~15c前 中国	HB③ B1 IIIa 台245	
	15	口縁部	18.8 -	口縁は外反。口唇は方形に近い丸。被熱している。	白色の釉が全面に施される。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	16c 景德鎮窯系	HC B12 V (後期層) 下471	
	16	胴部	- -	腰に丸味を持ち胴部は直線的。口縁は外反。外面に轆轤痕が顕著。	乳白色が全面に施される。	黒色微粒子 灰白色、細かい。	15c 福建	HB③ B7 IIIa 台14	
	17	杯 口縁部	- -	口縁は外反し型成形の口壳。	白の釉が全面に施されるが口唇先端は拭き取っている。	黒色微粒子 灰白色、緻密。	18c~19c 徳化窯系	HC C13 台5010	
	18	杯 口縁部	- -	口縁は外反し型成形の口壳。	乳白の釉が全面に施されるが口唇先端は拭き取っている。	白色 緻密。	18c~19c 徳化窯系	HB③ T14.15 II a 祝殿小-SL 台285	
	19	杯 口縁部	7.2 -	口縁は外反。胴部は逆「八」の字状に開く。型成形の口壳。	白の釉が全面に施されるが口唇先端は拭き取っている。	黒色微粒子 白色、緻密。	18c~19c 徳化窯系	HB③ S15 I (攪乱) 台299	



第 149 图 白磁



图版 105 白磁

(9) 青磁

総数 160 点が得られた。生産地は中国産で占められるが、1 点のみ中国か東南アジア産の産地不明がある。生産窯は龍泉窯と福建・広東系があり、龍泉窯産が多数である。生産年代は 13c ~ 14c の元代から明代の 17c 中葉であるが、特に 14c ~ 15c が多く出土している。器種は碗、鉢、皿、大皿、盤が得られ、出土量は碗、皿、盤、鉢の順で多い。層位別では HC V 層に明代の碗、皿が集中し出土する傾向にあるが貝塚時代後期を母体とする層であることから後世の攪乱によると考えられる。HB ③は II c ~ III c 層に元~明代の碗、皿、盤、鉢の順で出土する。(第 72 表)。平面的な分布は特に圧倒的な集中はみられないが、A7、B7、C6、D5、E5 を結ぶ直線ラインを中心に外側に広がりを見せる(第 150 図)。

分類は器種別に行い、完形品や口縁部から底部まで揃う資料が少ないことから、主に部位別の形態分類と文様の構成、施文方法で行い更に釉調、胎土、により行なった。14c ~ 16c の碗、皿の分類と年代観は基本的に上田(1982)に準拠するものである。以下に主なものを第 151 ~ 153 図、図版 106 ~ 108 に、観察一覧を第 73 表に示した。

1. 碗

総数 122 点の出土である。文様構成と施文法により 9 種に分類した。底部は高台の形態により 3 種に分類した。

I 類 鎬蓮弁文

図 2・3 は外面に鎬蓮弁文を施文。図 2 は口縁部の先端を欠く資料であるが口縁部でやや窄み端反る口縁部が予想される。胴部は下部にやや丸味があり逆「八」の字状外に開く。外面の鎬蓮弁文は明瞭な稜線を持つ。図 3 は直口口縁部で施される鎬は肉厚である。内面は無文。

II 類 ヘラ描蓮弁文

図 4 は口縁部が直口で外面にヘラ描の蓮弁文を施文するものである。図 5・6 は高台が三角状の断面形態で外面にヘラ描きの蓮弁文を施し、内底に一条の圏線と草花の印花文を施文している。

III 類 ヘラ描ラマ式蓮弁文+唐草文

図 7 は腰部に丸味を持ち口縁部までやや開きながら立ち上がる口縁部は外反し口唇部は僅かに肥厚している。高台は畳付の外側を削り出し、断面形態は三角状になる。外面にヘラ描きのラマ式蓮弁文を描き、内面はヘラ描きの唐草文を描いている。内底に一条の圏線と草花の印花文を施している。

第72表 青磁 出土量

器種 年代 産地 遺跡 層 遺構	碗												皿				大皿		盤		鉢		盤or皿		合 計	
	元・明初		明代										元・明初		明代		明代		明代		明代					
	龍泉窯系		龍泉窯系				福建・広東系		中国or 東南アジア		不明		龍泉 窯系		福建・ 広東系		龍泉 窯系		福建・ 広東系		龍泉 窯系		龍泉 窯系			
口 胴 底		口~底		口 胴 底		口 胴 底		口 胴 底		口 胴 底		口~底		口 胴 底		口 胴 底		口 胴 底		口 胴 底		口 胴 底				
HC I																									3	
HC II																										9
HC III																										2
HC V																										30
HC 一																										24
HC小計	0	0	1	1	17	18	9	3	1	1	1	0	0	0	0	8	2	3	1	1	1	0	0	0	0	68
HB I																										8
HB II a 祝女殿内小																										3
HB II b SK05																										3
HB II c 遺構																										1
HB III																										12
HB III a	1	1			10	20																				16
HB III b	1				3	1	1																			37
HB III c																										7
HB 不明																										2
HB 不明																										3
HB③小計	2	3	0	0	24	32	5	1	0	0	0	2	1	1	3	6	1	5	0	0	0	1	2	1	1	92
HC・HB③合計	2	3	1	1	41	50	14	4	1	1	1	2	1	1	3	14	3	8	1	1	1	1	2	1	1	160
器種別計	122												30				3		2		1		2			

HB③-II c遺構 (石列1群、石列4群-SL7、SK32)

元・明初:13c~14c、明代:14c~17c

IV類 片切彫草花文

図8は外面に片切彫の草花文を施文する胴部資料で内面は無文である。両面に施文の資料も得られているが小片のため作図していない。

V類 外面や内面に雷文や草花文を型押ししている（人形手）

図9・10は内面に印花の草花文を施す。外面は無文である。図9は口縁部が玉縁状で外にやや開く。内面の印花文は口縁部上位から施されている。

図11・12は口縁部が内湾気味の直口を示し、器面の内外面に印花の雷文や草花文などを施文する11は外面の雷文下に鋸歯文、内面の雷文下に草花文を描いている。

VI類 剣先蓮弁文（線刻蓮弁文）

図13～19は外面に剣先蓮弁文を施す直口碗である。図13・14は弁先の丸い剣先蓮弁文を描く。図15～17は、蓮弁を弁先と別々に描き一对の花弁にならないものや弁先を省略するものである。図15は双状の縦線と単線の鋸歯状の弁先で省略蓮弁文を描いている。図16の蓮弁文は、弁先を波状に別に描き一对の花弁にならないものである。図17は弁先を省略した線彫蓮弁文で、胴部中に連続する斜めの斜線を伴う。図18は外面に剣先蓮弁文を施す胴部である。図19は内底に草花の印花文を施した底部資料である。

VII類 線彫雷文くずれ

図20はやや内湾する直口の浅い碗である。外面に線彫の雷文くずれと唐草文を描く。内面は無文で見込に一条の圈線が認められる。

VIII類 無文外反

図21～27は外反無文碗である。図22は胴下部に張りを持ちやや直線的に立つが口縁部の外反は弱く端反りである。図24は胴部が口縁部に向かい直線的に開き立ち口縁部の外反が比較的強い。図21・27は比較的強外反が緩やかで図23～26は外反が強い。

IX類 無文直口 a：口唇部：丸・舌状 b：口唇部：肥厚・撥状

図28はやや内湾気味に開く直口口縁で、外面の口縁部と胴部に圈線を巡らしている。図29は逆「八」の字状に直線的に開く直口口縁。bは口縁部が直口する無文で、口唇部の断面形態は撥状を成す。生産地は福建・広東系で生産年代は15c～16cに位置づけられる。小片のため図化していないが底部3類の口縁部資料と考えられる。

底部

1類 高台の断面形態は四角状高台断面形態は四角状。内底に圈線が認められる。劃花文の底部の可能性はある。図1は内底面が平坦で幅広な圈線を有する。高台断面形態は四角状で低めである。劃花文の底部の可能性はある。図5は高台断面形態は高めの四角状。

2類 高台の断面形態は三角状。図6・19・30～36は高台の外面を斜めに削り出し、断面形態が三角状を示すものである。図34は疊付の外面を削り出し高台の断面形態が三角状を成すもので、内底に印花文を施している。

3類 高台の断面形態は幅広の台形状。図37は高台の低い、断面形態が幅広の台形状を示すものである。

2. 鉢

1点の出土である。図37は口縁が外反し、口唇の尖る形態で内外の器面に片切彫草花文を描いている。

3. 皿

総数 30 点得られた。分類は口縁部形態、腰部形態、底部の高台形態により部分的に分類し、文様構成と施文方法を加え分類した。口縁部が 4 種、底部で各 4 種に分類できた。

I 類 口折円縁、片切彫蓮弁文

図 39～42 は腰折れに近い屈曲を持ち、胴部は直線的に開く。口縁部は口折れである。図 39 は腰胴部が丸く屈曲、口縁部は口折れ。高台の断面形態は四角状。外面に片切彫の蓮弁文を巡らし、内底に圏線と草花の印花文を施している。図 42 は高台の断面形態は四角状で、外面に片切彫の蓮弁文を巡らしている。図 40 は腰部が僅かに丸く立ち、口縁部は口折れで鏝状に外に張り出す。外面に片切彫の蓮弁文を施文。図 41 は口折れで外面に片切彫の蓮弁文を描いている。

II 類 稜花状縁、腰折

腰が折れ、口縁部は大きく外に開き口唇部に稜花状の抉りを入れる。内面に篋描きの草花文、唐草文や櫛描きの流水文を描くものがある。図 45・46 は口縁部が外反し口唇部に抉りをいれ稜花状を成す。図 45 は内面に櫛描きの流水文を描いている。図 46 は内面に篋描きの唐草文を描いている。図 47 は腰が折れ口縁部は外に大きく開く、口唇部に平坦面を持つことから稜花状になることが推察できる。口唇部と内面に草花文を描く。

III 類 外反、無文

図 43 は腰部に丸味を持ち、口縁部に向かいやや開き立ち、外反する。図 44 は口縁部が玉縁状にやや肥厚する。

IV 類 直口、無文

図 52・53 は口縁部が外にやや開く直口で、腰部に丸味を持つ。図 52 は高台の断面形態は四角。内底と高台内は露胎している。

底部

1 類 片切彫蓮弁文、高台断面四角

図 42 は高台の畳付の両側を斜めに削り出した外割りの断面形態は四角状である。外面に片切彫の蓮弁文を施文している。内底面に陽圏線が認められる。

2 類 腰折、高台断面形態は台形状及び三角状

図 48 は腰折で胴部は反るようにやや開きながら立つ。高台は畳付の両側を斜めに削り出し、断面形態は台形状。内面に片切彫の唐草文を施文。内底に圏線と印花の草花文を施文している。

図 49 は高台の断面形態は三角状。高台内と内底が露胎し内底見込に印花文を施文している。図 50・51 は腰折れの皿の可能性が高い。

3 類 無文、高台断面三角状

図 54・55 は腰部に丸味を持ち、高台の断面形態が三角状をなすものである。

4. 大皿

総数 3 点得られ、図 56 は内面に篋描きの蓮弁文を描く底部資料である。高台形態は台形状を成す。図 57 は高台の断面形態が台形状を成すものである。

5. 盤

総数 2 点得られた。図 58 は鏝縁口縁で口唇部は、「L」字状に折れ、上面に引き上げるものである。内面に櫛描きの蓮弁文を施文している。

第73表-1 青磁 観察一覽

(質量単位:cm)

第図版	図番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	器形・文様構成	釉色・範囲・貫入	素地色・混和材・質	生産年代 生産地	遺跡・グリッド・層 遺構・台(ドット)番号
第151図・図版106	1	碗	I	底部	— — 3.2	高台断面形態は四角状。内底に圏線が認められる。劃花文の底部の可能性ある。	オリーブ色 高台脇	紫灰色 黒微粒子 密	12c~14c 龍泉窯系	HC J14 F518
	2		I	胴部	— — —	外反し外面に鑄蓮弁文を施す。内面無文。	緑灰色 全	褐色 黒・白色細粒子 ・細かい	13c~14c前 龍泉窯系	HB③ BC5.6 SK032 台1030
	3		I	口縁部	— — —	内湾気味の直口碗外面に鑄蓮弁文、内面無文。	褐色 全 貫入	褐色 黒白褐色細粒子 ・細かい	14c頃 龍泉窯系	HB③ S10 IIIb(5) 台307.308
	4		II	口縁部	15.0 — —	口縁は直口を成す。口唇は内側がやや尖る舌状。外面にへら描の蓮弁文を施文。	オリーブ色 全	灰色 黒白細粒 細かい	14c後~15c前 中国or東南 アジア	HC B16 V(後期層) F795
	5		II	底部	— — 5.6	高台内に砂目。高台は内割りの台形に近い三角。外面にへら描の蓮弁文を施文。内底は圏線と印花文。	緑灰色 高台内	灰色 黒微粒子 密	14c後~15c前 龍泉窯系	HC C15 V(後期層) F346
	6		II	底部	— — 5.8	高台の断面形態は高台の外側から削る三角状をなす。外面にへら描の蓮弁文、内底に一条圏線と印花文を施文。	淡緑色 高台内蛇の目 釉剥ぎ	灰色 黒白細粒 密	14c後~15c前 龍泉窯系	HC 不明 台5050
	7		III	口 底部	16.4 6.2 8.9	腰部に丸味を持ち口縁は外反。口唇はやや玉縁状をなす。高台は畳付の外側から削り出した断面形態が三角状。外面にへら描のワタ蓮弁文を描き、内面は片切彫の唐草文を描いている。内底は一条の圏線と印花文を描いている。	オリーブ色 高台内蛇の目 貫入	灰色 黒色微粒ガラス 質石英か 密	14c後~15c前 龍泉窯系	HC C14 V(後期層) F2942
	8		IV	胴部	— — —	外面にへら描の草花文を施文。内面は無文。	オリーブ色 全	灰色 黒白細粒 細かい	14c後~15c前 龍泉窯系	HC A12 V(後期層) F626
	9		V	口縁部	17.6 — —	口縁は玉縁をなし内面に型押の文様を施す所謂人形である。文様は草花文	淡灰緑 全	灰色 白黒細粒子 密	14c後~15c前 龍泉窯系	HB③ B6 IIIb(5) 台573
	10		V	胴部	— — —	内面は型押の草花文。外面は無文。人形手である。	オリーブ 全	灰色 白黒微粒子 密	14c後~15c前 龍泉窯系	HB③ D3.4 III(8~11) 台578
	11		V	口縁部	18.2 — —	やや開く直口口縁を成す。口唇は先端が厚い丸。外面に印花の雷文帯と波文を巡らしている。内面は型押の雷文と草花文(人形手)を施文している。	淡灰緑色 全	灰色 白黒色細粒 密	15c 龍泉窯系	HC C15 V(後期層) F370
	12		V	口縁部	18.0 — —	やや内湾気味に立ち上がる直口口縁である。口唇は丸い。外面と内面に印花の雷文帯を巡らしている。	淡灰緑色 全	灰白色 白黒微粒子 細かい	15c 龍泉窯系	HC B12 V(後期層) F1170
	13		VI	口縁部	14.6 — —	胴部から内湾気味に立ち上がる。口縁は直口を成し、口唇は丸い。外面に丸彫の蓮弁文を施している。	淡灰青色 全 貫入少	灰色 黒白微粒子 密	15c前~15c末 龍泉窯系	HC C17 F165
	14		VI	口縁部	15.4 — —	内湾気味の直口碗。外面に丸彫の蓮弁文を施す。内面、口縁に幅広二条の圏線。	淡灰緑 全 貫入	灰色 黒白微粒子 密	15c前~15c末 龍泉窯系	HB③ ST17~20 I 台69 HB③ T19 IIIa(3) 台1650
	15		VI	口縁部	15.0 — —	内湾気味の直口碗。外面に双状の篋により略蓮弁文を施す蓮弁の剣先は別々に描かれている。内面無文。	オリーブ全	灰色 白黒細粒子 細	15c前~15c末 龍泉窯系	HB③ D5 III(9) F204
	16		VI	口縁部	11.6 — —	口縁は内湾気味に立ち、口唇は丸い。外面に線彫の蓮弁文を描くが剣頭と蓮弁は別々に描き一対の弁にならない。	淡オリーブ色 全 貫入	生成色 黒白微粒子 細かい	15c後~16c前 福建・広東系	HC E9 II F619 HC D9 II F620
	17		VI	口縁部	13.0 — —	口縁はやや開き直に立ち、口唇は丸い。外面に剣頭を省略した線彫の蓮弁文を描き、中位に斜行の彫込みを巡らす。	オリーブ色 全 貫入	灰色 黒白細粒 細かい	15c後~16c前 福建・広東系	HC D18 F99
第152図・図版107	18	VI	胴部	— — —	外面に線彫の蓮弁文を描く。	灰緑色 全 貫入	灰色 黒白細粒 密	15c前~15c末 龍泉窯系	HC K14 F460	
	19	VI	底部	— — 4.6	高台の断面形態は畳付の外側から削り出した台形状。外面に線彫の蓮弁文を描く。内底面に印花文を施している。	灰緑色 高台内露胎 貫入	灰色 黒白細粒子 細かい	15c 龍泉窯系	HC J12 F141	
	20	VII	口縁部	12.8 — —	内湾気味の直口で浅い碗である。口唇はやや四角く外面に線彫の雷文くずれと横文を描く。内底圏線。	淡黄緑色 全 貫入少々	灰白色 白黒微粒子 密	16c前 福建・広東系	HC F16 F171	
	21	VIII	口縁部	18.0 — —	外反口縁。口唇は丸い。無文。	灰緑色 全	灰色 黒白微粒子 密	14c後~15c中 龍泉窯系	HC A13 II F1994	
	22	VIII	口縁部	16.6 — —	口縁は外反し口唇はやや舌状の丸、胴下部に張りを持つ。無文。	灰緑 全	灰色 黒白微粒子 密	14c後~15c中 龍泉窯系	HB③ A18 IIIa 台268	
	23	VIII	口縁部	14.0 — —	胴部は口縁に向かい緩やかに開き立ち上がる。口縁は外反し口唇は丸い。無文。	灰緑色 全	灰色 黒白微粒子 密	14c後~15c中 龍泉窯系	HC B16 III(グスク) F3957	

第73表-2 青磁 観察一覧

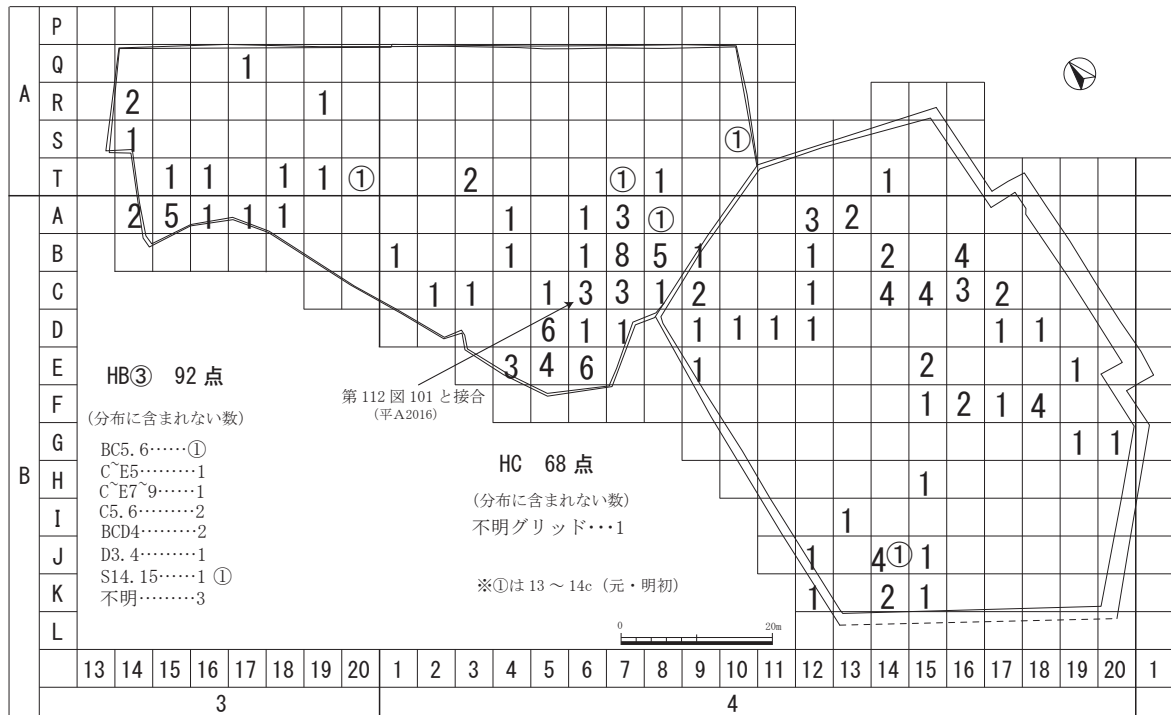
(質量単位:cm)

第図版	図番号	器種	分類	部位	口径 底径 器高	器形・文様構成	釉色・範囲・貫入	素地色・混和材・質	生産年代 生産地	遺跡・グリッド・層 遺構・台(ドット)番号
第152 図・ 図版 107	24	碗	VIII	口縁部	15.6 — —	口縁は一旦内に寄り外反する。口唇は舌状。胴下部に張りを持つ。無文。	灰緑 全	灰色 黒白微粒子 密	14c後～15c中 龍泉窯系	HB③ C～E5 (試掘トレ0～20) 台93
	25		VIII	口縁部	18.4 — —	胴部は口縁に向かい緩やかに開き立ち上がる。口縁は外反し口唇は丸い。無文。	灰緑色 全 貫入	灰色 黒白微粒子 密	14c後～15c中 龍泉窯系	HC F16 II ㊦1229
	26		VIII	口縁部	15.4 — —	口縁は外反し口唇は丸い。胴下部に張りを持つ。無文。	オリーブ 全	灰色 黒微粒子 密	14c後～15c中 龍泉窯系	HB③ C～E7～9 I 台65 HB③ E5 IIIa 台203 HB③ D6 III(8～11) 台528
	27		VIII	口縁部	14.4 — —	胴部は口縁に向かい緩やかに開き立ち上がる。口縁は外反し口唇はやや玉縁。無文。	オリーブ色 全	灰色 黒白微粒子 密	14c後～15c中 龍泉窯系	HC E15 V(後期層) ㊦1111
	28		IX	口縁部	14.3 — —	やや内湾気味の直口。口唇はやや丸い。	オリーブ色 全 貫入少	灰色 黒白微粒子 密	15c 龍泉窯系	HC C15 V(後期層) ㊦5004
	29		IX	口縁部	12.4 — —	口縁はやや開きながら立つ、直口無文。	オリーブ 全	灰色 白黒微粒子 密	15c 龍泉窯系	HB③ B7 IIIa上 台14
	30		2	底部	— — 5.6	高台の断面形態は三角状。内底に圏線と印花文を施文。	灰緑色 高台内蛇の目 釉剥ぎ	灰色 黒微粒子 密	14c後～15c中 龍泉窯系	HC E15 ㊦315
	31		2	底部	— — 7.0	腰部は逆「八」の字状に開く。高台の断面形態は畳付の外側から削り出した台形状。内底面に圏線と印花文を施している。	灰緑色 高台内蛇の目 釉剥ぎ・貫入	灰色 黒白微粒子 密	14c後～15c中 龍泉窯系	HC B14 V(後期層) ㊦455
	32		2	底部	— — 5.6	高台の断面形態は畳付の外側から削り出した台形状。内底面に圏線と印花文を施している。	淡オリーブ色 畳付 貫入	灰色 黒白細粒 細かい	14c後～15c中 龍泉窯系	HC D11 V(後期層) ㊦650
	33		2	底部	— — 6.8	高台の断面形態は三角。高台内と内底は露胎している。内底見込に印花文を施す。	オリーブ 高台脇	橙色 白黒微粒 細	14c後～15c中 龍泉窯系	HB③ A2 IIIa 台239 HB③ E4 III(8～10) 台571
34	2	底部	— — 6.2	腰部は逆「八」の字状に開く。内底に圏線と印花文。高台内の釉を蛇の目状に釉剥ぎする。	オリーブ 高台内蛇の目 釉剥ぎ・貫入	灰白色 黒細粒子 密	14c後～15c中 龍泉窯系	HB③ B7 IIIc(7) ㊦667		
第153 図・ 図版 108	35	鉢	2	底部	— — 5.0	腰部はやや丸味を持ち高台の断面形態は三角状に削り出す。無文	紫オリーブ色 高台内露胎 貫入	紫灰色 黒微粒子 密	15c 龍泉窯系	HC K15 ㊦250
	36		2	底部	— — 7.6	高台の断面形態は三角状。体面無文。内底に印花文を施文。釉が厚い。鉢の可能性あり。	青緑色 高台内蛇の目 釉剥ぎ	灰色 黒微粒子 密	14c後～15c中 龍泉窯系	HC C14 V(後期層) ㊦738
	37		3	底部	— — 6.8	高台は低く外側から斜に削り出し、断面形態は幅広の台形状。外底に轆轤痕が顕著である。	青緑色 内底蛇の目 釉剥ぎ、外底無釉	橙灰色 白黒微粒子 密	15c～16c 福建・広東系	HC I(表採) 台12818
	38		—	口縁部	21.4 — —	口縁は外反し口唇は丸い。胴下部に張りを持つ。内外面に片切彫の草花文を施す。	灰緑 全	灰色 黒色細粒子 密	14c後～15c中 龍泉窯系	HB③ B8 III(8～11) 台571
	39		I	口 底部	13.0 4.0 5.2	腰胴部が丸く口縁は口折れ。高台の断面形態は四角状。外面に片切彫の蓮弁文を巡らしている。内底に草花文印花文を施す。	淡褐緑 高台脇 貫入	褐灰色 黒色細粒子 細	14c末～15c中 龍泉窯系	HB③ C6 IIc 石列1群 SL002 台567 HA④ B18 C19 II F18 III 台1971.1984.2177(接合)
	40		I	口 底部	11.8 3.0 6.1	腰部は僅かに丸く立ち上がる。口縁は口折れ。口縁は鏝状に外に張り出す外面に片切彫の蓮弁文を施している。	オリーブ 不明	灰色 黒白微粒子	14c後～15c前 龍泉窯系	HB③ A7 IIIa 台221
	41		I	口縁部	12.0 — —	口縁は口折れを成し、外面に片切彫の蓮弁文を巡らしている。	淡灰緑色 全	灰色 白黒細粒子 密	14c後～15c前 龍泉窯系	HC T14 V(後期層) ㊦1766 HC A14 II ㊦2000
	42		1	底部	— — 6.8	高台の断面形態は四角状。高台内の釉を蛇の目釉剥ぎしている。外面に蓮弁文を施している。内底見込に陽圏線。	淡灰緑 高台内蛇の目 釉剥ぎ	灰白色 黒細粒子 密	14c後～15c前 龍泉窯系	HB③ A7 IIc 石列4群-SL07 ㊦442
	43		III	口縁部	10.4 — —	腰に丸味を持ち胴部は直線的に外に開く。口縁は外反する。	緑灰色 全	灰色 白黒細粒子 密	14c末～15c 龍泉窯系	HC F15 V(後期層) ㊦1185
	44		III	口縁部	13.0 — —	口縁は玉縁をなす。無文。	淡灰緑 全	灰白色 黒白微粒子 密	14c末～15c 龍泉窯系	HB③D5 IIc 石列1群SL (SL.01.02) 台52
45	II	口縁部	— — —	稜花皿である。口縁部は外反し口唇部に抉りをいれ稜花を成す。口唇は舌状を成す。内面に楡目描きの流水文を描く。	青緑色 全	灰色 黒白微粒子 密	15c 龍泉窯系	HC F18 ㊦67		
46	II	口縁部	— — —	口縁部は稜花を成し、口唇はへら削りする。内面に篋描きの唐草文を施している。	オリーブ 全 貫入	灰色 黒白微粒子 細	15c 龍泉窯系	HB③ C8 I(攪乱) 台739		
47	II	口縁部	— — —	口縁部が稜花の腰折れの皿、口唇と内面に沈線文(草花文)	灰緑 全 貫入	灰色 黒白微粒子 細	15c前～15c末 龍泉窯系	HB③ E6 I(攪乱) 台205		

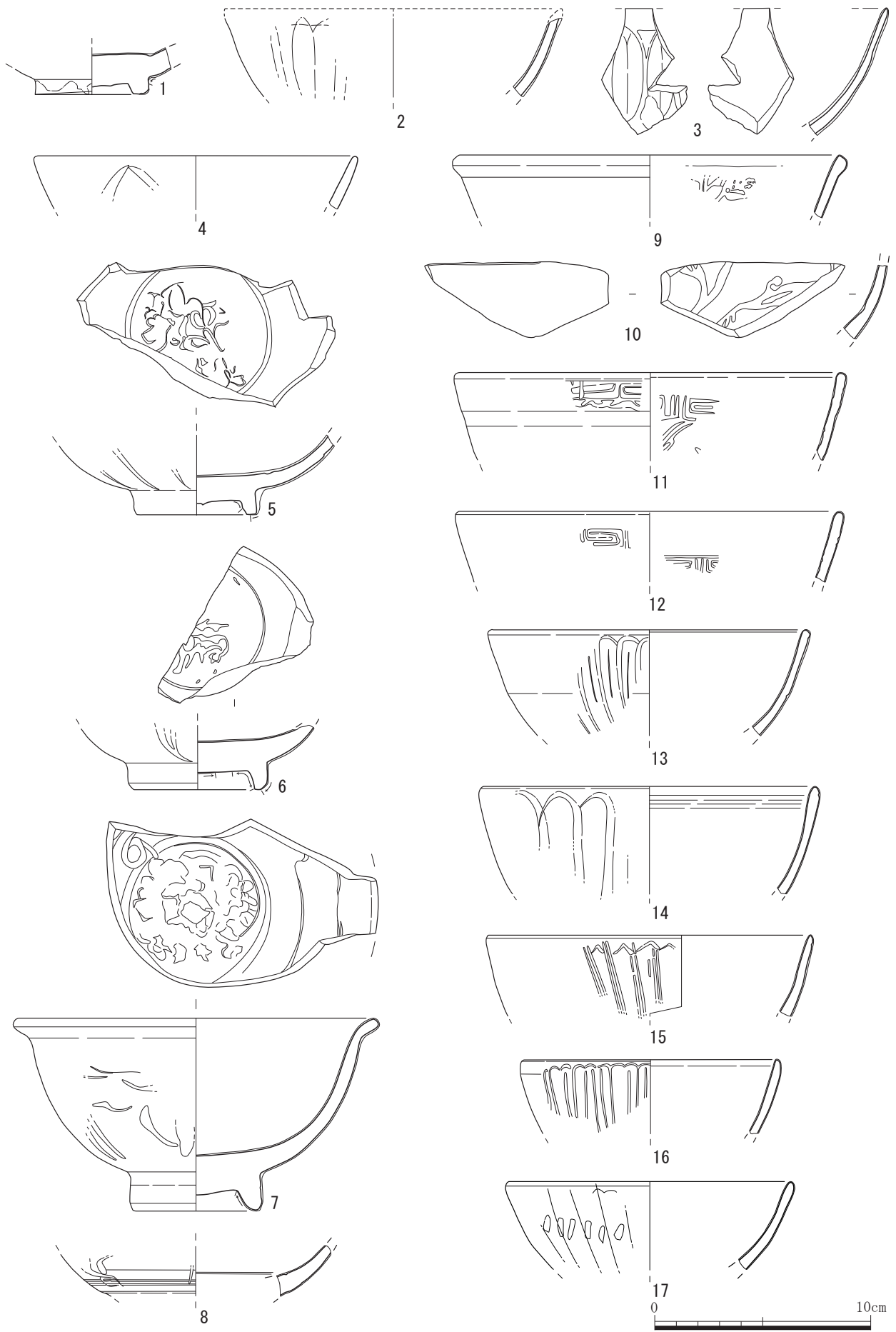
第73表-3 青磁 観察一覧

(法量単位:cm)

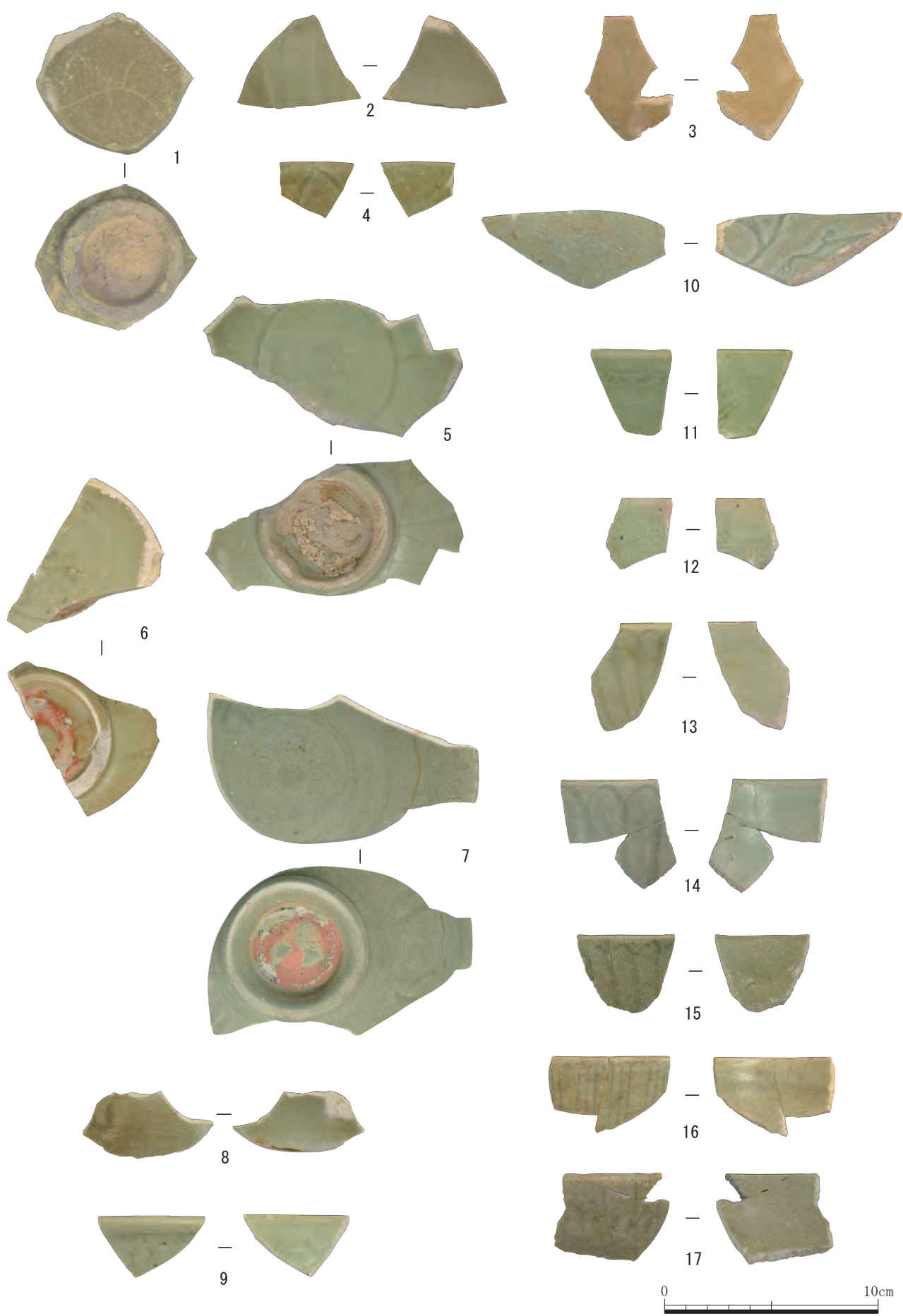
第図 図版	器 番号	器 種	分 類	部 位	口 径 底 径 器 高	器形・文様構成	釉 色・範囲・貫入	素地 色・混和材・質	生産年代 生産地	遺跡・グリッド・層 遺構・台(ドット)番号	
第 153 図 ・ 図 版 108	48	皿	2	底部	— — 5.8	腰折れで胴は外に開きながら立つ。高台は畳付の両側を斜めに削り出し、断面形態は台形状。内面に片切彫の唐草文を施文。内底に圏線と印花の草花文を施文している。	灰緑色 高台内蛇の目 釉剥ぎ 貫入	灰色 黒微粒子 密	15c 龍泉窯系	HC G19 ㊦42	
	49		2	底部	— — 6.0	腰折れ気味。高台の断面形態は三角状。高台内と内底は露胎している。内底見込に印花文を施す。	淡灰緑 内底、外底露胎	灰白 黒微粒子 密	15c 龍泉窯系	HB③ T15 IIIa 台275	
	50		2	底部	— — 5.2	腰部はやや屈曲する。高台の断面形態は台形状。無文	灰緑色 畳 貫入	灰色 黒白微粒子 密	15c 龍泉窯系	HC B9 ㊦153	
	51		2	底部	— — 6.6	底面は広目で平坦。腰折れになり外に開き立ち上がる。内底に1条の圏線。高台の断面形態は台形状。高台内は蛇の目釉剥ぎ。	淡青緑 高台内蛇の目 釉剥ぎ・貫入	灰色 黒微粒子 密	14c後～15c中 龍泉窯系	HB③ T8 IIIa上 台13 HB③ I (攪乱) 台71	
	52		IV	口～ 底部	9.8 2.7 5.4	内湾気味の直口、高台の断面形は四角状。高台内と内底は露胎している。焼成不良。	不明(白化) 内底露胎、外底 蛇の目釉剥ぎ	淡橙色 白黒微粒子 細	15c 龍泉窯系	HB③ B8 IIb 台24	
	53		IV	口縁部	9.0 — —	胴の丸く口縁は直口を成す。口唇は丸い。	オリーブ色 全 貫入	灰色 黒微粒子 密	15c 龍泉窯系	HC C15 ㊦363	
	54		3	底部	5.3 — —	高台の断面形態は四角状。円盤状製品	淡緑灰 内底露胎、高台 脇・貫入	生成り色 黒微粒子 気泡粗い	15c～16c前 福建・広東系	HC I13 I (攪乱) ㊦9	
	55		3	底部	— — 6.0	腰部はやや屈曲する。高台の断面形態は台形状。無文。碗の可能性あり。	オリーブ色 高台内釉剥ぎ 貫入	灰色 黒微粒子 密	14c後～15c前 龍泉窯系	HC J14 II ㊦1206	
	56		大 皿	—	底部	— — 7.0	高台の断面形態は台形状。内面に篋彫り蓮弁文、見込に陽圏線。鉢の可能性あり。	オリーブ色 高台内(蛇)	灰色 黒白微粒子 密	14c後～15c中 龍泉窯系	HC A12 II ㊦2010
	57			—	底部	— — 10.4	高台は見込に比べ小さく断面形態は台形状に削られる。内底見込に陽圏線。鉢の可能性あり。	淡黄緑 高台脇 貫入	灰 白黒細粒 密	15c後～16c 福建・広東系	HB③ C2 IIc 石列1群(SL02) 台477
58	盤	—	口縁部	— — —	口縁は鏝線状をなし断面形態は「L」字状。口唇の先端は上面に摘まみ上げる。内面に櫛描きの蓮弁が認められる。	オリーブ 全 貫入	灰色 黒白微粒子 密	14c後～15c前 龍泉窯系	HB③ C7 III(8～11) 台523		



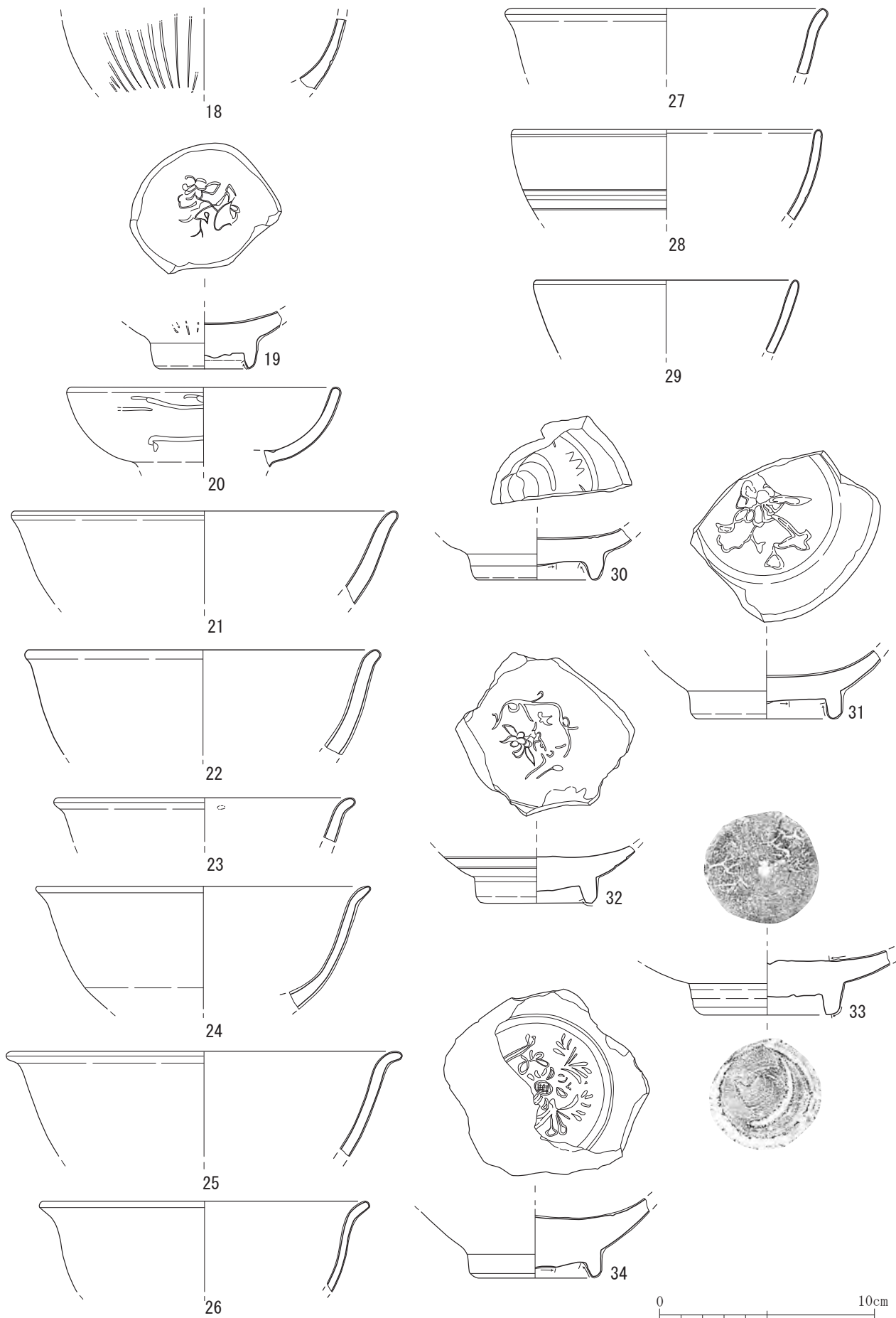
第150図 青磁 平面分布



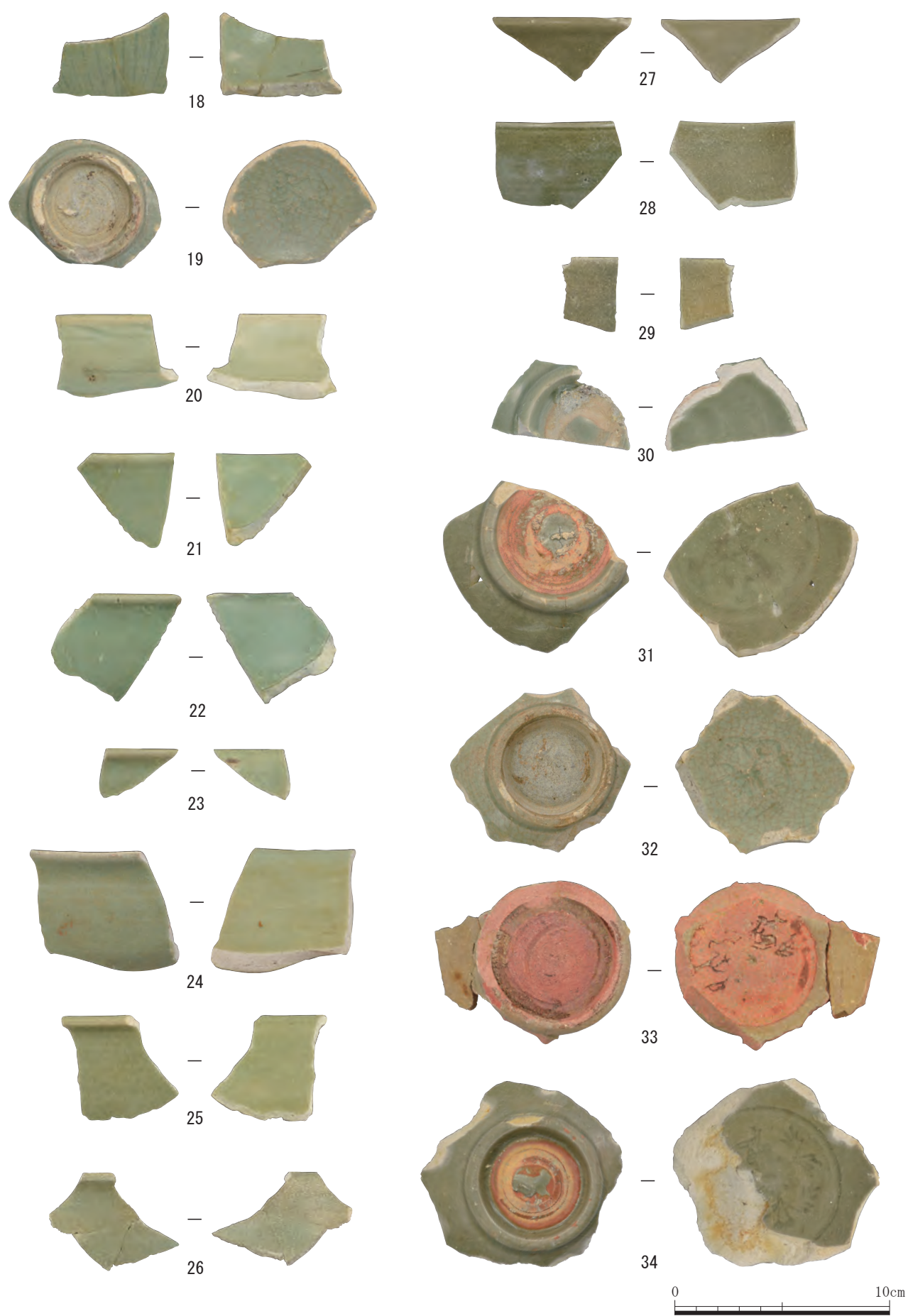
第151图 青磁1



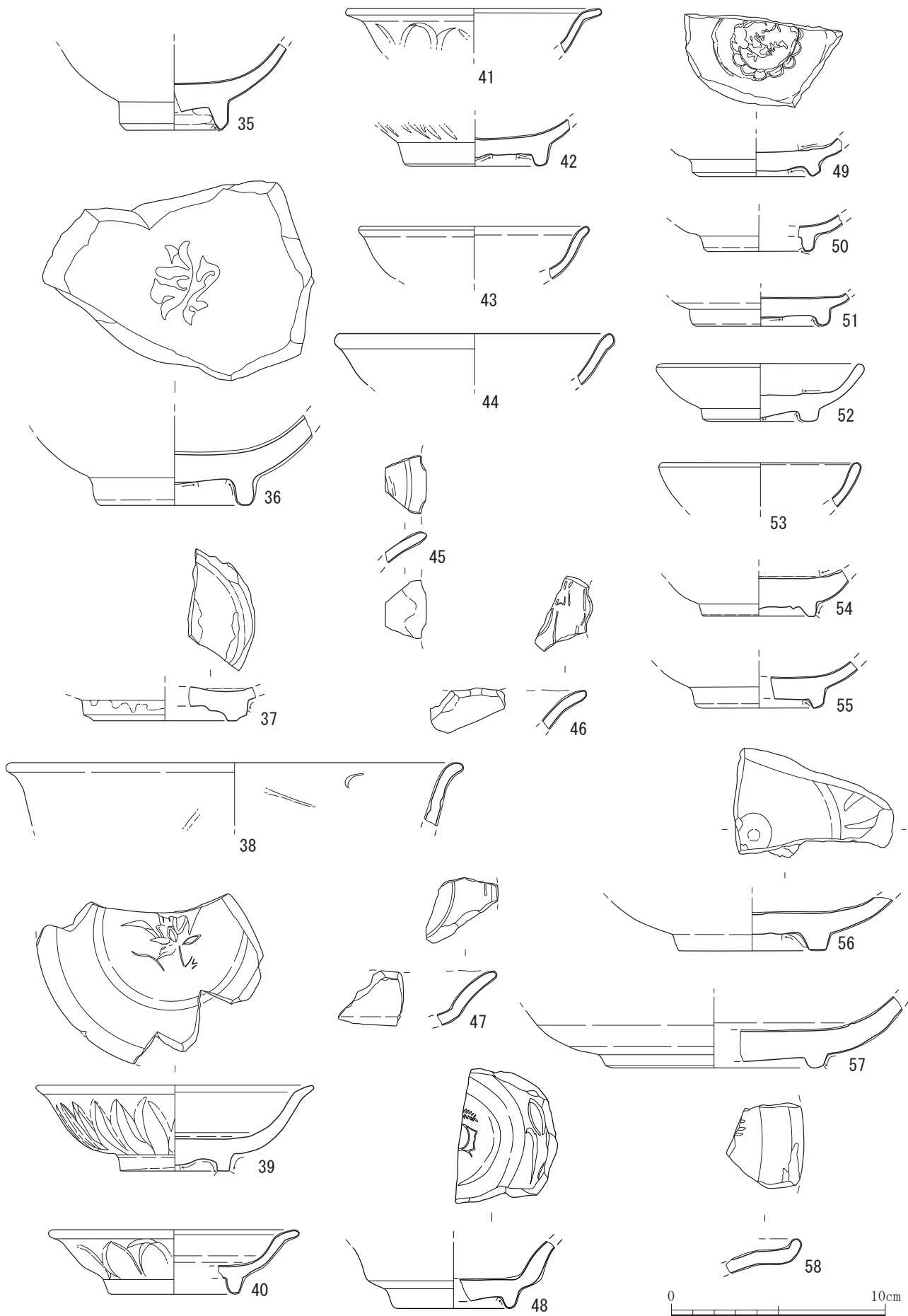
图版 106 青磁 1



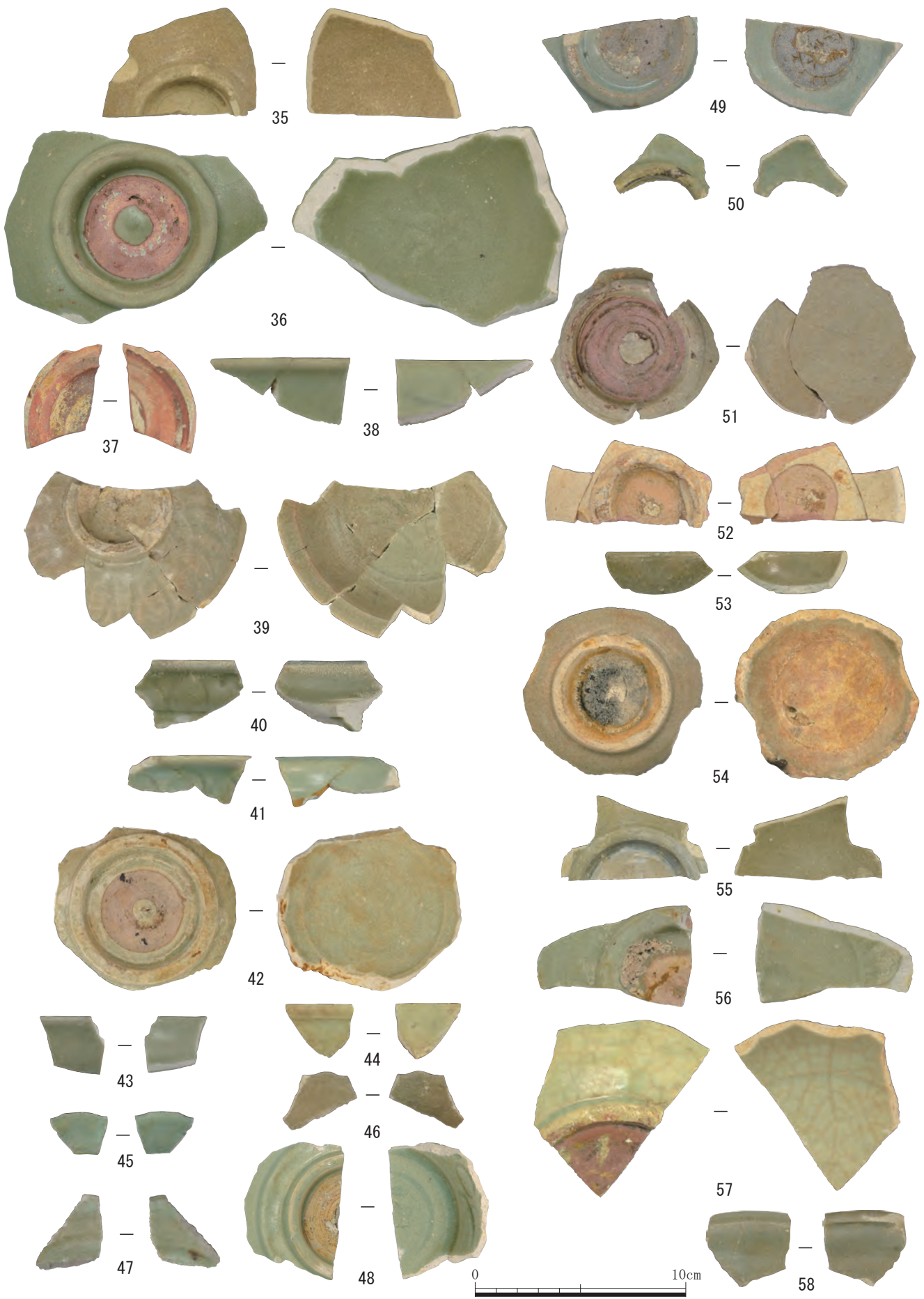
第 152 图 青磁 2



图版 107 青磁 2



第153图 青磁3



图版 108 青磁 3

(10) 染付・色絵

総数 60 点が得られ器種は碗 48 点、皿 8 点、杯 1 点、瓶 2 点、鉢 1 点が得られている（第 74 表）。生産地は景德鎮窯系、漳州窯系、福建・広東系があり、生産年代は 15c 後半～17c の明代から 17c 後半～18c の清代に位置づけられるが、碗は清代のものがやや多い。層位別には HB ③では I、II a 層に清代の福建・広東系の碗が多く出土している。平面分布においても HB ③は清代の遺物が多く、北側の祝女殿小周辺に集中する。HC は主に東側に出土し明代のものが多い傾向がある。分類は基本的に形態、成形方法、文様構成、施文範囲、釉調、素地により行い、明代は小野 1982 編年を基軸とする。以下に主なものを第 155・156 図、図版 109・110 に観察を第 75 表に示した。

1. 碗

I 類：やや小振りで口縁は外反する。胴部は直線的に立ち立ち、底部は高台が華奢な作りで内削りである。小野分類 B 群に属する。

図 1 は胴部が直線的に立ち口縁は外反する。外面に二条の圈線と唐草文を施文、内面は二条の圈線を巡らす。図 2 は逆「八」の字状に開き口縁は外反する。口唇は舌状を成し外面に圈線と唐草文を施文する。内面は二条の圈線に雷文帯を巡らしている。図 3 は逆「八」の字状に開き口縁は外反する。口唇は丸状。外面に圈線と唐草文を施文し内面は四方襷文を巡らしている。図 4 は逆「八」の字状に外に開き、口縁は外反する。口唇は丸状。外面に一条の圈線と唐草文を施文している。内面に圈線を配する。図 5 の高台は内削りの断面形態は三角状を成す。外面腰部に簡略化した蓮弁文を配し高台に圈線を巡らし、内底に二条の圈線と梅月文を施文している。いずれも生産地は景德鎮窯系、生産年代 15c 後半～16c 前半に位置づけられる。

II 類：口縁が直口し胴部は直線的に逆「八」の字状に外に開く。底部は内底面が窪む蓮子心になり高台は細作りになると考えられる。小野分類 C 群に属する。

図 6 は口縁が直口で口唇は角状、外面に圈線と波濤文を巡らしている。内面は圈線を巡らしている。図 7 は直口口縁で口唇は角状、外面に圈線と波濤文を巡らし下位に笹文を配している。内面は圈線を巡らしている。いずれも生産地は景德鎮窯系、生産年代は 16c 前半～16c 中葉。

III 類：口縁は直口で II 類と同様な口縁と考えられる。腰部が「く」の字に屈曲、胴部は直線的に外に広がる。内底面は広く平坦である。小野分類 D 群に属する。

図 8 は腰部に張りを持ち、胴部は直線的に外に広がる。高台は華奢で断面形態は三角状を成す。外面にアラベスク文を配し腰下部と高台に圈線を巡らしている。内底に二条の圈線に字花文を施文している。生産地は景德鎮窯系、生産年代は 15c 後半～16c 前半に位置づけられる。

IV 類：口縁が直口し腰部に丸味を持ち、胴部は直線的に立ち上がることが考えられる。内底は饅頭心である。小野分類 E 群に属する。

図 9 は内底が盛り上がる饅頭心を示し、高台は内削りの断面形態は三角状を成す。高台内側に砂目を確認できる。外面腰下部と高台に圈線を配し内底は二条の圈線と芙蓉文を施文している。高台内に角福の銘款を付す。生産地は景德鎮窯系、生産年代は 16c 後半に位置づけられる。

V 類：見込みは中心がやや窪み、小野分類 C 群に近い底部形態を示す。

図 10 は腰部に張りがあり、高台形態は三角状の断面を持つ、見込みは中心がやや窪む。畳付に破損部を研磨した部分があり、焼成時の溶着のための剥離面を修復し座りを整えたことが窺える。生産地は景德鎮窯系、生産年代は 16c～17c に位置づけられる。

VI類：口縁が直口し、胴部は直線的に逆「八」の字状に大きく外に開く。口縁部と内底に圈線を巡らす。無文である。

図 11 は胴部に丸み持ち逆「八」の字状に大きく外に開く、口縁は直口し口唇の断面形態は丸状。口縁の外内面に一条の圈線を配している。生産地は漳州窯系、生産年代 16c 後半～17c 初めに位置づけられる。図 12 の高台は外側と内側から削り出し畳付は四角い。外面の腰部と内面の見込に圈線を巡らし。外底と内底は露胎している。生産地は福建・広東系、生産年代 17c に位置づけられる。

VII類：外面に印文を施す印青花である。口縁部は直口と外反とある。胴部は直線的に逆「八」の字状に外に開くが、胴部は高台から屈曲するように直に立ちあがる。胴径に比較して高台径の広いものが多い(図 15)。図 13 は口縁が直口し口唇は先端のやや細い丸。外面に印花文を施文している。図 14 は胴部に丸味を持ち、口縁は直口し口唇は丸くなる。外面に唐草文と印花菊花文を施文。内面は口縁と見込に圈線を配している。15 の高台は外削りで、断面形態は三角状。外面に丸文を施文。内底と外底は露胎している。図 16 は高台が外削りの断面形態は四角状。内底は中心が盛り上がる。饅頭心で外面の腰部に一条の圈線を、内面は見込に一条の圈線を配している。内底は釉を蛇の目釉剥ぎし、外底は露胎している。生産地はいずれも福建・広東系、生産年代は 17c 後半～18c 前半に位置づけられる。

VIII類：口縁は直口で、胴部は直に立ち上がる。高台の断面形態は細い。

図 17 は口縁が直口で口唇は丸い。外面に圈線と梵字文を描き、内口縁は圈線を配する。図 18 は腰部にやや丸みを持つ。高台は高めで、断面形態は三角状。外面は梵字文と下位に蓮弁文を描き高台脇と高台に圈線を巡らしている。見込に圈線を配する。図 19 は高台の断面形態が先端のやや丸い細目の方形で外面に簡略した蓮弁文を巡らしている。いずれも生産地は福建・広東系、生産年代は 18c である。

2. 皿

生産地は景德鎮窯系、漳州窯系、福建・広東系が得られている。生産年代は 16c 末～17c 前半の明代から清代の 17c 後半～18c 代のものがある。図 20 は鏝状の稜花皿である。鏝の外面に圈線と草花文を施文し内面に圈線と四方禳文を巡らす。生産地は景德鎮窯系、生産年代は 16c。図 21 は逆「八」の字状に開き口縁は端反、口唇は舌状を成し外面に圈線と蓮華唐草文を施文している。内面は圈線を巡らしている。生産地は景德鎮窯系、生産年代は 16c 前半～中葉。図 22 は逆「八」の字状に開き口縁は内湾。口唇は舌状を成す。外面に圈線と略化した字文を施し、内面に圈線を巡らしている。底部が基筒底になる小野分類 C 群に属することが考えられる。生産地は景德鎮窯系、生産年代は 16c。

図 23 は胴部が逆「八」の字状に開く内面に花菱繋ぎ文を巡らしている。生産地は漳州窯系で生産年代は 16c 末～17c 前半。図 24 は高台の断面形態は三角状を成す。外面の高台に圈線を巡らしている。内底面に草花文を施文している。生産地は景德鎮窯系、生産年代は 16c 前半～中葉。

3. 杯

図 25 に示す 1 点のみの出土である。口縁部を欠く資料で詳細は不明であるが外反の杯(小碗)と考えられる。外面に草花文を施している。生産地は景德鎮窯系、生産年代は 16c～17c である。

4. 瓶

2 点のみの出土である。生産地は景德鎮窯、生産年代は 15c 末～16c に位置づけられる。図 26 は口縁がラッパ状に外に開き口唇は舌状を成す。外面に二条の圈線と縦の蕉葉文を描く。図 27 は高台の断面形態は台形状で畳付は丸い。外面腰下部に如意頭繋文を配し高台に二条の圈線を施す。

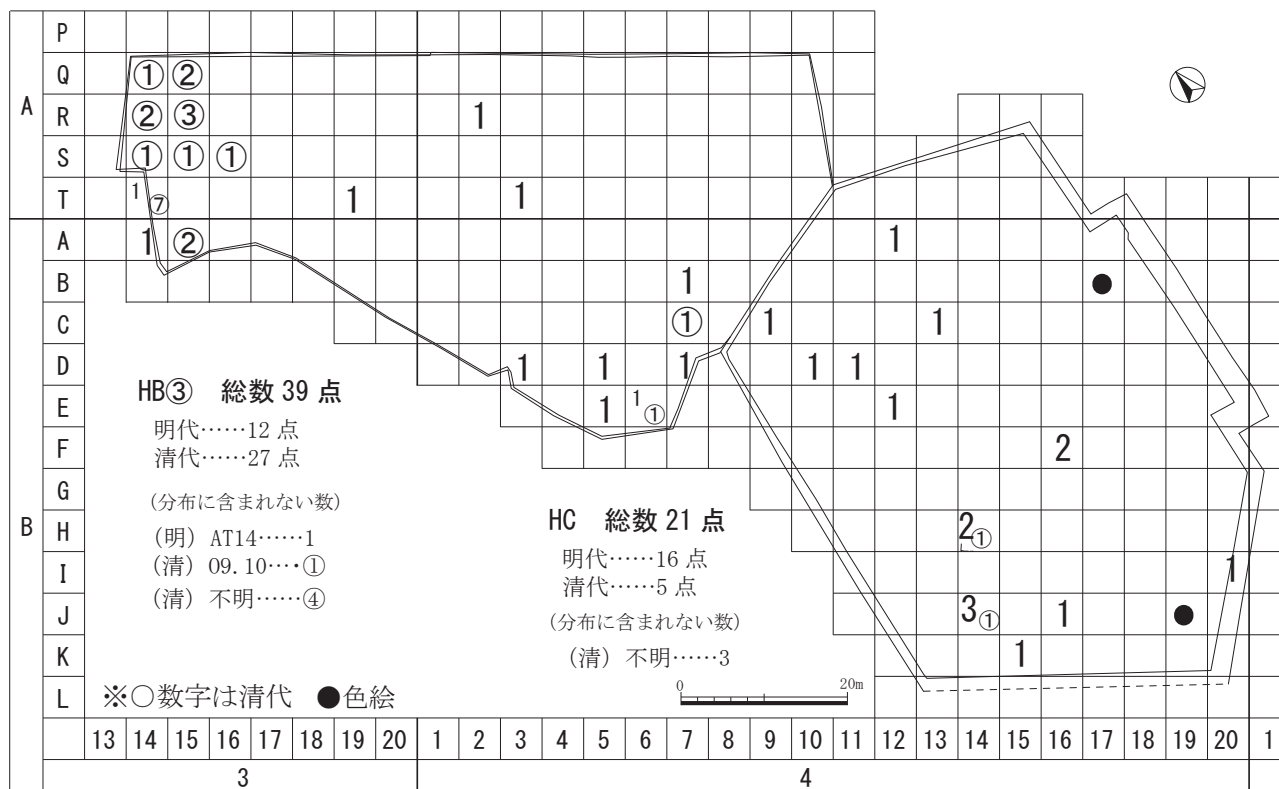
・色絵

碗の口縁部1点、胴部1点の計2点が得られている。図28は端反りの口縁で口唇は舌状を示す。外面に草花文を描いている。上絵のみの絵付けで、圏線と草花文の縁取りを赤で描き、文様の周りを緑色に塗っている。草花文の地色は剥落し不明である。B17 V層(後期層)出土。生産地は福建・広東系の生産年代は18cに位置づけられる。

第74表 染付・色絵 出土量

遺跡 層 遺構	器種 時代 産地	碗										皿			杯	瓶	鉢	合計	碗(色絵) 清代 福建・ 広東系 口・胴	
		明代					清代					明代		清代	明代	明代	清代			
		景德鎮窯系	漳州窯系	福建・ 広東系	不明	景德鎮窯系	福建・広東系	漳州窯	景德鎮窯系	景德鎮窯系	漳州窯	景德鎮窯系	景德鎮窯系	福建・ 広東系	景德鎮窯系	景德鎮窯系	福建・ 広東系			
		口	胴	底	口	口~底	底	口	胴	底	胴	口	胴	底	底	底	底			底
HC	I							1										1	2	
	II	1																	1	
	V	1									2		1						4	1
	—	4	1	1	1	1			2		1				1	1		1	14	1
	HC小計	6	1	1	1	1	0	0	3	0	0	1	2	0	1	0	1	1	21	2
HB③	I	1		1				1	6	3					1				13	
	IIa 遺構		1					2	5	1				1					10	
	IIc 遺構							1											1	
	III	1	1				1		1	2	1		1	1					9	
	IIIa	1		2				1			1						1		6	
	HB③小計	3	2	3	0	0	1	1	5	13	6	0	1	1	0	2	0	0	39	0
HC・HB③合計		9	3	4	1	1	1	1	8	13	6	1	3	1	1	2	1	1	60	2
年代別計		19					29					5		3	1	2	1	60	2	
器種別計		48										8			1	2	1	60	2	

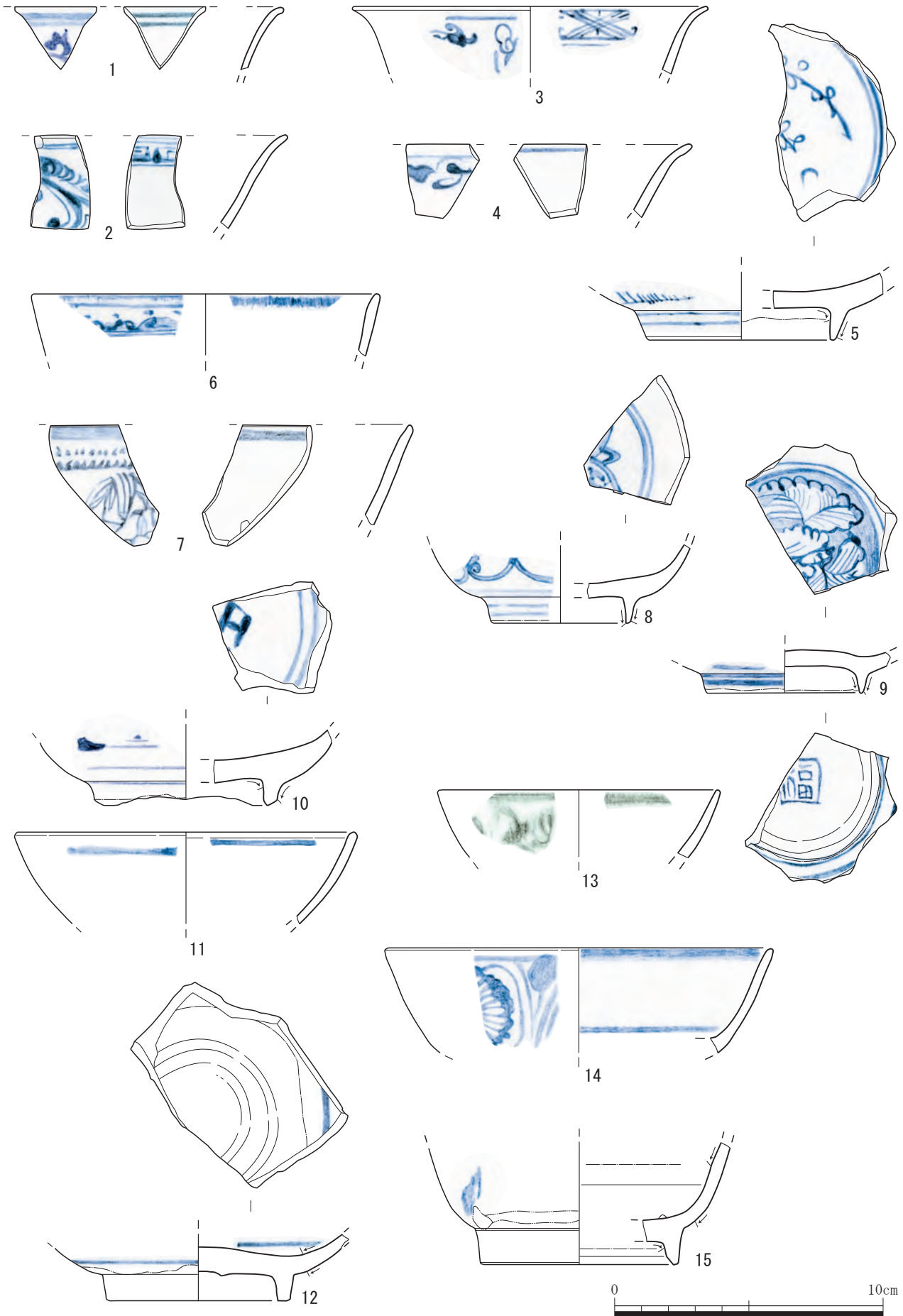
<凡例>:HB③IIa:祝女殿内小-SL、祝女殿内小-SL03、04周辺、0.5 IIc:石列1群口 明代:14c~17c中 清代:17c中~



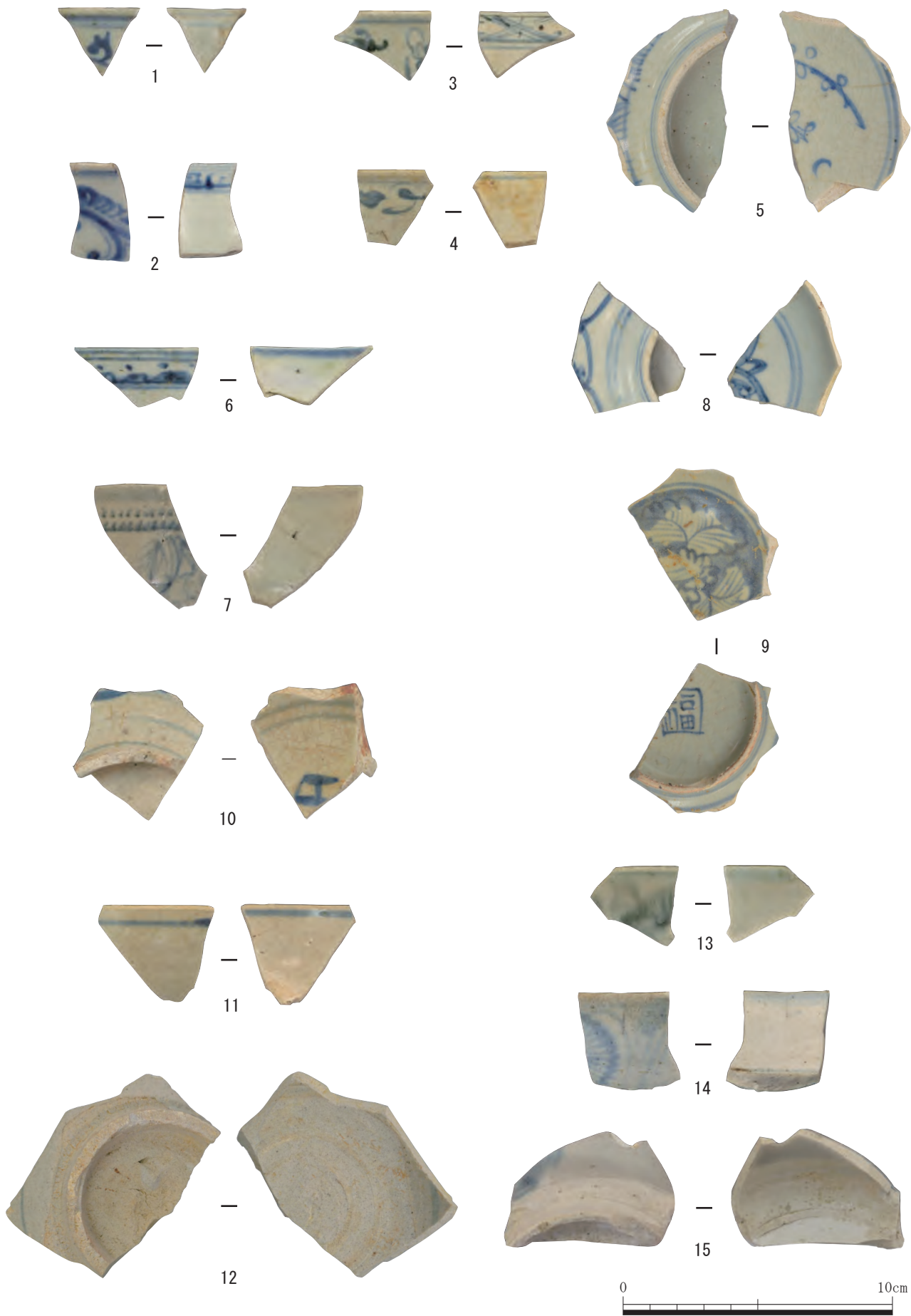
第154図 染付・色絵 平面分布

第75表 染付 観察一覧

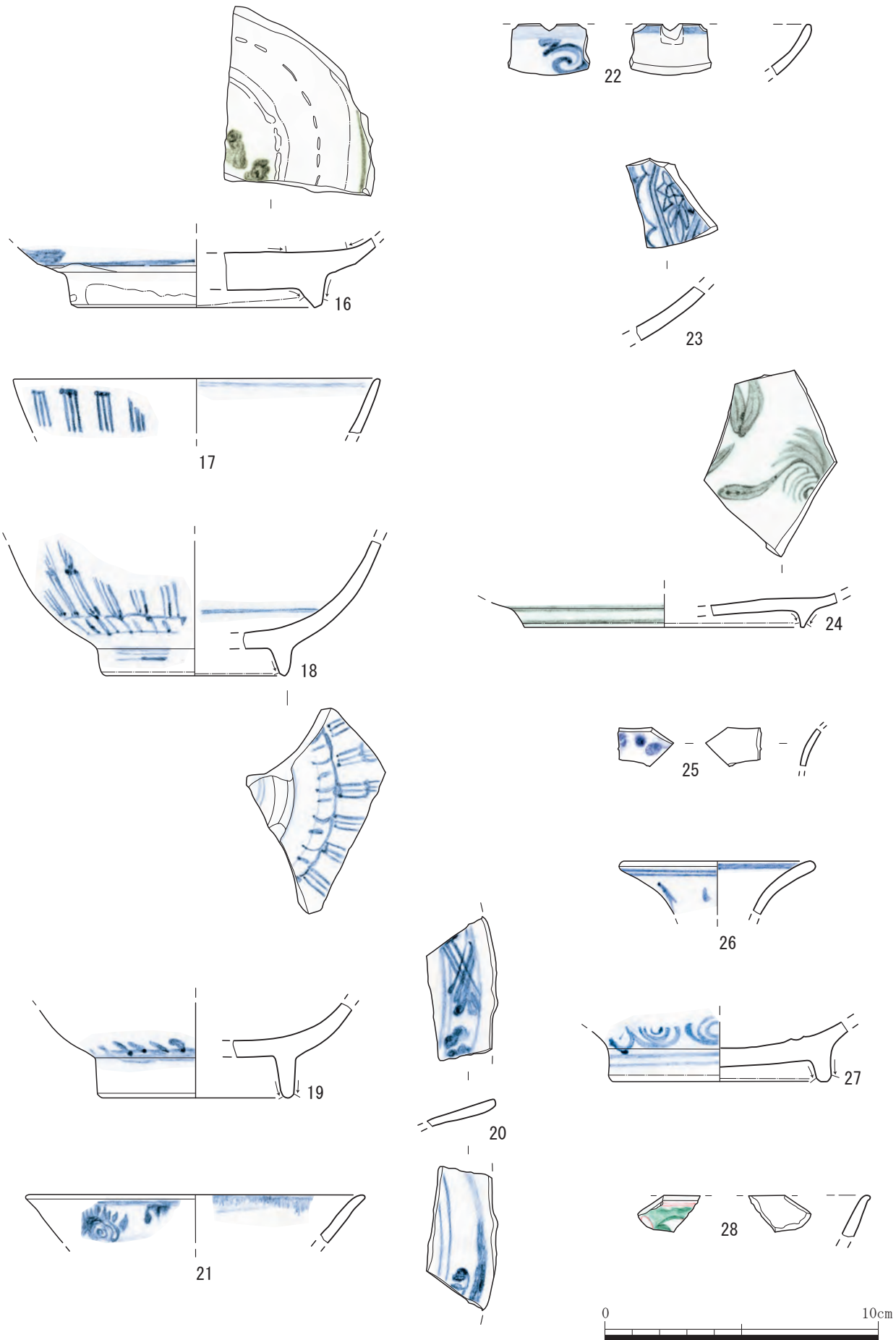
第図 図版	図 番号	器種	分類	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器厚 (mm)	器形・文様構成	釉・呉須	素地 色・質	生産年代 生産地	遺跡・グリッド・層 遺構・台(ドット)番号
第155 図・ 図版 109	1	碗	I	口縁部	—	—	3.0	口縁は直線的に立ち外反する。外面に二条の圏線と唐草文を施文、内面は二条の圏線巡らす。	淡青白色 発色は普通	灰白色 密	15c末～16c前 景德鎮窯系	HC D10 V(後期層) 台5005
	2			口縁部	—	—	3.0	口縁は逆「八」の字状に開き外反する。口唇は舌状を成し外面に圏線と唐草文を施文する。内面は二条の圏線に雷文帯を巡らす。	淡青白色 発色は普通	灰白色 密	15c後～16c前 景德鎮窯系	HB③ E6 III(10-11) 台707
	3			口縁部	13.2	—	4.0	口縁は逆「八」の字状に開き外反する。口唇は丸状。外面に圏線と唐草文を施文し内面は四方櫛文を巡らす。	淡青白色 発色は悪い	灰白色 密	15c末～16c初 景德鎮窯系	HB③ A3 T19 IIIa(3) 台1650
	4			口縁部	—	—	4.0	口縁は逆「八」の字状に開き外反する。口唇は丸状。外面に一条の圏線と唐草文を施文。内面に圏線を配する。	灰白色 発色は普通	灰白色 密	15c後～16c前 景德鎮窯	HB③ B7 I 台34
	5			底部	—	7.4	8.0	高台は内割りの断面形態は三角状を成す。外面腰に簡略化した蓮弁文を配し高台に圏線を巡らしている。内底に二条の圏線と梅月文を施文している。	淡青白色 発色は普通	灰白色 密	15c後～16c前 景德鎮窯系	HB③ T3 IIIa 台153
	6			口縁部	13.0	—	4.0	口縁は直口で口唇は角形、外面に圏線と波濤文を巡らしている。内面は圏線を巡らしている。	淡青白色 発色は普通	灰白色 密	16c前～中 景德鎮窯系	HC A12 II 下2718
	7			口縁部	—	—	4.0	口縁は直口で口唇は角形、外面に圏線と波濤文を巡らし篋文を配している。内面は圏線を巡らしている。	淡青灰色 発色はやや薄い	灰白色 密	16c前～中 景德鎮窯系	HC J14 下283
	8			底部	—	5.2	3.0	腰部が張り、胴部は直線的に立つ。高台は華奢な断面形態は三角状を成す。外面にアラベスク文を配し腰下部と高台に圏線を巡らす。内底に二条の圏線に草花文を施文している。	淡青白色 発色は普通	白色 密	15c後～16c前 景德鎮窯系	HC F16 台5017
	9			底部	—	6.0	5.0	高台は内割りの断面形態は三角状。内底は饅頭心を呈する。高台内側に砂目。外面、腰下部と高台に圏線、内底に二条の圏線と芙蓉文を施文。高台内に角福を付す。	淡青白色 発色は普通	白色 密	16c後 景德鎮窯系	HB③ A14 I 台63
	10			底部	—	6.8	5.0	外面に草花文、腰下部と高台に圏線を巡らす。内底に二条の圏線に草花文を施文。	淡青白色 発色は普通	灰白色 密	16c～17c 景德鎮窯系	HB③ R2 IIIa 台129
	11			口縁部	12.6	—	3.0	胴部に丸み持ち逆「八」の字状に開く、口縁は直口し口唇の断面形態は丸状。口縁の外内面に一条の圏線を配する。	淡青白色 発色はやや薄い	灰白色 密	16c後～17c初 漳州窯系	HC K15 下194
	12			底部	—	6.8	5.0	高台は外側と内側から削り出し畳付は四角い。腰部外面と内面の見込に圏線を巡らす。外底と内底は露胎している。	淡青白色 発色はやや薄い	灰白色 密	17c 福建・広東系	HB③ C7 III(9) 下269
	13			口縁部	10.4	—	4.0	口縁が直口し口唇は丸い。外面印花文を施文している。	灰白色 発色はやや薄い	灰白色 密	17c末～18c 福建・広東系	HC H14 下4
	14			口縁部	14.4	—	4.0	胴部に丸味を持ち、口縁は直口。口唇は丸い。外面に唐草文と印花文を施し、内面は口縁と見込に圏線を配する。	灰白色 発色はやや薄い	灰白色 密	17c末～18c前 福建・広東系	HC I(表採) 台5073
	15			底部	—	7.4	5.0	腰部が丸く屈曲、胴部は直線的に立つ。高台は外割りの断面形態は三角状。外面に丸文を施文。内底と外底は露胎。	灰白色 発色はやや薄い	灰白色 密	17c末～18c前 福建・広東系	HB③ R15 I 台102
	16			底部	—	9.2	4.0	外割りの高台で断面形態は三角状。外面に唐草文と内底は草花文を施文。内底の釉を蛇の目状に稀刺ぎしている。畳付は露胎。鉢の可能性ある。	灰白色 発色はやや薄い	灰白色 密	17c後～18c前 福建・広東系	HC I(表採) 台12811
	17			口縁部	13.4	—	3.0～ 4.0	口縁は直口で口唇は丸い。外面に圏線と梵字文を描き、内口縁は圏線を配する。	緑がかる青白色 発色は普通	灰白色 密	18c 福建・広東系	HB③ I 台9
	18			底部	—	7.0	5.0	腰部にやや丸みを持ち、胴部は直に立ち上がる。高台の断面形態は細く先端が三角状。外面に梵字文を描き、下位に蓮弁文を巡らす。高台脇と高台に圏線。内面は口縁と見込に圏線を配する。	緑がかる青白色 発色は普通	灰白色 密	18c 福建・広東系	HB③ S15 I 台299
	19			底部	—	7.2	5.0	高台の断面形態は細く先端が丸い方形。外面の腰下位に蓮弁文を巡らす。高台脇と高台に圏線。	淡青白色 発色はやや薄い	灰白色 密	18c 福建・広東系	HB③ Q15 I 台95
第156 図・ 図版 110	20	口縁部	—	—	4.0	口縁は鏢状の稜花縁を成す。鏢の外面に圏線と草花文を施文し内面は圏線と四方櫛文を巡らす。	淡青白色 発色は悪い	灰白色 密	16c 景德鎮窯系	HC C9 V(後期層) 下734		
	21	口縁部	12.4	—	4.0	逆「八」の字状に開き口縁は端反、口唇は舌状。外面に圏線と蓮華唐草文を施文。内面は圏線を巡らす。	淡青白色 発色は悪い	灰白色 密	16c前～中 景德鎮窯系	HC C13 V(後期層) 下414		
	22	口縁部	—	—	4.0	逆「八」の字状に開き口縁は内湾、口唇は舌状。外面に圏線と略化した字文を施文。内面に圏線。底部が基筒底になる。	淡青白色 発色は普通	灰白色 密	16c 景德鎮窯系	HB③ D3 III(8～11) 台562		
	23	底部	—	—	5.0	胴部は逆「八」の字状に開く内面に花菱繫ぎ文を巡らしている。	淡青白色 発色はやや薄い	灰白色 密	16c末～17c前 漳州窯	HC I20 台5035		
	24	底部	—	10.2	3.5	高台の断面形態は三角状を成す。外面高台に圏線、内底に草花文を施文。	淡青白色 発色は普通	灰白色 密	16c前～中 景德鎮窯系	HC D11 V(後期層) 下649		
	25	杯	胴部	—	—	2.5	外に開く外面に草花文を施文している。小碗。	淡青白色 発色は普通	灰白色 密	16c～17c 景德鎮窯系	HC H14 下14	
	26	瓶	口縁部	7.2	—	3.0～ 4.0	口縁はラッパ状に外に開き外反する。口唇は舌状。外面に二条の圏線と蕉葉文を描く。	淡青白色 発色は普通	灰白色 密	15c末～16c 景德鎮窯系	HB③ D5 IIIa 台201	
	27	瓶	底部	—	8.2	4.0	高台の断面は台形状。畳付は丸い。内底面に施釉前の器厚調整痕と考えられるヘラ削り痕が確認できる。	淡青白色 発色は普通	灰白色 密	16c 景德鎮窯系	HC F16 下295	



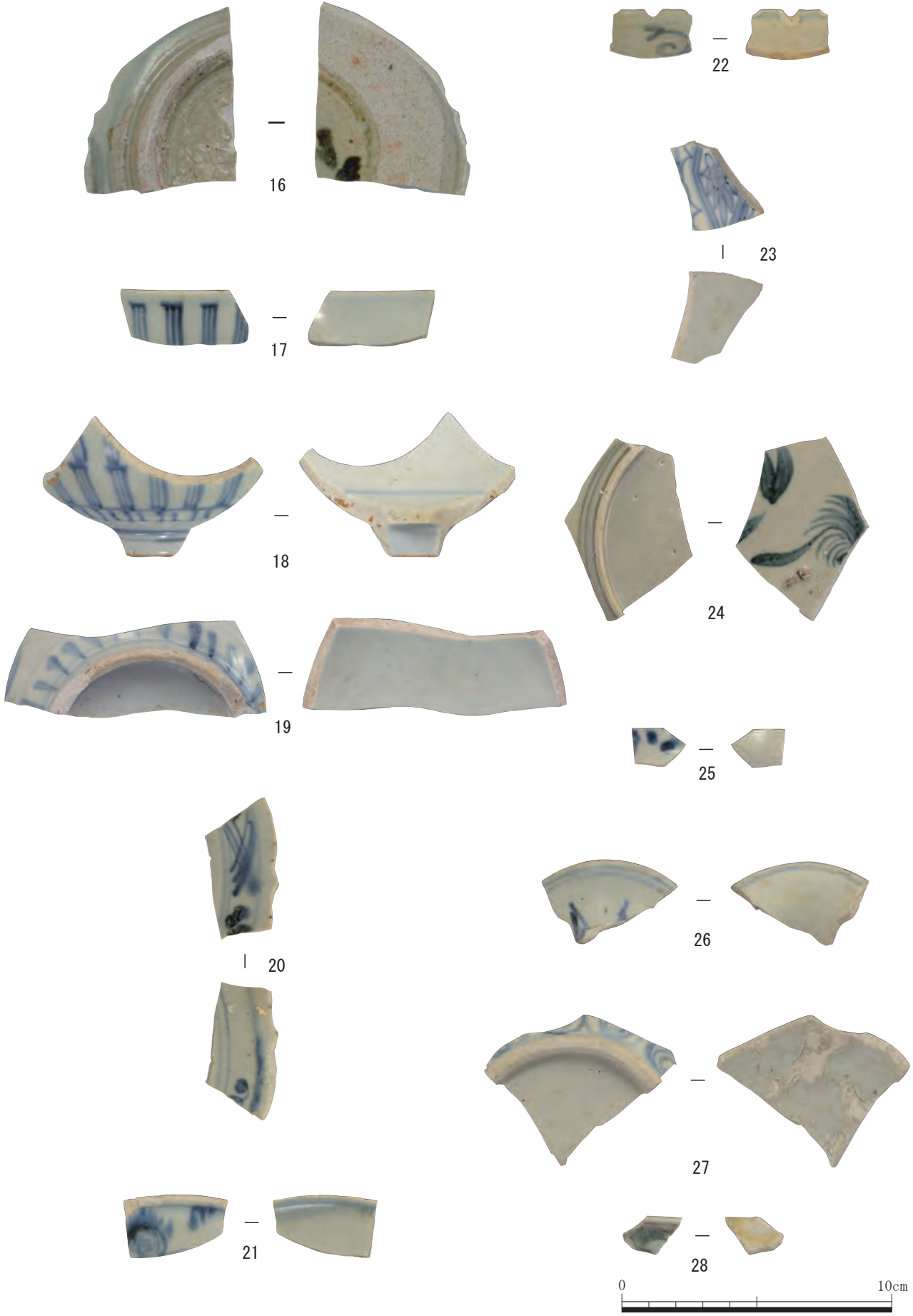
第155图 染付1



图版 109 染付 1



第 156 図 染付 2・色絵



图版 110 染付 2・色絵

(11) 褐釉陶器・半練土器

褐釉陶器は総数 86 点の内、中国産 60 点、タイ産 24 点、東南アジア産 2 点が得られている。器種は壺が殆どで 84 点、袋物が 1 点、壺甕不明が 1 点であった（第 76 表）。中国産・東南アジア産の生産年代はいずれも明代、タイ産の生産年代は 15c ~ 16c に位置づけられるものである。東南アジア産は大型の壺甕鉢の器種不明の胴部が 2 点えられているが小破片であることから今回図化していない。

層位別出土量は HC で V 層に多く出土しているが V 層が後期層であることを踏まえると後世の攪乱を受けた結果と考えられる。HB ③では III a に集中する。平面分布においては HB ③の南側にやや分布が集中する傾向にある。以下に主なものを第 158 図、図版 111 に観察一覧を第 77 表に示した。

中国産

当該の陶器は壺が殆どであったが、瓶か小壺などの全形を確認できないものを袋物で報告し、壺は法量別に大型、中型、小型に分類し集計した。

大型の壺が 12 点得られている。図 4、5 は大型の壺破片である。4 は肩が張り頸部は内向、器表面に楕円形の叩き締め痕が認められる。5 は器面に轆轤痕が顕著な胴部資料である。

中型の壺は 20 点得られた。図 1 は頸部が内向し口縁は外側に折り丸め、玉縁状を成す。図 2 は口縁が外に開き口唇の断面形態は三角状、いずれも口縁の上端部を外側に折返し成形している。外面は器面調整され轆轤痕はあまり認められない。図 6 は縦付きの外耳で壺の肩から頸部に貼付されるものであるが、胴部の器厚から中型壺に貼付されたものと考えられる。

小型の壺は 4 点得られているが、小片胴部のため図化はできなかった。図 7 は瓶か小壺と考えられる袋物である。なで肩で胴部は丸くなることが推察できる。外面は轆轤痕が顕著であり、薩摩産の可能性もある。

タイ産

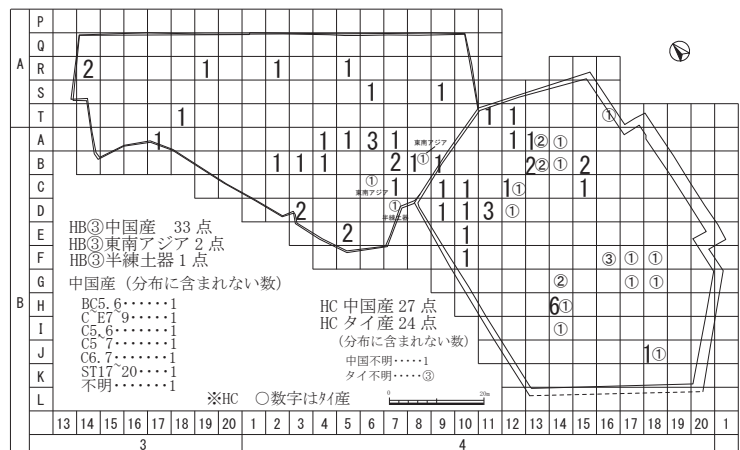
器種は壺の中型 5 点、小型 1 点、法量不明 17 点と壺甕不明が 1 点得られている。図 8 は頸部が肩部から大きくラップ状に大きく外反、口縁部は鏢縁状をなし、鏢の上端を僅かに摘み上げている。口唇の断面形態は三角状をなす。図 10 は肩が錨形に張り肩部に横耳を貼付している。図 9 は立ち上がりの開きが緩やかな底部で、底面に砂目痕が認められる。図 11 は胴部が砲弾状の形態を示す資料で内面は轆轤痕が顕著である。

タイ産半練土器

壺の口縁が 1 点得られた。図 12 はラップ状に大きく外反する壺の口縁で口縁部上端を外側から内側に折り返している。口唇は丸く、口縁内面の折り返し部分に一条の圈線を入れている。口縁部の先端を外側から内側に折り返す手法や形はタイのメナム産の褐釉陶器の壺によく似ている。生産年代は明代に位置づけられる。

<註・参考文献>

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（I）』「沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書第 54 集」



第 157 図 褐釉陶器・半練土器 平面分布

第76表 褐釉陶器・半練土器 出土量

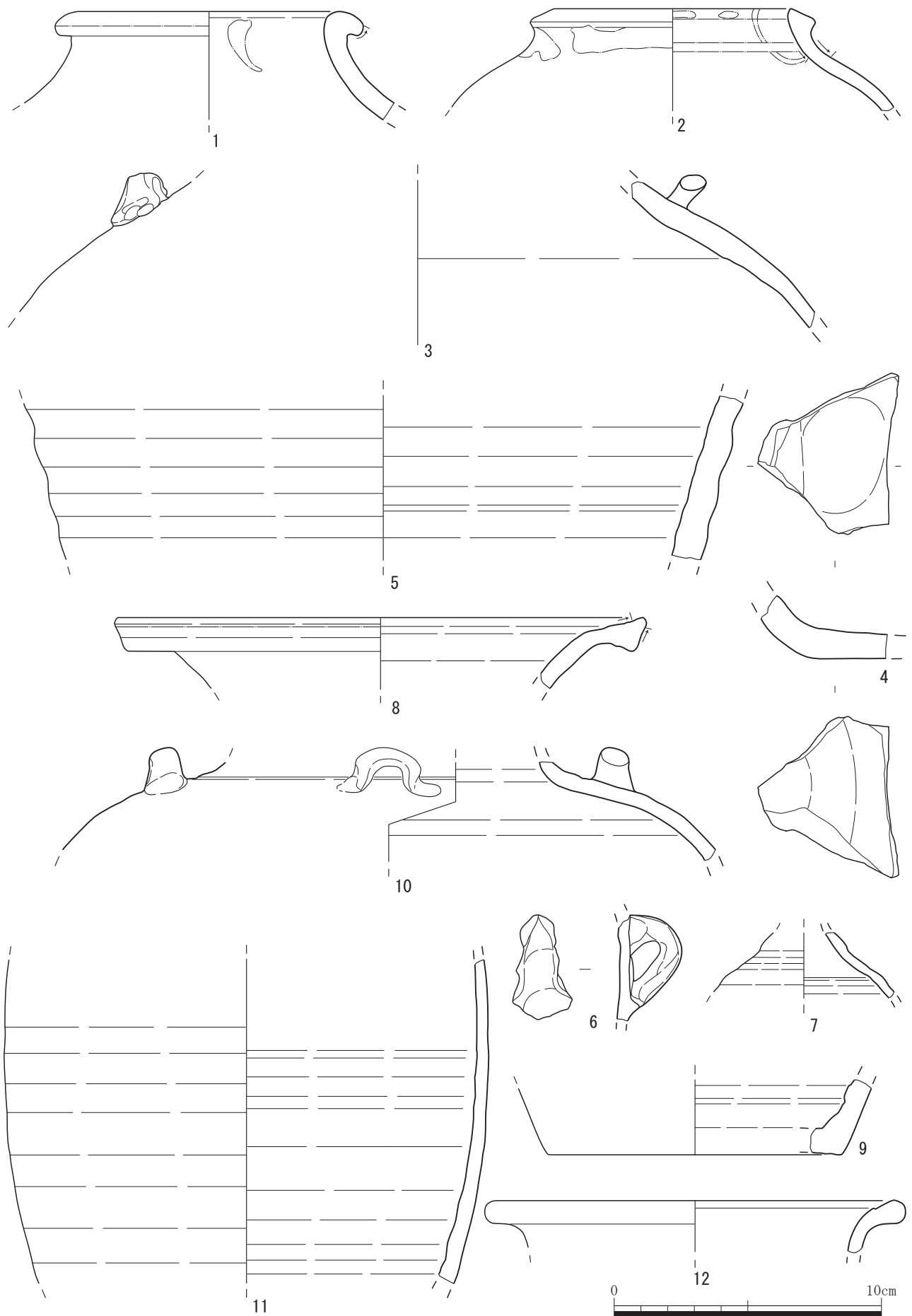
遺跡 層 遺構	産地	器種	法量	中国産					タイ産					東南アジア産	合計	タイ産半練土器				
				壺					袋物	壺						壺or甕	壺	壺		
				大	中		小	不明	—	中			小	不明		—	大	—		
				胴	口	胴	底	胴	胴	底	胴	口	胴	底		胴	胴	底	底	胴
HC	I	表採	1									1			1		3			
	II	近世					4				1			2			7			
	IIc	SK02					1										1			
	V		5	1			5						5				16			
	—			2			6	1	1	1	2		1	9	1		24			
	HC 小計			6	3	0	0	0	16	1	1	1	3	1	1	16	1	1	0	51
HB③	I		1		2		1										4			
	IIb																1	1		
	IIc	遺構			2	1	1										4			
	III		2		2												1	5	1	
	IIIa		1	1	6		1	5										14		
	IIIb				1			1										2		
	IIIc		2				1											3		
	不明				1			1										2		
	HB③ 小計			6	1	14	1	4	7	0	0	0	0	0	0	0	0	2	35	
HC+HB③ 合計			12	4	14	1	4	23	1	1	1	3	1	1	16	1	1	2	86	1
産地別計			60					24					2		86	1				

HB③: IIc SK32, 石列1群, 石列4群-SL06

第77表 褐釉陶器・半練土器 観察一覧

(法量単位: cm)

第図 図版	図 番号	産地	器種	部位	分類	口径 器厚 底径	器形・特徴	釉 色・範囲・掻き取り	素地 色・質・混和材	遺跡・グリッド・層 遺構・台(ドット)番号
第158 図・ 図版 111	1	中国産	壺	口縁部	中型	11.4 0.8 —	頸部は内向し口縁を外側に丸め、玉縁を成す。	黄褐色 外面口縁下部～内 面無釉	淡橙、細かい、茶 黒白細粒子	HC B15 V(後期層) 台864 HB③ B4 IIIa 台253
	2			口縁部	中型	10.4 0.5 —	口縁は内向し外に折る口唇の断面形態は三角状。	暗褐色 外面頸部と内面無 釉	淡橙色、細かい、 茶黒白細粒子	HB③ R19 IIIa 台187 HB③ R19 IIb 台21 HB③ S18 IIIa 台188
	3			胴部 (耳横)	中型	— 0.8 —	丸味のある胴部に横耳を貼付している。	緑褐色 外面	桃茶色、細かい、 茶黒白細粒子	HB③ R5 IIc 石列4群-SL06 台131 HB③ S6 IIIa 台336
	4			頸部	大型	— 0.9~1.0 —	肩の張る頸部資料、器面に叩き痕を認める。	緑褐色 外面内面施釉	淡橙色、細かい、 黒白細粒子	HC T12 V(後期層) 台629
	5			胴部	大型	— 0.9~1.0 —	外面に轆轤痕が顕著である。	緑褐色 外面内面施釉	淡橙色、細かい、 黒白細粒子	HC A12 V(後期層) 台722
	6			縦耳	中型	— 0.8 —	縦耳断面形態は「D」字状。	褐色 内面露胎	灰色、細かい、黒 白細粒子	HB③ B9 IIIa 台21
	7			袋物	胴部	小型	— 0.2~0.3 —	なで肩の小瓶か小壺か。外面に轆轤痕が顕著。薩摩産の可能性ある。	黒褐色 外面	橙色、細かい、白 細粒子
	8	タイ産	壺	口縁部	中型	20.0 0.9 —	口縁部はラッパ状に外に開く、口唇の断面形態は三角状。	黒褐色 外面内面	紫灰色、細かい、 黒白細粒子	HC G14 台22 HC D15 V(後期層) 台932
	9			底部	中型	— — 11.0	外側にやや開き立ち上がる。外底は砂目痕がみられる。	外面内面無釉	紫灰色、細かい、 黒白細粒子	HC 表採 台12825
	10			頸部 (耳)	中型	— 0.6~0.7 —	肩の張る胴部に横耳を貼付している。	黒褐色 内面無釉	紫灰色、細かい、 黒白細粒子	HC F16 II(近世層) 台1230
	11			胴部	中型	— 0.6~0.7 —	胴部は砲弾状。内面に轆轤痕が顕著である。	黒褐色 内面無釉	橙色、細かい、白 細粒子	HC F17 台134 HC F17 台135
	12	半練土産	壺	口縁部	—	15.8 0.5~0.8 —	口縁部はラッパ状に外反。口縁部上端部を外から内に折り返す。口唇は丸い。	無釉	淡い橙色、細かい、 白・黒細粒子	HB③ D7 III(10・11) 台704



第158図 褐釉陶器・半練土器



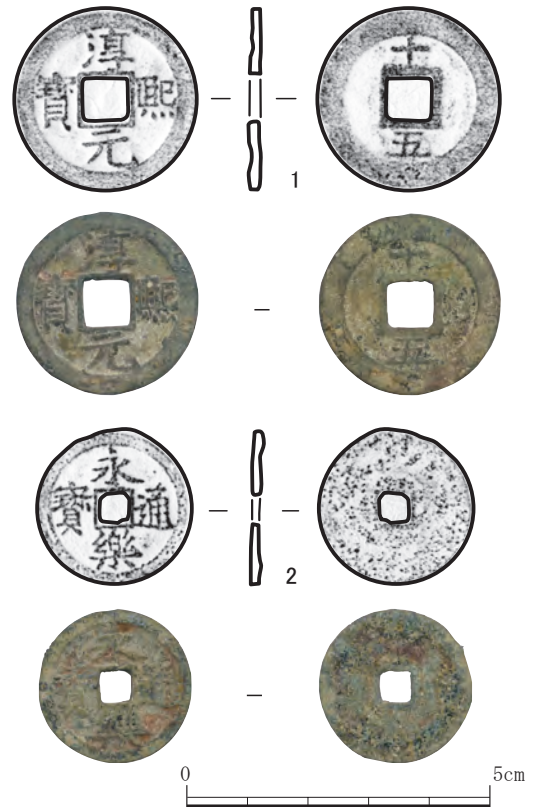
图版 111 褐釉陶器·半練土器

(12) 銭貨

HCから2点の完品資料が得られ、いずれも中国銭であった。

南宋銭：淳熙元寶（図1）は、径3.0cmを測る折二銭である。背に「十五」の文字が残り、淳熙15（西暦1188年）の鑄造ということになる。淳熙元寶には小平銭と折二銭があり、日本で検出される淳熙元寶折二銭は非常に少なく、たまに検出されても磨輪されていることが多い（永井1996）。北谷町内の遺跡では『北谷城』（1984）から完品1点の出土例があり、この時点での県内出土初例とされた。

明銭：永楽通寶（図2）は、1408年初鑄造である。日本の出土銭貨の中ではその出土量が上位を誇るが、中国では殆ど出土しない。国内で作られた鑄写銭は、中国で作られたものに比べて銅の割合が高いとされる（永井1996）。本資料は、特に裏面への緑青付着が顕著である。



第159図・図版112 銭貨 (S=4/5)

第78表 銭貨観察一覧

第図 図版	図番号	銭貨名	背文字	初鑄造		残存	外径 (cm)	内径 (cm)	縁幅 (mm)	縁厚 (mm)	重量 (g)	内縁・観察	地区・グリッド・層序 遺構・台帳番号
第159図 図版112	1	淳熙元寶	十五	1174 (1188)	南宋	完	3.0	0.7	2.5	2.0	7.4	折二銭。縁・字明瞭。	HC B16 III層 D3135
	2	永楽通寶		1408	明	完	2.5	0.5	1.5	1.5	3.3	縁・字明瞭。緑青。	HC C14 V層 D3721

(13) 木製品

人工的な加工が認められるものを選抜し、3点の写真を掲載した。図1は柁目の板材である。板面には凹凸があるため、手斧等で成形されたものと考えられる。完全に乾燥しており、非常に軽い。図2は棒状製品で、上方先端は丸みを帯び、加工・使用の痕跡と考えられる。こちらも完全に乾燥しているが、比較的重量感を残しており、堅木の質感を受ける。図3はHCクムイ状遺構からの出土であり、近世に帰属すると考えられる。柁目取りした小角材の3/5程度を削り出し、円柱状に仕上げている。用途は全く不明であるが、完品と思われる。



図版113 木製品 (S=3/5)

第79表 木製品観察一覧

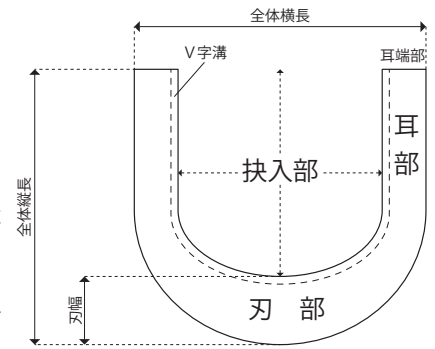
図版	図番号	種別	寸法 (cm)	乾燥重量 (g)	観察事項	地区・グリッド・層序 遺構・台帳番号
図版113	1	板材?	残存長 11.0、幅 4.3、厚 0.4	7.9	柁目取り、上下欠損、板面僅かに凹凸、乾燥状態で遺存。	HB ③ S6 III b(5)層 台 832
	2	棒状製品	長 11.5、径 1.6 × 1.2	16.7	上方先端に使用・加工痕、乾燥状態で遺存。堅木。	HB ③ T5 III b(5)層 台 338
	3	不明	長 10.8、幅 2.0、厚 1.4、円柱部径 1.0 × 0.8	9.4	柁目取り、削り出しで円柱部を作出。	HC G13 クムイ D1326

(14)鉄製品

U字に挟入部のV字溝に木製柄をはめ込む「風呂鍬」が、HB③・HCから1点ずつ得られた。

風呂鍬についての部位名称については林（2010）を参考にしたが、本項の内容に合わせて各所改変している（第160図）。本書中での便宜的呼称として取り扱うこととする。

図1は、HB③耕作域の溝SD06の検出プラン内（IV層上面）で出土した。



第160図 風呂鍬の部位名称

- ・ 全体形の縦横比は、7：10の横長となる。耳部外縁が内傾するため、扇形ともいべき特徴的な恰好を呈している。
- ・ 挟入部の縦横比は、ほぼ1：1。僅かに外傾するU字形を呈する。

図2はHCの表採資料であり、帰属時期は不明と言わざるを得ない。

- ・ 全体形の縦横比は、9：10と僅かに横長となるが、見た目の印象ではさほどそれを感じない。刃幅・耳幅ともに約1.5cmと一定で、U字形を呈する。
- ・ 挟入部の縦横比は15：13～14と、全体形比を僅かに逆転するが、やはり印象的には1：1に近い。

損耗による形状の変化は当然考慮したければならないものの、それでもやはりこの2点の資料には、以下の点においてタイプとしての明瞭な差異が感じられる。

- ① 挟入部の大きさ、即ちはめ込む「風呂」の大きさが全く異なること。
- ② 刃部の損耗を加味しなくてはならないが、両者の刃幅に1cmほどの大きな開きがあること。
- ③ 刃部ほど損耗しないであろう耳部には、そもそもの形態的差異があったと考えられること。
- ④ 実測図ではうまく示せないが、素材板の厚さが異なること（図2は非常に薄い）。
- ⑤ 素材の質感や錆化の様子にも異なりが認められ、鉄素材の違いが窺われること。

沖縄県内における風呂鍬は、これまで久米島下地原洞穴で1点の採集事例があるのみであった（1987上江洲）。比較参考するため、この下地原洞での採集資料実測図を図3として掲載した。

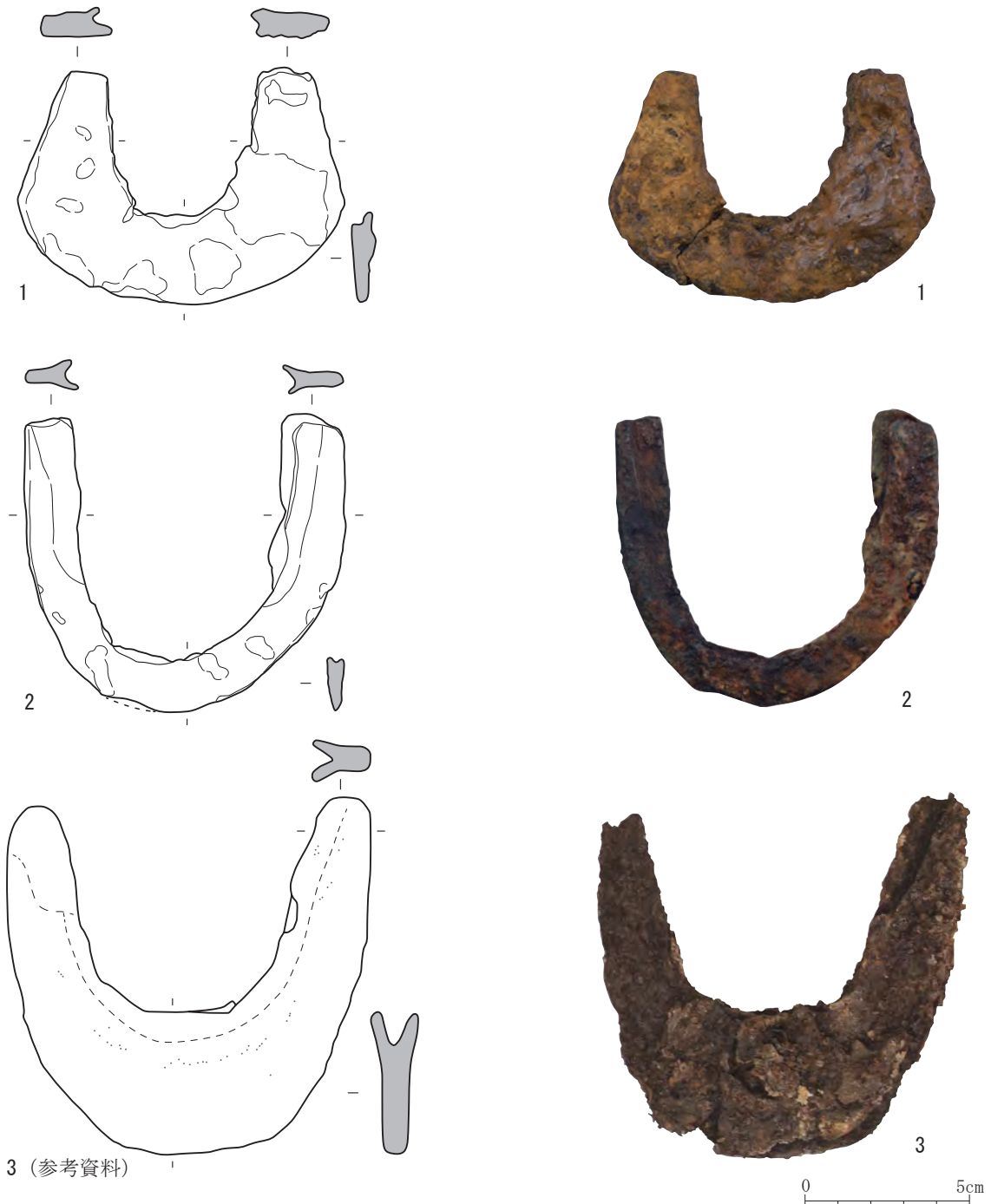
- ・ 全体形の縦横比は、11：12と僅かに横長となる。耳部は外傾する。
- ・ 挟入部も外傾しているため、その縦横比は正確ではないが、ほぼ1：1か。

この実測図は上江洲（1980）によるものであるが^{註1}、そこには同資料の写真も掲載されている。この写真を見る限り、鉄錆の付着が顕著である印象を受ける。その後作成された県内出土鉄器集成資料（1997沖縄県立博物館）にも同資料の写真が掲載されているのだが^{註2}、錆取り他の保存処理がなされたと見えて鉄器輪郭がよりはっきりしている。特に耳端部の形状は、実測図では丸みを帯びているが、後年の写真では、今回出土資料と同様に角張っている。全体形・挟入部についても、写真では台形気味な印象を受ける。上記縦横比や観察数値については、錆取り前の実測図を基にしていることを付記しておく。

今回得られた2点の風呂鍬は、沖縄県内では下地原洞穴に次ぐ発見であり、層位的発掘調査において得られたものとしては初例となる。下地原洞穴資料の報告者は上江洲均氏で、民俗学的視点からの考察・予察をしている。洞穴内の岩壁底に置かれていたとのことで、帰属年代が判然としない資料ではありながらも、「まず明治以降ということはありませんで、古いタイプの鍬と見たい。」^{註3}とした。『平安山原A遺跡』（2016）において戦前遺物として報告した鉄鍬は、全て木柄に直接長

^{註3}とした。『平安山原A遺跡』（2016）において戦前遺物として報告した鉄鍬は、全て木柄に直接長

方形板状の鉄製刃を取り付けた「刃鋏」であり、これが近代沖縄におけるティピカルなものであることは、同氏の民俗事例調査^{註4}によって報告されている。また、考古的見地から下地原洞穴が同じ久米島のヤジャーガマ遺跡と同系列であるという意見から、この採集資料がグスク時代の産物であると仮定し、「鉄を産しない沖縄では、鉄は輸入にたよる外なかったもので、刃鋏のような鋏を作ることも出来ようはずがない」^{註5}と、その蓋然性が充分にあることを指摘している。



第161図・図版114 鉄製品 (S=1/2)

第80表 鉄製品 観察一覧

第図 図版	図番号	種別	全体 (cm)		袂入部 (cm)		刃部 (cm)		重量 (g)	地区・グリッド・層 遺構・台 (取) 番号
			縦長	横長	縦長	横長	幅	最大厚		
第161図 図版114	1	風呂鋏	7.2	10.0	4.5	4.6	2.7	0.8	87.7	HB ③ Q9 SD06 直上 台 D2138
	2	風呂鋏	9.0	9.8	7.4	6.3	0.6	0.5	67.6	HC I (表採) 台 5089
	3 (参考)	風呂鋏	10.9	11.7	6.4	7 前後	4.3	0.7	-	久米島下地原洞穴採集資料

実際に3点を並置してみると、共通点と相違点が3者3様に混在している。風呂鍬としての形態分類をする以前に、鍬・鋤の混同も留意しなければならないが、端的な特徴を第81表に示した。これによると、図2が他2者と共通或いは近似する要素が最も少ないため、形式年代を考える上では図2が最も古相或いは新相を示している可能性がある。これ以上の形態分類や時期変遷を検討するには事例に乏しいと言わざるを得ないが、今回の層位的発掘事例を1つの定点として、今後の研究深化が進んでいくことが期待される。

第81表 各鉄製風呂鍬 特徴一覧

図番号	出土地	所属時期	全体形	袂入部	刃幅	厚さ	鉄銹
1	HB ③	貝塚時代後期後半～グスク時代	横長の扇形。	小	中	厚	顕著。
2	HC	不明(表採資料)	縦横 1:1 のU字形。	大	狭	薄	比較的少ない。
3	下地原洞穴	グスク時代前半か?	縦横 1:1 のU字形 (やや外に開く)。	中	広	厚	顕著。

図1資料の出土状況と年代観の検討

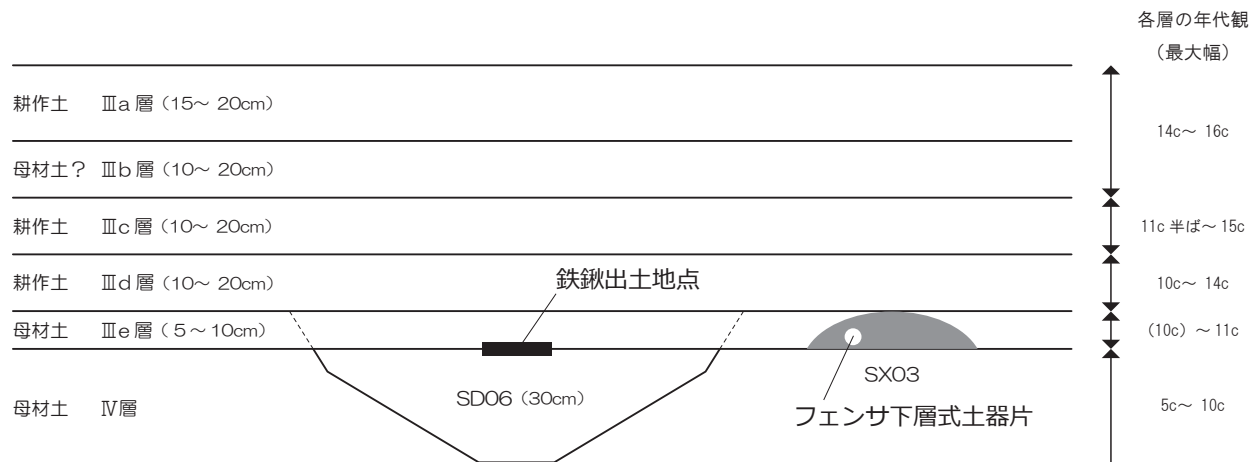
再述になるが、図1資料の出土状況を確認する。Ⅲe層除去後のⅣ層上面で溝(SD06)が検出された。この溝の検出プラン(溝埋土)上面において、本資料は見つかっている(図版115)。遺構検出にあたって本来の掘り込み面より少し掘り下げるということは間々ある上、本溝構築面がⅢe層上面であった可能性がある^{註6}ことも考えると、この遺物はSD06埋土中にあったという可能性もある。

層位発掘の通常の見え方からすれば、本資料はⅢe層より古く、溝(SD06)構築(或いは埋没)より新しいことになる。しかし、この鉄鍬が実際に耕起作業に用いられたものだとすると、木杭やウシ蹄のような痕跡の生じ方と同様に、上層から突き抜けた形でそのまま遺存した(農耕具の先は土中で外れると、そのまま埋まってしまう)という可能性も十分に考えられる。従って、先述した層位的年代観だけをもって断ずることは危険である。本品を覆っていたⅢe層或いはⅢd層を耕作対象としたと解釈した方が農耕の在り方としては自然であるため、本資料がⅢd層期に帰属する蓋然性は高いと考えられる。

第1節層序でも述べた通り、Ⅲd層の年代観は、少ないながらも層中から出土したカムイヤキ片をもって11c後半以降を当てている。しかし、上層からの遺物混入やⅢd耕作活動の長期継続の可能性をなお考慮するならば、Ⅲd層の年代観は古くなり得るし、そもそも鉄鍬の層位突き抜けがなかった(耕起作業とは無関係に遺棄された)とするならば、鉄鍬はⅢd層の年代に関わらずに10c中まで遡る可能性も生じる訳である。くどいことを自覚しつつ、再度模式図(第162図)^{註7}を示した上で、鉄鍬の年代観については以下のような複数の解釈が成立し得ることを提起したい。

- ① 1) 本資料はⅢe層の下から出土した。→2) 耕起に伴う層位突き抜けの可能性が高い。→3) 本資料は新しく見てⅢd層に帰属する。→4) Ⅲd層からはカムイヤキ片が出土している。→5) 本資料は11c後半以降のものである。
- ② 上記①3)まで同じ→4) Ⅲd層出土のカムイヤキ片は上位からの混入或いは耕作の長期継続に関わるもの。→5) Ⅲd層はくびれ平底期に帰属する。→6) 本資料はくびれ平底期のものである。
- ③ 上記①2)まで同じ→3) 本資料は古く見てⅢe層に帰属する。→4) Ⅲe層は10～11c頃の堆積である。→5) 本資料は10～11cのものである。
- ④ 上記①1)に同じ。→2) 本資料は耕起作業とは無関係に遺存した。→3) 本資料を覆っていたⅢe層は10～11c頃の堆積である。→4) 本資料は10～11c以前のものである。

いずれにしても、本資料はⅢa～e層にパックされており、遺物の層位突き抜けを考慮したとしても、グスク時代を下限とするものであることは確実と言える。



第162図 鉄製風呂鋤出土状況 層位模式



図版115 SD06検出プラン上での鉄鋤検出状況 (西より)



図版116 鉄製風呂鋤出土状況 近景 (西より)

註1：上江洲（1980）に記載された「図1下地原洞収集の鋤先実測図」をスキャンの上、デジタルトレースを行った。本書掲載にあたっては、実測図の向きの回転、断面図位置の移動等の変更を加えている。

註2：沖縄県立博物館（1997）にカラー写真図版として掲載された「下地原洞穴遺跡（具志川村）発見の鉄鋤」をスキャンの上、画像処理ソフトにより切り抜いたものを使用した。

註3：上江洲（1982）123頁からの引用。

註4：上江洲他（1983）に詳しい。

註5：上江洲（1982）121頁からの引用。

註6：第IV章第1節参照。

註7：第162図最右方の各層位の年代観について。上下の層位に与えた年代の重なりが大きいのは、各層位個別に考えられる年代を提示しているのみで、整合・調整を行っていないからである。各層の年代想定根拠は以下の通りである。

Ⅲa・b層：出土した青磁等の年代

Ⅲc層：カムイヤキ・青磁等の年代

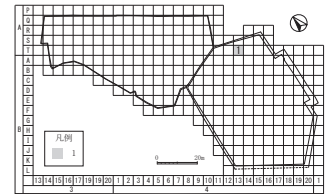
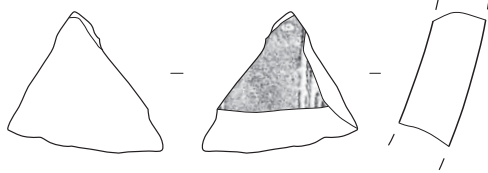
Ⅲd層：カムイヤキの年代及びⅢe層の様相

Ⅲe層：層中炭化物の年代測定結果

IV層：SX03出土のフェンサ下層式土器及び層下堆積物の年代測定結果（『平安山原B遺跡』（2015））

(15) 瓦質土器

湧田産と考えられる瓦質土器が1点確認できた。播鉢の胴部で僅かに櫛目が残り、単位ごとの間隔は2.5cmである。器色は灰色で胎土にはやや大粒の黒色粒が混じるが精良で、器厚は1.7cmを測る。HC T13 V（後期層）より出土した。



第163図・図版117 瓦質土器

第164図 瓦質土器 平面分布

(16) 本土産陶器

近世期では肥前産の碗・皿、備前や薩摩産の播鉢、薩摩・信楽及び中国地方産の壺・甕類、瀬戸美濃産の香炉等19点、近代期では関西系の碗、硬質陶器の洋皿の2点が得られた（第82表）。ほとんどの遺物がHB③の「祝女殿内小」の屋敷外縁部と石列1群周辺より出土し、近代陶器はHCからのみ出土した（第165図）。特徴的なものを第166図及び図版118に示し、第83表で観察一覧を示す。

図1は筒状の鉄絵碗であるが焼成不良のため鉄釉の発色が呉須に似る。図2は備前産の播鉢で櫛目は10本を数え、外面縁帯肥厚部に混和材の石灰岩粒（大）がのぞく。図3・4は同一個体の可能

第82表 本土産陶器 出土量

遺跡	層	器種	産地													不明	碗	洋皿	合計			
			唐津	内野山	九州	備前	薩摩	薩摩か沖繩	肥前系	薩摩	薩摩か沖繩	薩摩	信楽?	丹波か中国地方	瀬美					関西?	三重?	
HC	I 表採										1									1		
	不明				1														1	1	1	
	(V)後期												1								1	
	小計		0	0	0	1	0		0	1			0	1	0	0	0	1	0	1	1	6
HB③	I		1	1	2							1										6
	IIa 祝殿小(SL)														1							2
	IIc 石列1群			1				1											1			3
	IIIa							1														1
	IIIb													1								1
	IIIc			1																		1
	不明										1											
小計		1	3	2	0	2		1	0	1		1	0	1	1	1	0	1	0	0	0	15
器種別合計			1	3	2	0	2		4	1		2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	21

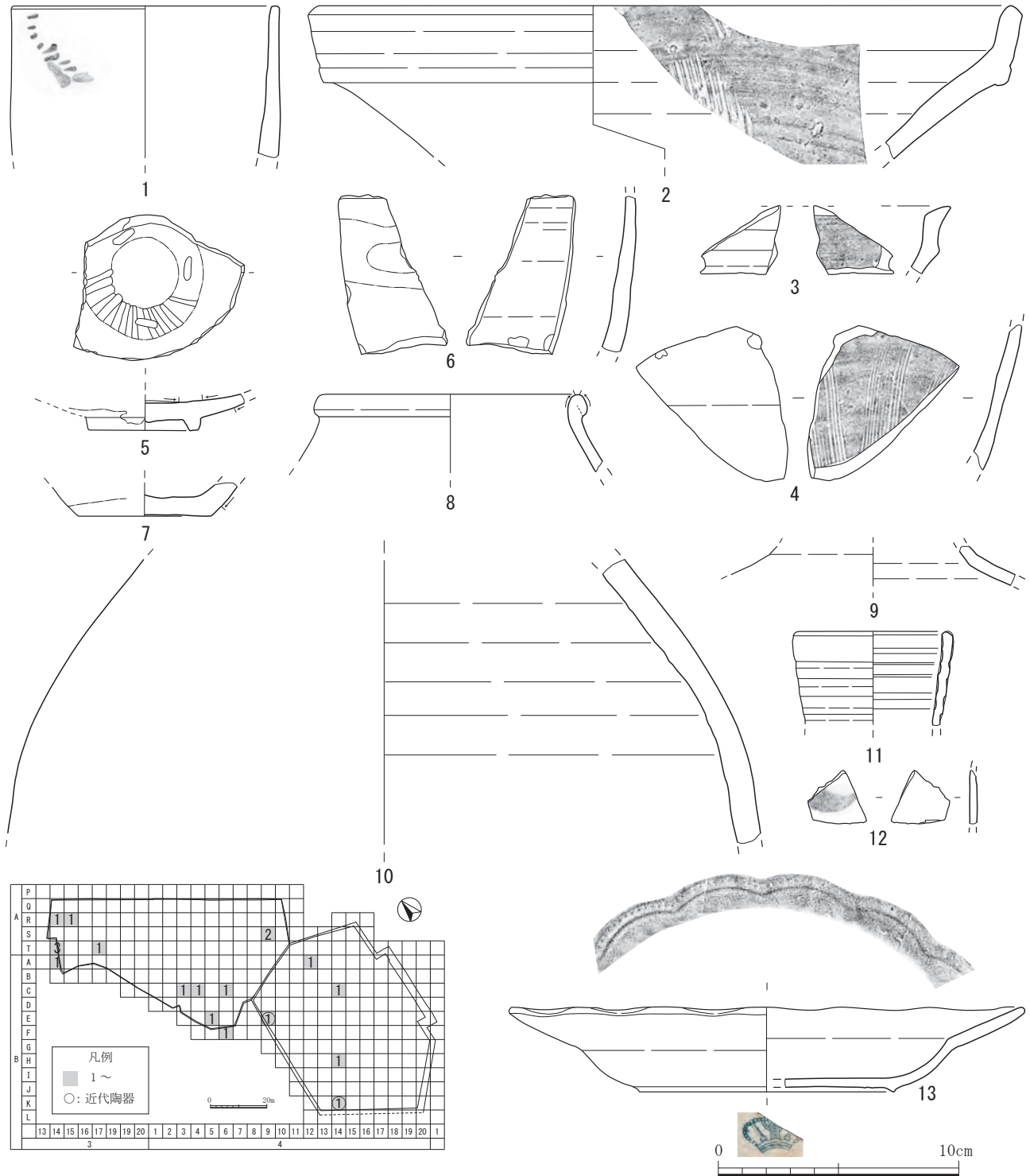
第83表 本土産陶器 観察一覧

(質量単位: cm)

第図版	番号	時代区分	産地	器種	部位	口径	器厚	器高	器形	文様/施釉/器色	混和材/調整痕/他	成形	生産年代	地区	グリッド層	遺構
第166図・図版118	1	近世	九州	碗	口～底	11.1	0.2～0.4		直口・筒状	鉄絵/透明釉/黄白 焼成不良で発色せず	—	口	江戸	HB③S9 I 台374		
	2		備前	播鉢	口縁	29.8	0.8～1.0		外面口縁部下方に張り出した鏝	櫛目10本/赤茶から灰茶	白色粒・赤色粒・石粒/回転擦痕	粘	15～16c前半	HC A12台2719・776		
	3		薩摩か沖繩	播鉢	口近く	—	0.5		「く」字状に屈曲	櫛目/橙色土?で横縞状	白土が筋状に入る	粘	17c前半	HB③		
	4		薩摩か沖繩	播鉢	胴	—	0.5		口縁部に向かって延びる	櫛目10本/茶	白土が筋状に入る/回転擦痕	粘	17c前半	HB③E5IIIa台203		
	5		肥前	皿	底	4.5	0.5		不明	不明/灰釉(蛇の目釉剥ぎ(胎土目痕))/白灰	黒色粒/硬質	口	近世	HC表採台12811		
	6		薩摩か沖繩	袋物	胴	—	0.7		大型	白土を流す/茶褐	-/ロクロ/-	粘	江戸	HB③C5～7 II c 石列1群台8		
	7		薩摩	袋物	底	5.6	0.8		小型	不明/鉄釉/赤茶	砂粒/回転ヒナデ	口	18c	HB③R15 I 台79		
	8		薩摩	壺	口縁	11.4	0.4		頸部は内向し口縁を外側に折り返しやや玉縁状	無/土灰/褐色(口唇露胎)	茶黒白細粒子	粘	17c	HC C14 V (後期層) 1818		
	9		信楽?	壺	肩	—	0.5		ナデ肩 器壁は薄め	不明/無釉/淡い褐色	白・黒細粒子/外面は良く調整され内面にロクロ痕	口	江戸	HB③T17IIIb台825		
	10		丹波か中国地方(日本海側)	壺or甕	胴	—	1.0		大型・胴部は緩やかに丸味	不明/鉄釉/茶褐	橙・茶色粒・白色粒/ロクロ	粘	17後～19c	HB③A14 I 台62 T14 II a 祝殿小(SL) 台190		
	11		瀬戸美濃	香炉	口縁	6.0	0.4～0.5		小型・筒状	白土で圏線/灰(被熱)/淡緑	ピンホール・赤色粒・黒色粒	口	16～17c	HC H14台5030		
	12		近代?	関西?	碗	胴	—	0.3		小片のため不明	鉄絵丸文(手描き)/透明釉/黄白	—	口	20c	HC K14台5045	
	13		近代	三重?	洋皿	口～底	21.5	0.3 3.5		硬質陶器 スープ皿	口縁部: 輪花、底面: 王冠(クロム印)は山庄製陶所か?	—	型	20c	HC E9台5069	

(成形凡例) 粘: 粘土積み上げ 口: ロクロ 型: 型押し

性のある播鉢で櫛目の幅は狭くて浅い。口縁部の形状から沖縄産の可能性もある。図5は皿の底部で蛇の目状の釉剥ぎの上に胎土目が残る。見込の釉剥ぎを行う際に素地が硬かったせいか、右回りで飛びガンナ状を呈する。図6・7は袋物で6は胴部で装飾と思われる白土が見える。サイズから大型になると思われる。7は小型の底部で瓶の可能性あり。図8は薩摩産の小壺の口縁部で口唇部は折り返して玉縁状にし、縁のみ釉を剥ぎ取る。図9は信楽産と思われる壺の肩部で外面はザラザラしている。図10は大型の壺か甕と考えられる胴部で、ナデ肩で緩やかに膨らむようである。図11は瀬戸美濃産の小香炉で被熱により変色している。図12は鉄絵の胴部であるが小片のため詳細不明。図13は硬質陶器の洋食器（スープ皿）で、輪花の周縁には微小な粒が並ぶ。底面には王冠（クロム押印）が見られる。



第165図 本土産陶器 平面分布 第166図 本土産陶器

(17) 本土産磁器

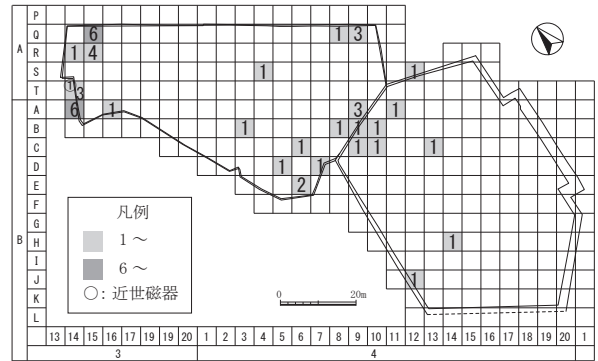
近世期中碗1点、小杯1点、瓶2点、近代期中碗11点、小碗15点、碗（サイズ不明）10点、大皿2点、皿11点、小皿1点、鉢1点、急須8点、蓋物（文房具）1点、現代期の香炉1点を確認した（第84表）。産地としては近世では肥前系のみ、近代では関西系1点、瀬戸美濃系21点、砥部もしくは伊豆産11点、肥前系10点、現代では瀬戸美濃産が1点確認できた。出土状況としてはHB③の「祝女殿内小」の屋敷外縁部やHB③とHCの境界上に位置する攪乱からの出土が多数を占めた（第167図）。以下特徴的なものを第168図及び図版119に示し、個々の観察は第85表に記す。

図1は肥前系の中碗で外面に山水文が描かれる。図2は有田産の小杯で花卉文を描くが呉須の発色はやや鈍い。高級品である。図3は肥前系の発色の悪い鉄絵瓶で、胎土に鉄分が入り込み茶色に



図版 118 本土産陶器

発色させている。図4～9は近代期の型紙刷り製品で今回は肥前系(図4・5)4点、砥部産(図6～9)6点が出土した。中には統制番号(㊦11)の賦された碗(図6)もあった。図10～14は銅版転写製品で9点が出土し過半数を皿類が占めた。いずれも瀬戸美濃産である。図15はゴム判製品の小碗で、1点のみ出土。図16・17はクロム青磁製小碗の小片、図18は関西系と思われる急須であるが、詳細は不明。



第167図 本土産磁器 平面分布

第84表 本土産磁器 出土量

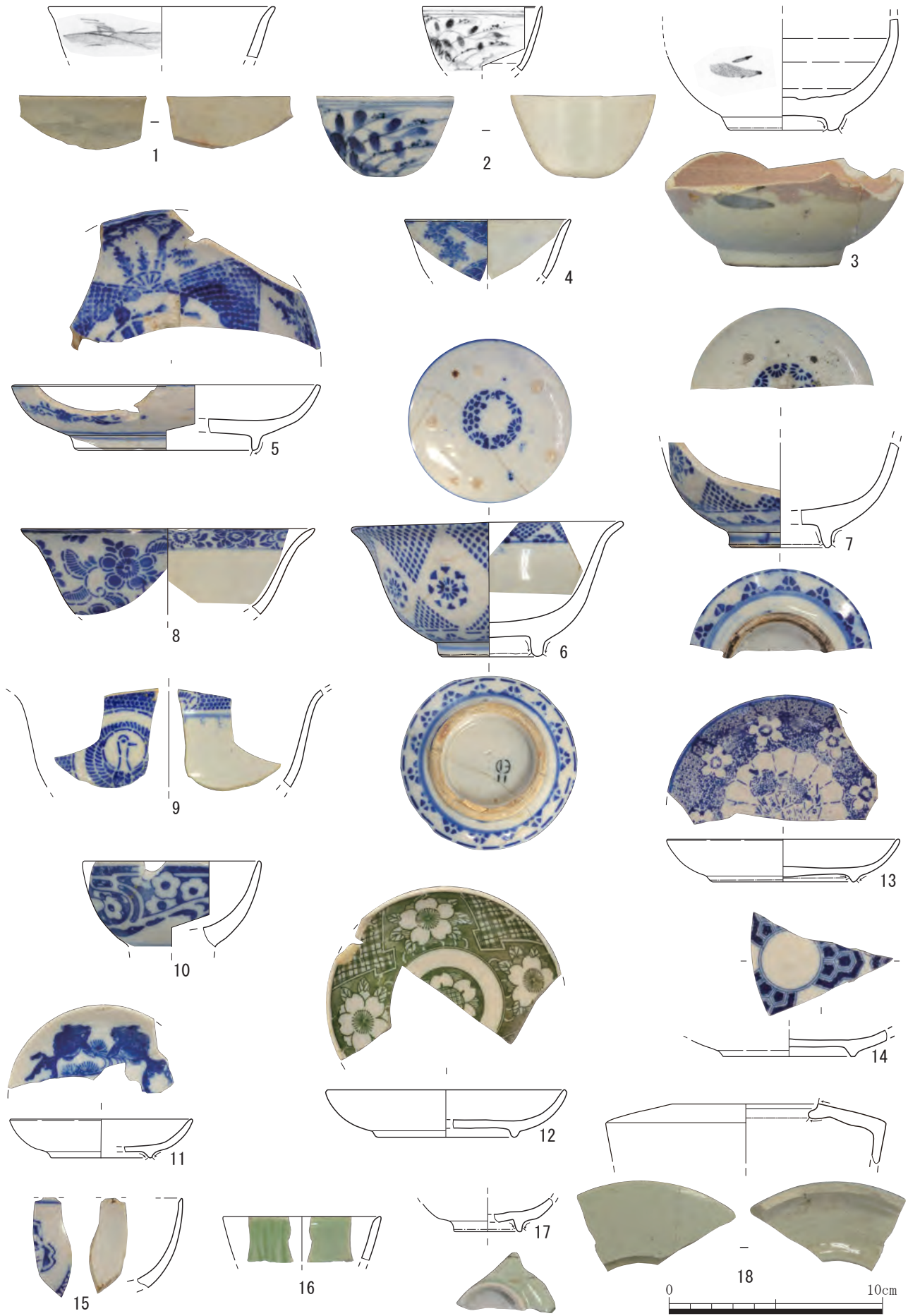
遺跡	時代区分 技法 器種	近世																	現代	合計							
		手描き				型紙				銅版				ゴム判		クロム					国民食器		不明				
		碗	皿	小杯	瓶	中碗	小碗	急須	中碗	小碗	碗	大皿	皿	蓋物	皿	小皿	小碗	小碗			小碗	鉢	皿	碗	小碗	大皿	急須
H C	表探								1	1					3												7
	小計	0	0	1		0	0	0	3	2	4	0	1	0	4	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	10
H B ③	I 攪乱							3											2							5	
	IIa 祝殿小-SL			1	1		1	3		3			1	4	1	2			3		1	2	2	1		1	27
	IIa 祝殿小-SL04周辺				1		2					1									1						6
	IIa 祝殿小-SL05		1																								2
	IIa SD01									1														2			1
	IIc 石列1群									1											1						2
	III	1													1												1
	IIIa																										2
	IIIb								1																		1
	IIIc									1																	1
不明		1																								2	
小計	2	1	0	2	2	2	2	6	6	0	3	1	0	1	5	1	2	0	5	1	1	1	2	2	1	52	
器種別合計	2	1	1	2	2	2	2	6	9	1	7	1	1	1	9	1	3	1	6	1	1	1	2	2	1	69	
技法別合計				6				10						19				14	1		9	2			7	1	

第85表 本土産磁器 観察一覧

(質量単位:g, cm)

第図 図版	番号	生産 年代	技法	産地	器種	サイズ	部位	口径	器高	底径	器厚 重量	口唇/器形	観察事項 (文様/高台等)	成形	地区 グリッド層 遺構(取上)台帳番号			
第168 図版 119	1	17c 後半	手描き	肥前	碗	中	口縁	10.6	-	-	0.4	舌状/外反	山水	口	HB③			
	2	1650 ~70		有田	杯	小	口~腰	5.6	-	-	7.08	舌状/直口	花卉文/釉の掛かりが均一でなく外面が凸凹している	口	HC H14f19			
	3	18c 後半		肥前系	瓶	大	底	-	-	5.2	0.4~0.8	最大径: 胴下半部	鉄絵・素地にピンホールから鉄分が入り酸化して茶色に発色している/畳付・内面無釉	口	HB③ I 台10			
	4	近代	型紙	肥前	碗	小	口縁	7.8	-	-	0.3	舌状/直口	外面:青海波地・窓絵に五弁花	口	HB③A14 I 台192			
	5			肥前系	皿	中1	口~底	14.4	3.1	8.8	0.3	角状/やや内湾	外面:花唐草・圏線、内面:点描地・扇絵、見込:蛇の目・矢羽/蛇の目凹型	型	HB③AT14 II a祝殿小SL台55・62			
	6			砥部	碗	中	口~底	12.8	6.3	5.0	0.3~1.0 226.5	0.45	舌状/外反	外面:点描地・菱形窓に菊花、腰:三角文、見込:松竹梅、内唇:点描・菱形窓に梅帯、五足のハマ痕、底面に統制番号:㊦11	口	HC台5047・5058・5002・155		
	7						口縁	-	-	4.8	0.4	- /直口	外面:点描地・菱形窓に菊花、腰:三角文、見込:松竹梅、五足のハマ痕	口	HB③ I 台9・10			
	8						口(口唇欠)	-	-	-	0.3~0.4	- /外反	外面:点描地・鶴丸(左向き)・松竹、内唇:点描に松竹帯	口	HC A11台5054			
	9			銅版	瀬戸美濃	皿	小2	口縁	8.4	-	-	0.2~0.8	0.3	舌状/やや内湾	外面:流水に桜 内面:金魚・松	?	HB③ I 台9	
	10							口~底	8.8	-	-	0.3	丸状/やや内湾	0.4	丸状/やや内湾	内面:桜・四菱、見込:蛇の目・桜	型	HB③S4 III a台134・431
	11							口~底	11.2	2.0	6.8	0.4	丸状/やや内湾	0.2	丸状/やや内湾	内面:点描地に桜、口青/畳付に茶土塗布	型	HB③Q9・10 I 台70・431
	12							底	11.4	2.0	6.8	0.2	不明	0.5	不明	内面:亀甲・鶴	鑄	HB③Q9・10 I 台70
	13	ゴム判	瀬戸美濃	碗	小	口縁	-	-	-	0.2~0.5	0.5	舌状/やや内湾	外面:宝船・松	型	HC表採台5073			
	14					口縁	7.4	-	-	0.3	舌状/直口	0.4	舌状/直口	外面:飛びガンナ	型	HC J12台5036		
	15	クロム	瀬戸美濃	碗	小	口縁	7.4	-	-	0.3	0.4	舌状/直口	外面:飛びガンナ	型	HB③R15 I 台79			
	16					胴	-	-	3.2	0.4	- /腰折れ	0.5	- /腰折れ	外面:草花?(手描き)釉上彩(茶)	型	HB③E6 I 攪乱台205		
	17	不明	関西系	急須	中	口~肩	6.9	-	-	0.5	0.5	丸/肩で屈曲	外面:不明、内面:ロクロ痕顕著	口	HB③ II aSD01台278			
	18																	

※皿のサイズについて江戸考古学研究会を参考に、小1:8.5~9.4cm、小2:10.5~11.6cm、小3:12.5~13.6cm、中1:14~15.4cm、中2:21cmとした。
成形凡例 口:ロクロ 鑄:鑄込み 型:型押し



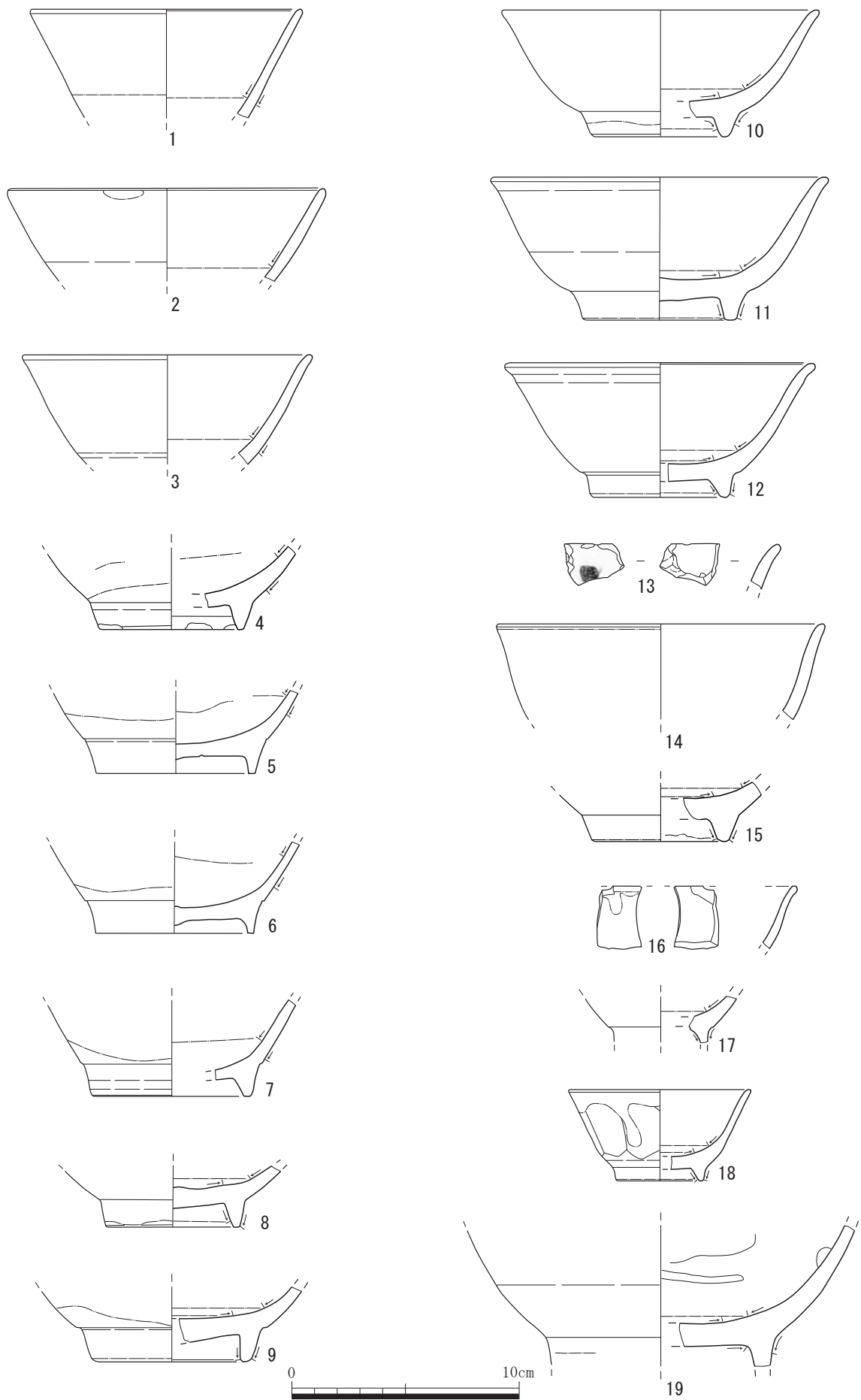
第 168 図・図版 119 本土産磁器

第88表 沖縄産施釉陶器 観察一覧

(法量単位: cm)

第図 図版	図 番号	器 種	分 類	施 釉	部 位	器 形	口 唇	腰	畳 付	口(縁)径・器 高・底径	器厚 (底厚)	文様(外・内)/ 器面調整	露胎部	貫 入	素 地色	遺跡・グリッド・層位 遺構・台帳(ドット)番号						
第170 図・ 図版 120	1	碗	I	灰	口縁	直口	丸	-	-	12.0/-/-	0.5	無/ロコ痕顕著	内外面: 胴下半分	有	淡灰	HB③S14 II a祝殿小SL05 台271						
	2									14.0/-/-	0.5	無/ロコ痕顕著 (一部に釉剥ぎ)	内外面: 胴下半分	無	淡灰	HB③T14 II a祝殿小SL04 台211						
	3									12.7/-/-	0.6	外面口縁より下1.3cm 白く焼け飛び	内外面: 胴下半分	有	灰	HB③ II a祝殿小SL05 台186						
	4				丸	-/-/6.4	0.6	外面: 鉄絵?	内面: 見込(熔着痕) 外面: 腰部下(畳付に砂)	無	淡灰	HB③S14 II a祝殿小SL05 台271										
	5				直	-/-/7.0	0.6	-	内面: 見込 外面: 胴下半部(焼成により赤い)	無	灰	HB③ I 台10										
	6				平	-/-/7.0	0.6	無/ロコ痕顕著	内面: 見込 外面: 腰部下(畳付に砂)	無	淡灰	HB③Q7 I 台48										
	7				-/-/7.1	0.4	無/-	内面: 見込(熔着痕) 外面: 腰部下(焼成により橙色)	無	白黄	HB③S14 II a祝殿小SL05 台271											
	8		III	外: 鉄 内: 白 外: 銅緑 内: 白	底	-	-	丸	丸	丸	-/-/5.8	0.8	無/ロコ痕顕著 見込裏に熔着痕	蛇の目釉剥ぎ(熔着痕あり) 畳付	無	淡橙	HB③A14 I 台63					
	9										-/-/7.0	1.0	無/-	蛇の目釉剥ぎ(熔着痕あり) 畳付(熔着痕あり)	有	淡橙	HB③Q9・10 I 台70					
	10		IV	白化粧+透明釉	口(底)	外反	舌	丸	丸	丸	14.0/5.5/6.2	0.7	無/-	蛇の目釉剥ぎ(熔着痕あり) 畳付(熔着痕あり)	有	淡橙	HB③AT14 II a祝殿小SL 台55					
	11										14.4/6.3/6.8	0.5 (0.9)	無/ロコ痕顕著	蛇の目釉剥ぎ(熔着痕あり) 畳付(熔着痕あり)	有	淡橙	HB③S14 II a祝殿小SL 台59					
	12										13.7/5.9/6.2	0.4 (0.8)	無/-	蛇の目釉剥ぎ(熔着痕あり) 畳付(熔着痕あり)	有	淡橙	HB③S14 II a祝殿小SL 台59					
	13				-	0.5	コバルトで印花/-	-	無	淡橙	HC B12台5060											
	14				丸	-	丸	-	14.4/-/-	0.6	口鏽/ロコ痕顕著	-	無	淡橙	HB③R15 I 台79							
	15		丸	-	丸	-	-/-/6.0	0.8	-	蛇の目釉剥ぎ(熔着痕あり) 畳付	無	淡橙	HC J12台5037									
16	小碗	III	外: 鉄 内: 白	口縁	外反	丸	-	-	-	0.4	外面口縁より釉垂れ	-	内 有	淡 橙	HB③T14 II a祝殿小SL04 台211							
17									IV	白	底	外反	舌	丸	丸	-/-/(4.1)	0.5	-	-	有	淡 橙	HC I13台5033
18									折れ	丸	丸	8.0/4.0/3.8	0.3 (0.5)	外面: 面取(10面)	蛇の目釉剥ぎ(熔着痕あり) 畳付(熔着痕あり)	無	灰	HB③AT14 II a祝殿小SL 台55				
19	大鉢	III	外: 鉄 内: 灰	底	-	丸	欠損	-/-/(9.6)	1.0	内面: 白土で文様/ ロコ痕顕著	蛇の目釉剥ぎ(熔着痕あり)	無	淡 橙	HB③AT14 II a祝殿小SL 台55								
第171 図・ 図版 121	20	急須	II	鉄	口縁	-	丸	-	-	5.0/-/-	0.5	-	口唇部~内面	無	灰	HB③ I 台10						
	21									9.4/-/- 最大径19.4	0.5	-	口唇~内面(釉垂れあり)	有	淡 灰	HB③S15 III a台292						
	22									3.9/-/- 最大径16.0	0.8	無/内面: ロコ痕顕著	口唇	無	灰	HB③AT14 II a祝殿小SL 台55						
	23				胴	-	-	-	-	0.4	彫り込み/ロコ	内面	無	灰	HB③ II a祝殿小SL05 台349							
	24				IV	白	口縁	-	角	-	-	6.0/-/-	0.6	外面: コバルト掛け 後、沈線文	口唇部(熔着痕あり)	有	淡 橙	HB③Q15 I 台95				
	25				II	鉄泥 か?	胴	-	-	-	-	-/-/- 最大径14.3	0.3	無/型	内面(釉垂れあり)	無	暗 赤	HB③Q14 II a祝殿小SL04 台176				
	26	IV	白	胴(底)	-	-	丸	-	最大径11.4	0.6	無/内面: ロコ痕顕著	底面(釉垂れあり)	有	淡 白	HB③A14 I 台63							
	27	鍋	II	鉄	底	丸	-	-	-	0.6	-	外面(煤付着)	無	淡 橙	HB③表採台431							
	28	蓋	II	鉄	庇	撮有	丸	-	-	11.6/-/-	1.0	無/ロコ痕顕著	内面・かかり	無	淡 橙	HB③ II aSD01台278						
	29									12.4/-/-	0.7	縁に三条の沈線を 巡らせる	上面: 蛇の目状の釉剥ぎ	無	淡 橙	HB③Q9・10 I 台70						
	30									11.8/-/-	0.7	蛇の目に鉄泥塗布	上面: 蛇の目状の釉剥ぎ (熔着痕あり)	無	白 黄	HB③Q9・10 I 台70						
	31	火取	II	鉄	口縁	直口	丸(膨)	-	-	10.0/-/-	0.5	外面: 1cm間隔で段 を付ける	内面	無	暗 茶	HB③S15 II a祝殿小SL05 台212						
32	小壺	II	鉄	底	-	-	丸	平	-/-/6.6	0.8	見込に回転痕を残す	外面: 腰部下(畳付: 砂付着) 硬質	無	白	HB③A15 III a台281							
33	瓶	I	灰	胴	-	-	丸	-	最大径8.0	0.5	外面: 釉に発色の違 いが見られる	内面(ロコ痕顕著) 硬質	無	暗 紫	HB③AT14 II a祝殿小SL 台55							
34									II	鉄	胴・腰	-	-	-	-	0.6	外面: 釉に発色の違 いが見られる	無	無	淡 灰	HB③R15 I 台102 HB③R15 II a祝殿小SL05 台237	
35	不明	II	鉄	胴	不明	-	-	-	-	1.3	線彫り (古典焼)	無	無	淡 赤	HB③A14 I 台62							
36	不明 (酒器?)								肩	筒	-	-	-	肩径: 10.2	0.5	外面: 釉に発色の違 いが見られる	内面(ロコ痕顕著)	無	白	HB③AT14 II a祝殿小SL 台55		

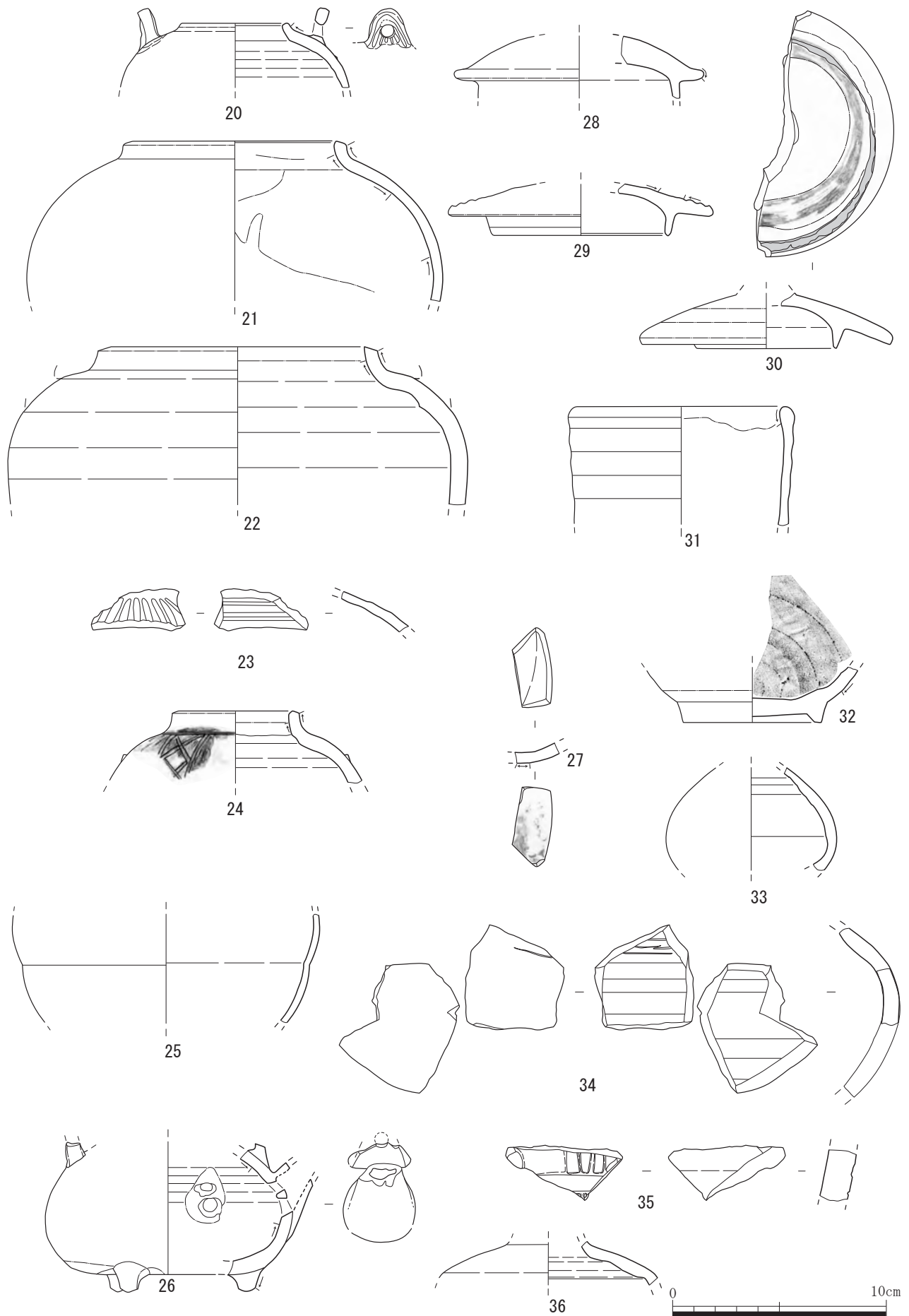
施釉凡例 灰: 灰釉 鉄: 鉄釉 白: 白化粧+透明釉



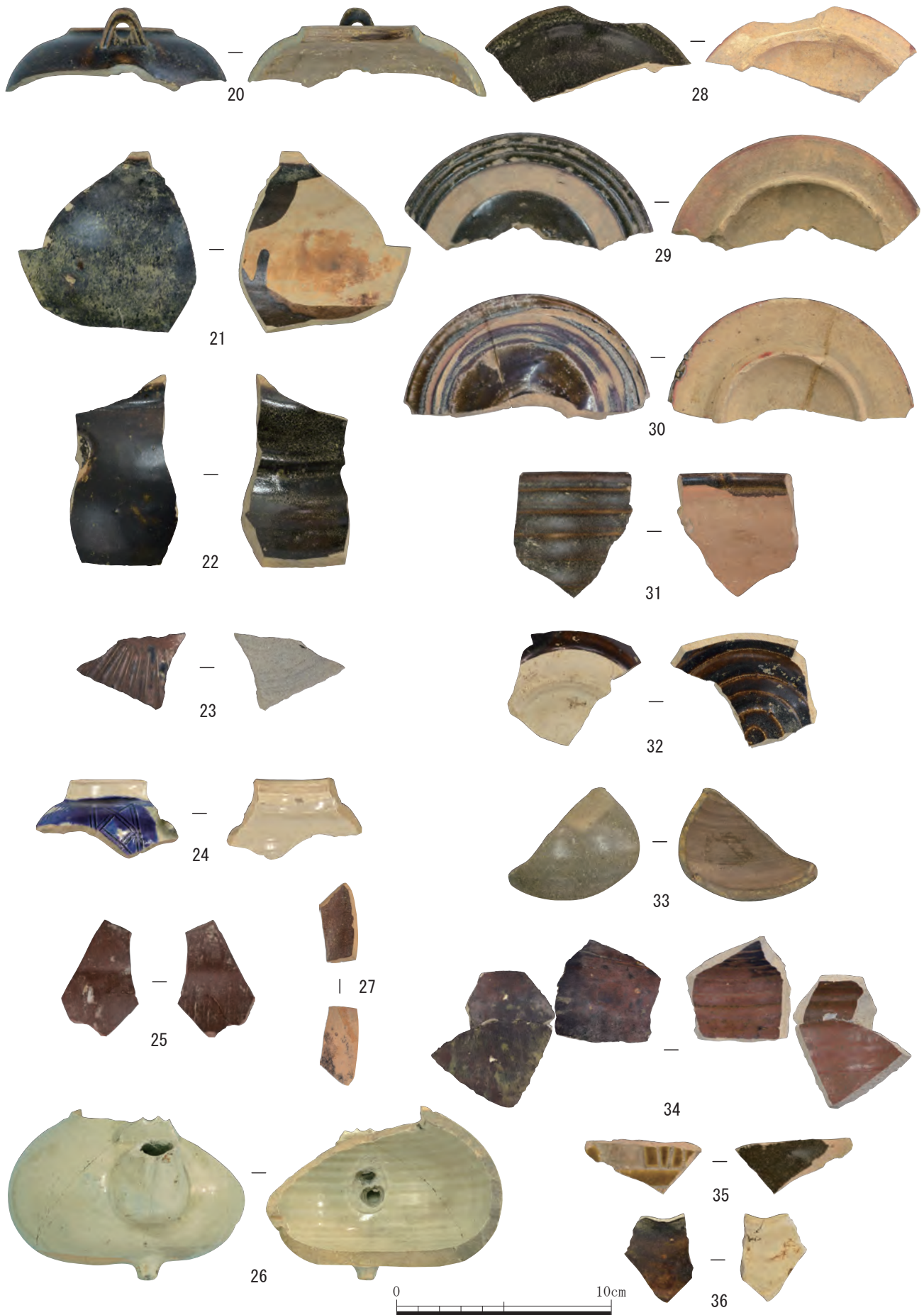
第170図 沖縄産施釉陶器 1



図版 120 沖縄産施釉陶器 1



第171図 沖縄産施釉陶器2



図版 121 沖縄産施釉陶器 2

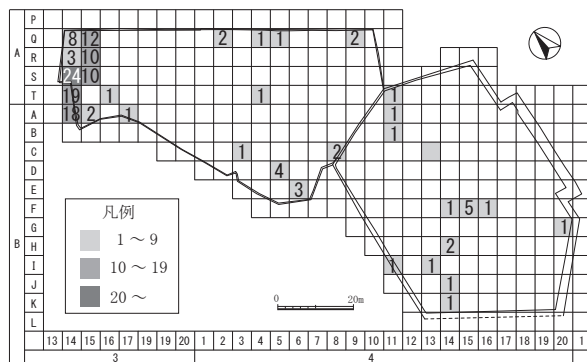
(19) 沖縄産無釉陶器

HCで40点、HB③で154点（うち「祝女殿内小」から74点）が出土した。器種別には壺30点、播24点、甕19点、水甕13点、瓶12点、鉢5点、火炉2点、香炉1点、鍋1点、煙管1点、不明86点（鉢？蓋？瓶 or 壺 or 甕を含む）である（第89表）。碗や皿などの食膳容器や灯明皿の出土は無く、調理容器の播鉢、貯蔵容器である壺・甕・瓶等が多く出土し、HB③の「祝女殿内小」周辺からは今回出土の全器種が確認できた。なお、HC V（後期層）より出土の壺の胴部は調査時の混ざり込みと考えられる。以下、特徴的なものを第173～175図・図版122～124に示し、個々の観察は第90表に記す。

図1～9は播鉢で図1～3は口縁部資料、古手にあたるⅡ類AとⅣ類が確認できた。図1の口唇上面には粘土目痕が見られる。平安山原B遺跡（2015）（第152図8）に次いで2例目の出土で、初期無釉陶器^註の可能性が高い。胴部は18点の出土のうち15点に隙間無く櫛目が見られたが、残存部位が底部に近い場合、単位ごとに間隔があっても隙間無く櫛目が描かれたように見えるため類別はしなかった。図6～9は底部で隙間無く櫛描きが施されるが単位の本数に違いが見られた。特に図9は中心部の様子がわかる資料である。図10・11は鉢でⅠ類とⅡ類が見られた。図12・13は今回2点のみ出土した火炉で、いずれも「く」字状に屈曲する。図14は小型の香炉で内面が白く煤ける。図15～18は瓶で今回は胴部のみ出土しⅡ・Ⅲ・Ⅳ類が得られた。壺は玉縁の口縁部（図19）が1点出土し、他は肩部（図20・21）胴部（図22）と底部（23～27）でサイズと器形から壺と判断した。図28は壺もしくは甕の可能性のある底部で、胴部に向けて大きく開く。図29は底部細片だが厚みと重量（55g）から甕とした。水甕と甕合わせて31点が出土している。図30は羅宇煙管の雁首である。調査区全体で1点のみの出土であるため、項を分けずに報告する。首部が破損しており詳

〈分類凡例〉

- 〈播鉢〉 Ⅰ類：口縁部の稜は二条でその直下は直線的な形状・内面に稜有り・櫛目の方向は直線的で間隔有り
- Ⅱ類A：口縁部の稜は一条でその直下は直線的な形状・内面に稜の有無・櫛目の方向は直線的 or やや弧状で間隔有り
- Ⅳ類：逆「L」字状の外反（幅広で2.1cm以上）・口～胴部は丸みを呈する・櫛目の方向は直線的 or 弧状で間隔無し
- 〈鉢〉 Ⅰ類：口縁部は逆「L」字状に外反・胴部はやや丸
- Ⅱ類：口縁部は逆「L」字状に外反・胴部は直線的
- 〈火炉〉 B類：「く」字状に屈曲し口縁部が平坦
- 〈瓶〉 Ⅱ類：最大径は胴部にあり、胴長でやや張
- Ⅲ類：最大径は胴部にあり、ほぼ砲弾形を呈する
- Ⅳ類：最大径は胴部にあり、胴部が丸形を呈する
- 〈壺〉 Ⅱ類：口縁部は外反し肩部から胴部にかけて張り出す。口唇部の断面形が蒲鉾状（A）、三角や舌状（C）に分かれる



第172図 沖縄産無釉陶器 平面分布

第89表 沖縄産無釉陶器 出土量

遺跡	層	遺構	器種		鉢	鉢(現代)	鉢?	鍋	火炉	香炉	瓶	瓶 or 壺	壺					壺 or 甕	水甕	甕	煙管	蓋?	不明	合計												
			口	頸									胴	底	口	頸	肩								耳	胴	底									
HC	V	表採										1		1											15		18									
		(後期)																										1								
		不明																								11	1	21								
		小計	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	6	2	0	0	0	0	1	0	0	26	1	40						
HB③	I	攪乱																										3	8							
		Ⅱa	祝殿小(SL)	3	1	6	2	1																						19		49				
		Ⅱb	祝殿小(SD01)																												2	4				
			SK13				1																								1	1				
			SK16																													1	1			
		Ⅱc	石列1群																													2	3			
	Ⅲ																													2	6					
	Ⅲa																													2	2					
		小計	3	1	14	4	5		2	1	1	1	1	1	1	1	1	3	8	1	1	0	1	1	6	12	2	13	1	15	2	1	1	50	2	154
器種別合計					24	5		2	1	1		2	1	1	1	1	0	1	1	1	6	12	2	13	1	15	2	1	1	50	2	194				

細は不明だが、小ぶりの火皿で首からの立ち上がりが非常に浅く器壁も非常に薄い。金属製煙管の代用品と考えられる。図 31 は器種不明の胴部である。締まった頸を持ち、胴部へ向かって湾曲するようであるが、細片のため詳細不明。今後の類似資料収集を待ちたい。

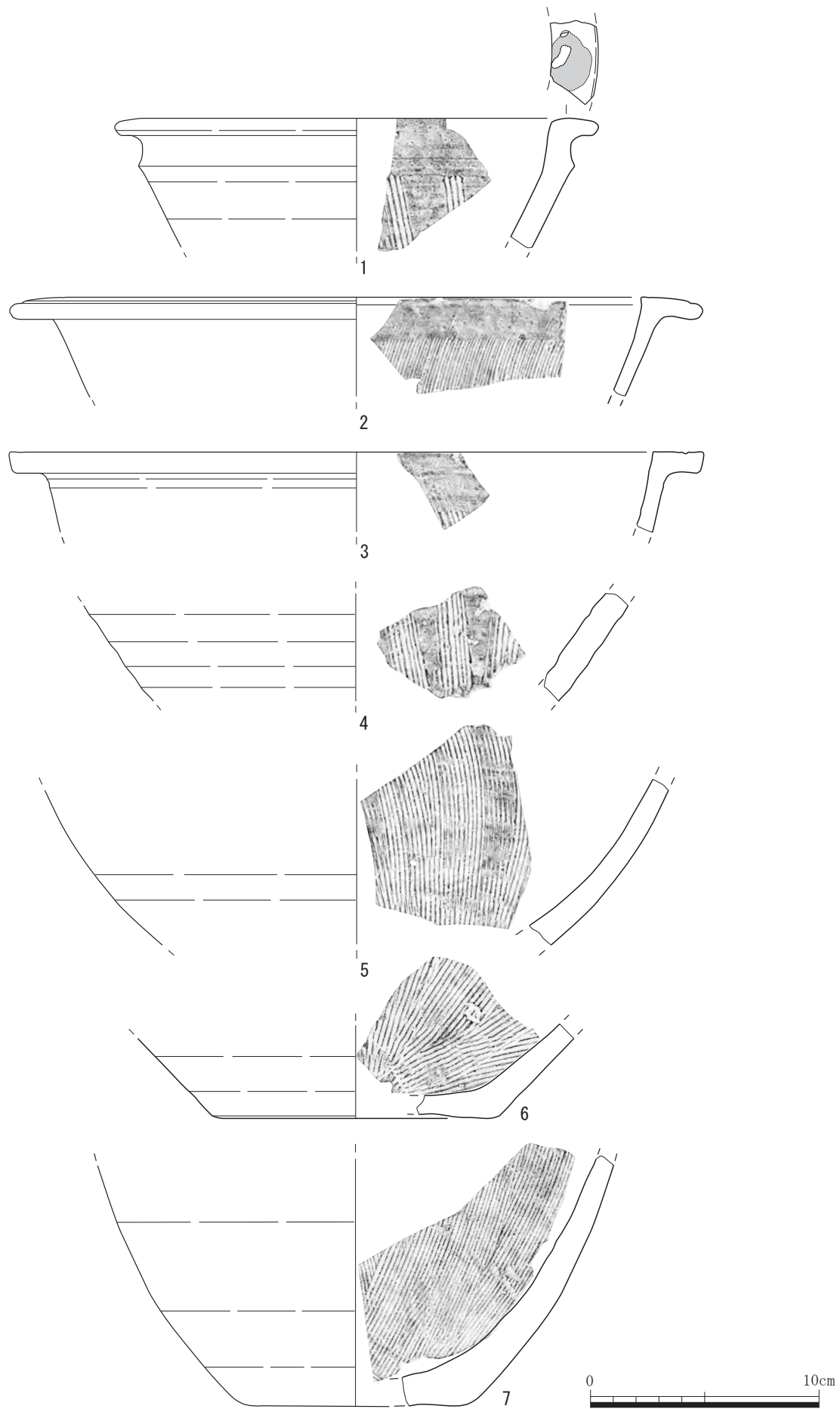
注：『首里城跡 - 御内原北地区 -』沖縄県立埋蔵文化財センター 2010

第90表 沖縄産無釉陶器 観察一覧

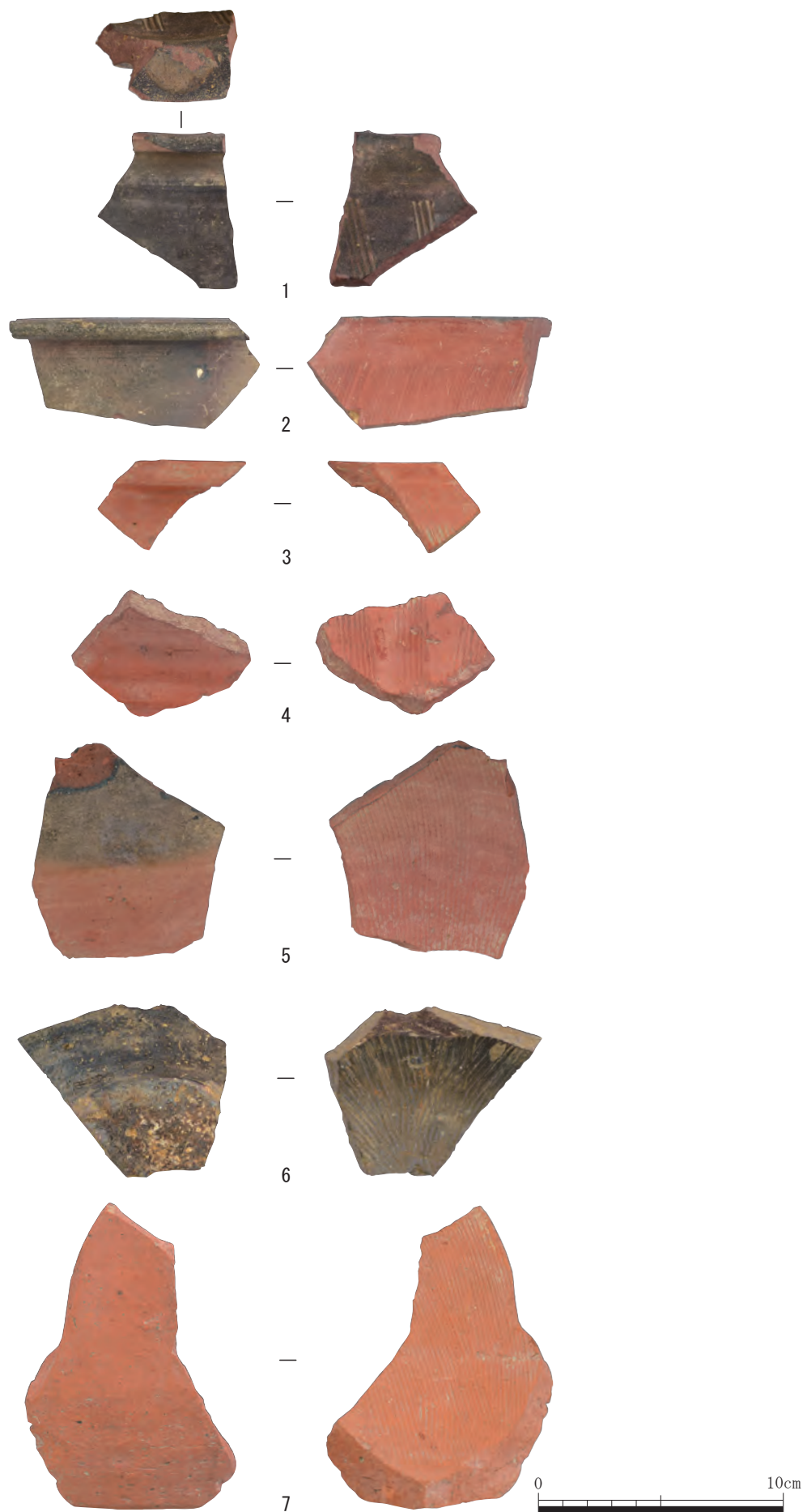
(法量単位: cm)

第図 図版	図 番号	器 種	部 位	分 類	口径 残存胴径	底径 器厚	形状・特徴 (口・胴・底・高台・器厚・文様)	器色	器面調整	混和材	焼 成	地区・グリッド・層位 遺構・台帳(取)番号	
第173 図・ 図版 122	1	挿鉢	口縁	II A	21.2 -	- 1.0	逆「L」字状(幅:1.8)、先端:やや舌状、口唇上面に粘土目、櫛目:3~4条一組、間隔:2.0	外-暗茶、内-茶、サンド-暗赤	内外-ロクロ	赤色粒(大)△ 黒色粒(細)△	良硬	HB③S14 II a祝殿小SL台59	
	2			IV	24.8 -	- 0.5	逆「L」字状(幅:2.6)、先端:丸、口唇上面に一条の圏線、隙間のない櫛目	外-暗茶、内-赤、サンド-暗赤	内外-ロクロ	石灰粒(大)△ 砂粒△	良硬	HC I13ト8	
	3			IV	30.2 -	- 0.7	逆「L」字状(幅:2.2)、先端:角、口唇上面に一条の圏線、櫛目間は空く	外-淡赤、内-淡赤、サンド-淡赤	内外-ロクロ	石灰粒(中)△ 黒色粒(中)△	良硬	HB③S14 II a祝殿小SL05台237	
	4		底	I or II	- 11.8	- 1.2	口縁部に向かって直状、櫛目:7条一単位、間隔:0.7以上	外内-赤、サンド-赤茶	内外-ロクロ	砂粒(細)△	良硬	HB③Q15 I 台95	
	5			不明	- 27.2	- 0.8	口縁部に向かって丸味を帯びる、隙間無く櫛目が入る	外-赤、内-赤、サンド-赤	外-ナデ	黒色粒(大~小)○	良硬	HB③S14 II a祝殿小SL05台280	
	6			I or II	-	12.4 0.9	口縁部に向かって直状、櫛目:7条一単位、間隔無し	外-灰、内-暗灰、サンド-暗紫	外-ヘラ削り	白土(筋状)○ 黒色粒(大)△	良硬	HB③C8 III 台577	
	7			I or II	-	10.0 0.9	口縁部に向かって丸味を帯びる、櫛目:10条一単位か、間隔無し	外-淡赤、内-淡赤、サンド-淡赤	外-ナデ	赤色粒(大)△ 黒色粒(小)◎	良中	HB③Q15 I 台95	
第174 図・ 図版 123	8	鉢	口縁	IV	-	13.4 1.1	口縁部に向かって直状、櫛目:間隔無し	外-茶、内-赤、サンド-赤	外-ヘラ削り	赤色粒(大)△ 黒色粒(小)◎	良中	HB③ I 台9	
	9			IV	-	14.0 1.1	口縁部に向かって直状、櫛目:間隔無し	外-暗黄、内-赤、サンド-赤	外-ヘラ削り	黒色粒(大)△	良中	HB③ II aSD01台278	
	10			I	33.0 -	- 0.7	逆「L」字状(幅:2.2)、先端:角、口唇上面に一条の圏線	外-赤、内-赤、サンド-赤	外-ヘラ削り 内-ロクロ	黒色粒(小)△	良中	HB③T14 II a祝殿小SL台190	
	11	火 炉	口縁 把手	II	33.0 -	- 0.7	逆「L」字状(幅:2.7)、先端:角、口唇上面に一条の圏線	外-赤、内-赤、サンド-赤	内外-ロクロ	黒色粒(細)△	良中	HB③Q15 I 台110	
	12			B	12 -	- 0.8	肩部で「く」字状に屈曲、先端:ほぼ角、口縁外面に圏線と穿孔	外-茶、内-赤茶、サンド-茶	内外-ロクロ	赤色粒(大)△ 砂粒(細)△	良硬	HB③T14 II a祝殿小SL台190	
	13			-	- 19.8	- 0.9	肩部で「く」字状に屈曲、把手中央に穿孔、把手の貼り付けはゆがむ	外-茶、内-赤茶、サンド-茶	外-ロクロ 内-指痕	赤色粒(大)△	良硬	HB③A15 III a台267	
	14			胴	- 7.7	- 0.6	小型の香炉、内面が白く煤けるのは灰が入っていたからか	外-暗茶、内-濁白、サンド-暗赤	外-ロクロ 内-不明	砂粒(微小)△	良硬	HB③A14 II b台343	
	第175 図・ 図版 124	15	瓶	胴	II	- 10.0	- 0.6	胴部:ほぼ直状、肩部:圏線	外-暗茶、内-青灰、サンド-赤茶	内外-ロクロ	赤色粒(大)△	良硬	HB③S15 II a祝殿小SL05台376
		16			III	- 7.1	- 0.6	肩部:圏線、器面:焼き膨れ	外-暗茶、内-灰、サンド-赤茶	内外-ロクロ	砂粒(細)○	中硬	HB③ II c石列 I 群台376
		17			IV	- 15.8	- 0.8	外反、頸部に五重圏線、外面に焼き飛び	外-暗茶、内-赤茶、サンド-茶	外-ナデ 内-ロクロ	粗穀△ 砂粒△	良硬	HB③S14 II b台146
		18			IV	- 14.6	- 0.9	胴部は緩やかに曲線を描く、器面に光沢があり鉄釉に似る	外-茶、内-灰、サンド-赤	内外-ロクロ	砂粒(細)○	良硬	HB③A14 I 台62
第175 図・ 図版 124	19	壺	口縁	II A	14.8 -	- 0.5	口唇:玉縁(長)、口唇内面に窯印?かと思われる印と石灰分の付着	外-暗茶、内-暗赤茶、サンド-茶	外-ナデ 内-ロクロ	無	良硬	HB③AT14 II a祝殿小SL台54	
	20			不明	- 26.4	- 0.9	頸部:圏線、最大径は胴部に持つ	外-暗茶、内-赤、サンド-暗赤	外-ナデ 内-ロクロ	赤色粒(大)△	良硬	HB③T16 III a台189	
	21			II C	- 15.1	- 0.8	肩部に圏線、内面に叩きの痕顕著	外-暗茶、内-灰、サンド-暗赤茶	外-ナデ 内-叩き	白土(筋状)△	良硬	HC 台5048	
	22		不明	- 18.0	- 0.9	胴部は直状に近い、器面に焼き膨れ	外-暗茶、内-灰、サンド-灰	外-ナデ 内-ヘラ削り	石英(中)△ 黒色粒(細)○	中硬	HB③ II c石列 I 群台564		
	23		底	不明	-	- 11.0	- 0.6	平底、立ち上がり直、胴部へ直線的に開く、底面は焼成により朱色を呈する	外-暗灰、内-暗茶、サンド-暗赤茶	内外-ロクロ	白土(筋状)△ 赤色粒(細)△	良硬	HB③D5 I 台51
	24				-	- 15.4	- 1.0	平底、立ち上がり直、胴部へ直線的に開く、内面に指ナデ痕顕著	外-暗灰、内-灰、サンド-暗赤茶	内外-叩き	白土(筋状)○ 黒色粒(中)△	良硬	HC H14 台210
	25				-	- 10.6	- 0.6	平底、立ち上がり直、胴部へ直線的に開く	外-灰、内-灰、サンド-暗赤茶	外-ナデ 内-ロクロ	砂粒(細)△	良硬	表採 台12811
	26				-	- 11.0	- 0.8	平底、立ち上がり直、胴部へ直線的に開く、焼き飛びが多く底部付近はあばた状	外-暗赤茶、内-暗茶、サンド-暗赤茶	内外-ロクロ	赤色粒(大)△ 砂粒(細)△	良硬	HB③ II aSD01台278
	27				-	- 10.4	- 0.8	平底、立ち上がり直、胴部へ直線的に開く	外-赤、内-赤、サンド-赤	外-ヘラ削り 内-ロクロ	赤色粒(大)○	良中	HB③Q14 I 台176
	28				壺 or 甕	不明	- 12.4	- 11.0	平底、立ち上がり直、胴部へ直線的に開く、底面・器面共に擦痕顕著	外-赤、内-赤、サンド-赤	外-ヘラ削り 内-ロクロ	赤色粒(大)△ 黒色粒(小)○	良硬
	29		甕	底	不明	- 8.8	- 1.0	平底、立ち上がり直、胴部へ直線的に開く、内面:白く濁る	外-暗灰、内-灰、サンド-赤	外-ナデ 内-ロクロ	赤色粒(中)△ 砂粒(細)△	良硬	HC T11 台5046
	30		煙管	雁首	-	外径:1.4 内径:1.1	- 0.2	火皿のみ。全体に薄い首部からの立ち上がりは非常に浅い	内外-暗赤	外-ナデ	黒色粒(細)△	良硬	HB③ I 台79
	31		不明	胴	-	- 7.4	- 0.4~0.9	丸く湾曲するが詳細不明	外-暗灰茶、内-暗灰、サンド-暗灰	外-ヘラ削り 内-ロクロ	無	良硬	HB③R15 I 台102

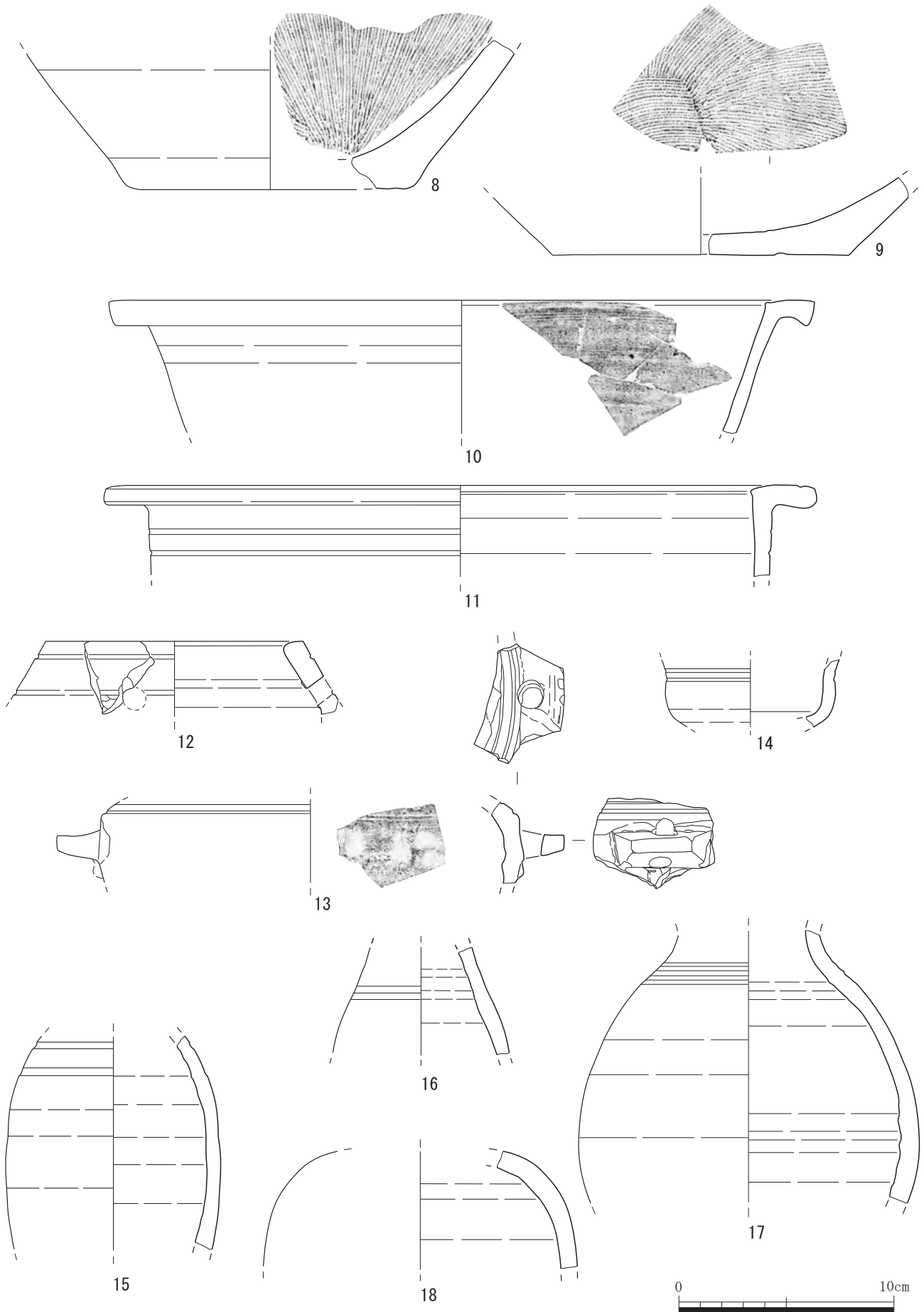
混和材凡例 ◎:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少 焼成凡例 良・中・悪 硬度凡例 硬・中・軟



第173図 沖縄産無釉陶器1



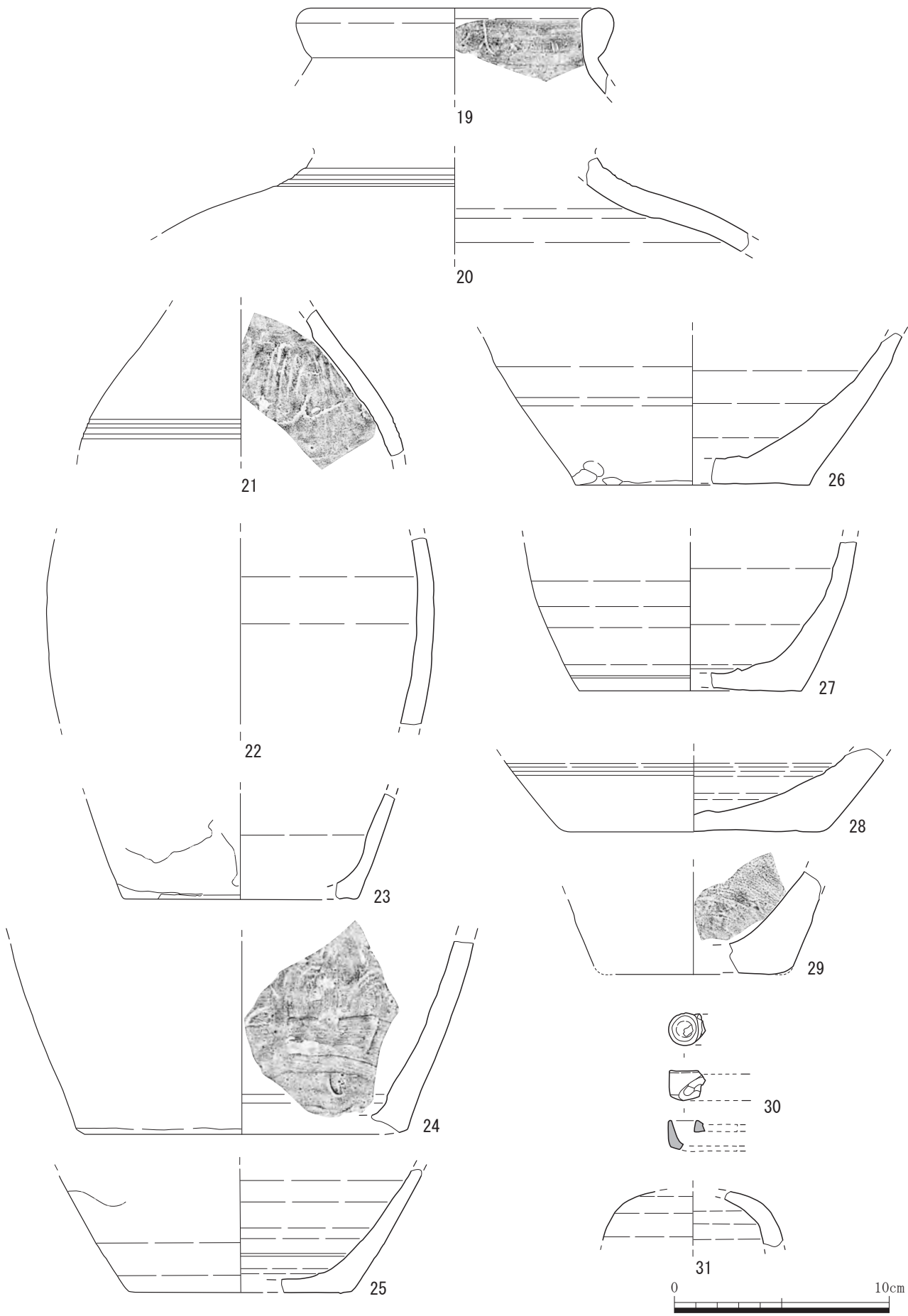
图版 122 冲縄産無釉陶器 1



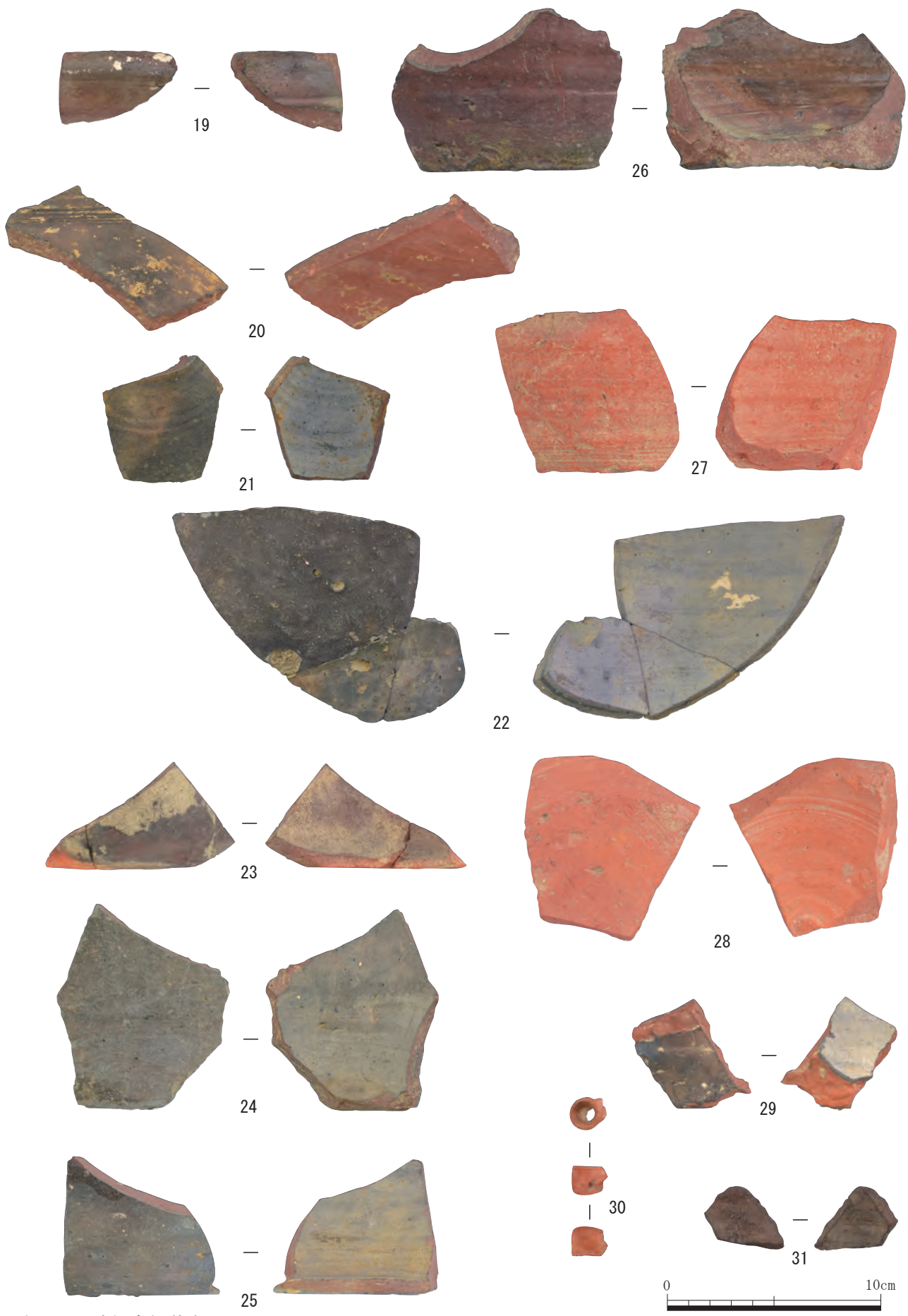
第 174 図 沖縄産無釉陶器 2



図版 123 沖縄産無釉陶器 2



第 175 図 沖縄産無釉陶器 3



图版 124 沖縄産無釉陶器 3

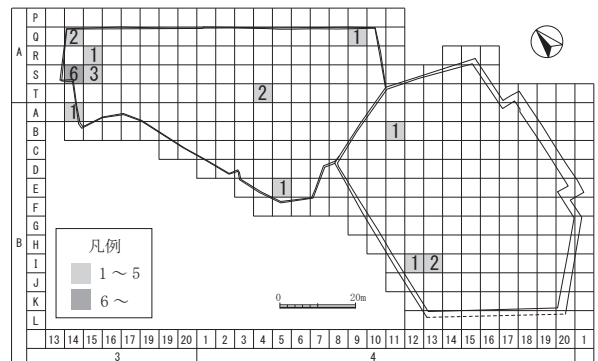
(20) 陶質土器

HCで8点、HB③で31点（うち「祝女殿内小」から10点）が出土した。器種別には火炉9点、鍋3点、土瓶3点、蓋・皿・鉢が1点ずつと不明21点（把手？鍋or土瓶を含む）である（第91表）。「祝女殿内小」周辺にやや纏まって出土している以外は出土数も箇所数も少なく特徴は見られなかった。また、出土器種の割合等にも目立った特徴は見られなかった。以下、特徴的なものを第177図及び図版125に示し、第92表に観察一覧、第176図で分布状況を示す。

図1は鍋の底部で外面には煤、内面は石灰分が付着した後、焦げて茶色を呈する。図2は蓋の撮み部であるが、高さ7mmで掴むにはやや浅めである。図3は腰部で「く」字状に屈曲する土瓶の胴部で鍋と同様に外面には煤、内面には石灰分が付着していた。屈曲部の最大径は18cmを測る。図4は土瓶の耳で外面に粒状の貼り付けが並び3粒と想定される。図5～9は火炉である。平安山原A遺跡（2016）に準じて分類したところ、今回は2タイプが確認できた。図5は口唇内面に器物を載せる突起を3ヶ所に設けるタイプでI類に該当する。図6はII類に該当する「く」字状に折れる口縁部で内面に煤が付着する。図7は筒状の口縁部でIII類と考えられる。外面には4組の圏線、内唇から内面へは煤が付着する。図8・9は底部で外面に白土で圏線を描き、いずれもA1類であるが9は高台が非常に低い。今回出土の火炉の口縁部はI類2点、II類1点、III類1点で、底部はA1類が3点であった。図10は逆「L」字状の口縁部を持つ鉢で沖縄産無釉陶器によく見られる器形であるが、砂質で擦ると素地の粉末が手に付着する。図11は皿で直状の底面を持つ。灯明皿の可能性もあるが細片のため詳細は不明。

第91表 陶質土器 出土量

遺跡層遺構	器種	鍋		鍋or土瓶		土瓶		把手?	蓋	皿	鉢	火炉		不明	合計		
		底	蓋受け	胴	底	耳	胴					胴	撮			口	口
H C	I 表採		1	1								1		1	4		
	不明					1						1		2	4		
	小計	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	3	0	8
H B ③	表採											1			1		
	I 攪乱			3			1		1	1	1	1	1	2	11		
	IIa 祝殿小-SL	2				1						1	2	3	1	10	
	IIb													1	1	2	
	III d 試掘				4							1				5	
	小計	2	0	3	4	1	1	1	1	1	1	3	0	4	7	2	31
	器種別合計	3		8		3		1	1	1	1	9		12		39	



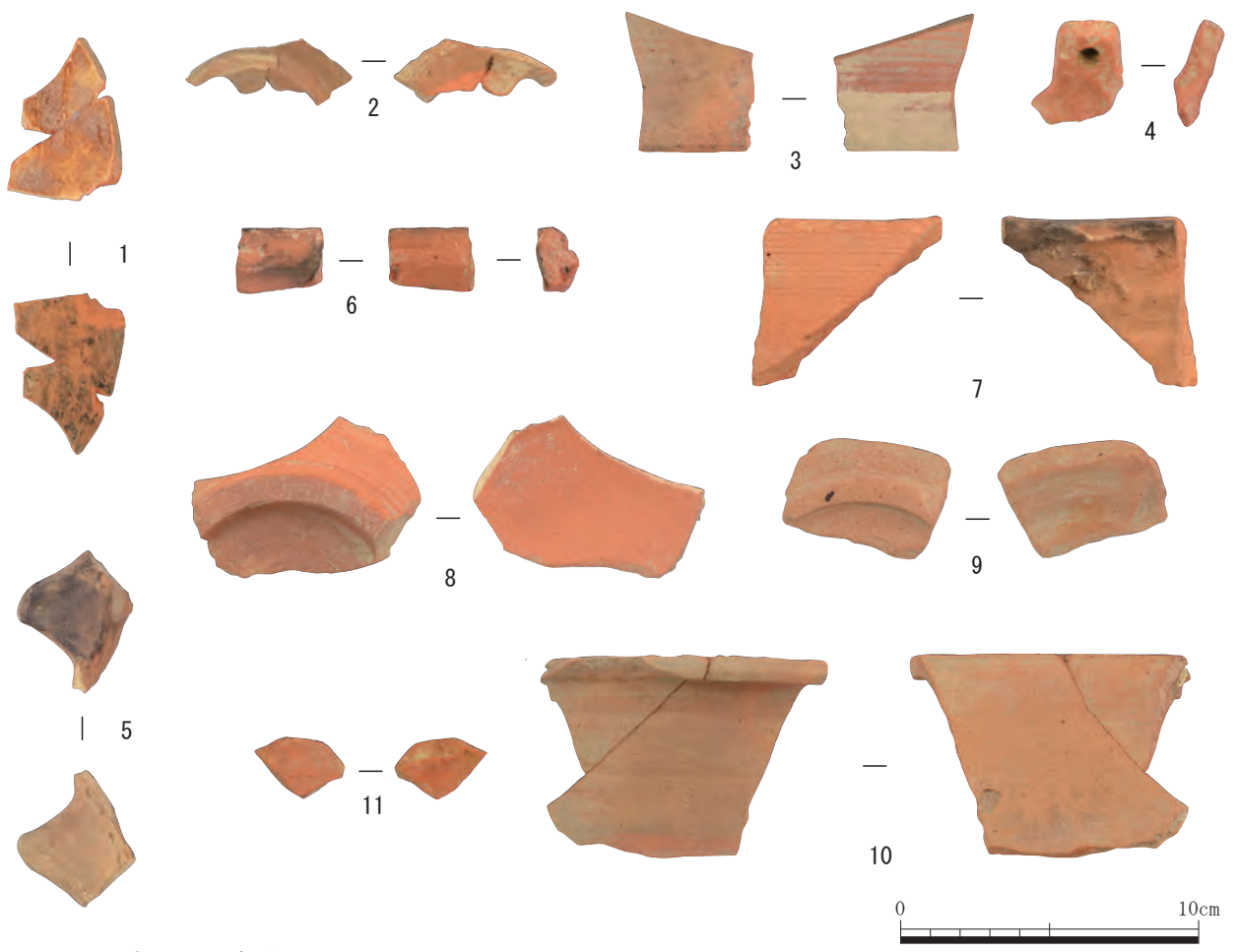
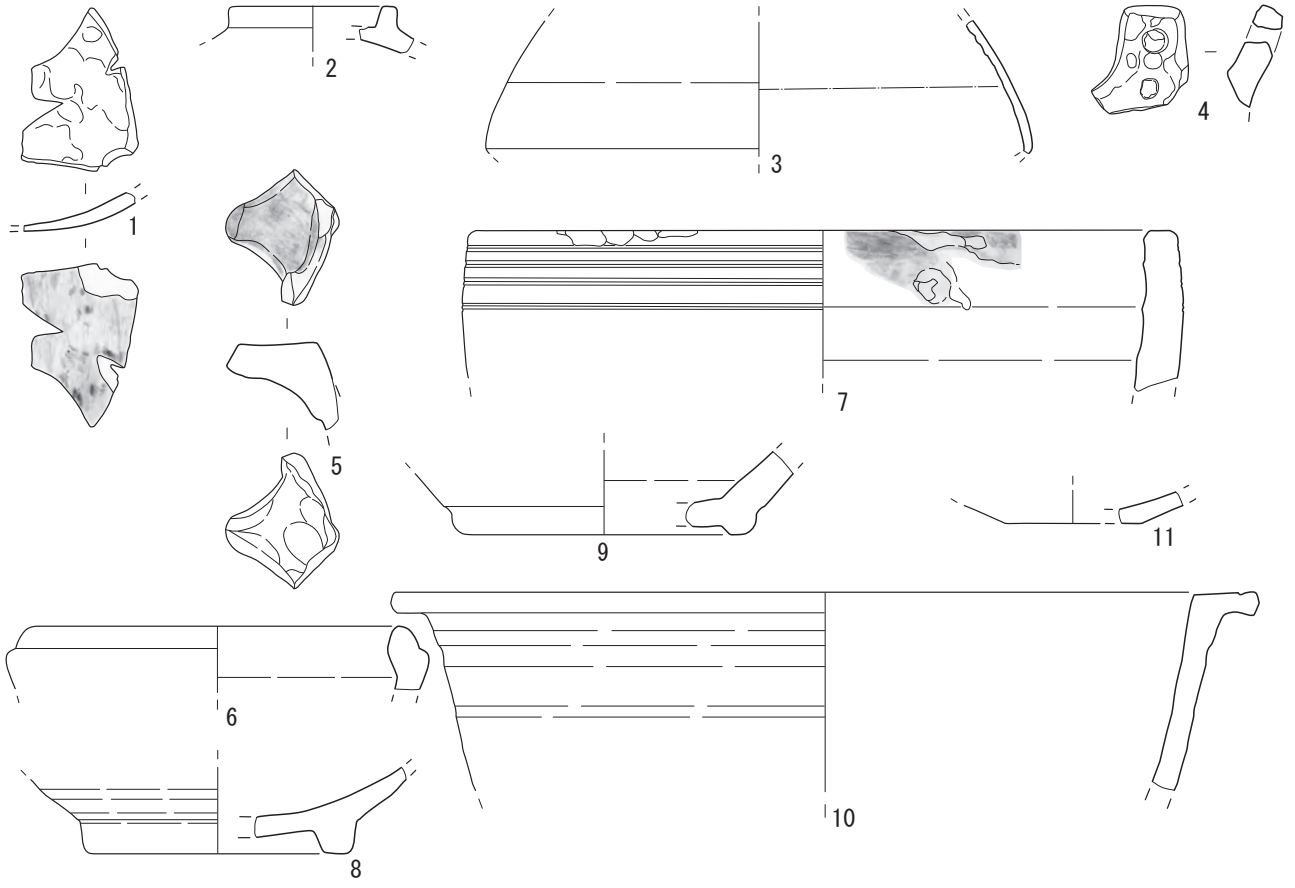
第176図 陶質土器 平面分布

第92表 陶質土器 観察一覧

(質量単位: cm)

第図 図版	番号	器種	部位	口径/胴径/底径	器厚	底厚	観察事項(器形・器色・分類等)	器色	混和材(粒状)					器面調整(外/内)	質	地区グリッド層遺構(取上)台帳番号
									赤色	白色	黒色	砂	雲母			
第177 図・ 図版 125	1	鍋	底	破損のため不明	0.2	0.4	外面:煤付着、内面:石灰分付着	淡茶	-	-	-	-	-	擦痕/擦痕	普通	HB③S15Ⅱa祝殿小SL05台212
	2	蓋	撮	5.6	0.6	-	高台状の撮み	淡茶	-	-	○	○	△	擦痕/ナデ	砂	HB③Q14Ⅰ台176
	3	土瓶	胴	最大径18.0	0.3	-	腰部で「く」字状に折れる 外面:煤付着、内面:石灰分付着・ ロクロ痕顕著	淡橙	△	-	-	-	△	ナデ/ロクロ	普通	HB③S15ⅡI攪乱台299
	4		耳	長3.3×短2.3	1.0	-	外面に粒状の貼り付けが並ぶ	橙	○	-	△	-	△	ナデ/ナデ	軟	HB③ST14Ⅱa祝殿小SL台60
	5	火炉	口縁	長3.4	0.6	-	口唇内面に器物を乗せる突起を貼り付ける(I類)	茶	○	△	○	-	△	ナデ/ナデ	硬	HB③ST14Ⅱa祝殿小SL台157
	6			12.0	0.8	-	口縁部「く」字状(II類)	橙	-	-	-	○	△	ナデ/ナデ	砂	HB③Q14Ⅰ台176
	7		23.5	12	-	円筒状を呈し、口唇内面に器物を乗せる突起を貼り付ける(III類)	淡茶	△	-	△	○	△	ナデ/擦痕	砂	HB③T17Ⅲb台825	
	8		底	9.0	0.5	0.6	高台状・白土で圏線(A1類)	橙	-	-	-	○	△	ロクロ/ロクロ	普通	HB③S15Ⅱa祝殿小SL05台212
	9	10.0	0.9	0.9	高台状(低い)・白土で圏線(A1類)	淡橙	○	-	○	-	○	ナデ/ロクロ	普通	HB③S14Ⅱa祝殿小SL05台237		
	10	鉢	口縁	28.6	0.8	-	口縁部を逆「L」字状に折り曲げ口唇は角状	淡橙	○	△	○	-	△	ロクロ/ロクロ	砂	HB③Q9・10Ⅰ台70
	11	皿	底	4.6	0.6	0.5	底部は直状を呈する	橙	△	-	△	-	△	擦痕/ナデ	普通	HB③Ⅰ台5

混和材凡例 ○:非常に多い ○:多い △:少ない △:僅少



第 177 图 · 图版 125 陶質土器

(21) 鍛冶関連遺物

鍛冶関連遺物は、羽口、鉄滓、炉壁破片、焼土が出土した。羽口に類似する焼土も関連資料として、ここに含めた。出土層位は、羽口は層不明、鉄滓はⅢa層と、石列1群（SL02）がほぼ同数の出土である。炉壁はⅢ層出土、鍛冶関連遺物の平面分布からⅠ層、層不明を除外して見ると、ほぼA～Eグリッドに分布し、B流路より南西側の出土である。主なものを第179図・図版126、第93表に出土状況、第178図に平面分布を示す。以下、略述する。

1. 羽口

羽口はHCから2点出土、101g、層不明。いずれも円管状である。

第179図1は、溶融物が付着する円管状の先端部破片。溶融物の範囲は、側面から見ると約45°程度の角度で有無があり、炉内に突き出した部分と炉壁内の差異と見られる。色調は外面の暗灰色の溶融物が付着しない部分は灰色を呈する。内面の先端部は暗褐色、他の部位は赤褐色を呈する。推定外径7cm、内径3cm、47.8g、HC C11出土。図2は、溶融物の付着は見られない円管状の破片、全体が摩滅する。色調は茶褐色と赤褐色が混じる。推定外径9.4cm、内径3.7cm、52.5g、HC H14出土。

本町内の遺跡で出土した羽口の殆どが円管状を呈するもので、その外・内径の平均値は、外径7.8cm、内径3.1cmである。外径の最大値は平安山原A遺跡（2016）出土の9.4cm、最小値は伊礼原遺跡（国指定外）（2014）の3.6cm、内径の最大値は北谷城（2010）の6cm、最小値は小堀原遺跡（2009）の1.8cmである。本遺跡出土のものは、概ね平均値に近い。

2. 鉄滓

鉄滓は総数47点、総重量2,245g、HB③で31点、985g、HCで16点、1,260g、殆どの資料は磁石に反応する。出土層位は、HB③ではⅢa層が主体をなし、ほぼ同じ量が石列1群（SL02）で出土。HCでは層不明、平面分布は主に石列2・3群周辺の出土である。

鉄滓は、形状からⅠ～Ⅳ類に大別した。Ⅰ類は楕形滓（図3～5）、Ⅱ類は厚さのある不定形な塊（図6）、最も大きなものは約10×5cmで、5～2cm程度のものもある。これらには、砂粒混じりの土の付着や、土と貝殻片、粗砂や小礫、枝サンゴなどが付着するものも見られる。Ⅲ類は粒々した塊で瘤状部分を有するもの、Ⅳ類は薄く扁平なもの（図7）、薄い剥離片状を呈するものや微小な鉄滓が含まれる薄い土塊状の磁石に反応するものもある。

図3は、表面の外縁よりやや内側に凸凹があり、周辺に僅かに気泡痕が見られる。裏面は破損面側の中央部が窪み、凸凹の無い面はザラザラである。色調は暗灰色を呈し、赤褐色を呈する部分も見られる。最大長は10.1cm、最大厚3.4cm、309g、HB③R14Ⅰ層出土。図4は、破損の無い楕形滓と見られる。表面はうねりのある面に気泡痕が見られ、瘤状を呈する部分もある。裏面は全体的に浅い凸凹が見られる。外縁の一部に貝殻片が付着する。色調は灰色を呈する。最大長は6.4cm、最大厚1.9cm、116g、HC G15出土。

図5は破片、表裏面が緩やかにうねる面を呈し、凸凹が目立たない。破損面に土と貝殻片が付着する。色調は暗灰色を呈する。最大長は7cm、最大厚1.8cm、135g、HC D10Ⅴ層出土。

図6は破片と見られ、表裏面に気泡痕が見られる。色調は暗灰色を呈する。長さ2.5cm、厚さ2.3cm、34.9g、HB③C5Ⅱb層出土。

図7は表裏面に凸凹や気泡痕が見られる。裏面に砂粒や微小な貝殻を含んだ土が付着する。色調は灰色を呈する。最大長は5.6cm、最大厚1.4cm、74.6g、HB③C3石列1群（SL02）出土。

3. 炉壁破片

炉壁破片としたものは、熔融物の表面に凸凹やうねりがあるが平坦的な形状を成すもので、裏面に羽口に類似する焼土が付着するものである。HB ③のみで16点、221g。黒褐色や灰色を呈する熔融物の表面には気泡痕が見られ、これら資料は磁石に反応する。平安山原A遺跡(2015: 第160図8)に類似するものである。

図8は、外縁と見られる片側が反る。上面は気泡痕が見られ、部分的に砂が付着する。色調は灰色を呈するが暗灰色の部分も見られる。重さは30g、HB ③D3 III層出土。図9は、破片端が反るもので熔融物表面の中央に光沢がある。色調は、ほぼ暗灰色を呈するが、一部灰色の部分がある。HB ③B1 III層出土。

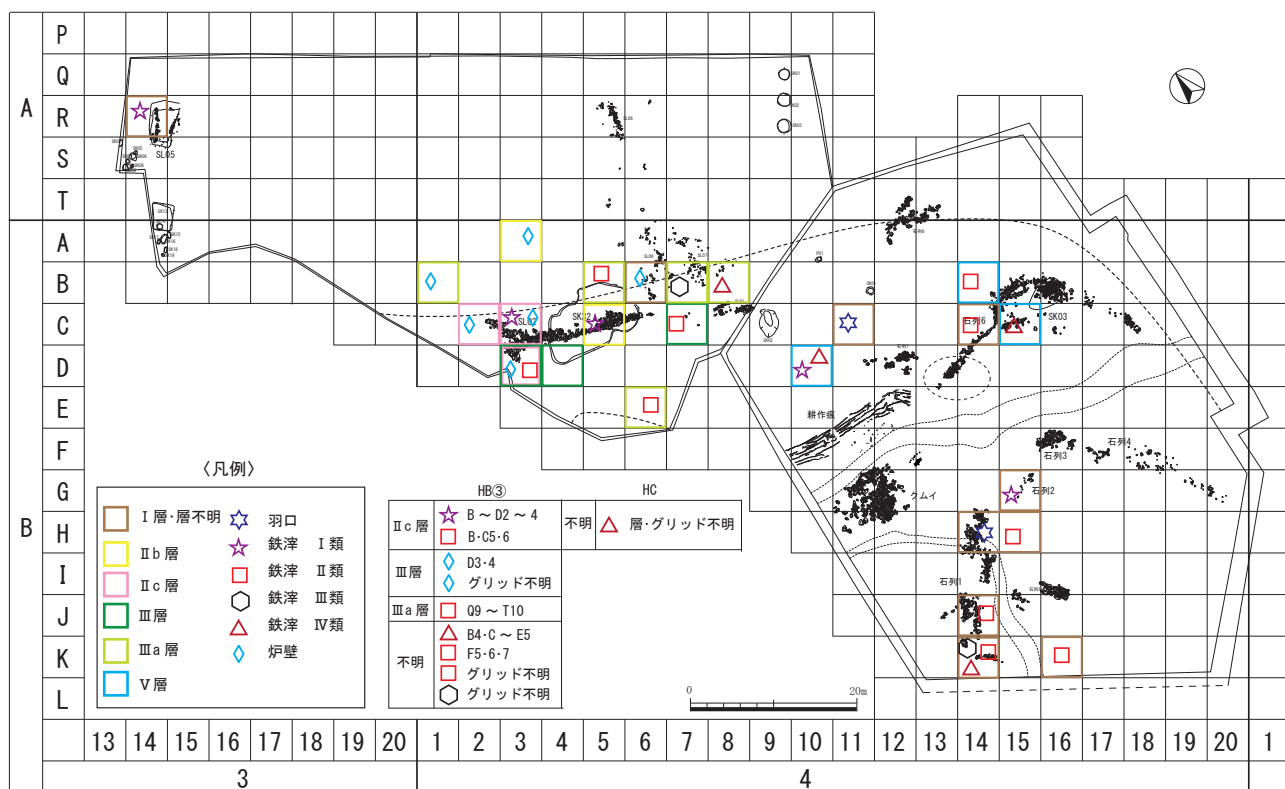
4. 焼土

焼土は、砂質と泥質があり、前者には細かい石を含むものがある。総数10点、211g、HB ③では9点、200g、III層出土、HCは1点、11g、層位不明である。焼土には磁石に反応するものもある。

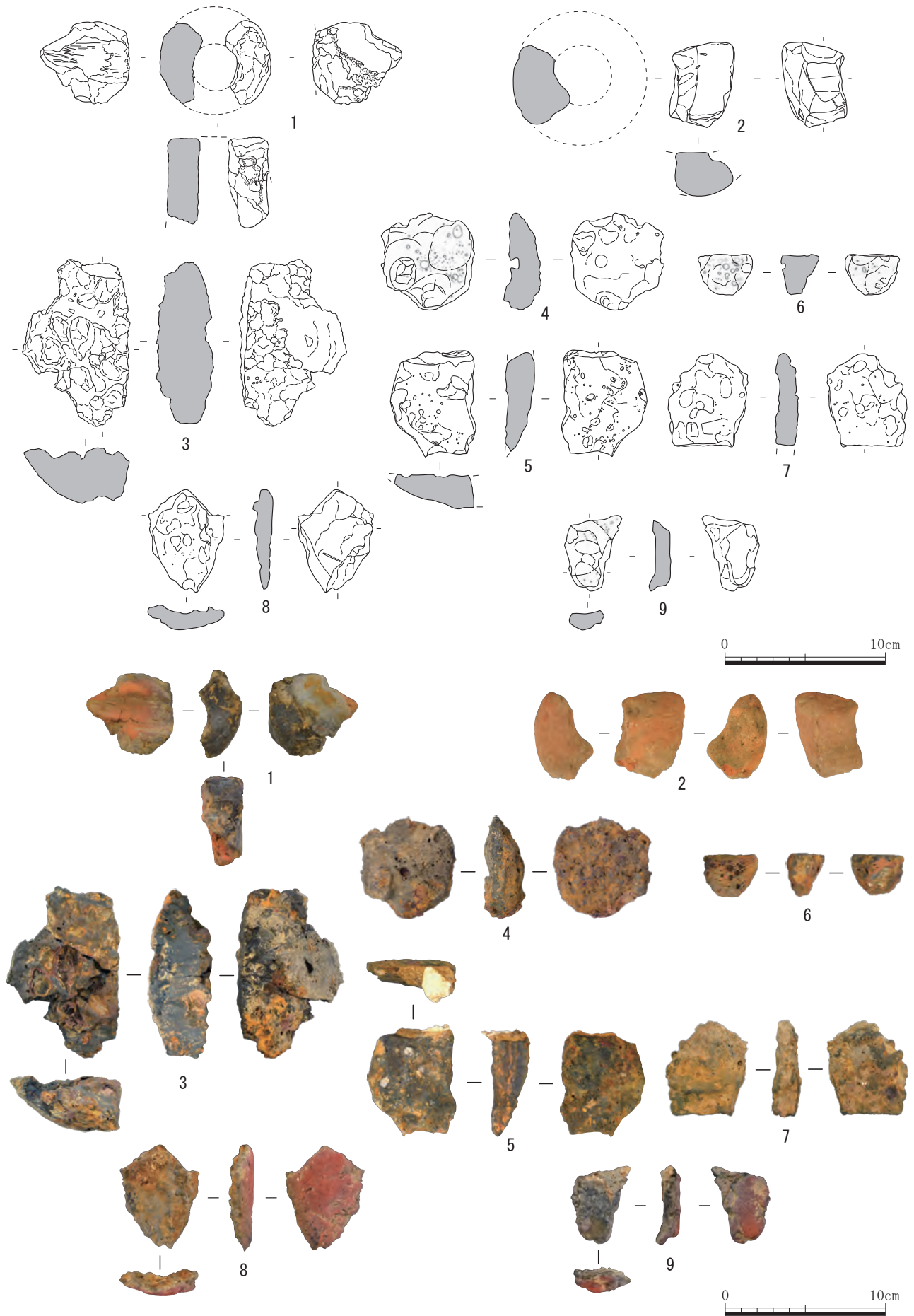
第93表 鍛冶関連遺物 出土量

(法量単位:g)

遺跡 層・遺構	種類 分類	羽口 個数 重量	鉄滓								炉壁破片				焼土					
			I類		II類		III類		IV類		砂質		泥質		砂質		泥質			
			個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量		
V	B14				1	222														
	C15																			
	D10			1	135															
	C11	1	48																	
	C14					1	97													
	E18																1	11		
	G15			2	233															
	J14					1	74													
	H14	1	53																	
	H15					1	4													
	K14					2	387	1	5	1	3									
	K16					1	60													
	不明																		2	27
HC小計		2	101	3	368	7	844	1	5	5	43	0	0	0	0	0	0	1	11	
I	R14			1	309															
	A3											1	24							
	C5			1	35															
	C2											2	41							
	C3			6	128							2	32							
	B~D2~4			2	14															
	D3					3	111													
	IIc(SK32)					1	33													
	C7					1	14													
	D3											2	33							
	D3~4											4	49							
	S9																6	81	2	114
	不明											3	18							
	Q9-T10					1	1													
	B1												1	15						
B5						1	108													
B7								2	26											
B8											4	40								
E6					2	61														
B4~C~E5											1	15								
B6												1	9							
F5~6~7					2	21														
不明					2	57	1	13												
HB③小計		0	0	10	486	13	405	3	39	5	55	16	221	6	81	3	119			
HC+HB③合計		2	101	13	854	20	1249	4	44	10	98	16	221	6	81	4	130			



第178図 羽口・鉄滓・炉壁 平面分布



第179図・図版126 鍛冶関連遺物 (1・2: 羽口. 3~7: 鉄滓. 8・9: 炉壁)

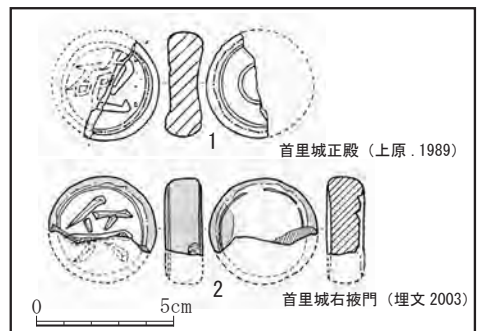
(22) 円盤状製品

円盤状製品が16点出土している(第94表)。これらは中国産青磁、中国産染付、本土産近代磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器の碗、皿、大鉢、播鉢、壺などの器物を素材に縁部を叩打や剥離により二次的加工を加え円盤状に成形したものである。平面形は円状や楕円状で、法量は最大で平面径12.7cm、厚さ4.8cm。最小は平面径3.5cm、厚さ1.2cmを測るが、大半は平面径が4~5cm、厚さ1cm前後である。当該製品については様々な研究が成され用途も銘銭説、玩具説、遊具説、めんこ説、呪術・信仰関係遺物説、飛礫説、蓋説、漁具説、計量具説など色々である(上原静2004)。

層位別出土量はHB③のI層とIIa祝女御内小-SLに集中している。平面分布においてもHB③の北側に集中している。以下に主なものを第181図、図版127に観察を第95表に示した。

図1~3は中国産の染付と青磁の碗、皿の底部を素材に高台から外側を打割し円盤状に粗成形し、更に打割面を細かく剥離、円形に整えている。平面径7.6~5.4cm、厚さ1.7~1.6cmを測る。図4~8は沖縄産無釉陶器の壺、播鉢の胴部を素材に縁部を打割や剥離により円形に加工したものである。胴部の独特の窪みがあり伏せて座りがいい。平面径7.7~3.5cm、厚さ1.2~1.0cmを測る。

第180図1・2は首里城正殿(上原静2004)と首里城右掖門(県埋文センター2003)から出土した青磁製、中国象棋駒で表面に印刻文字を施され、1が「砲」、2が「兵」と読める。特に1は首里城正殿II期基壇に伴ったことから15世紀中葉の頃に位置づけられ中国象棋の文化がこの頃にすでに伝来していたことがわかる資料と言える(上原2004)。これらの法量は平面径4cm、厚さ1.4cmと図2~4に示した青磁、染付の碗や皿の底部を利用した、円盤状製品と比較しやや近と言える。形態的には円状であること、表面の窪みなどよく似ている事がわかる。このことは素材が同じである、中国産の青磁、染付の碗や皿の底部を利用しこれらを模倣し円盤状製品の一部は作られたとも推察できる。図9は沖縄産施釉陶器製大鉢の底部部分を打割し円盤状に成形している。平面径が12.7cm、厚さ4.8cmあり、遊具には不向きとも考えられ、蓋など他の用途も考慮する必要を感じる。



第180図 中国象棋駒参考資料

第94表 円盤状製品 出土量

遺跡	層	遺構	素材								合計		
			青磁		染付		本磁		沖施			沖無	
			底	胴	底	胴	底	胴	底	胴		底	胴
			円形	略円	円形	楕円	略円	円形	楕円	略円	破損		
			完形	完形	半欠品	完形	半欠品	完形	完形	完形	破損		
H	I									1		1	
H	II		1									1	
H	I			1	1	1	1	1	1	1		5	
H	IIa	祝女殿内小-SL							1	1	4	6	
H	IIb									1		1	
H	IIc	石列1群		1								1	
合計			1	1	1	1	1	1	2	2	6	1	16

第95表 円盤状製品 観察一覧

第181図・図版127	図番号	素材	器形	器種	部位	完/破	計測値					観察事項	遺跡・グリッド・層遺構・台(ドット)番号
							最大長	最大幅	最大厚	底径	重量		
	1	中国産染付	円形	碗	底部	完形	7.6	7.1	1.7	-	96.6	碗の底部から胴部分を打割し取り除いたのち高台の一部と縁部を細かい剥離により円形に整えている。	HB③ C5~7 IIc 石列1群 台7
	2	中国産染付	円形	小碗	底部	半欠品	5.4	3.8	1.6	4.4	21.9	小碗の底部を利用、底部から胴部分を打割し取り除き底面と高台のみ残す。内底部の縁部は細かい剥離により円形に整えられている。	HB③ S14 I 台62 HB③ A15 IIIa 台281
	3	中国産青磁	円形	皿	底部	完形	5.6	5.5	1.7	4.0	49.8	皿の底部を利用、底部から胴部分を取り除き円盤状に二次的加工を加えるもの。高台から胴部分を打割し縁部を細かい剥離により円形により近く整えている。	HC A13 II Ⅱ2011
	4	沖縄産無釉陶器	楕円	壺	胴部	完形	7.7	7.3	1.2	-	93	胴部を利用、円盤状に打割し、さらに円に近づくため縁部の所々に細かく剥離し整えている。	HB③ S14 IIb 台146
	5	沖縄産無釉陶器	略円	壺	胴部	完形	4.9	4.7	1.0	-	25.9	胴部を利用し円盤状に打割し、さらに周縁の所々に細かな剥離をしている。	HB③ R15 I 台102
	6	沖縄産無釉陶器	円形	播鉢	胴部	完形	4.4	4.2	1.2	-	22.2	胴部を利用し円盤状に打割し、さらに周縁を細かな剥離により整えている。	HB③ 14-15 I 台431
	7	沖縄産無釉陶器	円形	壺	胴部	完形	4.4	4.1	1.0	-	22.9	胴部を利用し円盤状に打割し、さらに周縁の所々に細かな剥離をしている。	HB③ S14 IIa 祝女殿内小-SL05 台271
	8	沖縄産無釉陶器	略円	壺	胴部	完形	3.5	3.5	1.2	-	15.1	胴部を利用し円盤状に打割し、さらに周縁の所々に細かく剥離し整えている。	HB③ S14 IIa 祝女殿内小-SL05 台280
	9	沖縄産施釉陶器	円形	大鉢	底部	半欠品	12.7	9.0	4.8	9.0	418	大鉢の底部を利用、底面と高台のみ残り底部から胴部分を打割し取りのぞき円盤状に二次成形しているものである。打割面は細かい剥離により更に整えている。円盤状製品の従来考えられている用途は遊具であるがサイズが大きく不向きである。	HB③ 14-15 I 台431



第181图 円盤状製品



图版 127 円盤状製品

(23) 瓦

瓦は総数 112 点、約 34kg の出土である（第 96 表）。個数では丸瓦が 31.3% 平瓦は 46.4%、不明 22.3%、重量では丸瓦 54%、平瓦 32.5%、不明 13.5% で丸・平瓦の割合が逆転する。軒丸・軒平瓦は出土していない。いわゆる赤瓦であるが、明赤褐色の色調のものが多いが、やや暗い赤褐色を呈するものも見られ、橙褐色は 1 点のみである。層別の出土割合は、I 層出土が 51.8% II b 層出土は 25.9% である。その他のグリッドは、集落南・東側の耕作地にあたり、耕作土や耕作土母材層と考えられている III a・b・c 層の合計が 8% である。近代の耕作に伴う攪拌の際に混入した可能性が考えられる。

HB ③では、旧宇平安山集落の祝女殿内小の屋敷外縁部に相当する石列 3 群 (SL03・04) (第 46 図参照) 上面と周辺一帯 (S14・T14・15) からまとまって出土した (第 182 図)。隣接する平安山原 A 遺跡 (2016 年) で報告された屋敷跡全般からまとまって出土した分布域の東側端にあたる。平安山集落の家屋に用いられていたものと思われ、出土状況から、戦時中の破壊、または、米軍上陸後から戦後にかけて行われた米軍基地整備の造成工事によって生じたものと推測される。

HC 出土のものは戦後の造成によって散在したものと考えられ、砂丘の頂部に当たる一帯に見られる。出土した瓦の特徴的なものを示した。

第 183 図 1、丸瓦の長さは約 30cm、模骨の大きさが想定される凹面の広端面内径は約 11cm を測る。HB ③ T14 SL03・04 出土。

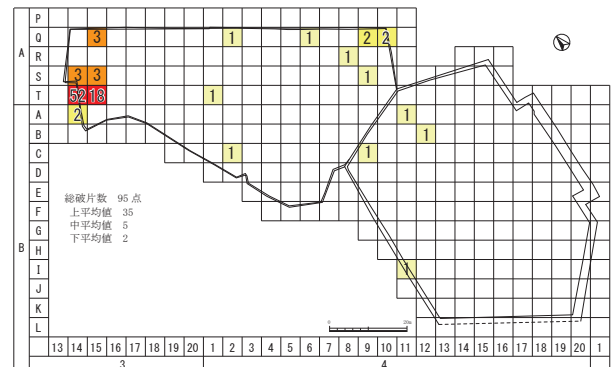
図 2、片側に径 8cm の半円形の抉りが施されており、焼成後に打ち欠いている。この打ち欠きの外面縁を漆喰が覆っていることから瓦葺の際に組み合わせ用に施されたものと見られ、棟から横方向に向きを変えるためのものと考えられる。他の丸瓦片では漆喰の塗り幅は概ね 3～5cm であるが、本品は最大幅 6cm、最小幅 2.5cm の箇所も見られる。HB ③ SL03・04 出土。

図 3、平瓦上端の整形は丁寧であるが、下端は雑、平瓦の模骨の大きさが想定される内径は狭端部 26cm、広端部 31.6cm である。平瓦に漆喰の付着は、殆ど見られず凹面に縦方向の付着が散見される程度である。側面には割りそこなったものもみられる。HB ③ SL03・04 出土。

琉球近世の丸瓦の直径は 15cm 前後、平瓦の幅広い側の径は 25cm 前後 (石井 2010)、現代の瓦製作

第96表 瓦出土量

遺跡	層	グリッド	遺構	丸		平		不明		合計		
				個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	
HB ③	I	S・T14	祝殿内小 (瓦溜り)					1	1			
		T14・T15		23	13,561	12	4,745	2	1,240	38	19,547	
		T14		2	1,875	1	638		2,516	3	5,029	
		A14・T14						1	13	1	13	
		A14			2	295			2	295		
		S14	1	1,432	1	76			2	1,508		
		Q9・10	2	125	1	149	1	34	4	308		
		Q15					1	24	1	24		
	S9			1	25			1	25			
	不明	2	95	2	252	2	73	6	420			
	小計				30	17,088	20	6,180	8	3,901	58	27,169
	II a	T14	石列遺構(SL04)	4	1,344	23	4,584			28	6,051	
		A14・T14		1	123					1	123	
		T14	石列遺構(SL04)周辺			1	46			1	46	
		小計				5	1,467	24	4,630	0	0	29
III a	不明							1	14	1	14	
	不明							2	16	2	16	
	不明							2	57	2	57	
	不明							1	459	1	459	
	不明				1	12			1	12		
	不明				1	43			1	43		
	小計						2	55	3	516	5	571
	表採	不明							1	8	1	8
	不明	Q2							1	5	1	5
		R8							1	22	1	22
S15								2	11	2	11	
T1				1	61					1	61	
不明				1	166			1	40	2	206	
小計				2	227	5	78	5	78	7	305	
HB③小計				35	18,555	48	11,092	20	4,533	103	34,180	
HC	表採	不明			4	89		1	3	5	92	
	攪乱	A11						1	8	1	8	
		I11						1	59	1	59	
		C9						1	18	1	18	
		B12						1	11	1	11	
HC小計				0	0	4	89	5	99	9	188	
HC③・HC合計				35	18,555	52	11,181	25	4,632	112	34,368	



第 182 図 瓦 平面分布

具の丸瓦の底部の径は 12cm、平瓦の下部径は 34cm（上原 2013）と示されており、広端部の大き
 きで比較すると本遺跡出土の瓦は現代の製作具のサイズとほぼ同様である。



第 183 図・図版 128 瓦

(24) 軽石製品・軽石・琥珀

1) 軽石製品

軽石製品は、平坦な磨滅痕を有するものでHCのみで5点、275.8gの出土である。製品は、それ以外のものに比して、表面の手触りのガサつきが弱い感がある。

軽石製品の主なものを第185図に示し、第97表に製品を含めた自然の軽石出土量、第184図に平面分布を示し、以下、製品について略述する。

第185図1は、平面・断面形は長楕円形を呈する。主な使用痕が先端部と右側面の2ヶ所に平坦面が見られる。平坦面が斜めとなる先端部の使用痕は幅約5.4cm。右側面の使用痕は幅約3cmである。その他の表面にも使用による磨滅があり、前述2ヶ所の使用痕に合わせた持ち方にすると、手の中で収まりの良い形である。長さ約10.1cm、幅約6.4cm、厚さ5.6cm、重さ117.8g。HC C12 V層出土。

図2は、平面・断面形ともに不定形を呈する。各面に見られる凹面以外の面が磨滅し、裏面の中央部から下端にかけての使用痕は傾斜した平坦面が見られる。最大幅約7.7cm。長さ11.5cm、厚さ6.8cm、重さ2.1g。HC B12層不明。

図3は、平面形は隅丸二等辺三角形、断面形は不定形を呈する。表面の使用痕は、中央部から左側面、上部の縁辺部、右下側縁辺部に平坦面が見られる。右側面は磨滅する。裏面から左・下側面にかけては石灰が付着する。右側面の上端側には傷状のスジが複数見られる。長さ9cm、幅6.4cm、厚さ4.9cm、重さ49.1g、HC H14層不明。

図4は、平面形は隅丸二等辺三角形、断面形は不定形。表面は中央部、左右側面の上部端から3分の2程度の範囲に平坦面が見られる。裏面は中央から左側には磨滅した欠損部がある。右側面の上部は磨滅する。長さ7cm、最大幅5.2cm、厚さ2.9cm、重さ16.3g、HC A16層不明。

図5は、平面形は隅丸三角形、断面形は不定形。表面中央部から右側にかけて肌理の粗いアバタ状の気泡痕が目立ち、裏面が磨滅する。長さ4cm、最大幅4.5cm、厚さ3.5cm、重さ10.5g、HC A15攪乱10.5g。

2) 軽石

軽石は総重量1,840.4g（製品を含む）である。HB③・HC全体で見るとHB③は46.6%、HCでは53.4%、

第97表 軽石 出土量(重量)

遺跡	層	グリッド	重量	小計	出土割合(%)		
					遺跡	全体	
HC	I	表採	1.8	1.8	7.2	3.9	
		A11	57.8	68.3			
		A15	10.5				
	II	D11	2.2	16.8	1.7	0.9	
		I14	14.6				
	V	A15	0.5	234.6	24.1	12.9	
		A16	16.3				
		B13	2.7				
		B14	9.7				
		B16	0.6				
		B17	0.8				
		C10	0.8				
		C12	117.8				
		C14	21.4				
		C15	7.9				
		C16	0.6				
		D9	11.3				
		D10	8.3				
		D13	0.5				
		D15	1.0				
		E15	1.2				
	E16	0.2					
	F13	1.5					
	F14	20.1					
	G12	7.5					
	G13	2.8					
	H13	1.1					
	V	貝層II群	c	9.3	17.1	1.8	0.9
			h	7.8			
		貝層III群	2	1.3	40.4	4.2	2.2
			5	39.1			
	不明	B12	2.1	593.0	61.0	32.6	
		B14一括	322.8				
B15一括		28.1					
E14一括		5.5					
E15一括		5.8					
F13一括		11.1					
F14一括		2.3					
G10一括		1.7					
G11		2.6					
G20一括		145.7					
H13	16.2						
H14	49.1						
HC小計			972.0	100.0	53.4		
HB③	IIc	C6	515.0	563.0	66.4	30.9	
		BC5.6	48.0				
	III	B3	5.5	176.1	20.8	9.7	
		C2	61.8				
		C7	32.4				
		C8	76.4				
	IIIc	S6	10.3	10.3	1.2	0.6	
III d	S16	21.0	21.0	2.5	1.2		
不明	B3	78.0	78.0	9.2	4.3		
HB③小計			848.4	100.0	46.6		
HC+HB③合計			1820.4	—	100.0		

(製品含む)

前者のⅡc層は30.9%、Ⅲ層は9.7%、Ⅲc層は0.6%、Ⅲd層は1.2%、後者のⅡ層は0.9%、Ⅴ層は12.9%、Ⅴ層の貝層Ⅱ群は0.9%、Ⅴ層の貝層Ⅲ群は2.2%である。層別の出土量は、HB③ではⅡc層、HCではⅤ層に多く出土する。

HB③のみで見るとⅡc層約66.4%、Ⅲ層20.8%、Ⅲc層1.2%、Ⅲd層2.5%、不明9.3%でⅡc層に多く、石列1群（SL02）周辺の出土である。HCのみではⅡ層1.7%、Ⅴ層24.1%、Ⅴ層の貝層Ⅱ群1.8%、Ⅴ層の貝層Ⅲ群4.2%、不明61%が出土、但し、その多くが層不明となっている（第97表）。

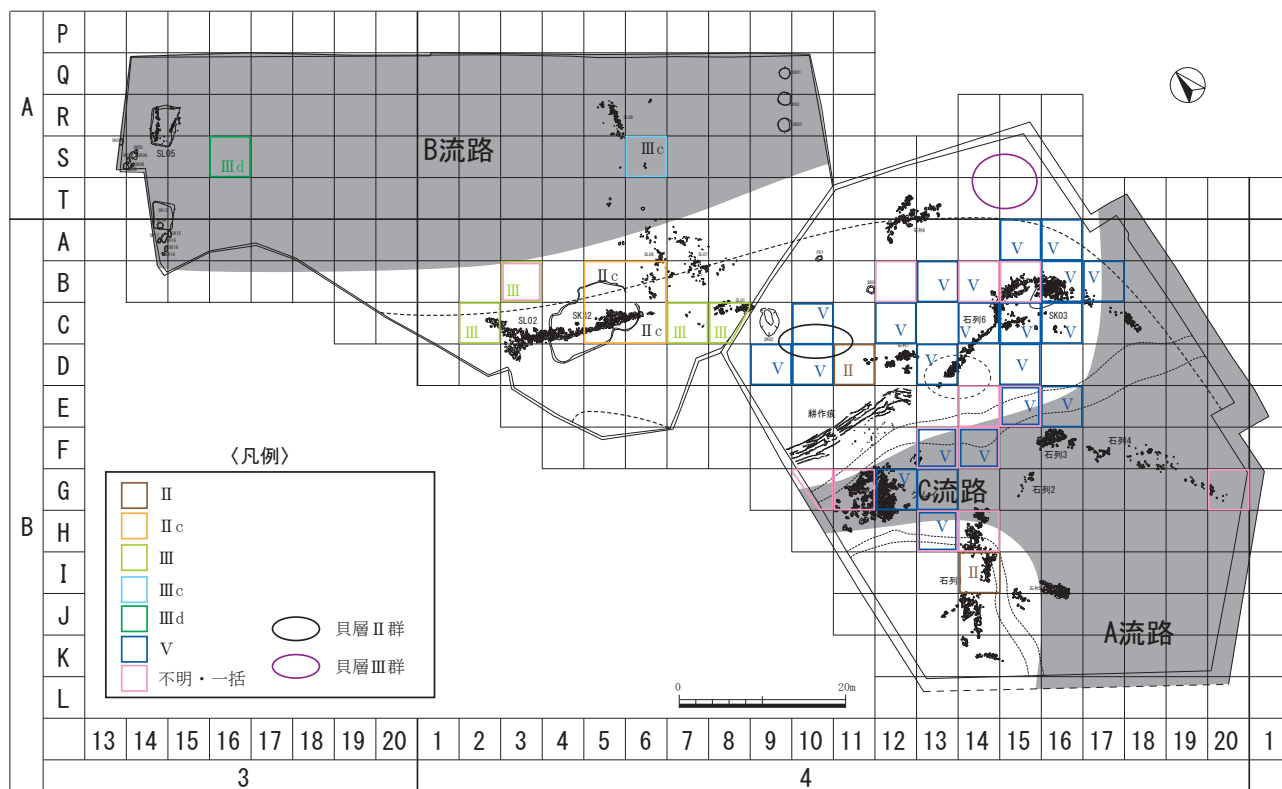
軽石の中で大きいものは軽石製品（図2）の約11×7cm程度で、殆どのものがこれより小さい。色調で見ると黒色は62%、黄色は38%である。色調と肌理では、黒褐色は粗く、黄褐色は細かい、中間としたものには両方見られる。

平面分布では、主にHB③、HCにまたがる砂丘とC流路に見られる。HB③のⅡc層出土のものは、石列1群（SL02）周辺にまとまりがあり、Ⅲ層出土のものは浜堤のB流路に向く傾斜部と頂部に見られ、HCのⅤ層出土のものは、浜堤頂部とA・C流路に向く傾斜部や流路底（第184図参照）にまとまりが見られる。A・C流路の合流部では、G14・15、H13～15で火山の噴出物であるスコリアが堆積する範囲（第28図・巻首図版9）が検出されており、その上位では貝層Ⅰ群が検出されている。この火山噴出物は、浜堤が形成される中で漂着したものと考えられ、平面分布で出土が見られない範囲は流路の形成による可能性が高いと考えられる。

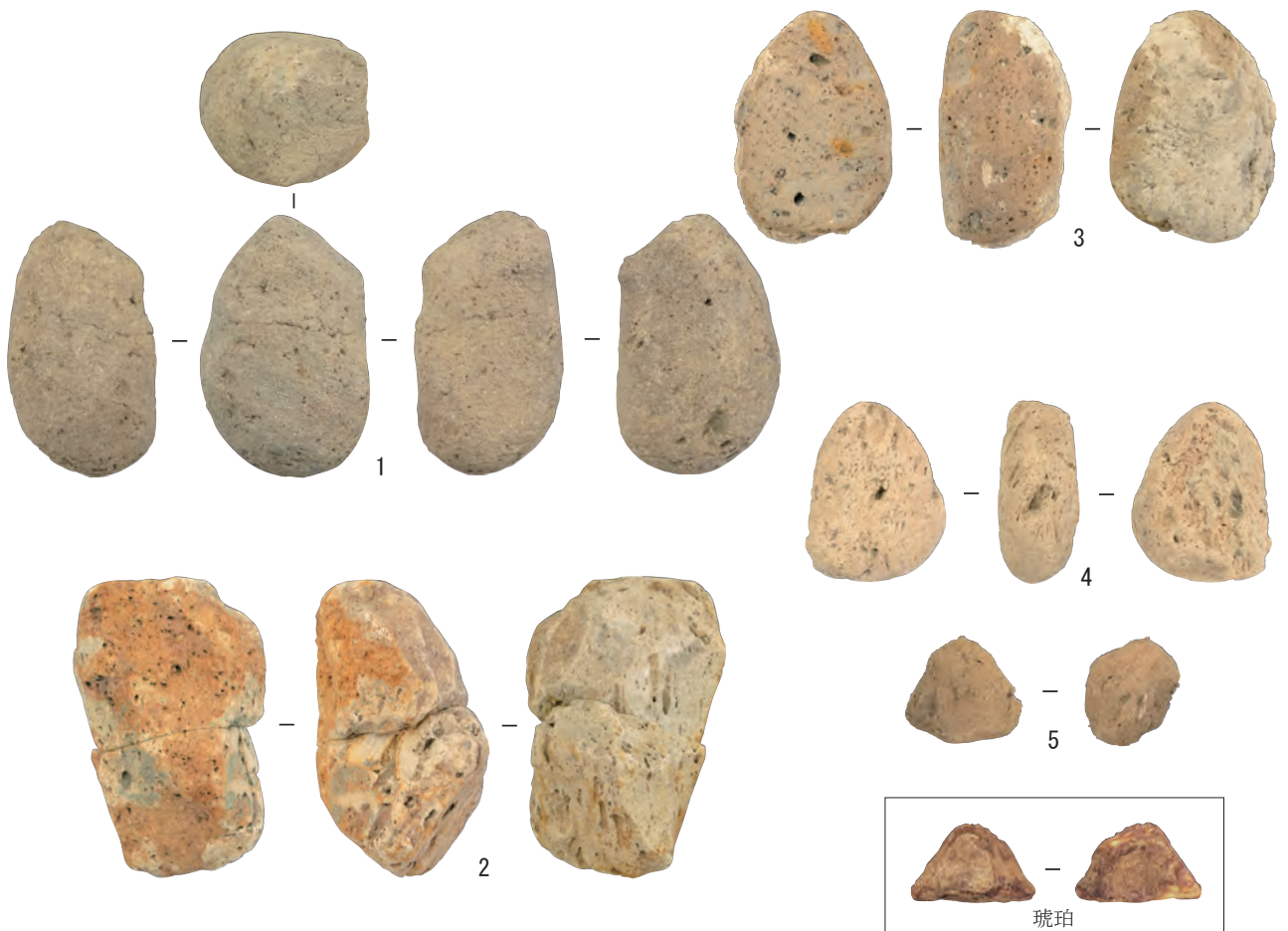
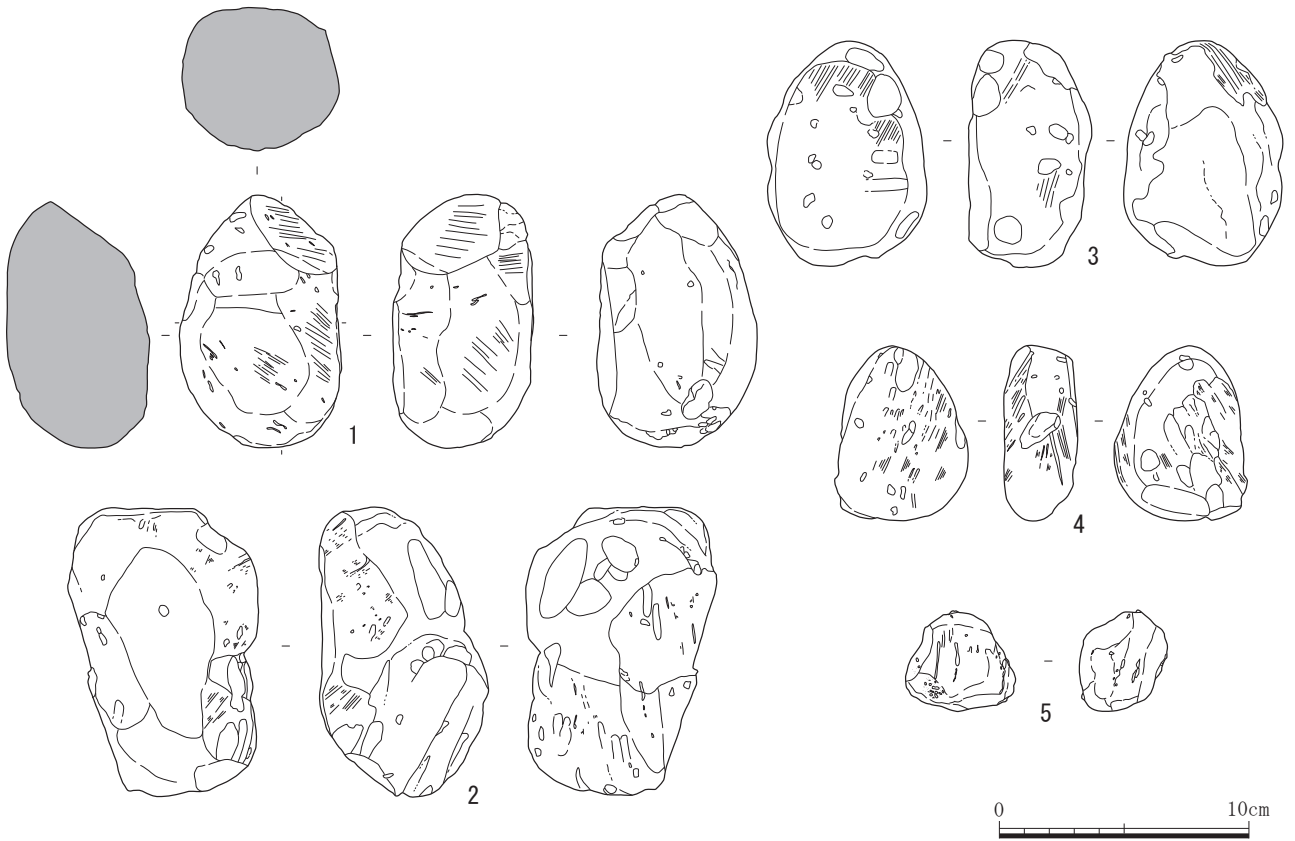
3) 琥珀

琥珀^(註1)は樹脂の化石で、HB③S-16Ⅲc層で1点出土、図版129に示した。縁辺部分の一部に光沢面が見られるが大半は風化面とみられ、細かい白色粒が付着する。一部にみられる小さな欠損部は黄白色を呈する。長さ約5cm、幅3cm、厚さ2.6cm、重さ17.0g。喜界島の川寺遺跡に出土例がある（2013奄美新聞）。

註1：大城逸朗氏の鑑定による。



第184図 軽石 平面分布（製品含む）



第 185 図・図版 129 軽石製品・琥珀

第V章 科学的分析

第1節 平安山原B遺跡・C遺跡で採集された脊椎動物遺体

樋泉岳二（早稲田大学）

はじめに

沖縄県北谷町の海岸平野に立地する平安山原B遺跡・同C遺跡では、2008・2009年度に実施された発掘調査において、沖縄貝塚時代後期から近現代にいたる各時代の層準から多数の脊椎動物遺体（魚骨・獣骨など）が出土した。ここではその同定結果を記載し、その特徴について考察する。

1. 資料と分析方法

調査区は平安山原B遺跡（HB③地区）、同C遺跡（HC地区）に分かれる（以下、それぞれ単にB遺跡、C遺跡と記述する）。骨類を出土した層準と主要な年代は、下位からV層・IV層（貝塚時代後期）、III層（IIIa層～IIIe層を含む、グスク時代）、II層（近世～近代）、I層（戦後）である。

III層については、B遺跡で検出された「耕作域」において、IIIa層～IIIe層に細分が行われている。各層の年代は、IIIa層・IIIb層が14～16世紀主体、IIIc層以下は13世紀以前と推定されている。ただしIIIc層・IIId層からは耕作土作出の際にV層から混入したと推定される大量の貝塚時代後期前半土器が出土しており、脊椎動物遺体についても当該時期の資料が多く含まれている可能性が高い。

V層出土資料については、貝層II群・貝層III群・貝層V群に分かれるほか、「後期層」として取り上げられた資料が多数ある。これらの年代については、今回は貝塚時代後期として一括して扱ったが、「後期層」に関しては、後述する通りウシ・ウマの遺体が相当数出土していることから、脊椎動物遺体に関する限り、グスク時代以降の資料が多数混在している可能性が高い。

なお、層序と年代の詳細については本書の当該項目を参照されたい。

分析資料はすべて発掘現場において手で拾い上げられたもの（ピックアップ資料）である。分析方法は、基本的に樋泉（2007）の方法を踏襲した。なお哺乳類の四肢骨については、骨幹の全周を残さない破片は原則として同定対象から除外した。遺体の予備的な同定は島袋春美氏の指導のもとに整理作業員諸氏が行い、筆者（樋泉）が同定結果の確認と集計・図表作成を行った。

2. 分析結果

同定結果を第99表～第100表に示した。ただし、ウミガメ類をはじめとする一部資料については種類・部位の詳細な同定が未了である（これらについては表中に「未同定」・「未確認」と表示した）。また組成の集計についても、資料数が膨大であり、詳細な同定未了の資料も残っているため、ここでは同定標本数（NISP）による組成のみを第101表～第102表に示し、最小個体数（MNI）の集計は見送った。

(1) 脊椎動物遺体の出土数と層位的・空間的分布傾向

同定対象となった資料の総数（NISP）はB遺跡452点、C遺跡1603点、合計2055点である（第101表～第102表）。このうちB遺跡III層（IIIa～IIIe層を含む）が390点、C遺跡V層（貝層II～V群）が834点、C遺跡V層（「後期層」）が548点と大多数を占めており、また平面分布としては、III層（グスク時代）はB遺跡、V層（貝塚時代後期）はC遺跡に集中している。これら以外の層準

では、いずれも 25 点以下とごく少ない。

地区・層位別の詳細な出土傾向をみると（第 101 表～第 102 表、第 186 図）、B 遺跡Ⅲ層では、A4 区が 225 点と突出して多く、B4 区が 85 点でこれに次ぐ。とくに A4 区では S8～S10 グリッド、B4 区では B8 グリッドを中心とした集中が認められる。C 遺跡Ⅴ層では、貝層Ⅲ群が 750 点と圧倒的に多く、とくに 5 層が 387 点と突出しており、2 層が 192 点でこれに次ぐ。C 遺跡「後期層」では、A～C/12～16 グリッドが 293 点と突出して多く、D～F/12～16 グリッドが 122 点でこれに次ぐ。このように、今回の調査で得られた遺体群は、層位的・平面的な分布の偏在性が著しい点の特徴である。

(2) 脊椎動物遺体の内容

遺体群の内容は、主要な遺体産出層準である B 遺跡Ⅲ層（グスク時代）、C 遺跡Ⅴ層（貝塚時代後期）の貝層Ⅱ～Ⅲ群と「後期層」でそれぞれ大きく異なるため、以下ではこれらに分けて、年代順に遺体群の詳細を記載する。

平安山原 C 遺跡Ⅴ層貝層Ⅱ・Ⅲ群

脊椎動物遺体の概要：脊椎動物遺体全体の組成（第 102 表、第 187 図）をみると、資料の大多数を占める貝層Ⅱ群と貝層Ⅲ群では魚類とイノシシ/ブタが大半を占めており、NISP 比では魚類が主体で、イノシシ/ブタがこれに次ぎ、他にウミガメ類（剣状腹板でアオウミガメが同定された）、ジュゴン、リクガメ類（リュウキュウヤマガメと思われる）も普通である。貝層Ⅱ群と貝層Ⅲ群を比較すると、貝層Ⅱ群では魚類の比率が特に高く、貝層Ⅲ群ではウミガメ類とジュゴンがやや多い点で特徴的である。また貝層Ⅲ群では、少数ではあるがイルカがみられる点も特徴である。その他に、オオコウモリ科、イヌ、ウシ、ウマも確認されているが、いずれも少数であり、ウシ・ウマは上層からの混入である可能性が高い。鳥類は確認されなかった。

魚類：ハリセンボン科、フエフキダイ科、ブダイ科を主体として、クロダイ属、ベラ科も普通にみられる（第 102 表、第 188 図）。ハタ科がやや多い点も特徴である。その他にアジ科、フグ科など多くの種類が確認されているが、いずれも少数である。フエフキダイ科の前上顎骨の大半はハマフエフキに類するタイプ（ハマフエフキ型）であった。ブダイ科の咽頭骨・前上顎骨・歯骨にはアオブダイ属とイロブダイ属がみられ、前者が圧倒的に多い。ベラ科の咽頭骨はベラ科 A とシロクラベラ型が大半を占める。

イノシシ/ブタ：現生リュウキュウイノシシに類する小型のイノシシである。詳細な形質学的検討を行っていないため「イノシシ/ブタ」としたが、おそらく野生のイノシシとみて問題ないかと思われる。

特筆されるのは出土部位が頭部骨格にほぼ限られている点で（第 102 表、第 187 図）、NISP 総数 256 点のうち 253 点を頭骨・顎骨・遊離歯が占める。また貝層Ⅲ群 5 層 S14 グリッドでは保存のよい頭蓋骨（鼻骨・上顎骨～後頭骨・骨番号 1502）、T15・A16 グリッドでも頭蓋骨前半部（鼻骨・上顎骨・前頭骨・それぞれ骨番号 3691、4364）が出土している（第 100 表）。S14 グリッドでは他にも同一個体の左右切歯骨や左右下顎骨（ただし骨番号 1502 の頭蓋骨と同一個体かは未確認）が得られており、また複数個体の頭蓋骨がまとまって採集されている例（台帳番号 12723）もみられる。

年齢構成については詳細な検討が未了だが、顎骨に基づく概要では、乳歯を伴う個体（約 1.5 歳以下）と永久歯への交換を完了した個体の MNI 比は 11:17 で幼獣が少なくないが、M3 萌出中（約 2.5～3.5 歳）が 6 個体、M3 が萌出完了した個体（約 3.5 歳以上）も 11 個体と多く、幼獣から成獣まで幅広い年齢の個体が混在している。性比を下顎犬歯数（顎骨に植立しているもの+遊離歯）に

もとづく最小個体数でみると、雄12：雌4で、雄が優勢である。解体痕については、明確なもの
は確認されていない。

ジュゴン：貝層Ⅲ群5層A16グリッドから下顎骨を除く頭蓋骨各部位（前頭骨～後頭骨・頬骨・
頭蓋底・切歯骨～上顎骨）がまとまって採集されており（第100表）、同一個体と考えられる。こ
のグリッドからは他にジュゴンは採集されていないことから、頭蓋骨のみが単独で存在していたと
考えられ、意図的に安置または埋納された可能性も考えられる。なお貝層Ⅱ～Ⅲ群全体では、他に
肩甲骨と上腕骨各1点、四肢骨破片2点および多数の肋骨破片が得られている。

平安山原C遺跡V層「後期層」

V層として位置づけられている資料群だが、貝層Ⅱ～Ⅲ群とは組成が大きく異なる。すなわち、
魚類とイノシシ／ブタに加え、ウシ・ウマ・ジュゴンが多く、イヌもやや多い（第102表、第187
図）。貝層Ⅱ～Ⅲ群および後述するB遺跡Ⅲ層と比較すると、イノシシ／ブタが頭部骨格に限られ
る点や、魚類の比率がやや高く、リクガメが混じる点では貝層Ⅱ～Ⅲ群、ウシ・ウマが多数含まれ、
イヌもやや多い点ではB遺跡Ⅲ層と共通しており、両者の中間的様相ととらえられる。また、B16
グリッドから明らかにブタと判断される資料（下顎骨の下顎角～関節突起破片）が1点確認されて
おり、同グリッドの上層（「グスク層」）からもブタの頭蓋骨（頭頂骨～後頭骨）1点確認されて
いる。これらのことから、「後期層」の遺体群には、おそらく上層（グスク時代以降）の資料が多
数混在しているのではないかと推測される。ただし魚類については、ハタ科がみられない点を除け
ば、V層貝層Ⅱ～Ⅲ群と大差は認められない（第102表、第188図）。

なお、B～C列の14～16グリッドではウシ・ウマの顎骨や歯が多産する傾向にあり、またしばし
ば保存のよい下顎骨も出土していることから、以下に述べる「グスク層」のウシ・ウマの産状と何
らかの関連がある可能性も考慮する必要がある。そのほか、E11グリッドではジュゴン若獣の右肩
甲骨3点がまとまって採集されており、特殊な取り扱いをなされたものの可能性がある。

平安山原C遺跡「グスク層」におけるウシ・ウマの特殊な産状

C遺跡「グスク層」からの出土遺体はNISP総数で20点と少ないが、B16グリッドにおいてウシ・
ウマ遺体の特殊な産状が確認されたので以下に記載する（第100表）。

B16グリッドではウマ10点、ウシ3点が採集されており、ウマは完存の下顎骨3点（同一個体と
考えられる左右下顎骨および別個体の右下顎骨）、ウシは別個体と考えられる左右下顎骨各1点（左
は完存、右は下顎枝を欠損）が含まれる。これらの下顎骨はすべて幼獣で、ウマはM1未萌出とM1
萌出中が各1個体、ウシはM1萌出中（M2未萌出）とM2萌出中（M3未萌出）が各1個体である。こ
のほかにウマは右距骨・踵骨と手／足根骨各1点、基節骨3点、ウシは左寛骨1点が得られている。
またウマのすべての下顎骨と基節骨にはカットマークが確認されている。詳細な出土状況の確認が
未了ではあるが、上記のようなきわめて特殊な内容からみて、これらの遺体群は通常の廃棄行為で
はなく、何らかの特殊な取り扱いを受けたものである可能性が高い。

なお、B16グリッドでは「後期層」からもウマの遊離歯9点（乳臼歯4点を含む）と中手／中足
骨1点、ウシ幼獣の左上顎骨（M1萌出中）が採集されており、上記のウシ・ウマと同一個体の資料
が含まれている可能性がある。またB16グリッドでは、先述の通り「グスク層」から明らかなブタ
頭骨（頭頂骨～後頭骨）、「後期層」からもブタ下顎骨（下顎角～筋突起）が採集されている。明ら
かにブタと判断できる遺体は他に確認されていないことから、これらも上記のウシ・ウマ遺体群と
関連する可能性がある。

平安山原 B 遺跡Ⅲ層

脊椎動物遺体の概要：脊椎動物遺体全体の組成（第 101 表、第 187 図）をみると、NISP 比ではイノシシ／ブタが主体をなし、魚類、ウシ、ウマ、ジュゴン、イヌがこれに次ぐ。ウミガメ類も普通である。リクガメ類・鳥類は確認されなかった。B 遺跡「耕作域」における層位変化（第 187 図）をみると、ウシ・ウマはⅢc～Ⅲe 層ではごく少ないが、Ⅲa～Ⅲb 層で増加する。

C 遺跡Ⅴ層貝層Ⅱ～Ⅲ群と比較すると、魚類が大幅に減少し、イノシシ／ブタ、ウシ、ウマ、イヌが増加する。リクガメ類が消滅するのも特徴である。なお、B 遺跡Ⅱ層（近世～近代）では魚類の減少とウシの増加がいつそう明確となる。

魚類：ハリセンボン科が最も多く、フエフキダイ科、ブダイ科がこれに次ぎ、ベラ科、クロダイ属も普通である（第 101 表、第 188 図）。他にフグ科とウツボ科がわずかにみられた。C 遺跡と比較しても、ハタ科がみられない点を除けば大きな変化は認められない。フエフキダイ科の前上顎骨 2 点はいずれもハマフエフキ型、ブダイ科の咽頭骨・前上顎骨・歯骨 11 点はすべてアオブダイ属、ベラ科の咽頭骨はシロクラベラ型 2 点、ベラ科 A が 1 点であった。

イヌ：散乱状態で検出されており、埋葬など特殊な産状を示唆する例は確認されていない。下顎骨と遊離歯が多いが、四肢骨もみられる（第 99 表）。

イノシシ／ブタ：Ⅲ層のイノシシ／ブタには、年代的にみてブタが含まれる可能性は十分に考えられるが、形態的にはいずれも野生種との判別は難しく、明確な家畜化（ブタ化）の特徴を示すものは確認されていない。年齢構成をみても、顎骨に基づく概要では、乳歯を伴う個体（約 1.5 歳以下）と永久歯への交換を完了した個体の MNI 比は 4:10 で、後者のうち M3 が萌出完了した個体（約 3.5 歳以上）が 9 個体を占めており、グスク時代以降の遺跡（たとえば今回の調査区の北西側に連なる平安山原 A 遺跡Ⅱ層、樋泉 2016）において飼育の証拠としてしばしば指摘される若齢個体（約 1.5 歳前後）への偏りは認められない（第 99 表）。部位組成については詳細な検討を行っていないが、NISP でみると、頭蓋骨と上顎骨・遊離歯が 25 点、下顎骨・遊離歯が 54 点、前肢骨が 80 点、後肢骨が 57 点で、全身の骨格が出土しており、著しい偏りは認められない（第 101 表、第 187 図）。性比を下顎犬歯数（顎骨に植立しているもの+遊離歯）にもとづく最小個体数でみると、雄 6:雌 3 で、雄が優勢である。解体痕については、上腕骨と脛骨各 4 点および橈骨 1 点にスパイラル・フラクチャーが確認された。

ウシ：下顎骨・遊離歯と四肢骨が出土している（第 99 表）。部位の偏りはとくに認められない。いずれも散乱状態で検出されており、特殊な産状を示唆する例は確認されていない。上腕骨・脛骨・中手骨・中足骨各 1 点にスパイラル・フラクチャーが確認された。

ウマ：出土資料 15 点中 13 点を遊離歯が占める（第 99 表）。とくに B8 グリッドでは切歯・臼歯 7 点が出土しているが、同一個体のものかは不明である。

ジュゴン：頭骨破片 4 点、椎骨破片 5 点、肋骨破片 19 点が採集されている（第 99 表）。いずれも散乱状態で検出されており、特殊な産状を示唆する例は認められない。解体痕・加工痕は確認されなかった。

3. 考察—平安山原 B 遺跡（HB ①・②・④地区）との比較

今回報告した調査区の北東側に隣接する平安山原 B 遺跡 HB ①・②・④地区でも貝塚時代後期前半のまとまった資料が得られている（樋泉 2015）。最後に、両調査区の貝塚時代後期の遺体群について予察的に比較検討する。両調査区の層序・年代の厳密な対比は難しいが、ここでは暫定的に、

B遺跡 HB ①・②・④地区のV層が今回のC遺跡V層におおむね並行するものにとらえておく。

今回はMNIが未算出なのでNISP比で比較すると、両調査区とも魚類とイノシシ/ブタを主体とする基本的パターンは共通しているが、今回の調査区では魚類の比率ははるかに高い。また今回の調査区ではリクガメ類・ウミガメ類・ジュゴンが多いのも特徴である。イノシシ/ブタの部位組成については、B遺跡 HB ①・②・④地区では顎骨・歯と四肢骨がいずれも多産しているのに対して、今回の調査区ではほぼ顎骨・歯に限られる点できわめて特異的である。魚類の組成も、HB ①・②・④地区に比べて今回の調査区ではフエフキダイ科が少なく、ハリセンボン科が多い点など、相違が大きい。このように、隣接した地区であるにも関わらず、遺体群の内容には顕著な差が認められた。

いっぽうジュゴンに関しては、B遺跡 HB ①・②・④地区では頭骨1点が出土したのみであり、特殊な性格を持つものである可能性が想定される。このことからみて、今回調査区の貝層Ⅲ群5層A16グリッドで単独出土した頭骨についても類似の性格のものである可能性が考えられる。

謝辞：分析作業に際しては、島袋春美氏・山城安生氏・東門研治氏・松原哲志氏ほか北谷町教育委員会の皆様より多大なるご教示・ご協力を賜った。黒住耐二氏（千葉中央博物館）には多くのご教示を賜った。記して厚く御礼申し上げる。

<参考文献>

- ・樋泉岳二（2007）「伊礼原遺跡から出土した脊椎動物遺体群」、『伊礼原遺跡－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業－』（北谷町教育委員会編），沖縄県北谷町教育委員会，pp480-534.
- ・樋泉岳二（2015）「平安山原B遺跡から採集された脊椎動物遺体」『平安山原B遺跡－桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成20・21・23年度）』（島袋春美編），沖縄県北谷町教育委員会，pp. 361-387.
- ・樋泉岳二（2016）「平安山原A遺跡から採集された脊椎動物遺体の概要」『平安山原A遺跡－桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成19・21・22・23年度）』（島袋春美編），沖縄県北谷町教育委員会，pp. 396-407.

第98表 平安山原B遺跡(HB③地区)・C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の種名一覧

軟骨魚綱	CHONDRICHTHYES	爬虫綱	REPTILIA
サメ類	Lamniformes?	アオウミガメ	<i>Chelonia mydas</i>
エイ目	Rajiformes	リュウキュウヤマガメ?	<i>Geoemyda spengleri japonica</i> ?
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES	哺乳綱	MAMMALIA
ウツボ科	Muraenidae	オオコウモリ科	Pteropodidae
ハタ科(マハタ型)	Serranidae cf. <i>Epinephelus</i>	ネズミ科	Muridae
ハタ科(スジアラ型)	Serranidae cf. <i>Plectropomus</i>	イヌ	<i>Canis familiaris</i>
アジ科	Carangidae	シカ科	Cervidae
フエダイ科	Lutjanidae	イノシシまたはブタ	<i>Sus scrofa</i>
クロダイ属	<i>Acanthopagrus</i> sp.	ウシ	<i>Bos taurus</i>
ヨロシマクロダイ	<i>Monotaxis grandoculis</i>	ウマ	<i>Equus feres</i>
フエフキダイ属(ハマフエフキ型)	<i>Lethrinus</i> cf. <i>L. nebulosus</i>	ジュゴン	<i>Dugong dugon</i>
キツネフエフキ	<i>Lethrinus miniatus</i>	イルカ類	Cetacea (small)
ベラ科(シロクラベラ型)	Labridae cf. <i>Cherodon shoeneinii</i>	クジラ類	Cetacea (large)
ベラ科(タキベラ型)	Labridae cf. " <i>Bodianus perditio</i> "		
ベラ科A	Labridae A		
ベラ科B	Labridae B		
イロブダイ属	<i>Balbometopon</i> sp.		
アオブダイ属	<i>Scarus</i> sp.		
コチ科	Platycephalidae		
モンガラカワハギ科	Balistidae		
フグ科	Tetraodontidae		
ハリセンボン科	Diodontidae		

第99表-1 平安山原B遺跡(HB③地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

*1 残存位置凡例: w完存, p近位端, d遠位端, fr破片, (p)・(d)は未癒合の骨端のみ, (p-)・(d-)は骨端未癒合脱落, <p>・<d>は骨端のみ欠損。

顎骨については, [] :顎骨残存範囲, () :萌出中の歯, <> :未萌出歯, × :脱落。

*2 <>を付けて示した資料(カメ類・ジュゴンの詳細部位不明の破片)はNISP算定対象外。

遺跡	層準	層準(細別)	区	グリッド	遺構	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置 *1	左右	数 *2	備考
HB③	I	I	A3	R15		79	368	未同定	未確認			1	
HB③	I	I	A3	R15		79	367	未同定	未確認			1	
HB③	I	I	A4	R8		1538	421	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	I	I	A4	R8		1538	224	イノシシ/ブタ	脛骨	m	R	1	
HB③	I	I	B3	A14		62	314	イノシシ/ブタ?	肋骨	fr		1	
HB③	I	I	B3・4	A20-1		445	354	ウミガメ	肋骨板			1	
HB③	I	I	B3・4	A20-1		445	346	ウミガメ	背甲板	fr		<1>	加工品?
HB③	I	I	B4	B2		38	54	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	I	I	B4	B7		34	55	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	I	I	B4	E6		206	342	ウシ	踵骨		R	1	
HB③	I	I	B4	EF2-4		72	327	ウシ	基節骨			1	
HB③	I	I	B4	B8		42	474	ウマ	上顎遊離歯	dm2/dm3?	R	2	
HB③	I	I	B4	B7		34	398	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか
HB③	IIa	IIa	A3	S14	祝殿小-SL05	237	312	イノシシ/ブタ	肋骨	fr		1	
HB③	IIb	IIb	B3	A14	SK18	345	455	ウシ	上顎遊離歯	P3	R	1	
HB③	IIb	IIb	B3	B6		12	379	ウマ	基節骨			1	
HB③	IIb	IIb	B4	B7		5	64	イノシシ/ブタ	下顎骨	[CP2×P3×P4M1M2M3]	L	1	♂
HB③	IIb	IIb	B4	B7		6	147	イノシシ/ブタ	上腕骨	d	R	1	
HB③	IIb	IIb上	B4	EF4		262	339	ウシ	中手骨	m-<d->		1	幼獣
HB③	IIb	IIb	B4	A9		3	392	ウマ	上腕骨	d	L	1	
HB③	IIb	IIb	B4	A8		2	362	ウシ/ウマ	肋骨	p		1	
HB③	IIb	IIb	B4	C5		15	284	未同定	未確認			1	
HB③	IIc	IIc	B4	BC5-6	SK32	584	28	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	
HB③	IIc	IIc	B4	C5-6	SK32	1031	15	アオブダイ属	歯骨		L	1	
HB③	IIc	IIc	B4	C5-6	SK32	1031	101	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HB③	IIc	IIc	B4	BC5-6	SK32	1030	149	イノシシ/ブタ	上腕骨	<d->	R	1	
HB③	IIc	IIc	B4	C5	SK32	1462	278	イノシシ/ブタ	寛骨(座骨)	臼	R	1	
HB③	IIc	IIc	B4	C5-6	SK32	1031	272	イノシシ/ブタ?	上腕骨	<d->	L	1	幼獣
HB③	IIc	IIc	B4	C5-6	SK32	579	369	ウシ	距骨		L	1	
HB③	IIc	IIc	B4	BC5-6	SK32	1030	326	ウシ	基節骨			1	
HB③	IIc	IIc	B4	C5-6	SK32	1031	378	ウマ	基節骨			1	
HB③	IIc	IIc	B4	C5-6	SK32	579	447	ジュゴン	肋骨	fr		1	
HB③	IIc	IIc	B4	D3	石列1群	1032	358	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	IIc	IIc	B4	C2	石列1群	477	302	イヌ	下顎骨	[M1×M2M3×]	R	1	
HB③	IIc	IIc	B4	C5-7	石列1群	7	155	イノシシ/ブタ	上腕骨	d	L	1	
HB③	IIc	IIc	B4	D5	石列1群	491	197	イノシシ/ブタ	大腿骨	<d->	L	1	
HB③	IIc	IIc	B4	C5-7	石列1群	7	470	ウシ	下顎遊離歯	M1	R	1	
HB③	IIc	IIc	B4	C5-7	石列1群	7	471	ウシ	下顎遊離歯	M2	L	1	
HB③	IIc	IIc	B4	C5-7	石列1群	7	388	ウマ	下顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか
HB③	IIIa	IIIa	A3	S18		1271	87	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M3	R	1	
HB③	IIIa	IIIa(4)	A3	Q18		1263	254	イノシシ/ブタ	肩甲骨	d	R	1	
HB③	IIIa	IIIa	A3	Q20		542	225	イノシシ/ブタ	脛骨	m		1	スパイラルフラクチャー
HB③	IIIa	IIIa	A3	Q17		78	345	ウマ	中手骨	p	L	1	
HB③	IIIa	IIIa	A4	S9		879	16	フェエキダイ科	歯骨		L	1	
HB③	IIIa	IIIa	A4	R9		922	258	イノシシ/ブタ	脛骨	m	L	1	
HB③	IIIa	IIIa上	A4	Q3		30	469	ウシ	下顎遊離歯	M1	R	1	
HB③	IIIa	IIIa上	A4	T7		12	409	ウシ/ウマ	椎骨	椎体		1	
HB③	IIIa	IIIa上	A4	T7		12	380	ウシ/ウマ	椎骨	椎体		1	
HB③	IIIa	IIIa	A4	S6		336	366	哺乳類	橈骨	m	L	1	
HB③	IIIa	IIIa	B4	-		200	18	フェエキダイ科	歯骨		R	1	
HB③	IIIa	IIIa上	B4	B8		25	27	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HB③	IIIa	IIIa上	B4	B8		29	289	イヌ	下顎遊離歯	M1	L	1	
HB③	IIIa	IIIa	B4	B2-1		270	274	イヌ?	上腕骨	m		1	加工品
HB③	IIIa	IIIa	B4	E5		169	68	イノシシ/ブタ	上顎骨	[M1M2]	L	1	
HB③	IIIa	IIIa上	B4	B8		29	111	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HB③	IIIa	IIIa上	B4	B7		14	309	イノシシ/ブタ	第4中手骨	p	R	1	
HB③	IIIa	IIIa	B4	A3		214	313	イノシシ/ブタ	肋骨	fr		1	
HB③	IIIa	IIIa	B4	E6		235	400	ウシ	下顎遊離歯	切歯	R	1	
HB③	IIIa	IIIa上	B4	B8		29	405	ウシ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	
HB③	IIIa	IIIa上	B4	B8		24	404	ウシ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	
HB③	IIIa	IIIa上	B4	BC8-9		22	389	ウマ	下顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか
HB③	IIIa	IIIa上	B4	B8		29	395	ウマ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HB③	IIIa	IIIa上	B4	B8		29	386	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HB③	IIIa	IIIa上	B4	B8		24	410	ウシ/ウマ	椎骨	椎体		1	
HB③	IIIb	IIIb(5)	A3	R19		1079	33	フェエキダイ科	椎骨			1	
HB③	IIIb	IIIb(5)	A3	R18		968	169	イノシシ/ブタ	上腕骨	<d->	R	1	スパイラルフラクチャー
HB③	IIIb	IIIb(5)	A4	T10		133	37	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	IIIb	IIIb(5)	A4	T8		1421	36	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	IIIb	IIIb下	A4	T8	SD04	753	394	イノシシ/ブタ	切歯骨	[H12I3×]	L	1	
HB③	IIIb	IIIb(5)	A4	T8		1421	95	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HB③	IIIb	IIIb(5)	A4	S7-8		384	121	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	L	1	
HB③	IIIb	IIIb(5)	A4	S9		139	462	イノシシ/ブタ	寛骨(腸骨)	臼	R	1	
HB③	IIIb	IIIb(5)	A4	T8		1422	402	ウシ	下顎遊離歯	dm4	L	1	
HB③	IIIb	IIIb(5)	A4	T8		196	464	ジュゴン	頭骨	fr		1	
HB③	IIIb	IIIb(5)	A4	T9		332	477	ジュゴン	頭骨	fr		1	
HB③	IIIb	IIIb(5)	B4	B6		573	58	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	IIIb	IIIb(5)	B4	B6		573	42	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	IIIb	IIIb(5)	B4	A7		366	427	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	IIIb	IIIb(5)	B4	A8		1583	107	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HB③	IIIb	IIIb(5)	B4	B7		55	230	イノシシ/ブタ	尺骨	m		1	

第99表-2 平安山原B遺跡(HB③地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

*1 残存位置凡例: w完存, p近位端, m骨幹, d遠位端, fr破片, (p)・(d)は未癒合の骨端のみ, (p)・(d)は骨端未癒合脱落, <p>・<d>は骨端のみ欠損

顎骨については, []:顎骨残存範囲, (): 萌出中の歯, <>: 未萌出歯, ×: 脱落

*2 <>を付けて示した資料(カメ類・ジュゴンの詳細部位不明の破片)はNISP算定対象外

遺跡	層準	層準(細別)	区	グリッド	遺構	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置 *1	左右	数 *2	備考
HB③	IIIb	IIIb(5)	B4	B6		573	191	イノシシ/ブタ	大腿骨	m		1	
HB③	IIIb	IIIb(5)	B4	C7		167	319	イノシシ/ブタ?	肋骨	fr		1	焼
HB③	IIIb	IIIb(5)	B4	B6		573	338	ウシ	中手骨	p-<d->	R	1	
HB③	IIIb	IIIb(5)	B4	B7		61	397	ウマ	下顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか
HB③	IIIb	IIIb(5)	B4	B7		55	463	ウシ/ウマ	頸椎			1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A3	S18		598	13	フェウキダイ科	角骨		L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A3	S14		1448	41	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A3	Q15		531	236	イノシシ/ブタ	尺骨	m		1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A3	Q18		1264	453	ジュゴン?	不明	fr		<1>	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	R9		1042	19	ハマフェウキ型	前上顎骨		L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S8		675	6	シロクラベラ型	下咽頭骨			1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	R9		1042	32	フグ科	前上顎/歯骨			1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	R6		1049	51	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	R9		1042	47	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	R9		1051	57	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	T6		1025	49	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	T7		1028	45	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S10		708	407	ウミガメ	上腕骨		R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	R7		725	391	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	R9		1042	355	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S10		1043	425	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S8		630	124	イノシシ/ブタ	上顎骨	[P4×M1M2]	L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S8		675	92	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P4×M1]	L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	T8		1029	99	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S6		1037	296	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♀
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	Q-T10		467	96	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	T8		1029	108	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HB③	IIIc	IIIc上	A4	Q7		1048	291	イノシシ/ブタ	肩甲骨	<d->	L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S6		1037	170	イノシシ/ブタ	上腕骨	<d->	R	1	スパイラルフラクチャー
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S8		675	152	イノシシ/ブタ	上腕骨	d	L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S8		675	182	イノシシ/ブタ	橈骨	p	L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S8		747	173	イノシシ/ブタ	橈骨	p-m	L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	Q-T10		464	159	イノシシ/ブタ	橈骨	m	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S10		627	239	イノシシ/ブタ	尺骨	p	L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S9		394	246	イノシシ/ブタ	尺骨	p	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S8		747	192	イノシシ/ブタ	尺骨	p-m	L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	Q-T10		464	234	イノシシ/ブタ	尺骨	m		1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S6		668	288	イノシシ/ブタ	寛骨(腸骨)	臼	L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	T8		758	281	イノシシ/ブタ	寛骨(腸骨)	臼	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	T8		1029	279	イノシシ/ブタ	寛骨(座骨)	臼	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S8		634	188	イノシシ/ブタ	脛骨	p	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	Q-T10		464	247	イノシシ/ブタ	脛骨	(p-)	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S7		729	221	イノシシ/ブタ	脛骨	m	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	T6		472	219	イノシシ/ブタ	脛骨	m	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S5		1543	209	イノシシ/ブタ	脛骨	m-(d-)	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	R6		1049	259	イノシシ/ブタ	脛骨	m-d	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S6		1037	206	イノシシ/ブタ	脛骨	d	L	1	焼
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	R5		722	261	イノシシ/ブタ	脛骨	d	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S8		634	403	ウシ	下顎遊離歯	dm4	L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	S5		468	340	ウシ	中手骨	d		1	スパイラルフラクチャー
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4			1124	344	ウシ	中手/中足骨	d		1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	T4		605	465	ジュゴン	頭骨	fr		1	
HB③	IIIc	IIIc上	A4	S6		438	443	ジュゴン	肋骨	fr		1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	T6		1025	418	ジュゴン	肋骨?	fr		1	焼
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	T8		631	417	ジュゴン	肋骨?	fr		1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	A4	T8		1029	452	ジュゴン?	不明	fr		<1>	
HB③	IIIc	IIIc(7)	B4	不明		402	7	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	B4	B8		626	424	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	IIIc	IIIc(7)	B4	B8		626	360	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	IIIc	IIIc(7)	B4	B7		799	131	イノシシ/ブタ	頭頂骨		R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	B4	C7		765	77	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M2M3]	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	B4	C7		764	78	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P2×P3P4×M1×M2]	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	B4	A7		635	109	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	B4	B7		739	255	イノシシ/ブタ	肩甲骨	d	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	B4	B7		733	167	イノシシ/ブタ	上腕骨	<p->	L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	B4	C7		829	406	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか
HB③	IIIc	IIIc(7)	B4	C8		867	377	ウシ/ウマ	肋骨	fr		1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	B4	C7		816	454	ジュゴン?	不明	fr		<1>	
HB③	IIIc	IIIc(7)	B4	B7		407	373	未同定	未確認			1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	-	-		566	11	フェウキダイ科	前上顎骨		L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	-	-		543	100	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	C	L	1	♂
HB③	IIIc	IIIc(7)	-	-		558	125	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	P4	L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	-	-		588	97	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HB③	IIIc	IIIc(7)	-	-		558	157	イノシシ/ブタ	上腕骨	d	L	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	-	-		566	307	イノシシ/ブタ	橈骨	p	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	-	-		558	200	イノシシ/ブタ	大腿骨	m-<d->	R	1	
HB③	IIIc	IIIc(7)	-	-		558	401	ウシ	下顎遊離歯	M3	L	1	
HB③	III d	III d(14)	A3	T15		1666	34	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	III d	III d(14)	A3	Q20		1301	352	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	III d	III d(14)	A3	T15		1666	332	イヌ	中手/中足骨	m		1	

第99表-3 平安山原B遺跡(HB③地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

*1 残存位置凡例: w完存, p近位端, m骨幹, d遠位端, fr破片, (p)・(d)は未癒合の骨端のみ, (p)・(d)は骨端未癒合脱落, <p>・<d>は骨端のみ欠損。

顎骨については, []:顎骨残存範囲, ():萌出中の歯, <>:未萌出歯, ×:脱落。

*2 <>を付けて示した資料(カメ類・ジュゴンの詳細部位不明の破片)はNISP算定対象外。

遺跡	層準	層準(細別)	区	グリッド	遺構	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置 *1	左右	数 *2	備考
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A3	T15		1599	275	イヌ?	大腿骨	m		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A3	T15		1599	72	イノシシ/ブタ	頭頂骨		L+R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A3	T15		1599	127	イノシシ/ブタ	上顎骨	[dm3dm4M1]	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A3	T15		1599	74	イノシシ/ブタ	上顎骨	[M2M3]	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A3	T16		1505	123	イノシシ/ブタ	上顎骨	[CP2P3P4]	R	1	♀
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A3	T15		1599	183	イノシシ/ブタ	橈骨	p-m	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A3	T15		1599	232	イノシシ/ブタ	尺骨	m		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A3	Q17		1100	408	ジュゴン	椎骨			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R7		1625	3	クロダイ属	前上顎骨		L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1674	31	フェウキダイ属	口蓋骨		R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1320	2	シロクラベラ型	上咽頭骨		R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R4		2476	5	ペラ科A	下咽頭骨			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R4		2476	1	アオブダイ属	上咽頭骨		R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1241	4	アオブダイ属	上咽頭骨		R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1261	12	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1520	26	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		2112	25	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1217	30	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		1529	29	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1632	46	フグ科	前上顎/歯骨			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	Q7		1564	40	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		1192	48	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S7		1318	44	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1632	39	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1617	59	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1685	52	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T7		1829	61	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T7		1022	53	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		1153	62	真骨類(保留)	椎骨			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		2104	351	ウミガメ	緑甲板			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		2104	349	ウミガメ	緑甲板			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1680	350	ウミガメ	緑甲板			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T10		1708	348	ウミガメ	腹甲板	fr		<1>	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R10		1633	432	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R7		1571	359	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S7		1605	433	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1520	423	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		2090	422	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1320	426	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1688	431	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S7		1318	293	イヌ	下顎骨	fr		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T4		1611	323	イヌ	第4中手骨	p	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R10		1527	270	イヌ?	下顎骨	[P4×M1×]	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	Q8		1566	328	イノシシ/ブタ	側頭骨			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		1525	81	イノシシ/ブタ	上顎骨	[M2]	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T6		1349	138	イノシシ/ブタ	上顎骨	[P2×P3×]	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T6		1915	79	イノシシ/ブタ	上顎骨	[<P2><P3><P4>dm4M1M2]	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		2112	393	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	I2	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T7		1559	86	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	C	R	1	♂
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1217	126	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M1		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T6		1138	118	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M2	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1319	115	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M3	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		2113	67	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M3	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R10		1648	459	イノシシ/ブタ	下顎骨	関節突起	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		2101	75	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M1×<M2>×]	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		2113	93	イノシシ/ブタ	下顎骨	[dm3×dm4M1<M2>×]	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1784	140	イノシシ/ブタ	下顎骨	[dm4×M1×]	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		2113	66	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M2×M3×]	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	Q7		1621	69	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3]	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		1192	76	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×P2×P3×P4×M1×M2M3]	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S7		1318	139	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3×]	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		2107	65	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M2×M3]	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S7		1843	106	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1217	102	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I3	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1283	21	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♀
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R4		2476	119	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1674	90	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		1529	114	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)上	A4	S3		783	112	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T7		1221	113	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R9		1627	105	イノシシ/ブタ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		1194	104	イノシシ/ブタ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1689	103	イノシシ/ブタ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T7		1559	331	イノシシ/ブタ	腰椎			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T7		1559	300	イノシシ/ブタ	腰椎			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1319	467	イノシシ/ブタ	腰椎	椎体		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1802	210	イノシシ/ブタ	肩甲骨	<d->	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T8		1238	263	イノシシ/ブタ	肩甲骨	<d->	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	Q8		1566	252	イノシシ/ブタ	肩甲骨	d	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		1608	250	イノシシ/ブタ	肩甲骨	d	L	1	

第99表-4 平安山原B遺跡(HB③地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

*1 残存位置凡例: w完存, p近位端, m骨幹, d遠位端, fr破片, (p)-(d)は未癒合の骨端のみ, (p)-(d)は骨端未癒合脱落, <p>-<d>は骨端のみ欠損。

顎骨については、[]:顎骨残存範囲, ():萌出中の歯, <>:未萌出歯, ×:脱落。

*2 <>を付けて示した資料(カメ類・ジュゴンの詳細部位不明の破片)はNISP算定対象外。

遺跡	層準	層準(細別)	区	グリッド	遺構	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置 *1	左右	数 #2	備考
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1520	251	イノシシ/ブタ	肩甲骨	d	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R6		1935	193	イノシシ/ブタ	上腕骨	m		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		1191	195	イノシシ/ブタ	上腕骨	m		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R9		1540	151	イノシシ/ブタ	上腕骨	m-<d->	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		2099	143	イノシシ/ブタ	上腕骨	m-d	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S6		1348	148	イノシシ/ブタ	上腕骨	<d->	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S7		1561	154	イノシシ/ブタ	上腕骨	d	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1520	153	イノシシ/ブタ	上腕骨	d	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	Q2		2474	144	イノシシ/ブタ	上腕骨	d	R	1	スパイラルフラクチャー
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1607	146	イノシシ/ブタ	上腕骨	d	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1320	179	イノシシ/ブタ	橈骨	p	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1257	178	イノシシ/ブタ	橈骨	p	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T5		1549	181	イノシシ/ブタ	橈骨	p	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S4		1628	184	イノシシ/ブタ	橈骨	p-m	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S7		1561	175	イノシシ/ブタ	橈骨	<p->	L	1	スパイラルフラクチャー
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R10		1527	176	イノシシ/ブタ	橈骨	m	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T6		1138	161	イノシシ/ブタ	橈骨	<d->	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T7		1559	162	イノシシ/ブタ	橈骨	d	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1520	245	イノシシ/ブタ	尺骨	p	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1563	241	イノシシ/ブタ	尺骨	p	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T10		1708	242	イノシシ/ブタ	尺骨	p	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		1192	228	イノシシ/ブタ	尺骨	m		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T6		1138	231	イノシシ/ブタ	尺骨	m		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R8		1278	308	イノシシ/ブタ	第4中手骨	p	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S6		1180	290	イノシシ/ブタ	寛骨	臼	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		2082	287	イノシシ/ブタ	寛骨	臼	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T7		1209	280	イノシシ/ブタ	寛骨(腸骨)	臼	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		2113	450	イノシシ/ブタ	寛骨(座骨)	臼	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T7		1321	282	イノシシ/ブタ	寛骨(座骨)	臼	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R10		2085	277	イノシシ/ブタ	寛骨(座骨)	臼	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1563	164	イノシシ/ブタ	大腿骨	<p>-<d->	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		2112	190	イノシシ/ブタ	大腿骨	m		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R10		1527	201	イノシシ/ブタ	大腿骨	m-<d->	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T8		1238	163	イノシシ/ブタ	大腿骨	(d-)r	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T8		1183	449	イノシシ/ブタ	大腿骨	(d)fr		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S7		1561	187	イノシシ/ブタ	脛骨	(p-)m	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T5		1456	223	イノシシ/ブタ	脛骨	m	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R5		1616	249	イノシシ/ブタ	脛骨	m-d	R	1	焼
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1491	248	イノシシ/ブタ	脛骨	m-d	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R8		1278	208	イノシシ/ブタ	脛骨	d	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S7		1605	207	イノシシ/ブタ	脛骨	d	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S7		1575	297	イノシシ/ブタ	距骨		L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T8		1080	304	イノシシ/ブタ	距骨		L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R9		1540	457	イノシシ/ブタ	踵骨		L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1320	212	イノシシ/ブタ	踵骨		L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R8		1278	316	イノシシ/ブタ	中手/中足骨	d		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		2101	305	イノシシ/ブタ	基節骨			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		2113	335	イノシシ/ブタ	肋骨	fr		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T5		1613	83	イノシシ/ブタ	肋骨	fr		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S10		1529	333	イノシシ/ブタ?	胸椎	棘突起		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S7		1605	334	イノシシ/ブタ?	胸椎	棘突起		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R8		1626	298	イノシシ/ブタ?	椎骨	椎体		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S8		1520	276	イノシシ/ブタ?	大腿骨	m-<d->	R	1	幼獣
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		2113	336	イノシシ/ブタ?	肋骨	fr		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R6		1203	481	ジュゴン	頭骨	fr		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S6		1631	414	ジュゴン	椎骨	fr		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	R8		1278	441	ジュゴン	肋骨	fr		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S5		882	442	ジュゴン	肋骨	fr		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1607	439	ジュゴン	肋骨	fr		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1598	446	ジュゴン	肋骨	fr		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1661	445	ジュゴン	肋骨	fr		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1693	440	ジュゴン	肋骨	fr		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1692	420	ジュゴン	肋骨	fr		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T5		2119	444	ジュゴン	肋骨	fr		1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	T8		1244	415	イルカ	連合頸椎			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S6		1631	468	未同定	未確認			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	A4	S9		1607	472	未同定	未確認			1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	B3	B19		1247	357	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	B3	A19		1578	292	イヌ	下顎骨	[P4M1]	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	B3	A19		1428	301	イヌ	下顎遊離歯	M1	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	B3	A20		1293	268	イヌ?	脛骨	m	L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	B3	A19		1578	448	イノシシ/ブタ	下顎骨	関節突起	L	1	焼
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	B3	B19		1376	186	イノシシ/ブタ	橈骨	p-m	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	B3	B19		1388	243	イノシシ/ブタ	尺骨	p	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	B3	A19		1578	217	イノシシ/ブタ	脛骨	m	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	B4	A2		1580	475	イヌ	上腕骨	<p->	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	B4	B5		2048	168	イノシシ/ブタ	上腕骨	m-<d->	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	B4	A1		1433	185	イノシシ/ブタ	橈骨	p-m	R	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	B4	A1		1185	214	イノシシ/ブタ	踵骨		L	1	
HB③	Ⅲd	Ⅲd(14)	B4	A1		1185	322	未同定	未確認			1	

第99表-5 平安山原B遺跡(HB③地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

*1 残存位置凡例: w完存, p近位端, m骨幹, d遠位端, fr 破片, (p)-(d)は未癒合の骨端のみ, (p)-(d)は骨端未癒合脱落, <p>-<d>は骨端のみ欠損。

顎骨については, [] :顎骨残存範囲, () : 萌出中の歯, <> : 未萌出歯, × : 脱落。

*2 <>を付けて示した資料(カメ類・ジュゴンの詳細部位不明の破片)はNISP算定対象外。

遺跡	層準	層準(細別)	区	グリッド	遺構	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置 *1	左右	数 *2	備考
HB③	III d	III d (14)	-	R12		1102	94	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HB③	III e	III e (15)	A4	S5		2377	429	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	III e	III e (15)	A4	T4		2142	375	ウミガメ	未確認			1	
HB③	III e	III e (15)	A4	S3		1345	117	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M3	L	1	
HB③	III e	III e (15)	A4	S9		2510	73	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M2<M3>]	L	1	
HB③	III e	III e (15)	A4	T4		2130	466	イノシシ/ブタ	下顎骨	関節突起	L	1	
HB③	III e	III e (15)	A4	R8		2374	71	イノシシ/ブタ	下顎骨	[[P4]M1M2]	R	1	
HB③	III e	III e (15)	A4	T3		2149	98	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HB③	III e	III e (15)	A4	S7		2240	265	イノシシ/ブタ	肩甲骨	<d->	R	1	
HB③	III e	III e (15)	A4	S9		2194	135	イノシシ/ブタ	上腕骨	m-<d->	L	1	
HB③	III e	III e (15)	A4	T2		2153	142	イノシシ/ブタ	上腕骨	d	L	1	
HB③	III e	III e (15)	A4	S14		2304	145	イノシシ/ブタ	上腕骨	d	R	1	
HB③	III e	III e (15)	A4	R6		2413	174	イノシシ/ブタ	橈骨	p-m	L	1	
HB③	III e	III e (15)	A4	R6		2413	226	イノシシ/ブタ	尺骨	p-m	L	1	
HB③	III e	III e (15)	A4	S7		2241	227	イノシシ/ブタ	尺骨	m		1	
HB③	III e	III e (15)	A4	T4		2130	269	イノシシ/ブタ	寛骨	臼	R	1	
HB③	III e	III e (15)	A4	S9		2510	91	イノシシ/ブタ	寛骨(座骨)	臼	R	1	
HB③	III e	III e (15)	A4	T1		2547	199	イノシシ/ブタ	大腿骨	m-<d->	R	1	
HB③	III e	III e (15)	A4	R7		2292	196	イノシシ/ブタ	大腿骨	<d->	L	1	
HB③	III e	III e (15)	B3	A17		2156	267	イヌ?	脛骨	m	L	1	
HB③	III e	III e (15)	B3	A18		2534	166	イノシシ/ブタ	上腕骨	<d->	R	1	
HB③	III e	III e (15)	B4	A2		2182	60	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	III	III (12)	A3	T15		2485	116	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M3	L	1	
HB③	III	III (12)	A4	T6		923	10	フェフキダイ科	前上顎骨		L	1	
HB③	III	III (12)	A4	S10		881	56	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	III	III (12)	A4	T8		854	38	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	III	III (12)	A4	S9		849	434	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	III	III (12)	A4	S7		1386	266	イノシシ/ブタ	肩甲骨	<d->	R	1	
HB③	III	III (12)	A4	T9		2002	141	イノシシ/ブタ	上腕骨	<p>-<d	L	1	
HB③	III	III (12)	A4	S9		880	171	イノシシ/ブタ	上腕骨	<d->	R	1	スパイラルフラクチャー
HB③	III	III (12)	A4	S8		1063	177	イノシシ/ブタ	橈骨	p	L	1	
HB③	III	III (12)	A4	R9		1041	160	イノシシ/ブタ	橈骨	m	R	1	
HB③	III	III (12)	A4	R9		1041	237	イノシシ/ブタ	尺骨	p	L	1	
HB③	III	III (12上)	A4	S10		786	238	イノシシ/ブタ	尺骨	p	L	1	
HB③	III	III (12)	A4	T7		1445	283	イノシシ/ブタ	寛骨(座骨)	臼	L	1	
HB③	III	III (12)	A4	S10		881	218	イノシシ/ブタ	脛骨	m	R	1	
HB③	III	III (12)	A4	R10		1314	203	イノシシ/ブタ	脛骨	d	L	1	スパイラルフラクチャー
HB③	III	III (12)	A4	T9		1065	204	イノシシ/ブタ	脛骨	d	L	1	スパイラルフラクチャー
HB③	III	III (12)	A4	S9		849	273	イノシシ/ブタ?	上腕骨	m-<d->	L	1	幼獣
HB③	III	III (12上)	A4	S1		777	343	ウシ	中足骨	m-<d->	R	1	スパイラルフラクチャー
HB③	III	III (12)	A4	R9		1041	412	ジュゴン	椎骨	fr		1	
HB③	III	III (12上)	A4	T9		793	411	ジュゴン	椎骨	fr		1	
HB③	III	III (12)	A4	T5		883	436	ジュゴン	肋骨	fr		1	
HB③	III	III (12)	A4	T9		609	419	ジュゴン	肋骨	fr		1	
HB③	III	III (12)	A4	S10		881	416	ジュゴン	肋骨?	fr		1	焼
HB③	III	III (12)	B4	C8		908	8	クロダイ属	前上顎骨		R	1	
HB③	III	III (8~11)	B4	C8		577	460	フェフキダイ属	口蓋骨		L	1	
HB③	III	III (12)	B4	B9		1059	14	フェフキダイ属	口蓋骨		R	1	
HB③	III	III (12)	B4	B9		940	43	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	III	III (8~11)	B4	D5		527	50	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	III	III (12)	B4	B9		1295	63	真骨類(同定不可)	椎骨			1	
HB③	III	III (12)	B4	B9		1295	24	真骨類(同定不可)	椎骨			1	
HB③	III	III (8~11)	B4	C8		488	330	ウミガメ	上腕骨			1	
HB③	III	III (12)	B4	A7		861	353	ウミガメ	肋骨板			1	
HB③	III	III (12)	B4	A7		861	428	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	III	III (12)	B4	B8		945	356	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	III	III (10・11)	B4	D4		700	430	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	III	III (12)	B4	C7		998	370	ウミガメ	未確認			1	
HB③	III	III (8~11)	B4	C8		577	294	イヌ	下顎骨	[I1×I2×I3×CP1×P2×P3×P4×M1M2×]	R	1	
HB③	III	III (10・11)	B4	E4		705	285	イヌ	下顎骨	[P4M1M2]	R	1	
HB③	III	III (10・11)	B4	D4		700	458	イヌ	下顎骨	関節突起		1	
HB③	III	III (10)	B4	D5		2061	295	イヌ	下顎遊離歯	C	L	1	
HB③	III	III (12)	B4	C5		951	320	イヌ	下顎遊離歯	M1	L	1	
HB③	III	III (13)	B4	D4		1957	461	イヌ	環椎			1	
HB③	III	III (12)	B4	B8		903	271	イヌ?	脛骨	m	R	1	
HB③	III	III (13)	B4	E4		1969	85	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	C	R	1	♂
HB③	III	III (12)	B4	B9		1295	88	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M3	R	1	
HB③	III	III (12)	B4	A6		1067	80	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P2P3]	L	1	
HB③	III	III (12)	B4	B8		939	129	イノシシ/ブタ	下顎骨	[I1×I2×I3×CP2P3P4M1M2M3]	L	1	♀
HB③	III	III (12上)	B4	B8		1588	137	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3×]	L	1	
HB③	III	III (13)	B4	C4		2095	128	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×P1×P2P3P4M1M2M3]	L	1	♂
HB③	III	III (8~11)	B4	C8		577	120	イノシシ/ブタ	下顎骨	[CP2×P3×]	L	1	♂
HB③	III	III (12)	B4	D2		1005	136	イノシシ/ブタ	下顎骨	[dm3×dm4×]	L	1	
HB③	III	III (8~11)	B4	E5		642	130	イノシシ/ブタ	下顎骨	[i1×i2×i3C×dm2×dm3dm4M1CM2]	L+R	1	
HB③	III	III	B4	B7	SK33	1088	70	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3]	R	1	
HB③	III	III (12)	B4	A7		861	133	イノシシ/ブタ	下顎骨	関節突起	R	1	
HB③	III	III (12)	B4	B8		939	129	イノシシ/ブタ	下顎骨	[I1I2×CP2×P3P4M1M2M3]	R	1	♀
HB③	III	III (13)	B4	C4		2095	128	イノシシ/ブタ	下顎骨	[CP1×P2P3P4M1M2M3×]	R	1	♂
HB③	III	III (12)	B4	C8		908	82	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M2M3]	R	1	異常
HB③	III	III (12)	B4	A3		857	84	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂

第99表-6 平安山原B遺跡(HB③地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

*1 残存位置凡例: w完存, o近位端, m骨幹, d遠位端, fr破片, (p)・(d)は未癒合の骨端のみ, (p-)・(d-)は骨端未癒合脱落, <p>・<d>は骨端のみ欠損

顎骨については, [] :顎骨残存範囲, () :萌出中の歯, <> :未萌出歯, × :脱落

*2 <>を付けて示した資料(カメ類・ジュゴンの詳細部位不明の破片)はNISF算定対象外

遺跡	層準	層準(細別)	区	グリッド	遺構	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置 *1	左右	数 *2	備考
HB③	Ⅲ	Ⅲ(8~11)	B4	C8		488	23	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HB③	Ⅲ	Ⅲ(13)	B4	D4		1999	22	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HB③	Ⅲ	Ⅲ(8~11)	B4	C8		577	89	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	L	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(8~11)	B4	C8		577	122	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	L	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(13)	B4	E4		1405	110	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(13)	B4	C5		1434	286	イノシシ/ブタ	肩甲骨	<d->	L	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(13)	B4	D4		2043	264	イノシシ/ブタ	肩甲骨	<d->	R	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(12)	B4	C4		906	194	イノシシ/ブタ	上腕骨	m		1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(11)	B4	D5		121	150	イノシシ/ブタ	上腕骨	<d->	R	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(12)	B4	C7		1000	158	イノシシ/ブタ	上腕骨	d	L	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(13)	B4	C7		1438	156	イノシシ/ブタ	上腕骨	d	L	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(12)	B4	C8		908	180	イノシシ/ブタ	橈骨	p	L	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(12)	B4	B5		895	172	イノシシ/ブタ	橈骨	p-m	L	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(12)	B4	A8		1069	165	イノシシ/ブタ	橈骨	m		1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(8~11)	B4	C7		523	240	イノシシ/ブタ	尺骨	p	L	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(12)	B4	B8		939	235	イノシシ/ブタ	尺骨	m		1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(9)	B4	C6		218	202	イノシシ/ブタ	脛骨	<p->m	R	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(12)	B4	A8		891	257	イノシシ/ブタ	脛骨	m	L	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(12)	B4	B8		939	256	イノシシ/ブタ	脛骨	m	L	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(12)	B4	B8		939	220	イノシシ/ブタ	脛骨	m	R	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(13)	B4	D4		1991	222	イノシシ/ブタ	脛骨	m	R	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(13)	B4	E4		1405	205	イノシシ/ブタ	脛骨	m-d	L	1	スパイラルフラクチャー
HB③	Ⅲ	Ⅲ(10~11)	B4	E4		705	303	イノシシ/ブタ	距骨		L	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(13)	B4	E4		1442	306	イノシシ/ブタ	第3中足骨	p	R	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(12)	B4	C5		951	321	イノシシ/ブタ?	脛骨	d	R?	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(9)	B4	C8		260	473	ウシ	下顎骨	[M1<M2>下顎枝]	L	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(12)	B4	C8		1001	456	ウシ	下顎骨	[P2×P3×M1×M2]	L	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(8~11)	B4	D5		527	399	ウシ	下顎遊離歯	切歯	L	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(12)	B4	B8		903	384	ウシ	肩甲骨	<d->	L	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(9)	B4	D5		203	324	ウシ	橈骨	p	R	1	スパイラルフラクチャー
HB③	Ⅲ	Ⅲ(10~11)	B4	E4		705	381	ウシ	手根骨			1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(10)	B4	E5		1467	325	ウシ	基節骨			1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(13)	B4	D5		2039	361	ウシ	中節骨			1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(8~11)	B4	D3-4		578	337	ウシ?	上腕骨	<d->	L	1	スパイラルフラクチャー
HB③	Ⅲ	Ⅲ(12)	B4	B7		897	390	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか
HB③	Ⅲ	Ⅲ(12)	B4	B8		939	364	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	R	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(8~11)	B4	C7		523	383	ウマ	下顎遊離歯	dm3	L	1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(8~11)	B4	C7		523	396	ウマ	下顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか
HB③	Ⅲ	Ⅲ(12)	B4	B8		903	501	ウマ	下顎遊離歯	臼歯	R	2	P3~M2のいずれか
HB③	Ⅲ	Ⅲ	B4	B8	SK34	1089	387	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ	B4	B8	SK34	1089	385	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(8~11)	B4	D5		640	371	ウマ	中節骨			1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(8~11)	B4	E5		642	363	ウシ/ウマ	頸椎			1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(8~11)	B4	D5		640	372	ウシ/ウマ	肋骨	fr		1	カットマーク
HB③	Ⅲ	Ⅲ(8~11)	B4	D5		640	376	ウシ/ウマ	肋骨	fr		1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(10~11)	B4	D5		701	329	ウシ/ウマ	肋骨	fr		1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(12)	B4	B9		994	413	ジュゴン	椎骨	fr		1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(9)	B4	C9		230	482	ジュゴン	肋骨			1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(8~11)	B4	C8		488	438	ジュゴン	肋骨	fr		1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(8~11)	B4	C8		577	437	ジュゴン	肋骨	fr		1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(13)	B4	D5		1995	483	ジュゴン	肋骨	fr		1	
HB③	Ⅲ	Ⅲ(9)	B4	D5		202	365	未同定	未確認			1	
HB③	Ⅳ	Ⅳ(18)上	A4	S8-9		1711	9	ウツボ科	歯骨		L	1	
HB③	Ⅳ	Ⅳ(18)上	A4	S10		1719	20	クロダイ属	歯骨		L	1	
HB③	Ⅳ	Ⅳ(18)上	A4	S10		1719	435	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HB③	Ⅳ	Ⅳ(18)	A4	S8-9		1718	132	イノシシ/ブタ	後頭骨	後頭顆	L	1	
HB③	Ⅳ	Ⅳ(18)	A4	S8-9		1718	134	イノシシ/ブタ	下顎骨	関節突起	R	1	
HB③	Ⅳ	Ⅳ(17)	A4	S9		1547	299	イノシシ/ブタ	腰椎			1	
HB③	Ⅳ	Ⅳ(18)	A4	S8-9		1718	233	イノシシ/ブタ	尺骨	m		1	
HB③	Ⅳ	Ⅳ(18)上	A4	R1		1369	189	イノシシ/ブタ	大腿骨	m		1	
HB③	Ⅳ	Ⅳ(17)	A4	R10		1526	198	イノシシ/ブタ	大腿骨	m-<d->	L	1	
HB③	Ⅳ	Ⅳ(18)上	A4	S7		1724	262	イノシシ/ブタ	脛骨	d	R	1	
HB③	Ⅳ	Ⅳ(17)	A4	S9		1547	260	イノシシ/ブタ	脛骨	d	R	1	
HB③	Ⅳ	Ⅳ(17)	A4	S9		1547	318	イノシシ/ブタ	腓骨	m		1	
HB③	Ⅳ	Ⅳ(17)	A4	R10		1526	213	イノシシ/ブタ	踵骨		L	1	
HB③	Ⅳ	Ⅳ(18)	A4	S8-9		1718	215	イノシシ/ブタ	踵骨		L	1	
HB③	Ⅳ	Ⅳ(18)	A4	S8-9		1718	211	イノシシ/ブタ	踵骨		L	1	
HB③	Ⅳ	Ⅳ(17)	A4	S9		1547	451	ジュゴン?	不明	fr		<1>	
HB③	V	V(19)	A3	E5		180	341	ウシ	距骨		L	1	
HB③	-	-	A4	Q10		1742	17	ハマフエフキ型	前上顎骨		L	1	
HB③	-	-	A4	Q-T10		503	35	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HB③	-	-	A4	Q-T10		503	216	イノシシ/ブタ	橈骨	p	R	1	
HB③	-	-	A4	Q-T10		503	244	イノシシ/ブタ	尺骨	p	R	1	
HB③	-	?	A4	T10		1035	229	イノシシ/ブタ	尺骨	m		1	

第100表-1 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照.

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考
HC	基本層II	-	-	B16	9300	2688	ハマフエフキ型	前上顎骨		R	1	
HC	基本層II	-	-	F16	12661	31	アオブダイ属	前上顎/歯骨			1	
HC	基本層II	-	-	K13	12667	1935	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	基本層II	-	-	T13	4160	2130	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	基本層II	-	-	J14	12663	1614	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	R	1	
HC	基本層II	-	-	D11	12658	2502	ウシ	下顎遊離歯	切歯	R	1	
HC	基本層II	-	-	I14	1195	1435	ウシ	中足骨	m		1	幼獣
HC	基本層II	-	-	J14	12665	980	ウシ/ウマ	頸椎			1	
HC	基本層II	-	-	H14	12662	2177	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	基本層II	-	-	H14	12662	2192	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	基本層II	-	-	J14	12665	2111	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	グスク層	-	-	B15	2890	1983	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	グスク層	-	-	B16	2988	1882	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	グスク層	-	-	B16	3347	165	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	グスク層	-	-	B16	3908	1363	イノシシ/ブタ	側頭骨	関節結節	R	1	
HC	グスク層	-	-	B16	12673	1612	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	R	1	
HC	グスク層	-	-	B16	3084	2557	ブタ	頭頂骨-後頭骨			1	
HC	グスク層	-	-	B16	3080	2372	ウシ	下顎骨	[i1~i3×C×dm2dm3dm4(M1)<M2>下顎枝]	L	1	完存
HC	グスク層	-	-	B16	3903	2375	ウシ	下顎骨	[i1×i2×i3×C×m1m2m3M1(M2)×<M3>×]	R	1	
HC	グスク層	-	-	B16	3086	2558	ウシ	寛骨(腸骨)	臼	L	1	
HC	グスク層	-	-	B16	3078	2416	ウマ	下顎骨	[i1i2i3dm2dm3dm4(M1)下顎枝]	L	1	完存. カットマーク
HC	グスク層	-	-	B16	3081	2417	ウマ	下顎骨	[i1i2×i3dm2dm3dm4(M1)下顎枝]	R	1	完存. カットマーク
HC	グスク層	-	-	B16	3079	2419	ウマ	下顎骨	[i1i2i3dm2dm3dm4<M1>下顎枝]	R	1	完存. カットマーク
HC	グスク層	-	-	B15	3322	2586	ウマ	下顎遊離歯	dm4	L	1	
HC	グスク層	-	-	B16	3907	2559	ウマ	距骨		R	1	
HC	グスク層	-	-	B16	3906	2538	ウマ	踵骨		R	1	腫痕
HC	グスク層	-	-	B16	3088	2490	ウマ	手/足根骨			1	
HC	グスク層	-	-	B16	3083	2540	ウマ	基節骨			1	カットマーク
HC	グスク層	-	-	B16	3082	2562	ウマ	基節骨			1	カットマーク
HC	グスク層	-	-	B16	3085	2563	ウマ	基節骨			1	カットマーク
HC	グスク層	-	-	B16	3088	2492	未同定	未確認			1	
HC	V層	貝層II群	b		322	1132	フェウキダイ科	角骨		R	1	
HC	V層	貝層II群	b		322	1134	フェウキダイ科	方骨		R	1	
HC	V層	貝層II群	b		12625	94	ペラ科B	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層II群	b		142	1409	アオブダイ属	上咽頭骨		R	1	
HC	V層	貝層II群	b		322	1133	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層II群	b		12625	80	フグ科	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層II群	b		322	1136	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層II群	b		322	1137	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層II群	b		142	1408	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	V層	貝層II群	b		322	1135	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	V層	貝層II群	b		142	1859	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	V層	貝層II群	c		162	2024	ハタ型	椎骨			1	
HC	V層	貝層II群	c		162	317	クロダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層II群	c		12614	544	ハマフエフキ型	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層II群	c		12614	187	フェウキダイ属	口蓋骨		R	1	
HC	V層	貝層II群	c		12619	1165	フェウキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層II群	c		12614	198	フェウキダイ科	第1椎骨			1	
HC	V層	貝層II群	c		162	276	フェウキダイ科	椎骨			1	
HC	V層	貝層II群	c		12622	242	タイ型	椎骨			1	
HC	V層	貝層II群	c		172	1426	ペラ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層II群	c		162	170	イロブダイ属	上咽頭骨		L	1	
HC	V層	貝層II群	c		12626	340	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層II群	c		162	289	ブダイ科	椎骨			1	
HC	V層	貝層II群	e		12613	1965	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層II群	e		12616	1931	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層II群	e		12622	1987	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層II群	e		12614	2010	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層II群	e		40	2690	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	V層	貝層II群	e		172	1427	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	V層	貝層II群	e		40	1507	リクガメ	緑甲板			1	
HC	V層	貝層II群	e		12614	1700	リクガメ	緑甲板			1	
HC	V層	貝層II群	e		12614	1702	リクガメ	緑甲板			1	
HC	V層	貝層II群	e		166	1649	リクガメ	緑骨板			1	
HC	V層	貝層II群	e		172	1428	リクガメ	緑骨板			1	
HC	V層	貝層II群	e		12614	1593	リクガメ	甲板	ft		<1>	
HC	V層	貝層II群	c		12619	1537	イノシシ/ブタ	上顎骨	[M2M3×]	L	1	
HC	V層	貝層II群	c		12	2683	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	P2/P3		1	
HC	V層	貝層II群	c		71	2684	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M1]	L	1	
HC	V層	貝層II群	e		12622	1538	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P2P3P4M1]	L	1	
HC	V層	貝層II群	c		12619	1553	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P3×P4M1M2]	L	1	
HC	V層	貝層II群	c		12619	1617	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	L	1	
HC	V層	貝層II群	e		172	1429	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	V層	貝層II群	e		12619	1281	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	V層	貝層II群	e		12	1315	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	
HC	V層	貝層II群	e		40	1508	イノシシ/ブタ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	
HC	V層	貝層II群	e		12622	2610	ウマ	下顎遊離歯	dm4?	R	1	
HC	V層	貝層II群	c		172	1410	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	V層	貝層II群	c		12	1315	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	V層	貝層II群	e		71	172	同定不可	椎骨			1	
HC	V層	貝層II群	e		12618	2020	同定不可	椎骨			1	
HC	V層	貝層II群	d		12628	196	フェウキダイ科	第1椎骨			1	
HC	V層	貝層II群	d		12629	1945	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層II群	d		12628	2029	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層II群	f		147	232	クロダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層II群	f		12633	1927	ハリセンボン科	前上顎骨			1	

第100表-2 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照.

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳 番号	骨 番号	種類	部位	残存位置*	左右	数 *	備考
HC	V層	貝層II群	f		147	163	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	V層	貝層II群	g		163	319	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層II群	g		12638	60	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層II群	g		12638	1911	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層II群	g		12638	1941	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層II群	h		17	1389	フグ科	前上顎/歯骨			1	
HC	V層	貝層II群	h		12651	328	真骨類(保留)	方骨		L	1	
HC	V層	貝層II群	h		12651	1742	イノシシ/ブタ	上/下顎遊離歯	M		1	
HC	V層	貝層II群	i		12646	160	クロダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層II群	i		12644	303	クロダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層II群	i		12646	197	フェウキダイ科	第1椎骨			1	
HC	V層	貝層II群	i		12647	241	タイ型	椎骨			1	
HC	V層	貝層II群	i		12646	67	ペラ科A	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層II群	i		46	1883	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層II群	i		12648	1943	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層II群	i		12646	1884	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層II群	i		317	132	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	V層	貝層II群	i		317	131	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	V層	貝層II群	i		12647	883	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	V層	貝層III群	1a層	T15	12339	1164	フェウキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層III群	1a層	T15	12339	37	フェウキダイ科	角骨		L	1	
HC	V層	貝層III群	1a層	T15	12339	343	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	1a層	T15	12337	1984	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層III群	1a層	T15	12171	1546	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×P2×P3P4M1M2(M3)]	L	1	♀
HC	V層	貝層III群	1a層	T15	11402	2685	イノシシ/ブタ	膝蓋骨			1	
HC	V層	貝層III群	1a層	T15	12339	358	同定不可	椎骨	椎体		1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T14	12367	1182	ハマフェウキ型	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T15	12375	294	ハマフェウキ型	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T15	12376	185	フェウキダイ属	口蓋骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T15	12376	84	フェウキダイ科	主上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T14	12369	125	フェウキダイ科	主上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T15	12385	1167	フェウキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T14	12356	1198	フェウキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T15	12375	1209	フェウキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T15	12388	360	フェウキダイ科	椎骨			1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T14	12362	101	シロクラペラ型	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層III群	1b層	S14	12342	72	ペラ科A	上咽頭骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	S14	12343	65	ペラ科A	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層III群	1b層	S14	12343	95	ペラ科B	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T14	12366	59	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T14	12369	381	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T14	12363	376	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	S14	12342	150	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T15	12393	122	フグ科	前上顎/歯骨			1	
HC	V層	貝層III群	1b層	S14	12341	1933	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層III群	1b層	S14	12353	2008	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T14	12365	1929	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T14	12371	1916	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T15	12383	1174	真骨類(保留)	椎骨			1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T15	12384	2348	ウミガメ	上腕骨		L	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T14	12357	2319	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層III群	1b層	S14	12352	1685	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	P3	R	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	S15	12354	1631	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M1]	R	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T15	12392	1652	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3]	R	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T14	12369	1582	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I1	L	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T14		2689	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I1	L	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T14	12369	1584	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	L	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T15	12383	1620	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	L	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T14	12369	1583	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	R	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T15	12375	1692	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	P4	R	1	
HC	V層	貝層III群	1b層	T15-42	11221	2674	イノシシ/ブタ	手/足根骨			1	
HC	V層	貝層III群	1b層	S14	12350	2074	ジュゴン	不明	fr		<1>	
HC	V層	貝層III群	1b層	T14	12356	1154	未同定	未確認			1	
HC	V層	貝層III群	1層	S14	12308	179	ハタ科	主上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	1層	T14	824	171	ハタ型	椎骨			1	
HC	V層	貝層III群	1層	T15	12335	157	クロダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	1層	T15	12335	155	クロダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	1層	T15	12335	182	フェウキダイ属	口蓋骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	1層	T14	12328	1212	フェウキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層III群	1層	T14	12321	13	フェウキダイ科	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層III群	1層	T15	12335	20	フェウキダイ科	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	1層	T15	12335	367	フェウキダイ科	椎骨			1	
HC	V層	貝層III群	1層	S15	12310	77	ペラ科	前上顎/歯骨			1	
HC	V層	貝層III群	1層	S15	12309	114	アオブダイ属	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層III群	1層	T15	12335	332	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	1層	T14	12319	29	アオブダイ属	前上顎/歯骨			1	
HC	V層	貝層III群	1層	T14	12313	1985	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層III群	1層	T15	12335	1886	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層III群	1層	T14	12315	1304	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	V層	貝層III群	1層	T14	824	1378	ウミガメ	頭骨			1	
HC	V層	貝層III群	1層	T14	12327	2282	ウミガメ	未確認			1	
HC	V層	貝層III群	1層	T15	12335	2300	ウミガメ	未確認			1	
HC	V層	貝層III群	1層	S15	12310	1567	リクガメ	斜状腹板		R	1	
HC	V層	貝層III群	1層	T14	11872	1778	イノシシ/ブタ	切歯骨	[I1×I2×I3×]	L	1	
HC	V層	貝層III群	1層	T14	12327	1687	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	P2	L	1	
HC	V層	貝層III群	1層	T14	12327	1660	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M1	L	1	

第100表-3 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照.

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳 番号	骨 番号	種類	部位	残存位置*	左右	数 *	備考
HC	V層	貝層Ⅲ群	1層	T14	12317	1566	イノシシ/ブタ	下顎骨	[m1×m2×(P3)]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	1層	T14	12327	1551	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M2×M3×]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	1層	T14	1147	1423	未同定	未確認				
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S15	3718	177	サメ類	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12408	2013	エイ目	尾棘			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12456	133	ウツボ科	前鋤骨				
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12456	91	マハタ型	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12411	34	スジアラ型	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	178	ハタ科	主上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12409	195	ハタ科	第1椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12490	199	ハタ型	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	A15	11876	159	フェダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12523	305	クロダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12519	304	クロダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12440	302	クロダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12416	135	クロダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	11002	2669	クロダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	264	320	クロダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12415	306	クロダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12429	156	クロダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12416	154	クロダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12425	310	クロダイ属	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12442	309	クロダイ属	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12456	27	ヨコシマクロダイ	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	1177	ハマフエキ型	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	1181	ハマフエキ型	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S13	12481	497	ハマフエキ型	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12509	293	ハマフエキ型	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12433	295	ハマフエキ型	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12433	296	ハマフエキ型	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12429	348	フェフキダイ属	口蓋骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	349	フェフキダイ属	口蓋骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	351	フェフキダイ属	口蓋骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	186	フェフキダイ属	口蓋骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12445	184	フェフキダイ属	口蓋骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12513	88	フェフキダイ科	主上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12445	86	フェフキダイ科	主上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12438	324	フェフキダイ科	主上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12475	85	フェフキダイ科	主上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12470	151	フェフキダイ科	主上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	92	フェフキダイ科	主上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12416	123	フェフキダイ科	主上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12438	130	フェフキダイ科	主上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	1159	フェフキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12416	1168	フェフキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	A15	797	1432	フェフキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	A15	797	1433	フェフキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12504	1206	フェフキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12442	1205	フェフキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	1201	フェフキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12416	1202	フェフキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12433	1200	フェフキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12433	1199	フェフキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12463	1197	フェフキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12734	1204	フェフキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	8	フェフキダイ科	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	6	フェフキダイ科	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12445	11	フェフキダイ科	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	12	フェフキダイ科	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12731	16	フェフキダイ科	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12433	36	フェフキダイ科	角骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12413	39	フェフキダイ科	角骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12409	347	フェフキダイ科	角骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12503	330	フェフキダイ科	角骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12416	45	フェフキダイ科	角骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12433	42	フェフキダイ科	角骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	357	フェフキダイ科	第1椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12429	368	フェフキダイ科	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	361	フェフキダイ科	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12429	234	タイ型	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12416	238	タイ型	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	240	タイ型	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12493	103	シロクラベラ型	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12734	104	シロクラベラ型	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	348	71	ベラ科A	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12407	61	ベラ科A	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12402	68	ベラ科A	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12416	66	ベラ科A	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12433	64	ベラ科A	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	74	イロブダイ属	上咽頭骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	3	イロブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	11877	33	アオブダイ属	上咽頭骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S15	12544	107	アオブダイ属	上咽頭骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12490	50	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12519	46	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	53	アオブダイ属	下咽頭骨			1	

第100表-4 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照。

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12429	58	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12459	51	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12474	55	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12442	377	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	145	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	142	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	3766	314	アオブダイ属	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12533	115	アオブダイ属	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	136	アオブダイ属	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12429	138	アオブダイ属	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12429	117	アオブダイ属	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	137	アオブダイ属	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12490	341	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12507	337	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12433	339	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12429	333	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	11881	335	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	11883	2018	アオブダイ属	上咽頭骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12470	79	フグ科	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12528	2006	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12542	1918	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12509	1988	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12413	1962	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12438	1872	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12444	1932	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12423	2002	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12416	2009	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12412	1926	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12412	1878	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12400	1885	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12443	1890	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12416	1948	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12443	2003	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12426	1915	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12472	1908	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12597	1989	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12507	1169	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12526	1261	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12456	1294	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12456	2014	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S13	12486	329	真骨類(保留)	方骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12456	180	真骨類(保留)	方骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12437	1172	真骨類(保留)	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12469	766	ウミガメ	機骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12423	2325	ウミガメ	椎骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12499	2302	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12428	2123	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S15	11403	2686	ウミガメ	縁骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12439	2321	ウミガメ	縁骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12502	2204	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12498	2206	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	11877	2203	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12543	2311	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12531	2238	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12531	2158	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12543	2270	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S15	3785	2201	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12436	2173	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12402	2327	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12402	2313	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12439	2157	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12420	2267	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	11882	2290	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14-31	12488		ウミガメ	不明	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14-32	12495		ウミガメ	不明	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14-41	12505		ウミガメ	不明	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14-12	12402		ウミガメ	不明	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14-13	12406		ウミガメ	不明	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14-13	12405		ウミガメ	不明	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12504	1844	ウミガメ	未確認			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12516	1850	ウミガメ	未確認			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S15	12550	1852	ウミガメ	未確認			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12466	1245	ウミガメ	未確認			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	1572	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12440	1571	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12445	1705	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12497	1696	ウミガメ	上腹板		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12415	1680	ウミガメ	上腹板		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	11009	1697	ウミガメ	内腹板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12438	1569	ウミガメ	剣状腹板		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12493	1577	イヌ	下顎遊離歯	M1	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	3945	1758	イノシシ/ブタ	上顎骨	[M2]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12454	1668	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯		L	1	dm4
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S15	3657	1761	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M3	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	1770	イノシシ/ブタ	下顎骨	[CP2×P3×P4×]	L	1	♀
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	1545	1790	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M1×M2]	L	1	

第100表-5 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照。

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12471	1812	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P2×P3×]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15-55	11062	2682	イノシシ/ブタ	下顎骨	関節突起	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	1818	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×P2×P3×]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12435	1353	イノシシ/ブタ	下顎骨	[CP2×P3×P4×]	R	1	♀
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	1817	イノシシ/ブタ	下顎骨	[m3×]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12734	1786	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P2×P3×P4×]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12515	1589	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	il	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	1689	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	dm4	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12435	1604	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I1	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	A15	3625	1346	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12527	1616	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12535	1276	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12420	1343	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12419	1287	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	892	1341	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♀
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	3596	1257	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12401	1259	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12461	1250	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12431	1626	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♀
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12416	1691	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	P		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12522	1712	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12420	1714	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S13	12486	2619	イノシシ/ブタ	肋骨	p		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	A15	12397	2498	ウシ	下顎遊離歯	P4	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	A15	3683	2528	ウシ	中肋骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	A15	3617	2564	ウシ	末肋骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12530	2083	ジュゴン	頭骨	fr		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12496	1324	ジュゴン	四肢骨	fr		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	A15	3610	2150	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	A15	3609	2093	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12499	2052	ジュゴン	不明	fr		1	<1>
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	A15	3607	2670	ジュゴン?	肋骨	m		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12465	1557	鳥/哺乳類同定不可	上腕骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	A15	11876	876	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12508	897	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	12542	884	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S15	12552	875	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S15	12553	877	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	A15	11876	270	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12402	260	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T15	12470	257	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	S14	323	1130	同定不可	椎骨	椎体		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	12443	734	同定不可	椎骨	椎体		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	2層	T14	352	322	同定不可	椎骨	椎体		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T15	12559	192	アジ科	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	A15	3673	161	フエダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T15	12698	498	ハマフエフキ型	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T15	12186	499	ハマフエフキ型	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	S15	12180	352	フエフキダイ属	口蓋骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T16	12565	90	フエフキダイ科	主上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T15	12183	181	フエフキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T16	12567	1195	フエフキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T16	12565	21	フエフキダイ科	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T16	12565	38	フエフキダイ科	角骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T14	12182	44	フエフキダイ科	角骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T15	12561	370	タイ型	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	S14	12177	355	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	S15	12180	119	アオブダイ属	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T15	12186	118	アオブダイ属	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T16	12565	116	アオブダイ属	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	A15	252	162	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T16	12565	2007	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	S15	12180	1291	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T16	12565	327	真骨類(保留)	方骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T16	12567	189	真骨類(保留)	未確認			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T15	12185	2322	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	A15	3728	2176	ウミガメ	腹甲板	fr		1	<1>
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	S14	12177	2254	ウミガメ	甲板	fr		1	<1>
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T15	12561	2275	ウミガメ	甲板	fr		1	<1>
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	A15	688	2675	リクガメ	中/下腹板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T15	12561	1285	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T14	12182	1252	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	S14	12177	1904	未同定	未確認			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	S15	12180	882	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T15	12561	900	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T15	12698	612	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	3層	T16	12565	1171	同定不可	椎骨	椎体		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	12210	236	タイ型	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	12199	57	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	12198	47	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T15	12571	54	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	12203	1964	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	12203	1910	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	12204	1302	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T15	12571	1173	真骨類(保留)	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	12199	749	ウミガメ	鳥口肩甲骨			1	

第100表-6 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照。

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	12743	2200	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	S14	12192	2326	ウミガメ	縁骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T15	4608	2167	ウミガメ	腹甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	B16	11908	2332	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	S14	12742	2252	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	4190	2242	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	B16	11907	665	ウミガメ	未確認			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	S14	12194	2298	ウミガメ	未確認			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	12208	2317	ウミガメ	未確認			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	12205	2299	ウミガメ	未確認			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	12200	1595	リクガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	122	1370	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	4188	1372	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P4M1]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	S15	12197	1533	イノシシ/ブタ	下顎骨	[c×m1×m2×m3×M1]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T15	12744	2046	イノシシ/ブタ	下顎骨	[m1×m2×m3×M1×]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	A16	634	1637	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	4188	1373	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	A16	11903	1340	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T15	12744	2081	ジユゴン	頭骨	fr		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	A16	12570	1905	未同定	未確認			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	12201	895	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	4層	T14	12203	611	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	4517	1445	ハタ科	鱧蓋骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12236	1646	アジ科	主上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12723	1575	アジ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	4303	290	アジ科	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	903	191	アジ科	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12302	193	アジ科	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	4347	1331	クロダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12292	301	クロダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12279	158	クロダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12279	308	クロダイ属	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12289	312	クロダイ属	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12221	1185	ハマフエフキ型	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12263	1178	ハマフエフキ型	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12262	1180	ハマフエフキ型	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12303	1184	ハマフエフキ型	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12297	545	ハマフエフキ型	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12236	288	キツネフエフキ	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12588	350	フエフキダイ属	口蓋骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12280	1096	フエフキダイ科	主上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	11917	1213	フエフキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12292	1157	フエフキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12303	1161	フエフキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12292	1163	フエフキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12260	735	フエフキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12290	1196	フエフキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	11911	10	フエフキダイ科	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	11924	93	フエフキダイ科	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12235	18	フエフキダイ科	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12297	22	フエフキダイ科	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T16	12592	17	フエフキダイ科	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	11937	235	タイ型	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12226	237	タイ型	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12212	239	タイ型	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12274	105	シロクラベラ型	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	4339	110	シロクラベラ型	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12582	109	シロクラベラ型	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	4476	96	タキベラ型	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12274	63	ベラ科A	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12290	62	ベラ科A	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12292	75	ベラ科	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12262	76	ベラ科	前上顎/歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12262	78	ベラ科	前上顎/歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	11939	286	ベラ科	角骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12214	194	ベラ科	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12289	70	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12583	56	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12262	111	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12282	380	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12289	383	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12719	140	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12719	147	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12289	112	アオブダイ属	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12262	139	アオブダイ属	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12226	334	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12279	149	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12277	338	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12291	148	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	11938	201	ブダイ科	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	12576	35	モンガラカワハギ科	前上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	11924	1271	モンガラカワハギ科	歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	3868	307	フグ科	歯骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	12741	1978	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	11940	1920	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	11940	1982	ハリセンボン科	前上顎骨			1	

第100表-7 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照。

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳 番号	骨 番号	種類	部位	残存位置*	左右	数 *	備考
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12223	1874	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12226	1866	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12218	1961	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12226	1870	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12211	1977	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12230	1871	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12719	1919	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12223	2028	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12232	1881	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12224	1949	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12262	1864	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	4366	1863	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12262	1865	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12266	1976	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12263	1869	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12264	1940	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	4404	1979	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	922	1873	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12729	1963	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12729	1912	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12573	1942	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12291	1936	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12292	1879	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12289	1887	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	11911	1299	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	12741	1298	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	11937	1297	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12212	1266	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12214	1296	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12723	1267	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12212	1292	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12257	1264	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	4454	1305	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	11924	175	真骨類(保留)	疑鎖骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	11940	1175	真骨類(保留)	椎骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	3901	2483	アオウミガメ	剣状腹板		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12250	1561	ウミガメ	上腕骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12257	666	ウミガメ	上腕骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	11249	1420	ウミガメ	上腕骨			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12261	2347	ウミガメ	尺骨		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	11930	2337	ウミガメ	大腿骨		R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	11923	2220	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	4260	2153	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	B15	11945	2307	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	4641	2301	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12228	2303	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12250	2305	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	4522	2154	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12260	2308	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12282	2172	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12290	2174	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12295	2304	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12574	2306	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	4823	2131	ウミガメ	縁甲板			1	老成個体
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12573	2168	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12265	2235	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12213	2230	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12272	2233	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12298	2228	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	4498	2156	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	4631	2536	ウミガメ	上腹板		L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	3457	2318	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	11916	2276	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	11916	2281	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	11916	2294	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	11923	2286	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	11921	2309	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	3458	2264	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	12740	2199	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	11930	2237	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	12741	2253	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	12741	2289	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	B15	11944	2202	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	B15	11945	2161	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12222	2314	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12241	2278	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12226	2293	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12254	2291	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12243	2175	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12258	2221	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	3789	2320	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12260	2240	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12273	2310	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12286	2277	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12272	2273	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12292	2329	ウミガメ	甲板	fr		<1>	

第100表-8 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照。

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考	
HC	V層	貝層III群	5層	T15	12295	2241	ウミガメ	甲板	fr		<1>		
HC	V層	貝層III群	5層	T15	4758	2247	ウミガメ	甲板	fr		<1>		
HC	V層	貝層III群	5層	T16	12304	2335	ウミガメ	甲板	fr		<1>		
HC	V層	貝層III群	5層	A16	12741	1846	ウミガメ	未確認			1		
HC	V層	貝層III群	5層	A16	11937	1321	ウミガメ	未確認			1		
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12236	770	ウミガメ	未確認			1		
HC	V層	貝層III群	5層	T15	12728	1814	ウミガメ	未確認			1		
HC	V層	貝層III群	5層	T15	12729	1847	ウミガメ	未確認			1		
HC	V層	貝層III群	5層	A16	11937	2283	ウミガメ	未確認			1		
HC	V層	貝層III群	5層	A16	4153	2169	ウミガメ	未確認			1		
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12248	2285	ウミガメ	未確認			1		
HC	V層	貝層III群	5層	T14	12279	2316	ウミガメ	未確認			1		
HC	V層	貝層III群	5層	T14	12277	2284	ウミガメ	未確認			1		
HC	V層	貝層III群	5層	T15	12290	1570	ウミガメ	肋骨板			1		
HC	V層	貝層III群	5層	T15	12290	1699	ウミガメ	縁甲板			1		
HC	V層	貝層III群	5層	A15	3401	1568	ウミガメ	内腹板			1		
HC	V層	貝層III群	5層	S15	10863	2687	ウミガメ	剣状腹板		L	1		
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4379	2226	ウミガメ	腹甲板			1		
HC	V層	貝層III群	5層	T14	12277	1599	ウミガメ	腹甲板			1		
HC	V層	貝層III群	5層	T14	12274	1598	ウミガメ	腹甲板			1		
HC	V層	貝層III群	5層	T15	12290	1600	ウミガメ	腹甲板			1		
HC	V層	貝層III群	5層	T15	12729	1596	ウミガメ	腹甲板			1		
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12719	1592	ウミガメ	甲板	fr		<1>		
HC	V層	貝層III群	5層	T15	12584	1591	ウミガメ	甲板	fr		<1>		
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12246	1860	オオコウモリ	未確認			1		
HC	V層	貝層III群	5層	T15	4364	1470	イノシシ/ブタ	鼻骨		L+R	1		
HC	V層	貝層III群	5層	T15	4364	1470	イノシシ/ブタ	前頭骨			L+R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	T15	4364	1470	イノシシ/ブタ	涙骨			L+R	1	♀. 同一個体
HC	V層	貝層III群	5層	T15	4364	1470	イノシシ/ブタ	上顎骨	[CP1×P2P3P4M1M2M3]		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	T15	4364	1470	イノシシ/ブタ	上顎骨	[11×12×13×CP1P2P3P4M1M2M3]		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4440	1502	イノシシ/ブタ	鼻骨			L+R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4440	1502	イノシシ/ブタ	前頭骨			L+R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4440	1502	イノシシ/ブタ	頭頂骨			1		同一個体
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4440	1502	イノシシ/ブタ	後頭骨			1		
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4440	1502	イノシシ/ブタ	上顎骨	[C×P1×P2P3P4M1M2M3×]		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4440	1502	イノシシ/ブタ	上顎骨	[C×P1×P2P3P4M1]		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	3691	1820	イノシシ/ブタ	鼻骨			L+R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	3691	1820	イノシシ/ブタ	前頭骨			L+R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	3691	1820	イノシシ/ブタ	上顎骨	P2P3P4×M1M2M3]		L	1	同一個体
HC	V層	貝層III群	5層	A16	3691	1820	イノシシ/ブタ	上顎骨	[C×P1×P2×P3P4M1M2M3]		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12236	1580	イノシシ/ブタ	切歯骨	[112×13×]		L	1	同一個体
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12236	1580	イノシシ/ブタ	切歯骨	[112×13×]		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1996	イノシシ/ブタ	前頭骨			L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1560	イノシシ/ブタ	前頭骨			L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4767	2493	イノシシ/ブタ	前頭骨			L+R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1529	イノシシ/ブタ	前頭骨			L+R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1525	イノシシ/ブタ	頭頂骨			R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1528	イノシシ/ブタ	後頭骨			1		
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1527	イノシシ/ブタ	後頭骨			1		
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1524	イノシシ/ブタ	後頭骨			1		
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1526	イノシシ/ブタ	涙骨			R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1530	イノシシ/ブタ	側頭骨	関節結節		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12265	1497	イノシシ/ブタ	頭骨	未確認		1		
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12236	1579	イノシシ/ブタ	切歯骨	[11(2)13×]		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12242	1586	イノシシ/ブタ	切歯骨	[112×13×]		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12212	1585	イノシシ/ブタ	切歯骨	[112×13×]		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4700	1505	イノシシ/ブタ	切歯骨-上顎骨	[112×13×C×P2P3P4M1M2M3]		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1517	イノシシ/ブタ	上顎骨	[(C)×(P1)]		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4777	1510	イノシシ/ブタ	上顎骨	[C×P1×P2P3M1M2(M3)]		L	1	♀
HC	V層	貝層III群	5層	A15	3588	1736	イノシシ/ブタ	上顎骨	[C×P1P2]		L	1	♀
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12254	1536	イノシシ/ブタ	上顎骨	[C×P2×P3P4M1M2]		L	1	♀
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4576	1441	イノシシ/ブタ	上顎骨	[C×P2P3P4M1M2M3]		L	1	♀
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12225	1550	イノシシ/ブタ	上顎骨	[m1m2m3M1]		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1520	イノシシ/ブタ	上顎骨	[m1m2m3M1]		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	T15	4487	2045	イノシシ/ブタ	上顎骨	[M3]		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	12741	1540	イノシシ/ブタ	上顎骨	[m3M1]		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1500	イノシシ/ブタ	上顎骨	[m3M1(M2)]		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4521	1774	イノシシ/ブタ	上顎骨	[P2P3P4M1M2]		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12237	1541	イノシシ/ブタ	上顎骨	[P3P4M1M2]		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12233	1532	イノシシ/ブタ	上顎骨	[P4M1M2M3]		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12233	1543	イノシシ/ブタ	上顎骨	[P2P3]		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4643	1843	イノシシ/ブタ	上顎骨	[P1×m1m2m3M1/P1×m1m2m3M1(M2)]		L+R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	T15	12292	1769	イノシシ/ブタ	上顎骨	[C×P1×P2×]		R	1	♂
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12236	1562	イノシシ/ブタ	上顎骨	[C×P1×P2P3]		R	1	♂
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4443	1509	イノシシ/ブタ	上顎骨	[CP1P2P3P4M1M2(M3)]		R	1	♂
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4375	1448	イノシシ/ブタ	上顎骨	[M1(M2)]		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12227	1656	イノシシ/ブタ	上顎骨	[M1(M2)×]		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4572	1513	イノシシ/ブタ	上顎骨	[m1m2m3]		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1520	イノシシ/ブタ	上顎骨	[m2×m3M1]		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4375	1447	イノシシ/ブタ	上顎骨	[m2m3M1(M2)]		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	T14	12279	1655	イノシシ/ブタ	上顎骨	[m3×(P4)M1M2×]		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4319	1792	イノシシ/ブタ	上顎骨	[P3P4M1M2]		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1499	イノシシ/ブタ	上顎骨	[P4M1M2M3]		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1519	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	i2		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12227	1658	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	dm4		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	11937	1606	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	I1		L	1	

第100表-9 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照。

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12248	1488	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	I1	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12723	1521	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	I1	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	12581	1609	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	I1	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12719	1590	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	I2	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12723	1522	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12262	1347	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12265	1348	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	4524	1349	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12262	1350	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12726	1661	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M1	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12279	1663	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M2	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12212	1694	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M3	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12248	1665	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M3	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	11916	1683	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M3	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12263	1682	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M3	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	4702	1451	イノシシ/ブタ	下顎骨	[I1I2I3×CP2P3P4×]	L	1	♂, 同一個体
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	4702	1451	イノシシ/ブタ	下顎骨	[I1]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12248	1483	イノシシ/ブタ	下顎骨	[(I1)]	L	1	同一個体
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12248	1483	イノシシ/ブタ	下顎骨	[(I1)I2×i3×c×m1×m2×m3×]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	3666	1511	イノシシ/ブタ	下顎骨	[I1×]	L	1	♂, 同一個体
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	3666	1511	イノシシ/ブタ	下顎骨	[I1×I2×I3×CP2×P3P4×M1×M2M3]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12233	1544	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P2P3P4M1M2×M3]	R	1	同一個体
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12233	1544	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P4M1M2M3]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	3970	1554	イノシシ/ブタ	下顎骨	[I1×I2×I3×CP1×P2×P3×P4×]	L	1	♂, 同一個体
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	3970	1554	イノシシ/ブタ	下顎骨	[I1×I2×I3×C]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	4173	1763	イノシシ/ブタ	下顎骨	[I1/I1I2]	L+R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	4579	1465	イノシシ/ブタ	下顎骨	[(I1)I2×i3×c×m1×m2m3M1]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	4009	2197	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P1×P2×P3×P4M1M2M3]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	3587	2198	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P2×P3×P4M1×M2×M3]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	3667	1752	イノシシ/ブタ	下顎骨	[c×m1×m2×m3×(P4)M1(M2)]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	4780	1755	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×m1×m2m3M1(M2)]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	4630	1471	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×m1×m2m3M1M2]	L	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12220	1768	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×P1×P2×P3×P4×]	L	1	♀
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12253	1999	イノシシ/ブタ	下顎骨	[c×P1m1×m2m3M1(M2)]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12234	1796	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×P2×P3×]	L	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	4171	1824	イノシシ/ブタ	下顎骨	[CP2×P3P4M1M2M3]	L	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	4572	1513	イノシシ/ブタ	下顎骨	[CP3×(P4)]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12302	1745	イノシシ/ブタ	下顎骨	[i1×i2×i3×c×m1×m2m3(M1)]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	4006	1474	イノシシ/ブタ	下顎骨	[I1I2×I3×C]	L	1	♀
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12238	1630	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M1]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12251	1531	イノシシ/ブタ	下顎骨	[m1×m2×m3M1]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12254	1823	イノシシ/ブタ	下顎骨	[m1×m2m3(M1)]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12302	1548	イノシシ/ブタ	下顎骨	[m1×m2m3M1×]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	4622	1789	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M2(M3)]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	4380	1760	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	4832	1753	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	4482	1772	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12302	1635	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12212	1534	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P2×P3P4]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	4517	1458	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P2×P3P4M1M2M3]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	4347	1330	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P2×P3P4M1M2M3×]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A15	11916	1643	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P3]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	4773	1506	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P4M1M2(M3)]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	4584	1547	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P4M1M2M3]	L	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	4571	1468	イノシシ/ブタ	下顎骨	[(I1)I2×i3(C)m1×m2×m3×M1×]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12237	1539	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12235	1715	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×m1×m2m3]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12303	1813	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×P1×]	R	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	4313	1475	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×P1×P2×P3×P4×M1×M2(M3)]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	4771	1512	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×P1P2×(P3)P4M1M2(M3)]	R	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12279	1811	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×P2×]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	3969	1766	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×P2×P3×]	R	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	4452	1762	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×P2×P3×]	R	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12269	1578	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×P2×P3×P4×]	R	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	4583	1464	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×P2×P3×P4×M1×M2(M3)×]	R	1	♂
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	4576	1441	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×P2P3P4M1M2M3]	R	1	♀
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12228	1800	イノシシ/ブタ	下顎骨	[i1×i2×i3×]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12280	1804	イノシシ/ブタ	下顎骨	[I1×I2×I3×C×P1]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	4547	1821	イノシシ/ブタ	下顎骨	[I1I2×I3×CP1P2×P3P4M1M2(M3)]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12251	1644	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M1(M2)×]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	4638	1452	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M1×M2(M3)]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12234	1629	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M1×M2M3×]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12583	1633	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M1M2]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	4595	1793	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M1M2M3]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	4679	1748	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M2(M3)]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12303	1552	イノシシ/ブタ	下顎骨	[m2×m3M1]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	4687	1624	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M2M3]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12263	16651	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	4338	1751	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T14	12282	1634	イノシシ/ブタ	下顎骨	[m3]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	4833	1750	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	A16	11929	1645	イノシシ/ブタ	下顎骨	[m3×M1(M2)×]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12225	1632	イノシシ/ブタ	下顎骨	[m3M1(M2)]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S15	12269	1565	イノシシ/ブタ	下顎骨	[m3m1×(M1)×]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	T15	12301	1767	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P2×P3×P4×]	R	1	
HC	V層	貝層Ⅲ群	5層	S14	12237	1542	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P3]	R	1	

第100表-10 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照.

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12244	1781	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P4×M1×]	R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S15	12257	1810	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P4×M1×]	R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	11905	1601	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I1	L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12223	1573	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I1	L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1516	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I1	L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S15	12257	1602	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I1	L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S15	12270	1603	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I1	L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12227	1605	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I1	R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S15	12270	1623	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I1	R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	11940	1636	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12234	1639	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12719	1638	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S15	12257	1619	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	T14	12280	1110	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12723	1518	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	11940	1284	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4377	1279	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	V層	貝層III群	5層	T14	4716	1249	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	V層	貝層III群	5層	B16	11947	1342	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♀
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12251	1251	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12251	1254	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	V層	貝層III群	5層	T14	4457	1253	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12223	1574	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♀
HC	V層	貝層III群	5層	T15	12728	1625	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♀
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12212	1694	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M1	L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S15	12267	1747	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M1	L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	T15	12289	1695	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M2	L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12222	1713	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	T15	4364	1470	イノシシ/ブタ	上/下顎遊離歯	切歯	R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A15	11916	1718	イノシシ/ブタ	上/下顎遊離歯	M		1	
HC	V層	貝層III群	5層	S15	12268	1746	イノシシ/ブタ	上/下顎遊離歯	M		1	
HC	V層	貝層III群	5層	B15	3851	2560	ウシ	距骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	3659	2215	ジュゴン	前頭骨	fr	L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	3659	2217	ジュゴン	前頭骨-頭頂骨-後頭骨			1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	3659	2223	ジュゴン	後頭骨	後頭顆	L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	3659	2224	ジュゴン	後頭骨	後頭顆	R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	3659	2213	ジュゴン	頬骨		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	3659	2214	ジュゴン	頬骨		R	1	同一個体
HC	V層	貝層III群	5層	A16	3659	2196	ジュゴン	頭蓋底			1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	3659	2225	ジュゴン	切歯骨		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	3659	2212	ジュゴン	切歯骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	3659	2216	ジュゴン	上顎骨		L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	3659	2211	ジュゴン	上顎骨		R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	T15	4307	2033	ジュゴン	肩甲骨	(d-)	L	1	
HC	V層	貝層III群	5層	T15	4827	1826	ジュゴン	上腕骨	w	R	1	
HC	V層	貝層III群	5層	T14	12277	1325	ジュゴン	四肢骨	fr		2	
HC	V層	貝層III群	5層	A15	4268	2183	ジュゴン	肋骨	w		1	
HC	V層	貝層III群	5層	T15	4664	2068	ジュゴン	肋骨	p-(d-)		1	
HC	V層	貝層III群	5層	S15	12720	2090	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	V層	貝層III群	5層	T14	12279	1242	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	V層	貝層III群	5層	T15	4665	2180	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	V層	貝層III群	5層	A15	4099	2181	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	V層	貝層III群	5層	B15	11946	2534	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4429	2092	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	V層	貝層III群	5層	B15	11944	2057	ジュゴン	不明	fr		<1>	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4372	1856	イルカ	椎骨	椎体		1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4513	1855	イルカ	椎骨	椎体		1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4511	1830	イルカ	椎骨	椎体		1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12212	1719	イルカ	椎骨	椎体		1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12221	1709	イルカ	椎骨	椎体		1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12248	997	哺乳類	頭椎			1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	12741	1072	哺乳類	胸椎			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12265	1067	哺乳類	胸椎			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12265	1066	哺乳類	胸椎			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12265	1070	哺乳類	胸椎			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12236	1077	哺乳類	胸椎			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12230	1074	哺乳類	胸椎			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	4688	1075	哺乳類	胸椎			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S15	12268	1122	哺乳類	胸椎			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S15	12268	1076	哺乳類	胸椎			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S15	12268	1121	哺乳類	胸椎			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S15	12267	1071	哺乳類	胸椎			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S15	4772	1073	哺乳類	胸椎			1	
HC	V層	貝層III群	5層	T15	12728	999	哺乳類	胸椎			1	
HC	V層	貝層III群	5層	T15	12589	1120	哺乳類	胸椎			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12224	1022	哺乳類	頸椎	棘突起		1	
HC	V層	貝層III群	5層	A15	11924	1894	未同定	未確認			1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	11931	1899	未同定	未確認			1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	12741	1902	未同定	未確認			1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	11937	1901	未同定	未確認			1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	11905	1898	未同定	未確認			1	
HC	V層	貝層III群	5層	A16	11937	1897	未同定	未確認			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12265	1153	未同定	未確認			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12228	1923	未同定	未確認			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12238	1922	未同定	未確認			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12251	1900	未同定	未確認			1	

第100表-11 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照。

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12250	1896	未同定	未確認			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S15	12262	1903	未同定	未確認			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S15	12261	1895	未同定	未確認			1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12250	881	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	V層	貝層III群	5層	T14	12276	899	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	V層	貝層III群	5層	T14	12275	879	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	V層	貝層III群	5層	S14	12228	267	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨			1	
HC	V層	貝層III群	5層	T14	12276	263	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨			1	
HC	V層	貝層III群	5層	T14	12285	836	鳥/哺乳類同定不可	脛骨			1	
HC	V層	貝層V群	h		12651	141	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11425	190	サメ類	椎骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11423	313	クロダイ属	歯骨		R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11486	1176	ハマフエキ型	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	11569	550	ハマフエキ型	前上顎骨		R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	11583	500	ハマフエキ型	前上顎骨		R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	11585	546	ハマフエキ型	前上顎骨		R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A15	11434	82	フエキダイ科	主上顎骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A15	11433	83	フエキダイ科	主上顎骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A16	11448	326	フエキダイ科	主上顎骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11490	87	フエキダイ科	主上顎骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	11598	81	フエキダイ科	主上顎骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A15	11434	127	フエキダイ科	主上顎骨		R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	11584	129	フエキダイ科	主上顎骨		R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11421	1162	フエキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11490	1211	フエキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11483	1160	フエキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11486	1166	フエキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	11569	1158	フエキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A16	11444	1207	フエキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11423	5	フエキダイ科	歯骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A16	11448	7	フエキダイ科	歯骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	11580	4	フエキダイ科	歯骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	11517	173	フエキダイ科	歯骨		R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A15	11439	40	フエキダイ科	角骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	1026	316	フエキダイ科	角骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11488	362	フエキダイ科	椎骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	3572	100	シロクラベラ型	下咽頭骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	11609	98	シロクラベラ型	下咽頭骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	1814	275	シロクラベラ型	下咽頭骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11420	2	イロブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	2034	106	アオブダイ属	上咽頭骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A12	11410	48	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A16	11448	52	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	12739	49	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11421	379	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11481	378	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	11572	354	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	11589	146	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11480	336	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11421	30	アオブダイ属	前上顎/歯骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	1728	32	アオブダイ属	前上顎/歯骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	2228	444	アオブダイ属	前上顎/歯骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11423	346	コチ科	歯骨		R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	11637	121	フグ科	前上顎/歯骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	2704	164	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A12	11410	1913	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11418	2030	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11423	1909	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A15	12738	1938	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A16	11450	2001	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	3254	1950	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11497	1907	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	11505	1924	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	11589	1900	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	11589	1986	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	11628	1928	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11423	1170	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11421	1301	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C12	3549	1295	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A15	1749	167	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	2898	1858	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	1028	1128	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11486	325	真骨類(保留)	角骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	2839	2533	ウミガメ	未節骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11486	2336	ウミガメ	髌骨板			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	2951	2124	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	2859	2129	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	11634	2122	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	1058	2506	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	2734	2227	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A15	3296	2272	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A16	11448	2323	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	11602	2229	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	2893	1375	ウミガメ	腹甲板			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	11570	2152	ウミガメ	腹甲板	f		<1>	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	3702	2532	ウミガメ	腹甲板	f		<1>	

第100表-12 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照.

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	3702	2510	ウミガメ	腹甲板	fr		<1>	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A14	11428	2334	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A16	11443	2331	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	11474	2315	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11487	2328	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C12	11563	2280	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	12739	2279	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	11580	2255	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	11616	2159	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A16	11442	1845	ウミガメ	未確認			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C12	11560	1849	ウミガメ	未確認			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C12	11560	1853	ウミガメ	未確認			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	11571	1854	ウミガメ	未確認			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B12	11458	2296	ウミガメ	未確認			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B13	1136	2171	ウミガメ	未確認			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C12	11563	1698	ウミガメ	上腹板		R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	11620	1597	ウミガメ	腹甲板			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	1978	1666	イヌ	上顎骨	[P4M1M2]	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	2272	2505	イノシシ/ブタ	前頭骨	眼窩上部	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	836	2218	イノシシ/ブタ	切歯骨	[[I1]×I2>I3×]	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	2249	1479	イノシシ/ブタ	上顎骨	[P3P4M1M2M3]	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	1791	1467	イノシシ/ブタ	上顎骨	[P4M1M2]	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C12	3551	1739	イノシシ/ブタ	上顎骨	[P4M1M2M3]	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	361	1749	イノシシ/ブタ	上顎骨	[M1M2]	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	494	1460	イノシシ/ブタ	上顎骨	[P3]	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A12	11416	1681	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M3	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B13	4035	1477	イノシシ/ブタ	下顎骨	[C×P2×P3×P4×M1M2]	L	1	♀
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	11635	1352	イノシシ/ブタ	下顎骨	[CP2×P3×]	L	1	♂
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	2965	1732	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M1(M2)×]	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A16	1556	1480	イノシシ/ブタ	下顎骨	[m1×m2m3]	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	818	1319	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M2(M3)]	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	2955	1462	イノシシ/ブタ	下顎骨	[m3M1]	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A16	2819	2219	イノシシ/ブタ	下顎骨	[I1I2P1×P2]	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	2954	1454	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M2M3]	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	1553	1791	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M2M3×]	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	2740	1442	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3]	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11493	1798	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3×]	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11421	1819	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P2×P3×]	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A15	11434	1618	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B12	11459	1615	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A16	11449	1260	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♀
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	11471	1339	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♀
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	9616	1627	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♀
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	11579	1338	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♀
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11423	1711	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M2	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	367	1738	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M2	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	442	1764	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	2271	1733	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11490	1743	イノシシ/ブタ	上/下顎遊離歯	M		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	2274	1822	ブタ	下顎骨	下顎角-関節突起	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	2279	2487	ウシ	前頭骨	角芯		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	1798	2546	ウシ	頬骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	1811	2628	ウシ	頬骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	376	2549	ウシ	頬骨		R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	2429	2437	ウシ	上顎骨	[dm3dm4(M1)]	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	2581	2459	ウシ	上顎骨	[P4]	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	1011	2457	ウシ	上顎遊離歯	dm2	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	750	2422	ウシ	上顎遊離歯	dm4	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	2580	2423	ウシ	上顎遊離歯	dm4	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	334	2456	ウシ	上顎遊離歯	P2	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	491	2458	ウシ	上顎遊離歯	P3	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	2899	2425	ウシ	上顎遊離歯	M1	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	1069	2431	ウシ	上顎遊離歯	M1	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	1138	2432	ウシ	上顎遊離歯	M1	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B13	11464	2411	ウシ	上顎遊離歯	M1	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	481	2406	ウシ	上顎遊離歯	M1	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	877	2408	ウシ	上顎遊離歯	M1	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	978	2436	ウシ	上顎遊離歯	M1/M2	L	1	おそらくM2
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	1008	2426	ウシ	上顎遊離歯	M1/M2	R	1	おそらくM2
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	399	2413	ウシ	上顎遊離歯	M2	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	3122	2428	ウシ	上顎遊離歯	M2	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	1082	2384	ウシ	下顎骨	[dm3dm4<M1>]	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	1081	2346	ウシ	下顎骨	[I1~I3×C×P2×P3P4M1M2M3下顎角]	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	2201	2373	ウシ	下顎骨	[I1~I3×C×P2P3P4M1M2M3]	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	2416	2374	ウシ	下顎骨	[I1~I3×C×P2P3P4M1M2M3下顎枝]	L	1	残存
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	2832	2613	ウシ	下顎骨	関節突起	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	1052	2383	ウシ	下顎骨	[dm3dm4]	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A14	511	2614	ウシ	下顎骨	関節突起	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A14	512	1980	ウシ	下顎骨	筋突起	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B12	468	2371	ウシ	下顎遊離歯	dm4	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	1027	2369	ウシ	下顎遊離歯	dm4	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	2256	2496	ウシ	下顎遊離歯	dm4	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A12	11411	2358	ウシ	下顎遊離歯	切歯	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A14	1753	2360	ウシ	下顎遊離歯	切歯	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	11589	2504	ウシ	下顎遊離歯	切歯	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	481	2693	ウシ	下顎遊離歯	切歯	R	1	

第100表-13 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照。

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11425	2387	ウシ	下顎遊離歯	M1	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B12	466	2390	ウシ	下顎遊離歯	M1	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	1017	2388	ウシ	下顎遊離歯	M1	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	2263	2389	ウシ	下顎遊離歯	M1	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11425	2352	ウシ	下顎遊離歯	M1	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B13	439	2353	ウシ	下顎遊離歯	M1	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	792	2351	ウシ	下顎遊離歯	M1	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	3406	2350	ウシ	下顎遊離歯	M1	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	871	2343	ウシ	下顎遊離歯	M1/M2	L	1	おそらくM2
HC	後期層	A-C/12-16	-	B13	1803	2363	ウシ	下顎遊離歯	M2	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	823	2361	ウシ	下顎遊離歯	M2	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	2377	2341	ウシ	下顎遊離歯	M2	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	11423	2376	ウシ	下顎遊離歯	M3	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	980	2377	ウシ	下顎遊離歯	M3	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B13	2909	2379	ウシ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	348	2367	ウシ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	11611	2394	ウシ	上/下顎遊離歯	臼歯	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	364	2397	ウシ	上/下顎遊離歯	臼歯	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	2260	2398	ウシ	上/下顎遊離歯	臼歯	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	2260	2392	ウシ	上/下顎遊離歯	臼歯	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	1177	2672	ウシ	尺骨	m	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11478	1269	ウシ	手根骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	863	1704	ウシ	手根骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	796	2449	ウシ	大腿骨	m	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A15	1767	2545	ウシ	脛骨	p	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	1234	2445	ウシ	脛骨	(p-)	L	1	スパイラルフラクチャー
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	503	2482	ウシ	踵骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	2971	2494	ウシ	踵骨		L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	820	2574	ウシ	中足骨	m	L	1	スパイラルフラクチャー
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	872	1708	ウシ	中節骨	w	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	11617	1328	ウシ	末節骨	d	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	1006	2547	ウマ	頬骨		R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	2270	2575	ウマ	上顎遊離歯	dm2?	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	3066	2667	ウマ	上顎遊離歯	dm3?	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	1068	2668	ウマ	上顎遊離歯	dm3	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	364	2664	ウマ	上顎遊離歯	dm3?	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	2434	2601	ウマ	上顎遊離歯	P2	L	1	dm2が混じる可能性あり
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	1797	2584	ウマ	上顎遊離歯	P2	L	1	dm2が混じる可能性あり
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	3383	2583	ウマ	上顎遊離歯	P2	L	1	dm2が混じる可能性あり
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	352	2580	ウマ	上顎遊離歯	P2	R	1	dm2が混じる可能性あり
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	876	2630	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	L	2	P3~M2のいずれか
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	1795	2657	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか, dm3を含む可能性あり
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	2302	2655	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか, dm3を含む可能性あり
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	975	2654	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか, dm3を含む可能性あり
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	1811	2629	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	1068	2666	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	833	2663	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか, dm3を含む可能性あり
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	1013	2680	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか, dm3を含む可能性あり
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	2963	2662	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか, dm3を含む可能性あり
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	2433	2661	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	3384	2415	ウマ	下顎骨	[P2×P3×P4×M1×M2×M3×]	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	2760	2414	ウマ	下顎骨	[P2×P3×P4×M1×M2×M3×]	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	3392	2598	ウマ	下顎骨	筋突起-関節突起	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A12	1804	2618	ウマ	下顎骨	連合部	L+R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	2255	2587	ウマ	下顎遊離歯	dm2?	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	2042	2420	ウマ	下顎遊離歯	dm2?	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	2432	2603	ウマ	下顎遊離歯	dm3	L	1	
HC	後期層?	A-C/12-16	-	B16	1000	2604	ウマ	下顎遊離歯	dm3	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	3705	2576	ウマ	下顎遊離歯	dm3	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	3405	2589	ウマ	下顎遊離歯	dm4?	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C12	3574	2611	ウマ	下顎遊離歯	dm4?	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B13	489	2439	ウマ	下顎遊離歯	P2	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A14	1834	2593	ウマ	下顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか
HC	後期層	A-C/12-16	-	B13	490	2592	ウマ	下顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	2276	2595	ウマ	下顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	748	2591	ウマ	下顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	2262	2609	ウマ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	452	2615	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		2	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A12	11412	2643	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B12	472	2639	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	11470	2624	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	453	2647	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	11504	2648	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	11579	2646	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	351	2625	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	365	2634	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	839	2635	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	341	2632	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	2257	2623	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	506	2569	ウマ	手/足根骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	793	2529	ウマ	手/足根骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	828	2565	ウマ	手/足根骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	2428	1311	ウマ	第2/4中手/中足骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	11627	1558	ウマ	第2/4中手/中足骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A13	3956	1317	ウシ/ウマ	寛骨(腸骨)		R	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B13	1118	2495	ウシ/ウマ	頸椎	棘突起		1	

第100表-14 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照.

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11482	1272	ウシ/ウマ	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	11585	2084	ジュゴン	頭骨	fr		1	焼
HC	後期層	A-C/12-16	-	A16	11448	2085	ジュゴン	頭骨	fr		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11492	2080	ジュゴン	頭骨	fr		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	900	2082	ジュゴン	頭骨	fr		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	2280	2692	ジュゴン	頭骨?	fr		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A15	11433	2106	ジュゴン	椎骨	fr		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	825	2555	ジュゴン	上腕骨	(p-)-(d-)	R	1	幼獣
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	3134	2073	ジュゴン	橈骨	(p-)-(d-)	L	1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	11617	2136	ジュゴン	指骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	897	2137	ジュゴン	指骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	3030	2182	ジュゴン	肋骨	<p>->d		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A16	11445	2148	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A16	1583	2101	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B13	11462	2120	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B14	11470	2144	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11488	2117	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11487	2163	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	2772	2089	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	12739	2222	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	11569	2134	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	12739	2115	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	1024	2194	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	11607	2208	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	11609	2114	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	11604	2112	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	11613	2141	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	1001	2193	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A15	11434	2048	ジュゴン	肋骨	m		1	焼
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	420	2049	ジュゴン	肋骨	m		1	焼
HC	後期層	A-C/12-16	-	A15	1510	2091	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A15	1370	2061	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A15	1509	2087	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B12	3600	2067	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B15	11491	2100	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	1040	2064	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	11568	2190	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	1051	2050	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	363	2062	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	2198	2162	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	347	2095	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	977	2076	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	974	2065	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	11625	2187	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	2200	2088	ジュゴン	不明	fr		<1>	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A15	11434	2055	ジュゴン	不明	fr		<1>	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	11590	2054	ジュゴン	不明	fr		<1>	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	11614	2075	ジュゴン	不明	fr		<1>	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	11604	2138	ジュゴン	不明	fr		<1>	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	898	1710	イルカ	椎骨	椎体		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C14	11603	1556	哺乳類	頭頂骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	2742	998	哺乳類	腰椎			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C13	11565	1782	鳥/哺乳類同定不可	寛骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	11511	1108	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C12	475	1393	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	A15	11433	259	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	B16	11505	256	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C15	11610	255	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨			1	
HC	後期層	A-C/12-16	-	C16	11633	261	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨			1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C10	11546	321	フェウキダイト	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C10	11539	1208	フェウキダイト	前上顎骨		R	1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C9	11536	353	アオブダイト属	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C11	11554	200	ブダイト	椎骨			1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C10	3469	1869	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C11	11551	1877	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	D10	11666	1300	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C9	1930	1126	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	D10	11668	2271	ウミガメ	縁骨板			1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	D10	11668	2231	ウミガメ	縁骨板			1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C10	11542	2166	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C9	11537	2333	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C9	11535	2160	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C9	11537	2295	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	後期層	C-E/8-11	-	D10	11667	2312	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C11	11549		ウミガメ	不明	fr		<1>	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C9	11534		ウミガメ	不明	fr		<1>	
HC	後期層	C-E/8-11	-	E10	11727	1891	イヌ	下顎骨	[P2×P3×P4]	R	1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	D11	11678	1992	イヌ	下顎遊離歯	C	L	1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	D11	2626	2507	イヌ	脛骨	m	L	1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	D11	2167	1765	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M2]	L	1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C9	729	1367	イノシシ/ブタ	下顎骨	[CP4M1M2M3]	R	1	♀
HC	後期層	C-E/8-11	-	C9	729	1368	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I1	L	1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C10	11543	1286	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	後期層	C-E/8-11	-	C10	11543	1256	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	後期層	C-E/8-11	-	D11	11674	1716	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M		1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C8	11521	1741	イノシシ/ブタ	上/下顎遊離歯	M		1	

第100表-15 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照。

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考
HC	後期層	C-E/8-11	-	D9	11649	2359	ウシ	下顎遊離歯	切歯	L	1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C8	11523	2345	ウシ	下顎遊離歯	M1/M2	L	1	おそらくM2
HC	後期層	C-E/8-11	-	D11	2472	2470	ウシ	機骨	p	R	1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	D11	1948	2450	ウシ	大腿骨	m	L	1	カットマーク
HC	後期層	C-E/8-11	-	D11	1942	2561	ウシ	距骨		L	1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	D9	11645	1327	ウシ	足根骨			1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	D10	11665	2467	ウマ	下顎遊離歯	dm2	R	1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	D9	2055	2570	ウマ	手/足根骨			1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	D11	1947	2541	ウシ/ウマ	胸椎	棘突起		1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	E10	700	2508	ウシ/ウマ	肋骨	m		1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	E11	1226	1829	ジュゴン	肩甲骨	(d-)	R	1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	E11	1227	1828	ジュゴン	肩甲骨	(d-)	R	1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	E11	1228	1827	ジュゴン	肩甲骨	(d-)	R	1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	D9	11655	1555	ジュゴン	中手骨			1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	D11	11677	2165	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C9	2215	2086	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C11	11550	2140	ジュゴン	不明	fr		1	<1>
HC	後期層	C-E/8-11	-	D9	11654	2053	ジュゴン	不明	fr		1	<1>
HC	後期層	C-E/8-11	-	C11	3533	2671	イルカ	連合頸椎			1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	E10	1305	1383	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C8	11522	265	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨			1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	C9	11529	264	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨			1	
HC	後期層	C-E/8-11	-	D11	2155	1401	鳥/哺乳類同定不可	脛骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	11686	25	フェウダイ科	歯骨		R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	9797	311	クロダイ属	歯骨		L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	1091	1413	クロダイ属	歯骨		L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	11700	1183	ハマフェウキ型	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2235	174	フェウキダイ科	主上顎骨		L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	F15	11787	89	フェウキダイ科	主上顎骨		L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	11689	1214	フェウキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D16	11721	1203	フェウキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	F14	11781	1210	フェウキダイ科	前上顎骨		R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D16	11721	19	フェウキダイ科	歯骨		R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D12	11679	41	フェウキダイ科	角骨		R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D16	319	166	フェウキダイ科	椎骨			1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E14	2690	97	シロクラベラ型	下咽頭骨			1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	1123	443	アオブダイ属	上咽頭骨		R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2332	69	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	F13	1361	168	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	1044	1131	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	11702	356	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	9797	344	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E12	11740	345	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E14	11752	384	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	9797	144	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	1980	113	アオブダイ属	歯骨		L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E15	11768	120	アオブダイ属	歯骨		L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E13	3182	1937	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E14	2661	1862	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2791	1303	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E14	2660	1293	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E14	11752	1775	真骨類(保留)	主上顎骨		R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	11700	323	真骨類(保留)	前上顎骨		R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D15	11712	176	真骨類(保留)	前上顎骨			1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E14	2691	318	真骨類(保留)	未確認			1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E15	2683	2205	アオウミガメ	下顎骨		L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D12	11682	2268	ウミガメ	甲板	fr		1	<1>
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	2535	2151	ウミガメ	甲板	fr		1	<1>
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2561	2125	ウミガメ	甲板	fr		1	<1>
HC	後期層	D-F/12-16	-	E14	11756	2239	ウミガメ	甲板	fr		1	<1>
HC	後期層	D-F/12-16	-	E14	11752	2288	ウミガメ	甲板	fr		1	<1>
HC	後期層	D-F/12-16	-	E15	1649	1848	ウミガメ	未確認			1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E15	11763	2044	ウミガメ	未確認			1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	11694	1876	イヌ	下顎遊離歯	C	L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E14	11750	1807	イヌ	下顎骨	[M1×M2×M3×]	L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	11695	1995	イヌ	下顎骨	[P3×P4×M1×M2×M3×]	R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2334	1773	イノシシ/ブタ	上顎骨	[P4×M1M2×]	R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	9797	1657	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	dm3	R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D16	940	1734	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3]	L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	1089	1754	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M2×M3]	R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D16	1141	1740	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I1	L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	1984	1280	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	後期層	D-F/12-16	-	D15	11713	1628	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♀
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	1090	1358	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M2	R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E16	1074	1481	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E15	11767	2452	ウシ	上顎遊離歯	P3	L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E14	2662	2433	ウシ	上顎遊離歯	M1	L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2803	2430	ウシ	上顎遊離歯	M2	R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	2537	2403	ウシ	上顎遊離歯	M3	L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	2801	2465	ウシ	上顎遊離歯	M3	R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D15	335	2386	ウシ	下顎骨	[dm2×dm3×dm4×(M1)×M2×]	L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E15	1109	2466	ウシ	下顎骨	[(M1)×M2×]	R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D15	11708	1802	ウシ	下顎骨	関節突起	R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2347	2344	ウシ	下顎遊離歯	M1/M2	L	1	おそらくM2
HC	後期層	D-F/12-16	-	E15	801	2338	ウシ	下顎遊離歯	M1/M2	R	1	おそらくM2
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	11704	2463	ウシ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	

第100表-16 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照.

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	1124	2462	ウシ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2792	2391	ウシ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D16	799	2550	ウシ	環椎	fr		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D15	11708	1268	ウシ	手根骨			1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	F16	1605	2553	ウシ	寛骨(腸骨)		R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	F12	1251	2474	ウシ	脛骨	m-d		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	2584	2444	ウシ	脛骨	m-d	R	1	スパイラルフラクチャー
HC	後期層	D-F/12-16	-	D16	800	2473	ウシ	中足骨	m-<d->	L	1	スパイラルフラクチャー
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	1093	2443	ウシ	中足骨	m-<d->	L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2360	2585	ウマ	上顎遊離歯	P2	L	1	dm2が混じる可能性あり
HC	後期層	D-F/12-16	-	D15	332	2582	ウマ	上顎遊離歯	P2	R	1	dm2が混じる可能性あり
HC	後期層	D-F/12-16	-	D12	1974	2656	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか、dm3を含む可能性あり
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2366	2651	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか、dm3を含む可能性あり
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2779	2650	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか、dm3を含む可能性あり
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2452	2678	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか、dm3を含む可能性あり
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2780	2659	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか、dm3を含む可能性あり
HC	後期層	D-F/12-16	-	E16	1033	2679	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか、dm3を含む可能性あり
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	2542	2617	ウマ	下顎骨	下顎枝	R	1	カットマーク
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	2542	2600	ウマ	下顎骨	関節突起	R	1	カットマーク
HC	後期層	D-F/12-16	-	D15	336	2438	ウマ	下顎遊離歯	P2	R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E12	1190	2418	ウマ	下顎遊離歯	臼歯		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	639	2607	ウマ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	11686	2640	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	11688	2644	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2321	2637	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D16	319	2642	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	2354	2627	ウマ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E14	2657	2539	ウマ	踵骨		L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2358	2481	ウマ	中足骨	d		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D16	11715	1247	ウマ	手/足根骨			1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E15	1034	2567	ウマ	手/足根骨			1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	1979	2698	ジュゴン	頭骨	fr		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	1985	2697	ジュゴン	頭骨	fr		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2790	2531	ジュゴン	頭骨	fr		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2357	2079	ジュゴン	頭骨	fr		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	9797	2051	ジュゴン	頭骨	fr		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E14	3172	2535	ジュゴン	肋骨	p		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2795	2069	ジュゴン	肋骨	p-(d-)		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D16	925	2077	ジュゴン	肋骨	m		1	焼
HC	後期層	D-F/12-16	-	D12	9763	2164	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D15	11713	2179	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D15	11710	2132	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D16	11715	2210	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D16	1121	2195	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D16	1835	2145	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E12	11740	2209	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E14	11757	2118	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E14	11747	2116	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E15	11761	2133	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	F14	11782	2113	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	F15	1646	2119	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D14	2794	2184	ジュゴン	肋骨	m		1	焼
HC	後期層	D-F/12-16	-	D13	424	2186	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D15	11709	2330	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E14	2663	2098	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E16	2918	2696	ジュゴン	不明	fr		<1>	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E15	2684	1857	イルカ	椎骨	椎体		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E15	2684	1861	イルカ	椎骨	椎体		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E15	1172	2572	未同定	未確認			1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D16	963	1757	鳥/哺乳類同定不可	脛骨	m	L	1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	D15	11709	896	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E13	11744	898	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	E16	11770	874	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	F14	11777	613	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	後期層	D-F/12-16	-	F14	11776	258	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	H15	11814	153	クロダイ属	歯骨		L	1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1459	1129	フェウキダイ科	主上顎骨		R	1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1558	108	シロクラベラ型	下咽頭骨			1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1444	1366	アオブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1454	231	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1270	1313	アオブダイ属	歯骨		L	1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1454	369	ブダイ科	方骨		L	1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1586	1263	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1482	2571	真骨類(保留)	未確認			1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	11799	769	ウミガメ	尺骨			1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	11798	2292	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1460	2170	ウミガメ	未確認			1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1454	292	リクガメ	腹甲板			1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	11797	1906	イヌ	下顎骨	[M1M2×M3×]	R	1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G16	11809	1611	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	I1	R	1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	I16	1636	1450	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M3	L	1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1566	1334	イノシシ/ブタ	下顎骨	[CP1×]	R	1	♀
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	11798	1640	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P3]	R	1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G12	11790	1277	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1484	1306	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1458	1461	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M2	L	1	

第100表-17 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照。

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考
HC	後期層	G-J/12-16	-	G14	1443	1453	イノシシ/ブタ	上/下顎遊離歯	M		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	H14	11731	2366	ウシ	下顎遊離歯	dm4	R	1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	J15	1633	2526	ウシ	中節骨			1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	I14	708	2616	ウマ	下顎骨	[I1~I3×]	L	1	同一個体
HC	後期層	G-J/12-16	-	I14	708	2616	ウマ	下顎骨	[I1~I3×P1P2P3M1×M2×M3下顎枝]完存	R	1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G15	1659	2537	ウシ/ウマ	肋骨	p		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	H12	1826	2480	ウシ/ウマ	肋骨	p		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G15	1658	2509	ウシ/ウマ	肋骨	m		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1349	1825	ジュゴン	上腕骨	(d-)	R	1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1462	2070	ジュゴン	肋骨	p-m		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1348	2071	ジュゴン	肋骨	p-m		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	2697	2058	ジュゴン	肋骨	<p->		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1463	2108	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1437	2107	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1466	2143	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1347	2188	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G14	1442	2099	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G14	1643	2189	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G14	1354	2191	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1459	1405	イルカ	頭骨	fr		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	I16	1636	1449	哺乳類	側頭骨	岩様部		1	
HC	後期層	G-J/12-16	-	G13	1461	1320	未同定	未確認			1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T15	11864	188	フェウキダイ属	口蓋骨		R	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T13	11853	24	フェウキダイ科	歯骨		R	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	S15	11830	342	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	S13	11819	1925	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T13	11844	1868	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T13	11850	1930	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T14	11858	1888	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	S16	11835	1262	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	S14	1907	1127	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T15	1382	284	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	S14	11826	767	ウミガメ	上腕骨			1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T13	11853	1594	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	後期層	S-T/13-16	-	S14	1906	1647	イヌ	下顎骨	[I1×I2×I3×CP2]	R	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	S15	11831	1993	イヌ	下顎遊離歯	C	L	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T14	1699	2047	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M1]	L	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T13	11843	1581	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P4×M1M2×(M3)]	R	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T13	11844	1621	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I1	R	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T13	11847	1278	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	後期層	S-T/13-16	-	T14	3145	1255	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	後期層	S-T/13-16	-	T15	1754	1737	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	L	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T15	11863	1717	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M		1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T15	1903	2424	ウシ	上顎骨	[P2P3P4]	R	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	S15	1706	2401	ウシ	上顎遊離歯	dm4	L	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	S16	11836	2454	ウシ	上顎遊離歯	P2	L	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	S15	1678	2451	ウシ	上顎遊離歯	P4	L	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	S15	1681	2435	ウシ	上顎遊離歯	M1	L	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	S13	510	2412	ウシ	上顎遊離歯	M2	L	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T15	1758	2402	ウシ	上顎遊離歯	M3	L	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	S15	1759	2357	ウシ	下顎遊離歯	切歯	L	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T15	1651	2356	ウシ	下顎遊離歯	P3	R	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T14	1741	2497	ウシ	下顎遊離歯	P4	L	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	S15	1670	2499	ウシ	下顎遊離歯	P4	R	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	S14	846	2349	ウシ	下顎遊離歯	M1	R	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T14	11860	2364	ウシ	下顎遊離歯	M2	L	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T14	11860	2378	ウシ	下顎遊離歯	M3	L	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T15	1650	2552	ウシ	脛骨		L	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	S13	509	2446	ウシ/ウマ	脛骨	m	R	1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T13	2843	2078	ジュゴン	肋骨	p		1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T13	11853	2135	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T16	1392	2103	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	S-T/13-16	-	T14	11855	878	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	後期層	-	-	T12	891	283	シロクラベラ型	下咽頭骨			1	
HC	後期層	-	-	T11	11837	1917	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	後期層	-	-	D18	11722	1344	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C		1	♂
HC	後期層	-	-	E17	11771	1703	ウシ	手根骨			1	
HC	後期層	-	-	B17	1104	2652	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか、dm3を含む可能性あり
HC	後期層	-	-	T12	781	2612	ウマ	下顎遊離歯	P2	L	1	
HC	後期層	-	-	B11	11454	2645	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	後期層	-	-	F11	1240	2544	ウシ/ウマ	大腿骨	d		1	
HC	後期層	-	-	G11	1602	2097	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	後期層	-	-	A11	11408	268	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨			1	
HC	SK01	-	-	B10	12704	1283	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	SK02	-	-	C9	12709	1947	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	SK02	-	-	C9	12706	1608	イヌ	下顎遊離歯	C	R	1	
HC	SK02	-	-	C9	12706	1816	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P4×M1×M2×]	R	1	
HC	SK02	-	-	C9	12709	1329	ウマ	中節骨	w		1	
HC	SK02	-	-	C9	2207	2139	ジュゴン	不明	fr		<1>	
HC	クムイ	-	-	H12	1830	315	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	クムイ	-	-	F12	1323	2468	ウシ	上腕骨	m-d	L	1	
HC	クムイ	-	-	F12	1319	2476	ウシ	脛骨	m	L	1	
HC	クムイ	-	-	G12	1854	2556	ウシ/ウマ	頸椎	棘突起		1	
HC	クムイ	-	-	G12	1859	2104	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	攪乱	-	-	B12	12682	26	ウツボ科	歯骨		L	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	11884	134	クロダイ属	前上顎骨		L	1	

第100表-18 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照.

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考
HC	不明	-	-	F14	12083	473	ハマフェウキ型	前上顎骨		L	1	
HC	不明	-	-	C14	12017	11779	ハマフェウキ型	前上顎骨		L	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	11889	496	ハマフェウキ型	前上顎骨		R	1	
HC	不明	-	-	F14	12082	183	フェウキダイ属	口蓋骨		R	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A16	11894	152	フェウキダイ科	主上顎骨		L	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	11889	124	フェウキダイ科	主上顎骨		R	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	11888	126	フェウキダイ科	主上顎骨		R	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	B15	11897	128	フェウキダイ科	主上顎骨		R	1	
HC	不明	-	-	C14	12015	1215	フェウキダイ科	前上顎骨		L	1	
HC	撿乱	-	-	A15	12679	14	フェウキダイ科	歯骨		L	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T14	12593	9	フェウキダイ科	歯骨		L	1	
HC	表採	-	-	-	12678	23	フェウキダイ科	歯骨		R	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	11887	15	フェウキダイ科	歯骨		R	1	
HC	不明	-	-	F14	12082	43	フェウキダイ科	角骨		R	1	
HC	不明	-	-	-	不明	2022	タイ型	椎骨			1	
HC	不明	-	-	B14	593	99	シクロラペラ型	下咽頭骨			1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	S15	3474	102	シクロラペラ型	下咽頭骨			1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	11888	73	ペラ科	前上顎骨		L	1	
HC	不明	-	-	A13	11965	1	イロブダイ属	下咽頭骨			1	
HC	不明	-	-	F14	12083	382	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	
HC	不明	-	-	C14	12017	143	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	B15	11897	331	アオブダイ属	歯骨		R	1	
HC	不明	-	-	J17	12149	1270	モンガラカワハギ科	歯骨			1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T12	12736	28	フグ科	前上顎骨		L	1	
HC	撿乱	-	-	B9	12681	1981	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	撿乱	-	-	T11	12692	2005	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	-	-	B15	11989	1889	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	-	-	C16	12023	1934	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	-	-	D14	12044	1944	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	-	-	F17	12091	1946	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	-	-	J14	12139	1939	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	-	-	T12	12170	2004	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A16	11895	1914	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	S15	12168	1880	ハリセンボン科	前上顎骨			1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	S15	11900	1265	ハリセンボン科	歯骨			1	
HC	不明	-	-	-	不明	1407	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	不明	-	-	-	不明	1406	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	
HC	不明	-	-	-	不明	618	ウミガメ	上腕骨			1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	S14	2792	1376	ウミガメ	指骨			1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	B14	469	233	ウミガメ	末節骨			1	
HC	不明	-	-	A12	527	1412	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	不明	-	-	C14	545	2127	ウミガメ	肋骨板			1	
HC	不明	-	-	C17	12026	2155	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	不明	-	-	-	不明	2236	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T14	3278	2126	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	11889	2232	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	B16	11899	2234	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T14	12593	2324	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	不明	-	-	E11	599	2128	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	11886	2269	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	11892	2287	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	S15	12166	2274	ウミガメ	甲板	fr		<1>	
HC	不明	-	-	-	不明	1851	ウミガメ	未確認			1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	B15	11898	1322	ウミガメ	未確認			1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	11888	2297	ウミガメ	未確認			1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	11890	1701	ウミガメ	縁甲板			1	
HC	不明	-	-	D12	12033	1564	ネズミ	上腕骨	m-d	L	1	
HC	不明	-	-	D12	12033	1576	ネズミ	大腿骨	<p>->m	L	1	
HC	不明	-	-	J15	12145	1650	ネズミ	脛骨	m		1	
HC	不明	-	-	E16	12065	1607	イヌ	上顎遊離歯	C	R	1	
HC	不明	-	-	D12	12033	1559	イヌ	下顎骨	[M1×M2]	R	1	
HC	不明	-	-	H20	12121	2486	シカ	橈骨	<p>-><d>	L	1	
HC	不明	-	-	J14	516	2491	イノシシ/ブタ	前頭骨-頭頂骨		R	1	
HC	不明	-	-	F17	269	1588	イノシシ/ブタ	上顎骨	[C×P2m1m2m3(P4)M1×]	L	1	
HC	不明	-	-	-	不明	1523	イノシシ/ブタ	上顎骨	[(P3)(P4)]	L	1	
HC	撿乱	-	-	D11	12688	1535	イノシシ/ブタ	上顎骨	[M1M2]	R	1	
HC	不明	-	-	-	不明	1653	イノシシ/ブタ	上顎骨	[M2]	R	1	
HC	不明	-	-	G11	12097	1549	イノシシ/ブタ	上顎骨	[m3M1]	R	1	
HC	不明	-	-	-	不明	1997	イノシシ/ブタ	上顎骨	[P1×(P2)]	R	1	
HC	不明	-	-	C11	11999	1667	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	dm4	L	1	
HC	不明	-	-	B14	11982	1610	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	I1	R	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	11887	1351	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	不明	-	-	C14	12014	1659	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	P2	R	1	
HC	不明	-	-	C11	11999	1662	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M1	L	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	S12	3492	1455	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M3	L	1	
HC	不明	-	-	K14	12158	1684	イノシシ/ブタ	上顎遊離歯	M3	R	1	
HC	不明	-	-	F16	12084	1642	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M1]	L	1	
HC	不明	-	-	E19	159	1788	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M1M2(M3)×]	L	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	S15	3762	1473	イノシシ/ブタ	下顎骨	[c×m1×m3M1×]	L	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T14	12593	1641	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M1]	L	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	S14	3488	1756	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3]	L	1	
HC	撿乱	-	-	B13	12684	1809	イノシシ/ブタ	下顎骨	吻端	R	1	
HC	不明	-	-	H14	209	1476	イノシシ/ブタ	下顎骨	[Cm1m2m3(P3)(P4)]	R	1	
HC	不明	-	-	E16	12065	1654	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M3]	R	1	
HC	不明	-	-	-	不明	1545	イノシシ/ブタ	下顎骨	[m3M1(M2)]	R	1	
HC	不明	-	-	B16	124	1771	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P3P4M1]	R	1	

第100表-19 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

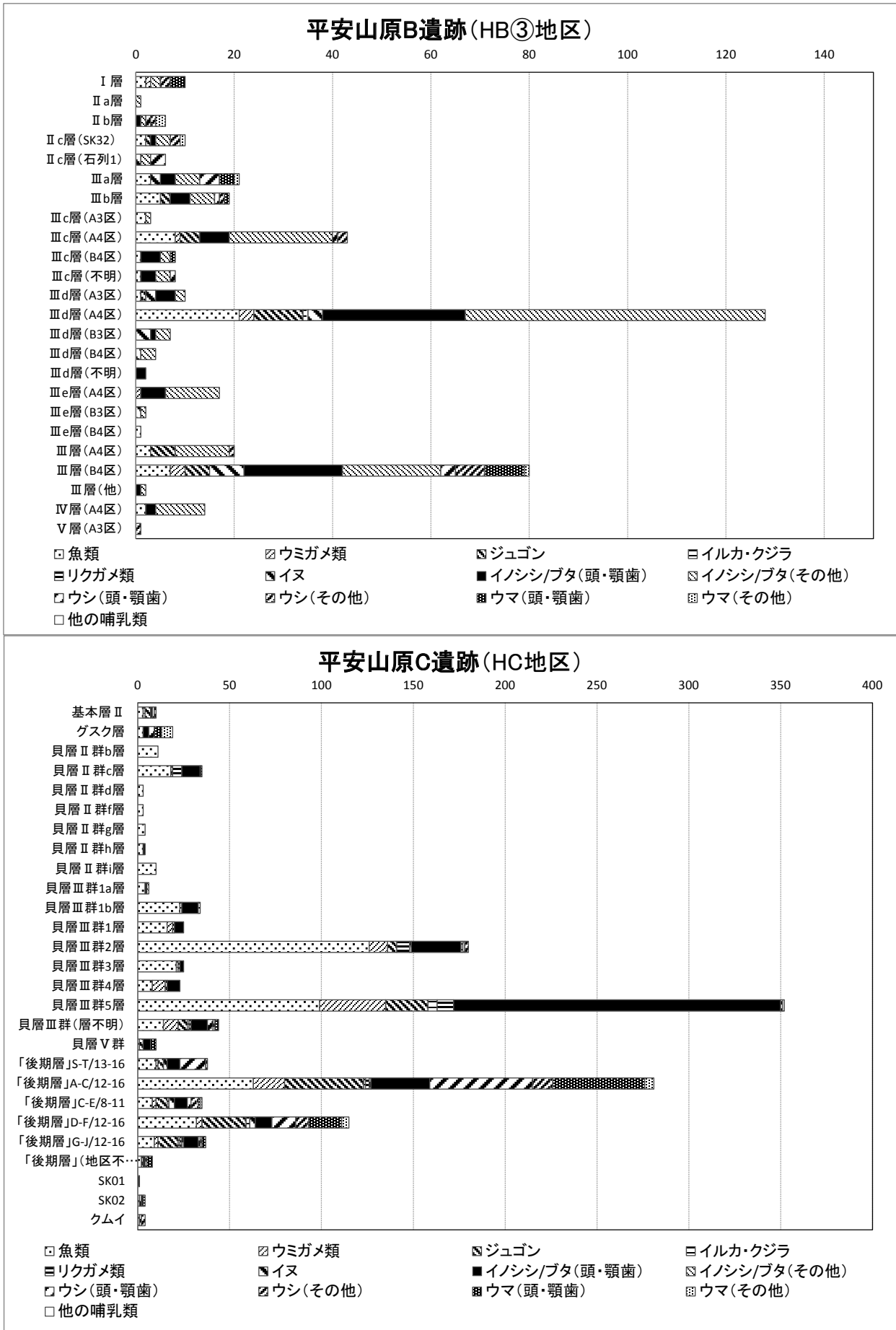
* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照。

遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T14	12593	1998	イノシシ/ブタ	下顎骨	[P3P4M1M2]	R	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T13	4801	1431	イノシシ/ブタ	下顎骨	[Cm1m2m3(P4M1M2×)]	R	1	♀
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T13	4801	1466	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M2M3]	R	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T13	4801	1355	イノシシ/ブタ	下顎骨	[M2M3×]	R	1	
HC	不明	-	-	K14	12160	1686	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	dm4	L	1	
HC	不明	-	-	B14	11985	1688	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	dm4	R	1	
HC	不明	-	-	G18	12104	1622	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I1	R	1	
HC	不明	-	-	J17	55	1735	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	L	1	
HC	表採	-	-	-	12678	1613	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	R	1	
HC	不明	-	-	K16	359	1417	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	I2	R	1	
HC	不明	-	-	D15	331	2620	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A16	3675	1282	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	L	1	♂
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	3806	1246	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T14	12593	1258	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	C	R	1	♂
HC	不明	-	-	D12	12030	1690	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	P3	R	1	
HC	不明	-	-	-	不明	1693	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	P4	R	1	
HC	不明	-	-	B17	191	1472	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	L	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T14	3475	1463	イノシシ/ブタ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HC	不明	-	-	C11	11999	1744	イノシシ/ブタ	上/下顎遊離歯	M		1	
HC	不明	-	-	-	不明	161	イノシシ/ブタ	上/下顎遊離歯	M		1	
HC	不明	-	-	G20	12108	1337	ウシ	前頭骨	角芯		1	
HC	不明	-	-	K14	456	2404	ウシ	上顎遊離歯	dm4	R	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	S15	12168	2405	ウシ	上顎遊離歯	dm4	R	1	
HC	不明	-	-	C16	271	2453	ウシ	上顎遊離歯	P2	L	1	
HC	不明	-	-	B14	11985	2455	ウシ	上顎遊離歯	P2	R	1	
HC	不明	-	-	J14	310	2434	ウシ	上顎遊離歯	M1	L	1	
HC	不明	-	-	B14	590	2407	ウシ	上顎遊離歯	M1	R	1	
HC	不明	-	-	F17	12090	2409	ウシ	上顎遊離歯	M1	R	1	
HC	不明	-	-	J14	290	2410	ウシ	上顎遊離歯	M1	R	1	
HC	不明	-	-	G17	132	2427	ウシ	上顎遊離歯	M2	R	1	
HC	不明	-	-	I19	49	2429	ウシ	上顎遊離歯	M2	R	1	
HC	不明	-	-	J18	35	2464	ウシ	上顎遊離歯	M3	R	1	
HC	不明	-	-	-	4632	2368	ウシ	下顎骨	[dm2dm3dm4(M1)]	L	1	
HC	不明	-	-	C14	555	2382	ウシ	下顎骨	[dm2dm3dm4]	R	1	
HC	不明	-	-	F15	232	2385	ウシ	下顎骨	[dm2dm3dm4]	R	1	
HC	不明	-	-	I19	51	2597	ウシ	下顎骨	筋突起-関節突起	R	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	3739	2421	ウシ	下顎骨	[I1~I3×C×P2P3P4×M1M2M3]	R	1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	3770	2596	ウシ	下顎骨	筋突起-関節突起	R	1	
HC	不明	-	-	C14	546	2370	ウシ	下顎遊離歯	dm4	R	1	
HC	不明	-	-	E12	571	2365	ウシ	下顎遊離歯	dm4	R	1	
HC	擾乱	-	-	B12	12682	2503	ウシ	下顎遊離歯	切歯	L	1	
HC	不明	-	-	E14	12058	2621	ウシ	下顎遊離歯	切歯	L	1	
HC	不明	-	-	I18	12133	2501	ウシ	下顎遊離歯	切歯	R	1	
HC	不明	-	-	C14	566	2355	ウシ	下顎遊離歯	P2	R	1	
HC	不明	-	-	F11	264	2500	ウシ	下顎遊離歯	P3	L	1	
HC	不明	-	-	D14	563	2354	ウシ	下顎遊離歯	M1	R	1	
HC	不明	-	-	C17	120	2339	ウシ	下顎遊離歯	M1/M2	R	1	おそらくM2
HC	不明	-	-	I14	257	2340	ウシ	下顎遊離歯	M1/M2	R	1	おそらくM2
HC	不明	-	-	I19	45	2362	ウシ	下顎遊離歯	M2	L	1	
HC	不明	-	-	C14	559	2342	ウシ	下顎遊離歯	M2	R	1	
HC	不明	-	-	E19	12070	2380	ウシ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HC	不明	-	-	E18	101	2400	ウシ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	
HC	不明	-	-	H15	258	2399	ウシ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	
HC	不明	-	-	I14	6	2460	ウシ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	
HC	不明	-	-	J14	12143	2396	ウシ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	
HC	不明	-	-	J15	252	2395	ウシ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	
HC	不明	-	-	K14	12160	2461	ウシ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	
HC	不明	-	-	K14	412	2393	ウシ	上/下顎遊離歯	臼歯		1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	S15	3340	2440	ウシ	上腕骨	d	L	1	スパイラルフラクチャー
HC	不明	-	-	E12	570	2441	ウシ	橈骨	<p>	R	1	スパイラルフラクチャー
HC	不明	-	-	D10	144	2573	ウシ	手根骨			1	
HC	不明	-	-	C18	249	2471	ウシ	中手骨	w	R	1	
HC	不明	-	-	H20	29	2472	ウシ	中手骨	p	L	1	スパイラルフラクチャー
HC	不明	-	-	J14	301	1403	ウシ	中手骨	m		1	
HC	不明	-	-	D12	567	2479	ウシ	寛骨	臼	L	1	カットマーク
HC	不明	-	-	C16	125	2488	ウシ	寛骨	臼	R	1	
HC	不明	-	-	K13	312	2485	ウシ	大腿骨	m	L	1	
HC	不明	-	-	D12	214	2543	ウシ	膝蓋骨		L	1	
HC	不明	-	-	F18	61	2475	ウシ	脛骨	m	L	1	スパイラルフラクチャー
HC	不明	-	-	G10	12096	1244	ウシ	距骨		R	1	
HC	不明	-	-	H20	12122	1326	ウシ	足根骨			1	
HC	不明	-	-	B17	162	2442	ウシ	中足骨	p	R	1	
HC	不明	-	-	J14	515	2527	ウシ	中節骨			1	
HC	不明	-	-	F16	296	2548	ウシ?	寛骨(座骨)		R	1	
HC	不明	-	-	C14	547	2665	ウマ	上顎遊離歯	dm3?	R	1	
HC	不明	-	-	E14	326	2581	ウマ	上顎遊離歯	P2	R	1	dm2が混じる可能性あり
HC	不明	-	-	D16	233	2653	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか、dm3を含む可能性あり
HC	不明	-	-	H14	208	2694	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか、dm3を含む可能性あり
HC	不明	-	-	B14	11981	2658	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか、dm3を含む可能性あり
HC	不明	-	-	B15	11987	2676	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか、dm3を含む可能性あり
HC	不明	-	-	F16	224	2660	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか、dm3を含む可能性あり
HC	不明	-	-	J14	311	2677	ウマ	上顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか、dm3を含む可能性あり
HC	不明	-	11層	T8	757	2599	ウマ	下顎骨	筋突起	L	1	
HC	不明	-	-	C16	272	2588	ウマ	下顎遊離歯	dm4	L	1	
HC	不明	-	-	C14	12016	2606	ウマ	下顎遊離歯	dm4	R	1	
HC	不明	-	-	C17	1210	2590	ウマ	下顎遊離歯	dm4	R	1	

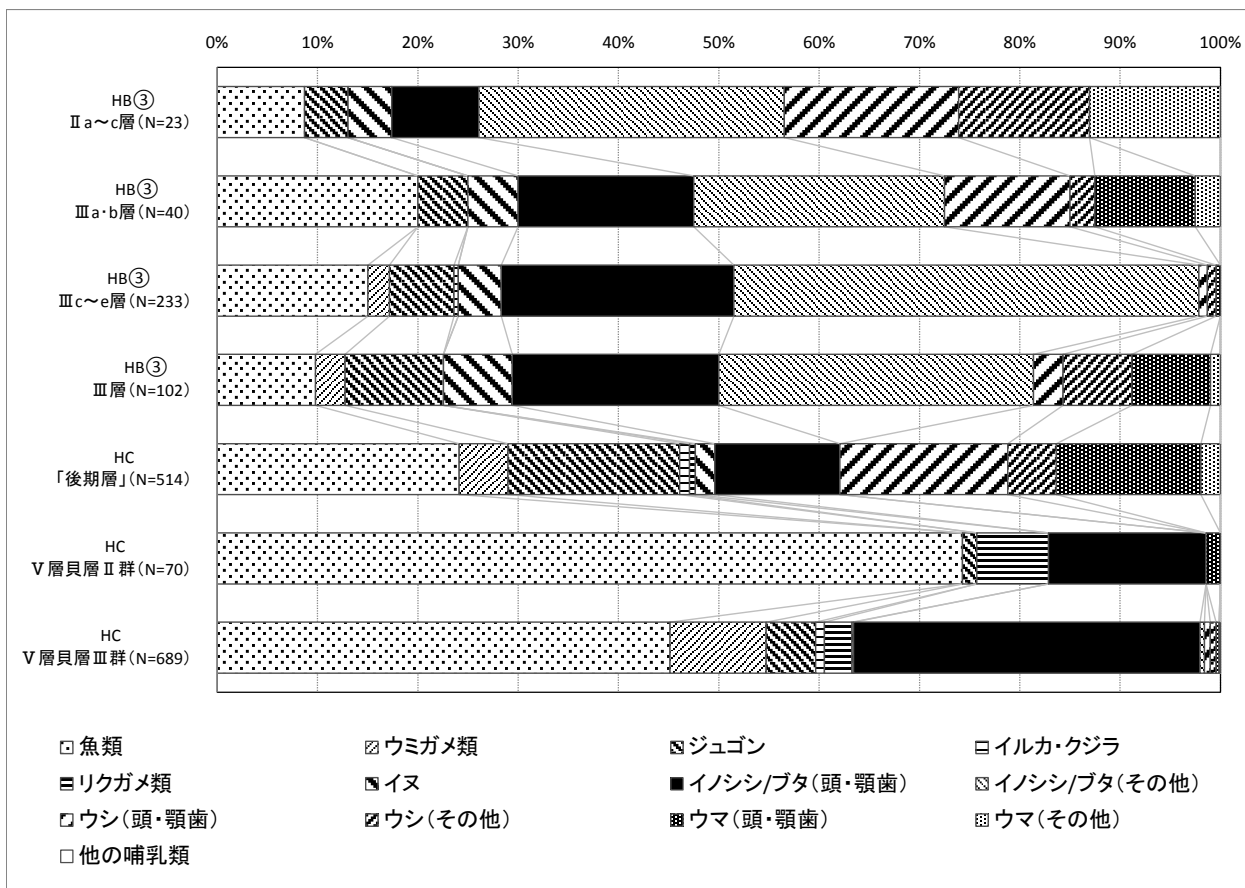
第100表-20 平安山原C遺跡(HC地区)から採集された脊椎動物遺体の同定結果

* 残存位置と数に関する凡例は第99表を参照.

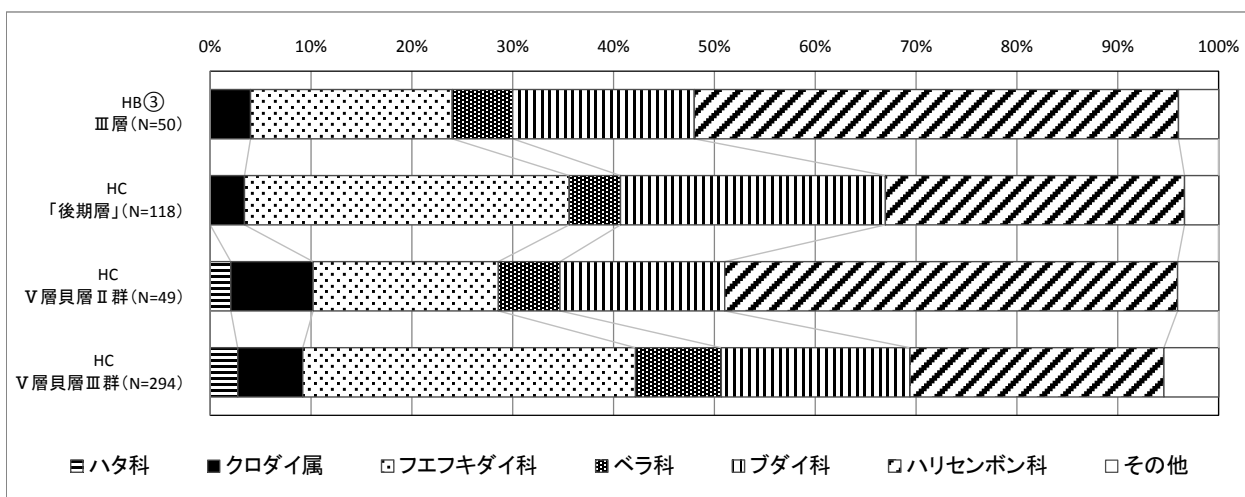
遺跡	層準	群・地区	細別層	グリッド	台帳番号	骨番号	種類	部位	残存位置*	左右	数*	備考
HC	不明	-	-	D11	611	2605	ウマ	下顎遊離歯	dm4	R	1	
HC	不明	-	-	K14	413	2602	ウマ	下顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか、dm3を含む可能性あり
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T13	4804	2579	ウマ	下顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T13	4802	2578	ウマ	下顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T13	4806	2577	ウマ	下顎遊離歯	臼歯	L	1	P3~M2のいずれか
HC	不明	-	-	B13	488	2594	ウマ	下顎遊離歯	臼歯	R	1	P3~M2のいずれか
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T14	3142	2608	ウマ	下顎遊離歯	M3	R	1	
HC	不明	-	-	C14	554	2631	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		2	
HC	不明	-	-	A12	525	2622	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	不明	-	-	B14	594	2641	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	不明	-	-	C14	556	2636	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	不明	-	-	C14	12014	2638	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	不明	-	-	C14	12015	2649	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	不明	-	-	D17	139	2626	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T14	3120	2633	ウマ	上/下顎遊離歯	切歯		1	
HC	不明	-	-	J14	457	2554	ウマ	肩甲骨		R	1	
HC	表土掘削	-	-	T15	12715	2478	ウマ	中手骨	p-<d->	R	1	
HC	不明	-	-	D14	581	2381	ウマ	大腿骨	p		1	
HC	不明	-	-	D11	147	2477	ウマ	脛骨	m	R	1	カットマーク・スパイラルフラクチャー
HC	不明	-	-	E12	142	2568	ウマ	手/足根骨			1	
HC	不明	-	-	G14	308	2566	ウマ	手/足根骨			1	
HC	不明	-	-	J14	448	1356	ウマ	中節骨			1	
HC	不明	-	-	E13	387	2542	ウマ?	中足骨?	m		1	スパイラルフラクチャー
HC	不明	-	-	F16	225	2673	ウシ/ウマ	側頭骨	岩様部		1	
HC	不明	-	-	F16	329	2489	ウシ/ウマ	頸椎			1	
HC	不明	-	-	A13	4800	2484	ウシ/ウマ	胸椎			1	
HC	不明	-	-	C17	164	981	ウシ/ウマ	胸椎			1	
HC	不明	-	-	J14	238	2530	ウシ/ウマ	椎骨	椎体		1	
HC	不明	-	-	C12	534	2469	ウシ/ウマ	上腕骨	<d->	R	1	
HC	不明	-	-	A12	525	2447	ウシ/ウマ	脛骨	m	R	1	
HC	不明	-	-	E18	109	2448	ウシ/ウマ	脛骨	m	R	1	
HC	不明	-	-	E14	226	2027	ジュゴン	椎骨	棘突起		1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	11887	1243	ジュゴン	肋骨	p		1	
HC	不明	-	-	D13	12034	2207	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	不明	-	-	E12	572	2102	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	不明	-	-	H11	1203	2110	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	不明	-	-	K15	12162	2109	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	不明	-	黒色混貝層	-	12712	2149	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	不明	-	-	B15	11987	2094	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	不明	-	-	C12	12003	2185	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	不明	-	-	C14	585	2066	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	不明	-	-	E12	573	2063	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	不明	-	-	G16	25	2096	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	B15	11898	2059	ジュゴン	肋骨	m		1	焼
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	3807	2147	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	11889	2121	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	3808	2695	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T12	12601	2178	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T12	12599	2142	ジュゴン	肋骨	m		1	
HC	不明	-	-	F14	12082	2056	ジュゴン	不明	fr		<1>	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T15	4050	2551	クジラ?	頭骨	fr		1	
HC	不明	-	-	-	不明	1078	哺乳類	胸椎			1	
HC	不明	-	-	-	不明	1068	哺乳類	胸椎			1	
HC	不明	-	-	D12	12031	739	哺乳類	椎骨	m		1	
HC	不明	-	-	K14	277	1360	未同定	未確認			1	
HC	不明	-	-	A12	527	1424	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	不明	-	-	E12	231	1364	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	不明	-	-	K13	12155	880	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	不明	-	-	B16	11506	262	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨			1	
HC	不明	-	-	D13	12039	266	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨			1	
HC	不明	-	-	E15	12063	269	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨			1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T14	3334	1437	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨	m		1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	T16	11870	271	鳥/哺乳類同定不可	四肢骨			1	
HC	不明	-	-	-	161	1504	同定不可	椎骨	椎体		1	
HC	不明	-	-	-	不明	318	同定不可	椎骨	椎体		1	
HC	不明	-	-	F16	12084	359	同定不可	椎骨	椎体		1	
HC	不明	貝層Ⅲ群	-	A15	617	1419	同定不可	椎骨	椎体		1	



第186図 平安山原B遺跡(HB③地区)・C遺跡(HC地区)における脊椎動物遺体の層位別出土数と組成(NISP)。



第187図 平安山原B遺跡(HB③地区)・C遺跡(HC地区)における脊椎動物遺体の地区・層位別組成(NISP比).
* N \geq 20の地区・層準のみを表示した.



第188図 平安山原B遺跡(HB③地区)・C遺跡(HC地区)における魚類遺体の地区・層位別組成(NISP比).
* N \geq 20の地区・層準のみを表示した。フェエキダイ科はヨコシマクロダイ1点を含む。



エイ目目 1 尾棘 ウツボ科 2 歯骨 (L) ハタ科 3 第1 椎骨 4 歯骨 (L) アジ科 5・6 椎骨 7 主上顎骨 (R) フェダイ科 8 前上顎骨 (R) 9 歯骨 (R) クロダイ属 10 前上顎骨 (R) 11 歯骨 (L) ヨコシマクロダイ 12 前上顎骨 (LR 不明) フェフキダイ属 (ハマフエフキ型) 13 前上顎骨 (L) フェフキダイ科 14 口蓋骨 (R) 15 歯骨 (L) 16 歯骨 (R) 17 主上顎骨 (R) 18 角骨 (L) フェフキダイ属 (キツネフエフキ型) 19 前上顎骨 (L) ベラ科 20 歯骨 (L) 21 前上顎骨 (L) 22 角骨 (L) ベラ科 A 23 下咽頭骨 ベラ科 B 24 下咽頭骨 ベラ科 (シロクラベラ型) 25 上咽頭骨 (R) 26 下咽頭骨 ベラ科 (タキベラ型) 27 下咽頭骨



イロブダイ属 28 上咽頭骨 (R) 29 下咽頭骨 ブダイ科 30 方骨 (L) アオブダイ属 31 前上顎骨 (R) 32 同 (L) 33 上咽頭骨 (L) 34 同 35・36 下咽頭骨 37 歯骨 (L) 38 同 (R) コチ科 39 歯骨 (R) モンガラカワハギ科 40 前上顎骨 (R) フグ科 41 歯骨 (L) 42 前上顎骨 or 歯骨 43 前上顎骨 (L) ハリセンボン科 44 歯骨 45 前上顎骨 サメ類 46 椎骨

図版 130 脊椎動物遺体 1 (魚類)



ウミガメ類 1 上腕骨 (R) 2 同 (L) 3 末節骨 6・7 肋骨板 8 背甲板 (加工品?) 9 臀骨板 12 縁骨板
 アオウミガメ 4 下顎骨 (L) 5 剣状腹板 (R) リクガメ類 10 上腹板 (R) 11 内腹板 13 剣状腹板 (R)



イヌ 1・2・4 下顎骨 (R) 3 上顎骨 (L) 6 上腕骨 (L) 7 尺骨 (L) 8 大腿骨 (R) 9 同 (L) 10 脛骨 (L)
 イヌ? 5 上腕骨? (LR 不明、加工品?) ネズミ科 11 上腕骨 (L) 12 大腿骨 (L) 13 脛骨

図版 131 脊椎動物遺体 2 (上段: ウミガメ類・リクガメ類、下段: イヌ・ネズミ科)



ウマ 1 下顎骨 (L) 2 肩甲骨 (R) 3 距骨 (R) 4 踵骨 (R) 5 中手骨 (R) 6 同 (L) 7 中節骨 8・9 基節骨



イノシシ/ブタ 1 側頭骨 (L) 2 下顎骨 (R) 3 同 (L) 4 上顎C (R、オス) 5 下顎C (L、メス) 6 同 (L、オス) 7 環椎 8 軸椎 9 肩甲骨 (L) 10 上腕骨 (L) 11 尺骨 (R) 12 腕骨+尺骨 (L) 13 腕骨 (L)

図版 132 脊椎動物遺体 3 (上段：ウマ、下段：イノシシ/ブタ)



イノシシ/ブタ 1 大腿骨 (L) 2 脛骨 (R) 3 腓骨 (L) 4 踵骨 (R) 5 距骨 (L) 6 第4中足骨 (R) 7 第3中足骨 (R) 8 中節骨 9 末節骨 10 基節骨 11 寛骨 (R)



イノシシ/ブタ 1・2 下顎骨 (L・R) 3 下顎骨 (R) 4 上顎 C(R、オス) 5 下顎 C(L、メス) 6 同 (R、オス) 7 肩甲骨 (L) 8 上腕骨 (L) 9 尺骨 (L) 10 橈骨 (L) 11・12 大腿骨 (R) 13 同 (L) 14・15 脛骨 (R) 16 踵骨 (L) 17 距骨 (L) 18 寛骨 (R) 19 下顎骨 (R)

図版 133 脊椎動物遺体 4 (イノシシ/ブタ)

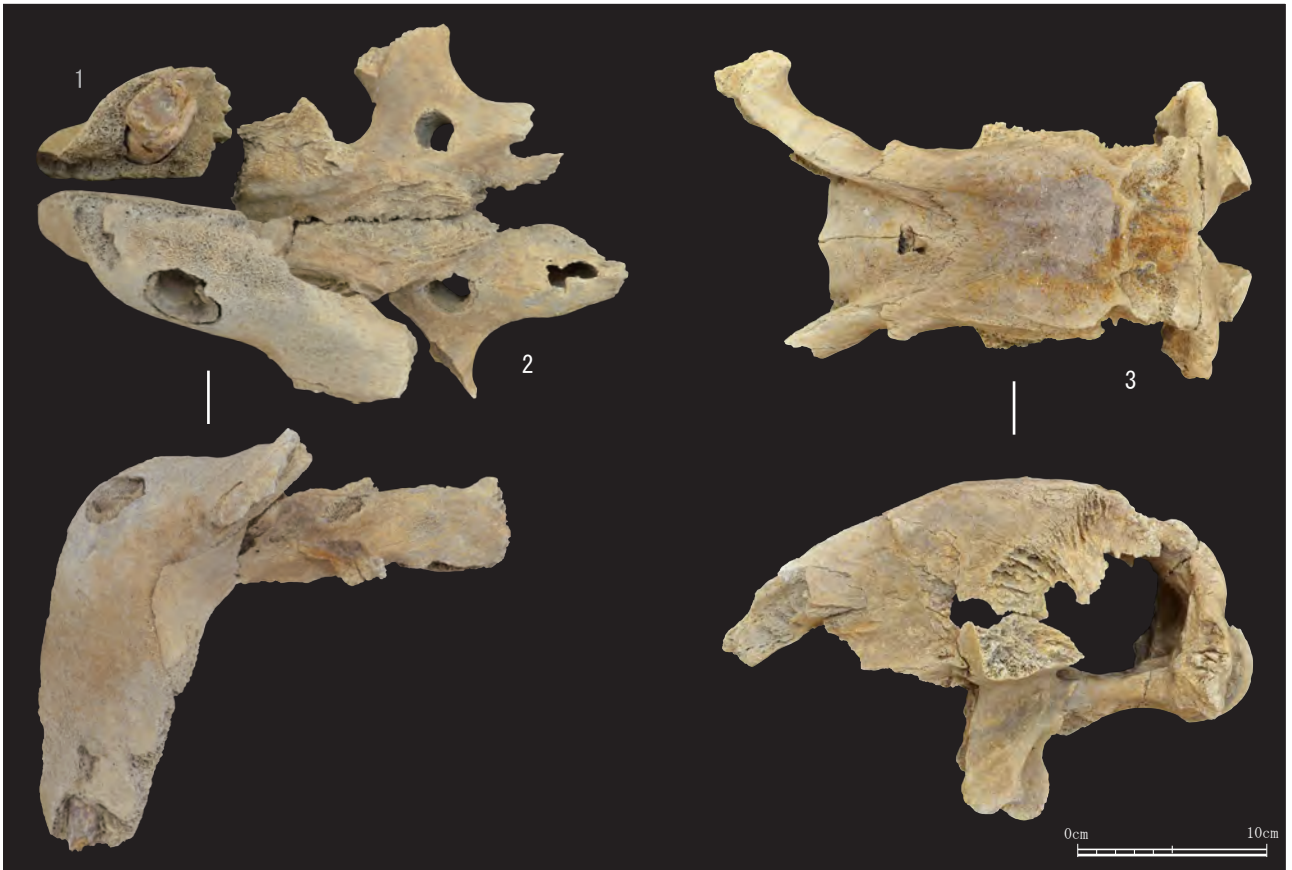


ウシ 1・2 前頭骨（角芯） 3 頬骨（L） 4 下顎骨（L） 5 上腕骨（L） 6 橈骨（R） 7 脛骨（R） 8 同（L） 9 距骨（R） 10 同（L）



ウシ 11 寛骨（L） 12 中手骨（R） 13 同（L） 14 中足骨（R） 15 同（L） 16 踵骨（L） 17 同（R） 18・19 中節骨 20 基節骨 21 末節骨

図版 134 脊椎動物遺体 5（ウシ）



ジュゴン 1 切歯骨 (R) 2 切歯骨 (L)+上顎骨 (L・R) 3 前頭骨+頭頂骨+後頭骨



ジュゴン 1 肋骨 2 椎骨 3 肩甲骨 (L) 4 上腕骨 (R) 5 同 (R、幼獣) 6 橈骨 (L) 7 中手骨
イルカ類 8 椎骨 9 連合頸椎

図版 135 脊椎動物遺体 6 (ジュゴン・イルカ類)

第2節 平安山原B遺跡と同C遺跡の貝類遺体および本地域の遺跡出土貝類のまとめ

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

平安山原B遺跡およびC遺跡は沖縄島中部西岸・北谷町に位置する沖縄貝塚時代後期から戦前までの遺跡であり、大面積の発掘調査が行われた地域に存在し、本遺跡もそのひとつである。平安山原B遺跡の貝類遺体に関しては、島袋（2008）と黒住（2015）により報告されており、今回のデータは新たに報告される地区のものである。興味深い本遺跡群の貝類遺体を検討する機会を与えて頂いたので、ここに簡単にではあるが結果を報告したい。また、両遺跡を含む本地域（キャンプ桑江北側地区）の遺跡出土貝類遺体に関する概略的なまとめも行った。報告に先立ち、種々お世話になった北谷町教育委員会の島袋春美・山城安生・東門研治の各氏、大量の貝類遺体の同定・集計・入力を行って頂いた資料室の方々に御礼申し上げる。

1. 平安山原B遺跡と同C遺跡

A. 対象サンプルと調査地点について

今回の報告対象サンプルは、平成21年度調査のHB③地区から平成21年度のHC地区にわたり、ピックアップ法によって得られたもので、土壌サンプルから抽出された遺体は含まれていない。得られた貝類は種の同定・出土部位・生死等を記録して、各グリッドの包含層および遺構ごとに集計され、第112表（CD収録データ）に示されている。報告者は、大部分の種の同定を行い、一部の誤同定と考えられる種に関しては沖縄の類似種に修正した。データが膨大であったため、前報の平安山原B遺跡と同様に（黒住, 2015）、出土数は同定標本数（NISP）として処理した。同定標本数の場合、チョウセンサザエ等は殻とフタ・破片が、二枚貝では左右殻と破片が、それぞれ1として集計され、破片の多くなる大形種や二枚貝で、最少個体数よりも過大評価となってしまう。ただ、今回のデータ間での比較には大きな影響を与えないと考えられる。

各時代の土器や他の人工遺物等で分布集中域が認められており、貝類でもグリッドを単位として、第190図に示したように、平安山原B遺跡（以下、平安山B；また適宜、遺跡を除いた）は①～④を、同C遺跡はⅡ群・Ⅲ群を分析の対象とした。各地区の考古代は、主に取りまとめ時の御教示による。なお、これらの分析対象以外からも当然貝類は出土しており、図版には分析対象の地区以外から出土した種も掲載している。

B. 結果

今回、総合計として290,718個体と膨大な数の貝類遺体が出土しており、他の地点とも併せて本遺跡からは海産腹足類38科167種、海産二枚貝類22科68種、淡水産腹足類4科8種、陸産腹足類3科9種が確認された。第105表に、今回の出土貝類のリストと生息場所類型を示した。

a) 優占種

今回報告の6地区の貝類で、いずれかの地区で全体の1%以上を占めるものを優占種として、第103表の左側に示した。なお、この23分類群が平安山Cの貝層Ⅲ群で約69%（上部）と約74%（下部）とやや低いほかは、全体の85%（④）から92%（Ⅱ群）とほとんど全てを占めていた。

6地区のうち、貝層Ⅲ群では、下部の5層が貝塚時代後1期後半の大当原式期の貝層として認識され、上部の1・1a・1b・2層は貝塚時代後2期前半のアカジャンガー式期のものと考えられてい

る。両者を比較すると、下部でイソハマグリ
の割合が高く、マガキガイ・シラナミ類等も
多く、チョウセンサザエ・サラサバテイラの
割合は低かった。一方、上部ではイソハマグ
リが減少し、マガキガイ等が多くなり、チョ
ウセンサザエ・サラサバテイラの割合が増加
していた。貝層Ⅱ群は、アカジャンガー式期
だが、Ⅲ群下部に類似し、イソハマグリがき
わめて優占していた。平安山Bの3地区(①
～③)は大当原式期とされ、その組成は類似
し、マガキガイ・シャコガイ類(シラナミ類等)



図版 136 ホシダカラ破損状態

が優占し、サラサバテイラも多く、イソハマグリは少ないという傾向が認められた。

また、この貝層Ⅲ群を中心に優占種とはならなかったが、ホシダカラも多く出土しており、その中には背面を人為的に欠如させているもの(図版 136)も、199 個体確認された(完形個体は 554 個体)。ホシダカラの背面部は、中部太平洋等ではタコ捕りのルアーに用いる例が知られているが、本遺跡群を含め沖縄の先史遺跡では普通には知られていない(本報告書第 40 表「貝製品出土量」)。そのため、図版 136 は軟体部=身を取り出すための定式化した破損形態を示していると理解されるのであろうが、単に食用とするだけであれば、背面からの強打や殻口からのテコの応用による半裁を行うと想定され、このような破損形態にはならないようにも思われる。今後、背面除去方法の検討や、背面部利用例の確認等が望まれる。

貝塚時代後期と近世のものを分析した結果、いくつかの傾向が認められた。一つ目は、イソハマグリの割合の変化で、平安山Cでは 7.8%以上で半数を占めるものもあったが、平安山Bでは 6.9%未滿に、さらに近世では 2%未滿に激減している傾向である。次いで、イソハマグリ以外では、マガキガイを中心にシャコガイ類等のサンゴ礁のイノーの貝が多く採集されていたこともわかる。一方で、平安山Bの貝塚時代後期と近世では河口干潟のアラスジケマンの割合が高かった。さらに、近代では、カワラガイ・リュウキュウシラトリ等の内湾の種の割合も増加していた。また、沖合の干瀬のチョウセンサザエと礁斜面のサラサバテイラは、どの時代を通して採集されており、むしろ近世で高い割合を示した。

サイズ組成：主な優占種およびヒレジャコ・シレナシジミの合計 10 種の大当原式期(HC 貝層Ⅲ群 5 と HB ③)とアカジャンガー式期(HC 貝層Ⅲ群 1～2)のサイズ組成を第 189 図に示した。今後、時代差や本地域の遺跡、あるいは他の遺跡との詳細な検討を行える詳細なデータを提供できている。

前報の平安山Aも結果(黒住, 2016)も加味して、いくつかの点を指摘しておきたい。サラサバテイラは小形の個体も多いものの、平安山Aと比較すると貝塚時代後期で大形のものが多い(黒住, 2002 も参照)。シラナミ類ではサイズは大きく変わらないが、大当原式期で 8cm 程度に明瞭なピークが認められている。ヒメジャコでは大当原式期からアカジャンガー式期にサイズが小形化しているようであり、この傾向は伊江島の具志原貝塚でも認められている(黒住, 1997)。マガキガイも不明瞭だが、同様にサイズ減少が認められるようである。なお、前報の平安山Aでは、本種の“殻高”としてしまったが、「殻径」の誤りである。その他、アラスジケマンのように平安山Bでは明瞭なピークを有するものの、他では不明瞭な種も存在していた。

2. キャンプ桑江北側地区における遺跡出土貝類組成の変化

これまでに本地域では長期間にわたる大規模な発掘調査が行われてきた。報告者はその多くにかかわらせて頂いてきており、ここでは後兼久原遺跡から平安山原A遺跡・大作原古墓群までの地域に存在する遺跡から出土する貝類遺体から想定される貝類利用と周辺環境の推定の概略を示しておきたい。

以前に示した本地域の遺跡から出土した暫定的な貝類遺体の変遷の表（黒住, 2014a）に、時代の明確ではなかった伊礼原B貝塚（中村, 1989）のカワラガイ・ヒメリュウキュウアサリの優占する自然貝層を除くなどの修正を行い、貝塚時代前期と新たに分析された平安山原地区のデータを追加して、第104表を作成した。この表では、各遺跡の層序認識の相違によって理解が全く異なることや、土器等で示される人工遺物の年代とその層に含まれる貝類遺体の時代が存在する可能性もあるが、暫定的なまとめとして提出しておきたい。以下は、この第104表に従って記述を進める。

A. 海産貝類の組成変化

a) 貝塚時代前期：本地域の伊礼原遺跡において、琉球列島として年代が古く、さらにまとまった貝類遺体群の稀有な例である前2期中葉の曾畑式期の貝層が報告されており、沖縄から絶滅したハイガイ（セイタカハイガイ型）が多く、サンゴ礁域のマガキガイ・チョウセンサザエ・サラサバテイラも優占する組成であった。その後、伊礼原Eでオキナワヒシガイが優占する自然貝層にチョウセンサザエ等の食用廃棄貝類が少数混じる堆積層が知られ、この層は前2期後葉の可能性もあると考えている。前3期の面縄前庭式期の土坑からはダテオキシジミが主体となり、マガキガイも多い遺体群を報告した。前3～4期と考えられるものは伊礼原Eのサンゴ礫層から得られており、マガキガイ・チョウセンサザエ等の多いものであった。後続する前5期の貝類群はうまく認識できていない。ただ、本地域では、前期の各時期で貝類の認められている遺跡数は少ない。

b) 貝塚時代後期：後1期初頭の阿波連浦下層式期の遺跡は少ないが、シャコガイ類・アラスジケマン等が多い例が報告されている。継続する後1期前半の浜屋原式期になると遺跡数・貝類出土量は増加し、イソハマグリが多く、マガキガイが次ぐという例が多い。後1期後半の大当原式期では遺跡数は多く、出土量はさらに増加するようで、マガキガイが主体で、イソハマグリが優占するもの（平安山C／Ⅱ群・Ⅲ群下部：第103表）、マガキガイ・アラスジケマンの多いタイプ（平安山B：第103表）、アラスジケマンが卓越する遺跡（小堀原）も見られ、優占種の類型が多様化するようである。後2期前半のアカジャンガー式期になると遺跡数は前の時期より減少し、マガキガイが優占するが、やはりイソハマグリやアラスジケマンの多い地区も存在する。後2期後半のフェンサ下層式期と明瞭に示されたものはなく、遺跡数は稀になっていると考えられる。報告者の判断で、台地上の大作原古墓群と、“後期終末～グスク初頭？”と教示を受けた海浜部の平安山BのⅣ層F～H地区2遺跡がこの時期の可能性があると考えたが、マガキガイ主体の状況に変化はなかった。

c) グスク時代：この地域ではグスク時代初期の遺構と遺物を有する重要な遺跡が発掘されている（後兼久原 [山城・島袋, 2003 ; 片桐, 2004]、小堀原 [山城・島袋, 2012]）。この時期では貝類遺体は極めて稀で、混入の可能性を否定できないが、やはりマガキガイが散見されている。グスク時代の主体期には遺跡は増加し、やはりマガキガイが多いものの、リュウキュウシラトリやウミニナ類の内湾の貝類が優占する遺跡も認められている。

d) 近世～近代：全体としては、やはりマガキガイが優占する遺跡が多く、シャコガイ類やリュウキュウシラトリ等が続く例が認められる。その具体例として、平安山Aで、近世以降で確実な地区の組成第103表に示した。同じ表の平安山Bの④地区も含めて検討すると、マガキガイが最多の

ものが6地区中の4つを占め、リュウキュウシラトリ・アラスジケマンが各1となっている。サンゴ礁のシャコガイ類・チョウセンサザエ・サラサバテイラも多いが、カワラガイ・マスオガイ・ヌノメガイ等の内湾の種が優占種となっている地区も多い。詳細に検討すると、シャゴウはかなり減少しており（第103表）、現在では沖縄島での生息が認められないハマグリ類（後端の丸いハマグリ類似種と尖るトゥドゥマリハマグリ）の両種）も近代に減少していた可能性がある。

e) 組成変化のまとめ：貝塚時代前2・3期には、優占種として、ハイガイ・ダテオキシジミが認められたが、それ以降は、戦前までマガキガイ・シャコガイ類・イソハマグリ・リュウキュウシラトリ・アラスジケマンが主体となり、チョウセンサザエ・サラサバテイラ・カワラガイが次ぐというパターンが、およそどの時代でも共通していた。ただ、a) 後期にイソハマグリの高割合、b) 後1期後半にアラスジケマンが大半を占める遺跡が存在する等、優占種のパターンが多様化するようになる、c) グスク時代以降に内湾のリュウキュウシラトリ等の種が優占種となる遺跡が増加するという変化は示されたと考えている。

B. 変化要因の検討

a) 環境変化

遺跡出土の食用海産貝類の変化を前述したが、ここでは、自然環境に関して考察する。

古い時代に優占していたハイガイとダテオキシジミは、泥質の潮間帯に生息する種であり、当時のナガサ川河口干潟が生息であったと考えられる。松田（2007）の示した地形分類図の河川右岸の後背湿地が想定され、河口の沖合には砂州が形成され、泥が堆積しやすい状況だった可能性が高い。

一方、前2期の可能性があるとした伊礼原Eの自然貝層は砂丘前面の潮上帯に形成されたものと推定され、貝類の組成は現在の内湾域のものと同様で、一帯が波当たりの弱い湾で、海側に砂丘等は形成されていなかったと考えられる。また、絶滅種や温暖種等はほぼ存在せず、現代と同じ海況であったことがわかる（黒住, 2014b も参照）。琉球列島における絶滅種であるハイガイ（セイタカハイガイ型）は、当初曾畑式期頃に分散・定着し、短期間に絶滅したと考えていたが（黒住, 2006）、その後の発掘資料から本地域では早く消滅したようであるが、沖縄島全体としては貝塚時代後期頃までは残存していたようであることもわかってきている。その後、大当原式期の小堀原でアラスジケマンが極めて優占する組成が認められており、遺跡前面の旧ナルカー（山城・島袋, 2012）の海側にアラスジケマンの生息できるような干潟が存在していたと思われる。この部分を含め地形分類図の丘陵側の後背湿地の一部はグスク時代には淡水巻貝・ヌノメカワニナの多産する水体となっていたことがわかる。

曾畑式期からチョウセンサザエ・サラサバテイラ等のサンゴ礁の干瀬・礁斜面に生息する種が優占種として出土しており、遺跡の周辺には現在と類似した形状のサンゴ礁が形成されていたと考えている（黒住, 2002 等）。ハイガイ等の泥質干潟の種の出土や干瀬の貝類が多くならないこと等の遺跡の貝類から、本地域の前面ではなく、これらの種は干瀬が岸から近い砂辺周辺で採集された可能性が高いと考えている。

このように考えると貝塚時代前2期後葉かと考えた時代以降、本地区の前面には“干瀬まで幅広いイノーを有する海域環境が形成されており、それ以降に大局的な変化はなかった”と考えられる。

陸域環境では、曾畑式期の貝層からはパンダナマイマイ等の人が改変した草地等の開放地に生息する種は認められず、林への人為的な影響はかなり小さかったと考えられている（黒住, 2007a）。その後も貝塚時代前3・4期には、北谷町には分布していないアマノヤマタカマイマイが発掘で発見さ

れており（黒住，2007b）、花粉分析でもアカガシ亜属・マテバシイ属の多いことが報告されて（パ
リノ・サーヴェイ，2014）、またグスク時代に絶滅した可能性のあるカツレンマイマイ（黒住，2011）もや
はり貝塚時代後期までは確実に抽出されていることから、後期までは斜面部の森林に大きな変化はなかった
可能性が高い。ただ、後1期前半にはパンダナマイマイの割合が増加しており、海浜部では浜堤等
の形成や、遺跡数の増加に伴い開けた環境が拡大したことも想定される。

b) 貝交易

弥生時代以降に北部九州へゴホウラやイモガイを供給した貝交易（例えば木下，1989等）に関し
て、本地域の発掘調査では、複数の貝集積や様々な形式を含めた貝輪加工品、あるいは交易に関連
したと推測できるダイミョウイモの出土（島袋，2010，2014；山城・島袋，2012）等、多大な成果
が挙げられている。

この貝交易と関連して貝塚時代後1期の遺跡数および貝類出土量は前後の時期より増大しており、
“活況を呈していた”ことが顕著に示されたと思われる。多くの貝交易に関係したと想定される遺
跡が小地域に連続する状況は伊江島南岸と類似する。伊江島南岸の遺跡群に対して、“礁斜面から上
がってくるゴホウラを得るために、集団間に干瀬の切れ目（方言名：クチ）を単位とするテリトリ
ーが存在したのではないか”と考えたことがある（黒住，2013）。本地域では、前述のように干瀬の貝
は少なく、幅広いイノーが存在し、クチも少数（ハンジャングチ）であり（北谷町，2005）、クチをテ
リトリーとしていた状況ではなかったと考えられる。一方で、貝交易の拠点集落等で出土する三翼
鏃・ガラス玉等の威信財的な搬入品（例えば新里，2001；安座間，2011）は、大規模で高い精度の調
査が行われた本地域では確認されていない。

本地区では、大当原式期からアカジャンガー式期にゴホウラとアツソデガイが比較的多い平安山
Cのような例も知られている（本報告書第40表）。しかし、第103表で示したように、この時期に
も干瀬のチョウセンサザエの割合はそれほど高くなく、上述のクチを主要な採集空間としていたと
は考えにくい。ただ、この時期に礁斜面のサラサバテイラは増加しており、全く隣接地の干瀬を意
識しなかった訳ではないのかもしれない。

また貝塚時代前1期前半から後2期前半の時代に、このイソハマグリとアラスジケマンの優占度
が小堀原・伊礼原・平安山原の遺跡群間やこの時期内で異なっていた。この相違は遺跡前面の小
地形（砂浜／河口干潟）によることが大きいのが、イソハマグリを好むというような“地点の相違で
はなく、集団の違い”という可能性も想定される。貝製品の出土量の相違等も、集団の違いという
ことで説明されるのかもしれない。前述の干瀬のクチをテリトリーとした集団の違いとは考えられ
ないので、持ち込まれるゴホウラ等の量およびその利用状況が異なっていたのかもしれない。もち
ろん、上記の遺跡群は同一集団を形成するものであり、各遺跡は加工址等の違いによるものという
説明もできるであろう。今後、土器の器種組成による遺跡での生活の在り方や土器形式の細分化に
よる遺跡の並立状況の検証等が行えれば、より詳細な比較が行えると考えられる。

以前にも少し議論したが（黒住，2009，2012）、本地域は、これまでに知られていたゴホウラの採
集地に遺跡が存在する様式とは異なるゴホウラ等の集積地ということが想定されよう。そして、ゴ
ホウラと同様な礁斜面下部に生息するアツソデガイ・大形ナルトボラ類・マンボウガイ等の死殻も
得られている。前述の砂辺地区を含め、遺跡前面以外から貝が集められたものと思われる。その要
因を、現時点では遺跡が継続して形成され、沖縄諸島以外の“人々の側の交流の程度”が大きかっ
たために、ゴホウラ生息地以外に集積地として成立していたと考えている。このことは、伊礼原D

や小堀原の貝塚時代後期には、他の後期遺跡とは異なり、狩猟で得たイノシシが卓越するという状況（樋泉, 2008, 2012）も傍証になるかもしれない。先に“後期終末～グスク初頭？”と教示を受けた平安山BのIV層F～H地区をフェンサ下層式期ではないかとしたが、これらの地区では貝類の出土量は多く、ある程度の活発な人間活動があり、もしかすると、このような遺跡が存在していたことも、本地域にグスク時代初期の遺跡が形成されたことにつながっているのではないだろうか。

また、貝交易の活発だった時期でも、“沖縄に分布しないヤマト（≒本土）の貝は全く確認されていない”。具体的には、食用のシジミやハマグリ、あるいは製品として利用できるタマキガイやツキヒガイ等は精度の高い発掘でも出土していない。当然持ち込まなかったということであろうが、ヤマトの人々の滞在程度の“低さ”を示しているのではないかと考えている。

c) 農耕

本地域では沖縄諸島の中で、直接的な出土穀類の炭素年代で最も古い年代（10世紀）が知られている（高宮・千田, 2012）。農耕開始に起因する出土貝類遺体の在り方について、ここで簡単に触れておきたい。

貝塚時代からグスク時代にかけての、穀類農耕の開始（例えば Takamiya et al., 2015）・権力者の出現による農耕の強制によって、食用貝類遺体はサンゴ礁域の種から内湾／河口干潟のカンギクやアラスジケマンに変化するというのが沖縄島のグスク本体での発掘調査の結果ら得られている変化であるが（例えば黒住, 2002, 2011）、本地域では上述のように、大きな変化は認められていない。同様な例は、沖縄島南部の垣花遺跡でも知られている（黒住, 2008b）。

現時点では、この両時期の組成に劇的な変化のない状況は、“庶民層”の遺跡であること等の遺跡の有する性質に起因するのではないかと考えている。ただ、今回報告の平安山Aでも明らかのように、リュウキュウシラトリ等の内湾の二枚貝類の割合が高くなっていることも認められており、全く農耕従事に伴う海域の貝類採集活動に変化がなかったという訳ではない。

穀類農耕開始期の小堀原遺跡から抽出された例では、粟が大半を占めており（高宮・千田, 2012）、水田稲作は時期的に後続するようである。後兼久原等のグスク時代層では、淡水性のヌノメカワニナが大量に出土しており、報告者は“水イモ栽培に伴うものではないか”と考えた（黒住, 2003b）。その後の詳細なデータでも、本地域ではカワニナ類は貝塚時代前2期から抽出されているものの、その中にはヌノメカワニナは含まれておらず（黒住, 2007a）、沖縄諸島へは早ければ貝塚時代前4期に南から持ち込まれた可能性を指摘した（黒住, 2007c）。この考えでも、沖縄の先史社会の生活様式を激変させるものでなかったことも議論し、高宮・新里（2013）も同様な取扱いをしている。本地域においては、ヌノメカワニナで想定した水イモ水田から、水田稲作への変換の時期は未だ明瞭ではなく、この点ではマルタニシがメルクマールになるのではと考えているが（黒住, 2002）、未だ詳細な時期を示せていない。

開墾に伴う海域環境変化

今回対象としている時代の中では、上述のグスク時代の穀類農耕開始と近世中後期の屋取による開墾により、土壌の流出が生じ海域に土砂の堆積するという影響が考えられる。後者に関しては、近世中後期の屋取集落が台地上に入植し、その開墾の結果、土壌流出の生じたことが発掘で確認されている（中村, 2007, p. 34-35）。これまでに示してきたように、サンゴ礁のマガキガイや体内共生藻の光合成産物を利用しているシャコガイ類やカワラガイでもグスク時代から近代まで激減している訳ではないことから、少なくともサンゴ礁に壊滅的なダメージを与えていないと考えている。ただ、近世・近代に内湾の種が優占種となっていることの要因の一つは、土砂流出によるイノー内の

環境変化（泥の堆積等）とも考えられる。

d) 社会・“政治体制”の変化

貝交易と農耕の問題を前述したが、それ以外の出土貝類を通してみた社会の変化と想定される事象にも簡単に触れておきたい。

ア. 先史時代

本地区では九州から曾畑式土器をもたらしたヤマトの集団の渡来が想定される。ヤマトの縄文時代前期ではハマグリやカキ等の内湾の貝類を利用する場合がほとんどであり、外海岩礁域の貝類利用例はほとんど知られていない。しかし、伊礼原遺跡では、サンゴ礁の干瀬等の岩礁域の貝類が優占種となっており、ヤマトからの渡来集団があったとしても、同地の伝統的な干潟の貝類利用からかなり早くサンゴ礁の貝類を食用に利用するように転換したと考えられる。

貝塚時代後1期前半から後2期前半に、遺跡ごとに異なるが、イソハマグリが増加が認められた。筆者はこの現象が海域環境の起因するものではなく、理由・状況は不明だが、出汁的利用としての食生活の変化により本種が増加したのではないかと想定している。

イ. グスク時代初期の貝類の少なさ

陶磁器等の人工遺物では、貝塚時代からグスク時代の変換期を示すことはできつつあるが、貝類遺体を含むある程度の層厚を持つ良好な包含層・遺構は沖縄諸島ではほとんど知られておらず、本地域でも同様であった。これは発掘精度の問題ではなく、廃棄・堆積にかかわっている事象であろう。堆積時間の短さも想定されるが、“魚介類の利用が低調で、廃棄の絶対量が少なかった”という可能性も想定されよう。穀類農耕を行っていた訳であり、周年定住であったことは確実だと考えられ、貝塚時代とは生活様式が激変していたのかもしれない。

ウ. グスク時代・近世・近代の貝類利用の在り方

本地域で興味深い点のひとつとして、一箇所グスク時代から近代の遺跡が連続して発掘されたことが挙げられる。平安山Aでは、グスク～近世とされたものが22地区のうち7地区と1/3を占めており、出土個体数も比較的多かった（黒住, 2016）。その優占種はマガキガイやリュウキュウシラトリであり、これまで示してきたものと極めて大きな相違はないと判断している。詳細な考古年代は分割されていない訳であるが、逆にみると、“連続的な地点も多い”と理解することも可能であろう。グスク時代と近世期を区分するのは、1609年の「薩摩の琉球入り」であり、琉球王国の社会体制、さらには地方の庶民層へも年貢等の形態で大きな変化の生じたことは多くの研究で明らかになっている。しかし、両時代の貝類遺体組成の変化が明瞭でなく、また貝類廃棄も連続する可能性があることから、少なくとも本地域の貝類採集活動では、グスク時代から近世期にかけての変化は劇的でなかったとも考えられる。

同様に、近世から近代にかけても、貝類遺体の組成変化は明瞭ではなかった（第103表）。むしろ、近世・近代の優占種のバラツキは、もしかすると、“各家庭の相違”を示しているのかもしれない。一方で平安山Aの集落域では貝類遺体は比較的多く、海域を利用する生活であったこともわかった。

近世遺跡では、沖縄島南部の垣花遺跡の近世期土坑ではマガキガイが60%を超え、貝塚時代後期やグスク時代のカンギクやアラスジケマンの優占する組成とは大きく異なっており、“ヤコウガイ漁”を含む漁撈活動が中心であったと想定した例もある（黒住, 2008）。漁民と伊平地区で示してきた農耕民の貝類利用の相違、さらには内陸部の農耕民の貝類利用との比較等、今後も各地で庶民層の貝類を含む動植物遺体の詳細な検討により、文献だけでは知り得なかった生活の実態がより明らかになっていくものと考えられる。本地域での結果は、今後の沖縄での研究に大きく寄与するものと言

えよう。

本報告の一部には、科学研究費（15H05966、代表：金原正明；15K02990、代表：樋泉岳二）を用いた。

<引用文献>

- 北谷町（編）．2005．伊礼原C遺跡保全整備基本構想策定業務報告書．51+11．
- 安座間充．2011．貝塚時代琉球列島の交流・交易史—列島南縁の島嶼世界にみる交流の風景—．In 高宮広土・伊藤慎二（編），先史・原始時代の琉球列島～ヒトと景観～，189-216．六一書房．
- 片桐千亜紀（編）．2004．後兼久原遺跡，沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書，(22)：1-198，6 pls．
- 木下尚子．1989．南海産貝輪交易考．In 横山浩一先生退官記念事業会（編），生産と流通の考古学．203-249．横山浩一先生退官記念論文集刊行会，福岡．
- 黒住耐二．1997．沖縄県具志原貝塚出土の貝類遺存体．In 岸本義彦（編），伊江島具志原貝塚発掘調査報告書，沖縄県文化財調査報告書，(130)：195-223．
- 黒住耐二．2002．貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活．In 木下尚子（編），先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—，67-86．熊本大学文学部．
- 黒住耐二．2003a．貝類遺体．In 山城安生・島袋春美（編），後兼久原遺跡，北谷町文化財調査報告書，(21)：264-268．
- 黒住耐二．2003b．沖縄における貝類遺体からみた湿地堆積物の検討—後兼久原遺跡のコラムサンプリング調査—．In 山城安生・島袋春美（編），後兼久原遺跡，北谷町文化財調査報告書，(21)：401-405．
- 黒住耐二．2003c．貝類遺体．In 山城安生・島袋春美（編），大作原古墓群，北谷町文化財調査報告書，(22)：163-171．
- 黒住耐二．2006．琉球列島において絶滅した完新世ハイガイ類（軟体動物門：二枚貝綱）の分類学的検討と生存年代．千葉中央博自然誌研究報告，9(1)：24-30．
- 黒住耐二．2007a．貝類遺体からみた伊礼原遺跡．In 中村 愿（編），伊礼原遺跡，北谷町文化財調査報告書，(26)：535-555．
- 黒住耐二．2007b．沖縄島固有種の陸産貝類アマノヤマタカマイマイの完新世における分布域の縮小．沖縄生物学会誌，(45)：57-60．
- 黒住耐二．2007c．胎生淡水産貝類からみた先史時代の沖縄諸島における根栽農耕の可能性．南島考古，(26)：121-132．
- 黒住耐二．2008a．伊礼原D遺跡から出土した貝類遺体．In 東門研治・島袋春美（編），伊礼原D遺跡，北谷町文化財調査報告書，(28)：168-183，197-200．
- 黒住耐二．2008b．垣花遺跡から得られた貝類遺体．In 城間宣子（編），垣花遺跡，南城市文化財調査報告書，(3)：98-113，180-185．
- 黒住耐二．2009．小堀原遺跡から出土した貝類遺体．In 東門研治・島袋春美（編），小堀原遺跡，北谷町文化財調査報告書，(30)：201-212．
- 黒住耐二．2010．伊礼原E遺跡から得られた貝類遺体．In 山城安生・島袋春美（編），伊礼原E遺跡，北谷町文化財調査報告書，(31)：41-56．
- 黒住耐二．2011．琉球先史時代人とサンゴ礁資源：貝類を中心として．In 高宮広土・伊藤慎二（編），先史・原始時代の琉球列島～ヒトと景観～，87-107．六一書房．
- 黒住耐二．2012．小堀原遺跡の貝塚時代後期層から出土した貝類遺体．In 山城安生・島袋春美（編），小堀原遺跡，北谷町文化財調査報告書，(34)：335-348．
- 黒住耐二．2013．ナガラ原東貝塚の貝類遺体．In 木下尚子（編），ナガラ原東貝塚の研究，340-362．熊本大学文学部．

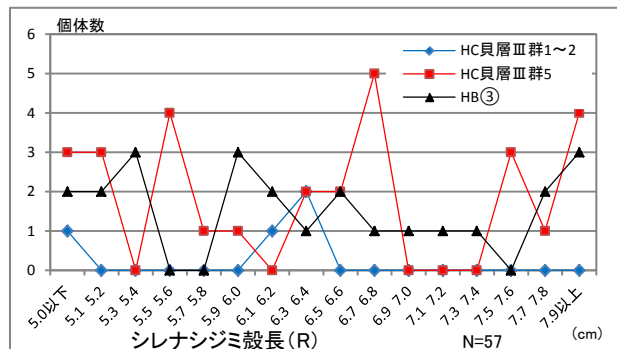
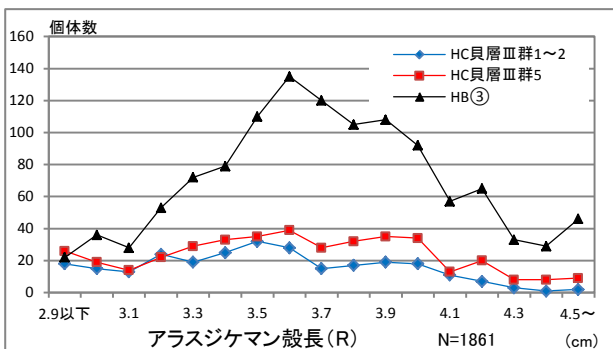
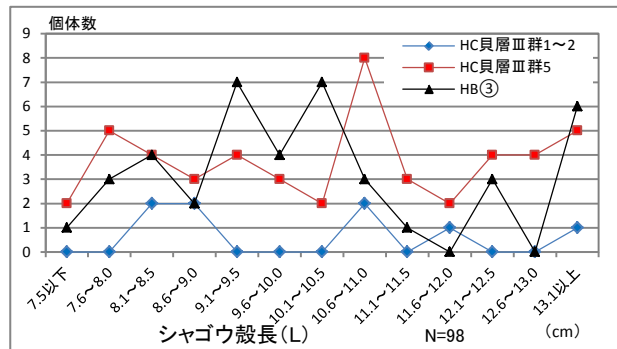
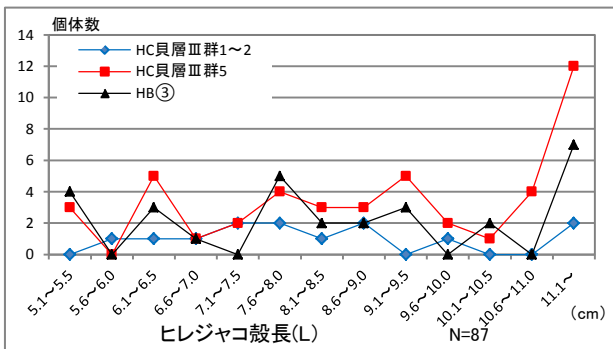
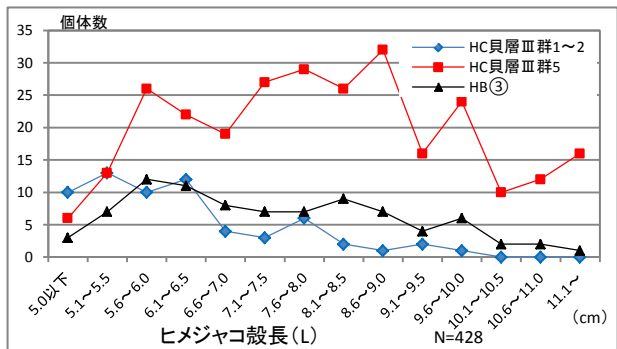
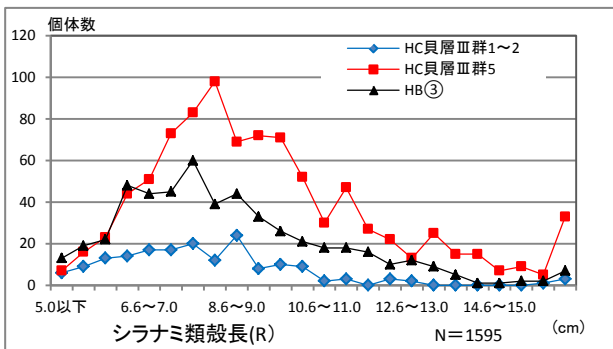
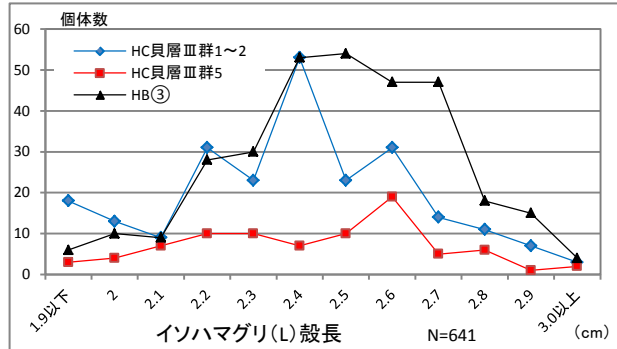
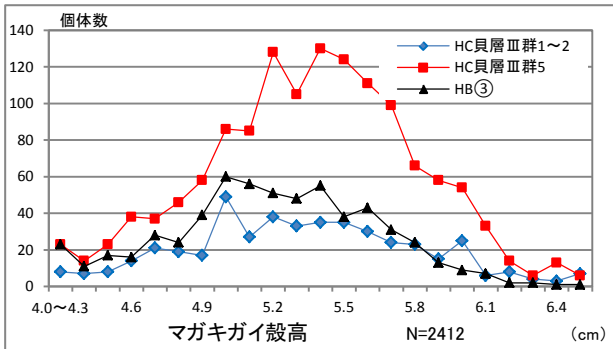
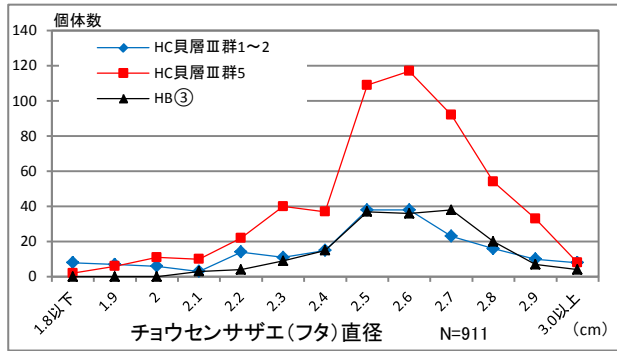
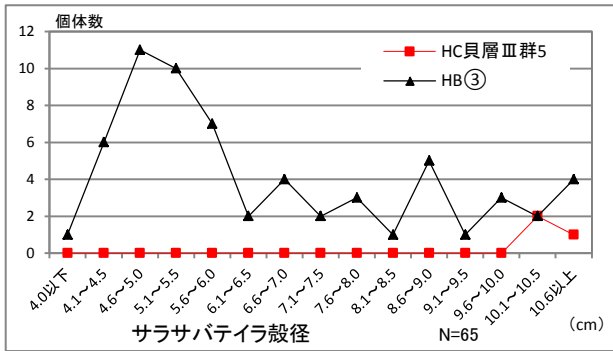
- 黒住耐二． 2014a. 伊礼原遺跡（国指定外）・伊礼原A遺跡の調査で得られた貝類遺体． 伊礼原遺跡（国指定外）・伊礼原A遺跡，北谷町文化財調査報告書，(36)：397-428.
- 黒住耐二． 2014b. 貝類遺体からみた沖縄諸島の環境変化と文化変化． In 高宮広土・新里貴之（編），琉球先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究，研究論文集，第2集，琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷，55-70. 六一書房．
- 黒住耐二． 2015. 平安山原B遺跡の調査で得られた貝類遺体． In 島袋春美（編），平安山原B遺跡，北谷町文化財調査報告書，(37)：388-404.
- 黒住耐二． 2016. 平安山原A遺跡の調査で得られた貝類遺体． In 島袋春美（編），平安山原A遺跡，北谷町文化財調査報告書，(38)：408-423. 北谷町教育委員会，沖縄．
- 松田順一郎． 2007. 伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋没地形と中央区・南区にみられた古地震痕跡． In 中村 愿（編），伊礼原遺跡，北谷町文化財調査報告書，(26)：44-60.
- 中村 愿（編）． 1989. 伊礼原B遺跡，北谷町文化財調査報告書，(8)：1-54, 24 pls.
- 中村 愿（編）． 2007. 伊礼原遺跡，北谷町文化財調査報告書，(26)：1-573.
- パリノ・サーヴェイ， 2014. 伊礼原遺跡・伊礼原A遺跡の自然科学分析． 伊礼原遺跡（国指定外）・伊礼原A遺跡，北谷町文化財調査報告書，(36)：429-437.
- 島袋春美． 2008. 貝類遺体． In 東門研治・島袋春美（編），平安山原B遺跡，北谷町文化財調査報告書，(29)：104-114.
- 島袋春美． 2010. 貝製品． In 山城安生・島袋春美（編），伊礼原E遺跡，北谷町文化財調査報告書，(31)：261-323, 巻頭図版 22.
- 島袋春美（編）． 2014. 伊礼原遺跡（国指定外）・伊礼原A遺跡，北谷町文化財調査報告書，(36)：1-459.
- 新里貴之． 2001. 物流ネットワークの一側面－南西諸島の弥生系遺物を素材として－． 南島考古，(20)：49-66.
- 高宮広土・千田寛之． 2012. 小堀原遺跡出土の植物遺体． In 山城安生・島袋春美（編），小堀原遺跡，北谷町文化財調査報告書，(34)：349-358.
- Takamiya, H., M. J. Hudson, H. Yonenobu, T. Kurozumi and T. Toizumi. 2015. Extraordinary case in human history: Prehistoric hunter-gatherer adaptation to the islands of the Central Ryukyus (Amami and Okinawa Archipelagos), Japan. *The Holocene*. / DOI: 10.1177/0959683615609752
- 高宮広土・新里貴之． 2013. 琉球列島貝塚時代における社会組織の変化，古代文化，64(4)：98-110.
- 樋泉岳二． 2010. 伊礼原E遺跡出土の脊椎動物遺体． In 山城安生・島袋春美（編），伊礼原E遺跡，北谷町文化財調査報告書，(31)：57-79.
- 樋泉岳二． 2012. 小堀原遺跡2008～2009年度調査で採集された脊椎動物遺体． In 山城安生・島袋春美（編），小堀原遺跡，北谷町文化財調査報告書，(34)：322-334.
- 樋泉岳二． 2008. 伊礼原D遺跡第3・4トレンチ出土の脊椎動物遺体． In 東門研治・島袋春美（編），伊礼原D遺跡，北谷町文化財調査報告書，(28)：184-196, 202.
- 樋泉岳二． 2012. 小堀原遺跡2008～2009年度調査で採集された脊椎動物遺体． In 山城安生・島袋春美（編），小堀原遺跡，北谷町文化財調査報告書，(34)：322-334.
- 山城安生・島袋春美（編）． 2003. 後兼久原遺跡，北谷町文化財調査報告書，(21)：1-413, 6 pls.
- 山城安生・島袋春美（編）． 2012. 小堀原遺跡，北谷町文化財調査報告書，(34)：1-387.

第103表 平安山原C遺跡・B遺跡の新規報告分およびA遺跡の近世以降の優占種。

地区名等	平安山原C												平安山原B												平安山原A(近世以降で確実なもの)																						
	貝層Ⅲ群				貝層Ⅱ群				①	②	③	④	イ		ヌ		リ		ト		チ																										
	下部:貝塚後期 [大当原]		上部:貝塚後期 [アカジャンガ-]		貝塚後期 [アカジャンガ-]		貝塚後期 [大当原]		貝塚後期 [大当原]		貝塚後期 [大当原]		近世/SK32		近世		近世		近代		近代~		近代~																								
N=35745		%		N=30808		%		N=82459		%		N=3565		%		N=4588		%		N=15682		%		N=1641		%		N=1904		%		N=2032		%		N=693		%		N=955		%		N=4968		%	
サンゴ礁域/岸側潮間帯(I-1)														サンゴ礁域/岸側潮間帯(I-1)																																	
イハマグリ	13288	37.2	2388	7.8	49185	59.6	205	5.8	317	6.9	573	3.7	27	1.6	52	2.7	4	0.2	5	0.7	9	0.9	34	0.7																							
サンゴ礁域/イノー内(I-2)														サンゴ礁域/イノー内(I-2)																																	
マガキガイ	3488	9.8	3147	10.2	8224	10.0	612	17.2	973	21.2	2868	18.3	164	10.0	506	23.3	876	43.1	170	24.5	175	18.3	794	16.0																							
クモガイ	733	2.1	932	3.0	1290	1.6	346	9.7	401	8.7	1455	9.3	79	4.8	72	3.8	114	5.6	24	3.5	65	6.8	78	1.6																							
シラミ類	2296	6.4	3856	12.5	1835	2.2	593	16.6	699	15.2	1804	11.5	115	7.0	69	3.6	37	1.8	16	2.3	19	2.0	14	0.3																							
ヒメシヤコ	402	1.1	1063	3.5	443	0.5	100	2.8	18	0.4	188	1.2	28	1.7	45	2.4	14	0.7	11	1.6	12	1.3	11	0.2																							
シヤコウ	210	0.6	351	1.1	243	0.3	92	2.6	90	2.0	217	1.4	12	0.7	17	0.9	10	0.5	1	0.1	0	0.0	5	0.1																							
中形イモガイ類*2	728	2.0	373	1.2	3460	4.2	186	5.2	126	2.7	394	2.5	12	0.7	28	1.5	22	1.1	7	1.0	10	1.0	52	1.0																							
ヤナギンボリイモ	199	0.6	319	1.0	314	0.4	24	0.7	38	0.8	119	0.8	4	0.2																																	
アンボン+クロフ	188	0.5	278	0.9	251	0.3	71	2.0	68	1.5	223	1.4	23	1.4	7	0.4	5	0.2	6	0.9	26	2.7	46	0.9																							
オニツノガイ*3	123	0.3	161	0.5	740	0.9	45	1.3	95	2.1	290	1.8	26	1.6	31	1.6	106	5.2	23	3.3	15	1.6	74	1.5																							
イトマキホラ	153	0.4	215	0.7	296	0.4	48	1.3	58	1.3	199	1.3	27	1.6	27	1.4	22	1.1	9	1.3	7	0.7	19	0.4																							
真珠貝類*4	185	0.5	455	1.5	805	1.0	2	0.1	3	0.1	40	0.3	3	0.2	13	0.7	0	0.0	0	0.0	3	0.3	4	0.1																							
サンゴ礁域/干瀬(I-3)														サンゴ礁域/干瀬(I-3)																																	
チョウセンサザエ	483	1.4	1539	5.0	1234	1.5	74	2.1	96	2.1	483	3.1	72	4.4	110	5.8	71	3.5	25	3.6	6	0.6	29	0.6																							
サンゴ礁域/礁斜面(I-4)														サンゴ礁域/礁斜面(I-4)																																	
サラサバテラ	826	2.3	2687	8.7	1830	2.2	186	5.2	222	4.8	901	5.7	130	7.9	172	9.0	58	2.9	20	2.9	23	2.4	56	1.1																							
内湾域(II)														内湾域(II)																																	
カラガイ	465	1.3	472	1.5	647	0.8	36	1.0	104	2.3	478	3.0	118	7.2	101	5.3	16	0.8	26	3.8	31	3.2	142	2.9																							
ホソシイナミ	440	1.2	257	0.8	414	0.5	15	0.4	53	1.2	500	3.2	68	4.1	40	2.1	26	1.3	14	2.0	22	2.3	88	1.8																							
リュウキュウシナトリ	65	0.2	308	1.0	194	0.2	6	0.2	29	0.6	170	1.1	68	4.1	64	2.9	65	3.2	36	5.2	117	12.3	1630	32.8																							
リュウキュウマスオ	220	0.6	247	0.8	483	0.6	40	1.1	42	0.9	191	1.2	40	2.4	41	2.2	33	1.6	13	1.9	23	2.4	113	2.3																							
マスオガイ	120	0.3	240	0.8	194	0.2	7	0.2	25	0.5	173	1.1	66	4.0	140	7.4	27	1.3	55	7.9	107	11.2	150	3.0																							
リュウキュウサルボオ	288	0.8	412	1.3	160	0.2	71	2.0	71	1.5	250	1.6	23	1.4	55	2.9	37	1.8	24	3.5	32	3.4	91	1.8																							
ヌノガイ	367	1.0	443	1.4	457	0.6	43	1.2	56	1.2	300	1.9	14	0.9	84	4.4	114	5.6	38	5.5	26	2.7	111	2.2																							
河口干潟-マングローブ域(III)														河口干潟-マングローブ域(III)																																	
アラスジケマン	1186	3.3	1021	3.3	1271	1.5	314	8.8	593	12.9	2099	13.4	341	20.8	33	1.7	41	2.0	3	0.4	14	1.5	40	0.8																							
陸域(V)														陸域(V)																																	
パンダナマイマイ*5	73	0.2	15	0.0	1269	1.5	0	0.0	5	0.1	24	0.2	1	0.1	79	4.1	2	0.1	3	0.4	0	0.0	0	0.0																							
40%≤				20≤ <40%				10≤ <20%				5≤ <10%				2≤ <5%																															

*1: []内は想定される土器型式, *2: 平安山原A(平A)では中形イモガイ類とヤナギンボリイモを含めた値, *3: 平Aではオニツノガイ科一括で、もしかするとウミナミ類も含まれている可能性がある,

*4: クロチョウガイ・アカヤガイ・ミドリアオリ・ウグイスガイ科を全て含めた値, *5: 平Aでは陸産貝類全体の値。



第189図 平安山原B・C遺跡から得られた優占種のサイズ組成変化

第104表 キャンプ桑江北側地区における各遺跡出土海産貝類遺体の時代別変遷（暫定）

時代	土器形式等	地点数	貝類出土量	主な遺跡等と優占貝類
近代～戦前	[戦前]	普通	居住域:多 その他:少	平安山原Bb/II層/サターヤ(少:マガキガイ・シヤコガイ類)
				伊礼原D/4-/戦前遺構(少:マガキガイ,カワラガイ)
				?平安山原Ba/②層(少:イソハマグリ,マガキガイ)
				?伊礼原(指定外)II層(普:マガキガイ・シヤコガイ)
				平安山原A/ト・チ(普通:マガキガイ・内湾域)
	[近代]			平安山原A/リ(普通:マガキガイ・内湾域)
近世		普通	居住域:普通 その他:少	平安山原Bc/④(普通:マガキガイ・内湾域)
				平安山原A/イ・ヌ(普通:マガキガイ・内湾域)
				伊礼原D/前半?4-7・8(普:マガキガイ,マスオガイ) 後半?4-9・10(少:マガキガイ,カワラガイ)
				伊礼原E/集石(稀:ヤコウガイ)
				後兼久原a/第三期(少:マガキガイ),
グスク時代の主体期	13-16世紀	多	居住域:多 その他:少	伊礼原/(?少:リュウキュウシラトリ・ウミナ類)
				伊礼原D/4-5・6(多:マガキガイ,内湾域)
				伊礼原(指定外)/III層(多:マガキガイ・シヤコガイ)
				後兼久原b/第1・第2検出面(普:マガキガイ)
				後兼久原a/第二期(多:マガキガイ・ウミナ類)
グスク時代初期	掘立建物址/ 3点セット	少	稀?	小堀原(極稀?)
				後兼久原b/I地区第3検出面(稀?:マガキガイ)
				後兼久原a/第一期(稀?:マガキガイ)
貝塚時代後2期 後半	くびれ平底土器 期(フェンサ下層土 器期)	稀?	少?	?大作原古墓(少:マガキガイ)
				?平安山原Bb/IV層F~H区(普:マガキガイ・シヤコガイ類)
貝塚時代後2期 前半	くびれ平底土器 期(アサシヤンカー式 土器期)	普通	普通	平安山原C/II・III群上部(極多:イソハマグリ・マガキガイ)
				伊礼原D/4-1・2(極多:マガキガイ),
				小堀原(普:カワラガイ,マガキガイ)
貝塚時代後1期 後半	大当原式土器期	多	極多	平安山原C/III群下部(極多:イソハマグリ・マガキガイ)
				?平安山原Bc/①~③(多:マガキガイ・シヤコガイ類・アラスジケマン)
				平安山原Bb/IV層B・E区(多:マガキガイ・シヤコガイ類)
				?平安山原Ba/III層・弥生(普:イソハマグリ)
				伊礼原(指定外)/IV層(極多:シヤコガイ・マガキガイ)
				?伊礼原E/弥生(少:シヤコガイ類,リュウキュウシラトリ)
				伊礼原A/IV層(極多:シヤコガイ・アラスジケマン)
小堀原(極多:アラスジケマン,イソハマグリ)				
貝塚時代後1期 前半	浜屋原式土器期	多	多	平安山原Bb/V層A区(極多:イソハマグリ・マガキガイ)
				平安山原Ba/③b~⑤層(多:マガキガイ・イソハマグリ)
				伊礼原/弥生(?普:イソハマグリ)
				伊礼原(指定外)/IV層(極多:シヤコガイ・マガキガイ)
				小堀原(多:アラスジケマン,イソハマグリ)
貝塚時代後1期 初頭	阿波連浦下層式 土器期	少	普通	伊礼原(指定外)/V層(多:マガキガイ・アラスジケマン)
貝塚時代前4・5期		稀?		
貝塚時代前3期	[3・4期]	稀	普通?	?伊礼原E/3区/5・6区(普:マガキガイ・チョウセンササエ)
	面縄前庭式 土器期	稀	少	伊礼原/土坑(少:ダテオキシジミ・マガキガイ)
貝塚時代前2期 後葉?	室川下層式 土器期?	稀	稀?	伊礼原E/5区(主に自然貝層;普:イソハマグリ・リュウキュウシラトリ)
貝塚時代前2期 中葉	曾畑式土器期	稀	普通	伊礼原/XIV層(多:ハイガイ・マガキガイ)

?は不確実なもの; 文献:後兼久原a(黒住,2003a), 後兼久原b(片桐,2004), 小堀原(黒住,2009,2012), 伊礼原E(黒住,2010), 伊礼原A(黒住,2014a), 伊礼原(指定外)(黒住,2014a), 伊礼原(黒住,2007a), 伊礼原D(黒住,2008), 平安山原C(本報告), 平安山原Ba(島袋,2008), 平安山原Bb(黒住,2015), 平安山原Bc(本報告), 平安山原A(本報告), 大作原古墓(黒住,2003c).

第105表 平安山原BおよびC遺跡出土貝類遺体の分類学的位置と生息場所類型。

和名	学名	生息場所 類型	図版 番号	和名	学名	生息場所 類型	図版 番号
軟体動物門 Mollusca				リュウキュウヘビガイ	Serpulorbis trimeresurus	I-2-a	74
腹足綱 Gastropoda				ヘビガイ類	"Serpulorbis" sp.	I-2-a	75
ツタノハ科 Patellidae				スズメガイ科 Hipponicidae			
オオツタノハ	Scutellastra optima	VI		アツキクスズメ	Sabia acuta	I-3-a	76
ツタノハ	Scutellastra flexuosa	I-3-a		タカラガイ科 Cypraeidae			
ヨメガカサ科 Nacellidae				キイロダカラ	Cypraea (Monetaria) moneta	I-1-a	78
オオベッコウガサ	Ceallana testudinaria	I-1-a		ハナビラダカラ	Cypraea (Monetaria) annulus	I-1-a	
ユキノカサ科 Lottiidae				コモンドカラ	Cypraea (Erosaria) erosa	I-2-b	
リュウキュウウノアシ	Patelloida saccharina	I-1-a	4	ナツメモドキ	Cypraea (Eronea) erronea	I-2-b	
ミミガイ科 Haliotidae				ハナマルユキ	Cypraea (Rav.) caputserpentis	I-3-a	
ミミガイ科の一種	Haliotidae gen. et sp.	I		ヤクシマダカラ	Cypraea (Arabica) arabica	I-2-a	
スカシガイ科 Fissurellidae				ホソヤクシマダカラ	Cypraea (Arabica) eglantina	II-2-a	84
スカシガイ科の一種	Fissurellidae gen. et sp.	I		ホシダカラ	Cypraea (s.s) tigris	I-2-c	85
リュウテン科 Turbinidae				ヒメホシダカラ	Cypraea (Lyncina) lynx	I-2-b	
コンダカサザエ	Turbo (Marma.) stenogyrum	I-2-a	8	ホシキスタ	Cypraea (Mystaponda) vitellus	I-2-a	
チヨウセンサザエ	Turbo (Marma.) angyrostomus	I-3-a		ハラダカラ	Cypraea (Leporicypraea) mappa	I-4-a	
リュウテン	Turbo (Turbo) petholatus	I-4-b		ウミウサギ科			
ヤコウガイ	Turbo (Lunatia) marmoratus	I-4-a	12	ウミウサギ	Ovula ovum	I-2-a	
カンギク	Lunella moniliformis	II-1-b		タマガイ科 Naticidae			
オオウラウス	Astraliium rhodostoma	I-2-a	16	トミガイ	Polinices tumidus	I-2-c	91
ニシキウズ科 Trochidae				ヘソアキトミガイ	Polinices flemingianus	I-2-c	
ニシキウズ	Trochus (Trochus) maculatus	I-2-a		リスガイ	Mammilla melanostoma	I-2-c	
ギンタカハマ	Trochus (Tectus) pyramis	I-4-a		ネズミガイ	Mammilla simiae	I-2-c	
コンダカギンタカハマ	Trochus (Tectus) triserialis	I-4-a	19	ホウシュノタマ	Notochochlis gualtieriana	II-1-c	
サラサハテイラ	Trochus (Rochia) niloticus	I-4-a	20	ヤツシロガイ科 Tonnidae			
オキナワインダタミ	Mondonta labio	II-1-b	21	ウスラガイ	Tonna perdax	I-2-c	
アマオブネ科 Neritidae				スクミウスラ	Tonna cepa	I-2-c	98
コンダカアマガイ	Nerita (Ritena) striata	I-1-b		イワカフトキワ	Malea (Quimalea) pomum	II-2-c	99
キバアマガイ	Nerita (Ritena) plicata	I-0-a	23	フジツガイ科 Ranellidae			
フツスジアマガイ	Nerita (Ritena) costata	I-0-a		フジツガイ	Cymatium (Lotoria) lotorium	I-4-a	101
アマオブネ	Nerita (Thelyostyla) albicilla	I-1-b		ミツカドボラ	Cymatium (Mon.) nicobaricum	I-2-a	102
マルアマオブネ	Nerita (Thelyostyla) squamulata	II-1-b	26	サツマボラ	Cymatium (Monoplex) aquatile	I-2-a	103
オオマルアマオブネ	Nerita (Thelyostyla) chamaeleon	I-1-b	27	シノマキ	Cymatium (Monoplex) pileare	I-4-a	104
ヒラマキオアマオブネ	Nerita (Thelyostyla) planospira	III-0-d		シオボラ	Cymatium (Gut.) muricinum	I-2-a	105
ニシキアマオブネ	Nerita (Amprinerita) polita	I-1-c		オオソウガイ	Cymatium (Ranularia) pyrura (Linnaeus, 1758)	I-4-a	106
カノコガイ	Clithon soverbianus	III-0-e		ハラガイ	Charonia tritonis	I-4-a	107
イガカノコ	Clithon corona	IV-5	31	オキニシ科 Bursidae			
ムラクモカノコ	Neritina variegata	IV-5		オキニシ	Bursa (s.s.) bufonis dunkeri	I-3-a	
シマカノコ	Neritina (Vittina) turrata	III-0-e	33	シワクチナルトボラ	Tutufa rebeta	I-4-a	
ドンダリカノコ	Neritina plumbea	IV-5		オオナルトボラ	Tutufa bufo	I-4-a	110
フネアマガイ	Septaria porcellana	IV-5	35	シロナルトボラ	Tutufa bufo	I-4-a	
タニシ科 Viviparidae				アツキガイ科 Muricidae			
マルタニシ	Chipangopaludina chinensis	IV-6		ガンゼキホラ	Chicoreus burunneus	I-2-a	
ヤマタニシ科 Cyclophoridae				テングガイ	Chicoreus ramosus	I-4-a	114
オキナワヤマタニシ	Cyclophorus turgidus	V-8		テツレイシ	Thais (Stramonita) savignyi	I-1-a	
オニノツノガイ科 Cerithiidae				コイワニシ	Thais (Semiricinula) squamosa	II-1-a	116
オニノツノガイ	Cerithium (Cerithium) modulosum	I-2-c	39	シラクモガイ	Thais (Stramonita) armigera	I-3-a	117
ハシナガツノブエ	Cerithium rostratum	II-2-c	40	ツノケツノイシ	Mancinella hippocastanum	I-1-a	
トウガタカニモリ	Rhinoclevis sinensis	I-2-c		ツルレイシ	Mancinella tuberosa	I-3-a	119
クワノミカニモリ	Clypeomorur chemnitziana	I-1-b	42	コイボテツレイシ	Mancinella intermedia	I-3-a	120
カヤノミカニモリ	Clypeomorur bifasciata	I-1-b	43	ウネレイシダマシ	Cronia margariticoala	I-1-b	121
イワ(ウミカ)カニモリ	Clypeomorur batillariaeformis	II-1-b	44	ヨウラクレイシダマシ	Cronia fiscella	I-2-a	122
ヘナタリ科 Cerithiidae				レイシダマシ	Morula granulata	I-1-a	123
ヘナタリ	Cerithidea (Cerithideopsilla) cingulata	III-1-c		レイシ類	"Cronia" sp.		
フトヘナタリ(イカカ)	Cerithidea (Cerithidea) moerchii	III-0-d		ハナワレイシ	Nassa vexillum	I-3-a	125
センニンガイ	Telescopium telescopium	III-0-c	47	ムラサキイガレイシ	Drupa (s.s.) morum	I-3-a	
マドモチウミナ	Terebralia sulcata	III-1-c	48	シロイガレイシ	Drupa ricinus albolabris	I-3-a	
キバウミナ	Terebralia parstris	III-1-c		アカイガレイシ	Drupa (Ricinella) rubusidaeus	I-3-a	
ウミナ科 Batillariidae				ホソスジテツボラ	Purpura persica	I-1-a	129
リュウキュウウミナ	Batillaria flectosiphonata	II-1-c	50	オニコブシ科 Vasidae			
イボウミナ	Batillaria zonalis	III-1-c		オニコブシ	Vasum ceramicum	I-3-a	131
ゴマフニナ科 Planaxidae				オニコブシ	Vasum turbinellum	I-2-a	
ゴマフニナ	Planaxis sulcatus	I-0-a		フトコロガイ科 Columbellidae			
トウガタカワニナ科 Thiaridae				フトコロガイ	Euplicia vesicolor	II-2-d	133
トウガタカワニナ	Thiara scabra	IV-5.6		エソバ科 Buccinidae			
ヌノメカワニナ	Melanoides tuberculata	IV-6		ノシガイ	Engina (Pusiostoma) mendicaria	I-1-a	134
スグカワニナ	Stenomelania uniformis	IV-6	56	シマベッコウバイ	Japeuthria cingulata	II-1-b	135
ヨシカワニナ	Stenomelania plicaria	IV-6	57	オリレイヨフバイ科 Nassariidae			
イボアヤカワニナ	Tarebia granifera	IV-6		ヒメオリレイシ	Nassarius sp. cf. nodifer	II-2-c	136
カワニナ科 Pleuroceridae				アツムシロ	Niotha semisulcata	I-1-b	137
カワニナ	Semisulcospira bensoni	IV-5.6	59	アワムシロ	Niotha albescens	I-2-c	
スイショウガイ科 Strombidae				イトマキボラ科 Fasciolaridae			
ムカンタモト	Strombus (Canarium) mutabilis	I-2-c		イトマキボラ	Pleuroploca trapezium	I-2-b	
フスジムカシタモト	Strombus (Canarium) labiatum	II-2-c		ナガイイトマキボラ	Pleuroploca filamentosa	I-2-a	140
オハヴロガイ	Strombus (Canarium) urceum	II-2-c	62	ベニマキ	Benimackia fastigia	I-2-a	141
ネジマガキ	Strombus (Gibberulus) g. gibbosus	II-1-c		ツノマタモドキ	Latirus belcheri	I-3-a	142
マギキガイ	Strombus (Conomurex) luhanus	I-2-c	64	リュウキュウツノマタ	Latirus polygonus	I-3-a	143
イボソデガイ	Strombus (Lentigo) lentiginosus	I-2-c		マルニシ	Leucozonia smaragdula	I-3-a	
マイノソデガイ	Strombus (Euprotomus) aurisidiana Linnaeus, 1758	I-4-c		トセボラ	Fusinus nicobaricus	I-2-c	
アツソデガイ	Strombus (Tricornis) thersites	I-4-c		マクラガイ科 Olividae			
ゴホウラ	Strombus (Tricornis) latissimus!	I-4-c		サツマナビ	Oliva annulata	I-2-c	146
クモガイ	Lambis lambis	I-2-c	69	フデガイ科 Mitridae			
ラクダガイ	Lambis truncata sebae	I-4-c	70	チョウセンフデ	Mitra mitra	I-2-c	
スイシガイ	Harpago chiragra	I-2-c		イモフデ	Pterygia dactylus	I-1-b	148
ムカデガイ科 Vermetidae				ミノムシガイ科 Costellariidae			
フタモチヘビガイ	Dendropoma maximum	I-2-a	73	オオミノムシガイ	Vexillum plicarium	II-2-c	150

和名	学名	生息場所 類型	図版 番号
イモガイ科 Conidae			
マダライモ	Conus (Virroconus) ebraeus	I-1-a	
サヤガタイモ	Conus (Virroconus) fulgetrum	I-1-a	152
ジュズガケサヤガタイモ	Conus (Virroconus) coronatus	I-1-a	153
イボシマイモ	Conus (Virgiconus) lividus	I-2-a	154
イボカバイモ	Conus (Virgiconus) distans	I-2-c	
ヤナギンボリイモ	Conus (Rhizoconus) miles	I-3-a	156
サラサミナシ	Conus (Rhizoconus) capitaneus	I-4-b	157
イタチイモ	Conus (Rhizoconus) mustelinus	I-4-b	
カハミナシ	Conus (Rhizoconus) vexillum	I-4-b	159
ヤキイモ	Conus (Pinoconus) magus	I-2-c	
サラサモドキ	Conus (Dauciconus) vitulinus	I-2-c	161
ヒラマキイモ	Conus (Dauciconus) planorbis	I-2-c	162
アジロイモ	Conus (Darioconus) pennaceus	II-2-c	
タガヤサンミナシ	Conus (Darioconus) textile	I-2-c	
ニシキミナシ	Conus (Strioconus) striatus	I-2-c	165
アンボイナ	Conus (Gastridium) geographus	I-2-c	
シロアンボイナ	Conus (Gastridium) tulipa	I-2-c	167
ナンヨウクロミナシ	Conus (s.s.) marmoreus	II-2-c	168
ミカドミナシ	Conus (Rhombus) imperialis	I-2-c	169
アカシマミナシ	Conus (Leptoconus) generalis	I-2-c	
ナガサラサミナシ	Conus (Leptoconus) litiglyphus	I-2-c	171
ゴマフイモ	Conus (Puncticulis) pulicarius	I-2-c	
コモンイモ	Conus (Puncticulis) arenatus	I-2-c	173
ダイミョウイモ	Conus (Cleobula) betulinus	II-2-c	
クロザメモドキ	Conus (Lithoconus) eburneus	I-2-c	
アンボンクロザメ	Conus (Lithoconus) litteratus	I-2-c	176
クロフモドキ	Conus (Lithoconus) leopardas	I-2-c	177
タケノコガイ科 Terebridae			
ウンソノ	Subula areolata	I-2-c	182
リュウキュウタケ	Oxymeris maculatus	I-2-c	
ベニタケ	Subula dimidiata	I-2-c	
ナツメガイ科 Bullidae			
ナツメガイ	Bulla vernicosa	I-2-c	
コナツメガイ	Bulla punctulata	I-2-c	
タマゴガイ科 Atyidae			
カイコガイ	Aliculastrum cylindricum	II-2-c	185
アメフラシ科 Aplysiidae			
タツナミガイ	Dolabella auricularia	I-2-b	188
ミスガイ科 Hydatinidae			
ミスガイ科の一種	Hydatinidae gen. et sp.	I-2-a	
カラマツガイ科 Siphonariidae			
コウダカカラマツ	Siphonaria laciniosa	I-0-a	
オカミガイ科 Ellobiidae			
クロヒラシノミ	Pythia pachydon	III-0-a	191
ツヤハマシノミ	Melampus flavus	V-10	192
モノアラガイ科 Lymnaeidae			
タイワンモノアラガイ	Radix swinhoei	IV-6	193
キセルガイ科 Clausiliidae			
ツヤギセル	Luchuphaedusa p. praecleara	V-8	
オキナワギセル	Phaedusa valida	V-7	
ナンバンマイマイ科 Camaenidae			
シュリマイマイ	Satsuma (s.s.) m. mercatoria var.	V-8	196
カツレンマイマイ	Satsuma (s.s.) m. katsurenensis	V-7	
ヤンバルマイマイ	Satsuma (s.s.) "m." atrata	V-7	
オキナワヤマタカマイマイ	Satsuma (Luchu.) euosmia	V-8	
オナジマイマイ科 Bradybaenidae			
バンドナマイマイ	Bradybaena circulus	V-8	
オキナワウスカワマイマイ	Acusta d. despecta	V-8	201
二枚貝綱 Bivalvia			
フネガイ科 Arcoidae			
オオタカノハ	Arca ventricosa	I-2-a	
エガイ	Barbatia (Abarbatia) trapezina	I-1-a	
ベニエガイ	Barbatia (Ust.) amygdaloumstosum	I-2-a	3
リュウキュウサルボオ	Anadana (Anadana) antiquata	II-2-b	
ハイガイ(セイカ型)	Tegillarca granulosa f. obessa	III-1-c	5
イガイ科 Mytilidae			
リュウキュウヒバリ	Modiolus auriculatus	I-1-a	6
ウグイスガイ科 Pteridae			
クロチョウガイ	Pinctada margaritifera	I-4-a	9
シュモクアオリ科 Isognomonidae			
カイシアオリの一種	Isognomon sp.cf. perna	I-1-a	12
シュモクアオリ	Isognomon isognomonum	II-2-b	
ハボウキガイ科 Pinnidae			
ハボウキガイ	Pinna (Subitopinna) sp. cf. bicolor	II-2-c	
イタヤガイ科 Pectinidae			
リュウキュウオウギ	Comptopallium radula	II-2-c	8
ウミギク科 Spondyliidae			
メンガイ類	Spondylus spp.	I-2-a	14
ベッコウガイ科 Pionodontidae			
シャコガキ	Hytissa hyotis	I-2-c	15
イタボガキ科 Ostreidae			
オハグロガキ	Saccostrea mardox	I-1-a	
ニセマガキ	Saccostrea echinata	II-1-b	17
オハグロガキモドキ	Saccostrea circumscuta	II-1-b	18
マガキ類	Crassostrea sp.	III-1-a	
ワニガキ	Dendrostrea folium	II-2-a	
ノギリガキ	Dendrostrea sandwichensis	II-2-a	21
シロヒメガキ	Ostrea fluctigera	II-2-b	22
ツキガイ科 Lucinidae			

和名	学名	生息場所 類型	図版 番号
ツキガイ	Codakia tigerna	I-2-c	24
クチベニツキガイ	Codakia punctata	I-2-c	
ウラツキガイ	Codakia paytenorum	II-2-c	
ヒメツキガイ	epicodakia bella	I-2-c	
カブラツキガイ	Anodontia edentula	II-2-c	28
カゴガイ科 Fimbridae			
カゴガイ	Fimbria soverbii	II-2-c	29
トマヤガイ科 Carditidae			
トマヤガイ	Cardita leana	II-1-a	30
キクザル科 Chamidae			
シロザル	Chama brassica	I-4-a	31
ヒレインコ	Chama lazarus	II-2-b	
キクザル	Chama sp.	II-2-a	
ザルガイ科 Cardiidae			
リュウキュウザルガイ	Vasticardium flavum	II-2-c	
カワラガイ	Fragum unedo	II-2-c	35
オオヒシガイ	Fragum fragum	I-2-c	
シャコガイ科 Tridacnidae			
シラナミ類	Tridacna maxima & noae	I-2-a	37
ヒレジャコ	Tridacna squamosa	I-2-c	38
ヒメジャコ	Tridacna crocea	I-2-a	
シャゴウ	Hippopus hippopus	I-2-c	40
シャコガイ類	"Tridacna" spp.	I-2	
バカガイ科 Mactridae			
リュウキュウバカガイ	Mactra maculata	II-2-c	42
タママキ	Mactra cuneata	II-1-c	43
ユキガイ	Meropesta nicobarica	II-2-c	
リュウキュウアリソガイ	Mactra mera	II-2-c	
チドリマスオガイ科 Mesodesmatidae			
イソハマグリ	Atactodea striata	I-1-c	
ナミノマスオ	Davila plana	I-1-c	
フジノハナガイ科 Donacidae			
リュウキュウナミノコ	Latona faba	I-1-c	
ナミノコガイ	Latona cuneata	II-1-c	49
ニッコウガイ科 Tellinidae			
ニッコウガイ	Tellinella virgata	II-2-c	
ヒメニッコウガイ	Tellinella staurella	II-2-c	
リュウキュウシラトリ	Quidnipsys palatum	II-1-c	
ヌノメイチョウシラトリ	Pistris capsoides	III-1-c	
サメザラ	Scutarcopagia scobinata	I-2-c	54
モチヅキザラ	Cyclotellina remies	I-2-c	55
アサジガイ科 Semelidae			
サメザラモドキ	Semele carnicolor	II-1-c	56
イソシジミ科 Psammobiidae			
リュウキュウマスオ	Asaphis violacens	II-1-c	
マスオガイ	Psammonea elongata	II-1-c	
シジミ科 Cyrenidae			
シレンシジミ	Geloina erosa	III-0-c	59
マルスダレガイ科 Veneridae			
ヌノメガイ	Periglypta puerpera	II-2-c	
アラヌメガイ	Periglypta reticulata	I-2-b	61
ホソズジナミ	Gafrarium pectinatum	II-1-c	
アラスジケマン	Gafrarium tumidum	III-1-c	
ユウカゲハマグリ	Pitar striatum	II-2-c	
ウスハマグリ類	Pitar sp.	II-2-c	65
ケショウヨミナエシ	Pitar(pitarina)obliquatum	II-2-c	66
オイカガミ	Bonartemis histrio	II-2-c	
リュウキュウアサリ	Tapes literatus	II-2-c	68
ヒメリュウキュウアサリ	Tapes belcheri	II-2-a	
ヒメアサリ	Ruditapes variegata	II-1-c	70
スダレハマグリ	Katelysia japonica	II-1-c	71
トドユマリハマグリ	Meretrix sp. cf. lamarcki	II-2-c	72
ハマグリ類似種	Meretrix sp. cf. lusoria	II-2-c	
ダテオキシジミ	Cyclina orientalis	III-1-c	73

生息場所類型 (Habitat)

- I : 外洋—サンゴ礁域
 - II : 内湾—転石域
 - III : 河口干潟—マングローブ域
 - IV : 淡水域
 - V : 陸域
 - VI : その他
- 0 : 潮間帯上部(Iではノッチ, IIIではマングローブ)
 - 1 : 潮間帯中・下部
 - 2 : 亜潮間帯上縁部(Iではイノ—)
 - 3 : 干瀬(II-2のみ適用)
 - 4 : 礁斜面及びその下部
 - 5 : 止水
 - 6 : 流水
 - 7 : 林内
 - 8 : 林内・林縁部
 - 9 : 林縁部
 - 10 : 海浜部
 - 11 : 打ち上げ物
 - 12 : 化石
 - a : 岩礁/岩盤
 - b : 転石
 - c : 礫/砂/泥底
 - d : 植物上
 - e : 淡水の流入する礫底

HB③地区																													HC HB③ 合計																
①					②					③					④		地区外										HB③ 合計																		
I	III	IIIa IIIb	IIIc	III d (IV)	計	IIb	III	IIIa IIIb	IIIc	III d (IV)	-	計	I	IIb	IIc	III	IIIa IIIb	IIIc	III d	-	計	IIc	計	I	IIa IIb	IIc		III		IIIa IIIb	IIIc	III d (IV・ V)	IIIe	-	計										
																																				1									
				1	1			1				1	2					1											1	2	1	1		1	6	10	23								
2		2			4			4					4				1	1	2								42		2	396	4	1		4	449	461	474								
																																		1	1	1	5								
																																			16	16	106								
																																				1	1	1							
																	3										3								2	13	16	205							
		8			8			5					5	8	3		3		2		1						22		1	3	213	8	4		1	252	282	449							
																																						1							
																																					1	1	14						
																																						6							
		8			8			1					1	3	1	1	6		2								2		1	6	137	5	1	1	5	158	180	380							
																	1																				1	4	5	7					
																			1																			1	2						
																																							1						
1				2	3			2	1	1	1	4	2	6	7	32											47	2	2	3		7	27	45	22	24	1	22	151	207	654				
29	55		528	612		35	77	140	711	10	973	113	163	213	2213	114	37	11	4						2868	164	164	146	38	234	1823	2180	1172	1659	91	914	8257	12874	41656						
		2		7	9			2	6							3	38	6	1							48	6	6	3	1	5	20	33	21	31	2	10	126	197	557					
																	1																						1	2					
																	2																						2	18					
																																								78					
9	21	2	314	346		5	7	54	323	12	401	45	62	71	1226	30	15	4	2						1455	79	79	34	8	113	850	482	500	818	36	177	3018	5299	11831						
1				2	3												6	2																					10	23	109				
			16	16					15		15	2	2	2	61	2										69	2	2	1		9	42	24	23	33	5	7	144	246	652					
																												1	1										2	3	4	24			
																																								1	2				
																																								1	3				
																																								2	4	14			
			1	1					1								3													1									2	23	28	292			
																																									1	1	8		
																	1																								2	3	6		
			1	1										1	3	7	9	1									21			3		2	16	19	2	2		17	61	83	414				
			6	6				1	1	2						1	15	1									17	3	3		1	1	27	18	13	16		6	82	112	680				
																																									2	2	15		
			21	21						14	1	15	2	1	7	75	2										87	4	4	6		9	76	50	47	81	3	13	285	412	1568				
																	1																							1	3	4	65		
			1	1													3													2	5	2	2						1	12	17	38			
																																										1	1		
			1	1										1															2			2	17	6	8		1	36	39	415					
																																									3	3	4		
																	2														1	4	2	1	6		1	15	17	46					
								1									3														2	1		2						1	6	10	14		
																																										1	6	10	14
																	1	4																								1	1	2	4

第106表-3 平安山原C遺跡・平安山原B遺跡出土貝類遺体の詳細

地区 区 層	HC地区																													
	貝層Ⅲ群											貝層Ⅱ群											貝層 Ⅳ・Ⅴ 群	地区 外・不 明	Ⅰ 層	Ⅱ 層	Ⅱc	Ⅲ層	Ⅴ層	HC 合計
	1・1a・ 1b	2	3	4	5	-	計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	-	計												
95	ホウシュノタマ	2	6			1		9	1	8	20	2	3	5	3	10	7	7	66	1	3							3	82	
96	タマガイ科												1						1									1	2	
97	ウズラガイ			1	1			2				1							1		2						1	4	10	
98	スクミウズラ				1			1			1								1									1	3	
99	イワカワトキワ																										1	1	2	
100	ヤツシロガイ科																													
101	フジツガイ			1			2	3																				4	7	
102	ミツカドボラ		5	1			20	26			2						2		1	5	2							3	36	
103	サツマボラ	1					2	3													1								4	
104	シノマキ					1		1					1					1											3	
105	シオボラ		1			1		2			1									1	2							2	7	
106	オオゾウガイ																				1								1	
107	ホラガイ	18	23	4	10	32	7	94		4	9	1	1	6	1	10	3	5	40	13	12					1	57	217		
108	オキニシ	6	11		3	29	3	52	1	8	6	1		6	1	8	12	3	46	13	8					1	28	148		
109	シワクチナルトボラ																											1	1	
110	オオナルトボラ	1				1		2			1								1									1	4	
111	シロナルトボラ					1		1													1							3	5	
112	ナルトボラ類																													
113	ガンゼキボラ	35	52	7	14	61	19	188	5	19	73	18	5	40	10	46	45	25	286	53	37		1			4	111	680		
114	テングガイ					1	1	2			1								1	2	2								6	
115	テツレイシ	49	58	4	5	91	4	211		4	8	4	3	6		3	6		34	15	7		2		2	19	290			
116	コイワニシ										2					1			3										3	
117	シラクモガイ	4	7	1	2	24	2	40	1		1			3	1	6	3		15	6	7					1	36	105		
118	ツノテツレイシ					3	7	10		2									2		3							27	42	
119	ツルレイシ	18	36	4	25	154	35	272	11	39	111	31	6	91	25	67	102	55	538	39	54		2		21	173	1099			
120	コイボテツレイシ																											1	1	
121	ウネレイシダマシ										1								1										1	
122	ヨウラクレイシダマシ										1								1										1	
123	レイシダマシ										1								1										1	
124	レイシ類																													
125	ハナワレイシ										8								8										8	
126	ムラサキイガレイシ					3	1	4											1	1	1	1					5	12		
127	シロイガレイシ					1		1			3			1					4										5	
128	アカイガレイシ	5	7	1	6	26	4	49		4	12	2		1		8	18	3	48	9	10				2	21	139			
129	ホソスジテツボラ											1							1										1	
130	アッキガイ科																													
131	オニコブシ		2		2	5	1	10		2									3	2	2					2	13	32		
132	コオニコブシ	27	59	1	6	83	15	191	3	22	53	14	1	33	8	67	44	13	258	58	28		1		6	138	680			
133	フトログガイ		1					1					1						1										2	
134	ノシガイ										1								3	1									4	
135	シマベッコウバイ	5	1		1	4	1	12		4	23	1	2	11	2	8	11	3	65									77		
136	ヒメオリレムシロ	1				3		4			2								2										6	
137	アツムシロ										1								1										1	
138	アワムシロ											1							1										1	
139	イトマキボラ	68	85	16	35	215	47	466	1	28	78	18	8	41	17	29	56	20	296	108	90				7	326	1293			
140	ナガイトマキボラ			1				1																		1	5	7		
141	ベニマキ											1							1										1	

第106表-6 平安山原C遺跡・平安山原B遺跡出土貝類遺体の詳細

地区 区 層 番号 和名	HC地区																									貝層 IV・V 群	地区 外・不 明	I 層	II 層	IIc	III層	V層	HC 合計
	貝層III群										貝層II群																						
	1・1a・ 1b	2	3	4	5	-	計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	-	計															
33	キクザル科	2	2	1		3		8																5	1						12	26	
34	リュウキュウザルガイ	13	12	2	19	106	5	157		3	16	1		1				3	1	25	15	48	2	4	1	7	312		571				
35	カワラガイ	147	318	72	140	472	112	1261		112	144	15	13	43	16	62	231	11	647	153	307	2	13			45	2074		4502				
36	オオヒシガイ																																
37	シラナミ類	825	1471	298	477	3856	725	7652		319	330	68	95	131	88	279	488	37	1835	1381	1092		38			295	6753		19046				
38	ヒレジャコ	61	84	21	26	215	28	435		46	37	9	1	12	10	7	61	12	195	55	26						55		766				
39	ヒメジャコ	127	275	42	242	1063	84	1833	2	63	86	17	36	49	13	58	100	19	443	96	153					5	89		2619				
40	シャゴウ	93	117	24	54	351	69	708	1	41	47	10	10	19	10	42	57	6	243	257	160					41	702		2111				
41	シャコガイ類	5	2		1	6	3	17								1		2	3	1	3					1	20		45				
42	リュウキュウバカガイ		4	2	4	13	1	24			1							1	2	3	16		1					48		94			
43	タママキ		2			1		3		1	3								4									4		11			
44	ユキガイ																												1		1		
45	リュウキュウアリソガイ																				1								3		4		
46	イソハマグリ	3319	9969	134	1594	2388	1410	18814		12128	12323	1428	2055	2540	1231	4880	10585	2015	49185	2106	2987					14	632		73738				
47	ナミノコマスオ	22	52		4	2	3	83		97	60	2	8	2	3	9	50	4	235	16	16						4		354				
48	リュウキュウナミノコ	9	62		7	6	2	86		86	136	6	22	21	14	21	38	7	351	3	19						1		460				
49	ナミノコガイ									1									1										1				
50	ニッコウガイ		2			4		6													4						1	7		18			
51	ヒメニッコウガイ	1140					1	1141																				6		1147			
52	リュウキュウシラトリ	21	44	19	32	308	30	454		24	69	3	3	9	15	18	34	19	194	39	1381		1	1	4	912		2986					
53	ヌノメイチョウシラトリ		2			6		8			5							1	6		2						1		17				
54	サメザラ		2	1		7		10			1								1								1	9		21			
55	モチヅキザラ			1		2		3			1								1									1		5			
56	サメザラモドキ					1		1																						1			
57	リュウキュウマスオ	64	156	30	70	247	47	614		102	141	5	13	27	13	65	89	28	483	37	97		1		16	464		1712					
58	マスオガイ	34	86	18	34	240	44	456		43	62	2	1	14	18	15	36	3	194	23	186		2		13	789		1663					
59	シレナシジミ	22	52	15	24	174	14	301		9	23		4	12	6	6	29	3	92	64	46				11	247		761					
60	ヌノメガイ	161	206	35	65	443	66	976		83	67	11	13	29	23	65	155	11	457	128	135	1	4		18	516		2235					
61	アラヌメガイ	1				5		6										1	1	2	1						2		11				
62	ホソスジイナミ	133	307	12	176	257	165	1050		53	166	14	5	28	5	39	94	10	414	70	124		2		5	154		1819					
63	アラスジケマン	442	744	80	618	1021	330	3235		154	506	23	12	36	15	152	319	54	1271	624	575		7		15	1069		6796					
64	ユウカゲハマグリ	4	12	5	14	50	8	93		3	11	1	2	1	1	4	3	3	29	5	260				4	219		610					
65	ウスハマグリ類					1		1																						1			
66	ケショウオミナエシ					1		1																						1			
67	オイノカガミ		1		2	46	6	55		1	3			1	2	1	1		9		6				1	22		93					
68	リュウキュウアサリ					4		4										1	1		1						6		12				
69	ヒメリュウキュウアサリ		1			1		2																				2		4			
70	ヒメアサリ	3	2	1	2	4	4	16			5		1	3			2	2	13		4					9		42					
71	スダレハマグリ	70	201	12	24	92	34	433		11	15	2	8	1		6	21	1	65	8	51		1		2	236		796					
72	トウドウマリハマグリ		2			4		6																			1		7				
73	ダテオキシジミ		3				1	4																			5		9				
74	マルスダレガイ科																										1		1				
二枚貝合計		6978	14699	928	3832	12796	3427	42660	4	13632	14713	1653	2342	3073	1579	5846	12666	2312	57820	5398	8181	6	84	4	558	17090		131801					
巻貝類・二枚貝合計		10393	20415	1857	6211	24644	6252	69772	441	15941	20209	2826	2760	6073	2514	9748	17792	4158	82462	11816	12814	23	163	16	1156	33565		211787					
区別合計		69772										82462										11816	12814	23	163	16	1156	33565	211787				
地区別(HC・HB③)合計		211787																															

HB地区																									HB③ 合計	HC HB③ 合計											
①					②					③					④					地区外																	
I	II	IIIa	IIIc	III d (IV)	計	II b	III	III a	III c	III d (IV)	-	計	I	II b	II c	III	III a	III c	III d	-	計	II c	計	I			II a	II c	III	III a	III c	III d (IV·V)	III e	-	計		
1					1					2	1	3				1						1					2	4	3	2	4	1		16	21	47	
	1			9	10		3		5	5		13	1	1	8	105						115	26	26	5	3	26	303	28	102	125		63	655	819	1390	
	6			30	36		22	2	25	53	2	104	8	6	48	411	1	3	1			478	118	118	14	26	143	1068	152	446	653	5	226	2733	3469	7971	
																											1								1	1	1
	64	29	2	498	593		28	24	99	536	12	699	38	66	84	1532	61	22		1		1804	115	115	76	31	204	1498	1144	968	1854	119	316	6210	9421	28467	
				53	53					18		18	2		2	63		2				69	11	11			2	30	12	6	32	2	8	92	243	1009	
				100	100					18		18		1	2	182	2	1				188	28	28			18	106	12	29	55	7	2	229	563	3182	
	8	3		81	92		7	1	10	71	1	90	10	17	10	170	6	2		2		217	12	12	13	1	30	159	197	150	263	13	39	865	1276	3387	
				1	1																											1			1	2	47
									1	2		3				10						10	1	1	1	3	3	26	5	3	19		18	78	92	186	
													1			4						5					11	2	5	13		3	34	39	50		
																																					1
																																					4
2	31	39		133	205		17	140	49	109	2	317	39	57	32	431	4	9		1		573	27	27	46	38	80	544	1745	892	402	2	268	4017	5139	78877	
				1	1											1						1						1	2	1				4	6	360	
															1	1						2	1	1			2	7	3	3		4	19	22		482	
																																				1	
										1	1					3						3					8		3	3		2	16	20		38	
				1	1																														1	1148	
				6	6		7	1	6	15		29	4	2	12	152						170	68	68	7	21	57	527	45	133	314	2	236	1342	1615	4601	
																1						1					5			1			6	7	24		
																1						1	1	1			3		1			4	6		27		
																													1			1	1		6		
																																				1	
	5		1	34	40		2	3	8	28	1	42	2	7	25	154	3					191	40	40	7	13	38	251	59	82	152	7	70	679	992	2704	
	1			6	7		5	1	9	10		25	1	5	14	150	1	2				173	66	66	9	8	44	357	20	125	296	1	196	1056	1327	2990	
	5	5		14	24		1	6	6	25	2	40		1	8	115	2	1				127	8	8	3		8	103	93	77	104	5	20	413	612	1373	
	6	3	1	33	43		3	7	8	35	3	56	4	25	49	206	11	5				300	14	14	15	12	45	202	295	129	144	5	66	913	1326	3561	
							2					2	2	2	9							13	1	1		1	4	8	18			2	33	49	60		
	1	1		13	15		5	2	8	36	2	53	9	29	123	329	1	7		2		500	68	68	17	46	62	443	169	122	161	4	265	1289	1925	3744	
	40	10	3	261	314		31	56	65	428	13	593	104	111	146	1686	19	29		4		2099	341	341	46	35	158	1157	996	903	1229	38	475	5037	8384	15180	
							2	3	2	1	8	1	1	11	75							88	19	19	2	13	15	244	15	60	129		128	606	721	1331	
																																				1	
																																				1	
							1					1		2	1	7						10	1	1		2	6	30	3	16	20		6	83	95	188	
																2	1					3	1	1			1	1			3		1	6	10	22	
																											3							3	3	7	
													1	2	2							5	1	1	1		9	2		4		9	25	31	73		
	1	1		5	7				5	8	1	14		1	1	34						36	11	11	1	2	12	83	16	48	79		27	268	336	1132	
									4	4	1					1						2	2	2	1		8	3	7	5		1	25	33	40		
																											2					2	2		11		
																											2				1		1	4	4	5	
3	182	99	7	1392	1683		142	255	333	1505	45	2280	238	356	616	6273	126	85	1	11		7706	1049	1049	287	271	1029	7922	5422	4726	6671	228	2678	29234	41952	173753	
5	270	252	13	3025	3565	1	207	406	698	3194	82	4588	531	702	1119	12734	361	175	34	26		15682	1641	1641	712	429	1882	13963	11114	8119	11965	480	4790	53454	78930	290717	
3565					4588					15682					1641					53454					78930					290717							
78930																														290717							

＜巻貝＞

ユキノカサ科 (4 リュウキュウウノアシ) **リュウテン科** (8 コシダカサザエ 12 ヤコウガイ 16 オオウラウズ) **ニシキウズ科** (19 コシダカギンタカハマ 20 サラサバテイラ 21 オキナワイシダタミ) **アマオブネ科** (23 キバアマガイ 26 マルアマオブネ 27 オオマルアマオブネ 31 イガカノコ 33 シマカノコ 35 フネアマガイ) **オニノツノガイ科** (39 オニノツノガイ 40 ハシナガツノブエ 42 クワノミカニモリ 43 カヤノミカニモリ 44 イワ(ウミニナ)カニモリ) **ヘナタリ科** (47 センニンガイ 48 マドモチウミニナ) **ウミニナ科** (50 リュウキュウウミニナ) **トウガタカワニナ科** (56 スグカワニナ 57 ヨシカワニナ) **カワニナ科** (59 カワニナ) **スイショウガイ科** (62 オハグログガイ 64 マガキガイ 69 クモガイ 70 ラクダガイ) **ムカデガイ科** (73 フタモチヘビガイ 74 リュウキュウヘビガイ 75 ヘビガイ類) **スズメガイ科** (76 アツキクスズメ) **タカラガイ科** (78 キイロダカラ 84 ホソヤクシマダカラ 85 ホシダカラ 89 タカラガイ科) **タマガイ科** (91 トミガイ) **ヤツシロガイ科** (98 スクミウズラ 99 イワカワトキワ) **フジツガイ科** (101 フジツガイ 102 ミツカドボラ 103 サツマボラ 104 シノマキ 105 シオボラ 106 オオゾウガイ 107 ホラガイ) **オキニシ科** (110 オオナルトボラ) **アッキガイ科** (114 テングガイ 116 コイワニシ 117 シラクモガイ 119 ツノレイシ 120 コイボテツレイシ 121 ウネレイシダマシ 122 ヨウラクレイシダマシ 123 レイシダマシ 125 ハナワレイシ 129 ホソスジテツボラ) **オニコブシ科** (131 オニコブシ) **フトコロガイ科** (133 フトコロガイ) **エゾバイ科** (134 ノシガイ 135 シマベッコウバイ) **オリイレヨフバイ科** (136 ヒメオリイレムシロ 137 アツムシロ) **イトマキボラ科** (140 ナガイトマキボラ 141 ベニマキ 142 ツノマタモドキ 143 リュウキュウツノマタ) **マクラガイ科** (146 サツマナビ) **フデガイ科** (148 イモフデ) **ミノムシガイ科** (150 オオミノムシガイ) **イモガイ科** (152 サヤガタイモ 153 ジュズカケサヤガタイモ 154 イボシマイモ 156 ヤナギシボリイモ 157 サラサミナシ 159 カバミナシ 161 サラサモドキ 162 ヒラマキイモ 165 ニシキミナシ 167 シロアンボイナ 168 ナンヨウクロミナシ 169 ミカドミナシ 171 ナガサラサミナシ 173 コモンイモ 176 アンボンクロザメ 177 クロフモドキ) **タケノコガイ科** (182 ウシノツノ) **タマゴガイ科** (185 カイコガイ) **タツナミガイ科** (188 タツナミガイ) **オカミミガイ科** (191 クロヒラシイノミ 192 ツヤハマシイノミ) **モノアラガイ科** (193 タイワンモノアラガイ) **ナンバンマイマイ科** (196 シュリマイマイ) **オナジマイマイ科** (201 オキナワウスカワマイマイ)

＜二枚貝＞

フネガイ科 (3 ベニエガイ 5 ハイガイ (セイタカ型)) **イガイ科** (6 リュウキュウヒバリ) **イタヤガイ科** (8 リュウキュウオウギ) **ウグイスガイ科** (9 クロチョウガイ) **シュモクアオリ科** (12 カイシアオリの一種) **ウミギク科** (14 メンガイ類) **ベッコウガキ科** (15 シャコガキ) **イタボガキ科** (17 ニセマガキ 18 オハグログガキモドキ 21 ノコギリガキ 22 シロヒメガキ) **ツキガイ科** (24 ツキガイ 28 カブラツキガイ) **カゴガイ科** (29 カゴガイ) **トマヤガイ科** (30 トマヤガイ) **キクザル科** (31 シロザル) **ザルガイ科** (35 カワラガイ) **シャコガイ科** (37 シラナミ類 38 ヒレジャコ 40 シャゴウ) **バカガイ科** (42 リュウキュウバカガイ 43 タママキ) **フジノハナガイ科** (49 ナミノコガイ) **ニッコウガイ科** (54 サメザラ 55 モチヅキザラ) **アサジガイ科** (56 サメザラモドキ) **シジミ科** (59 シレナシジミ) **マルスダレガイ科** (61 アラヌノメガイ 65 ウスハマグリ類 66 ケショウオミナエシ 68 リュウキュウアサリ 70 ヒメアサリ 71 スダレハマグリ 72 トウドウマリハマグリ 73 ダテオキシジミ)

貝類遺体名称 (図版 137 ~ 139)



図版 137 貝類遺体 1 (巻貝)

(番号は第 105 表と一致)



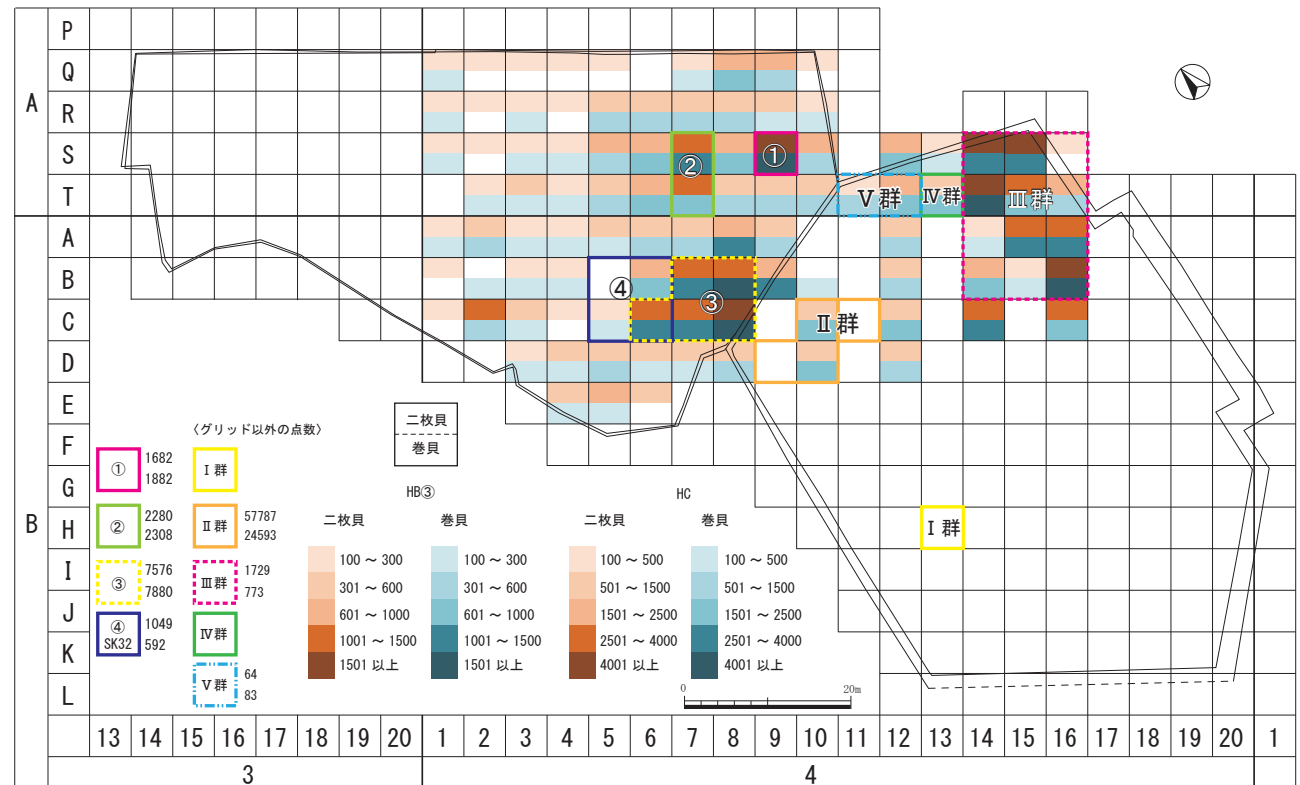
図版 138 貝類遺体 2 (上段：巻貝、下段：二枚貝)

(番号は第 105 表と一致)



図版 139 貝類遺体 3 (二枚貝)

(番号は第 105 表と一致)



第 190 図 平安山原 B・C 遺跡 貝類遺体分析地区名

第3節 平安山原B遺跡・平安山原C遺跡の年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

北谷町に所在する平安山原B遺跡、平安山原C遺跡は、沖縄本島中部の東シナ海に臨む海岸低地に位置する遺跡である。平安山原B遺跡は、これまでの調査で貝塚時代後期から戦前までの遺構や遺物が確認されている。一方、平安山原C遺跡は貝塚時代後期と想定される貝層が検出された。

本報告では平安山原B遺跡のR-8、T-5、Q-8グリッドから出土した炭化材6点と平安山原C遺跡の土坑や貝層より出土した獣骨4点と土器付着炭化物1点の放射性炭素年代測定を実施し、遺構および遺物包含層の年代に関わる資料を作成する。

1. 試料

平安山原B遺跡の試料は、R-8グリッドⅢe(15)層から出土した炭化材4点、T-5グリッドⅢd(14)層から出土した炭化材1点、Q-8グリッドⅢe(15)層から出土した炭化材1点の合計6点である。

平安山原C遺跡の試料は、HC-SK03より出土したウマ下顎骨1点と貝層Ⅲ群より出土したイノシシ下顎骨3点、土器付着炭化物1点の合計5点である。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

分析試料はAMS法で実施する。木材や炭化物は、試料表面の汚れをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する（酸—アルカリ—酸処理：AAA）。

骨試料はコラーゲン抽出（Collagen Extraction）を行う。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラシ等を使い、根・土壌等の付着物を取り除く。試料をビーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行う。

0.2Mの水酸化ナトリウム水溶液を試料の入ったビーカーに入れ、試料の着色がなくなるまで1時間ごとに水酸化ナトリウム水溶液を交換する。その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉碎用セルに入れ、粉碎する。リン酸塩除去のため試料を透析膜に入れて1Mの塩酸で酸処理を行い、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、得られた沈殿物に超純水を加え、90℃に加熱した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラーゲンを得る。

試料を燃焼させたあと、真空ラインで不純物（水など）を取り除き、CO₂を精製する。これを鉄で還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、小型タンデム加速器にて測定する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2016 M Stuiver and PJ

Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年) を較正することである。暦年較正は、CALIB7.1.0 のマニュアルにしたがい、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。暦年較正は北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表された値を記す。

3. 結果・考察

同位体効果による補正を行った測定結果を第 107 表、暦年較正結果を第 108 表に示す。

平安山原 B 遺跡の試料の測定年代 (補正年代) は R-8 グリッド III e(15) 層検出の 4 点 (Dot2199、Dot2200、Dot2201、Dot2427) は $1,010 \pm 20\text{BP}$ 、 $1,100 \pm 20\text{BP}$ 、 $1,100 \pm 20\text{BP}$ 、 $970 \pm 20\text{BP}$ 、T-5 グリッド III d(14) 層 (Dot2219) が $1,070 \pm 20\text{BP}$ 、Q-8 グリッド III e(15) 層 (Dot2323) が $1,080 \pm 20\text{BP}$ の値を示す。また、測定誤差を σ として計算させた暦年較正の結果は、R-8 グリッド III e(15) 層検出の 4 点 (Dot2199、Dot2200、Dot2201、Dot2427) が calAD997-1,027、calAD899-979、calAD899-977、calAD1,021-1,146、T-5 グリッド III d(14) 層 (Dot2219) が calAD 975-1,013、Q-8 グリッド III e(15) 層 (Dot2323) が calAD901-994 であった。

分析試料 6 点の測定年代 (補正年代) は $970 \pm 20\text{BP}$ ~ $1,100 \pm 20\text{BP}$ のまとまった値を示した。暦年較正年代は 10 世紀から 12 世紀半ばを示した。試料の炭化材 6 点は鉄製の鍬が出土した層の上下から出土し、分析目的は農具に関する間接的情報を得ることとしている。年代測定の結果から鍬の出土層の年代は 10 世紀から 12 世紀半ばに収まるものと推定される。

第 107 表 放射性炭素年代測定結果

遺跡名	遺構 グリッド 層位	試料の種類 (樹種同定)	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
平安山原 B 遺跡	R-8 III e(15) 層 Dot2199	炭化材 広葉樹 (散孔材)	$1,010 \pm 20$	-28.76 ± 0.19	$1,070 \pm 20$	IAAA-152578
	R-8 III e(15) 層 Dot2200	炭化材 広葉樹 (散孔材)	$1,100 \pm 20$	-28.05 ± 0.25	$1,150 \pm 20$	IAAA-152579
	R-8 III e(15) 層 Dot2201	炭化材 炭質物	$1,100 \pm 20$	-29.44 ± 0.18	$1,180 \pm 20$	IAAA-152580
	T-5 III d(14) 層 Dot2219	炭化材 未同定	$1,070 \pm 20$	-30.08 ± 0.19	$1,150 \pm 20$	IAAA-152581
	Q-8 III e(15) 層 Dot2323	炭化材 マツ属複維管束亜属	$1,080 \pm 20$	-29.36 ± 0.21	$1,150 \pm 20$	IAAA-152582
	R-8 III e(15) 層 Dot2427	炭化材 マツ属複維管束亜属 (節)	970 ± 20	-30.11 ± 0.19	$1,060 \pm 20$	IAAA-152583
平安山原 C 遺跡	HC-SK03	ウマ 下顎骨	560 ± 20	-15.68 ± 0.47	410 ± 20	IAAA-160029
	T15-42 貝層 III 群 -1 層	イノシシ 下顎骨 R	$1,140 \pm 30$	-23.22 ± 0.57	$1,110 \pm 20$	IAAA-160030
	S15-51 貝層 III 群 -1 層	イノシシ 下顎骨 R	$1,340 \pm 30$	-21.87 ± 0.52	$1,290 \pm 20$	IAAA-160032
	S15 貝層 III 群 -5 層	イノシシ 下顎骨 R	$1,890 \pm 30$	-21.97 ± 0.44	$1,840 \pm 20$	IAAA-160031
	貝層 III 群 -5 層 土器附着炭化物	炭化物	$1,800 \pm 30$	-22.45 ± 0.57	$1,750 \pm 20$	IAAA-122320

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。

2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

第108表 暦年較正結果

遺跡名	試料名	補正年代 (BP)		暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.
平安山原B遺跡	R-8 III e(15)層 Dot2199	1,012 ± 21	σ	cal AD 997 - cal AD 1,006	cal BP 953 - 944	0.263	IAAA-152578		
				cal AD 1,011 - cal AD 1,027	cal BP 939 - 923	0.737			
		2σ	cal AD 986 - cal AD 1,038	cal BP 964 - 912	1.000				
	R-8 III e(15)層 Dot2200	1,102 ± 22	σ	cal AD 899 - cal AD 932	cal BP 1,051 - 1,018	0.438		IAAA-152579	
				cal AD 947 - cal AD 979	cal BP 1,003 - 971	0.562			
		2σ	cal AD 892 - cal AD 988	cal BP 1,058 - 962	1.000				
	R-8 III e(15)層 Dot2201	1,104 ± 21	σ	cal AD 899 - cal AD 923	cal BP 1,051 - 1,027	0.455		IAAA-152580	
				cal AD 946 - cal AD 977	cal BP 1,004 - 973	0.545			
		2σ	cal AD 893 - cal AD 987	cal BP 1,057 - 963	1.000				
T-5 III d(14)層 Dot2219	1,065 ± 21	σ	cal AD 975 - cal AD 1,013	cal BP 975 - 937	1.000	IAAA-152581			
			cal AD 901 - cal AD 921	cal BP 1,049 - 1,029	0.110				
	2σ	cal AD 951 - cal AD 1,020	cal BP 999 - 930	0.890					
Q-8 III e(15)層 Dot2323	1,081 ± 21	σ	cal AD 901 - cal AD 920	cal BP 1,049 - 1,030	0.303	IAAA-152582			
			cal AD 961 - cal AD 994	cal BP 989 - 956	0.697				
	2σ	cal AD 897 - cal AD 926	cal BP 1,053 - 1,024	0.266					
		cal AD 942 - cal AD 1,015	cal BP 1,008 - 935	0.734					
R-8 III e(15)層 Dot2427	973 ± 21	σ	cal AD 1,021 - cal AD 1,045	cal BP 929 - 905	0.581	IAAA-152583			
			cal AD 1,097 - cal AD 1,119	cal BP 853 - 831	0.379				
	2σ	cal AD 1,143 - cal AD 1,146	cal BP 807 - 804	0.040					
		cal AD 1,018 - cal AD 1,051	cal BP 932 - 899	0.470					
	2σ	cal AD 1,081 - cal AD 1,151	cal BP 869 - 799	0.530					
平安山原C遺跡	HC-SK03 ウマ下顎骨	560 ± 23	σ	cal AD 1,326 - cal AD 1,343	cal BP 624 - 607	0.450	IAAA-160029		
				cal AD 1,394 - cal AD 1,413	cal BP 556 - 537	0.550			
		2σ	cal AD 1,314 - cal AD 1,356	cal BP 636 - 594	0.498				
			cal AD 1,388 - cal AD 1,423	cal BP 562 - 527	0.502				
	T15-42 貝層Ⅲ群-1層 イノシシ下顎骨R	1,140 ± 25	σ	cal AD 882 - cal AD 905	cal BP 1,068 - 1,045	0.300	IAAA-160030		
				cal AD 916 - cal AD 967	cal BP 1,034 - 983	0.700			
		2σ	cal AD 778 - cal AD 791	cal BP 1,172 - 1,159	0.044				
			cal AD 804 - cal AD 843	cal BP 1,146 - 1,107	0.078				
		2σ	cal AD 859 - cal AD 979	cal BP 1,091 - 971	0.878				
	S15-51 貝層Ⅲ群-1層 イノシシ下顎骨R	1,340 ± 25	σ	cal AD 655 - cal AD 679	cal BP 1,295 - 1,271	1.000	IAAA-160032		
				cal AD 647 - cal AD 695	cal BP 1,303 - 1,255	0.903			
	2σ	cal AD 700 - cal AD 710	cal BP 1,250 - 1,240	0.022					
		cal AD 746 - cal AD 763	cal BP 1,204 - 1,187	0.074					
S15 貝層Ⅲ群-5層 イノシシ下顎骨R	1,887 ± 25	σ	cal AD 77 - cal AD 132	cal BP 1,873 - 1,818	1.000	IAAA-160031			
			cal AD 63 - cal AD 179	cal BP 1,887 - 1,771	0.922				
	2σ	cal AD 186 - cal AD 213	cal BP 1,764 - 1,737	0.078					
貝層Ⅲ群-5層 土器附着炭化物	1,795 ± 26	σ	cal AD 144 - cal AD 153	cal BP 1,806 - 1,797	0.064	IAAA-122320			
			cal AD 169 - cal AD 194	cal BP 1,781 - 1,756	0.209				
	2σ	cal AD 210 - cal AD 255	cal BP 1,740 - 1,695	0.580					
		cal AD 300 - cal AD 317	cal BP 1,650 - 1,633	0.147					
	2σ	cal AD 134 - cal AD 259	cal BP 1,816 - 1,691	0.800					
		cal AD 281 - cal AD 324	cal BP 1,669 - 1,626	0.200					

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0 (Copyright 1986-2016 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
- 5) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

農耕に関する近隣遺跡の情報として、小堀原遺跡から検出された栽培植物のアワ、オオムギ、イネの年代測定が実施されている（高宮・千田，2014）。補正年代は920 ± 20BP ~ 1,030 ± 30BP、暦年較正年代（2σ）は10世紀半ばから12世紀半ばとされる。今回の年代測定の結果と調和するものである。

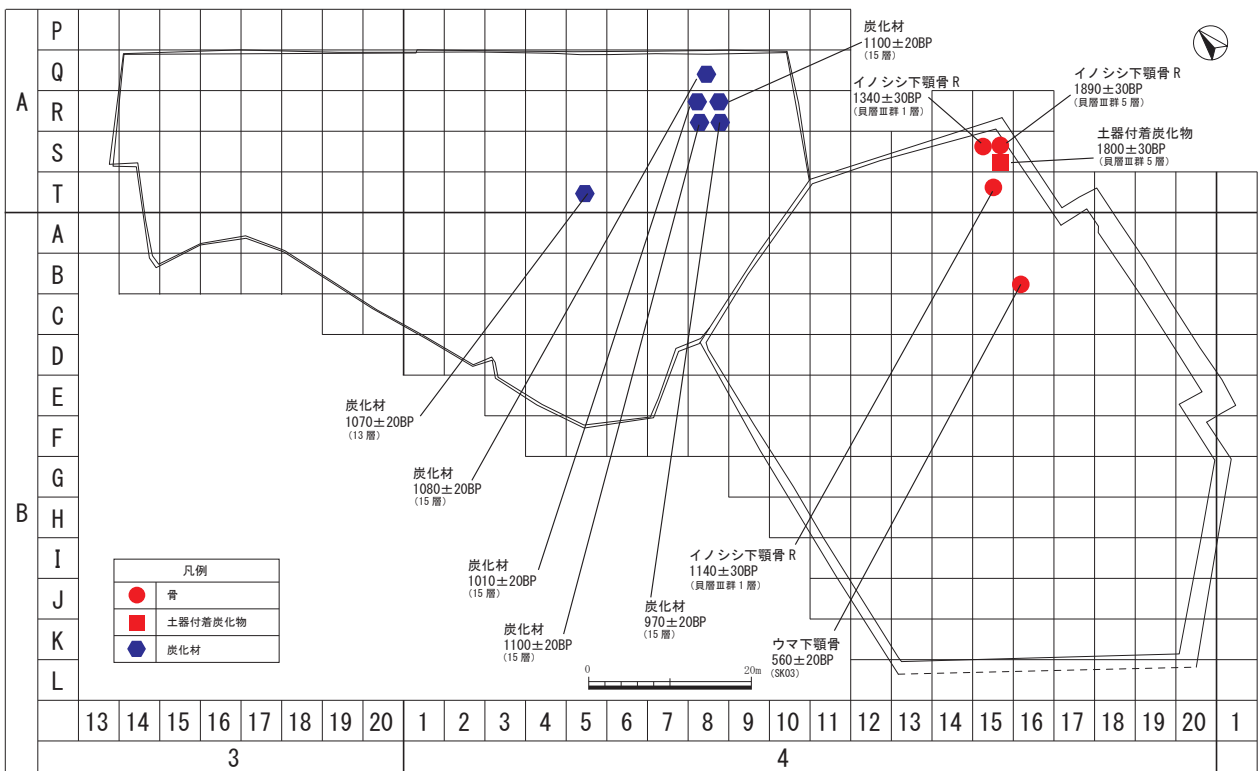
平安山原C遺跡の試料の測定年代（補正年代）は、HC-SK03 ウマ下顎骨が560 ± 20BP、貝層Ⅲ群-1層イノシシ下顎骨2点が1,140 ± 30BPと1,340 ± 30BP、貝層Ⅲ-5層イノシシ下顎骨が1,890 ± 30BP、土器附着炭化物が1,800 ± 30BPを示す。測定誤差をσとして計算させた結果、暦年較正年代はHC-

SK03 ウマ下顎骨が calAD1,326-1,413、貝層Ⅲ群-1層が calAD882-967、calAD655-679、貝層Ⅲ群-5層のイノシシ下顎骨が calAD77-132、土器付着炭化物が calAD144-317 である。

この測定結果を考慮すると、HC-SK03 ウマ下顎骨は 14 世紀前半から 15 世紀前半頃のグスク時代のもものと推定される。貝層Ⅲ群-1層より出土したイノシシの下顎骨の 2 点は 9 世紀後半から 10 世紀半ばと 7 世紀後半で、貝塚時代後期後半頃と推定される。また貝層Ⅲ群-5層のイノシシ下顎骨は 1 世紀後半から 2 世紀前半、土器付着炭化物は 2 世紀半ばから 4 世紀初頭頃で、貝塚時代後期前半と推定される。この結果は土層の累重関係と調和する。さらに調査所見によると、HC-SK03 のウマ下顎骨は南宋銭の大銭と共伴し、貝層Ⅲ群-1層は 6 世紀から 10 世紀、貝層Ⅲ群-5層は 1 世紀から 5 世紀と想定され、土器付着炭化物はゴホウラの腕輪と共伴するとされる。いずれも年代測定の結果と調和するものであった。

<引用文献>

高宮広土・千田寛之, 2014, 琉球列島先史・原史時代における植物食利用. 高宮広土・新里貴之編, 琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第 2 集, 琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷, 六一書房, 127-142.



第 191 図 平安山原 B・C 遺跡 試料採取箇所

第4節 平安山原B・C遺跡より出土した人骨資料について

藤田祐樹（沖縄県立博物館・美術館）

平安山原BおよびC遺跡から出土した人骨は、総数も少なく、いずれも断片的で破損も著しい。そのため、計測に耐える資料や、形態学的に特徴を議論できるような資料はない。しかしながら、その保存状況からこうした断片的な人骨の埋没した背景について若干の示唆が得られるため、本稿ではこうした点に注目して議論する。なお、平安山原C遺跡から出土した人骨のほうが多く、平安山原B遺跡の資料は数点にとどまるが、両者を明確に区別する必要はないと思われるため、両者を一連の資料として捉える。

資料には、堆積物の付着などはほぼ認められなかった。そのため、クリーニングはブラシ等で簡単に砂を物理的に除去するのみで終え、破損した資料の接合には、アセトン可用性の接着剤（Vutbar, Polybinyln Butyral Resis, Eastman Chemical Company, USA）を用いた。全ての資料について部位、年齢、性別等を検討したが、結果として性別を明らかにできる資料はなかった。年齢はサイズを主な手がかりとして成人か幼児かの判定を行ったが、その確度は不明であるため不確定の場合には「成人サイズ」などと記載するにとどめた。

出土状況および残存状況について

平安山原B・C遺跡より出土した人骨は、四肢骨、特に下肢骨の骨幹部が大半を占める。破片は小さく、最長の破片でも22cm以下である。出土位置は、広範囲にまばらに散乱しており、人骨の集中や個体のまとまりなどといった特定の傾向を見いだすことはできない。したがって、人骨はいずれも、それぞれの出土位置周辺に埋葬されたわけではなく、ある程度の距離を移動してきたものと推測される。地層中には流路とみなせる痕跡もあるが、こうした水流や、砂自体の移動によって、離れたところにあった埋葬が動かされ、その人骨が分散した結果、平安山原B・C遺跡一体に広がったものと考えられる。

大半の骨で骨表面の傷みが著しく、破断面も磨滅しているといった特徴も、こうした仮説と矛盾しない。水流や砂の動きを頻繁にうけて、骨表面や破断面が小さな破損を繰り返した結果、こうした磨滅が生じたのであろう。

下肢骨が比較的多く認められているが、その理由は人為的なものではなく、人骨が自然の営為によって移動するプロセスで、大半の骨が破砕消失するためと推測される。大腿骨や脛骨の骨幹部は、骨格の中でも特に骨壁が厚く、比較的頑丈である。そのため、こうした部位は自然の営為によって破壊されにくかったのであろう。

性別を推定できる資料はないが、成人サイズと判断される資料が多い。しかし、乳歯や、ほぼ未咬耗の永久歯（上顎中切歯）、明らかな幼児大腿骨も、わずかながら含まれている。したがって、成人サイズが多い理由も、やはり人骨が移動するプロセスで比較的キャシャな幼児人骨のほうにより破損消失しやすかったためと考えるべきだろう。そうであれば、もともと人骨があった場所には、成人も幼児も埋葬されていたかもしれない。

最後に、もともとの埋葬場所はどこかという疑問が残るが、これについては本遺跡の資料からは推測することが難しい。水流の影響で運ばれたのであれば、その上流部が候補として考えられるものの、人骨出土位置は必ずしも流路と一致しない。また、磨滅の程度が比較的軽い資料もあり、全

てが同じ要因によって同一箇所から運搬されていないかもしれない。現状では、遺跡周辺であろうとは推測されるものの、残念ながらその正確な位置はおろか方角すら、推測するのは困難である。

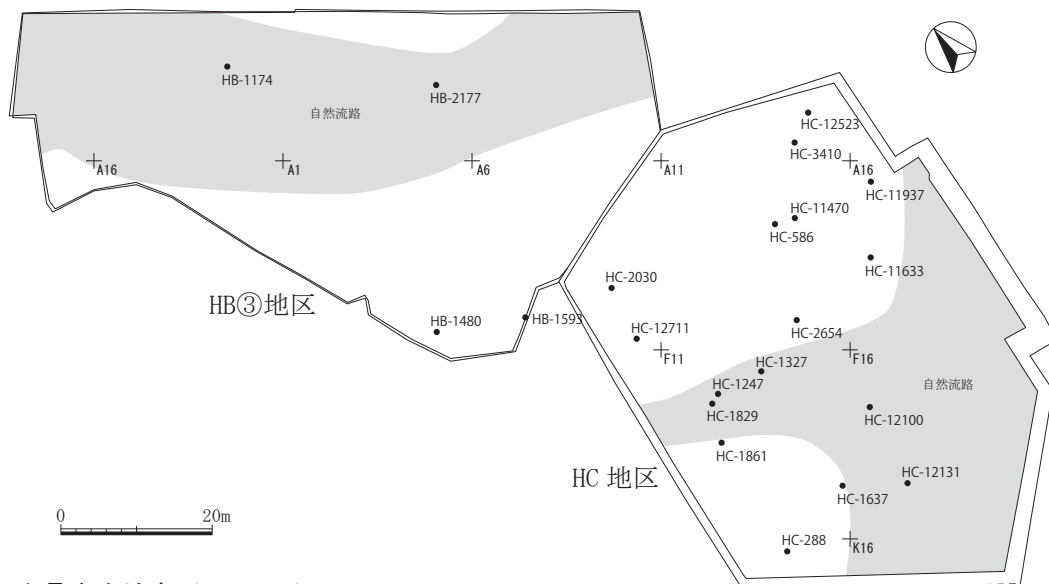
第 109 表 平安山原 B 遺跡および平安山原 C 遺跡から出土した人骨片一覧

図版 番号	Site	No.	Grid	層位・ 遺構	部位	左右	年齢	性別	残存程度					備考	
									近位 端	近位 骨幹	中央 骨幹	遠位 骨幹	遠位 端		全体
1	HC	台11470	B14	V	大腿骨片	L?	成人サイズ	ND	0	1	0	0	0	1	
2	HC	ド 2030	D9	V	脛骨	R	成人サイズ	M?	0	1	1	1	0	2	骨壁厚く男性的な印象をうけるが、表面の傷み激しく、詳細不明。サイズは普通。
3	HC	ド 1637	I15	V	脛骨	R	成人サイズ	ND	0	1	1	1	0	3	2030と同程度のサイズ。ひらめ筋線や骨間線の発達は弱い。
4	HC	ド 2654	E14	V	大腿骨片	R	成人サイズ	ND	0	1	1	1	0	2	シャフトはやや細く、粗線の発達も弱い。腎筋粗面は中程度。骨表面の傷みややや目立ち、破断面も摩滅している。
5	HC	台11937	A16	貝層 Ⅲ群 5	上顎第二大臼歯	L	成人	ND						3	重度の咬耗。遠心の歯頸部に重度のカリエス。歯石は認められない。
6	HC	台11633	C16	V	上顎第二大臼歯	L	成人	ND						5	強度の咬耗。遠心の歯頸部に重度のカリエス。頬側にわずかに歯石が付着。
7	HC	台12131	I17		上顎中切歯	L	小児	ND						3	ほぼ未咬耗。歯根は摩滅しており、どの程度形成されていたか不明。小児である可能性高い。
8	HC	台12523	S14	貝層 Ⅲ群 2	橈骨	R?	成人サイズ	ND	0	0	1	0	0	1	骨表面が滑らかなので成人と推測されるが詳細不明。
9	HC	台12711	-	SX002	腓骨	ND	成人サイズ	ND	0	0	1	0	0	1	サイズから成人と推測されるが、骨表面の傷みがあり詳細不明。
10	HC	ド 288	K14	dot	頭頂骨片	ND	成人サイズ	ND						<1	扁平であり若い個体を想起させるが、表面の傷み激しく詳細不明
11	HC	ド 3410	T14	貝層 Ⅲ群	上顎第二乳臼歯	R	小児	ND						4	強度の咬耗。遠心に重度のカリエス。頬側にごく少量の歯石。
12	HC	ド 586	B14		大腿骨	L	成人サイズ	ND	0	1	1	0	0	2	比較的しっかりした印象があるが、表面の傷み激しく、破断面摩滅し、詳細不明。
13	HC	ド 1829	H12	Ⅱ c	脛骨	R	成人サイズ	ND	0	0	1	0	0	1	骨壁あつく、やや扁平。表面および破断面の摩滅が激しい。
14	HC	台12100	G16	Ⅳ	大腿骨	R	幼児	ND	0	1	1	1	0	3	サイズ小さく、幼児。6～7歳前後か？
15	HC	ド 1861	H12	V	脛骨	R	成人サイズ	ND	0	1	1	1	0	3	破断面はフレッシュ。
16	HC	ド 1327	G14	V	脛骨	R	成人サイズ	ND	0	0	1	1	0	2	表面および破断面の摩滅が激しい。
17	HC	ド 1247	F12	Ⅱ c	脛骨	R	成人サイズ	ND	0	0	1	0	0	<1	表面および破断面の摩滅が激しい。
18	HB③	台 1174	R19	Ⅲ d(14)	大腿骨片	ND	成人サイズ	ND	0	0	1	0	0	<1	表面および破断面の摩滅が激しい。
19	HB③	台1480	E5	Ⅲ	尺骨	R	成人サイズ	ND	0	1	1	1	0	3	表面および破断面の摩滅が激しい。キャンヤな個体(女性?)
20	HB③	台1593	-	不明	頭頂骨片	ND	成人サイズ	ND						<1	表面および破断面の摩滅が激しい。冠状縫合部が明瞭であることから若い個体と推測されるが詳細不明。
21	HB③	D2177	R5	Ⅲ d(14)	大腿骨?	R?	成人サイズ	ND	0	1	0	0	0	1	表面および破断面の摩滅が激しい。左右に扁平。

残存部位は、各部分で残存している場合を1、残存していない場合を0とし、全体は完形を5として1～5の5段階で評価した。

性別および左右欄のNDは判定不能

「遺構」Ⅱc:クミイ Ⅳ:流路内



第 192 図 人骨出土地点 (S=1/1000)



(番号は第109表と一致)

図版 140 HC・HB ③人骨片

第VI章 まとめ

第1節 平安山原における遺物平面分布

本書は、北谷町字伊平小字平安山原における本格的発掘調査の最終報告となる。「平安山原」を冠する3遺跡、即ち平安山原A～C遺跡はそのいずれもが隣接しているため、これらを統合した内容を俯瞰することで、平安山原全体の更なる理解が進むものと思われる。本節においてはまず、種別ごとの遺物平面分布を提示し、そこから看取・推定できる事象を確認してみたい。

平面分布図の作成方法については、『平安山原A遺跡』（2016）第V章第3節「各期遺物の平面分布の検討」を踏襲し、各出土遺物の点数（破片数）を基にした。しかし、器種や帰属時期によっては破片数の絶対量が大きく異なるため、平面的変遷を相対的に比較できるように、分布の疎密表示をするにあたっては、表計算ソフトMicrosoft Excelを用いて以下のような調整を行った。

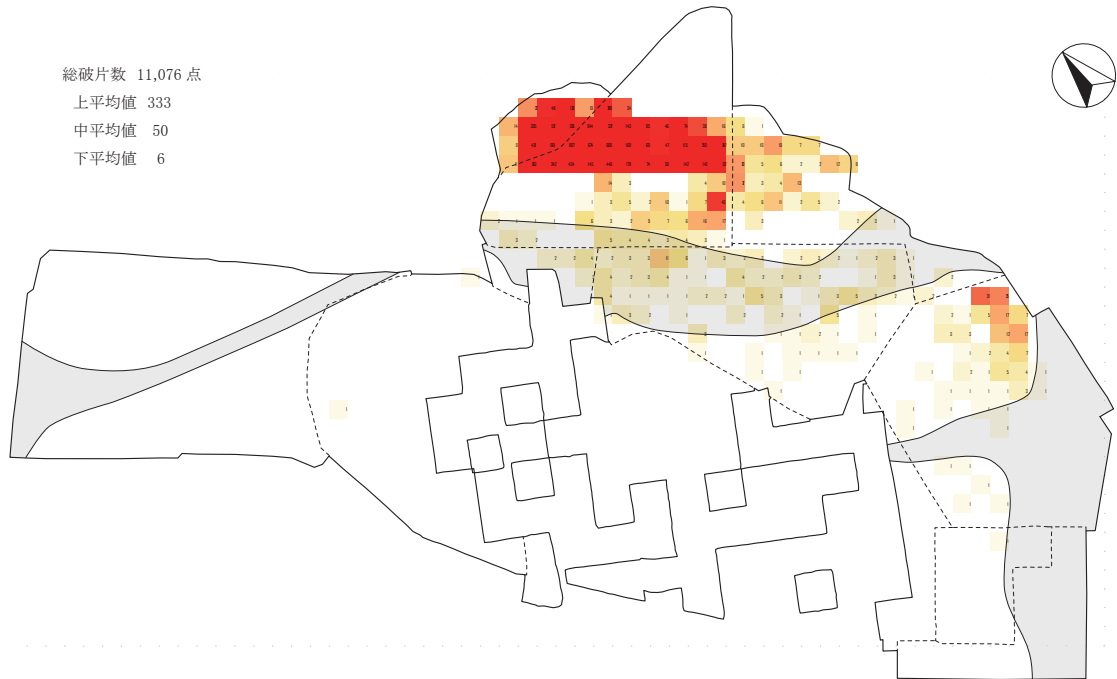
- ① 各遺物の破片総数を、遺物が出土したグリッド数で除し、これを「中平均値」として設定。
- ② 中平均値を上回る点数が得られたグリッドに限り、その破片総数をグリッド数で除し、「上平均値」を設定。
- ③ 中平均値を下回る点数が得られたグリッドに限り、その破片総数をグリッド数で除し、「下平均値」を設定。
- ④ セルの書式スタイルに3色スケールを用い、得られた3値をそれぞれ最大値・中間値・最小値として入力。
- ⑤ この結果、上平均値が最濃に、中平均値が中間色に、下平均値が最淡に塗り潰されることになり、併せて突出した大小値が除外される。

これまでの調査成果から確認された、平安山原現地人による活動開始は貝塚時代後期前半（弥生時代頃）であり、1945年に米軍が上陸し当地が接収されるまで、その活動は連綿と続いたことが分かっている。この2千年以上にわたるこの期間を下記のように区分し、その時期に帰属する各遺物をカウントした。なお近代の動向については、『平安山原A遺跡』（2016）にて詳しく検討したので、本書ではこれを割愛することとする。

平安山原-貝塚Ⅰ期(貝塚時代後期前半①)……	土器(阿波連浦下層式・浜屋原式)
平安山原-貝塚Ⅱ期(貝塚時代後期前半②)……	土器(大当原式)
平安山原-貝塚Ⅲ期(貝塚時代後期後半)……	土器(くびれ平底土器)
平安山原-グスクⅠ期(11～14c、宋・元代)……	グスク土器・カムイヤキ・白磁・青磁
平安山原-グスクⅡ期(14～17c、明代)……	白磁・青磁・染付・本土産陶器
平安山原-近世期(17～20c、清代)……	白磁・青磁・染付・本土産陶磁器

平安山原-貝塚Ⅰ期:破片数11,076点(全て土器)

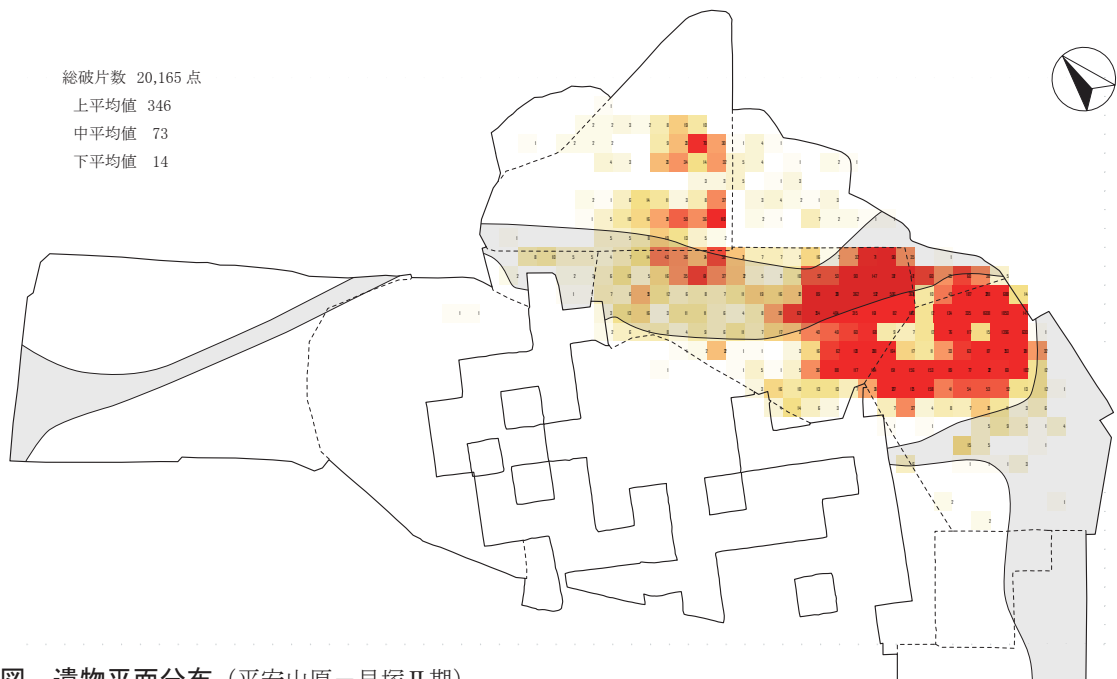
岩崖を背にするようにして土器が密集しており、その範囲は平安山原B遺跡に概ね収まる格好となっている。第一浜堤先端にもやや強い分布が認められるため、既に第一浜堤の形成が始まっていたとも考えられるが、周辺は恐らくビーチロックを底とした潮間帯であり、水流の影響で拡散したものであろう。



第 193 図 遺物平面分布 (平安山原-貝塚Ⅰ期)

平安山原-貝塚Ⅱ期:破片数20,165点(全て土器)

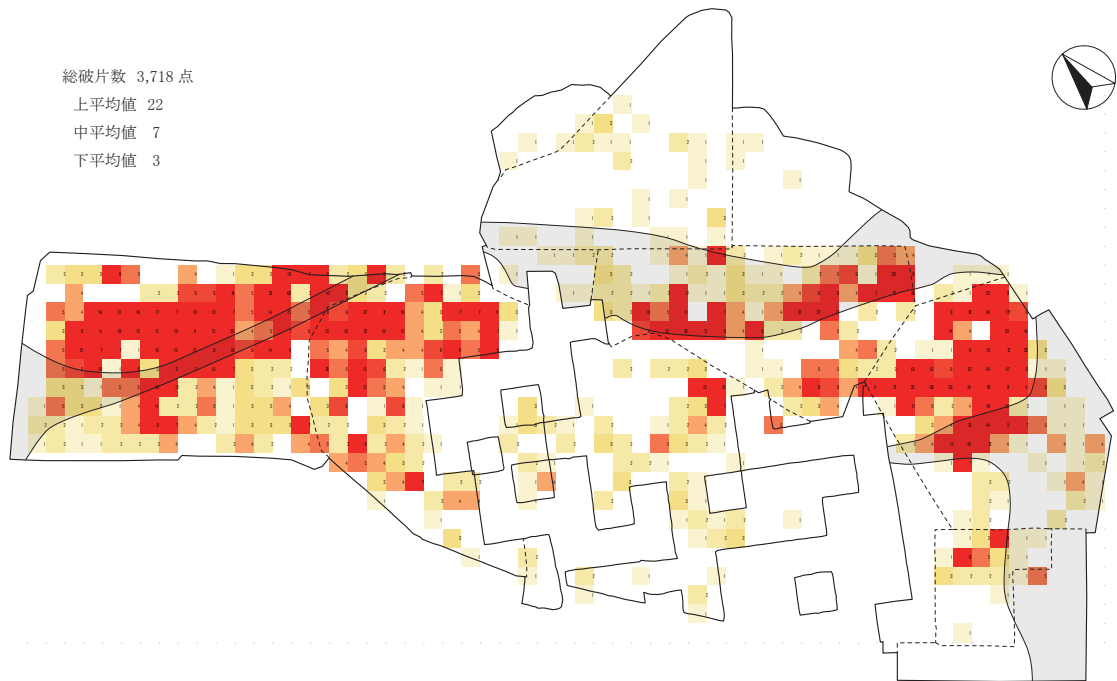
第一浜堤の形成を物語るように、大当原式土器の分布域は岩崖から離れ、平安山原C遺跡を中心とした浜堤先端へと完全に移行する。得られた資料数は各期を通じて最も多い上に密集率も高いため、廃棄場所への固執及び廃棄活動の活発さを感じさせる。



第 194 図 遺物平面分布 (平安山原-貝塚Ⅱ期)

平安山原-貝塚Ⅲ期:破片数3,718点(全て土器)

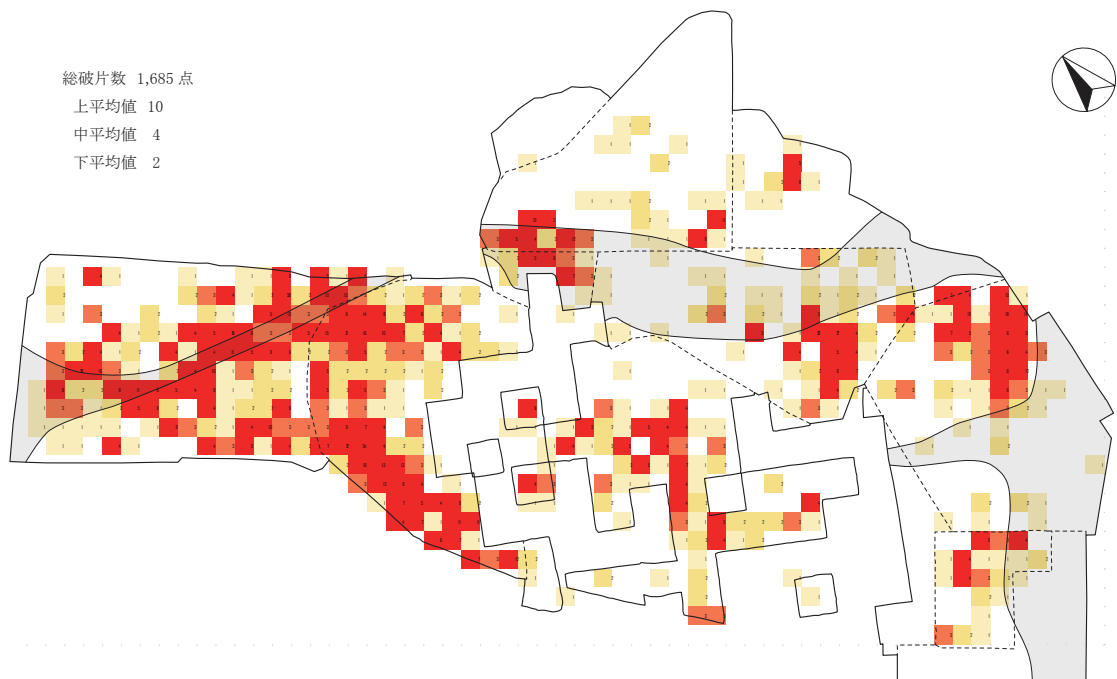
第一浜堤の成長とともに、くびれ平底土器の分布域も拡大する。古相のアカジャンガー式及び新相のフェンサ下層式の両方が認められるが、平安山原A遺跡では後者のみとなっている。従って貝塚Ⅱ期に後続したのは平安山原C遺跡やHB③であったことが分かる。



第 195 図 遺物平面分布 (平安山原-貝塚Ⅲ期)

平安山原-グスクⅠ期:破片数1,685点(グスク土器1,236、カムイヤキ143、白磁114、青磁192)

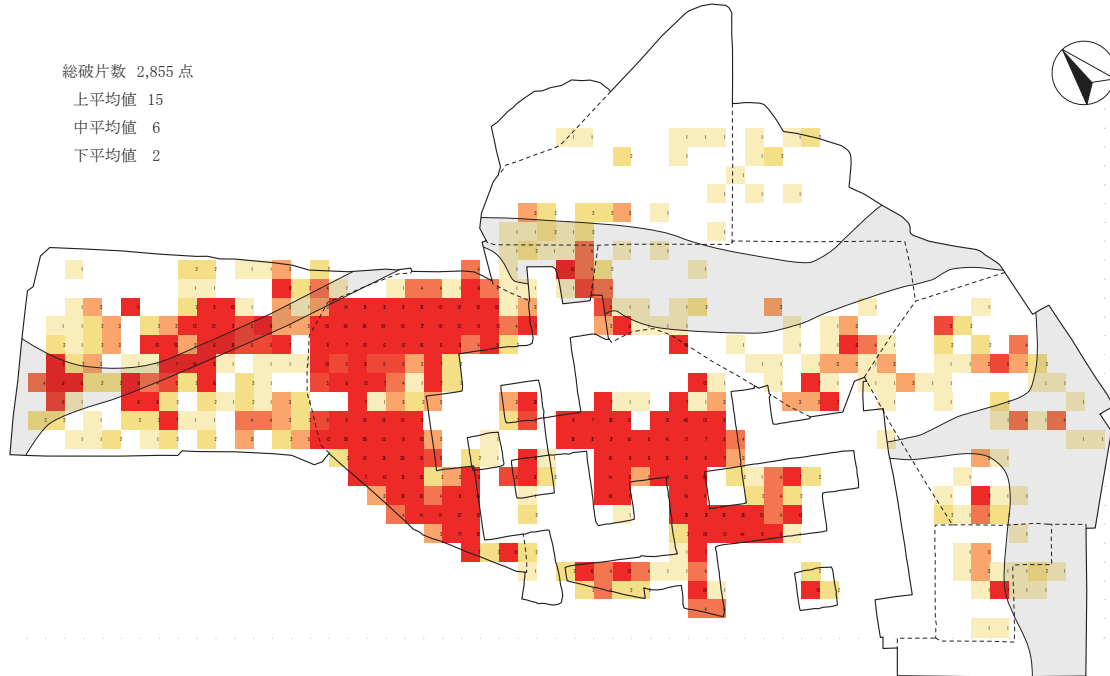
貝塚Ⅲ期に比べると分布域が僅かに海側へ広がるが、カウントされた破片の絶対数は各期を通じて最も少なく、人々の活動が低調であったことが見て取れる。この頃盛期を迎えていた南方の小堀原遺跡と対比すべき様相であろう。



第 196 図 遺物平面分布 (平安山原-グスクⅠ期)

平安山原-グスクⅡ期:破片数2,855点(白磁278、青磁1,968、染付584、本土産陶器25)

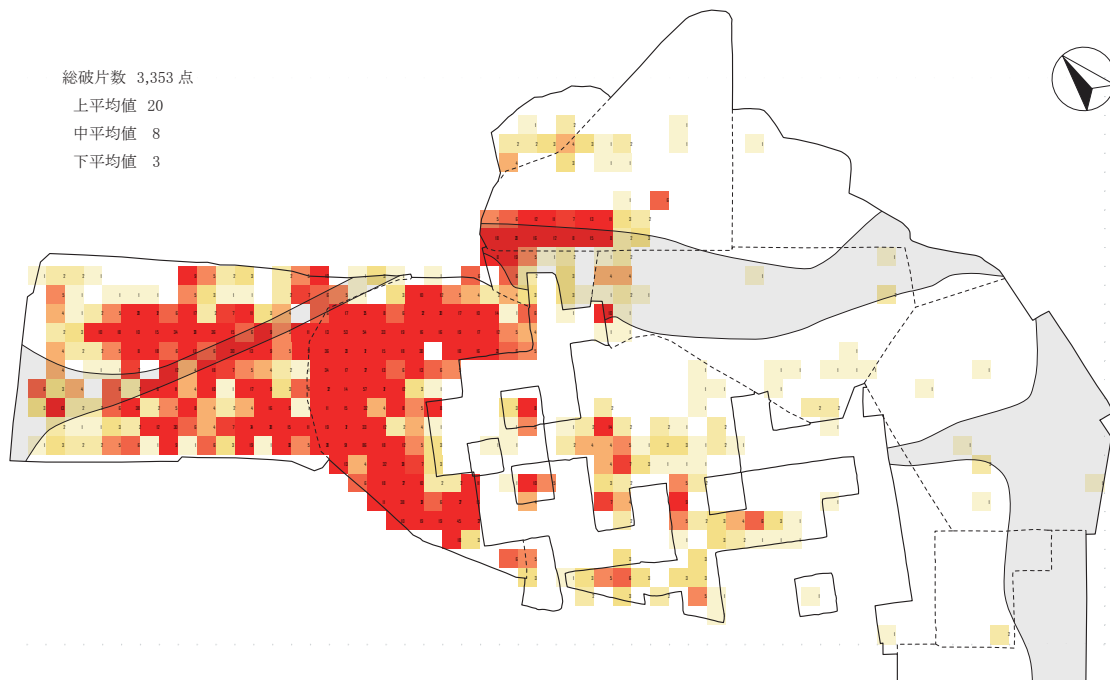
遺物分布の主体は平安山A遺跡に移行する。特にこれまで疎であったHA④では、当該期の土坑・ピットが高い密度をもって検出されており、破片数から考える以上に繁栄した様相を窺わせる。旧B流路である耕作域では、分布の空白が目立つようになる。



第 197 図 遺物平面分布 (平安山原-グスクⅡ期)

平安山原-近世期:破片数3,353点(白磁287、青磁91、染付1,923、本土産陶磁器1,052)

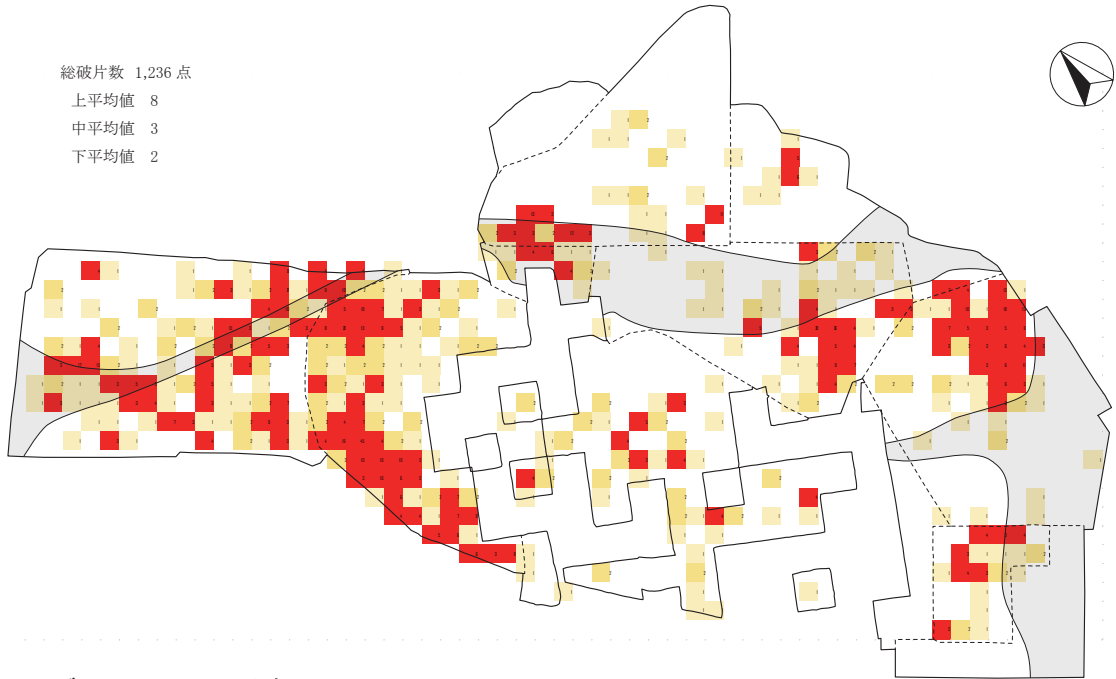
遺物分布の主体は、やや北側のHA②・③に移動する。この分布域は戦前集落域とほぼ重なっており、平安山村の端緒とみなすこともできる。



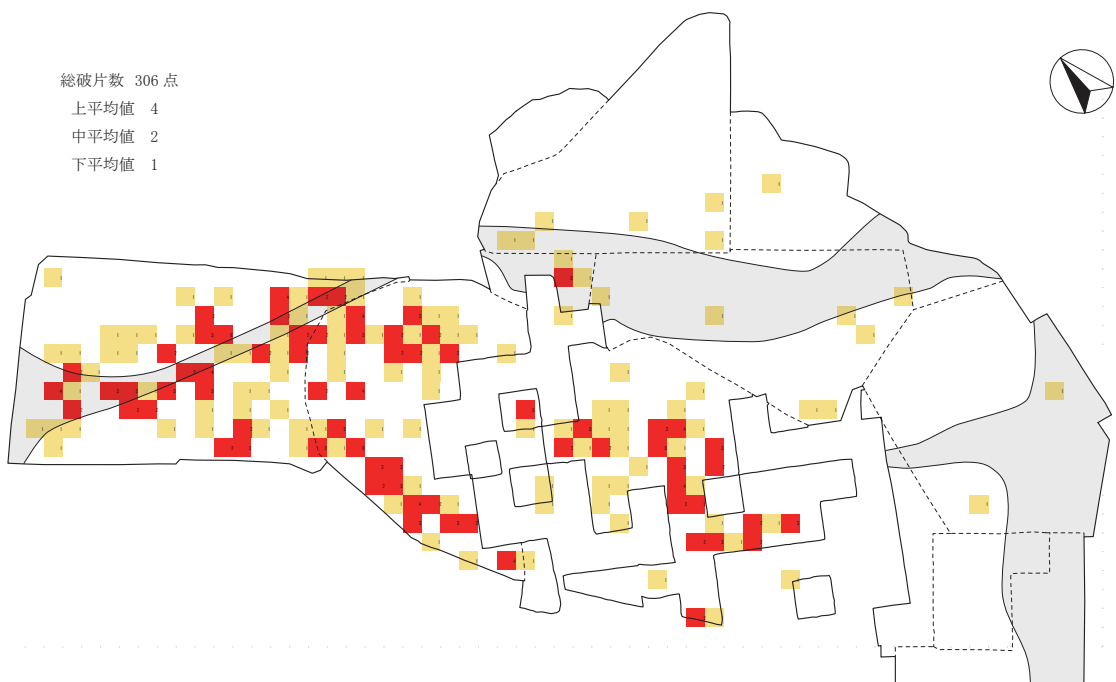
第 198 図 遺物平面分布 (平安山原-近世期)

平安山原-グスク I 期の検討

当該期の白磁・青磁はその9割以上が13c以降のものであり、石鍋流入の影響下に誕生したと考えられるグスク土器よりやや後出的なものと言える。よって、この両者の分布が重ならない部分は、13c以前にも人々の活動があった範囲と推定することができよう。平安山原-貝塚Ⅲ期の項にて既述したように、フェンサ下層式期の分布主体部は平安山原A遺跡に移動しており、これは平安小海進に伴う高標高地への移動ではなかったかと考えられる。その後のグスク初期にはHC・HB③に移動するものの、14c頃には再度居住域を東遷したという想像が可能である。



第 199 図 グスク土器平面分布 (平安山原-グスク I 期)

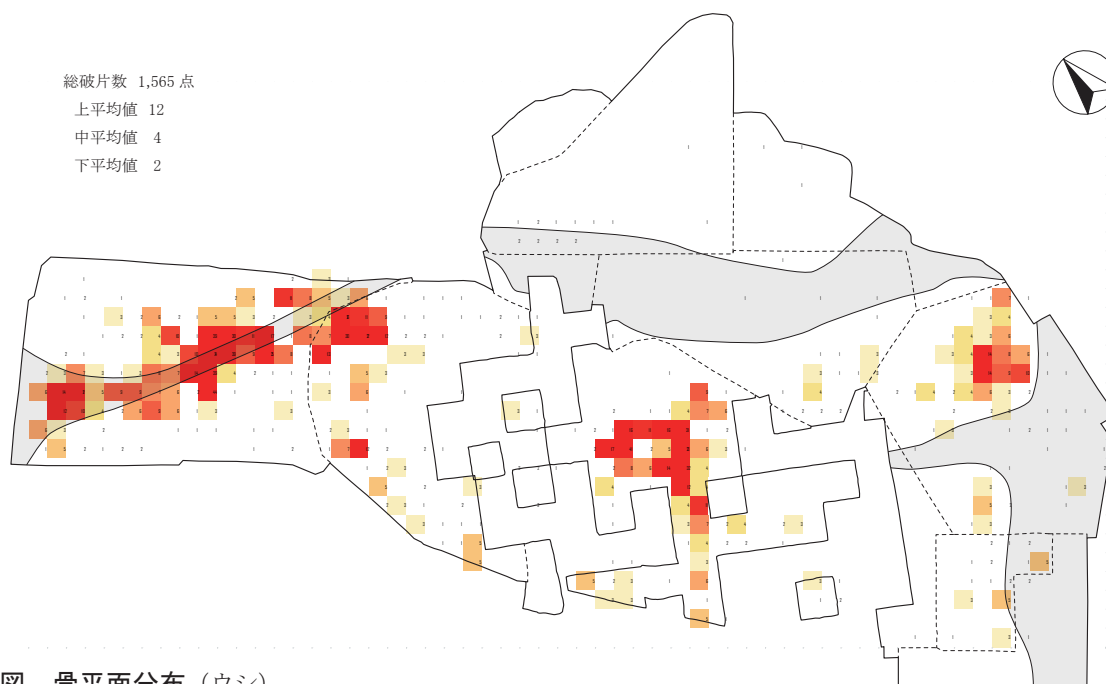


第 200 図 白磁・青磁平面分布 (平安山原-グスク I 期)

脊椎動物骨の分布

1. ウシ (1,565点) ・ウマ (830点)

『平安山原A遺跡』(2016)でも述べた通り、この両者は非常に類似した分布を示している。HA④で強い密集が認められることから、平安山原-グスクⅠ・Ⅱ期との親和性が感じられるため、平安山原におけるウシ・ウマは、グスク期には一定数が飼養されていたと考えられる。ただし使役目的の動物であり、最終的に食用とされたにしてもかなりの大型であるため、他の食用動物とは骨の廃棄のされ方に違いが生じることは留意しなければならない。ウシ・ウマ幼体骨が埋納されていた土坑(HC)や、近世期に構築された石列近く(HA①・HC)でも局所的に分布が認められた裏には、これらが集団で行う土木作業や祭祀等に深く関わる動物であったことを示唆するものである。



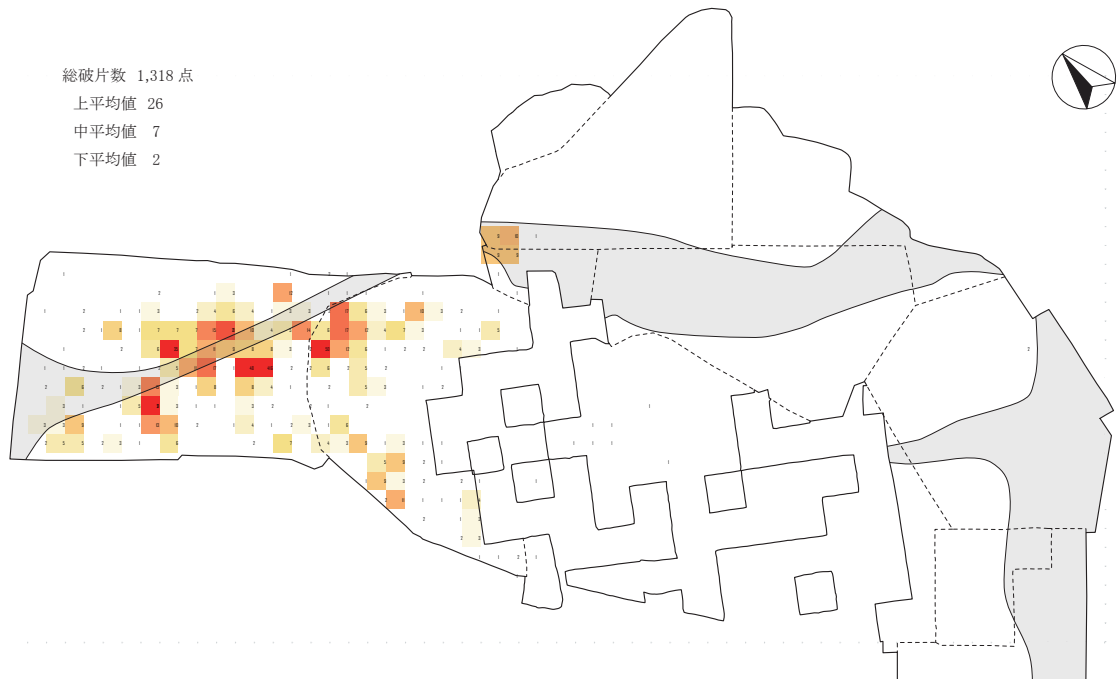
第 201 図 骨平面分布 (ウシ)



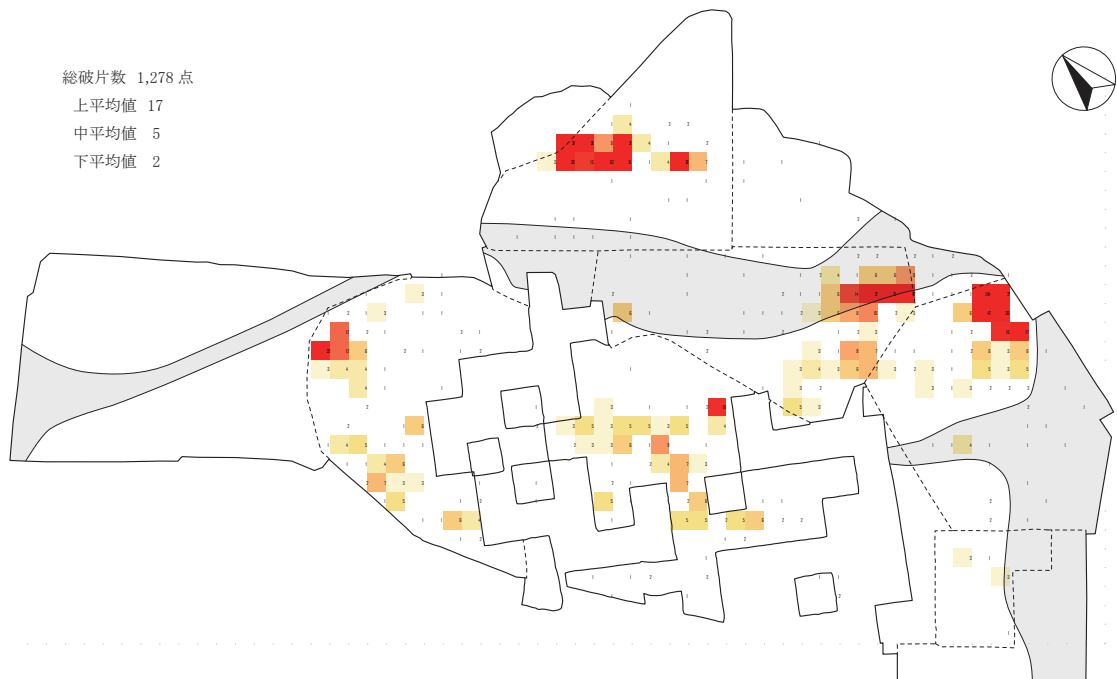
第 202 図 骨平面分布 (ウマ)

2. ブタ (1,318点) ・イノシシorブタ (1,278点)

前者は家畜化による骨の形状変化が認められたものであり、後者はそれが認められないものである。従って後者には、イノシシ或いは古いブタが多く含まれていると考えて大過ない。両者の分布の違いは非常に明瞭であり、ブタの分布域は近世期以降の平安山集落範囲と完全に一致している。これに対してイノシシorブタは、平安山原-貝塚Ⅰ・Ⅱ期及びグスクⅠ・Ⅱ期との親和性が認められるが、注目されるのは貝塚Ⅲ期、特にHA③とは全く重ならないことである。つまり、くびれ平底後半期には、イノシシの利用が全く低調であったことが予想されるのである。



第 203 図 骨平面分布 (ブタ)



第 204 図 骨平面分布 (イノシシ or ブタ)

3. 海獣類 (455点) ・ 魚類 (606点)

海獣類とはクジラ類・ジュゴン・ウミガメを指す。共に漁撈で得られる海獣類・魚類の分布もまた、非常に類似した様相を示している。平安山原-貝塚Ⅱ期と強く調和しており、当該期の漁撈が活発であったことが窺える。しかし一方で、それ以外の時期にはこれらの海産脊椎動物の利用が全く低調であることもまた、海浜近くに立地する遺跡としては特記される事象と言えよう。



第 205 図 骨平面分布 (海獣類)

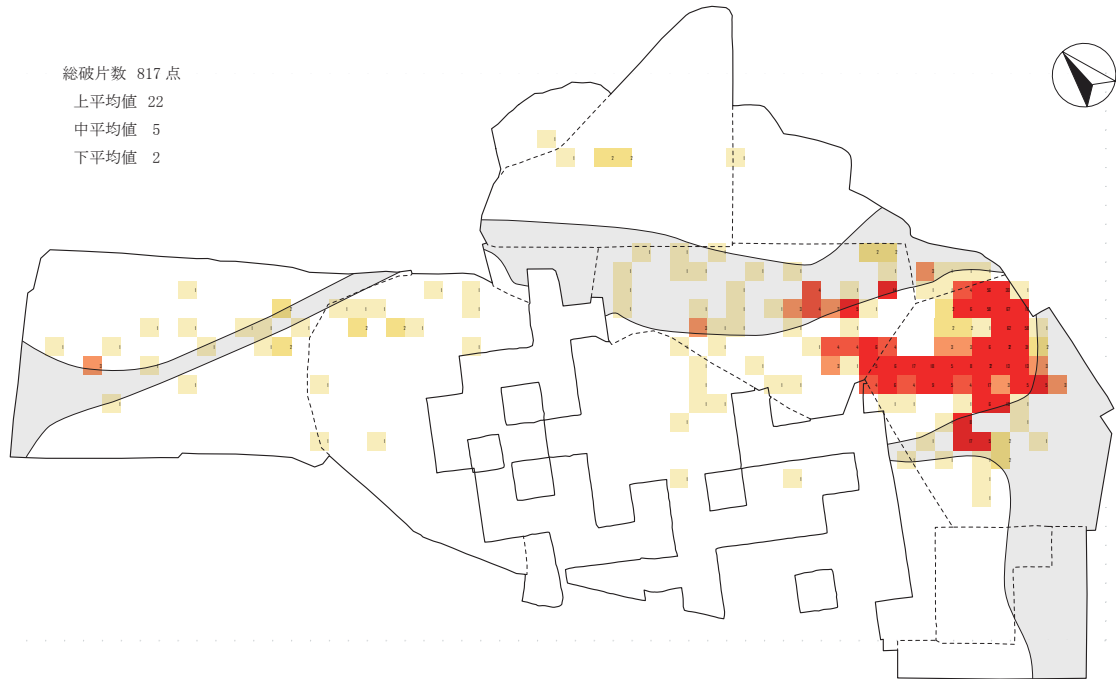


第 206 図 骨平面分布 (魚類)

貝製品・自然貝（素材？）の分布

1. シャコガイ類製有孔製品（817点）

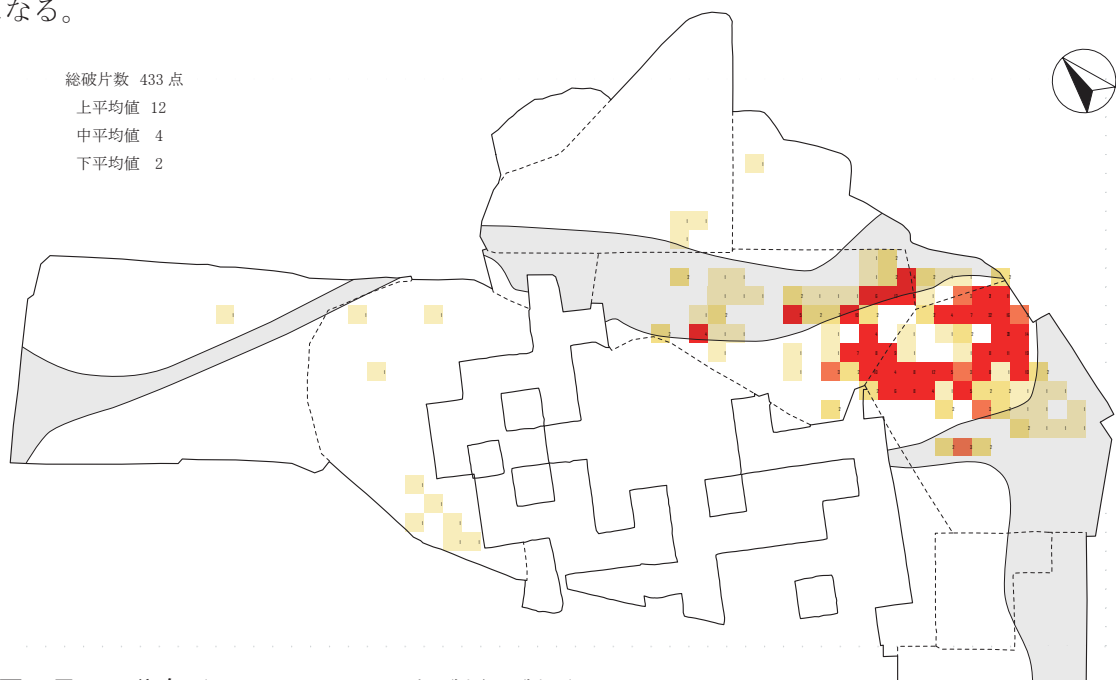
魚類骨との分布の一致が目立つ一方で、平安山原-貝塚Ⅲ期における傾向にも共通性が認められるが、食料残滓と漁具の廃棄場所は必ずしも一致する訳ではないことを留意しておきたい。貝層Ⅲ群の下層・上層や後期層（Ⅴ層）それぞれから定量出土しているため、貝塚Ⅱ・Ⅲ期に盛行した可能性が高いことは考えられる。



第 207 図 貝平面分布（シャコガイ類製有孔製品）

2. リュウキュウサルボオ製有孔製品（433点）

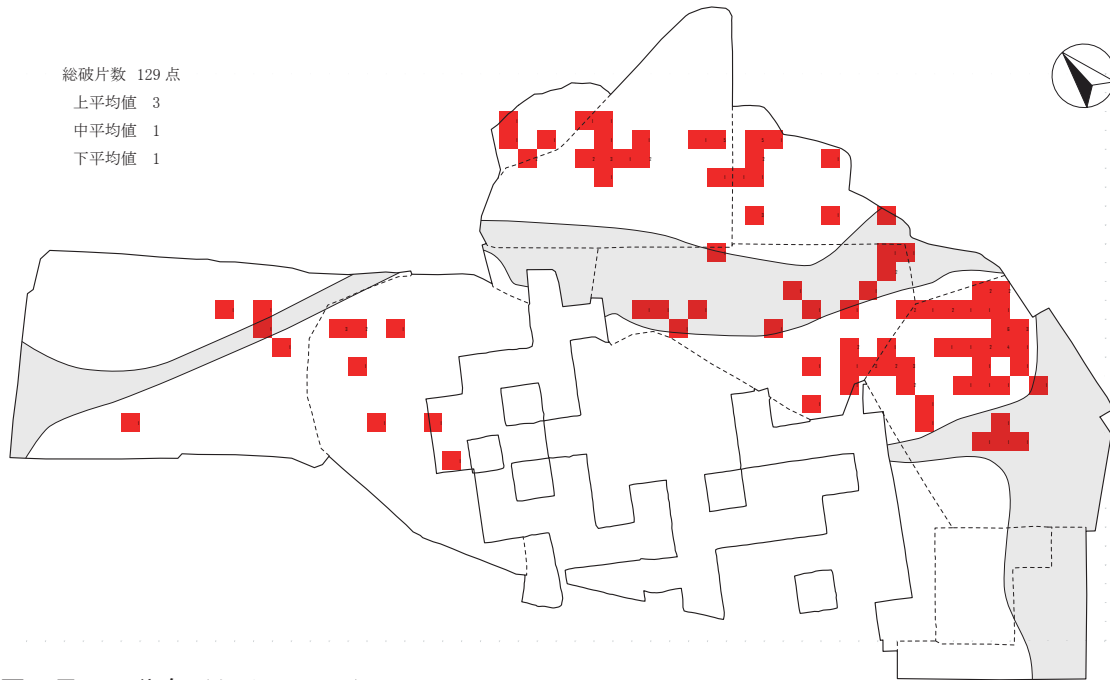
シャコガイ類に次いで点数が多いのが本製品である。平面分布はシャコガイ類と類似するが、僅かに分布範囲が狭い。しかしながらこの両者は生息域が異なるため、素材の獲得方法が全く異なることになる。



第 208 図 貝平面分布（リュウキュウサルボオ製有孔製品）

3. 大形イモガイ (129点)

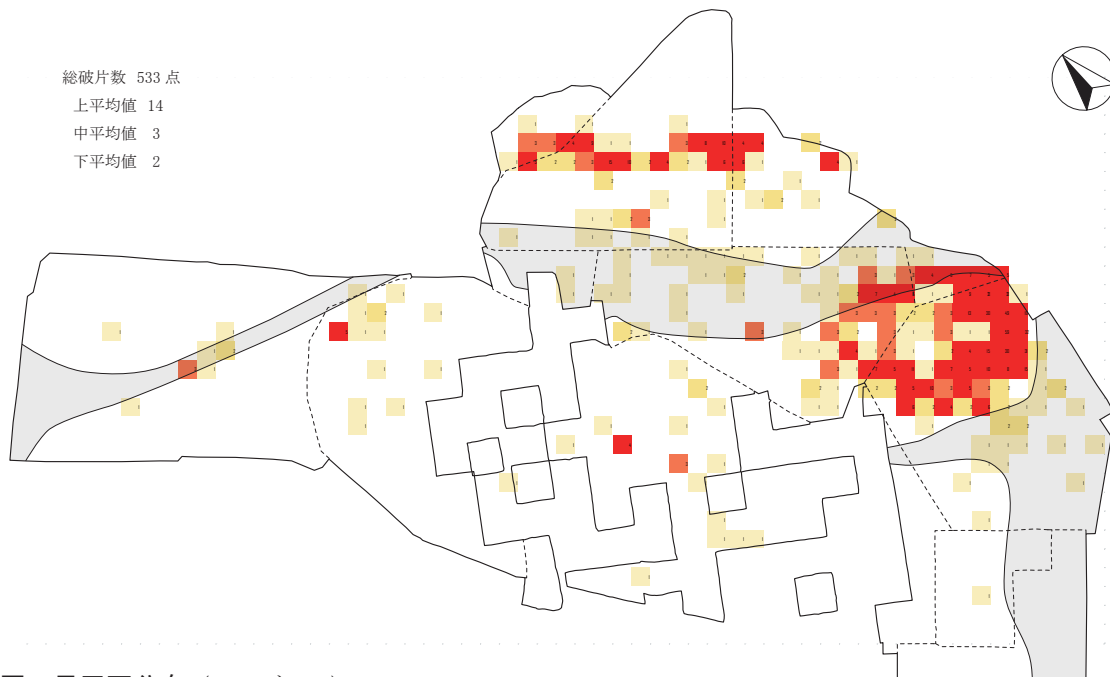
アンボクロザメ等の大形イモガイは、貝輪・貝符の素材として時折集積された状態で見つかるが、平安山原においてイモガイ集積は検出されず、グリッドあたり6点というのが最多であった。従って、平面分布図にも全く濃淡が現れない結果となった。それでも平面分布からは、平安山原-貝塚 I・II期で比較的多く得られたものと考えられることはできそうである。



第209図 貝平面分布 (大形イモガイ)

4. ホシダカラ (533点)

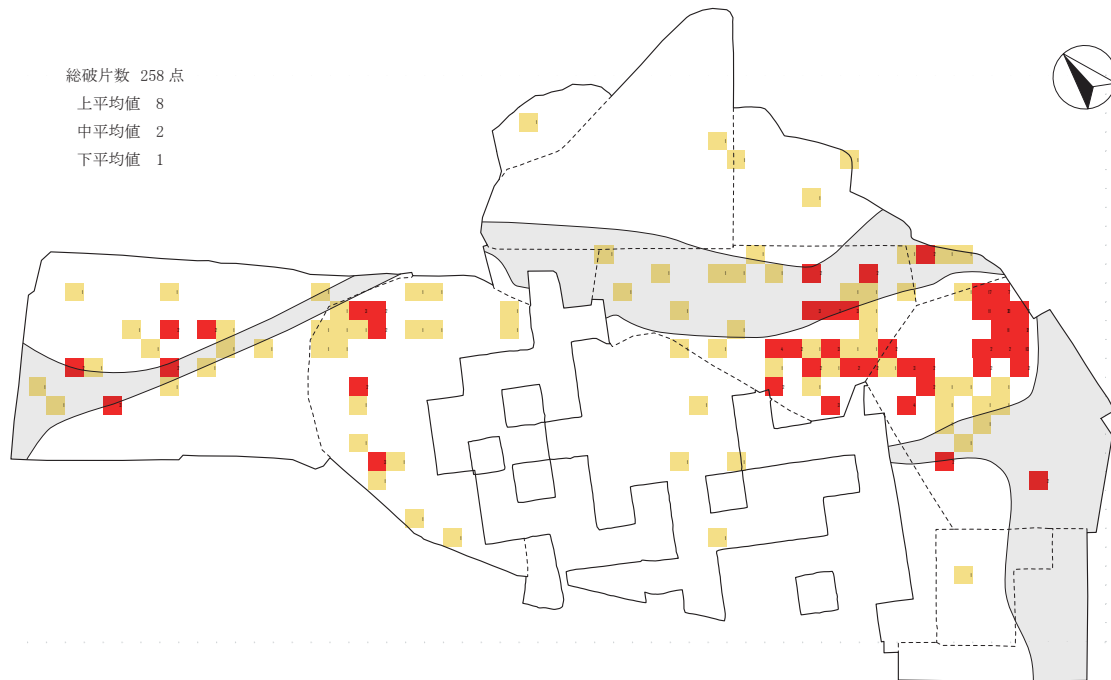
今回多く得られたホシダカラは、背面に抜き割られたような孔を持つものが殆どであるのに対して、その背面を素材とした製品・未製品は僅少であった。そのため食用として身を摘出する際の痕跡である可能性があるが、これほどホシダカラへの執着が認められるのも珍しい事例ではないかと思われる。平面分布からは、大形イモガイとの調和が認められた。



第210図 貝平面分布 (ホシダカラ)

5. ヤコウガイ (258点)

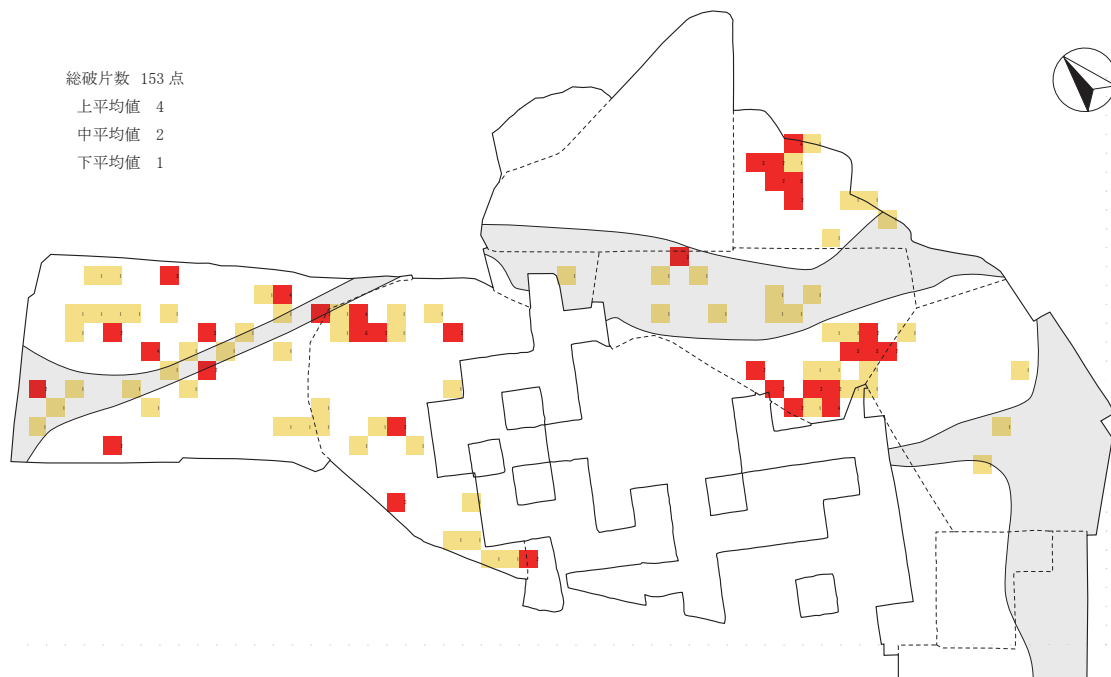
貝匙や螺鈿の素材であるヤコウガイのうち、加工痕跡のない自然貝を取り扱った。素材に向かないような小形のものが認められるため、純粹に食用として獲得されたものが含まれていることが考えられる。それでも平面分布からは、平安山原-貝塚1期及びグスク2期における利用は低調であったことが看取でき、ヤコウガイ交易が盛行した貝塚Ⅱ期～グスクⅠ期の産物とみても大過ないものと思われる。



第211図 貝平面分布 (ヤコウガイ)

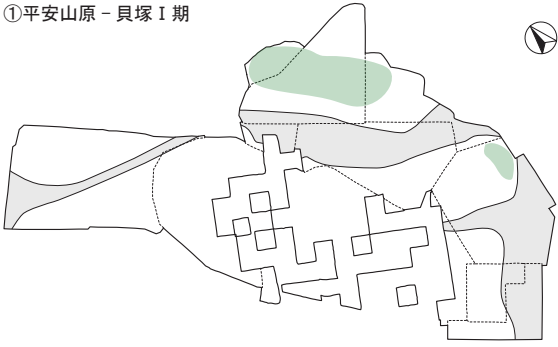
6. 小形タカラガイ製鍾 (153点)

ハナマルユキを主体とする小形タカラガイの殻底と螺軸部分を利用した貝鍾で、近年までその利用が知られているため、沖縄における貝鍾の中では新相を示すものと考えられる。平面分布からも、平安山原-近世期以降のものであることが看取できる。

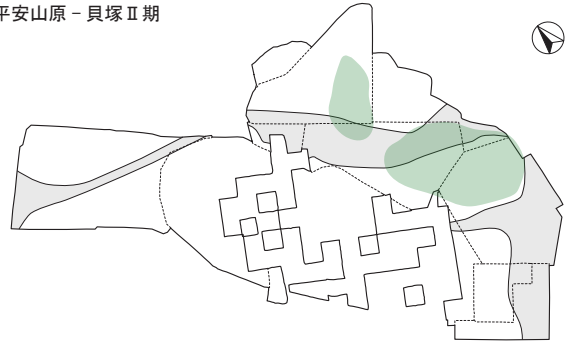


第212図 貝平面分布 (小形タカラガイ製鍾)

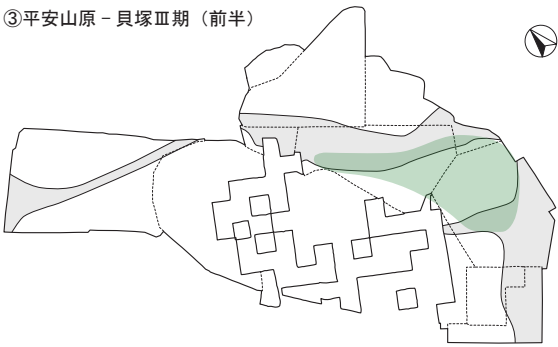
①平安山原 - 貝塚Ⅰ期



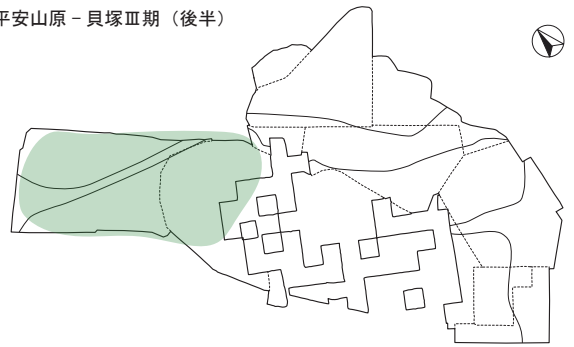
②平安山原 - 貝塚Ⅱ期



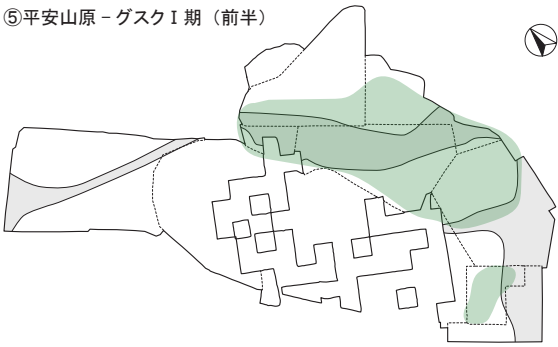
③平安山原 - 貝塚Ⅲ期 (前半)



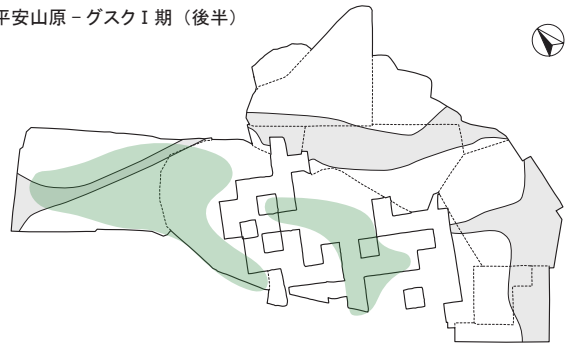
④平安山原 - 貝塚Ⅲ期 (後半)



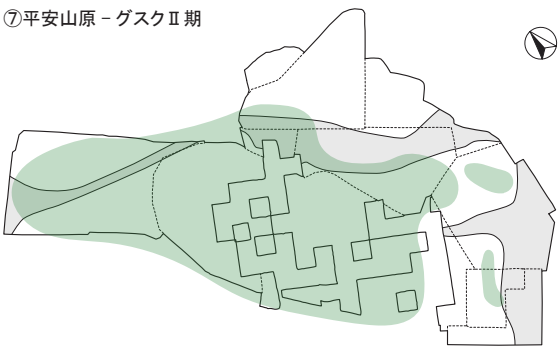
⑤平安山原 - グスクⅠ期 (前半)



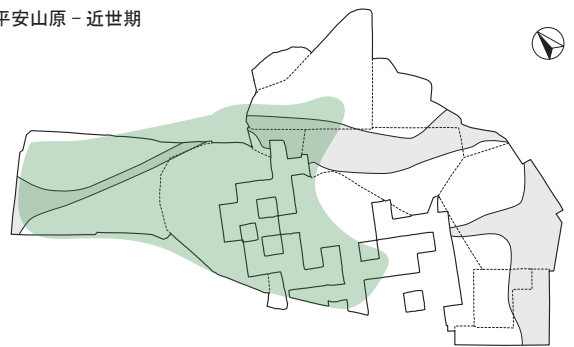
⑥平安山原 - グスクⅠ期 (後半)



⑦平安山原 - グスクⅡ期



⑧平安山原 - 近世期



第 213 図 各期遺物平面分布 (模式)

第2節 平安山原の地形と生活空間の変遷

小字平安山原において、これまで実施された発掘調査及び整理・分析作業から得られた知見は多様・豊富である。前節で述べたような遺物の平面分布に加え、各時期遺構配置の疎密、試掘・下層調査含む土層観察、有機遺物の年代測定等の結果を多角的に検討し、当地に人間が定住するに至った経緯やその後の地形変化、戦前に至るまでの生活空間の変遷を推定する。

1. 縄文時代

平安山原北東には切り立った岩崖があり、現在でもその標高差は15mほどある。縄文時代以前にはこの崖際まで海岸線が迫っており、水深も比較的あったものと思われる。人間が居住できるスペースは殆どなく、現ナガサ川を挟んで南方に位置する「伊礼原」が当時の人々の生活拠点であった。伊礼原E遺跡の調査知見から、縄文時代中頃に遺跡が大津波に襲われたことが判明しており、海浜に近かった同遺跡は、引き波によって遺跡立地面をなしていた砂を失っている。

この津波によって縄文遺物を含む大量の砂（調査現場では「枝サンゴ砂層」と通称）が平安山原にもたらされ、海水面付近まで堆積した。ここにナガサ川から淡水が供給され続けた結果、層上位の固結が始まる^註。以後数百年かけてこの平坦な凝結範囲（ビーチロック）は広がっていき、汀線が後退する原因となった。ビーチロックには、縄文時代前期曾畑式・室川下層式や中期船元式・仲泊式等の水磨した土器片が多く含まれている。この大きな自然作用によって、その後の平安山原には居住可能な環境が形作られていくことになる。

註：『平安山原A遺跡』（2016）第IV章第5節「平安山原A遺跡ビーチロックの年代測定」によると、枝サンゴ層が平安山にもたらされた後に生息していた可能性が高いマスオガイ（二枚の貝が揃った状態の自然貝）の測定結果から、少なくとも $3109 \pm 26BP$ （補正年代、縄文時代後期に該当する）には固結が始まっていたものと思われる。

2. 弥生時代前半～

崖肌の崩落を機に、岩崖前に小規模な砂浜が形成され、平安山原において確認し得る人々の最初の活動が始まった。定住と呼ぶには小規模であるが、崖を背にしたほぼ変わらぬ場所において盛んに燃焼行為を繰り返している。出土した土器から、阿波連浦下層式～浜屋原式期のことである（HB②）。この砂丘の前面にはビーチロックが広がっており、第一浜堤はまだ成長半ばであったと思われる、周辺にはアカテツ属等の低地林もみられた^註。

註：『平安山原B遺跡』（2015）第IV章第3節「平安山原B遺跡の自然科学分析」によると、第一浜堤下に潜り込む泥炭土壌中のアカテツ属樹木片の年代測定結果から、 $2133 \pm 25BP$ （補正年代）の値が得られている。

3. 弥生時代後半～

砂浜の拡大に伴い、大当原式期の人々の活動範囲も広がっていく（HB①）。ビーチロック上で発達した第一浜堤先端では、非常に活発な廃棄活動がなされる（HC貝層Ⅲ群-4・5層^{註1}）。浜堤背後に発生した自然流路は、何らかの原因で下流側が閉塞したことによって止水し、湿地状となる^{註2}。

HA②は、抜歯風習をもつ人々の埋葬場所ともなった^{註3}。ナガサ対岸の伊礼原では、同時期のイモガイ集積遺構が構築されている（『伊礼原D遺跡』（2013））。

註1：本書第IV章第3節「放射性炭素年代測定」によると、HC貝層Ⅲ群-5層出土のイノシシ下顎骨・土器片付着炭化物の年代測定から、それぞれ $1,887 \pm 25\text{BP}$ 及び $1,795 \pm 26\text{BP}$ （いずれも補正年代）の値が得られている。

註2：『平安山原B遺跡』（2015）第IV章第3節「平安山原B遺跡の自然科学分析」によると、B流路最下層である泥炭層中の広葉樹炭化材の年代測定から、概ね5c初頭～6c前半という暦年較正年代を得ている。この頃、B流路の本格的な埋没はまだ始まっていなかったことになる。

註3：抜歯人骨は3体見ついているが、その帰属時期は判然としていない。今後の重要な検討課題としてほしい。

4. 6世紀～

B流路上流部では砂洲が形成される（HC貝層Ⅲ群-3層）。この砂洲が成長を遂げた結果、流路への水の供給が遮断され、B流路の自然埋没が始まる。平安山での人々の活動の場は完全に第一浜堤上に移り、窪地への廃棄行為が行われている（HC貝層Ⅲ群-1・2層^{註1}）。唐銭「開元通宝」・「乾元重宝」も当該期に流入していた可能性あり^{註2}。また対岸の伊礼原では、抜歯を伴わない8世紀前半ごろの開脚屈葬人骨が認められている^{註3}。

註1：本書第IV章第3節「放射性炭素年代測定」によると、HC貝層Ⅲ群-1層出土のイノシシ下顎骨2点の年代測定から、 $1,340 \pm 25\text{BP}$ 及び $1,140 \pm 25\text{BP}$ （いずれも補正年代）の値が得られている。

註2・3：伊礼原D遺跡における唐銭・人骨については、未刊報告書での報告内容となる。

5. 10世紀前後

完全に埋没したB流路粘質シルト上に、溝や炭溜りが構築される。その後、同じ範囲にて耕作土壌が作出され、平安山で最初の農耕が開始されることになる^{註1}。第二浜堤の誕生とともに平安山の人々の活動範囲も広くなり、伊礼原では廃棄行為も盛んであった^{註2}。HA②からは人骨が見つかり、埋葬場所であったことが推定される^{註3}。

註1：農耕の開始時期については耕作土壌Ⅲd・Ⅲe層の解釈如何で変化するものであり、本書随所において様々な可能性があることを述べてきた。10～11世紀に農耕が開始されたと断じている訳ではないが、文脈上本箇所にてこの事象の記述を行った。

註2：『伊礼原D遺跡』（2013）における遺構4409SX-5層を参照。

註3：『平安山原A遺跡』（2016）第IV章第4節：「平安山原A遺跡の自然科学分析」によると、第一浜堤上で検出された人骨05の年代測定から、 $1072 \pm 23\text{BP}$ （補正年代）の値が得られている。

6. 11～14世紀

ナガサ河口両岸にて「第二浜堤」が発達を遂げ、大きく陸地が拡大する。しかし人々の活動は比較的低調で、カムイヤキ・グスク土器が散在するものの、滑石製石鍋・玉縁口縁白磁の出土はごく僅少であり、南方の小堀原遺跡に集約された感すらある^{註1}。旧流路範囲での耕作は行われていた可能性があるため、小堀原への生産物供給の場であっただろうか。平安山原におけるウシ・ウマの骨の平面分布は、当該期のそれに近似している。特筆すべきは、HA②と伊礼原D遺跡で1体ずつ、伏

臥屈葬の人骨埋葬が認められることである^{註2}。

註1：主に『小堀原遺跡』（2012）での報告内容となる。また、小堀原遺跡の特異性については、宮城（2016）に詳しく示されている。

註2：前者は、『平安山原A遺跡』（2016）第IV章第4節「平安山原A遺跡の自然科学分析」によると、人骨11の年代測定から、 $829 \pm 24\text{BP}$ （補正年代）の値が得られている。後者は未刊報告書での報告内容となるが、その帰属年代については前者と大差ない測定結果となった。

7. 14～16世紀

ナガサ両岸で、人々の活動が最活発化する（平安山原ではHA④に集中）。砂丘平坦地において数千基の柱穴を構築しており、同時期の耕作範囲も認められているため、居住・生産域の明瞭な区別があったものと考えられる。また、この頃から砂丘地上においても、黒系有色包含層が堆積するようになってくる。HA④にて刀が刺さったままの遺体が1体検出されているが、これはイレギュラーな状況と考えられ^{註1}、当時の通常墓域として使われていた範囲がどこであったかは判然としない。

註1：『平安山原A遺跡』（2016）にて報告している。「イレギュラーな状況」とは、①遺体が20代前半の女性であること、②刀が刺さったまま白骨化の過程で埋葬されている、等の事由による。

8. 近世前半ごろ

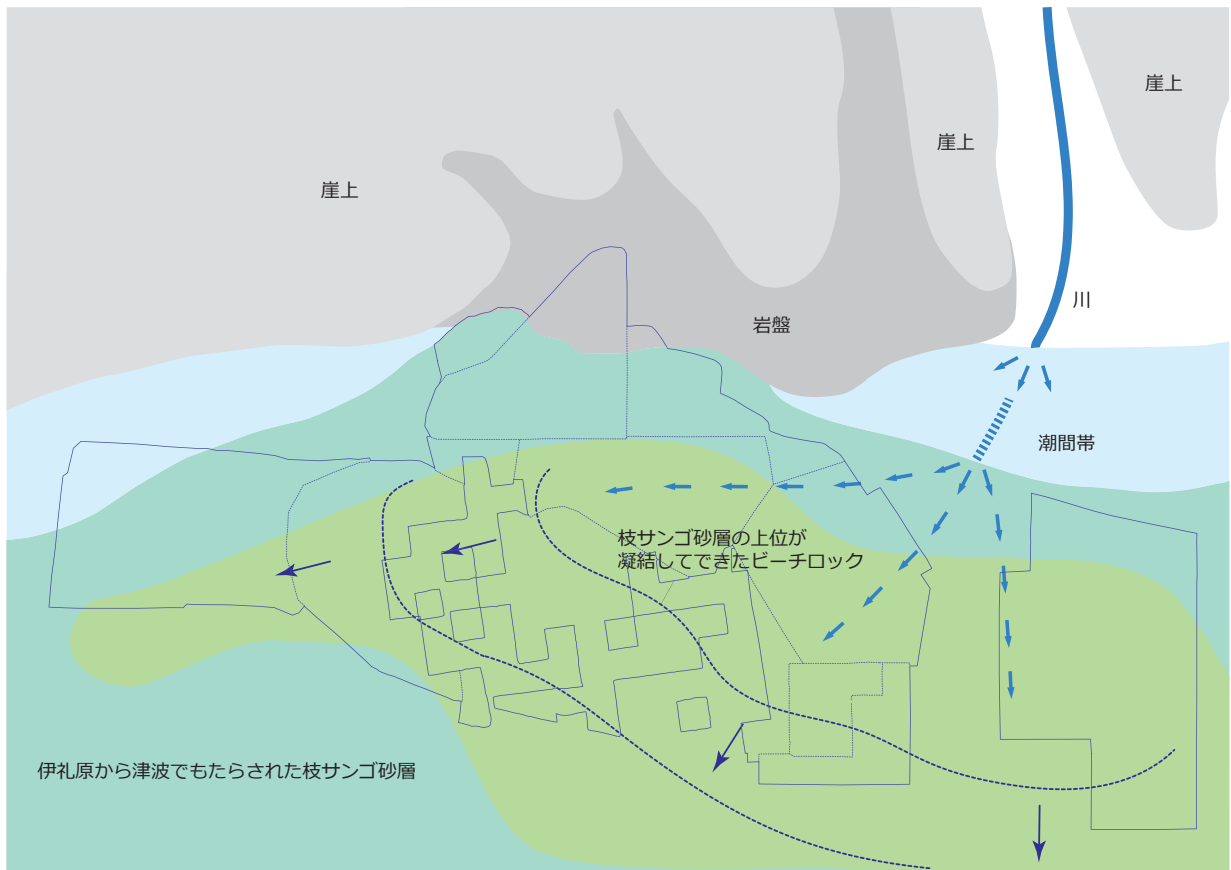
ナガサ沿岸域に構築された石列は、土留めによる地盤上昇をもたらした。その結果、川筋は安定し、その後の広大な耕作域の形成の基点となったものと思われる。

9. 近世後半ごろ

集落は、これまでのHA④から「サカイミチ」以北のHA②へとその中心が移動し、近代集落へと引き継がれる。また、B流路の下流部に当たるS-640の人為的埋没が進む。

10. 近代

沖縄県土地整理事業を受けて、「サカイミチ」以北の再整備が進められる。S-640は完全に埋め立てられて「ウラミチ」となり、「祝女殿内」を中心として新たな屋敷割りが行われる。



1. 縄文時代

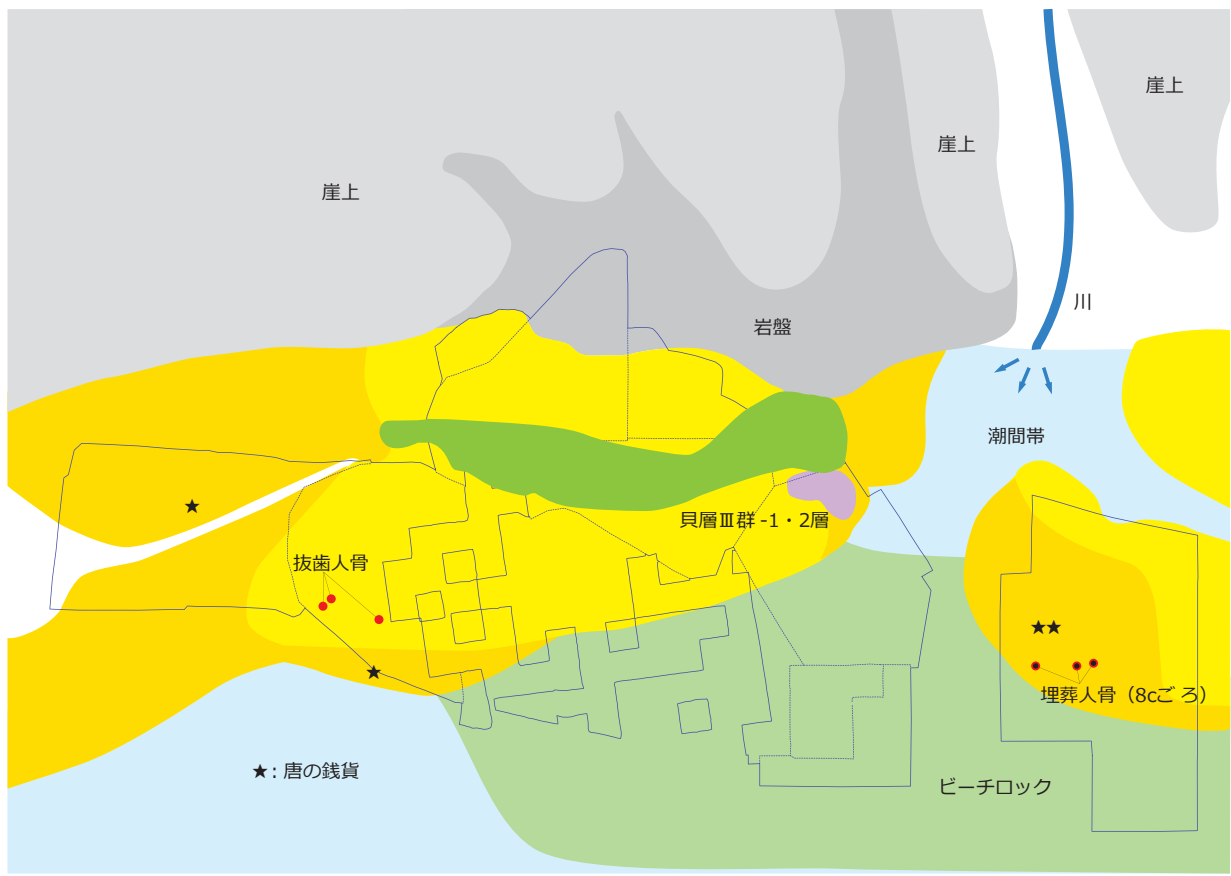


2. 弥生時代前半～

第 214 図 平安山原周辺遺跡 変遷 (1)



3. 弥生時代後半～

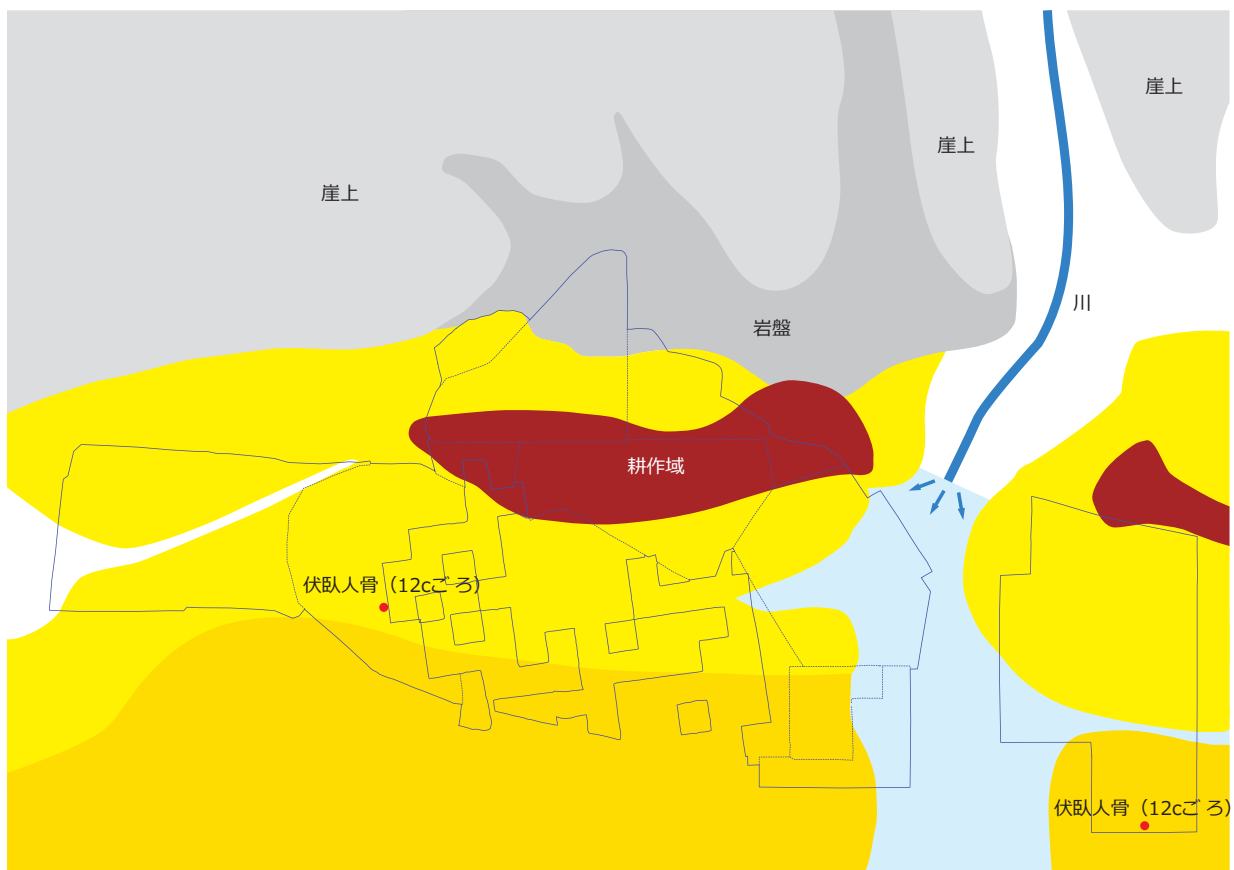


4. 6世紀～

第215図 平安山原周辺遺跡 変遷 (2)



5. 10 世紀前後

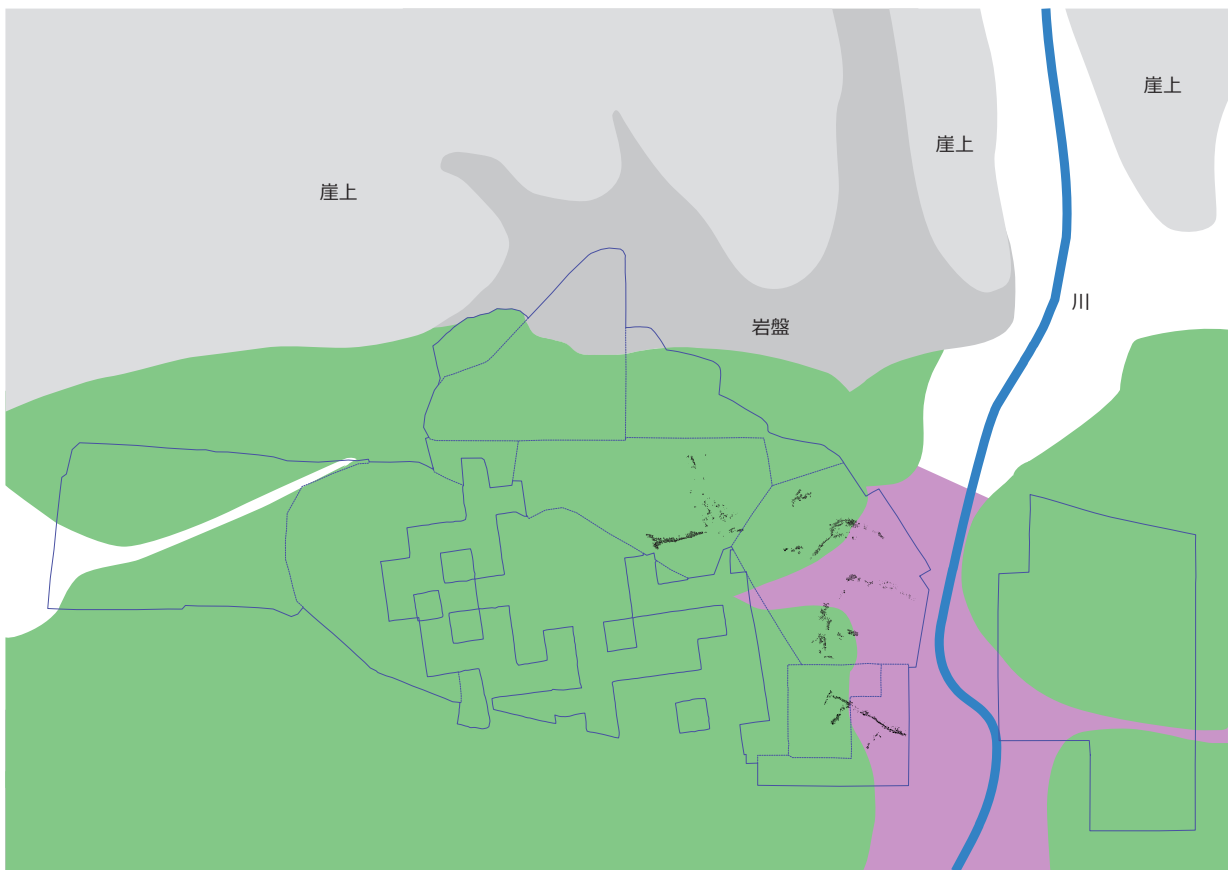


6. 11~14世紀

第 216 図 平安山原周辺遺跡 変遷 (3)



7. 14～16世紀

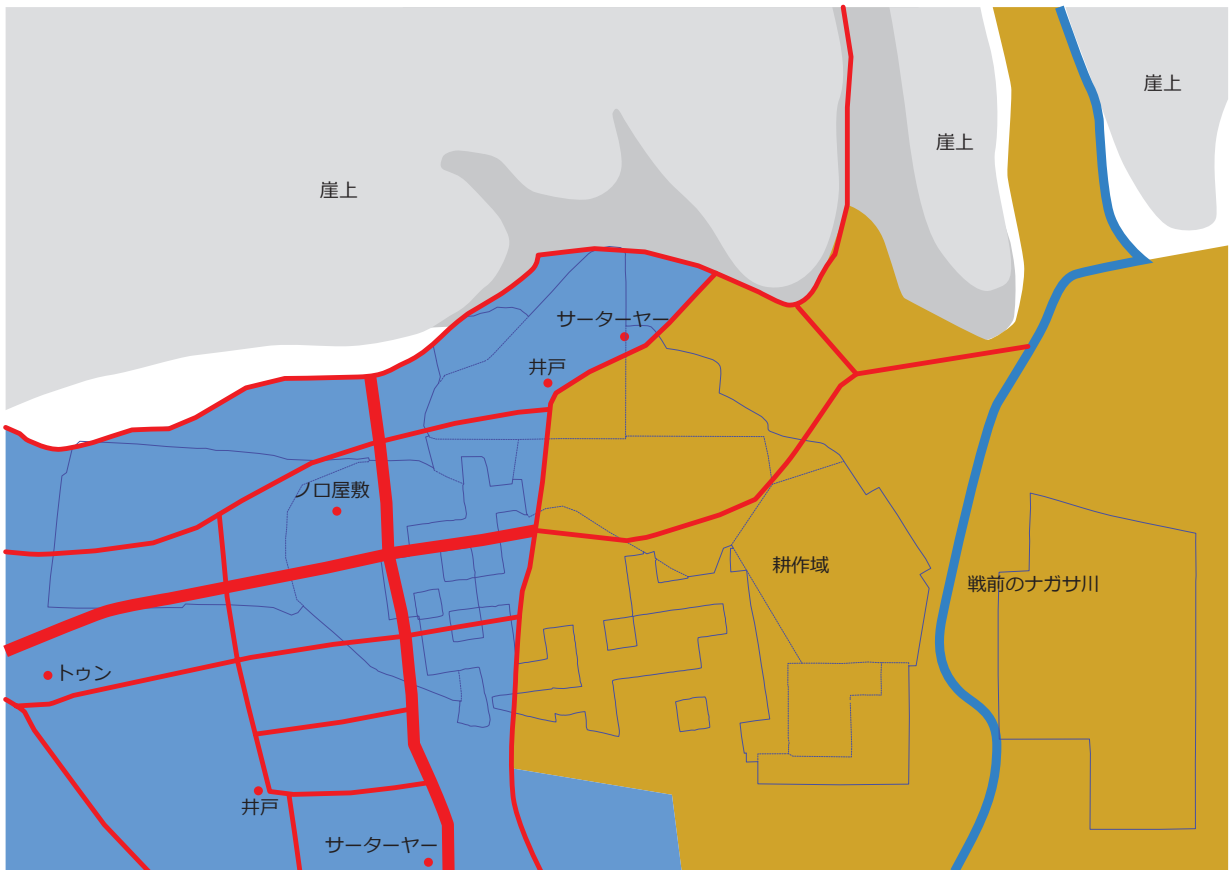


8. 近世前半ごろ

第217図 平安山原周辺遺跡 変遷(4)



9. 近世後半ごろ



10. 近代～戦前

第218図 平安山原周辺遺跡 変遷 (5)

層	遺構		C14測定値		HB③	HC				
	HB③	HC								
戦前・近代	I層				(本土産磁器) (第168図8) (第168図13) (第168図16) (第168図18) (第168図10)	(本土産陶器) (第166図13) (本土産磁器) (第168図6) (第168図9)				
					(本土産陶器) (第166図1) (本土産磁器) (第168図1) (沖縄産施釉陶器) (第170図1) (第170図18) (第170図19) (沖縄産無釉陶器) (第173図1) (第173図7) (第174図15) (第166図4) (第168図3) (第170図7) (第170図12) (第171図31) (第171図26) (第173図3) (第174図10) (第174図12) (第175図18) (第174図17)	(瓦質土器) (第163図) (本土産陶器) (第166図5) (第166図8) (第168図2) (第166図11)				
近世	II層	クムイ状遺構 (HC)	石列7群 (HC)	小溝状遺構 (HC)						
		SK03 (HC)	SK03 (HC)	ウマ下顎骨 R	560±23BP	(グスク土器) (第143図15) (白磁) (第149図3) (青磁) (第153図39) (第153図40) (第151図1) (第155図9) (第158図1) (第158図3) (第161図1) (第138図105) (第138図99) (第102図13) (第138図106) (第138図100) (第155図5) (第158図3) (第155図3) (第155図3) (第158図3) (第161図1)	(グスク土器) (第142図1) (第143図19) (第142図8) (第142図9) (第143図32) (第143図37) (第142図2) (第143図22) (第143図34) (第149図2) (第143図33) (第143図32) (白磁) (第149図5) (青磁) (第151図11) (第151図14) (第155図14) (第158図8) (第166図2) (第151図5) (第151図7) (第155図8) (第158図9) (第158図10) (第158図9) (第159図2) (第159図1) (第147図1) (第147図2)			
		SB01 (HB③)	SB02 (HB③)	ウシ蹄痕	貝層I群	HB③R8 炭化材 973±21BP	HB③R8 炭化材 1012±21BP	HB③T5 炭化材 1065±21BP	HB③Q8 炭化材 1081±21BP	HB③R8 炭化材 1102±22BP
		SD06 (HB③)	貝層III群 (HC)	HC 貝層III群 I層	イノシシ下顎骨 R	1140±25BP	HC 貝層III群 I層	イノシシ下顎骨 R	1340±25BP	
		III群 1	1a	1b	2a	2b				
貝塚時代後期	III層	III群 3	4	III群 5						
		III群 3	4	III群 5						
		III群 3	4	III群 5						
		III群 3	4	III群 5						
		III群 3	4	III群 5						
		HC 貝層群5層	土器附着炭化物	1795±26BP	HC 貝層III群5層	イノシシ下顎骨 R	1887±25BP			

第219図 時代別出土遺物変遷

第3節 平安山原B・C遺跡の遺構と遺物

第I章で述べたように平安山原B・C遺跡の調査で、平安山地区の発掘調査報告は完了する。今回の調査では貝塚時代後期の大当原式土器・アカジャンガー式土器・フェンサ下層式土器が大量に出土し、第110表に示した平安山地区で空白だった時期についての土器分類や、第IV章第1節で示した平面分布により、貝塚時代後期以後の浜堤の形成、それ以後の流路の形成や閉塞、それに伴うグスク期の耕作域の展開などが明らかにされた。沖縄先史人のサンゴ礁域における生活が、浜堤砂丘の形成と深く関係し展開していくというひとつのモデルといえよう。ここでは、平安山原C遺跡(HC)・平安山原B遺跡(HB③)の遺構・出土遺物の成果をまとめた。本遺跡は前項の遺物平面分布の状況から6期に分けられ、古い順に略述する。

貝塚時代後期以前

第110表 平安山原地区の主な器類 出土量

地区	種類	出土量																					
		貝塚前・搬入	阿波連浦下層式	浜屋原式	大当原式	アカジャンガー式	フェンサ下層式	グスク土器	カムイヤキ	滑石製品	白磁	青磁	染付	褐袖・半練	本磁(近世)	本陶(近世)	先島系	沖施	沖無	陶質土器	本磁(近代)	本陶(近代)	
第37集	HB①	186	244	5,657	740	100	83	7		55	38	186	24	54	26		708	590	176	170			
	HB②イ	171	400	5,052	10	30	2	2				22	3	3	4		198	136	10	24			
	HB②ロ			10	27	58	44	3		21	49	46	20	26	3		565	194	73	84			
	HB②不明	1	12	7																			
	HB④イ	3	3	189	56	19	17	3		2	11	2	6					4	10	1	3		
	HB④ロ			10	349	17	1																
	HB④不明			1																			
不明	2	3	28	1																			
第38集	HA③					1,107	345	83		324	517	857	531	207	229	57	4,179	6,886	1,528	2,815	180		
	HA②					497	379	20		577	1,040	1,303	607	179	338	21	5,949	5,805	2,078	4,042	53		
	HA④					169	91	10		161	1,238	338	638	41	53	39	362	943	118	247	10		
	HA①	1				52	40	5		3	12	9	3	1			1	6					
第40集	HB③	6		187	13,442	662	578	147	16	18	92	39	51	1	15		132	154	31		16		
	HC	8		159	7,000	246	164	180	7	1	12	66	21	36	5	5		20	30	8		47	

凡例：土器は既存の形式に置換、底部は含まない。HA：後期土器(アカジャンガー式かフェンサ下層式)でまとめた。白磁・青磁・染付の時代をまとめた。地区不明は含まない

縄文時代中期の船元系土器・室川下層式土器、縄文時代後期の面縄東洞式土器、縄文時代晩期の有文のカヤウチバンタ式土器及びチャート製品が各々1～3点出土している。出土層位はV層(後期層)や貝層Ⅲ群からの出土であるが、縄文時代に属する伊礼原遺跡(2007)・伊礼原E遺跡(2010)の遺物が高波により、広く平安山地区まで及んだためと思われる(註1)。

貝塚時代後期：I・II期

遺構：第23図の廃棄貝層の分布で示したように貝塚時代後期の貝層群は貝層Ⅲ群を中心にⅡ～V群が確認された。HB③やHCでも浜堤の高まりに遺物が分布し、B流路やC流路の存在が明らかになった。特にHC貝層Ⅲ群は最も厚い所で125cmを測り、上と下層で土器の相異の可能性が考えられ、上層(1・2)と下層(5)のイノシシ下顎骨で放射年代測定した。その結果、貝層Ⅲ群下層(5層)が1,890±25BP、貝層Ⅲ群上層(1層)から1,140±25BP及び1,340±25BPの値が得られた。上層の貝層Ⅲ群1b層下位より軽石の水平堆積も検出され、同層以前に、汀線だった可能性も確認出来た。

出土遺物：土器の平面分布(第63図)や接合の範囲(第66図)をみると、上位の近代からグスク期の攪乱を受けているが、大方は遺跡形成時のままと判断された。下層で尖底土器(大当原式土器)、上層でくびれ平底土器(主にアカジャンガー式土器)が主体をなし、従来いわれている土器の新旧関係について上・下層で放射性年代測定によると約400年の差が確認された。第22表の底部の出土量や第64図貝層Ⅲ群とV層(後期層)の土器変遷にも示すように、土器形式が徐々に変化するようである。下層からは有文(第71図5)・片口注口(図146)・外反口縁(図127)など、大当原式土器やアカジャンガー式土器の範疇に含まれないものが得られ、その出自は今後の検討課題である。粘土接合面の隆起が特徴である大当原式土器と、それに後続する器面調整のよいアカジャンガー式土器は、土器の製作技法においても顕著な異なりをみせる。両土器の系譜は他の遺物や外的な要因

第111表 東日本系土器出土一覧(南九州～沖縄)

島	遺跡	型式	備考	時期	層序メモ	同定・報告	報告年
鹿児島	干迫遺跡	加曾利B1式段階	注口土器(変容形搬入?)	縄文時代後期中葉～後葉(鐘ヶ崎式・市來式)	自然流路	前迫亮一	2003
鹿児島	上加世田遺跡	東日本の雰囲気を持った土器	双口土器, 在地型	縄文時代晩期(上加世田式・入佐式)	出土地点不明	河口貞徳	1990
種子島	大箇遺跡	安行Ⅰ～Ⅲa式	深鉢形, 浅鉢形, 台付皿形(搬入品)	縄文時代後期後半～晩期中葉	表採	岩崎卓也・設楽博己	1989
種子島	大箇遺跡	大洞C2式段階	広口壺形, 在地型	縄文時代晩期～弥生時代前期(一湊Ⅲ式・大隅黒川系)主体	A地点・大隅黒川系近隣	青崎和憲 東 和幸	1999
奄美大島	手広遺跡	大洞C2～A1段階	浅鉢, 在地型	貝塚時代後1期初頭(阿波連浦下層式)	ほぼ単独型式	石川日出志	1986
奄美大島	ウフタⅢ遺跡	大洞C2～A1段階	在地型	貝塚時代後2期初頭(阿波連浦下層式)	ほぼ単独型式	石川日出志	2002
喜界島	個人蔵	大洞C2～A1段階	在地型?		表採		
徳之島	トマチン遺跡	浮線文土器段階?	在地型	貝塚時代前5期末(仲原式)	ほぼ単独型式	伊藤慎二	2013
沖縄島	平安山原B③	大洞A1式	浅鉢器台	貝塚時代後2期(阿波連浦・浜屋原式土器)	阿波連浦下層式に関係か	設楽博己・他	2016

(註) 上加世田遺跡: 設楽・小林・水之江のコメントがある(木下2001)、水之江のコメントを表記。平安山原B③: 設楽博己の同定は写真によるもの

なども含めて考えるべきであろう。また、くびれ平底(Ⅳ・Ⅴ類)の中でもⅤ類(フェンサ下層式土器)はHC D11～14に纏まるようで、HA③・②の平面分布と総合すると時期的には第1節で示した平面分布(第195図)のようにHAにも広がり、後述のグスクⅠ期の平面分布に連続するようである。

HB③では、東日本の亀ヶ岡系の浅鉢の器台(第71図4)が出土した。設楽博己氏に写真を確認していただいたところ「東日本の大洞系土器で大洞A1式併行の可能性が高い」(註²)とのコメントであった。東日本系土器の出土は沖縄島では初例で九州との関連を見るため、第111表に鹿児島以南の東日本系土器の出土一覧を示した(註³)。これによると在地産を含め、7件が確認され東日本を起源とする土器が九州島から島伝いに連続して見られる。器台の部分は鹿児島県上加世田遺跡の双口土器に類似するが、同品は文様が施されていない(註⁴)。大洞A1式土器は本土においては縄文晩期後半に位置づけられるもので、平安山原の内陸側のHB②イでは阿波連浦下層式・浜屋原式土器が主体をなし、弥生式土器も数点確認されていることから同地区に由来する可能性が高い。東日本系の縄文土器の出土は、沖縄島で出土する新潟県糸魚川産のヒスイも含め、縄文晩期～弥生前半に新たな文物の交流を示唆しているようである。

石器は磨石が多いようで、他の貝塚時代後期と同様の傾向を示す。サイズを見ると9cm以下(3類)で、楕円形(Ⅲ類)が主体を示す(第34表)ことから手持ちにするためであろう。石皿はすべてHCで出土することから、この時期の生活面はHCが中心であったことを窺わせる。石斧は刃部の出土が多く、使用による破損と考えられ、HB③に多い。

貝製品は人工遺物の中で土器について出土点数が多く、そのほとんどは二枚貝有孔製品である(巻首図版15)。第129図15はゴホウラの半環状製品としたもので一端を抉り、「U」字状の形状からイノシシの牙製品の模造品が想定される。貝製模造品(註⁵)は貝塚時代前Ⅴ期に盛行するものであるが、この時期の遺跡は確認されていない。

第129図15は広田遺跡に見られる点刻文を施した有文具輪である。類例は県内で3例、県外では種子島の広田遺跡、長野県の八丁鎧塚古墳(木下2000)で出土。また、第132図34の貝符(広田下層タイプ)も有文具輪と同時期に属し、木下は有文具輪について「4世紀ごろ沖縄諸島人が広田遺跡人と接触したことで沖縄諸島に広田遺跡の貝製品の影響を受けた種々の貝製品が登場する」としている。HB②イや伊礼原遺跡では南海産貝輪交易初期の諸岡型貝輪(ゴホウラ)が出土しており、本遺跡では小形のゴホウラを用いた背面型貝輪か、あるいはその未製品が出土。貝輪の加工も粗割の後、貝輪自体を水平に研磨する方法が取られている。貝輪にも有文や背面型のみと時期差が認められる。また、ヤコウガイの殻や匙が多く得られており、貝錘(二枚貝有孔製品)が多く、貝符が伴うなど(島袋1999)、奄美諸島の「ヤコウガイ大量出土遺跡」に類するような状況を示す。ヤコ

ウガイは破片が多く、製品も少ないものの、ほかの自然貝をみると内湾性の貝が多いことから、やはり食用としての採集は考えにくい。匙は、有柄と無柄のタイプがあり、匙の形状にも、いくつかのバリエーションが見られる。類例としては伊江島ナガラ原西貝塚・久米島清水貝塚など大当原式土器を主体とする遺跡に多い。

二枚貝有孔製品は1,426点、21種の貝が得られた。出土の多さから各々の貝の平均重量・大きさ・孔の位置を分析した。その結果、係数1.1～1.5のものが最も適していると考えられる。貝塚時代後期に主に出土するシャコガイ類・メンガイ類・リュウキュウサルボオはこの示数に含まれ、網の錘の可能性が高いとした。中には前述の示数からはずれる貝種もあり、別の用途の可能性も出てきた(第59表)。対象物である魚類遺体の出土は二枚貝有孔製品の出土量と比べると少ないが、他の平安山原地区の中でも多い方である。そのほとんどは二枚貝有孔製品と同じ貝層Ⅲ群の出土である。また、ヒメジャコは二枚貝有孔製品と自然貝の大きさが貝層Ⅲ群の上層と下層では異なり、上層では小形化する。

大形イモガイとホシダカラの平面分布では貝塚Ⅰ・Ⅱ期の遺物と同様の分布(第209・210図)がみられた。大形イモガイは貝集積遺構や貝輪・貝符などの製品に用いられるもので、本遺跡からは広田下層タイプなどイモガイを用いたものが3点得られている。伊礼原D遺跡の集積貝などと大きさを比較すると本遺跡のものは小さい。ホシダカラの背面を除去したもの(図版136)が多数得られているが、ホシダカラ製の貝匙は1点のみの出土である。これらの状況から、大形イモガイとホシダカラは食用として採取したものと思われる。

脊椎動物遺体のうち、HC貝層Ⅲ群5層でジュゴンの頭骨がまとまって得られた。平安山原B遺跡(試掘2008)でも完形の頭骨(2008-第17図)が検出されており、樋泉は意図的な埋納の可能性を指摘している。魚の種類をみるとフエフキダイ科・ブダイ科・ハリセンボン科が多いようで、中でもハリセンボン科は棘が多く、岩礁近くに棲息することから網漁には適さないようで、漁網錘と魚種の関係は今後の課題である。

グスクⅠ期

遺構：HB③で建物址SB01・SB02などが検出された。遺物の平面分布をみるとグスク土器はHB③A5・6とHC貝層Ⅲ群上部のS～A15～16に当該期の遺物が一定のまとまりを見せ、明瞭な遺構は検出されていないが、生活面が想定される。その場所はB流路の外縁にあたる。カムイヤキと白磁玉縁口縁碗はグスク土器とは異なりB流路内に見られ、B流路が陸地化した後のものと考えられ、グスク土器との間に若干の時期差がある。

遺物：グスク土器・滑石製品・カムイヤキ・白磁玉縁碗があげられる。第69表で北谷町内の4器種の出土量を示した。地区によって遺物の出土量がかなり異なり、その構成比については宮城弘樹氏が4類に分けており、本遺跡は滑石の出土量が少ないことから宮城による3類「移行期集落」に分類される。

しかし、平安山原、伊礼原、小堀原・後兼久原と狭い範囲での4種の構成の差は、集団間のより具体的な役割の検討がなされるべきであろう。

グスク土器は少数ながら鍋Aの滑石模倣土器、鍋Bの羽釜、鍋Cの横耳など、この時期に見られる器種がほぼ得られており、前述のグリッドを中心に接合されている。鍋Aの滑石模倣土器は今回、方形横耳は検出されず、鍋Bの羽釜タイプは形状や胎土から搬入の可能性が高い。鍋Cは横耳を側面に2個配するもので、その断面は斜め上を向き、横耳の機能を示唆するものと思われる。前2者が滑石製石鍋の影響を受けたのは明らかで、鍋Cの横耳のタイプは波照間島の下田原式土器に形状

が類似するとする説^(註6)がある。滑石製石鍋が波照間島大泊浜貝塚(1986)で出土しており、グスク期には「琉球圏」(安里 1991)の枠組みの中にあり、その可能性を留意したい。甕形の頸部が「く」字状を呈し、土師器の影響が指摘され、同様な土器は後兼久原遺跡(2004)や宮古島市住屋遺跡(1999)で出土している。また、底部の立ち上がりは糸数城跡(1991)や稲福遺跡(1983)から出土する土器と類似することから、時期は若干新しくなると思われる。HB③の耕作域(IV層上面)から風呂鍬(第161図)が出土し、その帰属年代をグスクI期と下限とした。風呂鍬の出土はこの時期に農耕が行われていたことを具体的に裏付けるものである。同時期の後兼久原遺跡からは砂鉄が検出されたが、精錬製鉄には向かないよう^(註7)で、風呂鍬は搬入品の可能性が高い。

グスクII期

遺構：近世の遺構としては石列群がHCSK03(土坑)の最下層から複数のウシ・ウマの下顎骨と南宋銭が検出され、ウマ下顎骨の放射性炭素年代測定を行ったところ560±20BPの値が得られた。南宋銭の使用年代とほぼ一致する。当該期の遺物の平面分布(第196・197図)からグスクI・II期は平安山原A遺跡(2016)に主体がある。

遺物：全体的に出土量は少なく、その平面分布からHB③はHA④の延長部分と捉えられ、HCでは部分的に見られる。青磁・染付・褐釉陶器が得られ、青磁の図39がHA④のものと接合された。青磁は龍泉窯の碗が多く、褐釉陶器は中国産・タイ産が得られている。染付は明代と清代のものに分かれ、明代はHA④側に多い。備前産の播鉢(15c～16c前半)が出土、HA④や伊礼原D遺跡(2013)・後兼久原遺跡でも得られ、中国陶磁器が卓越して出土する時期に一定量の出土がある。また一時期古い備前播鉢は北谷城(2010)や首里城京の内(1998)に出土しており、継続的な搬入が認められる。

腹面利用のヤコウガイ匙・タカラガイ製錘は平面分布の状況やグスク期の小堀原遺跡や後兼久原遺跡ではみられないことからグスクII期以降に属すると思われる。

近世期

遺構：HB③で2群、HCで5群の石列遺構、HB③SK04・HCクムイ状遺構、木杭、編物などが検出された。本遺跡以外にも木杭や石列遺構は伊礼原D遺跡や伊礼原E遺跡でも検出されており、キャンプ桑江北側一帯が低地で水や流路など自然地形を改変するための土木工事が行われていたようである。HB③の土坑群の埋土が平安山原B遺跡試掘の第1号高床式建物址(2008-巻首図版7)とした柱穴の埋土と類似、HB①まで近世遺構が広がっていた可能性が考えられる。

遺物：染付・白磁・瓦質土器・本土産陶磁器や木製品などがあるが、出土数は相対的に少ない。この頃には居住域と耕作域が明確に分かれ、本遺跡部分は耕作域に相当していたようである。瓦質土器の播鉢が1点得られた。本品は平安山原A遺跡(2016)で瓦質b(湧田産)としたもので、その本体はHA④が想定される。少量ではあるが、平安山原A遺跡(2016)では埴も得られ、近接する伊礼原D遺跡でも出土する。

図2の近世有田産の小碗は、良品で「祝女殿内小」(平安山原A遺跡2016)の屋敷近くで得られている。同屋敷の境界部分に遺物が多く、HB②・HB③でも同様の資料が得られていることから本品もその一連の遺物であろう。また、灰釉碗など古手の沖縄産施釉陶器や、口唇に粘土目の残る沖縄産無釉陶器の播鉢などもここからの出土である。

近代

遺構：「祝女殿内小」屋敷の雨端(SL03)・石堀(SL04)・SL05・外溝(SD01)などが確認された。瓦もこれらの遺構を中心出土しており、瓦葺きだったことが想定される。これらの遺構はHB①・HB②・HA④で検出された遺構の延長部分で平安山集落の東側部分であることが証左された。

遺物：沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・陶質土器・本土産陶磁器・円盤状製品などが出土。これらは主にHB③のS・T・A・Q・R-14・15に集中して得られ、遺構の検出と符合する。

本土産陶磁器の下限としては三重産の硬質スープ皿、国民食器、統制番号の賦された型紙刷りなどが得られた。本土産磁器はHCとHB③の境に多く出土した。戦後の造成により移動した可能性も考えられる。平安山原A遺跡の成果も含め、『北谷町の地名』(2006)で調査されたことが、考古学的に実証された。

以上の状況と、これまでの平安山原A・B・C遺跡の報告から平安山原地区はHB②イ(浜屋原式土器主体)→HB①・HB③・HC貝層Ⅲ群(大当原式土器)→HCⅤ層(アカジャンガー式土器)→HA①・②フェンサ下層式土器→HB②・HCⅢ層(グスク土器・カムイヤキ)→HA④(青磁・白磁・染付)→HA②(沖縄産陶器)→HA②・③(本土産磁器(近代))の変遷が遺物からも窺える。平安山原B・C遺跡では貝塚Ⅱ期の大当原式土器、貝塚Ⅲ期のくびれ平底土器の出土で平安山地区の歴史の変遷がつながり、それに伴う浜堤および流路の形成が明らかになった。これにより、沖縄先史時代から近代までの沖積低地での浜堤の展開と人々の暮らしが密接につながっている様子が具体的に明らかになった。

<今後の課題>

①今回の調査でも大当原式土器はバリエーションがあり、細分を試みたが、粘土帯の継ぎ目の明瞭な(A・B類)が古く、はっきりしないC類が新しいことがわかったが、出土量が多く、結論を出すまでには至らなかった。

②くびれ平底土器も胎土や形状からアカジャンガー式土器とフェンサ下層式土器を分けたが、その中間タイプもある。土器分類形状を含め、胎土・器面調整など他の遺跡と統一性を図るのは時間を要する。

③縄文晩期の東日本の大洞A系土器の出土で、縄文文化の交流のあり方を見直す必要がある。

④貝塚時代後期における漁撈のあり方(二枚貝有孔製品の量に対して魚骨が少ない)。

⑤大当原式期の貝輪が背面型のみで、貝集積遺構もなく、古墳時代の南海産貝輪交易のあり方を再度検討する時期に迫られている。

⑥風呂鍬の出土からグスク時代初期の農具が明らかになったが、近隣の後兼久原遺跡からは砂鉄や鉄製品も得られており、鉄生産の面から若干の時期差が想定される。また、滑石製品の出土量が平安山原地区と小堀原・後兼久原地区の狭い地域で異なり、グスクⅠ期における集団間のあり方をより詳細に検討できるであろう。

<註・引用文献>

註1：伊礼原遺跡では縄文後期に暴浪または高波の痕跡が確認されている。伊礼原E遺跡は縄文中期～後期に津波によって遺跡の半分が破壊され、枝サンゴ等とともに再堆積した遺跡で、その際の遺物が枝サンゴ層に混じって広範囲に出土する。(伊礼原遺跡2007、伊礼原E遺跡2010)

註2：2016年9月、来沖していた東京大学の国木田大氏を通して、設楽博巳氏に写真を見ていただいた。

註3：第111表 東日本系土器出土一覧(南九州～沖縄)の作成は鹿児島大学 新里貴之・鹿児島県埋蔵文化財センター 前迫亮一氏の教示を受けた。

註4：鹿児島県上加世田遺跡では獣形勾玉も出土。呪術に関する可能性が指摘されている(河口貞徳・木下2001)

註5：貝製模造品はサメ歯を模造したものがシヌグ堂遺跡やキガ浜貝塚などで縄文後～晩期に盛行する。

註6：国分直一「沖縄グスク式土器と八重山式土器には製作技法において著しい類似」(国分直一1976)、安里嗣淳との論争がある。

註7：後兼久原遺跡の砂鉄は粒子が小さいことから精錬製鉄にはむかない(大澤2003「後兼久原遺跡」)

参考・引用文献

書名・稿名	発行年	編著者・発行機関・集号	参考・引用箇所
『北谷城』	1984	北谷町文化財調査報告書第1集	全般
『北谷城第7遺跡』	1985	北谷町文化財調査報告書第2集	全般
『伊礼原B遺跡』	1989	北谷町文化財調査報告書第8集	全般
『北谷城』	1991	北谷町文化財調査報告書第11集	全般
『玉代勢原遺跡』	1993	北谷町文化財調査報告書第13集	全般
『伊礼伊森原遺跡』	1998	北谷町文化財調査報告書第18集	全般
『後兼久原遺跡』	2003	北谷町文化財調査報告書第21集	全般
『大作原古墓群』	2003	北谷町文化財調査報告書第22集	全般
『キャンプ桑江返還に伴う試掘調査』	2005	北谷町文化財調査報告書第23集	全般
『北谷町の地名』	2006	北谷町文化財調査報告書第24集	全般
『伊礼原遺跡』	2007	北谷町文化財調査報告書第26集	全般
『伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡』	2008	北谷町文化財調査報告書第27集	全般
『伊礼原D遺跡』	2008	北谷町文化財調査報告書第28集	全般
『平安山原B遺跡』	2008	北谷町文化財調査報告書第29集	全般
『小堀原遺跡』	2009	北谷町文化財調査報告書第30集	全般
『伊礼原E遺跡』	2010	北谷町文化財調査報告書第31集	全般
『北谷城』	2010	北谷町文化財調査報告書第32集	全般
『平安山原地区試掘調査』	2011	北谷町文化財調査報告書第33集	全般
『小堀原遺跡』	2012	北谷町文化財調査報告書第34集	全般
『伊礼原D遺跡』	2013	北谷町文化財調査報告書第35集	全般
『伊礼原遺跡・伊礼原A遺跡』	2014	北谷町文化財調査報告書第36集	全般
『平安山原B遺跡』	2015	北谷町文化財調査報告書第37集	全般
『平安山原A遺跡』	2016	北谷町文化財調査報告書第38集	全般
『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』	2014	高宮広士・新里貴之編 / 琉球列島先史・原始時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集 第1集 / 六一書房	環境通史
「沖縄県宮古島の海岸砂の特徴とその起源」	2013	中井均・中井睦美 / 都留文科大学研究紀要第77集	層序
『稲の日本史』	2002	佐藤洋一郎 / 角川選書337 / 角川書店	層序・鉄製品
「水田土壌」	1976	三土正則 / 株式会社クボタ / URBAN KUBOTA NO.13	遺構
「水田跡に関する疑似畦畔Bと連続耕作—仙台市富沢遺跡の事例から—」	1999	佐藤甲二 / 『人類誌集報1999』東京都立大学考古学報告4	遺構
「琉球列島水田立地論—序説として—」『伊礼伊森原遺跡』	1998	中鉢良護 / 北谷町文化財調査報告書第18集	遺構
『新城下原第二遺跡』	2006	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集	遺構
『那覇原遺跡』	1996	那覇市文化財調査報告書第30集	遺構
『富沢遺跡』	2007	仙台市文化財調査報告書第313集	遺構
「中国唐銭「開元通宝」琉球圏の形成」	1991	安里嗣淳 / 沖縄県教育庁文化課紀要第7号	土器・まとめ
「読谷村大当原貝塚発掘調査概報」	1993	高宮廣衛・知念勇・岸本義彦・仲村健 / 『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第17集	土器
「縄文晩期からの視点」	2004	設楽博巳・小林謙一 / 『季刊考古学』第88号	土器
「沖縄諸島の土器」	2004	新里貴之 / 『考古資料大観12 貝塚後期文化』 / 高宮廣衛・知念勇	土器
「縄文社会の変容と弥生社会の形成」	2007	小林青樹 / 『考古学研究54-2』 / 考古学研究会	土器
「黒川式土器の再検討」	2009	水ノ江和同 / 『新弥生時代の始まり』第4巻 / 雄山閣	土器
『総覧 縄文土器』	2008	小林達雄編 / 『総覧 縄文土器』刊行委員会	土器
『徳之島トマチン遺跡の研究』	2013	新里貴之 / 鹿児島大学	土器
『ナガラ原東貝塚の研究』	2013	木下尚子 / 熊本大学	土器
『九州縄文文化の研究』	2012	水ノ江和同 / 雄山閣	土器
『沖縄文化財調査報告 1956～1962』	1976	沖縄県教育委員会 / 那覇出版社	土器
『恩納村熱田貝塚発掘調査報告書』	1979	沖縄県文化財調査報告書第23集	土器・貝製品
『稲福遺跡発掘調査報告書』	1983	沖縄県文化財調査報告書第50集	土器・まとめ
『具志原貝塚の概要』	1985	沖縄県文化財調査報告書第61集	土器
『下田原貝塚・大泊貝塚』	1986	沖縄県文化財調査報告書第74集	土器・まとめ
『平敷屋トウバル遺跡』	1996	沖縄県文化財調査報告書第125集	土器
『伊江島具志原貝塚 発掘調査報告書』	1997	沖縄県文化財調査報告書第130集	土器

参考・引用文献

書名・稿名	発行年	編著者・発行機関・集号	参考・引用箇所
『真栄里貝塚』	1999	糸満市文化財調査報告書第16集	土器
『具志川グスクⅠ』	2006	うるま市文化財調査報告書第4集	土器
『喜屋武グスク』	1988	具志川市教育委員会	土器
『宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚』	1980	具志川市教育委員会	土器・骨製品
『大堂原貝塚』	2005	名護市文化財調査報告書第17集	土器・貝製品
『住屋遺跡(Ⅰ)』	1999	平良市埋蔵文化財調査報告書第4集	土器・まとめ
『津堅貝塚』	2005	勝連町の文化財第23集	土器
『伊江島ナガラ原西貝塚 緊急発掘調査報告書 概報編』	1979	伊江村文化財調査報告書第8集	土器
『清水貝塚』	1989	具志川村文化財調査報告書第1集	土器・石器
『糸数城跡』	1991	玉城村文化財調査報告書第1集	土器・まとめ
『ウフタⅢ遺跡』	2002	龍郷町文化財発掘調査報告書(2)	土器
『奄美 沖縄 岩石鉱物図鑑』	1985	加藤祐三 / 新星図書出版	石器
『図説 石器入門事典 -縄文-』	1991	鈴木道之助 / 柏書房	石器
『縄文文化の研究 7 道具と技術』	1995	加藤晋平・小林達雄・藤本強編 / 雄山閣	石器
『考古資料大観 第9巻』	2002	北條芳隆・禰宜田佳男 / 小学館	石器
『考古資料の岩石学』	2006	五十嵐俊雄 / パリノ・サーヴェイ	石器
『軽石 -海底火山からのメッセージ-』	2009	加藤祐三 / 八坂書房	石器
『宇佐浜遺跡』	1989	沖縄県文化財調査報告書第93集	石器
『首里城 -南殿・北殿の遺構調査-』	1995	沖縄県文化財調査報告書第120集	石器
『首里城跡 -下之御庭・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門発掘調査報告-』	2001	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集	石器
『サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告書Ⅱ』	2015	沖縄県立博物館・美術館	石器
「寶貝の錘」	1971	岸上與一郎 / 『民俗学研究』35巻4号	貝製品
「螺蓋製貝斧」	1982	三島格 / 『賀川光夫先生還暦記念論集』 / 賀川光夫還暦記念会	貝製品
「オオツタノハの供給地」	1994	黒住耐二 / 『南島考古』第14号 / 沖縄考古学会	貝製品
「剥離痕をもつヤコウガイの蓋について」	1996	角田真也・伊藤慎二 / 『史学研究集録』第21号 / 國學院大学大学院日本史学専攻大学院会	貝製品
「八丁鎧塚1号墳スイズガイ・ゴホウラ釧について」『長野県史跡「八丁鎧塚」』	2000	木下尚子 / 須坂市教育委員会	貝製品
「装身具から見た広田遺跡」『種子島 広田遺跡』	2003	木下尚子 / 鹿児島歴史資料センター黎明館	貝製品
「奄美・沖縄諸島の漁網錘の形態的研究(その3) -考古資料-」	2004	島袋春美 / 『南島考古』第23号 / 沖縄考古学会	貝製品
『沖縄の民具』	1973	上江洲均 / 慶友社	貝製品
『南島貝文化の研究-貝の道の考古学-』	1996	木下尚子 / 法政大学出版局	貝製品
『津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書』	1978	沖縄県文化財調査報告書第17集	貝製品
『北原貝塚』	1995	沖縄県文化財調査報告書第123集	貝製品
『沖縄県伊江島ナガラ原西貝塚の試掘調査』	1977	伊江村文化財調査報告書第3集	貝製品
『具志堅貝塚発掘調査報告書』	1986	本部町文化財調査報告書第3集	貝製品
『備瀬貝塚』	1986	本部町文化財調査報告書第4集	貝製品
『沖縄県・久米島具志川村 清水貝塚発掘調査報告書』	1989	具志川村文化財調査報告書第1集	貝製品
『嘉門貝塚B』	1993	浦添市文化財調査報告書第21集	貝製品
『屋鈍遺跡』	2009	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(143)	貝製品
『広田遺跡』	2007	南種子町教育委員会	貝製品
「化石サメ歯製品について」	1987	島袋春美 / 『南島だより』第37号 / 沖縄考古学会	骨製品
『喜友名貝塚・喜友名グスク(Ⅰ)』	1999	沖縄県文化財調査報告書第134集	骨製品
「琉球列島における窯業生産の成立と発展」	2003	新里亮人 / 『考古学研究』49-1 / 考古学研究会	カムイヤキ
「カムイヤキとカムイヤキ古窯跡群」特集古代・中世の日本と奄美・沖縄諸島	2007	新里亮人 / 『東アジアの古代』130号 / 大和書房	カムイヤキ
「グスク時代初期における出土滑石からみた集団関係」	2016	宮城弘樹 / 『南島文化』沖縄国際大学南島文化研究所紀要第38号	滑石製品・まとめ
『砂辺サーク原遺跡』	1987	沖縄県文化財調査報告書第81集	滑石製品
『後兼久原遺跡』	2004	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第22集	滑石製品
『深堀遺跡』	2004	長崎市教育委員会	滑石製品
「大宰府出土の輸入中国磁器について」	1978	森田勉・横田賢次郎 / 研究論集4 / 九州歴史資料館	白磁・青磁

参考・引用文献

書名・稿名	発行年	編著者・発行機関・集号	参考・引用箇所
「14～16世紀の白磁の分類と編年」	1982	森田勉・横田賢次郎 / 研究論集4 / 九州歴史資料館	白磁
『首里城跡－御内原北地区－』	2010	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第54集	白磁・青磁・染付・褐釉・近世代陶磁器
「14～16世紀の青磁碗の分類」	1982	上田秀夫 / 貿易陶磁研究NO2 / 日本貿易陶磁研究会	青磁
「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」	1982	小野正敏 / 貿易陶磁研究NO2 / 日本貿易陶磁研究会	染付
「朝鮮半島と琉球諸島における銭貨流通と出土銭」	2000	門田誠一 / 同志社大学公開講座2000年度	銭貨
「琉球出土銭貨の研究」	2008	宮城弘樹 / 出土銭貨第28号 / 出土銭貨研究会	銭貨
『日本出土銭総覧』	1996	永井久美男 / 兵庫埋蔵銭調査会	銭貨
「久米島下地原洞収集の鉄先について」	1980	上江洲均 / 沖縄県立博物館紀要第6号	鉄製品
「古代における鉄製鉄先の研究－7世紀後半～11世紀の関東・東北を中心－」	2010	林正之 / 東京大学考古学研究室研究紀要第24号	鉄製品
『沖縄の暮らしと民具』	1982	上江洲均 / 考古民俗叢書19 / 慶友社	鉄製品
『琉球諸島の民具』	1983	上江洲均・神崎宣武・工藤員功 / 民族文化双書2 / 未来社	鉄製品
『日本民具辞典』	1997	日本民具学会編 / ぎょうせい	鉄製品
『沖縄の民具と生活－沖縄民俗誌Ⅰ－』	2005	上江洲均 / 琉球叢書⑩ / 榕樹書林	鉄製品
『考古資料より見た沖縄の鉄器文化』	1997	沖縄県立博物館	鉄製品
「琉球陶器の来た道 合同企画展」	2011	沖縄県立博物館美術館・那覇市立壺屋焼物博物館	近世代陶磁器
『九州陶磁の編年』	2000	九州近世陶磁学会	近世代陶磁器
『壺屋古窯群Ⅰ』	1992	那覇市文化財調査報告書第23集	近世代陶磁器
『湧田古窯跡Ⅱ』	1995	沖縄県文化財調査報告書第121集	近世代陶磁器
『渡地村跡』	2012	那覇市文化財調査報告書第91集	近世代陶磁器
『雪山遺跡・猿引遺跡』	2003	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(53)	近世代陶磁器
『椿城跡』	2010	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(155)	近世代陶磁器
「円盤状製品その後の資料」	1989	上原静 / 読谷村歴史民俗資料館紀要第13号	円盤状製品
「考古学からみた沖縄諸島遊具史」	2004	上原静 / 『グスク文化を考える 世界遺産国際シンポジウム<東アジアの城郭遺跡を比較して>の記録 / 今帰仁村教育委員会	円盤状製品
『首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書』	2003	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第14集	円盤状製品
『島瓦の考古学－琉球と瓦の物語－』	2010	石井龍太 / 新典社選書39 / 新典社	瓦
『琉球古瓦の研究』	2013	上原静 / 榕樹書林	瓦
「双口土器と獣形勾玉」	2001	木下尚子 / 鹿児島考古第35号	まとめ
「脊椎動物遺体からみた琉球列島の環境変化と文化変化」『琉球列島先史・原始時代の環境と文化の変遷』	2014	樋泉岳二 / 琉球列島先史・原始時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第2集 / 六一書房	まとめ
「沖縄考古学についての二、三の感想」	1975	安里嗣淳 / 『南島考古』第4号 / 沖縄考古学会	まとめ

参考webサイト

webサイトページ名	アドレス	参考箇所
日経電子版 / 2015.7.30 / 『南島史が塗り替わる 12世紀の製鉄炉跡』	http://style.nikkei.com/article/DGXMZO89843640Y5A720C1000000	環境通史
農林水産省 / 農業の匠 / 『沖縄県 金城政雄』	http://www.maff.go.jp/j/seisan/gizyutu/hukyu/h_takumi/pdf/okinawa_21.pdf	層序
農林水産省 / 都道府県施肥基準等 / 新潟県における土づくりのすすめ方 / 『土壌の基礎知識』	http://www.maff.go.jp/j/seisan/kankyo/hozen_type/h_sehi_kizyun/pdf/ntuti4.pdf	層序
『日本銀行金融研究所 中世の日本で流通した銭貨－渡来銭－』	http://www.imes.boj.or.jp/cm/research/zuroku/2009c_10_29.pdf	銭貨

報告書抄録

ふりがな	はんざんぼる いせき							
書名	平安山原B・C遺跡							
副書名	桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成20年度・21年度）							
巻次	-							
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第40集							
編著者名	島袋春美・土岐耕司・山城安生・上地千賀子・呉屋広江・比嘉優子・北條真子 樋泉岳二・黒住耐二・藤田祐樹・(株)パリオ・サーヴェイ							
編集機関	沖縄県北谷町教育委員会							
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159							
発行年月日	2016年（平成28年）12月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ' / "	° / ' / "		m ²	
はんざんぼる いせき 平安山原B遺跡	沖縄県 北谷町 字伊平 小字 平安山原	473260		26° 19' 30"	127° 45' 26"	20091014	2,595	土地区画整理事業に伴う 発掘調査
はんざんぼる いせき 平安山原C遺跡						20100219		
						20090331	2,900	
						20090930		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
		貝塚時代 後期	廃棄貝層 上層：くびれ平底土器期 下層：尖底土器期 散乱人骨	土器 ・縄文時代晩期大洞A式土器 石器 貝製品 ・広田下層貝符 ・有文ゴボウラ貝輪 ・二枚貝有孔製品（多量） 骨製品 ・化石サメ歯製骨鏃		貝層Ⅲ群-5層イノシシ下顎骨試料 ：1,887±25BP 貝層Ⅲ群-5層土器附着炭化物試料 ：1,795±26BP 貝層Ⅲ群-1層イノシシ下顎骨試料 ：1,340±25～1,140±25BP		
はんざんぼる いせき 平安山原B遺跡 はんざんぼる いせき 平安山原C遺跡		グスク 時代	掘立柱建物址 土坑・ピット・埋納土坑 貝集積・廃棄貝層 耕作関連遺構 溝・杭列・土坑列 燃烧遺構・蹄痕・畦畔	グスク土器・カムイヤキ 滑石製品 白磁・青磁・染付・色絵 褐釉陶器・銭貨・木製品 鉄製品（風呂鍬）		Ⅲe層に含まれる炭化物試料 ：1,104±21～973±21BP Ⅲd層に含まれる炭化物試料 ：1,065±21BP 埋納土坑内ウマ下顎骨試料 ：560±23BP		
		近世	石列群 大型土坑 クムイ状遺構 小溝状遺構群	瓦質土器・本土産陶磁器 沖縄産陶器・陶質土器 羽口・鉄滓・焼土 円盤状製品				
		近・現代	屋敷跡（祝女殿内小） 道路跡（溝・石列）	瓦・軽石・ガラス瓶				
要約	<p>平安山原B遺跡・平安山原C遺跡は、平成20・21年度に発掘調査が行われた隣接した遺跡である。浜堤及びそれに挟まれた流路が複数見つかっており、第一浜堤の先端付近では、貝塚時代後期前半～後半にわたる廃棄貝層が重層的に検出された。土器・貝製品等の人工遺物を大量に伴っており、当該期の変遷様相を窺い知る貴重な事例となった。第一浜堤の後背地においては、グスク時代初期ごろの耕作域が検出され、これに関連する可能性が高い遺構（溝・杭列・畦畔状遺構・蹄痕）も複数見ついている。最下層付近からは鉄製風呂鍬も出土し、これが県内における初めての発掘調査での出土事例となった。同じくグスク期の遺構として、ウシ・ウマの幼体骨とともに南宋銭が出土した、埋納土坑も特記される。近世期の遺構としては、広く構築される石列群が挙げられ、以後の耕作域拡大に寄与した可能性が想定された。平安山原地区における本格的発掘調査の最終報告でもあり、過去の調査成果の総括作業を行った結果、縄文時代から現在に至るまでの環境変化及び集落の変遷について、解明できた部分大きい。</p>							

北谷町文化財調査報告書 第40集

は ん ざん ばる い せき
平 安 山 原 B・C 遺 跡

— 桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成20・21年度） —

編 集： 北 谷 町 教 育 委 員 会

発行年： 2016年（平成28年）12月

〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江 226 番地

TEL 098-936-3159

印 刷： 有限会社 金城印刷

〒901-0305 沖縄県糸満市西崎 5-9-16 番地

TEL 098-995-0001



北 谷 町